

新幹線文化財調査事務所調査報告書 第6集

九州新幹線西九州ルート（長崎ルート）建設工事に係る埋蔵文化財発掘調査報告書

VI

# 竹松遺跡Ⅲ

2018

長崎県教育委員会

新幹線文化財調査事務所調査報告書 第6集

九州新幹線西九州ルート(長崎ルート)建設工事に係る埋蔵文化財発掘調査報告書

VI

# 竹 松 遺 跡 Ⅲ



遺跡遠景(南から)

TAK201304調査区(手前)。TAK201301調査区(中央)壁をブルーシートで保護している。  
TAK201302調査区(最奥)。TAK201303調査区(最奥右)(路線部分)。  
遺跡右は郡川。遠方は東彼杵町方面。



遺跡遠景(北から)

TAK201302調査区(手前)。TAK201303調査区(左の路線部分)。TAK201304, 01調査区(最奥)  
左は郡川。



標石を持つ箱式石棺墓検出状況(西から)  
左：TAK201302①調査区のST1 右：同調査区のST3



TAK201302③区出土 香炉蓋摘み



TAK201302⑤区 SD03出土 土馬

# 発刊にあたって

本書は、九州新幹線西九州ルート(長崎ルート)建設工事に伴って実施された、大村市竹松遺跡の発掘調査報告書です。

竹松遺跡は、以前より原始・古代の遺跡として知られておりましたが、九州新幹線の車両整備のための保守基地(後に車両基地に拡大)建設予定地になったことにより、やむなく発掘調査に至ったものです。

併せて車両基地に隣接する新幹線の車両が走ります路線部の調査も行いました。

調査対象面積は、約10万㎡にも及び、原始時代の住居跡や墓など、約700基の遺構が検出され、出土した遺物は約70万点にも上ります。

同遺跡の発掘調査は、平成23年度から着手し、同28年度に終了いたしました。これほどまでに広大な土地を原始時代から近世初期まで見ることができる遺跡は、本県では、これまで壱岐市にある国の特別史跡の原の辻遺跡ぐらいでしたので、本土部では初めての遺跡になります。

本書は、そのうちの平成25年度の発掘調査成果を掲載しております。平成26年度以降の調査成果も随時報告書を作成し、今後、公にいたします。本書を含め、竹松遺跡の一連の発掘調査報告書が、郷土の歴史に新たな発見と展開をもたらすことを期待しております。

最後になりましたが、発掘調査を支援していただいた共同企業体の皆様や、暑さ寒さの厳しいなか、発掘調査に従事された外業作業員の方々をはじめ、さまざまな形でご協力いただいた大村市教育委員会や独立行政法人鉄道建設・運輸施設整備支援機構の皆様など、関係者の皆様に厚く御礼申し上げます、刊行のあいさつといたします。

平成 30 年 8 月 31 日

長崎県教育委員会教育長  
池 松 誠 二

# 例 言

1. 本書は、九州新幹線西九州ルート(長崎ルート)建設(事業主体：独立行政法人鉄道建設・運輸施設整備支援機構)に伴って実施した長崎県大村市に所在する竹松遺跡のTAK201301調査区(大村市竹松町1021番地ほか所在、調査面積11,500㎡)とTAK201302調査区(大村市竹松町1037番地ほか所在、調査面積13,557㎡)TAK201303調査区(大村市竹松町903番3ほか所在、調査面積4,720㎡)、TAK201304調査区(大村市竹松町902番2ほか所在、調査面積9,900㎡)の埋蔵文化財発掘調査報告書である。

なお、『竹松遺跡Ⅱ』(長崎県教委編2017)で報告できなかったTAK201202調査区の弥生時代後期の集団墓も併せて報告する。

2. 調査は、長崎県教育庁新幹線文化財調査事務所が主体となり、TAK201301調査区は国際文化財株式会社と株式会社大進技術開発の共同企業体の支援を得た。また、TAK201302調査区は大成エンジニアリング株式会社と株式会社創建の共同企業体の支援を得た。さらにTAK201303調査区は扇精光株式会社と株式会社三基の共同企業体の支援を得て行い、TAK201304調査区は株式会社埋蔵文化財サポートシステムと株式会社大進技術開発の共同企業体の支援を得て行った。調査期間は以下のとおりである。

(1) 範囲確認調査(【 】は遺跡調査番号)

TAK201301調査区：平成25(2013)年1月10日(木)～同年2月20日(水)【TAK201217】

TAK201302調査区：平成23(2011)年7月4日(月)～同年9月8日(木)【TAK201105】

：平成25(2013)年1月10日(木)～同年2月20日(水)【TAK201217】

TAK201303調査区：平成23(2011)年7月4日(月)～同年9月8日(木)【TAK201105】

TAK201304調査区：平成25(2013)年1月10日(木)～同年2月20日(水)【TAK201217】

(2) 本調査

TAK201301調査区：平成25年5月27日(月)～平成26年1月15日(水)

TAK201302調査区：平成25年5月27日(月)～平成26年3月18日(火)

TAK201303調査区：平成25年5月27日(月)～平成26年3月14日(金)

TAK201304調査区：平成25年6月27日(木)～平成26年2月24日(月)

3. 遺物写真撮影は縄文時代の遺物を新久保恒和が撮影し、それ以外を東郷一子が撮影した。

4. 弥生後期の祭祀土坑から出土した焼人骨の分析・報告は土井ヶ浜遺跡・人類学ミュージアムの松下孝幸先生、松下真実先生から玉稿をいただいた。

5. 集団墓より出土した赤色顔料の分析では、九州国立博物館の志賀智史先生から玉稿をいただいた。

6. 放射性炭素年代の測定と花粉分析および寄生虫分析を株式会社古環境研究所に依頼した。また、放射性炭素年代測定をパリノ・サーヴェイ株式会社に依頼した。さらに放射性炭素年代測定とテフラ分析、炭化材の樹種同定をバレオ・ラボ株式会社に依頼した。

7. 本報告書の執筆担当者は本文目次に( )で示している。編集は中尾、中川、堀内、川畑が分担し、総編集を古門が行い、杉原がそれを助けた。

8. 本書で用いた座標は、すべて世界測地系を用い、方位はすべて座標北である。

9. 記録類および出土遺物は、長崎県教育庁新幹線文化財調査事務所に保管している。

10. 遺跡調査番号はTAK201301、TAK201302、TAK201303、TAK201304である。

11. 本書で使用した遺構番号は以下のとおりである。

SA：柵 SB：掘立柱建物跡 SC：堅穴建物跡 SD：溝 SK：土坑 SL：炉、カマド、焼土、鍛冶遺構

SP：柱穴 ST：埋葬施設 SX：不明遺構 SS：集石 SU：遺物集積 TP：試掘坑

12. 本書は紙幅の都合により「調査の経緯」「歴史的環境、地理的環境」を割愛した。『竹松遺跡Ⅰ』『竹松遺跡Ⅱ』を参照いただきたい。

13. 石器石材の同定は隅田祥光先生(長崎大学教育学部)よりご教示を得た。

14. 発掘調査にあたっては、西谷正先生(九州大学名誉教授)、松下孝幸先生(土井ヶ浜遺跡・人類学ミュージアム)、福永伸哉先生(大阪大学教授)、小田和利氏(九州歴史資料館)、杉原敏之氏(同館)を招聘し、ご指導を得た。

15. 刻書紡錘車の判読にあたっては、平川南先生(国立歴史民俗博物館名誉教授)にご教示を得た。

# 本文目次(1)

※( )内は執筆者

I 調査組織と方法(古門)	1	⑮TAK201302⑩SP168(柱穴)	184
1 調査組織	1	⑯TAK201302⑩SP258(柱穴)	185
2 遺跡位置	3	⑰TAK201302⑩SP281(柱穴)	185
3 調査方法	4	⑱TAK201302⑩SP231(柱穴)	186
II 層序(川畑)	5	⑳TAK201301D 区SX2(不明遺構)	186
1 共通土層	5	㉑TAK201301D 区SX4(不明遺構)	187
2 TAK201301の基本層序	5	㉒TAK201302①SX2(不明遺構)	189
3 TAK201302の基本層序	6	㉓TAK201302④SX5(竪穴建物)	190
4 TAK201303の基本層序	6	㉔TAK201302①ST1(箱式石棺墓)	192
5 TAK201304の基本層序	6	㉕TAK201302①ST3(箱式石棺墓)	195
III 遺構と遺物	29	㉖TAK201302①ST5(箱式石棺墓)	197
1 旧石器・縄文時代(中尾・浦田)	29	㉗TAK201302①ST6(箱式石棺墓)	199
(1)土坑	29	㉘TAK201302①ST7(箱式石棺墓)	202
①SK44	29	㉙TAK201302①ST8(箱式石棺墓)	204
②SK45	29	㉚TAK201302①ST9(箱式石棺墓)	207
③SK76	29	㉛TAK201302①ST10(箱式石棺墓)	209
④SK06	29	㉜TAK201302①ST11(箱式石棺墓)	211
⑤SK07	29	㉝TAK201302①ST12(箱式石棺墓)	212
(2)ピット	41	㉞TAK201302①ST13(箱式石棺墓)	214
①SP285	41	㉟TAK201302①ST15(箱式石棺墓)	218
(3)集石	41	㊱TAK201302①ST16(箱式石棺墓)	219
①SS01	41	㊲TAK201302①ST17(箱式石棺墓)	222
②SS04	41	㊳TAK201302①ST18(箱式石棺墓)	224
③SS05	42	㊴TAK201302①ST19(箱式石棺墓)	226
(4)遺物集積	46	㊵TAK201302①ST20(箱式石棺墓)	228
①SU01	46	㊶TAK201302①ST22(箱式石棺墓)	230
②SU03	46	㊷TAK201302①ST23(箱式石棺墓)	232
③SU04	46	㊸TAK201302①ST24(箱式石棺墓)	234
④SU05	48	㊹TAK201302④ST25(箱式石棺墓)	236
(5)旧河川	51	㊺TAK201302①ST26(石蓋木棺墓)	238
①土器	51	㊻TAK201302①ST27(石蓋木棺墓)	240
②石器	51	㊼TAK201302①ST28(木棺墓)	242
(6)TAK201301調査区の包含層出土遺物	55	㊽TAK201302①ST31(土坑墓)	245
①土器	55	㊾TAK201302①ST32(土坑墓)	246
②石器	56	㊿TAK201302①ST34(木棺墓)	247
(7)TAK201302調査区の包含層出土遺物	64	㉑TAK201202①ST35(甕棺)	247
①土器	64	㉒TAK201302①ST36(甕棺)	250
②石器	73	㉓TAK201302①ST37(甕棺)	252
(8)TAK201303調査区の包含層出土遺物	86	㉔TAK201302①ST38(甕棺)	254
①土器	86	㉕TAK201302①祭祀遺構 1	256
②石器	108	㉖TAK201202②祭祀遺構 2	261
(9)TAK201304調査区の包含層出土遺物	125	㉗TAK201302①標石 1	278
①土器	125	㉘TAK201302①標石 2	279
②石器	129	㉙TAK201302①標石 3	280
(10)小結	136	㉚TAK201302①標石 4	280
2 弥生時代・古墳時代(中川)	146	㉛TAK201303B1区ST1(甕棺)	281
(1)弥生時代の遺構、遺物	146	㉜TAK201302① SK2(土坑)	286
①TAK201303B3区SB1(掘立柱建物)	146	㉝TAK201302① SK3(土坑)	286
②TAK201303A5区SC1(竪穴建物)	147	㉞TAK201302① SK4(土坑)	286
③TAK201303B1区SC123(竪穴建物)	153	㉟TAK201302① SK5(土坑)	287
④TAK201303B1区SC124(竪穴建物)	160	㊱TAK201302① SK7(土坑)	287
⑤TAK201303A5区SC125(竪穴建物)	165	㊲TAK201302① SK8(土坑)	288
⑥TAK201301D 区SD2(溝)	166	㊳TAK201302① SK10(土坑)	288
⑦TAK201303B2区SD19(溝)	168	㉑TAK201302①弥生時代包含層遺物	289
⑧TAK201303B3区SD2(溝)	172	(2)古墳時代の遺構、遺物	298
⑨TAK201202⑥SK116(土坑)	174	①TAK201302⑩SC1(竪穴建物)	298
⑩TAK201303B2区SK27(土坑)	175	②TAK201303A1区SC114(竪穴建物)	299
⑪TAK201303A1区SK8(土坑)	176	③TAK201302⑩SP149(柱穴)	301
⑫TAK201303A1区SK9(土坑)	177	④TAK201302⑩SP150(柱穴)	301
⑬TAK201303B2区SL18(焼土)	178	⑤TAK201302⑩SP240(柱穴)	302
⑭TAK201303B2区SS4(集石)	178	⑥TAK201302⑩SP244(柱穴)	302
⑮TAK201303B2区SU1(遺物集積)	180	⑦TAK201302④SU2(遺物集積)	302
⑯TAK201302⑩SP5(柱穴)	183	⑧TAK201302⑩SU6(遺物集積)	304
⑰TAK201302⑩SP75(柱穴)	184	⑨TAK201303B3区SD3(溝)	312



## 本文目次(2)

※( )内は執筆者

⑩TAK201202⑥SK111(土坑)	313	③⑩SK65	392
⑪古墳時代包含層遺物	315	③⑪SK66	392
(3)小結—弥生時代の集団墓について—	317	③⑫SK71	393
①弥生時代の集団墓の配置について	317	③⑬SK72	394
②出土遺物からの構築時期について	317	③⑭SK92	395
③グループピングについて	321	③⑮TAK201202④区の未報告土坑について	395
④箱式石棺墓の石組み構造について	323	(5)集石(SS)・不明遺構(SX)	397
⑤TAK201208調査区の墓域について	326	①TAK201303B SS02	397
⑥標石について	327	②TAK201302④ SX04	398
⑦祭祀遺構について	328	③TAK201302⑤ SX07	402
⑧箱式石棺墓の石材について	328	④TAK201302⑤ SX06・⑦10	405
⑨破鏡及びその他の青銅器について	331	⑤TAK201302⑤ SX08	407
⑩全体的なまとめ	336	⑥TAK201302⑨ SX12	409
⑪長崎県本土部における弥生後期土器研究 の現状と課題(古門)	347	(6)包含層出土遺物	410
3 古代(堀内・川畑)	364	①TAK201302包含層出土遺物	410
(1)掘立柱建物(SB)	364	②TAK201303包含層出土遺物	419
①SB01	364	③TAK201304包含層出土遺物	422
②SB02	366	④特殊遺物	423
③SB03	367	⑤文字資料	425
④SB04	368	(7)小結(堀内)	427
⑤SB05	369	①古代の竹松遺跡の遺構と遺物に関する若干の考察	427
⑥SB06	371	②TAK1302⑤区の居宅関連の出土遺物と類似遺跡	429
⑦SB07	372	③居宅に先行する条里方向の掘立柱建物の 可能性、社会背景について	432
(2)柵列(SA)	373	④伊場遺跡と竹松遺跡	433
①SA01	373	⑤官衙遺跡の諸類型について	435
②SA02	374	4 中世(川畑)	447
③SA03・SA04	375	(1)掘立柱建物(SB)	447
(3)溝(SD)	376	①SB2	447
①SD03・05	376	(2)溝・河川(SD)	447
②SD04	379	①SD11	447
③SD08	380	SD11出土遺物	450
(4)土坑(SK)	381	②SD12	453
①SK12	382	③SD13	453
②SK13	382	④SD16	453
③SK15	383	SD16出土遺物	454
④SK16	383	⑤SD9	457
⑤SK17	383	SD9出土遺物	458
⑥SK18	384	⑥SD11	460
⑦SK19	384	SD11出土遺物	461
⑧SK20	384	(3)土坑(SK)	469
⑨SK23	385	①SK78	469
⑩SK24	385	SK78出土遺物	469
⑪SK25	386	②SK77	469
⑫SK26	386	③SK79	469
⑬SK27	386	(4)集石(SS)	470
⑭SK29・30	387	①SS5	470
⑮SK31・32	387	SS5出土遺物	472
⑯SK34	387	(5)墓(ST)	473
⑰SK35	387	①ST1	473
⑱SK36	388	ST1出土遺物	473
⑲SK37	388	(6)不明遺構(SX)	474
⑳SK38	388	①SX1	474
㉑SK42	388	SX1出土遺物	475
㉒SK43	389	(7)包含層出土の遺物	475
㉓SK44	389	①201301調査区2層出土遺物	475
㉔SK47・49	389	②201302調査区2層出土遺物	478
㉕SK50～54・63	390	③201303調査区2層出土遺物	483
㉖SK55	391	④201304調査区2層出土遺物	488
㉗SK56	391	⑤201301調査区3層出土遺物	490
㉘SK58	391	⑥201302調査区3層出土遺物	492
㉙SK62	392	⑦201303調査区3層出土遺物	497

## 本文目次(3)

※( )内は執筆者

⑧201304調査区3層出土遺物	499
(8)小結	501
①遺構数について	501
②滑石製石鍋について	501
③滑石製品について	502
5 近世(川畑)	503
(1)墓(ST)	503
①ST1	504
ST1出土遺物	504
②ST2	505
③ST3	505
ST3出土遺物	506
④ST4	506
ST4出土遺物	506
(2)柵列(SA)	508

①SA5	508
②SA6	508
(3)礎石建物(SB)	508
①SB9	508
②SB10	508
(4)土坑(SK)	509
①SK1	509
SK1出土遺物	509
(5)不明遺構(SX)	511
①SX6	511
SX6出土遺物	512
(6)小結	514
①近世墓について	514
IV 附編(自然科学分析結果)	515
V まとめ(古門)	572

## 挿図目次(1)

第1図 遺跡位置図	3
第2図 保守・車両基地概略図	4
第3図 大調査区TAK201301~04と小調査区区割り図	7
第4-1図 グリッド配置図	9
第4-2図 新幹線大村車両基地調査区位置図(1/5,000)	11
第5図 TAK201301調査区土層図-1(S=1/80)	12
第6図 TAK201301調査区土層図-2(S=1/80)	13
第7図 TAK201301調査区土層図-3(S=1/80)	14
第8図 TAK201301調査区土層図-4(S=1/80)	15
第9図 TAK201301調査区土層図-5(S=1/80)	16
第10図 TAK201302調査区土層図-1(S=1/80)	17
第11図 TAK201302調査区土層図-2(S=1/80)	18
第12図 TAK201302調査区土層図-3(S=1/80)	19
第13図 TAK201302調査区土層図-4(S=1/80)	20
第14図 TAK201302調査区土層図-5(S=1/80)	21
第15図 TAK201302調査区土層図-6(S=1/80)	22
第16図 TAK201302調査区土層図-7(S=1/80)	23
第17図 TAK201303調査区土層図-1(S=1/80)	24
第18図 TAK201304調査区土層図-1(S=1/80)	25
第19図 TAK201304調査区土層図-2(S=1/80)	26
第20図 TAK201304調査区土層図-3(S=1/80)	27
第21図 TAK201304調査区土層図-4(S=1/80)	28
第22図 欠番	
第23図 TAK201302調査区縄文時代遺構配置図(S=1/1,500)	30
第24図 TAK201302調査区縄文時代遺構配置図(③区~⑨区拡大)(S=1/800)	31
第25図 TAK201301調査区縄文時代遺構配置図(S=1,000)	32
第26図 TAK201304調査区縄文時代遺構配置図(S=1,000)	33
第27図 TAK201301調査区SK44遺構実測図(S=1/20)	34
第28図 TAK201301調査区SK45遺構実測図(S=1/20)及び出土遺物実測図(S=1/2)	35
第29図 TAK201302調査区SK76遺構実測図(S=1/20)及び出土遺物実測図(S=2/3)	36
第30図 TAK201304調査区SK06遺構実測図(S=1/20)	37
第31図 TAK201304調査区SK07遺構実測図(S=1/20)	38
第32図 TAK201304調査区旧河川・土坑・ピット配置図(S=1/400)	40
第33図 TAK201301調査区SP285遺構実測図(S=1/10)及び出土遺物実測図(S=2/3)	41
第34図 TAK201304調査区SS01遺構実測図(S=1/20)	42
第35図 TAK201304調査区SS04遺構実測図(S=1/20)	43
第36図 TAK201304調査区SS05遺構実測図(S=1/20)	45
第37図 TAK201302調査区SU01遺構実測図(S=1/20)及び出土遺物実測図(S=1/4)	47
第38図 TAK201302調査区SU03遺構実測図(S=1/20)及び出土遺物実測図(S=1/4)	48
第39図 TAK201302調査区SU04遺構実測図(S=1/20)及び出土遺物実測図(S=1/4)	49
第40図 TAK201302調査区SU05遺物出土状況(S=1/20)	50
第41図 TAK201302調査区SU05出土遺物実測図(S=1/4)	50
第42図 TAK201304調査区NR遺物密集区ドットマップ(S=1/200・1/40)及び土層図(S=1/100)	52
第43図 TAK201304調査区NR出土土器実測図(S=1/3)	52
第44図 TAK201304調査区NR出土土器実測図(S=2/3・1/3)	53

第45図 TAK201301調査区の縄文時代包含層出土土器実測図①(S=1/2)	57
第46図 TAK201301調査区の縄文時代包含層出土土器実測図②(S=1/3)	59
第47図 TAK201301調査区の縄文時代包含層出土土器実測図③(S=2/3)	60
第48図 TAK201301調査区の縄文時代包含層出土土器実測図④(S=1/2)	62
第49図 TAK201302調査区の縄文時代包含層出土土器実測図①(S=1/3)	65
第50図 TAK201302調査区の縄文時代包含層出土土器実測図②(S=1/3)	67
第51図 TAK201302調査区の縄文時代包含層出土土器実測図③(S=1/3)	69
第52図 TAK201302調査区の縄文時代包含層出土土器実測図④(S=1/3)	71
第53図 TAK201302調査区の縄文時代包含層出土土器実測図⑤(S=2/3・1/3)	74
第54図 TAK201302調査区の縄文時代包含層出土土器実測図⑥(S=2/3)	76
第55図 TAK201302調査区の縄文時代包含層出土土器実測図⑦(S=2/3・1/3)	78
第56図 TAK201302調査区の縄文時代包含層出土土器実測図⑧(S=2/3・1/3)	80
第57図 TAK201302調査区の縄文時代包含層出土土器実測図⑨(S=1/3)	81
第58図 TAK201302調査区の縄文時代包含層出土土器実測図⑩(S=1/3)	83
第59図 TAK201303調査区の縄文時代包含層出土土器実測図①(S=1/3)	86
第60図 TAK201303調査区の縄文時代包含層出土土器実測図②(S=1/3)	88
第61図 TAK201303調査区の縄文時代包含層出土土器実測図③(S=1/3)	90
第62図 TAK201303調査区の縄文時代包含層出土土器実測図④(S=1/3)	91
第63図 TAK201303調査区の縄文時代包含層出土土器実測図⑤(S=1/3)	94
第64図 TAK201303調査区の縄文時代包含層出土土器実測図⑥(S=1/3)	96
第65図 TAK201303調査区の縄文時代包含層出土土器実測図⑦(S=1/3)	98
第66図 TAK201303調査区の縄文時代包含層出土土器実測図⑧(S=1/3)	100
第67図 TAK201303調査区の縄文時代包含層出土土器実測図⑨(S=1/3)	102
第68図 TAK201303調査区の縄文時代包含層出土土器実測図⑩(S=2/3・1/3)	104
第69図 TAK201303調査区の縄文時代包含層出土土器実測図⑪(S=2/3)	110
第70図 TAK201303調査区の縄文時代包含層出土土器実測図⑫(S=2/3)	112
第71図 TAK201303調査区の縄文時代包含層出土土器実測図⑬(S=1/2)	114
第72図 TAK201303調査区の縄文時代包含層出土土器実測図⑭(S=1/2)	115
第73図 TAK201303調査区の縄文時代包含層出土土器実測図⑮(S=2/3)	117
第74図 TAK201303調査区の縄文時代包含層出土土器実測図⑯(S=2/3)	119
第75図 TAK201303調査区の縄文時代包含層出土土器実測図⑰(S=1/3)	121
第76図 TAK201304調査区の縄文時代包含層出土土器実測図①(S=1/3)	124
第77図 TAK201304調査区の縄文時代包含層出土土器実測図②(S=1/3)	126
第78図 TAK201304調査区の縄文時代包含層出土土器実測図③(S=2/3)	128
第79図 TAK201304調査区の縄文時代包含層出土土器実測図④(S=2/3)	129
第80図 TAK201304調査区の縄文時代包含層出土土器実測図⑤(S=2/3・1/2・1/3)	131
第81図 TAK201304調査区6層掘削トレンチ位置図(S=1/800)	135
第82図 石鏃基部分類図	136
第83図 装身具の類例(S=2/3)	137
第84図 TAK201301調査区D区弥生時代遺構配置図(S=1/500)	139
第85図 TAK201202調査区⑥区弥生時代遺構配置図(S=1/300)	140
第86図 TAK201302調査区①区弥生時代遺構配置図(S=1/300)	141
第87図 TAK201302調査区④区弥生時代遺構配置図(S=1/300)	142
第88図 TAK201302調査区⑩・⑪区弥生時代遺構配置図(S=1/500)	143
第89図 TAK201303調査区A区弥生時代遺構配置図(S=1/500)	144

## 挿 図 目 次(2)

第90図	TAK201303調査区B区弥生時代遺構配置図(S=1/500)	145	第153図	ST9平・断面図(S=1/40)	208
第91図	SB1平・断面図(S=1/80)	146	第154図	ST10平・断面図(S=1/40)	210
第92図	SB1出土遺物実測図(S=1/3)	147	第155図	ST11平・断面図(S=1/40)	212
第93図	SC1平・断面図(S=1/80)	148	第156図	ST12出土遺物実測図(S=1/3)	213
第94図	SC1出土遺物実測図その1(S=1/3)	149	第157図	ST12平・断面図(S=1/40)	214
第95図	SC1出土遺物実測図その2(S=1/3・2/3)	150	第158図	ST13平・断面図(S=1/40)	216
第96図	SC123平・断面図(S=1/80)	154	第159図	ST13出土遺物実測図(S=1/3)	217
第97図	SC123出土遺物実測図その1(S=1/3)	155	第160図	ST15平・断面図(S=1/40)	219
第98図	SC123出土遺物実測図その2(S=1/4・1/3・2/3)	156	第161図	ST16出土遺物実測図(S=1/3)	220
第99図	SC124平・断面図(S=1/80)	161	第162図	ST16平・断面図(S=1/40)	221
第100図	SC124出土遺物実測図その1(S=1/1・1/3)	162	第163図	ST17出土遺物実測図(S=1/1)	222
第101図	SC124出土遺物実測図その2(S=1/3・2/3)	163	第164図	ST17平・断面図(S=1/40)	223
第102図	SC125平・断面図(S=1/40)	165	第165図	ST18平・断面図(S=1/40)	225
第103図	SD2(1301D区)出土遺物実測図(S=1/3)	166	第166図	ST19平・断面図(S=1/40)	227
第104図	SD2(1301D区)平・断面図(S=1/100)	167	第167図	ST20平・断面図(S=1/40)	229
第105図	SD19平・断面図(S=1/60)	168	第168図	ST22平・断面図(S=1/40)	231
第106図	SD19出土遺物実測図その1(S=1/3)	169	第169図	ST23平・断面図(S=1/40)	233
第107図	SD19出土遺物実測図その2(S=1/3)	170	第170図	ST24平・断面図(S=1/40)	235
第108図	SD2(1303B3区)平・断面図(S=1/80)	172	第171図	ST25平・断面図(S=1/20)	237
第109図	SD2(1303B3区)出土遺物実測図(S=1/3・2/3)	173	第172図	ST26平・断面図(S=1/20)	239
第110図	SK116平・断面図(S=1/20)	174	第173図	ST27平・断面図(S=1/20)	241
第111図	SK116出土遺物実測図(S=1/3)	175	第174図	ST28平・断面図(S=1/20)	243
第112図	SK27平・断面図(S=1/40)	175	第175図	ST28出土遺物実測図(S=1/3)	244
第113図	SK27出土遺物実測図(S=1/3)	175	第176図	ST31平・断面図(S=1/20)	245
第114図	SK8平・断面図(S=1/20)	176	第177図	ST32平・断面図(S=1/20)	246
第115図	SK8出土遺物実測図(S=1/3)	176	第178図	ST34平・断面図(S=1/40)	247
第116図	SK9平・断面図(S=1/20)	177	第179図	ST35平面図(S=1/40)	248
第117図	SK9出土遺物実測図(S=1/3)	177	第180図	ST35出土遺物実測図(S=1/4・1/3)	249
第118図	SL18平・断面図(S=1/40)	178	第181図	ST36平・断面図(S=1/40)	250
第119図	SL18出土遺物実測図(S=1/3)	178	第182図	ST36出土遺物実測図(S=1/4)	251
第120図	SS4平・断面図(S=1/40)	179	第183図	ST37平・断面図(S=1/20)	252
第121図	SS4出土遺物実測図(S=1/3)	180	第184図	ST37出土遺物実測図(S=1/4)	253
第122図	SU1平面・拡大図(S=1/40・1/10)	181	第185図	ST38平・断面図(S=1/20)	254
第123図	SU1出土遺物実測図(S=1/3)	182	第186図	ST38出土遺物実測図(S=1/4)	255
第124図	SP5平・断面図(S=1/20)	183	第187図	祭祀遺構1出土遺物実測図(S=1/1・1/3)	257
第125図	SP5出土遺物実測図(S=1/3)	183	第188図	祭祀遺構1平・断面図(S=1/20)	259
第126図	SP75平・断面図(S=1/20)	184	第189図	祭祀遺構2平面図(S=1/40)	263
第127図	SP75出土遺物実測図(S=1/3)	184	第190図	祭祀遺構2出土遺物実測図その1(S=1/3)	264
第128図	SP168平・断面図(S=1/20)	184	第191図	祭祀遺構2出土遺物実測図その2(S=1/4・1/3)	265
第129図	SP168出土遺物実測図(S=1/3)	184	第192図	祭祀遺構2出土遺物実測図その3(S=1/4・1/3)	266
第130図	SP258平・断面図(S=1/20)	185	第193図	祭祀遺構2出土遺物実測図その4(S=1/4・1/3)	267
第131図	SP258出土遺物実測図(S=1/3)	185	第194図	祭祀遺構2出土遺物実測図その5(S=1/4・1/3)	268
第132図	SP281平・断面図(S=1/20)	185	第195図	祭祀遺構2出土遺物実測図その6(S=1/3)	269
第133図	SP281出土遺物実測図(S=1/3)	185	第196図	祭祀遺構2出土遺物実測図その7(S=1/4・1/3)	270
第134図	SP231平・断面図(S=1/20)	186	第197図	祭祀遺構2出土遺物実測図その8(S=1/3)	271
第135図	SP231出土遺物実測図(S=1/3)	186	第198図	標石1平・断面図(S=1/40)	279
第136図	SX2(1301D区)平・断面図(S=1/40)	186	第199図	標石2平・断面図(S=1/40)	279
第137図	SX2(1301D区)出土遺物実測図(S=1/3)	187	第200図	標石3平・断面図(S=1/40)	280
第138図	SX4平・断面図(S=1/40)	188	第201図	標石4平・断面図(S=1/40)	281
第139図	SX4出土遺物実測図(S=1/3)	188	第202図	ST1(1303B1区)平・断面図(S=1/20)	282
第140図	SX2(1302①)平・断面図(S=1/40)	189	第203図	ST1(1303B1区)出土遺物実測図(S=1/4)	283
第141図	SX2(1302①)出土遺物実測図(S=1/3)	190	第204図	SK2平・断面図(S=1/20)	286
第142図	SX5平・断面図(S=1/80)	190	第205図	SK3平・断面図(S=1/40)	286
第143図	SX5出土遺物実測図(S=1/4・1/3)	191	第206図	SK4平・断面図(S=1/40)	287
第144図	ST1(1302①)平・断面図(S=1/50)	193	第207図	SK5平・断面図(S=1/40)	287
第145図	ST3出土遺物実測図(S=1/3)	195	第208図	SK7平・断面図(S=1/40)	288
第146図	ST3平・断面図(S=1/40)	196	第209図	SK8(1302①)平・断面図(S=1/20)	288
第147図	ST5平・断面図(S=1/40)	198	第210図	SK10平・断面図(S=1/20)	288
第148図	ST6平・断面図(S=1/40)	200	第211図	弥生時代包含層出土遺物実測図(S=1/1・1/3・2/3)	290
第149図	ST6出土遺物実測図(S=1/3)	201	第212図	弥生時代包含層出土鉄斧実測図(S=1/4)	290
第150図	ST7平・断面図(S=1/20)	203	第213図	TAK201202調査区⑥区遺構配置図(S=1/300)	292
第151図	ST8平・断面図(S=1/40)	205	第214図	TAK201302調査区④区古墳時代遺構配置図(S=1/300)	293
第152図	ST8出土遺物実測図(S=1/1・1/3)	206	第215図	TAK201302調査区⑩区古墳時代遺構配置図(S=1/300)	294

## 挿 図 目 次(3)

第216図	TAK201302調査区⑩区古墳時代遺構配置図(S=1/500)	295	第279図	SK20平・断面図(S=1/60)	384
第217図	TAK201303調査区A区古墳時代遺構配置図(S=1/500)	296	第280図	SK20出土遺物(S=1/3)	384
第218図	TAK201303調査区B区古墳時代遺構配置図(S=1/500)	297	第281図	SK23平・断面図(S=1/40)	385
第219図	SC1(1302⑩)平・断面図(S=1/80)	298	第282図	SK23出土遺物(S=1/3)	385
第220図	SC1(1302⑩)出土遺物実測図(S=1/3)	299	第283図	SK24平・断面図(S=1/40)	385
第221図	SC114平・断面図(S=1/40)	300	第284図	SK25平・断面図(S=1/40)	386
第222図	SC114出土遺物実測図(S=1/3)	300	第285図	SK26平・断面図(S=1/60)	386
第223図	SP149平・断面図(S=1/20)	301	第286図	SK26出土遺物(S=1/3)	386
第224図	SP149出土遺物実測図(S=1/3)	301	第287図	SK27平・断面図(S=1/60)	386
第225図	SP150平・断面図(S=1/20)	301	第288図	SK29・30平・断面図(S=1/60)	387
第226図	SP150出土遺物実測図(S=1/3)	301	第289図	SK31・32平・断面図(S=1/60)	387
第227図	SP240平・断面図(S=1/20)	302	第290図	SK34平・断面図(S=1/60)	387
第228図	SP244平・断面図(S=1/20)	302	第291図	SK35平・断面図(S=1/60)	387
第229図	SU2平・断面図(S=1/20)	302	第292図	SK36平・断面図(S=1/60)	388
第230図	SU2出土遺物実測図(S=1/3)	303	第293図	SK37平・断面図(S=1/60)	388
第231図	SU6平・断面図(S=1/40)	304	第294図	SK38平・断面図(S=1/60)	388
第232図	SU6出土遺物実測図その1(S=1/3)	305	第295図	SK42平・断面図(S=1/60)	388
第233図	SU6出土遺物実測図その2(S=1/3)	306	第296図	SK43平・断面図(S=1/60)	389
第234図	SU6出土遺物実測図その3(S=1/3)	307	第297図	SK44平・断面図(S=1/60)	389
第235図	SU6出土遺物実測図その4(S=1/4)	308	第298図	SK47・49平・断面図(S=1/40)	389
第236図	SD3平・断面図(S=1/80)	312	第299図	SK50～54, 63平・断面図(S=1/40)	390
第237図	SD3出土遺物実測図(S=1/3)	313	第300図	SK55平・断面図(S=1/40)	391
第238図	SK111平・断面図(S=1/20)	314	第301図	SK56平・断面図(S=1/40)	391
第239図	SK111出土遺物実測図(S=1/4)	314	第302図	SK58平・断面図(S=1/60)	391
第240図	古墳時代包含層出土遺物実測図(S=1/3・2/3)	315	第303図	SK58出土遺物(S=1/3)	391
第241図	①区遺構配置図(S=1/300)	319	第304図	SK62平・断面図(S=1/60)	392
第242図	墓域出土遺物実測図その1	320	第305図	SK65平・断面図(S=1/40)	392
第243図	墓域出土遺物実測図その2	321	第306図	SK66平・断面図(S=1/20)	392
第244図	①区グルーピング図(S=1/400)	323	第307図	SK66出土遺物(S=1/3)	393
第245図	箱式石棺墓 型式模式図	325	第308図	SK71平・断面図(S=1/40)	393
第246図	石棺墓の型式変遷概念図(寺田2005)	326	第309図	SK71出土遺物(S=1/3)	393
第247図	TAK1208調査区の墓域(S=1/600)	327	第310図	SK72平・断面図(S=1/20)	394
第248図	箱式石棺の石材供給候補地図(S=1/50,000)	330	第311図	SK72出土遺物(S=1/3)	394
第249図	長崎県内における青銅鏡出土遺跡位置図(弥生時代～古墳時代前半)	332	第312図	SK92平・断面図(S=1/40)	395
第250図	破鏡及びその他の青銅器実測図(S=1/3・2/3)	333	第313図	TAK201202④区土坑及び周辺調査区遺構配置図(S=1/200)	396
第251図	TAK201302調査区④区古代遺構配置図(S=1/300)	359	第314図	SS02平・断面図(1/20)	397
第252図	TAK201302調査区⑤区古代遺構配置図(S=1/200)	360	第315図	SS02出土遺物(S=1/3)	398
第253図	TAK201302調査区⑥区⑦区⑧区古代遺構配置図(S=1/500)	361	第316図	SX04平・断面図(S=1/40)	398
第254図	TAK201302調査区⑨区⑩区古代遺構配置図(S=1/500)	362	第317図	SX04出土遺物(S=1/3)	401
第255図	TAK201303調査区B区古代遺構配置図(S=1/300)	363	第318図	SX07平・断面図(S=1/40)	402
第256図	SB01出土遺物(S=1/3)	364	第319図	SX07出土遺物(S=1/3)	403
第257図	SB01平・断面図(S=1/60)	365	第320図	SX06・SX10平・断面図(平面1/120, 断面1/40)	406
第258図	SB02平・断面図(S=1/80)	366	第321図	SX08平・断面図(S=1/60)	407
第259図	SB03平・断面図(S=1/60)	367	第322図	SX12平・断面図(断面S=1/40・平面S=1/120)	409
第260図	SB04平・断面図(S=1/60)	368	第323図	TAK201302包含層出土遺物その1(S=1/3)	411
第261図	SB05平・断面図(S=1/80)	370	第324図	TAK201302包含層出土遺物その2(S=1/3)	413
第262図	SB05出土遺物(S=1/3)	371	第325図	TAK201302包含層出土遺物その3(S=1/3)	415
第263図	SB06平・断面図(S=1/60)	371	第326図	TAK201302包含層出土遺物その4(S=1/3)	416
第264図	SB07平・断面図(S=1/80)	372	第327図	TAK201303包含層出土遺物(S=1/3)	420
第265図	SA01平・断面図(S=1/80)	374	第328図	TAK201304包含層出土遺物(S=1/3)	422
第266図	SA02平・断面図(S=1/60)	375	第329図	古代特殊遺物(S=1/2, 1/3)	424
第267図	SA03・SA04平・断面図(S=1/80)	375	第330図	古代出土文字資料(S=1/3)	425
第268図	SD03出土遺物(S=1/3)	377	第331図	宮原遺跡出土・惣座遺跡出土須恵器高杯(S=1/4)	429
第269図	SD03・05平・断面図(平面S=1/100, 断面1/40)	378	第332図	TAK201302調査区⑤区SKの並び(S=1/200)	431
第270図	SD04平・断面図(平面S=1/100, 断面1/40)	380	第333図	九州内官衙遺跡・駅路配置図	436
第271図	SK12平・断面図(S=1/40)	382	第334図	TAK201301調査区 D・E区遺構配置図(1/500)	441
第272図	SK13平・断面図(S=1/60)	382	第335図	TAK201302調査区 ①・②区遺構配置図(1/500)	442
第273図	SK15平・断面図(S=1/60)	383	第336図	TAK201302調査区 ⑨・⑩区遺構配置図(1/500)	443
第274図	SK16平・断面図(S=1/60)	383	第337図	TAK201302調査区 ⑪区遺構配置図(1/300)	444
第275図	SK16出土遺物(S=1/3)	383	第338図	TAK201303調査区 A区遺構配置図(1/500)	445
第276図	SK17平・断面図(S=1/60)	383	第339図	TAK201303調査区 C区遺構配置図(1/500)	446
第277図	SK18平・断面図(S=1/40)	384	第340図	SB2平・断面図(S=1/60)	448
第278図	SK19平・断面図(S=1/60)	384	第341図	SD11. 12. 13平・断面図(S=1/1,000, 1/200, 1/50)	449

## 挿 図 目 次(4)

第342図	SD11出土遺物-1(S=1/3)	451	第366図	TAK201303調査区2層出土遺物-1(S=1/3)	484
第343図	SD11出土遺物-2(S=1/3)	453	第367図	TAK201303調査区2層出土遺物-2(S=1/3)	486
第344図	SD16平・断面図(S=1/100、1/40)	454	第368図	TAK201304調査区2層出土遺物(S=1/3)	489
第345図	SD16出土遺物-1(S=1/3)	455	第369図	TAK201301調査区3層出土遺物(S=1/3)	491
第346図	SD16出土遺物-2(S=1/3)	456	第370図	TAK201302調査区3層出土遺物-1(S=1/3)	493
第347図	SD9平・断面図(S=1/100、1/50)	457	第371図	TAK201302調査区3層出土遺物-2(S=1/3)	495
第348図	SD9出土遺物-1(S=1/3)	458	第372図	TAK201303調査区3層出土遺物(S=1/3)	498
第349図	SD11平・断面図(S=1/400)	460	第373図	TAK201304調査区3層出土遺物(S=1/3)	499
第350図	SD11出土遺物-1(S=1/3)	462	第374図	石鍋編年図	501
第351図	SD11出土遺物-2(S=1/3)	464	第375図	岡遺跡出土不明滑石製品(S=1/3)	502
第352図	SD11出土遺物-3(S=1/3)	466	第376図	近世遺構配置図(S=1/200)	503
第353図	SK78平・断面図(S=1/40)	469	第377図	ST1平・断面図(S=1/40)	504
第354図	SK78出土遺物(S=1/3)	469	第378図	ST1出土遺物(S=1/3)	504
第355図	SK77平・断面図(S=1/40)	470	第379図	ST2平・断面図(S=1/40)	505
第356図	SK79平・断面図(S=1/40)	470	第380図	ST3平・断面図(S=1/40)	505
第357図	SS5平・断面図(S=1/50)	471	第381図	ST3出土遺物(S=1/3)	506
第358図	SS5出土遺物(S=1/3)	472	第382図	ST4平・断面図(S=1/40)	506
第359図	ST1平・断面図(S=1/20)	473	第383図	ST4出土遺物(S=1/3)	507
第360図	ST1出土遺物(S=1/3)	473	第384図	SK1平・断面図(S=1/20)	509
第361図	SX1平・断面図(S=1/40)	474	第385図	SK1出土遺物(S=1/4)	510
第362図	SX1出土遺物(S=1/3)	475	第386図	SX6平・断面図(S=1/80)	511
第363図	TAK201301調査区2層出土遺物(S=1/3)	476	第387図	SX6出土遺物(S=1/3)	512
第364図	TAK201302調査区2層出土遺物-1(S=1/3)	480	第388図	竹松遺跡全体遺構配置図(S=1/1,500)	577
第365図	TAK201302調査区2層出土遺物-2(S=1/3)	482			

## 表 目 次(1)

第1表	TAK201301調査区 SK45出土土器観察表	36	第37表	SD19出土土器観察表	171
第2表	TAK201302調査区 SK76出土石器観察表	36	第38表	SD2(1303B3区)出土土器観察表	174
第3表	長崎県内落とし穴状遺構検出遺跡一覧表	39	第39表	SD2(1303B3区)出土石器観察表	174
第4表	TAK201301調査区 SP285出土土器観察表	41	第40表	SK116出土土器観察表	175
第5表	TAK201304調査区 4層出土縄文土器時期別出土数一覧表	45	第41表	SK27出土土器観察表	175
第6表	長崎県内集石遺構検出遺跡一覧表	45	第42表	SK8(1303A1区)出土土器観察表	176
第7表	TAK201304調査区集石遺構観察表	45	第43表	SK9出土土器観察表	177
第8表	TAK201302調査区 SU01・SU03出土土器観察表	48	第44表	SL18出土土器観察表	178
第9表	TAK201302調査区 SU04出土土器観察表	49	第45表	SS4出土土器観察表	180
第10表	TAK201302調査区 SU05出土土器観察表	50	第46表	SU1出土土器観察表	182
第11表	TAK201304調査区 NR 出土土器観察表	52	第47表	SP5出土土器観察表	183
第12表	TAK201304調査区 NR 出土石器観察表	55	第48表	SP75出土土器観察表	184
第13表	TAK201301調査区 包含層出土土器観察表	60	第49表	SP168出土土器観察表	184
第14表	TAK201301調査区 包含層出土石器観察表	64	第50表	SP258出土土器観察表	185
第15表	TAK201302調査区 包含層出土土器観察表	73	第51表	SP281出土土器観察表	185
第16表	TAK201302調査区 包含層出土石器観察表	85	第52表	SP231出土土器観察表	186
第17表	TAK201303調査区 包含層出土土器観察表①	107	第53表	SX2(1301D区)出土土器観察表	187
第18表	TAK201303調査区 包含層出土土器観察表②	108	第54表	SX4出土土器観察表	188
第19表	TAK201303調査区 包含層出土石器観察表	123	第55表	SX2(1302①)出土土器観察表	190
第20表	TAK201304調査区 包含層出土土器観察表	127	第56表	SX5出土土器観察表	191
第21表	TAK201304調査区 包含層出土石器観察表	133	第57表	ST3出土土器観察表	195
第22表	TAK201304調査区 出土石鏃分類集計表	136	第58表	ST6出土土器観察表	201
第23表	TAK201304調査区 4層出土石鏃重量別度数分布表	136	第59表	ST8出土土器観察表	206
第24表	TAK201304調査区 石鏃基部別重量度数分布表	137	第60表	ST8出土ガラス小玉観察表	206
第25表	装身具(垂飾)観察表	138	第61表	ST12出土土器観察表	213
第26表	SB1出土土器観察表	147	第62表	ST13出土土器観察表	217
第27表	SC1出土土器観察表	152	第63表	ST16出土土器観察表	220
第28表	SC1出土石器観察表	153	第64表	ST17出土管玉観察表	222
第29表	SC123出土土器観察表その1	159	第65表	ST28出土土器観察表	244
第30表	SC123出土土器観察表その2	160	第66表	ST35出土土器観察表	248
第31表	SC123出土鏡観察表	160	第67表	ST36出土土器観察表	251
第32表	SC124出土土器観察表	164	第68表	ST37出土土器観察表	253
第33表	SC124出土ガラス小玉観察表	165	第69表	ST38出土土器観察表	256
第34表	SC124出土鉄製品観察表	165	第70表	祭祀遺構1出土土器観察表	258
第35表	SC124出土石器観察表	165	第71表	祭祀遺構1出土ガラス小玉観察表	258
第36表	SD2(1301D区)出土土器観察表	166	第72表	祭祀遺構2出土土器観察表その1	277

## 表 目 次(2)

第73表	祭祀遺構2出土土器観察表その2	278	第127表	SD9出土土器・陶磁器観察表	459
第74表	ST1(1303B1区)出土土器観察表	284	第128表	SD9出土滑石製石鍋観察表	459
第75表	弥生時代墳墓一覧表	285	第129表	SD9出土滑石製品観察表	459
第76表	弥生時代包含層出土土器観察表	291	第130表	SD9出土滑石製石鍋加工製品観察表	460
第77表	弥生時代包含層出土石器観察表	291	第131表	SD9出土石鍋加工素材観察表	460
第78表	弥生時代包含層出土青銅器観察表	291	第132表	SD11出土土器・陶磁器観察表	468
第79表	弥生時代包含層出土ガラス小玉観察表	291	第133表	SD11出土滑石製石鍋観察表	468
第80表	弥生時代包含層出土鉄器(鉄斧)観察表	291	第134表	SD11出土石鍋加工製品観察表	468
第81表	SC1出土土器観察表	299	第135表	SD11出土石鍋加工素材観察表	468
第82表	SC114出土土器観察表	300	第136表	SK78出土磁器観察表	469
第83表	SP149出土土器観察表	301	第137表	SS5出土陶器観察表	472
第84表	SP150出土土器観察表	301	第138表	SS5出土滑石製石鍋観察表	472
第85表	SU2出土土器観察表	303	第139表	ST1出土磁器観察表	474
第86表	SU6出土土器観察表その1	311	第140表	SX1出土木製品観察表	475
第87表	SU6出土土器観察表その2	312	第141表	TAK201301調査区 2層出土土器・陶磁器観察表	478
第88表	SD3出土土器観察表	313	第142表	TAK201301調査区 2層出土滑石製品観察表	478
第89表	SK111出土土器観察表	314	第143表	TAK201302調査区 2層出土土器・陶磁器観察表	479
第90表	古墳時代包含層出土土器観察表	316	第144表	TAK201302調査区 2層出土土製品観察表	479
第91表	古墳時代包含層出土石器観察表	316	第145表	TAK201302調査区 2層出土滑石製石鍋観察表	482
第92表	古墳時代包含層出土鉄製品観察表	316	第146表	TAK201302調査区 2層出土滑石製品観察表	483
第93表	長崎県内出土弥生時代関係鏡、鏡片、破鏡一覧表	334	第147表	TAK201302調査区 2層出土滑石製石鍋補修具観察表	483
第94表	旧彼杵郡内の石棺墓集成一覧表(一部高来郡を含む)	337	第148表	TAK201302調査区 2層出土石鍋加工素材観察表	483
第95表	SB01出土遺物観察表	365	第149表	TAK201303調査区 2層出土陶磁器観察表	486
第96表	SB05出土土器観察表	371	第150表	TAK201303調査区 2層出土滑石製石鍋観察表	487
第97表	SB(掘立柱建物跡)計測表	372	第151表	TAK201303調査区 2層出土滑石製品観察表	487
第98表	SA(柵列)計測表	376	第152表	TAK201303調査区 2層出土滑石製石鍋加工素材観察表	488
第99表	SD03出土土製品観察表	379	第153表	TAK201304調査区 2層出土土器・陶磁器観察表	488
第100表	SD03出土土器観察表	379	第154表	TAK201304調査区 2層出土滑石製石鍋観察表	488
第101表	SK16出土土器観察表	383	第155表	TAK201303調査区 2層出土滑石製石鍋加工素材観察表	488
第102表	SK20出土土器観察表	384	第156表	TAK201301調査区 3層出土土器・陶磁器観察表	490
第103表	SK23出土土器観察表	385	第157表	TAK201301調査区 3層出土滑石製ミニチュア石鍋観察表	490
第104表	SK26出土土器観察表	386	第158表	TAK201301調査区 3層出土滑石製品観察表	490
第105表	SK58出土土器観察表	391	第159表	TAK201302調査区 3層出土土器・陶磁器観察表	497
第106表	SK66出土土器観察表	393	第160表	TAK201302調査区 3層出土滑石製石鍋観察表	497
第107表	SK71出土土器観察表	393	第161表	TAK201302調査区 3層出土滑石製ミニチュア石鍋観察表	497
第108表	SK72出土土器観察表	394	第162表	TAK201302調査区 3層出土滑石製品観察表	497
第109表	TAK201202④区関連土坑一覧表	395	第163表	TAK201302調査区 3層出土滑石製石鍋加工素材観察表	497
第110表	TAK201303SS02出土土器観察表	398	第164表	TAK201303調査区 3層出土土器・陶磁器観察表	499
第111表	TAK201302SX04出土土器観察表	400	第165表	TAK201303調査区 3層出土滑石製品観察表	499
第112表	TAK201302SX04出土石器観察表	400	第166表	TAK201303調査区 3層出土石鍋観察表	499
第113表	TAK201302SX07出土土器観察表	404	第167表	TAK201304調査区 3層出土磁器観察表	500
第114表	TAK201302包含層出土土器観察表	417	第168表	TAK201304調査区 3層出土滑石製石鍋観察表	500
第115表	TAK201303包含層出土土器観察表	421	第169表	TAK201304調査区 3層出土滑石製品観察表	500
第116表	TAK201302・TAK201303包含層出土石器観察表	421	第170表	調査区ごとの遺構数	501
第117表	TAK201304包含層出土土器観察表	422	第171表	ST1出土土器観察表	505
第118表	TAK201304包含層出土土製品観察表	422	第172表	ST3出土金属製品観察表	506
第119表	古代特殊遺物(金属器)観察表	425	第173表	ST4出土金属製品観察表	507
第120表	古代特殊遺物(石器)観察表	425	第174表	ST4出土土器観察表	508
第121表	古代特殊遺物(土器)観察表	425	第175表	SA(柵列)計測表	508
第122表	SB(掘立柱建物跡)計測表	447	第176表	SB(礎石建物)計測表	508
第123表	SD11出土土器・陶磁器観察表	450	第177表	SK1出土土器観察表	510
第124表	SD11出土滑石製石鍋観察表	453	第178表	SX6出土土器観察表	512
第125表	SD16出土土器・陶磁器観察表	457	第179表	SX6出土石製品観察表	513
第126表	SD16出土滑石製石鍋観察表	457			

## 図 版 目 次(1)

図版 1	TAK201304調査区 SS04検出状況	44	図版 8	TAK201302調査区の縄文時代包含層出土土器①	66
図版 2	TAK201304調査区 NR 出土土器	52	図版 9	TAK201302調査区の縄文時代包含層出土土器②	68
図版 3	TAK201304調査区 NR 出土石器	54	図版10	TAK201302調査区の縄文時代包含層出土土器③	70
図版 4	TAK201301調査区の縄文時代包含層出土土器①	58	図版11	TAK201302調査区の縄文時代包含層出土土器④	72
図版 5	TAK201301調査区の縄文時代包含層出土土器②	59	図版12	TAK201302調査区の縄文時代包含層出土土器①	75
図版 6	TAK201301調査区の縄文時代包含層出土土器①	61	図版13	TAK201302調査区の縄文時代包含層出土土器②	77
図版 7	TAK201301調査区の縄文時代包含層出土土器②	63	図版14	TAK201302調査区の縄文時代包含層出土土器③	79

## 図 版 目 次(2)

図版15	TAK201302調査区の縄文時代包含層出土石器④	80	図版78	SP258出土遺物	185
図版16	TAK201302調査区の縄文時代包含層出土石器⑤	82	図版79	SP281出土遺物	185
図版17	TAK201302調査区の縄文時代包含層出土石器⑥	84	図版80	SP231出土遺物	186
図版18	TAK201303調査区の縄文時代包含層出土石器①	87	図版81	SX2(1301D区)遺構状況(①~④)	187
図版19	TAK201303調査区の縄文時代包含層出土石器②	89	図版82	SX2(1301D区)出土遺物	187
図版20	TAK201303調査区の縄文時代包含層出土石器③	92	図版83	SX4遺構状況(①~③)	187
図版21	TAK201303調査区の縄文時代包含層出土石器④	93	図版84	SX4出土遺物	188
図版22	TAK201303調査区の縄文時代包含層出土石器⑤	95	図版85	SX2(1302①)遺構状況(①~④)	189
図版23	TAK201303調査区の縄文時代包含層出土石器⑥	97	図版86	SX2(1302①)出土遺物	190
図版24	TAK201303調査区の縄文時代包含層出土石器⑦	99	図版87	SX5遺構状況(①~④)	191
図版25	TAK201303調査区の縄文時代包含層出土石器⑧	101	図版88	SX5出土遺物	191
図版26	TAK201303調査区の縄文時代包含層出土石器⑨	103	図版89	ST1(1302①)遺構状況(①~⑨)	192
図版27	TAK201303調査区の縄文時代包含層出土石器⑩	105	図版90	ST3遺構状況(①~⑥)	195
図版28	TAK201303調査区の縄文時代包含層出土石器①	111	図版91	ST3出土遺物	195
図版29	TAK201303調査区の縄文時代包含層出土石器②	113	図版92	ST5遺構状況(①~④)	197
図版30	TAK201303調査区の縄文時代包含層出土石器③	116	図版93	ST6遺構状況(①~⑨)	199
図版31	TAK201303調査区の縄文時代包含層出土石器④	116	図版94	ST6出土遺物	201
図版32	TAK201303調査区の縄文時代包含層出土石器⑤	118	図版95	ST7遺構状況(①~⑥)	202
図版33	TAK201303調査区の縄文時代包含層出土石器⑥	120	図版96	ST8遺構状況(①~⑥)	204
図版34	TAK201303調査区の縄文時代包含層出土石器⑦	122	図版97	ST8出土遺物	206
図版35	TAK201304調査区の縄文時代包含層出土石器①	125	図版98	ST9遺構状況(①~⑤)	207
図版36	TAK201304調査区の縄文時代包含層出土石器②	127	図版99	ST10遺構状況(①~⑥)	209
図版37	TAK201304調査区の縄文時代包含層出土石器①	130	図版100	ST11遺構状況(①~⑦)	211
図版38	TAK201304調査区の縄文時代包含層出土石器②	130	図版101	ST12遺構状況(①~⑤)	213
図版39	TAK201304調査区の縄文時代包含層出土石器③	132	図版102	ST12出土遺物	213
図版40	TAK201304調査区6層出土石器	135	図版103	ST13遺構状況(①~⑨)	215
図版41	オオスズメバチ前蛹	137	図版104	ST13出土遺物	217
図版42	SBI遺構状況(①・②)	147	図版105	ST15遺構状況(①~⑦)	218
図版43	SBI出土遺物	147	図版106	ST16遺構状況(①~⑤)	220
図版44	SC1遺構状況(①~④)	148	図版107	ST16出土遺物	220
図版45	SC1出土遺物その1	151	図版108	ST17遺構状況(①~⑥)	222
図版46	SC1出土遺物その2	152	図版109	ST17出土遺物	222
図版47	SC123遺構状況(①~⑧)	154	図版110	ST18遺構状況(①~⑤)	224
図版48	SC123出土遺物その1	157	図版111	ST19遺構状況(①~⑤)	226
図版49	SC123出土遺物その2	158	図版112	ST20遺構状況(①~⑥)	228
図版50	SC124遺構状況(①~④)	161	図版113	ST22遺構状況(①~④)	230
図版51	SC124出土遺物その1	163	図版114	ST23遺構状況(①~⑥)	232
図版52	SC124出土遺物その2	164	図版115	ST24遺構状況(①~⑥)	234
図版53	SC125遺構状況(①~③)	166	図版116	ST25遺構状況(①~④)	236
図版54	SD2(1301D区)遺構状況(①・②)	166	図版117	ST26遺構状況(①~⑥)	238
図版55	SD2(1301D区)出土遺物	166	図版118	ST27遺構状況(①~④)	240
図版56	SD19遺構状況(①~⑥)	169	図版119	ST28遺構状況(①~⑤)	242
図版57	SD19出土遺物その1	170	図版120	ST28出土遺物	244
図版58	SD19出土遺物その2	171	図版121	ST31遺構状況(①~③)	245
図版59	SD2(1303B3区)遺構状況(①~④)	173	図版122	ST32遺構状況(①~③)	246
図版60	SD2(1303B3区)出土遺物	173	図版123	ST34遺構状況(①・②)	247
図版61	SK116遺構状況(①・②)	174	図版124	ST35遺構状況(①~③)	248
図版62	SK116出土遺物	175	図版125	ST35出土遺物	248
図版63	SK27遺構状況(①・②)	175	図版126	ST36遺構状況(①~③)	250
図版64	SK27出土遺物	175	図版127	ST36出土遺物	250
図版65	SK8(1303A1区)遺構状況(①~③)	176	図版128	ST37遺構状況(①~④)	252
図版66	SK8(1303A1区)出土遺物	176	図版129	ST37出土遺物	253
図版67	SK9遺構状況(①~④)	177	図版130	ST38遺構状況(①~⑤)	254
図版68	SK9出土遺物	177	図版131	ST38出土遺物	255
図版69	SL18遺構状況(①・②)	178	図版132	祭祀遺構1遺構状況(①~⑥)	257
図版70	SL18出土遺物	178	図版133	祭祀遺構1出土遺物	258
図版71	SS4遺構状況(①~④)	179	図版134	祭祀遺構2遺構状況(①~④)	262
図版72	SS4出土遺物	180	図版135	祭祀遺構2出土遺物その1	272
図版73	SU1遺物出土状況	180	図版136	祭祀遺構2出土遺物その2	273
図版74	SU1出土遺物	183	図版137	祭祀遺構2出土遺物その3	274
図版75	SP5出土遺物	183	図版138	祭祀遺構2出土遺物その4	275
図版76	SP75出土遺物	184	図版139	祭祀遺構2出土遺物その5	276
図版77	SP168出土遺物	184	図版140	祭祀遺構2出土遺物その6	277

## 図 版 目 次(3)

図版141	標石1遺構状況(①・②)	279	図版204	SK13断面状況(南東から)	382
図版142	標石2遺構状況(①・②)	279	図版205	SK15断面状況(南東から)	383
図版143	標石3遺構状況(①～⑤)	280	図版206	SK16断面状況(北から)	383
図版144	標石4遺構状況(①～③)	280	図版207	SK16出土遺物	383
図版145	ST1(1303B 1区)遺構状況(①～⑥)	281	図版208	SK17断面状況(北から)	383
図版146	ST1(1303B 1区)出土遺物	284	図版209	SK18断面状況(北東から)	384
図版147	SK2遺構状況(①・②)	286	図版210	SK19断面状況(西から)	384
図版148	SK3遺構状況(①～③)	286	図版211	SK20断面状況(西から)	384
図版149	SK4遺構状況(①・②)	287	図版212	SK20出土遺物	384
図版150	SK5遺構状況(①～④)	287	図版213	SK23断面状況(北から)	385
図版151	SK7遺構状況(①～③)	288	図版214	SK23出土遺物	385
図版152	SK8(1302①)遺構状況(①・②)	288	図版215	SK24断面状況(北から)	385
図版153	SK10遺構状況(①・②)	288	図版216	SK25断面状況(北西から)	386
図版154	弥生時代包含層出土鉄斧	290	図版217	SK26完掘状況(北から)	386
図版155	弥生時代包含層出土遺物	291	図版218	SK26出土遺物	386
図版156	SC1(1302⑩)遺構状況(①～④)	299	図版219	SK27断面状況(北から)	386
図版157	SC1(1302⑩)出土遺物	299	図版220	SK29断面状況(東から)	387
図版158	SC114遺構状況(①～④)	300	図版221	SK30断面状況(東から)	387
図版159	SC114出土遺物	300	図版222	SK31・32断面状況(北東から)	387
図版160	SP149出土遺物	301	図版223	SK34断面状況(東から)	387
図版161	SP150出土遺物	301	図版224	SK35断面状況(東から)	387
図版162	SU2遺構状況(①～⑤)	303	図版225	SK36断面状況(東から)	388
図版163	SU2出土遺物	303	図版226	SK37断面状況(北から)	388
図版164	SU6遺構状況(①～④)	304	図版227	SK38断面状況(北から)	388
図版165	SU6出土遺物その1	308	図版228	SK42断面状況(北西から)	388
図版166	SU6出土遺物その2	309	図版229	SK43断面状況(東から)	389
図版167	SU6出土遺物その3	310	図版230	SK44検出状況(北西から)	389
図版168	SD3遺構状況(①～④)	313	図版231	SK44半截状況(北西から)	389
図版169	SD3出土遺物	313	図版232	SK50～54・63断面状況(北から)	390
図版170	SK111遺構状況(①～③)	314	図版233	SK52完掘状況(北から)	390
図版171	SK111出土遺物	314	図版234	SK53断面状況(北から)	390
図版172	古墳時代包含層出土遺物	316	図版235	SK55断面状況(北から)	391
図版173	ST1・ST13の分析石材	329	図版236	SK56断面状況(東から)	391
図版174	破鏡及びその他の青銅器	333	図版237	SK58断面状況(北から)	391
図版174-2	TAK201302①調査区弥生時代後期の集団墓空撮	358	図版238	SK58出土遺物	391
図版175	SB01完掘状況(北から)	364	図版239	SK62断面状況(西から)	392
図版176	SB01出土遺物	364	図版240	SK62完掘状況(北西から)	392
図版177	SB02検出状況(南から)	365	図版241	SK65断面状況(西から)	392
図版178	SB02完掘状況(東から)	366	図版242	SK65完掘状況(西から)	392
図版179	SB03・04完掘状況(東から)	368	図版243	SK66断面状況(南から)	392
図版180	SB05検出状況(北から)	369	図版244	SK66遺物出土状況	393
図版181	SB05完掘状況(北から)	369	図版245	SK66出土遺物	393
図版182	SB05・06完掘状況(空撮)	369	図版246	SK71断面状況(東から)	393
図版183	SB05出土遺物	371	図版247	SK71出土遺物	393
図版184	SB06検出状況(南から)	372	図版248	SK72検出状況(東から)	394
図版185	SB07・SA01・SA02検出状況	373	図版249	SK72断面状況(東から)	394
図版186	SA01完掘状況(北西から)	373	図版250	SK72完掘状況(東から)	394
図版187	SA02完掘状況(北から)	373	図版251	SK72出土遺物	394
図版188	SA03・04完掘状況(北から)	376	図版252	SK92断面状況(北東から)	395
図版189	SD03・05検出状況(南西から)	376	図版253	SS02検出状況(東から)	397
図版190	SD03・05完掘状況(南西から)	376	図版254	SS02焼土堆積状況	397
図版191	土馬出土状況(西から)	377	図版255	SS02完掘状況(西から)	397
図版192	SD03出土遺物	377	図版256	SS02出土遺物	398
図版193	SD04検出状況(南西から)	379	図版257	SX04検出状況(北から)	399
図版194	SD04完掘状況(南西から)	379	図版258	SX04遺物出土状況(北から)	399
図版195	SD04断面状況(北から)	380	図版259	SX04床面検出状況(北から)	399
図版196	SD08完掘状況(東から)	380	図版260	SX04掘り方完掘状況(北から)	399
図版197	TAK201302⑤区土坑群(SK12～25・92)検出状況(北東から)	381	図版261	SX04断面土層(東から)	399
図版198	TAK201302⑤区土坑群(SK12～25・92)完掘状況(北東から)	381	図版262	SX04断面土層(北から)	399
図版199	TAK201302⑤区土坑群(SK)北東側検出状況(北から)	381	図版263	SX04断面土層(東から)	399
図版200	TAK201302⑤区土坑群検出・完掘状況(北から)	381	図版264	SX04出土遺物	400
図版201	SK12検出状況(北から)	382	図版265	SX07検出状況(北から)	403
図版202	SK12断面状況(西から)	382	図版266	SX07完掘状況(北から)	403
図版203	SK12掘削状況(西から)	382			



## 図 版 目 次(4)

図版267	SX07出土遺物	404	図版302	SK77完掘状況(北から)	470
図版268	SX06検出状況(東から)	405	図版303	SK79完掘状況(北から)	470
図版269	SX06断面状況 AA'間(東から)	405	図版304	SS5検出状況(西から)	470
図版270	欠番		図版305	SS5出土遺物	472
図版271	SX10検出状況(西から)	406	図版306	ST1遺物出土状況(北から)	473
図版272	SX10完掘状況(西から)	406	図版307	ST1遺物出土状況	473
図版273	SX10調査区壁土層状況(西から)	406	図版308	ST1出土遺物	474
図版274	SX08検出状況(北から)	407	図版309	SX1検出状況(北から)	474
図版275	SX08断面状況(北から)	407	図版310	SX1完掘状況(北から)	474
図版276	SX08焼土範囲(東から)	407	図版311	SX1出土遺物	475
図版277	SX08完掘状況(東から)	408	図版312	TAK201301調査区2層出土遺物	477
図版278	9262G 西壁土層状況(東から)	408	図版313	TAK201302調査区2層出土遺物-1	481
図版279	SX12トレンチ②東壁土層状況(北西から)	409	図版314	TAK201302調査区2層出土遺物-2	482
図版280	SX12検出状況(空撮)	409	図版315	TAK201303調査区2層出土遺物-1	485
図版281	TAK201302包含層出土遺物その1	412	図版316	TAK201303調査区2層出土遺物-2	487
図版282	TAK201302包含層出土遺物その2	414	図版317	TAK201304調査区2層出土遺物	489
図版283	TAK201302包含層出土遺物その3	415	図版318	TAK201301調査区3層出土遺物	491
図版284	TAK201302包含層出土遺物その4	416	図版319	TAK201302調査区3層出土遺物-1	494
図版285	TAK201303包含層出土遺物	419	図版320	TAK201302調査区3層出土遺物-2	496
図版286	TAK201304包含層出土遺物	422	図版321	TAK201303調査区3層出土遺物	498
図版287	古代特殊遺物	424	図版322	TAK201304調査区3層出土遺物	500
図版288	古代出土文字資料	426	図版323	不明滑石製品(遺物番号1204)	502
図版289	SD11・12・13完掘状況(東から)	447	図版324	ST1~4配置状況(東から)	504
図版290	SD11出土遺物-1	452	図版325	ST1完掘状況(北から)	504
図版291	SD11出土遺物-2	453	図版326	ST1出土遺物	504
図版292	SD16完掘状況(東から)	454	図版327	ST2完掘状況(北から)	505
図版293	SD16出土遺物-1	455	図版328	ST3完掘状況(北から)	505
図版294	SD16出土遺物-2	456	図版329	ST3出土遺物	506
図版295	SD9(部分)(東から)	458	図版330	ST4遺物出土状況(北から)	506
図版296	SD9出土遺物	459	図版331	ST4出土遺物	507
図版297	SD11出土遺物-1	463	図版332	SK1検出状況(北から)	509
図版298	SD11出土遺物-2	465	図版333	SK1遺物出土状況(西から)	509
図版299	SD11出土遺物-3	467	図版334	SK1出土遺物	510
図版300	SK78完掘状況(北西から)	469	図版335	SX6検出状況(北から)	511
図版301	SK78出土遺物	469	図版336	SX6出土遺物	513

# I 調査組織と方法

## 1 調査組織

竹松遺跡の TAK201301、TAK201302、TAK201303、TAK201304の各調査区の発掘調査は、長崎県教育庁新幹線文化財調査事務所が担当し、作業員の雇用・労務管理・現場の安全管理および地形測量・遺構実測・空中写真撮影などを竹松遺跡特定埋蔵文化財発掘調査共同企業体に委託した。共同企業体の構成員は TAK201301調査区は国際文化財(株)と(株)大信技術開発の共同企業体(JV)。TAK201302調査区は大成エンジニアリング(株)と(株)創建の共同企業体(JV)。TAK201303調査区は扇精光(株)と(株)三基の共同企業体(JV)。TAK201304調査区は(株)埋蔵文化財サポートシステムと(株)大信技術開発の共同企業体(JV)である。

### (1) 新幹線文化財調査事務所

所長 副島和明(平成24年度～25年度)、古門雅高(平成26年度～)、課長 田尻清秀(平成24年度～27年度)、小島克孝(平成28年度～)、杉原敦史(平成26年度～)、係長 村川逸朗(平成24年度～27年度)、中尾篤志(平成28年度～)、主任主事 浜口広史(平成25年度～28年度)、主事 水口真理子(平成28年度～)

### (2) TAK201301調査区

#### ① 試掘・範囲確認調査

調査期間：平成25年1月10日～2月20日

調査担当：村川逸朗、山梨千晶 遺跡調査番号：TAK201217

#### ② 本調査担当

松元一浩(文化財保護主事)、濱村一成(文化財調査員)、小松義博(同)、松村理子(同)

堀内和宏(同)、加世田尊(同)、竹本成美(同)、久保田由佳(同)

【国際文化財株式会社】 現場代理人：川村 稔、調査員：土岐耕司、山崎良二、土任隆、青嶋邦夫、田口雄一、佐藤洋

【株式会社大信技術開発】 調査員：東貴之、木村有喬

#### ③ 調査期間・面積：平成25年5月27日～平成26年1月15日、11,500㎡

#### ④ 報告書担当

川畑敏則(主任文化財保護主事)、中尾篤志(係長)、中川潤次(文化財調査員)、堀内和宏(同)

一瀬勇士(同)、小松義博(同)、新久保恒和(同)、東郷一子(同)、久田ひとみ(同)

柿田佳央理(同)、久保田由佳(同)、松屋祥子(同)

### (3) TAK201302調査区

#### ① 試掘・範囲確認調査当

a. 小調査区①～⑧、⑩、⑫

調査期間：平成23年7月4日～同年9月8日、調査担当：川畑敏則、宮武直人、今西亮太

遺跡調査番号：TAK201105

B. 小調査区⑨、⑪

TAK201301調査区に同じ

②本調査担当

川畑敏則(主任文化財保護主事)、松崎光伸(文化財調査員)、田島陽子(同)、東郷一子(同)、小川慶晴(同)、松永直輝(同)、濱村一成(同)、徳弘隆之(同)、小松義博(同)、山下歩(同)、深堀真(同)

【大成エンジニアリング株式会社】 現場代理人：渡辺宏司 後に浅見克己に交代。

調査員：堀苑孝志、山中菊乃、広田健、久保倉勇輝、土沼章一、楠秀行、吉田好孝、地頭猛

【株式会社創建】 調査員：平田貴正

③調査期間・面積：平成25年5月27日～平成26年3月18日、13,557㎡

④報告書担当：TAK201301調査区に同じ

(3) TAK201303調査区

①試掘・範囲確認調査

a. 小調査区A、B

調査期間：平成24年10月30日～同年11月9日、調査担当：村川逸朗、山梨千晶

遺跡調査番号：TAK201213

B. 小調査区C、D

調査期間：平成24年7月2日～同年7月23日、調査担当：村川逸朗、宮武直人

遺跡調査番号：TAK201204

②本調査担当

中尾篤志(主任文化財保護主事)、松元一浩(主任文化財保護主事)、濱村一成(文化財調査員)、川淵雅行(同)、徳弘隆之(同)、相良麻衣子(同)、生田次男(同)、加世田尊(同)  
松永直輝(同)、野田真(同)

【扇精光株式会社】 現場代理人：池井栄次、 調査員：織田健吾、竹田将仁

【株式会社三基】 調査員：梅木信宏、高見澤太基

③調査期間、面積：平成25年5月27日～平成26年3月14日、4,720㎡

④報告書担当：TAK201301調査区に同じ

(4) TAK201304調査区

①試掘・範囲確認調査担当：TAK201301調査区に同じ

②本調査担当

浦田和彦(文化財保護主事)、徳弘隆之(文化財調査員)、深堀真(同)、竹本成美(同)  
山下歩(同)

【株式会社埋蔵文化財サポートシステム】 現場代理人：野口岩雄

調査員：小石龍信、大坪芳典、平島義孝、竹田ゆかり

【株式会社大信技術開発】 調査員：柳田利明、村上孝司

③調査期間・面積：平成25年6月27日～平成26年2月24日、9,900㎡

④報告書担当：TAK201301調査区に同じ



### 3 調査方法

発掘調査区は、平面直角座標第Ⅰ系を使用し、4級基準点測量を世界測地系で実施した。グリッドは20mピッチで設定し、北西交点(グリッドの左上)を基準にX座標の百の位、十の位、Y座標の百の位、十の位の数字を組み合わせる4桁のグリッド番号を付して順に並べ、グリッド名とした。

例えばX座標-6262.000、Y座標42536.000の場合は「2653」グリッドとした。(第4図参照)

調査区が広いので、小調査区を設けた。(第3図参照)。

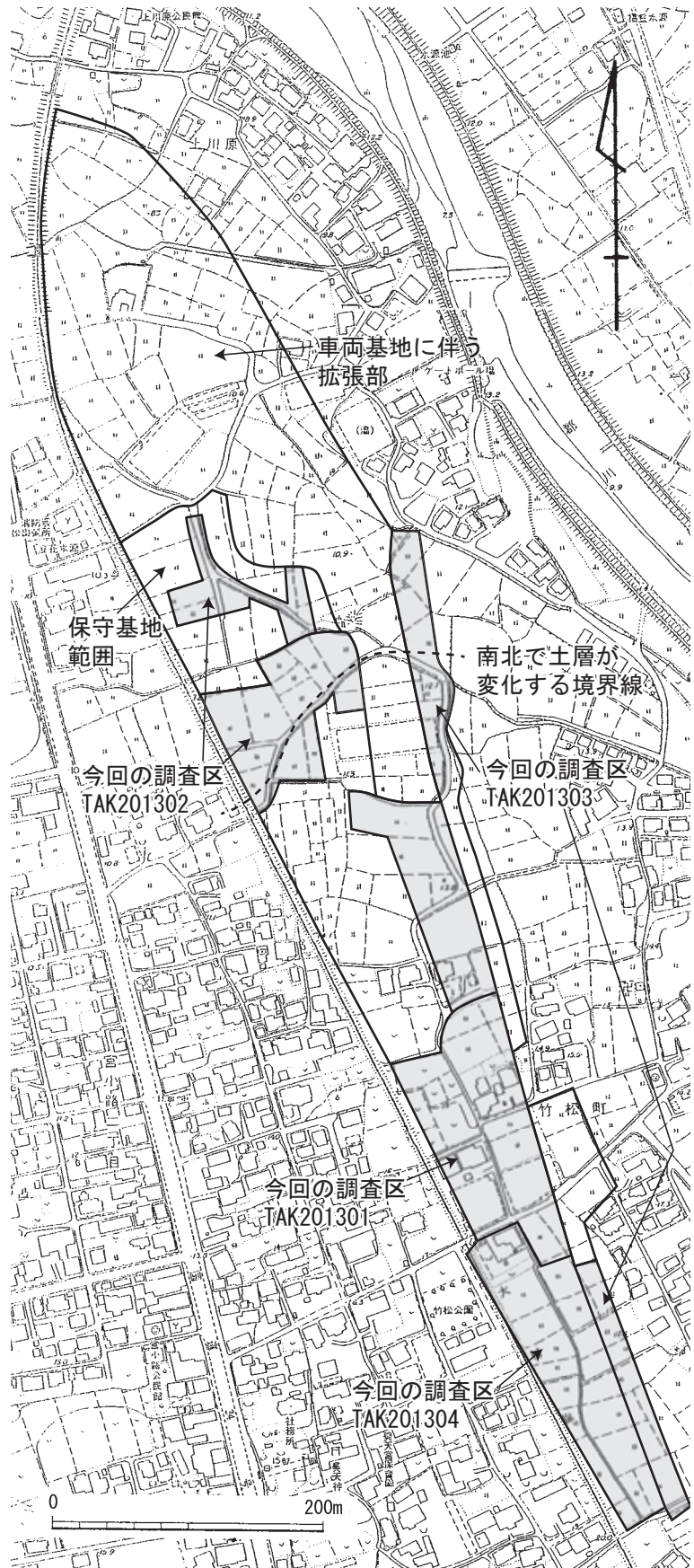
掘削は表土を重機で除去した後に人力で行った。

遺物の取り上げは、遺構に伴うものや原位置を保っていると思われるものについては、出土状況を写真記録するとともに、座標を記録しながら取り上げを行った。

遺構実測は基本的に手実測で行い、基準点には座標を落とした。

溝などの規模が大きい遺構は、デジタル実測で対応した。

なお、平成24年(2012)6月、諫早・長崎間の着工認可に伴い、大村市に建設予定であった保守基地が車両基地へと拡大変更された。



第2図 保守・車両基地概略図(S=1/5,000)

## II 層序

### 1. 共通土層

竹松遺跡の発掘調査においては、年度ごと、調査区ごとに認定する土層において、共通して分布・堆積する土層を「共通土層」と呼び、調査員が認識を共有した。

竹松遺跡の「共通土層」は遺跡の北と南では様相が異なる(第2図)。調査区でいうと、TAK201404調査区内の北部から TAK201108調査区と TAK201302調査区の間を走る市道を境とする。

北側の共通土層を「北部共通土層」南側の共通土層を「南部共通土層」と呼称した。

TAK201301調査区、TAK201304調査区は南部共通土層の堆積地域であり、TAK201302調査区と TAK201303調査区は北部共通土層と南部共通土層にまたがる地域である。

#### ①北部共通土層

- ・第Ⅰ層 表土(耕作土)
- ・第Ⅱa層 鉄、マンガン集積層。明黄橙色を呈する。床土、客土。
- ・第Ⅱb層 中世の包含層。鉄、マンガンの集積により、明黄橙色を呈する。色調から床土、客土と判断し、当初は遺物包含層とは認めない調査員もいたが、現場での検討の結果、中世の包含層と判断した。
- ・第Ⅲ層 砂質土。弥生時代の包含層。
- ・第Ⅳ層 古土層(西側には存在しない)「古土層」は通称。強く硬く締まる黄褐色の砂質土である。2万年前から3万年前に形成された土層との見解もある。
- ・第Ⅵ層 旧河川起源の礫層

#### ②南部共通土層

- ・第Ⅰ層 表土(耕作土)
- ・第Ⅱ層 鉄、マンガンの集積層。明黄橙色。床土、客土。
- ・第Ⅲ層 黒ボク土の腐植が多い部分。火山性の黒ボク土で、黒色または黒褐色を呈す。
- ・第Ⅳ層 いわゆる黒ボク土の下層部分である。褐色を呈する。「黄(きな)ボク」と俗称。
- ・第Ⅴ層 「古土層」
- ・第Ⅵ層 扇状地礫層。大村扇状地の基盤となる砂礫層である。

### 2. TAK201301の基本層序

調査区すべてが南部共通土層の堆積地域。調査区の土層と南部共通土層の相関は下表とおり。

土層	特徴	南部共通土層
1層	暗褐色土(現耕作土)	第Ⅰ層
2層	暗褐色土(近代客土)	第Ⅱ層
3層	黒褐色土(近世以前)	第Ⅲ層
4層	褐色土(縄文時代以降)	第Ⅳ層
5層	黄褐色土(縄文時代以前)	第Ⅴ層
6層	黄褐色砂礫土(大村扇状地礫層)	第Ⅵ層

なお土層図に示した土層番号は、南部共通土層のローマ数字をアラビア数字に置き換えて表記している。

### 3. TAK201302の基本層序

小調査区の①区から⑥区は北部共通土層、⑦区から⑩区は南部共通土層の堆積地域である。調査当時、調査現場で認識し、土層図にとった土層と共通土層の相関を平成27年(2015年)に調査員全員で協議した。

しかし、その際の同地区の土層と共通土層の相関を十分認識しきれていなかったことが、後の整理段階で判明したため、改めて現場の土層図を精査し、共通土層との相関を整理した。

したがって、他の調査区のような相関表は提示できない。

なお土層図に示した土層番号は、共通土層のローマ数字をアラビア数字に置き換えて表記している。

### 4. TAK201303の基本層序

小調査区のA区は北部共通土層、B区、C区、D区は南部共通土層が堆積する。そのうちB区とC区の土層を示した。

調査区の土層と南部共通土層の相関は下表のとおりである。

B区

土層	特徴	南部共通土層
1層	耕作土	第Ⅰ層
2層	鉄分沈着した水田床土	第Ⅱ層
3a層	暗褐色土、マンガン混じる 弥生時代後期の遺物包含層	第Ⅲ層
3b-1層	褐灰色粘質土、粘性強い。古代の遺物を含む。B区西側のみに分布	
3b-2層	黒褐色土・弥生時代後期の遺物を包含。	
3c層	褐色土・縄文時代晩期の遺物を包含。弥生時代後期の遺構検出面	第Ⅳ層
3d層	黒褐色砂礫層・縄文晩期の遺物をわずかに含む。B区西側のみに分布。	
4層	黄褐色礫層	第Ⅵ層

なお土層図に示した土層番号は、南部共通土層のローマ数字をアラビア数字に置き換えて表記している。

### 5. TAK201304の基本層序

調査区はすべて南部共通土層の堆積地域である。

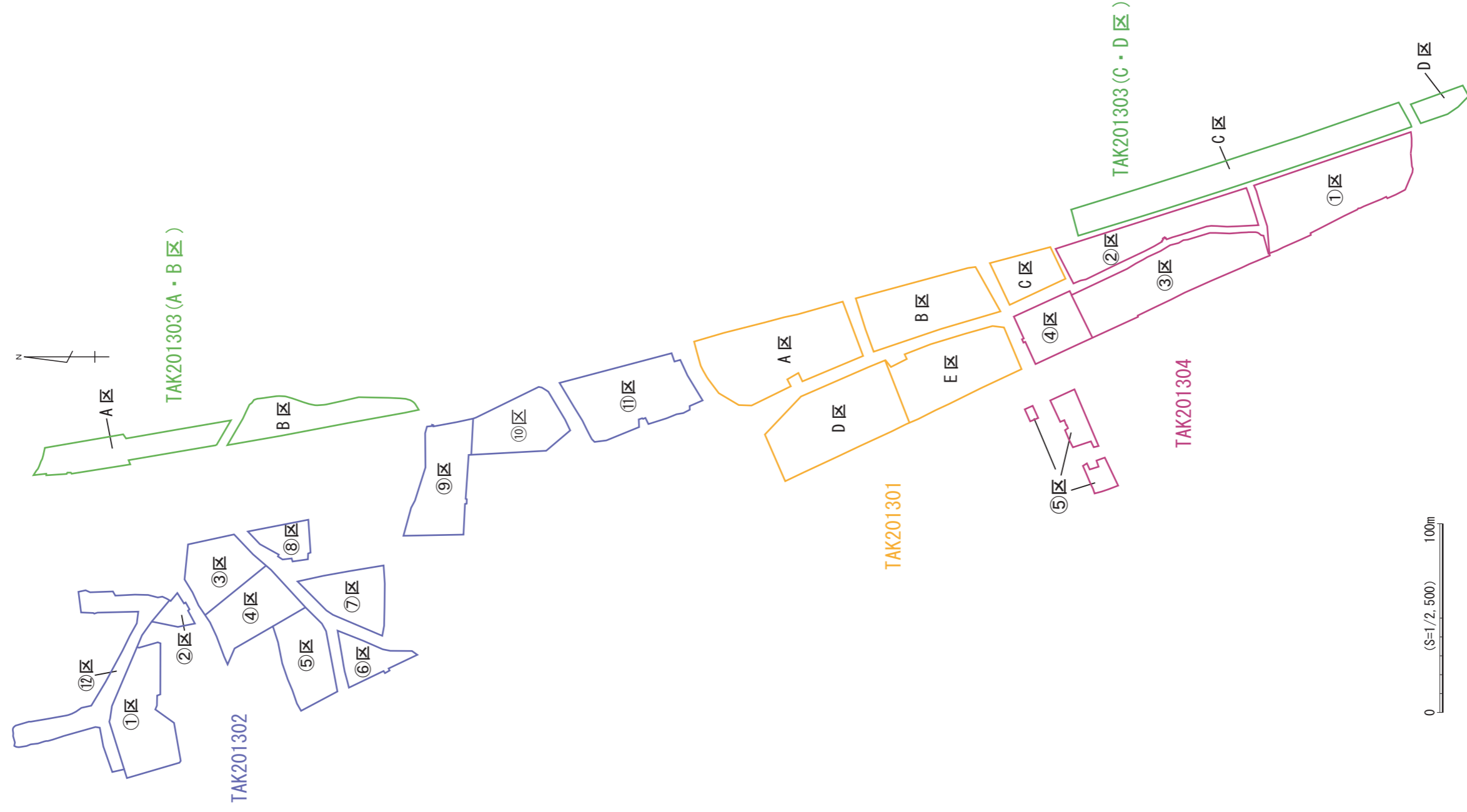
調査区の土層と南部共通土層の相関は下表のとおりである。

土層	特徴	南部共通土層
1層	表土 暗褐色土 10YR3/3	第Ⅰ層
2層	床土 明黄褐色土 7.5YR5/4	第Ⅱ層
3層	黒褐色土 10YR5/4	第Ⅲ層
4層	黒色土 7.5YR1.7/1	
5層	にぶい黄褐色粘砂質土 10YR5/4	第Ⅳ層
6層	黄褐色砂質土層 2.5Y5/3 (古土層 非常に硬い)	第Ⅴ層
7層	黒褐色砂礫層・縄文晩期の遺物をわずかに含む。B区西側のみに分布	
8層	黄褐色礫層	第Ⅵ層

なお土層図に示した土層番号は、南部共通土層のローマ数字をアラビア数字に置き換えて表記している。

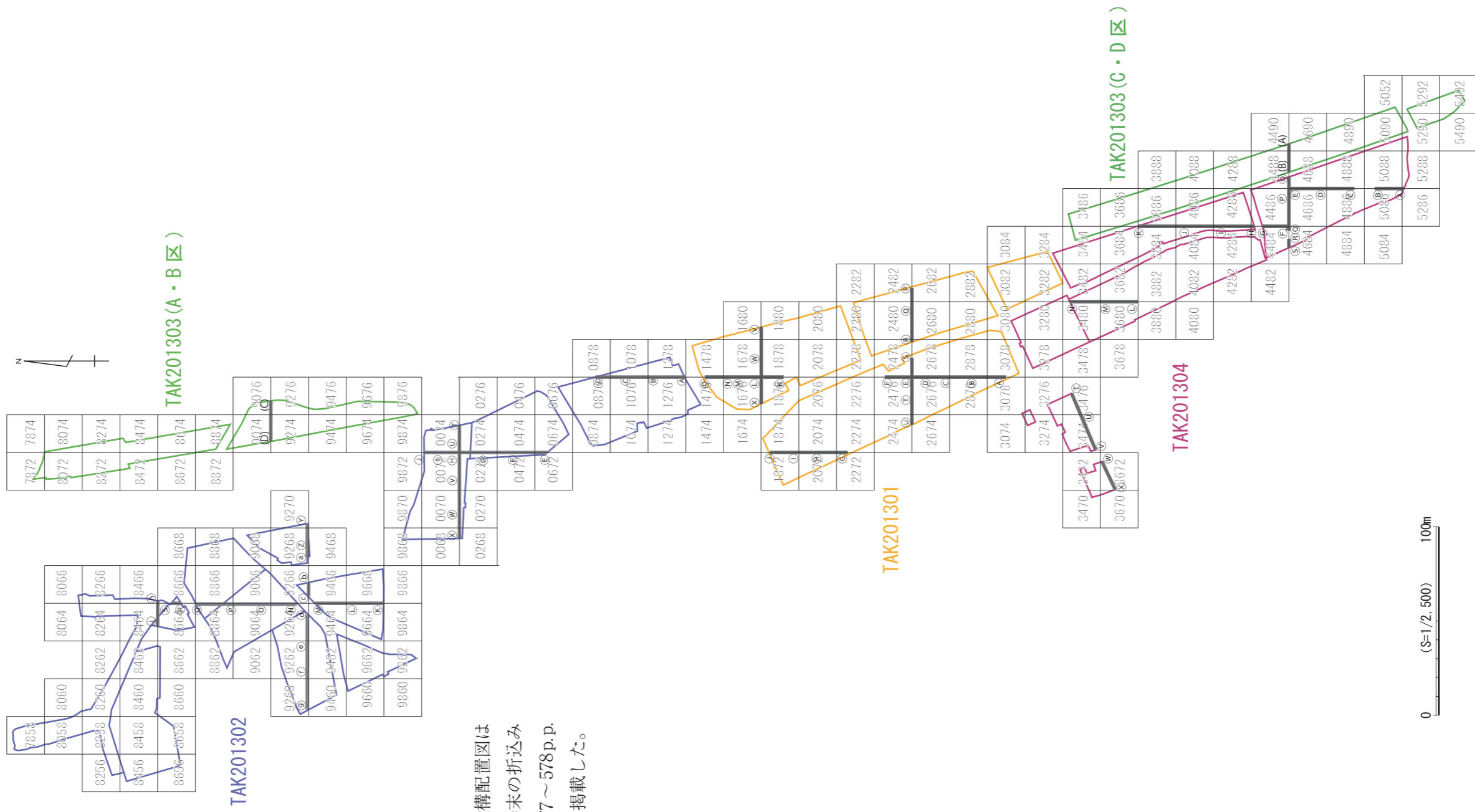
①区は前年度(平成24)に引き続き調査を行った弥生後期の集団墓域である。前年度の調査区 TAK201202②と⑧の一部が該当する。

遺構配置図は巻末の折込み577～578p.p.に掲載した。



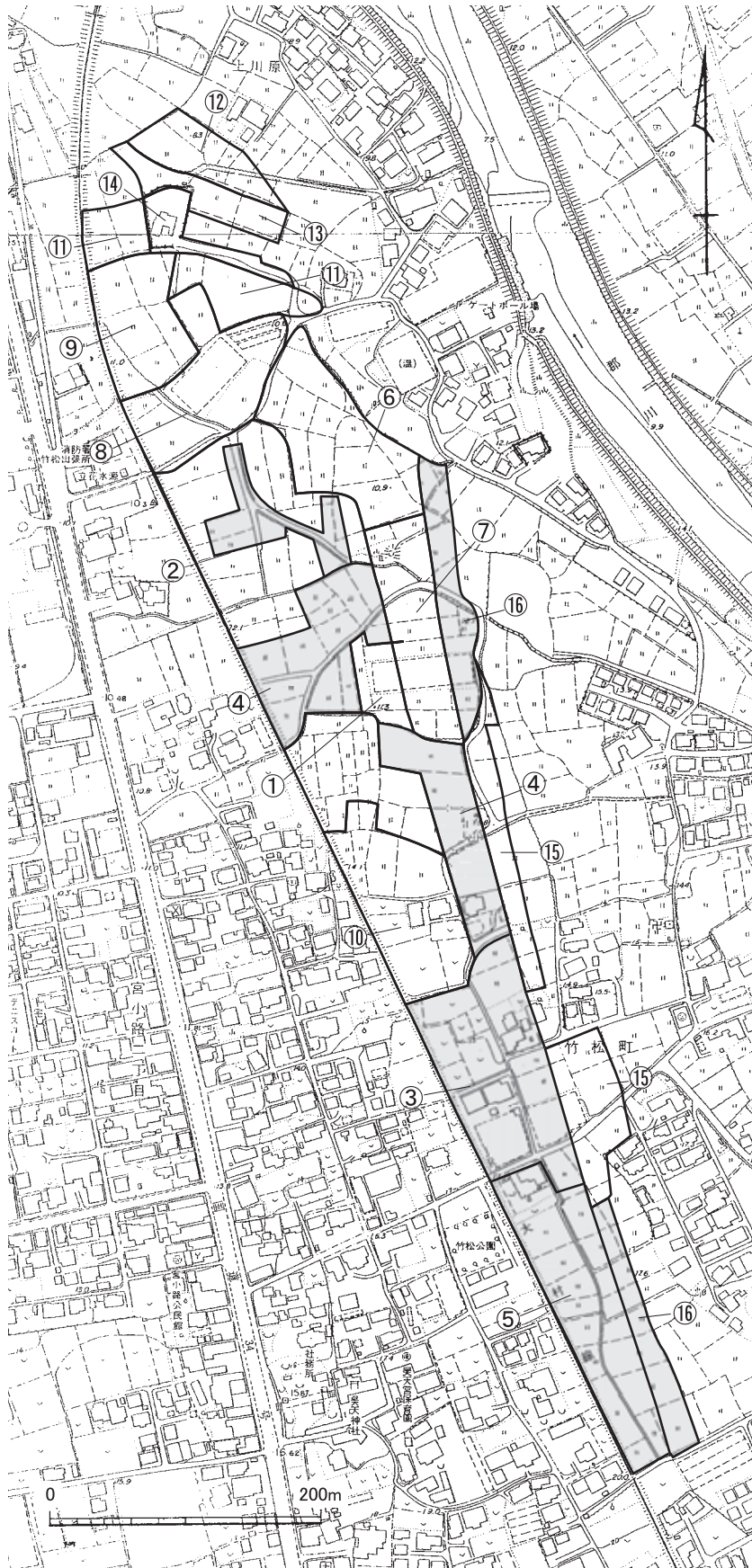
第3図 大調査区TAK201301～TAK201304と小調査区区割り図





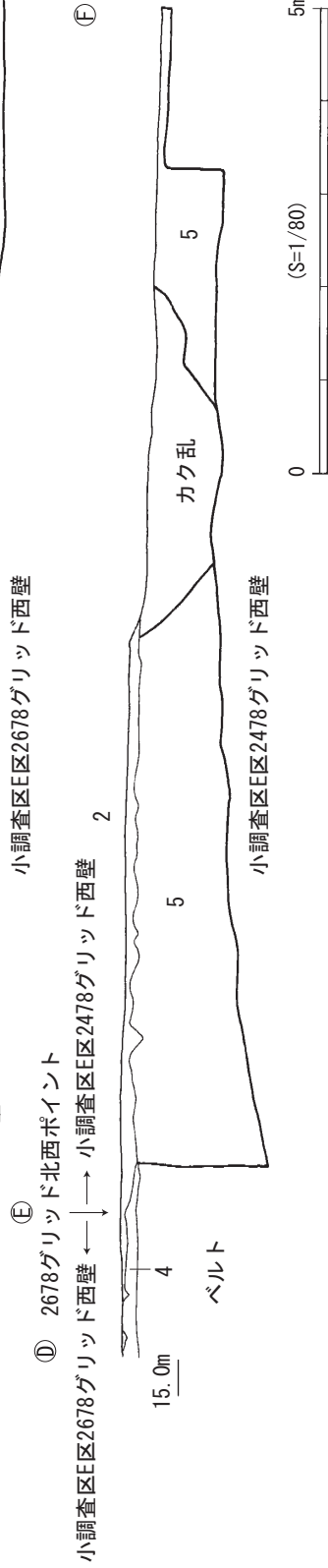
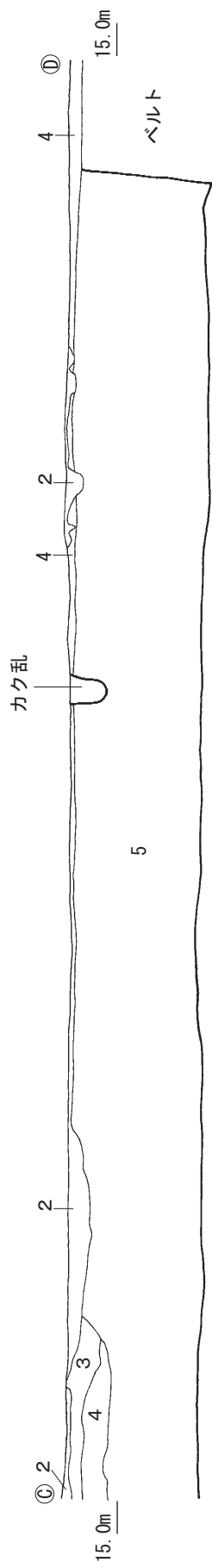
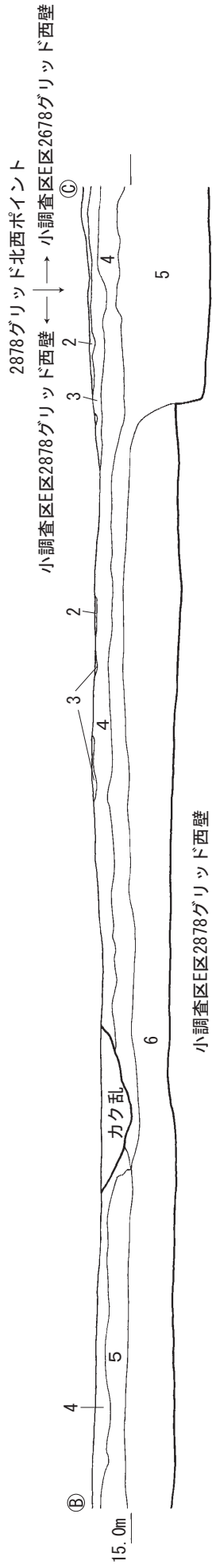
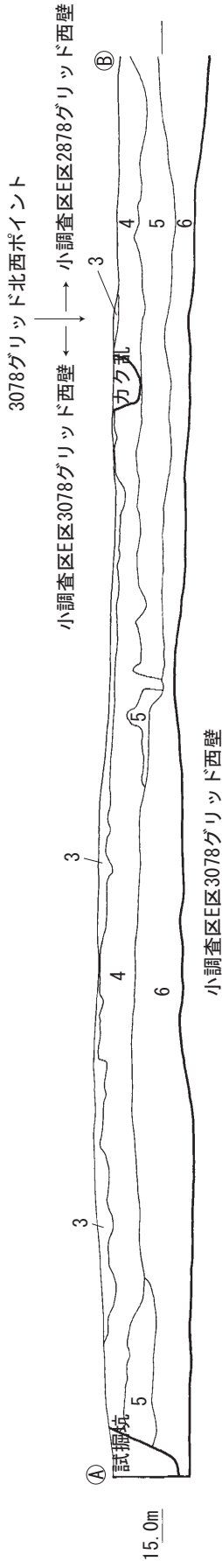
遺構配置図は  
巻末の折込み  
577～578 p.p  
に掲載した。  
に掲載した。

第4-1図 グリッド配置図(太線は土層実測ライン)



- ①TAK201108
- ②TAK201202
- ③TAK201301(報告分)
- ④TAK201302(同上)
- ⑤TAK201304(同上)
- ⑥TAK201405
- ⑦TAK201404
- ⑧TAK201407
- ⑨TAK201406
- ⑩TAK201403
- ⑪TAK201501
- ⑫TAK201502
- ⑬TAK201506
- ⑭TAK201604
- ⑮TAK201208
- ⑯TAK201303(報告分)

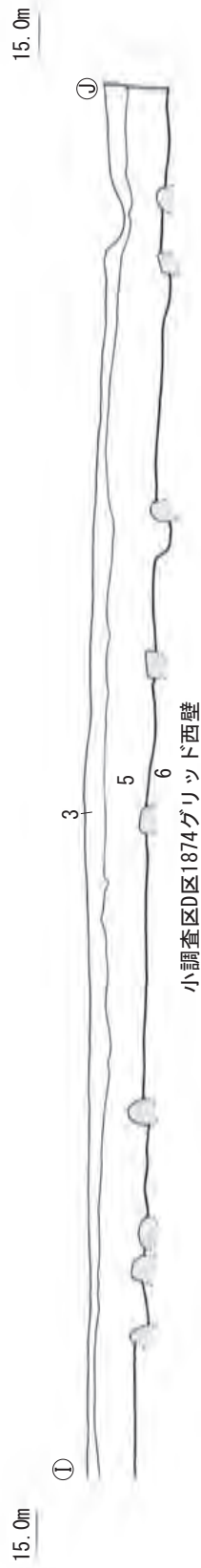
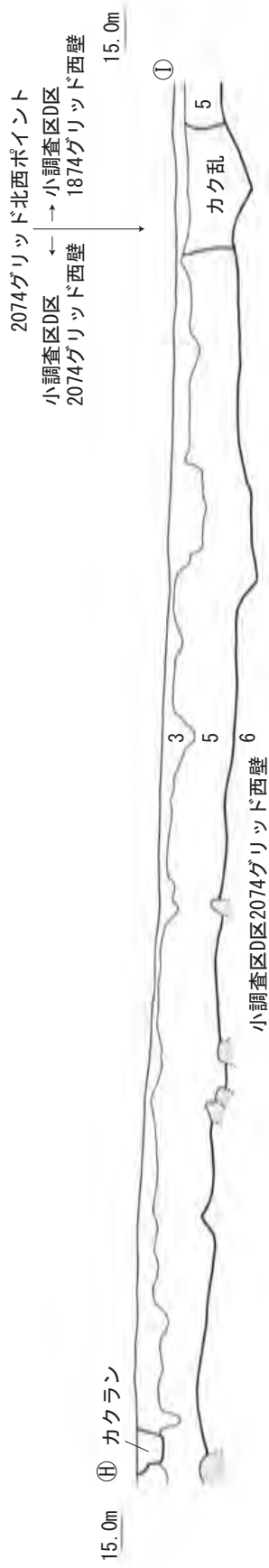
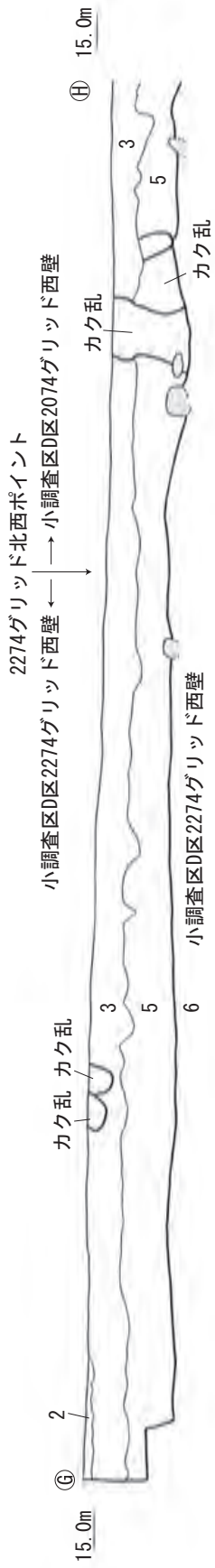
第4-2図 新幹線大村車両基地調査区位置図(1/5,000)



- 土層図1  
 小調査区E区土層(南部共通土層)  
 2層: にぶい黄褐土(近代客土)  
 3層: 黒褐粘質シルト  
 4層: 褐粘質土  
 5層: 黄褐粘質土(古土層)  
 6層: 砂礫層



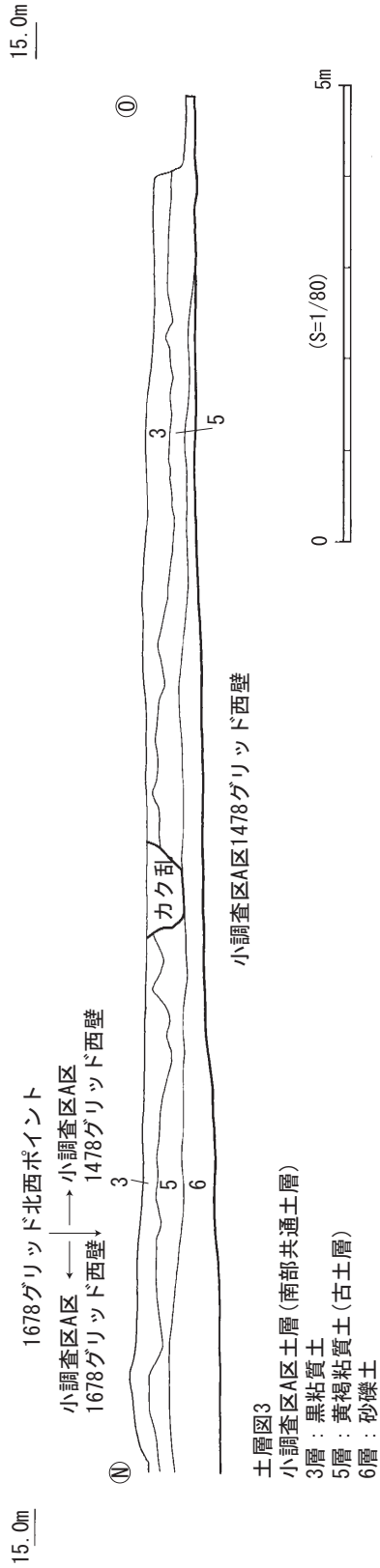
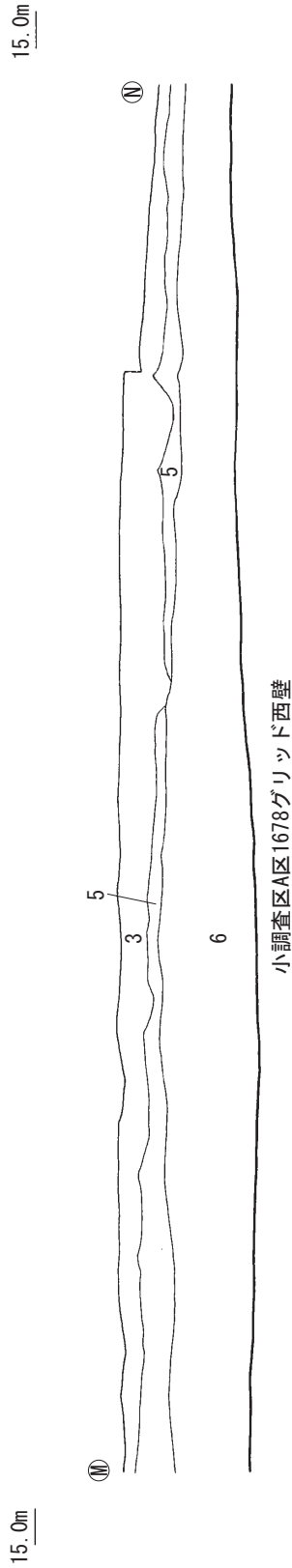
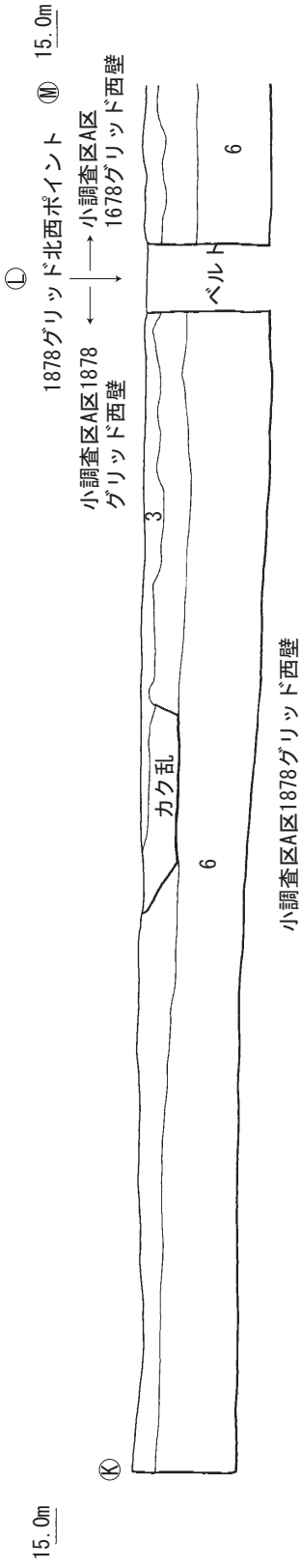
第5図 TAK201301調査区土層図-1(S=1/80)



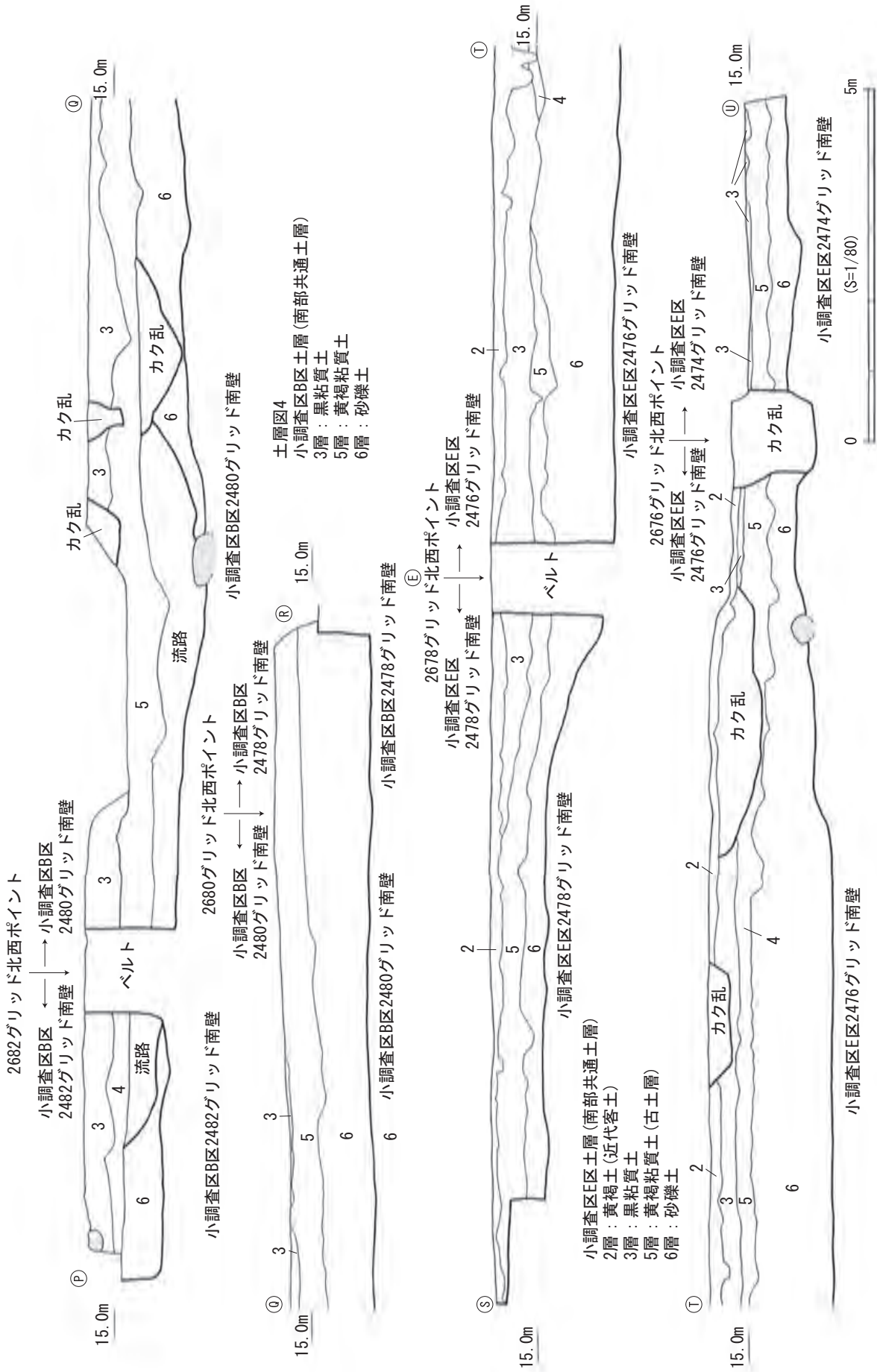
土層図2  
 小調査区D区土層(南部共通土層)  
 3層：黒粘質シルト  
 5層：黄褐粘質土(古土層)  
 6層：砂礫土



第6図 TAK201301調査区土層図-2(S=1/80)

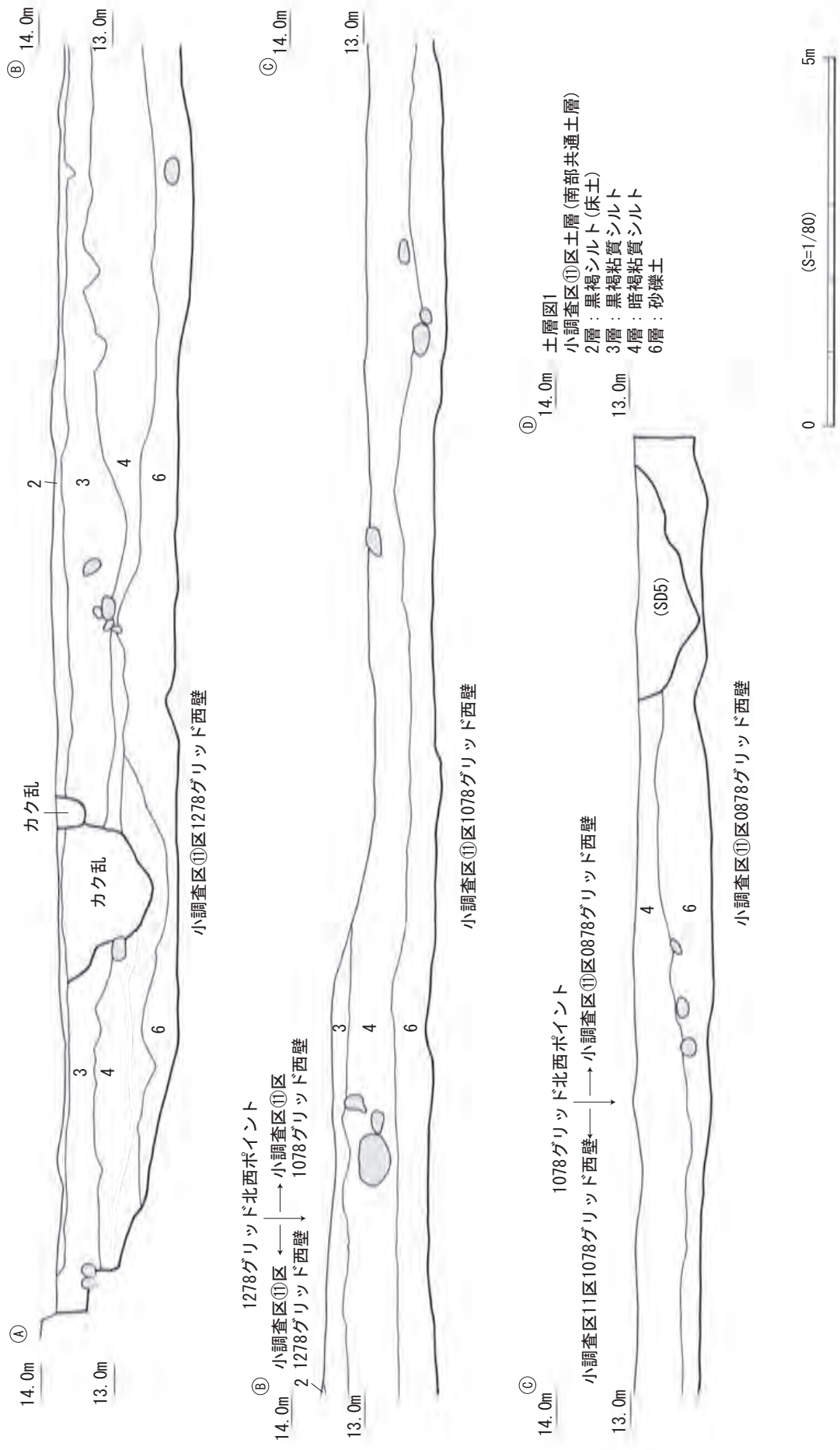


第7図 TAK201301調査区土層図-3 (S=1/80)



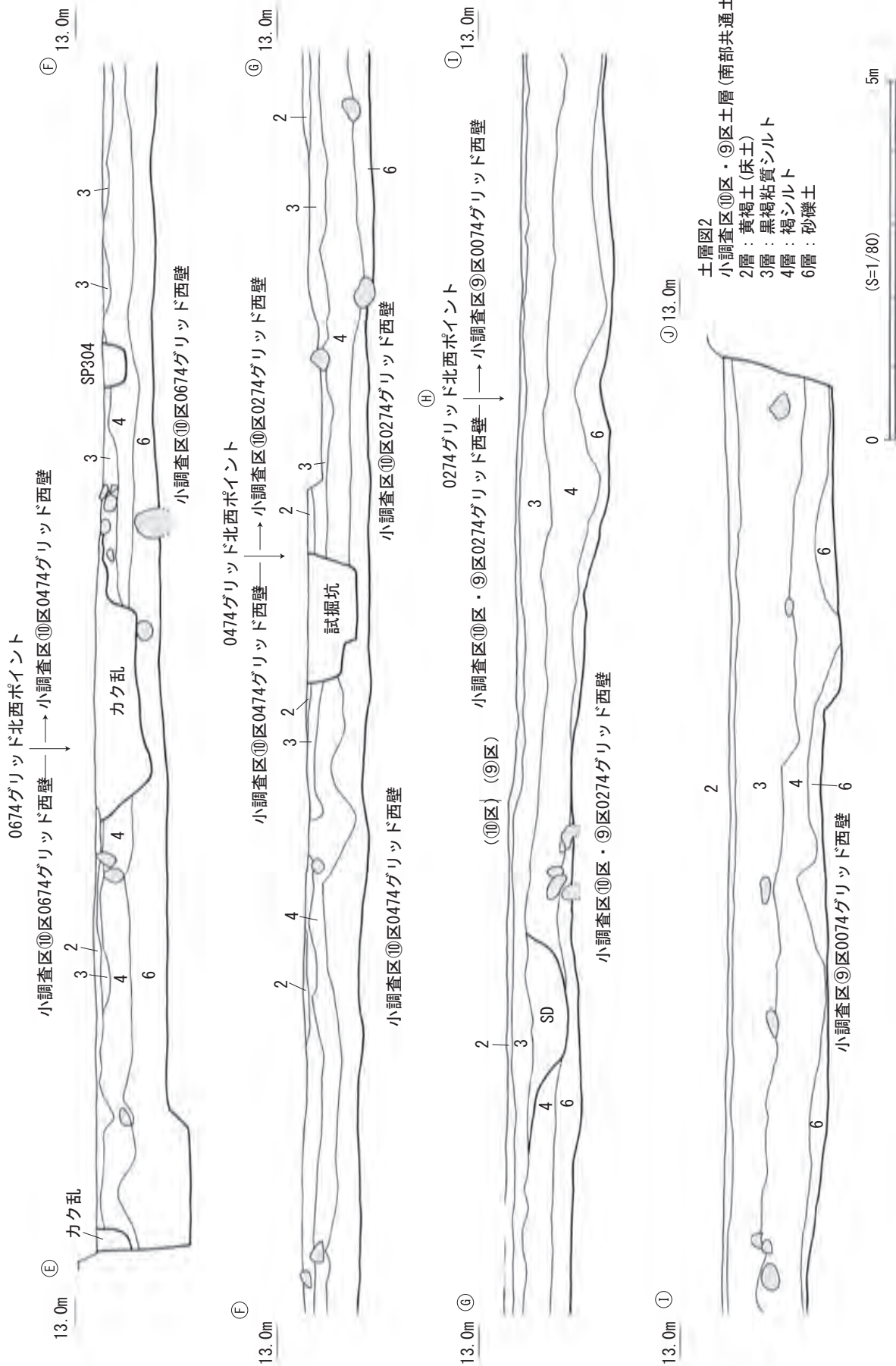
第8図 TAK201301調査区土層図-4(S=1/80)



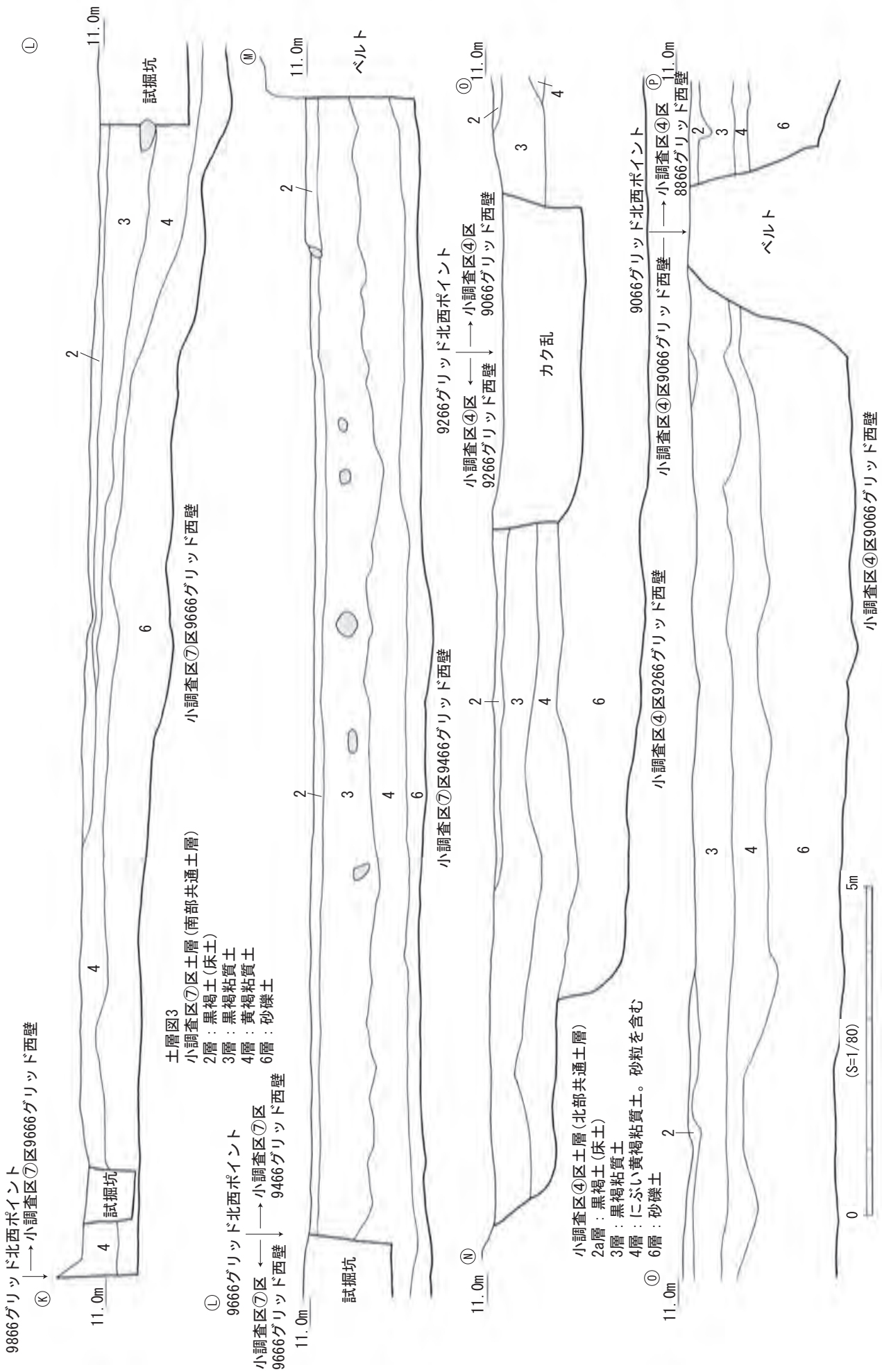


第10図 TAK201302調査区土層図-1(S=1/80)



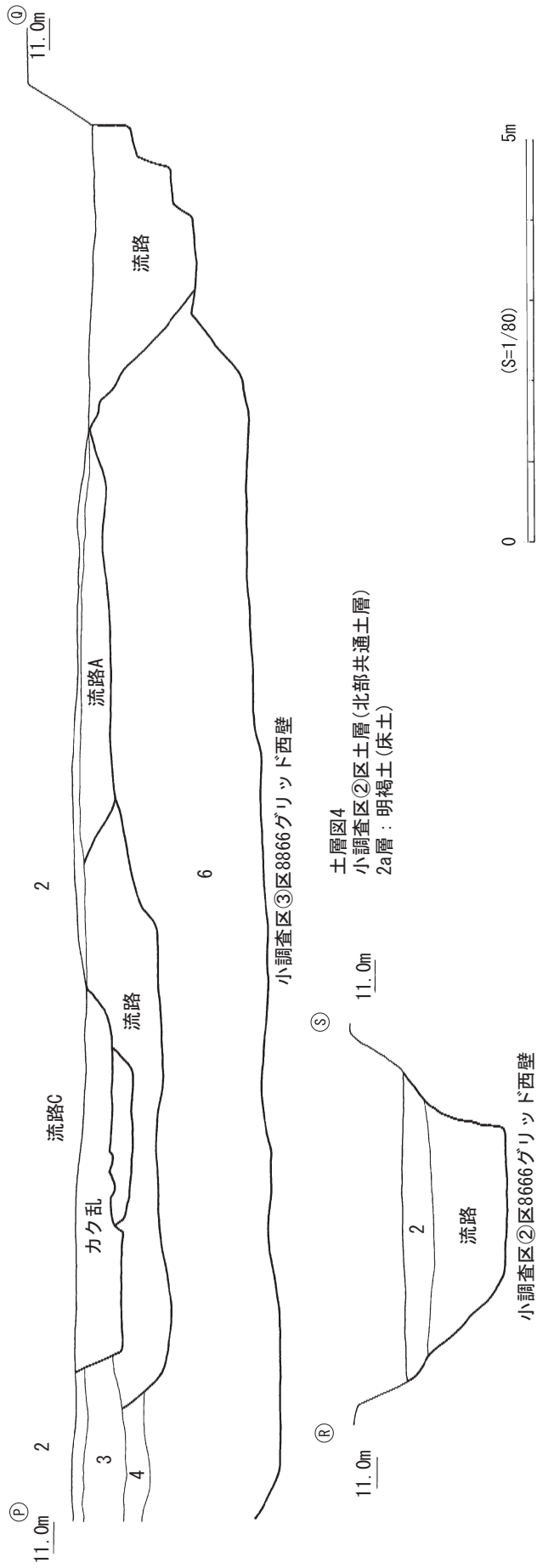


第11図 TAK201302調査区土層図-2 (S=1/80)



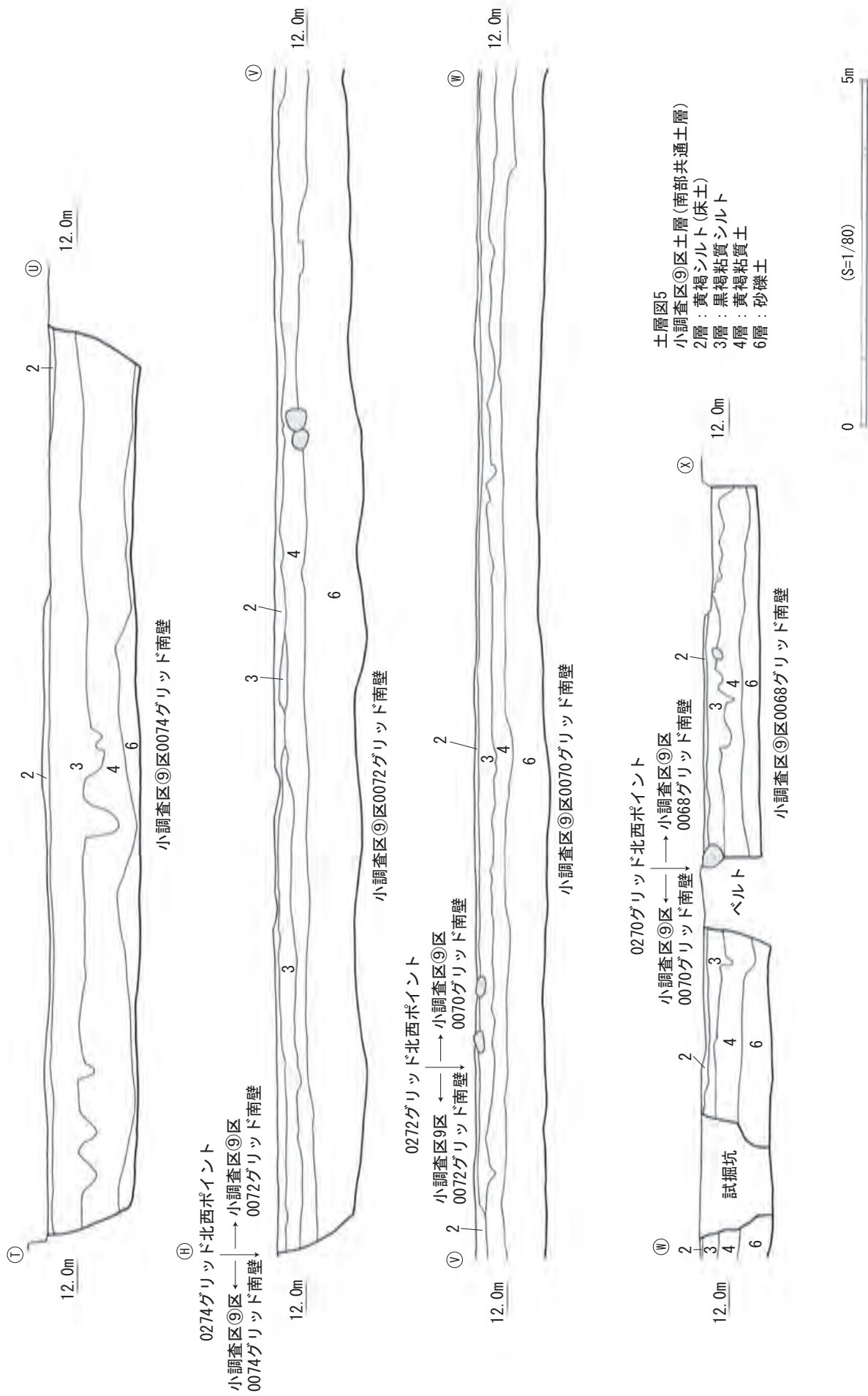
第12図 TAK201302調査区土層図-3(S=1/80)

8866グリッド北西ポイント  
 小調査区③区 ← → 小調査区③区  
 8866グリッド西壁 ↓ 8866グリッド西壁

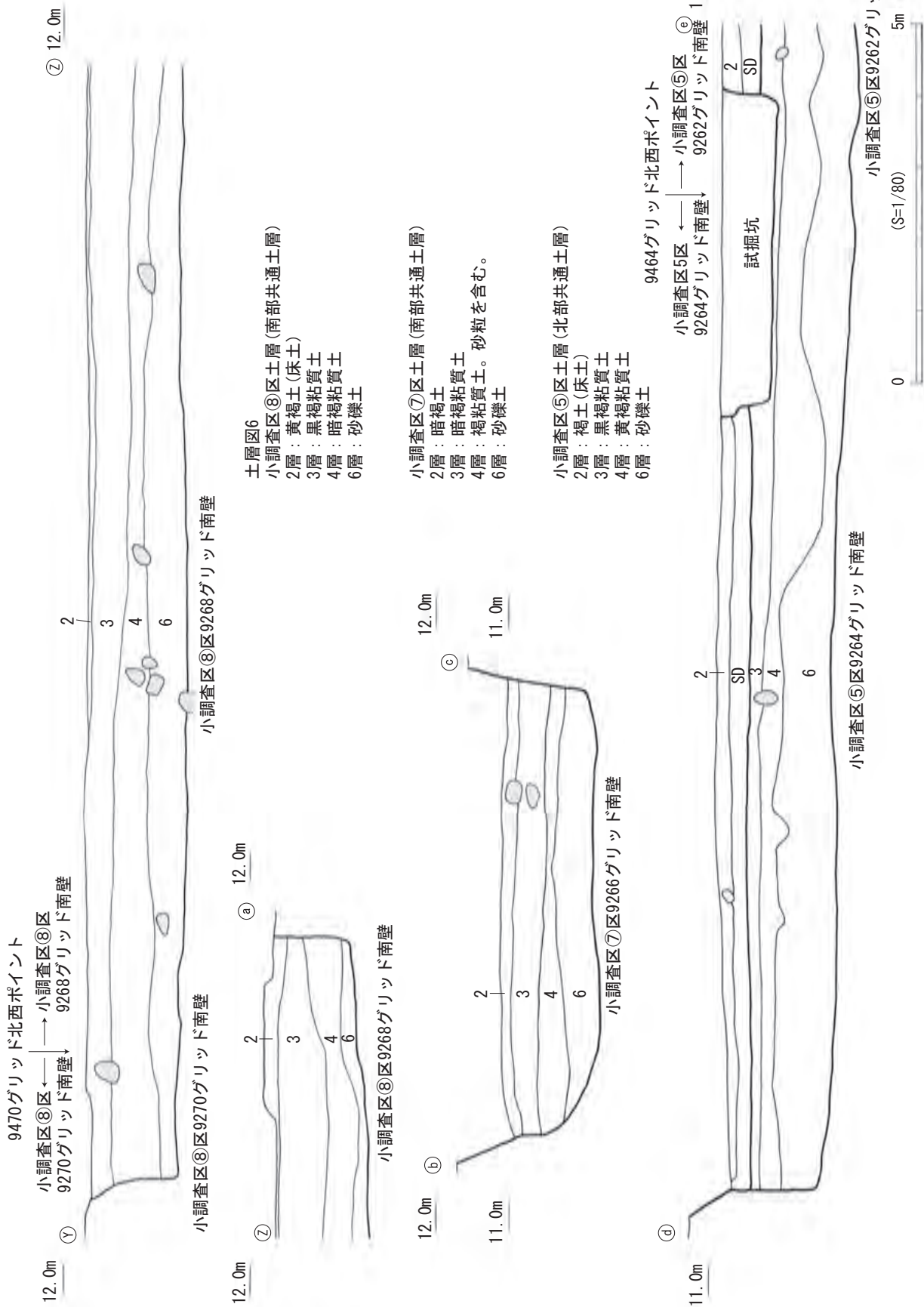


土層図4  
 小調査区②区土層(北部共通土層)  
 2a層：明褐土(床土)

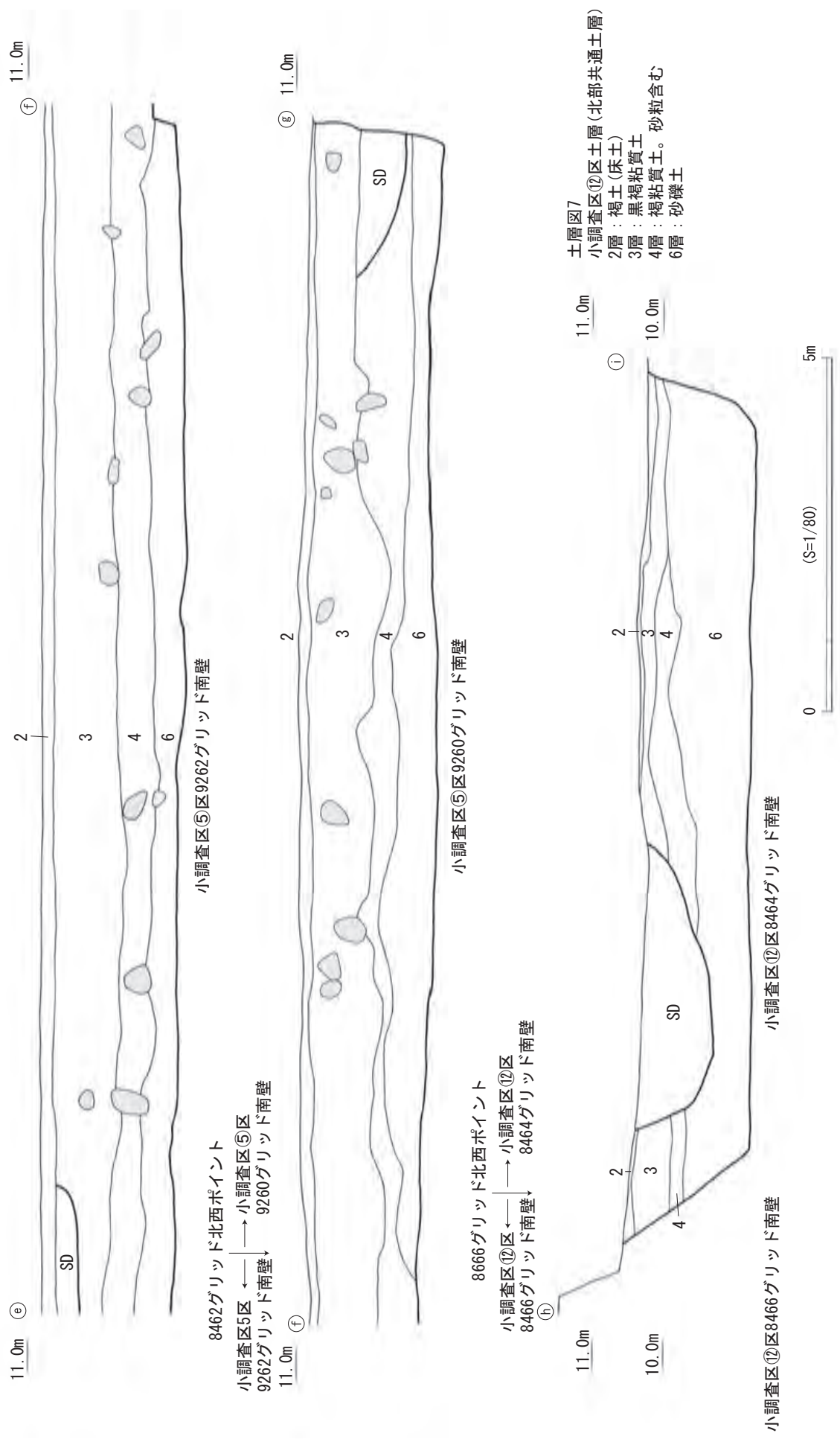
第13図 TAK201302調査区土層図-4(S=1/80)



第14図 TAK201302調査区土層図-5(S=1/80)

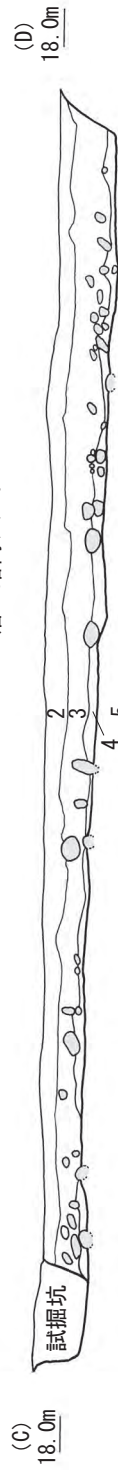


第15図 TAK201302調査区土層図-6 (S=1/80)

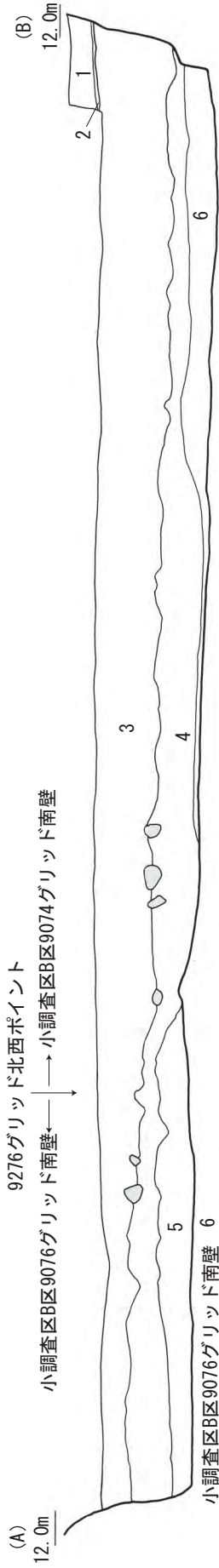


第16図 TAK201302調査区土層図-7(S=1/80)

- 土層図1  
 小調査区C区土層(南部共通土層)  
 2層: 褐灰粘質土(床土)  
 3層: 黒色シルト  
 4層: 黄褐シルト  
 5層: 暗褐シルト



小調査区C区4488グリッド南壁



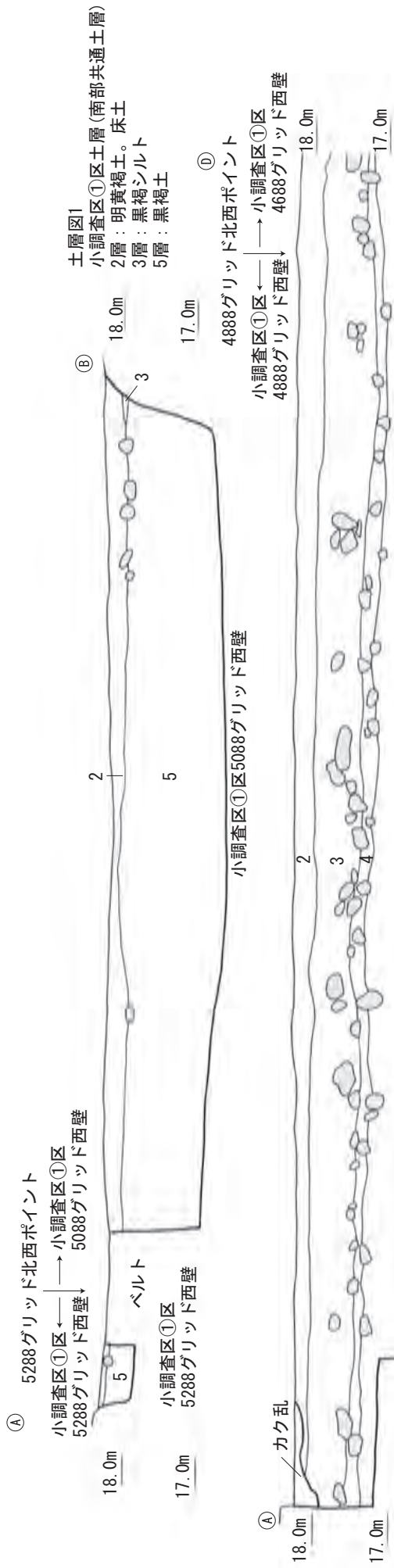
9276グリッド北西ポイント  
 小調査区B区9076グリッド南壁 ← → 小調査区B区9074グリッド南壁

小調査区B区9076グリッド南壁 6

- 小調査区B区土層(南部共通土層)  
 1層: 表土  
 2層: 褐灰粘質土(床土)  
 3層: 黒色シルト  
 4層: 黒褐シルト  
 5層: 暗褐シルト  
 6層: 砂礫土

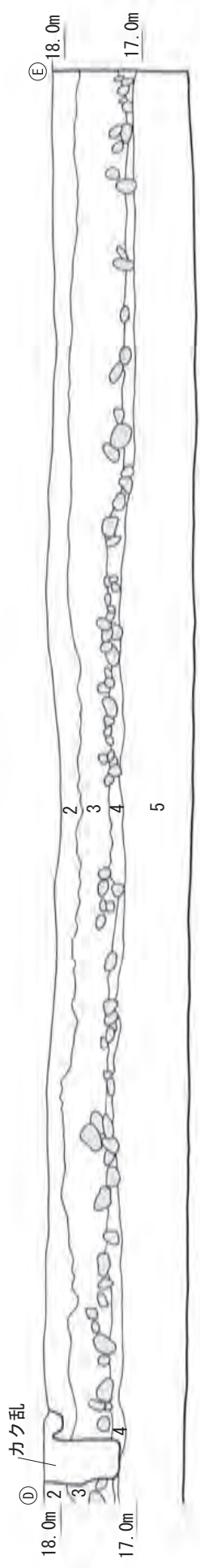


第17図 TAK201303調査区土層図-1(S=1/80)



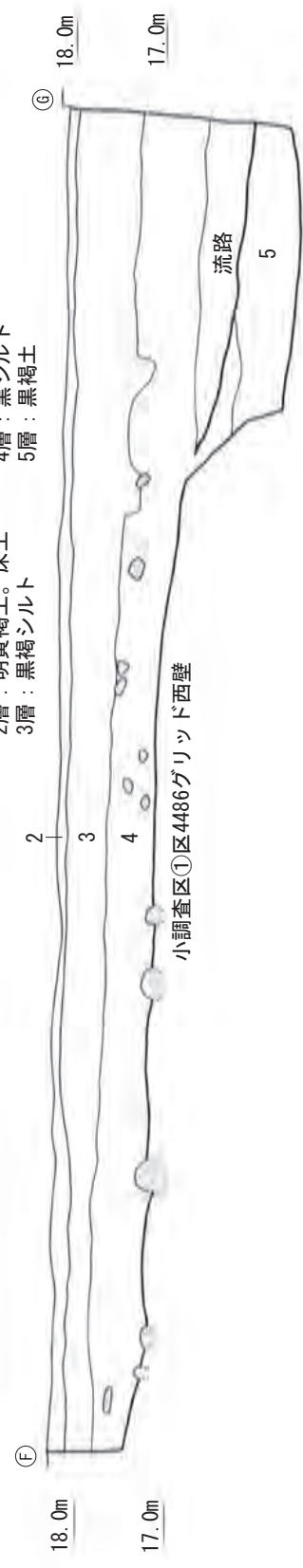
土層図1  
小調査区①区土層(南部共通土層)  
2層：明黄褐色土。床土  
3層：黒褐シルト  
5層：黒褐色

小調査区①区4888グリッド西壁

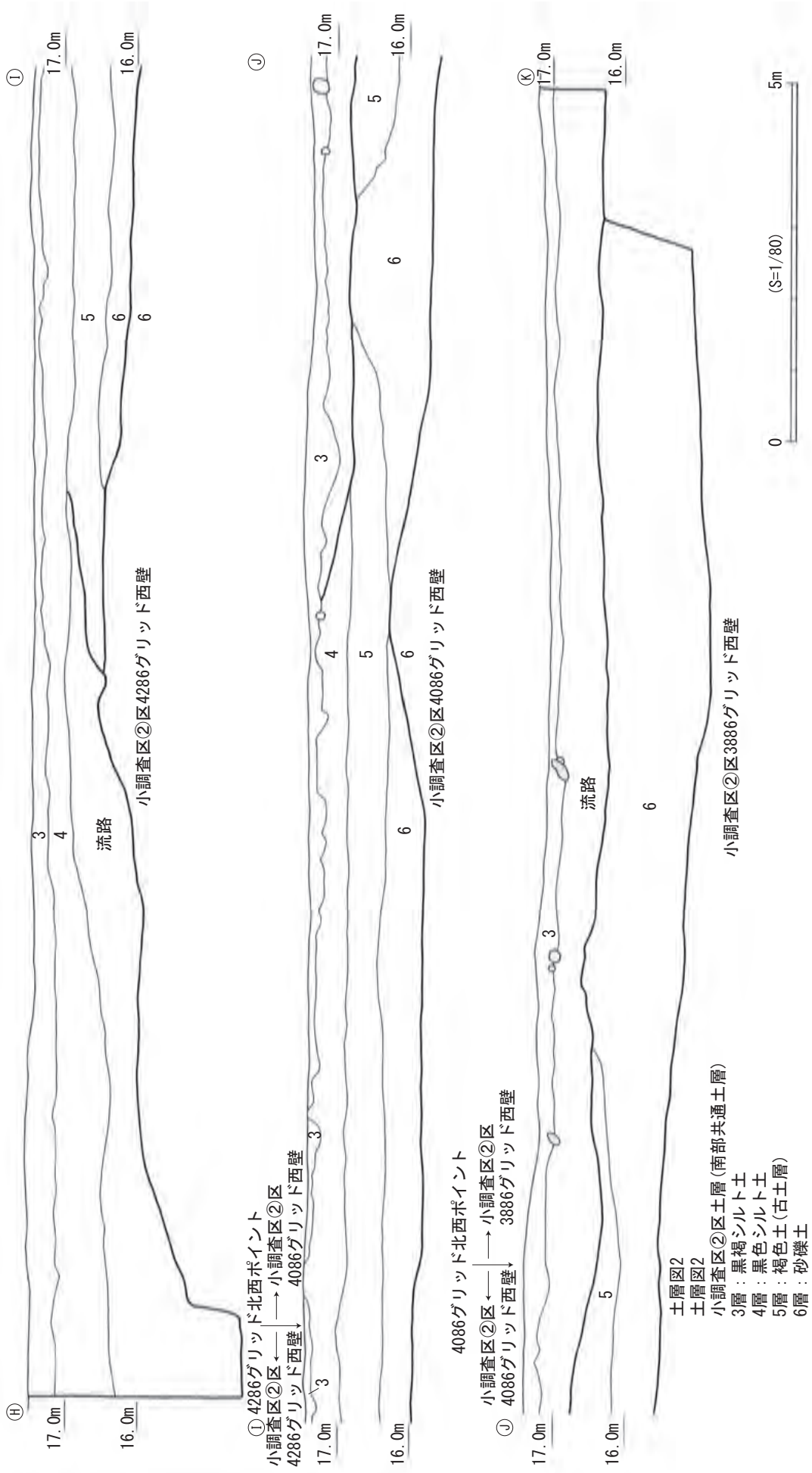


小調査区①区4688グリッド西壁

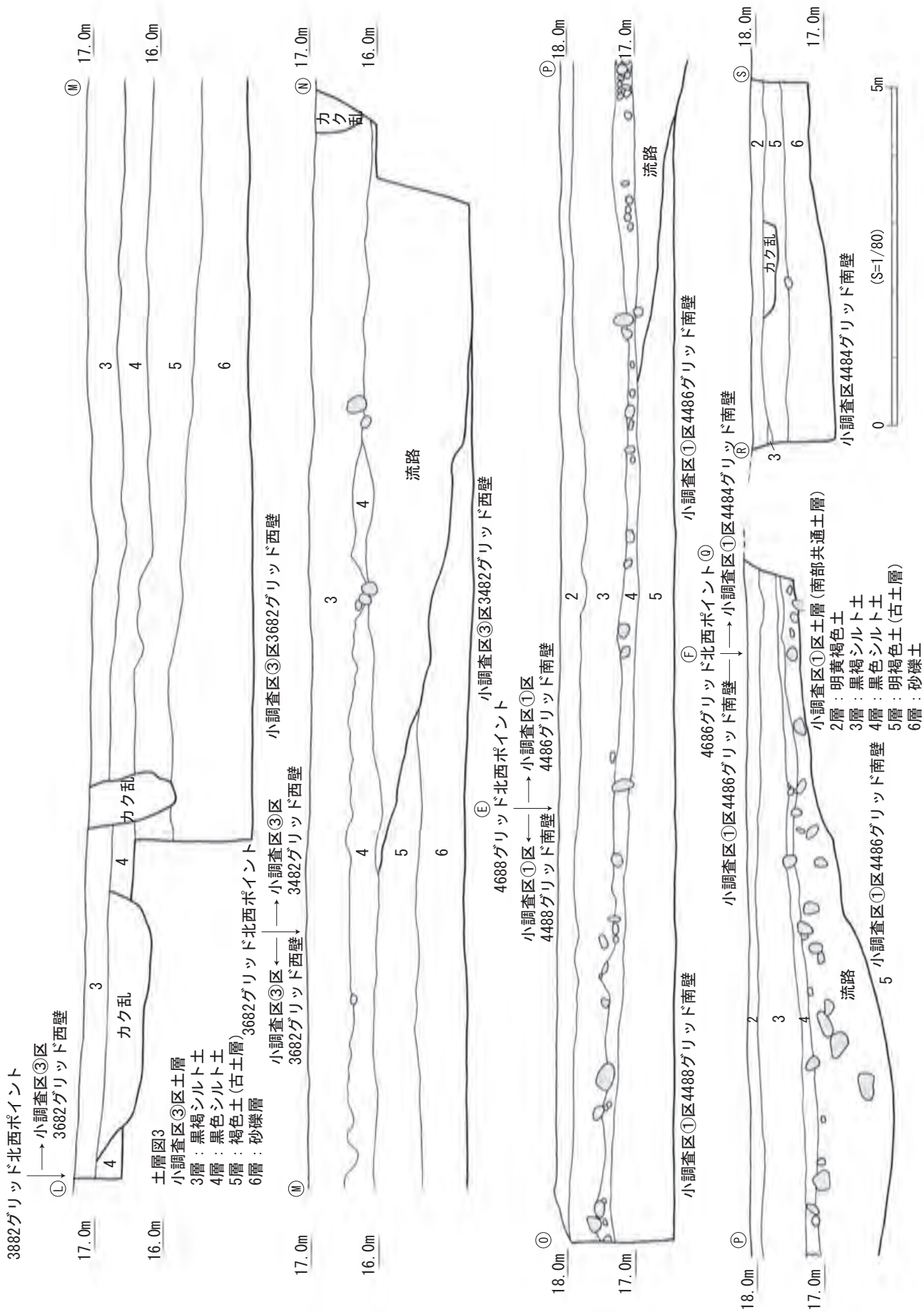
小調査区①区土層(南部共通土層)  
2層：明黄褐色土。床土  
3層：黒褐シルト  
4層：黒シルト  
5層：黒褐色



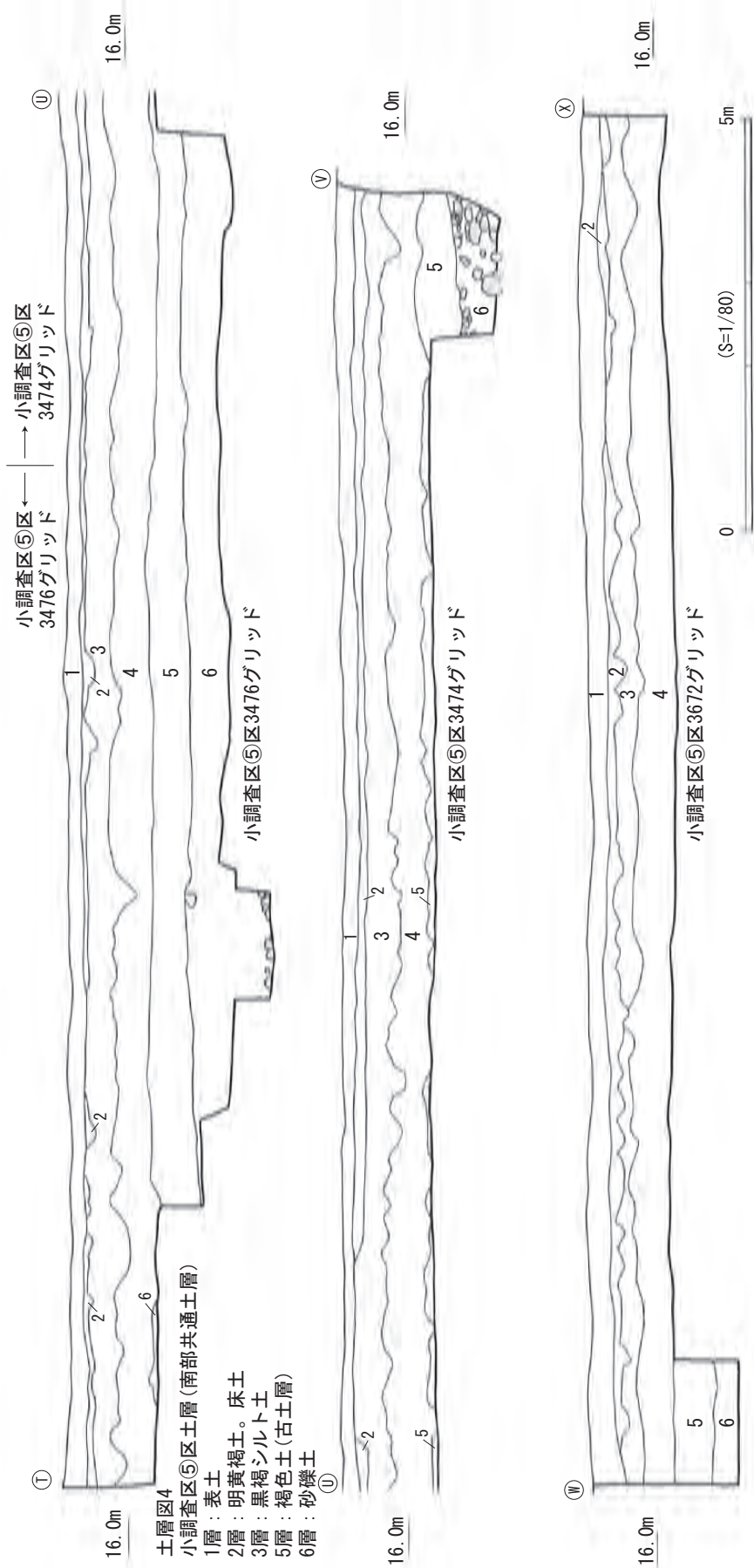




第19図 TAK201304調査区土層図-2(S=1/80)



第20図 TAK201304調査区土層図-3(S=1/80)



第21図 TAK201304調査区土層図-4(S=1/80)

### Ⅲ 遺構と遺物

#### 1 旧石器・縄文時代

平成25年度の調査で検出した縄文時代の遺構は、土坑(SK)5基、ピット(SP)1基、集石(SS)3基、遺物集積(SU)4基、旧河川(NR)1条であった。旧石器時代の遺物として TAK201303調査区より剥片尖頭器が出土した。

##### (1) 土坑(SK)

###### ① SK44(第27図)

TAK201301調査区E区4層上面で検出した。二段掘りになっており、上段は隅丸方形で一辺は約1.1m、深さ0.45m、下段は隅丸方形で一辺約0.3m、深さ0.4mである。埋土は、しまりの強い黒褐色シルトと暗褐色シルトで、後者は上段掘方になじんで立ち上がりがぼやけている。遺物は出土していない。遺構の形状は、後述するSK45と類似することから、縄文時代早期の落とし穴状遺構と考えられる。

###### ② SK45(第28図)

TAK201301調査区E区4層上面で検出した。二段掘りで、上段掘方は隅丸長方形で、長軸長1.1m、短軸長0.95m、深さ0.4m、下段掘方は円形で、直径0.3~0.4m、深さ0.4mである。下段掘方に沿って拳大の礫が据えてあり、逆茂木などの構造物を固定する根巻石かもしれない。構造や規模は前述したSK44と酷似しており、落とし穴状遺構であろう。

埋土は褐色シルトで、混入物の違いで上下2層に分層できる。遺物は2層から出土した(第28図1・第1表)。口縁部片で、やや開き気味の口縁端部に浅い刻みを施し、外面には浅い刻目が伴う2条の微隆起文が確認できる。高橋信武編年の塞ノ神I式古段階に相当することから(高橋1997)、この遺構は縄文時代早期後葉と考えられる。

###### ③ SK76(第29図)

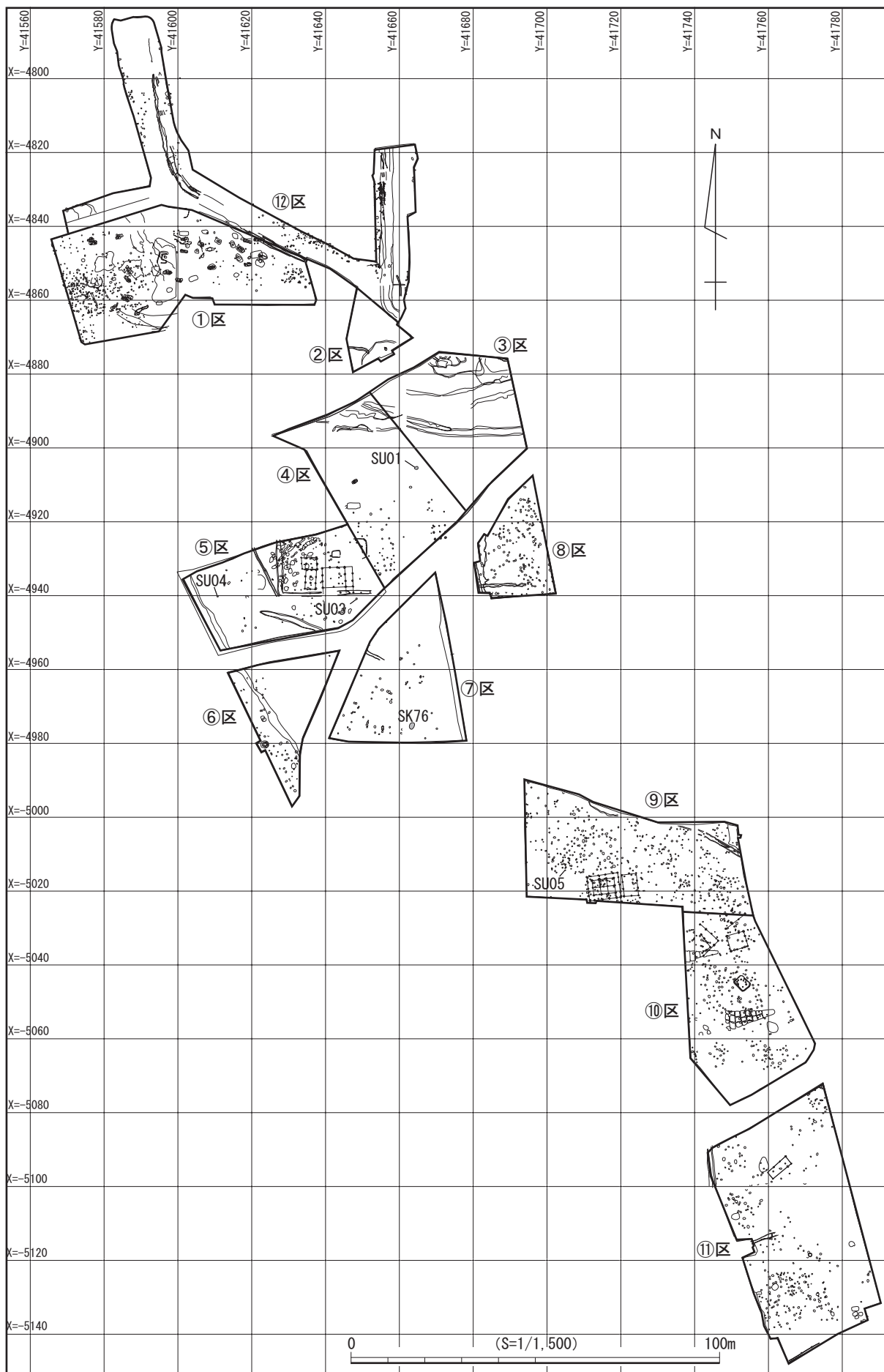
TAK201302調査区⑦区9666グリッド3層上面で検出した。掘り方は不定形で、長軸長1.7m、短軸長1.4m。断面はすりばち状になる。埋土は黒褐色土で、混入する礫の大きさや密度から上下2層に分層できる。遺物は黒曜石製の石匙が1点出土した(第29図2・第2表)。つまみ先端部を若干欠損するものの、ほぼ全形がうかがえる。灰褐色黒曜石製で厚手の横長剥片を素材とし、全体に丁寧な調整剥離を加えて整形する。側面の一部に平坦な礫面を残す。時期は特定できないが、縄文時代のものであろう。(中尾)

###### ④ SK06(第30図)

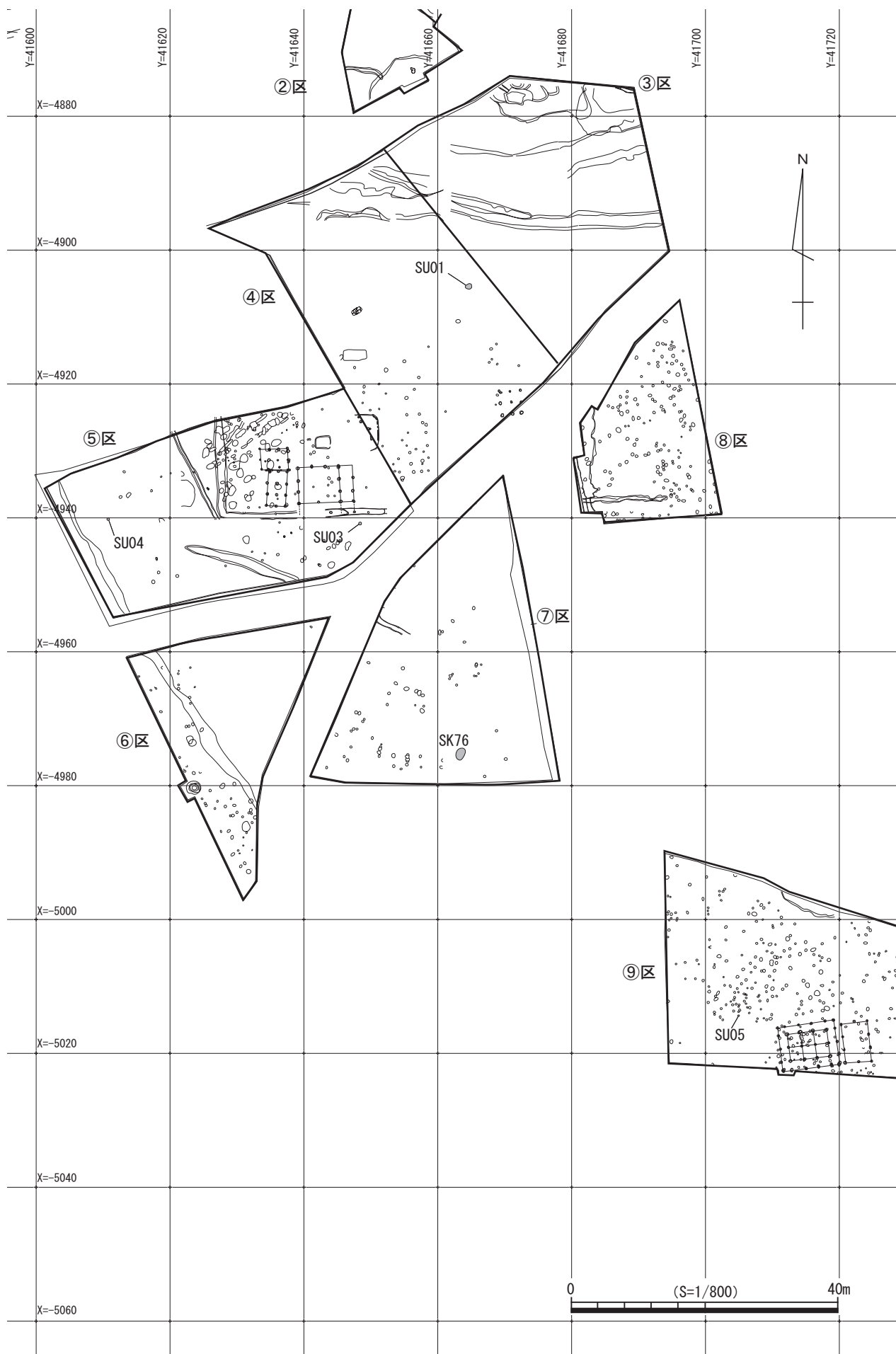
TAK201304調査区3区3682グリッドの南西隅、自然流路の西岸の5層(古土層)上面から検出された。規模は、掘方の上端の直径が1.32m、短径が0.94mの楕円形で、深さは0.55mである。穴の中央にピットを設け、拳大の礫を充填している。底のピットは直径約0.35mの円形で深さは約0.35cmである。土坑の底に逆茂木か杭を設置したものと考えられる。土坑内の埋土はにぶい褐色の粘砂質土で、遺物の出土はない。

###### ⑤ SK07(第31図)

TAK201304調査区3区4084グリッドの南西隅、自然流路の西岸の5層(古土層)上面から検出された。



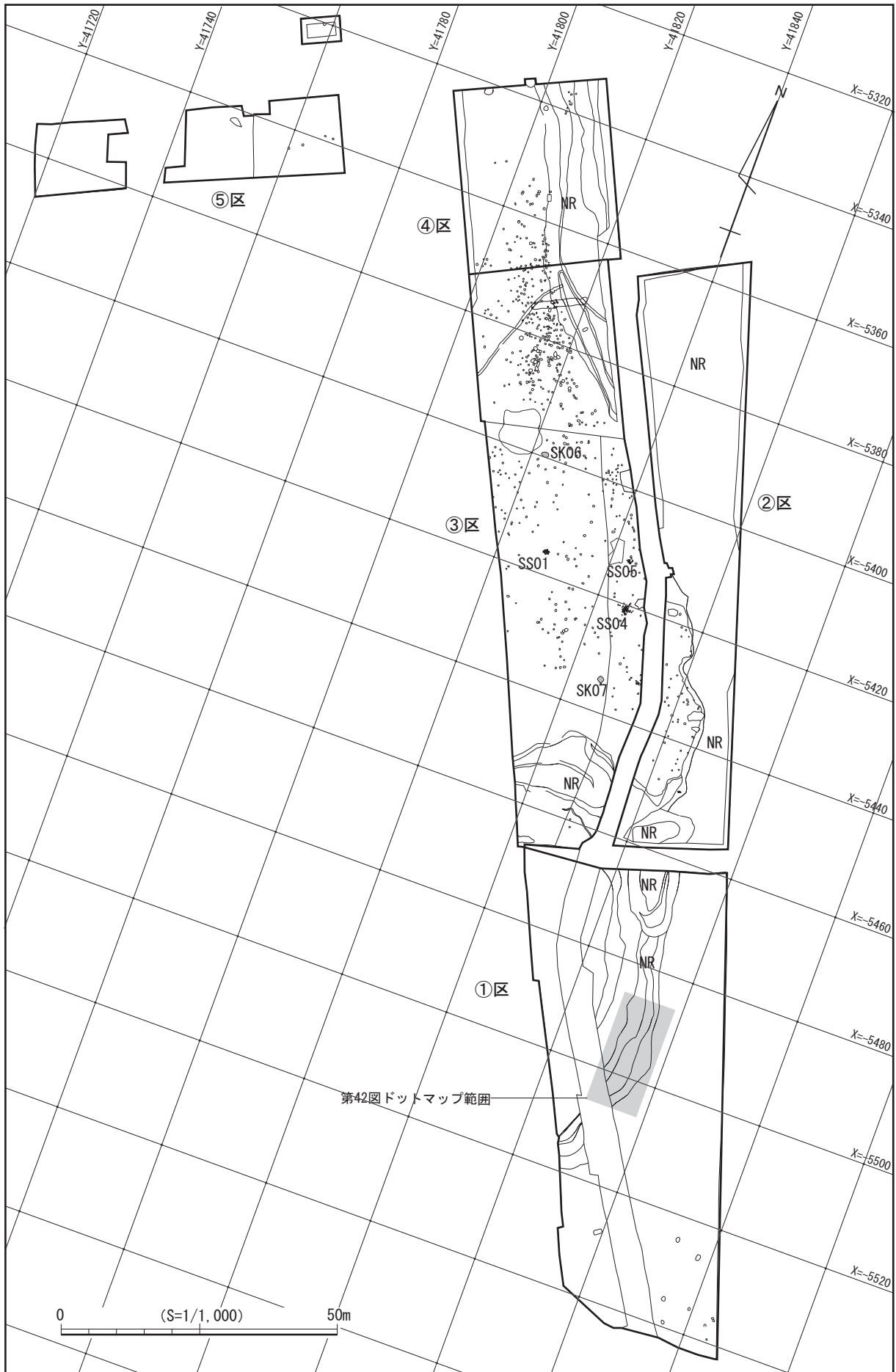
第23図 TAK201302調査区縄文時代遺構配置図(S=1/1,500)



第24図 TAK201302調査区縄文時代遺構配置図(③区~⑨区拡大) (S=1/800)

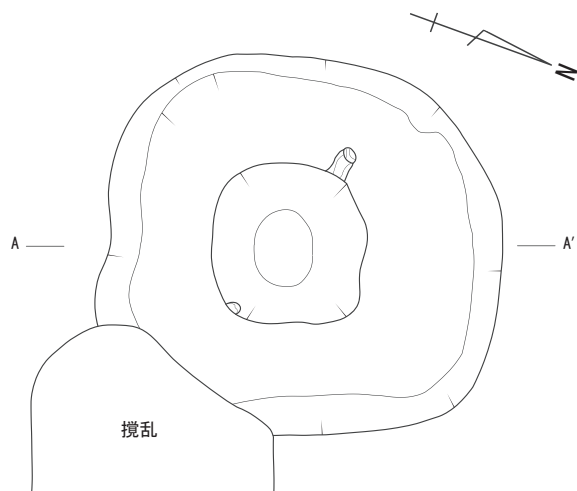


第25図 TAK201301調査区縄文時代遺構配置図(S=1/1,000)



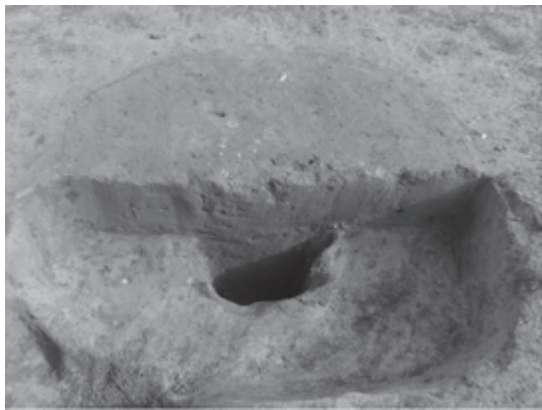
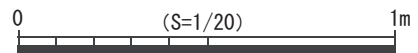
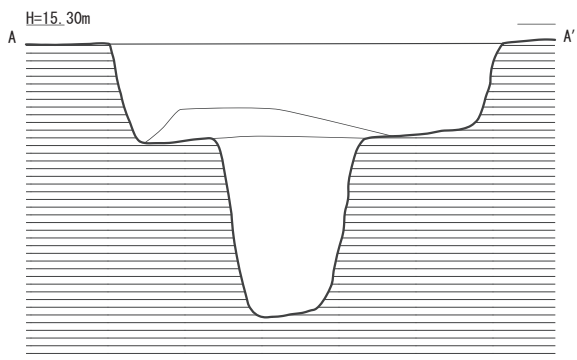
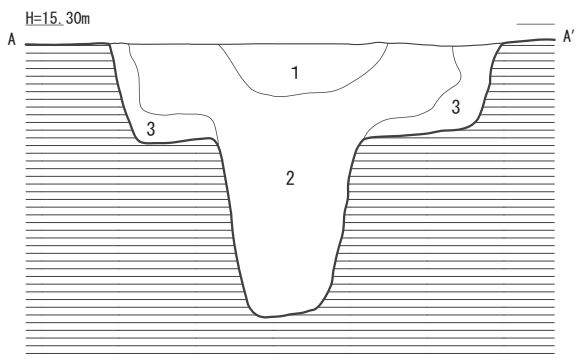
第26図 TAK201304調査区縄文時代遺構配置図 (S=1/1,000)



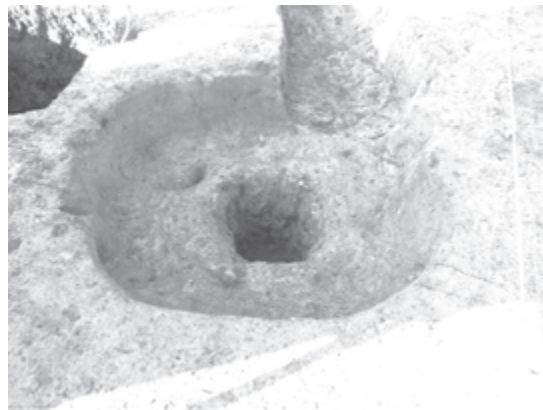


【土層注記】

- 1層：黒褐色シルト土 (Hue7.5YR2/2)。しまり強い。  
直径2～5cmの黄褐色ブロックを1割ほど含む。
- 2層：黒褐色シルト土 (Hue7.5YR3/1)。しまり強い。  
直径1cm程度の黄褐色ブロックを数%含む。
- 3層：暗褐色シルト土 (Hue10YR3/3)。しまり強い。  
掘方となじんでぼやける。

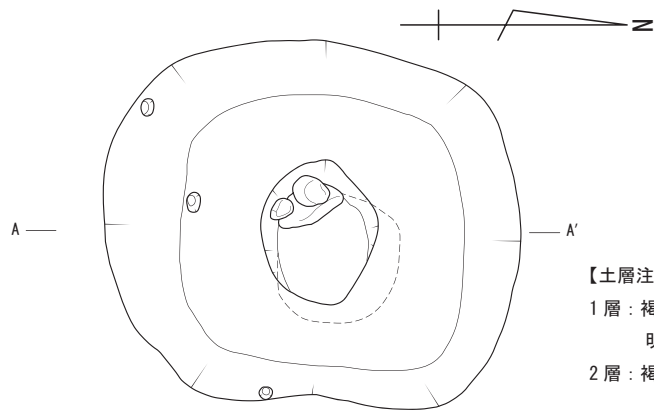


半截



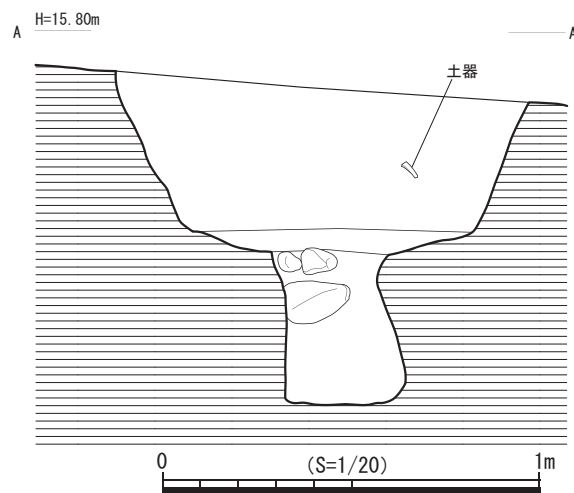
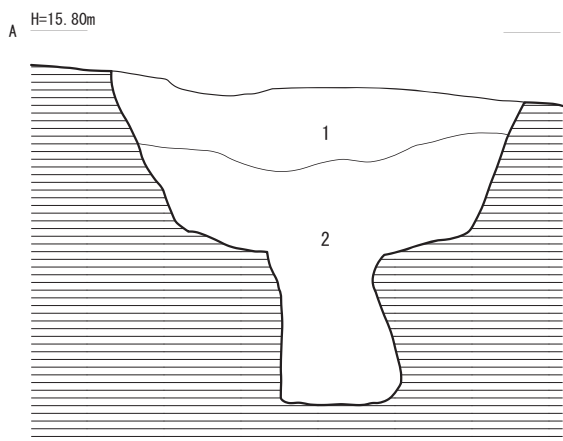
完掘

第27図 TAK201301調査区SK44遺構実測図(S=1/20)

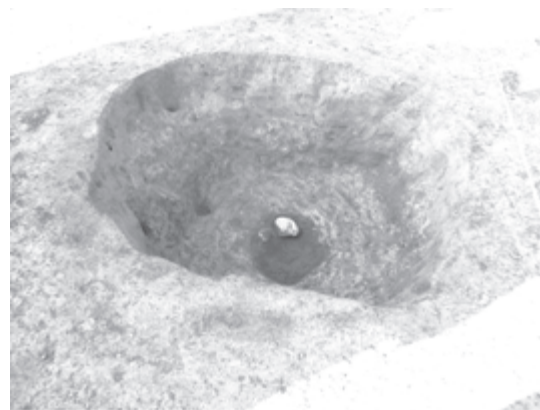


【土層注記】

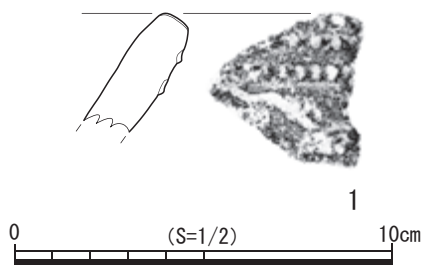
- 1層：褐色シルト土 (Hue10YR4/4)。しまり強い。
- 明黄褐色 (10YR7/6) で直径 2cm 大のブロックを少量含む。
- 2層：褐色シルト土 (Hue10YR3/3)。しまり強く、小礫 10% 未満含む。



半截



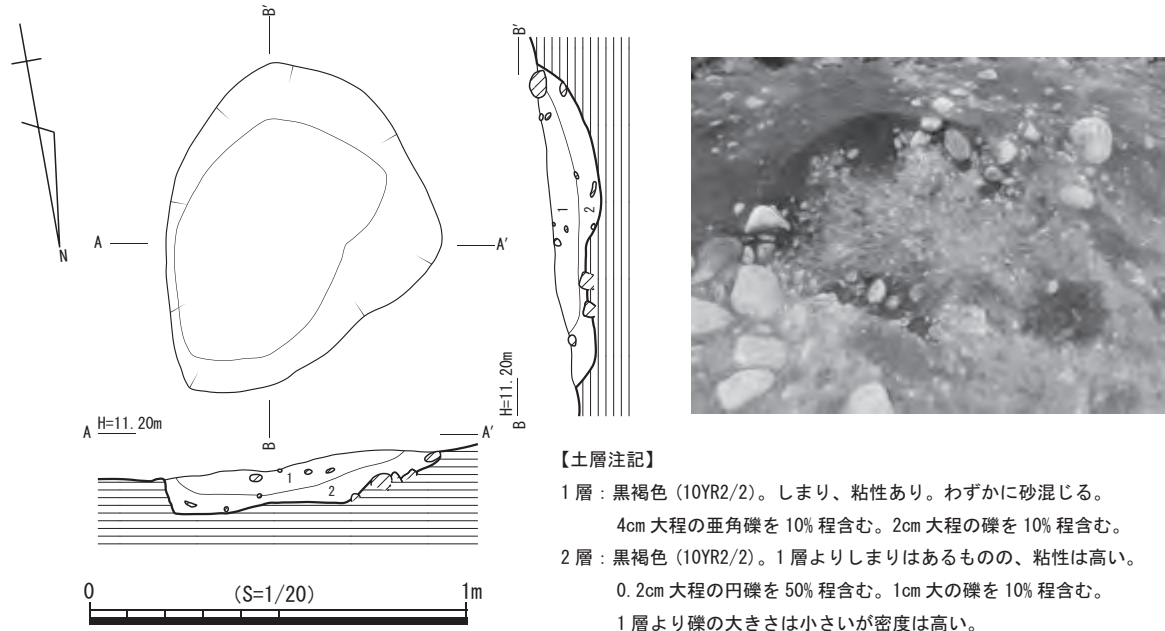
完掘



第28図 TAK201301調査区SK45遺構実測図 (S=1/20) 及び出土遺物実測図 (S=1/2)

第1表 TAK201301調査区SK45出土土器観察表

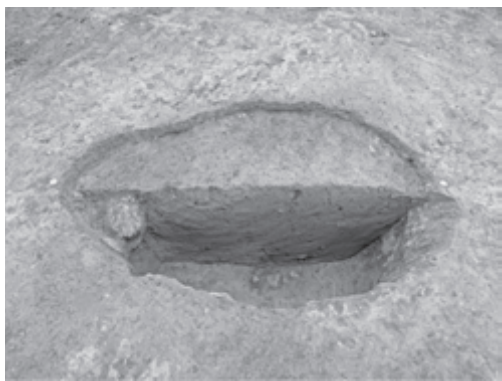
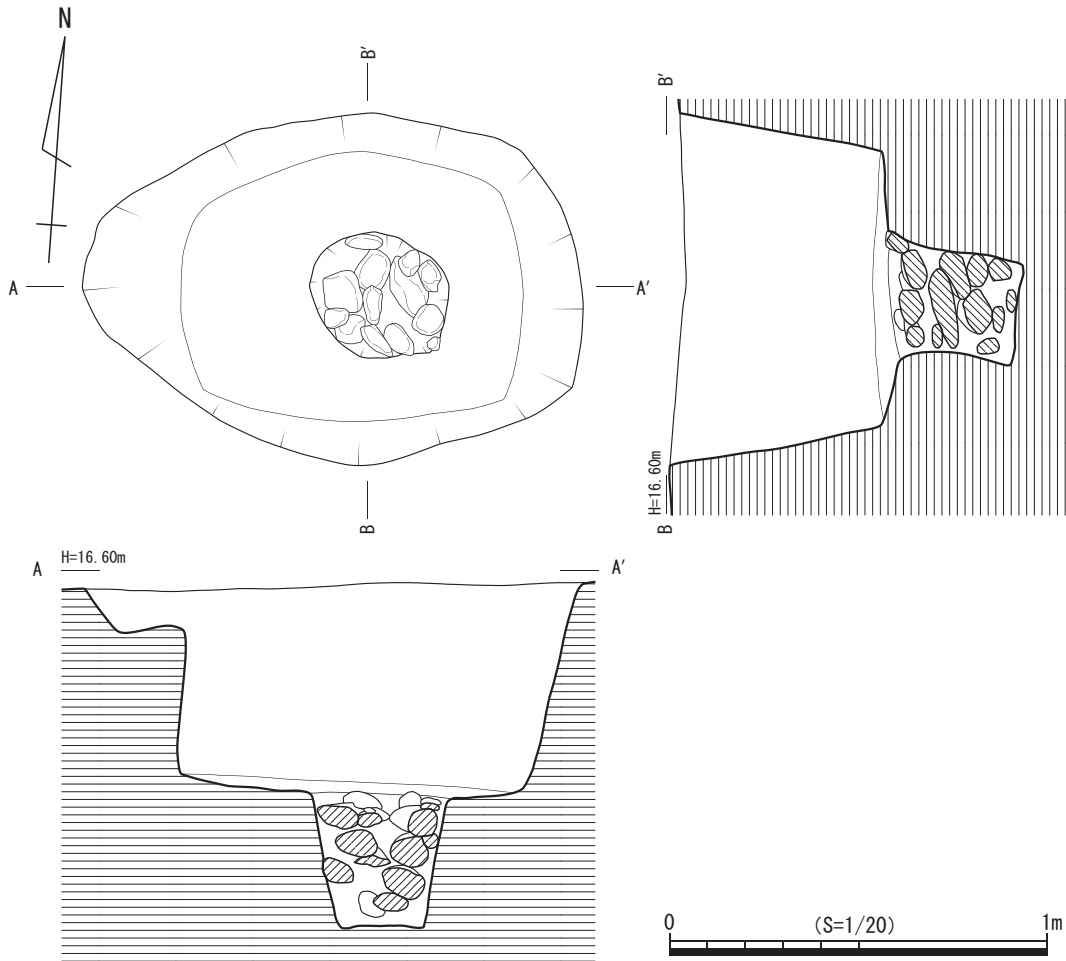
図版番号	出土区 グリッド	出土遺構	器種	部位	色調		調整		焼成	胎土	備考
					外面	内面	外面	内面			
1	E区	SK45	深鉢	口縁部	にぶい黄橙(10YR7/3)	にぶい黄橙(10YR7/4)	ナデ	ナデ	良好	角閃石、砂粒、雲母	



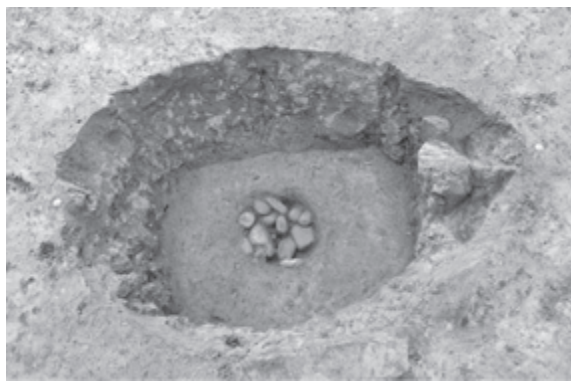
第29図 TAK201302調査区SK76遺構実測図(S=1/20)及び出土遺物実測図(S=2/3)

第2表 TAK201302調査区SK76出土石器観察表

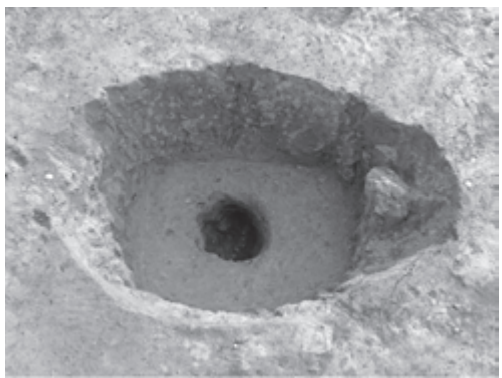
図版番号	器種	出土区 グリッド	出土遺構	石材	最大長 (mm)	最大幅 (mm)	最大厚 (mm)	重量 (g)
2	石匙	7区	SK76	黒曜石	(37.5)	75.5	12.5	(27.9)



1



2

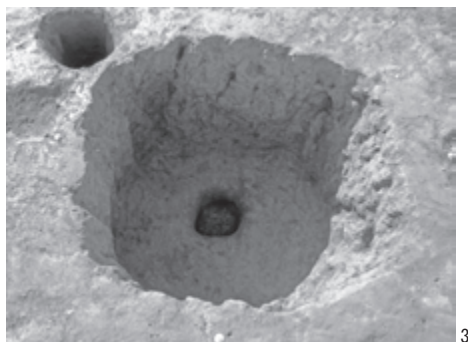
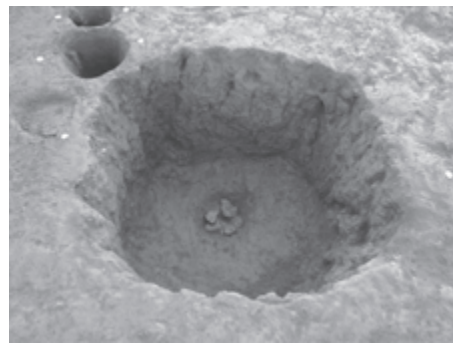
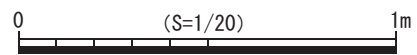
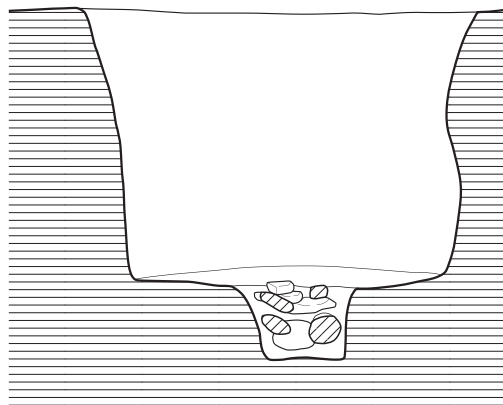
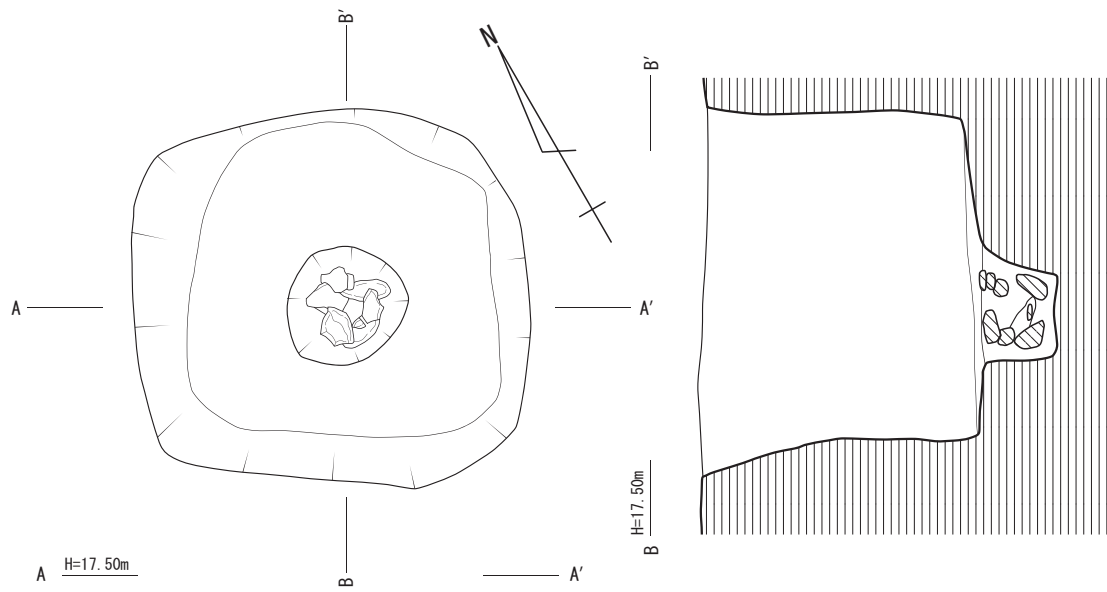


3



1. 土層断面  
(南から)
2. 完掘状況1  
(北から)
3. 完掘状況2  
(北から)
4. 半截状況  
(南から)

第30図 TAK201304調査区SK06遺構実測図(S=1/20)



1. 土層断面（南から）
2. 完掘状況 1（南から）
3. 完掘状況 2（南から）
4. 半截状況（南から）

第31図 TAK201304調査区SK07遺構実測図 (S=1/20)

規模は掘方で直径1.05m、短径0.98mの隅丸方形で、深さが約0.7mで穴の底の中央にピットを設け拳大の礫を充填している。底のピットの大きさは直径約0.32mの円形で深さが約0.2mである。土坑の底に逆茂木か杭を設置したものと考えられる。土坑内の埋土はにぶい褐色の粘砂質土で、遺物の出土はない。

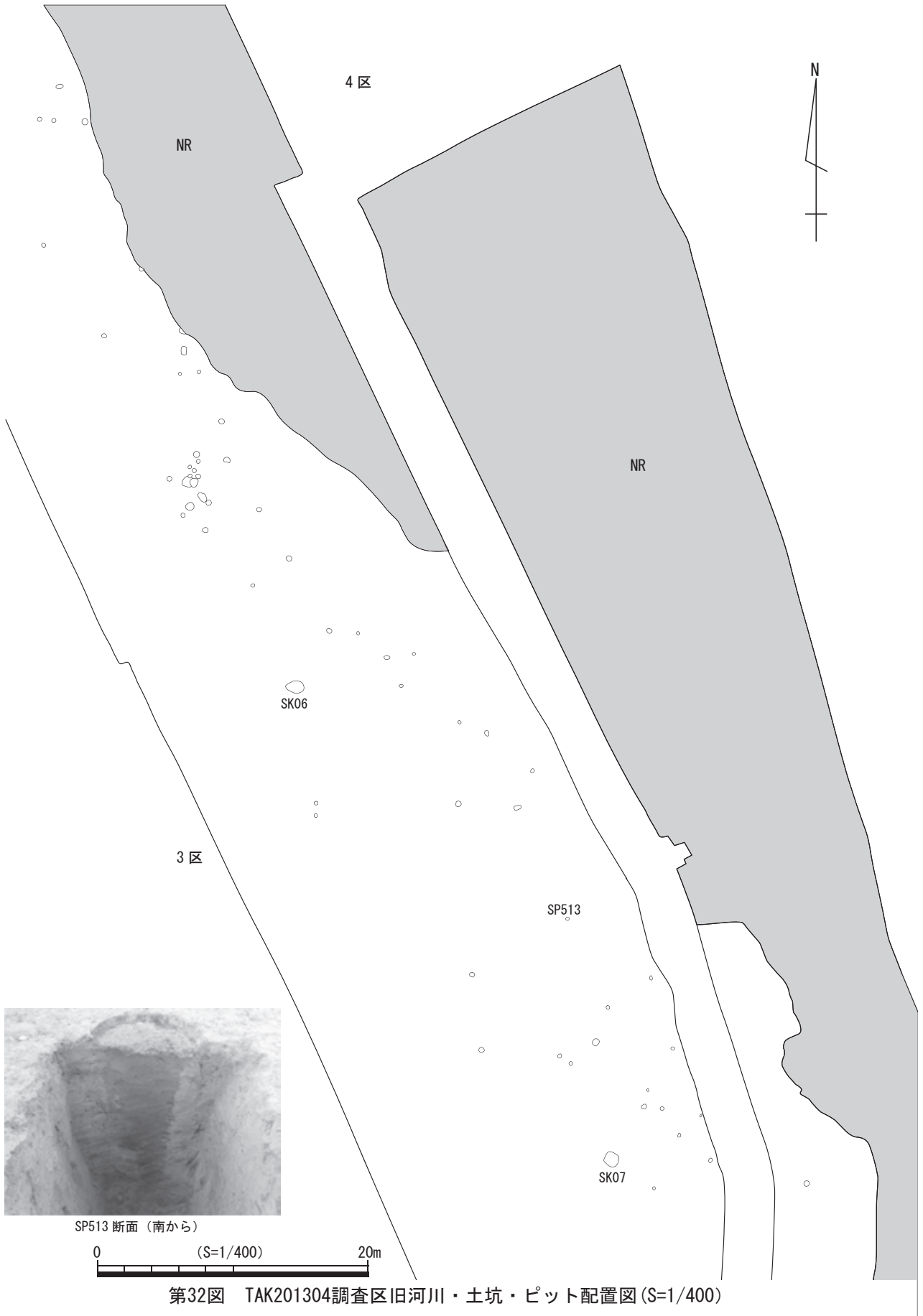
県内で検出された縄文時代の落とし穴状遺構で土坑の底に礫を詰めたピットをもつものを見てみると、例は4遺跡と少ないが、全て縄文時代早期のものである(第3表)。その中でも、黒丸遺跡で検出された落とし穴状遺構は(浦田2016)、今回検出されたものと同じく、坂口にある郡川の扇央から流れ出した旧河川沿いにある(阪口2013)。また、東日本の例であるが、佐藤宏之氏の研究によると、このタイプは縄文時代早期後半から前期初めのものでされている(佐藤1998)。これらのことから、今回検出した落とし穴状遺構も縄文時代早期後半頃のもので考えてよいと思われる。検出された落とし穴状遺構の立地をみると、自然流路(旧河川)の川淵にあり、水辺に水を求めてやってくる動物を対象として設置されている。これは、捕らえる獣種の限定はなく、設置場所を優先して作ったものであり、季節性も乏しく、狙う獣種も多岐にわたると考えられる。したがって、縄文時代早期後半頃にこの落とし穴状遺構を設置した集団は、獲物を求めて移動の生活を送るより、罠をつくることによりある程度定住していたものと推測できる。さらに、この2基の落とし穴状遺構の周囲には、同じ5層上面から多数のピットが検出された。この中で深さが0.5m以上あるものだけを落とし穴とともに図面に示してみた(第32図)。この落とし穴状遺構で狙った獲物は多岐にわたると考えられるが、当時の獲物の状況としてイノシシとシカが多かったと仮定すると、それぞれジャンプ力はイノシシが1m程、シカが1.5m程とみられるので、落とし穴に誘導する柵等を作るとすればその高さは獲物がイノシシだけを考えると1m以上、シカまでだと1.5m以上となる。堅固な支柱を立てようとするならば、地盤の強度にもよるが概ね支柱の高さの2分の1ほど根入れすればよいと思われるので、0.5m以上物を示した。すると、ピット群は落とし穴状遺構と河岸の間に集中し、獲物を落とし穴状遺構に誘導するための柵等を設置したピットとも考えられる。(浦田)

#### 【参考文献】

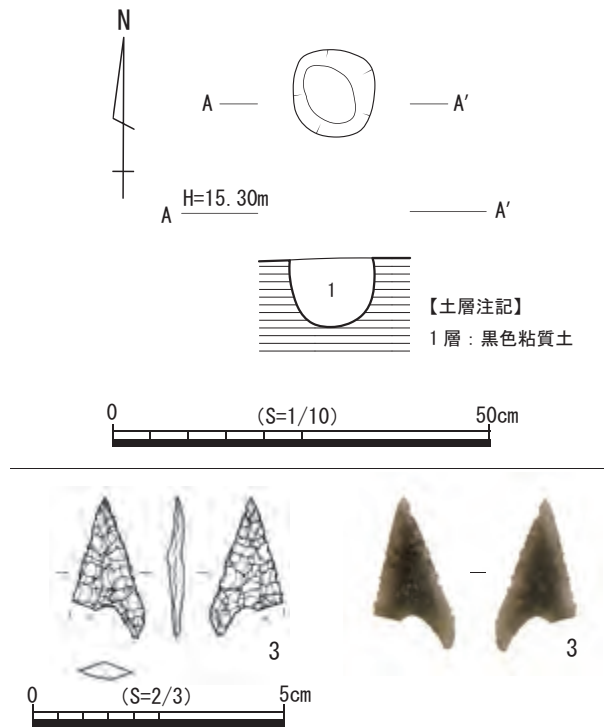
- 佐藤宏之1998「陥し穴罠の土俗考古学－狩猟技術のシステムと構造－」『縄文式生活構造－土俗考古学からのアプローチ』同成社
- 浦田和彦2016『黒丸遺跡』長崎県文化財調査報告書 第215集
- 阪口和則2013「旧河道について」『新編大村市史』第一巻第一章第四節第七項
- 高橋信武1997「平椀式土器と塞ノ神式土器の編年」『先史学・考古学論究2』龍田考古会
- 農林水産省生産局監修2014『改訂版 野生鳥獣被害防止マニュアル イノシシ・シカ・サル 実践編』(株)エイエイビー

第3表 長崎県内落とし穴状遺構検出遺跡一覧表 ※底の中央に礫を詰めたピットを有するもの

遺跡名	所在地	立地	時期	遺構名	報告書
牛込A・B遺跡	諫早市貝津牛込	丘陵	早期	1・2・3・4・5・9号土坑	『九州横断自動車道路建設に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査報告Ⅱ』長崎県文化財報告書第56集1982
鷹野遺跡	諫早市津久葉町	丘陵	早期	不明土坑7号	『諫早中核工業団地造成に伴う埋蔵文化財発掘調査報告Ⅲ』長崎県文化財報告書第85集1986
龍王遺跡	雲仙市国見町土黒・今出・川原田	扇状地	早期以降	SX-2	『龍王遺跡Ⅲ』(縄文時代・古墳時代編)雲仙市文化財調査報告書第3集2008
黒丸遺跡	大村市宮小路3丁目	扇状地	早期後半	SK05	『黒丸遺跡』県立ろう学校移転改築工事に伴う埋蔵文化財調査報告書 長崎県文化財調査報告書第215集2016



第32図 TAK201304調査区旧河川・土坑・ピット配置図(S=1/400)



第33図 TAK201301調査区SP285遺構実測図  
(S=1/10) 及び出土遺物実測図 (S=2/3)

第4表 TAK201301調査区SP285出土石器観察表

図版番号	器種	出土区グリッド	出土遺構	石材	最大長(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	重量(g)
3	石鏃	B区2682	SP285	黒曜石	27.5	(14.0)	3.0	(0.7)

## (2) ピット (SP)

### ① SP285(第33図)

TAK201301調査区B区2680グリッド4層上面で検出した。プランは円形に近く、直径0.12m、深さ0.1m程の小規模なピットである。埋土は黒褐色土である。遺物は石鏃が1点出土した(第33図3)。灰白色の黒曜石製で、片脚が欠損するものの、両側縁から入念な調整剥離を加えて断面菱形に整える。基部の挟りは深く、脚の端部は尖る。時期は特定できないが、縄文時代のものであろう。(中尾)

## (3) 集石 (SS)

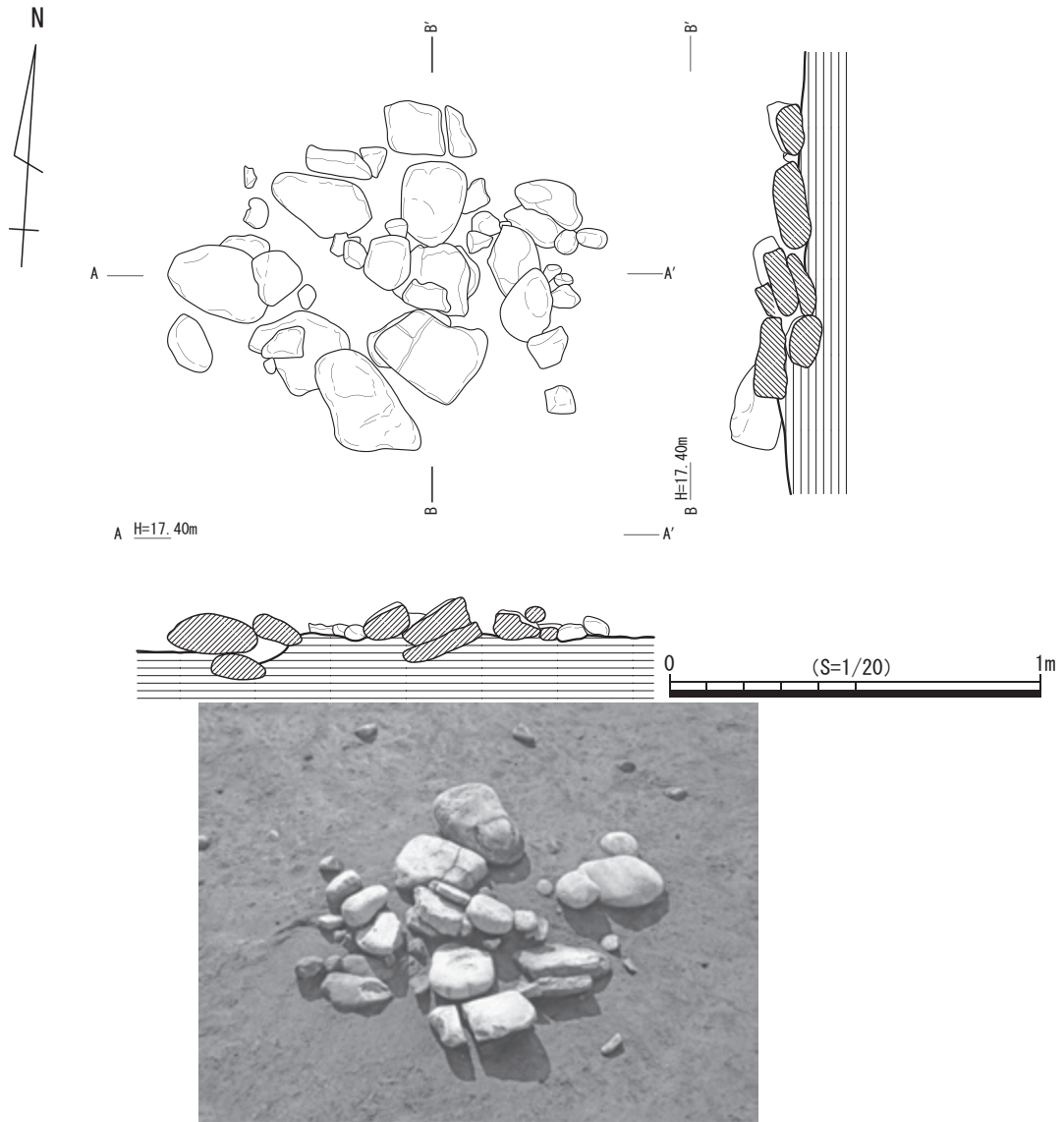
### ① SS01(第34図)

TAK201304調査区3区3882グリッド4層下層から検出された。規模は長径約1.2m、短径約0.9mを測る。平面形は楕円形で拳大のものを中心に5cmから35cm程の大きさの礫38個で構成される。使用された礫は郡川の扇状地礫層の安山岩である。掘り込みは無く、被熱の痕も見られない。遺物の出土も無い。

### ② SS04(第35図)

TAK201304調査区3区3884グリッド4層下層から検出された。規模は中心部の礫が密集するところが長径約1.3m、短径約1.1mを測り、散在する周辺部も含めると径が約3mとなる。平面形は円形で拳大





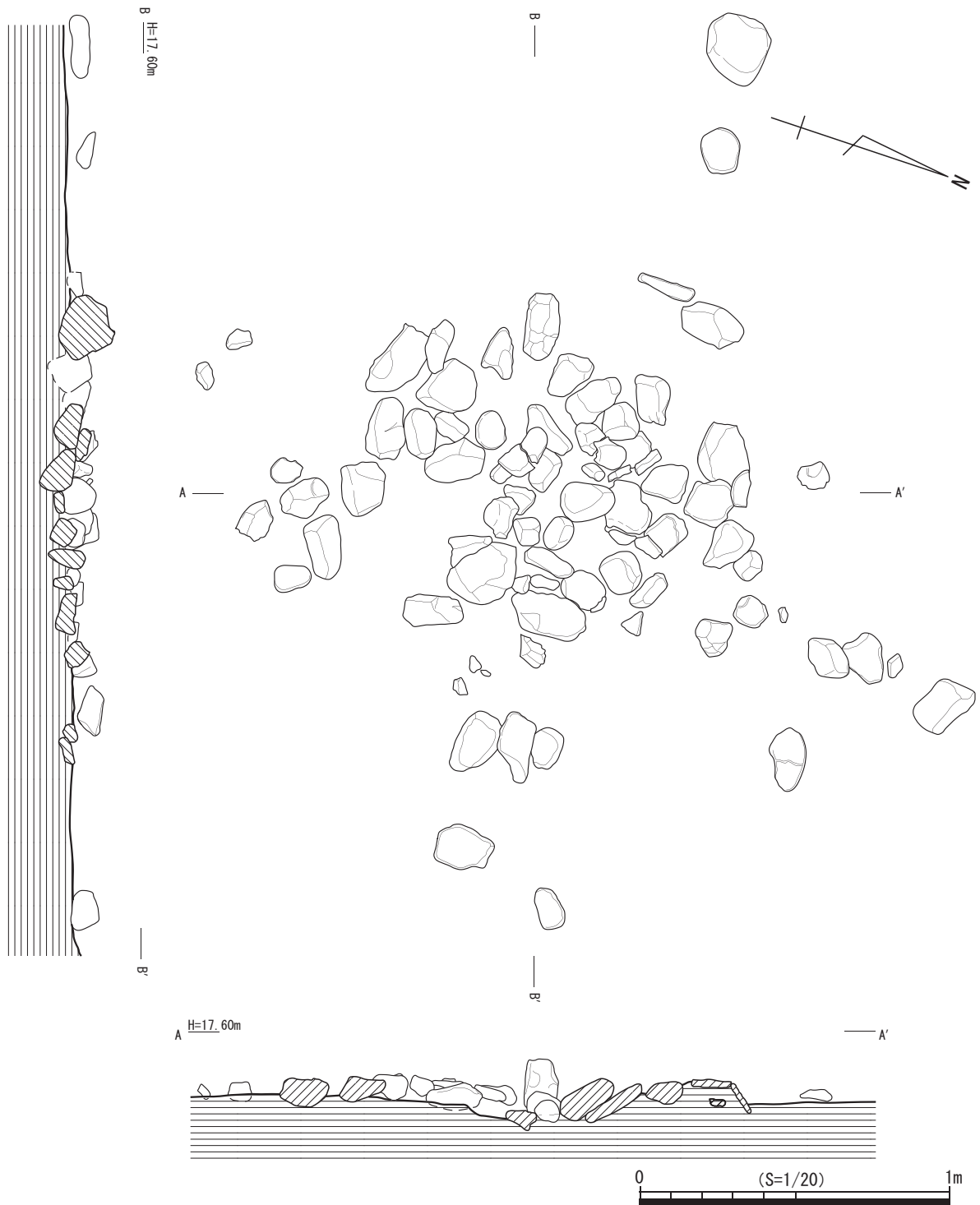
第34図 TAK201304調査区SS01遺構実測図 (S=1/20)

のものを中心に5cmから25cm程の大きさの礫95個で構成される。中心部の礫密集するところで79個を数える。使用された礫は郡川の扇状地礫層の安山岩である。掘り込みは無く、被熱の痕も見られない。遺物の出土も無い。

③ SS05(第36図)

TAK201304調査区3区3884グリッド4層下層から検出された。規模は長径約1.15m、短径約0.85mを測る。平面形は三角形で拳大のものを中心に8cmから35cm程の大きさの礫29個で構成される。使用された礫は郡川の扇状地礫層の安山岩である。掘り込みは無く、被熱の痕も見られない。遺物の出土も無い。

この3基の集石遺構の時期であるが、遺物を伴わないため確実な時期はわからない。遺構が検出された4層は調査区全体では層厚が薄いところで0.1m程度から最も厚いところで0.7m程度で、これらの遺構が検出された3882・3884・4084グリッドで見ると0.3~0.4mの堆積となる。この4層から出土した土器は全て縄文土器で、その中で時期や型式がわかるものをみて見ると第5表のとおりとなり、調

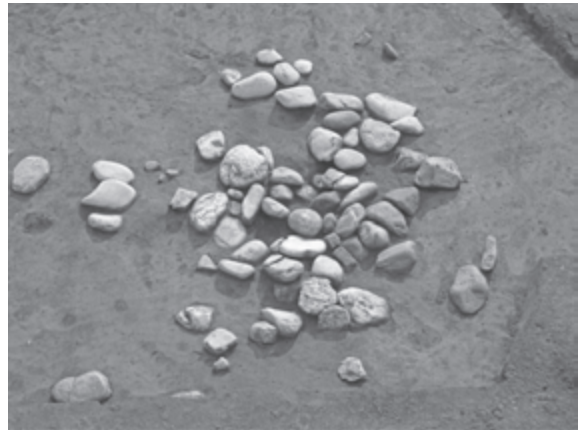


第35図 TAK201304調査区SS04遺構実測図(S=1/20)

査区全体では縄文時代早期後半と晩期にピークがあり、集石遺構が検出されたグリッドだけを見ると塞ノ神式土器が多数を占めることから、この3基の集石遺構も縄文時代早期後半のもの可能性が高いといえる。また、それを裏付けるように県内で検出された他の遺跡の掘り込みを持たない今回と同タイプの集石遺構も、例が5遺跡と少ないが全て縄文時代早期のものである(第6表)。

この縄文時代の遺跡で検出される集石遺構は全国的には縄文時代早期前半から中葉に普及し、やや衰退しながら前期に至り、中期で再び最盛期となり後期以降減少し、後期後半以降には消滅する。九

州では早期の普及率が高い。集石遺構の形態は掘り込みが無く拳大の礫が密集しているもの、浅い掘り込みがあるもの、土坑があるものなどがあるが、全て集石遺構とされている。人為的につくられた遺構(施設)であればその用途、目的があるはずでこれらのものを一括して集石遺構として見ていくのには無理があると考えられる。集石遺構でもその立地や掘り込みの有る無し、掘り込みでも浅いものと土坑状のもの、礫に被熱の痕跡があるかないかなど立地や形態別に見ていく必要があると考えられる。

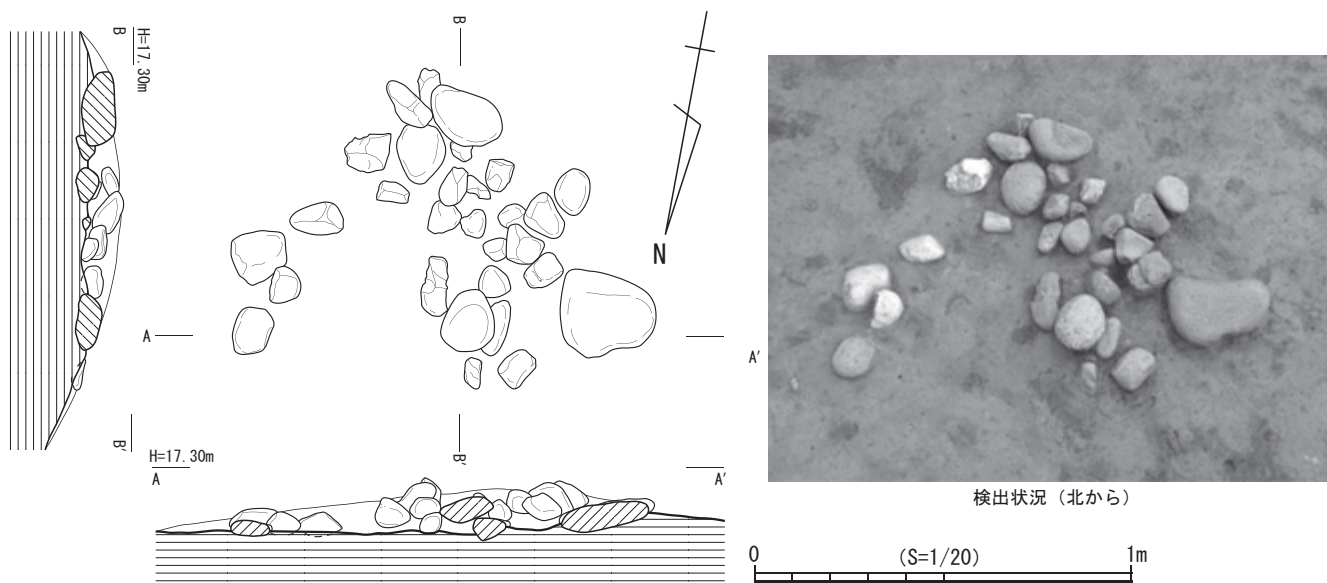


図版1 TAK201304調査区SS04検出状況  
(北から)

九州では八木澤一郎氏が南九州の集石遺構の形態分類と時期ごとの検出例を集成されている(八木澤1994)。その分類は1類が分散型で、掘り込みと底石とが共に無い形態のもの。2類は密集型で、掘り込みと底石とが共に無い形態のもの。3類は密集型で、掘り込みは有るが、底石は無い形態のもの。4類は密集型で、掘り込みと底石とが共に有る形態のもの。この4つの分類で時期毎の検出状況をまとめられた結果、集石遺構の形態の違いが時間的な変遷を示すものでは無いとされている。そのことから立地や形態別に縄文時代を通して使われた、それぞれ形態ごとに用途や目的があると思われる。

そこでここでは、今回検出された掘り込みが無く拳大の被熱の痕跡も無い礫が並べられた集石遺構について見てみたい。これまで集石遺構の用途としては多くが食物の蒸し焼き調理用の施設と考えられてきた。また、一部祭祀用の施設という見方もあった。しかし、今回検出されたタイプは掘り込みも礫に被熱の痕跡も無く、平らに礫を敷いたものであり、上記の食物調理用の施設とは考えにくい。

まず立地を見ると旧河川(自然流路)の岸にあり、同時期の可能性が高い落とし穴状遺構2基の間に位置する(第26図)。獲物を捕らえる罠があり、川などの流水があるところから、これらの集石遺構は捕らえた獲物を解体する作業台とは考えられないであろうか。当時一般的な獲物と考えられるイノシシを例にとって見ると、まず、落とし穴にかかったイノシシに止めを刺す。止めをさした後は速やかにイノシシの体を洗淨し、血抜きをする。死後硬直が始まりだす死後1時間ほどまでに血抜きをしなければならぬ。死後硬直が始まるともう血抜きは出来ない。血抜きをしないと肉にしたとき臭くて食せない。次にイノシシの腹を開き内臓を傷つけないように取り出す。内臓を傷つけると肉が臭くなる。内臓を取り出したら腹腔をきれいに洗淨する。ここまで終わると今度はイノシシを綺麗な流水に半日から1日漬け、完全に血抜きをし、肉を引き締める。その水から引き上げ皮を剥ぎ、食用とする肉を取る。当時は肉だけでなく毛皮や骨・牙も貴重な資源である。毛皮は衣服や、靴、シート、紐などの生活用具に、骨や牙も道具や装身具などになる。皮は剥いだままでは腐敗して使えなくなる。まずは皮に着いた余分な脂肪や筋を取らなければいけない。何度も水で洗いながらスクレイパー等で根気良く削り取ったはずである。まだこのままでは皮なのでこれを鞣し、革にしなければならない。原始時代の鞣しは旧石器時代に始まり、余分な脂肪などを取り除いた毛皮を湿気のある場所においてスクレイパーで毛を取り除き、乾燥させながら手で揉んだり、足で踏みつけたり、あるいは石や骨、棒などでたたいたりして柔らかくする単純なものであった。それが紀元前12,000年頃、旧石器時代の終わり



第36図 TAK201304調査区SS05遺構実測図 (S=1/20)

第5表 TAK201304調査区4層出土縄文土器時期別出土数一覧表

時期 型式	早期			前期		中期	後期	晩期
	一野	押型文	塞ノ神	西唐津	轟	船元		
数量	4層全体							
	2	2	27	1	7	1	4	12
	3882・3884・4084Gのみ							
	1		12		7			1

第6表 長崎県内集石遺構検出遺跡一覧表 ※掘り込みがないもの

	遺跡名	所在地	時期	立地	底に礫の入る ピットのある 落し穴	遺構数 ※( ) は総数	報告書
1	西輪久道遺跡	諫早市津久葉町	早期	川沿いの低丘陵の緩斜面		3	『諫早中核工業団地造成に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査報告書Ⅱ』長崎県文化財調査報告書第74集 1985
2	鷹野遺跡	諫早市津久葉町	早期	川沿いの低丘陵の緩斜面	1基	2(25)	『諫早中核工業団地造成に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査報告書Ⅲ』長崎県文化財調査報告書第85集 1986
3	牛込A・B遺跡	諫早市貝津町牛込	早期	川沿いの低丘陵の緩斜面	6基	4(7)	『九州横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査報告書Ⅱ』長崎県文化財調査報告書第56集 1982
4	百花台B、C、D遺跡	雲仙市国見町百花台堀囲	早・前期	標高200~300の段丘上		2(7)	『県道国見雲仙線改良工事に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査報告書』長崎県文化財調査報告書第116集 1994
5	一野遺跡	島原市有明町大三東字一野	早期	海岸沿いの段丘上		4(5)	『一野遺跡』有明町文化財調査報告書第11集 1992

第7表 TAK201304調査区集石遺構観察表

遺構名	層位	グリッド	規模(cm)		平面形	礫の状況			掘り込み	被熱
			長径	短径		礫数	大きさ(cm)	礫		
SS01	4層	3882	120	90	楕円	38	拳大中心に5~35	郡川扇状地の礫	なし	なし
SS04	4層	3884	中心部130	110	中心部 円	中心部79	拳大中心に5~25	郡川扇状地の礫	なし	なし
			周辺部を含め300			周辺部16				
SS05	4層	3884	115	85	三角	29	拳大中心に8~25	郡川扇状地の礫	なし	なし

頃には皮を乾燥するために焚き火の近くに掛けておくと皮が腐りにくくなり耐久性が生じることを知り、薫煙糝しが始まる。同時期に皮に付着していた脂肪分が多いと皮が柔らかくなることや燻し中に脂肪が皮に浸透して一層柔らかくなることを知り、動植物の油脂や魚の油、卵または動物の脳や肝臓

を塗って物理的処理を行う油鞣しも始まる。さらに、紀元前3000年頃、オリエントで樹皮や実、葉などを用いる植物タンニン鞣しが始まったとされる(竹之内2009)。この集石遺構がつくった時期の人々も何らかの皮鞣しの作業をしていたものと思われる。このように獲物の解体、皮鞣しの作業には手早さと水が必要であり、今回検出された集石遺構の立地から、これらの遺構は獲物の解体等の作業場ではないかと考えられる。県内の同時期・同形態の集石遺構が検出されている鷹野遺跡、牛込A・B遺跡からも今回検出されたものと同タイプの落とし穴状遺構も検出されており(第3表)、立地も川沿いのなだらかな丘陵斜面にある。(浦田)

#### 【参考文献】

- 古門雅高「長崎県の集石遺構と炉穴」『九州縄文時代の集石遺構と炉穴』第13回九州縄文研究会 宮崎大会 2003  
小葉一夫「遺構研究 集石遺構」『縄文時代10』縄文時代文化研究会 1999  
八木澤一郎「南九州の集石遺構」『南九州縄文通信8』南九州縄文研究会 1994  
『鳥獣・里山塾 獣肉の資源利用』鳥取県 2008  
竹之内一昭「原始時代と古代の皮革」『皮革科学55(1)』日本皮革技術協会 2009

### (4) 遺物集積(SU)

#### ① SU01(第37図)

TAK201302調査区④区9066グリッド4層上面で検出した。平面プランは不明瞭であるが、断面観察では長軸長0.5m、深さ0.15m程のすりばち状の掘り込みに、深鉢が直立に近い状態で埋設されていた。底部は見つかっておらず、埋設時に打ち欠いたと考えられる。また、検出時には深鉢の上部から直径0.1~0.3m程度の円礫が集中して見つかっていて、埋設時に礫を乗せた可能性がある。これらの状況から、埋甕と推測される。

深鉢は胴部~頸部でほぼ全周する(第37図4)。頸部で屈曲し、内外面とも条痕調整が残る。縄文時代晩期の粗製深鉢であろう。

#### ② SU03(第38図)

TAK201302調査区⑤区9664グリッド4層上面で検出した。平面プラン・断面の観察では、いずれも掘り込みを確認できなかったが、長軸長0.37m、短軸長0.35m、深さ0.18mの範囲で、直立に近い状態で深鉢を検出した。周囲に円礫が分布するが、検出面自体に礫を多く含むため、配石かどうは判断できなかった。掘り込みは明確でないものの、出土状況から埋甕の可能性が考えられる。

深鉢は胴部~頸部片で、半周ほどが残る(第38図5)。胴部が張り頸部で緩やかに内湾してくびれる。摩滅が著しく、表面は剥落して調整はみえない。縄文時代後期末~晩期の土器であろう。

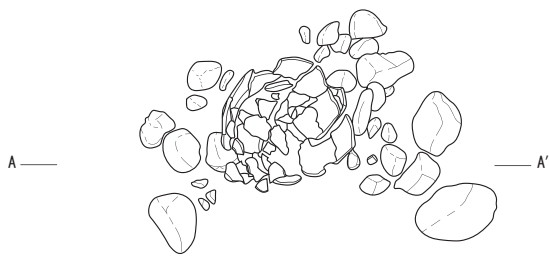
#### ③ SU04(第39図)

TAK201302調査区⑤区9460グリッド4層上面で検出した。重機を用いた下層確認の際に見つかったため、半分以上削平を受けて残存状況は悪い。断面の観察では、直径0.4m強、深さ0.35m程の掘り込みに、直立して深鉢を埋設していたらしい。埋甕であった可能性が高い。

検出した深鉢は、周辺に散乱した土器片を含めて接合したところ、口縁部から底部まで半周ほど復元できた(第39図6)。頸部でくびれて内湾気味に立ち上がり、口縁部が内折する。口縁部に2条、頸部



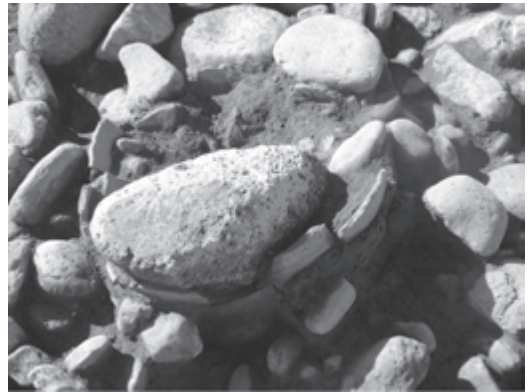
①検出状況



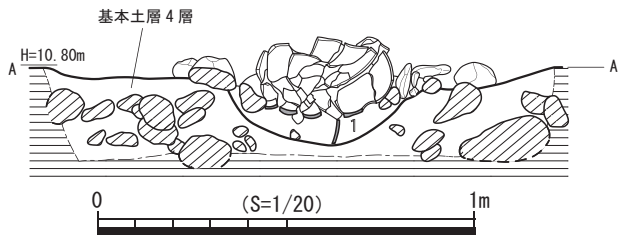
②礫群撤去状況



検出状況写真（西から）



検出状況写真（拡大）（東から）



【土層注記】

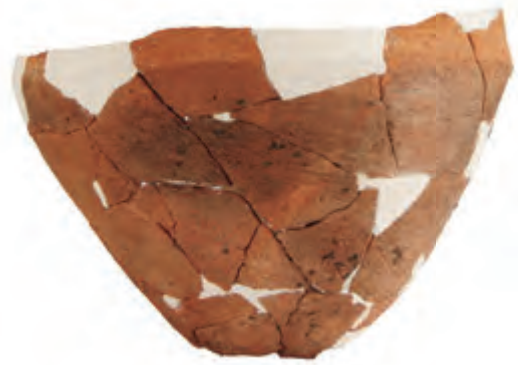
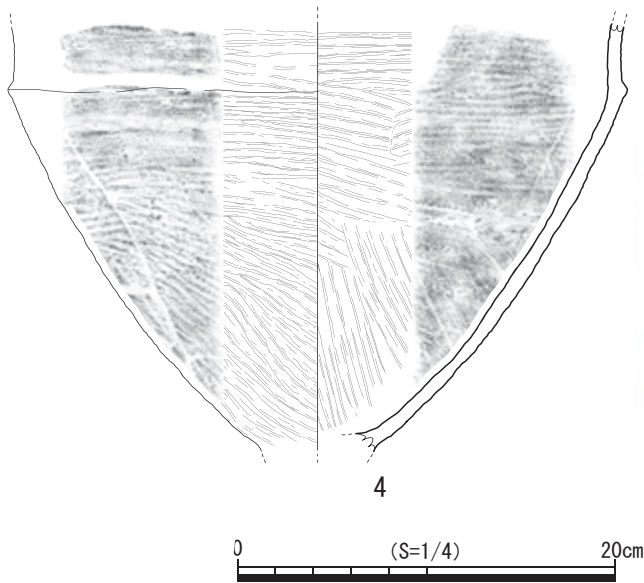
1層：黒褐色粘質土 (10YR3/2)

粘性強い。極細砂粒・細砂粒を5～10%含む。

褐色 (7.5YR4/6) の微粒子を満遍なく含む (30～40%)。

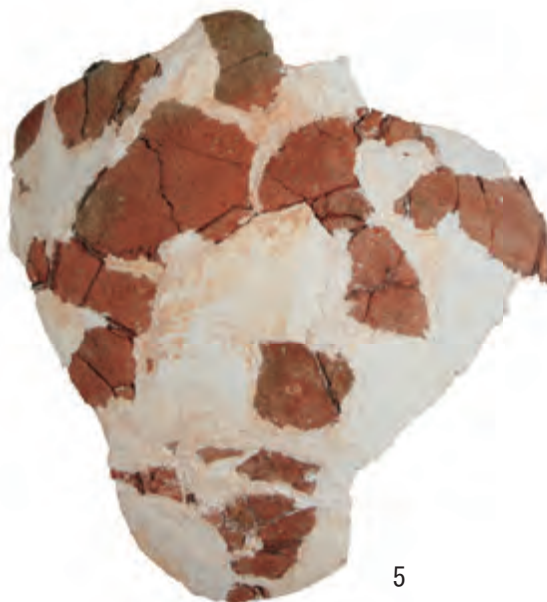
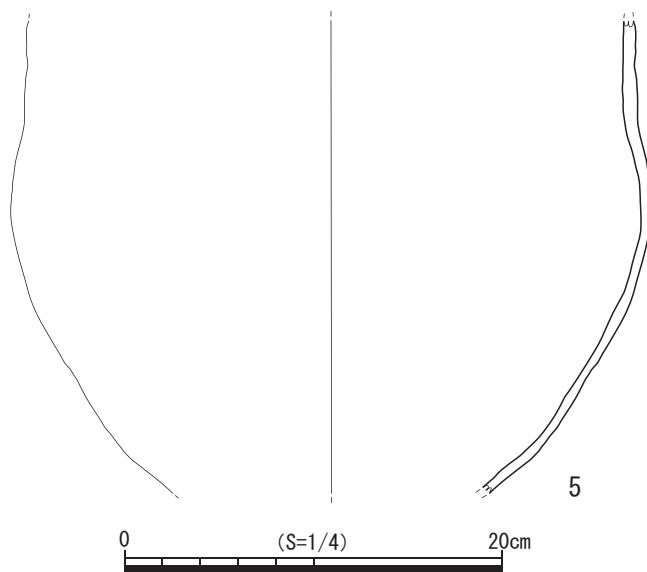
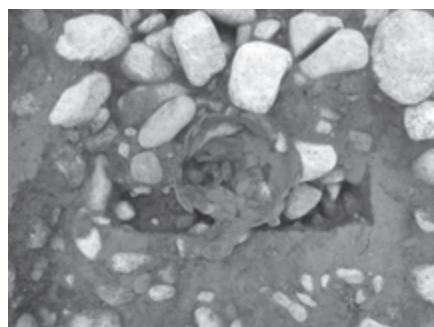
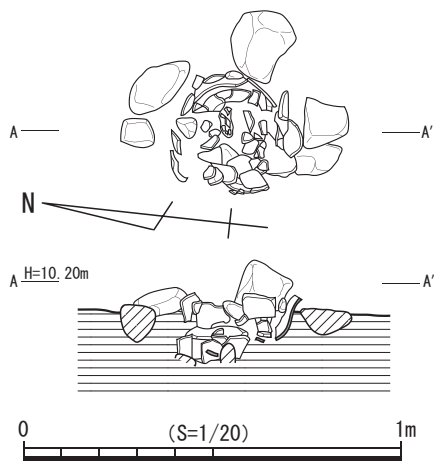
白色粒子を5%、1～5mmの礫を5%、10～50mmの礫を7%含む。

3～5mmのマンガン粒を2%含む。



4

第37図 TAK201302調査区SU01遺構実測図 (S=1/20) 及び出土遺物実測図 (S=1/4)



第38図 TAK201302調査区SU03遺構実測図(S=1/20)及び出土遺物実測図(S=1/4)

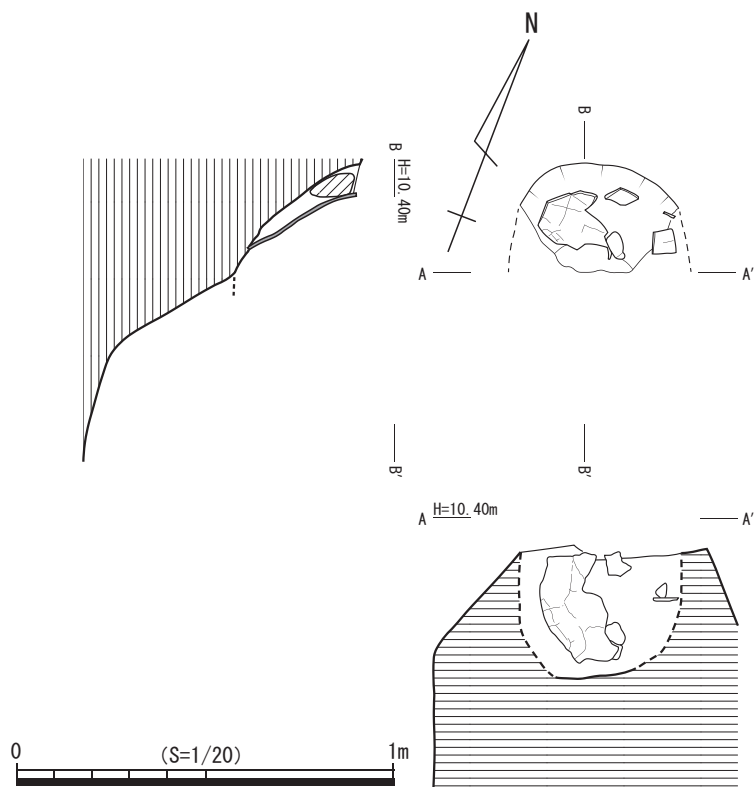
第8表 TAK201302調査区SU01・SU03出土土器観察表

図版番号	出土区グリッド	出土遺構	器種	部位	色調		調整		焼成	胎土	備考
					外面	内面	外面	内面			
4	4区9066	SU01	鉢	胴部	橙(7.5YR6/6)	橙(7.5YR6/8)	条痕	条痕	良好	雲母	
5	5区	SU03	深鉢	胴部	橙(5YR6/8)	明赤褐(5YR5/6)	ナデ?剥落著しい	ナデ?剥落著しい	良好	結晶片岩、雲母	

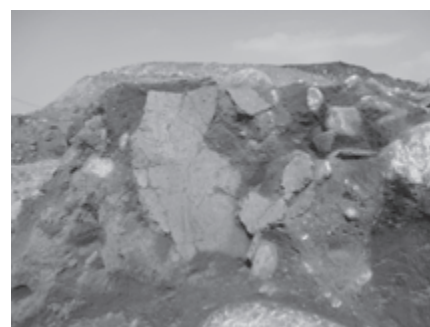
下端に1条凹線をめぐらす。底部はやや上底になる。調整は表裏とも板状工具によるので調整である。縄文時代後期末の土器であろう。

④ SU05(第40図)

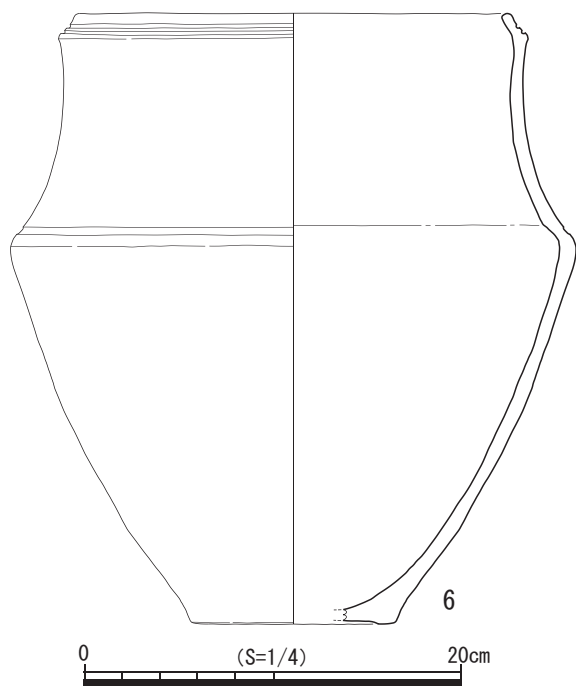
TAK201302調査区⑨区0070グリッド4層上面で検出した。約0.5m四方の範囲に、深鉢片がまとまって出土した。断面の記録がなく人為的な埋設かどうかは確証がない。出土した深鉢片を接合すると、口縁部と頸部から底部まで半周ほど復元できた。口縁部と底部は接合しなかったが、胎土や焼成、色調から同一個体と考えられることから、図上で復元した(第41図7)。直立気味の底部から直線的に胴部が外傾し、胴部中位で内屈し、口縁部が外反する。口縁部には補修孔とみられる穿孔が2箇所確認



検出状況①(南から)



検出状況②(近影)(南から)

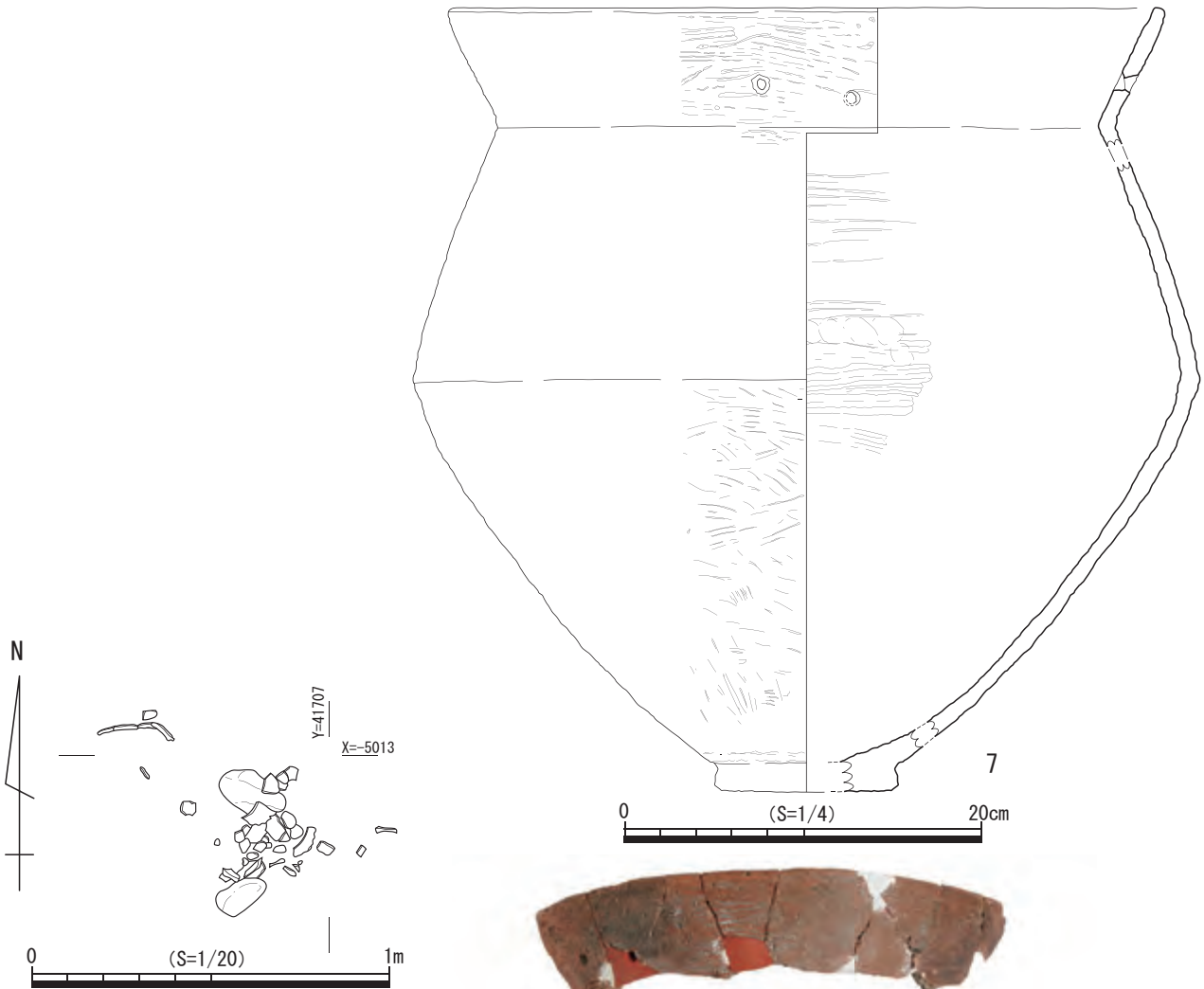


第39図 TAK201302調査区SU04遺構実測図 (S=1/20) 及び出土遺物実測図 (S=1/4)

第9表 TAK201302調査区 SU04出土土器観察表

図版番号	出土地区	出土遺構	器種	部位	色調		調整		焼成	胎土
					外面	内面	外面	内面		
7	9区0070	SU04	深鉢	口縁~底部	橙(5YR6/6)	にぶい赤褐(5YR5/3)	ナデ、擦過	ナデ、条痕	良好	雲母





第40図 TAK201302調査区SU05  
遺物出土状況 (S=1/20)



第41図 TAK201302調査区SU05出土遺物実測図 (S=1/4)

第10表 TAK201302調査区 SU05出土土器観察表

図版 番号	出土地区	出土遺構	器種	部位	色調		調整		焼成	胎土	備考
					外面	内面	外面	内面			
7	9区0070	SU05	深鉢	口縁~底部	橙 (5YR6/6)	にぶい赤褐 (5YR5/3)	ナデ、擦過	ナデ、条痕	良好	雲母	

できる。調整は、外面は板状工具によるなど、内面は胴部～頸部にかけて一部条痕が残るものの、他はなで調整である。晩期前半の古閑式併行期の深鉢である。(中尾)

#### (5) 旧河川 (NR)

TAK201304調査区を南北に流れる旧河川跡の4686グリッドの南部で、黒曜石の剥片・チップが密集して出土した。最初は河川の深みに流れ込んだものと考えたが、土層の観察の結果河川跡の窪みに4層が堆積したものであったため、その出土地点を記録していった。

その結果、黒曜石等の小剥片およびチップが383点、石器等が30点、土器片が6点検出された。時期は、出土した土器から縄文時代早期のものと思われる。出土状況をドットマップにしたのが**第42図**である。石器の分布を器種別、石鏃については基部の形状別に、さらには石材の違いも見てみたがそれぞれに出土状況の平面的・レベル的な違いや特徴を見出すことはできなかった。しかし、これだけの石片が出土していることから、付近で当時石器製作が行われたことを示すものといえる。

##### ① 土器 (第43図)

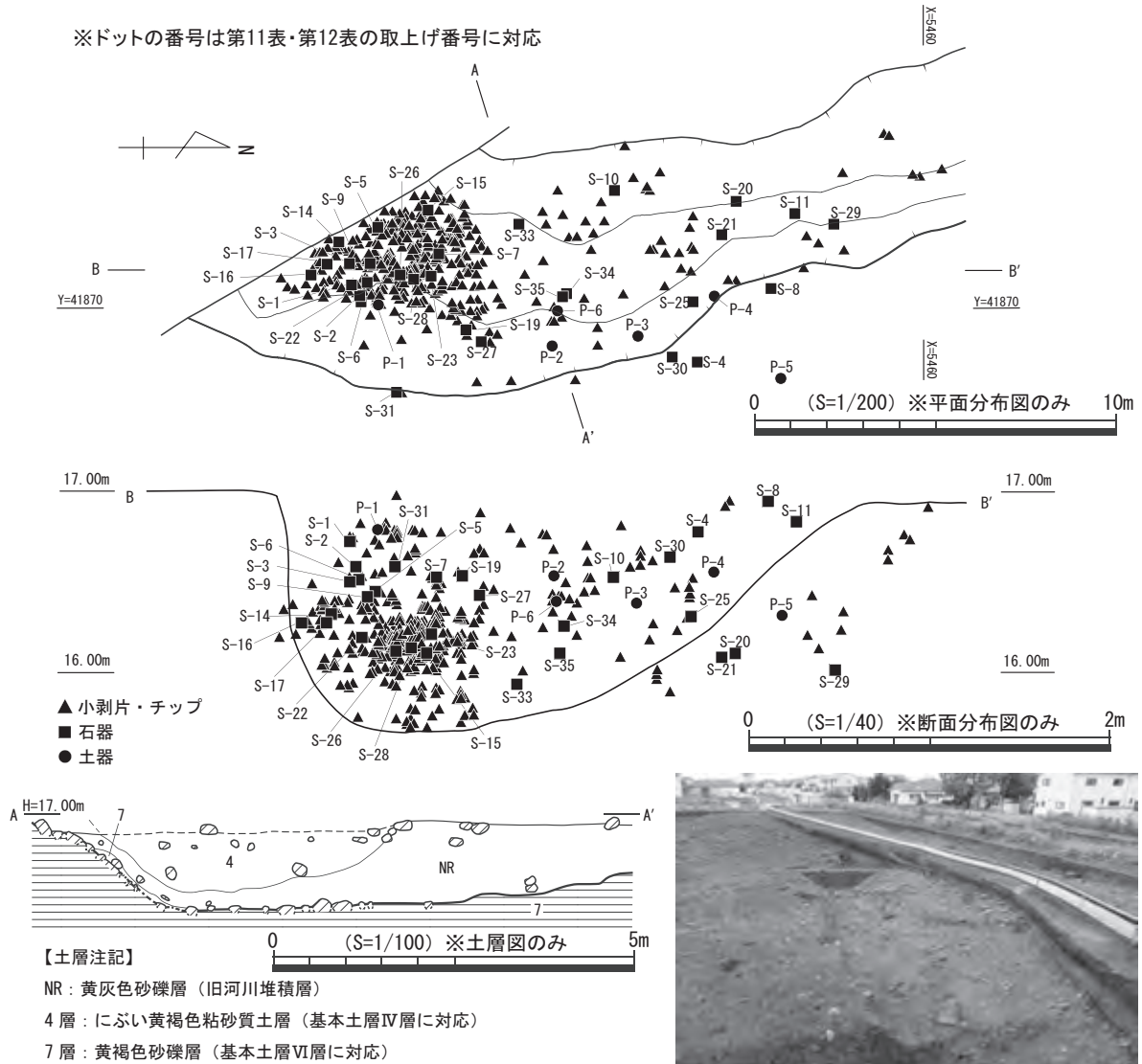
この遺物密集区から6点の土器片が出土したが、内3点は小片で表面の風化も激しく、図化できたのは3点にとどまる。**8**は深鉢の胴部片である。内面はナデ、外面に山形の押型文を縦位に施す。内外面ともやや風化している。**9・10**は外面に3本の沈線と撚糸文を施した痕跡が僅かに残る。内外面とも風化が激しい。塞ノ神式土器と考えられる。同一個体とみられる。

##### ② 石器 (第44図)

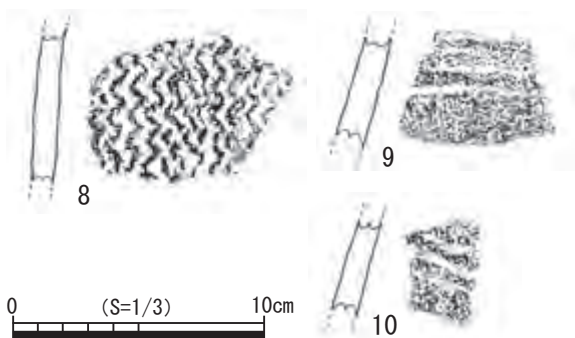
**11**は灰色の黒曜石製の剥片である。使用痕とみられる微細剥離がある。**13・16**はサヌカイトの剥片である。**12・14・15**は黒色の黒曜石製剥片で折断面がある。側縁に微細剥離がみられる。**17**はサヌカイト製の剥片である。スクレイパーの可能性もある。**18**はサヌカイトの大型の剥片で一辺に若干微細剥離がみられる。

**19～34**は石鏃である。石材は**31**がサヌカイト製で他は黒曜石製である。**19**は灰色の黒曜石製で平基である。基部の片脚が少し欠ける。**20**は黒色の黒曜石製で平基の基部である。**21**は白灰色の黒曜石製で凹基である。**22**はやや大型で暗灰色の黒曜石製の挟りが深い凹基である。片脚が欠損している。**23**は黒色の黒曜石製で両脚部が折れた凹基とみられる。**24**は青灰色の黒曜石製で片脚破損の凹基である。**25**は黒色の黒曜石製で片側面と基部が破損している。**26**は白灰色の黒曜石製で凹基の片脚で脚の先端も欠損する。**27**は黒色の黒曜石製の平基で両側面が外側に丸みを帯びる。**28**は小型で暗灰色の黒曜石製の凹基である。**29**は灰色の黒曜石製で凹基の片脚である。**30**は暗灰色の黒曜石製で凹基である。**31**はサヌカイト製で平基である。基部の先端が少し欠ける。**32**は大型で黒色の黒曜石製で基部が破損している。小型の尖頭器の可能性もある。表面にうっすらとにぶい褐色の風化が見られる。**34**は暗灰色の黒曜石製で凹基である。**35**は黒色の黒曜石製のスクレイパーである。一辺が折れている。**36**は黒色の黒曜石製のサイドブレードである。側面も一部破損している。**37**は黒色の黒曜石製のサイドブレードで一部折損する。**38・39**はサヌカイト製の石匙である。どちらも横長剥片を加工して製作している。(浦田)

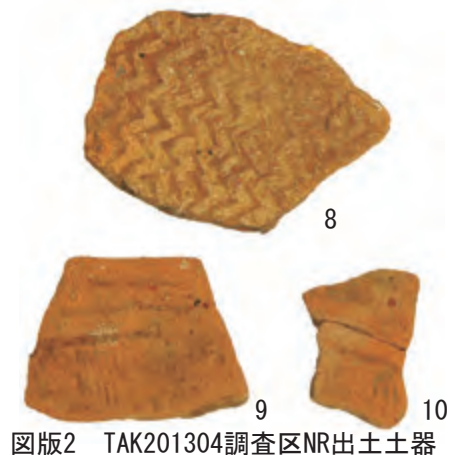
※ドットの番号は第11表・第12表の取上げ番号に対応



第42図 TAK201304調査区NR遺物密集区ドットマップ(S=1/200・S=1/40)及び土層図(S=1/100)



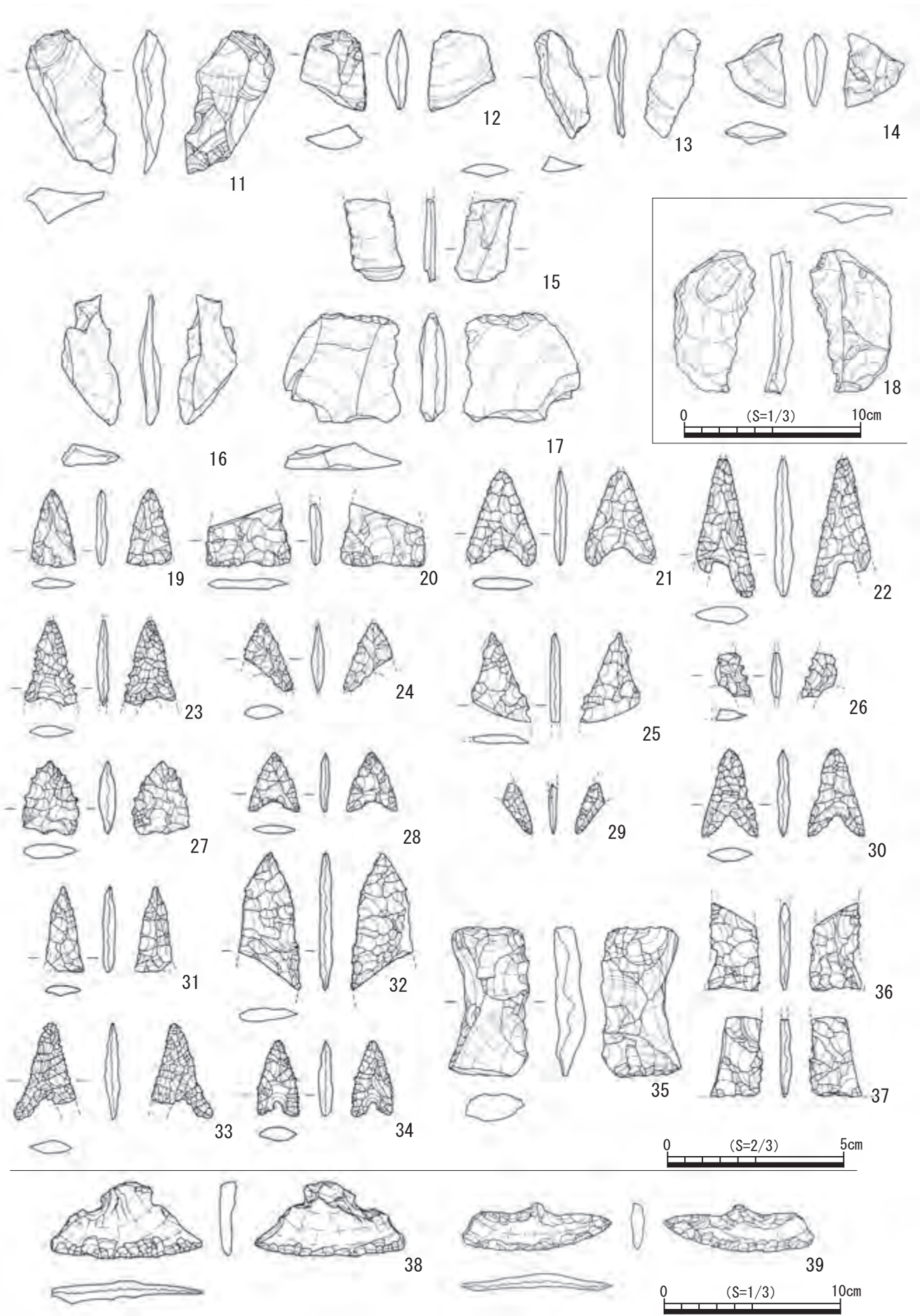
第43図 TAK201304調査区NR出土土器実測図(S=1/3)



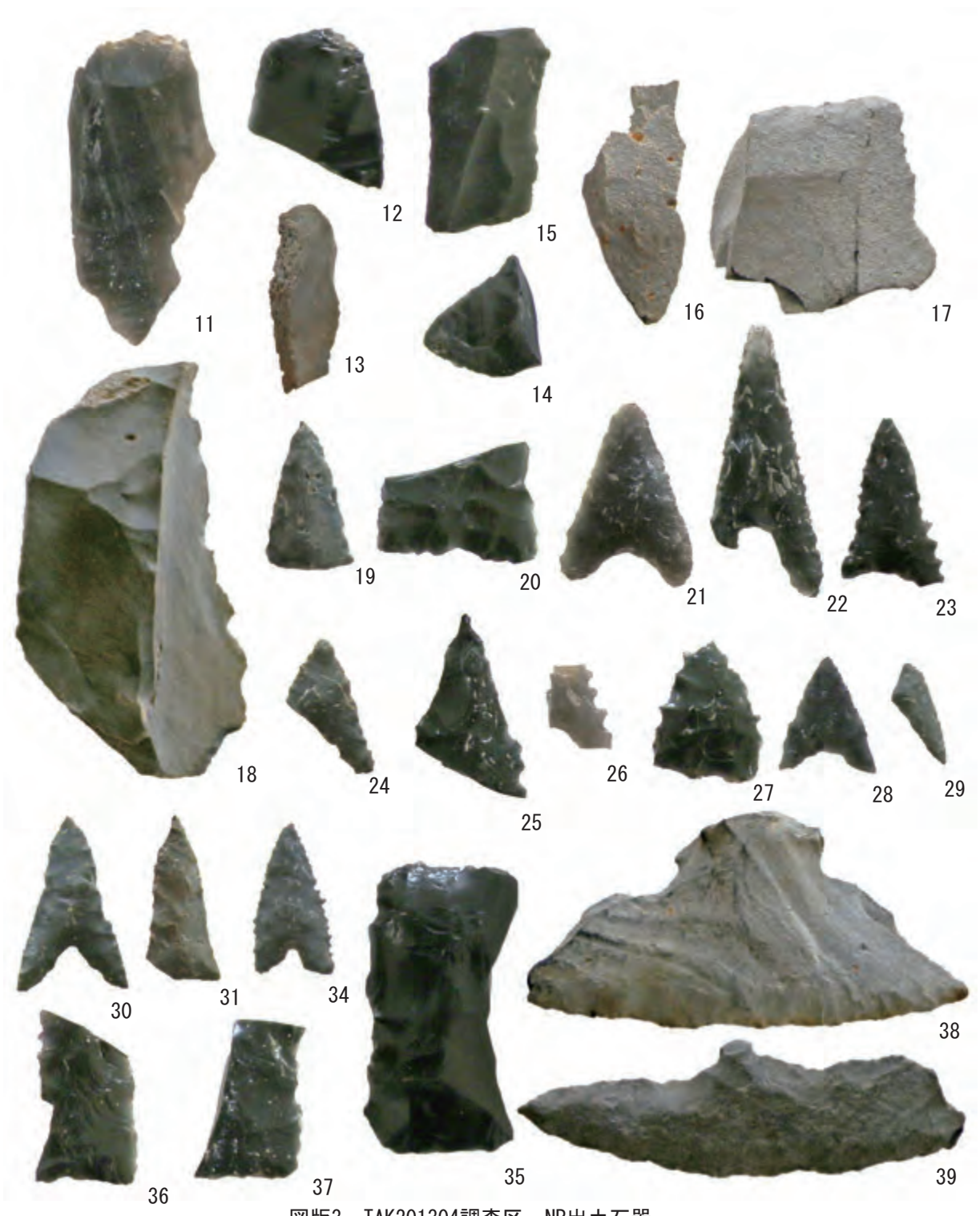
図版2 TAK201304調査区NR出土土器

第11表 TAK201304調査区NR出土土器観察表

図版番号	グリッド	取上げ番号	器種	部位	色調		調整		焼成	胎土	備考
					外面	内面	外面	内面			
8	4686	P-3	深鉢	胴部	橙(7.5YR6/6)	橙(7.5YR6/6)	ナデ	ナデ	ややあまい	角閃石・長石・雲母・石英粒を含む	やや表面風化
9	4686	P-4	深鉢	胴部	橙(5YR6/8)	橙(5YR6/6)	—	—	あまい	角閃石・雲母・石英粒を含む	表面風化
10	4686	P-5	深鉢	胴部	橙(5YR6/8)	橙(5YR6/8)	—	—	あまい	角閃石・雲母粒を含む	表面風化



第44図 TAK201304調査区NR出土石器実測図 (S=2/3・S=1/3)



图版3 TAK201304調査区 NR出土石器

第12表 TAK201304調査区NR出土石器観察表

図版番号	器種	グリッド	取上げ番号	石材	最大長 cm	最大幅 cm	最大厚 cm	重量 g	備考
11	剥片	4686	S-9	黒曜石	4.30	2.00	0.66	4.94	灰色
12	剥片	4686	S-19	黒曜石	(2.55)	(1.95)	0.51	(1.81)	使用痕
13	剥片	4686	S-22	サヌカイト	3.05	1.10	0.32	1.12	
14	剥片	4686	S-17	黒曜石	(1.90)	(1.90)	(0.62)	(1.45)	使用痕
15	剥片	4686	S-8	黒曜石	(2.45)	1.45	0.35	(1.10)	使用痕
16	剥片	4686	S-34	サヌカイト	3.60	1.60	0.50	2.27	
17	剥片	4686	S-25	サヌカイト	3.30	3.05	0.59	7.59	
18	剥片	4686	S-35	サヌカイト	7.90	4.35	1.10	37.73	使用痕
19	石鏃	4686	S-28	黒曜石	2.20	1.20	0.28	0.64	
20	石鏃	4686	S-11	黒曜石	(1.81)	2.30	0.33	(1.45)	
21	石鏃	4686	S-31	黒曜石	(2.70)	2.00	0.35	(1.47)	
22	石鏃	4686	S-21	黒曜石	(3.92)	1.55	0.50	(2.16)	片脚欠損
23	石鏃	4686	S-6	黒曜石	(2.47)	(1.54)	0.30	(0.78)	脚部欠損
24	石鏃	4686	S-2	黒曜石	(2.06)	(1.00)	0.40	(0.50)	片脚欠損
25	石鏃	4686	S-20	黒曜石	(2.70)	(1.82)	0.25	(0.95)	先端部
26	石鏃	4686	S-3	黒曜石	(1.33)	(1.00)	(0.30)	(0.34)	片脚部
27	石鏃	4686	S-1	黒曜石	2.10	1.60	0.45	1.22	
28	石鏃	4686	S-16	黒曜石	1.70	1.47	0.21	0.40	
29	石鏃	4686	S-30	黒曜石	(1.55)	(0.62)	(0.17)	(0.13)	片脚部
30	石鏃	4686	S-10	黒曜石	2.55	1.60	0.36	0.86	
31	石鏃	4686	S-29	サヌカイト	2.50	(1.14)	0.29	(0.69)	片脚欠損
32	石鏃	4686	S-5	黒曜石	(3.89)	(1.30)	0.35	(1.91)	表面風化あり
33	石鏃	3280	S-1	黒曜石	(2.70)	(1.70)	0.40	(1.36)	
34	石鏃	4686	S-4	黒曜石	2.20	1.20	0.40	0.76	
35	スクレイパー	4486	S-14	黒曜石	4.30	2.20	0.76	7.13	
36	サイドブレード	4686	S-32	黒曜石	(2.52)	(1.74)	(0.30)	(1.24)	
37	サイドブレード	4686	S-26	黒曜石	(2.36)	(1.60)	(0.34)	(1.35)	欠損
38	石匙	4686	S-15	サヌカイト	8.70	4.40	0.84	28.81	
39	石匙	4686	S-27	サヌカイト	8.60	2.75	0.65	14.23	

(6) TAK201301調査区の包含層出土遺物

①土器

平成25年度の調査で包含層から出土した全ての縄文土器について、以下の通り分類した。報告の範囲は、刻目突帯文系土器と、これに伴うと考えられる板付式系土器までとし、弥生時代前期までの土器を含む。報告は調査区ごとに行うが、以下の分類に従って記述する。なお、出土量が多くバリエーションが豊富な場合等、調査区によっては必要に応じて細分を行って記述する。

- ・ 第Ⅰ群土器：押型文土器
- ・ 第Ⅱ群土器：塞ノ神式土器
- ・ 第Ⅲ群土器：轟B式土器
- ・ 第Ⅳ群土器：曾畑式土器
- ・ 第Ⅴ群土器：船元式系土器
- ・ 第Ⅵ群土器：坂の下式系土器
- ・ 第Ⅶ群土器：御領式土器及び後期末土器群
- ・ 第Ⅷ群土器：古閑式系土器
- ・ 第Ⅸ群土器：黒川式系土器
- ・ 第Ⅹ群土器：刻目突帯文系土器
- ・ 第Ⅺ群土器：板付式系土器

a. 第Ⅱ群土器(第45図40～44)

40は外反する頸部の破片で、刻目が伴う微隆起文を横・斜め方向に貼り付ける。41も同様の微隆起文を縦方向に貼り付ける。胎土や色調から40と同一個体かもしれない。42・43は外面に沈線文があるもの。42は口唇部に浅い刻みがあり、水平および斜め方向の浅い沈線がある。43は屈曲部に3本単位の沈線を平行に施文し、同じく3本単位で円形の文様を描く。44は頸部が内傾する壺形土器で、外面にごく浅い刻みを施した微隆起文が5条確認できる。これらの土器は壺形土器が伴う点や微隆起文の特徴から、高橋信武分類の塞ノ神Ⅰ式古段階に該当する(高橋1997)。

b. 第Ⅲ群土器(第45図47)

47は外面にミミズバレ状の微隆起文を横方向に展開する。内面に条痕を残す。

c. 第Ⅳ群土器(第45図45～46)

45～46は外面に沈線文をもつもの。45は胎土に滑石を多く含み、縦横に沈線で施文する。46は横方向の沈線を主文様とするが、地文に浅い条痕が確認できる。

d. 第Ⅴ群土器(第45図48・49)

48は胴部上半の土器片で、内面にわずかに屈曲部の稜が残る。撚りの細かい撚糸もしくは条線を地文とし、円形刺突文を縦位に施文する。49は胴部片で、撚りの荒い縄文を縦方向に施文し、円形刺突文を縦位に施す。円形刺突文が単独で施文される特徴から、船元Ⅱ式であろう。

e. 第Ⅵ群土器(第45図50～52)

いずれも口縁部片で胎土に滑石を含むが、50・52は特に多く含む。50・51は口唇部を大きく刻み、外面に大ぶりの円形刺突文を帯状に施文する。50には円形刺突列の下を沈線で区画し、さらに胴部にも刺突文・沈線文が確認できる。52は口唇部に浅く幅広の刻みを入れるのみで、他は無文である。

f. 第Ⅷ群土器(第46図55・56)

いずれも浅鉢口縁部で、頸部が小さく屈曲して口縁部が短く外反する。55は緩やかな波状口縁で波頂部に刻みがある。また、口縁部内面に段を持つが、56は口縁部が短小化して段もなくなる。いずれも表裏両面を横方向のヘラミガキで調整する。

g. 第Ⅸ群土器(第46図53～54・57～58)

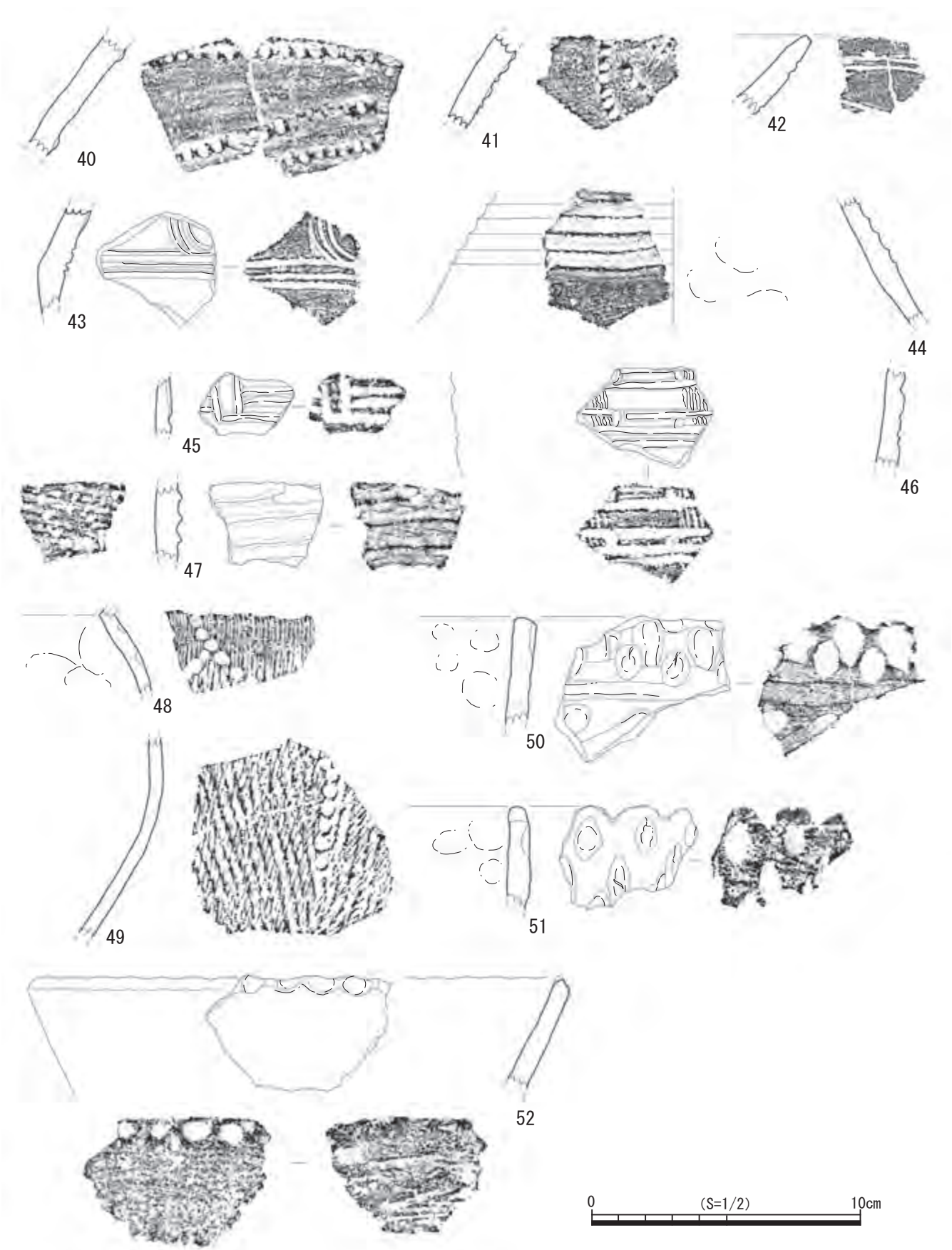
深鉢(53)・鉢(54)・浅鉢(57～58)からなる。53は外面に屈曲部の稜をとどめ、外面は条痕調整であるが、内面は横方向のヘラミガキで丁寧に調整する。54は薄手の鉢で口縁部に鱗状突起を持つ。57・58は胴部でくびれて頸部が大きく外反する長頸の浅鉢である。内外面ともヘラミガキによる丁寧な調整を施す。(中尾)

## ②石器

包含層出土石器は、弥生時代の石器を含んでいる可能性があるが、剥片石器や礫石器の多くは形態や技術的特徴から区別できないため、大陸系磨製石器群を除く石器群の多くは、以下縄文時代の石器の項で報告する。

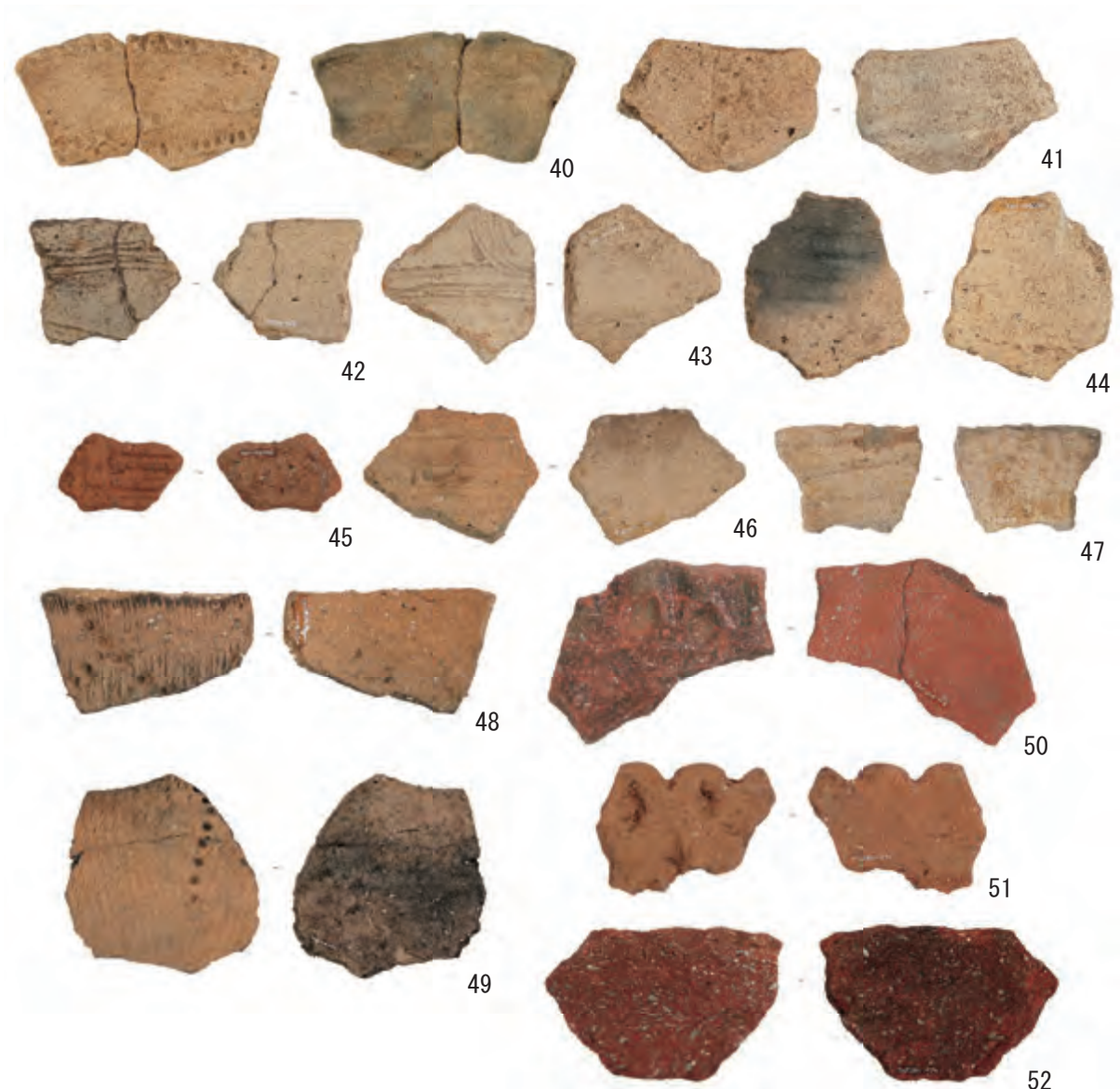
a. 石鏃(第47図59～84)

石鏃は、吉留秀敏の研究に倣って、体部側縁の形態を重視して、A類：直線的なもの(第47図59～69)、B類：外湾するもの(70～75)、C類：屈曲点を持つもの(76～80)、D類：内湾するもの(81～84)に大



第45図 TAK201301調査区の縄文時代包含層出土土器実測図①(S=1/2)





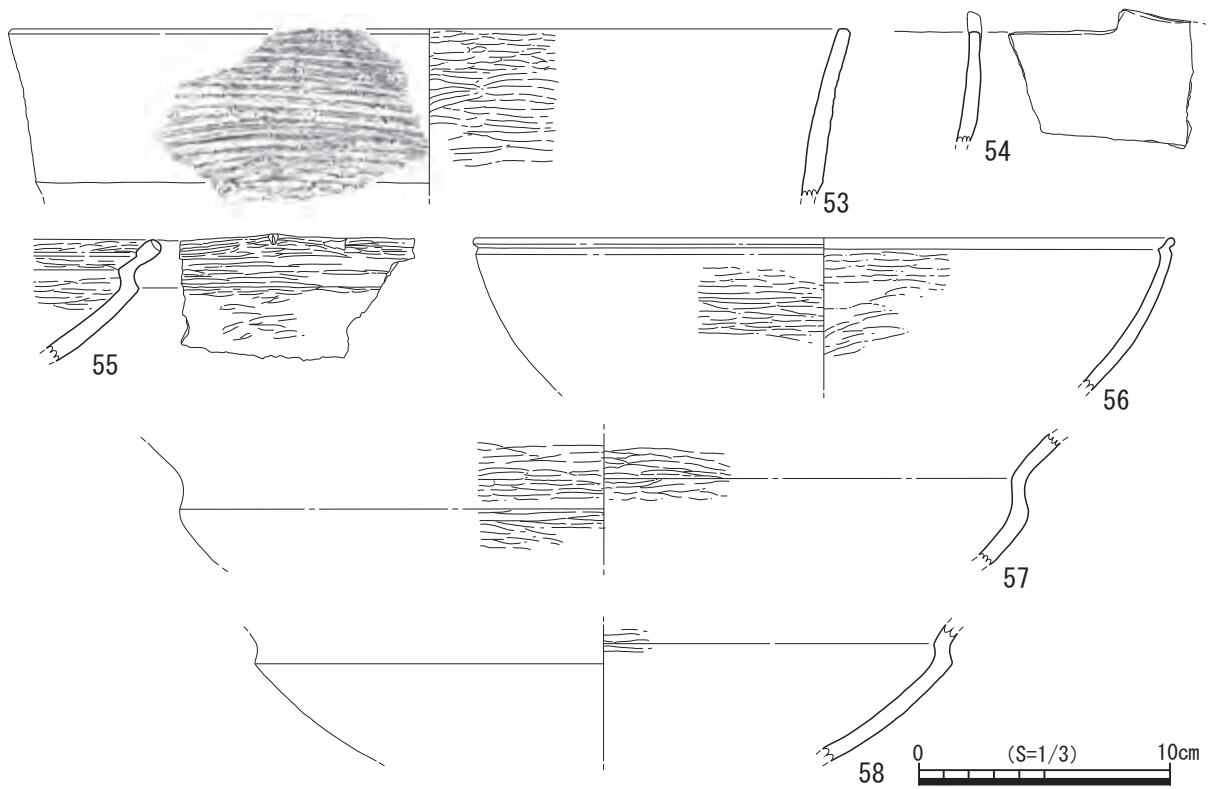
図版4 TAK201301調査区の縄文時代包含層出土土器①

別した(吉留2003)。素材は黒曜石が主体で、安山岩製は84のみである。

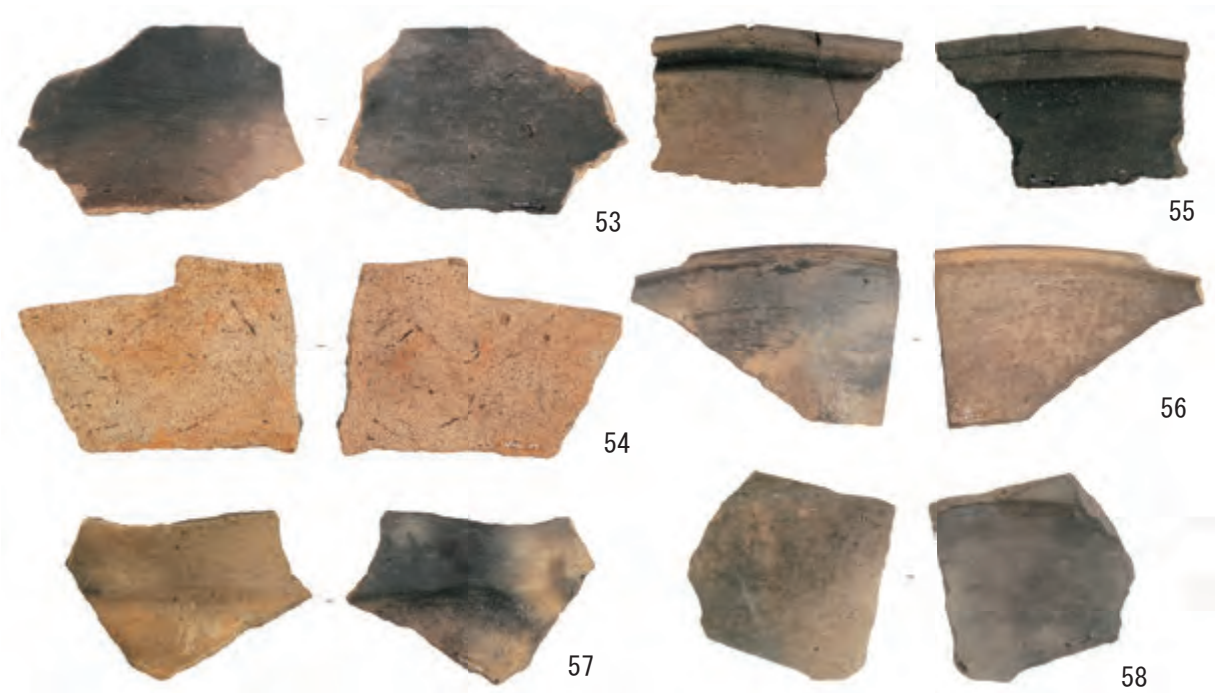
A類のうち、59は基部の挟りが浅いが、他は深く挟る。いずれも両側縁から丁寧な調整を加え、断面菱形もしくはレンズ状に整えている。59は厚手の剥片を素材とし、側縁から丁寧な調整を加えて体部中央に稜が通る。62は側縁の一辺を鋸歯状に加工する。66は局部磨製石鏃で非常に薄く仕上げる。複数の研磨面からなり、低い稜が部分的に残る。

B類は円基(70)と凹基(71~75)があり、凹基鏃の中でも挟りが浅いもの(71)と深い一群(72~75)がある。70は、素材の主要剥離面と礫面を残す。厚手の横長剥片を素材とし、縁辺から二次加工を加えるが、打点側を特に入念に調整する。73・74は非常に小型だが、調整は丁寧である。75は素材剥片の主要剥離面が残り、側面観もポジ面の丸みを残す。薄手の横長剥片を素材とし、打面を側縁に配置して入念に調整を加えている。

C類はいずれも凹基鏃で、挟りも深い。76は先端部が欠損するものの、先端部付近に屈曲部を有す



第46図 TAK201301調査区の縄文時代包含層出土土器実測図② (S=1/3)



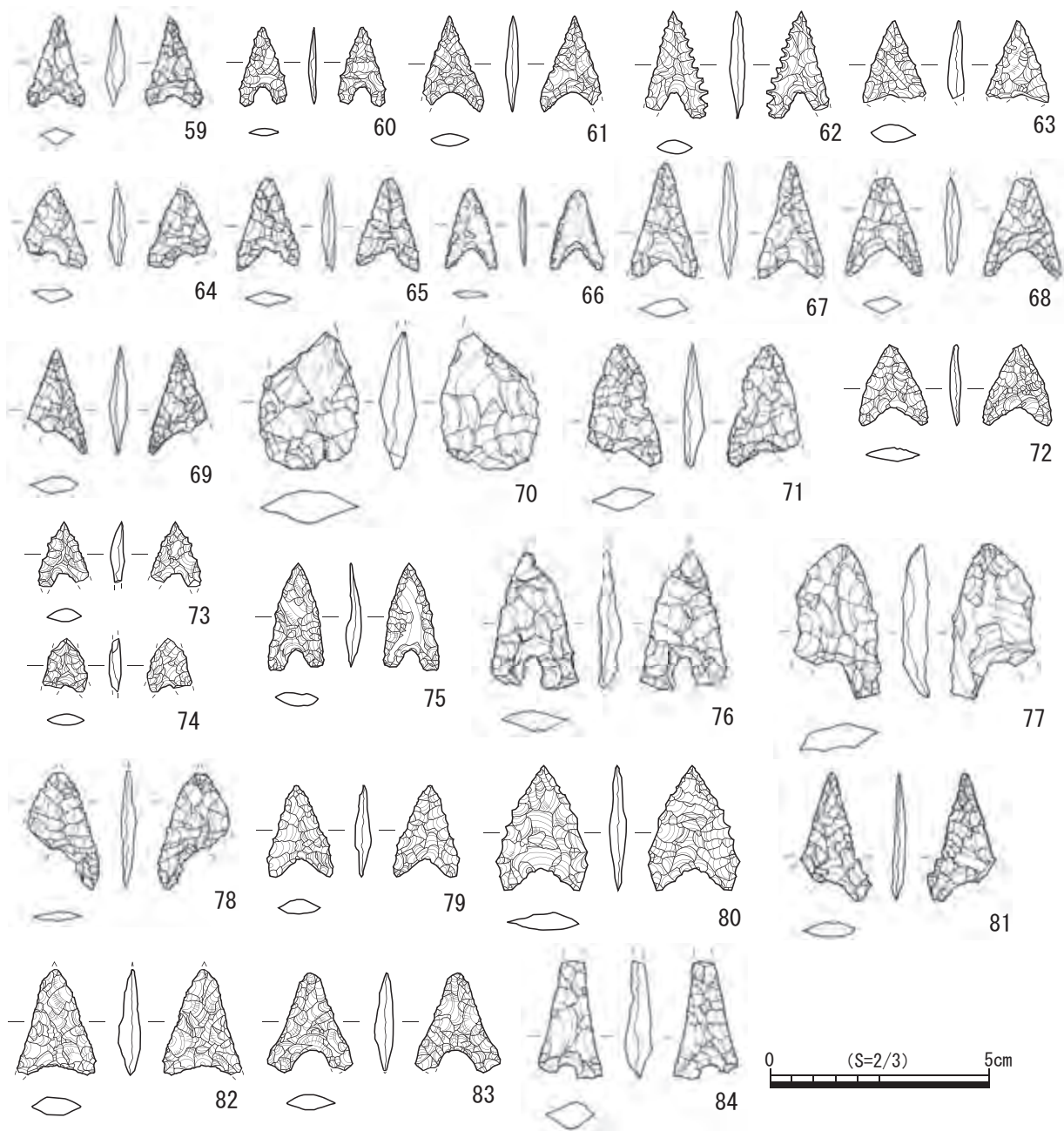
図版5 TAK201301調査区の縄文時代包含層出土土器②

る。77も同様であるが、素材剥片の背面が残る。厚手の横長剥片を素材とし、主要剥離面に調整剥離を加えて整形するが、背面は先端部や基部にわずかに調整を加えるのみである。78~80は基部付近に屈曲点を持つ。

D類は挟りの浅いものが多い。81は基部側の側縁が内湾しており、脚部が張り出す形態となる。84は長身の石鏃。やや厚手で両側縁から調整を加えて中央に鏑が通り、断面菱形となる。

第13表 TAK201301調査区包含層出土土器観察表

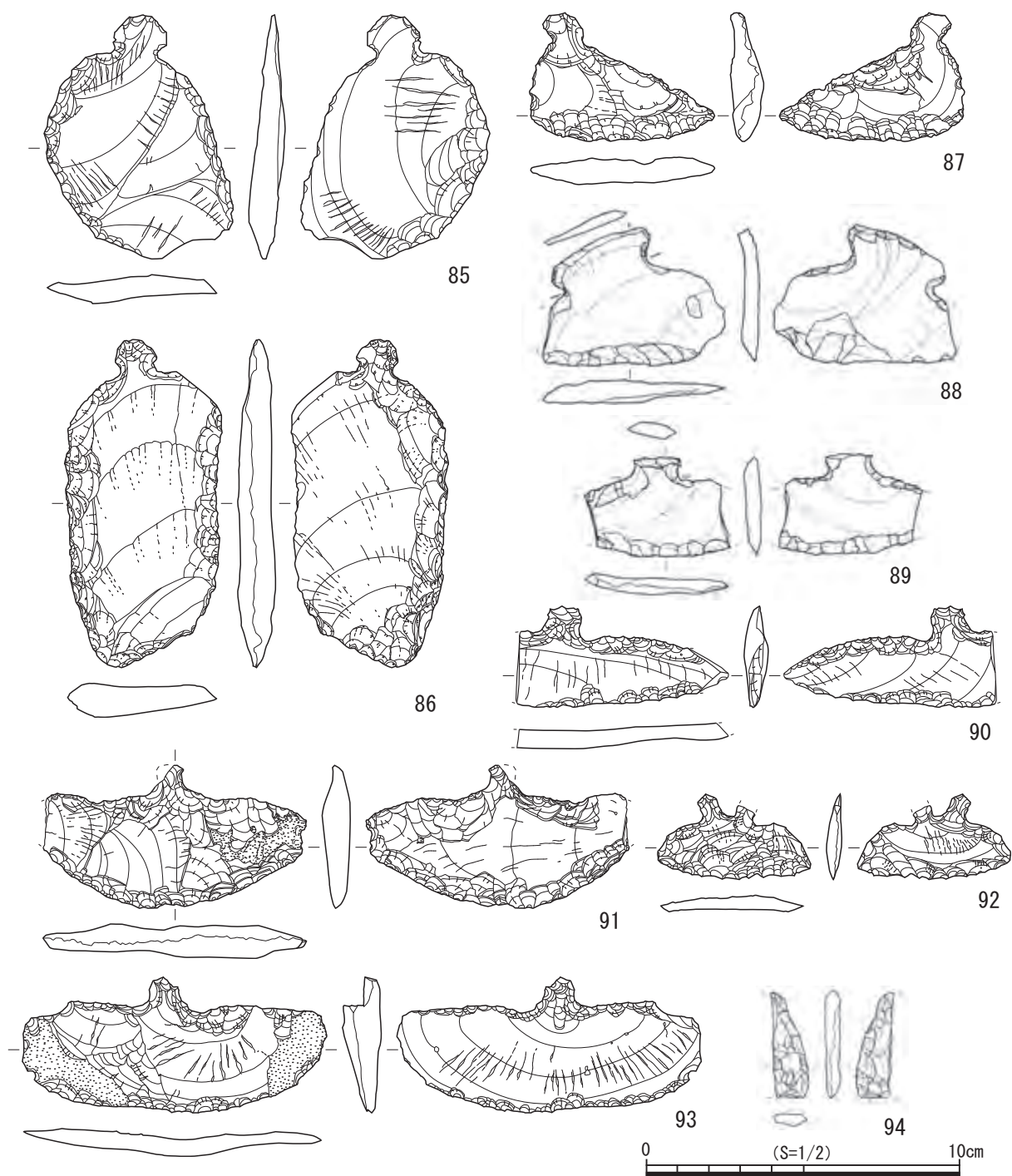
図版番号	出土区グリッド	層位	器種	部位	色調		調整		焼成	胎土	備考
					外面	内面	外面	内面			
40	E区 No. 22874	4層	深鉢	頸部	にぶい黄橙(10YR7/4)	浅黄(2.5Y7/4)	ナデ	ナデ	良好	角閃石、石英	
41	E-5区		深鉢	頸部か	にぶい黄橙(10YR7/4)	浅黄(2.5Y7/4)	ナデ	ヨコナデ	良好	角閃石、石英	
42	B区2880No. 136		深鉢	口縁部	浅黄(2.5Y7/3)	淡黄(2.5Y8/4)	ナデ	ナデ	良好	雲母、角閃石、砂粒	
43	E区2676	2層	深鉢	胴~頸部	にぶい黄橙(10YR7/2)	にぶい黄橙(10YR7/4)	沈線、ナデ	ナデ	良好	雲母、砂粒	
44	A区1676		壺形土器	頸部	浅黄(2.5Y7/4)	浅黄(2.5Y7/4)	ナデ	ユビオサエ、ナデ	良好	雲母、角閃石、砂粒	
45	E区2678	4層	深鉢	胴部	橙(5YR6/6)	にぶい赤褐(5YR5/4)	ナデ	ナデ	良好	滑石	
46	B区2680No. 18	4層	不明		橙(7.5YR6/6)	にぶい黄橙(10YR7/4)	ナデ	ナデ	良好	雲母、角閃石、砂粒	
47	E区2678	4層上面	深鉢	胴部片	浅黄(2.5Y7/4)	灰黄(2.5Y7/2)	ナデ	条痕→ナデ	良好	雲母、角閃石、砂粒	
48	B区2480	3層(4層境目か)	不明		にぶい黄橙(10YR6/4)	橙(7.5YR6/6)	撫系文	ユビオサエ	良好	石英、長石	
49	B区 No. 32		深鉢	胴部	明黄褐(10YR6/6)	暗灰黄(2.5Y4/2)	撫系文、円形刺突文	ナデ	良好	石英、長石、雲母	
50	D区2274カクラン		深鉢	口縁部	赤褐(2.5YR4/6)	明赤褐(2.5YR5/6)	ナデ	ユビオサエ	良好	滑石	
51	D区2474		深鉢	口縁部	橙(5YR6/6)	にぶい橙(5YR6/4)	ナデ	ユビオサエ	良好	雲母、角閃石、砂粒	
52	B区 No. 52		深鉢	口縁部	赤褐(10R4/3)	にぶい赤褐(2.5YR4/4)	ナデ	条痕	良好	滑石	
53	B区 No. 23		深鉢	口縁部	黒褐(7.5YR3/1)	黒褐(7.5YR3/1)	条痕	ヘラミガキ	良好	雲母、角閃石、砂粒	
54	B区2278	3層	鉢	口縁部	にぶい黄橙(10YR7/4)	にぶい橙(7.5YR7/4)	ナデ	ナデ	良好	雲母、角閃石、砂粒	
55	B区2480	3層(4層境目)	浅鉢	口縁部	にぶい黄橙(10YR5/3)	褐灰(10YR4/1)	ヘラミガキ→ナデ	ヘラミガキ→ナデ	良好	雲母、角閃石、砂粒	
56	B区 No. 27		浅鉢	口縁~胴部	褐灰(10YR5/1)	にぶい黄橙(10YR7/4)	ヘラミガキ	ヘラミガキ	良好	雲母、角閃石、砂粒	
57	B区 No. 76		長頸浅鉢	屈曲部	にぶい黄橙(10YR7/4)	浅黄(2.5Y7/4)	ヘラミガキ	ヘラミガキ	良好	雲母、角閃石、砂粒	
58	A区1678	3層	長頸浅鉢	屈曲部	灰黄褐(10YR4/2)	褐灰(10YR4/1)	ヘラミガキ→ナデ	ヘラミガキ→ナデ	良好	雲母、角閃石、砂粒	



第47図 TAK201301調査区の縄文時代包含層出土石器実測図①(S=2/3)



図版6 TAK201301調査区の縄文時代包含層出土石器①



第48図 TAK201301調査区の縄文時代包含層出土石器実測図②(S=1/2)

b. 石匙(第48図)

縦型(85~86)と横型(87~94)がある。安山岩製が主体で、黒曜石製は94のみである。いずれも素材剥片の主要剥離面及び背面を残し、縁辺に調整を加えて仕上げている。85は横長剥片の側縁に小さなつまみを作り、先端側を厚手にする。86は縦長剥片の先端側に小さなつまみをつけ、打面側を先端部とし、先端側が厚手になる。87・88はつまみの位置が左右に偏るもので、87は小型の、88はやや幅広のつまみがつく。いずれも素材剥片の縁辺部を刃部とする。89~93は中央につまみがつくもので、刃部が直線的なもの(89・90・92)と湾曲するもの(91・93)がある。いずれもつまみは小さい。素材剥片



図版7 TAK201301調査区の縄文時代包含層出土石器②

の縁辺や側縁を刃部にしたものが多く、つまみ側に比べて刃部が薄くなり、鋭い刃部となる。91・93は素材剥片の背面に平坦な礫面を残す。92はつまみが2箇所つく小型品である。94は褐灰色で光沢の少ない黒曜石製で、刃部が平坦な横型石匙の側縁部と考えられる。折損しているが、折損面から調整剥離を入念に加えている。(中尾)

【参考文献】

高橋信武1997「平椀式土器と塞ノ神式土器の編年」『先史学・考古学論究2』龍田考古会

吉留秀敏2003「弥生時代開始期の石器技術—石鏃について」『立命館大学考古学論集Ⅲ 家根祥多さん追悼論集』立命館大学考古学論集刊行会

第14表 TAK201301調査区包含層出土石器観察表

図版番号	器種	出土区グリッド	層位	石材	最大長(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	重量(g)	備考
59	石鉢	B区2680	3層	黒曜石(褐灰色)	20.5	13.0	4.0	0.6	
60	石鉢	B区-692880	3層	黒曜石	18.0	11.0	2.0	0.3	
61	石鉢	E区-32674	4層	黒曜石	22.0	13.5	3.0	0.5	
62	石鉢	E区2676	4層	黒曜石	24.5	14.5	3.5	(0.7)	
63	石鉢	D区1875	2層	黒曜石	(18.5)	14.0	4.0	(0.8)	
64	石鉢		SD11-27	黒曜石(黒灰色、透明、ゴマシオ)	(17.5)	(14.0)	4.0	(0.6)	
65	石鉢	B区2880	3層 No. 80	黒曜石(くすんだ褐灰色)	21.0	14.0	3.0	0.5	
66	石鉢	B区2880	3層(4層上面)	黒曜石(黒色)	18.0	12.0	1.5	0.3	
67	石鉢	B区2680	4層 No. 165	黒曜石(灰褐色)	(26.0)	15.0	4.0	(0.9)	
68	石鉢	B区2880	4層 No. 127	黒曜石(褐灰色)	(22.0)	17.5	3.5	(0.8)	
69	石鉢	B区2680	3層 No. 7	黒曜石(漆黒色)	23.5	(13.5)	4.0	(0.7)	
70	石鉢	B区2680	4層 No. 162	黒曜石(褐灰色)	(31.0)	22.0	8.5	(4.5)	
71	石鉢	D区2272	2層(落ち込み部)	黒曜石(漆黒色、透明)	27.5	(17.0)	5.0	(1.7)	
72	石鉢	E区-32674	4層	黒曜石	18.0	15.5	3.0	0.6	
73	石鉢	D区2474	3層	黒曜石	(14.5)	(11.0)	3.5	(0.4)	
74	石鉢	B区-402680	3層	黒曜石	(12.0)	(10.0)	2.5	(0.3)	
75	石鉢	A区1476	Ⅲ~Ⅳ層境	黒曜石	24.0	13.5	3.5	0.8	
76	石鉢	B区2480	4層 No. 109	黒曜石(褐灰色)	(31.5)	19.5	4.5	(2.1)	
77	石鉢	B区2480	3層	黒曜石	35.0	19.5	6.0	(3.2)	
78	石鉢	D区2272	2層(落ち込み部)	黒曜石(灰白色、透明)	(26.5)	(16.0)	3.5	(0.9)	
79	石鉢	A区1476	3層	黒曜石	20.5	15.0	35.0	0.7	
80	石鉢	B区-1492880	4層	黒曜石	28.0	20.5	4.0	1.7	
81	石鉢	B区2882	4層 No. 134	黒曜石(漆黒色)	(29.0)	(15.5)	3.0	(0.7)	
82	石鉢	C区-13082	4層上面	黒曜石	(24.0)	18.0	5.0	(1.5)	
83	石鉢	B区-202280	3層	黒曜石	22.5	19.0	4.5	(1.0)	
84	石鉢	B区2880	4層 No. 126	安山岩	(27.0)	15.0	6.0	(1.7)	
85	横型石匙	B区-62880	3層(4層境)	安山岩?玄武岩?	76.9	60.0	7.1	32.7	
86	縦型石匙	B区2278	3層	安山岩	103.8	48.9	11.4	63.3	
87	横型石匙	B区-382682	3層	安山岩?	39.4	58.4	9.8	15.4	
88	石匙	B区2880	3層	安山岩	43.5	(58.0)	7.0	(13.8)	
89	石匙	B区2880	4層 No. 133	安山岩	31.5	(46.0)	7.0	(8.8)	
90	横型石匙	B区-542882	3層下部	ハリ質安山岩	31.7	(67.2)	7.5	(12.1)	
91	横型石匙	B区-1112882	4層(礫)	安山岩	45.5	(83.5)	11.0	(33.0)	
92	横型石匙	B区-622680	3層	ハリ質安山岩	26.7	48.5	4.8	4.9	
93	横型石匙	A区1478	2層	ハリ質安山岩	43.3	96.6	5.8	23.3	
94	石匙	B区2680	3層(下部)	黒曜石(褐灰色)	(33.0)	(12.0)	(4.0)	(1.8)	石匙片 再利用あり

(7) TAK201302調査区の包含層出土遺物

①土器

a. 第Ⅵ群土器(第49図95・図版8)

砲弾形の深鉢である。口縁部~胴部にかけて半周ほど残る。胎土に滑石を多く含み、表裏面とも独特の光沢を帯びる。口縁部に大ぶりの刻みをもつ山形の突起を有し、口縁部外面に指頭により大ぶりで浅い凹点文を横方向に連続施文する。凹点文は口縁部上端から3列連続するが、施文後に胴部を中心にケズリ調整を行って、凹点文3列目の一部も横方向のケズリ調整で消えている。内面は丁寧な調整である。

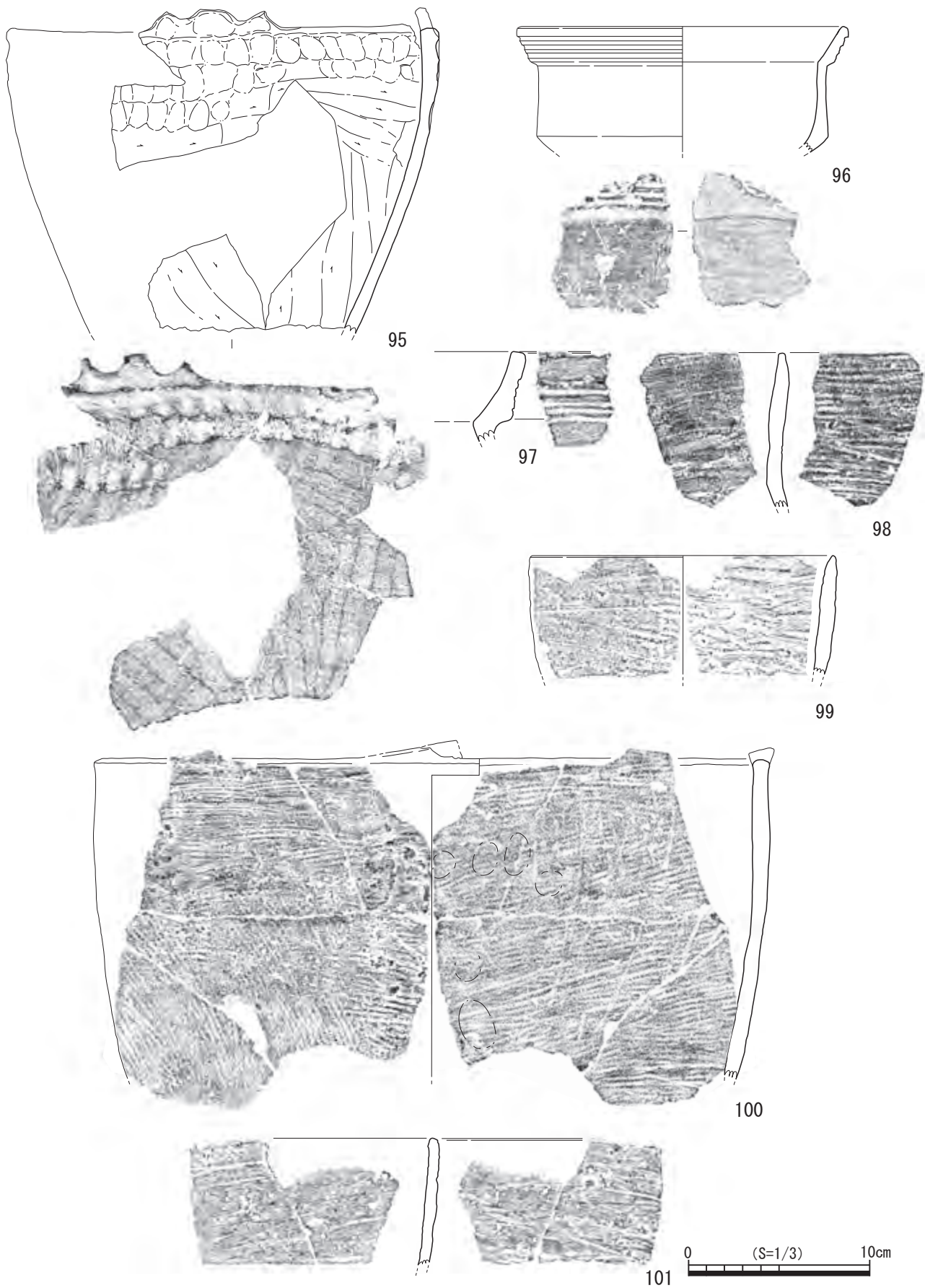
b. 第Ⅷ群土器・第Ⅸ群土器・第Ⅹ群土器(第49図96~第52図、図版8~図版11)

縄文時代晩期~弥生時代早期の土器を一括掲載した。深鉢と浅鉢に分けて記述する。

深鉢(第49図96~第51図120・図版8~図版10)

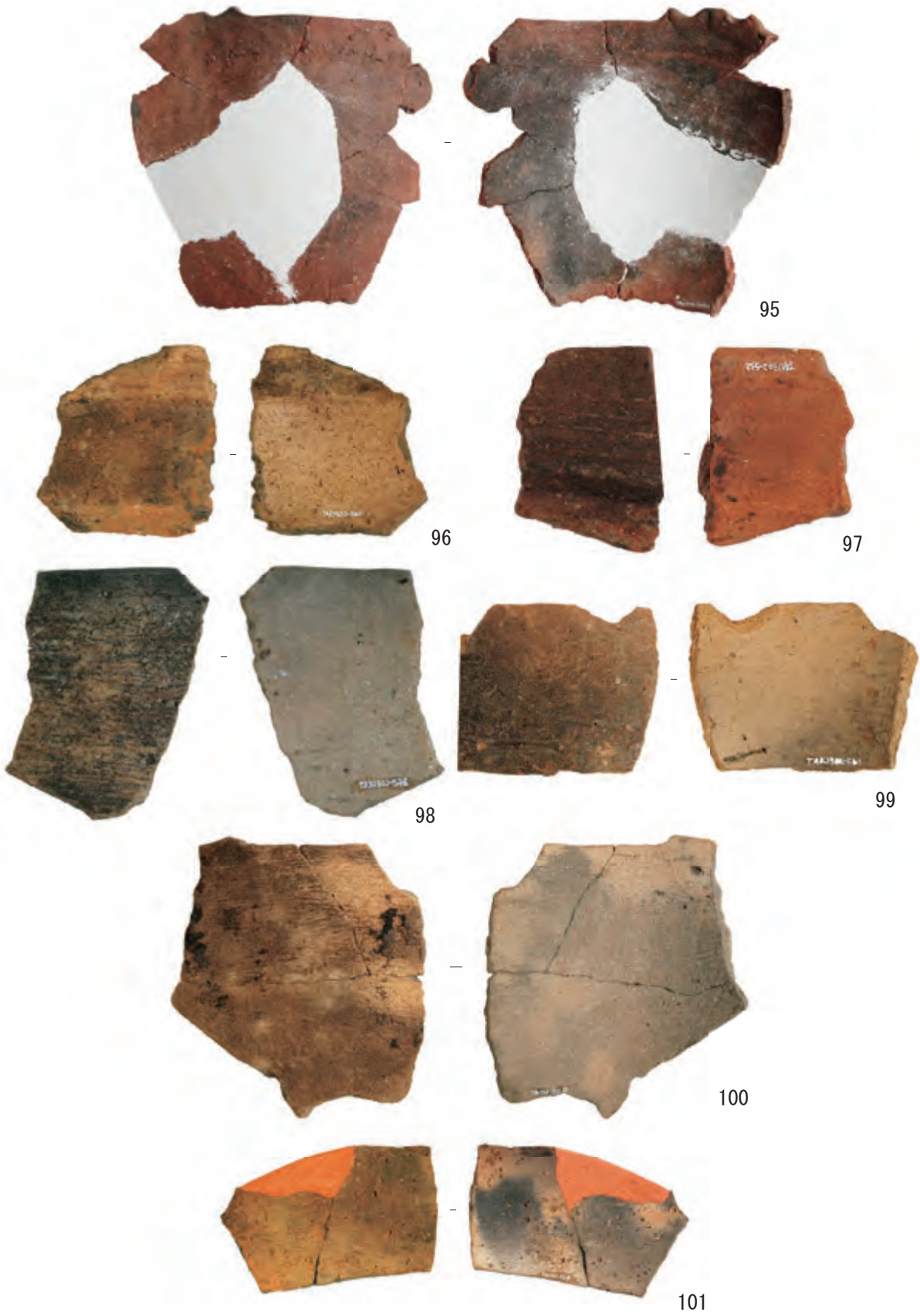
**第49図96・97**は第Ⅷ群土器の深鉢口縁部である。**96**は小型であるが胴部から屈曲して直立気味に頸部が立ち上がり、口縁部はさらに屈曲して外反する。口縁部外面には、浅い段状の平行沈線が3条確認できる。**97**はやや大ぶりの破片だが、口縁部はやや丸みを帯びて内湾気味である。口縁部下端が肥厚して外側に張り出す。口縁部外面に細い平行沈線を4条施文する。

**98~101**は第Ⅸ群土器のうち、砲弾形の深鉢である。**98**は口縁部片で、胴部にかけて緩やかに内湾する。**99**は小型深鉢で、口縁部端部はやや尖り気味、外面には条痕が残る。**100**は大型深鉢で、口縁部には鱗状突起がつく。口縁部から8.5cmほど下位に粘土接合痕があり、それより上位では横位の条痕、下位では斜位の条痕となる。内面も条痕調整だが、一部に指頭圧痕が残る。**101**は内外面とも繊維質の工具による調整で、表裏面にはやや扁平な空隙が多く見られる。

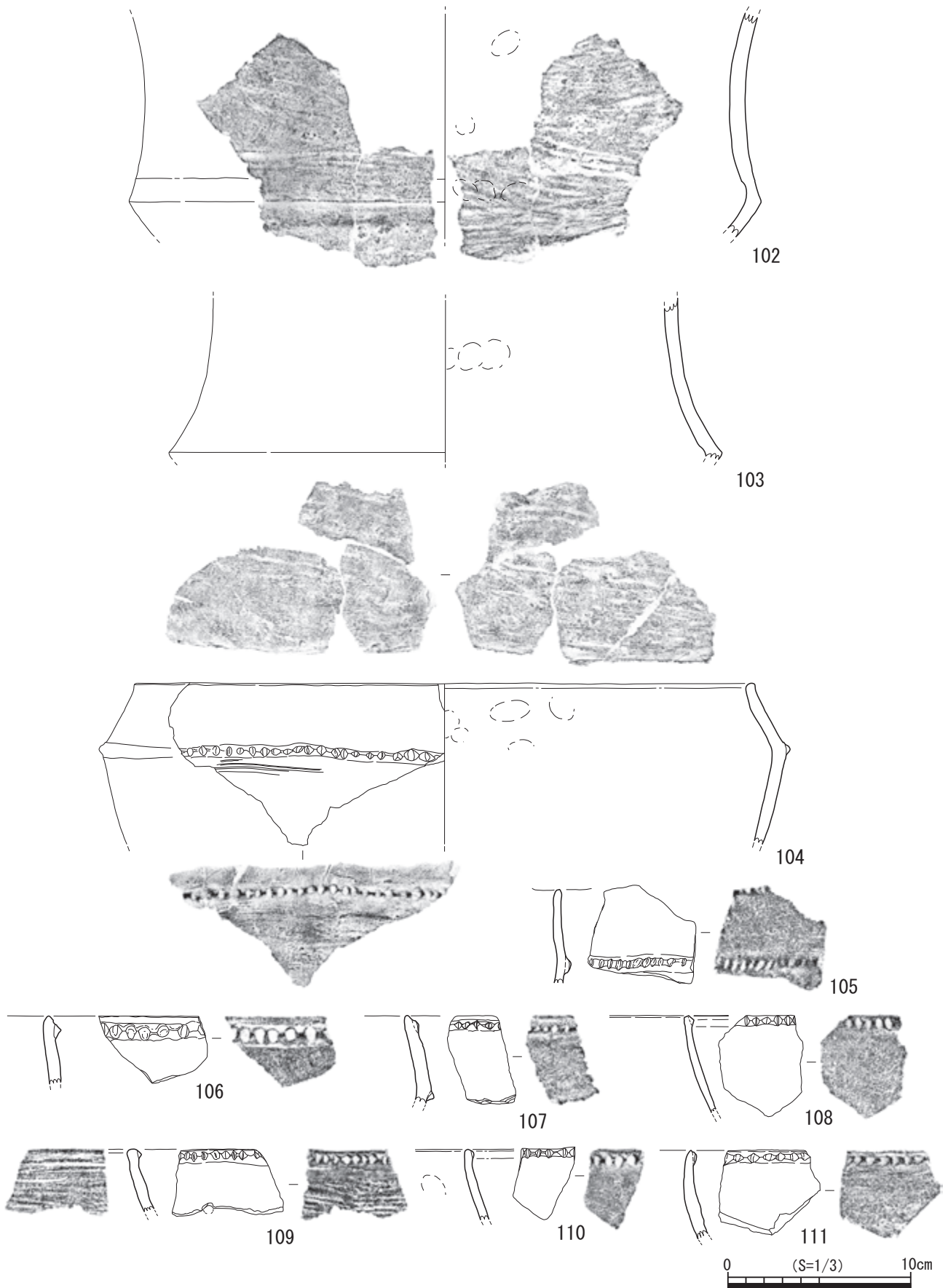


第49図 TAK201302調査区の縄文時代包含層出土土器実測図①(S=1/3)

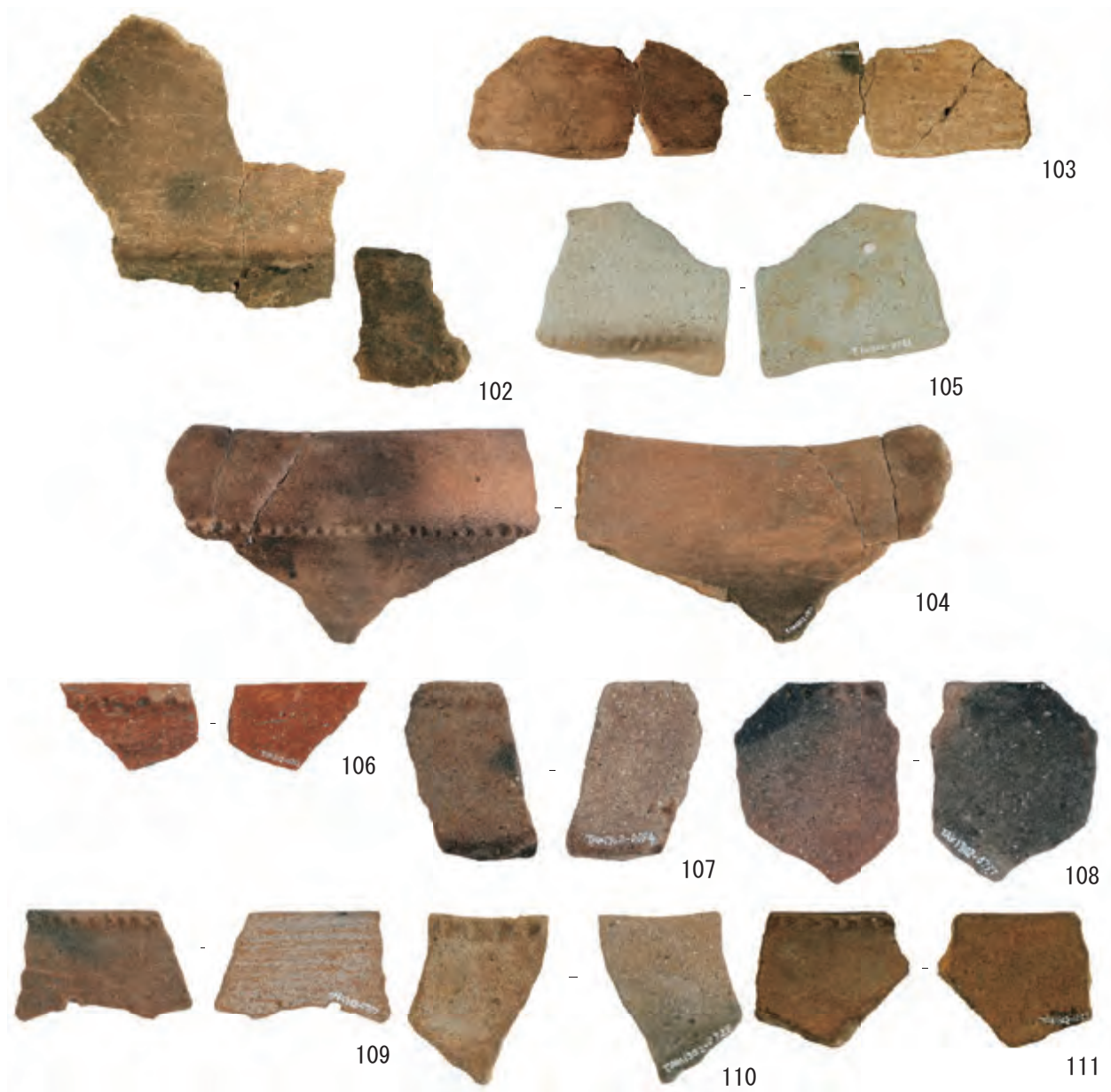




図版8 TAK201302調査区の縄文時代包含層出土土器①



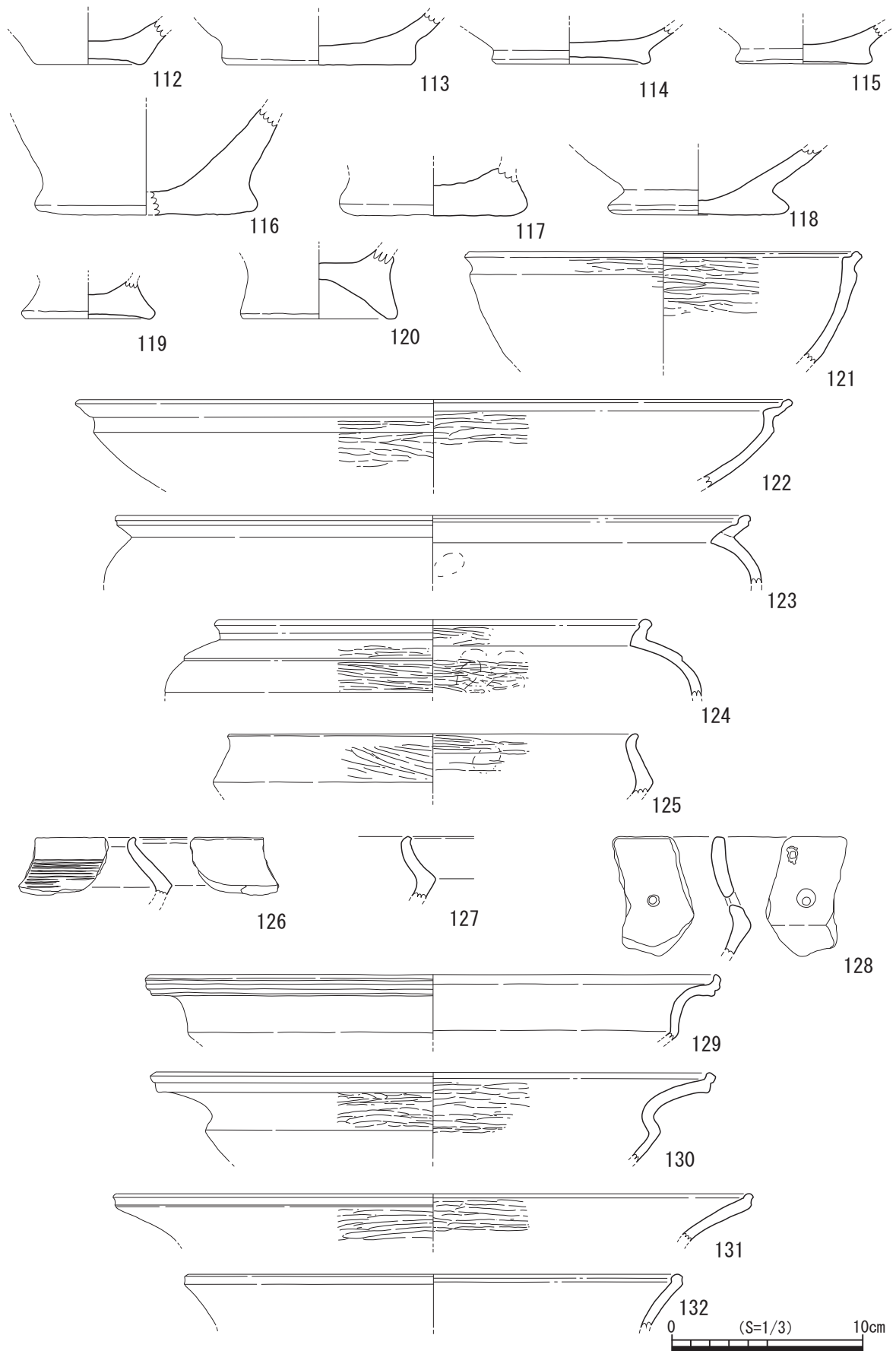
第50図 TAK201302調査区の縄文時代包含層出土土器実測図②(S=1/3)



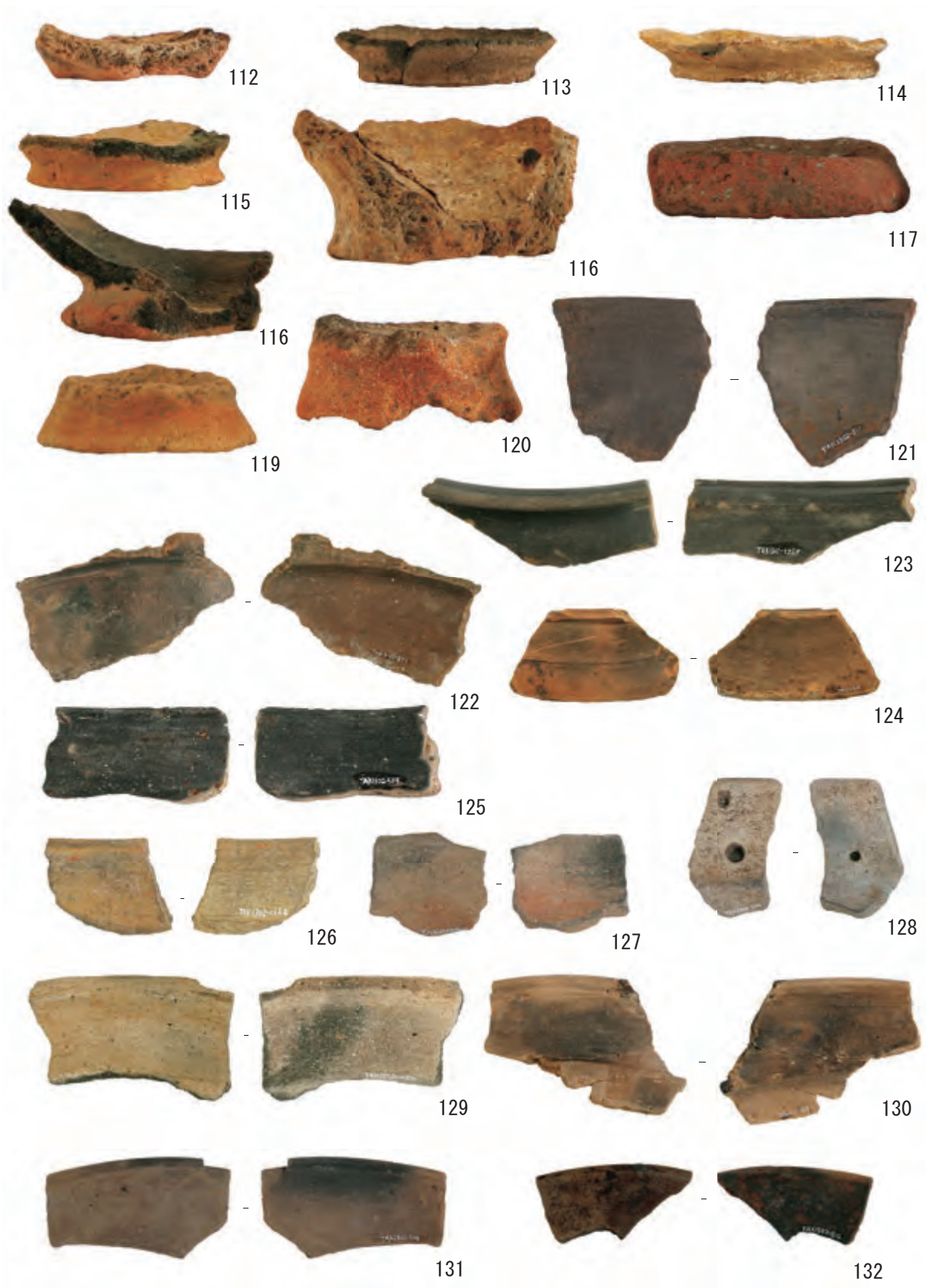
図版9 TAK201302調査区の縄文時代包含層出土土器②

102・103は胴部に屈曲のある深鉢である。102は屈曲部破片で、屈曲部外面のやや上位に段を形成する。外面は板状工具によるなで調整、内面は条痕後になでているが、特に内面屈曲部は強くなでており、やや窪み気味になる。屈曲部付近には煤が付着する。屈曲部の段の特徴から第Ⅶ群土器であろう。103は屈曲部付近の破片で、屈曲部外面には鋭い稜が立つ。外面はなで調整、内面は条痕後なで調整で指頭圧痕が部分的に残る。第Ⅸ群土器に伴うものか。

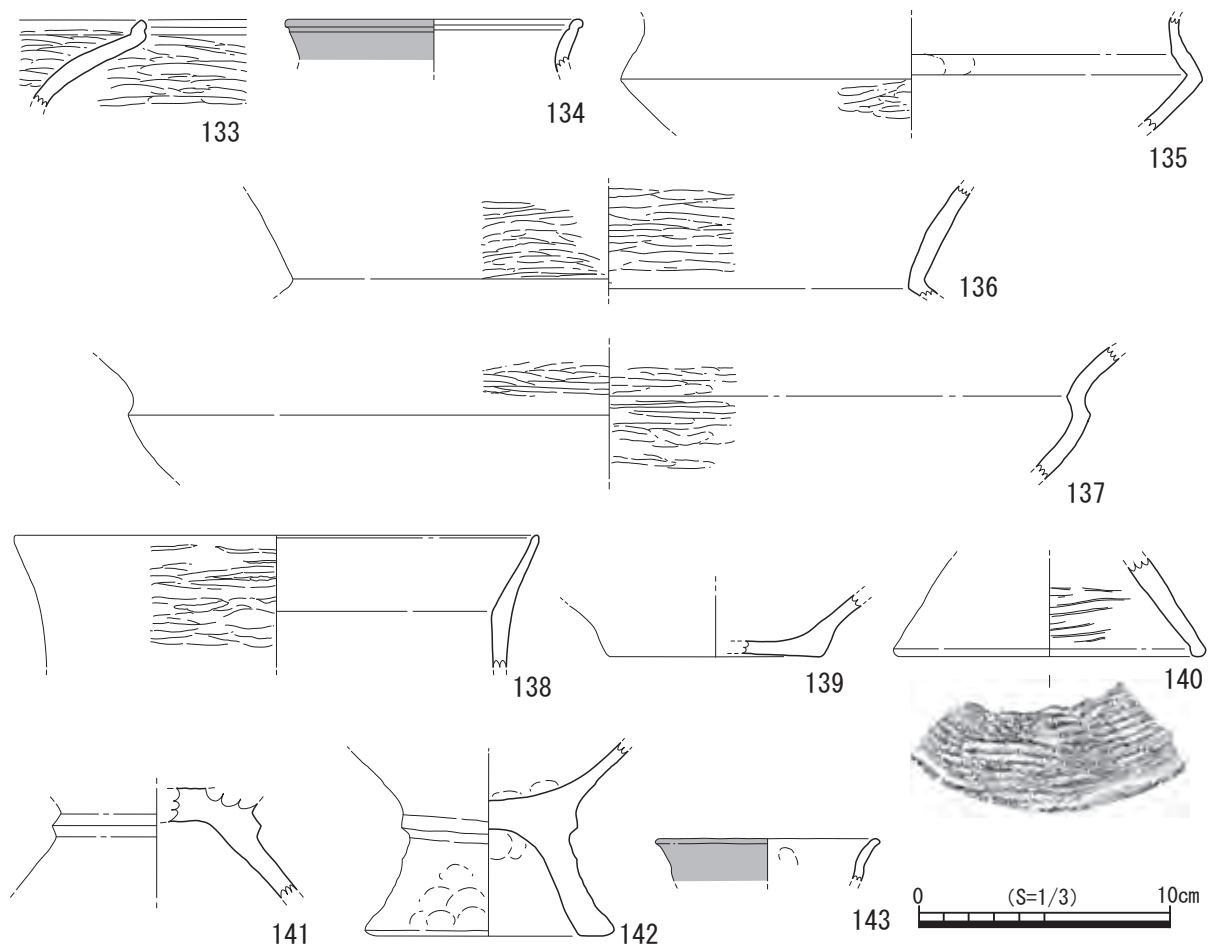
104～111は第Ⅹ群土器である。いずれも屈曲形の深鉢である。104・105は屈曲部に刻目突帯文を持つもの。104は屈曲が鋭く、突帯は細く刻みもヘラで丁寧に刻んでいる。胎土に雲母を大量に含み、内外面はなでるものの、胴部外面には条痕調整がわずかに残る。105はヘラ刻みの突帯を貼り付ける。摩滅が著しく調整は不明瞭である。106～111は口唇部に刻目突帯を貼り付けるもので、107は屈曲部にも貼り付けている。口唇部のやや下がった位置に貼り付けるもの(106・107)と口唇部に接して張り付けるもの(108～111)がある。106は突帯上を棒状工具で深く大ぶりに刻むが、他はヘラ状工具を用



第51図 TAK201302調査区の縄文時代包含層出土土器実測図③(S=1/3)



図版10 TAK201302調査区の縄文時代包含層出土土器③



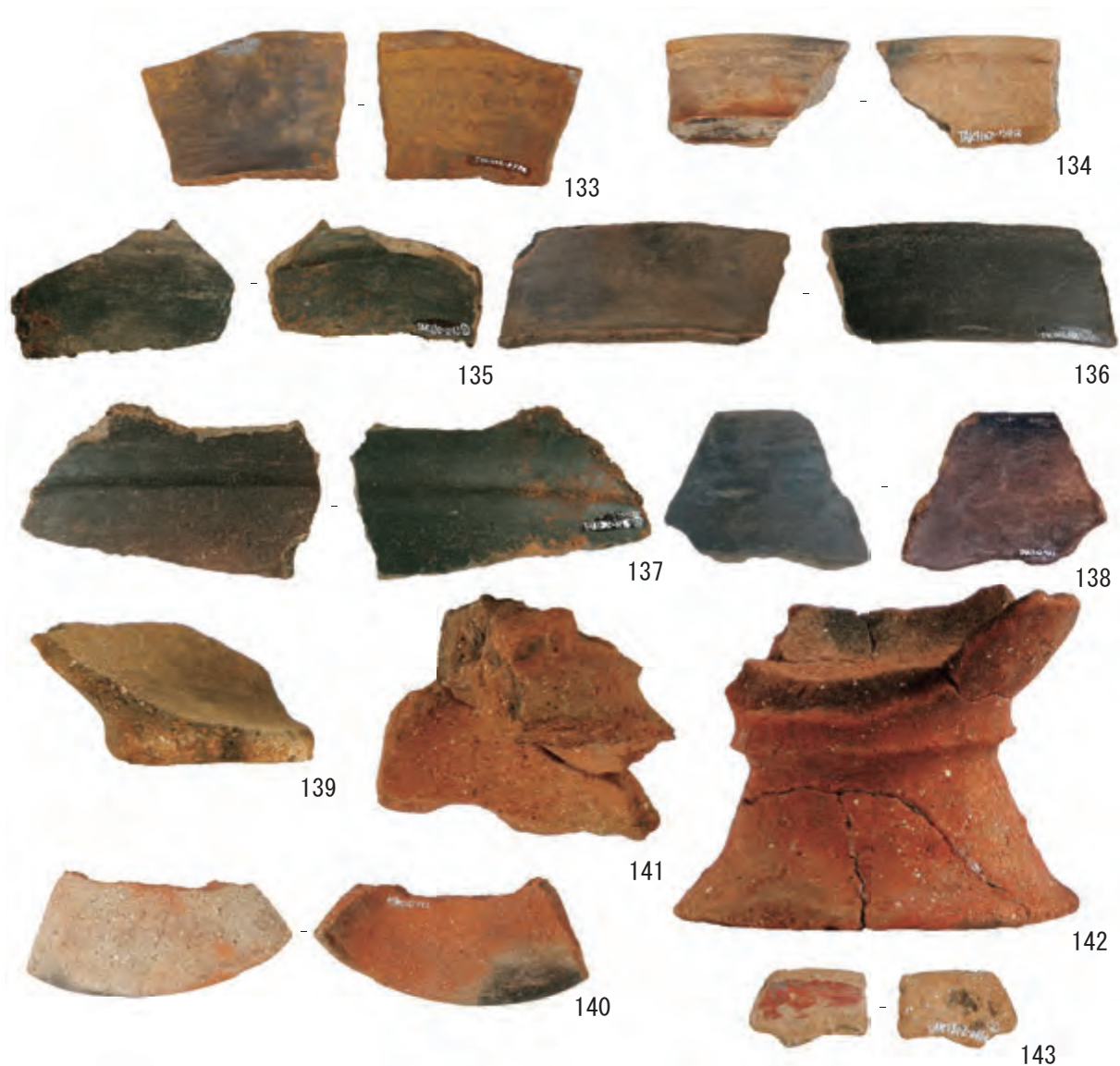
第52図 TAK201302調査区の縄文時代包含層出土土器実測図④

いて端正に刻む。109には内外面に条痕調整を残す。

112～120は深鉢底部である。112は小ぶりの底部から斜めに胴部が立ち上がり、底面はやや上底になる。第Ⅶ群土器の深鉢であろう。113～115は底部側面が直立気味になるもので、平底(113)と上底(114・115)がある。第Ⅷ群土器の深鉢に多い。116～119は底部側面が外側に大きく張り出すもので、平底(116～118)と上底(119)がある。第Ⅸ群土器から第Ⅹ群土器の深鉢にみられる特徴である。120は極端な上底で、雲母を大量に含む胎土の特徴から、第Ⅹ群土器に伴う可能性がある。

浅鉢ほか(第51図121～第52図・図版10～図版11)

121～128は頸部が短い浅鉢である。121・122は頸部が小さく内湾し口縁部が短く外反する浅鉢口縁部で、いずれも口縁内面に段をもち、内外面とも丁寧なヘラミガキで調整する。122は頸部・口縁部ともに長く、より古手であろう。第Ⅷ群土器に伴う浅鉢である。123・124は胴部が外側に大きく張り出し口縁部が短く立ち上がる浅鉢である。いずれも内外面ともヘラミガキで研磨し、内面には胴部張り出し部分を中心に指頭圧痕を残す。123は口縁部外面に沈線、内面に段を持つ。124は口縁部外面の沈線が曖昧になり、内面の段も不明瞭になる。また、外面に段を持つ点が特徴で、欠損するが下位にもう一つ段がついていた痕跡がある。いずれも第Ⅸ群土器に伴う浅鉢である。125～127は口縁部が退化して口縁端部がわずかに外反するのみとなり、胴部が屈曲する浅鉢で、いわゆる「く」の字口縁浅鉢である。内外面ともなでもしくはヘラミガキで平滑に整える。128は大型の口縁部片であるが、補



図版11 TAK201302調査区の縄文時代包含層出土土器④

修孔が残る。第Ⅹ群土器に伴う浅鉢である。

129～137は頸部が長い浅鉢である。129・130は口縁部が直立気味に立ち上がり、外面に沈線もしくは段を持つもので、内外面とも丁寧なヘラミガキで平滑に整える。第Ⅶ群土器に伴う浅鉢であろう。131～133は口縁部の立ち上がりが短く、外面の沈線が不明瞭となるもの。第Ⅷ群土器に伴う浅鉢である。134は小型の浅鉢口縁部で、口縁部と頸部は内外面の沈線で区別される。外面にわずかに丹塗りの痕跡が残る。第Ⅸ群土器に伴う浅鉢である。135～137は屈曲部である。胴部から鋭く内屈して頸部が緩やかに外反する点は共通するが、頸部の外反が滑らかなもの(137)と稜を伴って鋭く屈曲して外反するもの(135・136)の二者がある。内外面とも丁寧なヘラミガキである。第Ⅸ群土器に伴う浅鉢であろう。

138は鉢であろうか。口縁部外面は滑らかに外反するが、内面は稜をもって屈曲気味に外傾する。外面は条痕後に丁寧なヘラミガキ、内面はヘラミガキである。外面には煤が付着する。139は平底の底部であるが、かなり薄手で胴部の立ち上がりの傾斜がきつい。「く」の字口縁浅鉢の底部と考えられる。140～142は高坏脚部。140は内面に条痕を残し、接地面内側がやや突出する。141・142は脚部

第15表 TAK201302調査区包含層出土土器観察表

図版番号	出土区グリッド	層位	器種	部位	色調		調整		焼成	胎土	備考
					外面	内面	外面	内面			
95	9区0274	3層	深鉢	口縁~胴部	明赤褐(2.5YR5.6)	にぶい赤褐(2.5YR5.4)	ケズリ	ナデ	良好	滑石、雲母、砂粒	
96	5区9462	4a層	深鉢	口縁~胴部	橙(7.5YR6.6)	にぶい橙(7.5YR7.4)	ヘラミガキ	ヘラミガキ	良好	雲母、砂粒	
97	5区9460	3層	深鉢	口縁部	黒褐(7.5YR3.2)	褐(7.5YR4.6)	ナデ	ナデ	良好	雲母、黒雲母、砂粒	
98	5区 No. 67		深鉢	口縁部	にぶい褐(7.5YR5.3)	灰褐(5YR5.2)	捺痕	捺痕→ナデ	良好	雲母、砂粒、結晶片岩	
99	7区9666	3層	深鉢	口縁部	にぶい黄褐(10YR4.3)	にぶい黄褐(10YR7.3)	捺痕	捺痕	良好	雲母、砂粒	
100	5区9260	4b層	深鉢	口縁~胴部	褐(7.5YR4.4)	褐灰(7.5YR5.1)	捺痕	捺痕	良好	雲母、赤色粒子、砂粒	
101	5区 No. 74		深鉢	口縁部	にぶい黄褐(10YR5.3)	灰黄褐(10YR5.2)	捺痕	ナデ	良好	雲母、砂粒	
102	5区9260	4b層	深鉢	胴部(屈曲部)	にぶい赤褐(5YR5.3)	にぶい黄褐(10YR7.3)	擦過→ナデ	擦過→ナデ	良好	雲母、角閃石、砂粒	
103	5区9260	4b層	深鉢	頸部	にぶい褐(7.5YR5.3)	にぶい黄褐(10YR7.3)	捺痕→ナデ	捺痕(強いヨコナデ)	良好	雲母、角閃石、砂粒	
104	5区9462	4a層	深鉢	口縁部~屈曲部	橙(7.5YR6.6)	橙(7.5YR6.6)	捺痕→ナデ	捺痕→ナデ	良好	雲母、角閃石、砂粒	
105	5区9264	4d層	深鉢	口縁部	灰白(10YR7.1)	灰白(2.5Y7.1)	ナデ	ナデ	良好	雲母、黒雲母、砂粒	
106	5区9464	4a層	深鉢	口縁部	赤褐(5YR4.8)	赤褐(5YR4.8)	ナデ	ナデ	良好	金雲母、黒雲母、砂粒、石英	
107	4区9264	2層	深鉢	口縁部	にぶい褐(7.5YR5.3)	にぶい褐(7.5YR5.3)	ナデ消し	ナデ	良好	雲母、黒雲母、砂粒	
108	4区9266	3層	深鉢	口縁部	褐(7.5YR4.3)	黒褐(10YR3.1)	ナデ	ナデ	良好	雲母、角閃石、砂粒	
109	6区9462	4層	深鉢	口縁部	にぶい黄褐(10YR5.3)	灰白(10YR8.1)	捺痕	捺痕	良好	金雲母、黒雲母、砂粒	
110	4区9264	2~5層	深鉢	口縁部	灰褐(7.5YR6.2)	にぶい褐(7.5YR6.3)	ナデ	指押さえ→ナデ	良好	雲母、黒雲母、砂粒	
111	3区9068	表土	深鉢	口縁部	黄褐(10YR5.6)	明黄褐(10YR6.6)	ナデ	ナデ	良好	雲母、砂粒	
112	3区8866	流路D	深鉢	底部	橙(2.5YR6.6)	明黄褐(10YR7.6)	ナデ	ナデ	良好	雲母、角閃石、砂粒、褐色粒子	
113	7区7764	3層	深鉢	底部	赤(10R5.6)	明褐灰(5YR7.2)	ナデ	ナデ	良好	雲母、角閃石、砂粒	
114	3区8866	2層	深鉢	底部	にぶい黄(2.5Y6.3)	明黄褐(2.5Y7.6)	ナデ	ナデ	良好	雲母、角閃石、砂粒	
115	5区9462	3層	浅鉢	底部	明赤褐(5YR5.6)	にぶい橙(5YR7.3)	ナデ	ナデ	良好	雲母、砂粒	
116	4区8864	2層	深鉢	底部	にぶい橙(7.5YR7.4)	灰褐(7.5YR5.2)	ナデ	ナデ	良好	雲母、砂粒	
117	3区8868	流路C底面	深鉢	底部	明赤褐(2.5YR5.6)	灰赤(2.5YR5.2)	ナデ	ナデ	良好	雲母、結晶片岩、石英	
118	6区9660	4層	深鉢	底部	にぶい褐(7.5YR5.4)	灰褐(7.5YR5.2)	ナデ	ナデ	良好	雲母、砂粒	
119	7区9464	3層	深鉢	底部	橙(5YR7.8)	橙(5YR7.8)	ナデ	ナデ	良好	雲母、砂粒	
120	5区9464	4a層	深鉢	底部	赤(10R5.6)	赤灰(2.5YR5.1)	ナデ	ナデ	良好	雲母、角閃石、砂粒	
121	4区9064	3層	浅鉢	口縁部	褐灰(7.5YR4.1)	褐灰(7.5YR6.1)	ヘラミガキ→ナデ	ヘラミガキ	良好	雲母、砂粒	
122	6区9862	3層	短頸浅鉢	口縁部	黒褐(10YR2.2)	黒褐(7.5YR3.2)	ヘラミガキ	ヘラミガキ	良好	雲母、角閃石、砂粒	
123	4区9064	2層	浅鉢	口縁部	にぶい橙(5YR6.4)	褐灰(5YR6.1)	ヘラミガキ	ヘラミガキ	良好	雲母、角閃石、砂粒	
124	5区9460	西壁トレンチ	浅鉢	口縁部	にぶい橙(7.5YR5.4)	暗褐(7.5YR3.3)	ヘラミガキ	指押さえ→ヘラミガキ	良好	雲母、砂粒	
125	5区9464	4a層	浅鉢	口縁部	褐灰(10YR4.1)	黒褐(10YR3.2)	ヘラミガキ	指押さえ→ヘラミガキ?	良好	雲母、砂粒	
126	3区8868	流路G	浅鉢	口縁部	にぶい黄橙(10YR7.4)	灰黄褐(10YR6.2)	ナデ、丹塗り	ハケメ	良好	雲母、角閃石、砂粒	
127	3区8866	流路D	浅鉢	口縁部	にぶい黄橙(10YR7.3)	にぶい黄橙(10YR7.3)	ナデ	ナデ	良好	雲母、黒雲母、砂粒	
128	3区8866	流路D	深鉢	口縁部	にぶい黄橙(10YR7.3)	にぶい黄橙(10YR6.3)	ハケ→ナデ	ナデ	良好	雲母、角閃石、砂粒	
129	5区9462	4c層	浅鉢	口縁部	にぶい橙(7.5YR7.3)	灰褐(7.5YR6.2)	ナデ、丹塗り	ナデ	良好	雲母、角閃石、砂粒	
130	7区9666	3層	浅鉢	口縁部	にぶい褐(7.5YR7.4)	にぶい橙(7.5YR6.4)	ヘラミガキ	ヘラミガキ	良好	雲母、砂粒	
131	3区8868	流路C No.1	浅鉢	口縁部	灰褐(7.5YR5.2)	にぶい褐(7.5YR5.3)	ヘラミガキ	ヘラミガキ	良好	雲母、角閃石、砂粒	
132	4区9064	3層	浅鉢	口縁部	にぶい橙(2.5YR6.4)	にぶい黄褐(2.5YR4.3)	ヘラミガキ	ヘラミガキ	良好	雲母、砂粒	
133	5区9462	2層	長頸浅鉢	口縁部	明褐(7.5YR5.6)	明褐(7.5YR5.6)	ヘラミガキ	ヘラミガキ	良好	雲母、角閃石、砂粒	
134	5区9462	4a層	長頸浅鉢	口縁部	にぶい黄橙(10YR7.4)	にぶい黄橙(10YR6.4)	ヘラミガキ	ヘラミガキ	良好	雲母、砂粒	
135	4区9064	2層	長頸浅鉢?	屈曲部	褐灰(10YR4.1)	黒褐(10YR3.1)	ヘラミガキ	指押さえ、ナデ	良好	雲母、角閃石、砂粒	
136	5区9260	4層	深鉢	胴部	にぶい黄褐(10YR5.3)	黒褐(10YR3.2)	ヘラミガキ	ヘラミガキ	良好	雲母、砂粒	
137	4区8864	流路C	長頸浅鉢	屈曲部	黒褐(10YR3.1)	黒(7.5YR2.1)	ヘラミガキ	ヘラミガキ	良好	雲母、角閃石、砂粒	
138	5区9460	3層	浅鉢	口縁~胴部	黒褐(7.5YR3.1)	灰褐(7.5YR4.2)	ヘラミガキ	ヘラミガキ	良好	雲母、角閃石、砂粒	
139	4区9264	2層	浅鉢	底部	にぶい赤褐(2.5YR4.3)	灰赤(2.5YR4.2)	ナデ	ナデ	良好	雲母、黒雲母、砂粒	
140	4区9264東南北ベルト トレンチ	2~5層	高坏	脚部	にぶい黄橙(10YR7.3)	明赤褐(5YR5.6)	ナデ	捺痕	良好	雲母、角閃石、砂粒	
141	4区9264東南北ベルト トレンチ	2~5層	高坏	脚部	橙(2.5YR6.6)	橙(2.5YR6.6)	ナデ	ナデ	良好	雲母、黒雲母、砂粒	
142	4区9266	3層	台付浅鉢	底部	赤(10YR5.8)	明赤褐(2.5YR5.6)	指押さえ、ナデ	指押さえ、ナデ	良好	雲母、角閃石、砂粒	
143	4区9264	2層	鉢	口縁部	橙(7.5YR7.6)	橙(7.5YR7.6)	ナデ、丹塗り	剥落著しい	良好	雲母、砂粒	

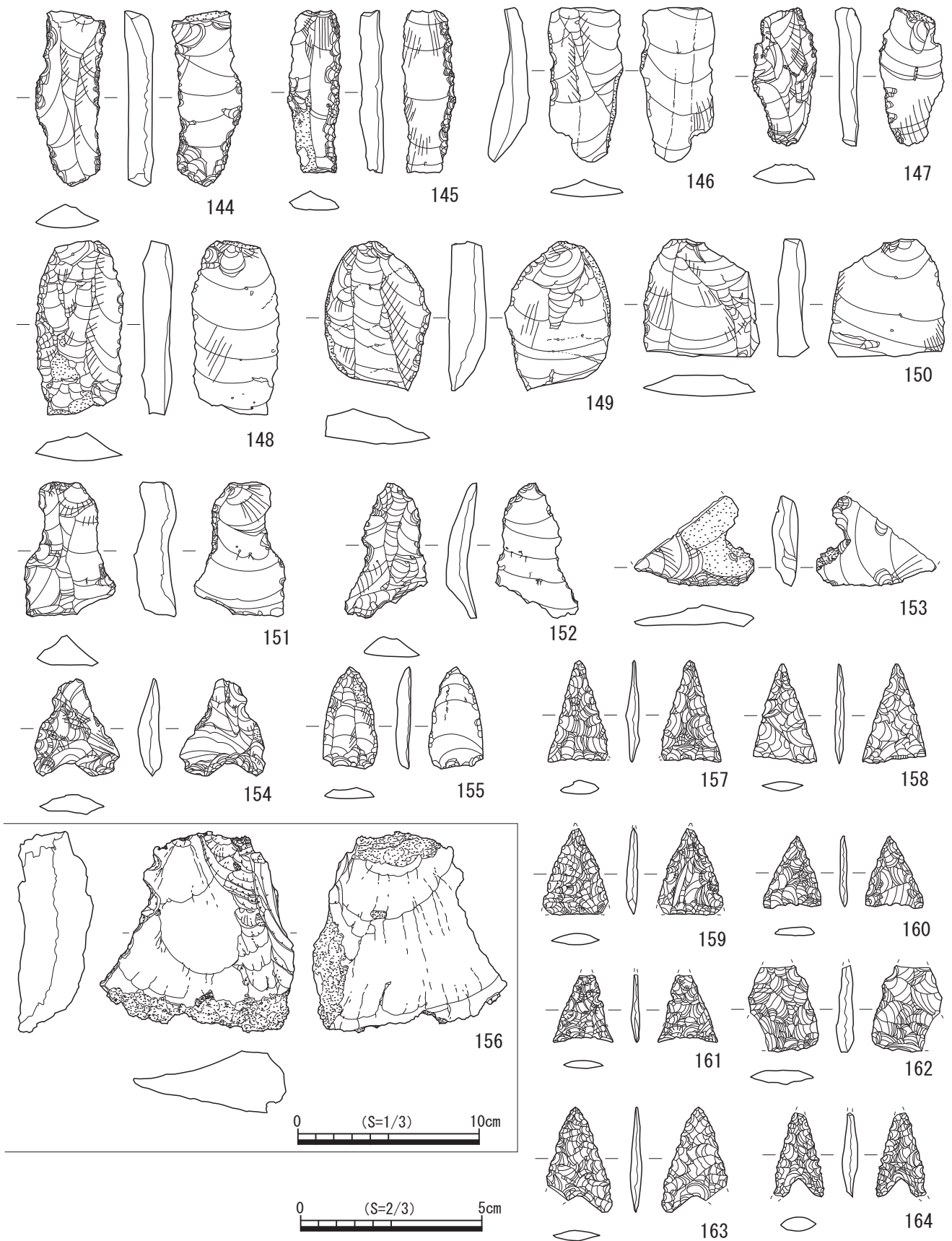
と坏部の境に突帯を持つ。**142**は内外面に指頭圧痕を残す。これらは第Ⅹ群土器に伴う高坏である。**143**はミニチュアの鉢口縁部で、外面に丹塗りの痕跡が残る。(中尾)

②石器

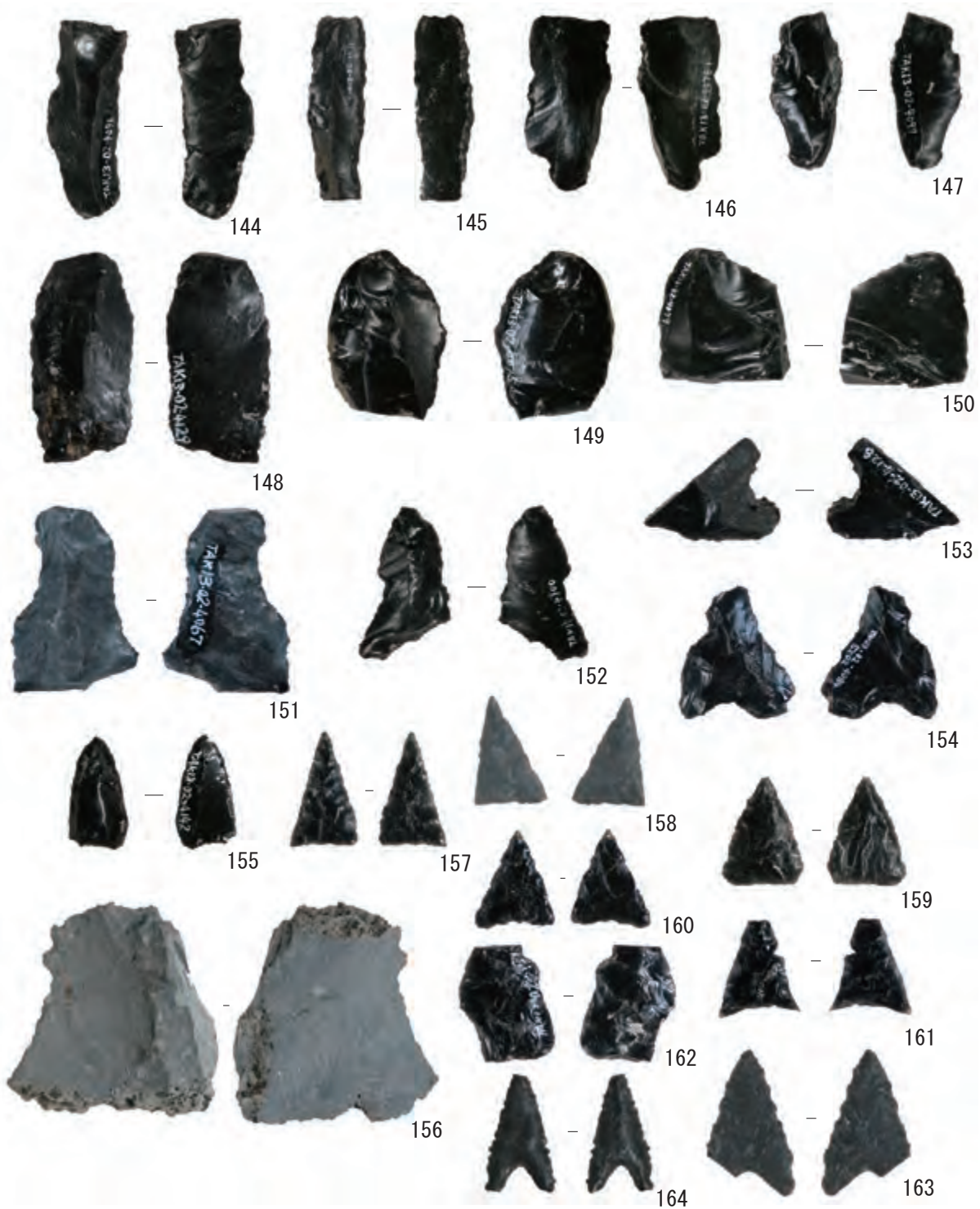
a. 剥片(第53図144~155・図版12)

黒曜石製の縦長剥片を中心に掲載した。いずれも側縁に使用痕とみられる微細剥離や二次加工が伴う。また、背面に主要剥離面と同方向の剥離面が残るものが多い。**144**は打面に平坦な礫面を残す。**145**は背面に自然面を残し、打面には二次加工を加えてバルブを除去している。**146**は側縁に自然面が残る縦長剥片で、打面は切断により除去し、さらに切断面に二次加工を加える。**147・148**は打面に平坦な礫面が残る。また、**148**は光沢がなくスリガラス状で、白色不純物を多く含む。**149**は打面から側縁にかけて丸みを帯びた礫面が残り、円礫素材であることが分かる。**150**は小さな調整打面をもつ。**151**は厚手の縦長剥片の下端部に二次加工を加えて直線的な刃部を作る。打面には平坦な礫面が残る。パティナが非常に発達しており、古い時期の石器かもしれない。**152**は漆黒色で白色の不純物を含む。**153**は剥片の縁辺部で切断面が残る。背面には平坦な自然面を残し、縁辺部には微細剥離が連続する。**154**は寸詰まりの不定形剥片で、下端部にはノッチ状の抉りを入れるほか、側面にも二次加工を加える。**155**は縦長剥片の周縁部に微細剥離が連続する。先端部は、背面側は微細剥離が連続するものの主要





第53図 TAK201302調査区の縄文時代包含層出土石器実測図①(S=2/3・S=1/3)

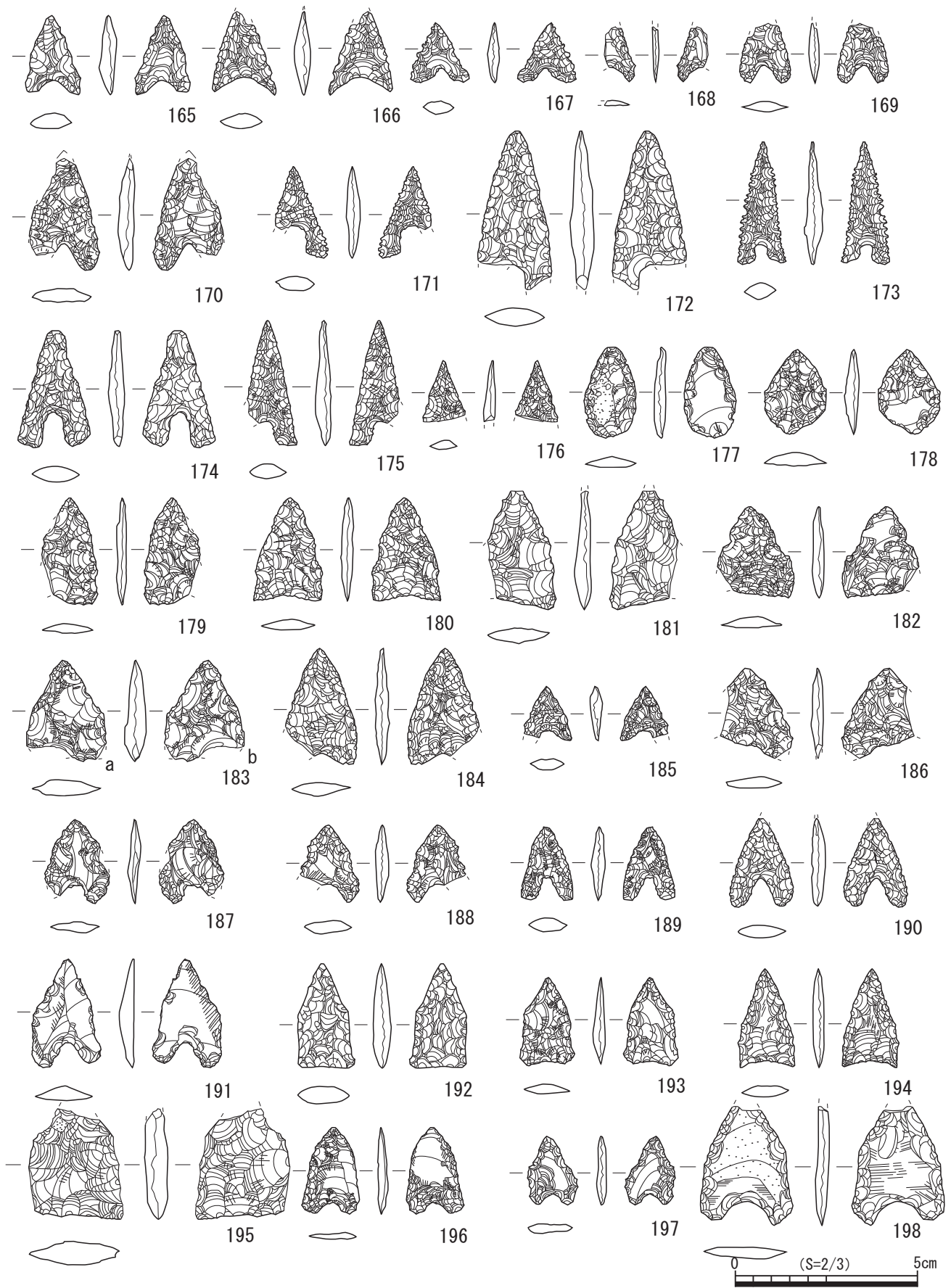


図版12 TAK201302調査区の縄文時代包含層出土石器①

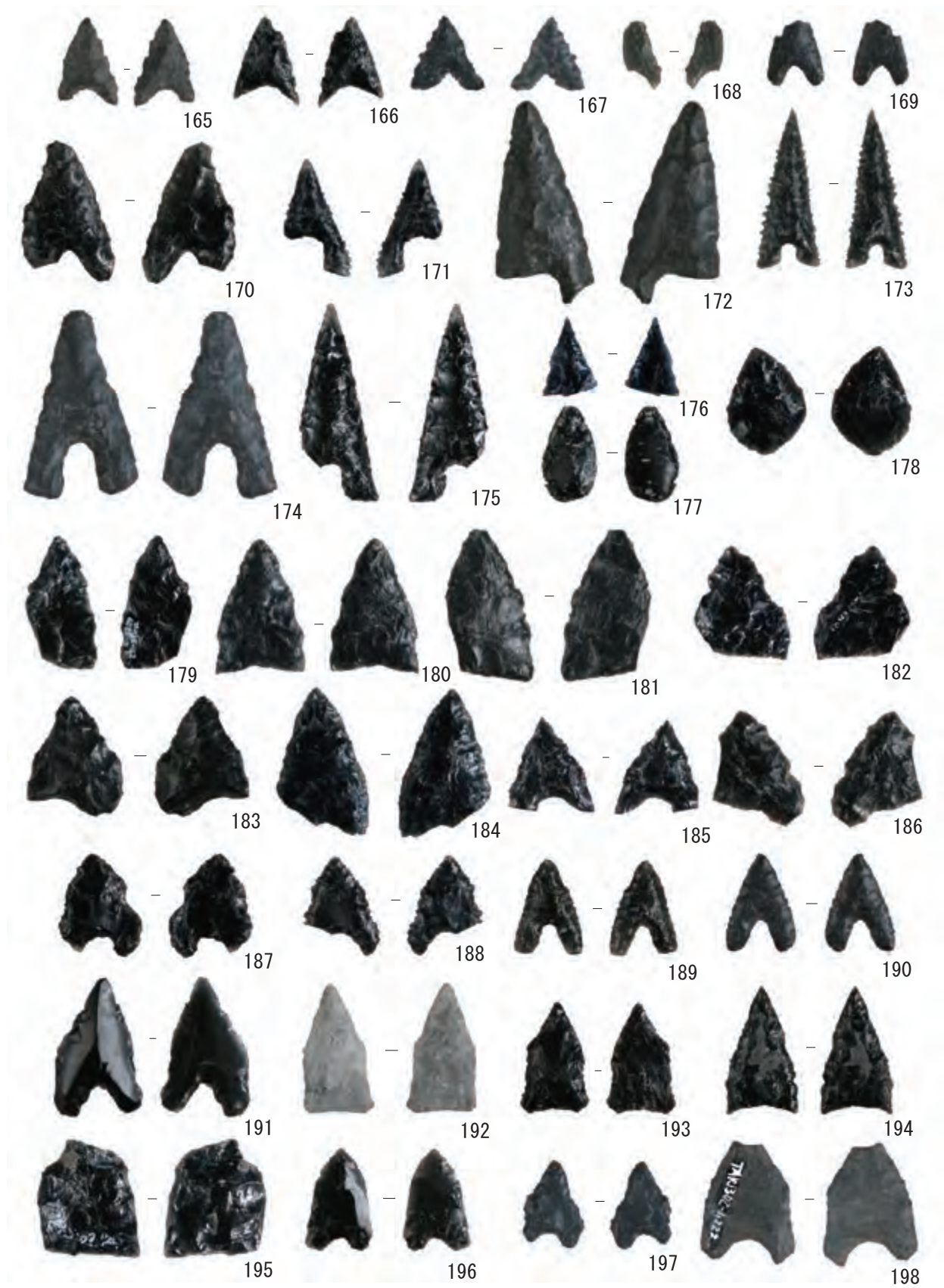
剥離面側はまばらで、先端部を意識した加工か判断がつかない。基部側には急角度の二次調整を加える。以上の黒曜石は漆黒色で光沢を帯びたものが多く、礫面が平坦なものは腰岳産、円礫素材は松浦市牟田産が主体と推測される。

b. 石鏃(第53図157～第55図202・図版12～図版14)

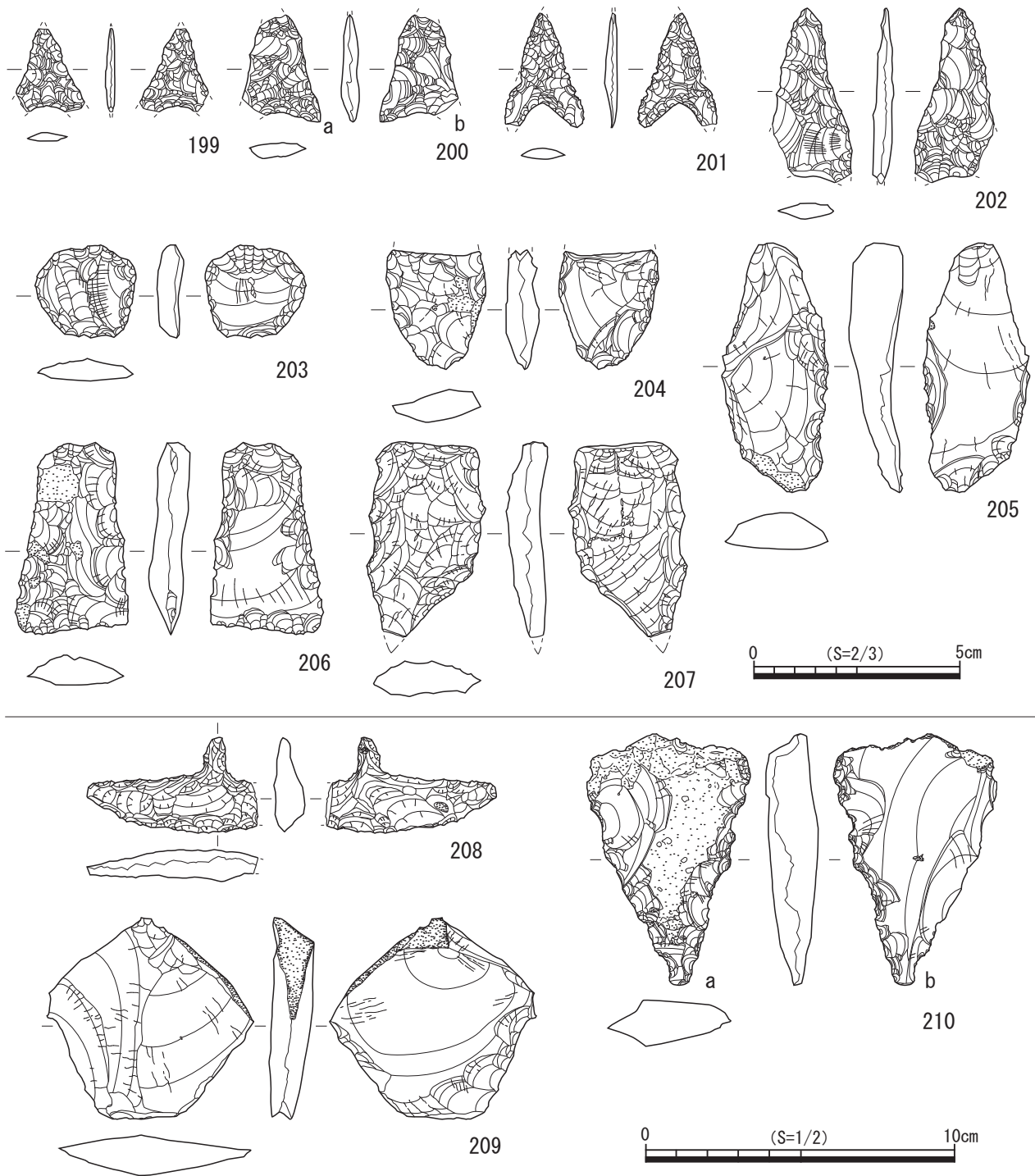
石鏃は、TAK201301調査区出土石器と同様、側縁形態をもとにA類～D類に4分類する。ほとんどが黒曜石製で、192・198のみ安山岩製である。



第54図 TAK201302調査区の縄文時代包含層出土石器実測図② (S=2/3)

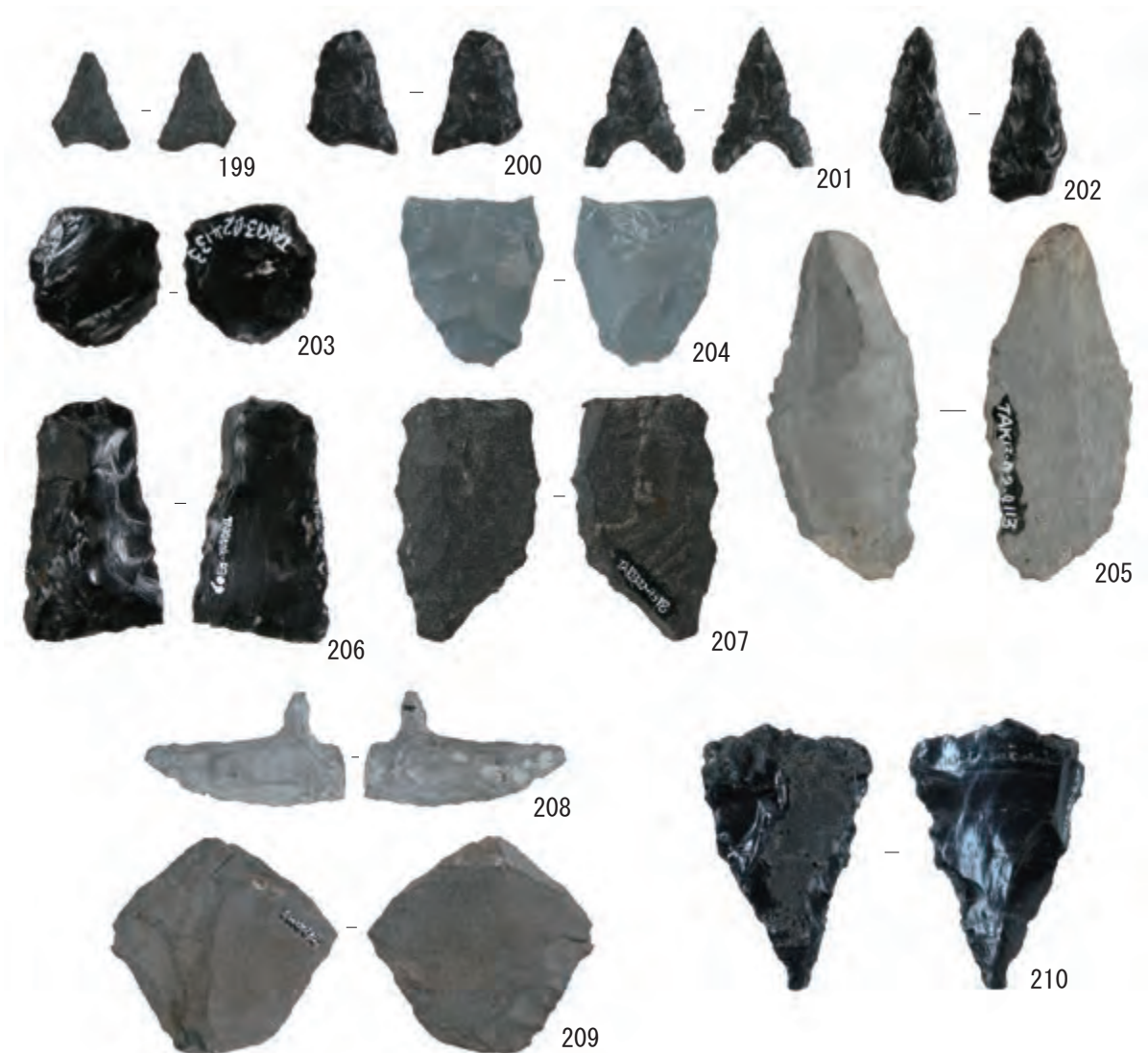


図版13 TAK201302調査区の縄文時代包含層出土石器②



第55図 TAK201302調査区の縄文時代包含層出土石器実測図③(S=2/3・S=1/2)

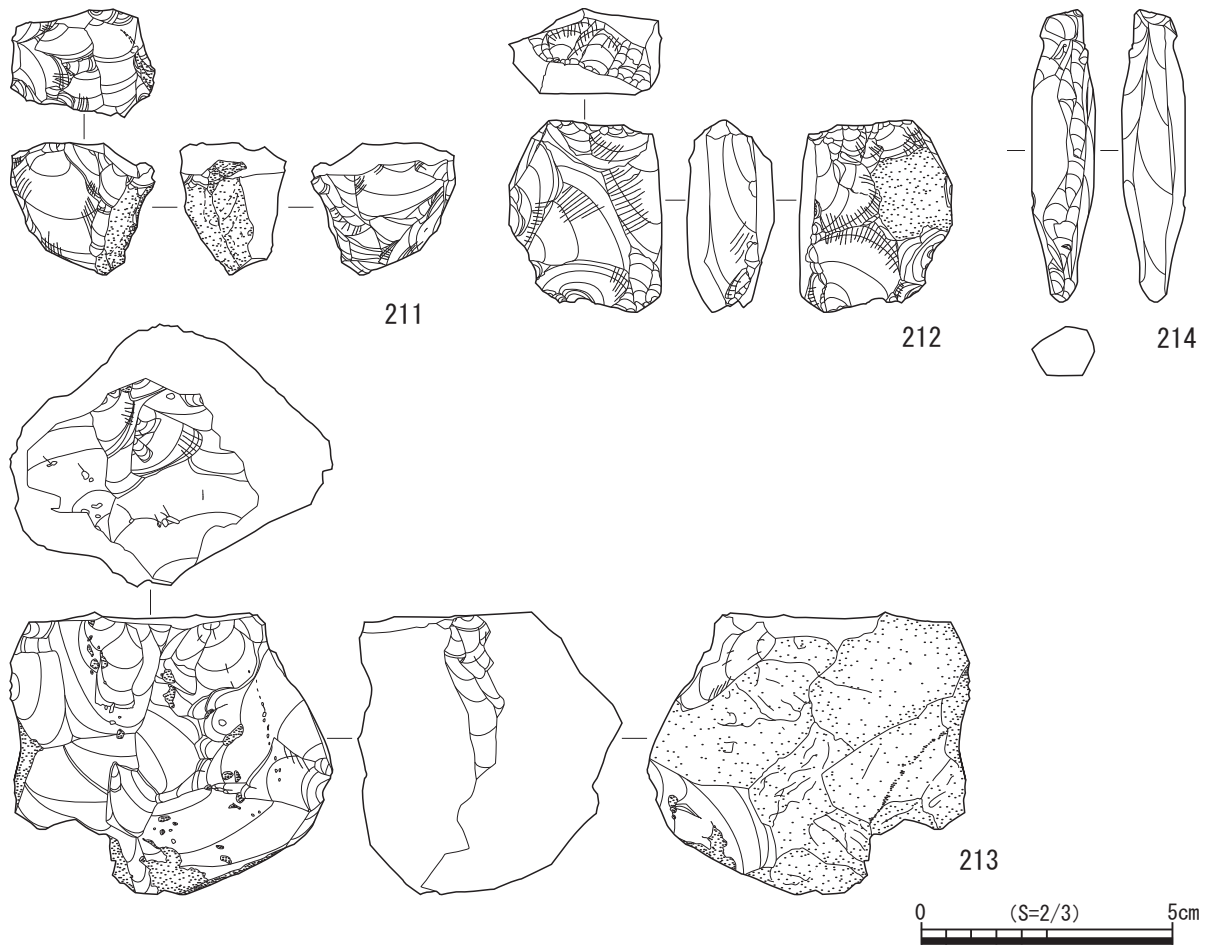
側縁が直線をなすA類(157~176)は、基部に着目すると平基もしくはわずかに凹むもの(157~162)と、凹基(163~175)に細分できる。157~161・163は丁寧な調整を加えて先端部を鋭く、体部を薄く仕上げる。159・160には素材の主要剥離面・背面がそれぞれ残る。162・164~167は厚みがあり、体部中央付近が最大厚となる。162は白色不純物を含む。168は小型で素材剥片の主要剥離面が残り、打面を側縁側にとっている。灰白色の黒曜石である。170は透明度の高い黒曜石製で、側面観は長軸方向にやや湾曲している。素材剥片の背面がネガ面として残り、主要剥離面を中心に入念な調整を加えている。171は両側縁がやや鋸歯状で、基部の挟りが深い。厚手で体部中央部に最大厚がある。172~



図版14 TAK201302調査区の縄文時代包含層出土石器③

175は大型石鏃である。172・174はやや幅広の石鏃。いずれも丁寧な調整を加えて断面レンズ状に仕上げる。173・175は細身の石鏃。173は両側縁が鋸歯状で、断面はやや厚手の菱形を呈し、先端部を中心に鏃がきれいに通る。先端部は鋭く脚端部は平坦となる。175は側縁が直線状となるものの、鋭い先端部や脚端部が平坦になる点など、173と共通点が多い。

側縁が外湾するB類(177～191)は、基部に着目すると、円基(177・178)、平基もしくはわずかに凹むもの(179～183)、凹基(184～191)に細分できる。177・178は素材剥片の主要剥離面を残し、177は打面を基部側に、178は先端側にそれぞれ配置する。先端部を中心に二次加工を加え、基部の調整はわずかで、剥片の形状をそのまま生かしている。179～183は幅広で薄手のものが多く、幅広にもかかわらず体部中央に達する大ぶりの平坦剥離を連続して入れる。厚みのある183は体部中央に達する押圧剥離を入れているものの、a面左側縁からの剥離が急角度になってしまい、横断面がアンバランスになっている。184～191には、薄手を志向するもの(184・186・187)のほか、やや厚手のもの(185・189)もある。185は極小型の石鏃で、先端部は急角度の調整で入念に作り出す。187は素材剥片の主要剥離面が残り、打面を側縁側にする。188は素材剥片のネガ面が残る。191は剥片鏃。縦長剥片の縁辺を先端部にする。側縁が屈曲するように見えるが、素材剥片の形状によるもので、屈曲を意図した加工は



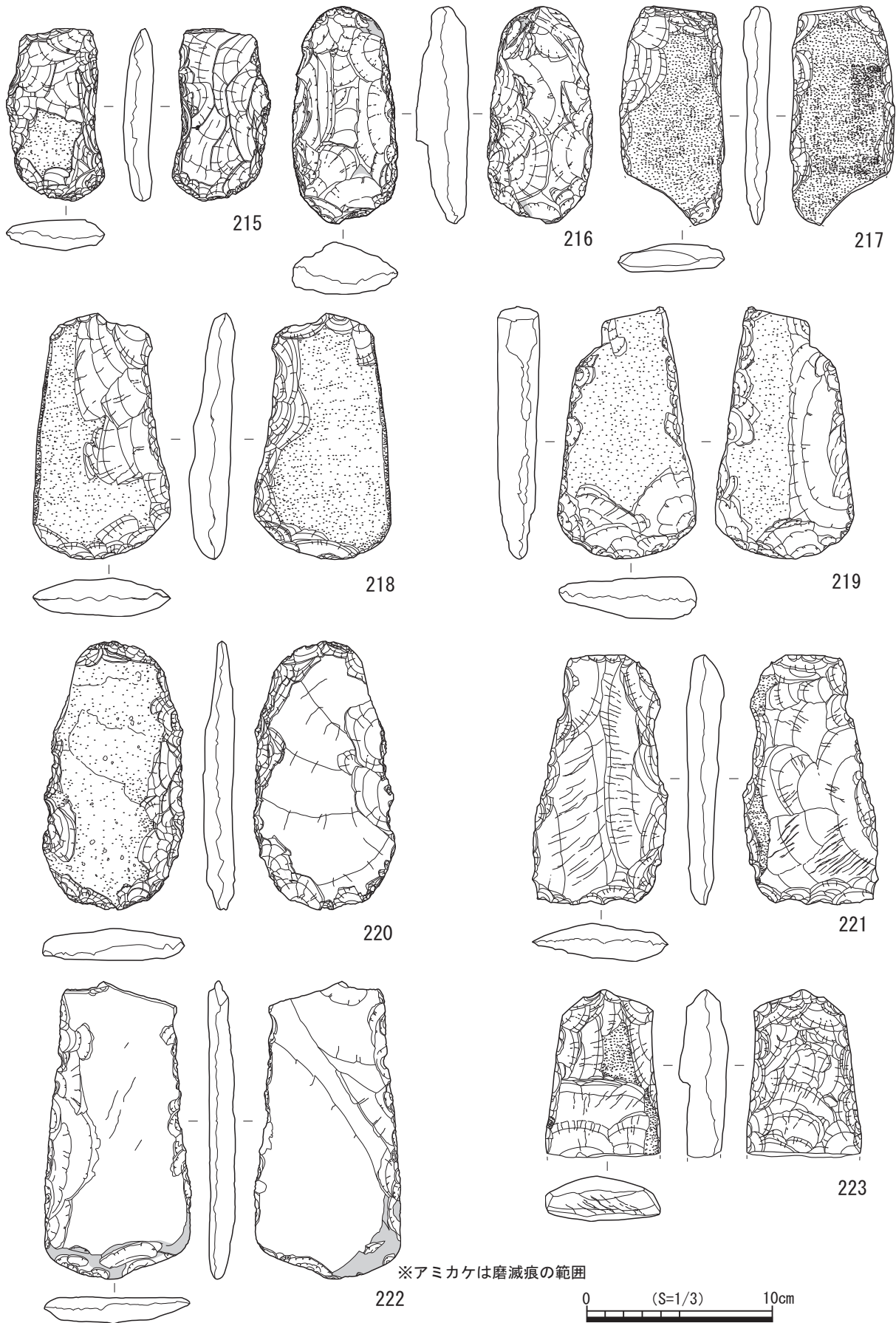
第56図 TAK201302調査区の縄文時代包含層出土石器実測図④(S=2/3)



図版15 TAK201302調査区の縄文時代包含層出土石器④

ない。

側縁に屈曲点をもつC類(192~198)は、基部に着目すると、平基もしくはわずかに凹むもの(192~195)と凹基(196~198)に細分できる。屈曲点は先端部に近い位置にあるものが主体だが(192・193・195・196・198)、基部付近にあるものも少数ある(194・197)。193・196~198は素材剥片の主要剥離



第57図 TAK201302調査区の縄文時代包含層出土石器実測図⑤(S=1/3)

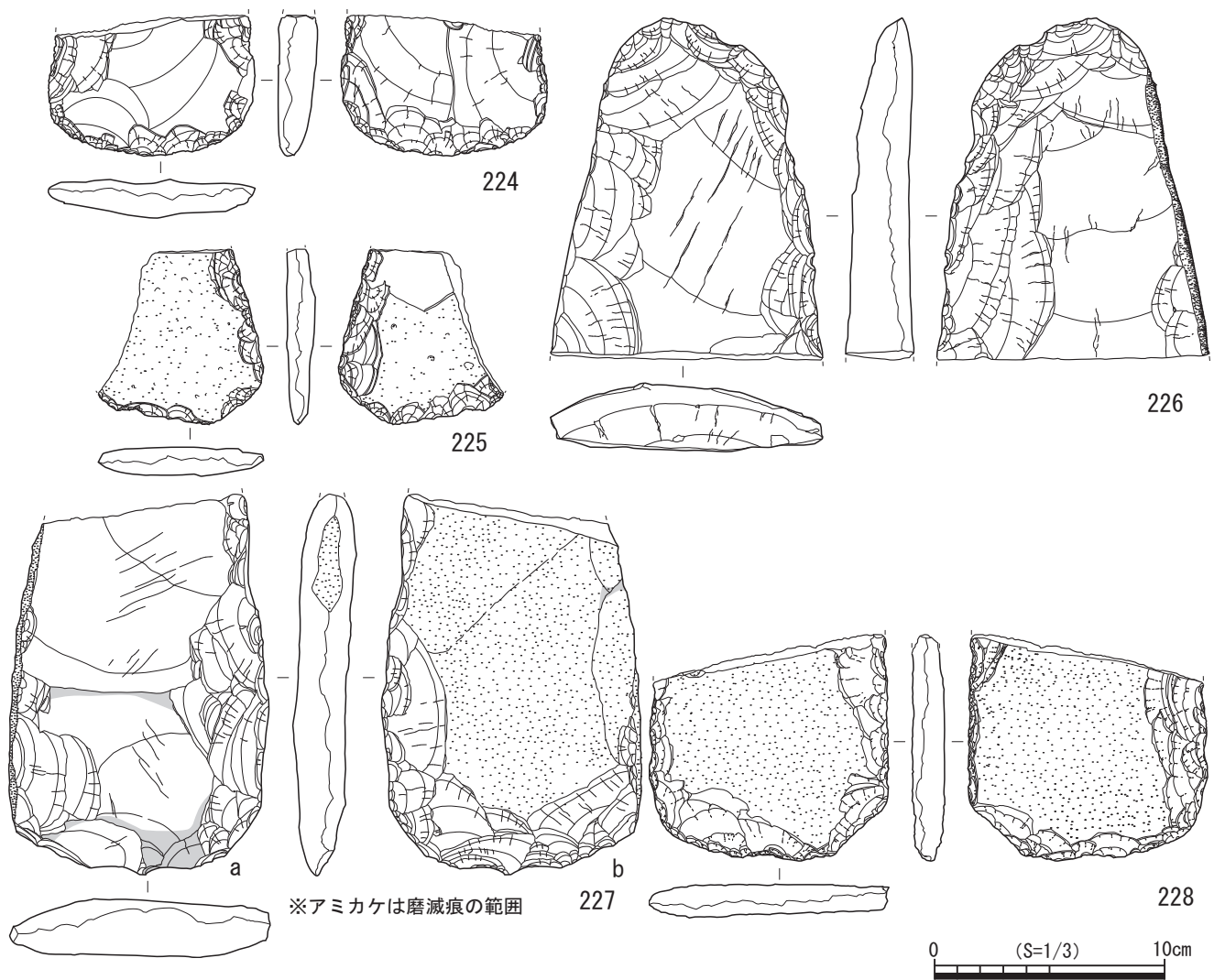




図版16 TAK201302調査区の縄文時代包含層出土石器⑤

面を残すが、打面を側縁側にするもの(193・197)、基部側にとるもの(196・198)がある。194・198は体部に研磨面を有し、断面横長六角形となる。198の基部付近の研磨面は、バルブの除去が目的と考えられる。

側縁が内湾するD類(199～202)は、基部に着目すると平基(202)と凹基(199～201)がある。199は非



第58図 TAK201302調査区の縄文時代包含層出土石器⑥(S=1/3)

常に薄く仕上げる。**200**はb面右側縁からの調整剥離が急角度になり、断面形が左右でアンバランスとなる。**201**は体部を中心に入念な調整を加え、脚部が外側に張り出す形状となる。**202**は大型で、体部上半から先端部にかけて特に調整剥離を加えて薄く仕上げる。

c. スクレイパー類(第53図156・第55図203~210)

**156**は安山岩製の大型剥片を素材とするスクレイパーである。打面・縁辺・側縁の一辺に礫面を残す。寸詰まりの剥片で、主要剥離面はネガ面となる。礫面でない方の側縁に粗い二次加工を加えて刃部とする。**203**は寸詰まりの小型剥片の縁辺に微細な調整剥離を加えて刃部とする。**204**は灰白色黒曜石製で上半部を折損。横長剥片素材で打面側を中心に大ぶりの調整剥離を加えて刃部を形成する。**205・206**は縦長剥片素材で、側縁から縁辺部に調整を加えて刃部とする。**207**は素材剥片の背面がネガ面として残る。**208**は安山岩製石匙。横長で中央に小さなつまみがつく。**209**は玄武岩製の厚手の剥片の側縁に調整剥離を加えて刃部とする。**210**は平坦な自然面をもつ厚手の黒曜石剥片で、a面右側縁を中心に調整を加えて刃部を形成する。



図版17 TAK201302調査区の縄文時代包含層出土石器⑥

d. 石核(第56図211～213)

211はサイコロ状の石核。白色不純物を含む黒曜石製で礫面が一部残る。長軸方向の剥片剥離を基本としつつ、打面転移を繰り返して小型剥片を生産している。212はやや扁平な石核。求心状の剥片剥離により寸詰まりの剥片を生産している。褐灰色黒曜石製。213は大ぶりの石核で白色不純物を多く含む黒曜石製。平坦な礫面を打面として長軸方向の剥片剥離を基本とするが、作業面を打面として側縁側にも剥片剥離を行っている。礫面が半周ほど残る。

e. 不明石器(第56図214)

214は黒曜石製。細長い角柱状で、複数の剥離面もあるが、ローリングにより稜線が丸みを帯び、剥離面もスリガラス状となる。大型の剥片剥離時の屑片であろうか。

f. 打製石斧(第57図215～228)

いずれも安山岩製である。基部から刃部に向けて側縁が緩やかに開き、刃部は円刃となるものが多い。(216～220・222・224・227・228)。215は小型で平面形・側面観とも湾曲する。刃部の剥離面の稜線がやや丸みを帯びている。216は小型だが厚手のもの。217～219は扁平礫を素材とし、縁辺を中心に二次加工を加える。220は扁平な剥片を素材とする。221は側縁がややくびれ、刃部は直刃となる。222は扁平礫を素材とするが、刃部は丸みを帯びて長軸方向の線条痕が残る。223は厚手で基部がやや尖る。224～228は大型のもので、扁平(224・225・228)と厚手(226・227)がある。226は基部片で周縁に加工を加えて基部は丸く仕上げる。227は刃部片で、a面右端部に摩滅痕が残る。228は表裏に礫面を残す。(中尾)

第16表 TAK201302調査区包含層出土石器観察表

	器種	出土地区グリッド	層位	石材	最大長 (mm)	最大幅 (mm)	最大厚 (mm)	重量 (g)	備考
144	剥片	5区9262	4層	黒曜石	43.5	19.0	8.0	6.5	
145	剥片	5区9260	4b層	黒曜石	44.5	14.3	6.1	4.0	
146	剥片	4区9264	2層	黒曜石	42.0	20.6	7.3	4.9	
147	剥片	5区9262	4層	黒曜石	37.2	17.0	6.1	3.5	
148	剥片	5区9462	4c層	黒曜石	48.1	23.7	7.4	9.7	
149	剥片	4区9264	2層	黒曜石	41.0	28.9	9.7	11.8	
150	剥片	4区9264	3層	黒曜石	(32.5)	31.5	6.7	(7.6)	
151	二次加工ある剥片	4区9064	2層	黒曜石	36.7	24.5	9.0	7.1	
152	剥片	5区9262	4b層	黒曜石	33.0	19.0	5.4	3.5	
153	剥片	5区9462	4a層	黒曜石	(24.7)	(33.0)	(6.1)	(3.6)	つくり荒く自然面残る
154	二次加工ある剥片	4区9264	SX02	黒曜石	26.5	23.5	5.5	2.7	
155	二次加工ある剥片	7区9666	4層	黒曜石	27.6	14.7	3.3	1.4	
156	スクレイパー	4区9266	3層	安山岩	107.2	103.7	39.4	362.4	
157	石鏃	4区9264	SX02	黒曜石	28.0	16.0	3.5	(1.0)	完形、三角形
158	石鏃	4区9264	2層	黒曜石	27.0	17.5	2.5	1.0	灰色、三角形
159	石鏃	4区9264	2層	黒曜石	(23.5)	18.0	3.0	(1.2)	ほぼ完形、三角形
160	石鏃	3区8664	2層	黒曜石	19.5	16.6	2.0	0.7	完形
161	石鏃	4区9266	3層	黒曜石	(18.5)	16.5	2.5	(0.6)	先端欠
162	石鏃	7区9666	4層	黒曜石	(24.0)	(29.0)	5.0	(2.1)	先端と片脚欠
163	石鏃	9区9870	3層	黒曜石	29.0	18.0	3.0	(1.2)	片脚欠
164	石鏃	8区9068	3層	黒曜石	(23.0)	14.0	4.5	(1.0)	先端欠
165	石鏃	5区7660	2層	安山岩	22.0	16.0	4.0	1.1	灰色、完形
166	石鏃	5区9264	4d層	黒曜石	(23.0)	17.0	4.0	(0.9)	先端欠
167	石鏃	9区0074	2層	黒曜石	16.0	16.0	3.5	0.6	鋸歯
168	石鏃	7区9464	トレンチ	チャート	(14.5)	(8.5)	2.0	(0.3)	灰色、半分欠け
169	石鏃	9区0068	3層	黒曜石	(16.5)	13.5	3.0	(0.6)	先端欠
170	石鏃	7区9464	3層	黒曜石	(30.5)	(20.0)	4.5	(2.4)	透明度高い、片脚欠
171	石鏃	5区9262	2層	黒曜石	25.0	(14.0)	4.0	(0.7)	鋸形鏃、鋸歯鏃、片脚欠
172	石鏃	5区No.67		黒曜石	(43.5)	(20.5)	5.5	(4.2)	灰色、片脚欠
173	石鏃	5区No.70		黒曜石	33.5	13.0	4.5	1.3	鋸歯、完形
174	石鏃	11区0874	SP315	黒曜石	32.0	19.5	4.5	1.9	ほぼ完形
175	石鏃	10区0274	3a層	黒曜石	34.0	13.5	4.0	1.3	片脚欠
176	石鏃	4区9264東	南北ベルトトレンチ 2~5層	黒曜石	(16.5)	(11.5)	(2.5)	(0.4)	基部欠
177	石鏃	5区9260	表土	黒曜石	25.0	14.5	3.0	1.3	脚部なし
178	石鏃	5区9264	4b層	黒曜石	23.0	16.5	4.0	1.4	
179	石鏃	4区9264	2層	黒曜石	29.0	(15.0)	3.0	(1.3)	
180	石鏃	5区9262	4b層	黒曜石	28.0	19.0	3.5	1.6	完形
181	石鏃	4区9264	2層	黒曜石	32.5	(18.5)	4.0	(2.5)	片脚欠損
182	石鏃	5区9262	4b層	黒曜石	25.0	(21.0)	3.5	(1.6)	三角鏃
183	石鏃	3区8866	流路D	黒曜石	(27.5)	(22.0)	6.0	(2.9)	
184	石鏃	5区9262	4b層	黒曜石	31.5	(19.5)	3.5	(2.1)	片脚欠
185	石鏃	5区9462	3層	黒曜石	15.0	(13.0)	3.5	(0.5)	片脚欠
186	石鏃	7区9466	3層	黒曜石	(24.5)	(19.5)	3.5	(1.4)	両脚先端部欠
187	石鏃	5区No.40		黒曜石	23.0	18.5	3.5	(1.2)	
188	石鏃	4区9264	2層	黒曜石	21.0	(13.0)	3.5	(0.8)	片脚欠損
189	石鏃	4区9264	3層	黒曜石	20.0	20.0	4.0	0.9	ほぼ完形
190	石鏃	4区9066	表土	黒曜石	24.0	17.0	3.5	1.2	灰色
191	石鏃	4区9064	2層	黒曜石	29.5	19.0	4.0	1.6	剥片鏃
192	石鏃	4区9064	2層	安山岩	29.0	15.4	4.5	2.1	灰色、五角形
193	石鏃	4区8864	2層	黒曜石	24.0	15.0	3.5	1.0	五角形
194	石鏃	4区9264	2層	黒曜石	27.0	15.5	3.0	1.2	局部磨製
195	石鏃	4区9266	3層	黒曜石	(26.0)	22.0	5.5	(3.3)	先端欠
196	石鏃	4区8862	2層	黒曜石	23.5	16.0	3.0	0.9	剥片鏃
197	石鏃	8区9068	3層	黒曜石	19.0	13.5	2.5	0.6	片脚欠
198	石鏃	2区8664	2層	黒曜石	(26.5)	20.5	3.0	(2.3)	先端欠、局部磨製
199	石鏃	7区9466	3層	安山岩	(20.0)	(16.0)	2.0	(0.7)	灰色
200	石鏃	3区		黒曜石	(26.0)	(17.5)	4.5	(1.9)	
201	石鏃	10区0474	4層上面	黒曜石	(27.5)	19.0	3.0	(1.0)	
202	石鏃	4区9064	2層	黒曜石	(42.0)	(19.5)	4.0	(3.3)	大型
203	スクレイパー	7区9464	3層	黒曜石	22.4	24.2	5.7	3.4	ラウンドスクレイパー
204	スクレイパー	3区8866		黒曜石	(29.5)	24.5	8.0	(5.5)	灰色
205	スクレイパー	5区9264	2層	安山岩	60.5	25.5	13.0	16.0	
206	スクレイパー	4区9064	3層	黒曜石	46.1	27.1	8.7	10.5	
207	スクレイパー	7区9664	3層	安山岩	(47.1)	38.0	7.9	(11.4)	
208	石匙	5区No.9		安山岩	31.0	(54.8)	10.0	(11.3)	片側欠
209	スクレイパー	7区9664	2層	安山岩	64.9	66.4	13.1	53.0	
210	スクレイパー	7区9664	3層	黒曜石	81.0	52.5	17.0	51.6	
211	石核	B2区9274-2	3層②	黒曜石	21.2	28.6	21.0	13.6	
212	石核	5区9464	3b層	黒曜石	38.0	30.2	17.2	20.7	灰色
213	石核	4区8862	攪乱	黒曜石	56.0	64.0	52.0	160.4	
214	不明石器	4区9264	SX02 No.7	黒曜石	58.0	12.2	9.5	7.5	全面スリガラス状 (被熱?)
215	打製石斧	5区9460	3層	玄武岩	92.5	53.0	16.5	85.0	縄文
216	打製石斧	7区9464	4層	玄武岩	115.9	56.2	38.0	204.5	
217	打製石斧	5区9260	3層	安山岩	117.6	(56.2)	14.3	(127.0)	縄文
218	打製石斧	4区9264	2層	安山岩	132.0	73.5	21.2	261.6	縄文、片側縁刃なし
219	打製石斧	7区9664	2層	玄武岩	131.4	73.9	22.2	291.4	
220	打製石斧	5区9460	3層	玄武岩	144.5	76.5	17.0	209.6	縄文
221	打製石斧	4区9064	3層?	玄武岩	134.0	72.4	19.2	218.7	縄文
222	打製石斧	9区0068	3層	玄武岩	158.6	78.1	13.4	206.4	
223	打製石斧	3区8864	流路C	玄武岩	(90.1)	62.3	24.2	(172.5)	縄文
224	打製石斧	3区8866	2層下 流路	玄武岩	(61.0)	89.5	17.0	(115.9)	縄文
225	打製石斧	3区8868	流路D下層	玄武岩	(76.0)	(71.5)	(12.5)	(79.5)	縄文
226	打製石斧	4区9064	3層	玄武岩	(148.5)	117.6	29.4	(727.0)	縄文、大型
227	打製石斧	4区9264	2層	安山岩	(165.3)	113.4	25.3	(802.0)	縄文、大型、片側縁刃なし
228	打製石斧		SP31	玄武岩	(103.0)	103.0	14.0	(192.9)	



第59図 TAK201303調査区の縄文時代包含層出土土器実測図①(S=1/3)

(8) TAK201303調査区の包含層出土遺物

①土器

a. 第I群土器(第59図229～243)

229～235は山形押型文を施文する土器である。229は口縁部が外反する深鉢で、外面には振幅の弱い山形押型文を横位から斜位に施文する。口縁部内面には口唇部から垂直に原体条痕が伸び、さらにその下位に外面と同様の原体による山形文を横位に施文する。230は直線的に外反する口縁部で、山形押型文を外面に施文するが、内面は無文である。232は口縁部直下と思われ、内面に外反する屈曲部がわずかに残る。外面は山形文、内面は原体条痕とその下に外面と同じ原体による山形文が残る。233・234は同一個体と思われる。いずれも外面には山形文を横位に施文する。233は口縁部直下の破片で、内面には外面と同様の原体で山形文を横位に施文する。235は口縁部付近の破片で、内外面に山形文を横位に施文する。236～240は楕円押型文を施文する。いずれも粒が小さい。横方向の施文が



図版18 TAK201303調査区の縄文時代包含層出土土器①

多く、内面はなでる。**238**は大きく外反する頸部で縦方向に施文する。壺形土器の頸部かもしれない。**241**は連珠文を横位に施文し、内面にも同様の施文がある。**242**は格子目文、**243**は撚糸文である。**243**は口縁部片で、口縁端部はやや尖り気味である。内面には外面と同様の原体で横位に撚糸文を施文し、直下を強く指おさえする。

b. 第VI群土器(第59図244～245)

**244**はやや厚手の無文深鉢口縁部。胎土に雲母を多く含み、内外面とも強いなで調整である。**245**は胎土に滑石を多く含む深鉢口縁部片。横位の区画凹線の上に、凹点、斜位の凹線を施文する。

c. 第VII群土器(第60図246)

**246**は口縁部が直立し、口縁部外面に3条の沈線を施文する。胎土は空隙が多くやや多孔質である。

d. 第VIII群土器(第60図247～249)

いずれも深鉢口縁部である。内傾する頸部から直線的に外反する口縁部と考えられ、外面に4～5条の横位の沈線を施文する。**247**の口縁部下端はやや肥厚する。

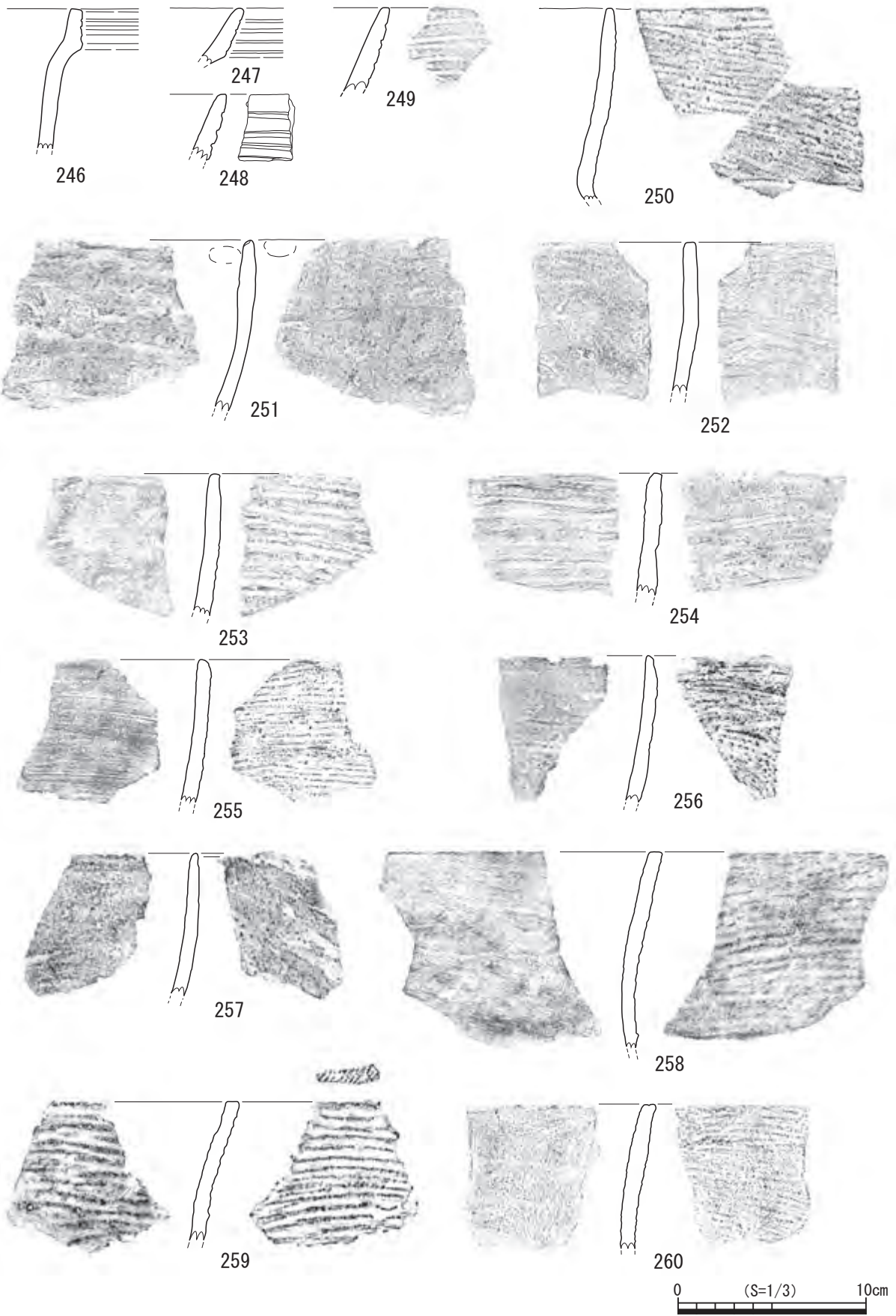
e. 第IX群土器～第XI群土器(第60図250～第68図373)

縄文時代晩期後半～弥生時代前期の土器を一括掲載した。深鉢と浅鉢に分けて記述する。

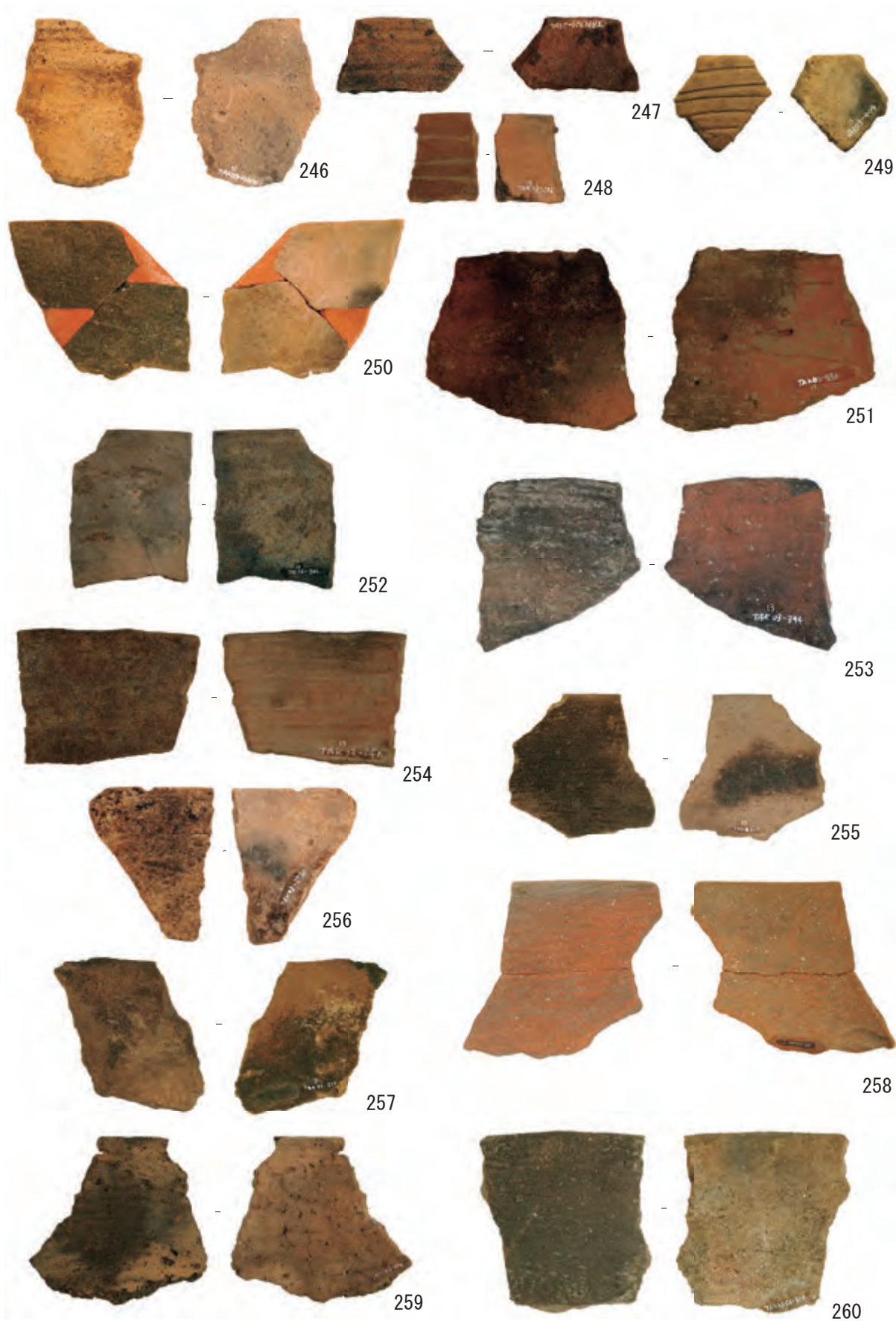
深鉢(第60図250～第63図304)

**250～261**は条痕調整が残る粗製深鉢の口縁部である。口縁部が内湾するもの(**251～257**)と、外反するもの(**250・258～261**)があり、前者は砲弾形、後者は屈曲形の深鉢に対応するだろう。**251・259**の口唇部には浅い刻みを密に入れる。**259**の外面には二枚貝条痕が明瞭に残り、胎土は空隙が多く多孔質である。

**262～269**は口縁部で、外面に沈線文を有する一群である。いずれも外反気味の器形になることから、**270～275**の胴部と組み合って屈曲形の深鉢になると推測される。**262**は外面に条痕が残るが、口縁端

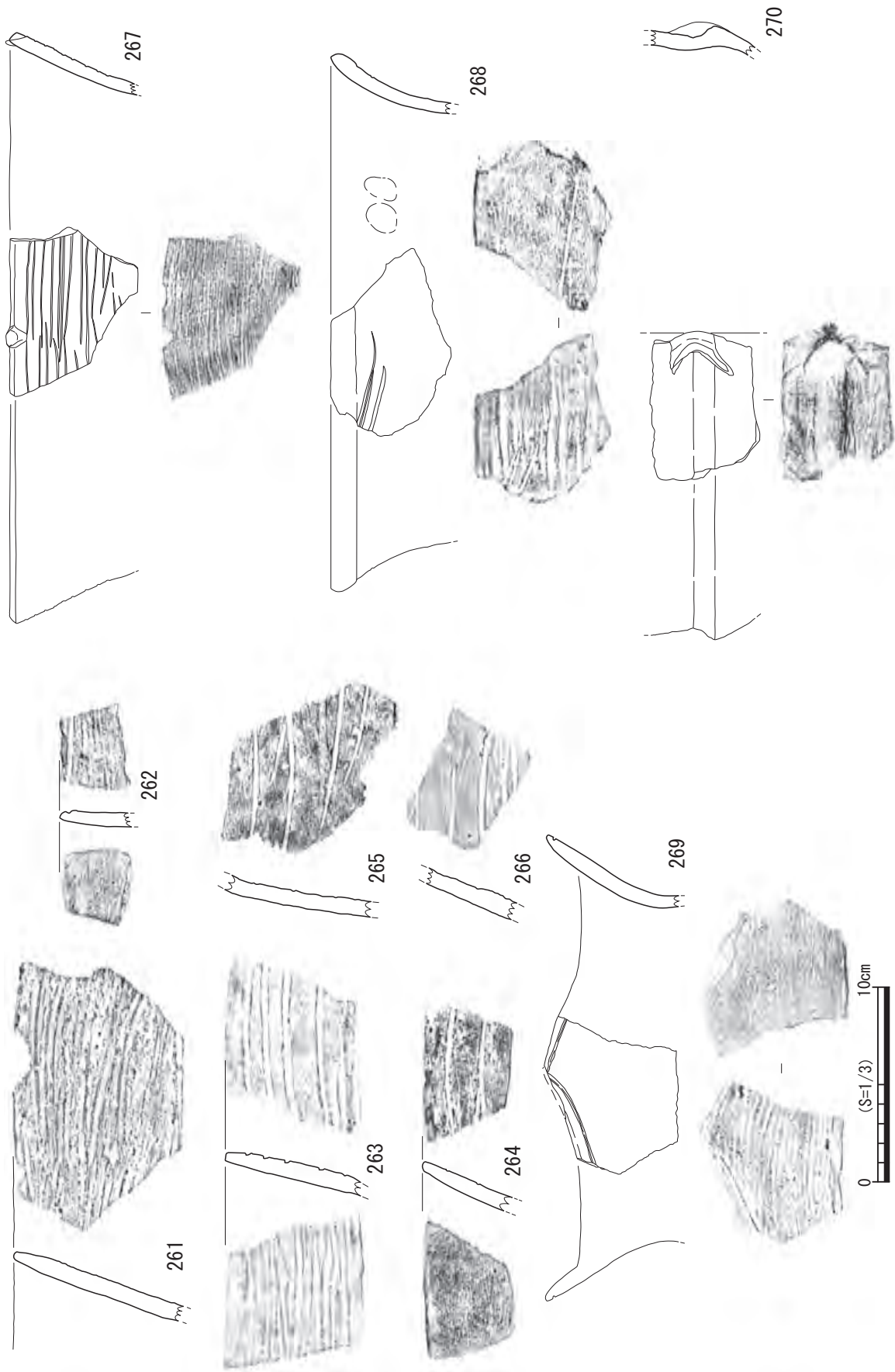


第60図 TAK201303調査区の縄文時代包含層出土土器実測図②(S=1/3)

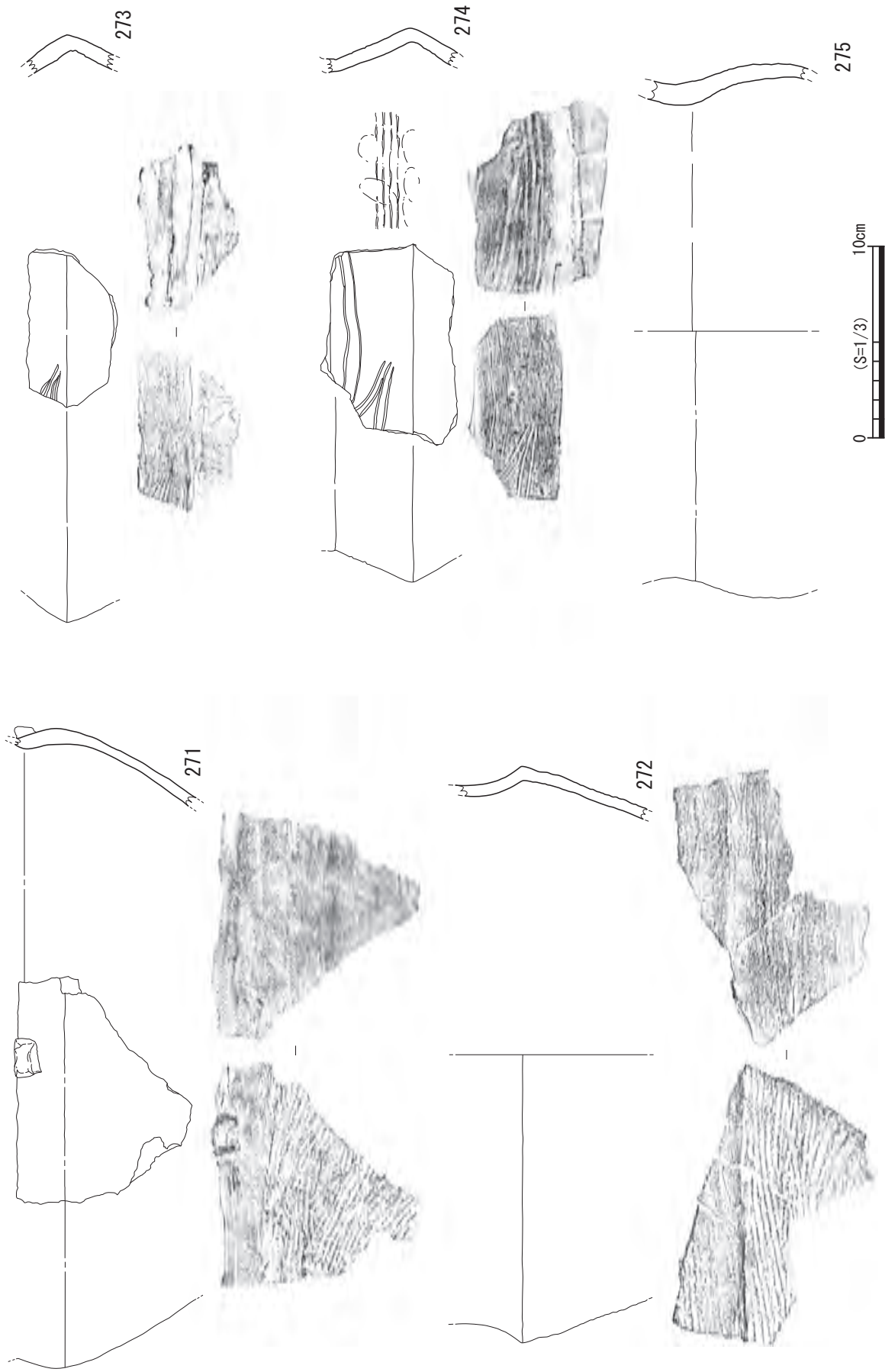


図版19 TAK201303調査区の縄文時代包含層出土土器②

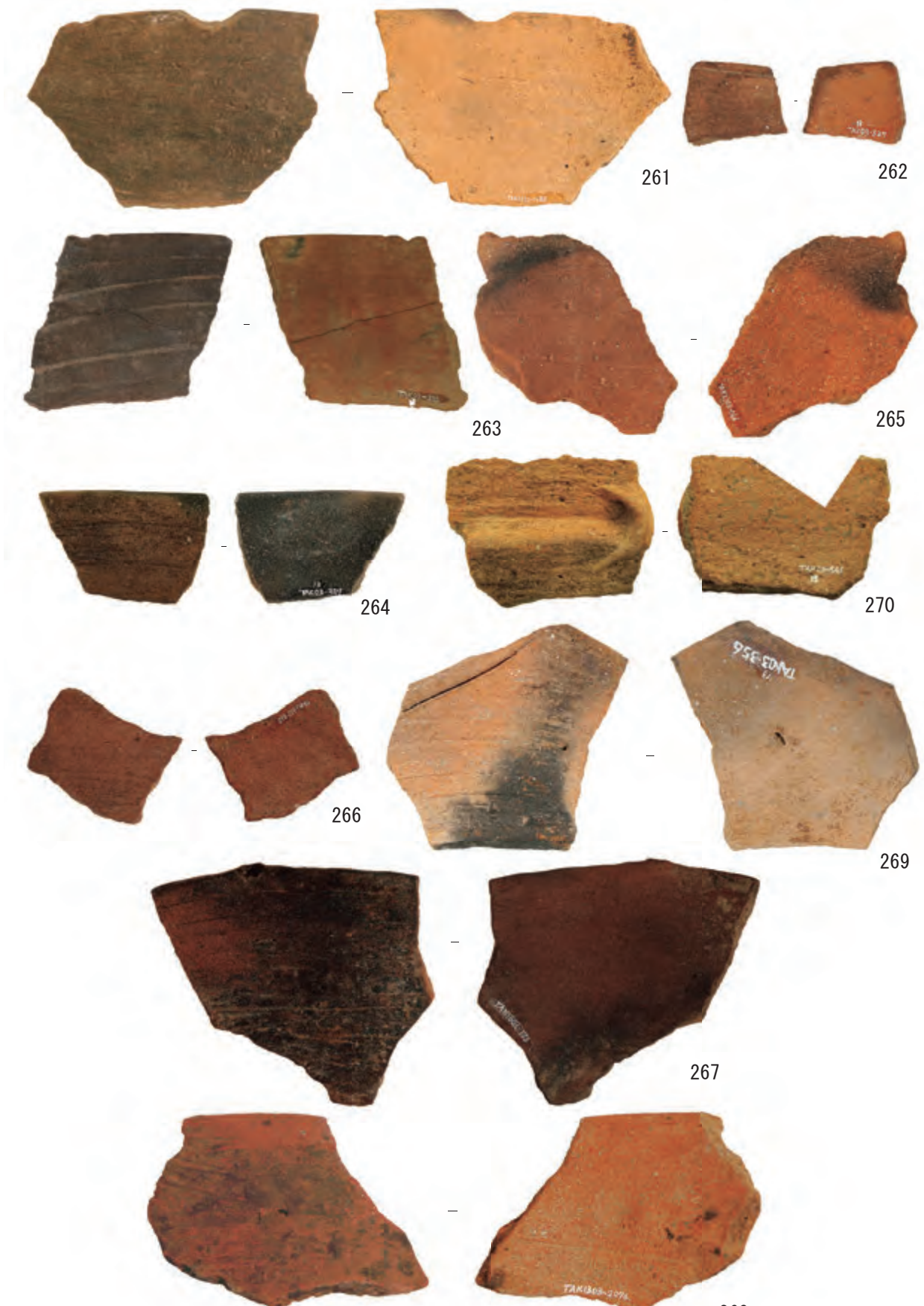




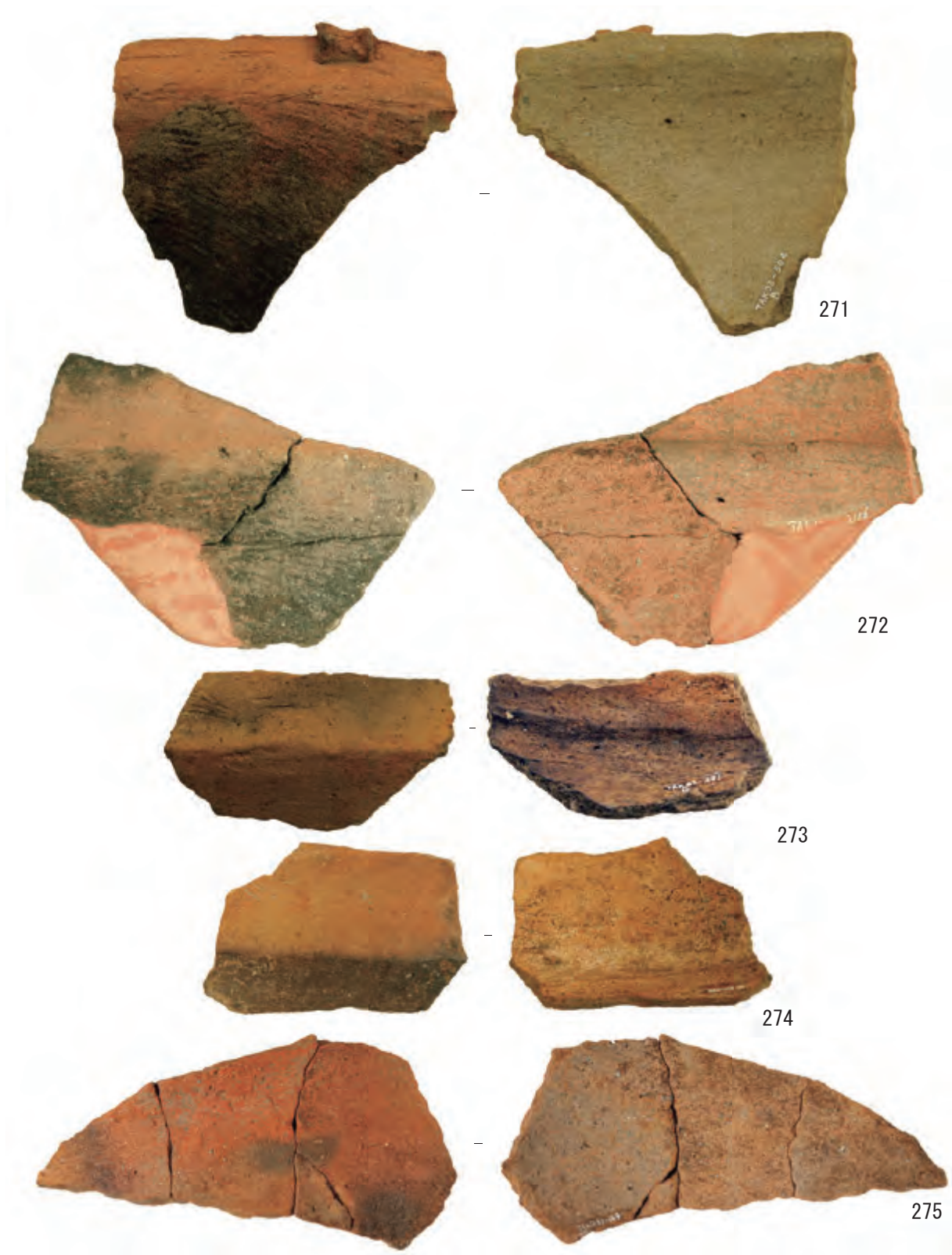
第61図 TAK201303調査区の縄文時代包含層出土土器実測図③(S=1/3)



第62図 TAK201303調査区の縄文時代の包層出土土器実測図④ (S=1/3)

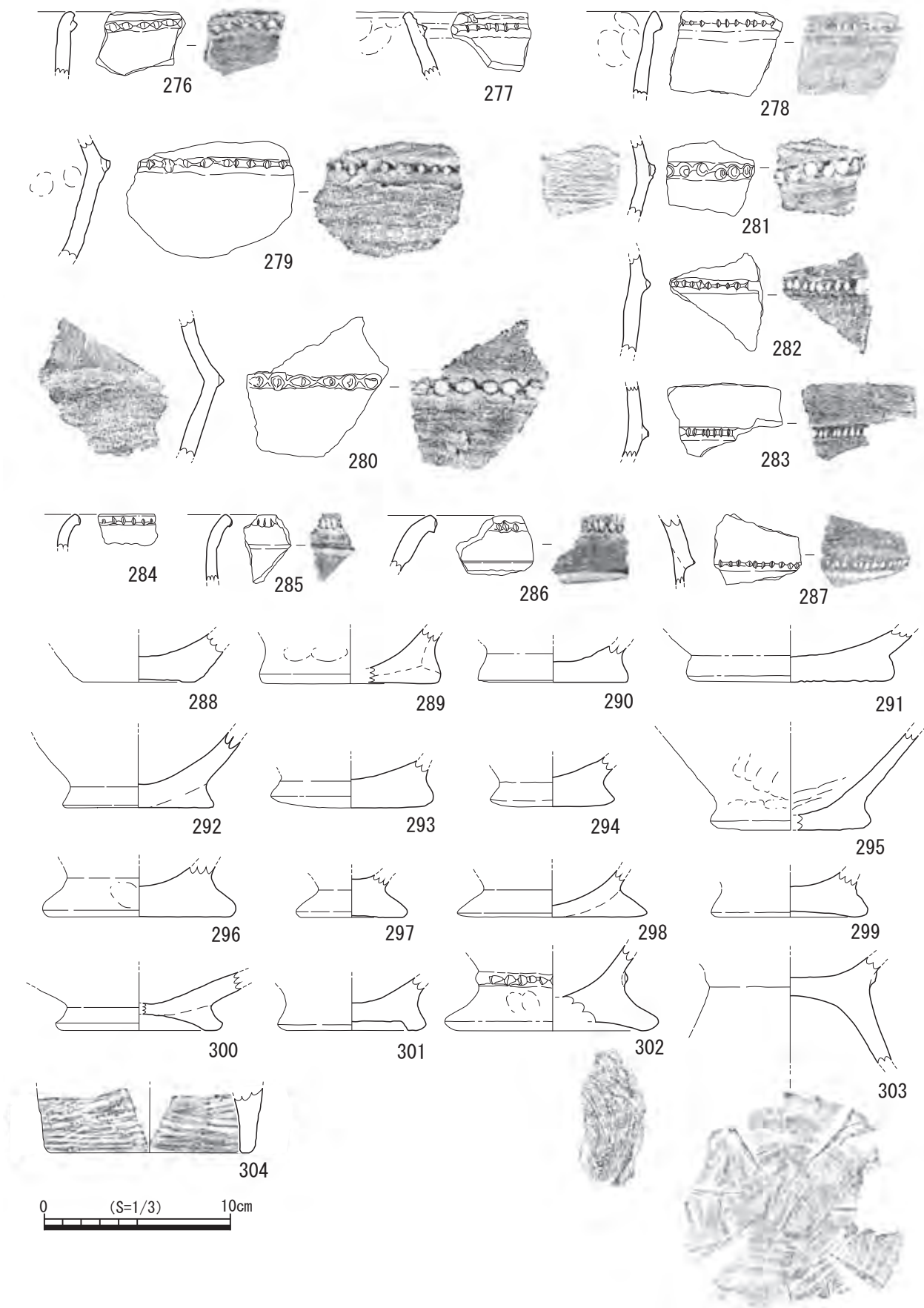


図版20 TAK201303調査区の縄文時代包含層出土土器③



図版21 TAK201303調査区の縄文時代包含層出土土器④

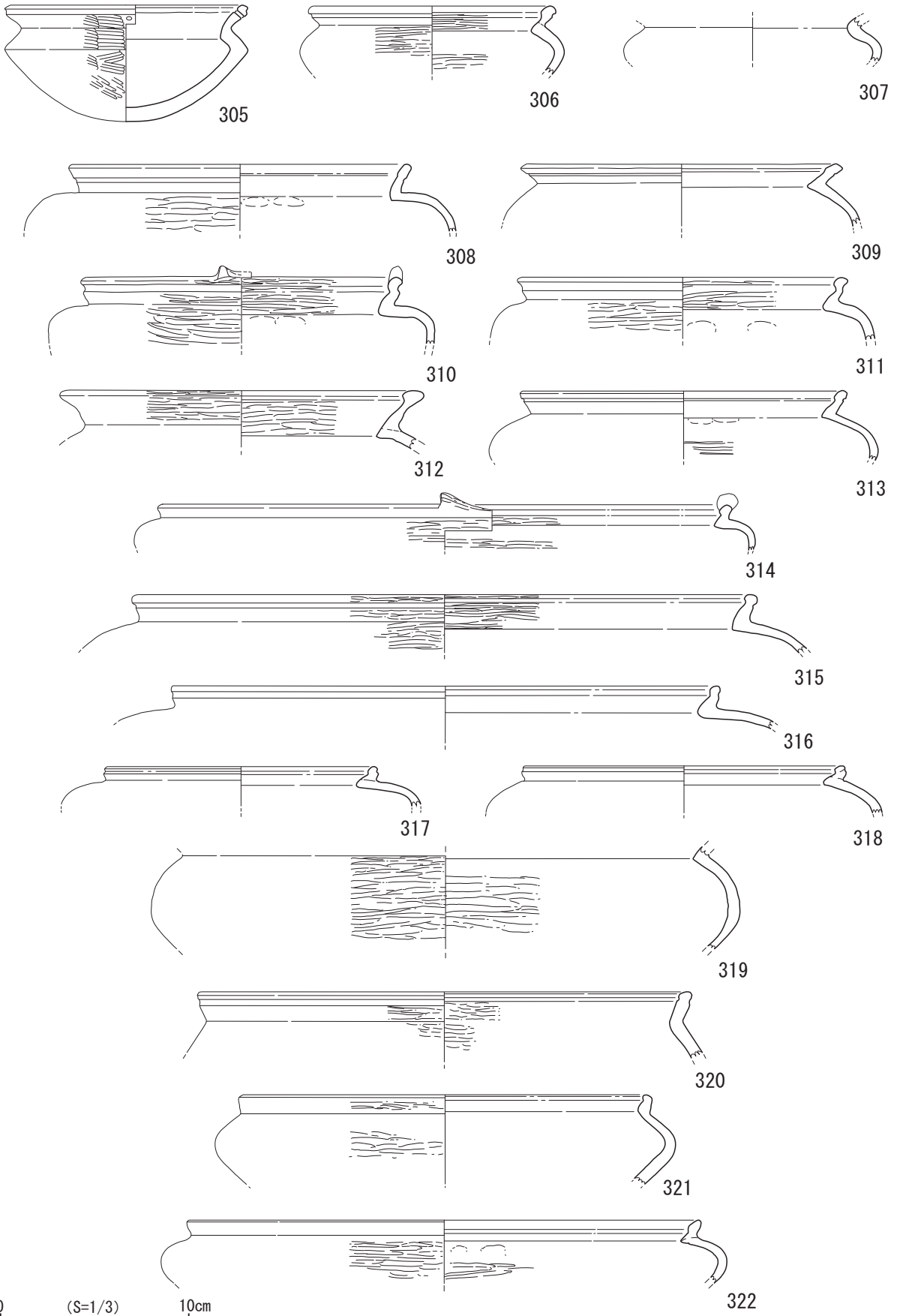
部直下に沈線1条を施文する。**263**～**266**はなで調整した口縁部外面に、横位の沈線を多条に施文したものである。**263**の内面には条痕が残る。**267**は平口縁だが口唇部に凹部をつくり、外面を細沈線で埋める。沈線は横位に施文するが、その多くが口唇部の凹点付近で切れるものが多い。**268**は口唇部が外側に肥厚し、口縁部に斜め方向の沈線2条が確認できる。**269**は大ぶりの波状口縁をなし、口唇部に



第63図 TAK201303調査区の縄文時代包含層出土土器実測図⑤ (S=1/3)



図版22 TAK201303調査区の縄文時代包含層出土土器⑤

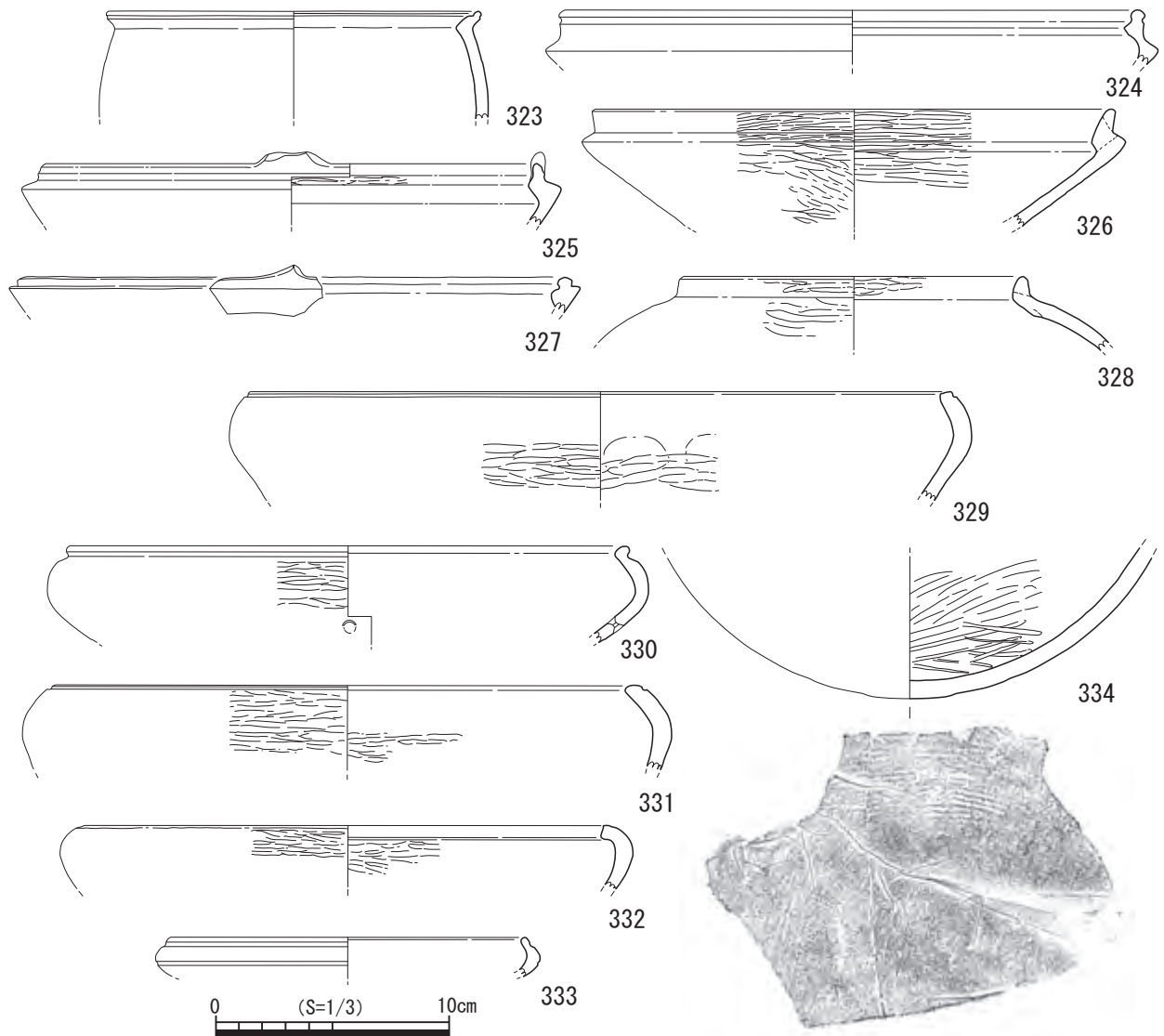


第64図 TAK201303調査区の縄文時代包含層出土土器実測図⑥(S=1/3)



図版23 TAK201303調査区の縄文時代包含層出土土器⑥



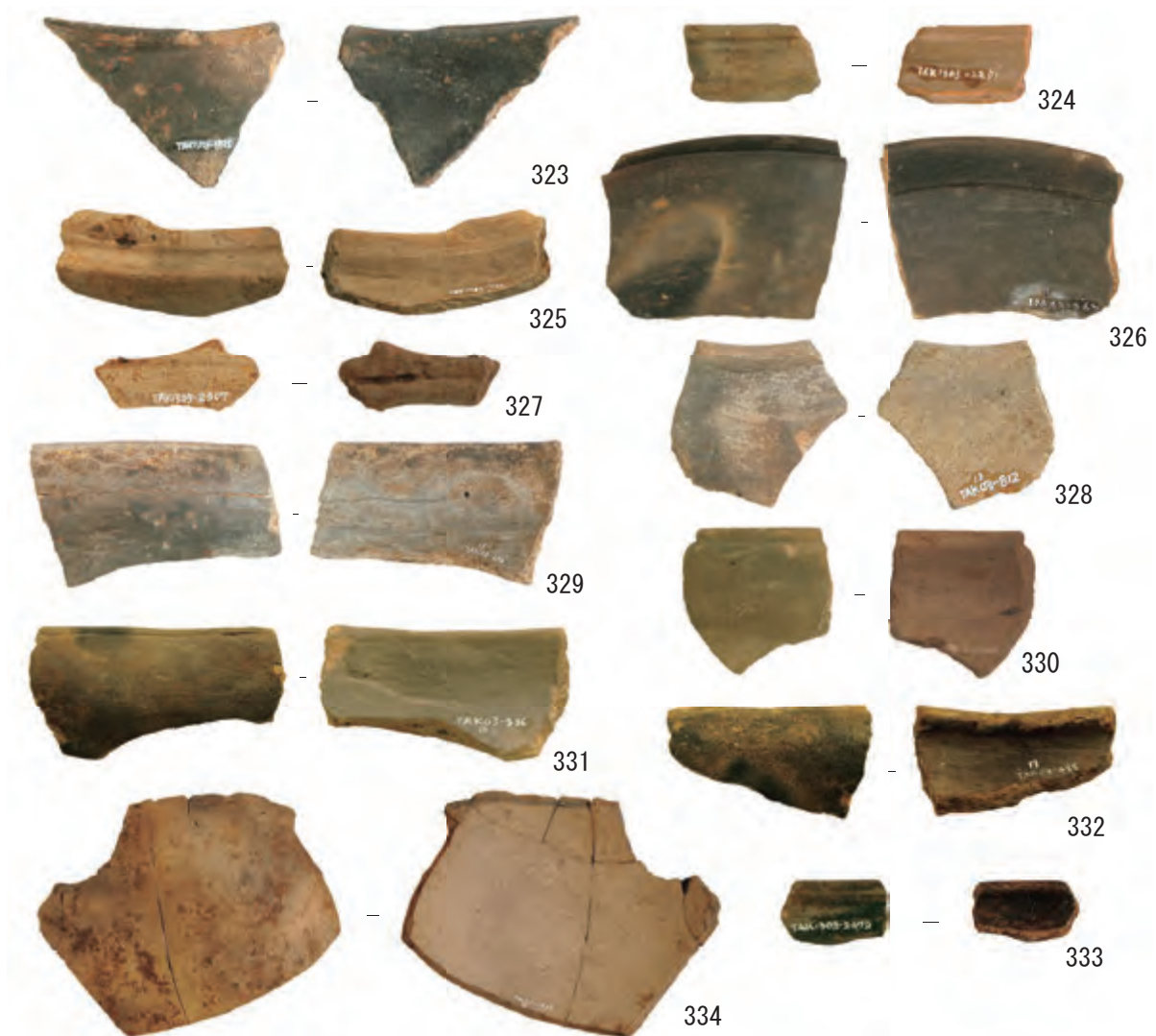


第65図 TAK201303調査区の縄文時代包含層出土土器実測図⑦(S=1/3)

沿って細くて深い沈線を1条めぐらす。外面には条痕が残る。**270～275**は屈曲する胴部片である。外傾する胴部から短く頸部が内傾し、口縁部が長く外反する器形と考えられ、胴部との屈曲部に稜を持つもの(**270・272～274**)と、丸みを持つもの(**271・275**)がある。胴部には条痕が残るものの、頸部はそれをなで消して平滑にするものが多い(**271・272**)。**270・271**の頸部には、それぞれ蝶ネクタイ状、俵形の突起がつく。また**273・274**の頸部には、横位もしくは斜位の細沈線を多条に施文する。

**276～283**は刻目突帯文土器深鉢である。口縁部では、刻目突帯が口唇部からやや下がった位置にあるもの(**276・277**)と、口唇部に接するもの(**278**)がある。いずれもヘラ刻みだが、**276**は深く密に、**277・278**は浅く疎らに施文する。胴部片はいずれも屈曲部に刻目突帯を貼り付けるが、屈曲がきついもの(**279・280**)と、緩やかなもの(**281～283**)がある。**280・281**は棒状工具による大ぶりの刻み、**279**はヘラによるしっかりとした刻みを持つが、**282・283**は浅いヘラ刻みである。調整は横方向のなで調整が主体だが、**281**の内面には条痕が残る。

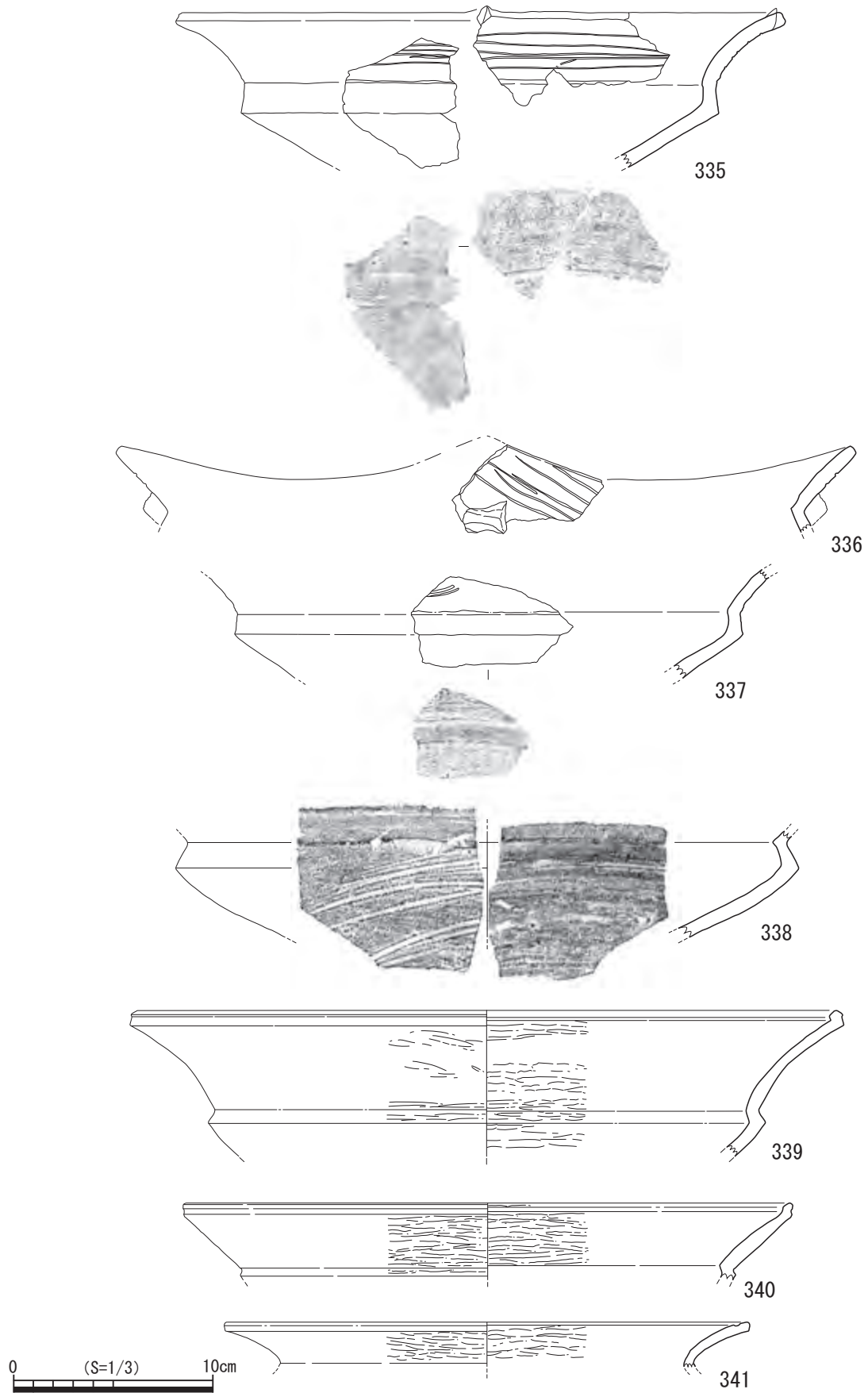
**284～287**は板付式系土器である。**284～286**は外反する甕口縁部片で、平坦な口唇部の外側角に浅いヘラ刻みを施す。**285・286**は胴部との境に段をもち、口縁部がやや肥厚する。**287**は胴部片で、内傾



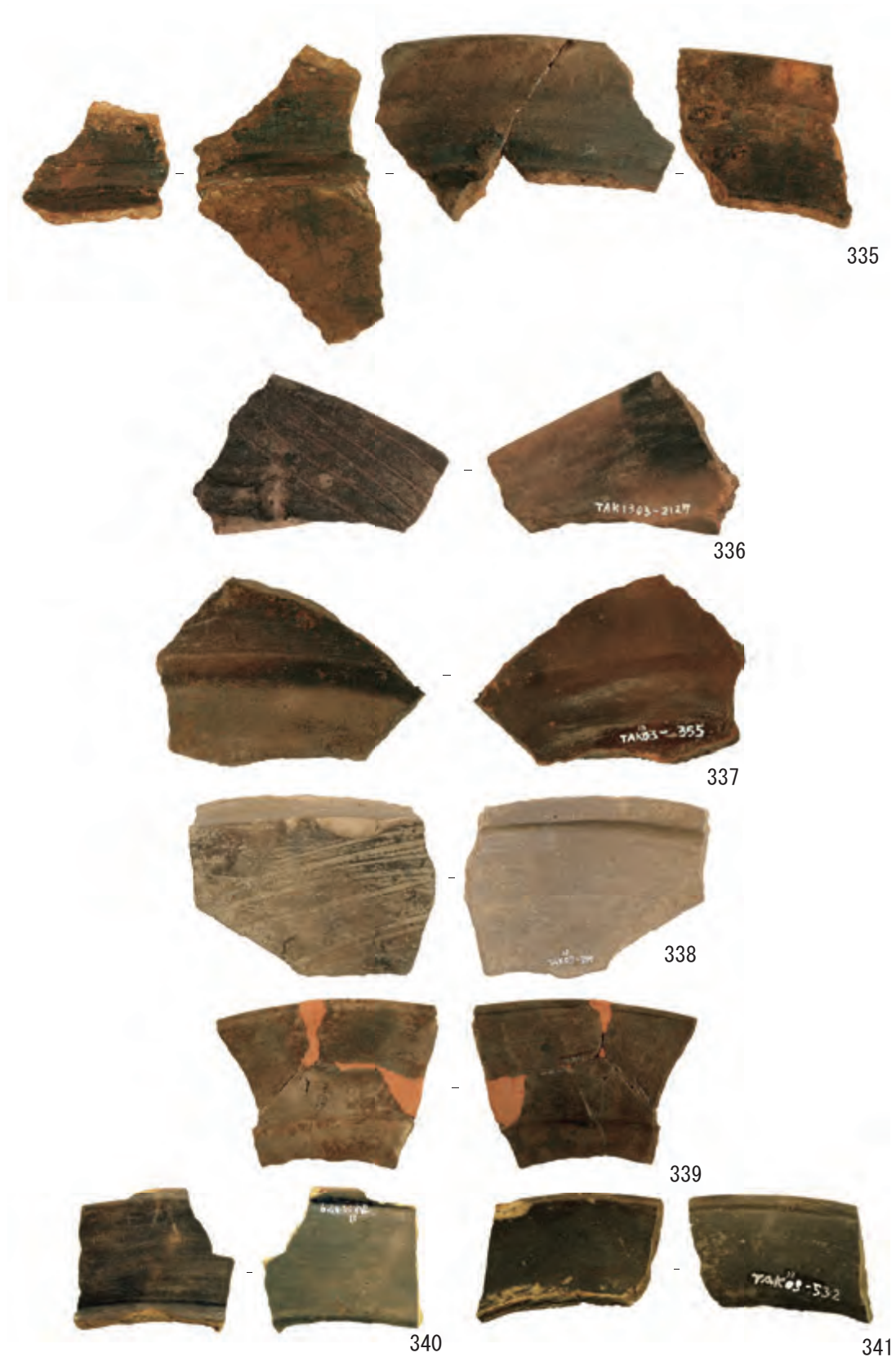
図版24 TAK201303調査区の縄文時代包含層出土土器⑦

する胴部上半と直立する胴部下半の境に段を持つ。段の部分は粘土紐の接合部分に相当し、胴部上半に厚手の粘土板を外傾接合することで段を形成していることが分かる。段には浅いヘラ刻みを疎らにつける。

288～302は深鉢底部である。底面から胴部が斜めに外反して立ち上がるもの(288)、底部外面が外側に張り出すもの(289～302)があり、後者は張り出しが弱いもの(289～295)と強く張り出すもの(296～302)がある。288はやや上底になり、第Ⅶ群土器に伴う深鉢底部であろう。底部外面の張り出しが弱い一群はいずれも平底であるが、張り出しが強いものには上底や凹底が伴う(299～302)。302は底部外側の張り出しが特に強く、胴部の立ち上がり部分に刻目突帯を貼り付ける。刻目突帯文土器に伴う底部であろう。303は高坏脚部か。坏部の立ち上がり付近に突帯を巡らせており、刻目突帯文土器に伴う高坏と考えられる。脚部内面には条痕調整が残る。304は直立気味に立ち上がる脚部であろうか。内外面に条痕調整が残る。深鉢や鉢口縁部にしては器壁の厚さの割に口径が小さいことや、内面の傾きから器高が低すぎるため脚部とした。



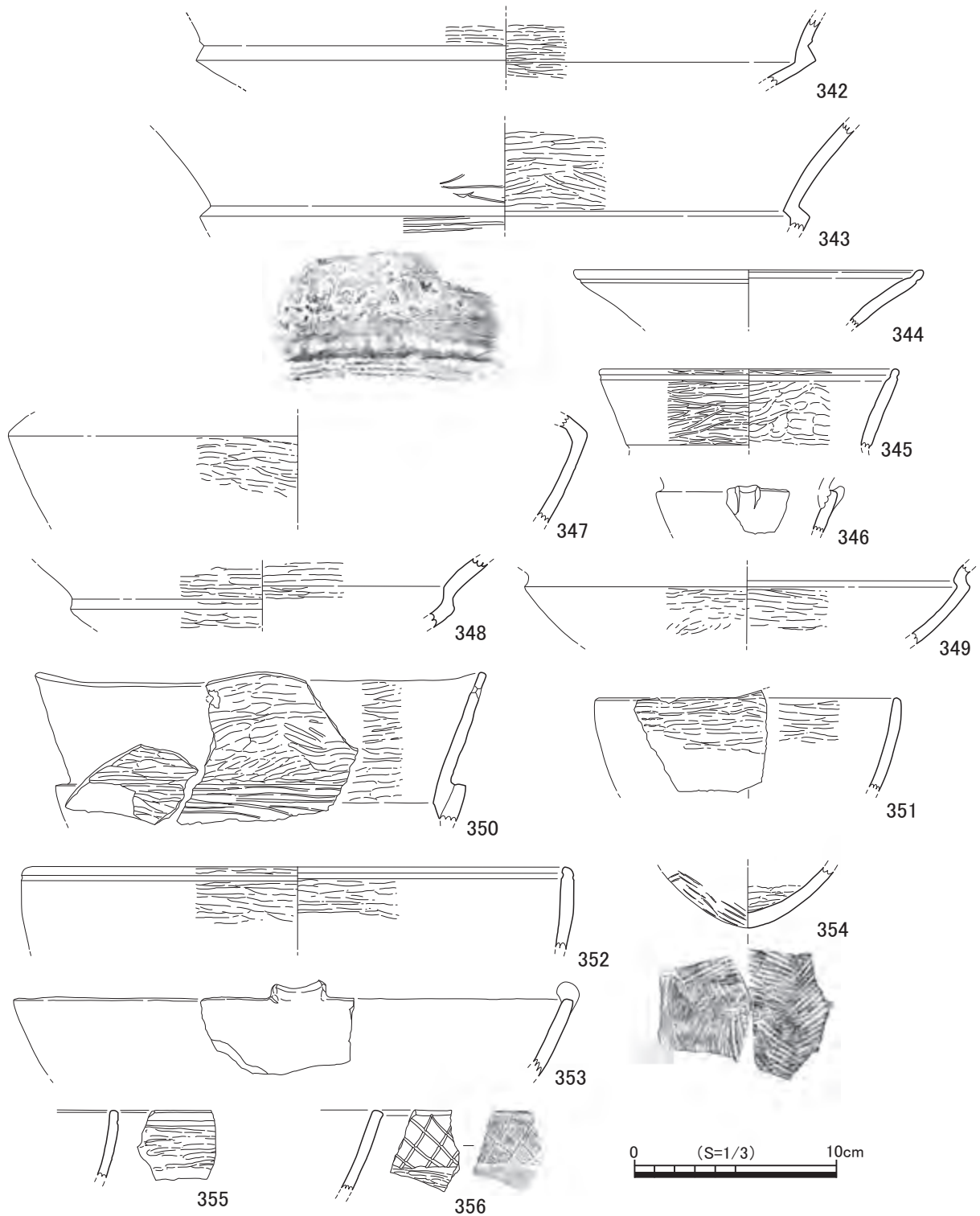
第66図 TAK201303調査区の縄文時代包含層出土土器実測図⑧(S=1/3)



図版25 TAK201303調査区の縄文時代包含層出土土器⑧

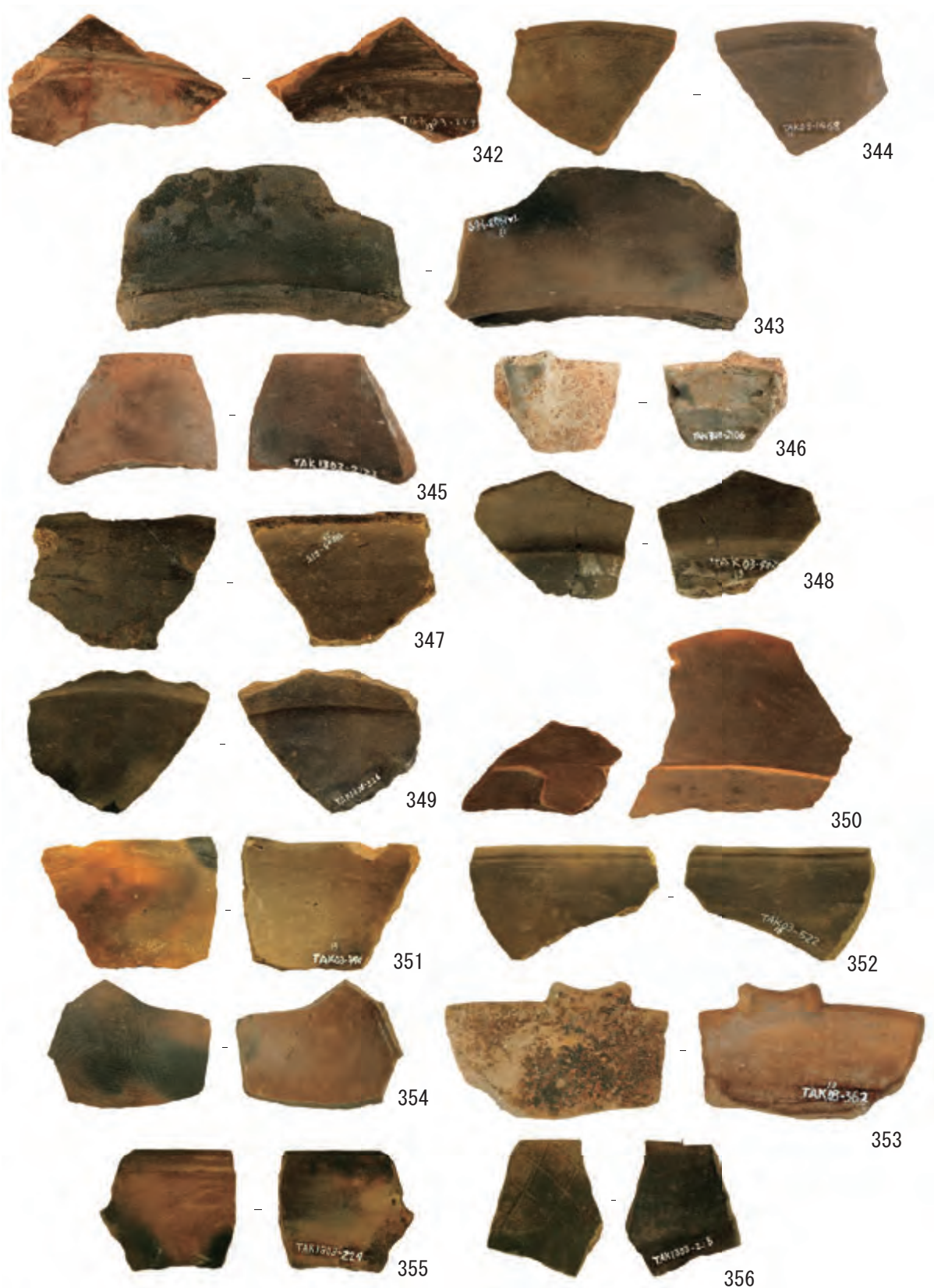
浅鉢ほか(第64図305～第68図373)

305～333は頸部が短い一群である。305～307は小型で、短く外反する頸部と口縁部は、外面の沈線、内面の段で区別される。305は半周ほど復元できた個体で、胴部張り出し部分が屈曲して稜を持ち、



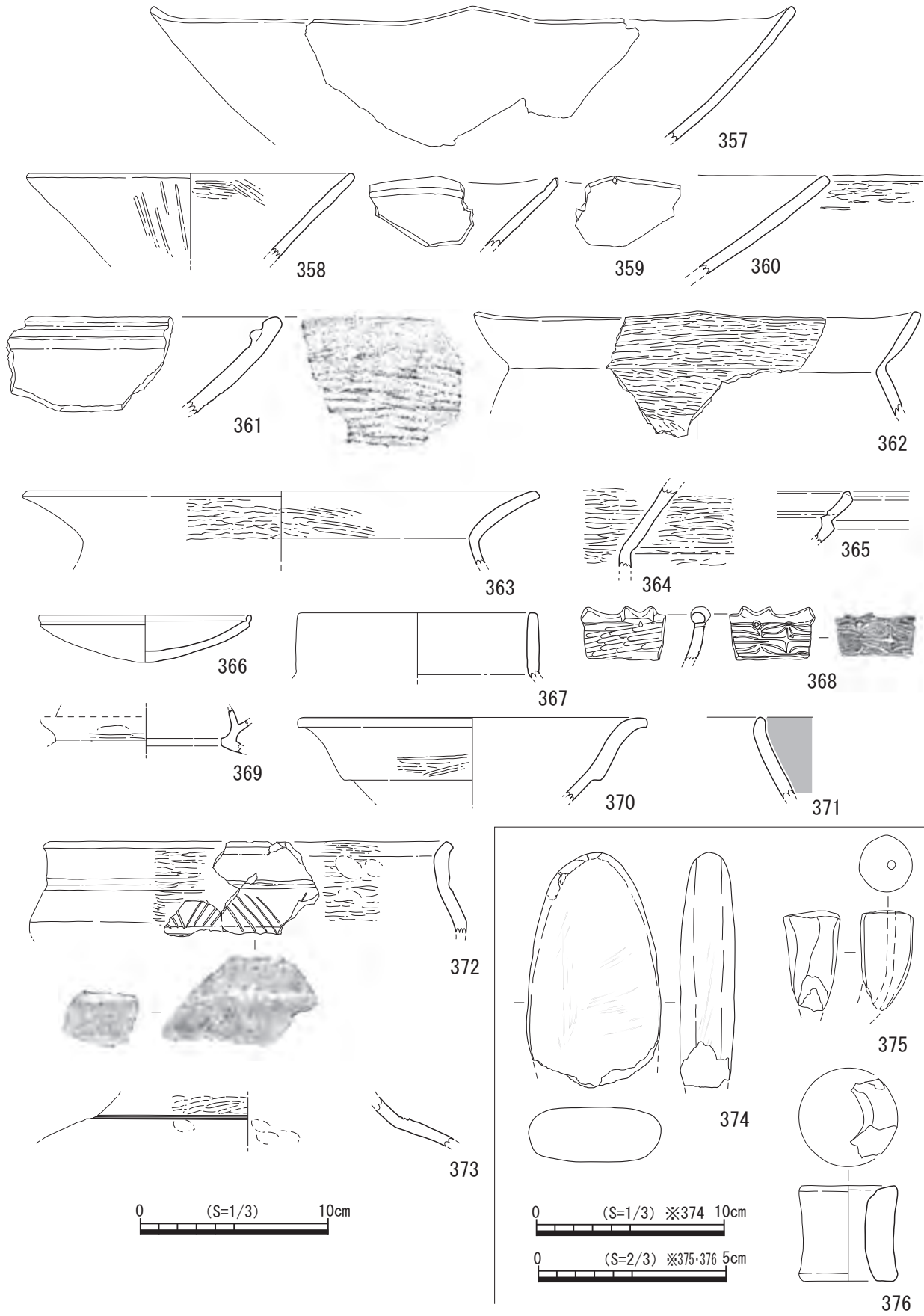
第67図 TAK201303調査区の縄文時代包含層出土土器実測図⑨ (S=1/3)

口唇部付近に穿孔がある。底部は丸底となる。**308~319**は胴部が丸みを持って外側に大きく張り出すもの。頸部と口縁部の境には、外面に沈線、内面に段を有する。内外面ともヘラミガキにより丁寧に調整する。**314**は口縁部に鱗状突起がつく。**320**は胴部の張り出しが弱くなり、胴部から頸部の屈曲が鈍角をなすもの。口縁部と頸部の境には内外面とも沈線が残る。**321・322**は胴部の張りは健在だが、頸部と口縁部の境にあった外面沈線がなくなっている。**323~327**は、胴部の張り出しが弱くなったも

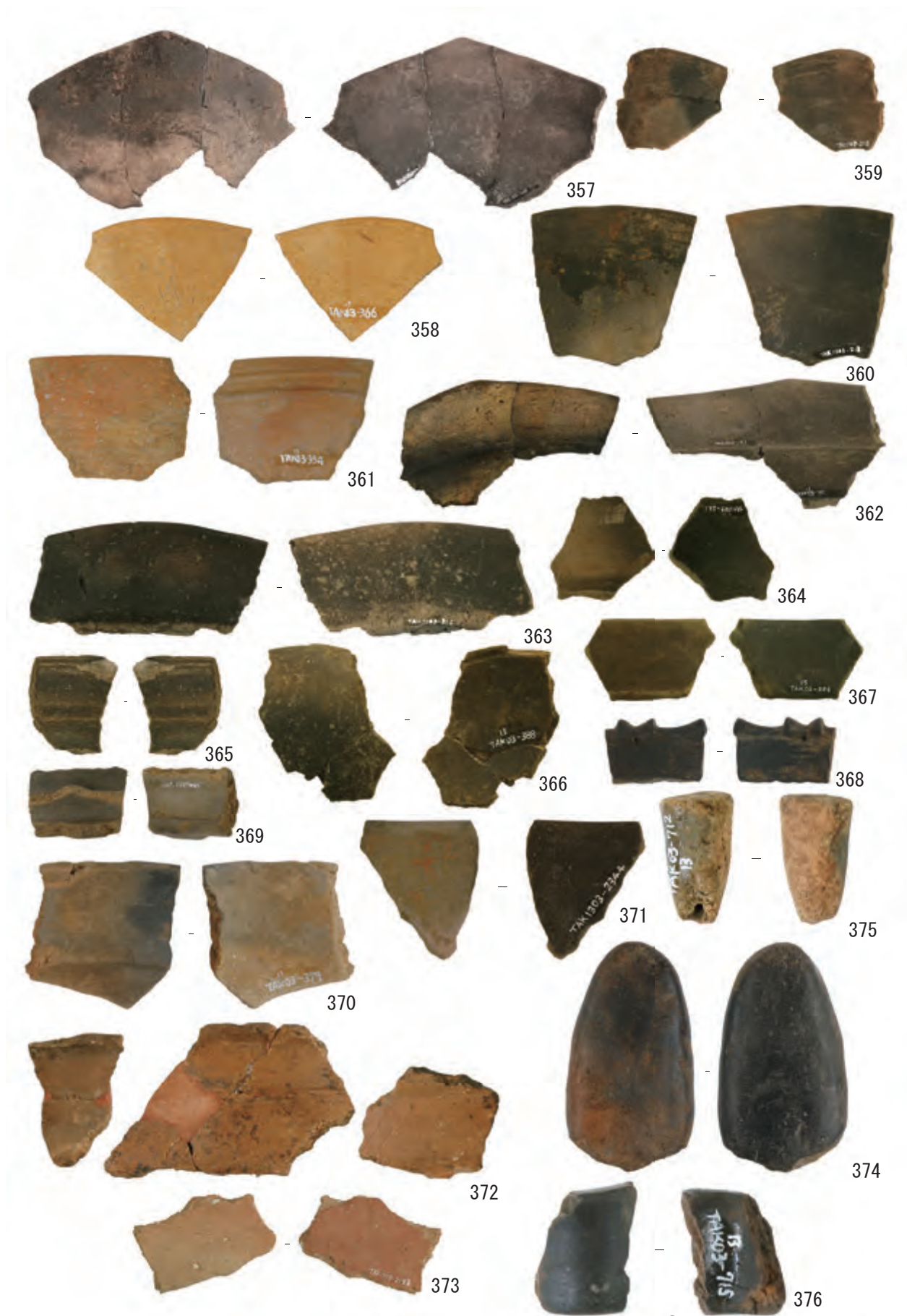


図版26 TAK201303調査区の縄文時代包含層出土土器⑨

のである。323は胴部の張りがなくなったもの、324～327は胴部が短く張り出してすぐに屈曲するものである。325～327では頸部と口縁部の区分も曖昧になっている。325・327には鱗状突起がつく。328～333は胴部の張り出しは健在で、口縁部～頸部が短小化したものである。328は口縁部と頸部の区別



第68図 TAK201303調査区の縄文時代包含層出土土器実測図⑩(S=1/3・S=2/3)



図版27 TAK201303調査区の縄文時代包含層出土土器⑩



がなくなり、**329～331**では口縁部と頸部がさらに短小化して、わずかに外面の沈線で区別されるのみとなり、**332**では胴部と一体化する。ただし、調整は一貫して丁寧なヘラミガキが残る。**333**は口縁部と胴部に沈線を持つ小型の浅鉢である。**334**は丸底の底部で、内面にはヘラミガキ、外面は条痕後にヘラミガキとなる。上記の浅鉢に伴う底部であろう。

**335～350**は、胴部で屈曲して頸部が長く伸びる浅鉢である。**335**は口唇部に大ぶりの凹点をもち、口縁部に横走る沈線を多重に施文する。**336・337**は胎土や焼成の特徴から同一個体と思われる。**336**は波状口縁で、波頂部から放射状に沈線を施文する。屈曲する口縁部と頸部の境に蝶ネクタイ状の突起を貼り付ける。**337**は屈曲する頸部を強くなでて頸部との境が段状をなす。頸部に沈線がわずかに確認できる。**338**は屈曲する胴部で外面に条痕調整が残る。**339～341**は外反する頸部から口縁部。**339・340**は口縁部が短く立ち上がり、内外面に沈線や段をつける。**341**は口縁部と頸部の区別が内面の沈線のみとなる。**342・343・347～349**は屈曲する胴部片。いずれもヘラミガキにより平滑に整えるが、**343**は胴部に横位の条痕が残り、頸部に沈線文の一部が確認できる。**344・345**は小型の口縁部片。頸部と口縁部を内外面の沈線で区分する。**346**はミニチュアの浅鉢胴部。屈曲部に矩形の突起を貼り付ける。**350**は波状口縁で口縁部に補修孔を持つ。内外面とも丁寧なヘラミガキで調整するが、屈曲部の接合面に現れた擬口縁には条痕調整が見える。また、頸部と胴部は、胴部の内側に頸部の粘土板を重ねて接合していることが分かる。

**351～361**は鉢である。いずれもヘラミガキによる丁寧な調整である。**351～356**は内湾気味に立ち上がるボウル状の鉢。**351・353**の口縁部には、それぞれ鱗状突起、リボン状突起がつく。**352・355**は口縁部に沈線を施すもので、**352**は内外面に、**355**は外面のみである。**354**は鉢底部であろう。底部は尖り気味の丸底で、外面に放射状の条痕が残る。**356**は口縁部外面に格子目状の沈線文を施文し、直下を強くヘラミガキしてやや段状となる。**357～361**は単純に外反する鉢。**357・359**は浅い波状口縁である。**359**は波頂部に小さな凹点、内面には口唇部に沿って浅い凹線を施す。**361**は口縁部内面に2条の強い凹線を施文し、突帯状の張り出しを作る。**362～364**は口縁部が屈曲して外反する鉢。いずれもヘラミガキにより入念に調整する。**366**は器高が低く皿に近い。**367**は直口口縁の壺か。**368**は口縁部は内湾気味で、口唇部に山形突起を持ち、突起の直下を穿孔する。外面には三叉文に類似した沈線文を施文する。**369**は壺形土器か。張り出しの強い胴部から頸部が丸く内湾し、外面に突起がつく。内外面とも丁寧な調整で、焼成は他の浅鉢と同様である。**370**は鉢口縁部。口唇部が外反し、外面には胴部との境に段を持つ。**371～373**は壺形土器。**371**は口縁部がわずかに外反し、外面は丹塗り。**372**は張り出しの弱い胴部から頸部が内傾し、直立気味に口縁部が立ち上がるもので、頸部と口縁部は外面の沈線で区別される。頸部外面に4条単位の沈線で連続山形文を施す。板付式の壺形土器の影響を受けた在地土器であろう。**373**は胴部が張る壺で頸部との境に3条の細沈線を施す。

#### f. 土製品(第68図374～376)

**374**は不明土製品。先端部を欠損するが、扁平な撥形となる。全体を丁寧なヘラミガキで整え、部分的に鋭利なヘラ状工具で研磨して浅い沈線状をなす。全体の形状や大きさから推測して、磨製石斧を模したものか。**375**は垂飾品。下端部がやや湾曲する円錐形で、面取りした上端から先端部にかけて穿孔する。**376**は垂飾品か。円筒形の筒状を呈するが、中位がやや内湾して緩やかにくびれることから、耳栓の可能性もある。(中尾)

第17表 TAK201303調査区包含層出土土器観察表①

図版番号	出土区グリッド	層位	器種	部位	色調		調整		焼成	胎土	備考
					外面	内面	外面	内面			
229	A5区 8674-13	4層② P-19	深鉢	口縁部	灰黄褐(10YR6 2)	灰黄褐(10YR5 2)	山形押型文	山形押型文、ナデ	良好	雲母、角閃石、砂粒	
230	A5区 8874-6	3層③ P-19	深鉢	口縁部	暗赤褐(2.5YR3 3)	暗赤褐(2.5YR3 2)	山形押型文	ナデ	良好	雲母、砂粒	山形押型文
231	A5区 8674-13	3層④	深鉢	口縁部	褐(7.5YR4 4)	褐(7.5YR4 4)	山形文	原体条痕、山形文	良好	雲母、角閃石、砂粒	
232	A5区 8674	2層 SD09	深鉢	口縁付近	にぶい橙(7.5YR7 3)	にぶい橙(7.5YR7 3)	山形押型文	原体条痕、山形押型文	良好	長石、石英、雲母、角閃石	
233	A5区 8874-6	3層	深鉢	胴部	灰黄褐(10YR5 2)	にぶい黄橙(10YR6 4)	山形押型文	山形押型文、ナデ	良好	雲母、砂粒	
234	A4区 8674-8672	3層	深鉢	胴部	にぶい黄橙(10YR7 3)	にぶい黄橙(10YR7 4)	山形押型文	ナデ	良好	長石、石英、雲母、角閃石	
235	A5区 8674-14	3層	深鉢	胴部	黄橙(10YR8 6)	黄橙(10YR8 6)	山形押型文	山形押型文	良好	石英、角閃石	楕円押型
236	B2区	3層②	深鉢	胴部	灰黄褐(10YR6 2)	浅黄橙(10YR8 3)	楕円押型文	ナデ、指押さえ	良好	雲母、角閃石、砂粒	
237	A5区 8874-5	3層②	深鉢	胴部	褐灰(10YR6 1)	浅黄橙(7.5YR8 3)	楕円押型文	ナデ	良好	雲母、角閃石、砂粒	
238	A5区	SP488	深鉢	胴部	明黄褐(2.5Y7 6)	にぶい黄(2.5Y6 4)	楕円押型文	ナデ	良好	砂粒	
239	B1区 9076	3層	深鉢	胴部	褐(7.5YR4 3)	灰褐(7.5YR4 2)	楕円押型文	ナデ	良好	雲母、角閃石、砂粒	
240	A5区 8674	北側3層	深鉢	胴部	明赤褐(5YR5 8)	にぶい赤褐(5YR5 3)	楕円押型文	ナデ	良好	雲母、角閃石、砂粒	
241	B区 9274-8	3層②	深鉢	胴部(口縁付近)	にぶい黄褐(10YR6 3)	にぶい黄橙(10YR6 3)	連続文押型文	原体条痕、ナデ	良好	雲母、角閃石、砂粒	
242	A5区 8874-1	南側ベルト3層③	深鉢	胴部	浅黄橙(7.5YR8 4)	黒褐(7.5YR3 1)	格子目押型文	ナデ	良好	雲母、角閃石、砂粒	
243	B1区 9074-7	3層② P-5	深鉢	口縁部	にぶい橙(7.5YR7 3)	にぶい橙(5YR6 4)	燃糸文	燃糸文、ナデ	良好	長石	
244	A区	東壁トレンチ3層	深鉢	口縁部	褐(7.5YR4 6)	にぶい橙(7.5YR6 4)	ナデ	ナデ	良好	雲母、石英、砂粒	
245	B1区 9074-7	南側トレンチ3層②	深鉢	口縁付近	にぶい橙(7.5YR5 4)	橙(7.5YR7 6)	ナデ	ナデ	良好	滑石	
246	C区	4層	深鉢	口縁部	橙(7.5YR7 6)	明褐灰(7.5YR7 2)	擦過ナデ	ナデ	良好	雲母、砂粒	
247	B区	3層	深鉢	口縁部	橙(2.5YR6 6)	橙(2.5YR6 6)	ナデ	ナデ	良好	雲母、角閃石、砂粒	
248	A5区 8674-13	3層④	深鉢	口縁部	にぶい赤褐(2.5YR4 4)	橙(7.5YR6 6)	ナデ	ナデ	良好	雲母、砂粒	
249	A5区	SP746	深鉢	口縁部	にぶい黄橙(10YR6 3)	にぶい黄橙(10YR7 3)	ナデ	ナデ	良好	雲母、砂粒	
250	9276-1	3層② P-24	深鉢	口縁部	黒褐(7.5YR3 1)	橙(7.5YR6 6)	条痕	ナデ	良好	雲母、角閃石、砂粒	
251	A5区 8874-1	3層④	深鉢	口縁部	にぶい赤褐(7.5R4 3)	赤褐(10R4 4)	条痕→ナデ	条痕→ナデ	良好	雲母、結晶片岩、砂粒	
252	A5区 8874-2	3層	深鉢	口縁部	黒褐(5YR3 1)	褐灰(5YR4 1)	ミガキ	ナデ	良好	雲母、砂粒	
253	A5区 8674	3層(旧 SC34 P-2)	深鉢	口縁部	にぶい赤褐(5YR5 3)	赤(10R5 6)	条痕	ナデ	良好	雲母、結晶片岩、砂粒	
254	A5区 8874	P-72	深鉢	口縁部	暗赤灰(2.5YR3 1)	明赤褐(2.5YR5 8)	条痕	条痕	良好	雲母、石英、砂粒	
255	A5区 8876-6	3層 P-14	壺	口縁部	黒褐(10YR2 2)	にぶい赤褐(10YR4 3)	条痕	条痕→ナデ	良好	雲母、砂粒	
256	A5区 8674-14	3層 P-2	深鉢	口縁部	灰褐(5YR4 2)	灰褐(5YR4 2)	条痕	ナデ	良好	雲母、砂粒	
257	A5区 8674-13	3層④	深鉢	口縁部	赤褐(5YR4 6)	灰褐(5YR4 2)	ナデ	ナデ	良好	石英、雲母	
258	A5区 8874-6	3層③	深鉢	口縁部	赤(10R4 8)	明褐(7.5YR5 8)	条痕	ナデ、条痕→ナデ	良好	雲母、結晶片岩、砂粒	
259	A5区	SP589	鉢	口縁部	黒褐(10YR3 2)	黒褐(10YR3 2)	ハケメ	ハケメ	良好	雲母、砂粒	
260	A5区 8874	SP106 P-1	深鉢	口縁部	暗褐(10YR3 3)	にぶい黄褐(10YR6 2)	条痕	ナデ	良好	石英、雲母	
261	B3区 9276-1	3層② P-25	深鉢	口縁部	黒褐(10YR3 1)	橙(7.5YR7 6)	条痕	ナデ	良好	雲母、角閃石、砂粒	
262	A5区 8874-5	3層	深鉢	口縁部	赤褐(10YR5 4)	赤褐(10R6 6)	条痕	ナデ	良好	雲母、砂粒	
263	A5区 8876-6	3層③ P-16	深鉢	口縁部	褐(7.5YR4 3)	黒褐(7.5YR3 1)	ナデ	条痕	良好	雲母、砂粒	
264	A5区 8874-2	3層	深鉢	口縁部	褐(7.5YR4 3)	黒褐(7.5YR3 1)	条痕→ナデ	ナデ	良好	長石、石英、雲母、角閃石	
265	A4区 8674	SD9西側サブトレ	深鉢	胴部	赤褐(5YR4 6)	明赤褐(5YR5 6)	ナデ	ナデ	良好	長石、石英、黒雲母、赤色粒子	
266	A4区 8674	3層(旧 SC119-P16)	深鉢	胴部	にぶい赤褐(5YR4 4)	赤褐(5YR4 8)	ナデ	ナデ	良好	長石、石英、金雲母、黒雲母	
267	A5区	SP494 P-1	深鉢	口縁部	暗赤褐(7.5R4 3)	暗赤褐(7.5R3 3)	ナデ	軽いミガキ	良好	長石、雲母	
268	B区 9074	3層	深鉢	口縁部	明赤褐(5YR5 6)	明赤褐(5YR5 6)	条痕	条痕→ナデ	良好	雲母、結晶片岩、砂粒	
269	A5区 8874-6	3層③	深鉢	口縁部	赤(10R5 6)	橙(5YR6 6)	条痕	ナデ	良好	雲母、結晶片岩	
270	A5区 8674-1	3層③ P-8	屈曲深鉢	胴部	橙(2.5YR6 4)	橙(2.5YR6 4)	ナデ、条痕	ナデ、条痕→ナデ	良好	雲母、結晶片岩、砂粒	
271	A5区 8874-1	3層③ P-10	屈曲深鉢	胴部	赤褐(10R5 4)	褐灰(10YR6 1)	条痕、条痕→ナデ	ナデ	良好	雲母、結晶片岩	
272	A5区	SP676	深鉢	口縁部	橙(5YR6 6)	にぶい橙(5YR6 4)	ナデ、条痕	ナデ、条痕	良好	雲母、結晶片岩、砂粒	
273	A5区 8674-13	南側ベルト3層③	深鉢	屈曲部	にぶい橙(5YR6 4)	にぶい橙(5YR7 4)	ナデ	ハラナデ	良好	雲母、砂粒	
274	A5区 8674	3層③ P-16	深鉢	屈曲部	にぶい赤褐(2.5YR5 4)	灰白(10YR8 2)	ナデ、擦過	条痕→ナデ、ハラナデ	良好	雲母、砂粒	
275	A5区	SP491 P-1	深鉢	胴部	にぶい赤褐(2.5YR4 4)	にぶい橙(7.5YR6 4)	ナデ、条痕→ナデ	条痕→ナデケン	良好	長石、石英、雲母、角閃石、結晶片岩	
276	A5区 8674	3層	深鉢	口縁部	明褐(7.5YR5 6)	明褐灰(7.5YR7 2)	ナデ	ナデ	良好	雲母、角閃石、砂粒	
277	A5区 8874	P-65	深鉢	口縁部	にぶい黄褐(10YR4 3)	にぶい橙(7.5YR7 3)	ナデ	ナデ、指押さえ	良好	石英、雲母、砂粒	
278	A5区 8874-5	3層③ P-9	深鉢	口縁部	灰黄(2.5Y4 2)	暗オリープ褐(2.5Y3 3)	ナデ	ナデ、指押さえ	良好	雲母、砂粒	
279	9064	3層	深鉢	屈曲部	にぶい黄橙(10YR6 3)	ナデ(10YR7 1)	ナデ	ナデ	良好	雲母、角閃石、砂粒	
280	A5区 8874	1層	深鉢	胴部	褐灰(10YR4 1)	褐灰(10YR5 1)	ナデ、擦過	ナデ	良好	雲母、角閃石、砂粒	
281	B1区 9074-6	3層	壺	胴部	明黄褐(10YR6 6)	灰黄褐(10YR4 2)	ナデ、条痕	条痕	良好	雲母、黒雲母、砂粒	
282	A5区	SP703	深鉢	胴部	灰白(10YR8 2)	灰白(10YR8 2)	ナデ	ナデ	良好	雲母、砂粒	
283	A5区	SP498	深鉢	胴部	にぶい褐(7.5YR5 3)	浅黄橙(7.5YR8 3)	条痕→ナデ	ナデ	良好	雲母、角閃石、砂粒	
284	A5区 8874-6	3層(旧 SK44 P-2)	深鉢	口縁部	にぶい黄褐(10YR6 3)	浅黄橙(10YR8 3)	ナデ	ナデ	良好	雲母、赤色粒子、砂粒	
285	A5区 8874	1層	深鉢	口縁部	にぶい赤褐(5YR5 4)	にぶい橙(5YR7 3)	ナデ	ナデ	良好	雲母、赤色粒子、砂粒	
286	A5区 8674	3層	深鉢	口縁部	浅黄橙(7.5YR8 4)	浅黄橙(7.5YR8 4)	ナデ	ナデ	良好	雲母、砂粒	
287	A5区 8674	3層	壺	胴部	にぶい橙(5YR6 4)	にぶい橙(5YR6 4)	ナデ	ナデ	良好	石英、雲母、砂粒	
288	B1区 9074-15	3層② P-14	深鉢	底部	明褐(7.5YR5 6)	にぶい橙(7.5YR5 4)	ナデ	ナデ	良好	石英、雲母、砂粒	
289	A4区 8672	3層 P-6	深鉢	底部	灰赤(10R6 2)	赤褐(10R6 8)	ナデ	ナデ	良好	長石、雲母、結晶片岩、赤色粒子	
290	A5区 8874-7	3層 P-1	深鉢	底部	橙(7.5YR7 6)	橙(7.5YR7 6)	剥落	ナデ	良好	石英、雲母、砂粒	
291	B1区 8874	P-1	深鉢	底部	明褐(7.5YR5 8)	灰褐(7.5YR4 2)	ナデ、条痕	ナデ	良好	雲母、砂粒	
292	A5区 8874-2	3層③ P-20	深鉢	底部	赤(10R5 6)	橙(2.5YR6 8)	ナデ	ナデ	良好	雲母、結晶片岩、砂粒	
293	A5区 8674-13	3層④ P-4	深鉢	底部	明赤褐(2.5YR5 6)	にぶい橙(7.5YR7 3)	ナデ	ナデ	良好	雲母、砂粒	
294	A5区 8874-10	3層 P-3	浅鉢	底部	にぶい橙(5YR7 4)	にぶい橙(5YR7 4)	ナデ	ナデ	良好	雲母、結晶片岩、砂粒	
295	A5区 8874	SP31 P-1	深鉢	底部	橙(2.5YR6 6)	橙(2.5YR6 6)	ナデ	ナデ、ハラナデ	良好	雲母、結晶片岩、砂粒	
296	A5区 8874-2	3層 P-18	深鉢	底部	にぶい橙(7.5YR6 4)	橙(5YR6 6)	ナデ、指押さえ	ナデ	良好	雲母、結晶片岩、砂粒	
297	A5区 8874-2	3層 P-9	深鉢	底部	にぶい赤褐(2.5YR4 4)	極暗赤褐(2.5YR4 2)	ナデ	ナデ	良好	雲母、結晶片岩、砂粒	
298	A5区 8874	P-73	深鉢	底部	にぶい赤褐(5YR5 3)	にぶい赤褐(5YR5 3)	ナデ	ナデ	良好	雲母、砂粒	
299	A4区 8672	3層 P-5	深鉢	底部	橙(5YR6 8)	灰黄褐(10YR5 2)	ナデ	ナデ	良好	長石、雲母、角閃石	
300	8674-13	3層④ P-7	深鉢	底部	明赤褐(2.5YR5 8)	橙(2.5YR6 6)	ナデ	ミガキ?	良好	長石	
301	A5区 8874-11	3層④ P-3	深鉢	底部	黒褐(10YR3 1)	黒褐(10YR3 1)	条痕、ナデ	ナデ	良好	雲母、角閃石、砂粒	
302	B3区 9274-15	3層②南北トレンチ	深鉢	口縁部	明赤褐(5YR5 8)	明褐灰(7.5YR7 2)	ナデ	ナデ	良好	石英、雲母、黒雲母、砂粒	
303	9064	南北ベルト2層	高坏		にぶい橙(5YR6 4)	にぶい橙(5YR7 3)	ナデ	ナデ	良好	雲母、砂粒	
304	B1区 9076	3層(旧 SC02)	高坏	高台?	黄橙(10YR7 8)	黄橙(10YR8 6)	条痕	条痕	良好	長石	
305	A5区 8874	P-44	浅鉢	口縁→底部	オリープ黒(5Y3 2)	オリープ黒(5Y3 2)	ミガキ	ミガキ	良好	雲母、砂粒	12残存
306	A5区 8674-13	3層③	浅鉢	口縁→胴部	にぶい褐(7.5YR5 3)	にぶい橙(7.5YR5 3)	ミガキ	ミガキ	良好	雲母、砂粒	
307	A5区 8674-14	3層④	浅鉢	胴部	黒褐(7.5YR3 2)	黒褐(7.5YR3 2)	ハラミガキ	ハラミガキ	良好	砂粒	
308	B1区 9276-1	3層 P-46	浅鉢	口縁部	にぶい赤褐(2.5YR5 4)	赤灰(2.5YR4 1)	ハラミガキ	ハラミガキ、指押さえ	良好	雲母、砂粒	
309	A5区	SP734 P-1	浅鉢	口縁部	赤黒(7.5R2 1)	暗赤灰(7.5R3 1)	ハラミガキ	ナデ、ハラナデ	良好	雲母、砂粒	
310	B2区 9276-5	3層③	浅鉢	口縁部	黒褐(10YR2 2)	黒褐(10YR2 3)	ミガキ	ミガキ	良好	砂粒	
311	B2区 9276-9	3層 P-38	浅鉢	口縁部	黒褐(7.5YR3 2)	暗褐(7.5YR3 3)	ハラミガキ	ハラミガキ、指押さえ	良好	長石	
312	A5区 8874-1	3層③ P-1	浅鉢	口縁部	黒褐(10YR3 2)	黒褐(10YR3 2)	ハラミガキ	ハラミガキ、指押さえ	良好	砂粒	
313	A5区 8874	P-77	浅鉢	口縁部	赤黒(7.5R2 1)	赤黒(7.5R2 1)	ミガキ	条痕、指押さえ	良好	雲母、砂粒	
314	A5区	SP678 P-1	浅鉢	口縁部	褐灰(10YR4 1)	褐灰(10YR5 1)	ハラミガキ	ハラミガキ	良好	雲母、砂粒	
315	B2区 9276-5	3層③	浅鉢	口縁→胴部	黒褐(10YR3 1)	褐灰(10YR4 1)	ハラミガキ	ハラミガキ	良好	雲母、角閃石、砂粒	
316	B2区 9279	3層 P-42	浅鉢	口縁部	暗褐(10YR3 3)	暗褐(10YR3 3)	ハラミガキ	ハラミガキ	良好	雲母、砂粒	
317	A5区 8874-2	3層	浅鉢	口縁部	灰黄褐(10YR4 2)	灰黄褐(10YR4 2)	ハラミガキ	ハラミガキ	良好	雲母、砂粒	
318	A5区 8674	SP42 P-2	浅鉢	口縁部	黒褐(2.5Y3 1)	黄褐(2.5Y5 6)	ミガキ	ナデ	良好	雲母、砂粒	

第18表 TAK201303調査区包含層出土土器観察表②

図版番号	出土区グリッド	層位	器種	部位	色調		調整		焼成	胎土	備考
					外面	内面	外面	内面			
328	B1区 9074-16	3層② SL-16	浅鉢	口縁部	にぶい黄褐(10YR5 3)	褐灰(10YR4 1)	ヨコミガキ	ナデ	良好	雲母、角閃石、砂粒	
329	A5区 8874	P-32	浅鉢	口縁～胴部	オリーブ褐(2.5Y4 3)	暗灰黄(2.5Y5 2)	ハラミガキ	ハラミガキ、指押さえ	良好	雲母、角閃石、砂粒	
330	B2区 9274-2	4層	浅鉢	口縁部	黒褐(10YR3 2)	にぶい黄褐(10YR5 4)	ハラミガキ	ハラミガキ	良好	雲母、角閃石、砂粒	
331	A5区 8874-6	東西ベルト北壁	浅鉢	口縁部	にぶい黄褐(10YR5 3)	褐灰(10YR5 1)	ハラミガキ	ナデ、ハラミガキ	良好	雲母、砂粒	
332	A5区 8874-1、2	南北ベルト3層①	浅鉢	口縁部	にぶい赤褐(5YR5 3)	褐灰(5YR4 1)	ハラミガキ	ハラミガキ	良好	雲母、砂粒	
333	B2区 9274-9276	3層(旧 SC31)	浅鉢	口縁部	にぶい黄褐(10YR4 3)	にぶい黄褐(10YR4 3)	ナデ	ハラミガキ	良好	雲母、角閃石、砂粒	
334	B区 9474-3	3層①	浅鉢	底部	にぶい黄褐(10YR5 4)	灰白(10YR7 1)	条痕→ミガキ	ハラミガキ	良好	雲母、砂粒	
335	A5区 8674	3層(旧 SC88 P-9)	浅鉢	口縁部	黒褐(5YR3 1)	にぶい赤褐(5YR4 4)	ミガキ	ハラミガキ	良好	雲母、砂粒	
336	A区 8874	東壁トレンチ3層	浅鉢	口縁部	黒褐(10YR3 1)	にぶい褐(7.5YR5 4)	ナデ	ハラミガキ	良好	雲母、砂粒	
337	A5区 8874-6	3層 P-2	浅鉢	屈曲部	黒褐(7.5YR3 2)	褐(7.5YR4 3)	ナデ、ミガキ	ハラミガキ	良好	雲母、砂粒	
338	A5区 8874-5	4層上面 P-6	長頸浅鉢?	頸～胴部	黄灰(2.5Y5 1)	黄灰(2.5Y4 1)	ナデ、条痕	条痕→ナデ	良好	雲母、角閃石、砂粒	
339	A4区 8674-5	3層 P-1	長頸浅鉢	口縁部	褐灰(10YR5 1)	暗褐(10YR3 3)	ハラミガキ	ハラミガキ	良好	雲母、砂粒	
340	A5区 8674-13	南側ベルト3層③ P-12	長頸浅鉢	口縁部	暗褐(10YR3 3)	褐灰(10YR4 1)	ハラミガキ	ハラミガキ	良好	雲母、砂粒	
341	A5区 8874-1、2	南北ベルト3層④	浅鉢	口縁部	黒褐(7.5YR3 1)	黒褐(7.5YR3 1)	ハラミガキ	ハラミガキ	良好	雲母、砂粒	
342	A5区 8674-13	3層④ P-8	浅鉢	頸部	にぶい橙(7.5YR6 4)	黒褐(7.5YR3 1)	ナデ、ミガキ	ミガキ	良好	雲母、砂粒	
343	A5区 8674-13	南側ベルト3層③	浅鉢	屈曲部	黒褐(10YR2 3)	にぶい黄褐(10YR5 3)	ナデ	ハラミガキ	良好	雲母、角閃石、砂粒	
344	9276-13	3層② P-12	浅鉢	口縁部	にぶい黄褐(10YR5 3)	黒(10YR1.7 1)	ミガキ	ミガキ	良好	長石、石英	
345	A5区 8674-13.14	3層①ベルト清掃	浅鉢	口縁部	にぶい橙(7.5YR6 4)	灰褐(7.5YR4 2)	ハラミガキ	ハラミガキ	良好	雲母、砂粒	
346	A5区 8874	3層	ミニチュア鉢	屈曲部	にぶい黄褐(10YR7 4)	褐灰(10YR5 1)	ナデ	ナデ	良好	雲母、角閃石、砂粒	
347	A5区 8674-2.14	3層①ベルト清掃	浅鉢	胴部	灰黄褐(10YR4 2)	黒褐(10YR3 1)	ハラミガキ	ハラミガキ	良好	雲母、砂粒	胴張浅鉢
348	A5区 8674	SP164 P-1	浅鉢	屈曲部	にぶい黄褐(10YR5 3)	灰黄褐(10YR4 2)	ハラミガキ	ハラミガキ	良好	雲母、砂粒	
349	A5区 8674-11	3層①	長頸浅鉢	屈曲部	褐灰(10YR4 1)	褐灰(10YR4 1)	ハラミガキ	ハラミガキ	良好	雲母、角閃石、砂粒	
350	B2区 9274-11	3層③	浅鉢	口縁部	黒褐(10YR3 2)	黒褐(10YR3 2)	ハラミガキ	ハラミガキ	良好	雲母、角閃石、砂粒	
351	A5区 8874-1、2	南北ベルト3層③	浅鉢	口縁部	明赤褐(5YR4 8)	橙(5YR6 8)	ハラミガキ	ハラミガキ	良好	雲母、角閃石、砂粒	
352	A5区 8674-9.10	南北ベルト3層①	鉢	口縁部	灰黄褐(10YR4 2)	褐灰(10YR4 1)	ハラミガキ	ハラミガキ	良好	雲母、角閃石、砂粒	
353	A5区 8874-6	3層③ P-18	鉢	口縁部	にぶい橙(2.5YR6 4)	にぶい赤褐(2.5YR5 4)	ナデ	ミガキ	良好	雲母、結晶片岩	
354	A5区	SP567	浅鉢	底部	褐灰(10YR4 1)	にぶい黄褐(10YR5 3)	条痕	ミガキ	良好	雲母、砂粒	
355	A5区 8874	3層	浅鉢	口縁部	にぶい赤褐(5YR5 3)	黒褐(7.5YR3 2)	ハラミガキ	ハラミガキ	良好	雲母	
356	A5区 8874	3層	浅鉢	口縁部	褐灰(7.5YR4 2)	黒褐(7.5YR3 1)	ミガキ	ミガキ	良好	雲母、砂粒	
357	9276-1	3層② P-27	浅鉢	口縁部	黒褐(10YR3 1)	黒褐(10YR3 1)	ナデ	ナデ	良好	雲母、角閃石、砂粒	
358	A5区 8874-6	3層③	浅鉢	口縁部	橙(5YR6 8)	橙(5YR6 8)	ヨコナデ→ハラミガキ	ハラミガキ	良好	雲母、砂粒	
359	A5区 8674	SP32	深鉢	口縁部	にぶい赤褐(5YR4 3)	にぶい赤褐(5YR5 3)	ハラミガキ	ハラミガキ	良好	雲母、角閃石、砂粒	
360	A5区 8674-10	3層 P-1	皿	口縁部	褐灰(10YR4 1)	褐灰(10YR4 1)	ミガキ	ミガキ	良好	雲母、砂粒	後期開削工藤浅鉢口縁
361	A5区 8874-6	3層③ P-8	鉢	口縁部	橙(2.5YR6 6)	橙(2.5YR6 6)	条痕、条痕→ナデ	ナデ	良好	雲母、結晶片岩、砂粒	
362	A5区 8874-2	3層 P-17/A5区 SP678	鉢	口縁部	明赤褐(10YR6 6)	黒褐(10YR3 1)	ハラミガキ	ハラミガキ	良好	雲母、砂粒	鉢形土器(精製)
363	A5区 8874-5	3層南北トレンチ	浅鉢?	口縁部	黒(10YR2 1)	黒(10YR2 2)	ハラミガキ	ハラミガキ	良好	雲母、砂粒	
364	A5区 8674-10	3層	浅鉢	頸部	にぶい褐(7.5YR5 4)	黒(7.5YR2 1)	ハラミガキ	ハラミガキ	良好	長石、雲母、角閃石	
365	A5区 8674	3層	浅鉢	口縁部	褐灰(10YR4 1)	褐灰(10YR4 1)	ミガキ	ミガキ	良好	雲母、砂粒	
366	A5区 8674	3層(旧 SC88 P-29)	浅鉢	口縁～底部	灰黄褐(10YR4 2)	褐灰(10YR4 1)	ハラミガキ	ハラミガキ	良好	雲母、角閃石、砂粒	
367	A5区 8674-9.10	南北ベルト3層①	浅鉢	口縁部	暗赤褐(5YR3 3)	暗赤褐(5YR3 1)	ミガキ	ミガキ	良好	雲母、砂粒	
368	A5区 8874-2	3層	浅鉢	口縁部	オリーブ黒(5Y3 1)	オリーブ黒(5Y3 1)	ナデ	ハラミガキ	良好	雲母、角閃石	
369	A4区 8674-9	3層	不明	頸部	黄灰(2.5Y4 1)	灰黄(2.5Y6 2)	ミガキ	ナデ	良好	雲母、砂粒	東日本系の形土器か?
370	A5区 8674	3層(旧 SC84 P-1)	浅鉢	口縁部	橙(5YR7 6)	浅黄橙(7.5YR8 3)	ハラミガキ	ナデ	良好	雲母、砂粒	
371	B2区 9274-2	3層②	壺	口縁部	灰褐(7.5YR5 2)	黒(7.5YR2 1)	ナデ	ナデ	良好	雲母、砂粒	
372	A5区 8874-6.8674	3層 P-1 旧 SC88 P-5	壺	口縁部	褐(7.5YR4 4)	明赤褐(5YR5 6)	ハラミガキ	ハラミガキ	良好	雲母、砂粒、赤色粒子	新形式の形土器の壺か
373	A5区 8674-13.14	南北ベルト(精査)	壺	頸～胴部	橙(7.5YR6 6)	明赤褐(5YR5 6)	ハラミガキ、ナデ	指押さえ	良好	石英、雲母、砂粒	
374	A5区 8874	S-25	不明土製品	頸部	黒(5YR1.7 1)	黒褐(5YR2 1)	ハラミガキ	ハラミガキ	良好	雲母、角閃石、砂粒	
375	B区 9074	3層(旧 SC03 貼床下)	土製垂飾品		橙(2.5YR6 8)	橙(2.5YR6 8)	ナデ	ナデ	良好	雲母、砂粒、赤色粒子	
376	B1区 9074	基本土層3層 SC23	管状土製品		黒(7.5YR2 1)	黒(7.5YR3 1)	ナデ	ナデ	良好	雲母	

②石器(第69図377～第75図465-3)

a. 旧石器時代の遺物(第69図377・378)

377は剥片尖頭器である。黒曜石製でパティナが厚い。縦長剥片の打面側を基部とし、両側縁から調整を加えて基部を作り出す。先端部欠損。「古土層」と呼ぶ5層褐色硬化層の落ち込み内から出土した。

b. 剥片(第69図379・380)

378は安山岩製の二次加工ある剥片で、厚手の縦長剥片の背面側に急角度の調整剥離を加えて断面三角形に仕上げる。基部及び先端部が欠損する。379・380はいずれも縦長剥片である。379は漆黒色の黒曜石製で背面に平坦な礫面を残す。380は玄武岩製。剥片の縁辺に微細剥離が伴う。

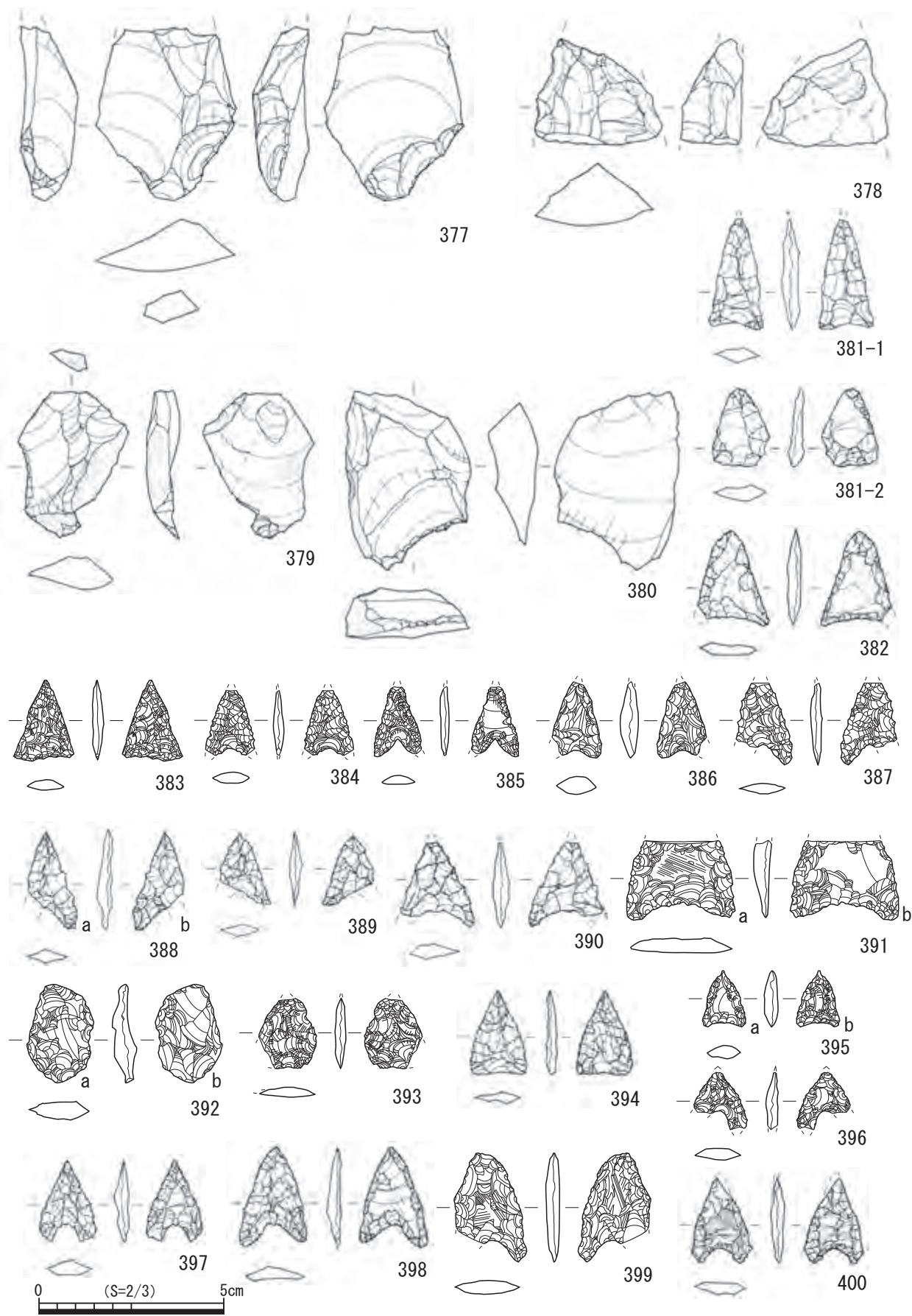
c. 石鏃(第69図381-1～第70図424)

TAK201301の石鏃分類に従って記述する。黒曜石製が主体で、381-1・382・390・399・407は安山岩製、413・415はチャート製である。側縁が直線的になるA類(第69図381-1～391)は、基部に着目すると平基もしくは抉りが浅いもの(381～383)、凹基(384～391)に細分できる。381-1は細身で、両側縁からの調整剥離により体部中央に鎬が通って断面菱形に近い。381-2・382は薄手の寸詰まりの剥片を素材とし、縁辺を中心に二次加工を加えて整形している。383・384は平坦剥離が全面に及ぶ丁寧な調整。385は素材剥片の主要剥離面が残り、先端部を打面側に向ける。386は褐灰色で光沢のない厚手の

黒曜石を素材とし、やや急角度の調整剥離で断面菱形に仕上げる。稜が取れてやや丸みを帯びており、二次堆積によるものか。**387**は白色不純物が混じる漆黒色の黒曜石を素材とし、側縁からの調整剥離により体部中央に弱い稜を形成する。**388**はb面左側縁が鋸歯状を呈す。a面体部右側の調整は縁辺から垂直に入れるのに対し、鋸歯状を呈すb面体部左側の調整剥離は側縁から基部向きに鋭角に入れている。**389**は小ぶりながら薄手で先端部を鋭く仕上げる。**390**は側縁からの求心状の剥離で、体部中央が最大厚となる。**391**は大型石鏃の基部で、b面に素材剥片の背面が残り、縁辺を中心に調整を加える。a面基部付近に研磨面があるが、ややふくらみを残すことから、素材剥片のバルブの除去を目的とした研磨と考えられる。

側縁が外湾するB類(第69図**392**～第70図**405**)は、基部に着目すると、円基(**392**)、平基もしくは挟りが浅いもの(**393**～**395**)、凹基(**396**～**405**)に細分できる。**392**はa面に素材剥片の打面(礫面)及び主要剥離面を残し、打面を基部側に向ける。先端部は欠損するが、素材の形状を生かして周縁に浅い調整剥離を加える。**393**は周縁からの求心状の平坦剥離により、扁平で丸みを帯びた形状に仕上げる。**394**は褐灰色黒曜石製で、周縁から丁寧に調整を加える。先端部にかけて特に細かい調整を加え先端を鋭く仕上げる。**395**は小型ながら厚手の石鏃で、素材剥片の主要剥離面・背面が残っており、打面を側縁側に向ける。b面中央に素材剥片のバルブの膨らみが残り、調整は縁辺を中心にやや急角度の剥離を加える。**396**は小ぶりだが基部の挟りが深く、体部中央に最大厚を持つ。**397**は全体的に丁寧に調整剥離を加え、特に先端部は細かい剥離を入れて体部中央に稜を形成する。**398**は素材剥片の主要剥離面が残り、打面を先端側に向ける。素材剥片の背面を中心に平坦剥離を入念に加え、主要剥離面側は縁辺のみの調整とする。**399**は薄手の石鏃で、体部中央両面に研磨面を形成し、断面横長六角形となる。**400**は素材剥片の背面が残り、打面を基部側に向ける。体部中央に研磨面を形成する。**401**は薄手の石鏃。全面に丁寧な調整剥離が及び、先端部及び脚部先端は鋭利である。**402**は小型であるが、調整剥離が全面に及び、脚部を細く作り出す。**403**・**404**は幅広で寸詰まりの石鏃。いずれも丁寧な調整剥離が全面に及ぶ。**403**は脚部先端が尖るのに対し、**404**は脚部裾が平坦となる。南島原市下末法遺跡では、同様の石鏃が縄文時代早期押型文土器に伴って出土している。**405**は大型石鏃で、丁寧な調整剥離を全面に加えて断面レンズ状に仕上げる。基部の挟りが深く、脚部側縁が丸みを帯びる。

側縁に屈曲点をもつC類(第70図**406**～**416**)は、基部に着目すると、平基もしくは挟りが浅いもの(**406**～**409**)、凹基(**410**～**416**)に細分できる。**406**は灰白色黒曜石製で、細身で屈曲点は先端部近くにある。両側縁からの調整により、体部中央にややアンバランスな鎬を形成する。**407**は平坦剥離を側縁から体部に入れて減厚を試みているが、体部中央にこぶ状に最大厚が残る。**408**はやや厚手で全体に丁寧な調整であるが、屈曲部から先端部にかけて特に入念に調整を加える。**409**は素材剥片の主要剥離面が残り、打面を基部側に向ける。周縁からの平坦剥離を加えるが、基部側の一方を大きく剥離しすぎてアンバランスとなり、放棄したものか。**410**は体部から先端部を特に入念に調整し、脚部との境に屈曲点を持つ。体部中央に平坦な研磨面を持つ。**411**は**410**と同様に脚部寄りに屈曲点を持ち、体部中央に研磨面を形成するが、基部からの調整剥離により研磨面の一部が切られている。**412**は両側縁からの調整剥離により体部中央に稜が通るが、基部を両面研磨している。**413**は乳白色地に黒色が帯状に入るチャート製で、脚部と体部の境に屈曲点を持つ。やや厚手で体部中央に最大厚を持つ。**414**はやや薄手。**415**は赤褐色チャート製で、先端部付近に屈曲点を持つ。縁辺に比較的急角度の調整を加



第69図 TAK201303調査区の縄文時代包含層出土石器実測図①(S=2/3)



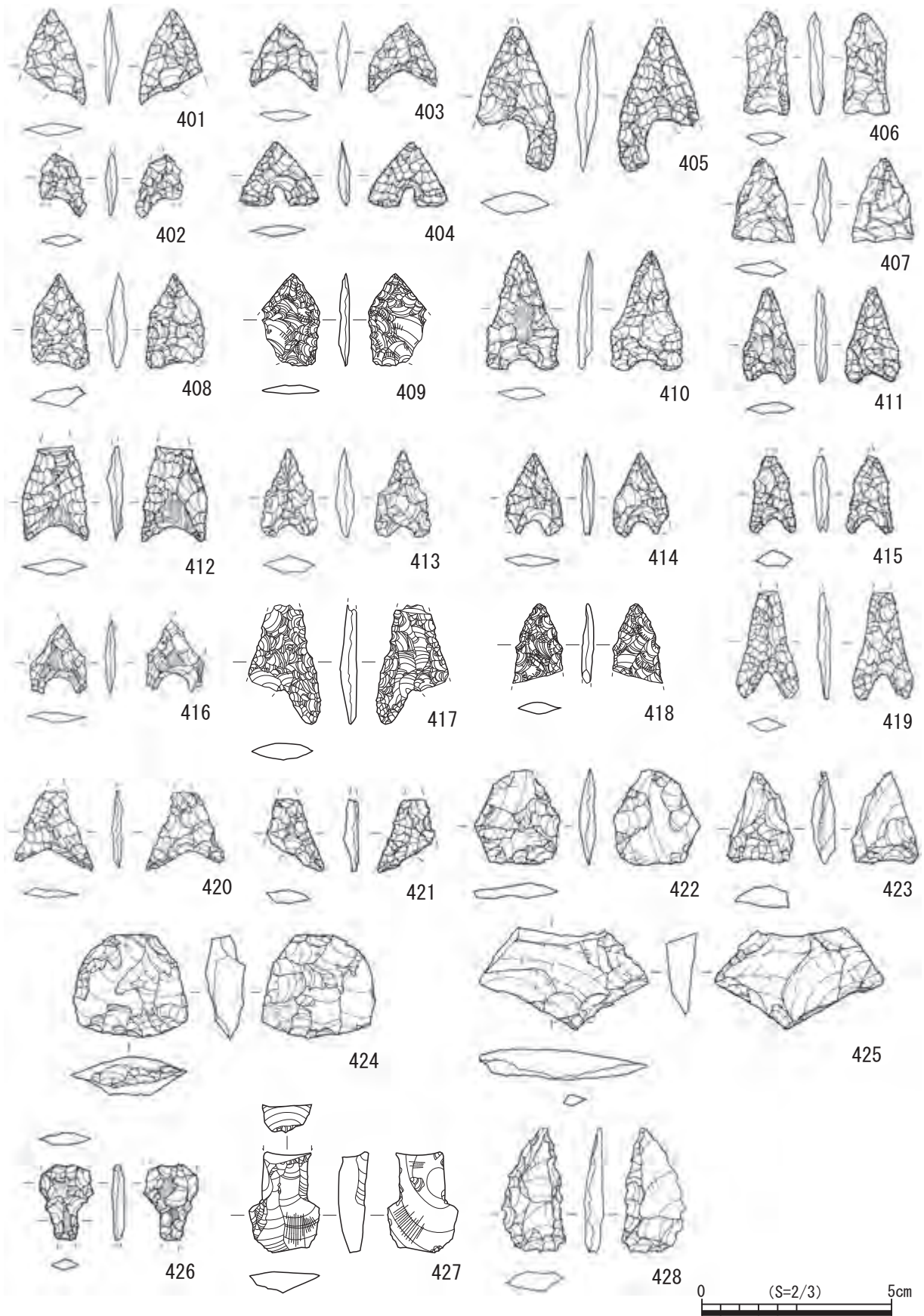
図版28 TAK201303調査区の縄文時代包含層出土石器①

えて、断面横長六角形に仕上げる。**416**は脚部寄りに屈曲点をもち、体部を研磨して薄く仕上げる。

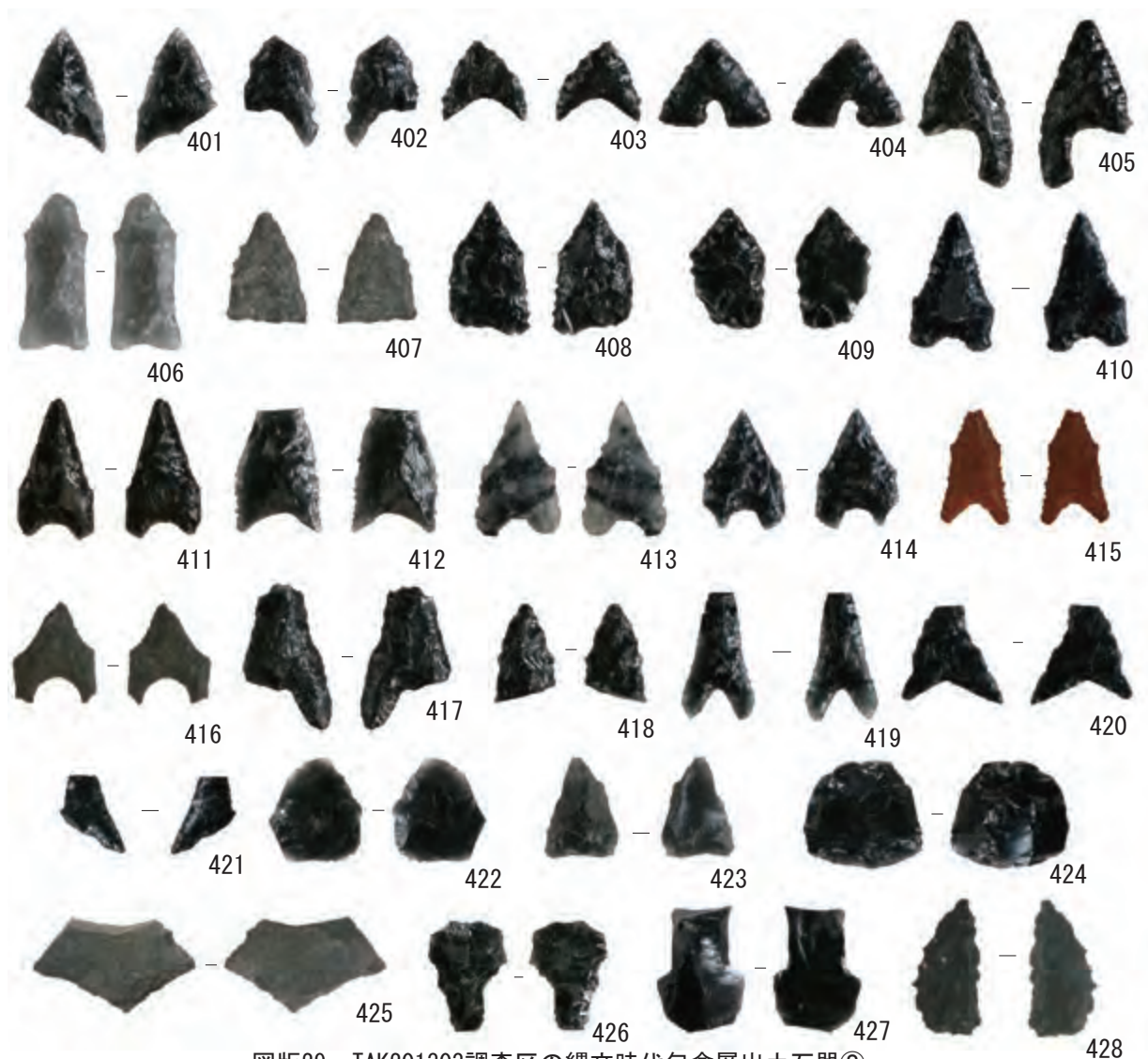
側縁が内湾するD類(第70図**417**～**421**)は、基部は凹基のみである。**417**・**419**は体部と脚部の境で内湾し、脚部が外側に張り出す。**420**・**421**は脚部が大きく外側に張り出すもので、脚部先端は尖る。**420**はかなり薄く仕上げる。**422**・**423**は石鏃未成品。**422**は寸詰まりの薄手の剥片を素材とし、打面を切断した後周縁から調整剥離を加える。**423**はやや厚みのある剥片が素材で、折り取って分割し分割面から調整剥離を加えて整形している。

#### d. 石錐(第70図**425**～**426**)

**425**は安山岩製の厚手の剥片素材で、表裏両面からの調整で先端部をわずかに作り出す。スクレイパーの可能性もある。**426**は漆黒色黒曜石製で、両側縁からの調整で細い先端部を作り出す。体部両面に研磨面が見えることから、局部磨製石鏃の転用品と考えられる。



第70図 TAK201303調査区の縄文時代包含層出土石器実測図② (S=2/3)



図版29 TAK201303調査区の縄文時代包含層出土石器②

e. 彫器(第70図427)

427は漆黒色黒曜石の縦長剥片を素材とし、打面側を切断後に長軸方向に調整剥離を加えて彫刀面を2面形成する。

f. 石鋸(第70図428)

428は褐灰色黒曜石の縦長剥片を素材とし、縁辺を中心に比較的急角度の調整剥離を加える。背面への調整が主体で、主要剥離面側へは一辺のみ調整を加える。両側縁はやや鋸歯状となる。

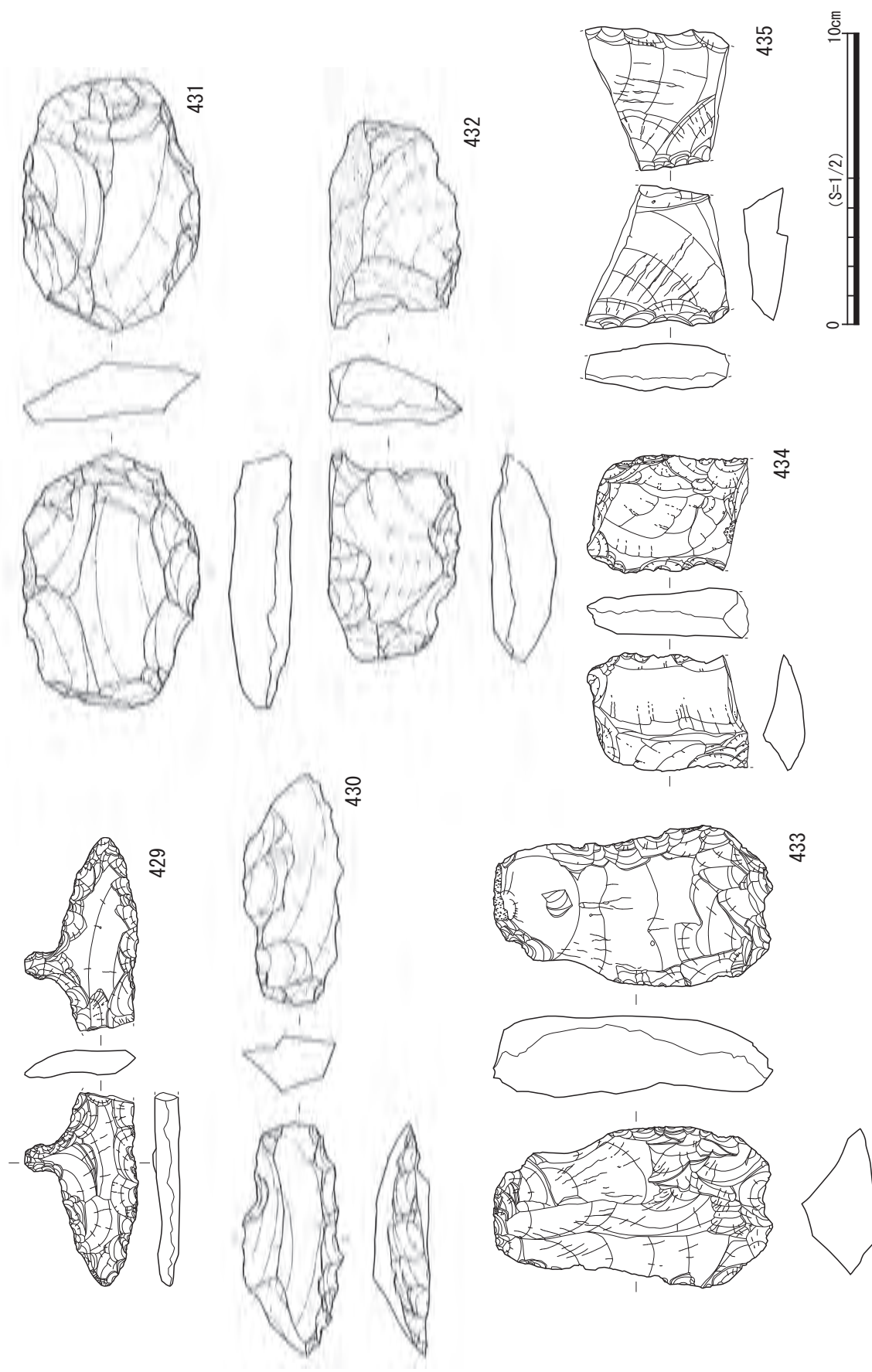
g. 石匙(第71図429)

429は横型石匙で、横長の素材剥片の縁辺を中心に調整剥離を加える。中央に幅狭のつまみがつく。

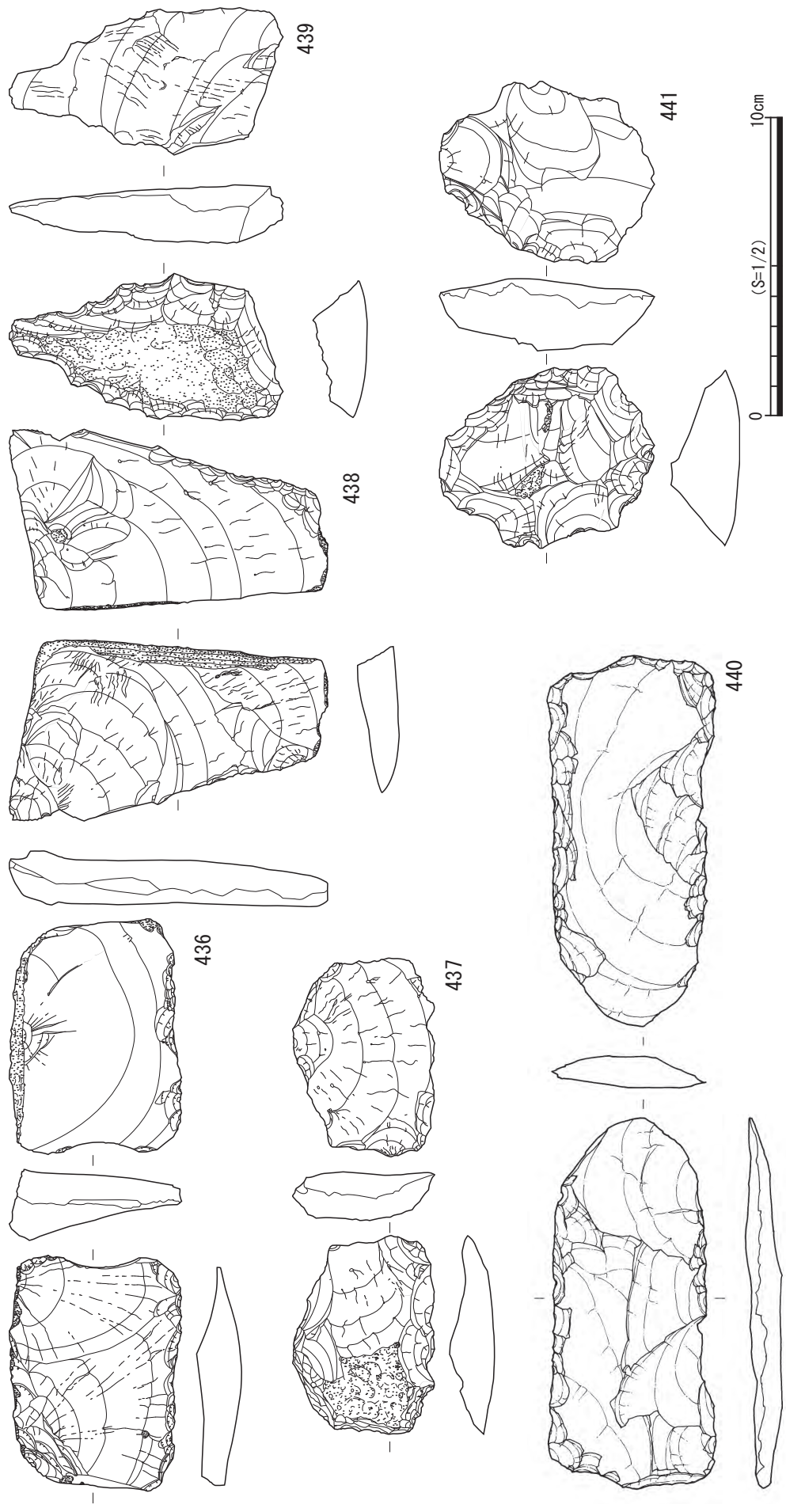
h. スクレイパー(第70図424・第71図430～第72図441)

424は厚手の寸詰まり剥片を素材とし、縁辺部にやや急角度の調整剥離を加えて、直線的な刃部を作る。431は厚手の横長剥片を素材とし、縁辺に荒い調整を加えて丸い刃部を作る。素材剥片の打面付近に礫面が残る。430も厚手の横長剥片を素材とし、縁辺に急角度の調整剥離を加えて刃部を作る。432は横長剥片素材で打面側に刃部を作る。周縁に礫面が残る。433は厚手の縦長剥片を素材とし、両側縁を中心に刃部を作る。434・435は横長剥片を分割して、長軸に鋭利な刃部を作る。436～441は素





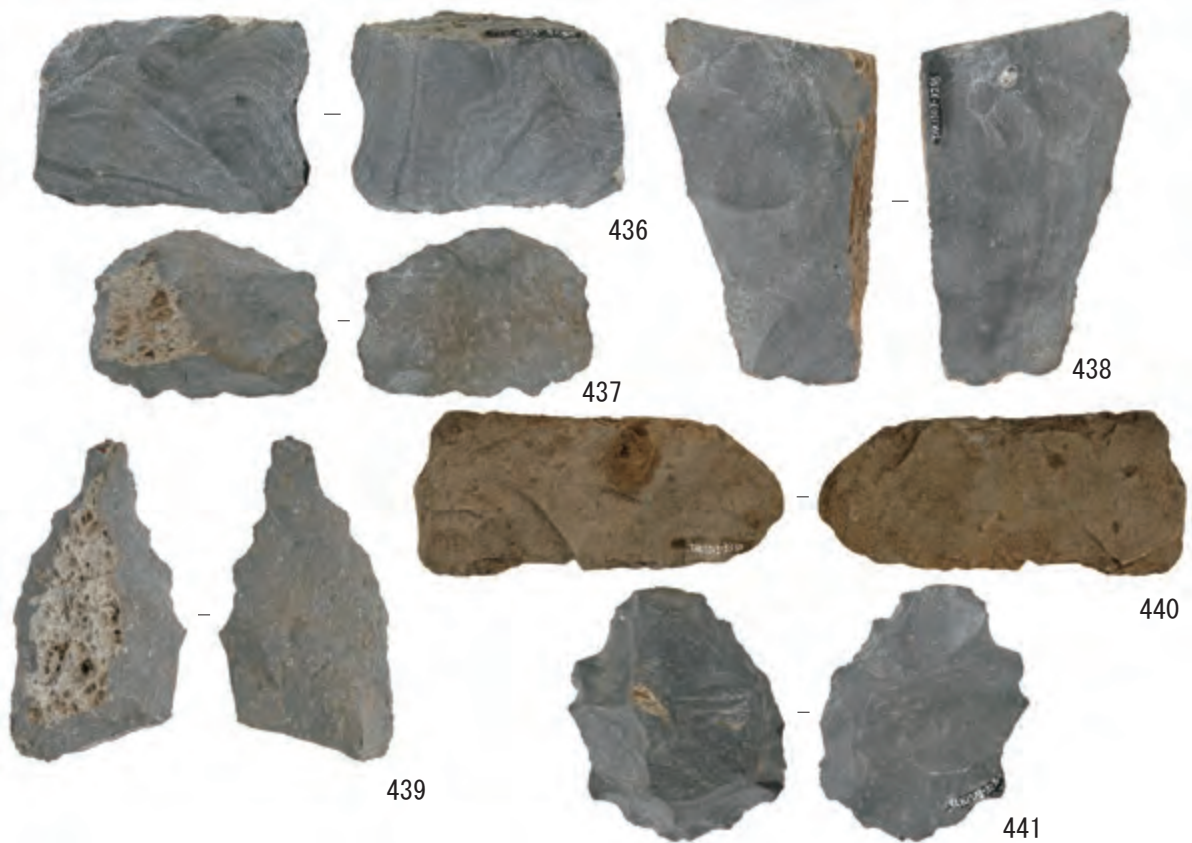
第71図 TAK201303調査区の縄文時代包含層出土石器実測図③ (S=1/2)



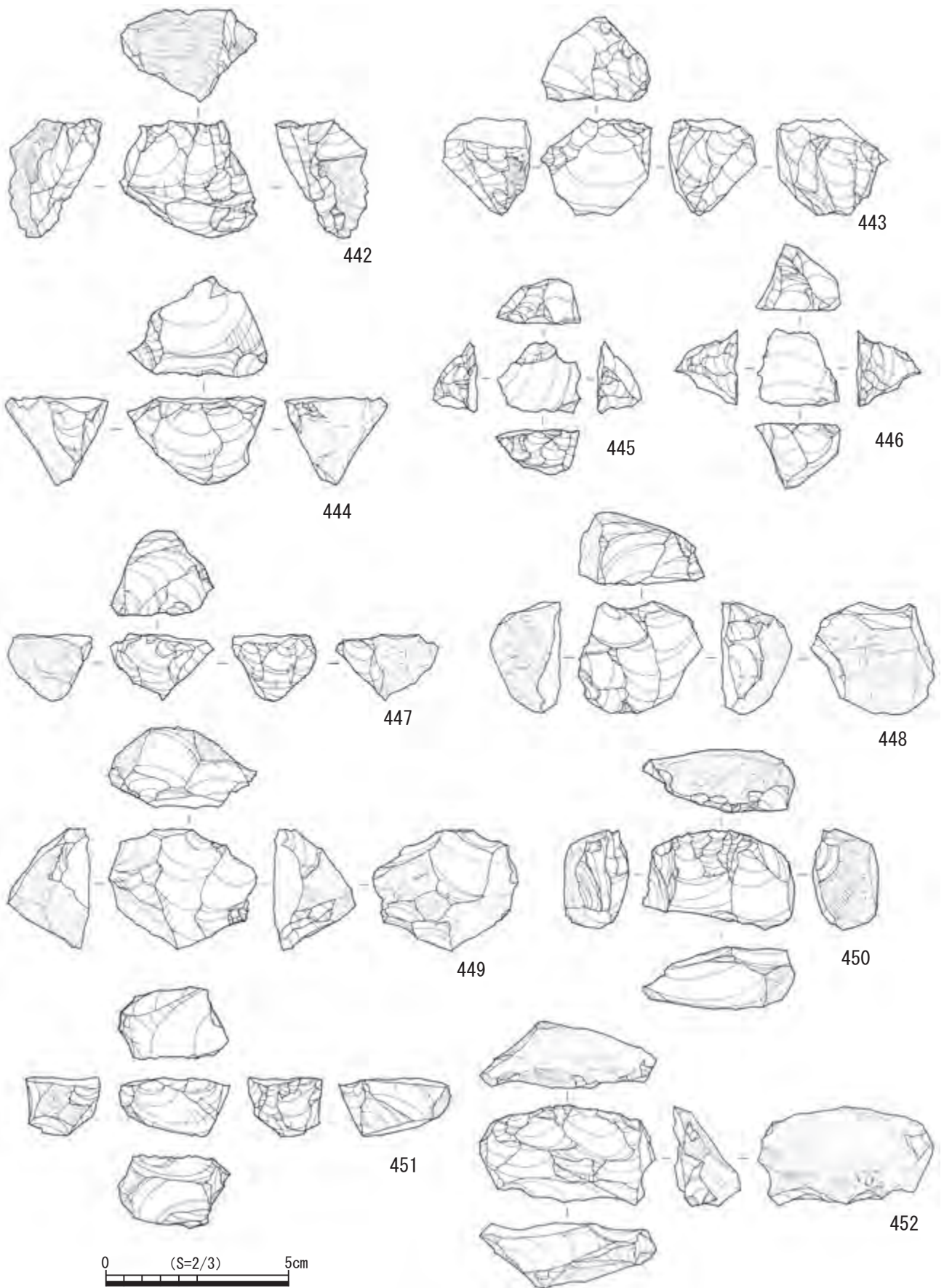
第72図 TAK201303調査区の縄文時代包層出土石器実測図④ (S=1/2)



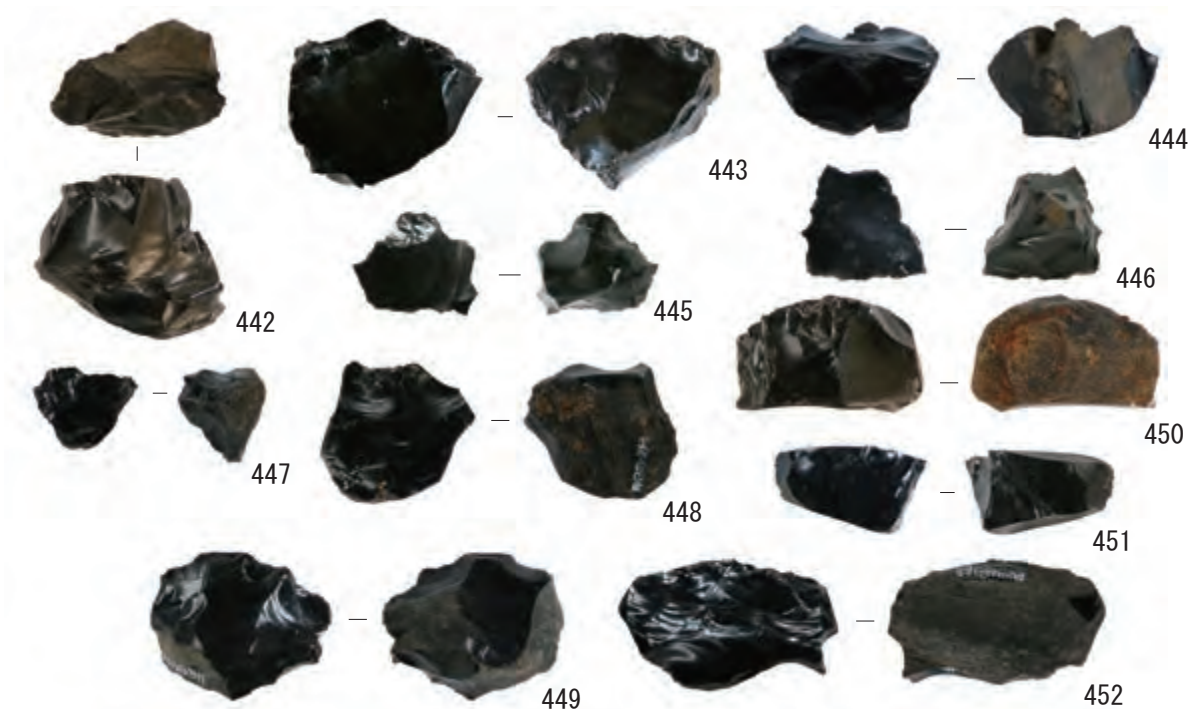
図版30 TAK201303調査区の縄文時代包含層出土石器③



図版31 TAK201303調査区の縄文時代包含層出土石器④



第73図 TAK201303調査区の縄文時代包含層出土石器実測図⑤(S=2/3)



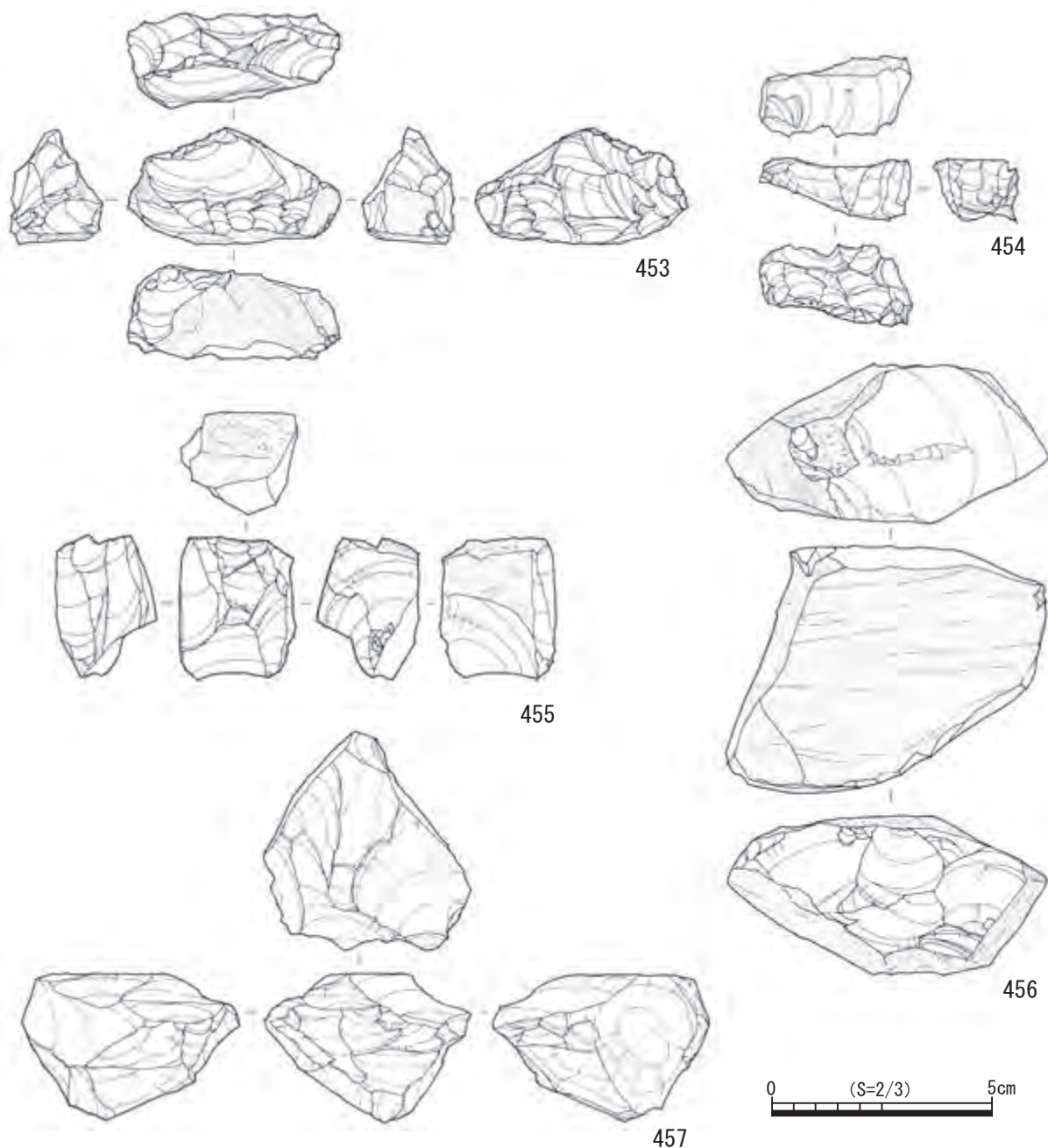
図版32 TAK201303調査区の縄文時代包含層出土石器⑤

材剥片の形状を生かし、最小限の調整剥離で刃部を作る。436・438は長軸にわずかに調整剥離を加えて刃部とする。437・441は素材剥片の背面を中心に急角度の調整剥離を入れて刃部を作る。439は素材剥片の背面に調整を加えて2辺の刃部を作るが、先端がやや尖り気味となる。440は薄手の横長剥片を素材とし、大振りの剥離でバルブを除去した後、長軸に沿った側縁に丁寧な調整を加えて刃部とする。横刃型刃器であろう。

i. 石核(第73図442～第74図457)

黒曜石を主体とする小型石核で、安山岩製は457のみである。ほとんどの石核に平坦な礫面が残り、これをそのまま打面とするものも多い。442～447は、平坦面を打面として作業面を複数面持つもので、側面観は逆三角形となる。打面は調整打面(分割面含む)が多いが(443～447)、自然面を打面とするものもある(442)。いずれも平坦打面から打点をずらしながら剥片剥離を行い、打面転移はほとんど行わない。生産された剥片は幅狭の縦長剥片や寸詰まりの剥片である。448は平坦な調整打面から剥片剥離を行うほか、側縁には90度打面転移した作業面が残る。449は作業面が鋭角になるように角度をつけて打面調整を行い、縦長剥片を生産している。

450～454は角柱状の素材礫の長軸を打面とし、短軸方向に短小な剥片剥離を行う一群である。450・452は平坦な自然面を打面とする。450の側面には90度打面転移した作業面が残る。451は分割面を打面とし、小型の剥片を剥出する。452は1つの作業面で求心状の剥片剥離を行うが、打面はいずれも平坦な自然面である。453は側面観が三角形となるが、同じ作業面でも90度・180度と頻繁に打面を転移して小型剥片の生産を行う。454は剥片素材で、主要剥離面から短軸方向に剥片剥離を行うほか、背面には求心状の作業面が残る。455は角柱状で平坦な自然面を打面とし、長軸方向のほか90度・180度角度を変えて剥片剥離を行っている。456はやや扁平な石核で、自然面を打面として小口部分に作業面が残る。457は安山岩製石核で、平坦打面を作って剥片剥離を行う。右側縁の大きな剥離は被熱に

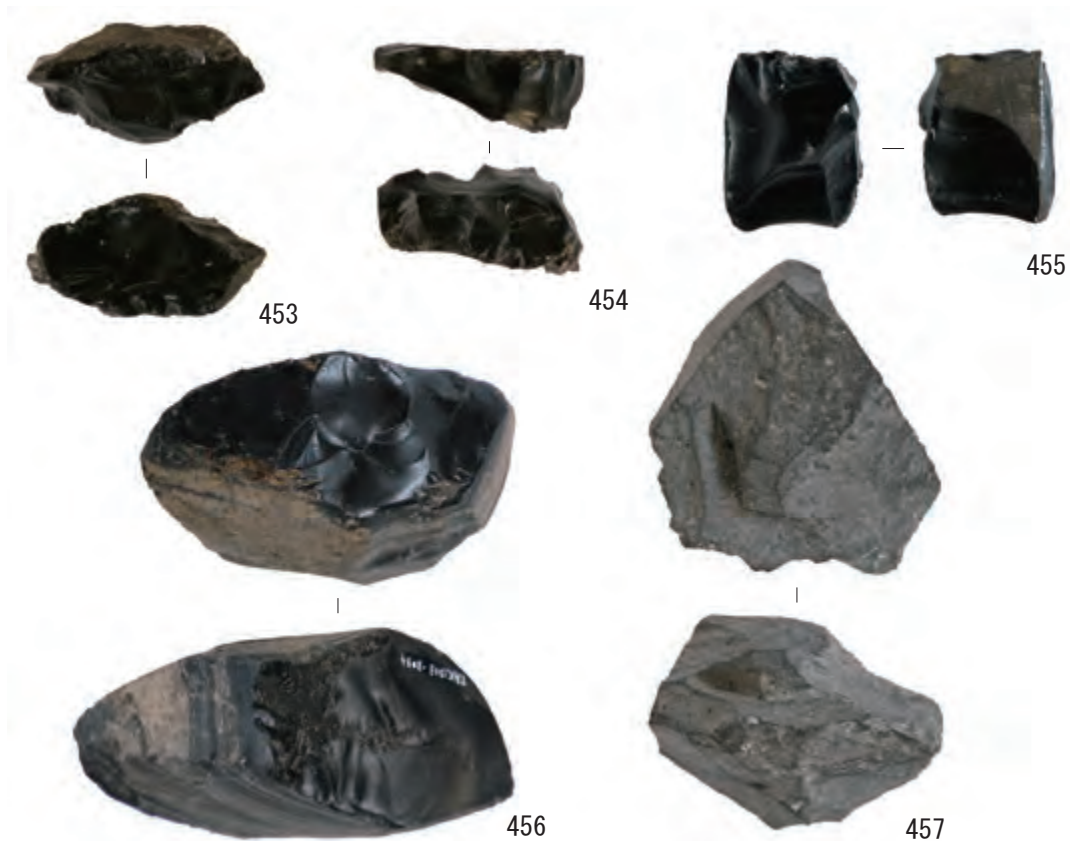


第74図 TAK201303調査区の縄文時代包含層出土石器実測図⑥ (S=2/3)

よるはじけか。寸詰まりの小型剥片を生産する。

j. 打製石斧(第75図458～462)

いずれも安山岩製である。小型(458)・中型(459・461・462)・大型(460)がある。形態は両側縁が平行する短冊形が主体であるが(458～460・462)、刃部にかけて幅広になる撥形もある(461)。458は剥片素材で縁辺を中心に調整を加える。459はローリングにより全体的に摩滅するが、剥片素材か。460は扁平礫を素材とし、周縁に調整を加えて円刃を作り出す。461は扁平礫を素材とするが、大ぶりの調整剥離が体部全面に及んでおり、礫面をほとんど残さない。刃部及び一側縁に細かい調整を加えて直線的な刃部を作る。462は扁平礫を素材とするが、両側縁を中心に丁寧な調整を加え、緩やかに内湾する。刃部付近に摩滅痕がわずかに残る。



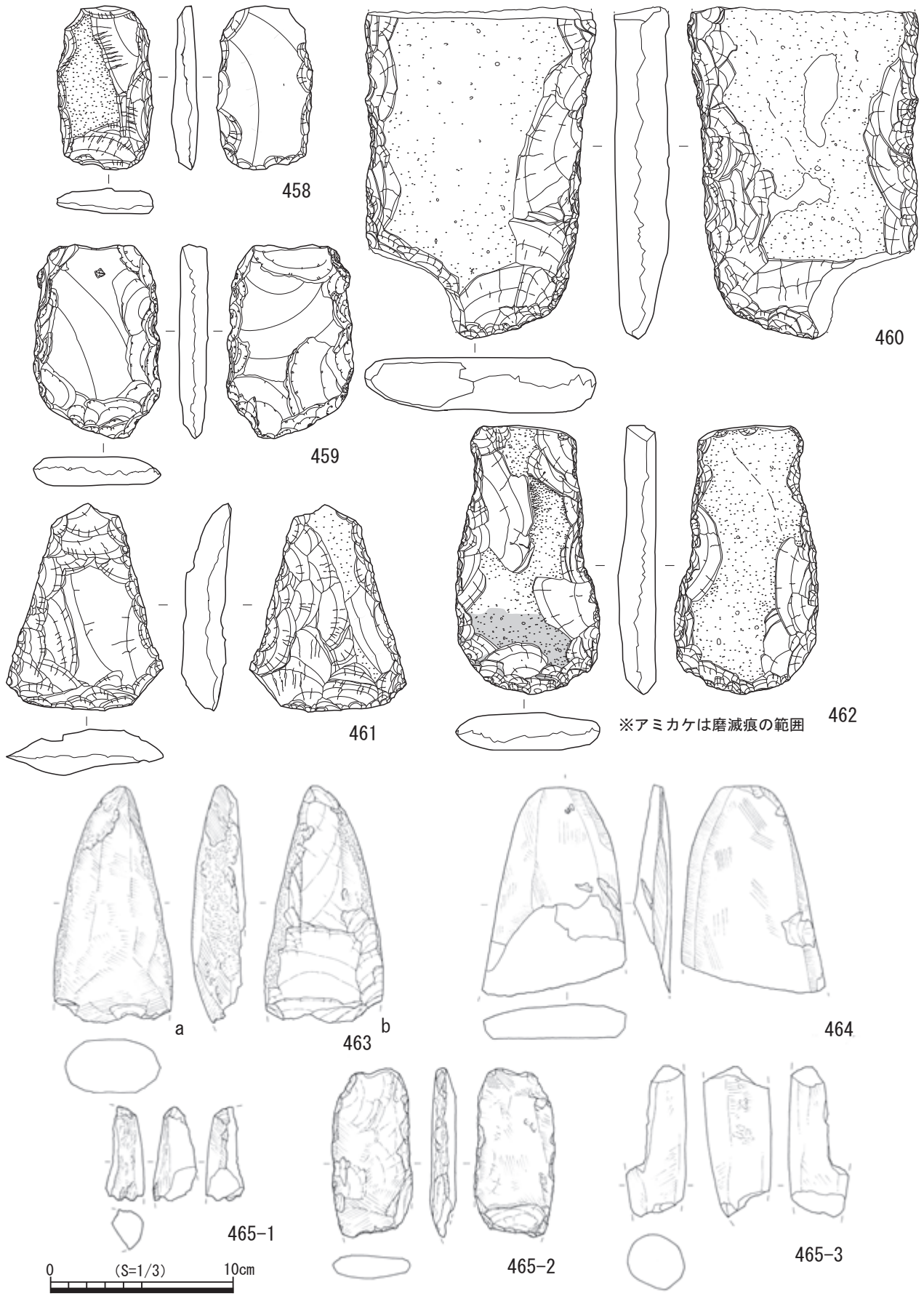
図版33 TAK201303調査区の縄文時代包含層出土石器⑥

k. 磨製石斧(第75図463~465-2)

463は硬質砂岩製。基部が尖り刃部にかけて幅広になる。a面全面に研磨面が広がるが、b面は調整剥離が残る。側面には一部研磨面もあるが、基本的に敲打面をそのまま残す。464は良質の蛇紋岩製で、全面を研磨して薄手で扁平に仕上げる。基部は先細りとなる。465-1は側面から基部にかけての破片である。側縁に面取り状の研磨面が残る。465-2は扁平・小型の磨製石斧。体部は両面とも研磨面が広がるが、側縁には敲打痕が残る。刃部は欠損するが、欠損面にわずかに研磨面が残り、刃部再生を意図したものであろう。

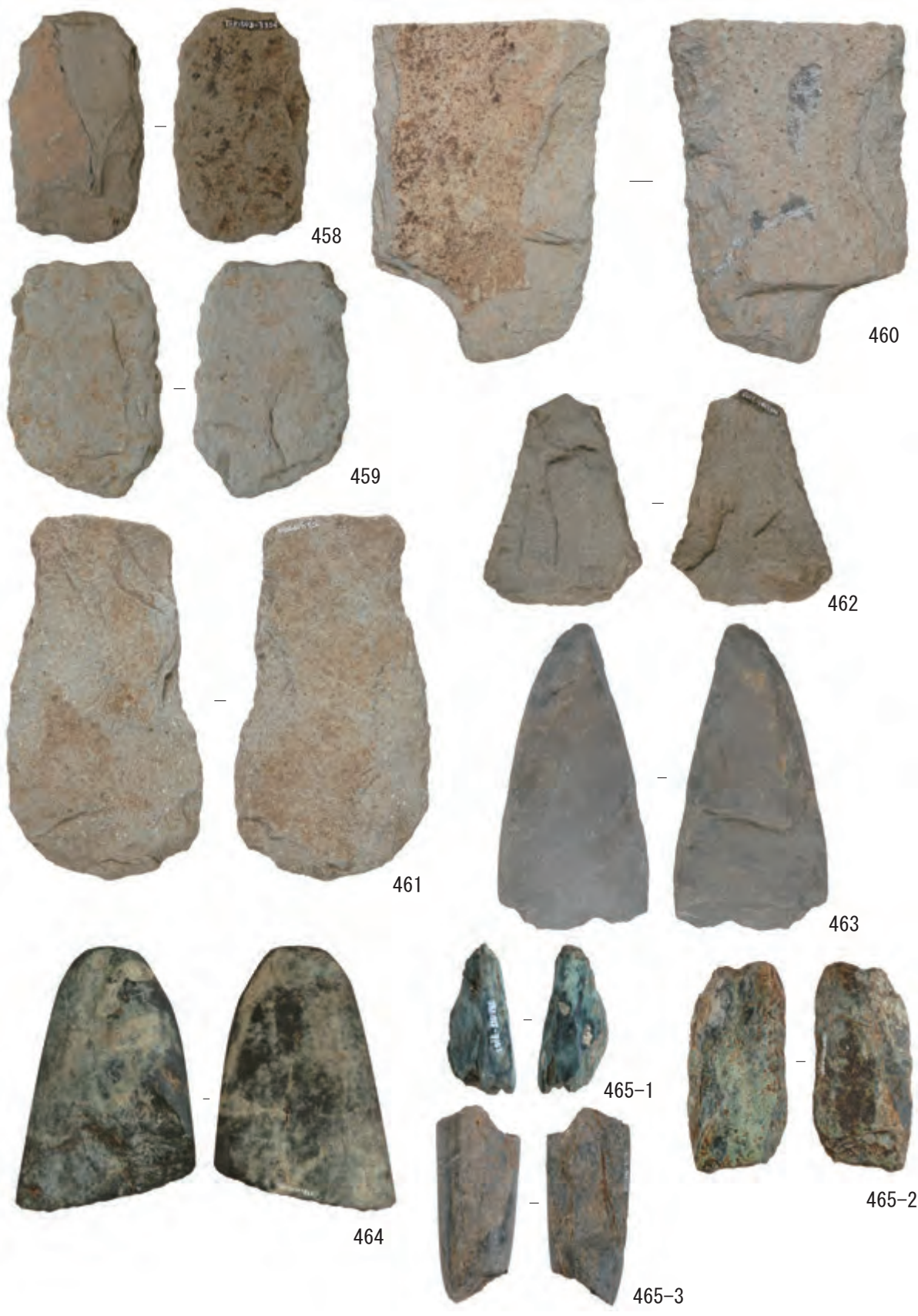
1. 石棒(第75図465-3)

465-3は節理の発達した蛇紋岩製。欠損が著しいが断面円形の棒状に仕上げる。下端に向けてやや先細りとなる。研磨痕をわずかに残す。(中尾)



第75図 TAK201303調査区の縄文時代包含層出土石器実測図⑦(S=1/3)





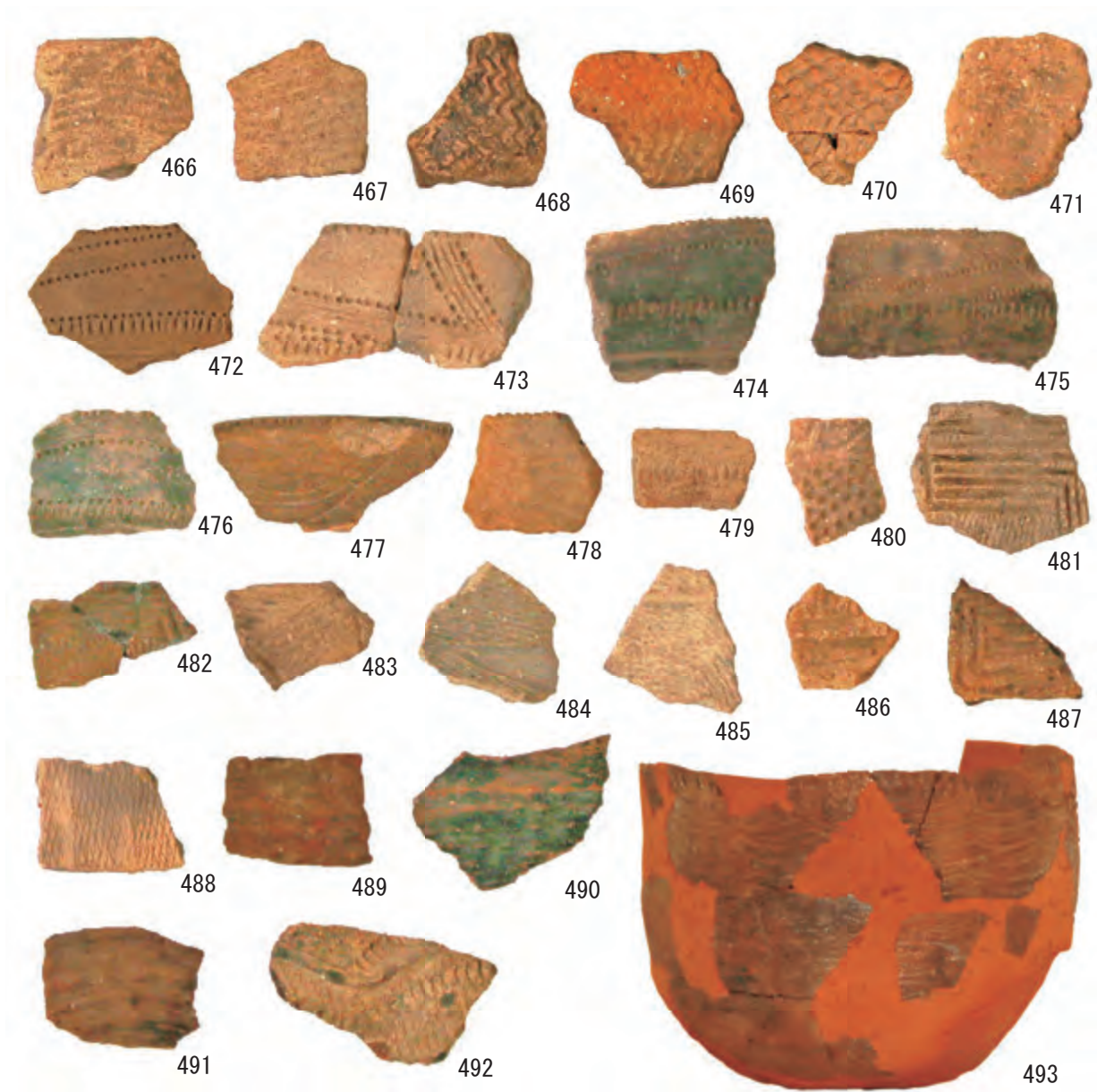
図版34 TAK201303調査区の縄文時代包含層出土石器⑦

第19表 TAK201303調査区包含層出土石器観察表

図版番号	器種	出土区グリッド	層位	石材	最大長 (mm)	最大幅 (mm)	最大厚 (mm)	重量 (g)	備考
377	剥片尖頭器	A5区 8874-7	SK50 S-1	黒曜石	(46.5)	38.0	15.0	(19.0)	
378	尖頭器	A5区 8874	3層	安山岩	(28.5)	(34)	(16.5)	14.9	
379	剥片	A5区 8874-1	3層	黒曜石	39.0	30.0	8.5	7.5	使用痕ある剥片
380	剥片	B2区 9274-8	3層②	安山岩	48.0	33.0	13.5	20.1	使用痕ある剥片
381-1	石鏃	B2区 9274、9276	3層	安山岩	(29.5)	14.5	4.5	(1.5)	
381-2	石鏃未製品	A4区 8674	3層	黒曜石	21.0	15.0	4.0	0.9	
382	石鏃	B3区 9474	3層上面	安山岩	26.0	(19.0)	3.5	1.3	片脚欠損
383	石鏃	A2~3区	埋戻土 表探	黒曜石	21.5	16.0	3.0	0.8	完形
384	石鏃	C1区 4086	北側6層上層 清掃中	黒曜石	(17.5)	(13.0)	3.0	(0.6)	両脚端部・先端部欠損
385	石鏃	C2区 5090	攪乱	黒曜石	(19.0)	(13.0)	2.5	(0.5)	先端部欠損
386	石鏃	A区 8072、8074、8472、8474	清掃	黒曜石	(20.5)	(13.5)	5.0	(1.2)	片脚欠損
387	石鏃	A区 8874	3層	黒曜石	(22.0)	(15.0)	3.0	(0.8)	片脚・先端部欠損
388	石鏃	B2区 9274、9276	3層	黒曜石	(31.5)	(13.5)	4.0	(0.7)	
389	石鏃	A5区 8874-1 南側ベルト	3層④	黒曜石	(20.0)	(14.0)	3.5	(0.4)	
390	石鏃	A5区 8674	SL04 S-1	安山岩	(23.0)	(20)	4.5	(1.2)	
391	局部磨製石鏃	A5区 8874-5 南側ベルト	3層④	黒曜石	(21.0)	26.0	4.0	(2.9)	脚部付近のみ残存
392	石鏃	A4区 8472、8474 東西トレンチ	上層(黄褐色砂)	黒曜石	21.5	18.5	6.0	2.6	先端部欠損
393	石鏃	A4区 8472、8474 東西トレンチ	—	黒曜石	(18.5)	(15.5)	3.0	(0.9)	先端部欠損
394	石鏃	A区 北2 8272	3層赤黄褐土	黒曜石	22.5	15.0	3.0	0.9	
395	石鏃	A区 東壁トレンチ	3層	黒曜石	15.0	11.5	3.5	0.6	小型
396	石鏃	B2区 9276-5	3層③	黒曜石	(15.5)	(14.0)	3.0	(0.5)	片脚欠損
397	石鏃	A5区 8874-10	3層	黒曜石	22.0	15.0	4.0	0.7	
398	石鏃	9274-11	3層① S-1	黒曜石	27.0	18.5	4.0	1.2	完形
399	局部磨製石鏃	B2区	SD19	黒曜石	29.0	(19.0)	3.5	(2.0)	片脚・先端部欠損
400	石鏃	B1区 9074-11	3層②	黒曜石	(22.5)	16.0	3.5	(0.9)	
401	石鏃	A5区 8874-10	3層① S-1	黒曜石	25.0	(16.5)	3.5	(0.8)	
402	石鏃	B区 9074-7	3層②	黒曜石	(16.5)	12.0	3.0	(0.4)	
403	石鏃	9074-16、9274-4境界ベルト	3層	黒曜石	18.0	18.0	3.0	0.6	
404	石鏃	B2区 9274-12	3層③	黒曜石	17.0	21.0	3.0	0.7	
405	石鏃	B区 9274	3層	黒曜石	38.0	(21.5)	6.0	(2.6)	
406	石鏃	B2区 9276-5	3層②	黒曜石	27.0	12.0	4.0	1.2	完形
407	石鏃	B1区 9074	3層	安山岩	22.0	16.0	4.5	1.2	
408	石鏃	B1区 9074-7	3層②	黒曜石	25.0	15.0	5.0	1.6	
409	石鏃	A5区 8874	3層	黒曜石	24.0	(15.0)	3.0	(1.1)	
410	局部磨製石鏃	A5区 8674	3層 S-1	黒曜石	31.0	19.0	4.0	1.7	
411	局部磨製石鏃	B2区	SD19	黒曜石	25.0	14.0	3.0	0.9	
412	石鏃	9074-14	3層②	黒曜石	(24.5)	17.5	4.0	(1.5)	
413	石鏃	B2区 9274、9276	3層	黒曜石	23.0	19.5	4.5	1.2	
414	石鏃	B2区 9276-5	3層	黒曜石	22.0	(15.0)	3.0	(0.8)	
415	石鏃	A5区 8874	S-1	チャート	(20.0)	12.0	4.0	(0.8)	
416	局部磨製石鏃	A5区 8674	3層精査	黒曜石	(18.5)	15.0	2.5	(0.5)	
417	石鏃	C2区 5090	5層	黒曜石	(31.0)	(19.5)	4.0	(2.1)	片脚・先端部欠損
418	石鏃	A区 8874	3層	黒曜石	(20.5)	(13.0)	3.0	(0.7)	脚部欠損
419	石鏃	A5区 8874-1	3層	黒曜石	(28.0)	16.0	3.5	(1.0)	
420	石鏃	A5区 8674	3層	黒曜石	(20.5)	20.5	2.5	(0.6)	
421	石鏃	B3区 9474	3層精査	黒曜石	(19.0)	(15)	4.0	(0.7)	片脚・先端部欠損
422	石鏃未成品	B2区 9274-11	3層②	黒曜石	25.0	22.5	4.0	1.9	
423	石鏃未成品	B2区 9274-2	3層②	黒曜石	24.0	17.0	6.0	2.0	
424	スクレイパー	B2区 9274-11	3層②	黒曜石	27.0	30.0	10.0	7.6	
425	石鏃	B1区 9074-2	3層②	安山岩	27.0	44.0	8.0	8.4	
426	石鏃	B2区 9276-5	3層②	黒曜石	(20.0)	14.0	3.0	(0.8)	局部磨製石鏃転用
427	彫器	B1区 9276-1	3層②	黒曜石	26.5	18.5	6.0	2.8	彫刀面2箇所
428	石鏃	A区 8874	1層	黒曜石	32.5	17.0	5.0	2.6	
429	石匙	C1区 3886	5層	安山岩	39.0	(66.5)	9.5	(19.4)	
430	スクレイパー	A5区 8674-14	4層②	玄武岩	34.5	79.0	19.0	44.1	
431	スクレイパー	B1区 9276-1	3層③ S-4	安山岩	60.5	87.0	21.0	120.0	
432	スクレイパー	9276-9	3層②	安山岩	45.0	71.5	22.0	73.0	
433	スクレイパー	A5区 8674	3層	安山岩	95.0	50.5	28.0	154.0	
434	スクレイパー	A5区	3層	安山岩	(51.5)	39.7	(16.4)	(38.1)	
435	スクレイパー	B2区 9276-5	3層③ S-2	安山岩?玄武岩?	(48.9)	(49.6)	15.5	(41.5)	
436	スクレイパー	A5区 8874	S-6	安山岩	56.4	77.9	23.2	82.8	
437	スクレイパー	9074-16、9074-4境界ベルト	3層	安山岩	47.3	66.0	15.0	52.9	
438	スクレイパー	A5区 8674	3層	安山岩	100.0	60.0	13.0	106.0	
439	スクレイパー	A5区 8874	2層	安山岩?玄武岩?	92.3	48.8	19.6	81.4	
440	横刃型刃器	C2区 5090西側	3層	安山岩	56.0	123.5	12.0	86.9	
441	スクレイパー	A5区 8874-2 南北ベルト	3層①	安山岩	72.0	61.0	24.0	93.9	
442	石核	A4区 8674	3層 SD9	黒曜石	32.0	37.0	25.0	20.5	
443	石核	A5区 8674-13	3層	黒曜石	26.0	30.0	23.5	16.2	
444	石核	A5区 8874-1	3層③精査	黒曜石	24.0	38.0	28.0	17.6	
445	石核	B2区 9274-4	3層①	黒曜石	19.5	22.5	12.0	4.0	
446	石核	9074-12	3層②	黒曜石	21.0	23.0	17.5	5.5	
447	石核	B2区 9274、9276	2層	黒曜石	17.5	28.0	23.0	8.1	
448	石核	B区 9074	3層	黒曜石	30.0	34.0	19.0	19.0	
449	石核	B3区 9474、9476	2層清掃中	黒曜石	33.0	40.0	22.0	22.6	
450	石核	A4区 8672	SD9サブトレ	黒曜石	27.0	41.0	17.5	21.4	
451	石核	9276-13	3層② S-1	黒曜石	16.0	30.0	20.0	10.2	
452	石核	B1区 9074-7	3層②	黒曜石	27.0	48.0	18.0	17.7	
453	石核	B2区 9274-3	3層②	黒曜石	26.0	48.0	21.0	22.5	
454	石核	A5区 8674-5~9東西ベルト	3層①	黒曜石	13.5	34.0	18.0	7.0	
455	石核	B1区 9274-4、9274-8 ベルト	3層②	黒曜石	32.0	26.5	23.0	20.2	
456	石核	A5区 8874	S-18	黒曜石	56.0	72.5	36.0	160.0	
457	石核	9274-4	3層② S-1	安山岩	33.5	46.5	49.5	64.3	
458	打製石斧	B1区	SD19 S-4	安山岩	88.6	52.0	14.3	84.8	
459	打製石斧	A区 8874	2層 SD3	安山岩	104.6	68.0	15.5	177.6	
460	打製石斧	A5区 8674-13	3層④	安山岩	(181.0)	(125.5)	30.0	(969.0)	大型
461	打製石斧	A5区 8674	3層	安山岩	147.0	78.5	20.5	332.2	
462	打製石斧	B1区 9274-4	3層② S-3	安山岩	112.8	85.6	24.7	237.7	
463	磨製石斧	B区 9274-6	3層③ S-1	玄武岩	(129.0)	(64.5)	(29.0)	(295.0)	
464	磨製石斧	C2区 5090	3層	蛇紋岩	(113.0)	(78.0)	(20.0)	(200.0)	
465-1	磨製石斧	B1区 9074-1	3層②	蛇紋岩	(51.5)	(20.5)	(24.0)	(23.2)	
465-2	磨製石斧	A5区 8674	3層	蛇紋岩	(91.5)	43.5	81.3	(81.3)	
465-3	石棒	A5区 8674	3層	蛇紋岩	(82.0)	(32.0)	(36.0)	(120.0)	



第76図 TAK201304調査区の縄文時代包含層出土土器実測図①(S=1/3)



図版35 TAK201304調査区の縄文時代包含層出土土器①

(9) TAK201304調査区の包含層出土遺物

①土器(第76図466～第77図502)

466～488は縄文早期の土器である。466と467は貝殻条痕文をもつ一野式土器である。468と469は山形押型文を施す早水台式土器か。470は縄文土器の胴部片である。内面は未調整で、外面は横方向に楕円の、斜め方向に山形の押型文を施し、文様が2種類組み合わせられている。471は無文土器である。

472～488は塞ノ神式土器である。472～476は屈曲する口縁部で、屈曲部に刻みを持つ。3～4本単位の沈線を波状や平行・斜行に施し、沈線に沿って列点をつける。472は頸部から口縁が外反する深鉢である。また頸部から口縁にいたる屈曲部に厚みがある。口唇部に刻みをつけ内面はヨコナデ、外面は上から刺突および浅い3条の横走沈線をゆるやかな波状で構成し、さらにその下に刺突が続いていくことが確認される。中尾・四方高迫遺跡に同型式の出土例が見られる。477・478は屈曲せずに外販



第77図 TAK201304調査区の縄文時代包含層出土土器実測図② (S=1/3)

する口縁部。口唇部に刻みを持ち、外面は3本単位で山形文や波状文を施文する。**479～488**は胴部片。**481～483・485～487**は縦位に格子目撚糸文を施文後に沈線文を施す。**484**は沈線区画を持つ撚糸文を施文する。**488**は縦位撚糸文で沈線はない。いずれも塞ノ神A式であろう。

**489～491**は縄文前期前半の轟式土器である。口縁部に細く、断面形が三角形を呈する隆線文をもつ。**493**は縄文前期の西唐津式土器である。刺突、沈線を施している。施文方向は左から右である。また、口縁は緩やかな波状をなし、口唇部全体に刻みを施す。

**492**は縄文中期前半の船元式土器である。原体は太く撚りは緩い縄文を全面に施し、これに爪形文や刺突を加えた船元I式土器か。

**494**は縄文後期の無文土器である。底部外面に指頭圧痕が残る。胎土に滑石を含んでおり、坂の下式の深鉢底部であろう。**495**は器壁が厚い鉢の底部片である。底部下面が重みによるためか垂れ下がっ



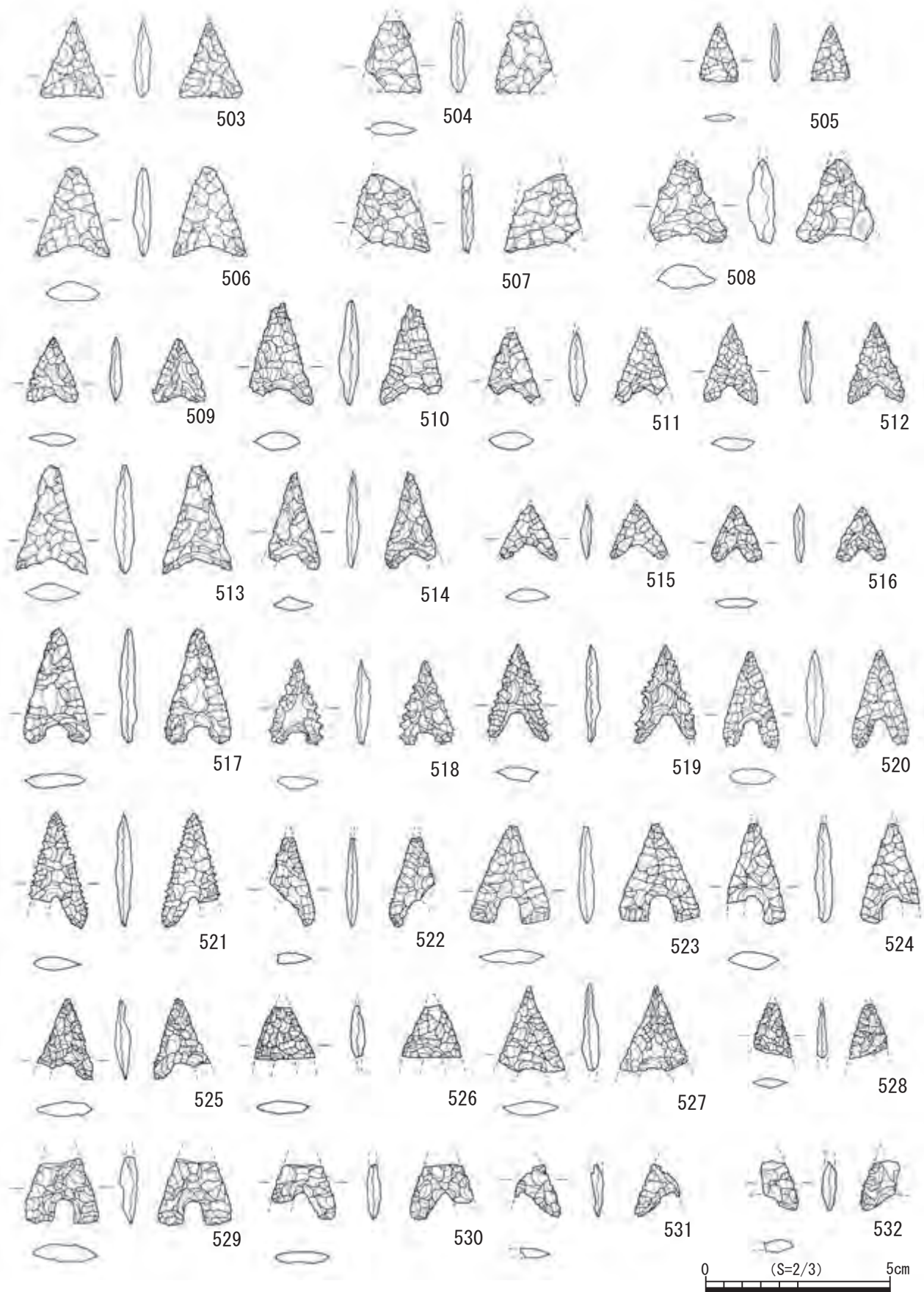
図版36 TAK201304調査区の縄文時代包含層出土土器②

第20表 TAK201304調査区包含層出土土器観察表

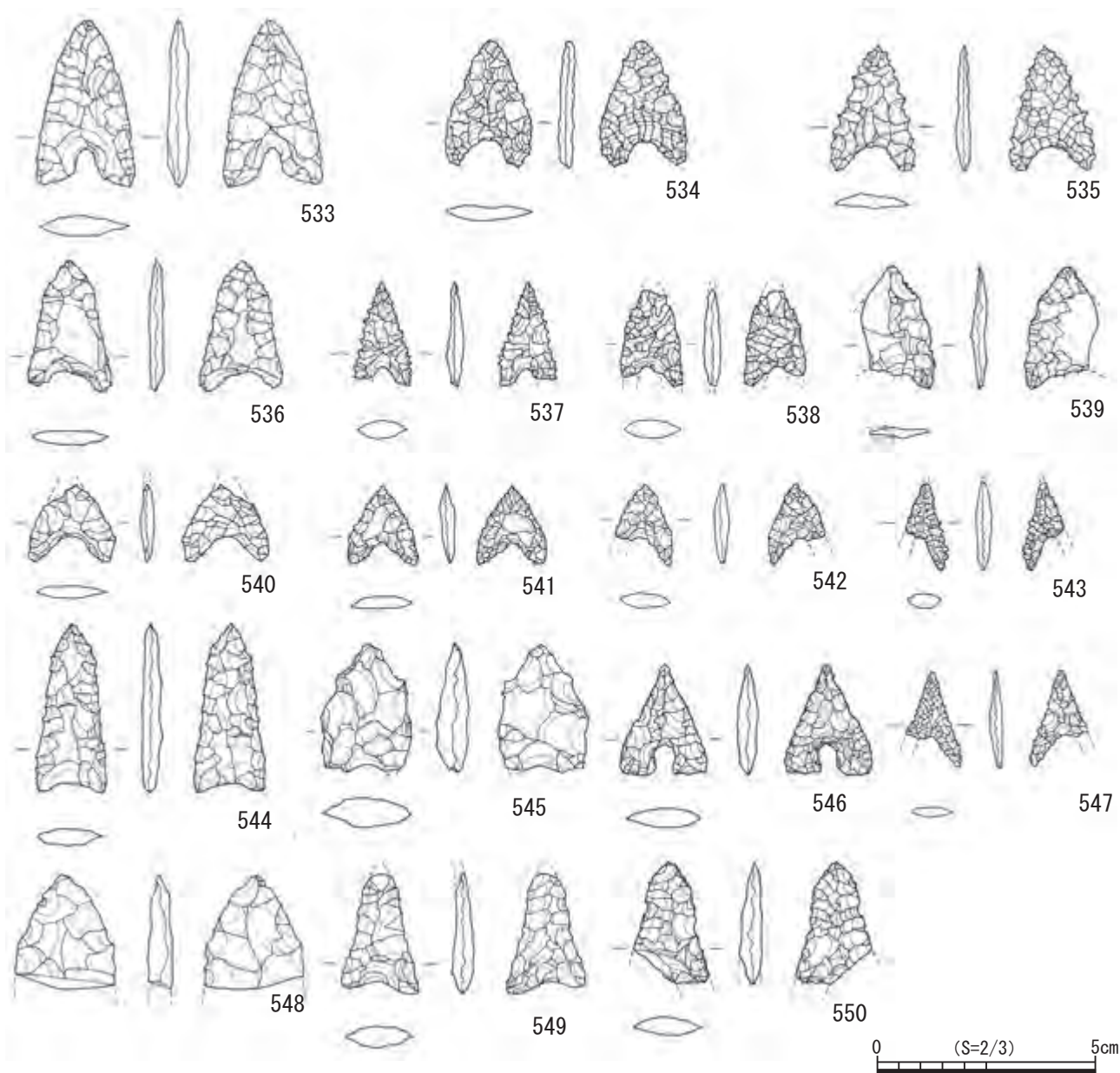
図版 番号	出土区 グリッド	層位	器種	部位	色調		調整		焼成	胎土	備考
					外面	内面	外面	内面			
466	3882		深鉢	口縁部	にぶい橙(7.5YR6.4)	にぶい褐(7.5YR5.4)	条痕	ナデ	良好	角閃石・雲母・砂粒	
467	3882		深鉢	胴部	にぶい橙(5YR6.4)	にぶい橙(5YR6.4)	条痕	ナデ	良好	角閃石・石英	
468	4284		深鉢	胴部	にぶい赤褐(5YR5.4)	褐灰(5YR5.1)		ナデ	良好	角閃石・長石	
469	4686		深鉢	胴部	明赤褐(2.5YR5.8)	にぶい黄橙(10YR6.3)		ナデ	良好	雲母・滑石・角閃石・砂粒	胎土悪い
470	4284		不明	胴部	明赤褐(2.5YR5.6)	にぶい黄橙(10YR6.3)	山形押型文	—	良好	結晶片岩・雲母・角閃石・石英	横にポジティブ楕円文、斜めあるいは縦方向に押し型山形文との二つの文様を組み合わせている
471	3884		深鉢	胴部	明赤褐(5YR5.6)	灰褐(5YR4.2)	横ナデ	ナデ	良好	角閃石・雲母・長石	
472	4086		深鉢	口縁	にぶい褐(7.5YR5.4)	にぶい橙(7.5YR6.4)	ヨコナデ・刺突、沈線、ヘラ押圧	ヨコナデ	良好	角閃石・雲母・長石多量、白色粒子	
473	3882		浅鉢	口縁部	にぶい褐(7.5YR6.3)	にぶい褐(7.5YR5.3)	ナデ	ナデ/横ナデ	良好	角閃石・雲母・赤色粒	口縁に刻目
474	3884		深鉢	口縁部	黒褐(7.5YR3.1)	にぶい褐(7.5YR5.3)	丁寧なナデ(右上がり)	ナデ	良好	角閃石・長石	9、10、12と同一個体
475	3884		深鉢	口縁部	黒褐(7.5YR3.2)	にぶい褐(7.5YR5.4)	ナデ	ナデ	良好	角閃石・雲母	
476	4086		深鉢	口縁部	黒褐(7.5YR3.2)	灰褐(7.5YR5.2)	ナデ	横ナデ	良好	角閃石・石英	
477	3480		深鉢	口縁部	灰褐(5YR4.2)	にぶい赤褐(5YR4.4)	ナデ	ヘラ	良好	角閃石・雲母・石英・長石	口縁に刻目
478	4286		深鉢	口縁部	にぶい橙(5YR6.4)	にぶい橙(7.5YR6.4)	ナデ	ナデ	良好	角閃石・雲母・赤色粒	口縁に刻目
479	4082		深鉢	口縁部	にぶい橙(7.5YR7.4)	にぶい橙(7.5YR7.4)	ナデ	横ナデ	良好	角閃石・石英・雲母	口縁に刻目
480	3882		深鉢	胴部	にぶい褐(7.5YR5.3)	にぶい橙(7.5YR6.4)	ナデ	ハケ/ナデ	良好	角閃石・雲母・長石・赤色粒	
481	4484北ベルト		深鉢	胴部	灰黄褐(10YR5.2)	にぶい橙(7.5YR6.4)	ナデ	ハケ/ナデ	良好	角閃石	区画文あり
482	4284		深鉢	胴部	灰黄褐(10YR4.2)	にぶい橙(7.5YR6.4)	ナデ	横ナデ	良好	角閃石・石英	
483	3884		深鉢	胴部	にぶい橙(7.5YR6.4)	灰褐(7.5YR5.2)	ナデ	ナデ	良好	角閃石・雲母	
484	4284		深鉢	胴部	褐灰(7.5YR5.1)	にぶい褐(7.5YR5.3)	ナデ	ナデ	良好	角閃石・滑石・赤色粒	
485	4286		深鉢	胴部	にぶい褐(7.5YR6.3)	にぶい橙(7.5YR6.4)	燃糸文(印付モノ)	ナデ	良好	角閃石・雲母	
486	3682		深鉢	胴部	にぶい褐(7.5YR5.4)	にぶい橙(7.5YR5.4)	燃糸文(印付モノ)	ナデ	良好	角閃石・雲母・赤色粒	
487	4284		深鉢	胴部	にぶい褐(7.5YR5.3)	にぶい橙(7.5YR6.4)	ナデ	ナデ	良好	角閃石	
488	4484北ベルト		深鉢	胴部	にぶい褐(7.5YR5.3)	にぶい橙(7.5YR6.4)	ナデ	横ナデ	良好	角閃石	
489	4084		深鉢	口縁部	にぶい赤褐(2.5YR4.4)	赤褐(2.5YR4.6)	指押さえ	横ケズリ	良好	角閃石・雲母	やや粗
490	4084		深鉢	胴部	暗赤褐(2.5YR3.2)	赤褐(2.5YR4.6)	指押さえ	横ケズリ	良好	角閃石・雲母	やや粗
491	4084		深鉢	胴部	にぶい赤褐(5YR4.3)	赤褐(5YR4.6)	指押さえ	横ケズリ	良好	雲母	やや粗
492	3682		深鉢	胴部	にぶい黄褐(10YR5.3)	にぶい赤褐(5YR5.4)	縄文	ナデ	良好	石英・雲母・角閃石	
493	3682		深鉢	口縁～底部	にぶい赤褐(2.5YR4.3)	にぶい赤褐(2.5YR5.4)	口縁部：二重刺突文 胴部：波状沈線 底部：ナデ	ナデ	良好	石英・長石・滑石	口縁に刻目
494	3882		深鉢	底部	にぶい褐(7.5YR5.4)	灰褐(7.5YR5.2)	指押さえ	指押さえ	良好	長石・雲母	
495	5088		鉢	底部	赤褐(2.5YR4.6)	赤灰(2.5YR4.1)	ヘラケズリ	ナデ	良好	角閃石・雲母・長石	坂の下式
496	4888		台付鉢	底部	にぶい赤褐(2.5YR4.4)	にぶい赤褐(2.5YR4.4)	太型凹線文	ヨコナデ	良好	角閃石・雲母・長石・滑石	上げ底
497	3480		深鉢	胴部	明赤褐(2.5YR5.6)	にぶい褐(7.5YR5.3)	ヨコナデ	ヨコナデ	良好	雲母・石英・長石	
498	3882		深鉢	胴部	にぶい褐(7.5YR5.4)	明褐(7.5YR5.6)	粗いナデ	ハケ	良好	角閃石・気泡・やや粗	
499	3682		深鉢	胴部	黒褐(7.5YR3.2)	灰褐(7.5YR4.2)	条痕	条痕	良好	長石・角閃石・赤色粒	
500	4486		深鉢	口縁	にぶい橙(7.5YR6.4)	にぶい橙(7.5YR6.3)	ハケ/ナデ	ハケ/ナデ	良好	長石	
501	3078		精製浅鉢	口縁	にぶい橙(7.5YR6.4)	にぶい黄橙(10YR6.3)	ヨコミガキ	ヨコミガキ	良好	角閃石・雲母・長石多量	気泡多し 胎土粗い
502	3882		浅鉢	頸部	にぶい橙(7.5YR6.4)	明赤褐(5YR5.6)	ナデ	横ナデ	良好	角閃石・長石	

ている。また器形に添うように垂直に沈線文が深く施されている。坂の下式段階(胴部第2類相当)に相当するとおもわれる。滑石を含むことにより滑らかな器面である。496は台付鉢の上げ底を呈する底部片である。内面はナデ、外面は深く凹線文が刻まれている。阿高式段階に相当するとおもわれる。滑石を含むことにより滑らかな器面である。

497～502は縄文晩期の土器である。497は深鉢の胴部片である。内外面ともに浅く条痕がほどこされた後ナデ調整されている。497～500は粗製で器面に条痕がみられることから、宮の本式土器かと思



第78図 TAK201304調査区の縄文時代包含層出土石器実測図①(S=2/3)



第79図 TAK201304調査区の縄文時代包含層出土石器実測図②(S=2/3)

われる。**501**は浅鉢の頸部片である。内外面ともに横方向に磨かれ頸部にくぼみがみられる。黒川式段階に相当するとおもわれる。**502**は浅鉢であり、胴部の屈曲が緩やかで口縁部に文様帯がない。また、口縁部の立ち上がりが口縁内外に巡る沈線に取って代わる点から、黒川式土器かと思われる。(浦田)

## ②石器(第78図503～第80図560)

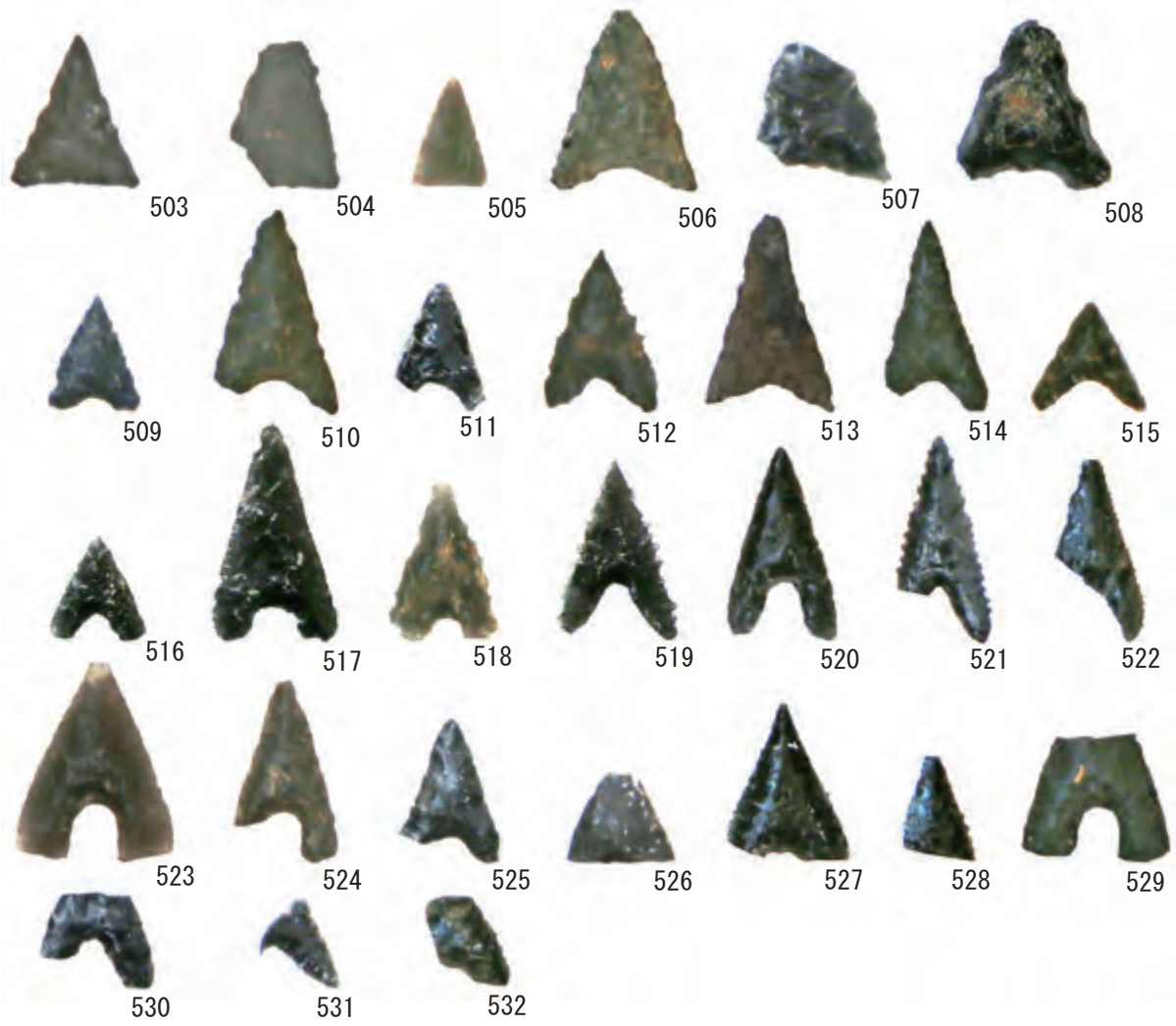
石器は、1～4層出土石器と6層出土石器に分けて報告する。

### 1～4層出土石器

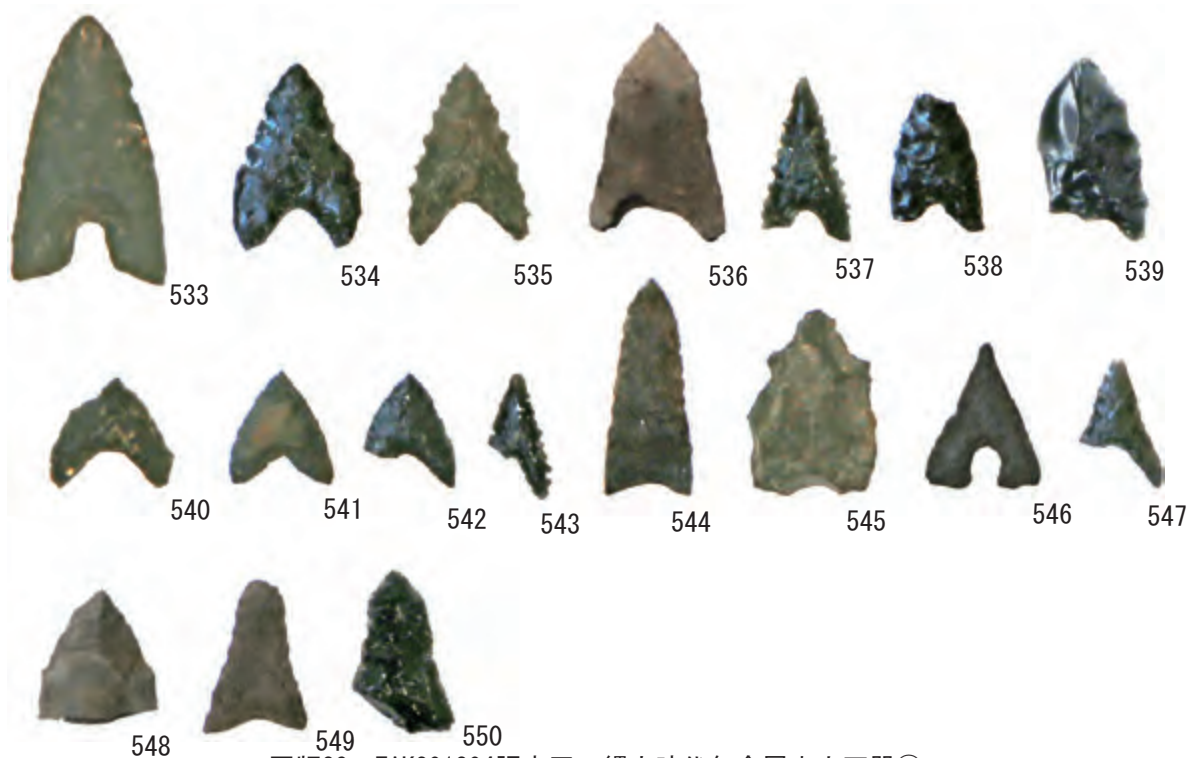
#### a. 石鏃(第78図503～第79図550)

**503～505**は平基の三角形鏃である。**503**の基部は僅かに内湾し**504・505**は側縁が外湾している。と

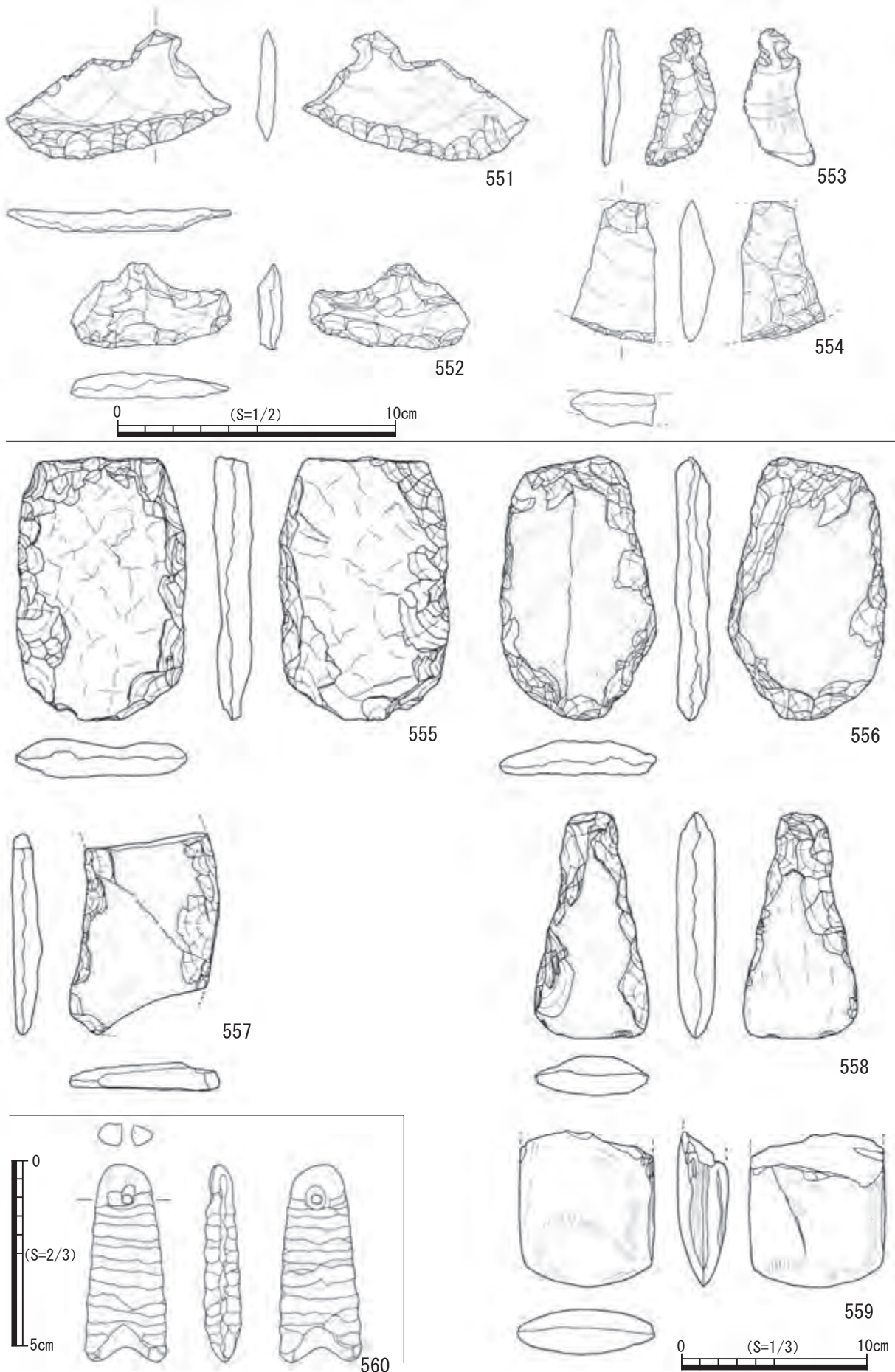




図版37 TAK201304調査区の縄文時代包含層出土石器①



図版38 TAK201304調査区の縄文時代包含層出土石器②



第80図 TAK201304調査区の縄文時代包含層出土石器実測図③ (S=2/3・S=1/2・S=1/3)



図版39 TAK201304調査区の縄文時代包含層出土石器③

くに505は小型で薄く仕上げている。507は三角形凹基で平基に近い浅い挟りで厚さが薄い。506・508は挟りが浅く弧を描く円基鏃である。508は片面に素材面を大きく残し、もう片面の調整も荒い。これは割れにくかったため中央部の膨らみを生かして加工をした可能性がある。509は比較的小型で正三角に近い凹基で片面の中央部に剥離面が残る。後期の可能性がある。506・508・510・514・515・532・540は比較的挟りが浅く脚部先端部が丸みをもつ。また510・514は二等辺三角形に近い長身の形状である。511・525はともに類似する挟りの形状である。512は挟りが深い。513・549は挟りの浅い二等辺三角形に近い円基である。513は先端が丸みを帯び、549の先端は欠損により不明である。515・539・540・541は小型で挟りは三角形状を描く。516は正三角形に近い三角形凹基である。小型で丁寧に周縁より丁寧に加工する。517は三角形凹基で挟りが浅いU字状で脚部が丸味をおびる。518・520・

第21表 TAK201304調査区包含層出土石器観察表

図版番号	器種	出土区 グリッド	層位	石材	最大長(mm) *( )は残存値	最大幅 (mm)	最大厚 (mm)	重量 (g)	備考
503	石鏃	3882	5層	黒曜石	(21.0)	17.0	4.2	(0.9)	平基、完形
504	石鏃	4084	5層	黒曜石	(19.5)	(15.0)	4.0	(1.1)	平基、片脚・先端折れ
505	石鏃	3884	5層上面	黒曜石	(20.0)	10.0	2.4	(0.3)	平基、小型、完形
506	石鏃	3882	5層	安山岩	24.0	(20.0)	5.2	(1.6)	円基、完形
507	石鏃	4686	3層	黒曜石	(21.0)	(21.0)	3.0	(1.2)	凹基、平基に近い浅い挟り、片脚・先端折れ
508	石鏃	4284	5層	黒曜石	(23.0)	(21.0)	7.7	(2.6)	円基、先端・片脚折れ
509	石鏃	3280	3層	黒曜石	17.3	14.0	3.3	0.5	凹基
510	石鏃	4486	5層	黒曜石	28.0	(16.0)	4.7	(1.4)	凹基、挟り浅い、片脚先端部折れ
511	石鏃	3682	4層	黒曜石	(19.0)	(14.0)	5.0	(0.8)	凹基、挟り浅い、両脚先端部折れ
512	石鏃	4084	5層	黒曜石	22.0	15.0	4.0	0.8	凹基、脚先端部太い、完形
513	石鏃	4888	西ベルト4層	安山岩	29.0	19.0	5.4	2.0	円基、挟り浅い、風化
514	石鏃	3680	5層	黒曜石	26.0	(14.0)	3.5	(0.7)	凹基、挟り浅い、完形
515	石鏃	3884	5層上面	黒曜石	(15.0)	16.0	3.2	(0.5)	三角基、小型、完形
516	石鏃	1区西	表採	黒曜石	15	13.5	2.3	0.4	三角基、小型
517	石鏃	4888	層位不明	黒曜石	31.0	18	4.6	1.90	凹基
518	石鏃	4286	5層	黒曜石	23.0	14.0	4.0	1.2	鋸歯鏃、挟り浅い完形
519	石鏃	4888	ベルト2層	黒曜石	27.0	17	3.6	0.89	鋸歯鏃、挟り深い完形
520	石鏃	5088	5層	黒曜石	26.0	14.5	4.3	0.97	凹基、挟り深い、完形
521	石鏃	4486	4層	黒曜石	31.0	(16.0)	4.3	(1.1)	鋸歯鏃、凹基、挟り深い、片脚折れ
522	石鏃	4084	5層上面	黒曜石	(22.0)	(13.0)	3.0	(0.3)	凹基、挟り深い、片脚折れ
523	石鏃	3276	5層	黒曜石	27.0	21.0	3.0	1.7	凹基、鋸形鏃、完形
524	石鏃	4686	4層	黒曜石	(27.0)	(15.5)	4.9	(1.2)	鋸形、凹基、表面風化ありやや茶色に濁り、片脚折れ
525	石鏃	4886	3層北壁	黒曜石	22.0	(16.0)	4.0	(0.8)	凹基、片脚折れ
526	石鏃	3882	3層	黒曜石	(12.0)	(14.5)	3.0	(0.6)	先端、脚部折れにより基種不明
527	石鏃	3480	5層	黒曜石	(23.0)	(17.0)	4.0	(1.4)	両脚折れ基種不明
528	石鏃	3882	5層	黒曜石	(14.9)	(10.5)	2.5	(0.3)	両脚、先端折れ基種不明
529	石鏃	3880	5層	黒曜石	(2.2)	2.0	4.5	(1.3)	凹基、鋸形鏃、先端折れ
530	石鏃	4888	3層	黒曜石	(14.5)	(17.0)	3.6	(0.7)	三角形凹基、挟り深い、片脚・先端部折れ
531	石鏃	3882	4層	黒曜石	(14.0)	(12.0)	(2.9)	(0.2)	三角形凹基、挟り深い、片脚部残存
532	石鏃	5088	5層	黒曜石	(13.5)	(5.5)	(3.9)	(0.4)	凹基、挟り浅い、片脚のみ残存
533	石鏃	3882	5層	黒曜石	38.0	22.5	4.5	3.3	凹基、大型、完形
534	石鏃	4084	5層	黒曜石	29.0	20.0	3.5	1.8	凹基、大型、完形、脚部太い
535	石鏃	3680	5層	黒曜石	29.0	19.0	3.0	1.5	鋸歯鏃、挟り浅い完形
536	石鏃	4686	3層下	安山岩	30.0	1.9	3.2	1.6	円基、挟り浅い、風化
537	石鏃	4686	5a層	黒曜石	24.0	(13.0)	4.0	0.8	鋸歯鏃、挟り浅い完形
538	石鏃	4084	5層	黒曜石	(2.2)	(1.4)	3.0	(1.0)	片脚、先端折れ基種不明
539	石鏃	4486	4層	黒曜石	28.0	(17.0)	3.8	(1.4)	円基、五角形石鏃
540	石鏃	3682	5層	黒曜石	(17.5)	19.5	3.1	(0.7)	三角基、先端折れ、小型
541	石鏃	4082	5層	黒曜石	17.5	16.0	2.5	0.7	三角基、小型、局部磨製、完形
542	石鏃	3280	5層	黒曜石	18.0	(13.0)	3.0	(0.5)	三角基、片脚折れ、小型
543	石鏃	3882	5層	黒曜石	(20.0)	(19.0)	3.0	(0.4)	凹基、鋸歯鏃、挟り深い、先端・片脚折れ
544	石鏃	3280	3層	安山岩	48.5	16.0	4.5	2.6	円基、挟り浅い大型
545	石鏃	4086	5層	黒曜石	(29.0)	21.0	7.4	(3.8)	未製品か
546	石鏃	4686	4層	黒曜石	25.4	20.4	4.2	1.4	鋸形
547	石鏃	4486	5層	黒曜石	(24.0)	(12.0)	3.0	(0.5)	凹基、鋸歯鏃、挟り深い、片脚・先端折れ、黒色に灰色の縞が二本はいる
548	尖頭器	342	5a層	安山岩	(2.6)	(2.3)	(0.58)	(2.9)	
549	石鏃	4084	3層	安山岩	(28.0)	18.0	4.7	(1.6)	円基、挟り浅い
550	石鏃	4886	2層	黒曜石	(27.5)	(17)	4.6	(1.60)	脚部欠損により基種不明、基部(脚部)が折れたものを再加工か
551	石匙	4686	5a層	安山岩	4.60	8.00	0.78	22.6	
552	石匙	3882	5層	安山岩	3.10	4.70	0.93	15.4	
553	石匙	4284	5層	黒曜石	4.90	2.50	0.60	5.0	
554	スクレイパー	4284	5層	安山岩	5.50	(3.0)	1.15	(18.51)	
555	打製石斧	4686	5層	安山岩	14.10	9.10	2.04	340.0	短冊形
556	打製石斧	4286	4層	安山岩	14.50	8.30	1.80	275	
557	打製石斧	4086	4層下	安山岩	(7.9)	(10.7)	1.59	(165)	
558	局部磨製石斧	3884	5層	安山岩	12.10	6.10	2.07	175.0	
559	磨製石斧	4686	5層	安山岩	(8.3)	7.30	(2.70)	(215.0)	
560	装身具	4284	5層	方解石	53	22	10	12.5	

535・537・543は側面に鋸歯状加工を施す石鏃である。518・537の挟りは浅く520・535・543は深い挟りである。520・537・543の側面は直線的で、535は外反する。とくに520は一方の側面の鋸歯状の加工は微細にしてあるがもう一方の側面はほとんどされていない。518は片面に素材面が残り鋸歯状の加工も荒く全体に丁寧につくられたものではない。519は三角形凹基で側縁部に鋸歯状の加工を施している。挟りは深く両面とも周縁より加工するものの体部はあらい。550は二等辺三角形に近い三角形凹基で先端部に近い位置に肩部を作出し周縁より丁寧に加工する。両脚は欠損している。521は側縁部に鋸歯状の加工を施し挟りは深く両面とも周縁より丁寧に加工する。522・547は挟りが深く側面は直線的である。524、546は脚部が幅広く角ばった鋸形基である。524は風化により表面が濁る。とくに546は体部と脚部との境に屈曲が顕著に認められ周縁より丁寧に加工する。526は両脚欠損により形態は不明である。530・531ともに挟りは深く両面とも周縁より丁寧に加工する。536・544は先端に近い位置に肩部を作出しともに挟りは浅く弧を描く。とくに544は大型で風化により表面が磨耗され

る。536はとくに風化が激しい。539は五角形円基である。543は脚部先端部がまるみをおび、518・520・535・537は角ばり、512・533・534・539・541・547は尖り気味である。529・523は挟りが丁寧に調整され脚部が幅広く角ばった鋏形基である。533は大型の石鋏である。534は体部半ばから脚部にかけて張り出し三角形の石鋏のなかでも形状が異なる。541・540は側縁が外湾し515は正三角形に近く542は脚が長い円基鋏である。541は両面中央部を磨き片面の脚部も部分的に磨く。中央部と脚部の磨き方向が同一なことから意図的に脚部は磨いていないとおもわれる。548は材質をサヌカイトとする尖頭器である。基部は欠失しており、木葉形状を呈し両面加工されたものである。527・528・545は残存状況により分類が出来ないものである。545は未製品かとおもわれ527は左右非対称な石鋏で528は残存状況により形態は不明である。

b. 石匙(第80図551～553)

551は材質をサヌカイトとする横形の石匙である。刃部、摘み部ともに丁寧に加工されている。下端刃部、摘み部とその周囲に調整剥離が多い。552は安山岩質の横形石匙である。全体に加工が精緻でなく、厚みも不均衡である。また、刃部片側は欠失している。553は材質を黒曜石とする縦形の石匙である。刃部、摘み部ともに周縁のみ調整剥離している。

c. スクレイパー(第80図554)

554は材質をサヌカイトとするスクレイパーの一部と思われる。

d. 打製石斧(第80図555～557)

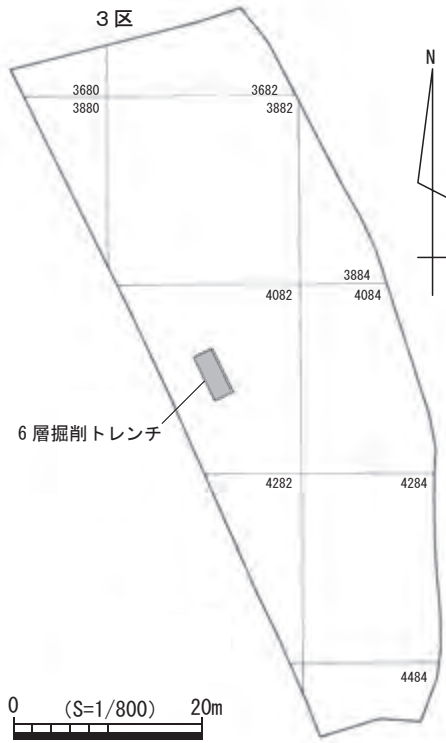
555は安山岩質の打製石斧である。短冊形を呈し、両刃であるが刃潰れもみられる。

e. 磨製石斧(第80図558・559)

558は安山岩質の局部磨製石斧である。基部は敲打を受け摩滅し、刃部は丁寧に磨かれている。全体にローリングを受けており、剥離が不明瞭である。塞ノ神式土器と共伴する出土例(「平遺跡」長崎県文化財調査報告書第65集諫早中核工業団地造成に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査報告書 I 1983長崎県教育委員会)もあることから、製作年代として縄文早期後半の可能性も考えられる。559は安山岩質の磨製石斧である。基部を大きく欠失し刃部を残している。丁寧に磨かれており、その形状から定角式磨製石斧である。

f. 垂飾品(第80図560)

560は2区4284グリッドの4層の中上層から出土した装身具(垂飾品)である。長さ53mm、幅22mm、厚さ10mm、重さ12.5gを測る。材質は白色の石製で蛍光X線分析によりカルシウム(Ca)を多く含むことから方解石(カルサイト)である可能性が高い。形状は隅丸のバチ形で横に7本のくびれを施し、上部端に穿孔をし、下部を三角に挟りを入れ、全体を丁寧に磨き上げている。この垂飾品が出土した4層からは最下部では押型文土器など縄文時代早期の土器が出土し、中上層では後期から晩期の土器片が混在して出土する。このことからこの垂飾品も縄文時代後期から晩期にかけてのものと考えられる。



第81図 TAK201304調査区6層掘削トレンチ位置図 (S=1/800)

6層出土石器(図版40)

調査区に旧河川の西側に5層(古土層)の堆積があり、その下層に赤褐色粘砂質土の6層が堆積していた。調査区全体としては5層上面までの調査としたが、4082グリッドに2m×5mのトレンチを設定し、工程の許す範囲で掘削し、遺物等の包含が無いか確認した(第81図)。その結果、黒曜石の剥片が8点出土した。石器や使用痕のみられるものは無かった。(浦田)



図版40 TAK201304調査区6層出土石器

(10) 小結

① 石鏃について

TAK201304調査区では、1層から4層とNR(旧河川)を含め69点の石鏃が出土した。うち、63点を各層やNRで図化した。さらにその中の基部の全体がわかるもの50点について基部に着目して分類



第82図 石鏃基部分類図

した(第82図)。凹基の中の分類に長脚鏃も入れたが今回出土は無かった。その他形状の分類では剥片鏃も入れたがこれも出土が無かった。また、重さについては完形品28点のみを入れた。

石鏃は弓の矢の先に装着して獲物を狩るための道具である。旧石器時代から縄文時代へと気候が温暖化する中、獲物となる動物の小型化が進み、小型で敏捷な動物を狩るために縄文時代から弓矢が用いられるようになる。狩猟用に使用された縄文時代の石鏃は小型で、戦闘にも使用されるようになる弥生時代になると大型化することは、これまでの研究で指摘されている。

今回の調査で出土した石鏃を基部ごとに分類してみると、黒曜石製では凹基が多くはあるが全ての形状の基部が出土しておりあまり特徴はみられない。石鏃の材料となる剥片の形状によりいろんな基部のものを作成したものかもしれない。サヌカイト製をみると平基と円基のものだけで基部を大きくえぐっているものはない。これも黒曜石のように剥離させにくいためかもしれない。また、黒曜石製より重い傾向がみえる(第22表)。

次に、縄文時代の包含層である4層から出土した石鏃の重さをみると、大きく1g以下の小型のもの、1.5から1.8gの中型のもの2g以上の大型のものに分けられる(第23表)。当時の獲物を考えると小型のものは魚や鳥などを、中型のものは小動物を、大型のものはイノシシやシカなどの大型の動物の狩猟用と考えられる。

さらに、基部の形状別の石鏃の重さを見て見ると、凹基の三角脚は1g以下の小型のものだけである。平基・凹基の円脚の石鏃は小型から中型、凹基の鋏形鏃と円基は小型から大型まで作られている(第24表)。(浦田)

第22表 TAK201304調査区出土石鏃分類別集計表

出土層位	石材	基部					形状・その他 ※内数			重さ(g)			
		平基	凹基			円基	鋸歯鏃	局部磨製	五角形	最小	最大	平均	計測個数
			三角脚	円脚	鋏形								
1・2層	黒曜石		2	1			1			0.4	1.9	1.06	3
3層	黒曜石		2	2	2	3	1		1	0.5	1.4	0.85	2
	サヌカイト					4			2	1.6	2.6	1.95	4
4層	黒曜石	3	7	10	3	2	3	1	1	0.3	3.8	1.41	13
	サヌカイト					1						1.6	1
NR	黒曜石	3	2	2	1	1				0.4	1.47	0.94	5
	サヌカイト	1											
計	黒曜石	3	14	15	6	6	5		2	0.3	3.8	1.22	23
	サヌカイト	1				5				1.6	2.6	1.88	5
合計		4	14	15	6	11	5	1	4				

第23表 TAK201304調査区4層出土石鏃重量別度数分布表

重さg	0.3	0.4	0.5	0.6	0.7	0.8	0.9	1.0	1.1	1.2	1.3	1.4	1.5	1.6	1.7	1.8	1.9	2.0
数量	1		1		1	2	1	1		1			1	1	1	1		
重さg	2.1	2.2	2.3	2.4	2.5	2.6	2.7	2.8	2.9	3.0	3.1	3.2	3.3	3.4	3.5	3.6	3.7	3.8
数量						1							1					1

第24表 TAK201304調査区石鏃基部別重量度数分布表

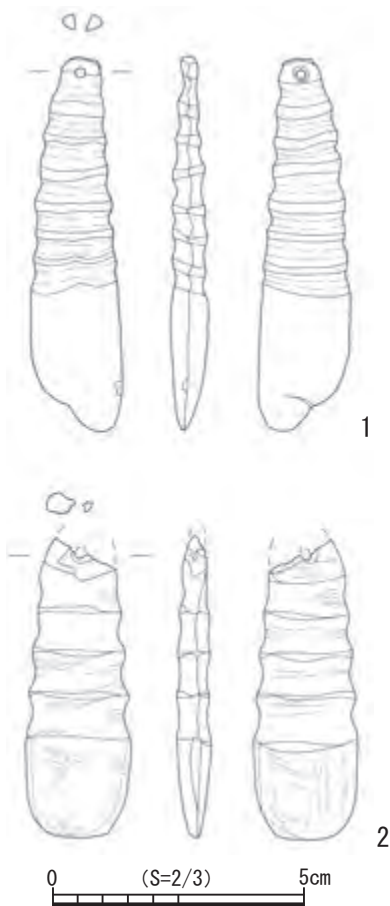
重さ g		0.3	0.4	0.5	0.6	0.7	0.8	0.9	1.0	1.1	1.2	1.3	1.4	1.5	1.6	1.7	1.8	1.9	2.0	2.1	2.2	2.3	2.4	2.5	2.6	2.7	2.8	2.9	3.0	3.1	3.2	3.3	3.4	3.5	3.6	3.7	3.8		
基部別数	平基	1						1		1																													
	三角脚		1				1	2	1	1																													
	凹基			2	1			1	1			1			2			1																					
	鏃形							1					1				1																						
	円基			1											2				1						1													1	

②装身具について

第80図560の類例を見ると、長崎県諫早市の一里松遺跡から1点(第83図1)、宮崎県都城市の田辺開拓第2遺跡から1点(第83図2)出土している。どちらも第80図560と同じ白色の石製でくびれを持ち、上部に穿孔があり、全体を丁寧に磨いている。1は出土土層から坂の下式土器が中心に出土しているので縄文時代後期初頭、2は宮之迫式土器や市来式土器が出土していることから縄文時代後期初頭から中葉にかけてのものと考えられる。

縄文時代の石製の玉を見ていくと、玦状耳飾り、大珠、丸玉、勾玉、管玉、小玉、獣形勾玉、三万田型垂飾などがあるが、第80図560の垂飾はその形状から獣形勾玉や三万田型垂飾に近いと思われる。獣形勾玉、三万田型垂飾が使用された時期は縄文時代後期後葉が中心なので、時期的にも合うと考えられる。垂飾も含む装身具・装飾品は外敵から身を守る目的で魔力があるとされるものを身に着けたことから始まるといわれる。呪術的なものからその後身分や権威を表わすものに、さらには宗教的シンボルとしても使用されるようになる。また、男女や成人の区別、集団の同族意識、威信財としても使用されてきた。装身具の中でも胸元を飾る垂飾は一点豪華なものであり誰でも持てるものではない。

外敵から身を守る呪術的なものか他と区別する身分を表すものと考えられる。そこで、縄文時代の人々にとって白く芋虫状のものはないかとみてみると、オオスズメバチの前蛹(図版41)が思い浮かばれる。ハチの子を食べる習慣は現在でも信州を中心に残る。考古学的な資料は無いが縄文時代にも大切な秋の蛋白源として利用されていたことは類推できる。日本ではクロスズメバチとオオスズメバチの子が食されてきたがクロスズメバチは小型で攻撃性は弱く採取しやすいが子が取れる数が少ない。それに対しオオスズメバチは大型で子の採取できる数も多いが攻撃性が非常に強く誰でも採取できるものではない。さらに食



1：一里松遺跡・2：田辺開拓第2遺跡  
第83図 装身具の類例 (S=2/3)



図版41 オオスズメバチ前蛹

(<http://mushikurotowa.cooklog.net/>より作成)



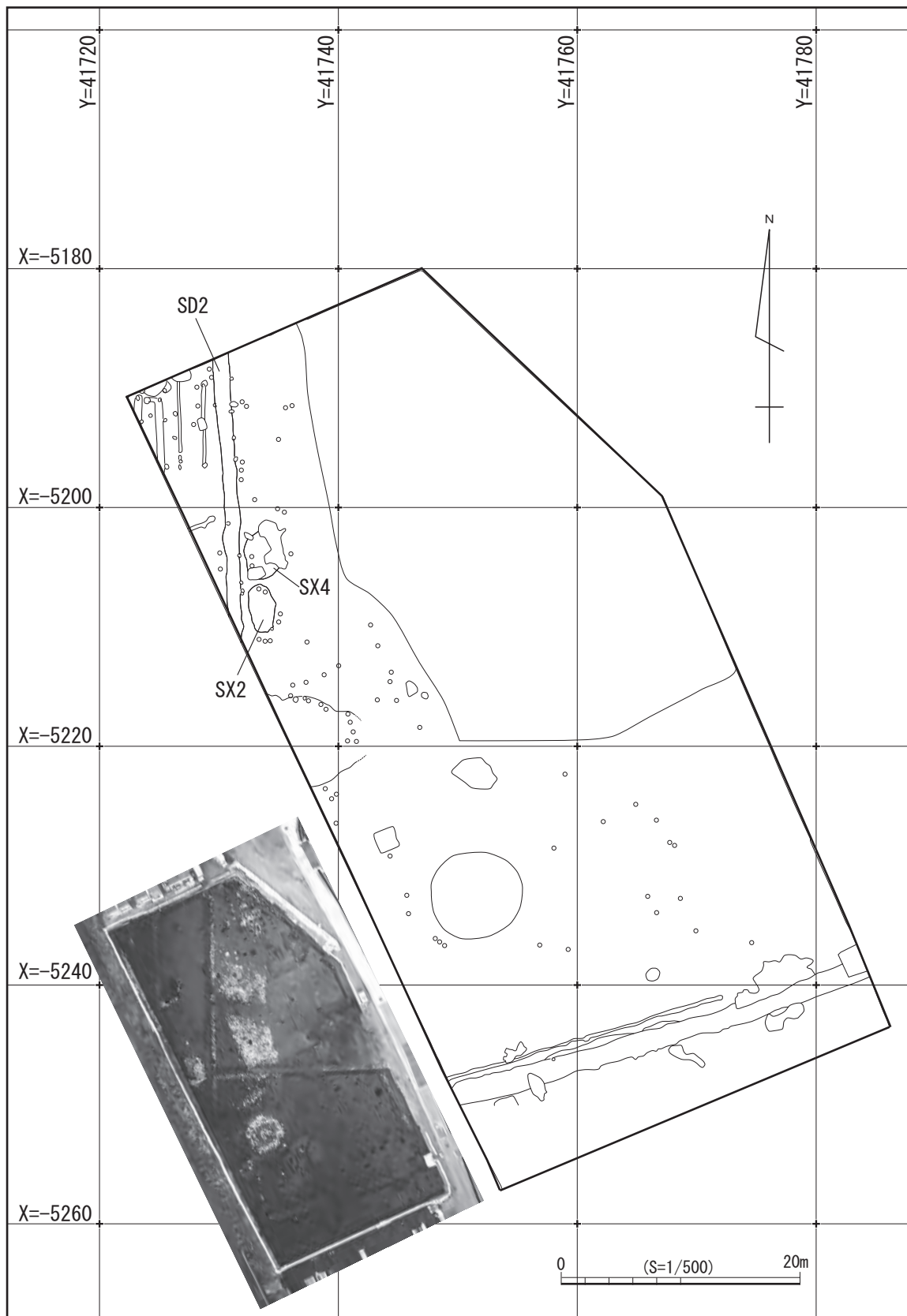
第25表 装身具(垂飾)観察表

図版番号	出土遺跡	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重さ(g)	材質	色調	その他
第80図560	竹松遺跡	53	22	10	12.5	方解石	白色	
第83図1	一里松遺跡	74	18	8	9.7		白色	表面にマンガン分が付着
第83図2	田辺開拓第2遺跡	(70)	21	8			白色	

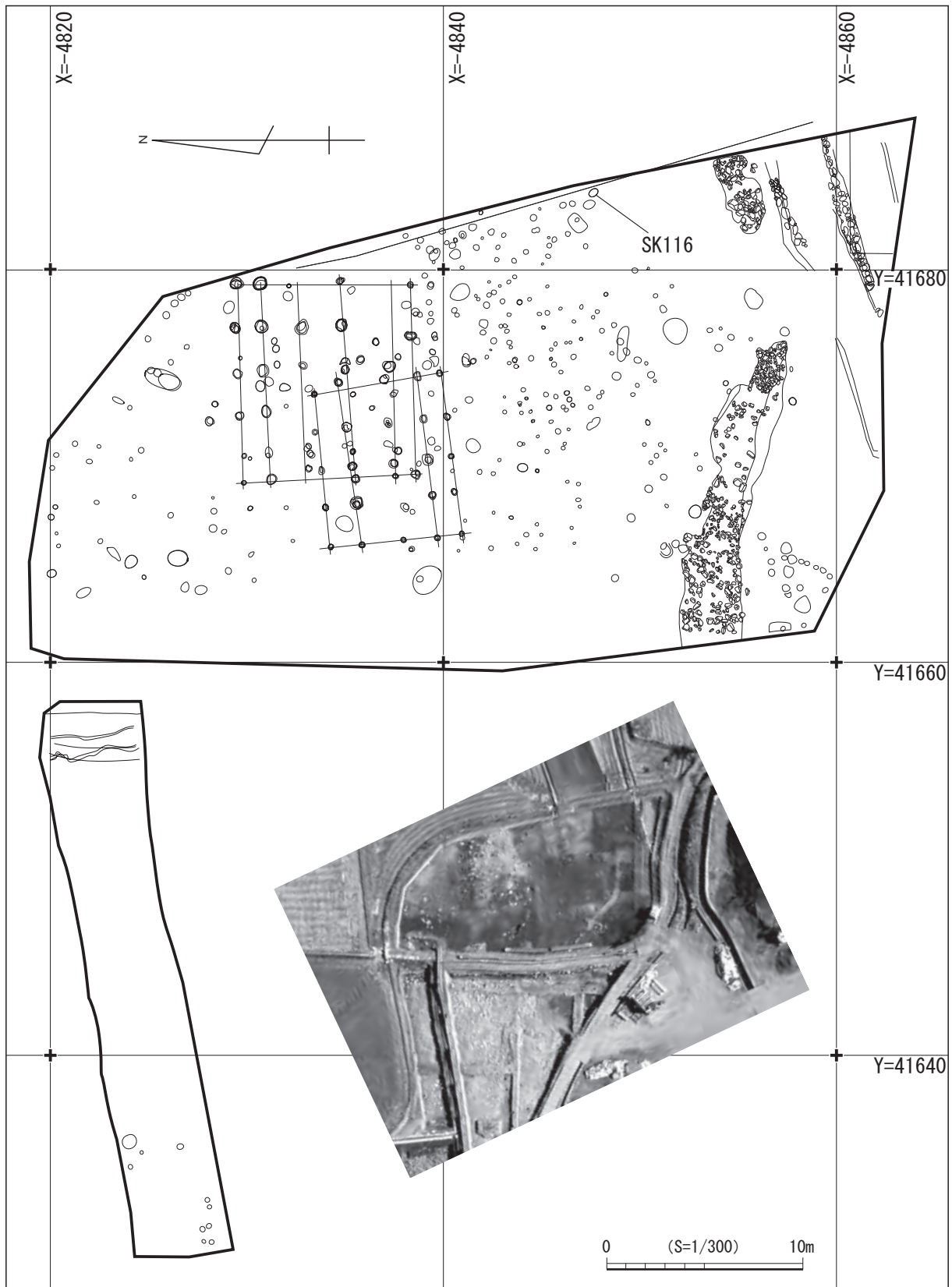
するオオスズメバチの子でも幼虫、前蛹、蛹、成虫とあるが一番美味といわれるのが前蛹である。現在の時点で出来うる推測ではあるがこれらの垂飾はオオスズメバチの前蛹をモチーフとしたものでその貴重で、危険なハチの子の採取でオオスズメバチから身を守るための呪術的なものが集団の中でオオスズメバチのハチの子を採取できる人物の身分を示すものではないかと思われる。(浦田)

【参考文献】

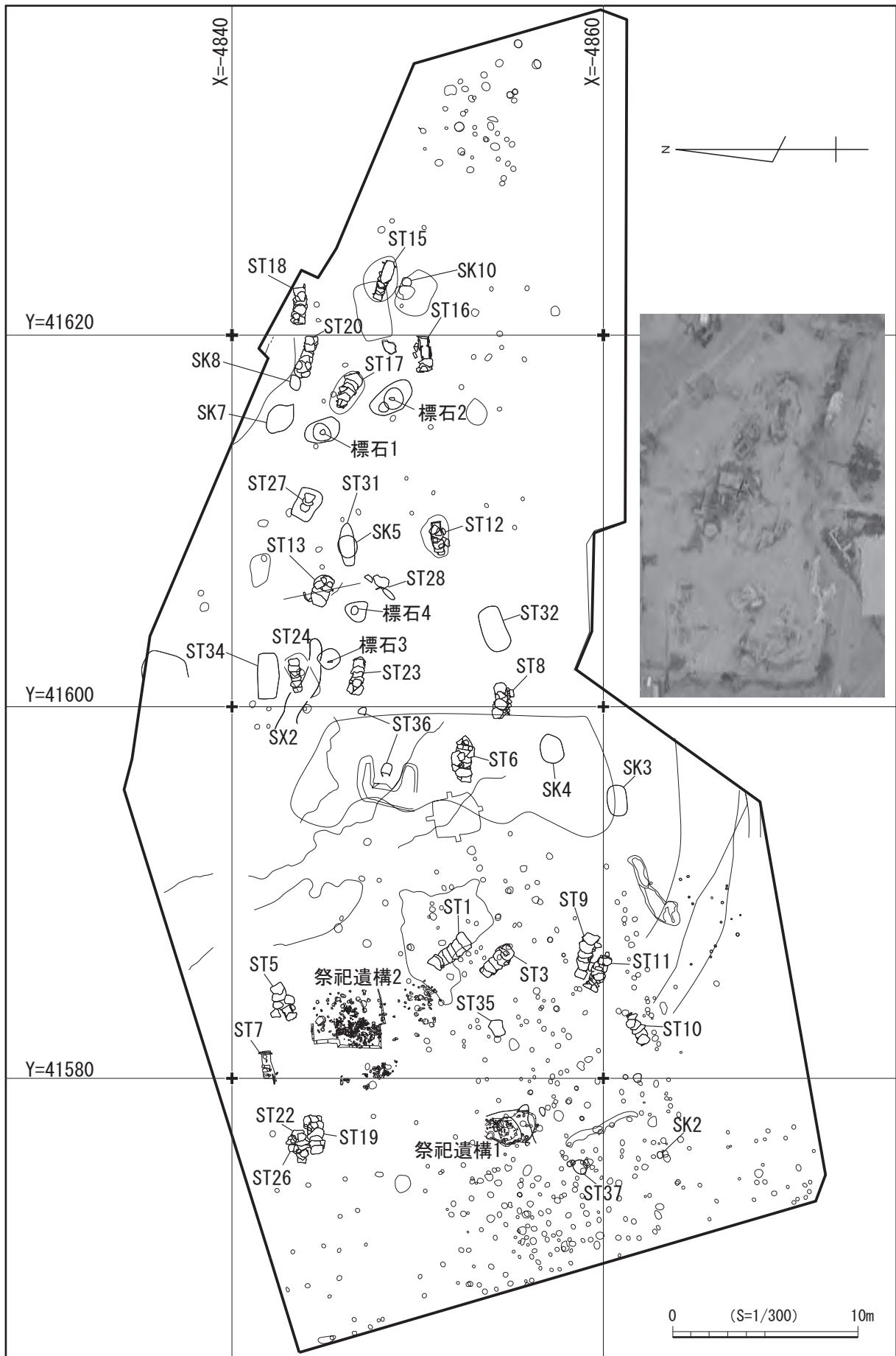
- 土肥 孝「縄文時代の装身具」『日本の美術2』No. 369 至文堂 1997
- 大坪 志子『縄文玉文化の研究－九州ブランドから縄文文化の多様性を探る－』雄山閣 2015
- 松浦 誠「日本における昆虫食の歴史と現状：スズメバチを中心として」『三重大学生物資源学部紀要』1999
- 都城市教育委員会編「田辺開拓第2遺跡①・②」『都城市内遺跡6』都城市文化財調査報告書第110集 2013



第84図 TAK201301調査区D区弥生時代遺構配置図(S=1/500)

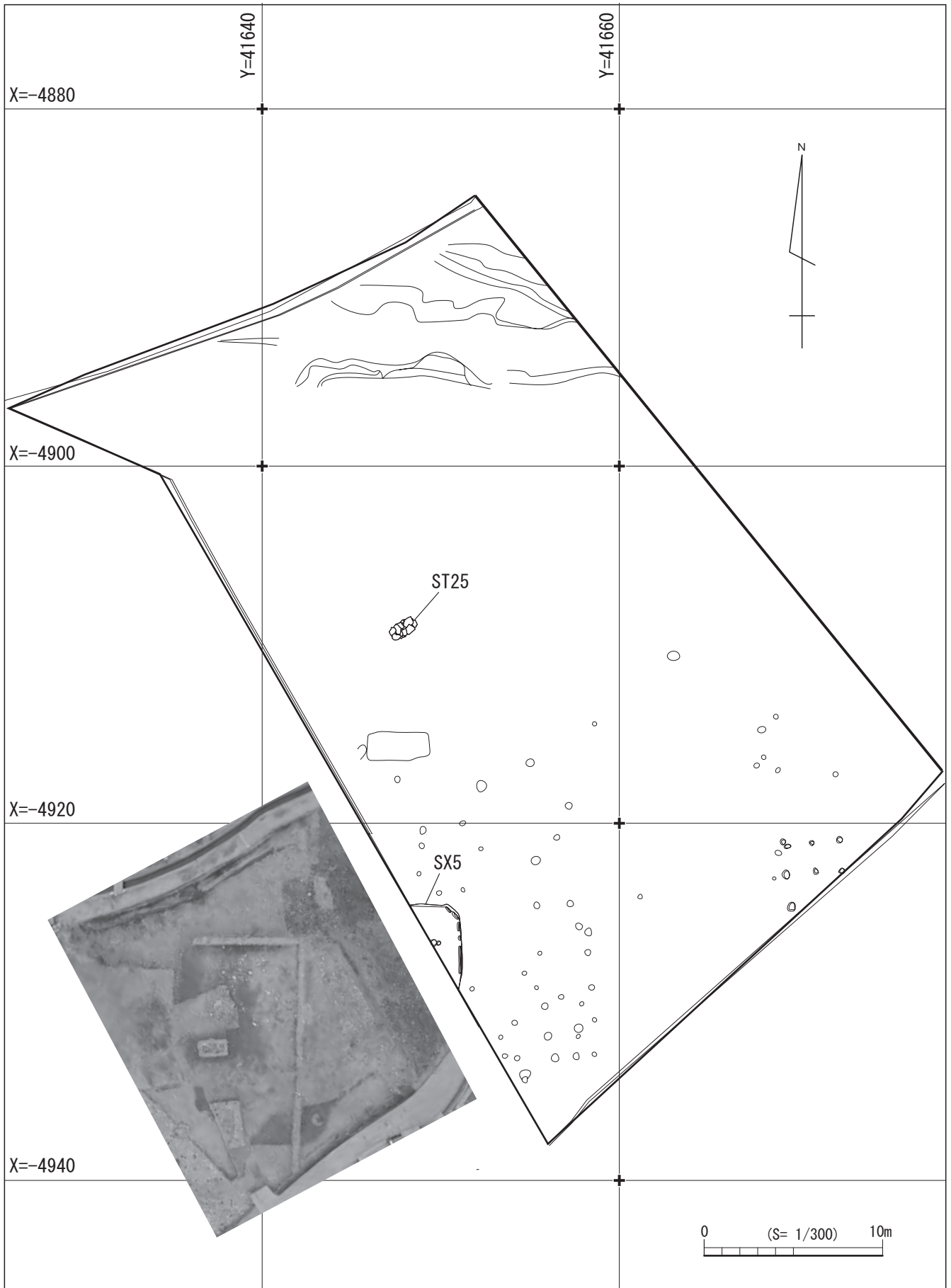


第85図 TAK201202調査区⑥区弥生時代遺構配置図(S=1/300)  
『竹松遺跡Ⅱ』未報告分平成24年度調査

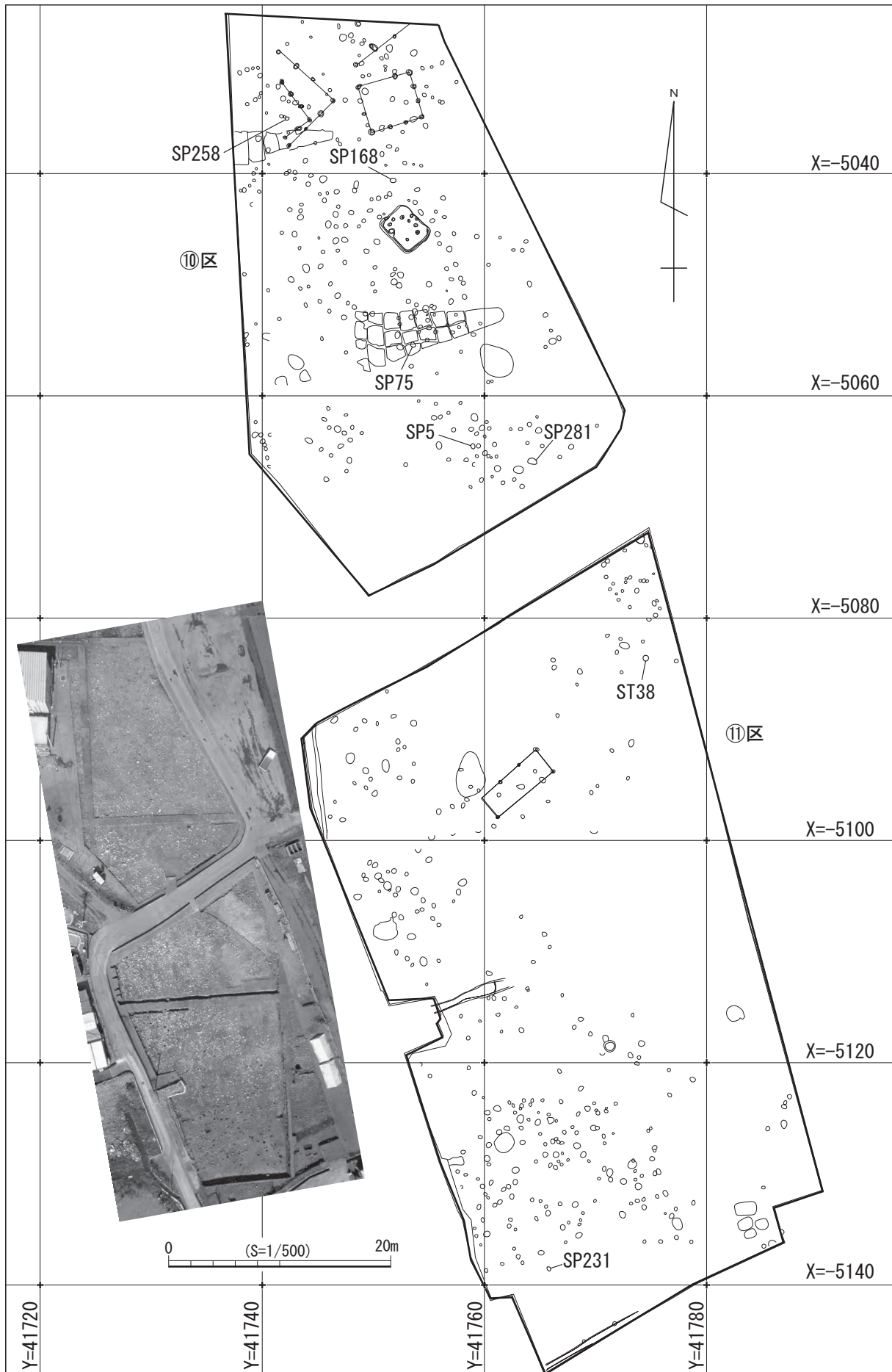


第86図 TAK201302 調査区①区弥生時代遺構配置図(S=1/300)

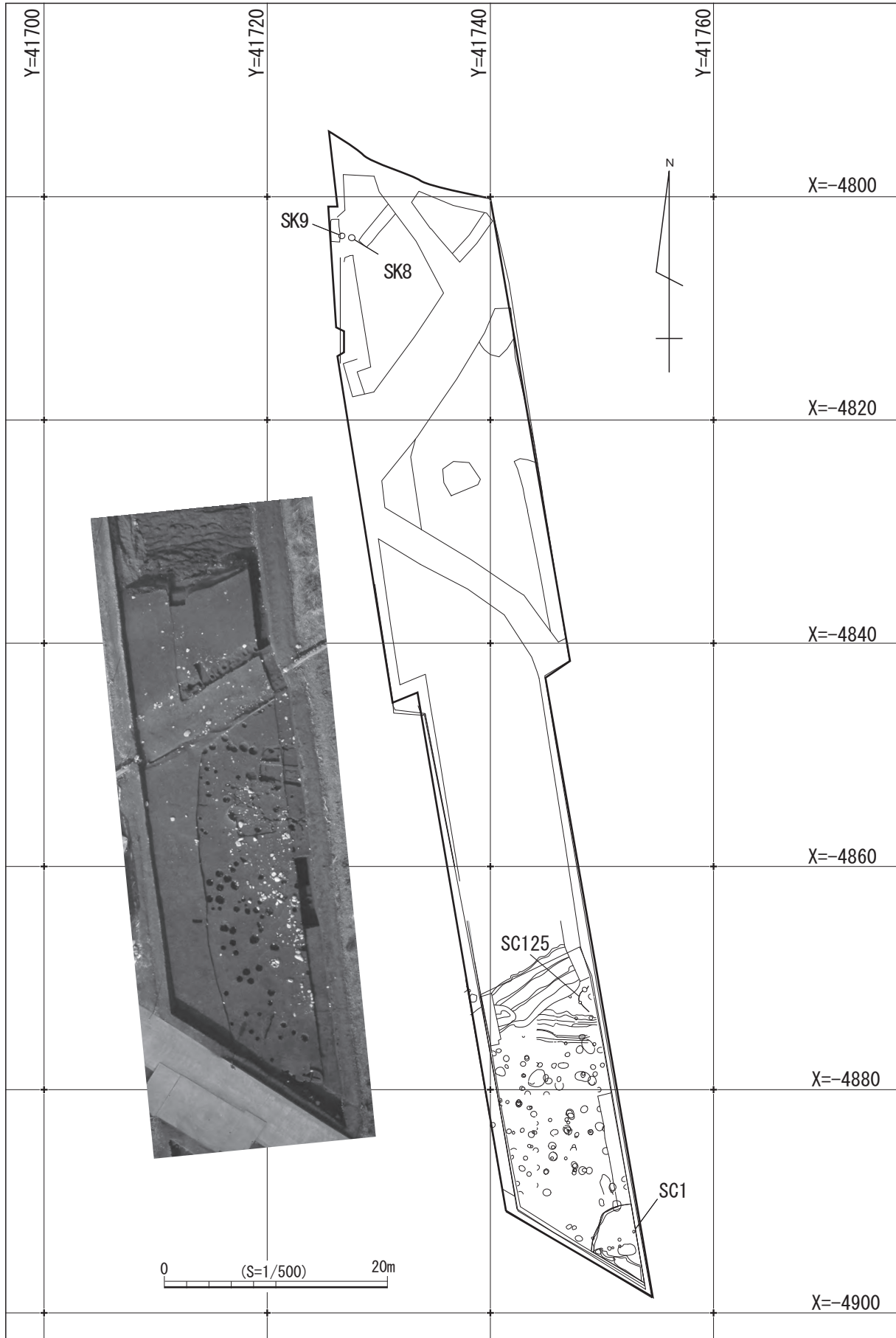
(当調査区は年度をまたがったため前年度調査の TAK201202調査区の②区と⑧区の一部と重なる)



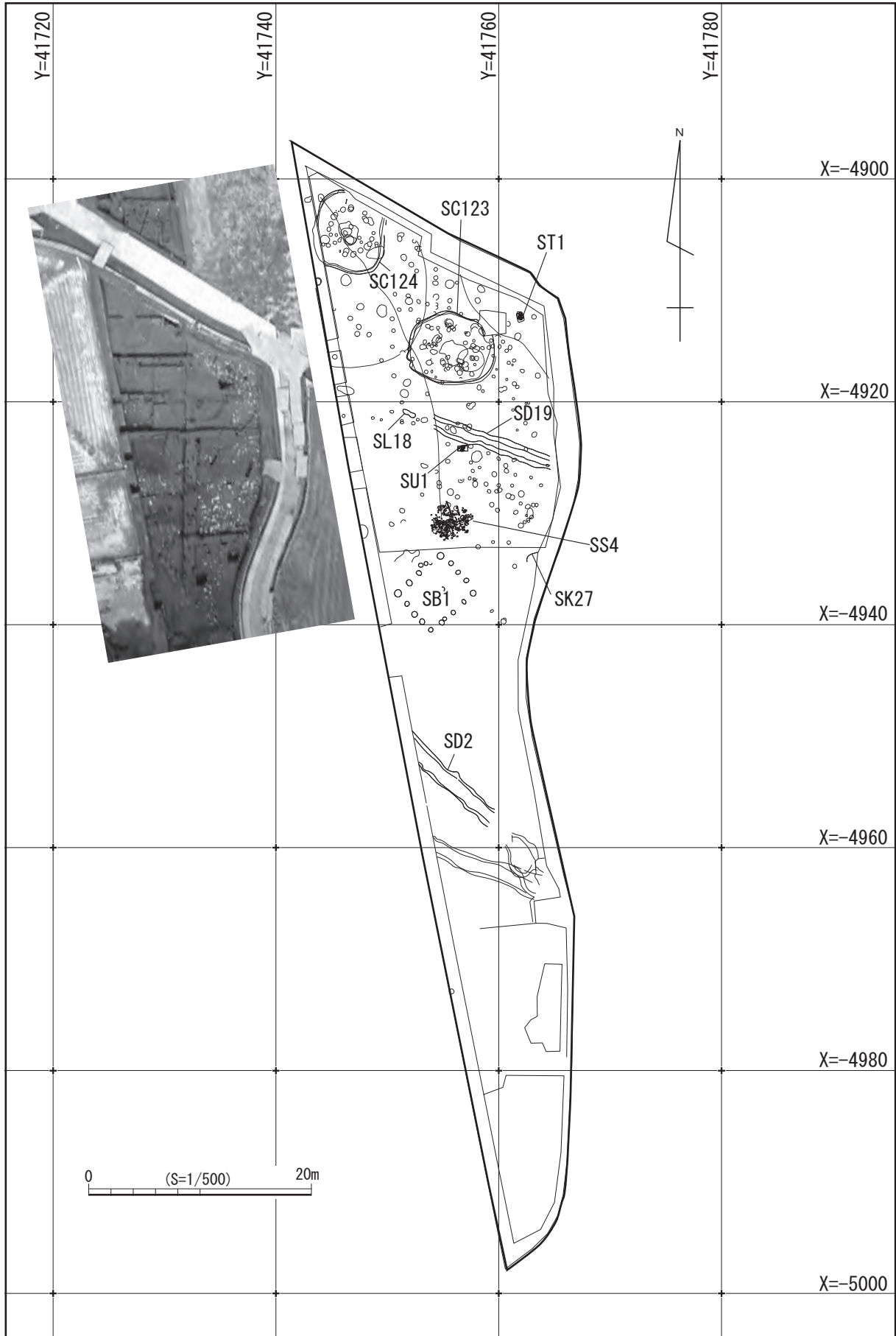
第87図 TAK201302調査区④区弥生時代遺構配置図(S=1/300)



第88図 TAK201302調査区⑩・⑪区弥生時代遺構配置図 (S=1/500)



第89図 TAK201303調査区A区弥生時代遺構配置図 (S =1/500)  
現場では北から1~5の小区に分けたが、省略



第90図 TAK201303調査区B区弥生時代遺構配置図 (S=1/500)  
現場では北から1~5の小区に分けたが、省略



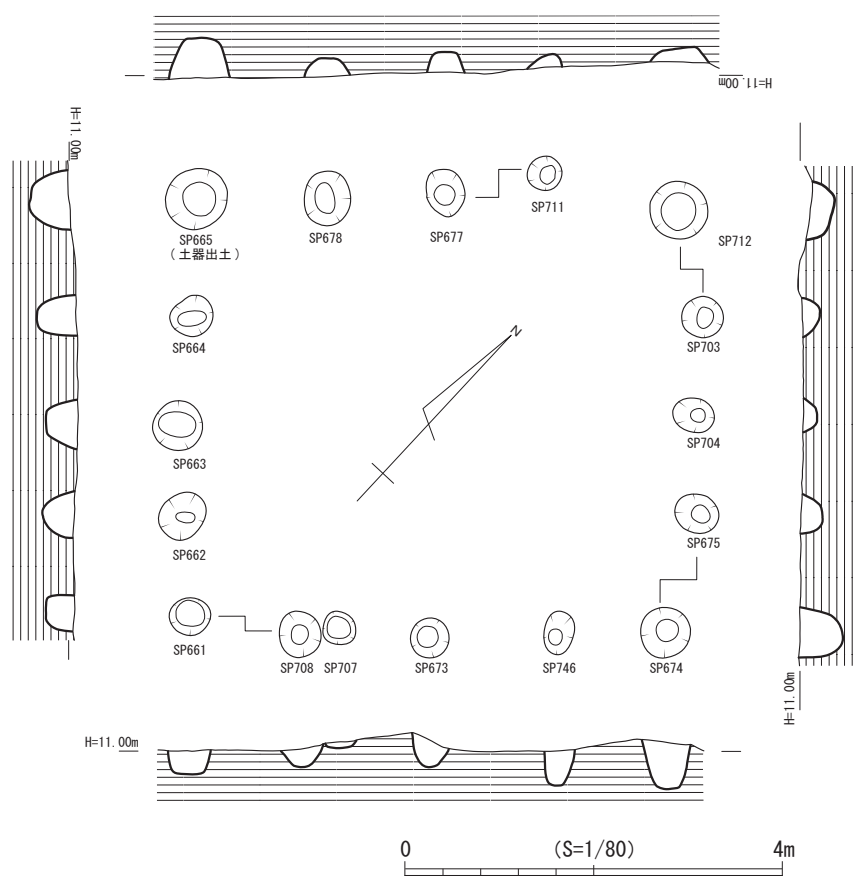
## 2 弥生時代・古墳時代

### (1) 弥生時代の遺構、遺物

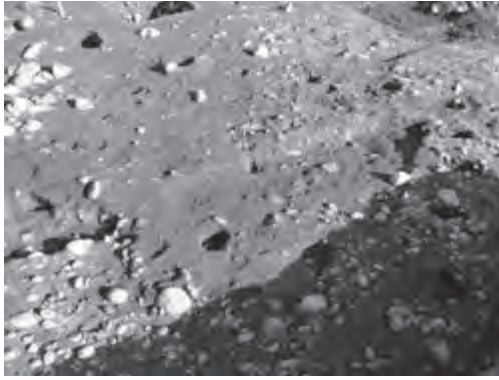
TAK201301～04調査区で弥生時代の遺構が検出された調査区は TAK201301～03である。遺構は掘立柱建物(SB)、竪穴建物(SC)、溝(SD)、墓(ST)、土坑(SK)、柱穴(SP)、集石(SS)、焼土(SL)、祭祀遺構、標石、遺物集積(SU)、不明遺構(SX)を検出した。特に箱式石棺墓を中心とする墓域の様相は集落構成を考えるうえで極めて重要である。以下個別遺構、遺物の説明を記す。

#### ①TAK201303B3区SB1(掘立柱建物) (第91・92図 図版42・43 表26)

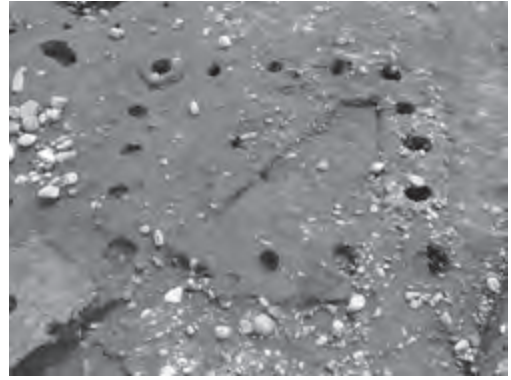
B3区9274、9474グリッドに位置する。SC123から南に16mの位置に構築されている。規模は4間×4間の側柱建物でやや横長の建物である。柱穴は円形及び楕円形で規模は、長軸0.42～0.62m、深さ0.14～0.50mを測る。桁行間は1.1～1.3m、梁行間は1.0～1.3m、桁行長は5.08m、梁行長は4.4mである。柱列は桁行、梁行ともにやや不揃いである。柱の深さから考えてかなり削平されている。出土遺物はSP665の覆土から1点だけ出土した。以下出土遺物について記す。561は器種不明の土器片である。弥生土器片なのか判然としない。酸化焰焼成の土器で灰色味があったものである。朝鮮半島系の土器ではなく、外面の様態は二次的被熱を思わせる感がある(長崎県埋蔵文化財センター古澤氏所見)。SB1は時代が判然としないが弥生時代の遺構、遺物として報告する。



第91図 SB1平・断面図(S=1/80)

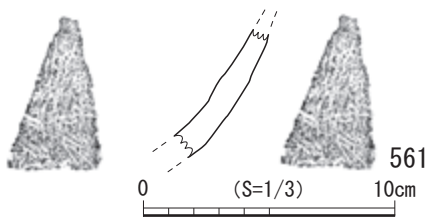


①検出・半截状況

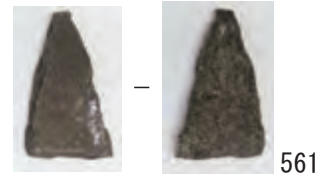


②完掘状況

図版42 SB1遺構状況(①・②)



第92図 SB1出土遺物実測図(S=1/3)



図版43 SB1出土遺物

第26表 SB1出土土器観察表

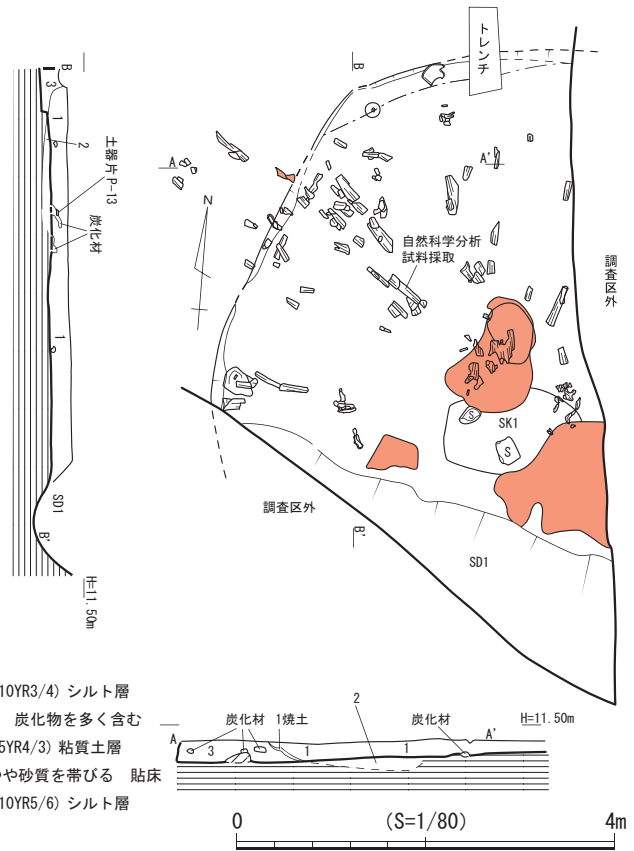
遺物番号	器種	部位	法量(cm)			調整		色調		焼成	胎土	備考
			口径	器高	底径	外面	内面	外面	内面			
561	不明	—	—	—	—	ハケメ	ナデ	2.5Y4/1 黄灰	2.5Y4/1 黄灰	良	石英・雲母 角閃石	小片・細片

②TAK201303A5区SC1(竪穴建物) (第93~95図 図版44~46 表27・28)

A5区8874グリッドに位置する竪穴建物である。遺構は3-①層で確認した。調査区外及びSD1に切られているため1/4程度の残存である。壁の立ち上がりは5~13cm程で削平が著しい。平面形を確認後に掘削を開始した結果、床面よりやや上層で炭化材が多量に出土した。炭化材は丸、四角の板材があり出土した板材は北西方向、北方向に向かって倒れた様相を呈していたことから焼失住居であろう。また0.37m×0.23mを測る焼土を検出し、この回りに多く出土した炭化材は自然科学分析(年代測定、樹種同定)を行った。竪穴内施設では長軸1.40m、短軸0.94mの楕円形を呈する土坑を検出した。この土坑を取り囲むように楕円形や不整形を呈する3ヶ所の焼土を検出した。規模1.2m×0.6m、1.2m×1.1m、0.4m×0.3m程である。柱穴は確認できなかった。出土遺物は覆土及び床面からの出土である。以下出土遺物について記す。

562~566、569は甕の口縁部~底部の破片である。562、563は、くの字口縁を呈し内外面に縦、斜め方向にハケメ調整を施す。564は口縁部を欠損するが内外面のハケメ調整が562、563と同一であることから考えて562、563と同じ形態であろう。565は口縁部片でやや緩やかなくの字口縁を呈する。566、569は甕の底部である。566は僅かに内湾気味の曲線を描く。569は平底で底部付近は炭の付着が残る。胎土は多くの砂粒を含む。いずれの土器も外面は縦方向のハケメ調整を施す。567、568は台付甕の脚部片である。570は高杯で杯部から脚部片で穿孔が一部認められる。571は短頸壺の口縁部から胴部片である外面は縦方向のハケメ調整を施す。572は壺胴部片である。三角凸帯を一条貼り付けている。外面は斜め方向にハケメ調整を施す。573~578は縄文時代晩期の深鉢、浅鉢片、丹塗り土器片である。

579～584までは複合口縁壺又は壺の口縁部胴部片である。581は複合口縁壺で口縁端部は丸い。583は口縁部が欠損する。口頸部に三角凸帯を付設する。内外面はハケメ調整を施す。584は胴部片で二重の刻目三角凸帯を有する。585～591までは石製品である。585は黒曜石製の小形の石鏃である。凹基無茎鏃である。588は敲打石器で断面三角形を呈し、一辺が欠損する。589は磨石で楕円形を呈する。両面に痕跡が残る。側面に僅かな凹凸痕があることから敲打石器としても使用したものと思われる。590は結晶片岩製の石器片で器種は不明。591は小形の石斧で基部が欠損する。刃は蛤刃で丁寧に磨きを施している。592は小形の石製品で全面が磨かれていることから砥石かもしれない。593は鉄鏃の基部である。時期は甕、台付甕の脚部から後期前半頃であろう。



第93図 SC1平・断面図(S=1/80)



①東西ベルト土層 炭火材



②検出状況

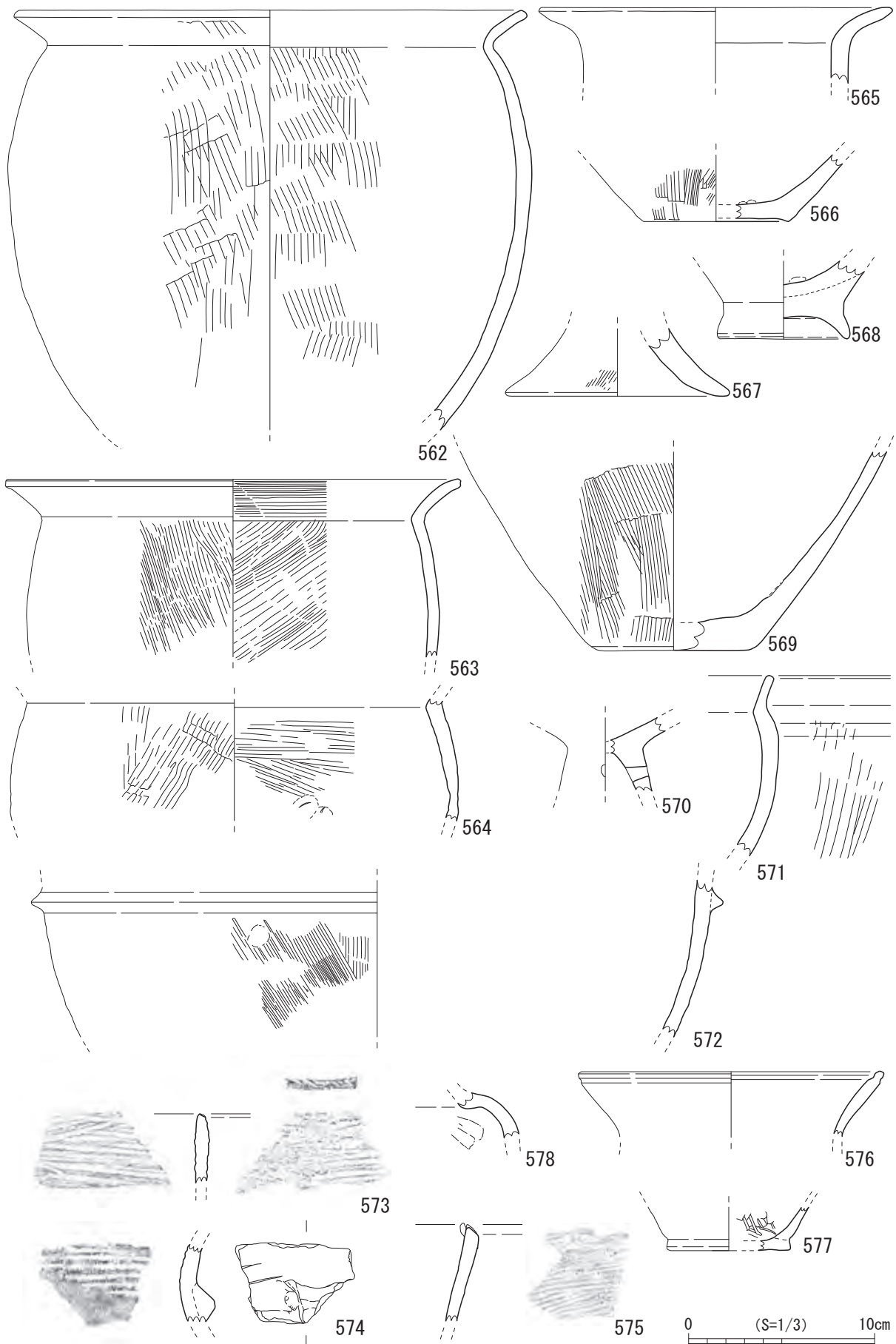


③貼床検出状況

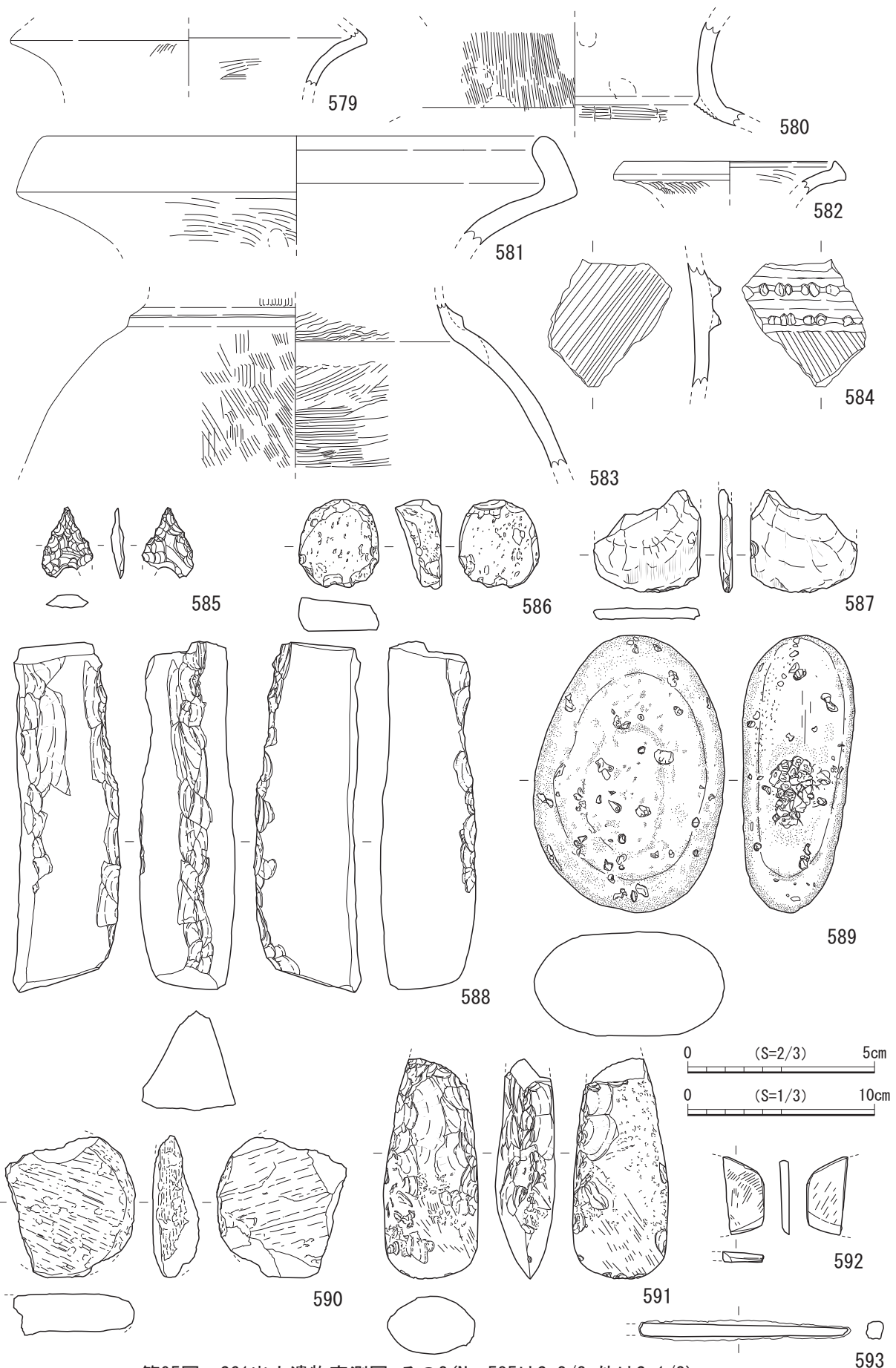


④完掘状況

図版44 SC1遺構状況(①～④)



第94図 SC1出土遺物実測図 その1 (S=1/3)



第95図 SC1出土遺物実測図 その2 (No. 585はS=2/3, 他はS=1/3)



図版45 SC1出土遺物 その1



図版46 SC1出土遺物 その2

第27表 SC1出土土器観察表

遺物番号	器種	部位	法量 (cm)			調整		色調		焼成	胎土	備考
			口径	器高	底径	外面	内面	外面	内面			
562	甕	口縁～底部	(26.9)	—	—	縦、斜め方向ハケメ	縦、斜め方向ハケメ	7.5YR5/4にぶい褐	5YR6/6橙	良	石英、雲母 角閃石	くの字口縁
563	甕	口縁～底部	(24.2)	—	—	縦方向ハケメ	斜め方向ハケメ	5YR8/2灰白	10YR8/3浅黄橙	良好	雲母、角閃石	くの字口縁
564	甕	口縁～底部	—	—	—	ハケメ	ハケメ	7.5YR7/2明褐灰	7.5YR7/3にぶい橙	良好 やや硬質	長石、雲母、石英 角閃石	口縁部欠損
565	甕	口縁部	(18.6)	—	—	ハケメ	上部ナデ・ハケメ	7.5YR7/4にぶい橙	7.5YR7/4にぶい橙	良好 やや硬質	雲母、黒色粒子 赤色粒子、白色粒子	緩やかなくの字口縁
566	甕	底部	—	—	(7.8)	ハケメ	ナデ	10YR7/3にぶい黄橙	10YR7/3にぶい黄橙	良好 やや硬質	雲母、長石	
567	台付甕	脚部	—	—	(12.0)	ハケメ	ナデ	5YR7/6橙	5YR7/6橙	良	雲母、長石	
568	台付甕	脚部	—	—	7.1	ハケメ	ナデ	10YR3/2黒褐	10YR5/2灰黄褐	良	長石、雲母 角閃石	
569	甕	底部	—	—	(8.0)	縦方向ハケメ	ナデ	2.5Y5/2暗灰黄	10YR7/6暗灰黄	良	石英、長石、雲母 砂粒を多く含む	平底 底部付近に炭の付着
570	高杯	坏部～脚部	—	—	—	ハケメ	ナデ	10YR8/3浅黄橙	10YR8/3浅黄橙	良	長石、雲母 角閃石	穿孔を有す
571	短頸壺	口縁～胴部	—	—	—	縦方向ハケメ	ナデ	7.5YR6/3にぶい褐	7.5YR5/3にぶい褐	良好 やや硬質	雲母、長石 赤色粒子	小型
572	壺	胴部	—	—	—	斜め方向ハケメ	ナデ	5YR6/4にぶい橙	5YR6/1褐灰	良	雲母、石英、長石	一重の三面凸帯を有す
573	深鉢	口縁部	—	—	—	条痕	条痕	5YR4/3にぶい赤褐	7.5YR4/3褐	良好 やや硬質	長石、石英、雲母 角閃石	縄文時代晩期
574	深鉢	屈曲部	—	—	—	ナデ	条痕	5YR4/2灰褐	5YR6/4にぶい橙	良	雲母、長石、石英 結晶片岩	縄文時代晩期 リボン状突起あり
575	深鉢	口縁部	—	—	—	条痕	ナデ	5YR4/3にぶい赤褐	5YR4/4にぶい赤褐	良	長石、雲母	縄文時代晩期 唇部に凹損あり
576	浅鉢	口縁部	(16.0)	—	—	ミガキ	ミガキ	7.5YR4/2灰褐	7.5YR4/2灰褐	良	長石、石英、雲母 角閃石	縄文時代晩期 口縁部内外に浅い沈線
577	深鉢	底部	—	—	(6.6)	ナデ	ヘラナデ	7.5YR4/4褐	5YR6/4にぶい橙	良	長石、雲母	縄文時代晩期
578	壺	肩部	—	—	—	ヘラミガキ	ナデ	丹塗り	10YR7/4にぶい黄橙	良	黒色粒子 赤色粒子	縄文時代晩期 丹塗り土器
579	壺	頸部	(19.0)	—	—	ナデ	ハケメ	5YR6/6橙	5YR6/6橙	良	長石、石英、雲母 赤色粒子	複合口縁壺
580	壺	頸部～胴部	—	—	—	ハケメ	ナデ	5YR6/6橙	5YR6/8橙	良	長石、雲母、石英	
581	壺	口縁部	(26.4)	—	—	ハケ→ナデ	ハケメ→ナデ	10YR7/3にぶい黄橙	10YR7/3にぶい黄橙	良	長石、雲母、石英	複合口縁壺 口縁端部は丸い
582	壺	口縁部	(11.4)	—	—	ハケメ	ハケメ	7.5YR6/4にぶい橙	7.5YR6/3にぶい褐	良	石英、長石	複合口縁
583	壺	胴部	—	—	—	ハケメ	ハケメ	5YR7/4にぶい橙	5YR6/4にぶい橙	良 やや硬質	雲母、石英 赤色粒子	口頸部に三角凸帯を有す
584	壺	胴部	—	—	—	ハケメ	ハケメ	10YR5/3にぶい黄褐	10YR5/2灰黄褐	良	長石、石英、雲母	二重の刻目三角凸帯を有す

第28表 SC1出土石器観察表

遺物番号	器種	石材	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	備考
585	石鏃	黒曜石	1.85	1.35	0.35	0.59	凹基無茎鏃
586	軽石製品	軽石	4.65	4.3	2.5	12.52	平坦面形成
587	磨製石斧	滑石	5.45	5.7	0.7	29.64	扁平
588	敲打石器	玄武岩	18.6	5.1	5.8	720	断面三角形
589	磨石	凝灰岩	14.7	10.1	5.5	955	側面に僅かな凹凸痕を有す
590	不明	結晶片岩	7.5	7.85	2.5	150	
591	石斧	泥岩	11.7	5.1	3.1	260	基部欠損、刃は蛤刃
592	砥石?	安山岩	3.15	2.2	0.5	6.97	四面ともに磨きあり
593	鉄鏃	鉄	11.3	1.1	0.9	15.9	基部

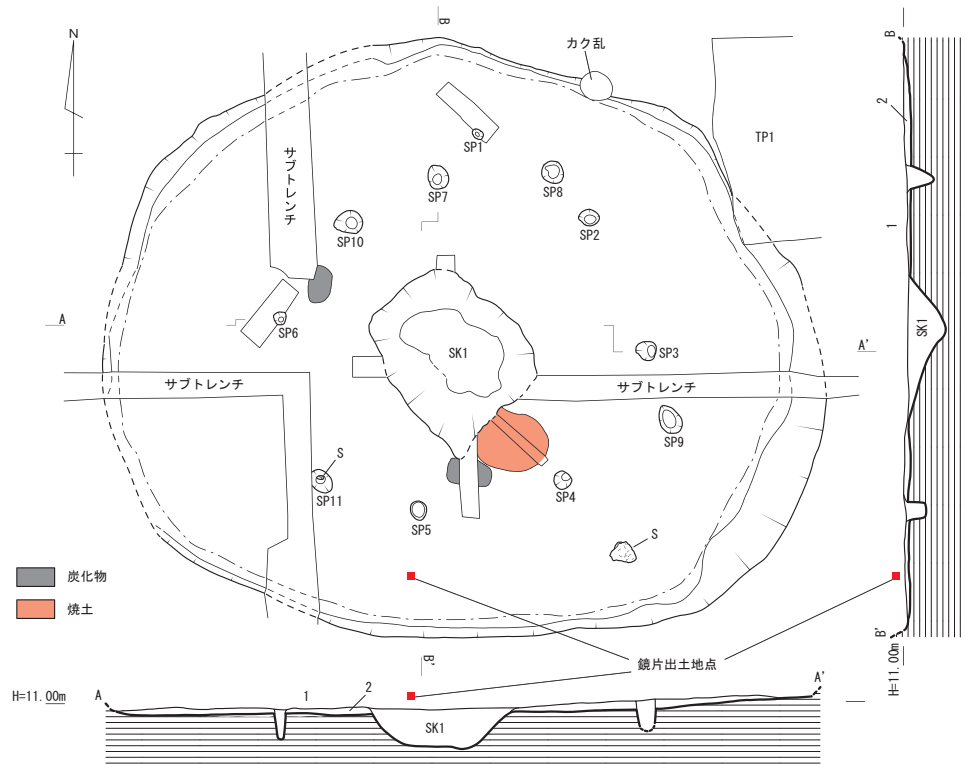
③TAK201303B1区SC123(竪穴建物) (第96~98図 図版47~49 表29~31)

B1区9074グリッドに位置し、中心軸で長軸7.50m×短軸6.36m、高さ3~15cmを測る竪穴建物である。かなり上面は削平されており床面までの高さは浅い。平面形は楕円形を成し、中央に1.66m×1.36mの長方形を呈す土抗を確認した。縁辺部は被熱により焼土となっていることから地床炉と考えられる。柱穴は地床炉を取り囲むように配置されている。11本の柱穴を検出したが断面形状及び高さから2本(SP8, 9)は柱穴とは判断できず8本(SP2, 3, 4, 5, 6, 7, 10, 11)で支柱穴を構成する。柱穴の規模は長軸30~62cm、高さ44~60cmを測る。平面形は円形及び楕円形の平面形を呈する。また1本(SP1)は長軸26cm×高さ60cmを測る。配置から考えて支柱穴の補助材であろう。出入り口の配置は判然としない。

出土遺物は弥生土器壺、甕、台付甕、短頸壺、破鏡、縄文晩期土器浅鉢、剥片等が出土した。遺物は覆土及び床面から出土した。以下出土遺物について記す。

594、596は袋状口縁壺、595は複合口縁壺の口縁部片である。597~602は壺口頸部で三角凸帯を有す。599は外面丹塗りである。603、604は短頸壺の口頸部である。605、606は小形壺で口頸部から胴部片である。口頸部には三角凸帯を有し、外面はハケメ調整を施す。607は壺口縁部で内面にハケメを有す。608~612は壺の胴部片である。いずれも二重の三角凸帯を有し、607、609、611は刻み目を施し内外面はハケメ調整を行っている。613は壺の底部片である。内側に指圧痕が残る。614~623は甕の口縁部から口頸部の破片である。614は口縁端部が方形で、615~619は口縁端部が丸い仕上げである。619は口頸部に三角凸帯を有する。620~622は口頸部から胴部の破片である。内外面に細かなハケメ調整を施す。623は甕口縁部片で端部は丸い。624は甕胴部片で内外面の縦、斜め方向にハケメ調整を施す。625~627は甕の底部片である。いずれも底部は平底で内外面はハケメ調整を施す。628~635は台付甕の脚部である。628の脚部は欠損している。脚端部は方形と丸形がある。630が方形でそれ以外は丸形である。635は丸形でやや開く。それ以外は直線的な脚部である。636~639は縄文晩期の深鉢浅鉢の口縁部片、胴部片である。いずれも小片である。以上のことからSC123の構築時期を考えると床面からの遺物が少なく、破片であるため時期の判断が難しい。また覆土内の流れ込みの遺物も考慮して考えると594、595、596袋状口縁、複合口縁壺、618、619の甕口縁部、628~635までの台付甕を考えると後期前半頃の所産であろう。640は破鏡である。舶載の細線式獣帯鏡(後漢鏡)で床面から20cm上の覆土から出土した。鏡の内外面、破断面は極めて残りが良く錆一つない状態である(詳細は「小結」の331頁を参照のこと)。

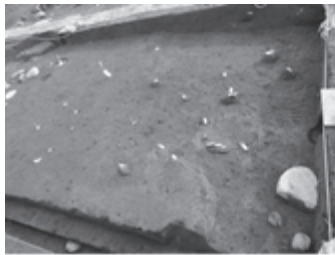




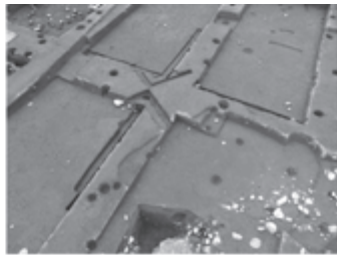
1 : 黒褐色 (10YR3/2) ややしまりのある粘質シルト  
 2 : 暗褐色 (10YR3/4) 固くしまった粘質シルト (貼床面)  
 SK1 : 橙色 (7.5YR7/6) 粘質土、焼土と炭化物を多く含む

0 (S=1/80) 4m

第96図 SC123平・断面図 (S=1/80)



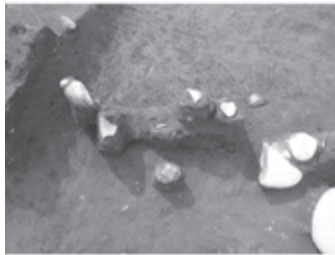
①検出状況



②遺物出土状況 その1



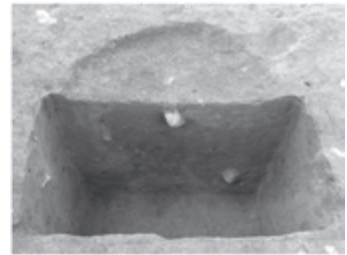
③遺物出土状況 その2



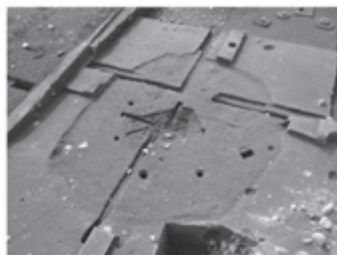
④鏡出土状況 その1



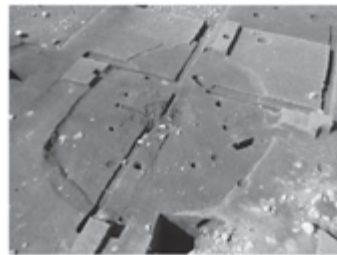
⑤鏡出土状況 その2



⑥SP1断面

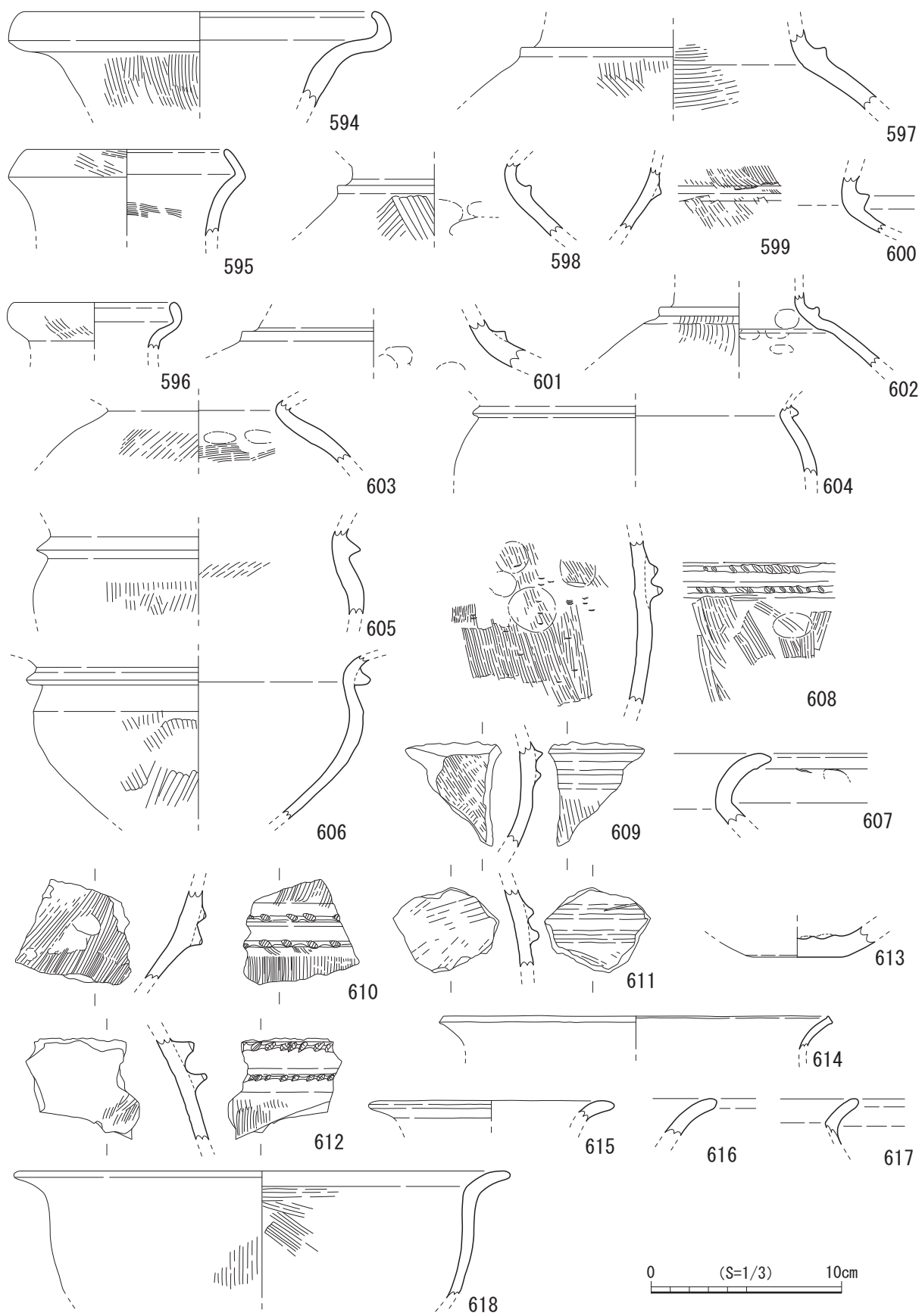


⑦内部遺構検出状況

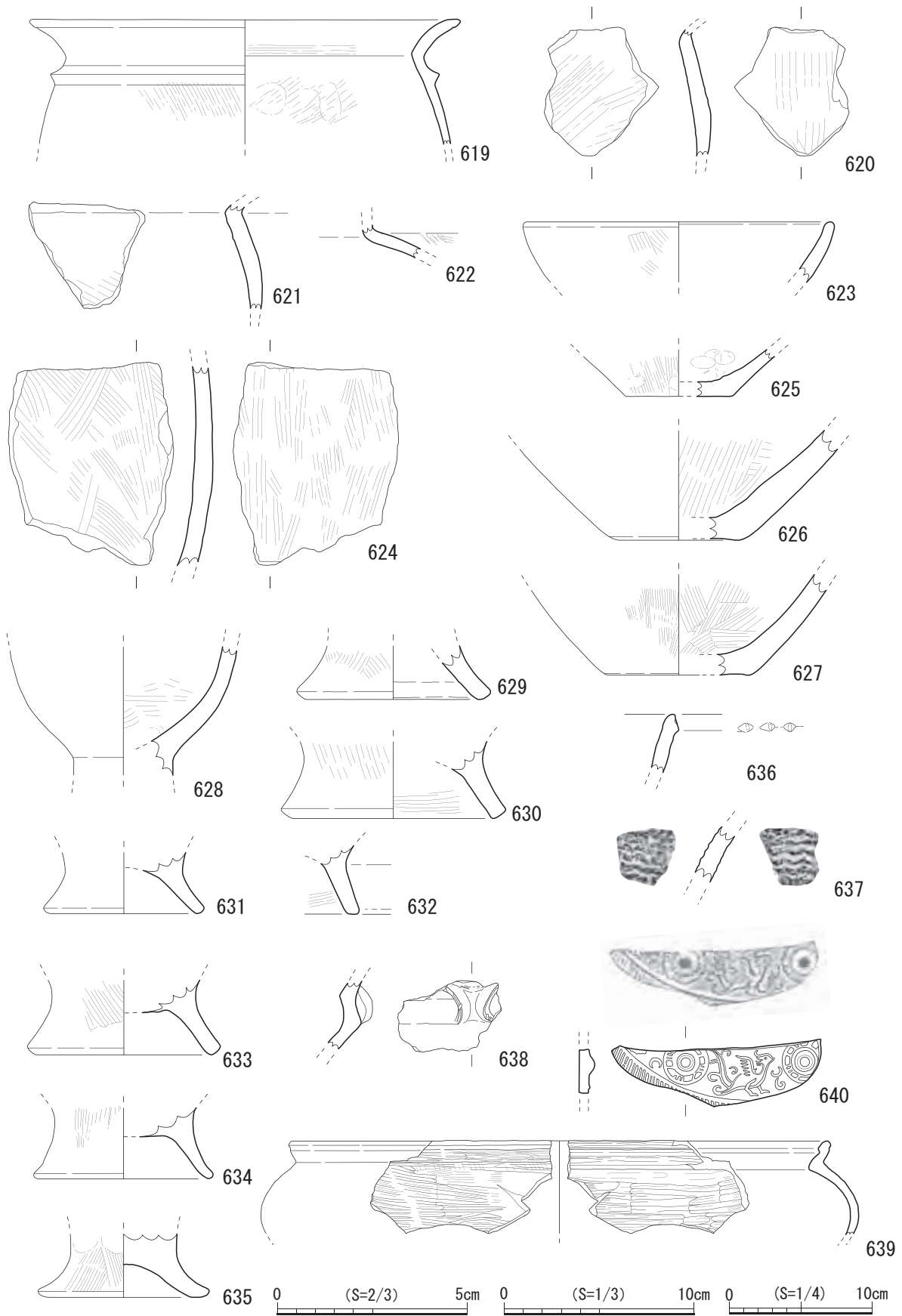


⑧完掘状況

図版47 SC123遺構状況 (①~⑧)



第97図 SC123出土遺物実測図 その1 (S=1/3)



第98図 SC123出土遺物実測図 その2 (No. 639はS=1/4, No. 640はS=2/3, 他はS=1/3)



図版48 SC123出土遺物 その1



図版49 SC123出土遺物 その2

第29表 SC123出土土器観察表その1

遺物番号	器種	部位	法量 (cm)			調整		色調		焼成	胎土	備考
			口径	器高	底径	外面	内面	外面	内面			
594	壺	口縁部	(18.4)	—	—	ハケメ	ナデ	10YR7/4 にぶい黄橙	10YR7/4 にぶい黄橙	良	石英、長石、雲母 角閃石	袋状口縁壺
595	壺	口縁部	(10.4)	—	—	ハケメ	ハケメ	7.5YR7/4 にぶい橙	7.5YR7/4 にぶい橙	良	長石、石英、雲母 角閃石	複合口縁壺
596	壺	口縁部	(8.3)	—	—	ハケメ	ナデ	2.5YR4/6 赤褐	10YR7/2 にぶい黄橙	良	長石、雲母	袋状口縁壺外面丹塗り
597	壺	口頸部	—	—	—	ハケメ	横方向の ハケメ	7.5YR8/4 浅黄橙	7.5YR7/4 にぶい橙	良	長石、石英、雲母	三角凸帯を有す
598	壺	口頸部	—	—	—	ハケメ	ハケメ ナデ消し	10YR8/3 浅黄橙	10YR8/3 浅黄橙	良	長石、雲母	三角凸帯を有す
599	壺	口頸部	—	—	—	ハケメ ナデ消し	ハケメ ナデ消し	10YR8/3 浅黄橙	10YR8/3 浅黄橙	良	長石、石英、雲母 角閃石	三角凸帯を有す、外面丹 塗り
600	壺	口頸部	—	—	—	ナデ	ナデ	10YR6/4 にぶい黄橙	10YR6/4 にぶい黄橙	良	石英、雲母 赤色粒子	三角凸帯を有す
601	壺	口頸部	—	—	—	ナデ	ナデ	10YR8/4 浅黄橙	10YR8/3 浅黄橙	良	長石	三角凸帯を有す
602	壺	口頸部	—	—	—	ハケメ	ナデ	10YR4/1 褐灰	10YR3/1 黒褐	良	長石、雲母 角閃石	三角凸帯を有す
603	壺	口頸部	—	—	—	ハケメ	ハケメ	2.5YR4/6 赤褐	7.5YR6/3 にぶい褐	良	長石、石英、雲母	短頸壺
604	壺	口頸部	—	—	—	ナデ	ナデ	10YR4/2 灰黄褐	10YR4/2 灰黄褐	良	雲母、石英、長石	短頸壺、頸部基部に1条 凸帯
605	小形壺	口頸部～ 胸部	—	—	—	ハケメ	ハケメ	10YR6/3 にぶい黄橙	10YR7/3 にぶい黄橙	良 やや硬質	長石、石英	口頸部に三角凸帯を有す
606	小形壺	口頸部～ 胸部	—	—	—	ハケメ	ケズリ	5YR5/3 にぶい赤褐	5YR6/3 にぶい橙	良 やや硬質	長石、石英、雲母	口頸部に三角凸帯を有す
607	壺	口縁部	—	—	—	ナデ	ハケメ	2.5Y8/3 淡黄	10YR8/3 浅黄橙	良	長石、雲母	刻目
608	壺	胸部	—	—	—	ハケメ	ハケメ	7.5YR7/3 にぶい橙	7.5YR7/4 にぶい橙	良	長石、雲母 角閃石	二重の三角凸帯を有す
609	壺	胸部	—	—	—	ハケメ	ハケメ	10YR7/3 にぶい黄橙	10YR7/3 にぶい黄橙	良	長石、雲母赤色粒 子	二重の刻目三角凸帯を有 す
610	壺	胸部	—	—	—	ハケメ	ハケメ ユビオサエ	7.5YR6/4 にぶい橙	7.5YR8/2 灰白	良	長石、石英、雲母	二重の三角凸帯を有す
611	壺	胸部	—	—	—	ハケメ	ハケメ	10YR4/2 灰黄褐	7.5YR6/3 にぶい褐	良	長石、石英、雲母 赤色粒子、角閃石	二重の刻目三角凸帯を有 す
612	壺	胸部	—	—	—	ハケメ	ハケメ	5YR5/4 にぶい赤褐	5YR7/4 にぶい橙	良 やや硬質	雲母、長石、石英 赤色粒子	二重の三角凸帯を有す
613	壺	底部	—	—	(4.6)	ナデ	指圧痕	7.5YR8/2 灰白	7.5YR8/2 灰白	良	長石、雲母、石英	平底
614	甗	口縁部～ 口頸部	(10.1)	—	—	ナデ	ナデ	7.5YR3/3 暗褐	7.5YR4/4 褐	良	雲母、石英	
615	甗	口縁部	(12.2)	—	—	ナデ	ナデ	10YR5/3 にぶい黄褐	10YR4/2 灰黄褐	良	雲母、角閃石	
616	甗	口縁部	—	—	—	ナデ	スス付着	10YR7/3 にぶい黄橙	10YR3/1 黒褐	良	長石、雲母 褐色粒子	
617	甗	口縁部	—	—	—	ナデ	ナデ	10YR5/4 にぶい黄褐	10YR6/6 明黄褐	良 やや硬質	雲母、石英	
618	甗	口縁部	(26.0)	—	—	ナデ	ナデ	5YR8/2 灰白	5YR8/1 灰白	良	長石、雲母 角閃石、褐色粒子	
619	甗	口縁部	(22.6)	—	—	ハケメ	ハケメ	7.5YR7/3 にぶい橙	7.5YR5/1 褐灰	良	石英、長石、雲母	口頸部に三角凸帯を有す
620	甗	口頸部～ 胸部	—	—	—	ハケメ	ハケメ	7.5YR6/3 にぶい褐	7.5YR7/3 にぶい橙	良	石英、長石、雲母	
621	甗	口頸部～ 胸部	—	—	—	ハケメ	ハケメ	5YR7/2 明褐灰	5YR7/3 にぶい橙	良	長石、雲母、赤色 粒子、角閃石	
622	甗	口頸部～ 胸部	—	—	—	ハケメ	ハケメ	10YR8/4 浅黄橙	10YR8/4 浅黄橙	良	長石、雲母、石英	
623	甗	口縁部	(16.0)	—	—	ナデ	ナデ	10YR7/4 にぶい黄橙	10YR6/3 にぶい黄橙	良 やや硬質	石英、雲母	
624	甗	胸部	—	—	—	縦、斜め方向 ハケメ	縦、斜め方向 ハケメ	7.5YR7/4 にぶい橙	7.5YR4/1 褐灰	良 やや硬質	長石、石英、雲母 角閃石	
625	甗	底部	—	—	(5.6)	ハケメ	ハケメ	10YR7/4 にぶい黄橙	10YR8/2 灰白	良好	長石、石英、雲母	平底
626	甗	底部	—	—	(7.2)	ハケメ	ハケメ	10YR8/4 浅黄橙	10YR8/3 浅黄橙	良	長石、石英、雲母 角閃石	平底
627	甗	底部	—	—	(7.6)	ハケメ	ハケメ	10YR7/3 にぶい黄橙	7.5Y8/2 灰白	良好	長石、雲母	平底
628	台付甗	脚部	—	—	—	ナデ	ハケメ	10R6/3 にぶい赤橙	10R3/1 暗赤灰	良	長石、石英、雲母	脚部欠損
629	台付甗	脚部	—	—	(9.4)	ハケメ	ナデ	7.5YR6/6 橙	7.5YR6/6 橙	良好	長石、石英、雲母 角閃石	
630	台付甗	脚部	—	—	(10.6)	ハケメ	ハケメ	7.5YR6/6 橙	7.5YR6/6 橙	良	長石、石英、雲母 角閃石	
631	台付甗	脚部	—	—	(7.6)	ハケメ	ナデ	5YR6/6 橙	5YR6/4 にぶい橙	良	長石、石英、雲母 赤色粒子	
632	台付甗	脚部	—	—	(7.4)	ハケメ	ハケメ	7.5YR6/4 にぶい橙	5YR6/4 にぶい橙	良	長石、角閃石 褐色粒子	
633	台付甗	脚部	—	—	(9.4)	ハケメ	ナデ	7.5YR7/6 橙	7.5YR7/6 橙	良	長石、石英、雲母	

第30表 SC123出土土器観察表その2

遺物番号	器種	部位	法量(cm)			調整		色調		焼成	胎土	備考
			口径	器高	底径	外面	内面	外面	内面			
634	台付甕	脚部	—	—	(9.0)	ハケメ	ナデ	10YR7/4 にぶい黄橙	10YR7/4 にぶい黄橙	良	石英、長石、雲母	
635	台付甕	脚部	—	—	(8.0)	ハケメ	ナデ	7.5YR7/4 にぶい橙	7.5YR7/4 にぶい橙	良	長石、雲母	
636	深鉢	口縁部	—	—	—	ハケメ	ナデ	7.5YR7/3 にぶい橙	7.5YR6/3 にぶい褐	良	長石、赤色粒子 角閃石、結晶片岩	縄文晩期
637	深鉢	口縁部	—	—	—	押型文 (山形文)	押型文 (山形文)	10YR6/3 にぶい黄橙	10YR6/3 にぶい黄橙	良	雲母、石英	縄文晩期
638	深鉢	屈曲部	—	—	—	ナデ	ナデ	5YR2/1 黒褐	5YR5/4 にぶい赤褐	良	石英、長石、雲母 角閃石、	縄文晩期
639	浅鉢	口縁部～ 胴部	(37.6)	—	—	ミガキ ハケメ	ミガキ	7.5YR4/1 褐灰	7.5YR5/2 灰褐	良	雲母、赤色粒子、 角閃石	縄文晩期

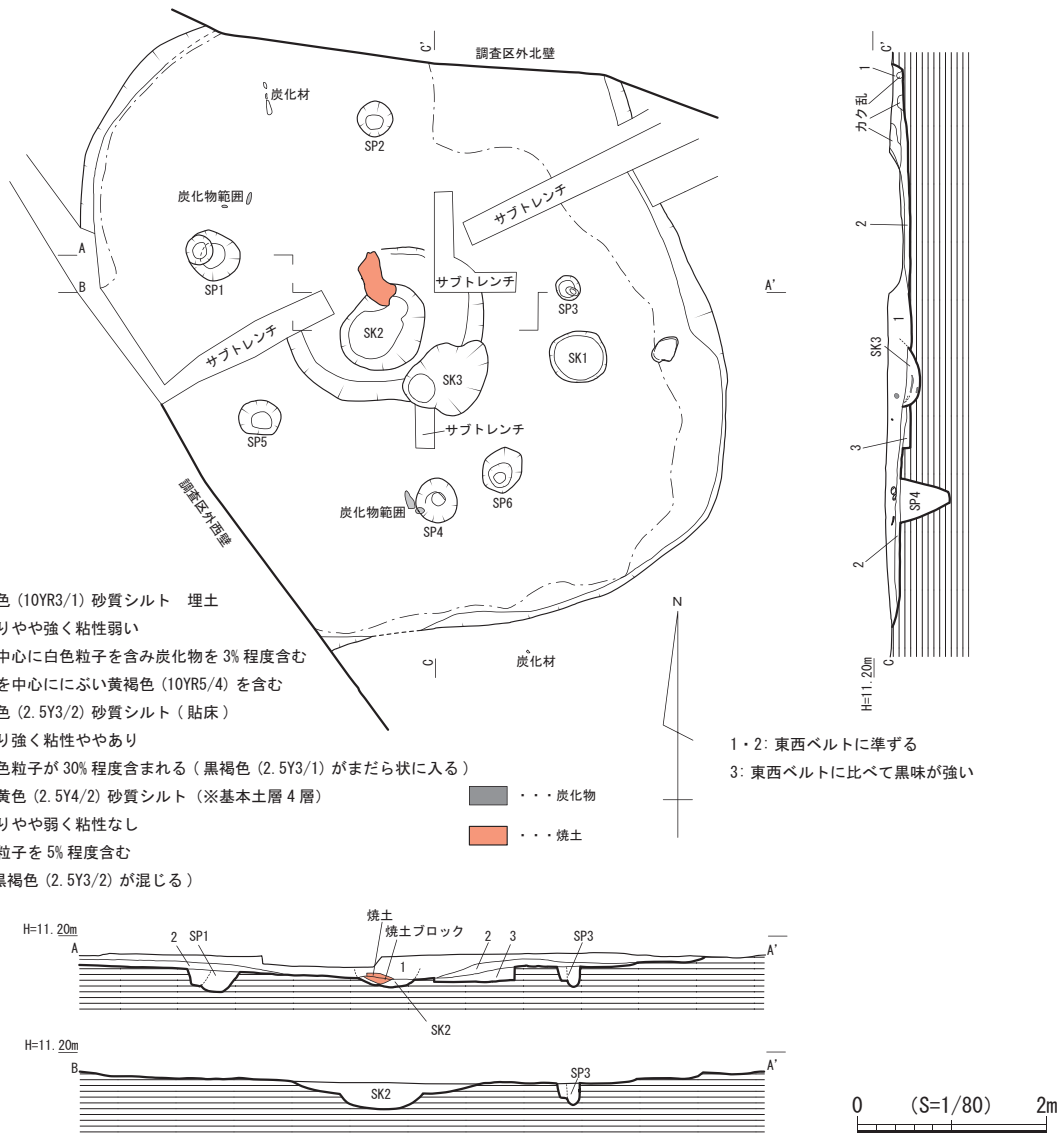
第31表 SC123出土鏡観察表

遺物番号	器種	部位	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	備考
640	細線式獣帯鏡	破鏡	7.40	2.00	0.21	10.66	乳座間に鳥(朱雀)が配されている

④TAK201303B1区SC124(竪穴建物) (第99～101図 図版50～52 表32～35)

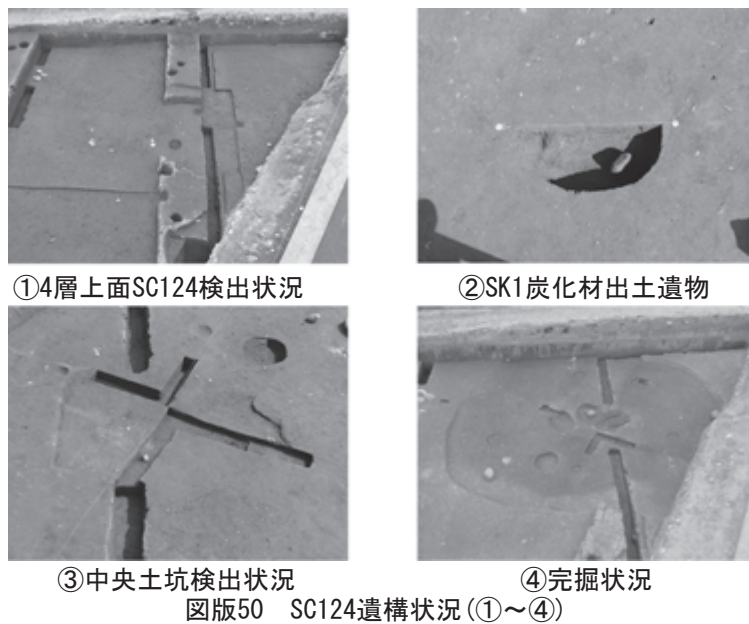
B1区の9074グリッドに位置し、長軸7.26m+×短軸5.60m+、高さ10cm程の規模で平面形は長楕円形を呈する竪穴建物である。北側と西側の一部は調査区外である。全体的に削平が著しく壁高等は浅い。屋内施設は柱穴、中央土坑、焼土を検出した。床は5～10cm程の貼床を構築している。床面は中央土坑(SK2)に向かって緩やかに傾斜する。柱穴はSP1～6の6本で直径27～52cm、高さ18～31cmを測る。柱穴の平面形は円形及び楕円形を呈し、配置は不揃いである。土坑は3基を確認した(SK1～3)。中央にSK2が位置し南東側に隣接してSK3が位置する。SK2は長軸0.98m、短軸0.82m、高さ0.15～0.20mを測る。SK2の堆積土は2層で上層は5cm程の焼土ブロックが堆積していた。また遺物の出土はなく、直径20cmと7cm程の円礫が出土したのみである。土坑内は焼土粒子、炭化物を多く含む。北側に20cm×50cm程の焼土が検出された。この中からミニチュア土器片、甕小片が出土した。SK3は長軸0.93m、短軸0.76m、高さ11cmを測る。土坑内は炭化物を多く含む堆積状況であった。SK1は長軸0.60m、短軸0.55m、高さ14cmで平面形は円形を呈する。土坑内の堆積は3層の堆積を確認し、2層下層で焼土、炭化物を確認した。遺物は床面、焼土、覆土から出土した。甕、壺、ミニチュア土器、台付甕、ガラス小玉、石器等が出土した。以下出土遺物について記す。

641～647は甕口縁部から胴部の破片である。642、643はくの字口縁を呈する。内外面はハケメ調整を施す。648は甕の底部片でやや内側にくぼむ。内外面はハケメ調整を施す。649～652は台付甕脚部片である。脚端部は651、652が丸い形状、649、650がやや尖り気味である。653は高杯杯部片である。654はミニチュア土器で焼土からの出土である。655は複合口縁壺の口縁部片である。端部は丸い仕上げである。656は壺口縁部で口縁部は外反し端部は丸い。内外面はハケメ調整を施す。657、658は壺口頸部片である。三角凸帯を有す。内外面に細かなハケメ調整を施す。659～663は壺の胴部片である。一重の三角凸帯を有し、663は刻目を施す。664～673はガラス小玉である。紺色と淡青色の2種類で直径3～4mm台である。674は棒状鉄製品である。断面は方形である。一部が欠損しており全容が分からない。釘か。675～684は縦長剥片で683は円形搔器か。685は石鏃で上部欠損である。686は石包丁の穿孔部である。687は敲石で側面の敲き痕が残る。以上の出土遺物から甕641～643、台付甕649～652、壺655、656から考えて後期前半頃と思われる。

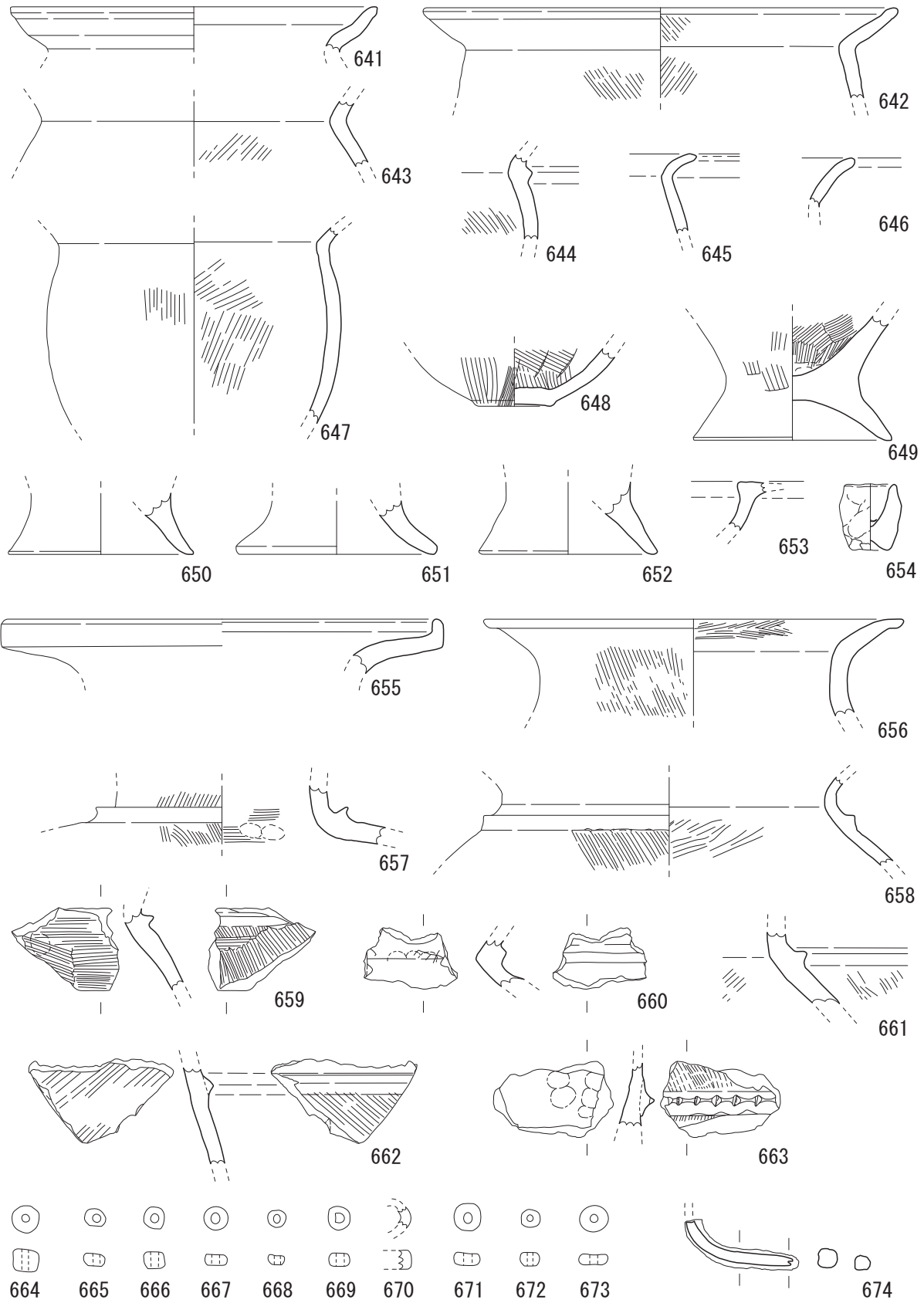


1. 黒褐色 (10YR3/1) 砂質シルト 埋土  
しまりやや強く粘性弱い  
上位中心に白色粒子を含み炭化物を3%程度含む  
下位を中心ににぶい黄褐色 (10YR5/4) を含む
2. 黒褐色 (2.5Y3/2) 砂質シルト (貼床)  
しまり強く粘性ややあり  
黄褐色粒子が30%程度含まれる (黒褐色 (2.5Y3/1) がまだら状に入る)
3. 暗灰黄色 (2.5Y4/2) 砂質シルト (※基本土層4層)  
しまりやや弱く粘性なし  
白色粒子を5%程度含む  
※(黒褐色 (2.5Y3/2) が混じる)

第99図 SC124平・断面図 (S=1/80)

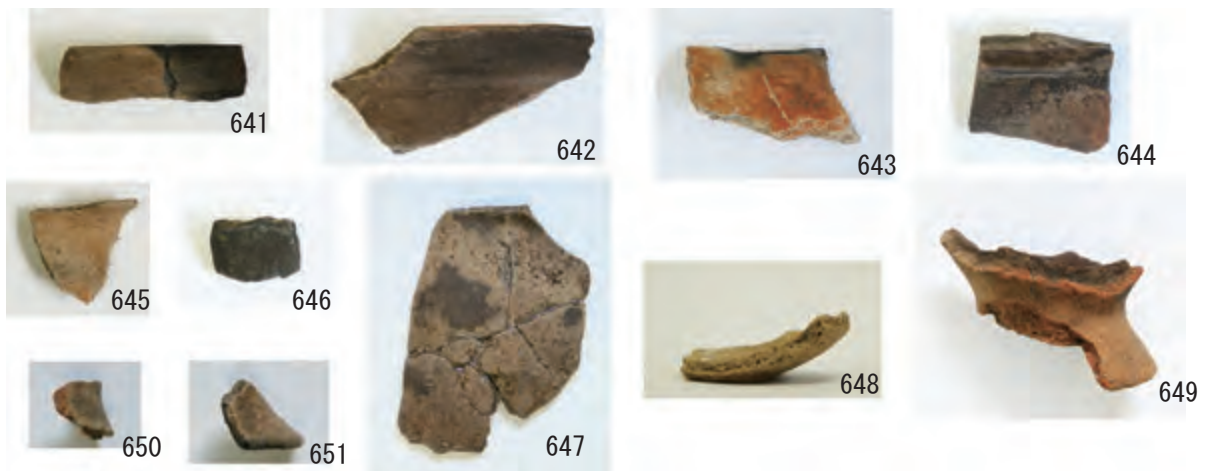
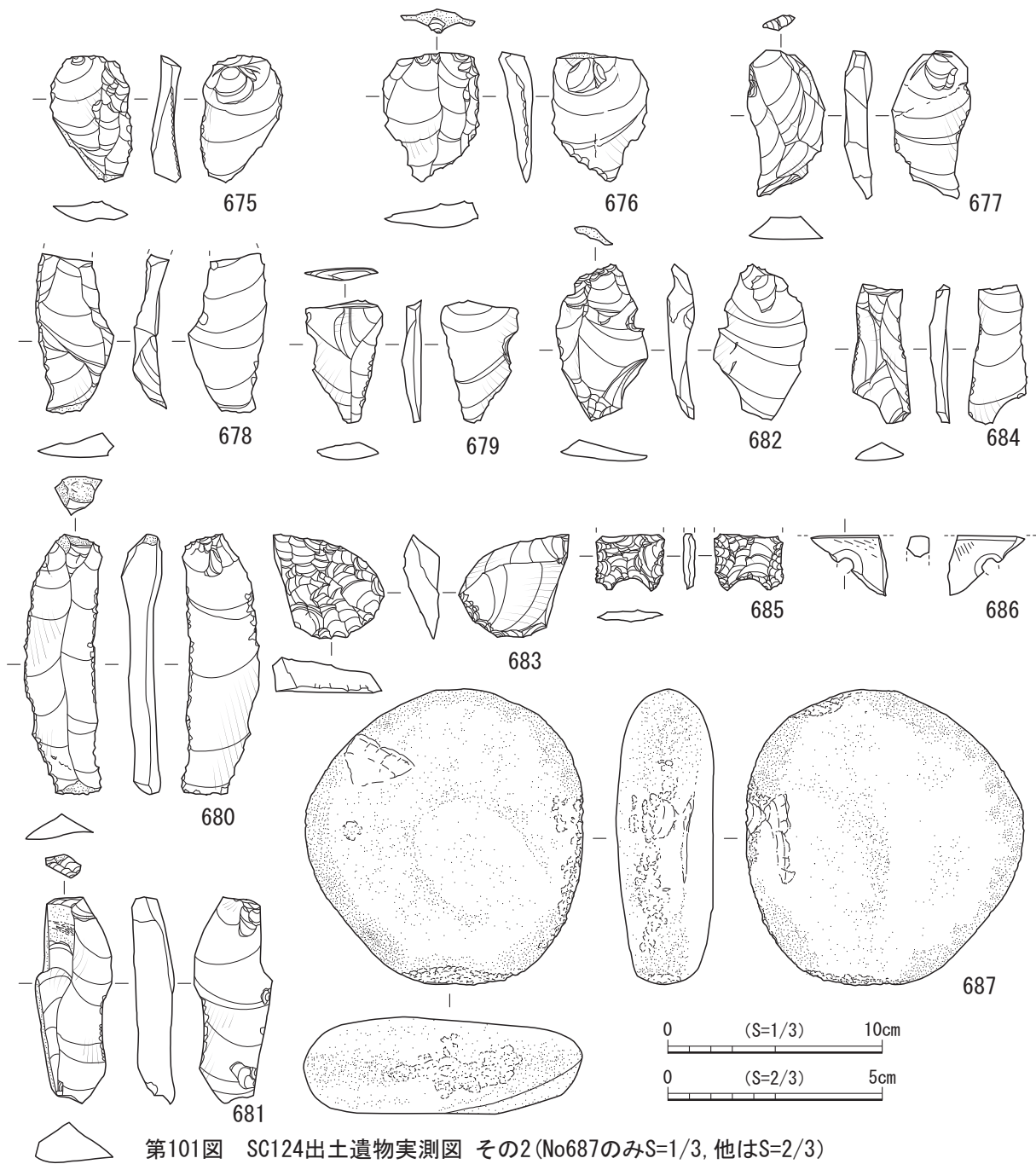






第100図 SC124出土遺物実測図 その1  
 (No. 664~673はS=1/1, 他はS=1/3)

0 (S=1/1) 2cm 0 (S=1/3) 10cm



図版51 SC124出土遺物 その1



図版52 SC124出土遺物 その2

第32表 SC124出土土器観察表

遺物番号	器種	部位	法量 (cm)			調整		色調		焼成	胎土	備考
			口径	器高	底径	外面	内面	外面	内面			
641	甕	口縁部	(18.6)	—	—	ハケメ	ナデ	10YR7/3 にぶい黄橙	10YR2/1 黒	良	長石、雲母、角閃石	
642	甕	口縁部	(24.4)	—	—	ハケメ	ハケメ	7.5YR3/3 暗褐	10YR7/4 にぶい黄橙	良	長石、石英、雲母、角閃石	くの字口縁
643	甕	口縁部～胴部	—	—	—	ナデ	ナデ	5YR6/6 橙	7.5YR7/4 にぶい橙	良	石英、長石、雲母、角閃石	くの字口縁、丹塗り
644	甕	頸部	—	—	—	ナデ	ナデ	2.5YR5/3 にぶい 赤褐	2.5YR5/1 赤灰	良	長石、石英、雲母	
645	甕	口縁部	—	—	—	ハケメ	ハケメ	7.5YR7/3 にぶい 橙	7.5YR8/3 浅黄橙	良	長石、雲母、角閃石	
646	甕	口縁部	—	—	—	ナデ	ナデ	10YR3/3 暗褐	10YR3/3 暗褐	良	雲母、石英	
647	甕	胴部	—	—	—	ハケメ	ハケメ	5YR3/2 暗赤褐	5YR3/2 暗赤褐	不良	長石、角閃石、雲母、赤色粒子	
648	甕	底部	—	—	(3.6)	ハケメ	ハケメ	10YR7/3 にぶい黄橙	10YR7/3 にぶい黄橙	良	長石、石英、雲母、赤色粒子	やや内側にくぼむ
649	台付甕	脚部	—	—	(10.2)	ハケメ	ナデ	7.5YR6/4 にぶい橙	7.5YR3/3 暗褐	良	長石、石英、雲母、角閃石	脚端部はやや尖り気味
650	台付甕	脚部	—	—	(9.6)	ナデ	ナデ	7.5YR7/4 にぶい橙	7.5YR5/3 にぶい褐	良	長石、雲母、赤色粒子	脚端部はやや尖り気味
651	台付甕	脚部	—	—	(10.0)	ナデ	ナデ	7.5YR7/2 明褐灰	7.5YR8/1 灰白	良	長石、雲母	脚端部は丸い形状
652	台付甕	脚部	—	—	(8.8)	ナデ	ナデ	5YR6/4 にぶい 橙	5YR5/4 にぶい赤褐	良	長石、石英、雲母、赤色粒子、角閃石	脚端部は丸い形状
653	高杯	杯部	—	—	—	ナデ	ナデ	7.5YR6/6 橙	7.5YR6/6 橙	良	石英、雲母、角閃石、赤色粒子	須玖式
654	ミニチュア土器	—	—	—	(1.8)	ナデ 指形成の跡あり	ナデ	7.5YR6/4 にぶい橙	7.5YR6/4 にぶい橙	良	長石、雲母	
655	壺	口縁部	(22.0)	—	—	ナデ	ナデ	7.5YR7/4 にぶい橙	7.5YR7/3 にぶい黄橙	良	石英、雲母、長石、角閃石、赤色粒子	複合口縁壺
656	壺	口縁部	(21.6)	—	—	ハケメ	ハケメ	7.5YR7/4 にぶい橙	7.5YR7/4 にぶい橙	良好	長石、石英、雲母、角閃石	
657	壺	口頸部	—	—	—	ハケメ	ハケメ 指痕あり	7.5YR7/6 橙	7.5YR4/1 褐灰	良好 やや硬質	石英、雲母、長石、赤色粒子	三角凸帯を有す
658	壺	口頸部	—	—	—	ハケメ	ハケメ	7.5YR6/6 橙	7.5YR6/4 にぶい橙	良	石英、雲母、長石	三角凸帯を有す
659	壺	胴部	—	—	—	ハケメ	ハケメ	7.5YR6/6 橙	7.5YR4/2 灰褐	良	雲母、石英、長石、赤色粒子	一重の三角凸帯を有す
660	壺	胴部	—	—	—	ナデ	ハケメ	7.5YR7/4 にぶい 橙	7.5YR7/4 にぶい 橙	良	長石、雲母、角閃石	一重の三角凸帯を有す
661	壺	胴部	—	—	—	ハケメ	ハケメ	10YR7/4 にぶい黄橙	10YR8/4 浅黄橙	良好 やや硬質	石英、長石、雲母	一重の三角凸帯を有す
662	壺	胴部	—	—	—	ハケメ	ハケメ	10YR8/3 浅黄橙	10YR7/4 にぶい黄橙	良	石英、長石、雲母、角閃石、赤色粒子	一重の三角凸帯を有す
663	壺	胴部	—	—	—	ハケメ	ナデ 指痕あり	7.5YR7/3 にぶい 橙	7.5YR6/3 にぶい 褐	良	長石、雲母、角閃石	一重の三角刻目凸帯を有す

第33表 SC124出土ガラス小玉観察表

遺物番号	色調	内径①(mm)	内径②(mm)	外径①(mm)	外径②(mm)	厚①(mm)	厚②(mm)	直径(mm)	備考
664	淡青色	1.421	1.106	3.924	4.282	3.107	—	4.078	
665	淡青色	1.604	1.451	3.117	3.214	1.731	—	3.227	
666	紺色	1.166	0.979	3.169	—	2.475	—	2.946	
667	紺色	1.792	1.592	3.838	3.845	1.335	1.761	3.845	
668	淡青色	1.317	1.113	2.832	2.752	1.547	—	2.783	
669	紺色	1.548	1.484	3.695	3.525	2.009	—	3.635	
670	淡青色	—	—	—	—	—	—	—	半欠のため測定不能
671	紺色	1.471	1.250	4.634	4.486	1.971	2.314	4.624	
672	紺色	1.270	1.026	4.661	4.262	1.755	2.020	4.320	
673	紺色	0.939	0.992	3.297	3.034	1.945	—	3.242	

第34表 SC124出土鉄製品観察表

遺物番号	器種	材質	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	備考
674	棒状鉄製品	鉄	5.8	1.0	1.0	12.1	一部欠損、全容不明

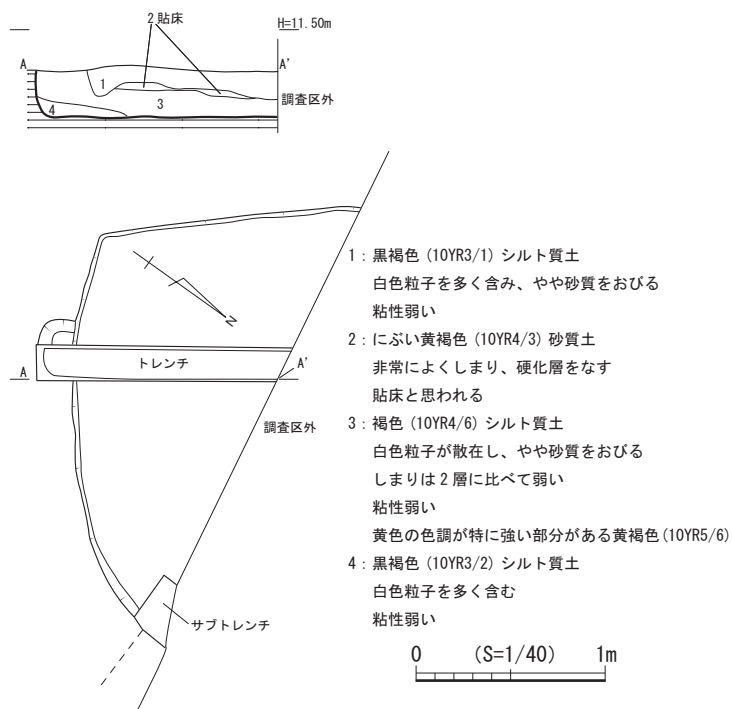
第35表 SC124出土石器観察表

遺物番号	器種	石材	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	備考
675	剥片	黒曜石	2.90	1.9	0.65	2.79	縦長剥片、使用痕あり
676	剥片	黒曜石	3.0	2.2	0.75	3.15	縦長剥片、使用痕あり
677	剥片	黒曜石	3.35	1.8	0.6	3.08	縦長剥片、使用痕あり
678	剥片	黒曜石	3.65	1.8	0.8	2.86	縦長剥片、使用痕あり
679	剥片	黒曜石	2.8	1.8	0.4	1.26	縦長剥片、使用痕あり
680	剥片	黒曜石	6.0	1.9	0.9	6.21	縦長剥片、使用痕あり
681	剥片	黒曜石	4.8	1.75	0.9	6.41	縦長剥片、使用痕あり
682	剥片	黒曜石	3.6	2.1	0.6	2.81	縦長剥片、使用痕あり
683	円形搔器	黒曜石	2.9	2.55	0.8	3.74	
684	剥片	黒曜石	3.2	1.3	0.5	1.36	縦長剥片
685	石鏃	黒曜石	(1.3)	1.6	0.25	0.62	上部欠損
686	石包丁	安山岩	1.4	1.8	0.5	1.22	穿孔部
687	敲石	凝灰岩	13.7	12.9	4.5	1045	側面に敲打痕が残る

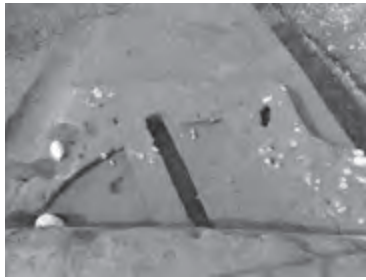
⑤TAK201303A5区SC125(竪穴建物)

(第102図 図版53)

A5区8674グリッドに位置する竪穴建物である。長軸2.0m+、短軸1.40m+、高さ10~15cm程を測る。ほとんどが調査区外に位置しているため北西側コーナー部分を含む1/4のみの検出である。竪穴遺構の西側辺に直径3cm程の柱穴を1カ所検出した。また4cm程の貼床の状況を確認した。出土遺物は土層ベルトの覆土から縄文時代晩期土器小片1点、黒曜石剥片1点が出土した。いずれも流れこみである。



第102図 SC125平・断面図(S=1/40)



①検出状況



②土層



③完掘状況

図版53 SC125遺構状況(①~③)

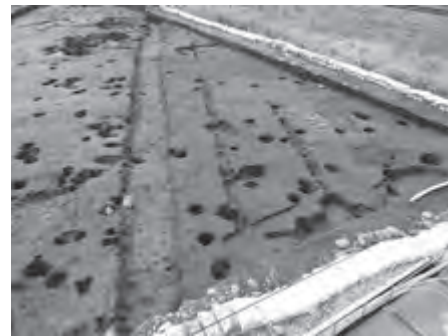
⑥TAK201301D区SD2(溝) (第103・104図 図版54・55 表36)

D区1872、2072グリッドに位置し、ほぼ南北方向に直線的に構築された溝である。長さ約23.0m+、幅1.09~1.20m、高さ0.26~0.30m+を測る。溝内の堆積は1~2層である。出土遺物は弥生時代の遺物が中心であった。器台片、壺胴部片が出土した。以下出土遺物について記す。

688、689は器台片である。端部はやや反り、透かしの一部が残る。690は壺胴部片で刻目三角凸帯を有す。時期は後期後半頃であろう。

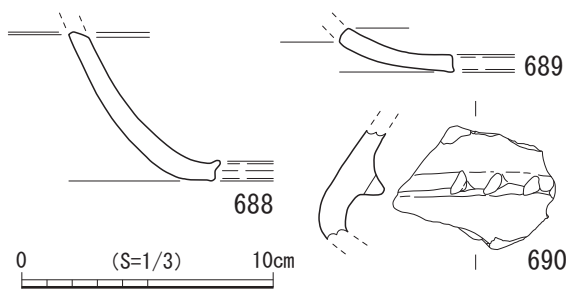


①検出状況

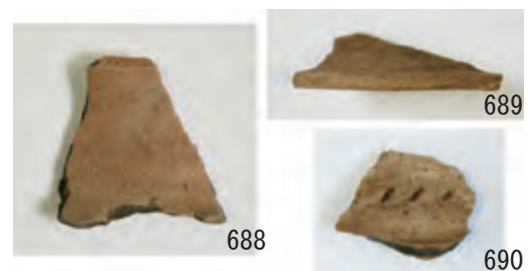


②完掘状況

図版54 SD2(1301D区)遺構状況(①・②)



第103図 SD2(1301D区)出土遺物実測図(S=1/3)



図版55 SD2(1301D区)出土遺物

第36表 SD2(1301D区)出土土器観察表

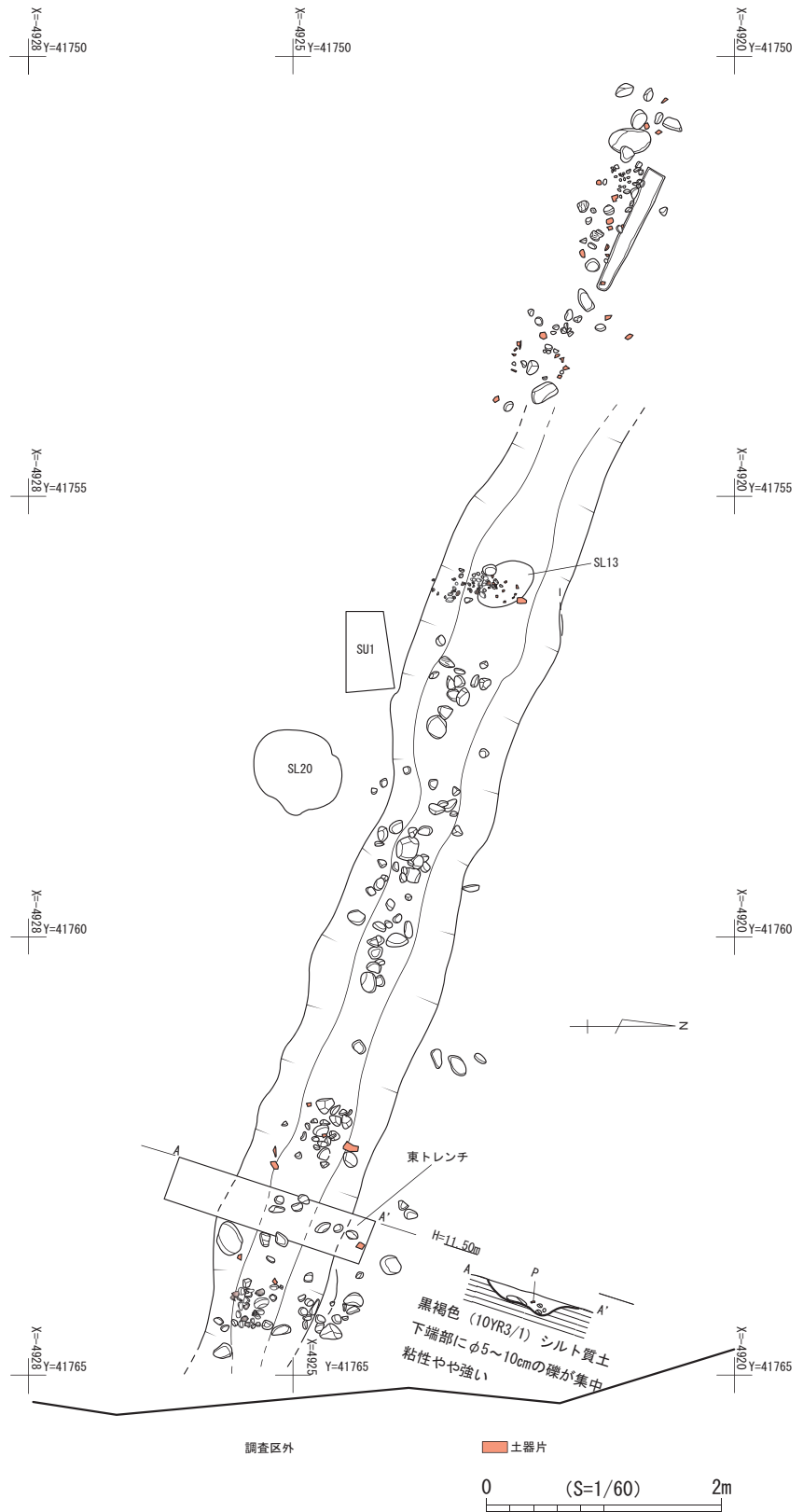
遺物番号	器種	部位	法量(cm)			調整		色調		焼成	胎土	備考
			口径	器高	底径	外面	内面	外面	内面			
688	器台	裾部	—	—	—	ナデ	ナデ	7.5YR7/4 にぶい橙	7.5YR7/4 にぶい橙	良好	赤色粒子、石英	透かしの一部が残る
689	器台	裾部	—	—	(19.8)	ナデ	ナデ	7.5YR6/4 にぶい橙	10YR6/4 にぶい黄橙	良	赤色粒子、石英	透かしの一部が残る
690	壺	胴部	—	—	—	ナデ	ナデ	7.5YR7/4 にぶい橙	10YR8/4 浅黄橙	良	赤色粒子、長石	刻目三角凸帯を有す



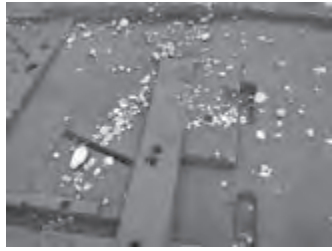
⑦TAK201303B2区SD19(溝) (第105～107図 図版56～58 表37)

SD19はB2区9274、9276グリッドに位置する。南東方向から北西方向に構築された溝で、規模は現存長12.0m+、幅1.30m、深さ18～20cmを測る。後世の洪水等で北西方向途中が流されている。遺物は覆土及び床面から壺胴部片、甕口縁部片、高杯脚部片、台付甕脚部片が出土した。以下出土遺物について記す。

691～697は甕口縁部片である。くの字口縁を呈し、内外面に細かいハケメ調整を施している。698～700は台付甕の脚部である。脚端部は丸い仕上げである。701は甕底部でやや内側にくぼむ。702は複合口縁壺の口縁部である。703～706は壺胴部で一重又は二重の三角凸帯を有し、704、706は刻目を施す。707、708は壺の底部片である。底部はややくぼむ。709は甕口縁部で口縁端部は丸い仕上げである。外面はススが付着する。全体的に土器の仕上げは丁寧である。710は高杯脚部で裾端部は欠損する。外面は縦方向に細かいハケメ調整を施す。711、712は鉢底部片である。



第105図 SD19平・断面図(S=1/60)



①西から その1



②西から その2



③西から その3



④検出状況  
(SD19堀削状況参考)

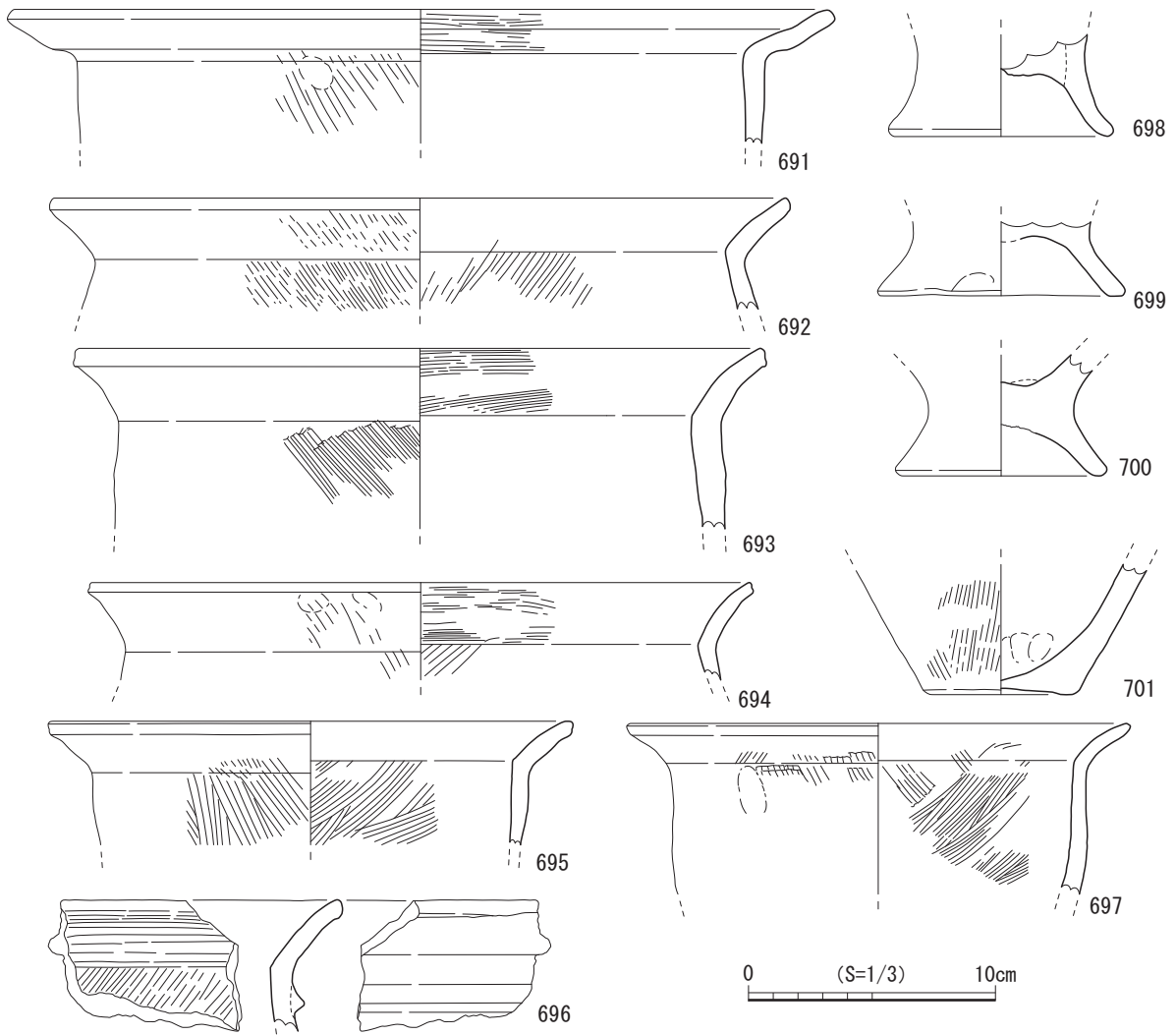


⑤完掘状況 その1



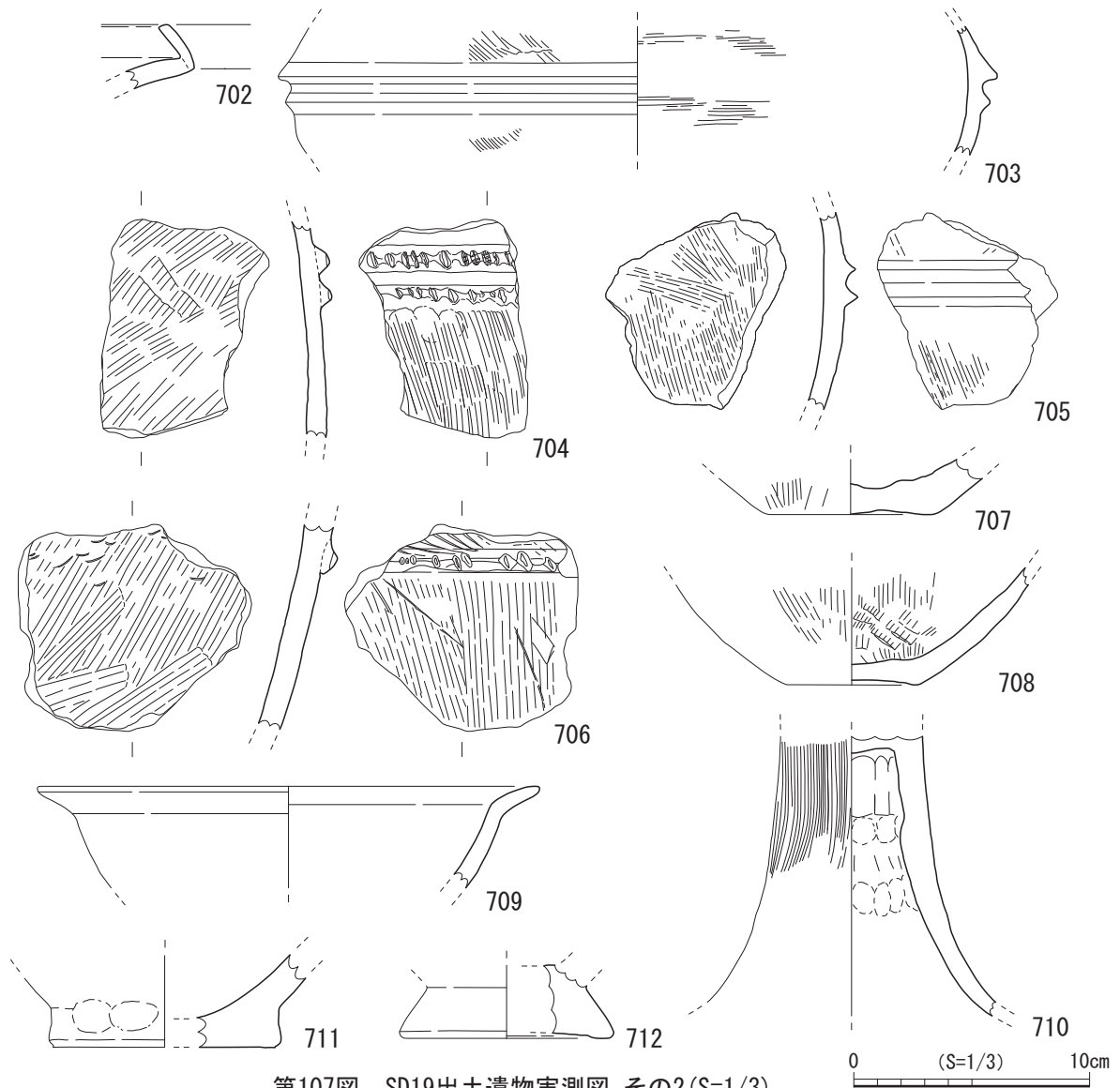
⑥完掘状況 その2

図版56 SD19遺構状況(①~⑥)

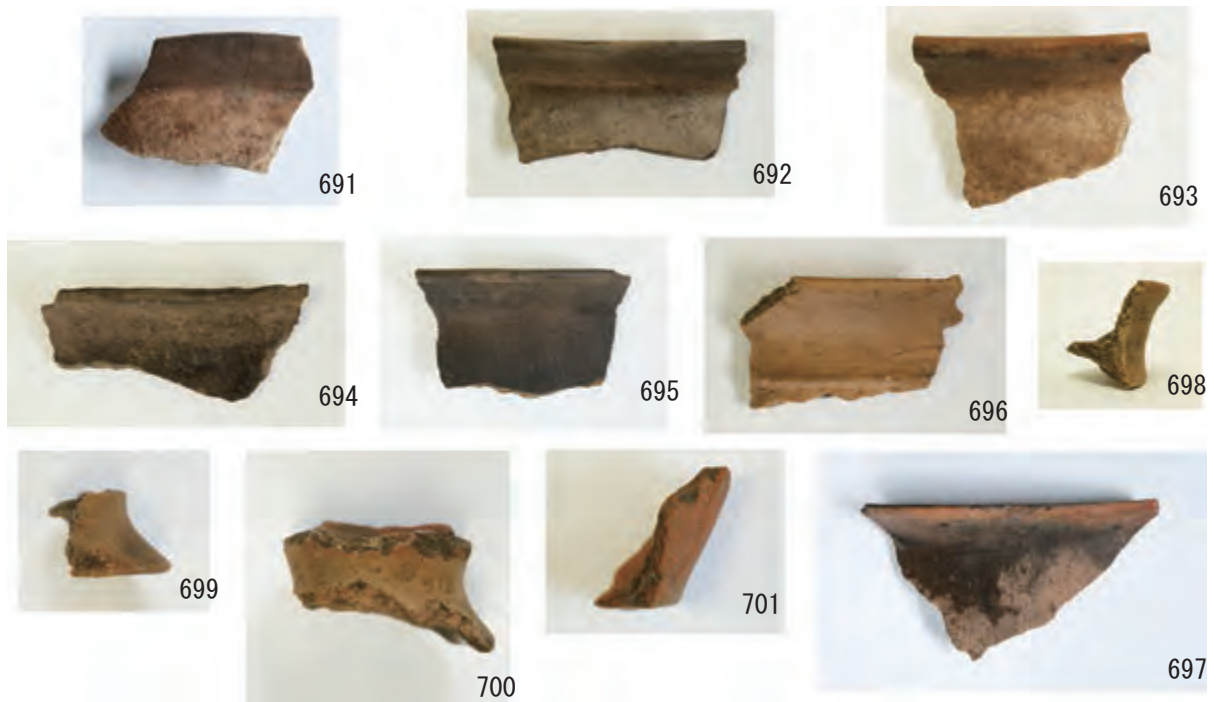


第106図 SD19出土遺物実測図 その1(S=1/3)





第107図 SD19出土遺物実測図 その2(S=1/3)



図版57 SD19出土遺物 その1



図版58 SD19出土遺物 その2

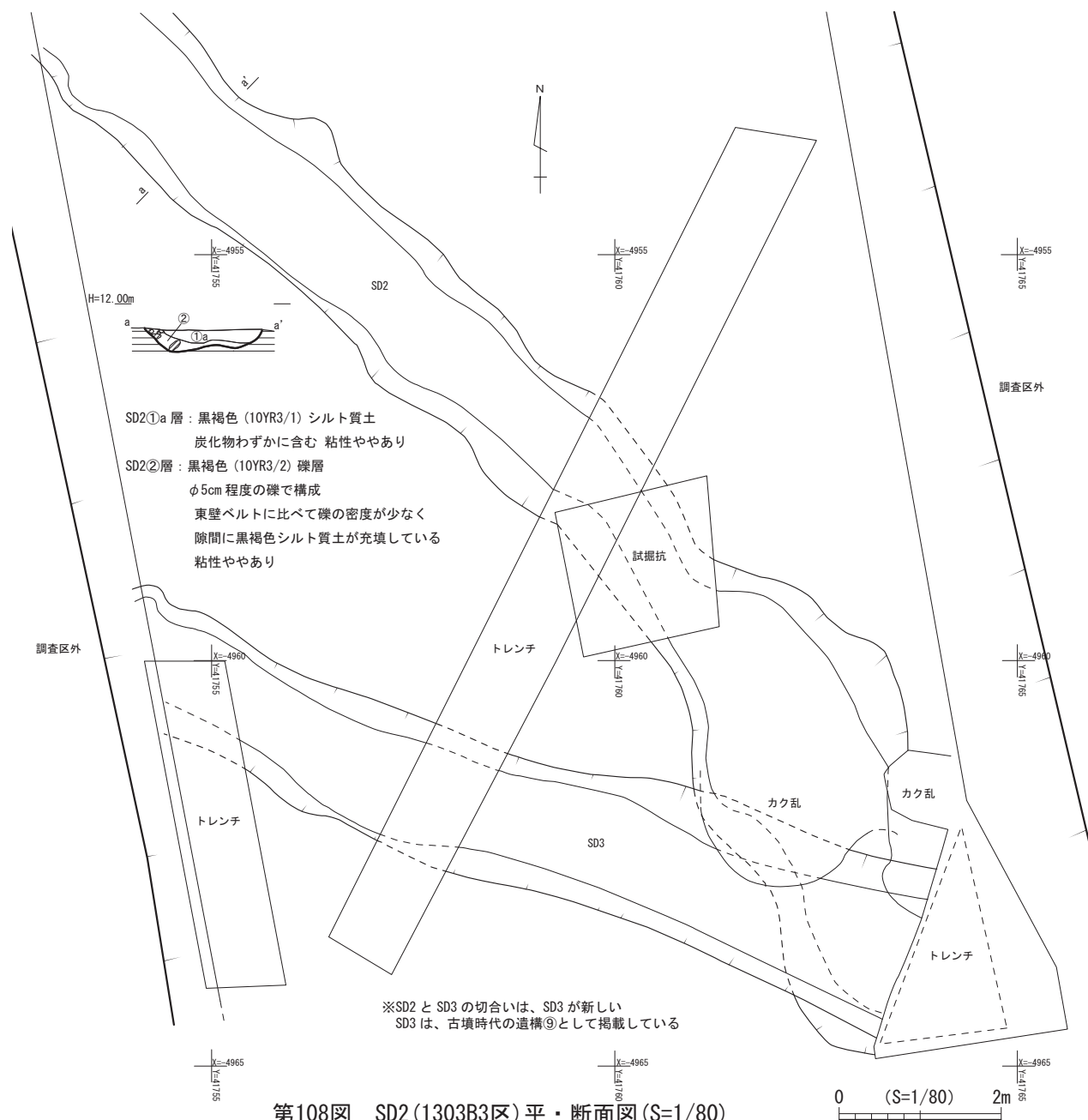
第37表 SD19出土土器観察表

遺物番号	器種	部位	法量 (cm)			調整		色調		焼成	胎土	備考
			口径	器高	底径	外面	内面	外面	内面			
691	甕	口縁部	(33.4)	—	—	ハケメ	ナデ	10YR7/4 にぶい黄橙	10YR7/4 にぶい黄橙	良	石英、長石、雲母 角閃石	くの字口縁
692	甕	口縁部	(29.6)	—	—	ハケメ	ハケメ	10YR7/3 にぶい黄橙	10YR7/3 にぶい黄橙	良 やや硬質	石英、長石、雲母	くの字口縁
693	甕	口縁部	(27.6)	—	—	ハケメ	ハケメ	5YR7/4 にぶい橙	7.5YR8/4 浅黄橙	良 やや硬質	長石、雲母 赤色粒子	くの字口縁
694	甕	口縁部	(26.6)	—	—	ナデ 指痕あり	ナデ	7.5YR5/2 灰褐	7.5YR4/3 褐	良 やや硬質	長石、雲母	くの字口縁
695	甕	口縁部	(20.6)	—	—	ハケメ	ハケメ	7.5YR3/1 黒褐	7.5YR4/2 灰褐	良 やや硬質	長石、雲母 角閃石	くの字口縁
696	甕	口縁部	54.8	—	—	ハケメ	ハケメ	7.5YR7/3 にぶい橙	7.5YR7/3 にぶい橙	良 やや硬質	長石、雲母 角閃石	くの字口縁
697	甕	口縁部	(20.0)	—	—	ハケメ	ハケメ	5YR5/1 褐灰	5YR3/2 暗赤褐	良	石英、長石、雲母	くの字口縁
698	台付甕	脚部	—	—	(8.6)	ナデ	ナデ	2.5YR5/6 明赤褐	2.5YR7/4 淡赤橙	良	長石、雲母 角閃石	脚端部が丸い仕上げ
699	台付甕	脚部	—	—	(9.8)	ハケメ	ハケメ	7.5YR5/4 にぶい橙	5YR6/6 橙	良	石英、長石、雲母	脚端部が丸い仕上げ
700	台付甕	脚部	—	—	(8.6)	ナデ	ナデ ユビオサエ	2.5YR6/4 にぶい橙	10R6/4 にぶい赤橙	良	石英、長石、雲母 赤色粒子、角閃石	脚端部が丸い仕上げ
701	甕	底部	—	—	(5.6)	ハケメ	ナデ	2.5YR6/4 にぶい橙	2.5YR6/4 にぶい橙	良	長石、石英、雲母	平底
702	壺	口縁部	—	—	—	ナデ	ナデ	7.5YR7/4 にぶい橙	7.5YR7/4 にぶい橙	良 やや硬質	長石、雲母 角閃石、赤色粒子	複合口縁壺
703	壺	胴部	—	—	—	ナデ	ハケメ	10R6/6 赤橙	10R4/1 暗赤灰	良	長石、石英、雲母 角閃石	二重の三角凸帯を有す
704	壺	胴部	—	—	—	ハケメ	ハケメ	7.5YR7/4 にぶい橙	7.5YR6/4 にぶい橙	良	長石、雲母 褐色粒子	二重の刻目三角凸帯を有す
705	壺	胴部	—	—	—	ハケメ	ハケメ	10YR7/3 にぶい黄橙	10YR7/3 にぶい黄橙	良	長石、石英、雲母 角閃石	二重の三角凸帯を有す
706	壺	胴部	—	—	—	ハケメ	ハケメ ツメ痕有り	2.5YR6/4 にぶい橙	7.5YR6/2 灰褐	良	長石、雲母 角閃石	二重の刻目三角凸帯を有す
707	壺	底部	—	—	(7.0)	ハケメ	剥落	10YR6/3 にぶい黄橙	10YR7/3 にぶい黄橙	良	長石、石英、雲母	平底
708	壺	底部	—	—	(5.6)	ハケメ	ハケメ	7.5YR6/6 橙	7.5YR6/3 にぶい褐	良 やや硬質	長石、石英、雲母 角閃石	平底
709	鉢	口縁部	(21.3)	—	—	ナデ	ナデ	2.5Y7/4 浅黄	2.5Y7/4 浅黄	良好	長石、雲母	外面に煤付着
710	高杯	脚部	—	—	—	(縦方向) 細いハケメ	ナデ	7.5YR7/4 にぶい橙	7.5YR6/4 にぶい橙	良	長石、石英、雲母 角閃石	裾端部欠損
711	鉢	底部	—	—	(9.4)	ナデ ユビオサエ	ナデ	7.5YR7/4 にぶい橙	7.5YR7/4 にぶい橙	不良	長石、石英、雲母	縄文晩期、粗製土器
712	鉢	底部	—	—	(8.6)	ナデ	ナデ	7.5YR6/4 にぶい橙	7.5YR6/4 にぶい橙	良	長石、石英、雲母 角閃石	縄文晩期、粗製土器

⑧TAK201303B3区SD2(溝) (第108・109図 図版59・60 表38・39)

SD2はB3区9476グリッドに位置する。SD3と並行に構築されている。構築方向は南東から北西方向で規模は長さ8.6m+、幅1.50m、深さ0.28mを測る。南東部で切り合い関係がありSD3がSD2を切っている。遺物は覆土及び床面から高杯杯部、脚部、台付甕脚部、鉢などが出土した。以下出土遺物について記す。

713~717までは台付甕の脚部である。715は脚端部がやや尖る。残りは丸い仕上げである。718は鉢口縁部片である。内外面はハケメ調整を施している。全体的に粗い仕上げである。719~723は高杯杯部、脚部片である。719は内面が削り調整、外面は細かいハケメ調整を施す。丁寧な作りである。720、722は高杯脚部片で722は2つの穿孔を有す。721は高杯杯部で先端部が欠損する。723は高杯脚部片で端部は丸い仕上げである。724は壺口縁部片である。725は石鏃片で五角形鏃である。基部が欠損する。





①検出状況



②断面状況

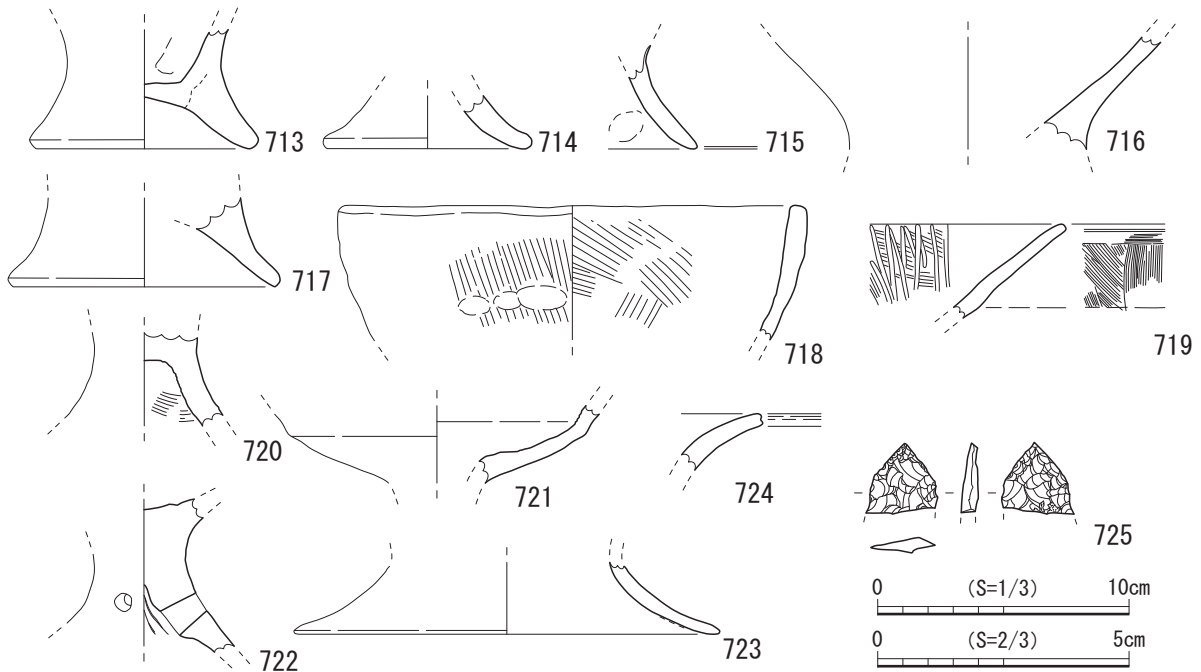


③完掘状況 その1



④完掘状況 その2

図版59 SD2(1303B3区)遺構状況(①~④)



第109図 SD2(1303B3区)出土遺物実測図(No. 725のみS=2/3, 他はS=1/3)



図版60 SD2(1303B3区)出土遺物

第38表 SD2(1303B3区)出土土器観察表

遺物番号	器種	部位	法量(cm)			調整		色調		焼成	胎土	備考
			口径	器高	底径	外面	内面	外面	内面			
713	台付甕	脚部	—	—	(8.6)	ナデ	ヘラナデ	2.5YR6/4にぶい橙	2.5YR6/4にぶい橙	良	長石、雲母	
714	台付甕	脚部	—	—	(7.6)	ナデ	ナデ	5YR7/4にぶい橙	5YR6/4にぶい橙	良	長石、石英、雲母	
715	台付甕	脚部	—	—	—	ナデ	ナデ ユビオサエ	7.5YR6/4にぶい橙	7.5YR5/2 灰褐	良 やや硬質	長石、雲母	脚端部がやや尖る
716	台付甕	脚部	—	—	—	ナデ	ナデ	7.5YR8/3 浅黄橙	7.5YR8/3 浅黄橙	良	長石、雲母 赤色粒子	
717	台付甕	脚部	—	—	(10.4)	ナデ	ナデ	7.5YR6/4にぶい橙	7.5YR7/4にぶい橙	良	長石、雲母 角閃石	
718	鉢	口縁部	(17.8)	—	—	ハケメ	ハケメ	7.5YR4/2 灰褐	7.5YR6/3 にぶい褐	良	長石、石英	全体的に粗い仕上げ
719	高杯	杯部	—	—	—	細かい ハケメ	削り	7.5YR6/4にぶい橙	7.5YR6/4にぶい橙	良	長石、雲母 赤色粒子	内面に暗文あり
720	高杯	脚部	—	—	—	ナデ	ナデ	5YR6/6 橙	5YR6/6 橙	良	長石	裾端部欠損
721	高杯	杯部	—	—	—	ナデ	剥離	10YR7/3にぶい黄橙	10YR7/3にぶい黄橙	良	長石、雲母 角閃石	全体的に粗い仕上げ
722	高杯	脚部	—	—	—	ナデ	ナデ	7.5YR6/6 橙	7.5YR4/4 褐	良	長石、石英、雲母	二つの穿孔有す
723	高杯	脚部	—	—	(16.9)	ナデ	ナデ	10YR7/4にぶい黄橙	10YR7/4にぶい黄橙	良	長石、雲母 角閃石、赤色粒子	
724	壺	口縁部	—	—	—	ハケメ	ナデ	7.5YR7/3にぶい橙	7.5YR7/4にぶい橙	良	長石、石英、雲母 赤色粒子	

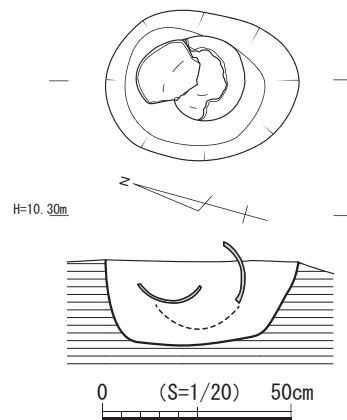
第39表 SD2(1303B3区)出土石器観察表

遺物番号	器種	石材	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	備考
725	石鏃	黒曜石	1.4	1.4	0.3	0.46	五角形鏃、基部欠損

⑨TAK201202⑥SK116(土坑) (第110・111図 図版61・62 表40)

平成24年度調査分で、『竹松遺跡Ⅱ』(長崎県教委編 2017)未報告の遺構である。

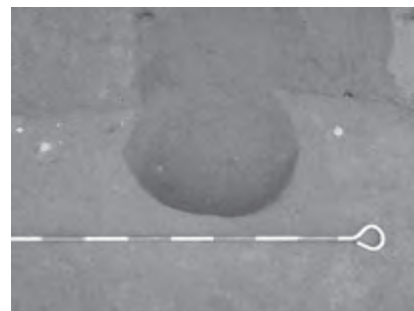
⑥区8468グリッドに位置し、長軸0.51m、短軸0.40m、高さ0.23mを測る。平面形は楕円形である。土坑内覆土から短頸壺片が出土した。726は口縁部～底部にかけて一部欠損するが接合、復元で完形となった。口頸部から短く外湾し口縁部は上方向につまみあげられている。端部は丸い仕上げである。全体的に器壁は厚い。内外面は細かいハケメ調整を施し丁寧な作りである。胴部最大径は中心よりやや上位にあり、底部は凸レンズ状を呈する。時期は弥生時代後期中頃から後半頃であろう。



第110図 SK116 平・断面図(S=1/20)

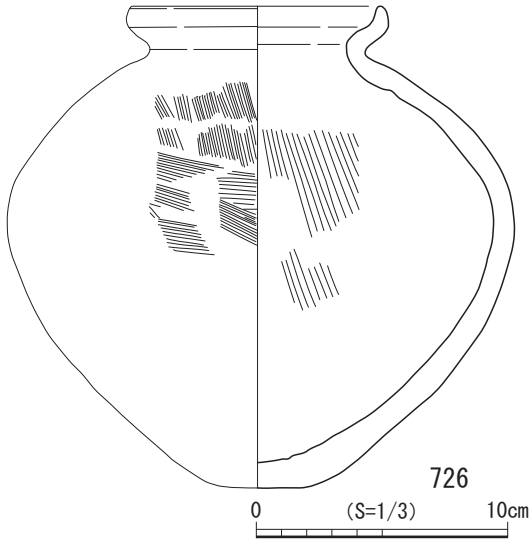


①遺物出土状況



②完掘状況

図版61 SK116遺構状況(①・②)



第111図 SK116出土遺物実測図(S=1/3)



図版62 SK116出土遺物

第40表 SK116出土土器観察表

遺物番号	器種	部位	法量(cm)			調整		色調		焼成	胎土	備考
			口径	器高	底径	外面	内面	外面	内面			
726	短頸壺	口縁部～底部	(10.0)	19.1	3.0	ハケメ	ハケメ	7.5YR7/6 橙	7.5YR6/4 にぶい橙	良好	長石、赤色粒子	接合復元で完形 底部は凸レンズ状

⑩ TAK201303B2区SK27(土坑) (第112・113図 図版63・64 表41)

B2区9276グリッドに位置し、長軸0.9m+、短軸0.3m+、高さ0.23mを測る。平面形は楕円(推定)である。遺物は甕の口頸部～胴部片が出土した。727は甕の口頸部～胴部の破片である。口頸部に三角凸帯を施し、内外面は斜め方向にハケメ調整を施す。

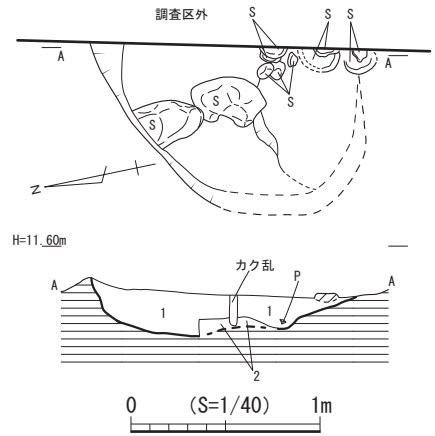


①検出状況



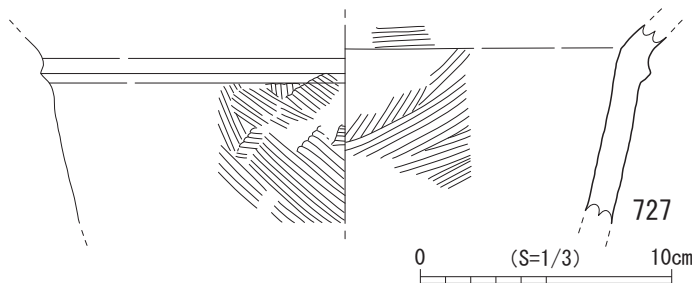
②断面 北から

図版63 SK27遺構状況(①・②)



1. 黒褐色(10YR3/2) しまりあり  
炭化粒(2mm大) 礫(φ5～10mm大) 入る
2. 褐色(10YR4/4-4/6) しまり強 SK外φ10～20cm大の礫

第112図 SK27平・断面図(S=1/40)



第113図 SK27出土遺物実測図(S=1/3)



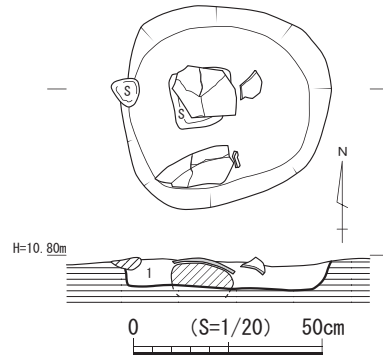
図版64 SK27出土遺物

第41表 SK27出土土器観察表

遺物番号	器種	部位	法量(cm)			調整		色調		焼成	胎土	備考
			口径	器高	底径	外面	内面	外面	内面			
727	甕	口頸部～胴部	—	—	—	斜め方向 ハケメ	斜め方向 ハケメ	7.5YR6/4 にぶい橙	7.5YR6/4 にぶい橙	良好	長石、石英、雲母 赤色粒子	口頸部に三角凸帯を有す

⑪ TAK201303A1区SK8(土坑) (第114・115図 図版65・66 表42)

SK8はA1区8072グリッドに位置する。主軸方位はN-89°-Eで長軸を東西方向に構築された土坑である。規模は長軸(東西方向)0.55m、短軸(南北方向)0.53m、深さ0.06mを測るほぼ円形の土坑である。遺物は甕の口縁部～胴部片が出土した。728はくの字口縁を呈する甕である。口縁部～胴部片で内外面は細かなハケメ調整を施している。器壁は薄く全体的に丁寧な作りである。時期は弥生時代後期後半頃の所産であろう。



1. にぶい黄褐色(10YR4/3) 細い砂が混じるシルト質  
しまりがややあり、粘性は弱い  
1cm程の小石をごく少量(1~2%)含む

第114図 SK8(1303A1区)平・断面図(S=1/20)



①遺物出土状況 その1

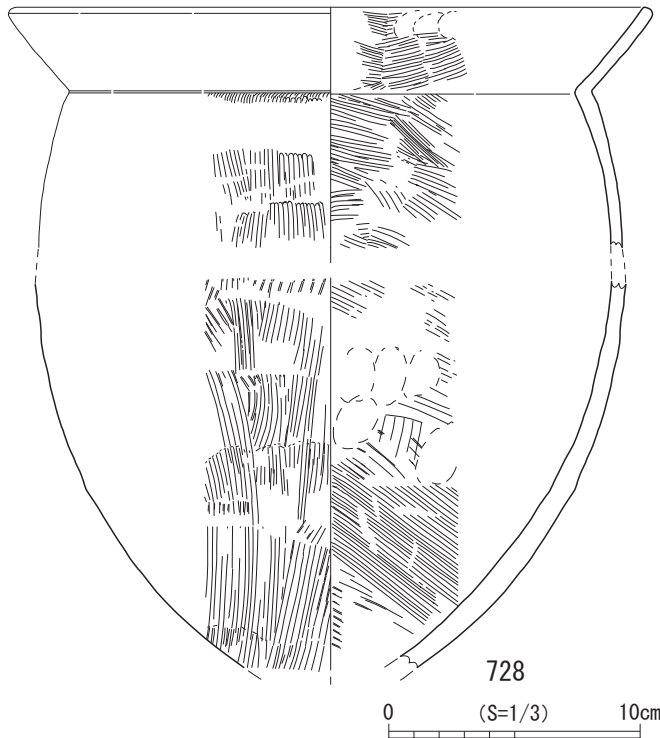


②遺物出土状況 その2



③完掘状況

図版65 SK8(1303A1区)遺構状況(①~③)



第115図 SK8(1303A1区)出土遺物実測図(S=1/3)



図版66 SK8(1303A1区)出土遺物

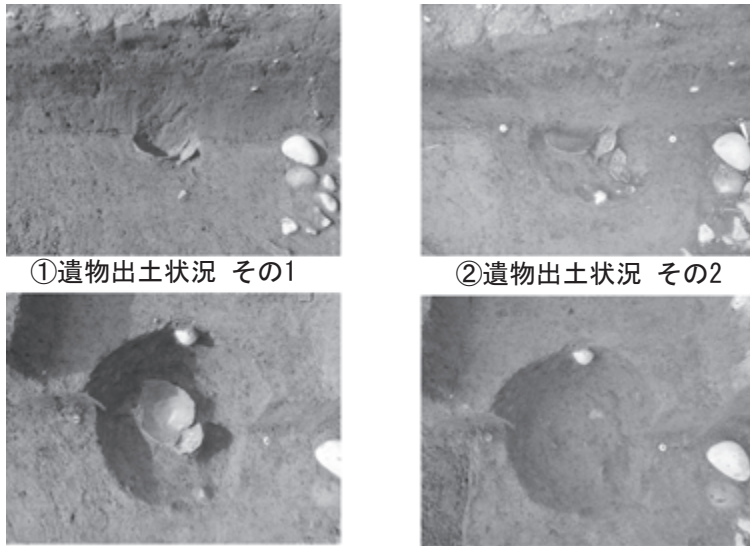
第42表 SK8(1303A1区)出土土器観察表

遺物番号	器種	部位	法量(cm)			調整		色調		焼成	胎土	備考
			口径	器高	底径	外面	内面	外面	内面			
728	甕	口縁部～胴部	(25.0)	—	—	ハケメ	ハケメ ナデ	5YR7/3 にぶい橙	2. 5YR6/6 橙	良好	長石、石英、雲母	くの字口縁

⑫ TAK201303A1区SK9(土坑) (第116・117図 図版67・68 表43)

SK9はA1区8072グリッドに位置する。主軸方位はN-1°-Eで南北方向に長軸をとる。規模は長軸(南北方向)0.59m、短軸(東西方向)0.49m、深さ0.29mを測る楕円形を呈する土坑である。

遺物は弥生土器甕胴部～底部片である。729は甕の胴部～底部片である。全体的に剥離や磨耗が目立つ。胎土も多くの砂粒を含み焼成もやや軟質である。内外面はハケメ調整を施す。底部は凸レンズ状で径が小さい。その中央に1cm程の穴を開けている。底部形状から弥生時代後期後半頃であろう。



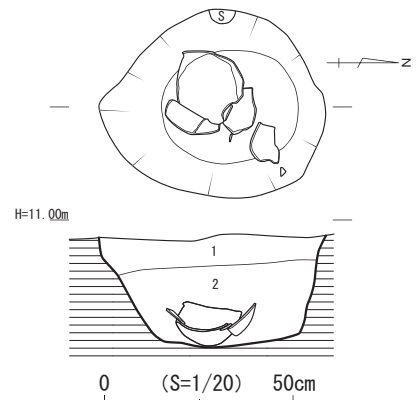
①遺物出土状況 その1

②遺物出土状況 その2

③遺物出土状況 その3

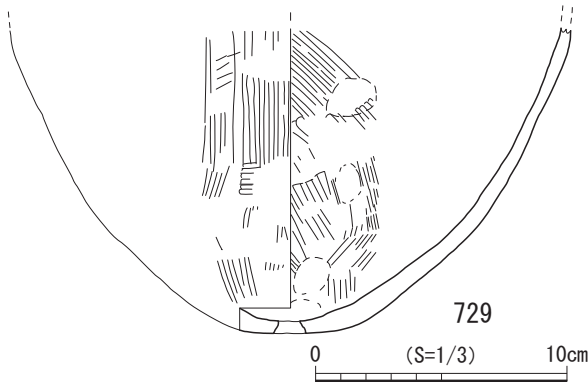
④完掘状況

図版67 SK9遺構状況(①～④)



1. にぶい黄褐色(10YR4/3)細砂粒混じりのシルト 粘性弱い  
暗褐色(10YR3/3)ブロック3% 礫を含まない
2. 灰黄褐色(10YR4/2)細砂粒混じりのシルト(1より細砂多い)  
粘性弱い、1よりはる  
暗褐色(10YR3/3)ブロック5%、2cm程の礫を2%

第116図 SK9平・断面図(S=1/20)



第117図 SK9出土遺物実測図(S=1/3)



図版68 SK9出土遺物

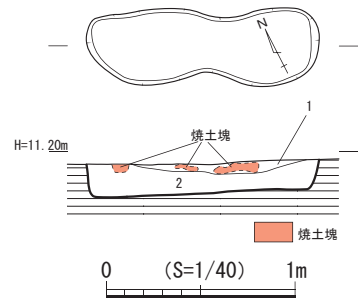
第43表 SK9出土土器観察表

遺物番号	器種	部位	法量(cm)			調整		色調		焼成	胎土	備考
			口径	器高	底径	外面	内面	外面	内面			
729	甕	胴部～底部	—	—	—	ハケメ	ハケメ	10YR7/3 にぶい黄橙	7.5YR7/1 明褐灰	良	多くの砂粒を含む 石英、雲母、角閃石	底部は凸レンズ状で、中央に1cm程の孔を有す



⑬ TAK201303B2区SL18(焼土) (第118・119図 図版69・70 表44)

B2区9274グリッドに位置し、長軸1.24m、短軸0.3~0.42m、高さは15~17cmを測る。平面形は長楕円形で瓢箪形を呈する。出土遺物は甕口縁部片、袋状口縁壺口縁部片、その他や弥生土器小片が出土した。730は甕口縁部~口頸部片で口縁上部は欠損する。くの字口縁を呈すると思われる。外面は磨耗が目立ち調整は確認できない。内面は横方向にハケメ調整を施す。731は袋状口縁壺の口縁部片である。胎土は砂粒を多く含み、ナデ調整を施す。口縁端部は丸く仕上げている。



- 1. 黒褐色(10YR3/2)粘質シルト、しまり弱い全体に橙色(5YR6/8)の焼土と炭を含む(25%)点線内に特に集中し焼土塊となっている 点線外でも焼土3%~5%
- 2. 暗褐色(10YR3/4)粘質シルト、1よりしまり、粘質白色粒1%以下、焼土1%以下 3cm以下の小礫2%

第118図 SL18平・断面図(S=1/40)

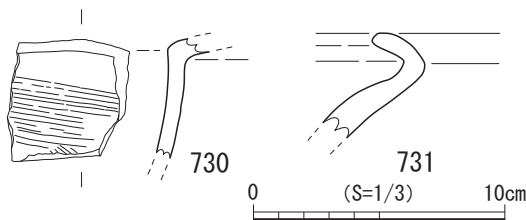


①検出状況

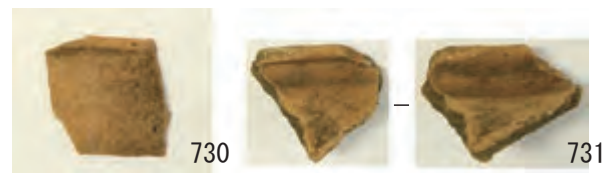


②断面状況

図版69 SL18遺構状況(①・②)



第119図 SL18出土遺物実測図(S=1/3)



図版70 SL18出土遺物

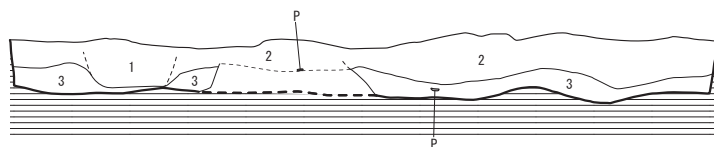
第44表 SL18出土土器観察表

遺物番号	器種	部位	法量(cm)			調整		色調		焼成	胎土	備考
			口径	器高	底径	外面	内面	外面	内面			
730	甕	口縁部~口頸部	—	—	—	ナデ	横方向ハケメ	7.5YR7/6 橙	5YR6/4 にぶい橙	良	長石、石英、雲母 角閃石	くの字口縁 外面磨耗が目立つ
731	壺	口縁部	—	—	—	ナデ	ハケメ	7.5YR6/4 にぶい橙	7.5YR6/4 にぶい橙	良	長石、石英、金雲母 砂粒を多く含む	袋状口縁壺 砂粒を多く含む

⑭ TAK201303B2区SS4(集石) (第120・121図 図版71・72 表45)

B2区9274グリッドに位置する。40cm×20cm、40cm×30cm程の円礫から拳大の円礫で構成されている集石遺構で、礫の下層は平面のプランが確認できなかった。断面実測から判断して壁の立ち上がりが無いことから追認できる。全体的に石の集積密度はやや散発的である。出土遺物は弥生土器甕口縁部片、胴部片、底部片、一部縄文土器片が出土した。いずれも小片である。732は甕の口縁部~胴部片である。くの字口縁を呈し、外面は斜め方向のやや広めのハケメ調整を施す。口縁部内面は横方向のハケメ、胴部内面は斜め方向のハケメ調整を施す。733は短頸壺の口頸部片である。内外面は磨

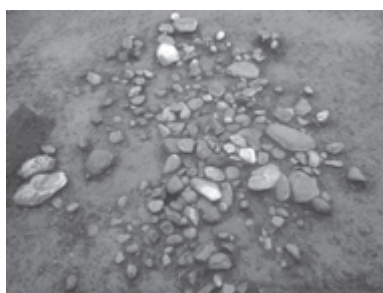
耗が激しく調整が確認できない。734は甕胴部～底部片である。底部は平底で胴部は縦、斜め方向のハケメ調整を施す。底部内面は指圧痕が残る。



1. 暗赤灰色 (2.5YR3/1) 砂質シルト  
しまりやや弱く、粘性あり 下層中心に指頭大～20cm大の礫を30%含む  
追記：下層確認するも平面でSK・SPとして検出できず
  2. 暗赤褐色 (2.5YR3/2) 砂質シルト  
しまりやや強く、粘性あり 2cm大～10cm大の礫を10%含む  
炭化物がわずかに含まれる 赤色粒子がかすかに含まれる
  3. 暗灰黄色 (2.5Y4/2) 砂質シルト (極細粒砂)  
しまり弱く、粘性あり 10cm～30cm大の礫を30%含む (層にむかって大きくなる)
- ※ SS4は掘込をもつ遺構ではない 基本土層3層中に円礫を配置した遺構と判断

0 (S=1/40) 1m

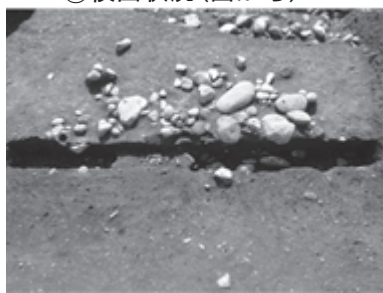
第120図 SS4平・断面図 (S=1/40)



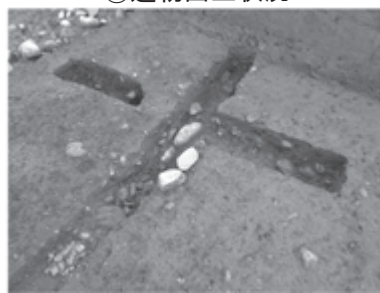
①検出状況(西から)



②遺物出土状況

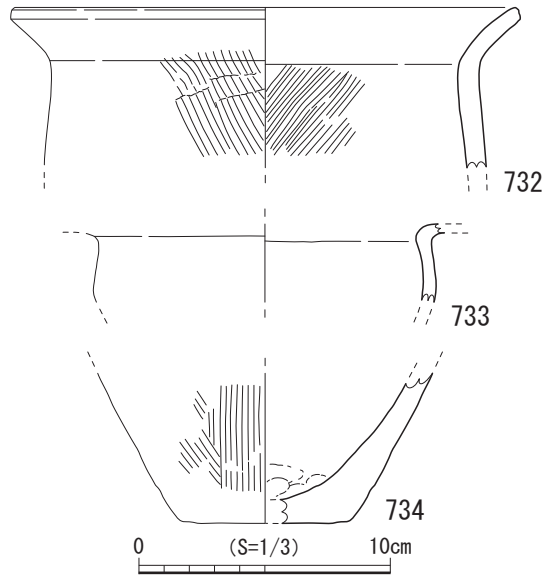


③北面検出状況(北から)

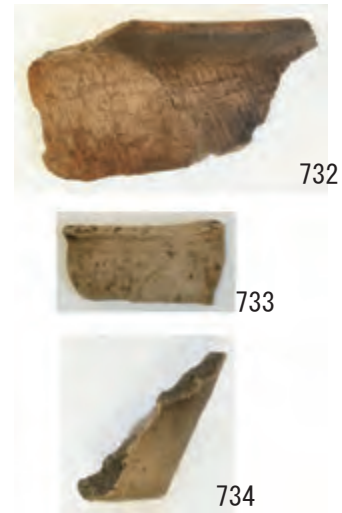


④南北トレンチ土層断面(東から)

図版71 SS4遺構状況(①～④)



第121図 SS4出土遺物実測図 (S=1/3)



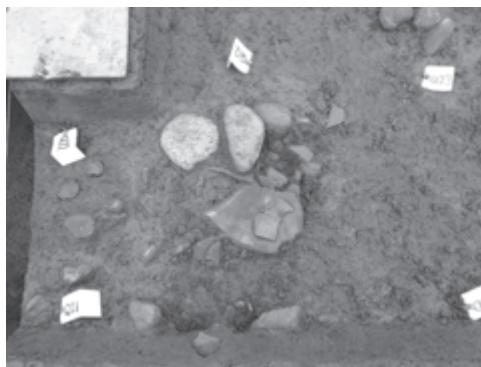
図版72 SS4出土遺物

第45表 SS4出土土器観察表

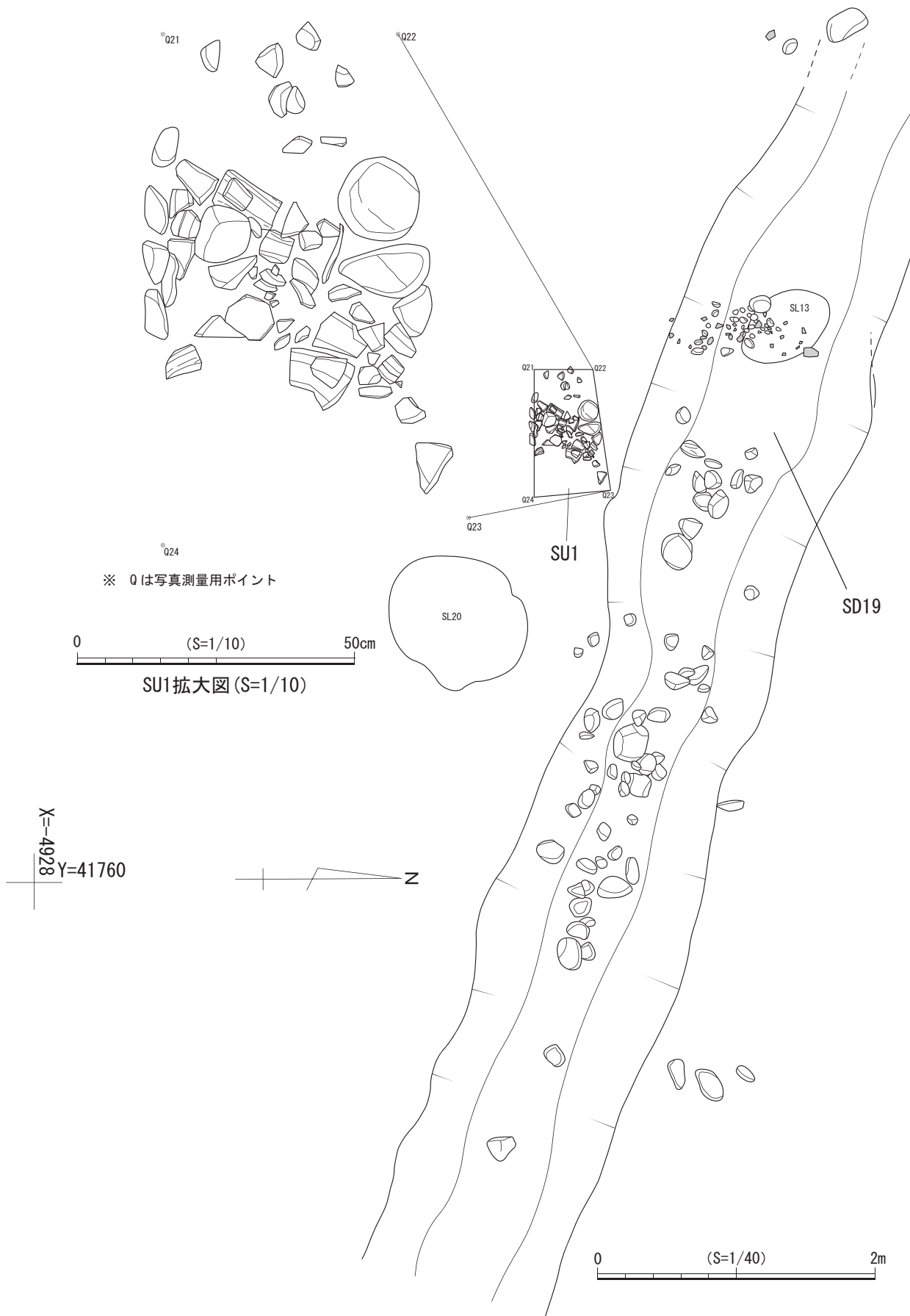
遺物番号	器種	部位	法量 (cm)			調整		色調		焼成	胎土	備考
			口径	器高	底径	外面	内面	外面	内面			
732	甕	口縁部 ~胴部	(21.0)	—	—	ハケメ	ハケメ	7.5YR7/4 にぶい橙	7.5YR8/4 浅黄橙	良	長石、雲母	くの字口縁
733	壺	口頸部	—	—	—	ハケメ ナデ	ハケメ ナデ	7.5YR8/2 灰白	7.5YR8/2 灰白	不良	長石、石英、雲母	短頸壺 内外面摩耗が激しい
734	甕	底部 ~胴部	—	—	(6.4)	ハケメ	ナデ	10YR4/2 灰黄褐	10YR8/2 灰白	良	長石、雲母 角閃石	底部内面に指圧痕あり

⑮ TAK201303B2区SU1(遺物集積) (第122・123図 図版73・74 表46)

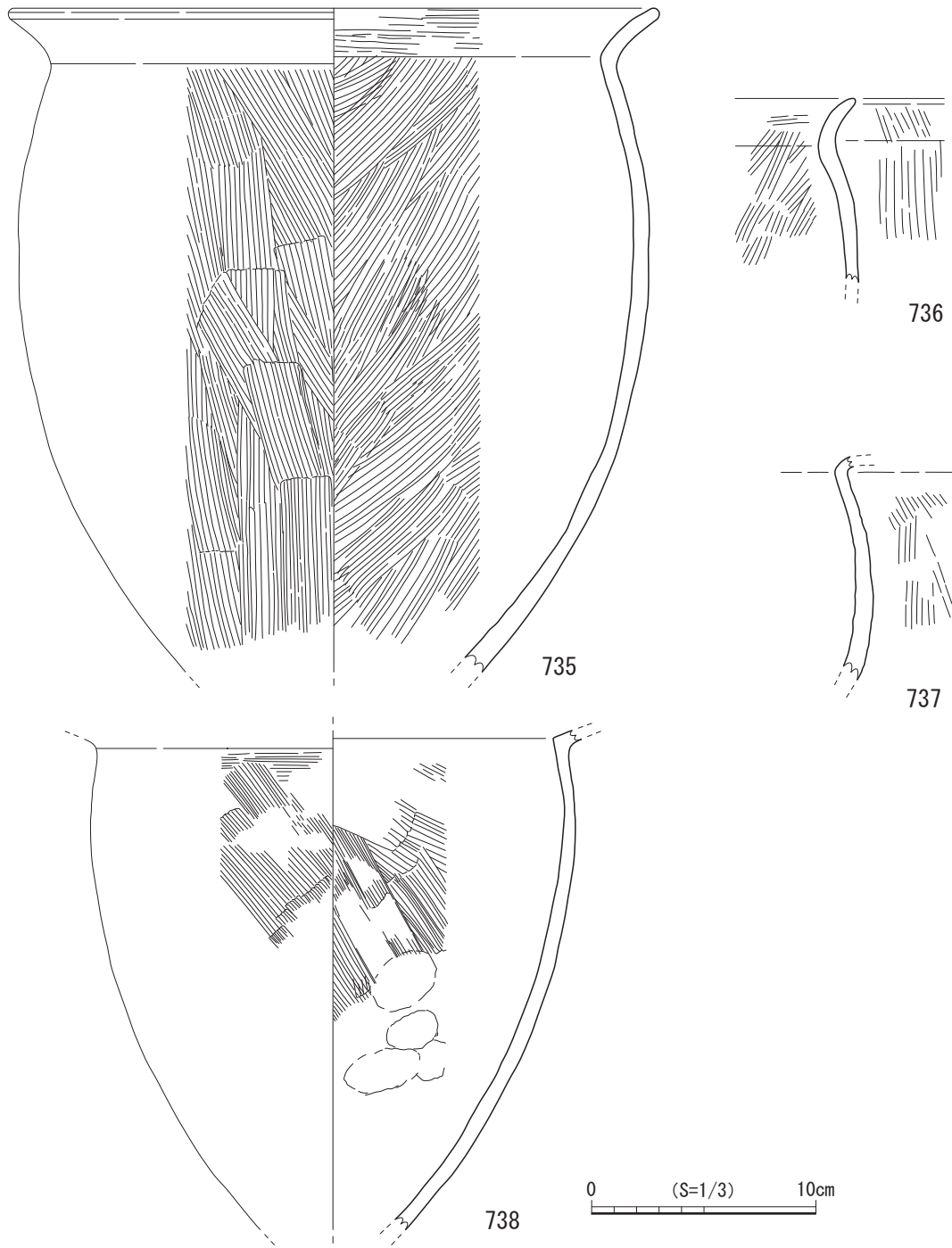
SU1はB2区9274グリッドに位置する。SD19に隣接する。東西0.9m、南北0.5mの範囲で弥生土器の集中を見る。遺物は甕片が集中していた。735~738は甕の口縁部~胴部片である。735はくの字口縁部を呈する甕である。内外面は縦、斜め方向にハケメ調整を施す。口縁部端部は丸い仕上げである。736は甕口縁部~胴部片である。口縁部は緩やかに外反し端部は丸い。内外面はハケメ調整を施す。胎土も多く砂粒を含み、全体的に粗い仕上げである。737、738は甕胴部片である。737は磨耗が激しくハケメ調整が僅かに残る。738は口縁部が欠損し内外面は斜め方向にハケメ調整を施す。



図版73 SU1遺物出土状況



第122図 SU1平面・拡大図 (S=1/40, S=1/10)



第123図 SU1出土遺物実測図(S=1/3)

第46表 SU1出土土器観察表

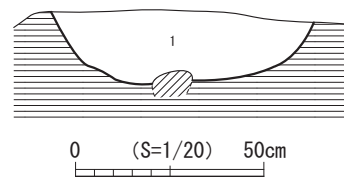
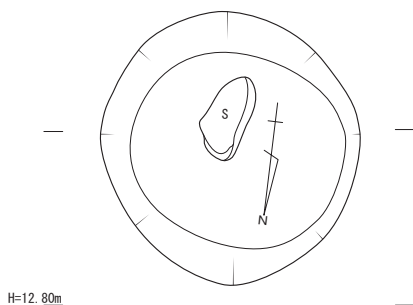
遺物番号	器種	部位	法量 (cm)			調整		色調		焼成	胎土	備考
			口径	器高	底径	外面	内面	外面	内面			
735	甕	口縁部~ 胴部	29.0	—	—	縦、斜め方向 ハケメ	縦、斜め方向 ハケメ	10YR6/4 にぶい黄橙	10YR6/4 にぶい黄橙	良	長石、石英 角閃石	くの字口縁
736	甕	口縁部~ 胴部	—	—	—	ハケメ	ハケメ	10YR5/3 にぶい黄褐	10YR1.7/1 黒	良	長石、石英、雲母 角閃石	口縁部は緩やかに外反
737	甕	胴部	—	—	—	ハケメ	ハケメ	7.5YR7/3 にぶい橙	10YR8/4 浅黄橙	不良	長石、石英、雲母 角閃石	磨耗が激しい
738	甕	胴部	—	—	—	斜め方向 ハケメ	斜め方向 ハケメ	7.5YR5/4 にぶい褐	7.5YR5/2 灰褐	良	石英、雲母 角閃石	口縁部欠損



図版74 SU1出土遺物

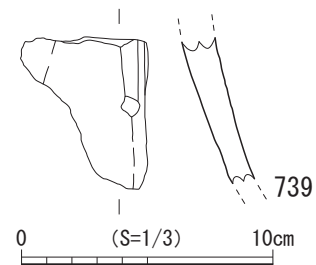
⑩ TAK201302⑩SP5(柱穴) (第124・125図 図版75 表47)

SP5は⑩区0676グリッドに位置する。長軸0.70m、短軸0.66m、深さ0.20mを測る。平面形は円形を呈し、覆土は黒色の単層である。遺物は器台片が覆土から出土した。739は器台で透かし端部の破片である。外面は斜め方向に細かいハケメ調整を施す。



1. 黒色 (7.5YR2/1) しまりあり  
φ1mm 大の微細な黄色粒 5%、焼土粒 1% 含有

第124図 SP5平・断面図(S=1/20)



第125図 SP5出土遺物実測図(S=1/3)



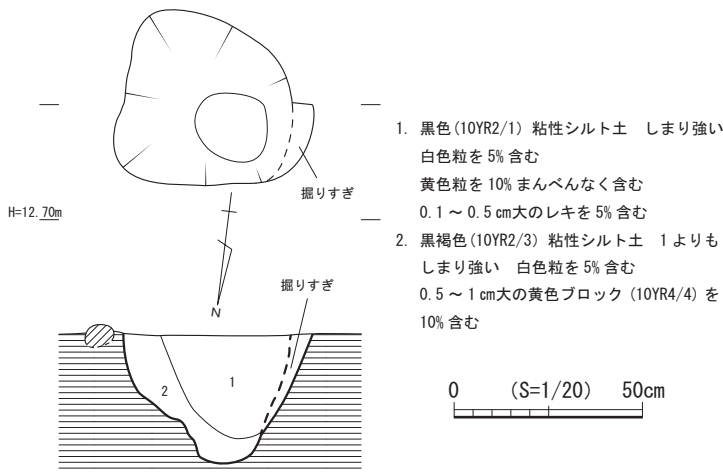
図版75 SP5出土遺物

第47表 SP5出土土器観察表

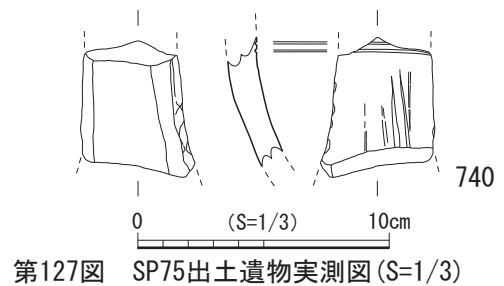
遺物番号	器種	部位	法量 (cm)			調整		色調		焼成	胎土	備考
			口径	器高	底径	外面	内面	外面	内面			
739	器台	透かし端部	—	—	—	外面 斜め方向 ハケメ	内面 ナデ	外面 10YR7/4 にぶい黄橙	内面 10YR6/6 明黄褐	良	長石、雲母 赤色粒子	

⑰ TAK201302⑩SP75(柱穴) (第126・127図 図版76 表48)

SP75は⑩区0474グリッドに位置する。規模は長軸0.44m、短軸0.44m、深さ0.34mを測り、平面形はやや不整形である。堆積土層は2層で覆土から器台片が出土した。740は器台の透かし端部の破片である。上部に細い沈線が2条残り、外面は縦方向に薄いハケメ調整が残る。



第126図 SP75平・断面図(S=1/20)



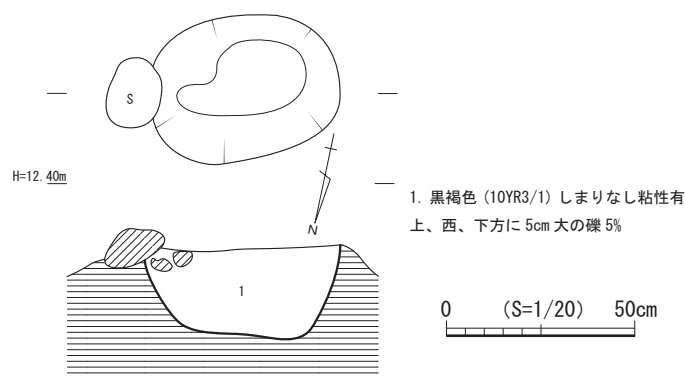
図版76 SP75出土遺物

第48表 SP75出土土器観察表

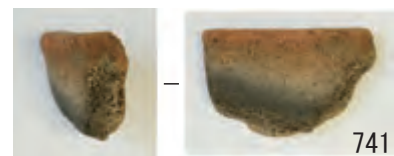
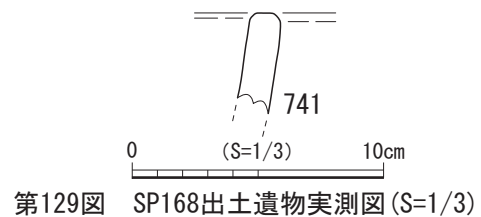
遺物番号	器種	部位	法量(cm)			調整		色調		焼成	胎土	備考
			口径	器高	底径	外面	内面	外面	内面			
740	器台	透かし端部	—	—	—	縦方向薄いハケメ	ナデ	7.5YR7/4にぶい橙	7.5YR7/4にぶい橙	良	長石、赤色粒子	細かい沈線が2条残る

⑱ TAK201302⑩SP168(柱穴) (第128・129図 図版77 表49)

SP168は⑩区0474グリッドに位置する。規模は長軸0.50m、短軸0.40m、深さ0.22mを測る。平面形は楕円形を呈し、覆土は黒褐色粘質土の単層である。741は鉢口縁部片である。口縁端部は方形で器壁は厚い。砂粒を多く含む焼成は良好である。



第128図 SP168平・断面図(S=1/20)



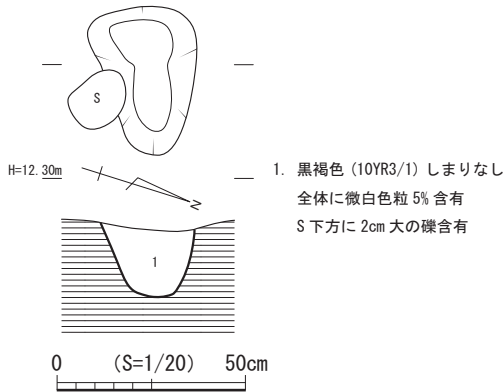
図版77 SP168出土遺物

第49表 SP168出土土器観察表

遺物番号	器種	部位	法量(cm)			調整		色調		焼成	胎土	備考
			口径	器高	底径	外面	内面	外面	内面			
741	鉢	口縁部	—	—	—	ナデ	ナデ	5YR7/6橙	10YR7/3にぶい黄橙	良好	角閃石、石英長石、赤色粒子	砂粒を多く含む

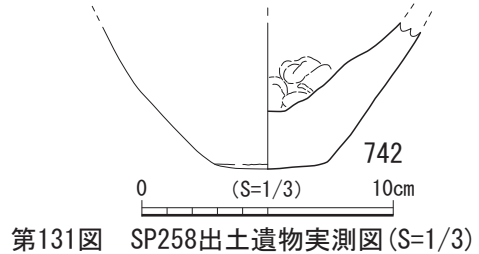
⑬ TAK201302⑩SP258(柱穴) (第130・131図 図版78 表50)

SP258は⑩区0274グリッドに位置する。規模は長軸0.40m、短軸0.24m、深さ0.18mを測る。平面形は楕円形を呈し、覆土は黒褐色粘質土の単層である。遺物は弥生時代甕底部片が出土した。742は甕底部～胴部片である。底部は緩やかな凸レンズ状で、内面は指圧痕が残る。外面は僅かにハケメ痕が残る。



第130図 SP258平・断面図(S=1/20)

1. 黒褐色(10YR3/1)しまりなし  
全体に微白色粒5%含有  
S下方に2cm大の礫含有



第131図 SP258出土遺物実測図(S=1/3)



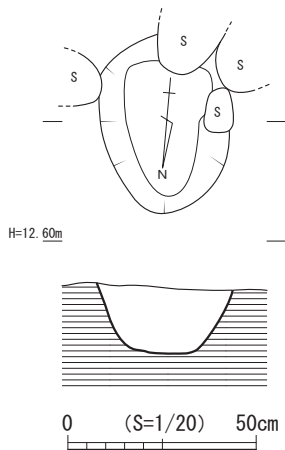
図版78 SP258出土遺物

第50表 SP258出土土器観察表

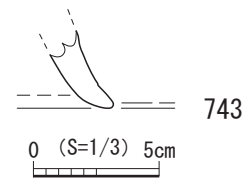
遺物番号	器種	部位	法量(cm)			調整		色調		焼成	胎土	備考
			口径	器高	底径	外面	内面	外面	内面			
742	甕	胴部～底部	—	—	4.4	ハケメ	指圧痕	10YR8/3 浅黄橙	7.5YR8/4 浅黄橙	良	長石、褐色粒子	底部は緩やかな凸レンズ状

⑭ TAK201302⑩SP281(柱穴) (第132・133図 図版79 表51)

SP281は⑩区0674グリッドに位置する。規模は長軸0.44m、短軸0.34m、深さ0.20mを測る。平面形は楕円形を呈する。遺物は弥生時代甕胴部片、台付甕脚部片が出土した。743は台付甕脚部片で、端部はやや尖り気味である。



第132図 SP281平・断面図(S=1/20)



第133図 SP281出土遺物実測図(S=1/3)



図版79 SP281出土遺物

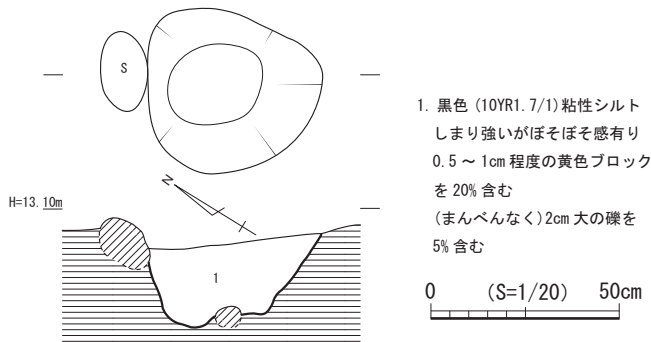
第51表 SP281出土土器観察表

遺物番号	器種	部位	法量(cm)			調整		色調		焼成	胎土	備考
			口径	器高	底径	外面	内面	外面	内面			
743	台付甕	脚部	—	—	—	ハケメ	ナデ	7.5YR7/4 にぶい橙	7.5YR7/4 にぶい橙	良	長石	端部はやや尖り気味

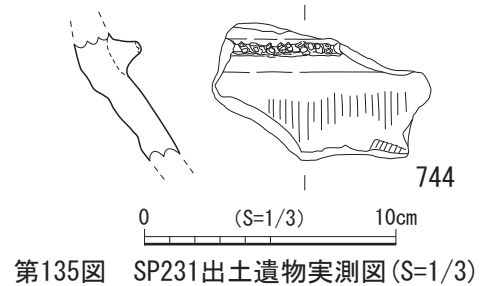


②TAK201302①SP231(柱穴) (第134・135図 図版80 表52)

SP231は①区1276グリッドに位置する。規模は長、短軸0.44m、深さ0.20mを測る。平面プランは不整楕円を呈し、覆土は小礫混じりの粘質シルト層である。遺物は刻目凸帯付きの壺胴部片が出土した。744は壺の胴部片である。三角凸帯を有し刻目を施す。外面は薄いハケメ調整を施す。内面は剥離が目立つ。



第134図 SP231平・断面図 (S=1/20)



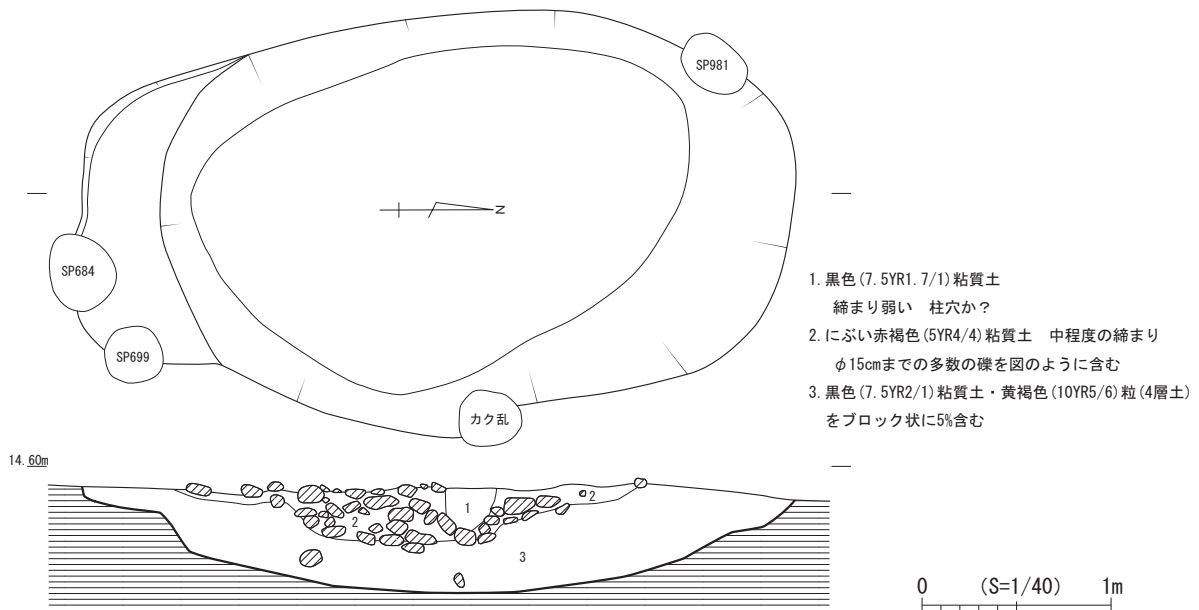
図版80 SP231出土遺物

第52表 SP231出土土器観察表

遺物番号	器種	部位	法量 (cm)			調整		色調		焼成	胎土	備考
			口径	器高	底径	外面	内面	外面	内面			
744	壺	胴部	—	—	—	薄いハケメ	剥離	5YR6/6 橙	7.5YR7/4 にぶい橙	良	雲母、石英 角閃石、赤色粒子	内面は剥離が目立つ 刻目三角凸帯を有す

②TAK201301D区SX2(不明遺構) (第136・137図 図版81・82 表53)

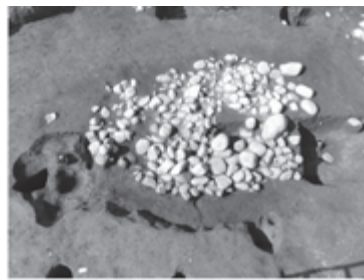
SX2はD区2072グリッドに位置する。規模は長軸3.76m、短軸2.24m、深さ0.56mを測る。平面形は南北方向に楕円形を呈する。検出時は人頭大から拳大の円礫が遺構全体で確認された。集石墓とも考えられるが壁の立ち上がり、床面の状況から考えて判然としなかったため不明遺構とした。遺物は3層から弥生土器壺胴部片が出土した。745は壺胴部片である。胴部に方形の凸帯を付け三角形の刻目を有す。胎土は砂粒を多く含み全体的に粗い仕上げである。



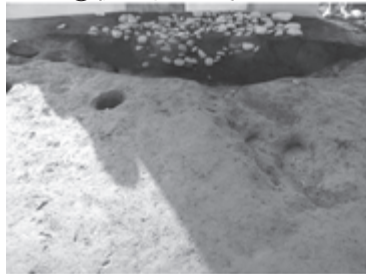
第136図 SX2(1301D区)平・断面図 (S=1/40)



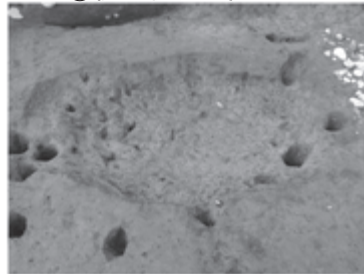
①検出状況 その1



②検出状況 その2

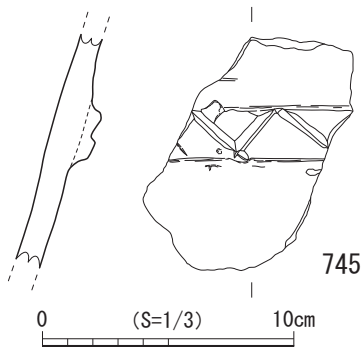


③断面状況



④完掘状況

図版81 SX2(1301D区)遺構状況(①~④)



図版82 SX2(1301D区)出土遺物

第137図 SX2(1301D区)出土遺物実測図(S=1/3)

第53表 SX2(1301D区)出土土器観察表

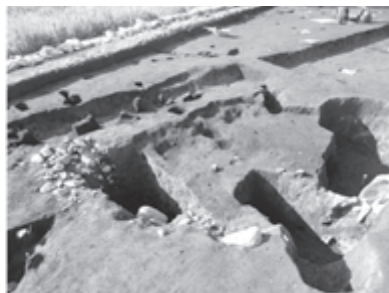
遺物番号	器種	部位	法量(cm)			調整		色調		焼成	胎土	備考
			口径	器高	底径	外面	内面	外面	内面			
745	壺	胴部	—	—	—	ナデ	ナデ	5YR7/8 橙	10YR8/4 浅黄橙	良	石英、長石 砂粒を多く含む	胴部に方形の凸帯を付け 三角形の刻目を有す

②TAK201301D区SX4(不明遺構) (第138・139図 図版83・84 表54)

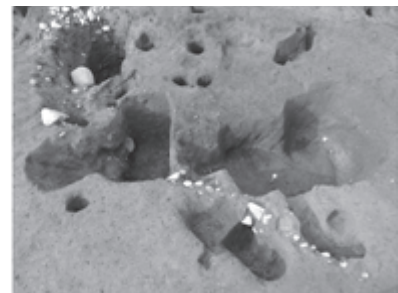
SX4はD区2072グリッドに位置する。規模は長軸3.70m、短軸2.2m+、深さ0.34mを測る。3ヶ所程が攪乱で削平されており全体像が定かではない。覆土は単層の暗赤灰粘質土で弥生時代甕口縁部片等が出土した。746は大形甕の口縁部片である。内外面に粗いハケメ調整が施されている。また口縁天井部にも刻目を施しており器壁は厚い。



①底面検出状況

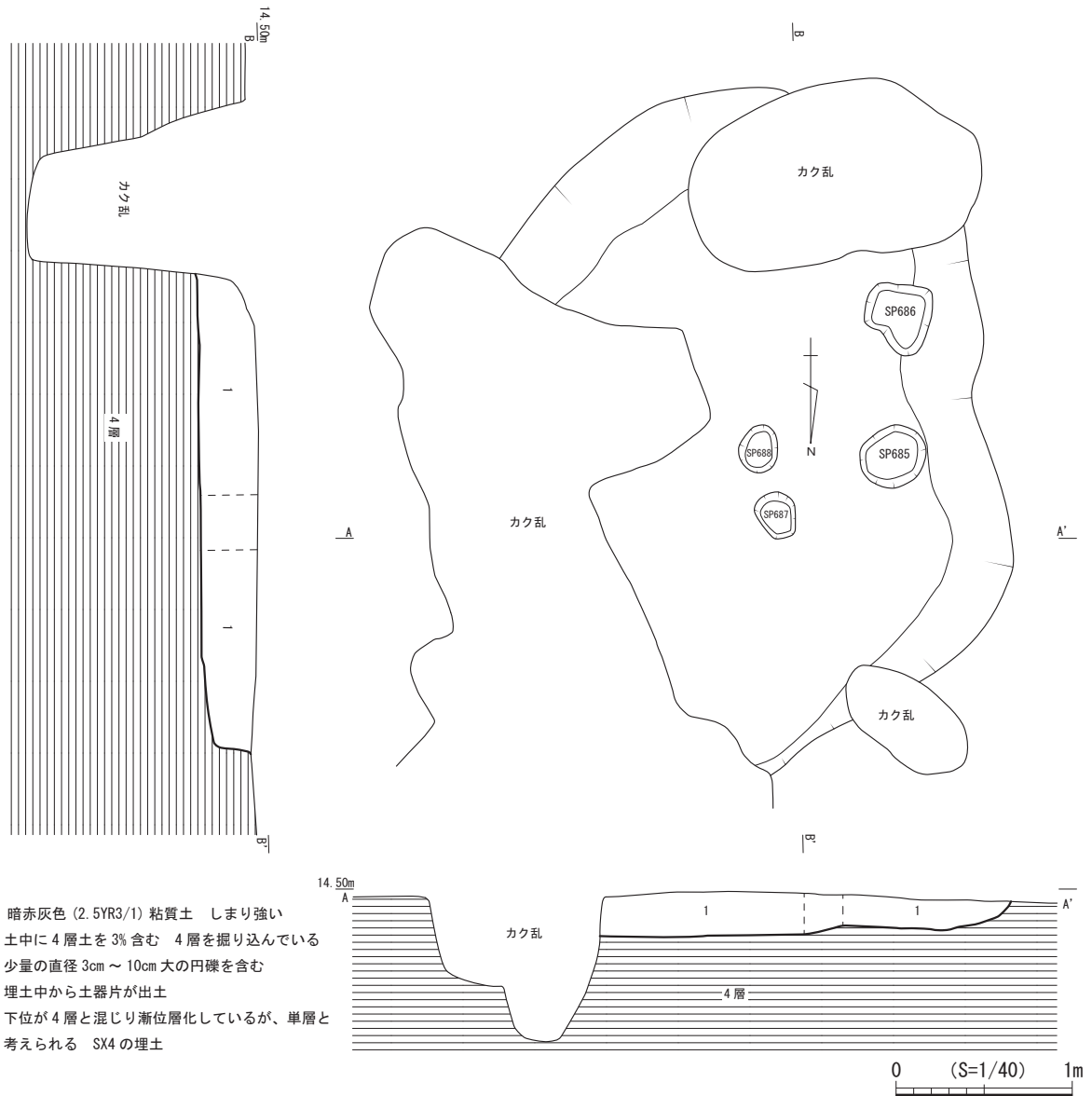


②遺物出土状況



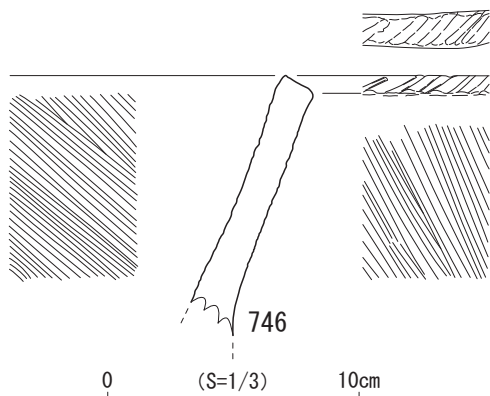
③完掘状況

図版83 SX4遺構状況(①~③)

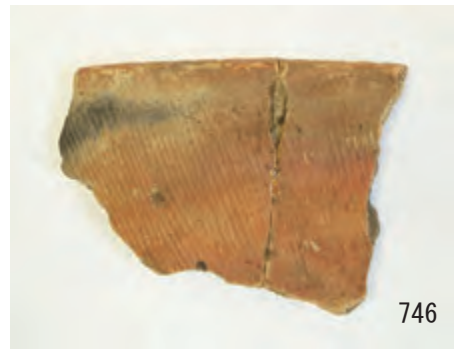


1. 暗赤灰色 (2.5YR3/1) 粘質土 しまり強い  
 土中に4層土を3%含む 4層を掘り込んでいる  
 少量の直径3cm~10cm大の円礫を含む  
 埋土中から土器片が出土  
 下位が4層と混じり漸位層化しているが、単層と  
 考えられる SX4の埋土

第138図 SX4平・断面図(S=1/40)



第139図 SX4出土遺物実測図(S=1/3)



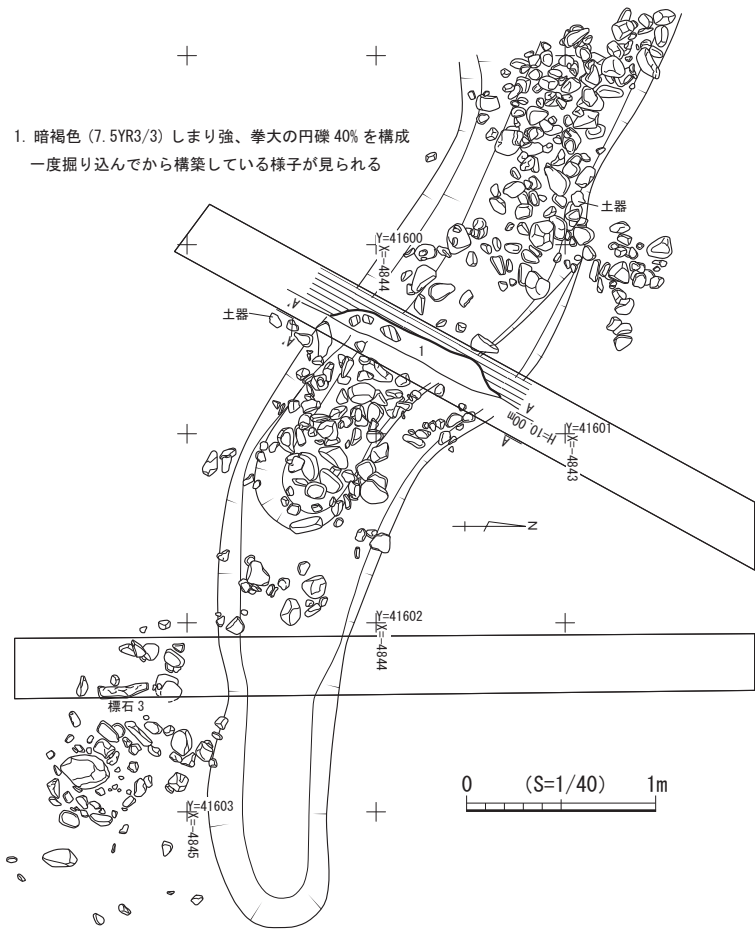
図版84 SX4出土遺物

第54表 SX4出土土器観察表

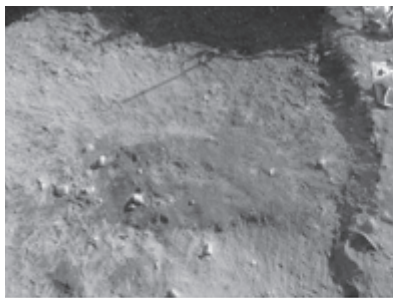
遺物番号	器種	部位	法量(cm)			調整		色調		焼成	胎土	備考
			口径	器高	底径	外面	内面	外面	内面			
746	大形甕	口縁部	(55.0)	—	—	(粗い)ハケメ	(粗い)ハケメ	2.5YR6/6 橙	7.5YR7/4 にぶい橙	良	石英、砂粒	口唇部に刻目を有す

②TAK201302①SX2(不明遺構) (第140・141図 図版85・86 表55)

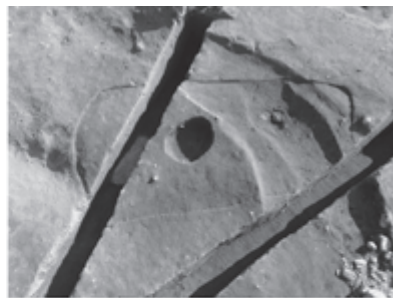
SX2は①区8458～8460グリッドに位置する。ST24を切って構築された溝状の集石遺構である。全長5.0m+で西側は調査区外に続く。幅は最大1.0m、深さは6cm程である。検出時に人頭大から拳大の集石が溝内外に集石している。遺構内から弥生土器壺胴部片が1点出土した。747は壺胴部の二重刻目三角凸帯片である。刻目は横楕円で間隔はやや不揃いである。器面調整は内外面ともやや粗いハケメ調整を施す。



第140図 SX2 (1302①) 平・断面図 (S=1/40)



①検出状況



②完掘状況 (SQ23切り合い北から)

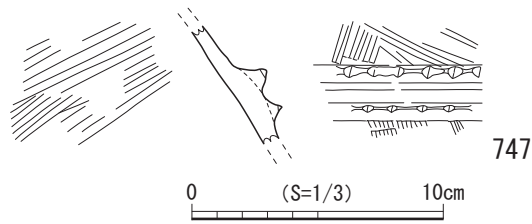


③作業風景

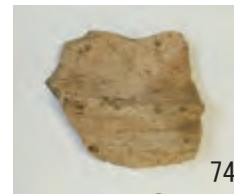


④完掘状況 (北から)

図版85 SX2 (1302①) 遺構状況 (①～④)



第141図 SX2 (1302①) 出土遺物実測図 (S=1/3)



図版86 SX2 (1302①) 出土遺物

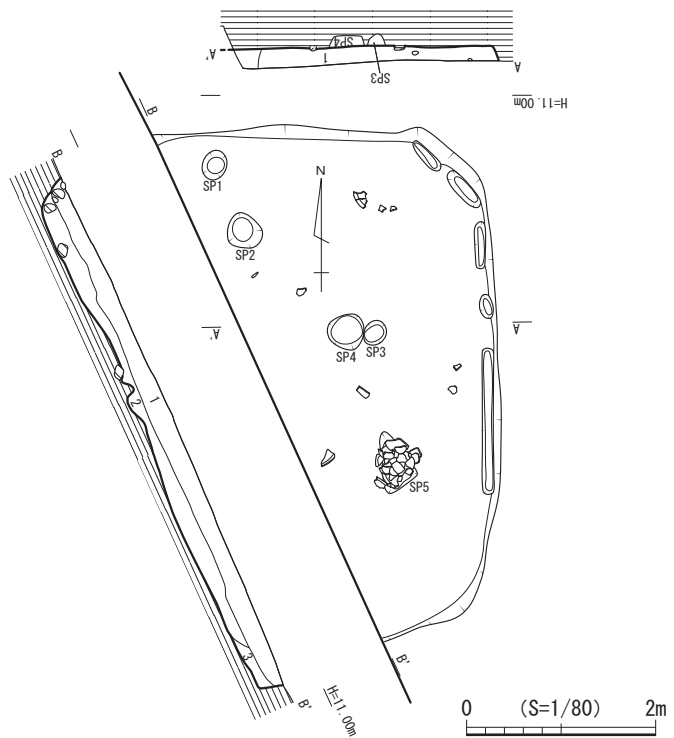
第55表 SX2 (1302①) 出土土器観察表

遺物番号	器種	部位	法量 (cm)			調整		色調		焼成	胎土	備考
			口径	器高	底径	外面	内面	外面	内面			
747	壺	胴部	—	—	—	やや粗いハケメ	やや粗いハケメ	7.5YR8/3 浅黄橙	10YR7/4 にがい黄橙	良	石英、雲母 角閃石、赤色粒子	二重の刻目三角凸帯を有す

⑤TAK201302④SX5 (竖穴建物) (第142・143図 図版87・88 表56)

SX5は④区9264グリッドに位置する。不明遺構としているが平面形及び完掘状況からみて竖穴建物跡である。規模は長軸5.4m+、短軸3.2m+、床面までの深さ0.20m、構築時の深さ0.24m~0.4mを測る。平面形は1/2以上が欠損しているが2辺のコーナーから考えて隅丸方形と思われる。竖穴建物内施設は北西側から東側にかけて幅12~16cm、深さ5~8cm程の周壁溝の一部が検出された。柱穴は5穴を確認した。柱穴の規模は直径0.24~0.40m、深さ0.20~0.24mで円形及び楕円形を呈する。遺物は床面及び覆土から出土した。器種は甕、台付甕、壺、丹塗りの土器片等が出土した。748~750は甕の口縁部~底部の破片である。748は甕で口縁部~胴部片である。口縁部は緩やかに外湾し端部は丸い。内外面はススが付着し磨耗した個所がある。内面はハケメ調整が僅かに残る。749は台付甕の口縁~底部にかけての破片である。脚部は欠損する。口縁部はく

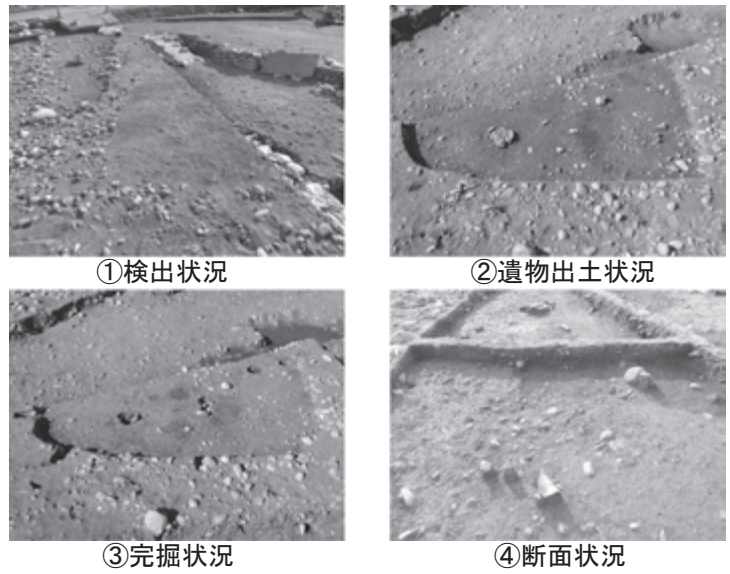
明瞭な四柱穴・炉は検出されなかったが、周溝も一部巡り住居である可能性が高い  
本跡西部は⑤区にて削平



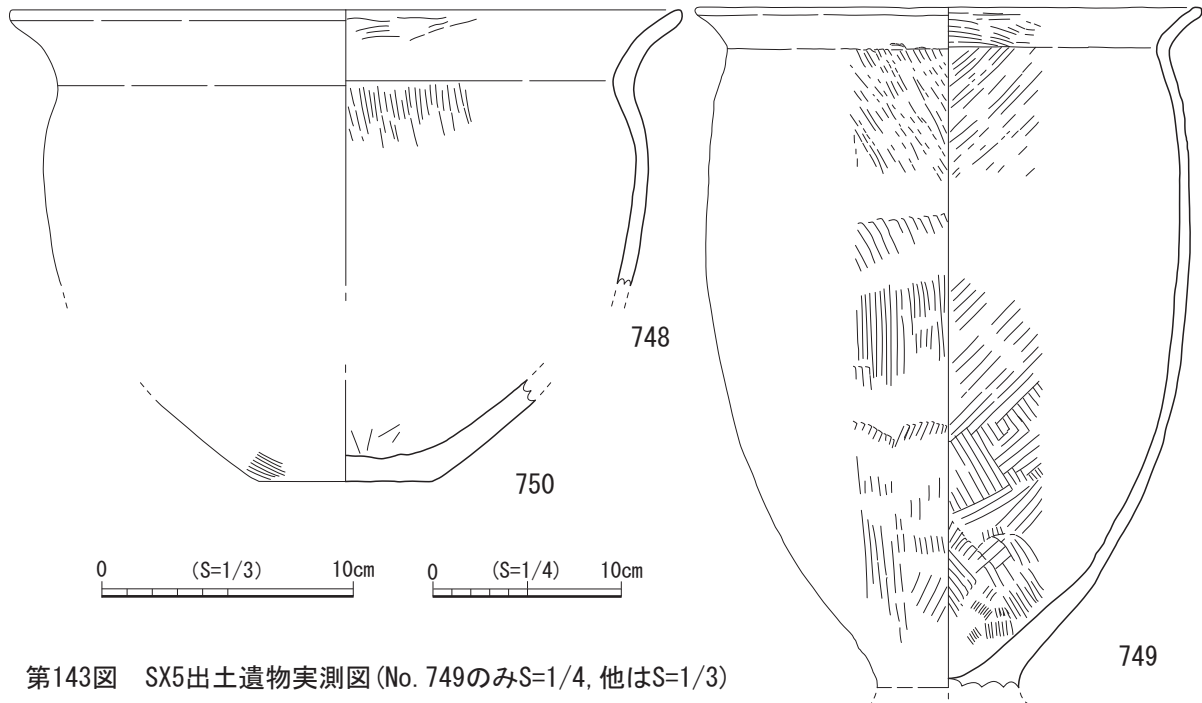
1. 暗褐色 (10YR3/3) 粘質土、しまり強い、粘性中 0.3~1cm大の褐色粒 (7.5YR4/6) を均一に25~30%、0.5~1cm大の炭化物を10%(下面に多い)、白色粒を20~25%、0.1~0.3cm大のマンガン粒を10%、0.1~1cm大の礫を5~7%、3~5cm大の礫を7%、10~15cm大の礫を2%含む 土器片有り
2. 黒褐色 (10YR3/2) 粘質土、しまり強い、粘質中 0.1~0.3cm大のマンガン粒を3%、0.3~3cm大の褐色粒 7.5YR4/6 を25~30%、白色粒を10%、0.1~1cm大の礫を10~15%、3~5cm大の礫を10%、10~15cm大の礫を7%含む ①よりも小礫の量増加
3. 黒褐色 (7.5YR3/2) 粘質土、しまり強い、粘性大 0.3~2cm大の褐色粒 (7.5YR4/6) を15~20%、0.1~0.3cm大のマンガン粒を7%、白色粒を15~20%、0.1~1cm大の礫を7~10%、3~5cm大の礫を5%、10~15cm大の礫を10%含む

第142図 SX5平・断面図 (S=1/80)

の字状でやや細長い胴部を呈する。内外面は縦、斜め方向にハケメ調整を行い、器壁は薄い。全体的に丁寧な作りである。750は壺の底部片である。底部は平底でややくぼむ。



①検出状況 ②遺物出土状況  
③完掘状況 ④断面状況  
図版87 SX5遺構状況(①~④)



第143図 SX5出土遺物実測図(No. 749のみS=1/4, 他はS=1/3)



図版88 SX5出土遺物

第56表 SX5出土土器観察表

遺物番号	器種	部位	法量(cm)			調整		色調		焼成	胎土	備考
			口径	器高	底径	外面	内面	外面	内面			
748	甕	口縁部~胴部	(26.6)	—	—	ナデ	ハケメ	10YR4/3 にぶい黄褐	10YR7/4 にぶい黄橙	良	長石、石英、雲母 角閃石、赤色粒子	内外面にスス付着
749	台付甕	口縁部~底部	26.8	—	—	縦、斜め方向 ハケメ	縦、斜め方向 ハケメ	2.5YR6/6 橙	2.5YR6/3 にぶい橙	良好	長石、石英、雲母 角閃石、赤色粒子	くの字口縁 脚部欠損
750	壺	底部	—	—	-6.8	ハケメ	ハケメ	10YR8/2 灰白	10YR7/2 にぶい黄橙	良	石英、角閃石 赤色粒子	平底でやや窪む

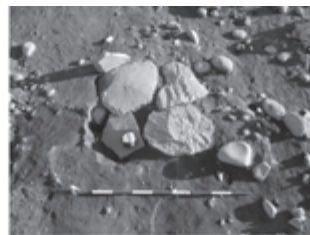
②TAK201302①ST1(箱式石棺墓) (第144図 図版89)

ST1は①区8458グリッドに位置する。主軸方位はE-45°-Sで南東から北西方向へ構築された箱式石棺墓である。検出段階で0.75m×0.65m、0.7m×0.6m程の台形、方形等の板石を5枚検出した。また南西側で板石一枚が立ったままの状態で検出した(標石)。上面の板石5枚を取り除くと土砂と小円礫が混ざった20~30cmの盛土が確認され、その盛土を取り除くと、人頭大、拳大の墓石(円礫)が両端にやや集中する状況で検出された。墓壙は2段堀になっており、上段の墓壙規模は中心長軸上端2.80m、下端2.26m、短軸上端1.40m、下端1.30m、高さ0.20~0.44mを測る。その中心に埋葬壙が構築され、規模は中心長軸上端2.34m、下端2.24m、短軸上端0.96m、下端0.86m、高さ0.26~0.42mを測る。この中に石棺が構築されている。石棺の蓋石は7枚で覆われており、北西から南東側に向かって鎧積みが行われていた。石棺の規模は中心長軸上端1.88m、下端1.84m、短軸上端0.48m、下端0.42m、高さ0.24mを測る。南西側小口で床面に枕石と考えられる0.32m×0.44mの台形状の平石1枚が設置されていることから南西側小口が頭位と考えられる。南西側小口幅0.54m、高さは0.50m、北西側小口幅0.34m、高さ0.40mを測る。両側石は3枚、両小口は板石1枚で構築されている。両側石の規模は長さ0.53m~0.82m、高さ0.22m~0.38mである。小口頭位(南西側)の板石は幅0.50m、高さ0.42mの一枚岩で、小口足位(北西側)の板石は幅0.50m、高さ0.30mの一枚岩である。両側石3枚の構築は、小口頭位側の側板と小口足位側の側板を最初に設置し、最後に中央の1枚を設置して両側面の板石が動かないように固定している。床面は概ね水平である。頭位、胸位、足位において朱及びベンガラを検出した。

出土遺物は5枚の板石を検出した時点で、1枚の板石に貼り付いた状態で、刻目三角凸帯を有する壺胴部片が出土した。この遺物は5m離れた祭祀遺構2から出土した土器片と接合した。この遺物は祭祀遺構2で掲載する。ST1の時期は後期後半頃の所産か。



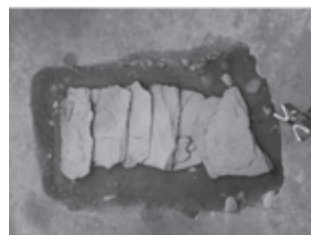
①マウンド検出状況



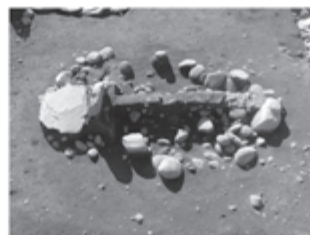
②上石検出状況



③礫投げ込み状況(北から)



④石棺検出状況



⑤蓋石外し後配石



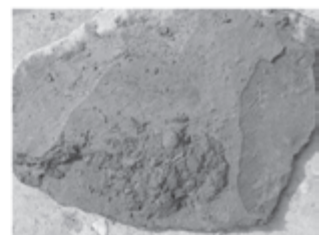
⑥石棺検出状況



⑦石棺完掘状況



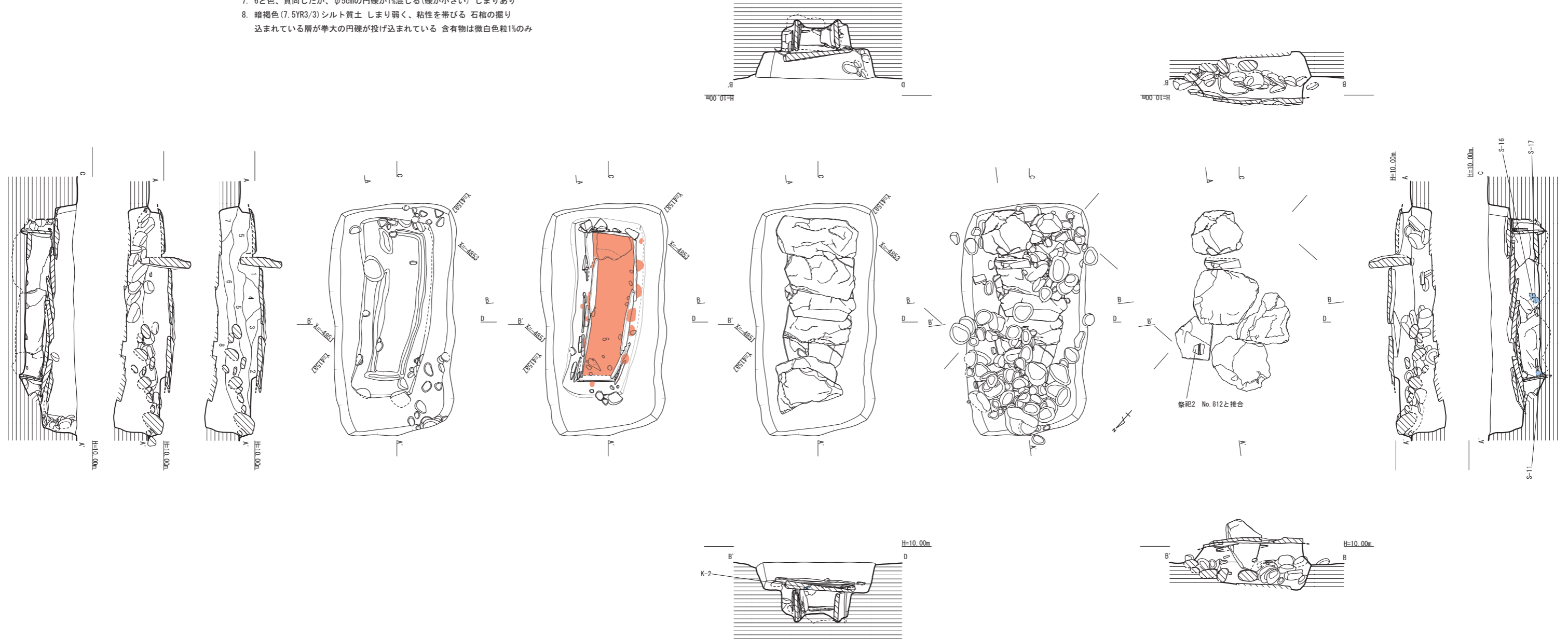
⑧掘方完掘状況



⑨朱検出状況

図版89 ST1(1302①)遺構状況(①~⑨)

1. 暗褐色(7.5YR3/4)土 盛り土 しまり弱い φ3cm拳大の礫3% 微白色粒1%  
ごくわずかにマンガン粒が混じる 標石を立てる際、掘り込んだか
2. 褐色(7.5YR4/4)土 φ3cm~20cm大の円礫30% しまり強い  
マンガン粒3% 微白色粒3%含有
3. 黒褐色(7.5YR3/2)土 しまり強く、全体的に粗い 微白色粒、微細マンガン粒  
25%ずつ含有 φ2cmの小礫も数えられるほど混じる
4. 2と同色、含有も同じだが、しまりが少し緩くなる
5. 4と同色で、礫の含有量が減る(1%) 土粒細かくしまりあり ややシルト質を感じる
6. 暗褐色(7.5YR3/3)土ややシルト質を帯びる土 しまり弱い 拳~人頭大の円礫を  
投げ込んでいる 微白色粒3% 炭化物、焼土粒出土
7. 6と色、質同じだが、φ5cmの円礫が1%混じる(礫が小さい) しまりあり
8. 暗褐色(7.5YR3/3)シルト質土 しまり弱く、粘性を帯びる 石棺の掘り  
込まれている層が拳大の円礫が投げ込まれている 含有物は微白色粒1%のみ



■ ... 朱・ベンガラ  
■ ... 分析石材 (S-11, S-16, S-17, K-2)

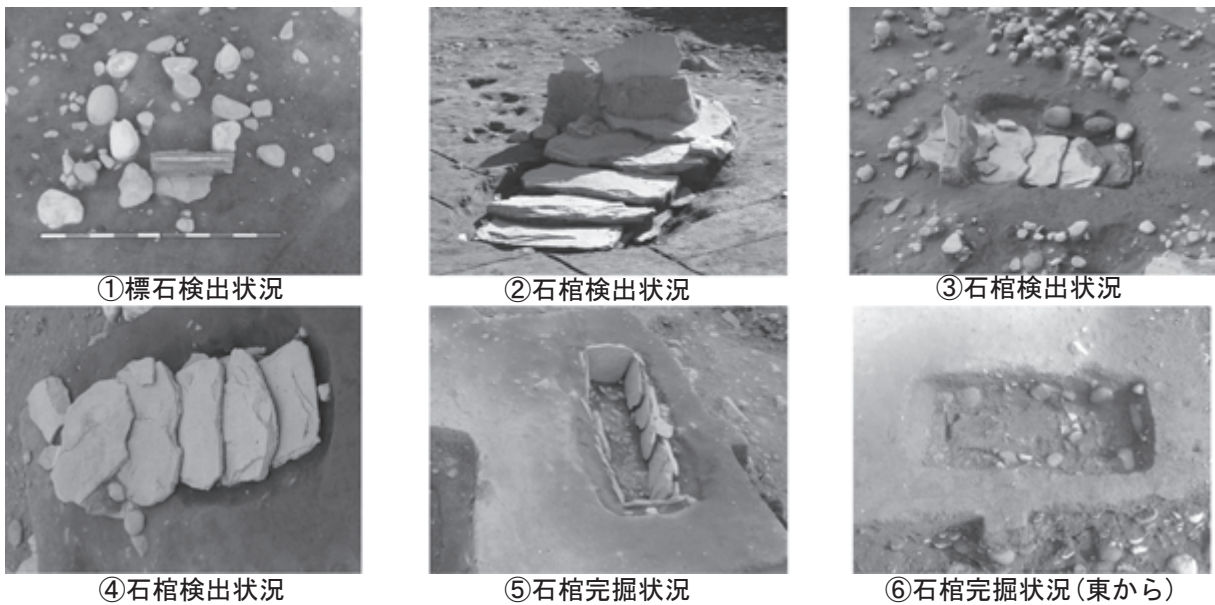
0 (S=1/50) 2m

第144図 ST1 (1302①) 平・断面図 (S=1/50)

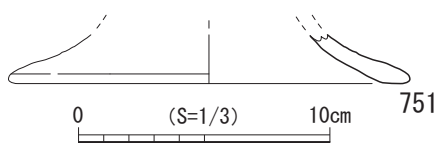


②TAK201302①ST3(箱式石棺墓) (第145・146図 図版90・91 表57)

ST3は①区8458グリッドに位置し、ST1から南西4m程に構築されている。主軸方位はE-44°-Sの箱式石棺墓である。蓋石は5枚で北西側から南東側に鎧積みを行っている。南東側の鎧積み蓋石の上に楕円形の板石を立て標石としている。墓壙規模は中心で長軸上端2.08m、短軸0.96m、高さ0.32mを測り、長方形の平面形を呈する。石棺の両側石は4枚の板石で、両小口は1枚の板石で構築されている。側石の1枚は結晶片岩である。石棺規模は中心で長軸1.64m、短軸0.34m、高さ0.32mを測る。両小口幅は南東側小口幅下端が0.38m、北西側小口幅下端が0.28mを測ることから南東側小口が頭位と考えられる。石棺の両側石は4枚の板石で構成されており、いずれも側石の端部を重ねる鎧重ねで足位から頭位に向かって構築している。床面は散発的に小礫等が敷き詰められていた。床面は頭位から足位に向かって5°の傾斜が認められる。出土遺物は壺胴部片が3点、器台の裾端部片1点が出土した。壺片3点の内2点は祭祀遺構2から出土した二重凸帯を有す壺と接合し、残り1点はST1から出土した刻目三角凸帯を有する壺胴部片と接合した。さらにこの破片は祭祀遺構2から出土した壺胴部片と接合した。この遺物は祭祀遺構2で掲載する。751は器台裾片で墓壙から西に0.8m程の所から出土した。復元底径16cmを測る。内外面はナデ調整を施し、胎土は多くの砂粒を含む。焼成はやや軟質である。これらの土器から考えてST3はST1と同時期の後期後半頃と思われる。



図版90 ST3遺構状況(①~⑥)



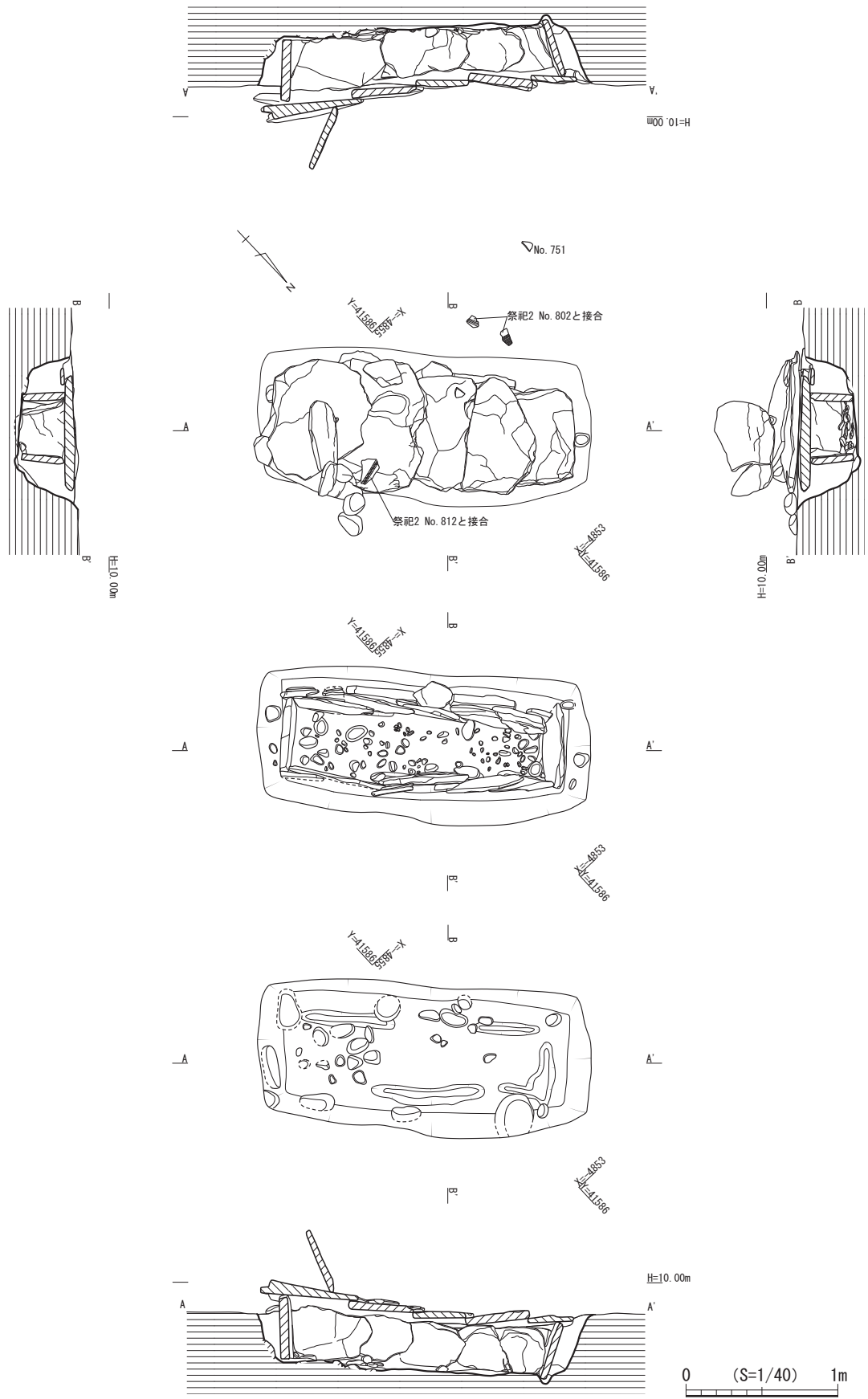
第145図 ST3出土遺物実測図(S=1/3)



図版91 ST3出土遺物

第57表 ST3出土土器観察表

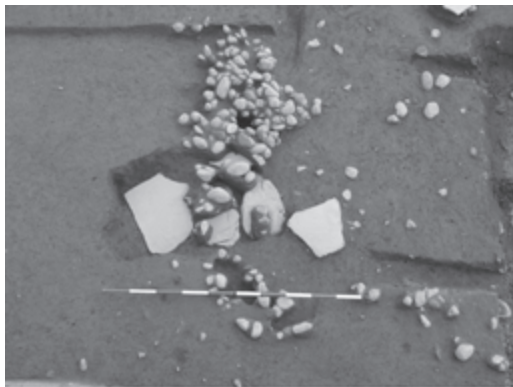
遺物番号	器種	部位	法量(cm)			調整		色調		焼成	胎土	備考
			口径	器高	底径	外面	内面	外面	内面			
751	器台	裾部	—	—	(16.0)	ナデ	ナデ	10YR7/3 にぶい黄橙	10YR7/3 にぶい黄橙	良 やや軟質	角閃石、長石 赤色粒子	多くの砂粒を含む



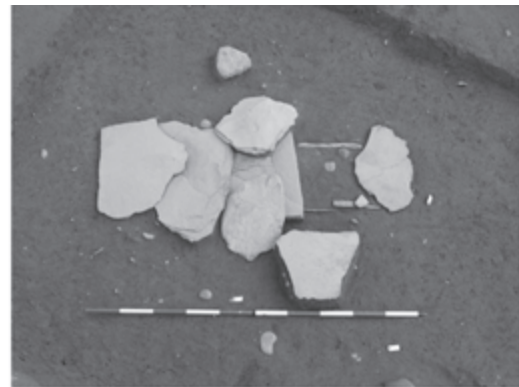
第146図 ST3平・断面図(S=1/40)

⑳TAK201302㉑ST5(箱式石棺墓) (第147図 図版92)

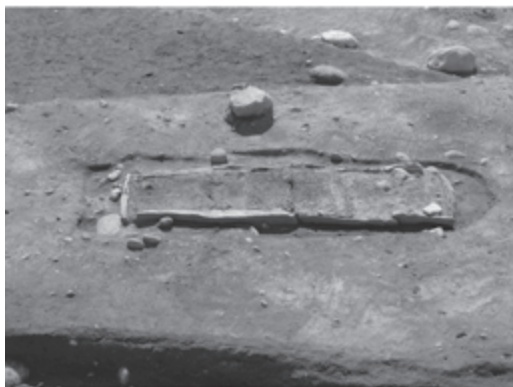
ST5は①区8458グリッドに位置する。主軸方位はN-64°-Eで北東から南西に構築された箱式石棺墓である。蓋石8枚で構成され、2枚が動いている。墓壙規模は中心で長軸2.10m、短軸0.8m、高さ0.38mを測り、平面形は長方形を呈する。この中に石棺が構築されている。両側石は3枚で、両小口は1枚の板石で構築されている。石棺内の規模は長軸上端1.58m、下端1.38m、短軸上端0.42m、下端0.36m、高さ0.42mを測る。両小口幅下端の長さは北東側0.34m、南西側0.28mであることから北東側小口が頭位と考えられる。頭位側小口の高さは0.34m、足位側小口の高さは0.28mである。両側石は足位から頭位に向かって鎧重ねで構築されている。床面は水平ではなく中央部でやや窪む。遺物は出土しなかった。花粉サンプルを3ヶ所から採取した(詳細は竹松遺跡IVで報告)。



①検出状況



②蓋石検出状況

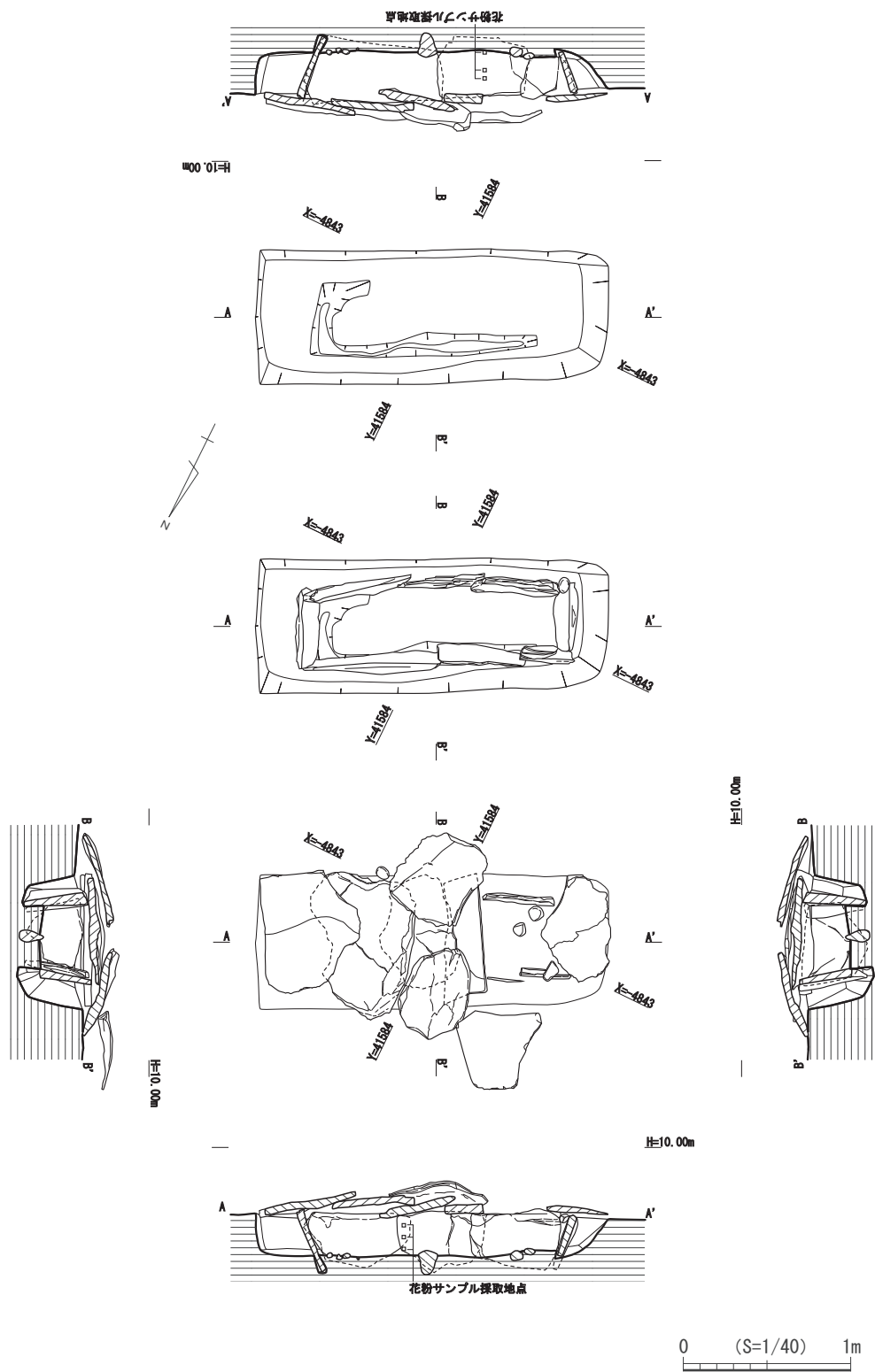


③石棺検出状況



④掘方完掘状況

図版92 ST5遺構状況(①~④)

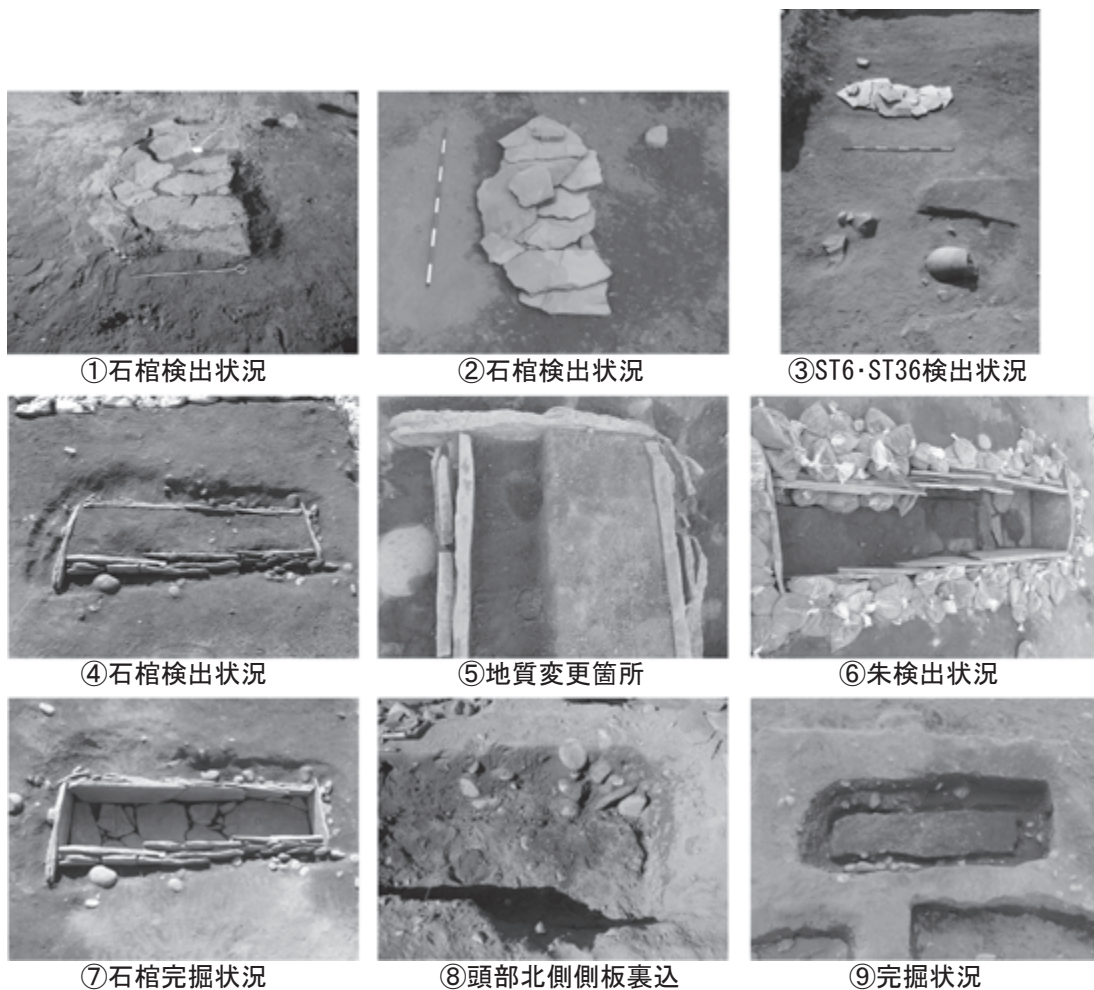


第147図 ST5平・断面図(S=1/40)

②TAK201302①ST6(箱式石棺墓) (第148・149図 図版93・94 表58)

ST6は①区8458グリッドに位置する。主軸方位はE-3°-Sではほぼ東西方向に構築された箱式石棺墓である。蓋石は8枚で構成され動かされた様子はない。石材は安山岩である。墓壙は縦長の長方形で東側が隅丸である。規模は中心で長軸上端2.36m、長軸下端2.10m、短軸上端0.98m、短軸下端0.88m、高さ0.34mを測る。この墓壙の中に石棺を構築している。石棺の規模は下端で長軸1.88m、短軸0.44m、高さ0.34mである。

側石は北側3枚、南側は4枚、両小口は1枚で構築されている。東側小口の幅は0.44m、高さ0.34m、西側小口の幅は0.36m、高さ0.26mを測る。こうしたことから東側小口が頭位と考えられる。側石の構築は南側の4枚は足位から頭位に向かって順に持ち送り式で構築され、北側の3枚は頭位から足位に向かって鎧重ねで構築されている。また裏込めの板石も多い。床面全体に平石が設置されている。頭位には0.22m×0.40mの台形状の平石が設置されている。この平石は敷き詰められている平石より一段高く設置されている。石枕であろう。この石枕の中央部で骨片が出土した。また足位、胸部付近で朱を検出した。床面は頭位位置から足位にかけて僅かに傾斜する。遺物は出土しなかった。遺物は東側蓋石に接する位置から甕胴部片1点が出土した。752は甕胴部片である。外面は縦方向にハケメ調整を行い、その後ナデ調整を行う。内面は粗いハケメ調整を縦、斜め、横方向に行っている。器壁は厚い。



①石棺検出状況

②石棺検出状況

③ST6・ST36検出状況

④石棺検出状況

⑤地質変更箇所

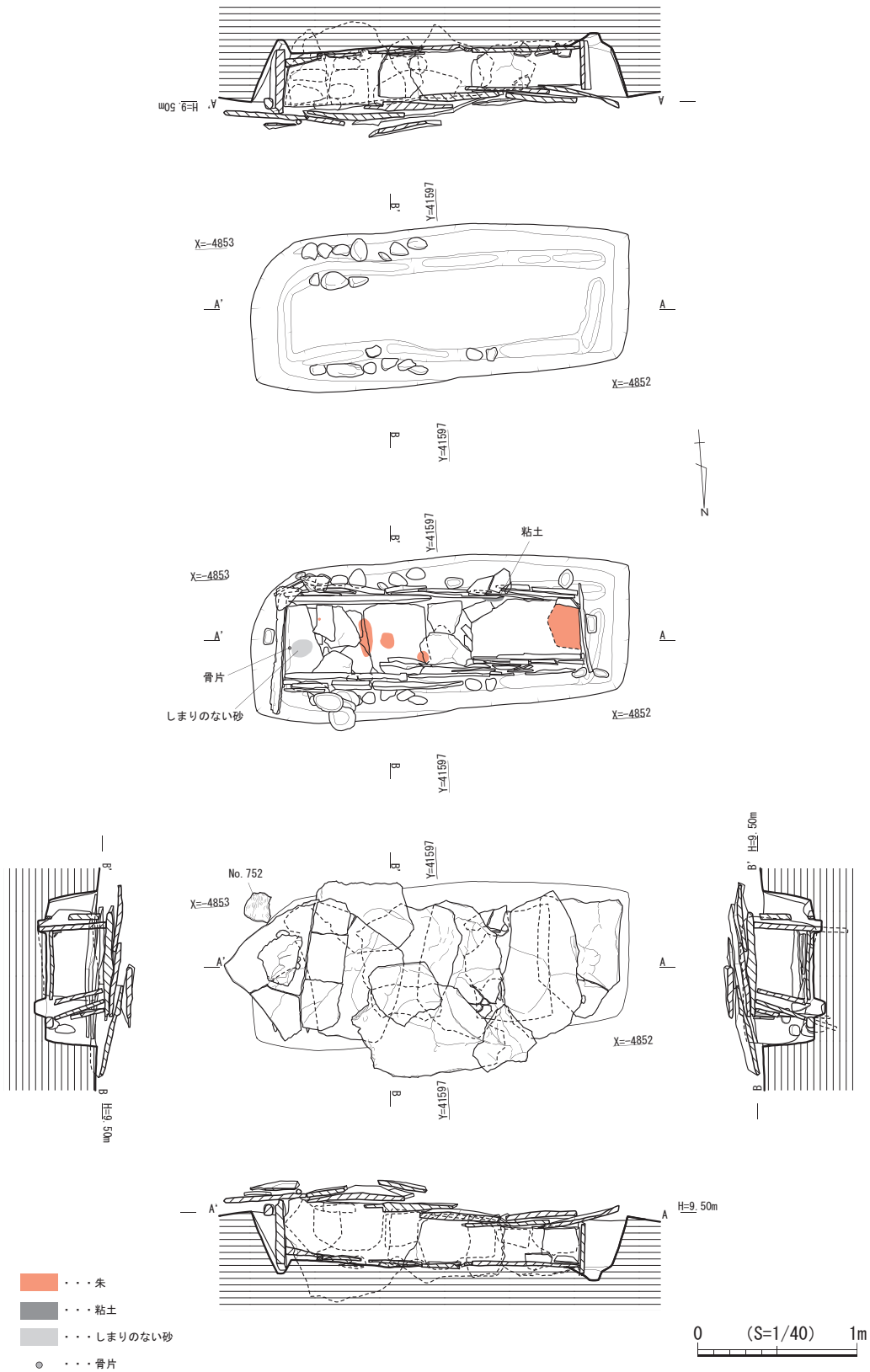
⑥朱検出状況

⑦石棺完掘状況

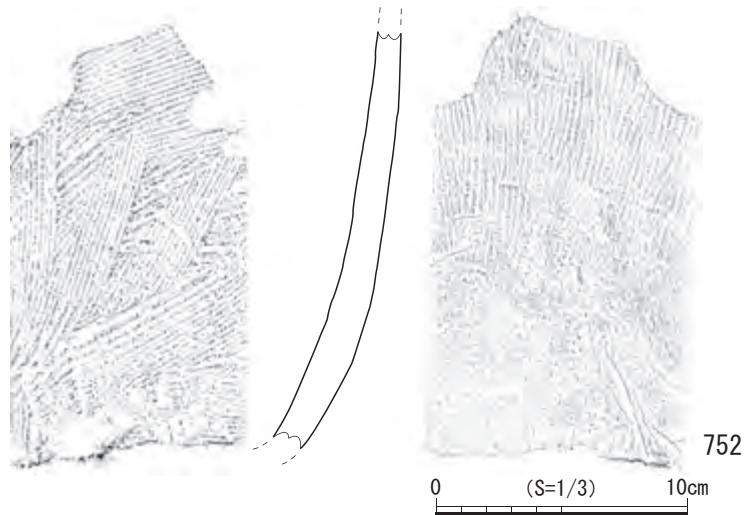
⑧頭部北側側板裏込

⑨完掘状況

図版93 ST6遺構状況(①~⑨)



第148図 ST6平・断面図 (S=1/40)



第149図 ST6出土遺物実測図 (S=1/3)



図版94 ST6出土遺物

第58表 ST6出土土器観察表

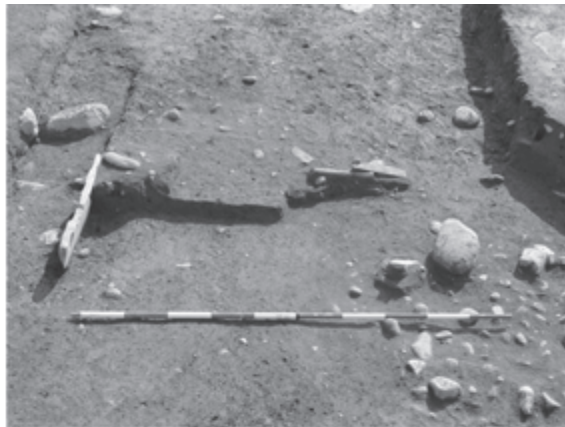
遺物番号	器種	部位	法量 (cm)			調整		色調		焼成	胎土	備考
			口径	器高	底径	外面 縦方向	内面 縦、斜め、横方向	外面	内面			
752	甕	胴部～ 底部付近	—	—	—	ハケメ ナデ	ハケメ	10YR6/4 にぶい黄橙	10YR2/1 黒	良 硬質	長石、赤色粒子 多くの砂粒を含む	器壁は厚い

③TAK201302①ST7(箱式石棺墓) (第150図 図版95)

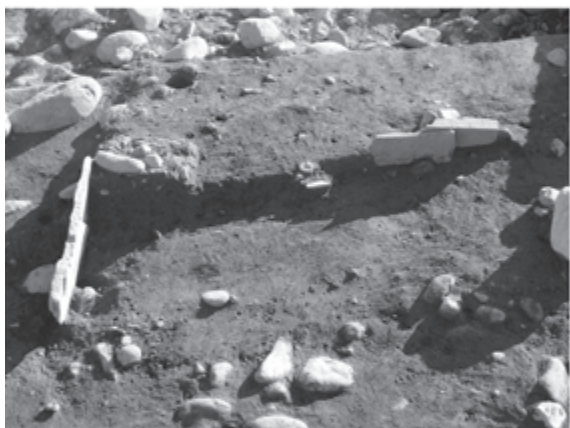
ST7は①区8458グリッドに位置する。ST5の北側に位置し半壊状態で検出した。蓋石、側石、小口板石等が攪乱により欠損しているため僅かな痕跡しか残っていない。墓壙、石棺規模は測定不能である。石棺構築時の床面長軸は1.48m、短軸は0.50mを測る。主軸方位はN-90°-Eで東西方向に構築された箱式石棺墓である。東側小口の板石1枚、床面の敷石4枚側石2枚が残存する。全体的に攪乱が著しい。遺物は出土しなかった。



①石棺側石検出状況



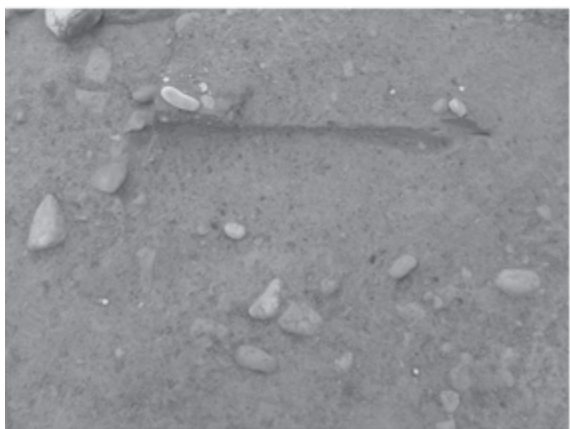
②石棺検出状況



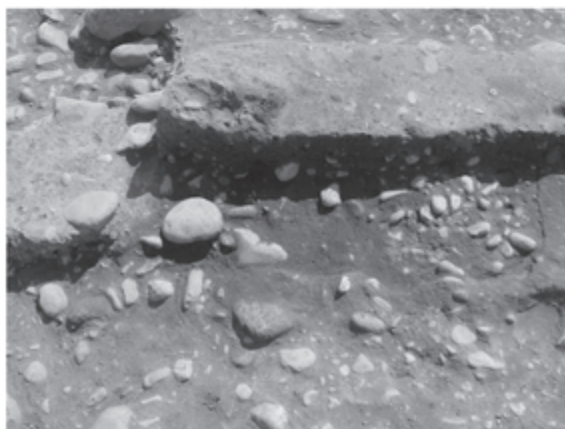
③石棺検出状況



④床板検出状況



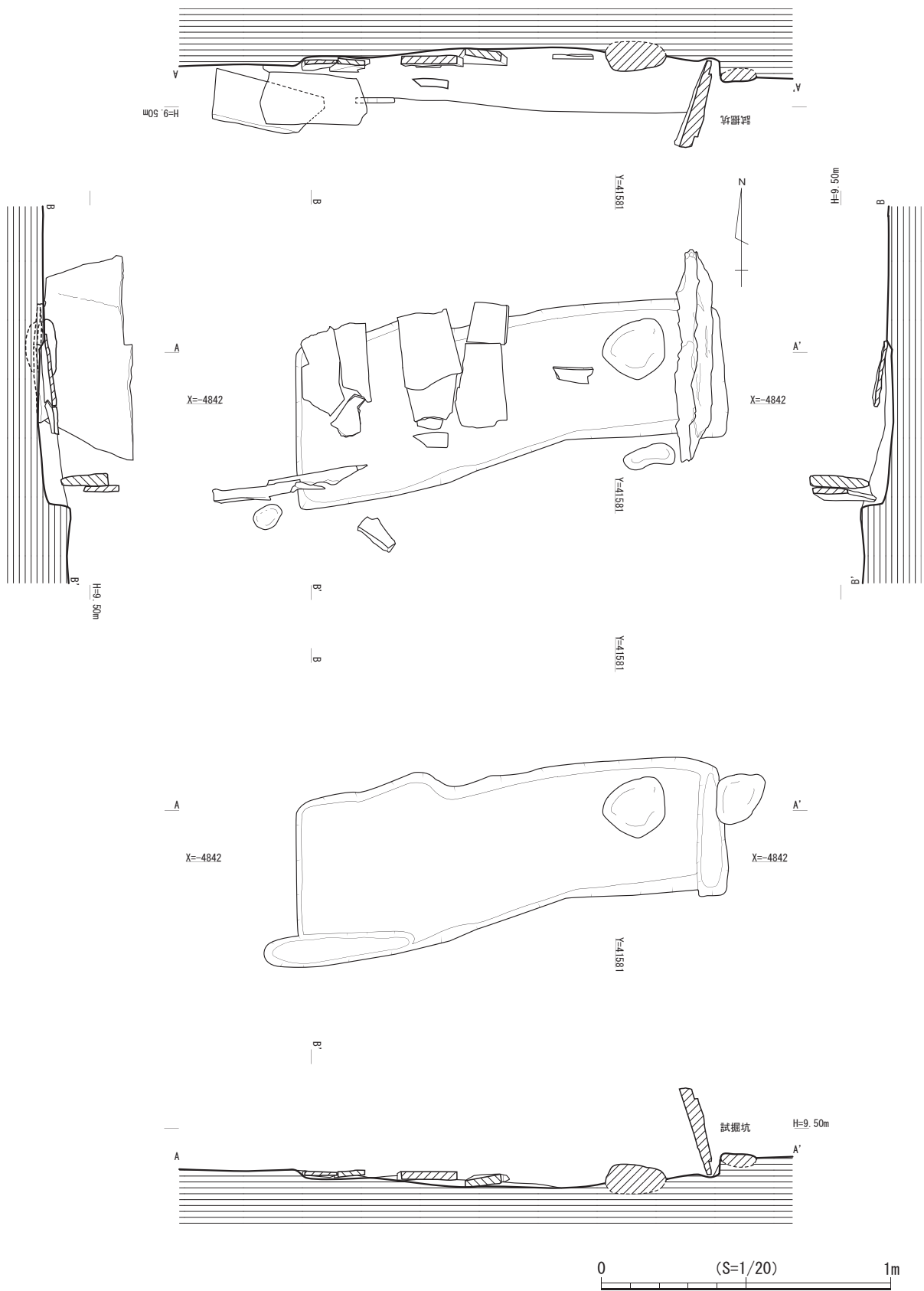
⑤完掘状況



⑥完掘状況

図版95 ST7遺構状況(①~⑥)





第150図 ST7平・断面図(S=1/20)

③TAK201302①ST8(箱式石棺墓) (第151・152図 図版96・97 表59・60)

ST8は①区8458、8460グリッドに位置する。主軸方位はE-4.5°-Sでほぼ東西に構築された箱式石棺墓である。5枚の蓋石で構成され、更にその上に3枚の蓋石を配置する。墓壙は中心で長軸上端2.0m、長軸下端1.68m、短軸上端0.68m、短軸下端0.4mを測る。平面形は縦長の緩やかな台形状を呈する。墓壙の東側小口の下端幅は0.46m、西側小口幅は0.32mである。小口幅から考えて東側が頭位であろう。

石棺は両側石4枚で、両小口は1枚の板石で構築されている。南側石4枚は足位から順次外側に鎧重ねで構築する。北側石は足位から内側に持ち送り、最後の東小口部の側石が外側に配置されている。変則的な構成である。石棺規模は内面下端長軸で1.56m、短軸で0.36mを測る。床面は全体に板石を配置し、丁寧な仕上げを行っている。頭位で高さ0.26m、足位で0.18mを測る。床面はほぼ水平である。側石、小口との接合部、床石接合部の一部にベンガラが塗られている。出土遺物は甕胴部片、ガラス小玉が中央部頭位から3個、また覆土から2個が出土した。753は甕胴部片で外面縦、斜め方向にハケメ調整を施す。内面は僅かに削り痕が残る。754は壺の胴部片である。二重の三角凸帯を有す。内外面は縦、横方向にハケメ調整を施す。755～759はいずれもガラス小玉で淡青色を呈するカリガラスである。直径2.5～4.0mmを測る。



①検出状況



②石棺検出状況



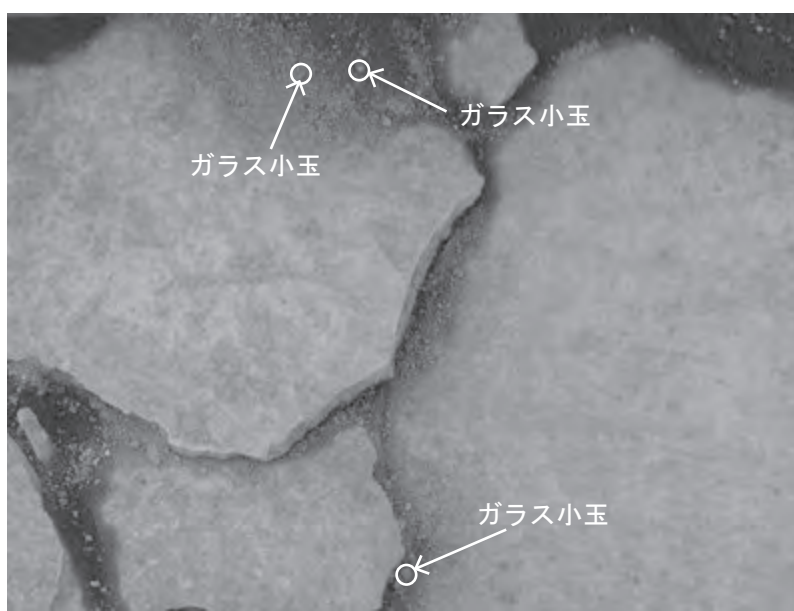
③小玉・貝殻検出状況



④朱

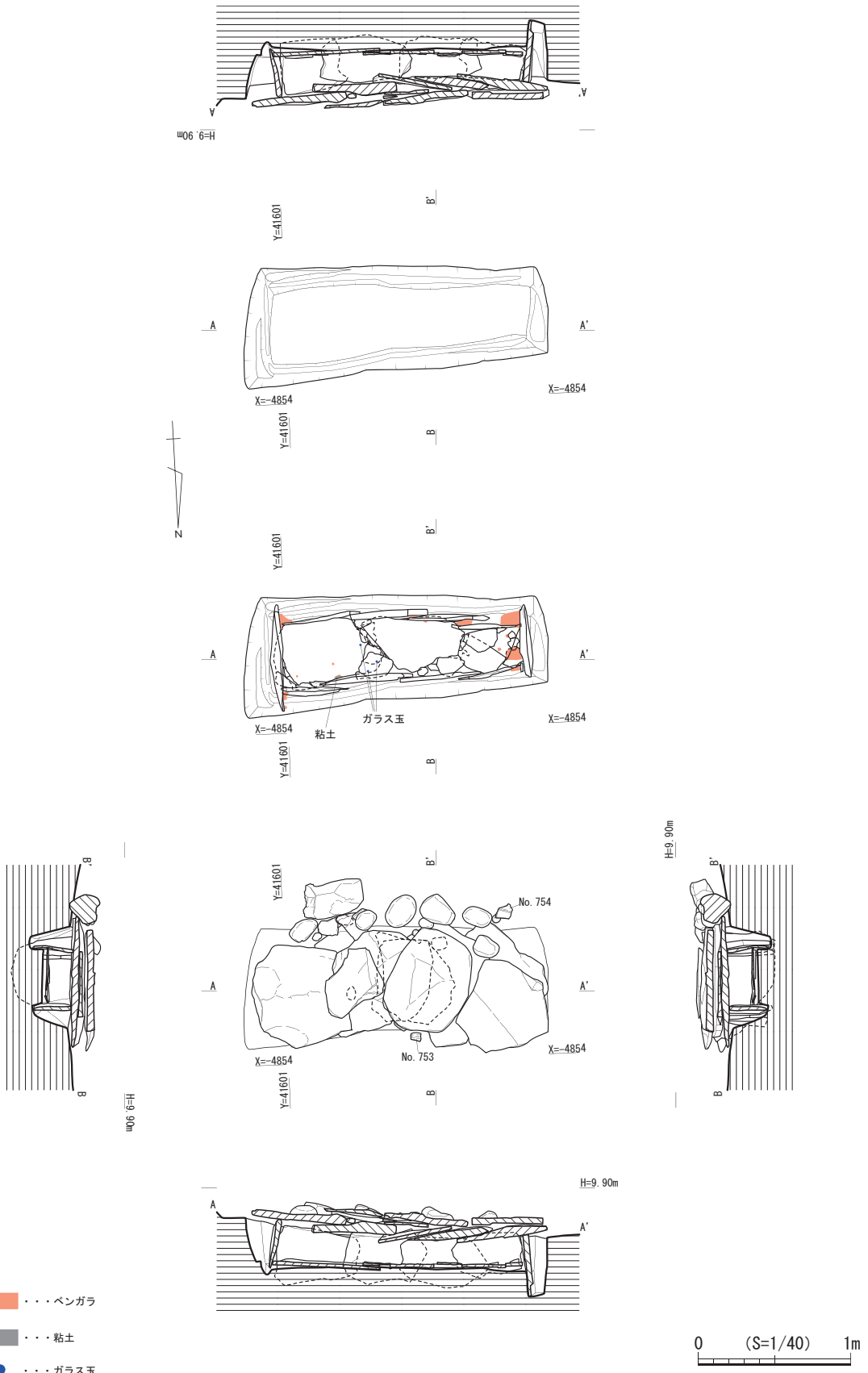


⑤完掘状況

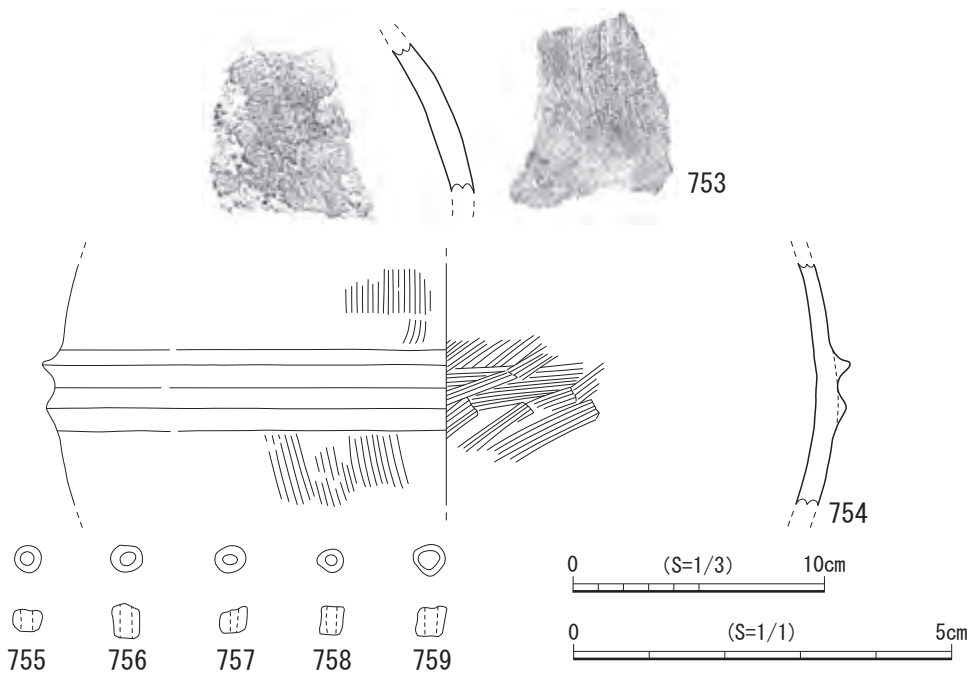


⑥遺物検出状況

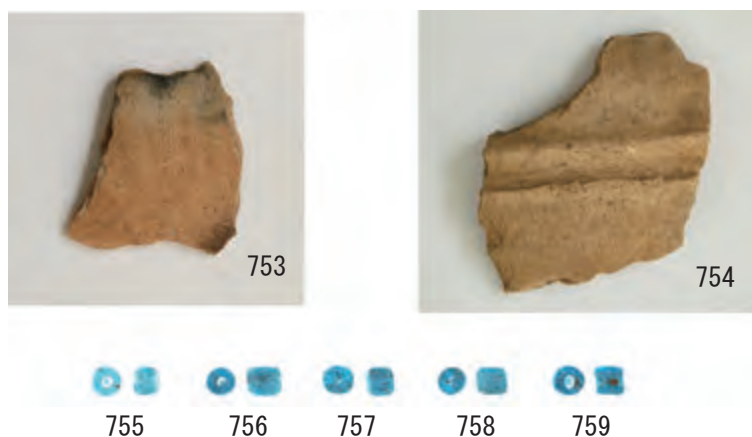
図版96 ST8遺構状況(①～⑥)



第151図 ST8平・断面図(S=1/40)



第152図 ST8出土遺物実測図 (No. 753・754はS=1/3, No. 755~759はS=1/1)



図版97 ST8出土遺物

第59表 ST8出土土器観察表

遺物番号	器種	部位	法量 (cm)			調整		色調		焼成	胎土	備考
			口径	器高	底径	外面	内面	外面	内面			
753	甕	胴部	—	—	—	縦、斜め方向 ハケメ	ケズリ痕	7.5YR6/6 橙	5YR6/6 橙	良 やや軟質	石英、長石	多くの砂粒を含む
754	壺	胴部	—	—	—	ハケメ	ハケメ	10YR7/4 にぶい黄橙	10YR7/6 明黄褐	良	石英、角閃石	二重の三角凸帯を有す

第60表 ST8出土ガラス小玉観察表

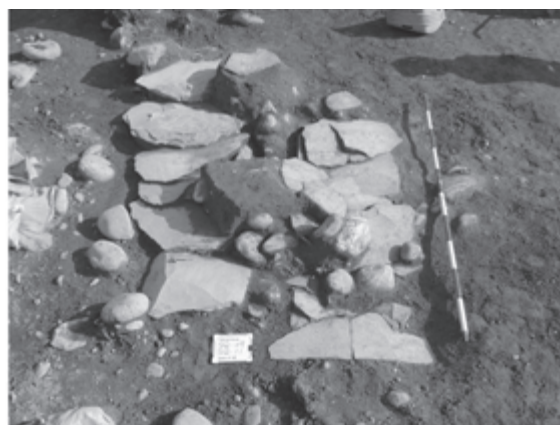
遺物番号	材質	色調	最大長 (mm)	最大幅 (mm)	最大厚 (mm)	重量 (g)	備考
755	カリガラス	淡青色	2.80	3.90		0.05	
756	カリガラス	淡青色	4.30	4.00		0.07	
757	カリガラス	淡青色	3.40	3.90		0.05	
758	カリガラス	淡青色	3.80	3.50		0.06	
759	カリガラス	淡青色	3.60	4.00		0.04	

③TAK201302①ST9(箱式石棺墓) (第153図 図版98)

ST9は①区の8458グリッドに位置する。主軸方位はE-27°-Sで東南から北西に構築された箱式石棺墓である。墓壙は縦長のプランで規模は長軸2.40m、幅0.80m、高さ0.20mを測る。蓋石は6枚の平石で北西小口から順に設置し東南小口で完了している。また蓋石の周辺には人頭大から拳大の円礫が散発的に配置していた。両小口の板石は各1枚で、両側石は4枚で構築されている。石棺内の規模は長軸1.98m、幅0.48m、中心の高さ0.21m、東南小口幅0.60m、北西小口幅0.45mを測る。小口の規模から東南側が頭位と考えられる。床面には敷石がなく地山成形である。頭位に赤色を確認したが、分析結果では朱・ベンガラの確認は出来なかった。遺物は出土しなかった。



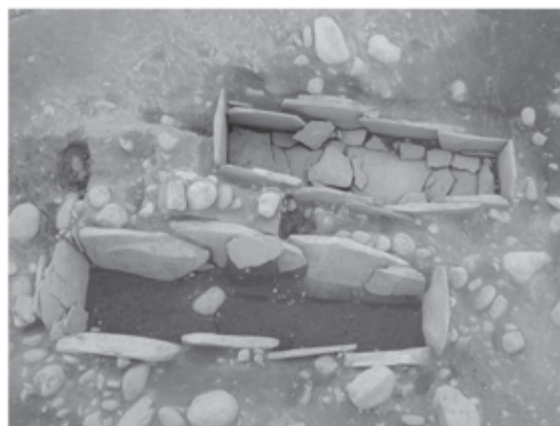
①発見状況



②ST9(左)・ST11(右)検出状況



③ST9(下)・ST11(上)蓋石除去状況

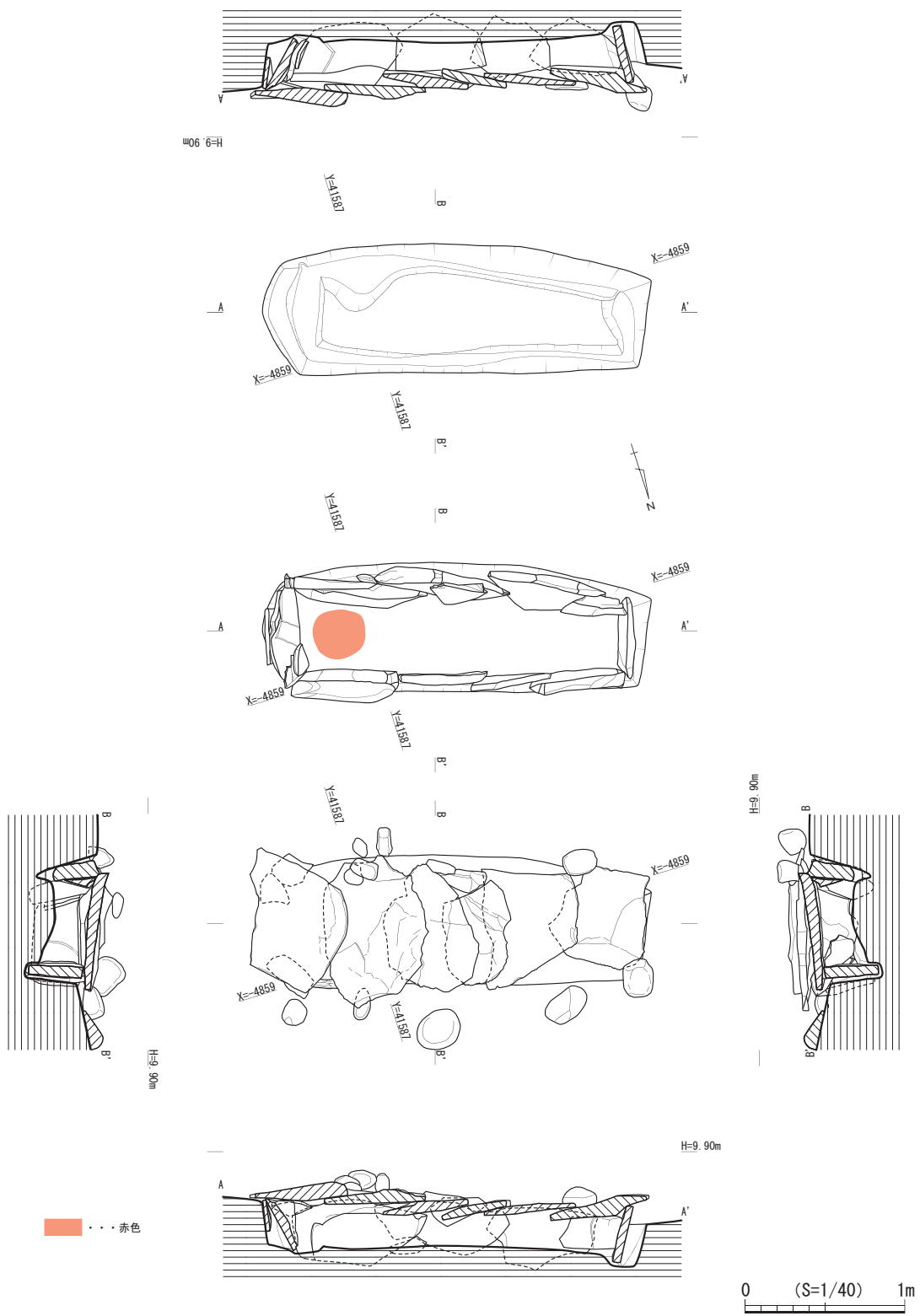


④ST9(下)・ST11(上)石棺完掘状況



⑤ST9(下)・ST11(上)石棺完掘状況

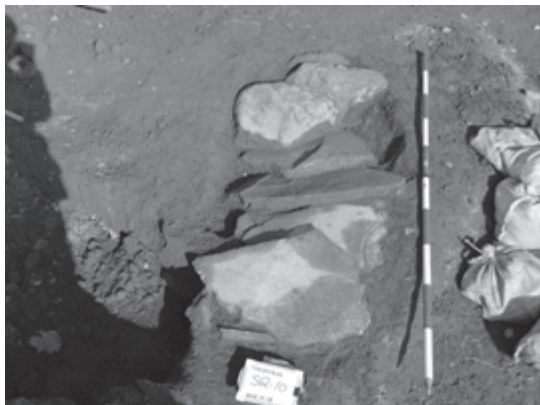
図版98 ST9遺構状況(①~⑤)



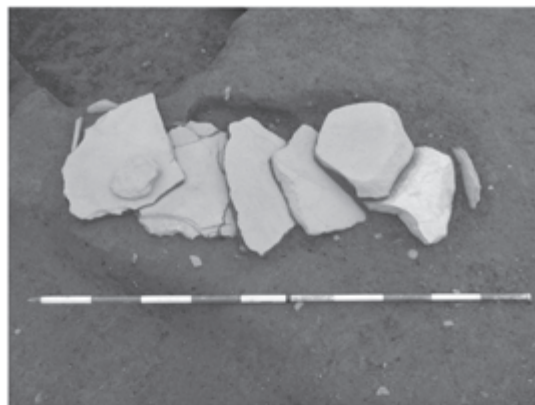
第153图 ST9平·断面图(S=1/40)

③TAK201302①ST10(箱式石棺墓) (第154図 図版99)

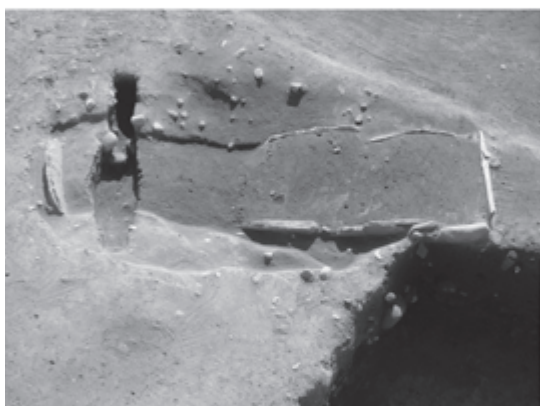
ST10は①区8658グリッドに位置する。主軸方位はS-58°-Wで南西から北東方向に構築された箱式石棺墓である。蓋石は6枚で構成されている。墓壙は中心で長軸上端1.84m、下端1.66m、短軸上端0.46m、下端0.36m、高さ0.24mを測る。平面は縦長形のプランを呈する。両小口は1枚の板石で南西側小口下端幅0.4m、北東側小口下端0.26mを測る。南西側小口幅が広いことから頭位と考えられる。石棺の両側石は頭位側の2枚が残存するが足位側の側石は欠損する。両小口は1枚の板石が残存する。頭位に赤色を確認したが、分析結果では朱・ベンガラの確認は出来なかった。遺物は出土しなかった。



①検出状況



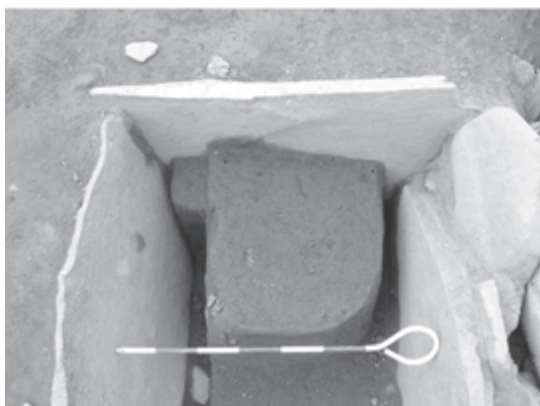
②石棺蓋石検出状況



③石棺検出状況(北から)



④赤色顔料検出

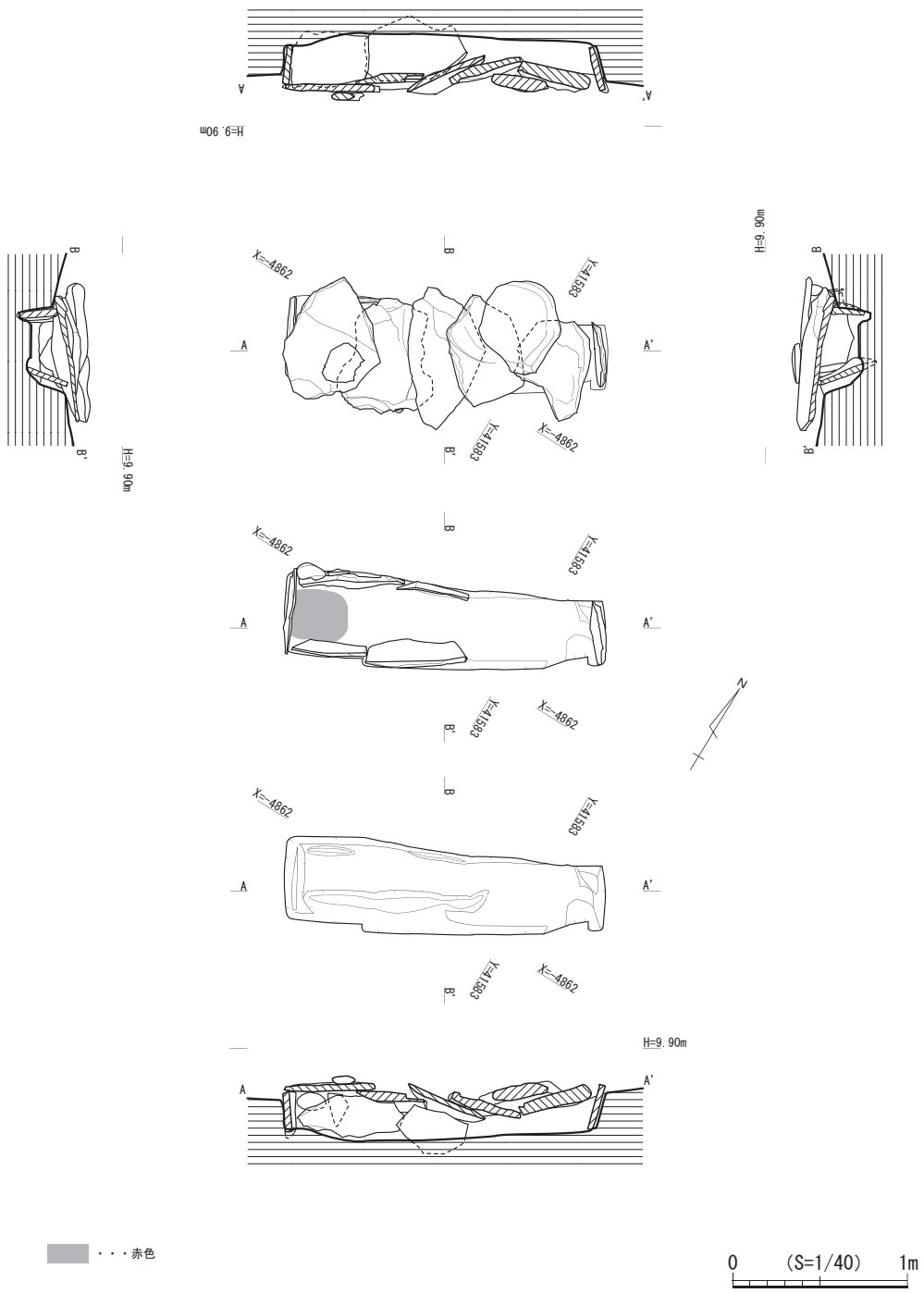


⑤赤色顔料検出(東から)



⑥完掘状況

図版99 ST10遺構状況(①~⑥)



第154図 ST10平・断面図(S=1/40)

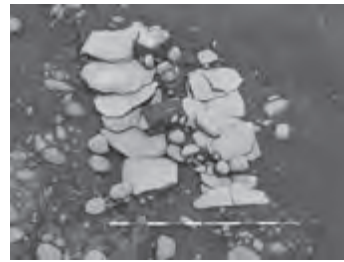


③4TAK201302①ST11(箱式石棺墓) (第155図 図版100)

ST11は①区の8458、8658グリッドに位置する。ST9と切り合い関係を示し、並列に構築された箱式石棺墓である。ST11がST9を切っており新しく構築されている。主軸方位はE-23°-Sで東南から北西方向に構築された箱式石棺墓である。墓壙は縦長に構築され規模は長軸2.06m、中心幅0.88m、高さ0.32mを測る。蓋石は5枚で更に円礫及び小板石等で隙間を覆っている。両小口は板石1枚、両側石は4枚、床面は全体に板状の敷石で構築されている。棺内の規模は長軸下端1.64m、中心幅0.56m、中心高さ0.24mである。南東小口幅下端0.42m、北西小口幅下端0.36mを測る。南東小口幅が広いこと及び小口前の敷石に朱が施されていることから頭位と考えられる。朱は足位まで施されていた。全体的に蓋石が棺内に落ち込んでおり構築時の現況は留めていない。遺物は出土しなかった。



①ST9(左)・ST11(右) 検出状況



②ST9(左)・ST11(右) 検出状況



③ST9(下)・ST11(上)  
蓋石除去状況



④ST11配石(北から)



⑤ST9(下)・ST11(上)  
石棺完掘状況

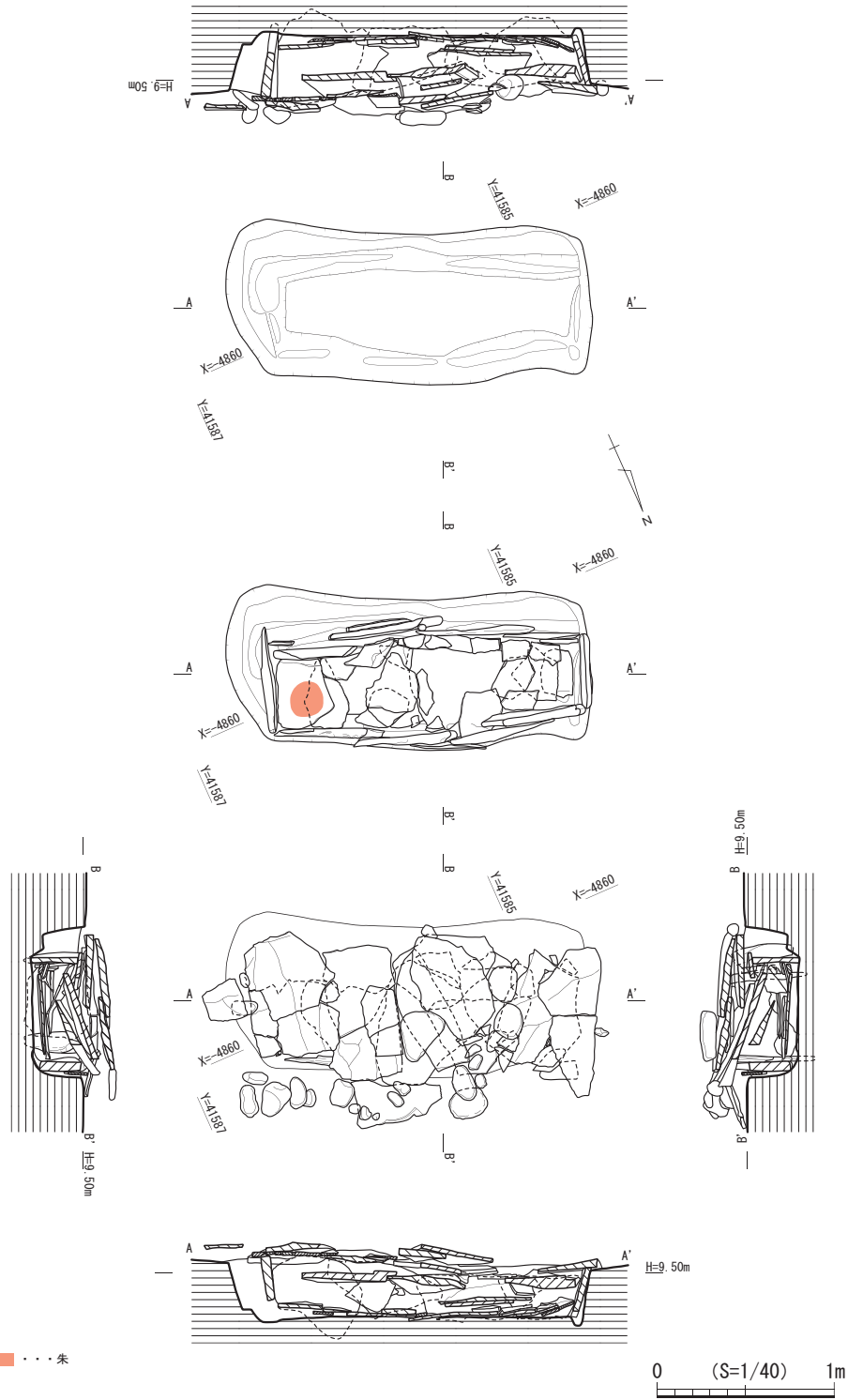


⑥ST11床面 朱検出(西から)



⑦ST11堀方完掘状況

図版100 ST11遺構状況(①~⑦)

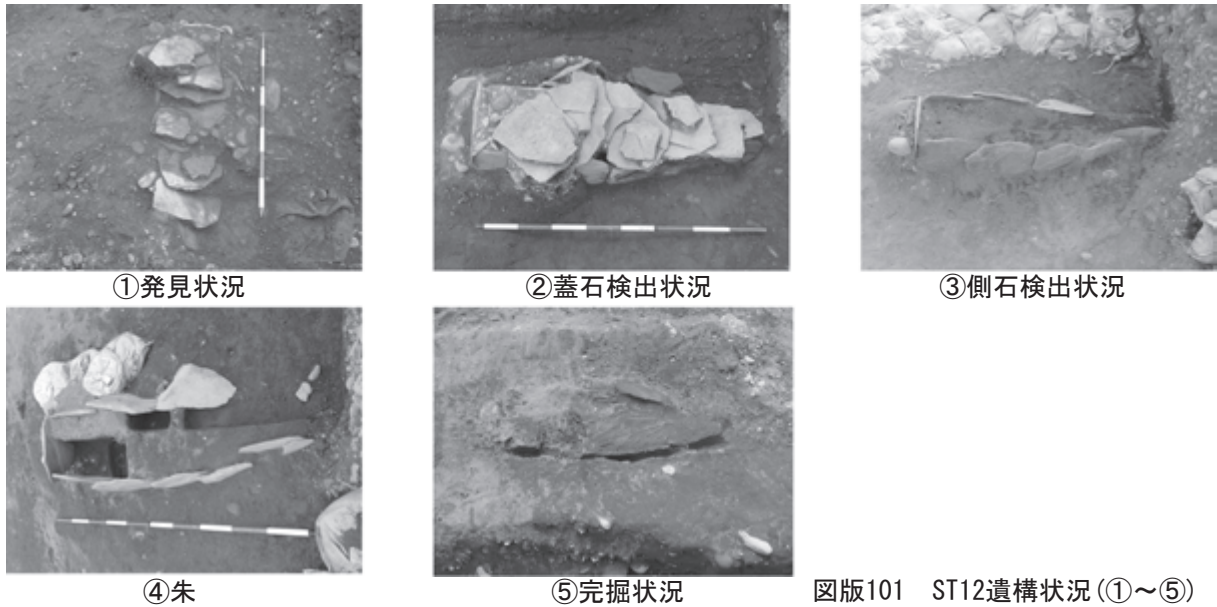


③TAK201302①ST12(箱式石棺墓) (第156・157図 図版101・102 表61)

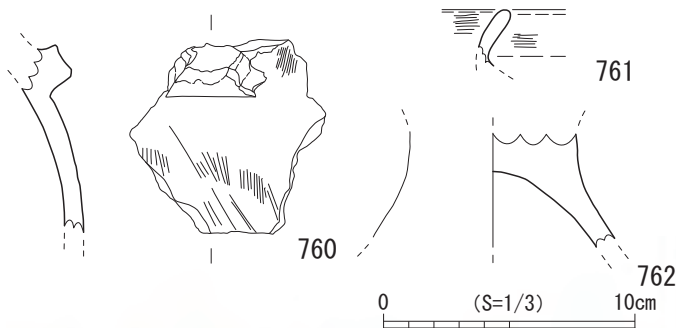
ST12は①区8460グリッドに位置する。主軸方位をN-83.5°-Eにとり東西方向に構築された箱式石棺墓である。東側蓋石、西側小口板石、側石等が原位置から動いており、また西側床面が削られていることから河川の氾濫が影響した可能性が考えられる。墓壙上端の規模は長軸1.96m、中心幅0.72m、高さは0.36m+である。中心から西側は破壊されている。石棺内下端長軸1.84m、幅0.42m、高さ0.30m、

残存する東側小口下端幅0.38mを測る。東側小口床面に14cm×12cmの朱が確認できたことから頭位と考えられる。朱は足位まで僅かであるが検出できた。

遺物は壺胴部小片、短頸壺口縁部小片、丹塗りの壺胴部小片等10点が出土した。この内3点を実測した。760は壺の胴部片である。台形状の凸帯を有する。全体的に剥離が目立つ。外面に僅かなハケメが残る。761は甕の口縁端部である。端部は丸く仕上げられている。762は高杯脚部片である。脚部はやや開脚気味である。



図版101 ST12遺構状況(①~⑤)



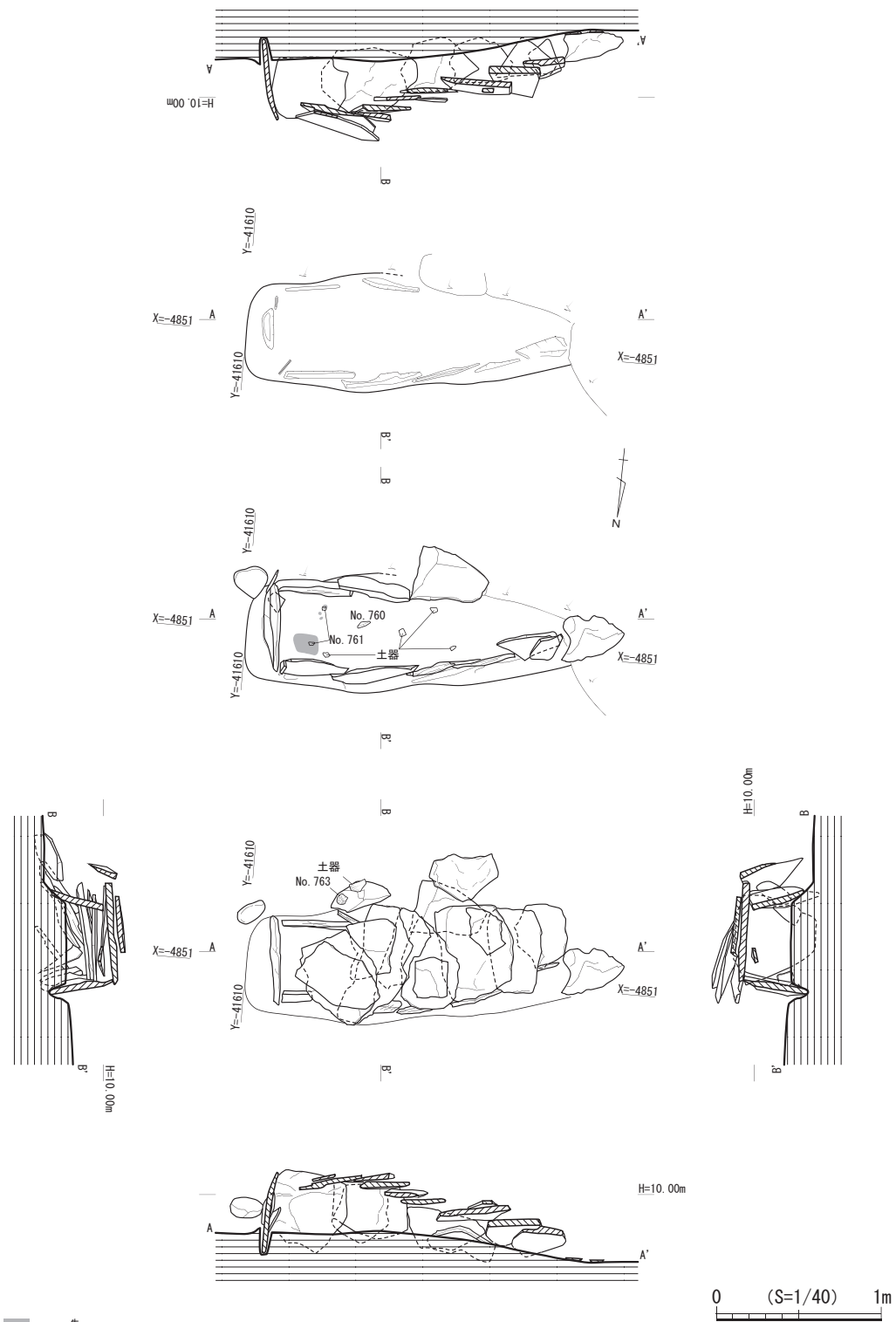
第156図 ST12出土遺物実測図(S=1/3)



図版102 ST12出土遺物

第61表 ST12出土土器観察表

遺物番号	器種	部位	法量(cm)			調整		色調		焼成	胎土	備考
			口径	器高	底径	外面	内面	外面	内面			
760	壺	胴部	—	—	—	ハケメ	ナデ	10YR6/4 にぶい黄橙	5YR6/6 橙	良	長石、雲母	台形状の凸帯を有す
761	甕	口縁端部	—	—	—	ハケメ	ハケメ	10YR6/6 明黄褐	10YR7/4 にぶい黄橙	良	石英、角閃石	端部は丸い仕上げ
762	高杯	脚部	—	—	—	ナデ	ナデ	7.5YR7/6 橙	7.5YR3/1 黒褐	良 やや軟質	石英、角閃石	端部はやや開脚気味

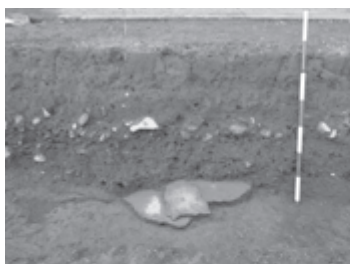


第157図 ST12平・断面図(S=1/40)

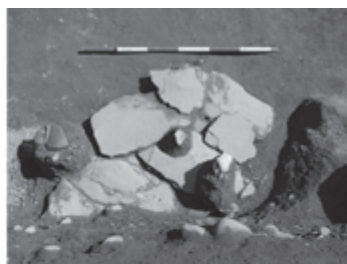
③⑥TAK201302①ST13(箱式石棺墓) (第158・159図 図版103・104 表62)

ST13は①区8460グリッドに位置する。2012年度に調査区外の農道の下から石棺の一部が露出した状況で検出した。主軸方位をN-60°-Wにとり北西から南東に構築された箱式石棺墓である。墓壙は二段掘りで、長軸上端1.5m+、短軸上端1.3m+、高さ0.25mで推定楕円形を呈する。墓壙中央に埋葬壙

が構築され、長軸1.5m、短軸0.63m、高さ0.25mではほぼ長方形のプランで構築されている。石棺の構造は蓋石が4枚で、鎧積み出来なかった部分2ヶ所は上から1枚載せ鎧積みとしている。両小口の板石は1枚、両側石は3枚と2枚で構成されている。石棺内の床面は全体に板石状の敷石が敷きつめられている。石棺内の規模は北西小口下端幅0.33m、南東小口幅0.23m、中心長軸下端1.2m、中心短軸下端0.3m、中心の高さ0.23mを測る。小口の規模から北西側が頭位と考えられる。石棺の上縁部を取り囲むように板状の割石を配置している。石棺長軸下端の規模から考えて小児用の可能性がある。ベンガラは小口石、側石、石棺の上縁部、床石にも塗布されていた。遺物は墓壙内覆土上面及び石蓋直上から器台片、壺底部片、壺口頸部～胴部片、高杯杯部～脚部片が出土した。**763**は器台くびれ部～裾部片で1/2が残存する。この土器は蓋石直上で出土した。裾端部は方形を呈し、内外面は縦及び横方向のハケメ調整を施し器壁は厚い。くびれ部に透かしは見当たらない。裾部で丹塗り一部認められた。**764**は壺底部片である。底径は5.0cmで緩やかな凸レンズ状を呈する。外面は僅かにハケメ調整が残る。内面はナデ調整と指圧痕が残る。焼成はやや軟質である。**765**は壺口頸部～胴部片である。口頸部に三角凸帯を有し、内外面とも縦、斜め方向にハケメ調整が残る。焼成はやや軟質である。**766**は高杯杯部、脚部片である。脚部に一部朱が塗布されている。外面は縦、斜め方向にハケメ調整、内面はハケメ後ナデ調整を施す。焼成はやや軟質である。これらの土器から後期前半頃の所産であろう。



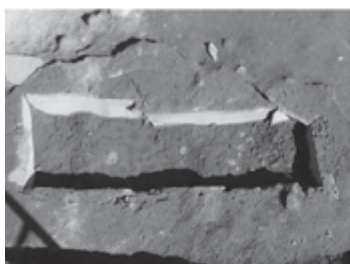
①蓋石検出状況 その1



②蓋石検出状況 その2



③朱(蓋直下、北から)



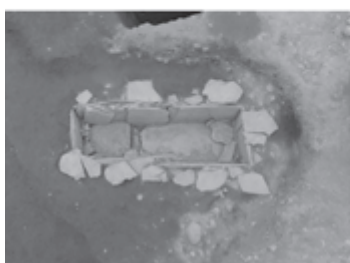
④蓋石直下 朱検出状況



⑤石棺内部



⑥歯検出状況



⑦蓋石除去状況

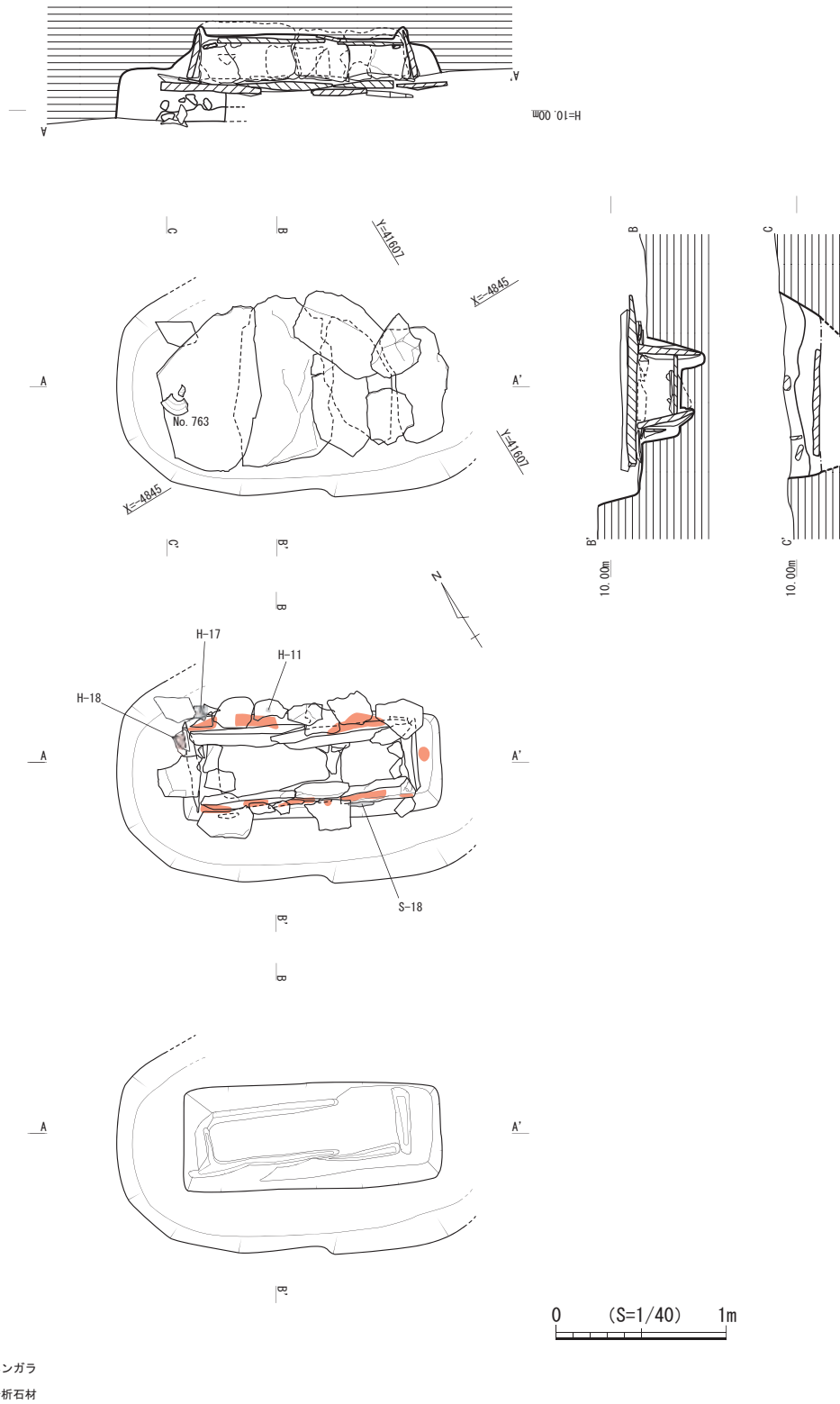


⑧石棺内完掘状況

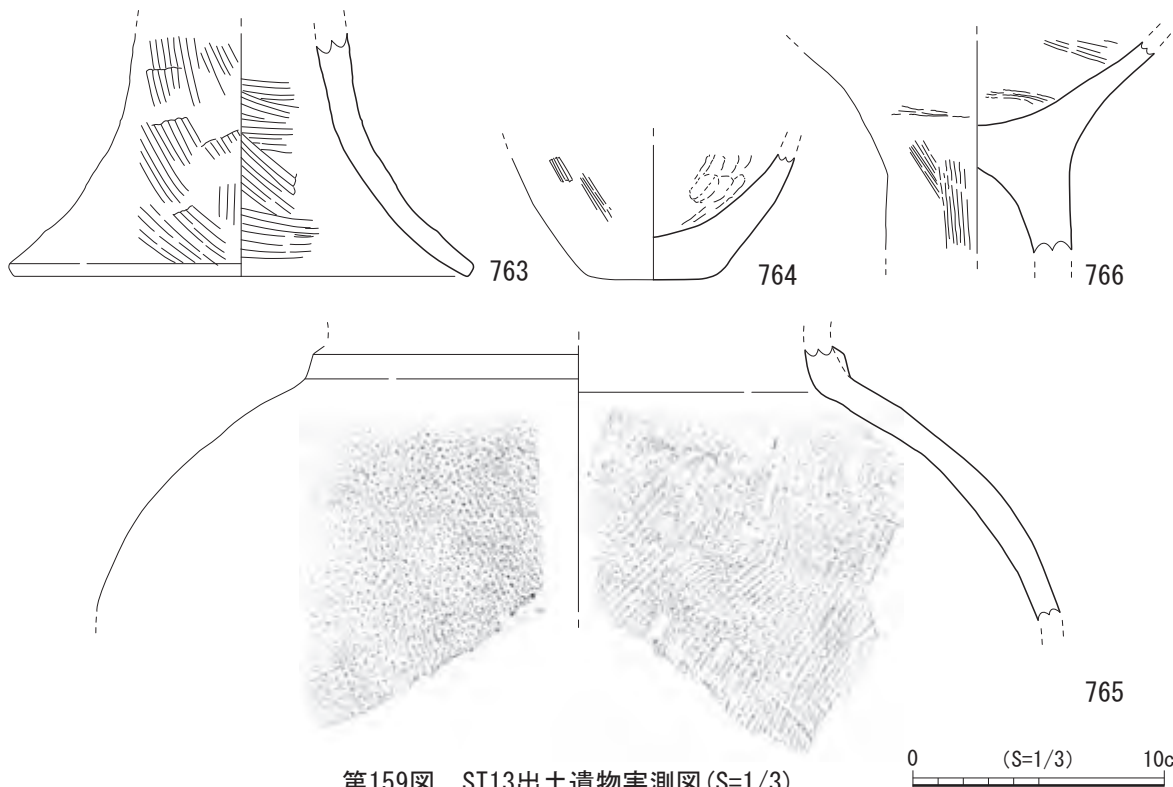


⑨完掘状況

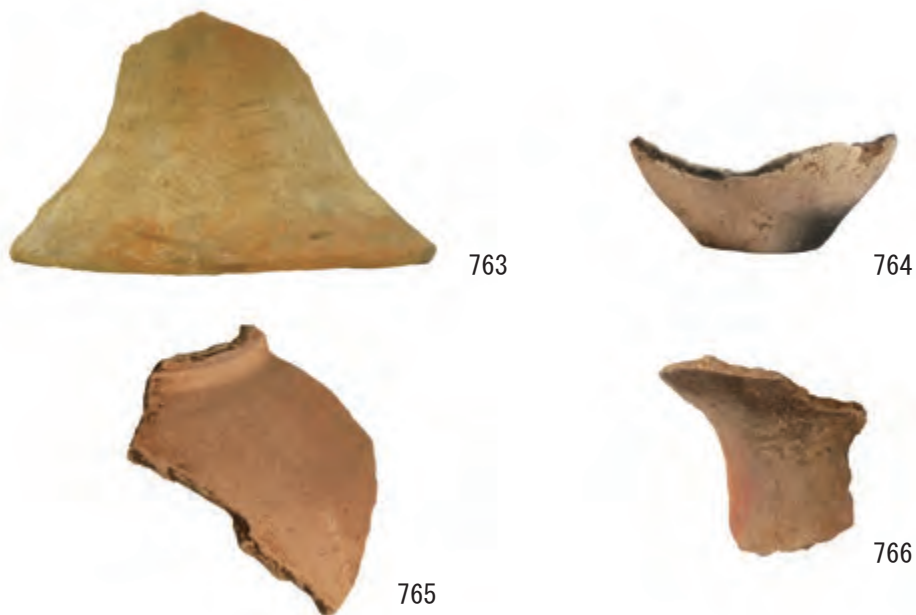
図版103 ST13遺構状況(①～⑨)



第158図 ST13平・断面図(S=1/40)



第159図 ST13出土遺物実測図 (S=1/3)



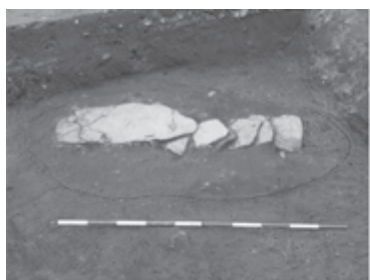
図版104 ST13出土遺物

第62表 ST13出土土器観察表

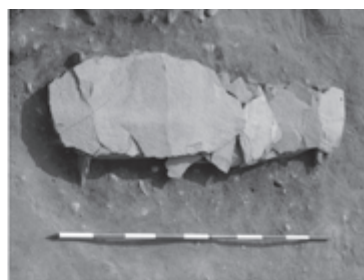
遺物番号	器種	部位	法量 (cm)			調整		色調		焼成	胎土	備考
			口径	器高	底径	外面	内面	外面	内面			
763	器台	裾部	—	—	(18.0)	縦、横方向ハケメ	縦、横方向ハケメ	5YR7/6 橙	10YR7/4 にぶい黄橙	良	長石、雲母 角閃石	脚端部は方形を呈す
764	壺	底部	—	—	5.0	ハケメ ナデ	ナデ 指圧痕	10YR7/4 にぶい黄橙	10YR6/3 にぶい黄橙	良 やや軟質	長石、赤色粒子	底部は緩やかな凸レンズ状
765	壺	口頸部～胴部	—	—	—	縦、斜め方向ハケメ	縦、斜め方向ハケメ	7.5YR7/6 橙	10YR7/4 にぶい黄橙	良	長石、石英 赤色粒子	口頸部に三角凸帯を有す
766	高坏	杯部～脚部	—	—	—	縦、斜め方向ハケメ	ハケメ ナデ	10YR6/4 にぶい黄橙	10YR7/4 にぶい黄橙	良 やや軟質	長石、石英 赤色粒子	脚部に丹塗りあり

③TAK201302①ST15(箱式石棺墓) (第160図 図版105)

ST15は①区8462グリッドに位置する。主軸方位はE-20°-Sで東南から北西方向に構築された箱式石棺墓である。蓋石は7枚で北西方向から順に持ち送りをを行い、東南方向で1mを超える板石で蓋をしている。墓壙確認のため周りを精査したが確認できなかった。石棺の埋葬壙の規模は中心の長軸2.06m、短軸0.8m、高さ0.24mを測る。この中に石棺を構築している。両小口石は1枚の板石で、東南側小口幅下端0.5m、北西側小口幅下端0.26mを測ることから頭位は東南側であろう。両側石は3枚と4枚で構成され鎧重ねに側石を構築している。床石は全面に板石を敷き詰めている。石棺内の規模は長軸下端1.76m、短軸0.48m、高さ0.21mを測る。東南側小口床面(頭位)には0.32m×0.36mの大きさで朱の散布が施され、床石には繊維片が付着していた。遺物の出土はなかった。



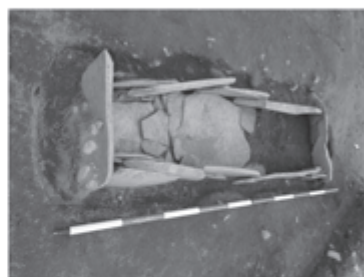
①蓋石検出状況 その1



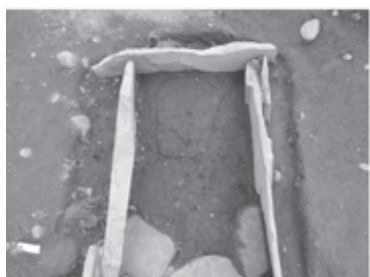
②蓋石検出状況 その2



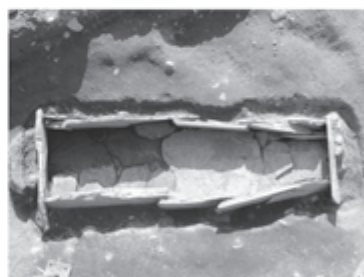
③朱範囲



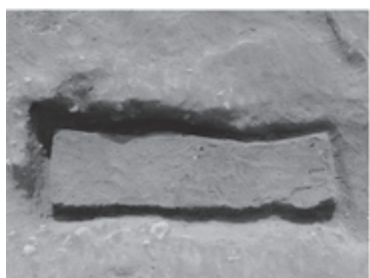
④蓋石除去状況



⑤朱の検出



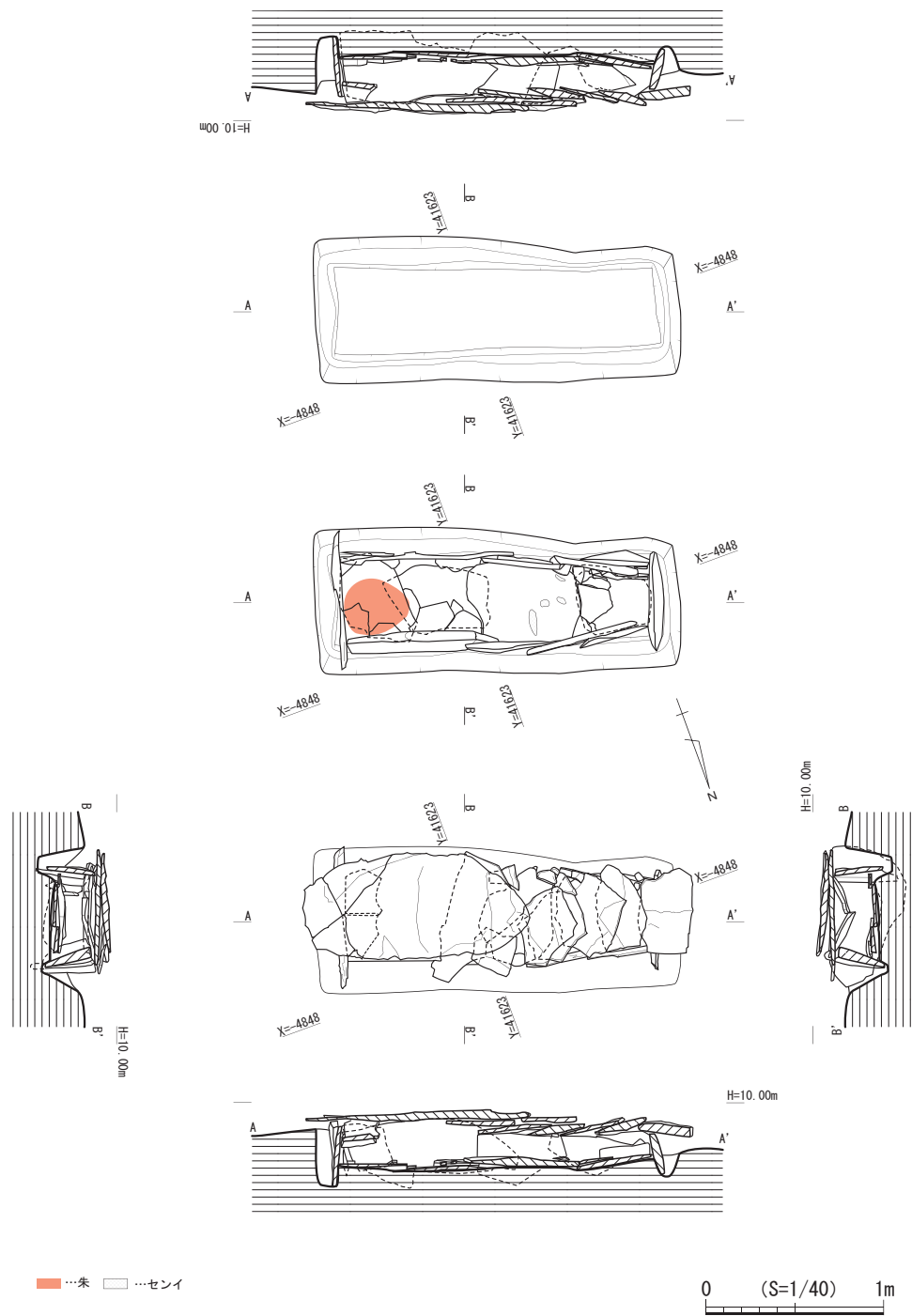
⑥石棺内完掘状況



⑦堀方完掘状況

図版105 ST15遺構状況(①~⑦)





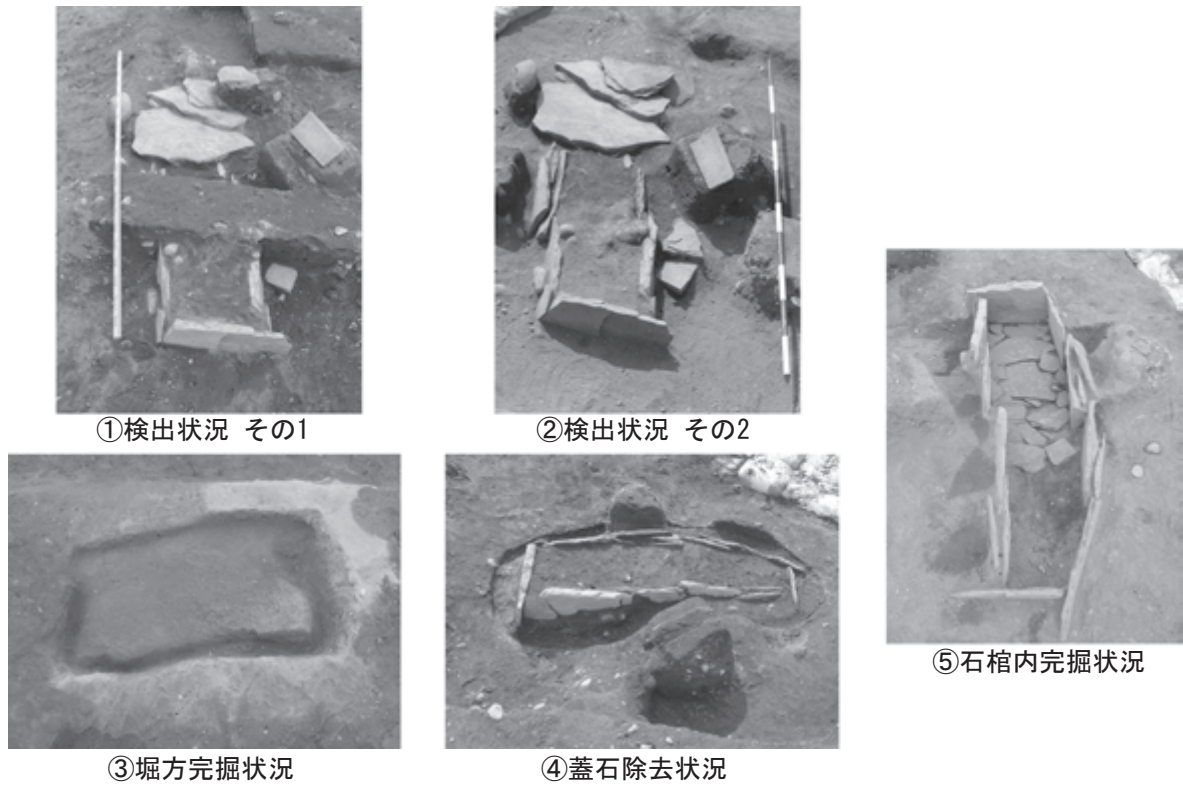
第160図 ST15平・断面図(S=1/40)

③8TAK201302①ST16(箱式石棺墓) (第161・162図 図版106・107 表63)

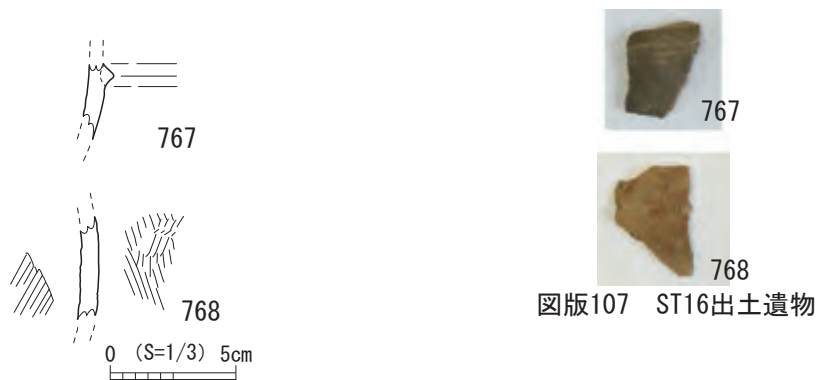
ST16は①区8460グリッドに位置し、8462グリッドとの境界近くである。主軸方位はN-82°-Eでほぼ東西方向に構築された箱式石棺墓である。墓壙は長軸上端2.03m、短軸上端1.03m、高さ0.22mを測る長方形の平面形である。検出時に蓋石は2枚しか残存していなかった。石棺の構造は両小口が板石1

枚で、両側石は5枚で構成されている。側石の構築は、北側石は持ち送りで、西側になるほど側石が狭く設置しており、平面形は長台形を呈する。石棺の規模は中心長軸下端1.79m、中心短軸下端0.5m、東側小口幅0.47m、西小口幅0.21m、高さ0.2mを測る。東側小口幅が広いことから頭位と考えられる。この小口石から胸部にかけて朱を施されている。床面は、頭位から2/3程まで板石を敷き詰めており、敷石がない部分で土壌サンプルを採取した。また骨片、骨粉を頭位側で4ヶ所確認した。

出土遺物は墓壙覆土から甕胴部片、壺口頸部小片が出土した。767は壺の口頸部付近で三角凸帯を有する。内外面はハケメが僅かに残る。768は甕の胴部片である。内外面にハケメ痕が残る。



図版106 ST16遺構状況(①~⑤)

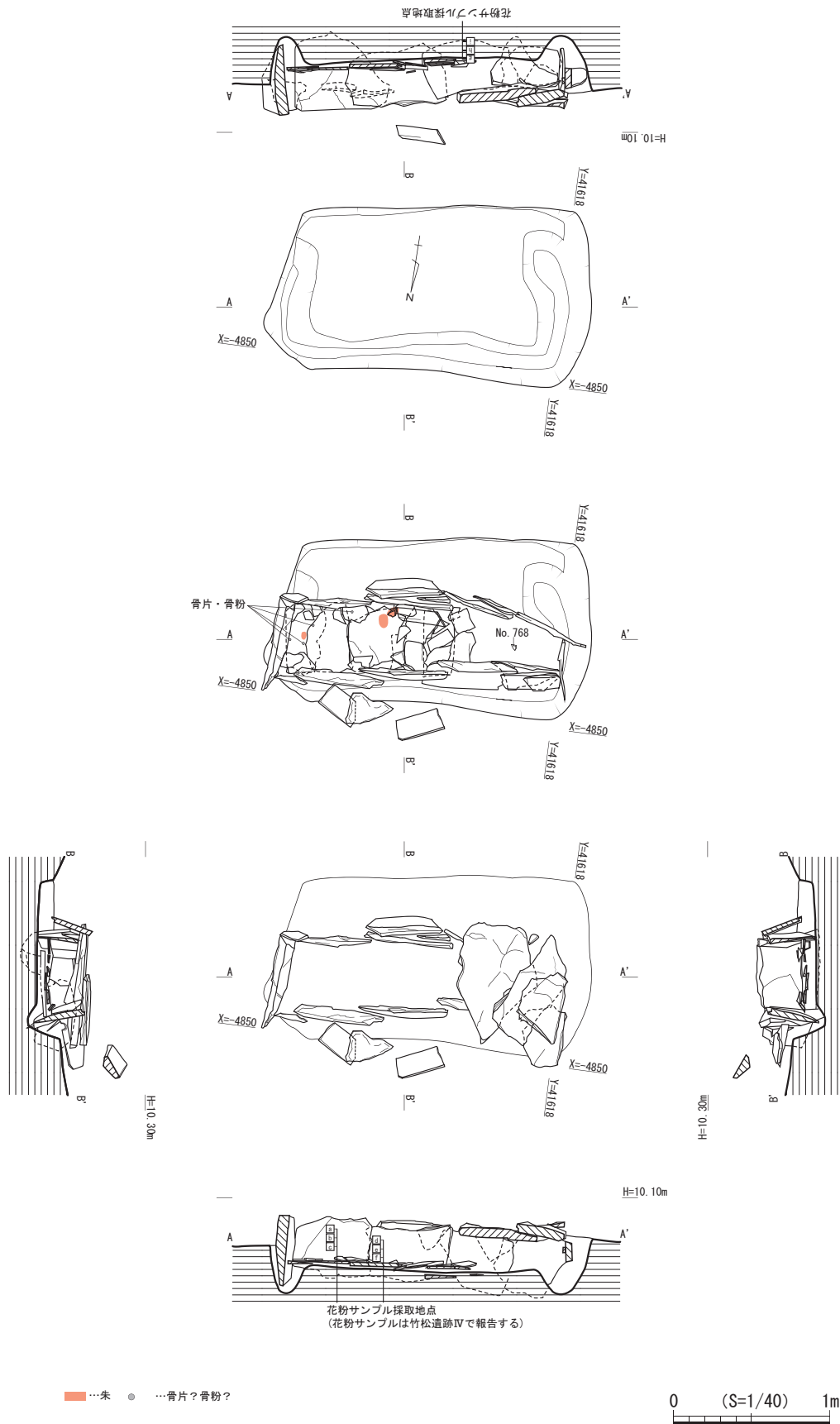


図版107 ST16出土遺物

第161図 ST16出土遺物実測図(S=1/3)

第63表 ST16出土土器観察表

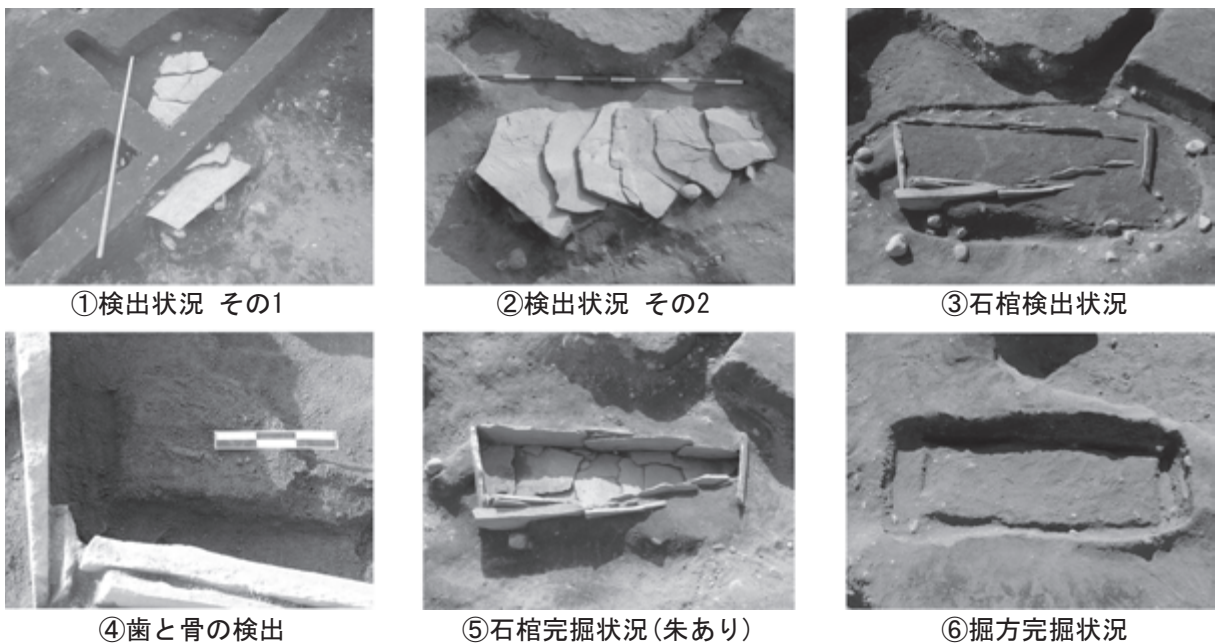
遺物番号	器種	部位	法量(cm)			調整		色調		焼成	胎土	備考
			口径	器高	底径	外面	内面	外面	内面			
767	壺	口頸部	—	—	—	ハケメ	ハケメ	10YR6/2 灰黄褐	10YR2/1 黒	良	長石、雲母 角閃石	三角凸帯を有す
768	甕	胴部	—	—	—	ハケメ	ハケメ	10YR6/3 にぶい黄橙	10YR7/3 にぶい黄橙	良	石英、雲母 角閃石	



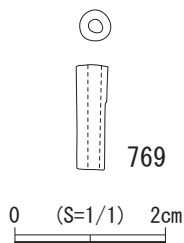
第162図 ST16平・断面図(S=1/40)

③TAK201302①ST17(箱式石棺墓)(第163・164図 図版108・109 表64)

ST17は①区8460グリッドに位置する。主軸方位はE-29°-Sで東南から北西方向に構築された箱式石棺墓である。蓋石は7枚で東南側から北西側に鎧積みされている。墓壙は長方形で中心の長軸上端2.2m、短軸上端0.95m、高さ0.25mを測る。石棺の規模は中心の長軸下端1.62m、短軸下端0.5m、高さ0.2mを測る。平面形は縦長の等脚台形状を呈する。両小口は板石1枚で、両側石は3枚で構築されている。東南小口下端幅は0.6m、北西小口下端幅は0.2mである。このことから頭位は東南側と考えられる。床面は板石が全面に敷かれており、東南側の頭位付近では0.2m×0.2m範囲で朱が検出され、その範囲の中から骨片が10数点出土した。また北西側小口端でも僅かに朱が検出された。出土遺物は石棺内覆土から碧玉の管玉が1点出土した。769は碧玉の管玉である。長さ1.39cm、幅4.3mmを測る。穿孔は両面からである。色調は淡緑灰色で北陸産の可能性がある。



図版108 ST17遺構状況(①～⑥)



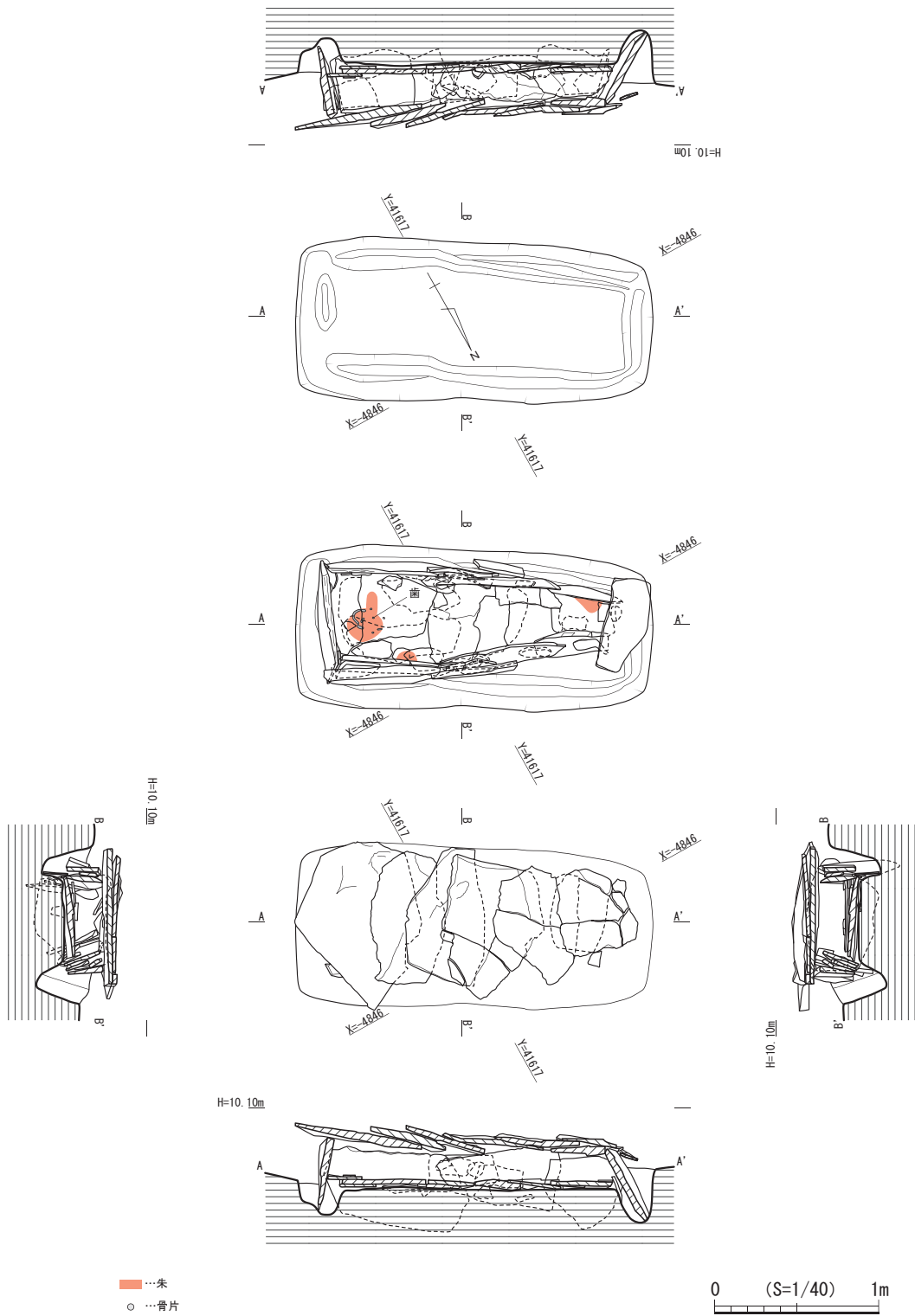
第163図 ST17出土遺物実測図(S=1/1)



図版109 ST17出土遺物

第64表 ST17出土管玉観察表

遺物番号	材質	色調	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	備考
769	碧玉	淡緑灰色	1.39	0.42		0.35	穿孔は両側から、北陸産の可能性



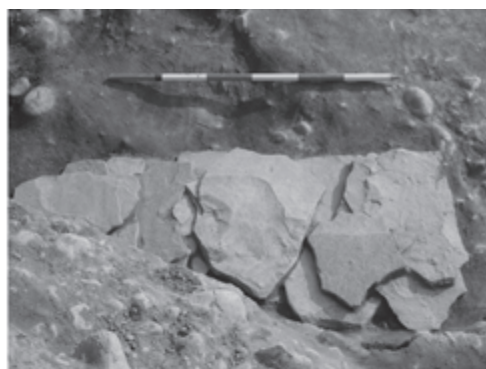
第164图 ST17平·断面图(S=1/40)

④TAK201302①ST18(箱式石棺墓) (第165図 図版110)

ST18は①区8462グリッドに位置する。主軸方位はN-90°-Eで東西方向に構築された箱式石棺墓である。蓋石は10枚の板石で西側小口から東側小口へ鎧積みを行っている。墓壙規模は中心の長軸上端1.97m、短軸上端0.75m、高さ0.44mを測る、長方形の平面形を呈する。石棺はこの中に構築され、両小口は板石1枚で、側石は4枚と3枚で構築されている。石棺の規模は長軸下端1.72m、短軸下端0.47m、高さ0.22mを測り、平面形は長方形で東側の幅がやや狭い。床面は板石を全面に敷き詰めていた。東側小口下端幅0.34m、西側小口下端幅0.55mを測る。このことから西側小口が頭位と考えられる。頭位床面から足位床面への傾斜は3°ある。頭位床面には朱が施されていた。遺物は出土しなかった。



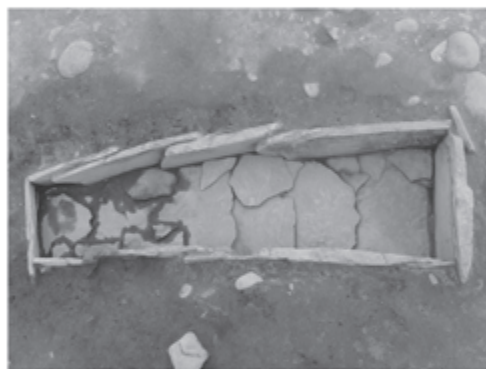
①石棺検出状況



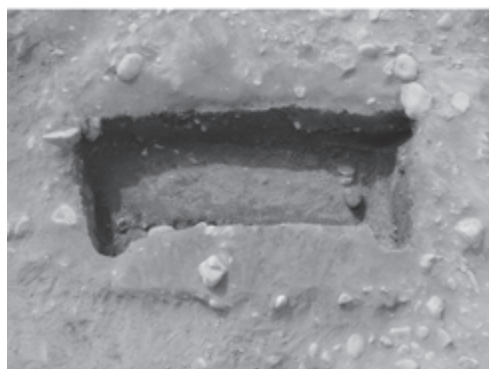
②蓋石検出状況



③蓋石除去状況

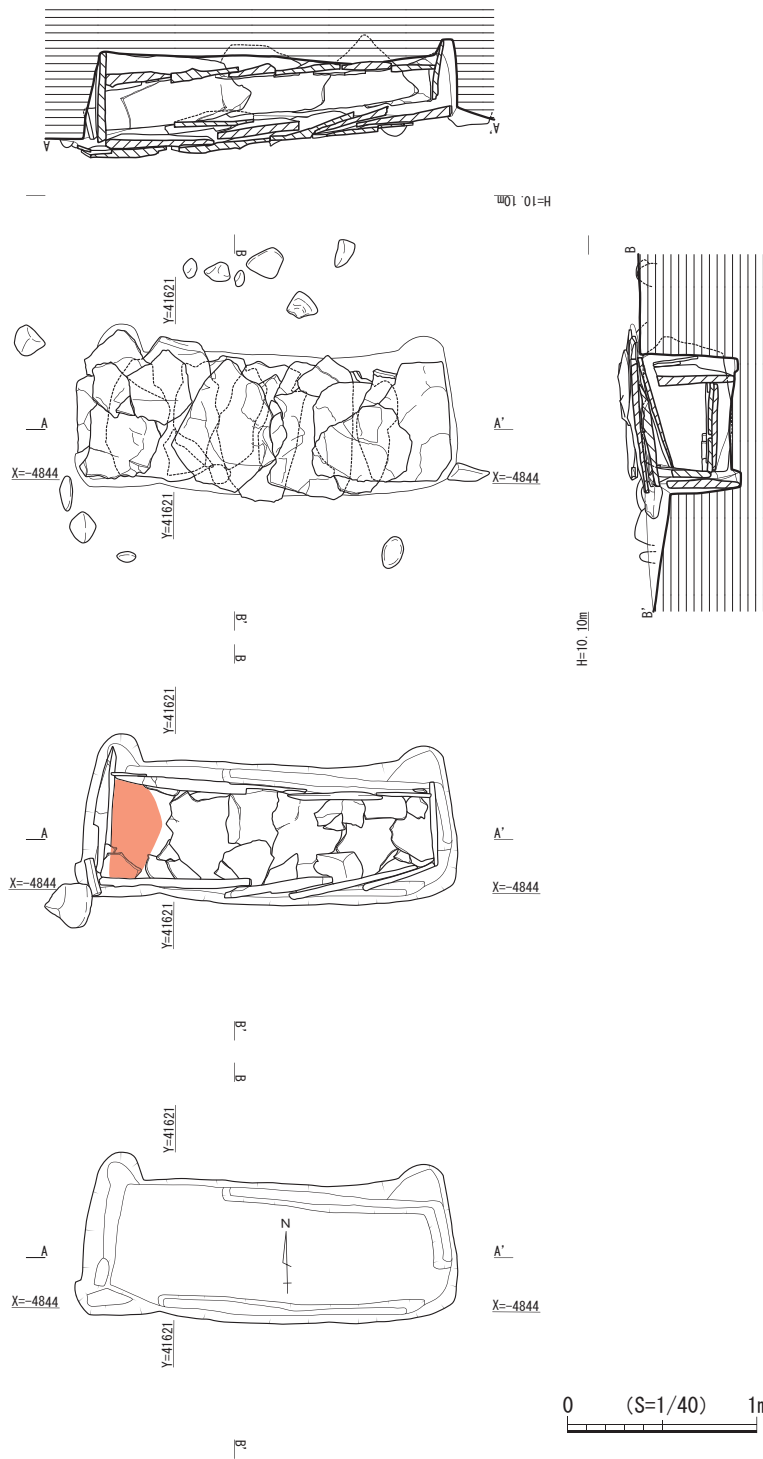


④石棺内完掘状況



⑤掘方完掘状況

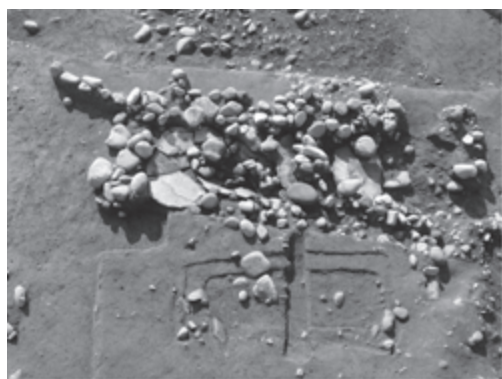
図版110 ST18遺構状況(①~⑤)



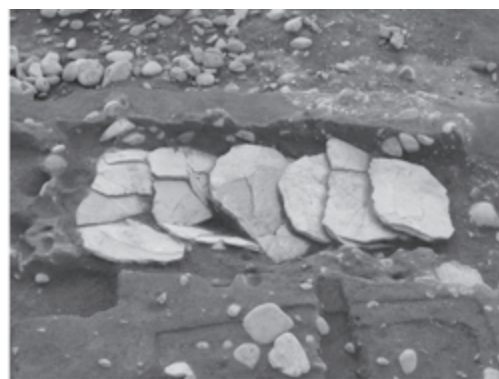
第165図 ST18平・断面図 (S=1/40)

④TAK201302①ST19(箱式石棺墓) (第166図 図版111)

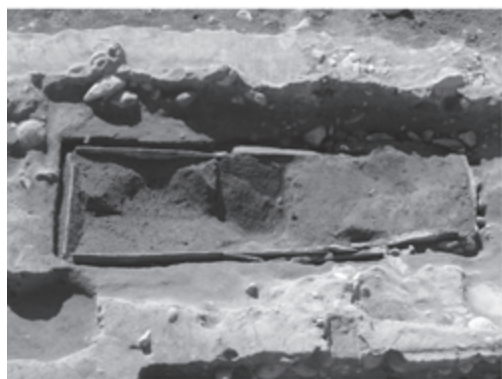
ST19は①区8456グリッドに位置する。主軸方位はN-88°-Eで東西方向に構築された箱式石棺墓である。検出時に人頭大から拳大の円礫が墓壙全体を覆う状況であった。蓋石は7枚で東側から西側へ鎧積みを行っている。墓壙の規模は長軸上端2.1m、短軸上端0.8m、高さ0.37mを測り、平面形は長方形を呈する。石棺は両小口が1枚の板石を配し、両側石は3枚で構成され、拳大、板石を裏込めに使用している。3枚の側石は持ち送りで西側が狭く構築されている。石棺の規模は中心長軸下端1.72m、短軸下端0.4m、高さ0.31mを測る。東側小口下端幅0.48m、西側小口幅0.4mを測ることから東側が頭位と思われる。頭位と考えられる部分に10cm×10cm程の朱が確認された。また中心付近に0.4m×0.4m程の板石を1枚敷いている。ST19とST22は墓壙の切り合い関係からST22が新しい。遺物は出土しなかった。



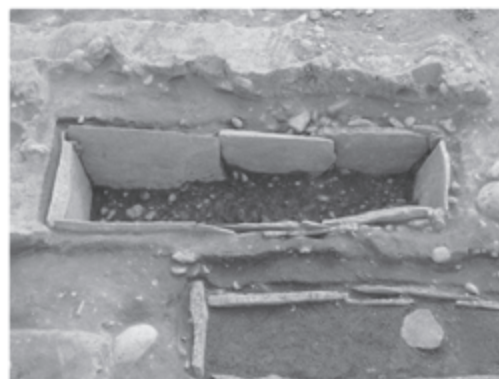
①ST19(上)・ST26(下)検出状況(北から)



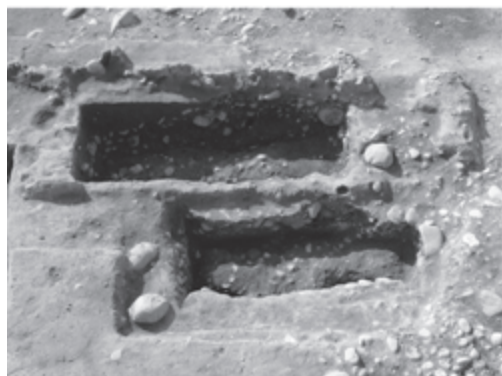
②ST19(上)蓋石検出状況



③蓋石除去状況



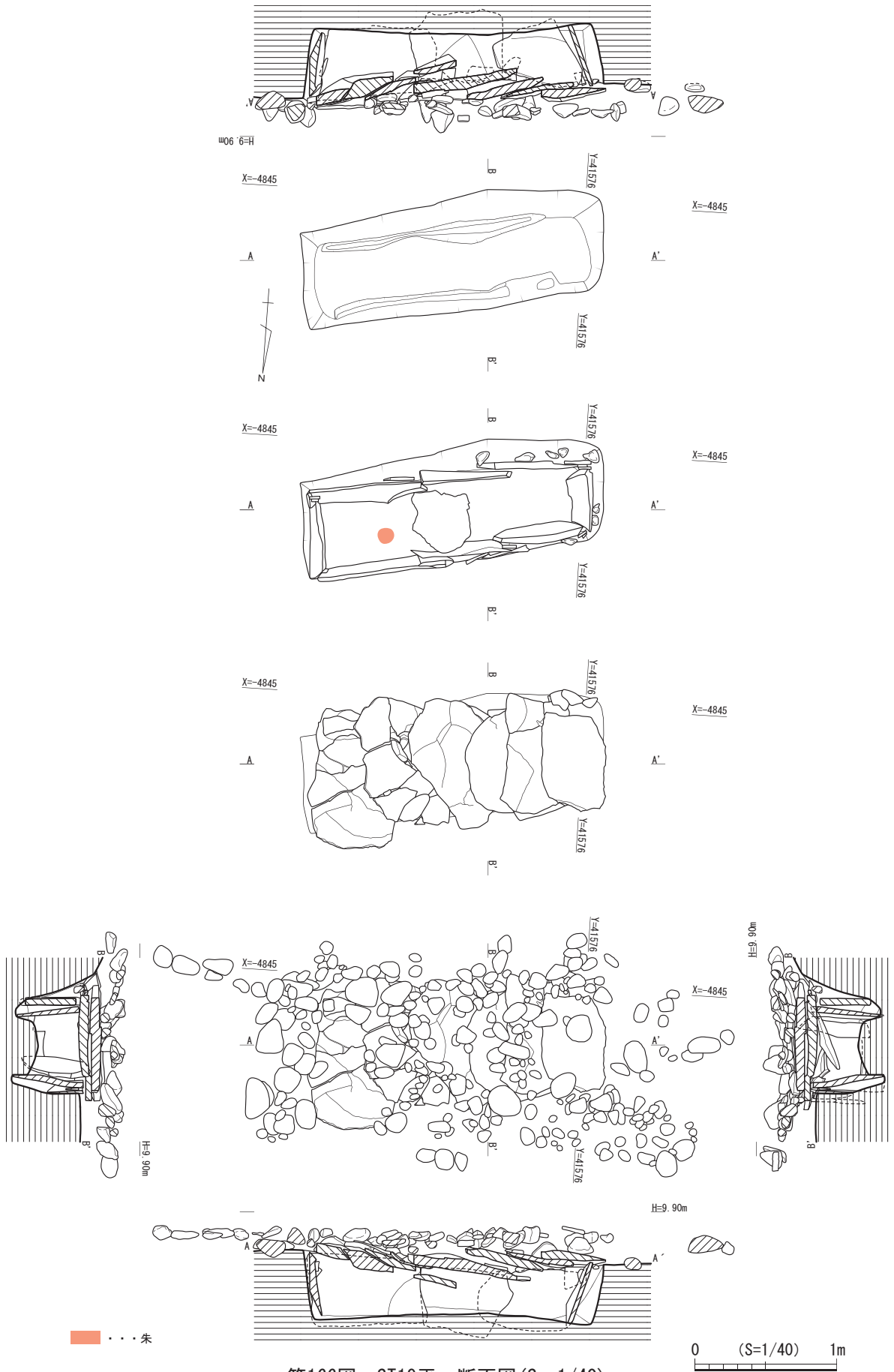
④ST19(上)石棺内完掘状況



⑤ST19(上)・ST22(下)石棺除去状況

図版111 ST19遺構状況(①～⑤)

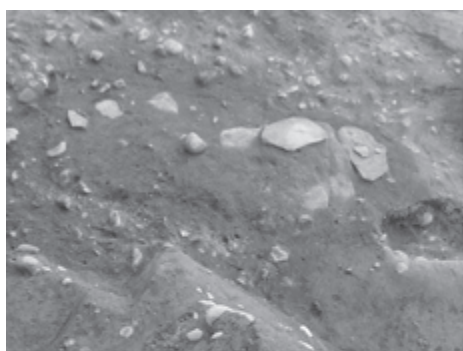




第166图 ST19平·断面图(S= 1/40)

④TAK201302①ST20(箱式石棺墓) (第167図 図版112)

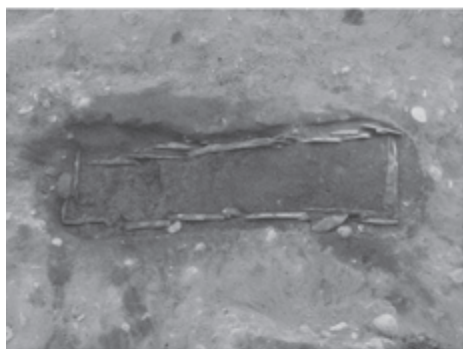
ST20は①区8460グリッドに位置する。ST18と接続するが切り合い関係はない。主軸方位はN-67°-Wで北西から南東にかけて構築された箱式石棺墓である。蓋石は南東方向から北西方向に板石を鎧積みになっている。墓壙は長方形の平面形を有し、小口方向がやや張り出す。規模は中心長軸上端2.21m、短軸上端0.6m、高さ0.3mを測る。石棺の構造は両小口の板石は1枚で、両側石は板石4枚で持ち送りで構成されている。床面は全面に敷石を行う。石棺の規模は中心下端長軸1.92m、中心短軸は0.35m、北西小口下端幅0.45m、南東小口下端幅0.35m、高さ0.26mを測る。こうした状況から北西小口側が頭位と考えられる。頭位側の敷石上面の0.2m×0.2mの範囲及び南東小口側敷石上面の0.55m×0.25mの範囲で朱・ベンガラが確認された。また石棺全体から骨片が出土し、粘土の塊片が6ヶ所で確認された。粘土塊は石棺内の石材のつなぎ目を補う目張りであろう。遺物は出土しなかった。



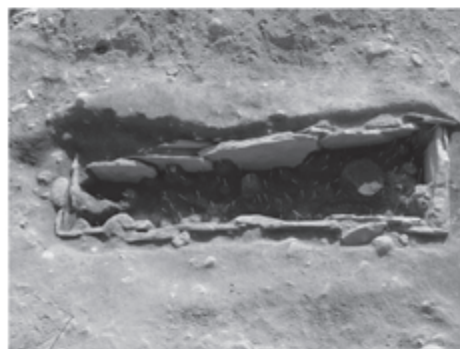
①プラン検出(北から)



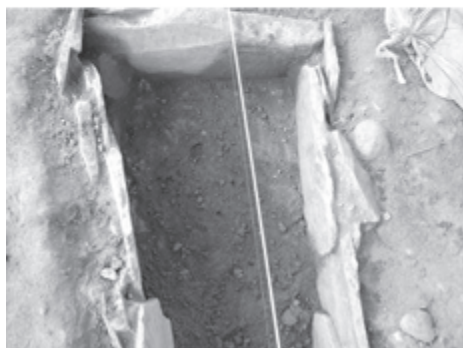
②蓋石検出状況



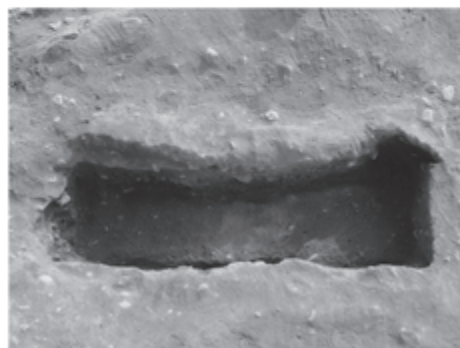
③蓋石除去検出



④骨片出土状況

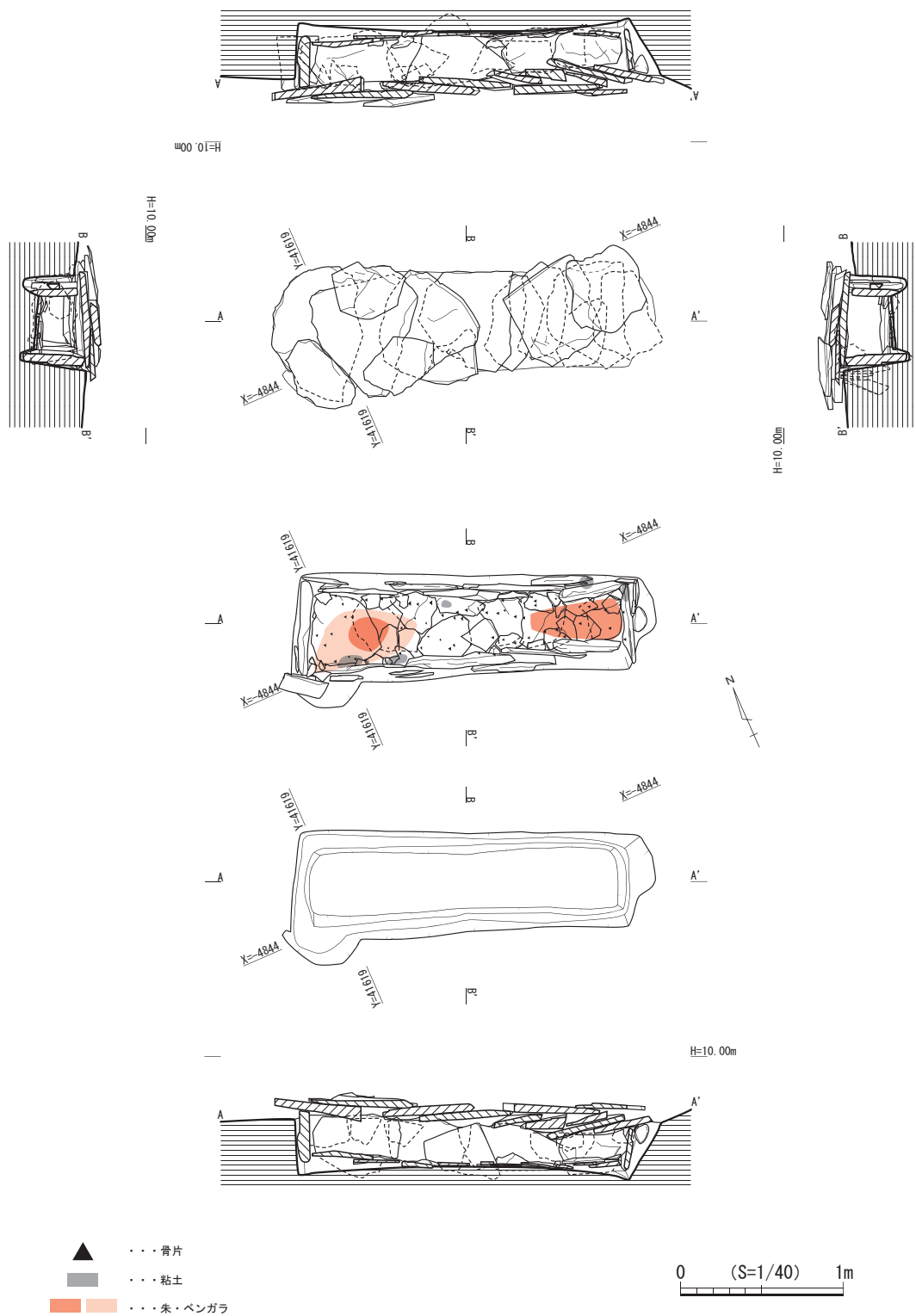


⑤朱の出土状況



⑥掘方完掘状況

図版112 ST20遺構状況(①~⑥)



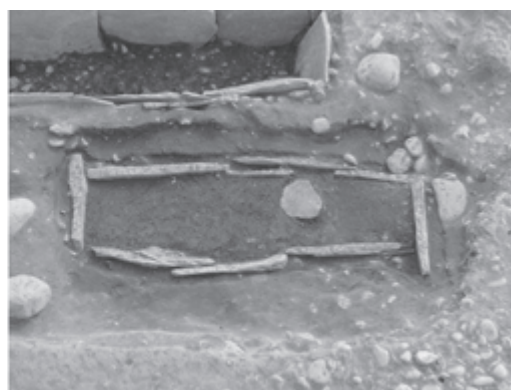
第167図 ST20平・断面図(S=1/40)

④3TAK201302①ST22(箱式石棺墓) (第168図 図版113)

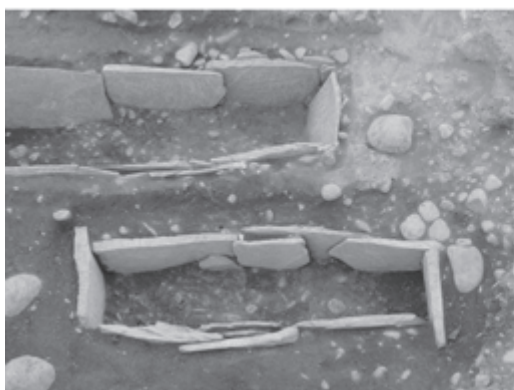
ST22は①区8456グリッドに位置する。主軸方位はN-83°-Eでほぼ東西方向に構築された二段掘りの箱式石棺墓である。蓋石は8枚で西側から東側に鎧積みしている。墓壙は中心の長軸上端2.30m、短軸1.3m+、高さ0.2m程を測る横長楕円形の平面形を呈する。墓壙やや中央に埋葬壙が構築されている。規模は中心長軸上端1.68m、短軸0.56m、高さ0.22mを測り、長方形の平面形を呈する。石棺はこの中に構築さて両小口は板石1枚、両側石は3枚で構成されている。規模は中心長軸下端1.80m、短軸0.38m、高さ0.37mを測る。東側小口幅は0.35m、西側小口幅0.29mを測る。このことから東側小口が頭位と考えられる。床面に敷石はなくほぼ水平である。遺物は出土しなかった。ST22はST19、ST26(木棺墓)と切り合い関係がある。ST26はST19、ST22の上層で構築された遺構である。よってST19とST22との関係は、墓壙の切り合い状況からST22が新しい。遺物は出土しなかった。



①ST19(上)石棺検出状況・ST22(下)蓋石検出状況



②ST22(下)蓋石除去状況

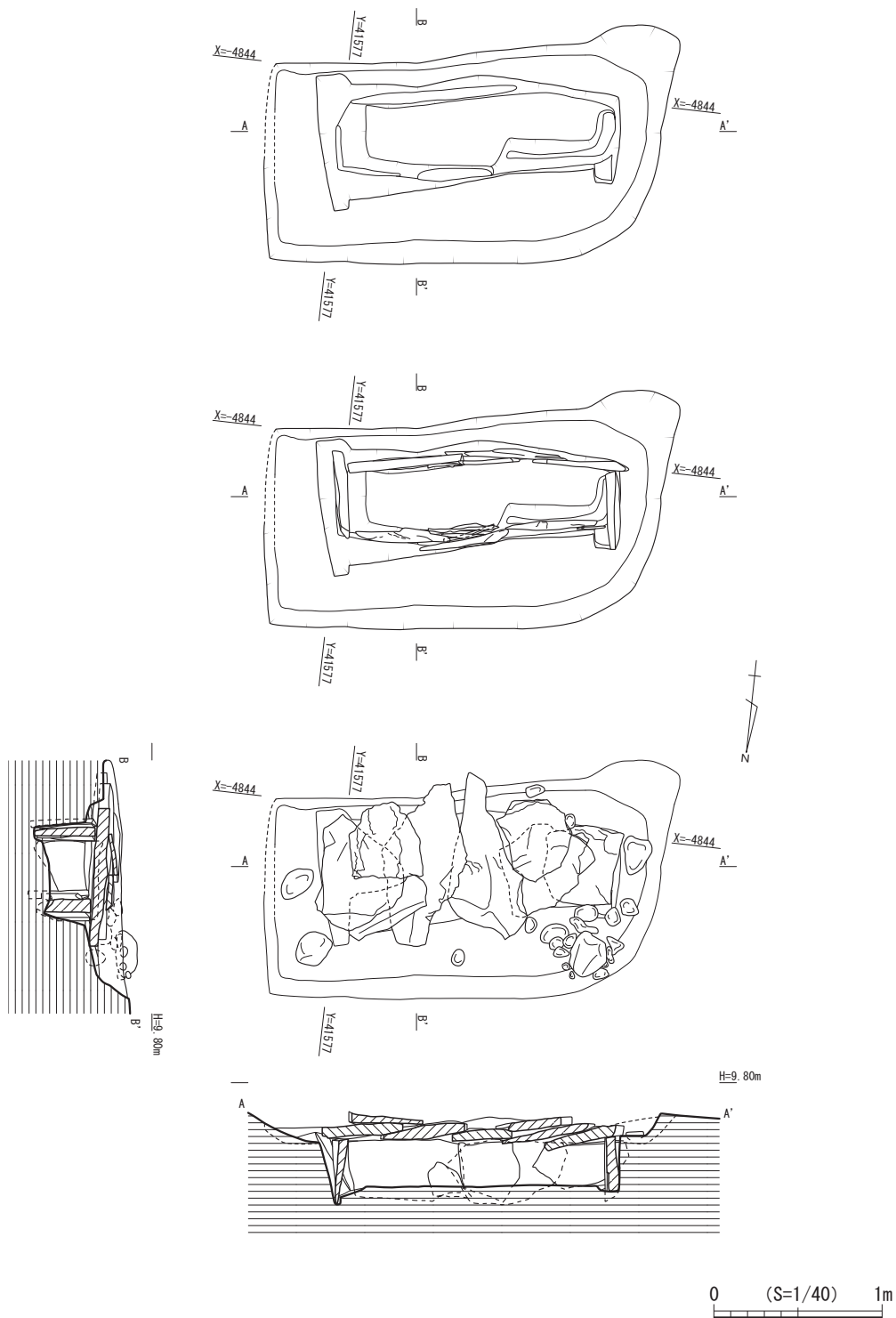


③ST19(上)・ST22(下)石棺内完掘状況



④ST19(上)・ST22(下)石棺除去状況

図版113 ST22遺構状況(①~④)



第168图 ST22平·断面图(S=1/40)

④TAK201302①ST23(箱式石棺墓) (第169図 図版114)

ST23は①区8460グリッドに位置する。主軸方位はN-76°-Wでほぼ東西方向に構築された箱式石棺墓である。墓壙は2段掘りで推定長軸2.80m、短軸1.55m、高さ0.38m程の楕円形の平面形を呈する。蓋石は8枚で東側から西側に鎧積みを行っている。埋葬壙は墓壙中央部に構築され中心長軸上端2.17m、短軸0.64m、高さ0.22mで東側がやや窄む長方形の平面形を呈する。

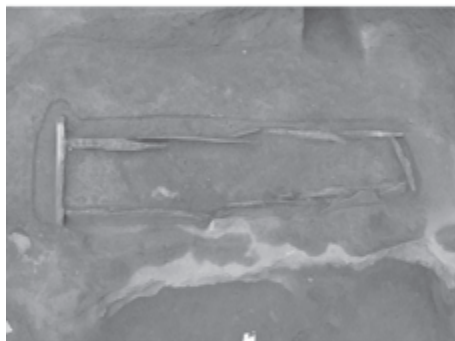
箱式石棺墓はこの中に構築され両小口は1枚の板石、両側石は4枚と3枚で鎧重ねの構造を行っている。東側小口幅0.25m、西小口幅0.35mを測ることから西側が頭位と考えられる。石棺の規模は中心長軸下端1.80m、短軸0.38m、高さ頭位側で0.25m、足位側で0.18mを測る。頭位から足位に向かって蓋石を4°程傾斜して構築している。床面は敷石を配置し水平に構築され、西側小口付近には0.70m×0.3m程の範囲で朱が施されている。遺物は出土しなかった。



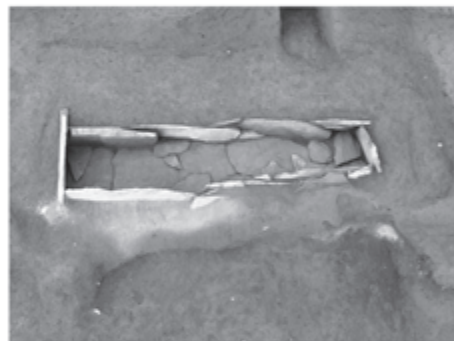
①検出状況(北から)



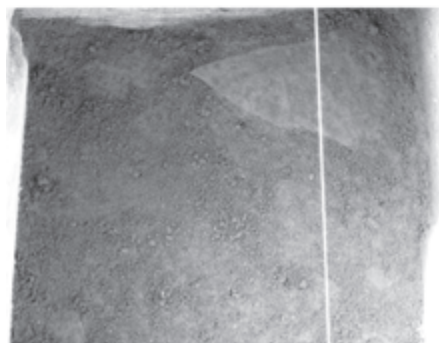
②蓋石検出状況



③蓋石検出状況



④石棺内完掘状況

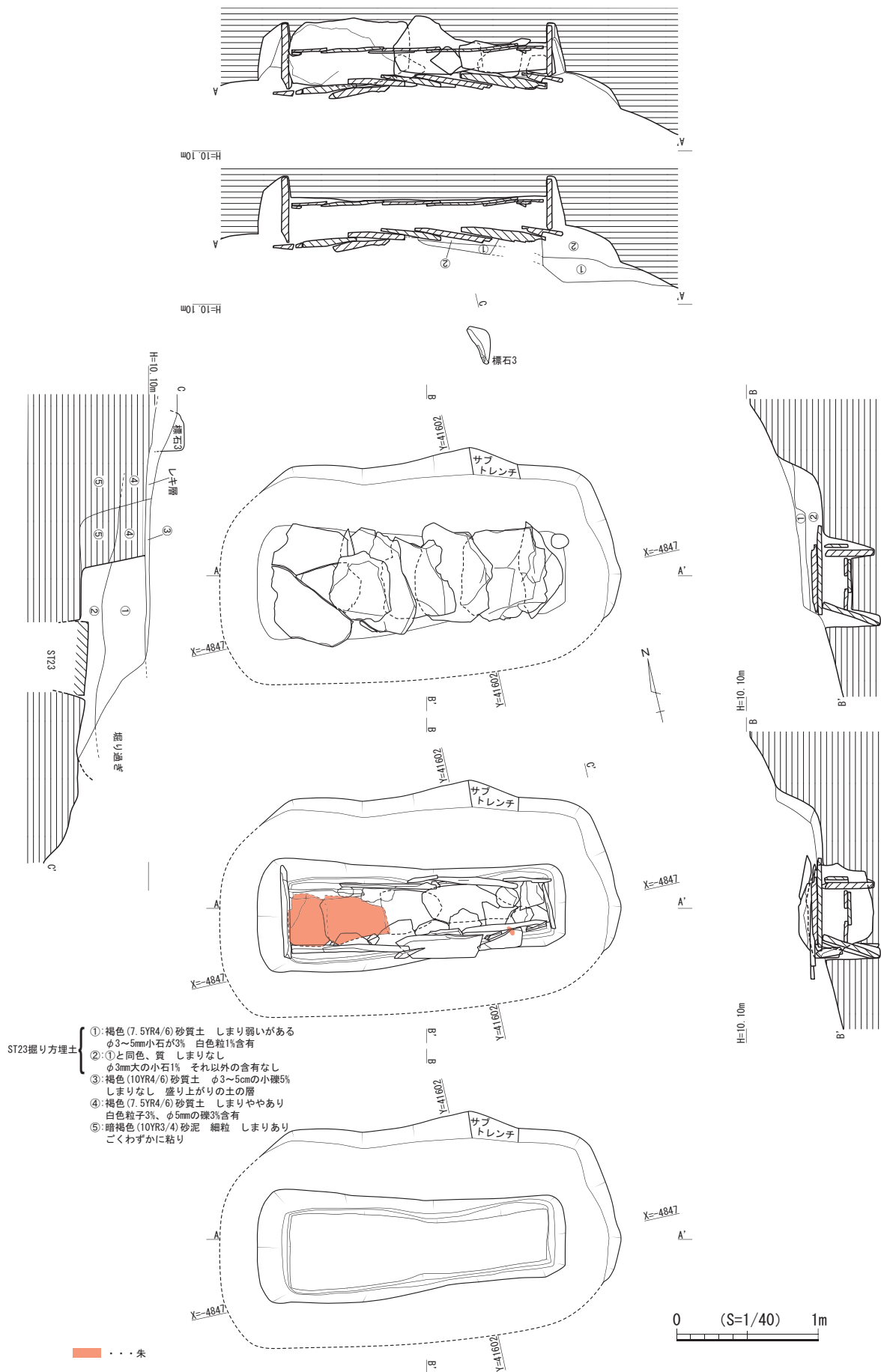


⑤朱の出土状況



⑥掘方完掘状況

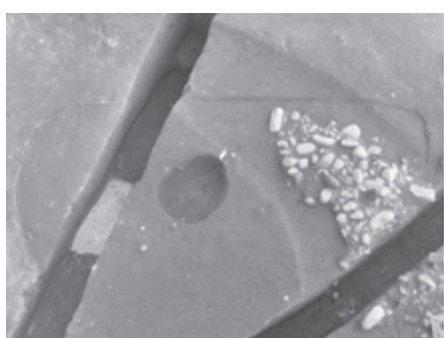
図版114 ST23遺構状況(①~⑥)



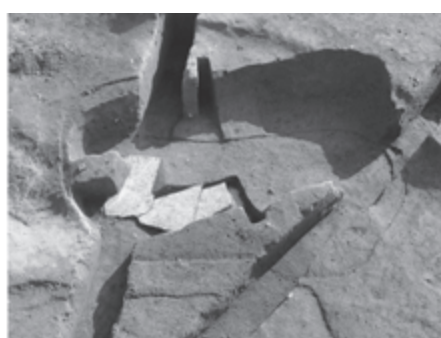
第169図 ST23平・断面図(S=1/40)

④5TAK201302①ST24(箱式石棺墓) (第170図 図版115)

ST24は①区8460グリッドに位置する。ST34(土坑墓)が北側に隣接し構築方向がほぼ同一である。主軸方位をN-87°-Eにとりほぼ東西方向に構築された箱式石棺墓である。墓壙は3段掘りである。上段の墓壙規模は長軸上端2.55m、短軸1.60m、高さ0.37mを測り、長方形の平面形を呈する。中段の墓壙の規模は長軸上端2.0m、短軸0.8m、高さ0.15mを測り全周していない。埋葬壙は西側小口がやや北側に傾き構築されている。埋葬壙の規模は中心長軸上端1.87m、下端1.77m、短軸上端0.60m、下端0.53mを測る。蓋石は7枚で構成され西側小口から東側小口に向かって鎧積みされている。両小口は板石1枚で、両側石は4枚で構成され鎧重ねである。床面は敷石が行われている。石棺の規模は中心長軸下端1.70m、短軸0.28m、東側小口幅下端0.35m、西側小口幅下端0.28mを測ることから東側が頭位と考えられる。遺物は出土しなかった。



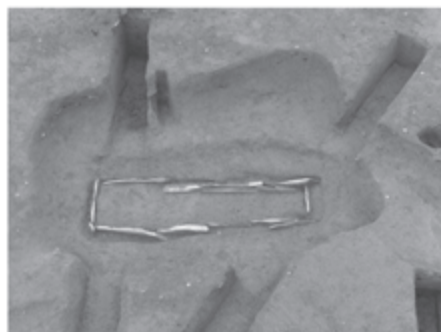
①ST24・SX2切り合い(北から)



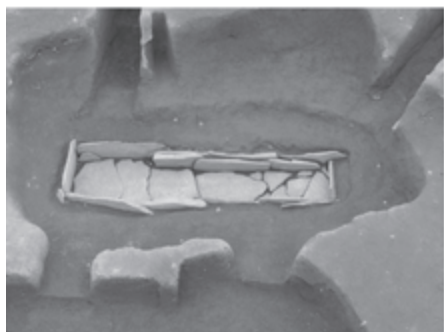
②検出状況



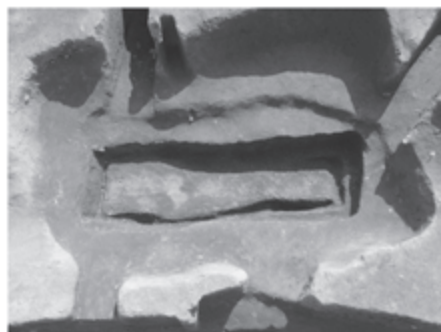
③蓋石検出状況



④蓋石除去状況



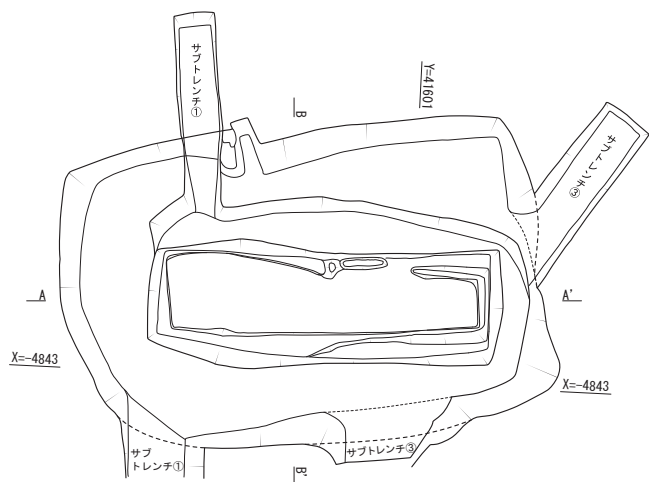
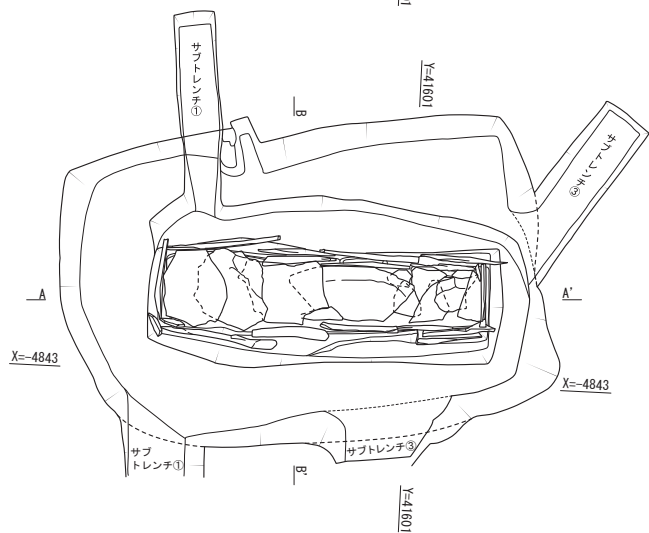
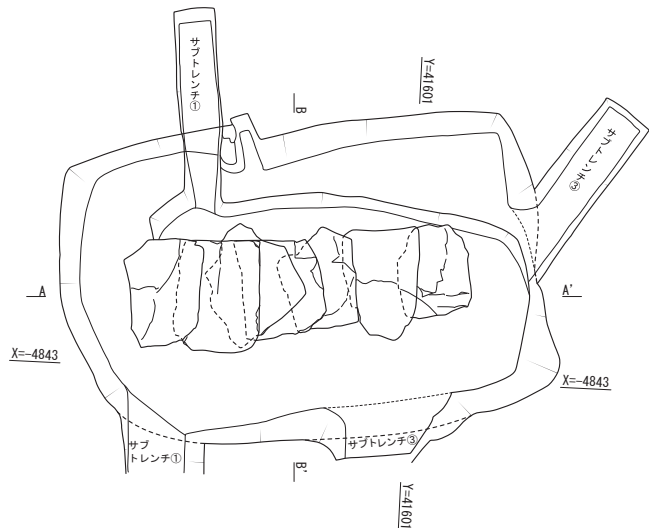
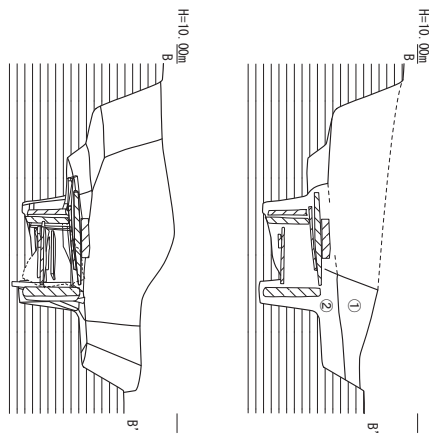
⑤埋土掘削



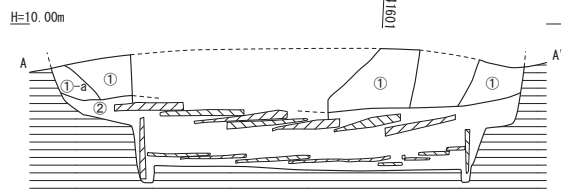
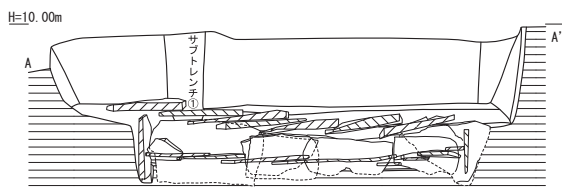
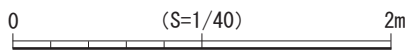
⑥完掘状況

図版115 ST24遺構状況(①~⑥)





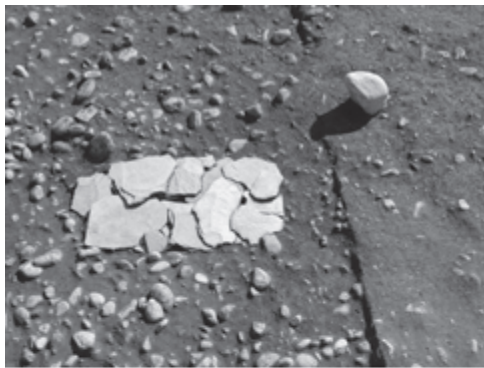
- ①: 褐色 (7.5YR4/4) 砂質土だが粘質も帯びる  
 褐灰色 (7.5YR4/1) 年度ブロック5%、微白色粒2%含有  
 炭化物も出土する
- ①-a: 褐色 (7.5YR4/4) 砂質土で粘らない。含有は、なし
- ②: 褐色 (7.5YR4/6) 砂質土  
 ①と同様のパーセンテージで粘土 (①と同色) を含み、  
 微白色粒1%含有  
 強めの粘性を帯びる



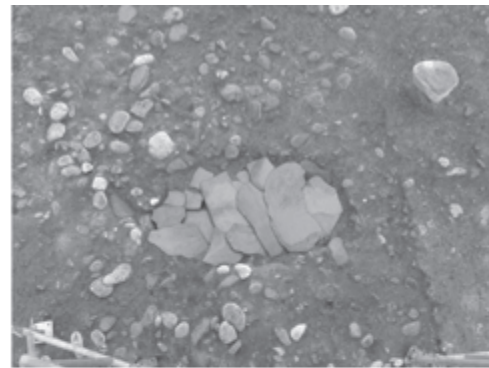
第170図 ST24平・断面図 (S=1/40)

④TAK201302④ST25(箱式石棺墓) (第171図 図版116)

ST25は④区9064グリッドに位置し、主軸方位をW-31.5°-Sにとり、南西から北東方向に構築された集団墓域外の箱式石棺墓である。墓壙は中心長軸上端1.38m、下端1.08m、短軸上端0.80m、下端0.32m、高さ0.33mを測り、楕円形の平面形を呈する。蓋石は4重に平石を鍔積みになっている。石棺は墓壙中央に構築され両小口は板石1枚、両側石は3枚から4枚で構成され裏込め材を挿入している。石棺規模は中心長軸下端1.12m、短軸下端0.30m、高さ0.22mを測る。南西小口幅は0.33m、北西小口幅0.22mを測ることから南西側が頭位と考えられる。床面は敷石が全面に施されている。遺物は出土しなかった。



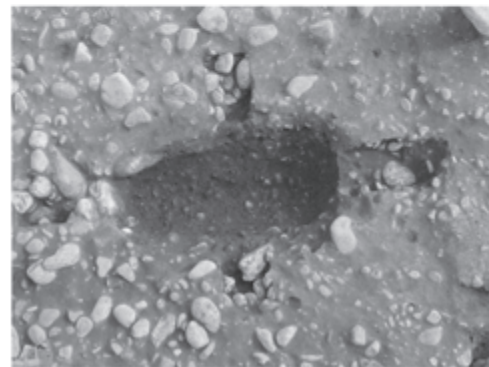
①検出状況



②蓋石3層目検出状況

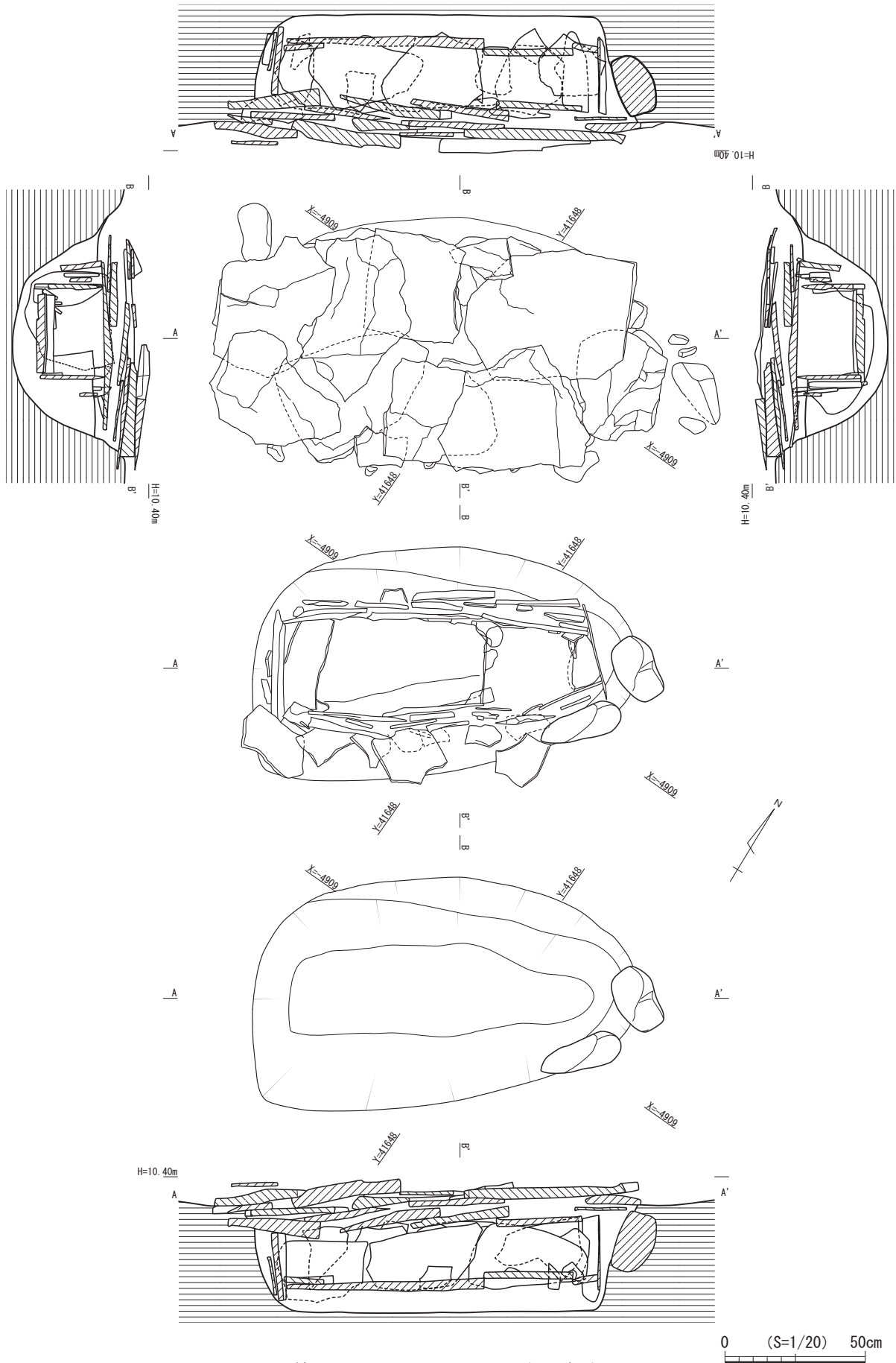


③石棺内完掘状況



④掘方完掘状況

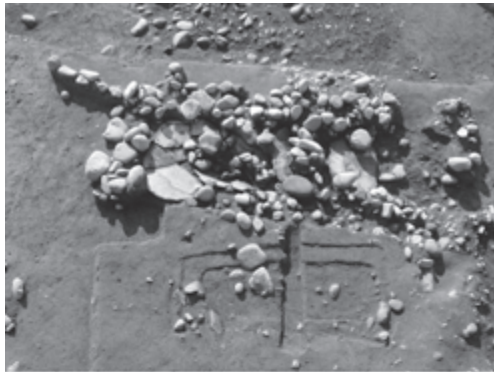
図版116 ST25遺構状況(①~④)



第171图 ST25平·断面图(S=1/20)

④TAK201302①ST26(石蓋木棺墓) (第172図 図版117)

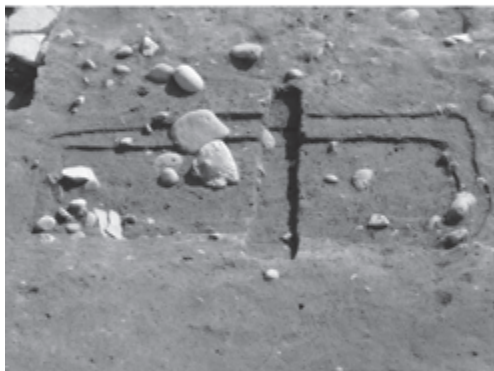
ST26は①区8456グリッドに位置する。ST19、22と隣接する。主軸方位をN-83°-Eにとりほぼ東西方向に構築された石蓋木棺墓である。墓壙は中心長軸上端1.65m、短軸上端0.70m、高さ0.25mを測り長方形の平面形を呈する。蓋石は3枚で墓壙からややずれて検出された。埋葬壙は墓壙のほぼ中央に位置する状況で構築されている。主体部の検出段階から周りに5cm程の周溝が確認でき全体を掘削した結果、床面四隅に幅5~6cm、高さ5cm程の周溝を確認した。この周溝から木棺墓と考えられる。木棺墓の規模は中心長軸下端1.39m、短軸下端0.42m、高さ0.20m程である。遺物は出土しなかった。



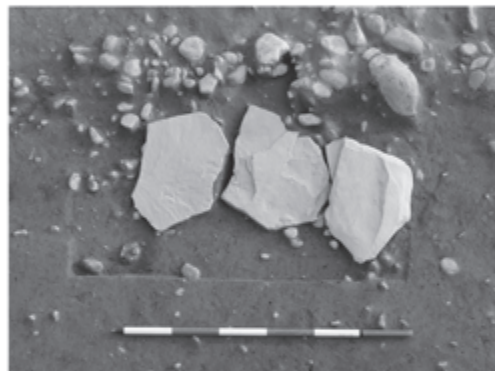
①ST19(上)・ST26(下)棺外堀方検出状況(北から)



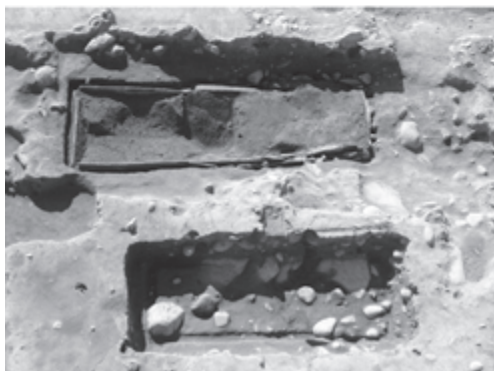
②ST19(上)・ST26(下)同時検出



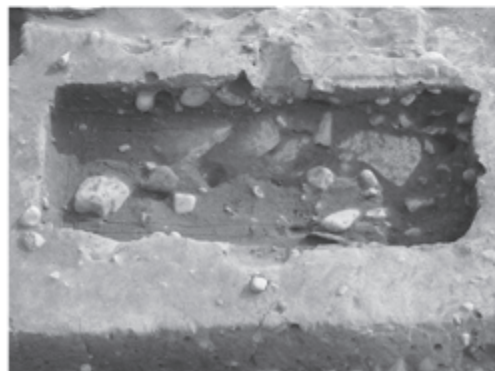
③ST26棺外堀方検出状況(北から)



④石棺検出状況

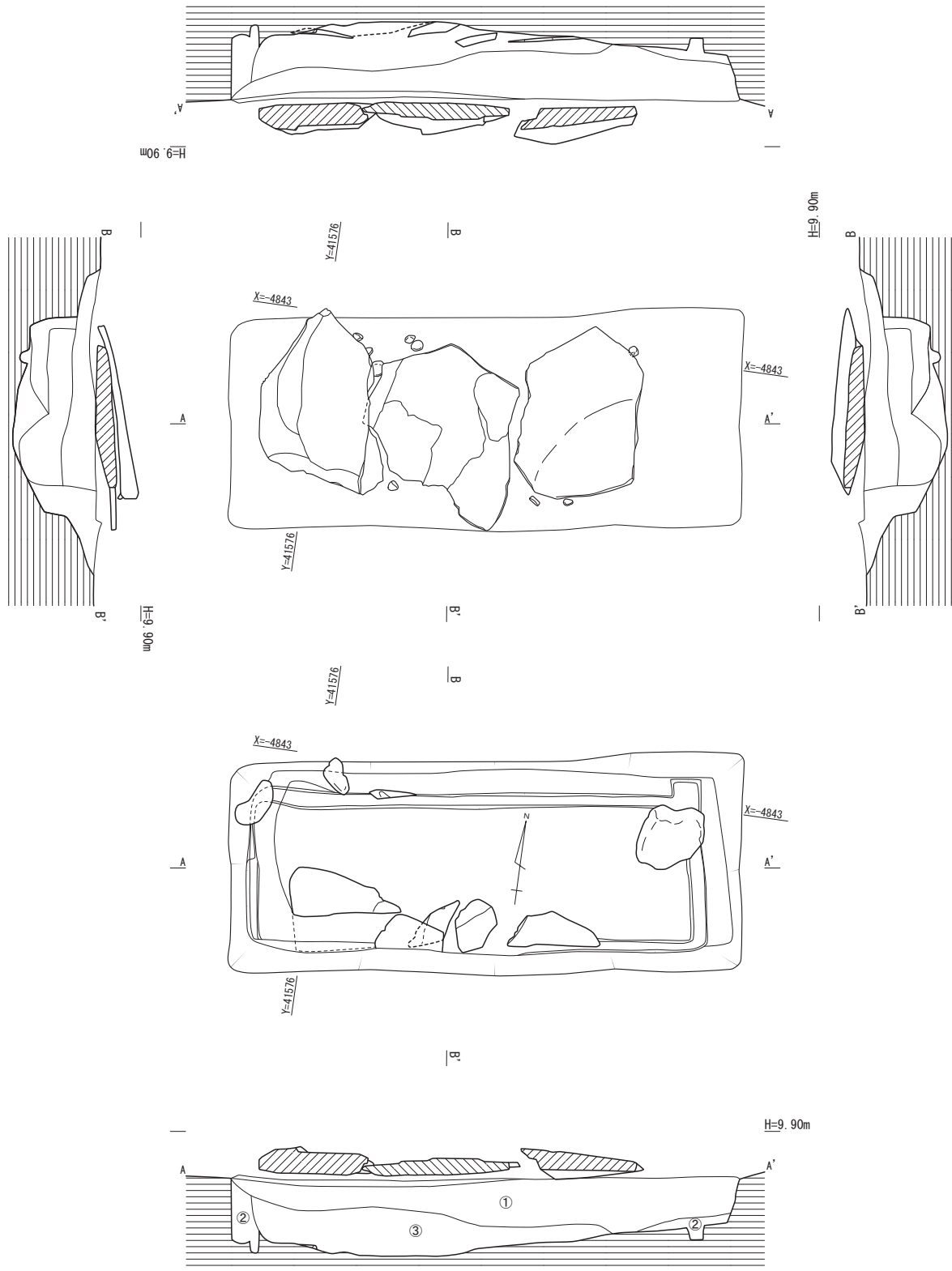


⑤ST19(上)側板小口検出・ST26(下)完掘状況



⑥木棺跡検出状況

図版117 ST26遺構状況(①~⑥)



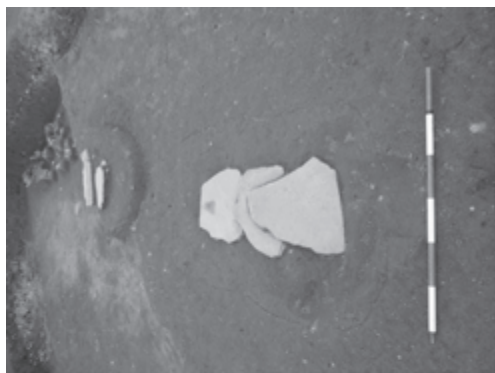
- ①暗褐色 (7.5YR3/4) しまりあり  
φ30mmの小礫5%混じる
- ②同色 しまりあり 粘性あり
- ③同色土 拳大の礫を半数含む 含有なし しまりあり

0 (S=1/20) 1m

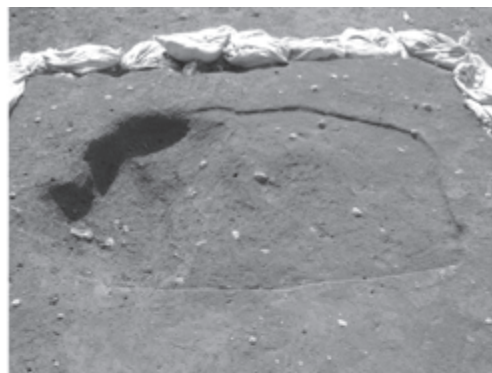
第172図 ST26平・断面図 (S=1/20)

④TAK201302①ST27(石蓋木棺墓) (第173図 図版118)

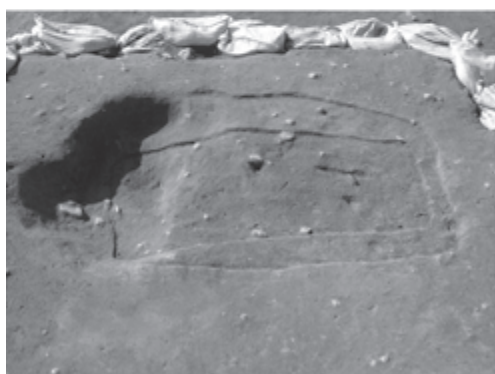
ST27は①区8460グリッドに位置する。主軸方位をE-28°-Sにとりほぼ東南から北西方向に構築された石蓋木棺墓である。墓壙は中心長軸上端1.98m、短軸1.05mで楕円形の平面形を呈する。蓋石は3枚で墓壙中央に位置する。蓋石の記録後、墓壙平面の精査段階で長方形の埋葬壙を検出した。規模は中心長軸上端1.58m、短軸0.75m、高さ0.28mである。床面四隅に幅7~8cm、高さ10cmの周溝を検出したことから木棺墓と考えられる。木棺の規模は中心長軸下端1.25m、短軸下端0.5m、高さ0.2mを測る長方形の平面である。木棺の長軸下端の規模から考えて小児墓の可能性はある。遺物は出土しなかった。



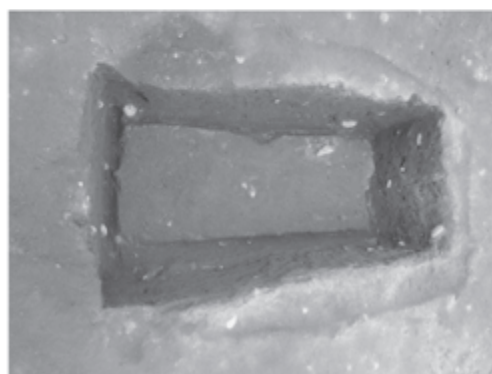
①石棺検出状況



②蓋石を外した状況

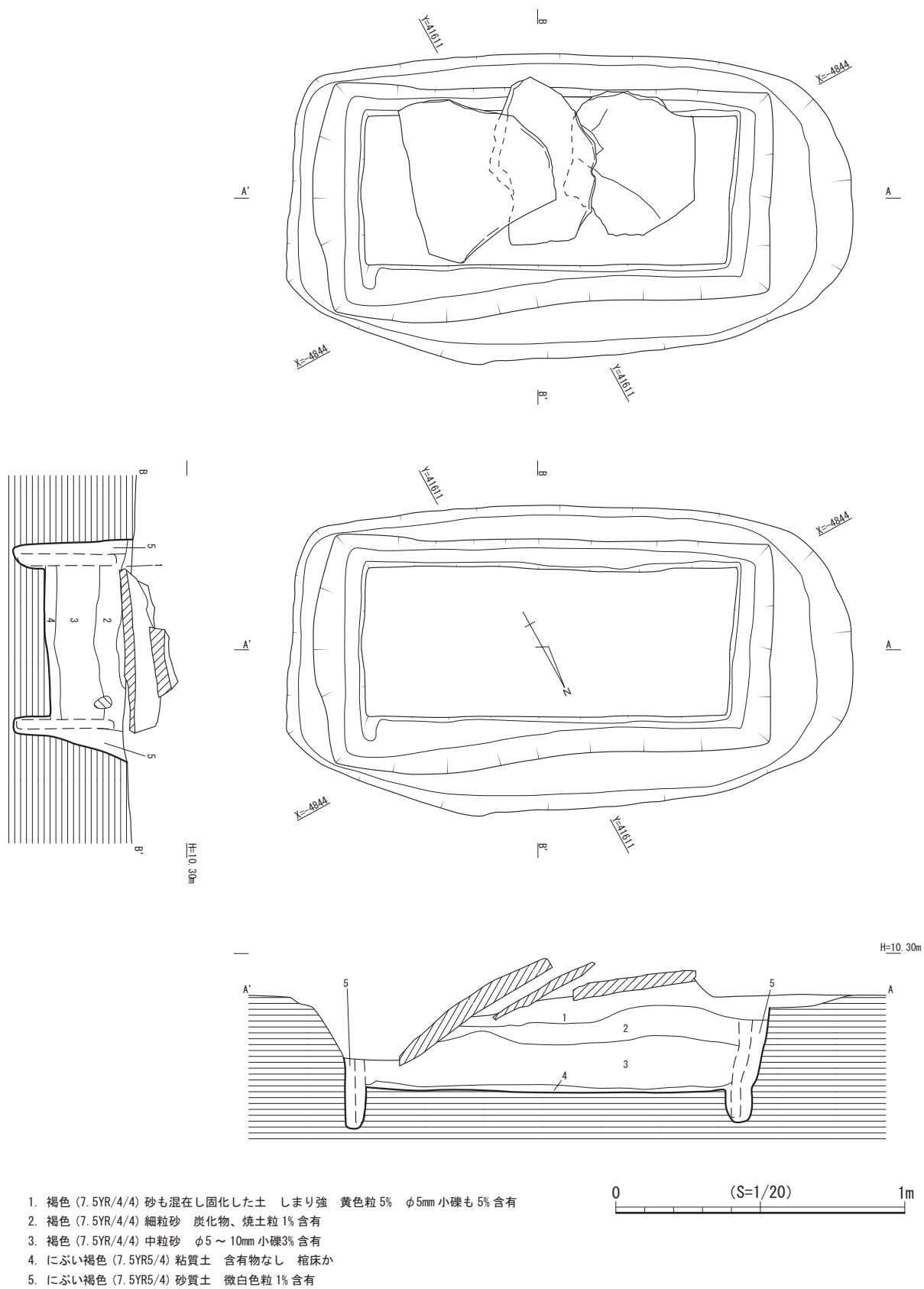


③堀方検出状況



④堀方完掘状況

図版118 ST27遺構状況(①~④)



1. 褐色 (7.5YR/4/4) 砂も混在し固化した土 しまり強 黄色粒 5% φ5mm 小礫も 5% 含有
2. 褐色 (7.5YR/4/4) 細粒砂 炭化物、焼土粒 1% 含有
3. 褐色 (7.5YR/4/4) 中粒砂 φ5 ~ 10mm 小礫3% 含有
4. にぶい褐色 (7.5YR5/4) 粘質土 含有物なし 棺床か
5. にぶい褐色 (7.5YR5/4) 砂質土 微白色粒 1% 含有

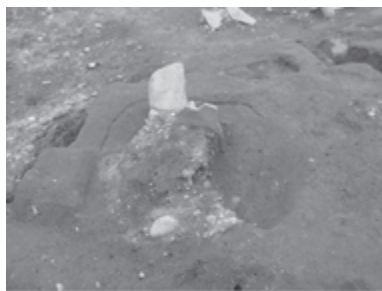
0 (S=1/20) 1m

第173図 ST27平・断面図(S=1/20)

④9TAK201302①ST28(木棺墓) (第174・175図 図版119・120 表65)

ST28は①区8460グリッドに位置する。主軸方位はN-65°-Eで北東から南西方向に構築された木棺墓である。検出時の状況は長軸1.25m、短軸0.95m、高さ0.25m程で、小、中礫及び弱粘質土混じりのマウンド状を呈している。このマウンドに板状の薄い立石(標石)、0.8m×0.2m程の楕円形大石、板状の0.95m×0.55m程の大石、0.5m×0.25mの板状の石を検出した。これらの板石を記録した後に立石(標石)を残しながら長軸方向にマウンドの堆積状況を確認した。堆積は高さ0.25mを測り4層に分層できる。マウンドを掘削後、主体部の検出を開始した結果、長方形のプランを呈した土坑を検出した。規模は中心長軸上端1.64m、下端1.27m、短軸上端1.02m、下端0.68m、高さ0.3mを測る。また床面四隅は幅7~12cmの溝を検出した。北東小口幅下端は0.62m、南西小口幅は0.56mを測る。このことから北東側が頭位と思われる。板状の薄い立石(標石)は土坑長軸のほぼ中央に位置している。

遺物は弥生土器の壺口頸部、胴部片、高杯杯部片が覆土から出土した。770は壺胴部片である。二重の刻目三角凸帯を有する。内外面共にハケメ調整を施す。771は高杯杯部片で口縁部は欠損している。内外面はハケメ調整、杯底部は指圧痕が残る。772、773は壺の口頸部片である。三角凸帯を有す。774は壺胴部片である。内外面に粗いハケメ調整を施す。



①検出状況



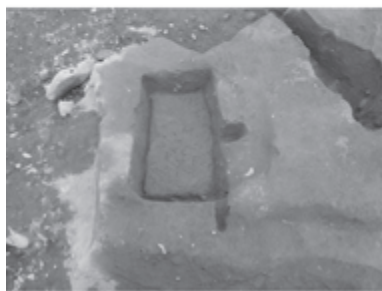
②ST28と標石4の位置関係



③長軸断面状況



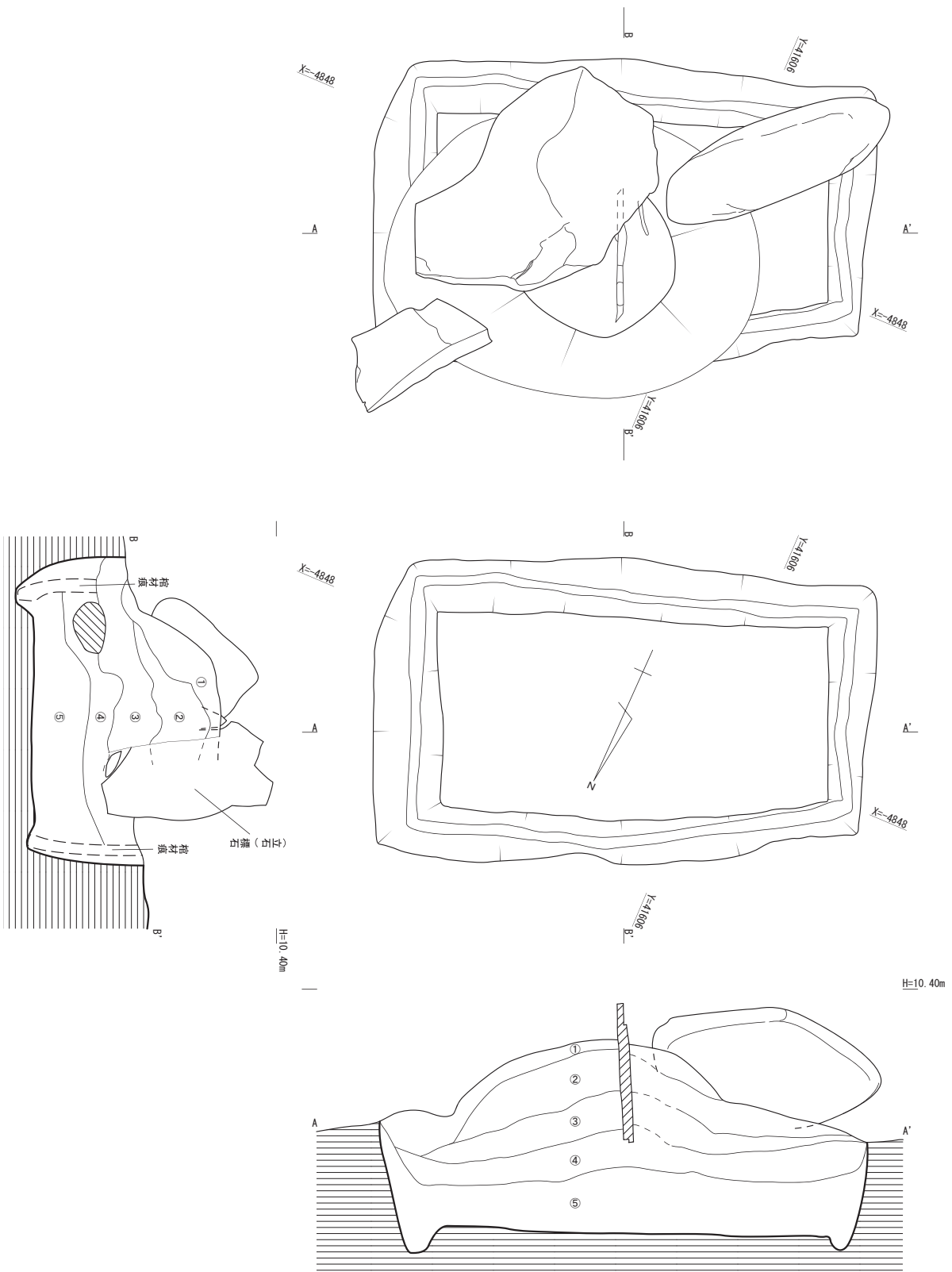
④短軸断面状況



⑤掘方完掘状況

図版119 ST28遺構状況(①~⑤)

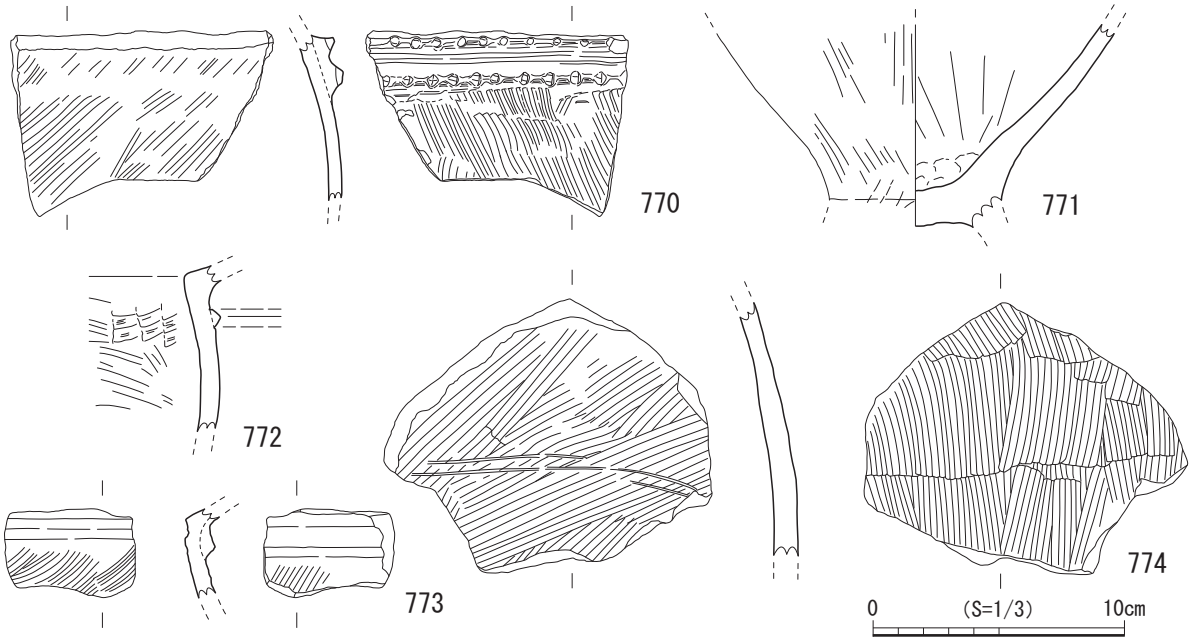




- ① 黒褐 (10YR2/2) 砂レキ φ2mm以上の極粗粒砂、φ1cm~30cmの礫で構成 盛り土
- ② 褐色 (10YR4/4) 砂層 極細粒砂 含有物なし 盛り土
- ③ にぶい黄褐 (10YR4/3) 細粒砂 ややしまる φ2cm小レキをこくわずかに含む 盛り土
- ④ 灰黄褐 (10YR4/2) 極細粒砂 しまり弱 φ5cm円礫数えられるほど 埋土
- ⑤ 灰黄褐 (10YR4/2) 極細粒砂 ややしまる 埋土

0 (S=1/20) 1m

第174図 ST28平・断面図(S=1/20)



第175図 ST28出土遺物実測図(S=1/3)



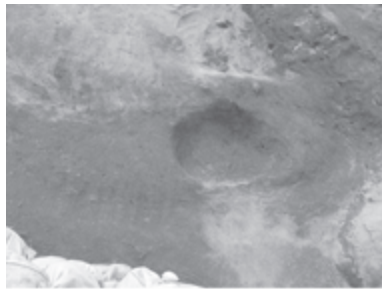
図版120 ST28出土遺物

第65表 ST28出土土器観察表

遺物番号	器種	部位	法量(cm)			調整		色調		焼成	胎土	備考
			口径	器高	底径	外面	内面	外面	内面			
770	壺	胴部	—	—	—	ハケメ	ハケメ	7.5YR8/4 浅黄橙	10YR8/4 浅黄橙	良好	石英、角閃石	二重の刻目三角凸帯を有す
771	高杯	杯部	—	—	—	ハケメ	ハケメ	2.5YR7/2 明赤灰	5YR7/4 にぶい橙	良	石英、雲母	口縁部欠損 底部に指圧痕が残る
772	壺	口頸部	—	—	—	ハケメ	ハケメ	10YR4/2 灰黄褐	10YR8/4 浅黄橙	良好	長石、角閃石	三角凸帯を有す
773	壺	口頸部	—	—	—	ハケメ	ハケメ	10YR7/6 明黄褐	7.5YR8/4 浅黄橙	良好	長石、赤色粒子	三角凸帯を有す
774	壺	胴部	—	—	—	粗い ハケメ	粗い ハケメ	2.5YR4/8 赤褐	10YR7/3 にぶい黄橙	良好	石英、雲母 赤色粒子	

⑤TAK201302①ST31(土坑墓) (第176図 図版121)

ST31は①区8460グリッドに位置する。主軸方位をW-3°-Sにとり東西方向に構築された土坑墓である。砂質のため1/2程を掘りすぎ、形状を不明にした責任は大きい。残存する規模は中心長軸1.06m+、短軸0.68m、高さ0.1mである。残存部中央の0.8m×0.15mの範囲に朱が施されていた。全体の状態から土坑墓と考えられる。遺物は出土しなかった。



①検出状況

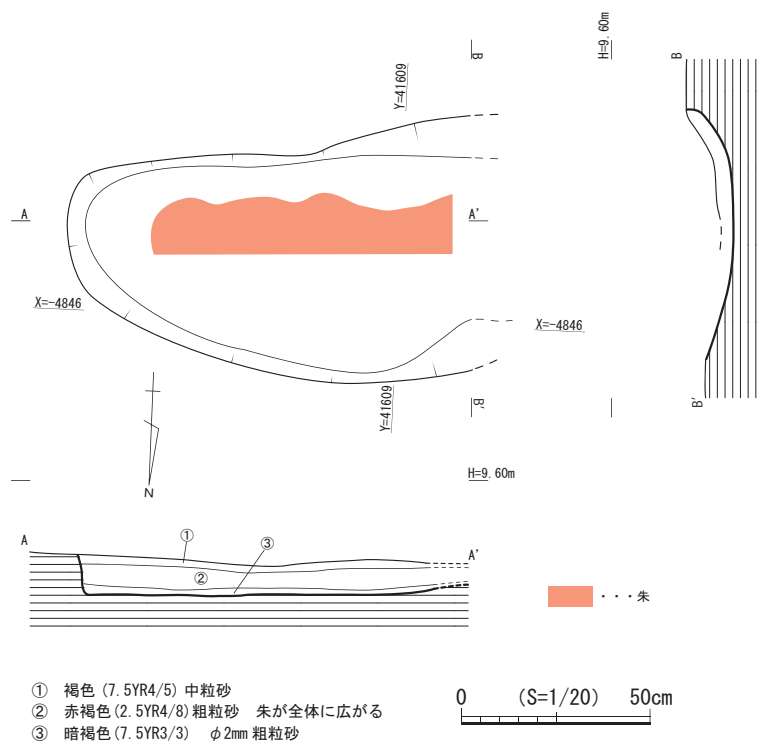


②断面状況



③朱

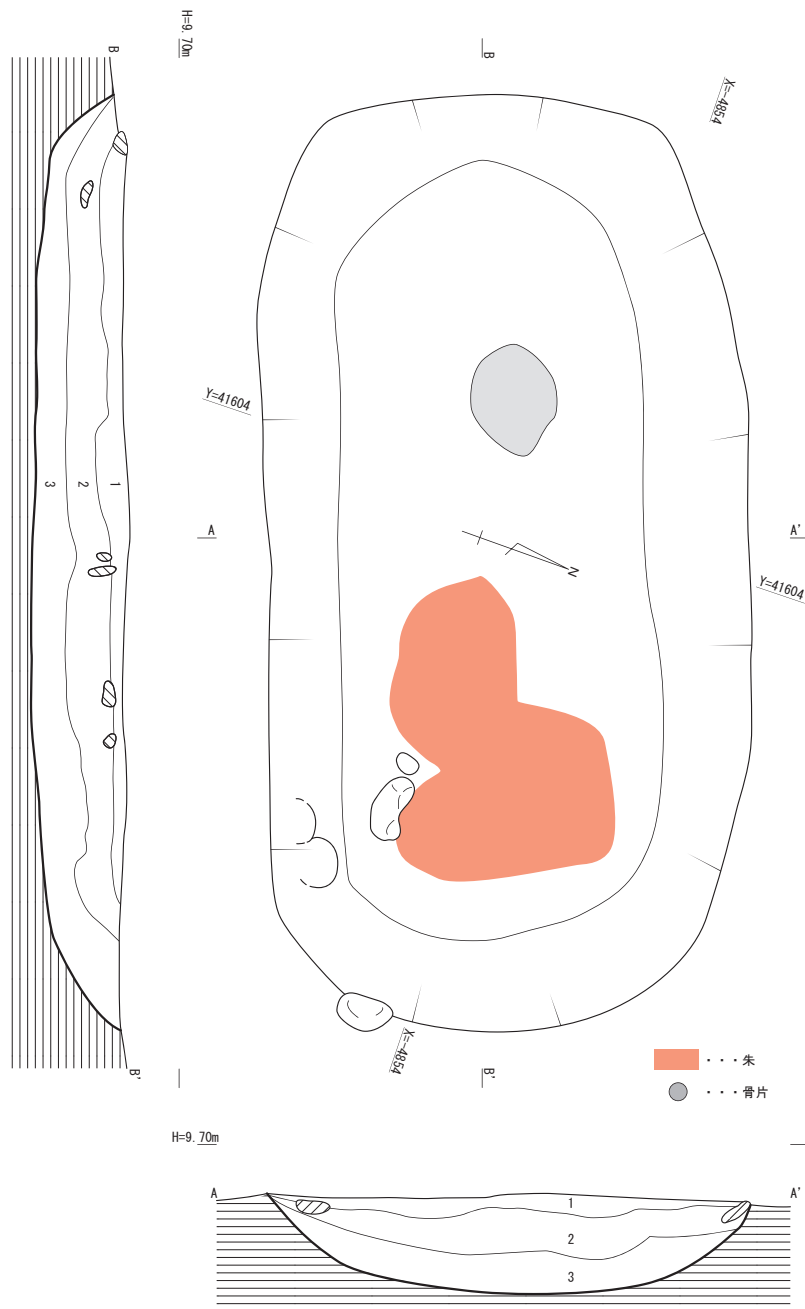
図版121 ST31遺構状況(①~③)



第176図 ST31平・断面図(S=1/20)

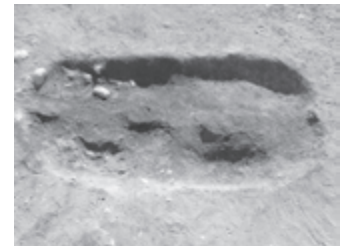
⑤TAK201302①ST32(土坑墓) (第177図 図版122)

ST32は①区8460グリッドに位置する。主軸方位をN-70°-Eにとる。ST8の西側に構築された土坑墓である。規模は中心長軸上端2.47m、下端2.05m、短軸上端1.25m、下端0.8m、高さ0.25mを測る楕円形の平面形を呈する。全体的に壁の立ち上がりは緩やかである。北東側小口幅は0.85m、南西側小口幅は0.75mを測ることから頭位は北東側と考えられる。また頭位付近に0.8m×0.55m幅の不整形の高まりに朱が確認されたことも頭位との関連が考えられる。足位付近では骨片が数点確認できた。遺物は出土しなかった。

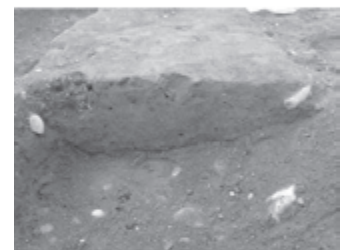


1. 褐色 (7.5YR4/6) 砂質土、ややしまる 炭化物が(φ10mm)5%、焼土1%、φ50mmの円礫が5%混じる 一部固くなっている(被熱?)
2. 褐色 (7.5YR4/6) 砂層 しまり弱い 含有物なし
3. 暗赤褐色 (2.5YR3/4) 砂質だが、粘性も感じる 朱(Hg?)が染み渡る層

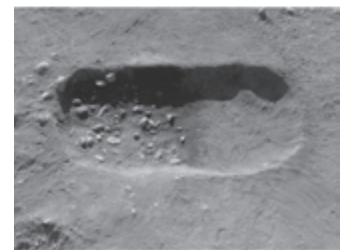
第177図 ST32平・断面図(S=1/20)



①朱、骨検出状況



②短軸断面状況

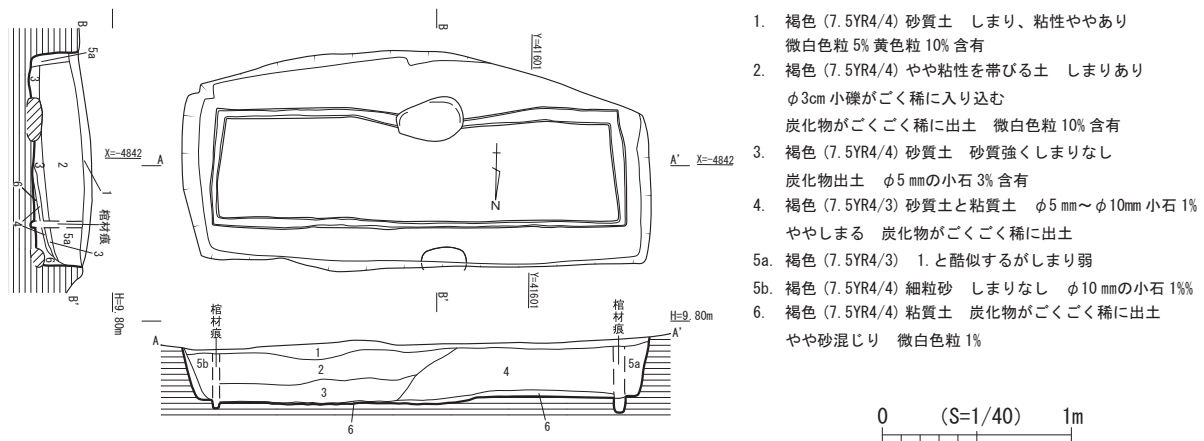


③掘方完掘状況

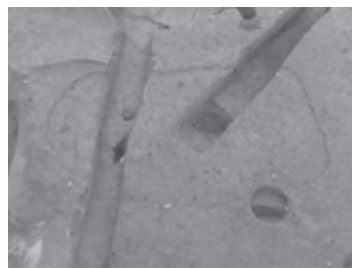
図版122 ST32遺構状況  
(①~③)

⑤TAK201302①ST34(木棺墓) (第178図 図版123)

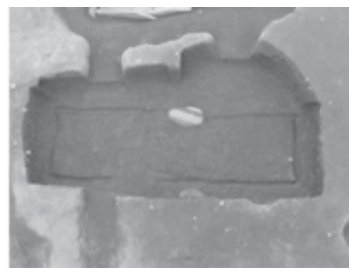
ST34は①区8460グリッドに位置する。ST25が南側に隣接する。主軸方位をN-85°-Eにとりほぼ東西に構築された木棺墓である。墓壙規模は中心長軸上端2.48m、短軸上端1.14mを測る、やや南側が膨らむ長方形を呈する。その中央部に埋葬壙を構築する。規模は中心長軸上端2.18m、下端2.08m、短軸上端0.6m、下端0.5m、高さ0.24mを測る。両小口下端幅は0.5mであることから頭位の位置は判断できない。床面は四隅に5~7cm程の溝跡を確認したことから木棺墓と判断した。棺内外から遺物は出土しなかった。



第178図 ST34平・断面図 (S=1/40)



①検出状況

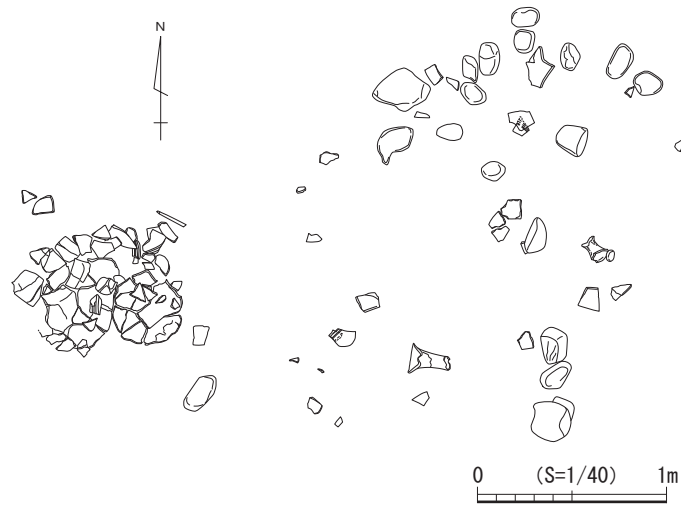


②完掘状況

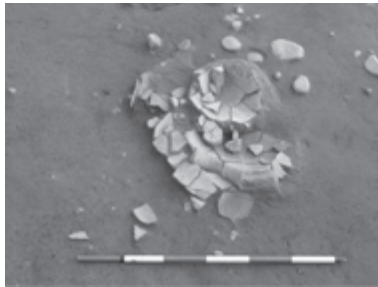
図版123 ST34遺構状況(①・②)

⑤TAK201202①ST35(甕棺) (第179・180図 図版124・125 表66)

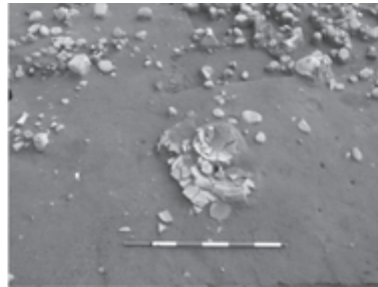
ST35は2012年度(平成24)に調査した②区8458グリッド(年度またぎの調査のため2013年度は①区8458グリッド)の甕棺(壺棺)である。遺構は後世の洪水等で墓壙プラン等が破壊され棺自体が移動した状況で検出した。甕棺(壺棺)の出土状況は原形を留めておらず破片でややまとまって出土した。775は甕口縁部から胴部の破片である。内外面は斜め方向に粗いハケメ調整を施す。776は壺である。口縁部は欠損するがその他はほぼ完形に接合復元できた。器高(残存高)57.3cm、胴部最大径44.8cm、底径9cmを測る。口縁部から底部付近まで縦又は斜め方向にハケメ調整を施す。口頸部の三角凸帯、胴部最大径より下位に二重の三角凸帯を施し刻目を有す。また胴部の一部には朱塗りが行われている。底部は僅かに凸レンズ状を呈する平底で端部はやや丸く仕上げられている。壺の大きさから考えて乳幼児棺であろう。時期は弥生時代後期後半頃と思われる。



第179図 ST35平面図 (S=1/40)



①検出状況 その1



②検出状況 その2



③刀子出土状況

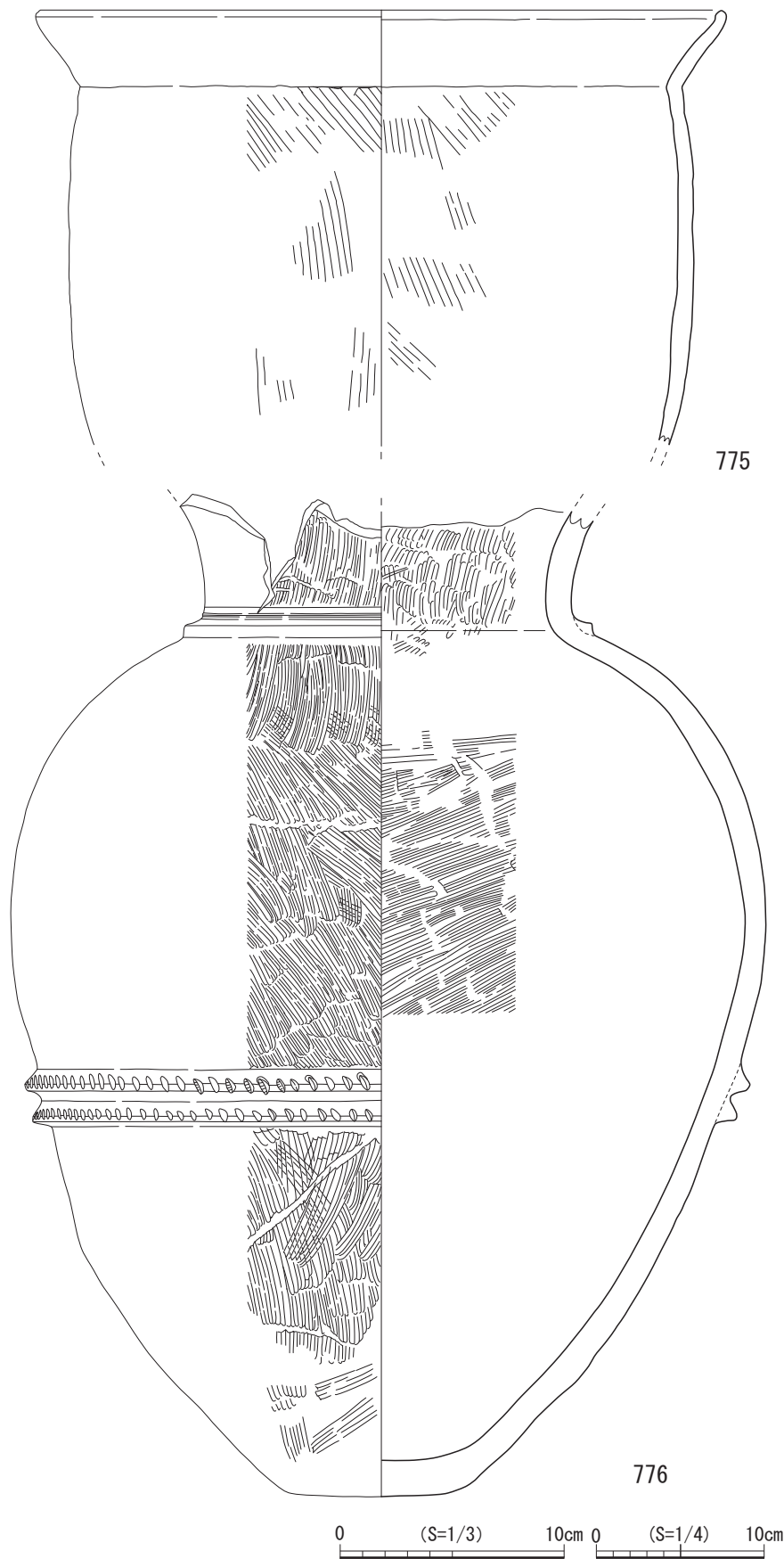
図版124 ST35遺構状況(①~③)



図版125 ST35出土遺物

第66表 ST35出土土器観察表

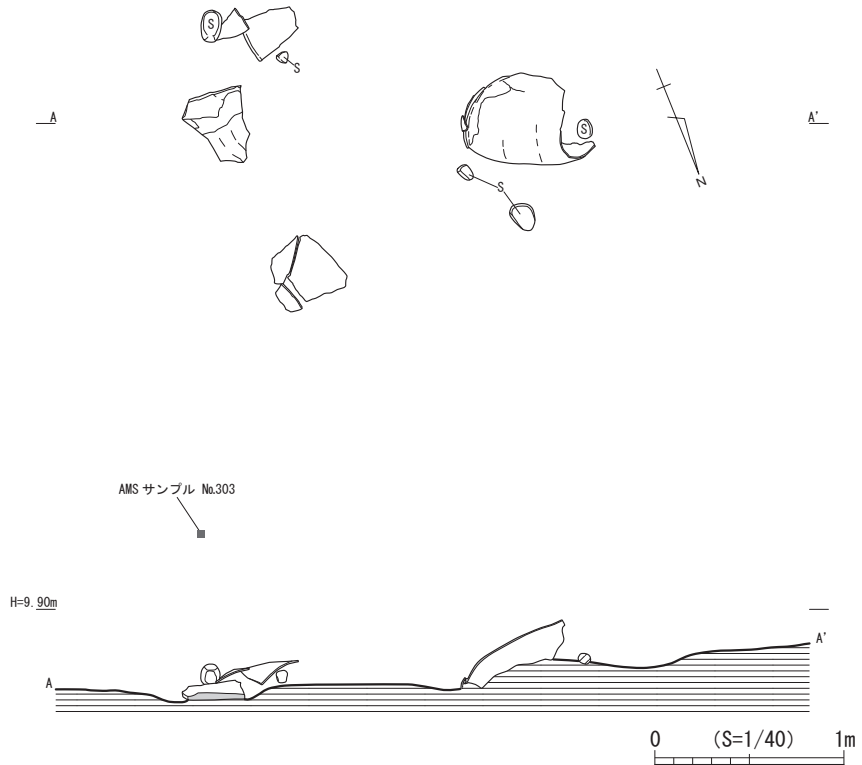
遺物番号	器種	部位	法量 (cm)			調整		色調		焼成	胎土	備考
			口径	器高	底径	外面	内面	外面	内面			
775	甕	口縁部～胴部	—	—	—	斜め方向 粗いハケメ	斜め方向 粗いハケメ	7.5YR4/2 灰褐色	7.5YR5/4 にぶい褐色	良	雲母	
776	壺	ほぼ完形	—	(残存高) 57.3	9.0	ハケメ	ハケメ	7.5YR7/4 にぶい橙	7.5YR7/3 にぶい橙	良好	石英、角閃石 赤色粒子	胴部最大径44.8cm、 胴部に二重の三角凸帯 を有す



第180図 ST35出土遺物実測図 (No. 775はS=1/3, No. 776はS=1/4)

⑤4TAK201302①ST36(甕棺) (第181・182図 図版126・127 表67)

ST36も ST35と共に2012年度(平成24)に調査されたものである。②区8458グリッド(年度をまたいだ調査のため2013年度は①区8458グリッド)に位置する甕棺墓である。甕棺は胴部半分が3m程離れた状況で出土したことから原位置を保っていないことが確認された。よって墓壙等の情報は得られなかった。777は甕で口縁部、底部が一部欠損する。復元口径46.5cm、器高(残存高)65cm、胴部最大径50.7cmを測る。口縁部は一部残存し、くの字形を呈し、口頸部に一重の台形状の凸帯を有する。内外面は縦、横、斜めにハケメ調整を丁寧に行っている。胴部最大径は中心より上位に位置する。甕の規模から乳幼児棺と考えられる。時期は弥生時代後期前半頃と思われる。



第181図 ST36平・断面図 (S=1/40)



①検出状況 その1



②検出状況 その2



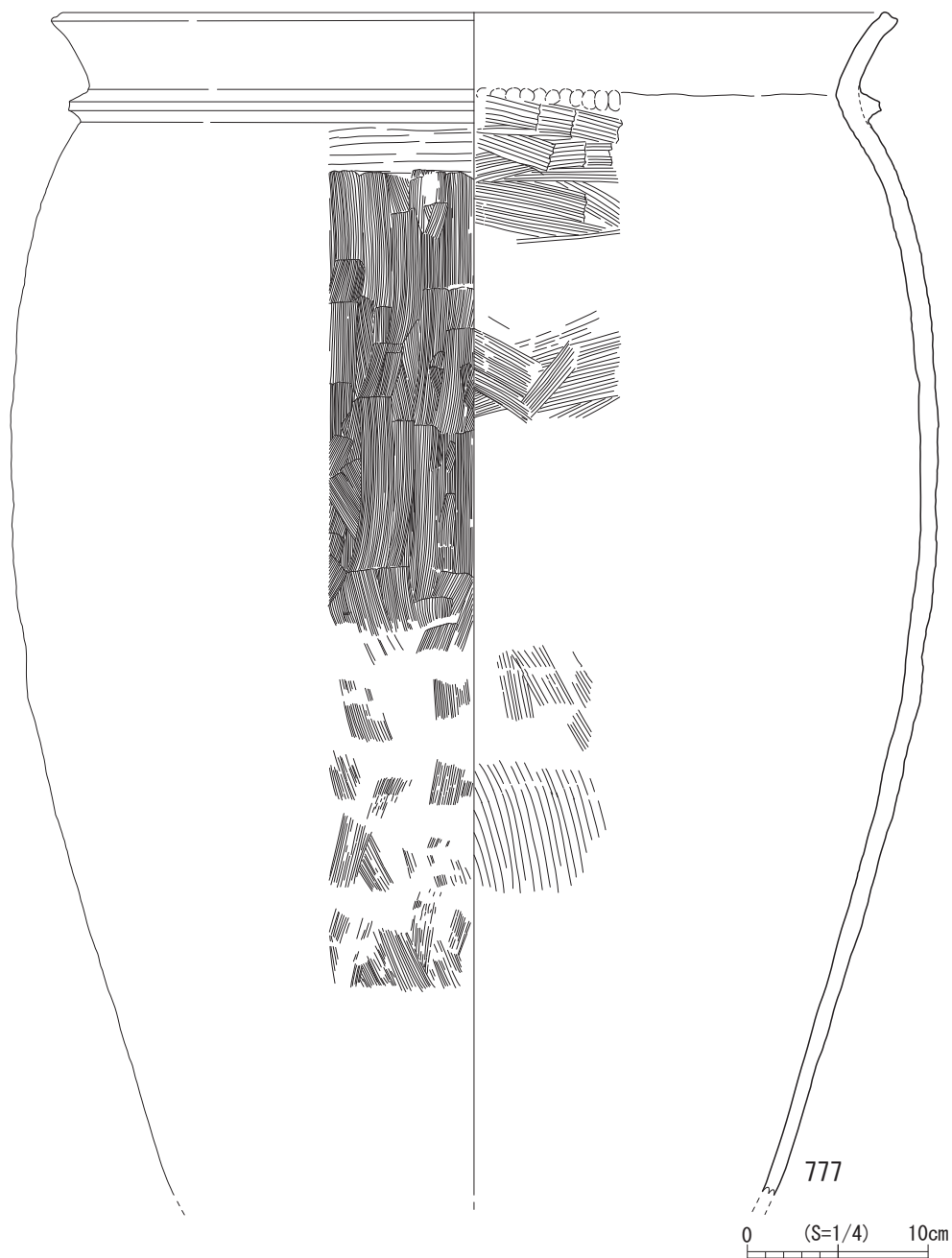
③検出状況 その3

図版126 ST36遺構状況(①~③)



図版127 ST36出土遺物





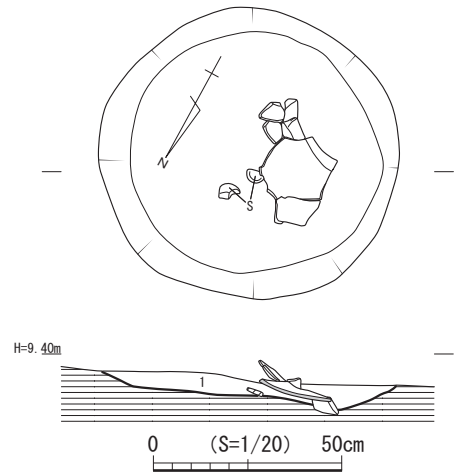
第182図 ST36出土遺物実測図 (S=1/4)

第67表 ST36出土土器観察表

遺物 番号	器種	部位	法量 (cm)			調整		色調		焼成	胎土	備考
			口径	器高 <small>(残存高)</small>	底径	外面	内面	外面	内面			
777	甕	口縁部～ 胴部	(46.5)	<small>(残存高)</small> 65.0	—	ハケメ	ハケメ	10YR7/6 明黄褐	7.5YR7/6 橙	良好	長石、雲母 角閃石	胴部最大径50.7cm。口 頸部に一重の台形状凸 帯を有す

⑤TAK201302①ST37(甕棺) (第183・184図 図版128・129 表68)

ST37は①区8456グリッドに位置する。主軸方位をN-63°-Eにとる甕棺墓である。遺構上面がかなり削平されていることから床面近くしか残存していない。そこに甕棺の口縁部～胴部片が出土した。残存形状は円形で規模は長軸0.79m、短軸0.78m、深さ9cm程である。778は甕で復元口径48cm、胴部最大径47.4cmを測る。口縁部はくの字口縁を有し、端部は丸く仕上げられている。口唇部に三角凸帯が貼り付けられ、胴部最大径下位に一重の刻目三角凸帯を有す。口縁部～胴部にかけての内外面には斜め方向にハケメ調整を施す。時期は弥生時代後期後半頃と思われる。



1. 灰褐色(7.5YR4/2)粘質土 砂が少し混じる  
微白色粒1%、鉄分のシミが全体に広がる  
甕棺掘り込み覆土

第183図 ST37平・断面図(S=1/20)



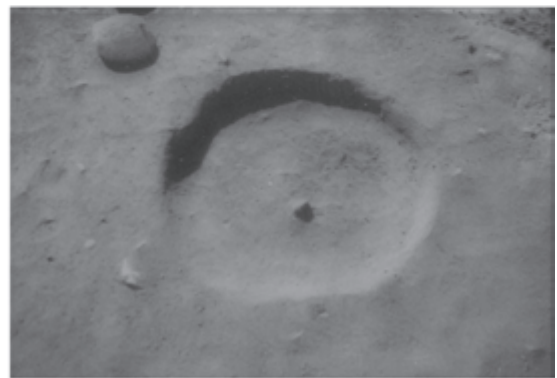
①検出状況



②半截状況

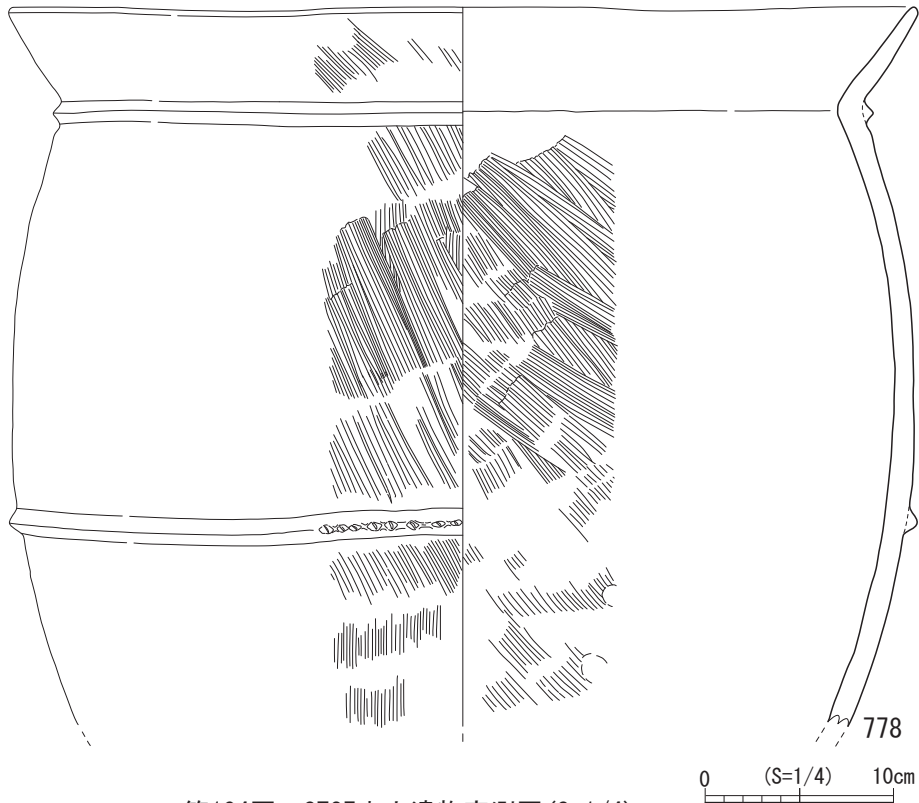


③遺物出土状況



④完掘状況

図版128 ST37遺構状況(①～④)



第184図 ST37出土遺物実測図 (S=1/4)



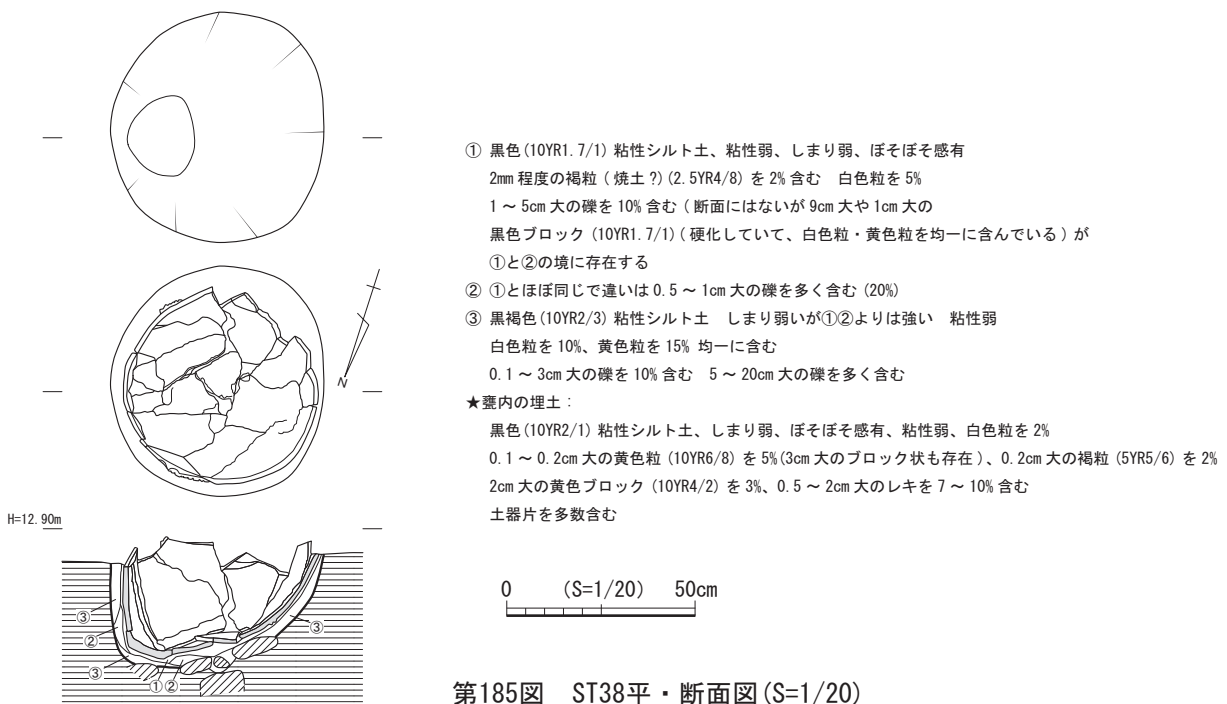
図版129 ST37出土遺物

第68表 ST 37出土土器観察表

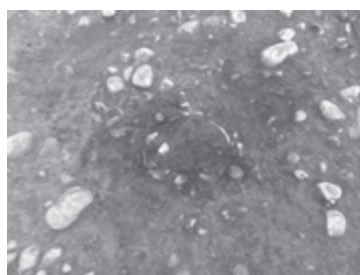
遺物番号	器種	部位	法量 (cm)			調整		色調		焼成	胎土	備考
			口径	器高	底径	外面	内面	外面	内面			
778	甕	口縁部～胴部	(48.0)	(既存高) 38.0	—	斜め ハケメ	斜め ハケメ	7.5YR8/2 灰白	7.5YR8/2 灰白	良好	石英、雲母 角閃石	胴部最大径44.7cm、口 唇部に台形状凸帯を、 胴部に一重の刻目三角 凸帯を有す

⑤⑥TAK201302①①ST38(甕棺) (第185・186図 図版130・131 表69)

ST38は①①区0876グリッドに位置する甕棺(壺)墓である。主軸方位をN-73°-Eにとる。検出時の墓壙の平面形は円形で覆土は黒色土である。規模は長軸0.61m、短軸0.55m、深さ0.29mである。甕棺は底部～胴部が原位置を保っており胴部上部が破損していることから上面はかなり削平されている状況である。779は甕で口縁部は欠損する。口頸部の三角凸帯～底部までが概ね接合復元できた。胴部は二重の刻目三角凸帯を有す。底部は平底で端部はやや丸い。内外面全体に縦、斜め方向にやや細かなハケメ調整を施している。復元器高は60cm+である事から乳幼児棺であろう。時期は弥生時代後期後半頃の所産か。



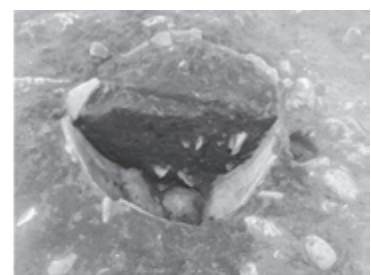
第185図 ST38平・断面図(S=1/20)



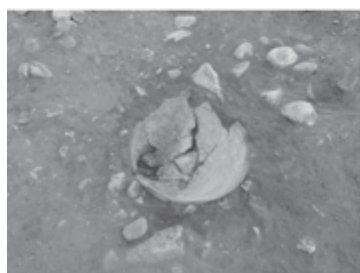
①検出状況



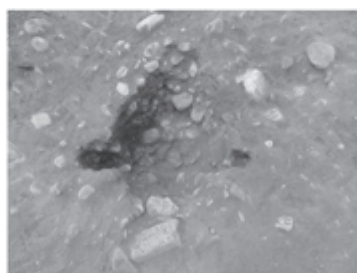
②甕検出状況



③半截状況

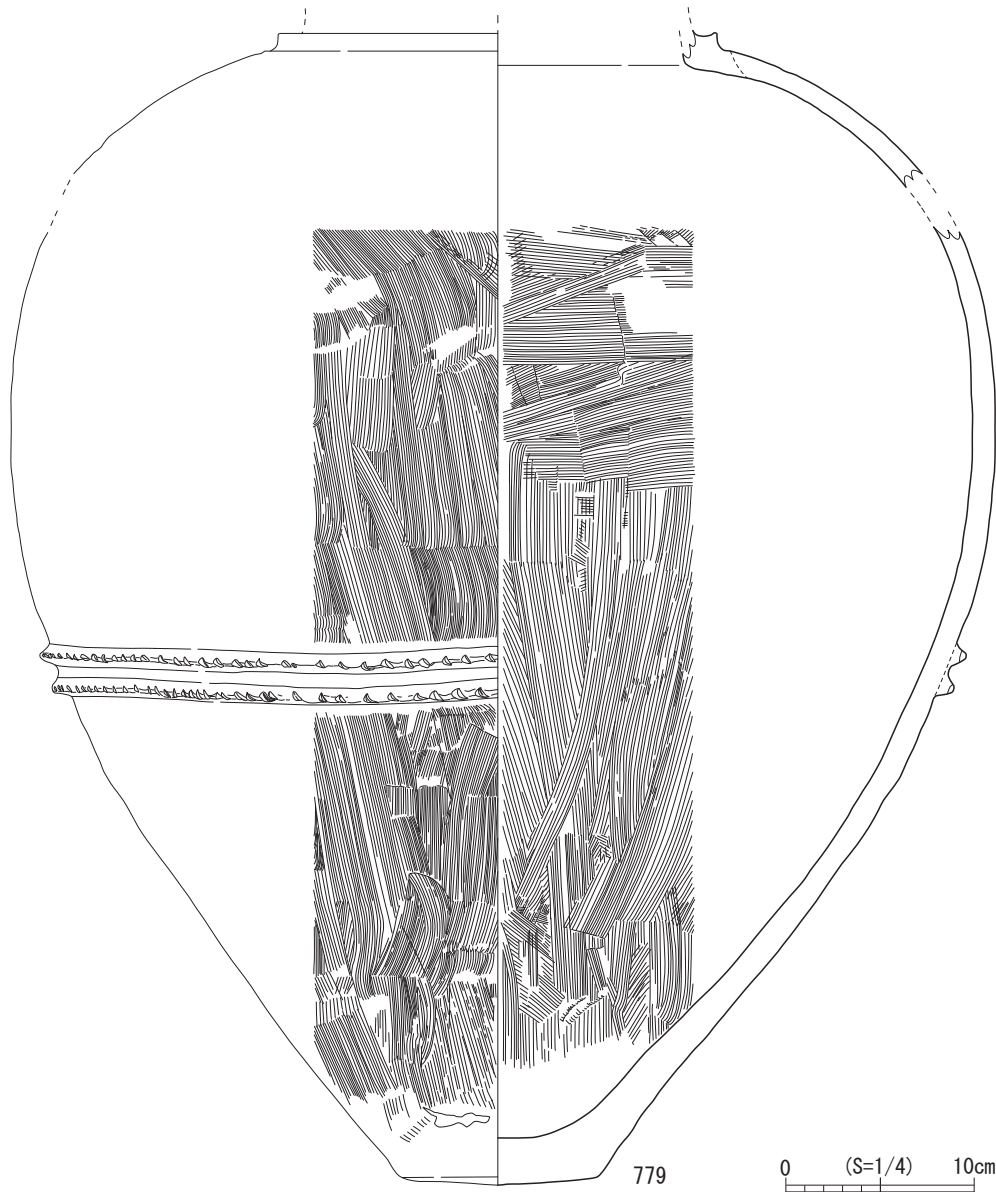


④完掘状況



⑤掘方完掘状況

図版130 ST38遺構状況(①～⑤)



第186图 ST38出土遺物実測図 (S=1/4)



図版131 ST38出土遺物

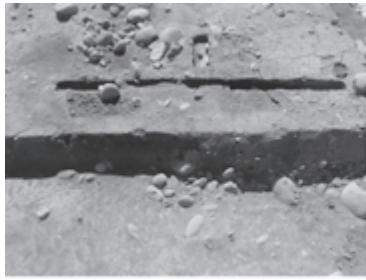
第69表 ST 38出土土器観察表

遺物 番号	器種	部位	法量 (cm)			調整		色調		焼成	胎土	備考
			口径	器高	底径	外面	内面	外面	内面			
779	甕 (壺)	胴部～ 底部	—	60+	10.8	縦、斜め方向 ハケメ	縦、斜め方向 ハケメ	7.5YR7/4 にぶい橙	7.5YR8/2 灰白	良好	長石、石英、雲母	胴部最大径52cm、二重 の刻目三角凸帯を有す

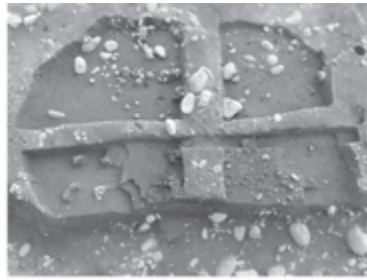
⑤TAK201302①祭祀遺構1 (第187・188図 図版132・133 表70・71)

祭祀遺構1は①区8456グリッドに位置する。主軸(長軸)方位はN-3°-Wをとりほぼ南北方向に構築された土坑である。規模は長軸(南北方向)2.6m+、短軸(東西方向)1.55m+を測り、平面形は不正楕円形を呈する。この遺構の中心部に長軸1.1m、短軸0.8m、深さ0.5m程の楕円形の土坑が構築されている。遺構掘削は十字ベルトを残し、土層確認を実施しながら掘削を行う方法を取り進めた。遺物の出土状況は検出時から骨片が大量に出土したことから詳細な記録を取りながら掘削を実施した。骨片は1層上面から2層上面までの20cm程に集中し、火葬骨の分布範囲は土坑を中心に東西3.4m、南北2.8mの広がりを確認した。特に土坑の北側に集中する。土坑の堆積土層は深さ0.5mで3層に分層できる。2層目上面までが埋まった段階で火葬骨の集中が確認できた。出土遺物はガラス小玉(紺色)、甕、高杯、短頸小形壺、刀子片等が出土した。甕は遺構南西側壁際に原位置を保ったと思われる状態で床面に口縁部を上にして置かれていた。以下出土土器について記す。

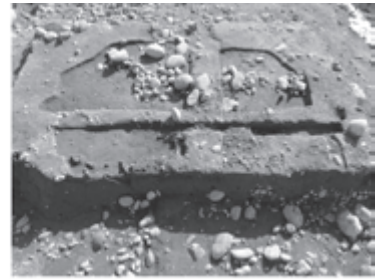
780は鉢でほぼ完形品であるが左右アンバランスである。口縁端部は丸くやや内側に内湾する。内面は縦、斜め方向にランダムにハケメ調整が施され、外面はナデ調整を行っているためハケメ調整は薄い。底部は平底である。781は短頸壺の口縁部～胴部片である。口縁部は短く外湾し端部は丸い。内外面はハケメ調整の後にナデ調整を行い丁寧な仕上げである。外面に僅かな斜め方向のハケメ痕が残る。782は甕で口縁部の一部が欠損するがその他はほぼ完形品である。この土器は土坑床面直上に置かれた土器である。口縁部はくの字口縁で端部は丸い。胴部は最大径が中央にある。胴部に一部に3～4cm程の孔を開けている。底部は平底であるが僅かに膨らみをもつ。外面はハケメ調整後にナデ調整を行っており僅かにハケメ痕が残る。783は高杯形土器で完形品である。口縁部は外反気味で端部は丸い。口頸部に刻目凸帯を有する。杯部は丸みがある。脚部はやや開き端部は丸い。外面は脚部にハケメ調整が残る。全体的に丁寧な作りである。784、785はガラス小玉でいずれも紺色の色調で、材質はカリガラスである。土器の時期は782、783の土器から弥生時代後期前半頃と考えられる。



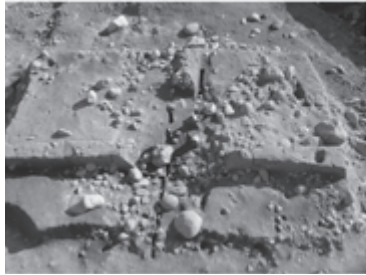
①焼骨検出状況



②SK1骨片検出状況



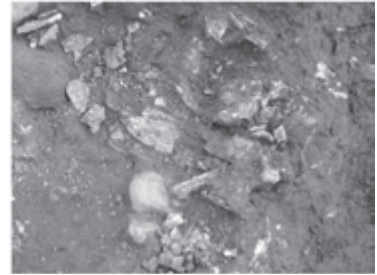
③SK1検出状況



④祭祀遺構1出土状況

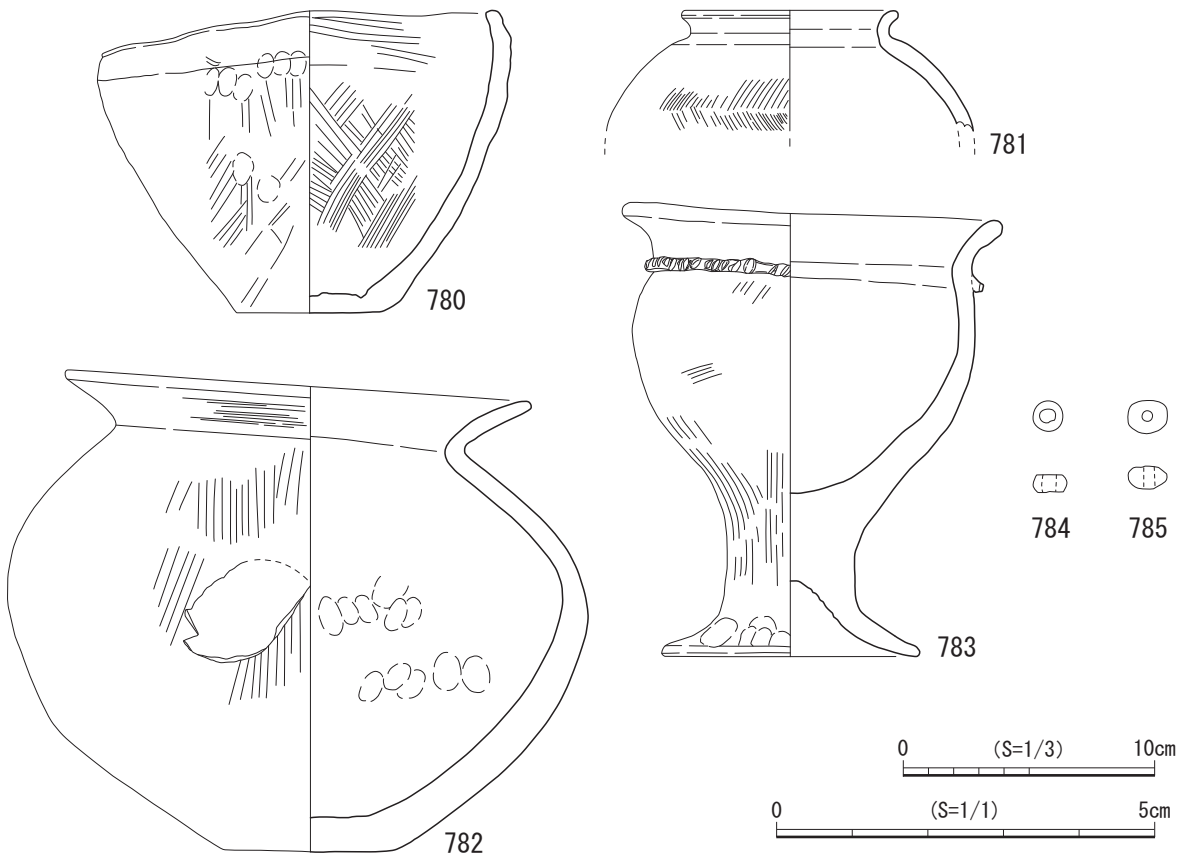


⑤祭祀供献出土状況



⑥密骨状況(西から)

図版132 祭祀遺構1遺構状況(①~⑥)



第187図 祭祀遺構1出土遺物実測図(No. 784・785はS=1/1, 他はS=1/3)



図版133 祭祀遺構1出土遺物

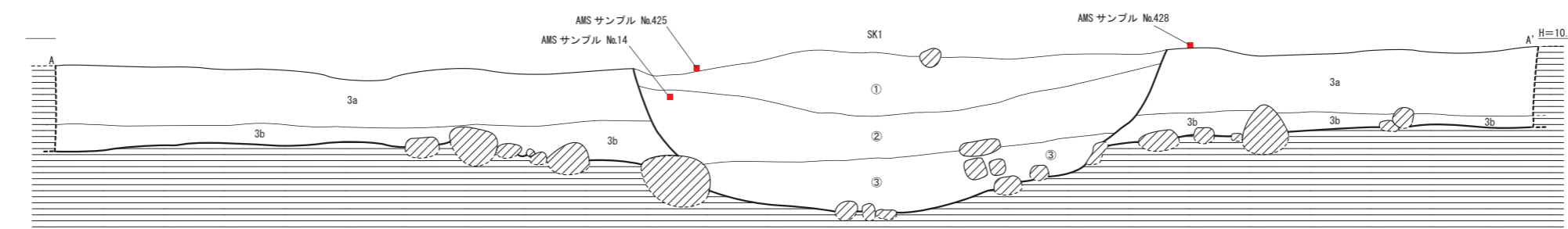
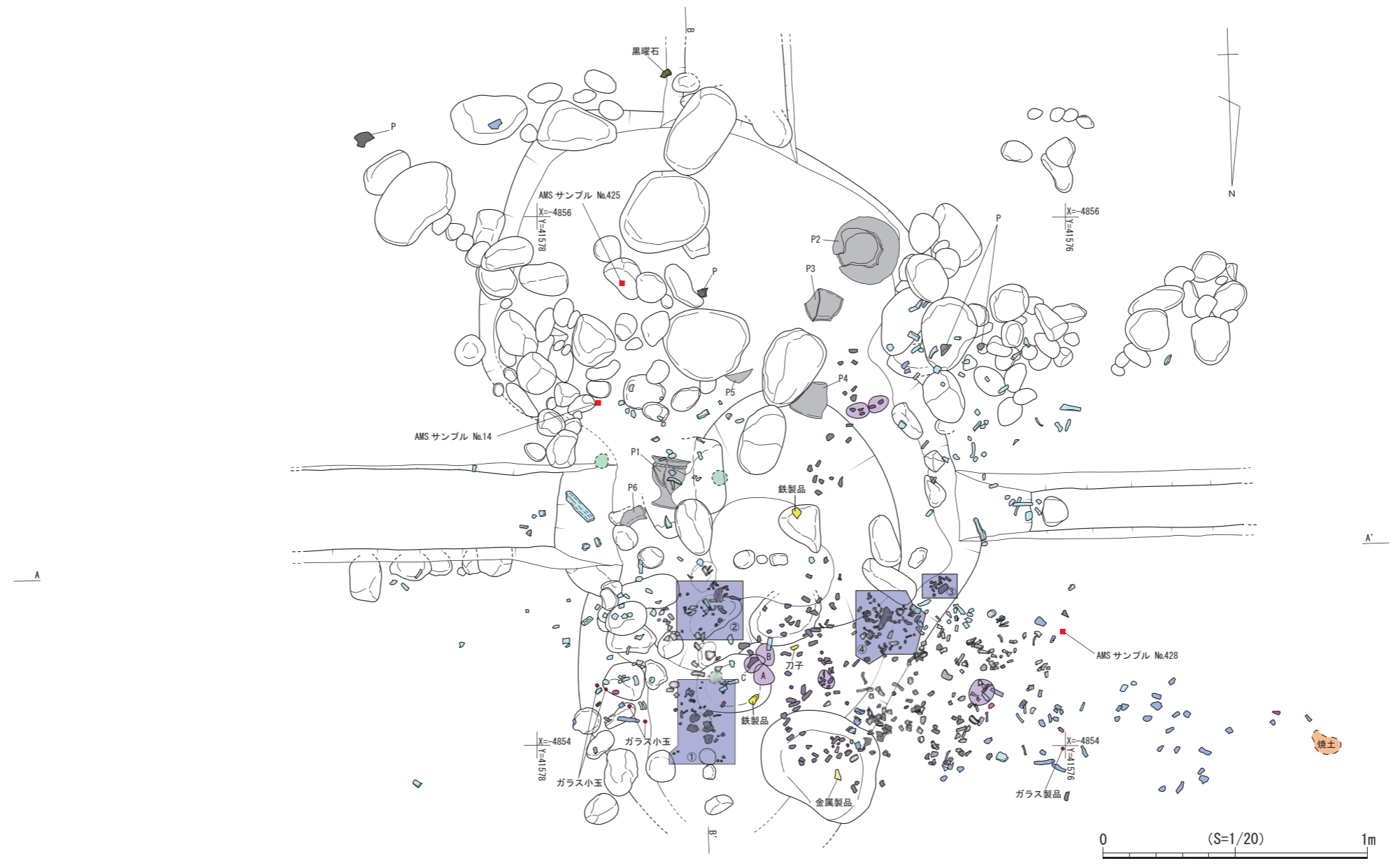
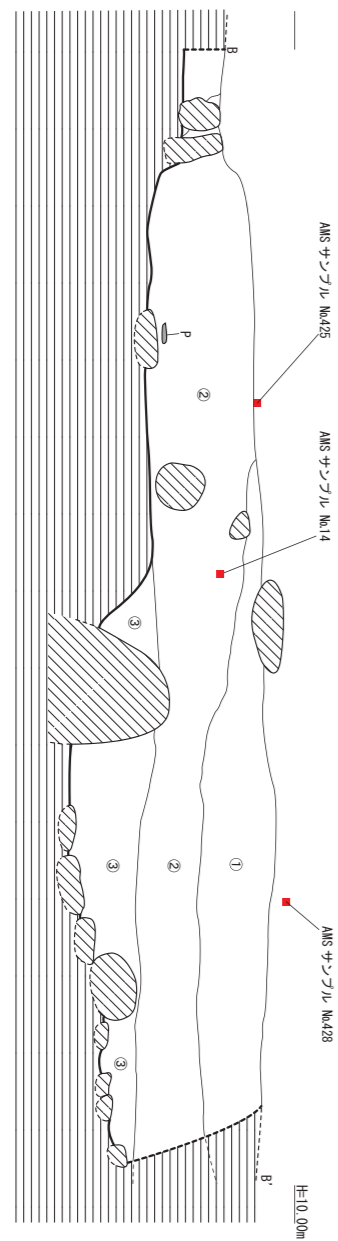
第70表 祭祀遺構1出土土器観察表

遺物番号	器種	部位	法量 (cm)			調整			色調		焼成	胎土	備考
			口径	器高	底径	外面	内面	外面	内面				
780	鉢	ほぼ完形	15.5	12.0~10.3	5.8	ハケメ	ナデ	縦、斜め方向 ハケメ	7.5YR6/4 にぶい橙	7.5YR7/4 にぶい橙	良好	長石、石英、雲母 角閃石、赤色粒子	左右アンバランス 平底
781	短頸壺	口縁部 ~胴部	(8.4)	—	—	ハケメ	ナデ	ハケメ ナデ	10YR7/4 にぶい黄橙	10YR7/3 にぶい黄橙	良好	長石、石英、雲母 角閃石、赤色粒子	
782	甕	ほぼ完形	(18.4)	19.0	6.8	ハケメ	ナデ		10YR8/2 灰白	10YR8/2 灰白	良好	長石、角閃石 赤色粒子	胴部に3~4cm の孔
783	高杯型 土器	完形	14.4	18.0~ 17.3	10.0	ハケメ	ナデ	ナデ	2.5Y7/2 灰黄	10YR7/2 にぶい黄橙	良好	長石、雲母 赤色粒子	口頸部に刻目 凸帯を有す

第71表 祭祀遺構1出土ガラス小玉観察表

遺物番号	材質	色調	最大長 (mm)	最大幅 (mm)	最大厚 (mm)	重量 (g)	備考
784	カリガラス	紺色	3.00	4.20		0.08	
785	カリガラス	紺色	2.90	4.98		0.09	





- |      |          |                   |
|------|----------|-------------------|
| 骨1   | 密骨 ブロック  | 刀子                |
| 骨2   | 骨重なりブロック | 黒曜石               |
| 骨3   | 骨粉・炭化物   | 土器1               |
| 甗1   | ガラス玉1    | 土器2               |
| 甗2   | ガラス玉2    | 焼土                |
| 甗3   | 金属製品     | 下層祭祀遺構 土器 (P1~P6) |
| 甗・犬甗 | 鉄製品      |                   |

- ① にぶい黄褐 (10YR4/3) シルト質で粉碎された焼人骨片 (~5cm大) 焼土塊 (~φ2cm大) 黒褐土 (7.5Y3/1 灰によるものと思われる) を含む (人骨片15%部分的に50% 焼土塊3%、黒褐)
- ② にぶい黄褐 (10YR4/3) ①層より粘性も増すが砂粒も増える 焼き人骨粉、焼土粒 黒褐土ブロックをわずかに含む 3a層ブロック (10cm~20cm大) をまばらに (1%) 含む 下部に供献土器がすわる
- ③ にぶい黄褐 (10YR5/4) 粘性大、上層で見られた骨粉、焼土粒、黒褐色土は含まない
- 3a: 黄褐 (2.5Y5/4) しまり大、マンガンブロックを15%含む全体に微細な白色粒子を含む 上面にはわずかに骨粉が見られたが、①層形成時に部分的に広がったもので、遺構にはならないと判断した
- 3b: 黄褐 (2.5Y5/4) しまり粘性さらに増 3a層で見られたマンガンブロックは大きく減る (2%) 白色粒子も減り、まばらになる

第188図 祭祀遺構1平・断面図 (S=1/20)

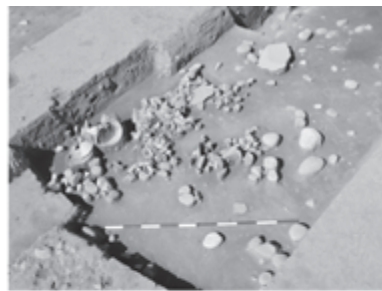
⑤TAK201202②祭祀遺構2 (第189~197図 図版134~140 表72・73)

祭祀遺構2は2012年度(平成24)に調査した遺構である。①区8458グリッドに位置する。ST5、ST19の南側に南北2.7m、東西2.2mの範囲に土器集中を検出した。器種は高杯、複合口縁壺、コップ形土器、器台、短頸壺、甕等が出土した。特に高杯、器台、壺等から丹塗り痕を有す。こうした土器の出土状況から地山に直接土器を並べた祖霊祭祀を行った様子が窺える。以下出土土器について記す。786~793は甕の口縁部~胴部、底部にかけての破片である。786はくの字口縁を呈する甕で口頸部に三角凸帯を有す。口縁端部は丸い。787は甕の口縁部で口頸部に三角凸帯を有し、口縁部は横方向に外反する。端部はやや尖る。内外面共にハケメ調整を施す。788、793は口縁部を欠損する。口頸部に三角凸帯を有す。789~792はくの字口縁を呈する。特に790、791、792はくの字は鋭角である。いずれも内外面に粗いハケメ調整が残る。794、795は壺で口縁部が欠損する。内外面はハケメ調整を施す。いずれも底部は口径が小さく凸レンズ状の平底である。このことから時期は弥生時代後期後半頃が考えられる。796、797は複合口縁壺の口縁部~胴部片である。いずれも口縁端部は丸く仕上げられている。797は口頸部に三角凸帯を有し、内外面にハケメ調整を施す。798は口縁部~口頸部片である。口縁端部は欠損する。口頸部に刻目凸帯を有す。799~801は壺胴部片で刻目二重三角凸帯を有す。刻目は丸い形状の799と細長い801がある。802~811は壺である。802~805は口縁部が欠損している。口頸部~胴部片である。802は口頸部に一重の三角凸帯を有し、胴部に二重の三角凸帯を付設する。内外面はハケメ調整を施す。806は長頸壺である。口縁部の一部が欠損するがほぼ完形品である。口縁部は基部から緩やかに外反し、端部は丸い。底径は小さくやや凸レンズ状の平底である。口頸部、胴部上位にやや細めの沈線を有す。807~811は壺胴部片である。胴部に二重~三重の刻目三角凸帯を有す(808は刻目ではない)。刻目は丸い809、810。やや細長い807、811がある。内外面はハケメ調整を施す。812、813は壺部片である。二重の三角凸帯を有し、812は刻目を施す。813は口頸部に三角凸帯を有す。口頸部内面に丹塗りを施す。いずれの土器も内外面にハケメ調整を施す。814は壺底部片である。底部は平底である。内面ハケメ調整、外面はハケメ、ナデ調整を施す。胎土は多くの砂粒を含み、焼成は良好ではあるが粗い仕上げである。815は壺の胴部~底部片である。底部は平底である。内外面とも粗いハケメ調整を施す。816は長頸壺の胴部片である。口頸部が僅かに認識できる。内外面はハケメ調整を施す。815、816共に内面は黒色を呈し、815は外面の一部も黒色が残る。817は小形の広口壺で完形である。口縁部は僅かに外方向に開き、端部は丸い。外面は縦方向にハケメ調整を行う。内面は口頸部で指圧痕を残す。底部はやや凸レンズ状の平底である。818、819は短頸壺である。818は口縁部~底部にかけて接合復元ができほぼ復元完形となった。口縁部は短く端部は丸い。底部は径が小さく凸レンズ状の平底である。820は壺の底部片で平底である。821~828までは高杯で完形品、杯部から脚部片、杯部片、脚部片である。821は高杯で脚部の一部が欠損する。杯部は浅く、口縁部は直線的に伸び、端部は丸い。杯部内面は横方向にハケメ調整を行い、外面は縦方向のハケメ調整を施す。脚部は長脚で外面はハケメ調整と削りを施す。822、824は鋤先口縁を呈する高杯である。いずれも杯部は浅く、口縁部は鋤先状を呈する。822の端部は丸く、824は方形である。脚部は大きく開き端部は丸い。821、822、824は鋤先口縁部、脚部の開き等から時期は弥生時代後期前半頃であろう。823は杯部が欠損する。脚裾部に4ヶ所の穿孔を空ける。脚部は僅かに内湾気味に開き、端部は丸い。胎土は砂粒を含むが丁寧な作りである。825は接合復元できほぼ完形となった。口縁部は外反し端部は丸い。

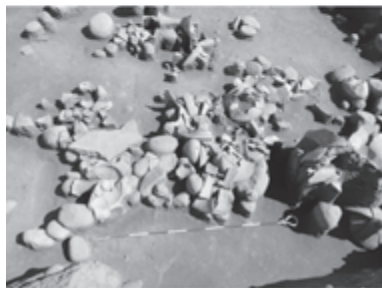
脚部は僅かに内湾しながら開く。端部は丸く短いかえりを作る。裾部は3ヶ所に穿孔を確認した。杯部内面は暗文を施す。脚部の内外面はハケメ調整を施す。**826**は杯部片で口縁部が外反し端部は横方向に短く伸びる。端部は丸い仕上げである。**827**は杯部片である。口縁部は横方向に伸び端部は方形に近い。外面は僅かなハケメ調整が残る。**828**は杯部と脚部片で裾部が欠損する。口縁部はやや外傾し端部はやや丸い。この高杯の時期は後期前半頃と思われる。**829**～**831**は脚部で**829**は長脚高杯の可能性もある。外面はハケメ調整を施している。**823**、**825**、**826**の時期は弥生時代後期後半頃と思われる。**832**は鉢で口縁部はやや内湾し端部は丸い。底部は平底である。内面に僅かにハケメ調整痕が残る。**833**はコップ形土器の完形品で、底部に孔が開けられている。口縁部はやや内すぼみで端部は外側に僅かにつまみ出し尖る。口縁部の状況から長頸壺等の蓋の可能性もある。**834**～**844**は肥前型器台である。**834**、**843**、**844**は破片を接合復元しほぼ完形品となった。この3点を中心に記載することにする。**834**は受部27.7cm、裾部28.4cm、器高(中心で)26.2cm、くびれ部13.8cmを測る。受部端部は方形で中央に僅かな窪みを有す。裾部は大きく外反し端部は丸い。くびれ部に3条の沈線を有し、上下2段に5ヶ所の長方形透かしを設けている。内外面に縦、横方向にハケメ調整を施す。**843**は受部28.4cm、裾部28.6cm、器高22.9cm、くびれ部13.8cmを測る。中央やや上位に4条の沈線を施し、上下2段に7ヶ所の長方形の透かしを有する。外面は縦方向のハケメ、内面は横方向のハケメ調整を施す。**844**は受部30.4cm、裾部30.5cm、器高中心で26.1cm、くびれ部15.5cmを測る。くびれ部に4条の沈線を有し右下がりで左右並行ではない。透かしは円形と長方形があり、くびれを境に上下2段で構成されている。長方形透かしは上下5ヶ所で、円形透かしは1ヶ所(5孔)空けられている。これらの特徴から時期は後期後半頃が考えられる。その他の器台も後期後半頃の時期に相当する。



①出土遺物検出状況 その1



②出土遺物検出状況 その2

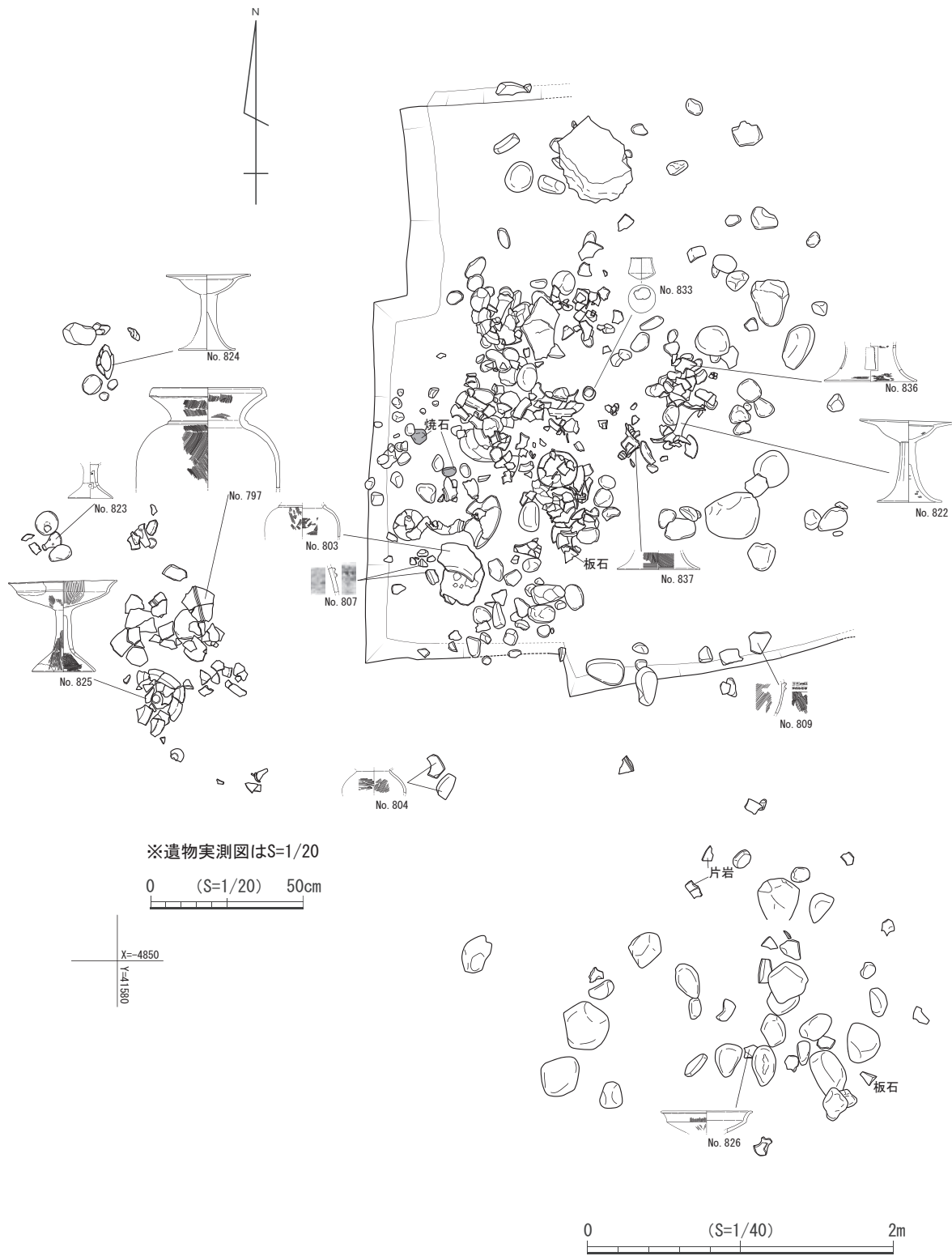


③出土遺物検出状況 その3

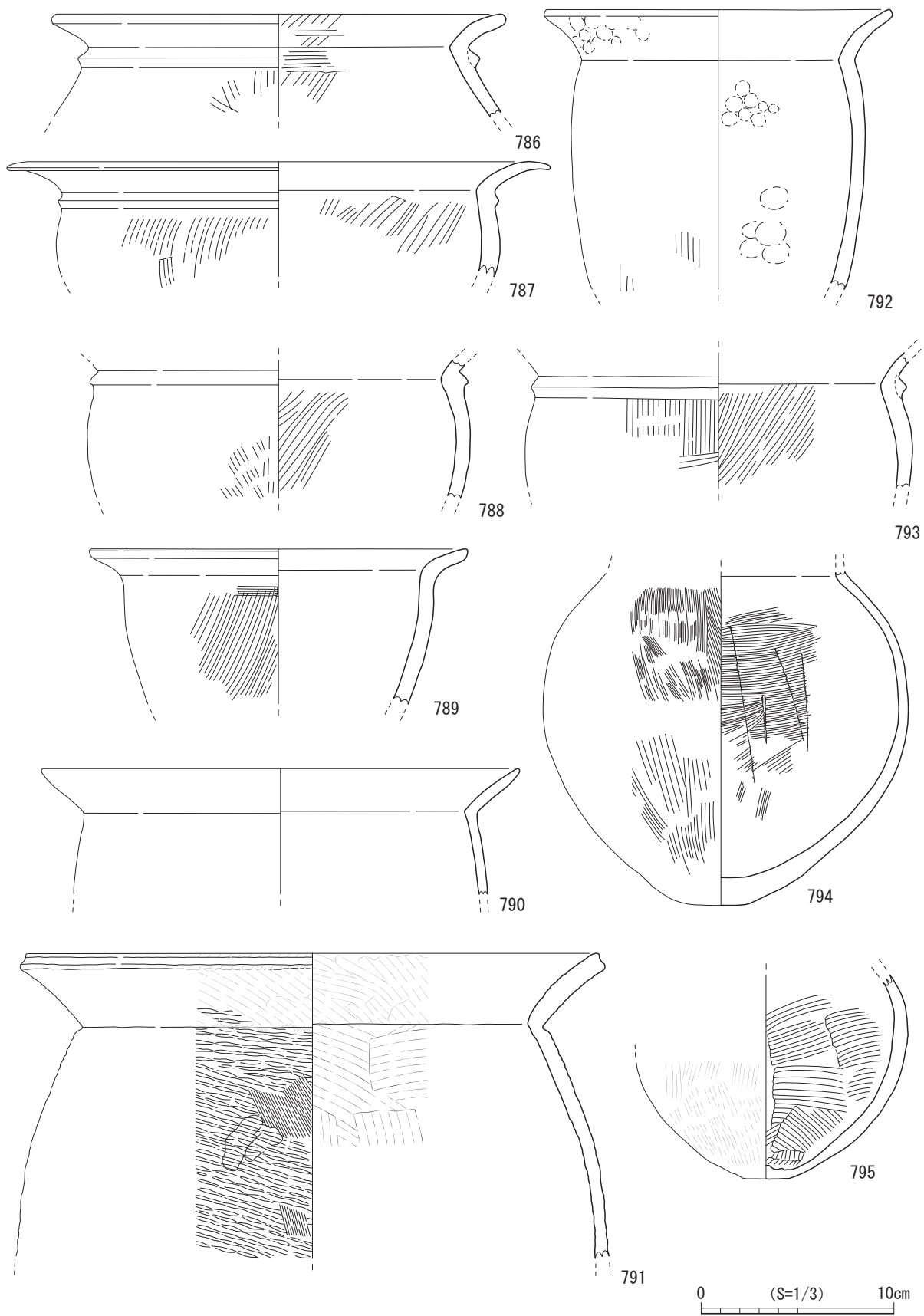


④出土遺物検出状況 その4

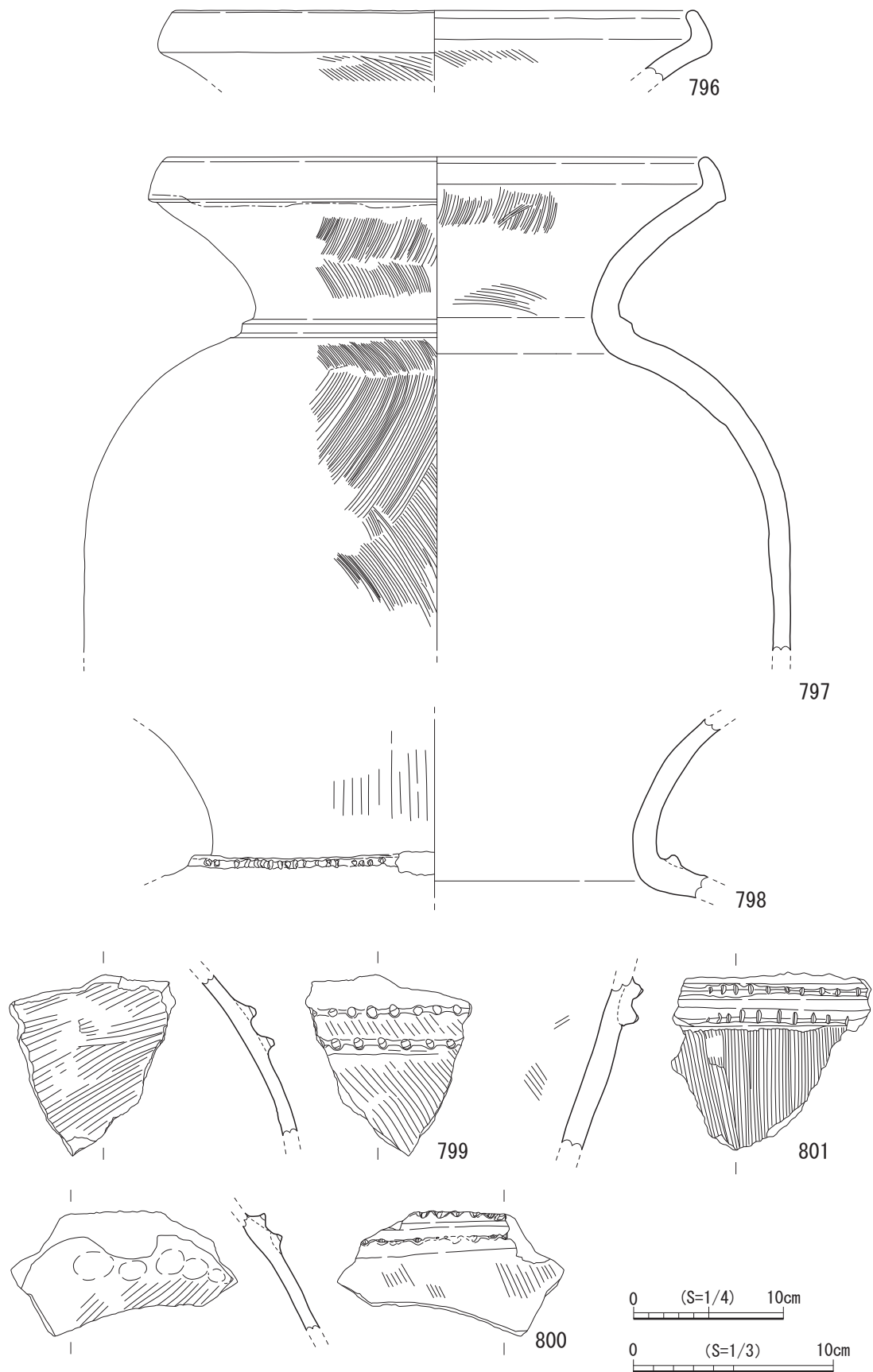
図版134 祭祀遺構2遺構状況(①～④)



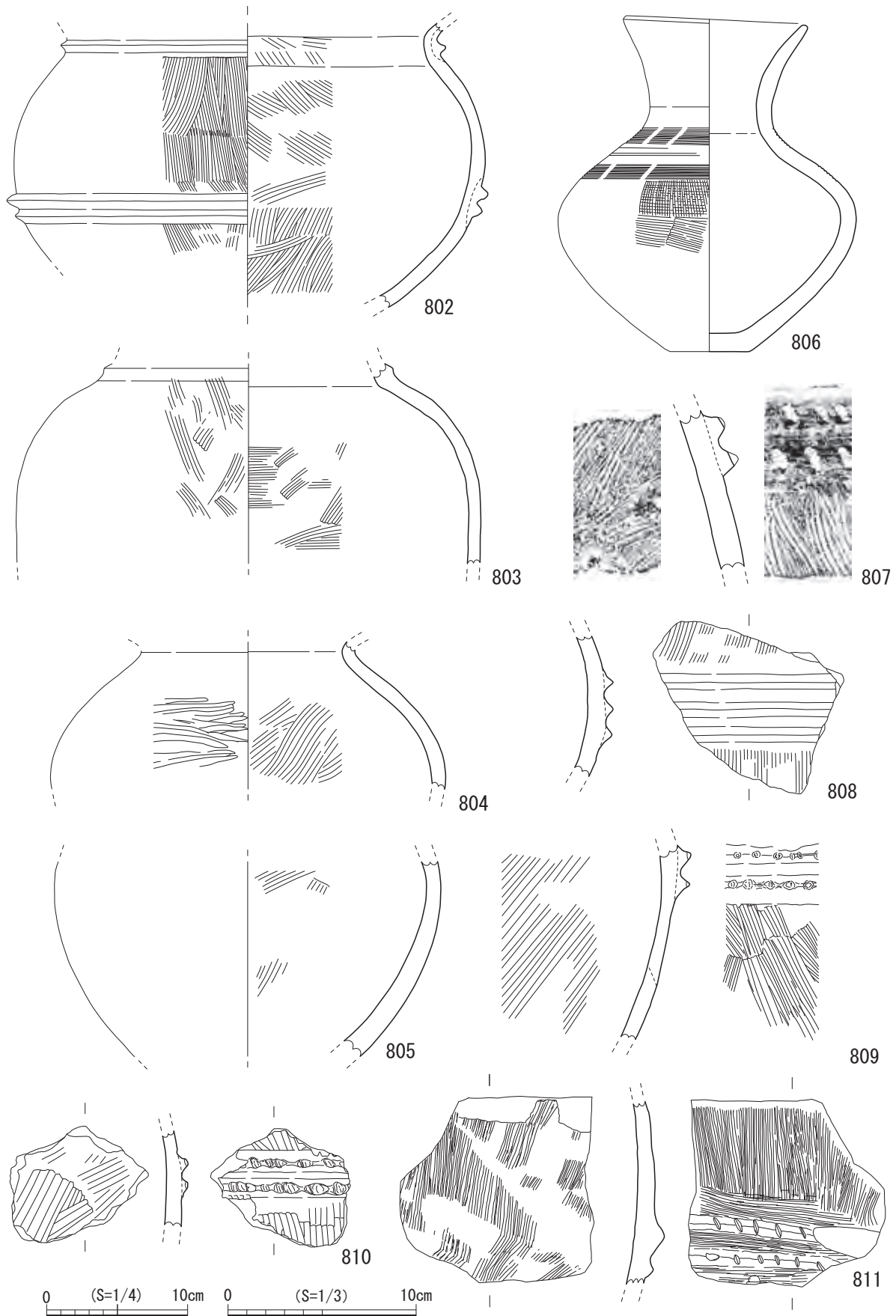
第189図 祭祀遺構2平面図(S=1/40)



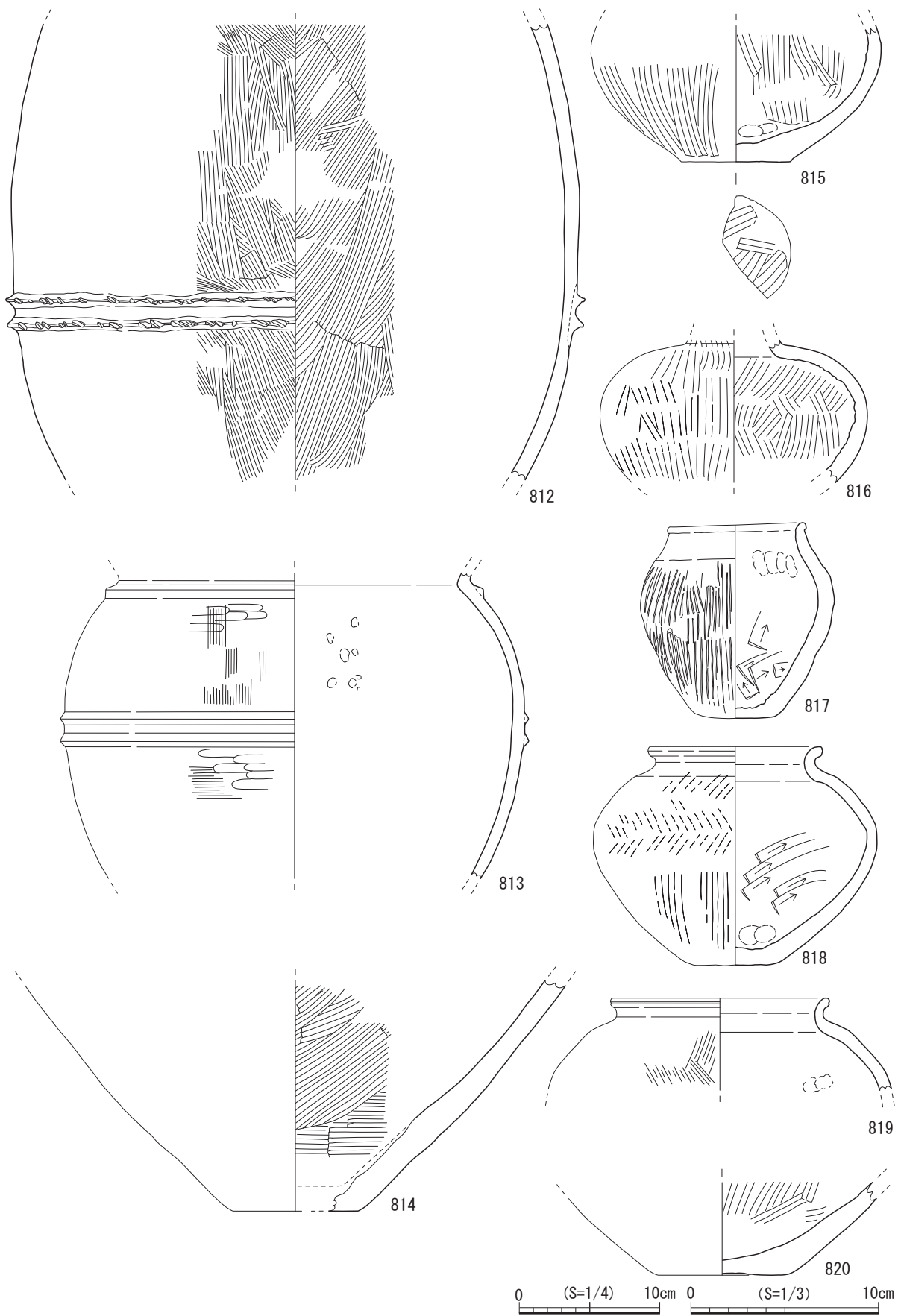
第190図 祭祀遺構2出土遺物実測図 その1 (S=1/3)



第191図 祭祀遺構2出土遺物実測図 その2 (No. 797のみS=1/4, 他はS=1/3)

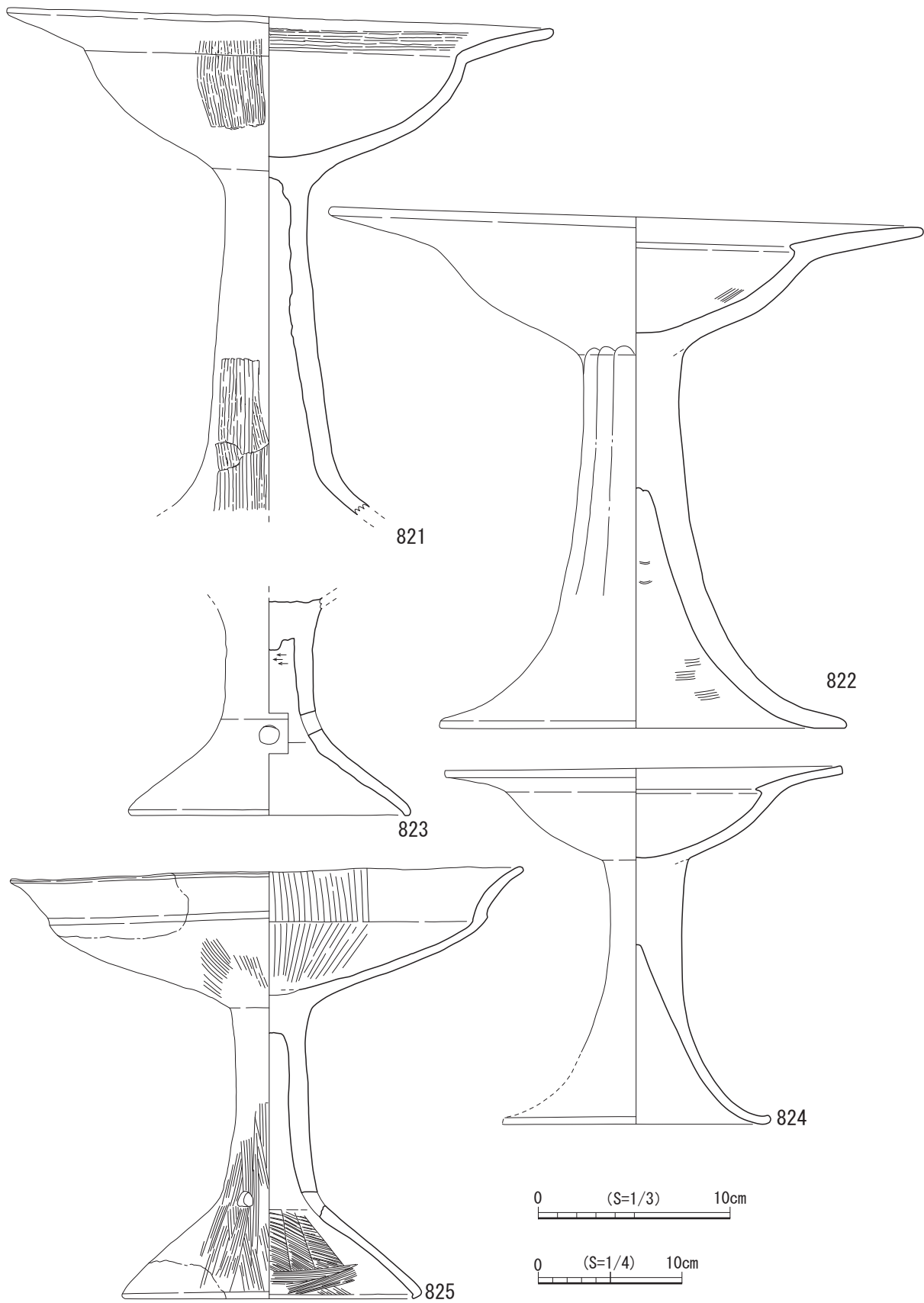


第192図 祭祀遺構2出土遺物実測図 その3 (NO. 802のみS=1/4, 他はS=1/3)

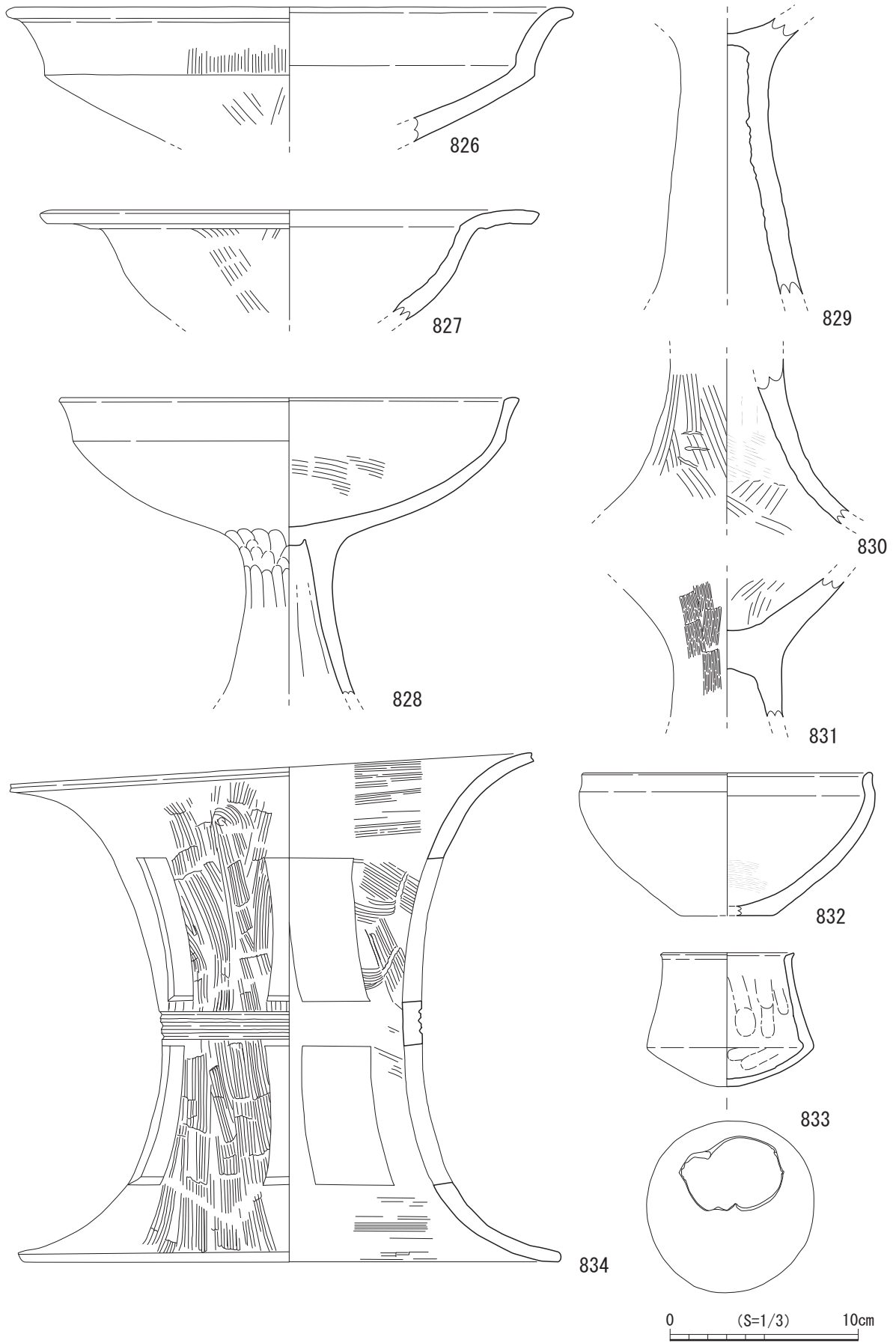


第193図 祭祀遺構2出土遺物実測図 その4 (No. 812・813はS=1/4, 他はS=1/3)

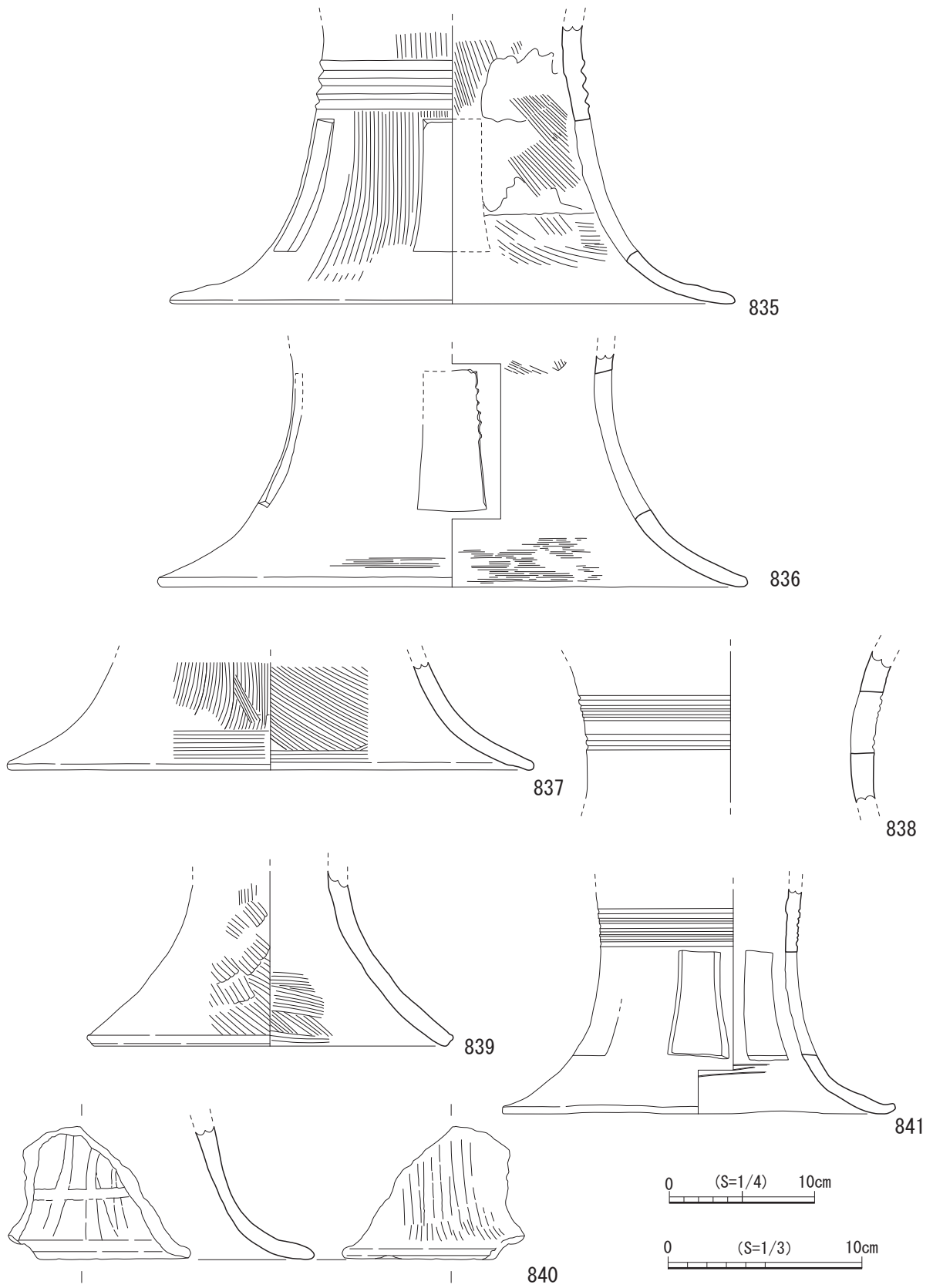




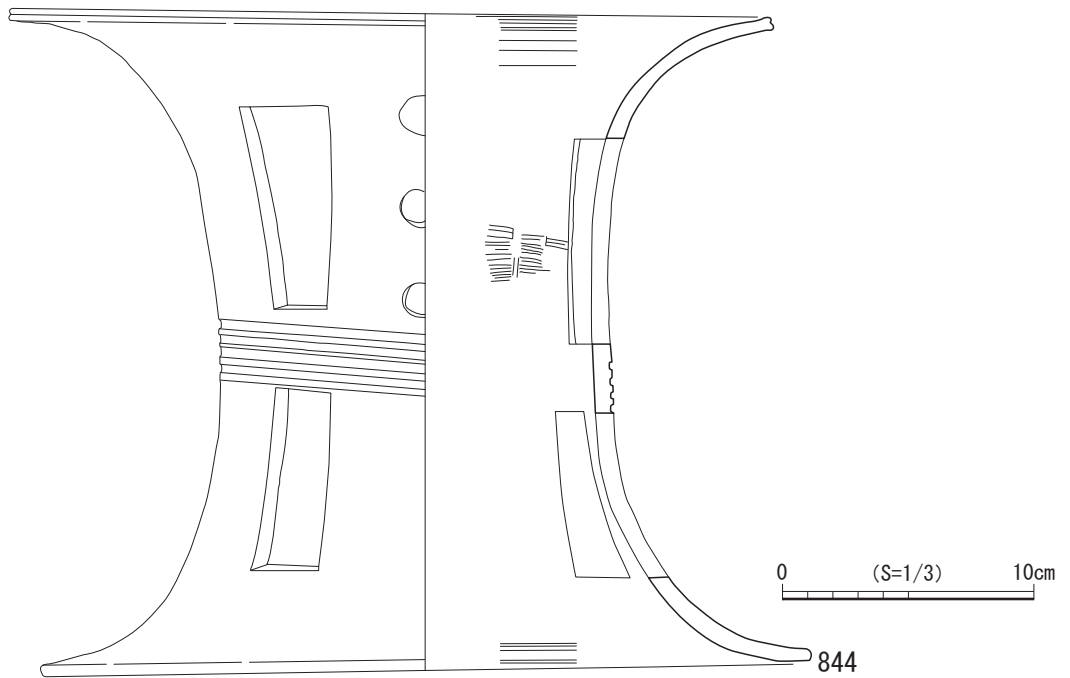
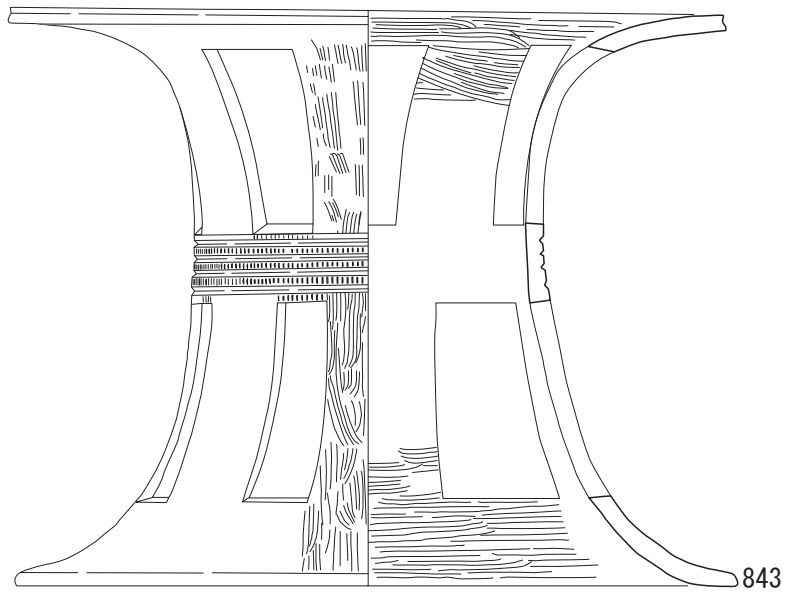
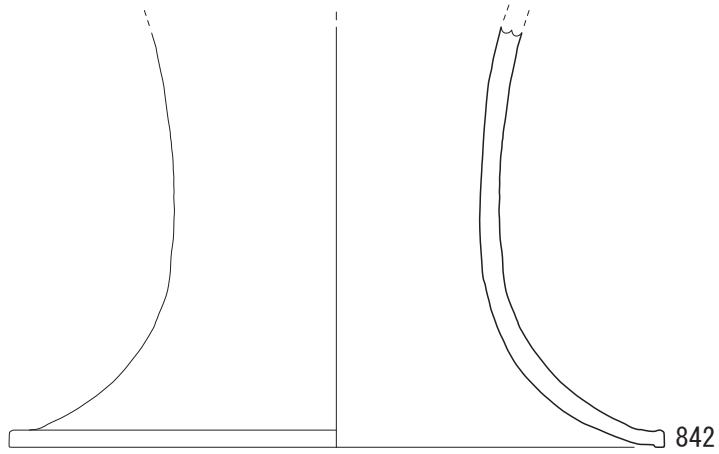
第194図 祭祀遺構2出土遺物実測図 その5 (No. 824・825はS=1/4, 他はS=1/3)



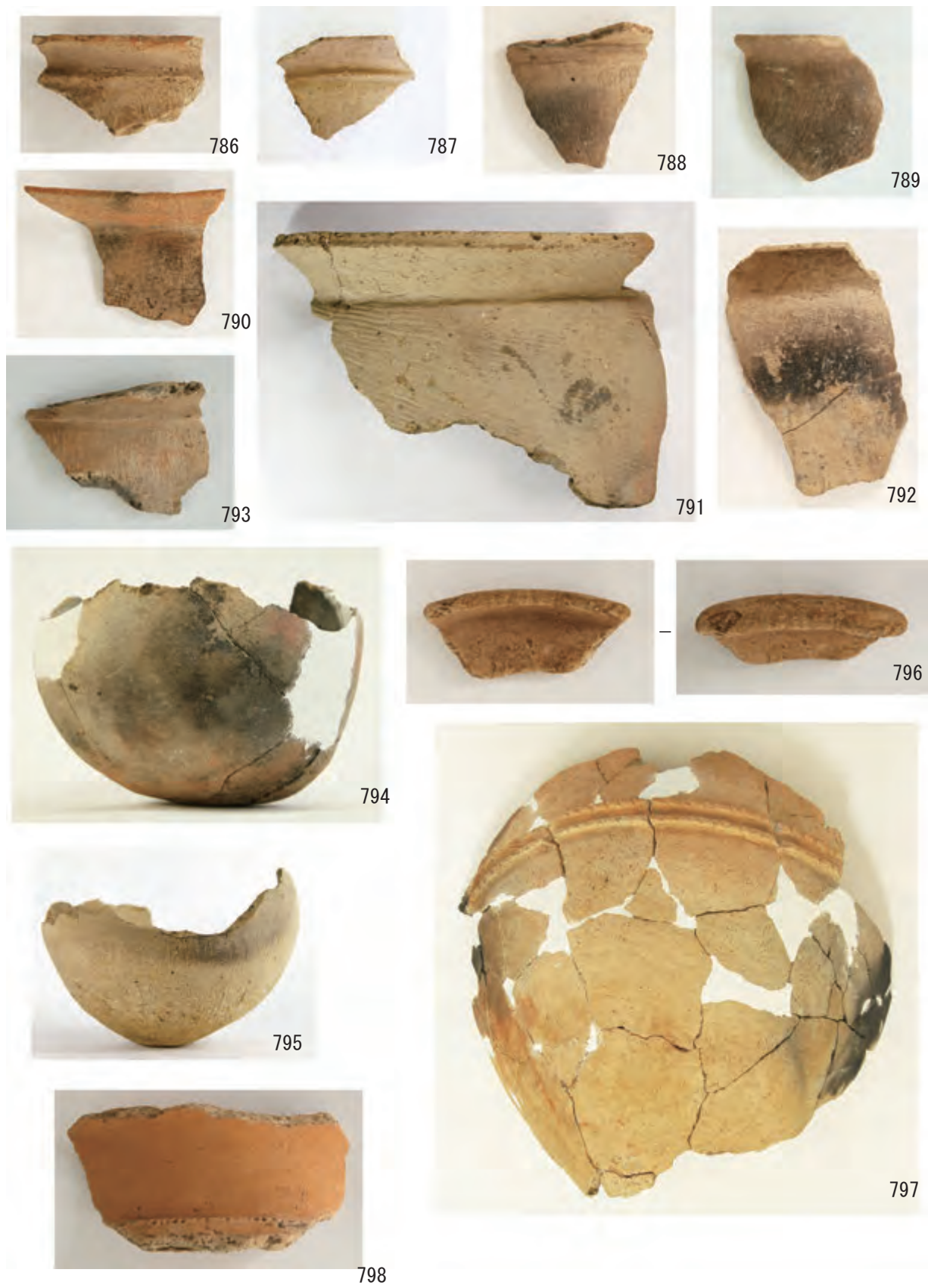
第195図 祭祀遺構2出土遺物実測図 その6(S=1/3)



第196図 祭祀遺構2出土遺物実測図 その7 (No. 841のみS=1/4, 他はS=1/3)



第197図 祭祀遺構2出土遺物実測図 その8 (S=1/3)



図版135 祭祀遺構2出土遺物 その1



799



800



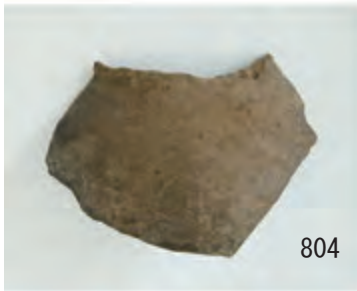
801



802



803



804



805



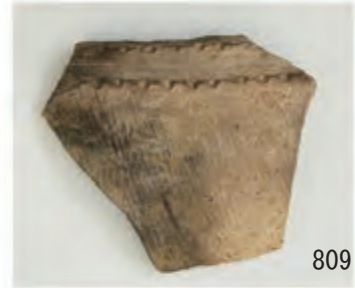
806



807



808



809



810



811



812

図版136 祭祀遺構2出土遺物 その2



図版137 祭祀遺構2出土遺物 その3



823



824



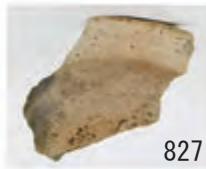
825



829



826



827



830



831



828



832

図版138 祭祀遺構2出土遺物 その4





図版139 祭祀遺構2出土遺物 その5



843



844

図版140 祭祀遺構2出土遺物 その6

第72表 祭祀遺構2出土土器観察表その1

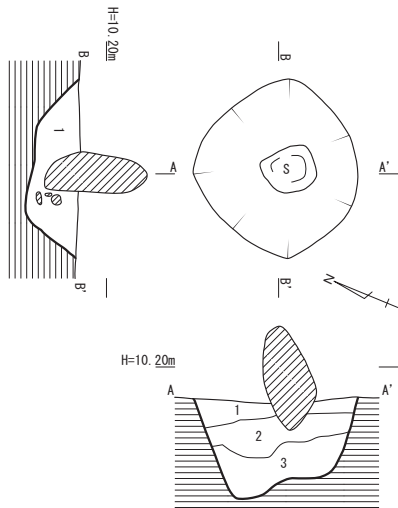
遺物番号	器種	部位	法量 (cm)			調整		色調		焼成	胎土	備考
			口径	器高	底径	外面	内面	外面	内面			
786	甕	口縁部	(23.0)	—	—	ハケメ	ハケメ	7.5YR7/4 にぶい橙	7.5YR7/4 にぶい橙	良	長石、角閃石 赤色粒子	くの字口縁、口頸部に三角凸帯を有す
787	甕	口縁部	(28.2)	—	—	ハケメ	ハケメ	10YR7/4 にぶい黄橙	10YR7/4 にぶい黄橙	良 やや顆	石英、長石、雲母 赤色粒子	口頸部に三角凸帯を有す
788	甕	口頸部	—	—	—	ハケメ	ハケメ	10YR7/3 にぶい黄橙	7.5YR7/4 にぶい橙	良 やや顆	長石、雲母 角閃石	口縁部欠損、口頸部に三角凸帯を有す
789	甕	口縁部	(19.6)	—	—	ハケメ	ナデ	7.5YR3/2 黒褐	7.5YR6/4 にぶい橙	良	長石、雲母 角閃石、赤色粒子	くの字口縁
790	甕	口縁部	(24.6)	—	—	ナデ	ナデ	5YR6/6 橙	5YR6/6 橙	良	細い砂粒 石英、雲母	くの字口縁、くの字は鋭角
791	甕	口縁部	(29.6)	—	—	ハケメ	ハケメ	7.5YR7/3 にぶい橙	7.5YR7/3 にぶい橙	良	雲母、石英 赤色粒子	くの字口縁、くの字は鋭角
792	甕	口縁部～ 胴部	(17.8)	—	—	ミガキ 指押え	ミガキ 指押え	10YR7/3 にぶい黄橙	10YR7/3 にぶい黄橙	良	石英	くの字口縁、くの字は鋭角
793	甕	口頸部	—	—	—	ハケメ	ハケメ	5YR7/4 にぶい橙	7.5YR7/3 にぶい橙	良 やや顆	石英、雲母 角閃石、褐色粒子	口縁部欠損、口頸部に三角凸帯を有す
794	壺	胴部～ 底部	—	—	—	ハケメ	ハケメ	5YR6/4 にぶい橙	10YR6/3 にぶい黄橙	良	長石、結晶片岩	凸レンズ状平底
795	壺	胴部～ 底部	—	—	(2.4)	ハケメ	ハケメ	10YR7/3 にぶい黄橙	10YR6/3 にぶい黄橙	良	長石、角閃石 赤色粒子	凸レンズ状平底
796	壺	口縁部	(26.2)	—	—	ハケメ	ハケメ	10YR7/4 にぶい黄橙	7.5YR6/4 にぶい橙	良	雲母、石英 角閃石、赤色粒子	複合口縁壺
797	壺	口縁部～ 胴部	36.0	—	—	ハケメ	ハケメ	7.5YR7/4 にぶい橙	7.5YR7/3 にぶい橙	良好	長石、角閃石 赤色粒子	複合口縁壺、口頸部に三角凸帯を有す
798	壺	口縁部～ 口頸部	—	—	—	ハケメ	ハケメ～ユビナデ	5YR7/8 橙	5YR7/8 橙	良	石英、雲母 角閃石、赤色粒子	口頸部に刻目凸帯を有す
799	壺	胴部	—	—	—	ハケメ	ハケメ	5YR5/8 明赤褐	10YR7/4 にぶい黄橙	良	雲母	二重の刻目三角凸帯を有す、刻目は丸い
800	壺	胴部	—	—	—	ハケメ	ハケメ	7.5YR8/4 浅黄橙	7.5YR8/2 灰白	良	雲母、石英	二重の刻目三角凸帯を有す
801	壺	胴部	—	—	—	ハケメ	ハケメ	10YR7/4 にぶい黄橙	10YR7/4 にぶい黄橙	良	長石、角閃石 結晶片岩	二重の刻目三角凸帯を有す、刻目は細長い
802	壺	口頸部～ 胴部	—	—	—	ハケメ	ハケメ	7.5YR7/4 にぶい橙	5YR7/6 橙	良好	長石、角閃石 赤色粒子	口頸部に一重の三角凸帯を、胴部に二重の三角凸帯を有す
803	壺	口頸部～ 胴部	—	—	—	ハケメ	ハケメ	5YR7/6 橙	5YR7/6 橙	良	石英、雲母 角閃石、赤色粒子	口縁部欠損
804	壺	口頸部～ 胴部	—	—	—	ハケメ	ハケメ 指押えあり	10YR6/3 にぶい黄橙	10YR5/2 灰黄褐	良	雲母、石英 角閃石	口縁部欠損
805	壺	口頸部～ 胴部	—	—	—	ミガキ	ハケメ	7.5YR4/1 褐灰	7.5YR3/1 黒褐	良好	雲母、角閃石	口縁部欠損
806	長頸壺	ほぼ完形	9.4	17.8	4.2	ハケメ	ナデ	10YR7/4 にぶい黄橙	7.5YR7/6 橙	良好	長石、石英、雲母 角閃石	底部凸レンズ状。口頸部胴部上位に細めの沈線を有す
807	壺	胴部	—	—	—	ハケメ	ハケメ	7.5YR7/4 にぶい橙	7.5YR7/4 にぶい橙	良	石英、雲母 角閃石	二重の刻目凸帯を有す、刻目は細長い
808	壺	胴部	—	—	—	ハケメ	ハケメ	10YR8/4 浅黄橙	10YR7/1 灰白	良	長石、褐色粒子	三重の三角凸帯を有す
809	壺	胴部	—	—	—	ハケメ	ハケメ	10YR8/3 浅黄橙	10YR8/4 浅黄橙	良好	長石、褐色粒子	二重の刻目凸帯を有す、刻目は丸い
810	壺	胴部	—	—	—	ハケメ	ハケメ	10YR7/6 明黄褐	10YR8/4 浅黄橙	良	長石、石英、雲母 赤色粒子	二重の刻目凸帯を有す、刻目は丸い
811	壺	胴部	—	—	—	ハケメ	ハケメ	10R6/1 赤灰	10R7/1 明赤灰	良	長石、角閃石 赤色粒子	刻目凸帯を有す、刻目は細長い
812	壺	胴部	—	—	—	ハケメ	ハケメ	10YR7/3 にぶい黄橙	7.5YR7/6 橙	良好	長石、石英	二重の刻目三角凸帯を有す
813	壺	胴部	—	—	—	ハケメ	ユビオサエ痕	5YR4/3 にぶい赤褐	5YR7/3 にぶい橙	良好	長石、雲母 角閃石	口頸部に三角凸帯を有す、口頸部内面に丹塗りを施す
814	壺	底部	—	—	(6.8)	ハケメ ナデ	ハケメ	7.5YR7/6 橙	7.5YR7/6 橙	良	多くの砂粒を含む 石英、角閃石 赤色粒子	平底

第73表 祭祀遺構2出土土器観察表その2

遺物番号	器種	部位	法量 (cm)			調整		色調		焼成	胎土	備考
			口径	器高	底径	外面	内面	外面	内面			
815	壺	胴部～底部	—	—	5.8	粗いハケメ	粗いハケメ	10YR8/4 浅黄橙	10YR4/1 褐灰	良	石英、雲母 角閃石	平底 内面は黒色を呈す
816	長頸壺	胴部	—	—	—	ハケメ	ハケメ	2.5Y7/3 浅黄	2.5Y2/1 黒	良	長石、雲母 赤色粒子	内面は黒色を呈す
817	小形広口壺	完形	7.4	10.2	4.3	縦方向ハケメ	指圧痕	10YR7/3 にぶい黄橙	10YR7/3 にぶい黄橙	良好	石英、雲母、 角閃石、赤色粒子	凸レンズ状平底
818	短頸壺	復元完形	(9.2)	11.5	4.0	ハケメ	ハケメ	10YR8/4 浅黄橙	10YR8/4 浅黄橙	良好	石英、雲母 角閃石、赤色粒子	凸レンズ状平底
819	短頸壺	口縁部	(11.6)	—	—	ハケメ	ハケメ	10YR7/4 にぶい黄橙	10YR7/4 にぶい黄橙	良	石英、雲母	
820	壺	底部	—	—	7.0	ナデ	ハケメ	10YR7/4 にぶい黄橙	10YR7/4 にぶい黄橙	良	石英、雲母 角閃石、赤色粒子	平底
821	高杯	脚部杯部	(28.5)	—	—	縦方向ハケメ	横方向ハケメ	5YR7/4 にぶい橙	5YR7/4 にぶい橙	良好	長石、石英 赤色粒子	脚部一部欠損
822	高杯	脚部杯部	30.7	(27.2)	—	ナデ	ナデ	7.5YR7/6 橙	7.5YR7/6 橙	良好	長石、赤色粒子	鋤先口縁
823	高杯	脚部	—	—	(14.6)	ナデ	ナデ	7.5YR7/6 橙	7.5YR7/6 橙	良好	石英	脚部に4ヶ所の穿孔を有す
824	高杯	杯部脚部	27.6	(24.8)	(18.6)	ナデ	ナデ	5YR7/8 橙	7.5YR7/4 にぶい橙	良好	石英、角閃石	鋤先口縁
825	高杯	ほぼ完形	35	29.9	20.8	脚部ハケメ	脚部ハケメ	2.5YR5/8 明赤褐	2.5YR5/6 明赤褐	良好	長石、石英 金雲母	裾部3ヶ所に穿孔を有す
826	高杯	杯部	(29.6)	—	—	ハケメ	ナデ	10YR8/4 浅黄橙	10YR8/4 浅黄橙	良好	石英、雲母 角閃石	口縁部が外反
827	高杯	杯部	(26.4)	—	—	ハケメ	ナデ	7.5YR7/4 にぶい橙	7.5YR7/6 橙	良	長石、雲母 角閃石	
828	高杯	杯部脚部	24.2	—	—	ナデ	ハケメ	7.5YR7/4 にぶい橙	7.5YR7/4 にぶい橙	良	長石、雲母 赤色粒子	裾部が欠損
829	高杯	脚部	—	—	—	ハケメ	ヘラ削り	7.5YR8/2 灰白	7.5YR7/6 橙	良	雲母、赤色粒子 細かい砂粒	長脚高杯の可能性あり
830	高杯	脚部	—	—	—	ハケメ	ハケメ	2.5YR6/6 橙	5YR6/2 灰褐	良	長石、赤色粒子	
831	高杯	脚部	—	—	—	ハケメ	ハケメ	10YR6/3 にぶい黄橙	10YR6/3 にぶい黄橙	良	石英、雲母 角閃石	
832	鉢	口縁～胴部～底部	(15.0)	7.5	(5.0)	ナデ	ハケメ	7.5YR7/3 にぶい橙	7.5YR7/3 にぶい橙	良	雲母、赤色粒子 細かい砂粒	平底
833	コップ型土器	完形	7.2	6.1	—	ナデ指圧痕あり	ナデ指圧痕あり	2.5YR6/6 橙	2.5YR6/6 橙	良	長石、石英 角閃石	底部に孔あきあり
834	肥前形器台	(接合復元) ほぼ完形	(受部) 27.7	26.2	(裾部) 28.4	縦、横方向ハケメ	縦、横方向ハケメ	10YR7/1 灰白	7.5YR8/3 浅黄橙	良	長石、雲母 赤色粒子	上下2段に5ヶ所の長方形透かしを有す
835	肥前形器台	体部裾部	—	—	(29.0)	ハケメ	ハケメ	7.5YR7/2 明褐灰	7.5YR7/2 明褐灰	良	赤色粒子 細かい砂粒	
836	肥前形器台	裾部	—	—	30.0	ハケメ	ハケメ	10YR7/4 にぶい黄橙	10YR7/4 にぶい黄橙	良	石英、雲母 角閃石	
837	肥前形器台	裾部	—	—	(27.0)	ハケメ	ハケメ	7.5YR7/2 明褐灰	7.5YR7/2 明褐灰	良	赤色粒子 細かい砂粒	
838	肥前形器台	中位部	—	—	—	ナデ	ハケメ	10YR5/4 にぶい黄褐	7.5YR8/4 浅黄橙	良	石英	
839	肥前形器台	脚部	—	—	(18.0)	ハケメ	ハケメ	2.5YR6/4 にぶい橙	10YR7/2 にぶい黄橙	良	長石、雲母 角閃石	
840	肥前形器台	ソデ部	—	—	—	ハケメ	ヘラ削り	7.5YR7/6 橙	7.5YR7/6 橙	良	石英、雲母 赤色粒子	
841	肥前形器台	裾部	—	—	(26.7)	ハケメ	ハケメ	5YR7/4 にぶい橙	5YR7/4 にぶい橙	良好	赤色粒子、角閃石	
842	肥前形器台	裾部	—	—	26.0	表面摩耗	表面摩耗	10YR7/4 にぶい黄橙	10YR7/4 にぶい黄橙	良好	長石、石英、雲母 角閃石、赤色粒子	
843	肥前形器台	(接合復元) ほぼ完形	(受部) 28.4	22.9	(裾部) 28.6	縦方向ハケメ	横方向ハケメ	10YR7/3 にぶい黄橙	10YR7/3 にぶい黄橙	良好	長石、赤色粒子	上下2段に7ヶ所の長方形透かし5ヶ所、円形透かし1ヶ所(5孔)を有す
844	肥前形器台	(接合復元) ほぼ完形	(受部) 30.4	26.1	(裾部) 30.5	ナデ	ナデ	7.5YR8/4 浅黄橙	7.5YR8/4 浅黄橙	良好	石英、赤色粒子	長方形透かし5ヶ所、円形透かし1ヶ所(5孔)を有す

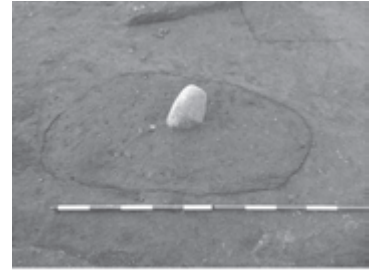
㊦TAK201302①標石1 (第198図 図版141)

標石1は①区8460グリッドに位置する。検出時の規模は長軸0.92m、短軸0.86m、深さ0.4～0.5mを測る土坑で平面形は隅丸楕円形を呈する。覆土は3層に分層できる。標石は全長0.53mで土坑の中央部に立石する。土坑に15cm程埋められている。石材は箱式石棺墓と同等の安山岩である。遺物は出土しなかった。土坑は箱式石棺墓等を構築した層からの掘削で墓域を構築した時期差は小さいと考える。



1. にぶい黄褐色 (10YR4/3) 砂質土 しまりややあり  
φ3cm 小円礫を 1% 含む
2. 暗褐色 (10YR3/4) 中粒砂 しまりない  
φ3cm 小円礫を 1% 含む
3. 暗褐色 (10YR3/4) 中粒砂 しまりない  
円礫を含まない

第198図 標石1平・断面図 (S=1/40)



①検出状況

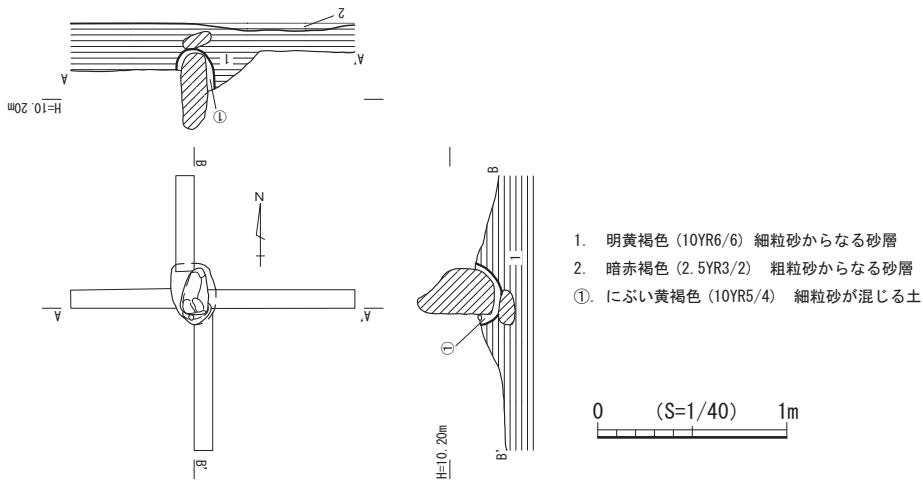


②半截状況

図版141 標石1遺構状況 (①・②)

⑥TAK201302①標石2 (第199図 図版142)

標石2は①区8460グリッドに位置する。長軸0.32m、短軸0.23m、深さ0.1mを測る土坑に長軸0.4m、短軸0.24m、先端がやや欠けている標石を設置させている。土坑は箱式石棺墓等を構築した層からの掘削で墓域を構築した時期差は小さいと考える。遺物は出土しなかった。



第199図 標石2平・断面図 (S=1/40)



①検出状況

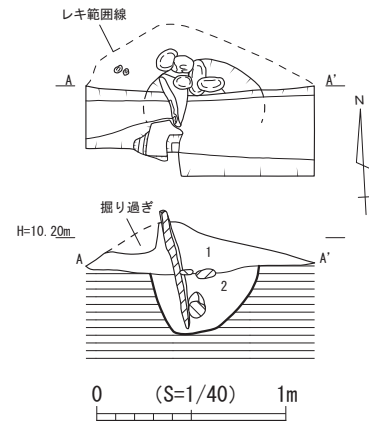


②半截状況

図版142 標石2遺構状況 (①・②)

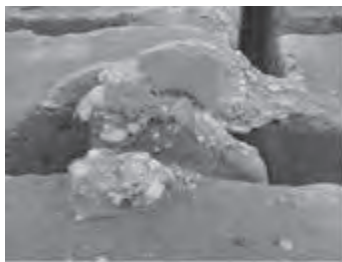
⑥TAK201302①標石3 (第200図 図版143)

標石3は①区8460グリッドに位置する。長軸1.20m、短軸0.8m+、高さ0.3mを測るマウンドを小礫混じりの土で構築し、その下に長軸0.6m+、深さ0.3mを測る土坑を掘りこんでいる。土坑のやや東側に幅0.3m、長さ0.63mの板状の結晶片岩(石皿を転用している)を標石とし、根元は円礫で押さえている。土坑は箱式石棺墓等を構築した層からの掘削で墓域を構築した時期差は小さいと考える。遺物は出土しなかった。



1. 暗褐色(10YR3/3)粘質土でしまり強 50%をφ3cm~20cmの円礫が占める 微白色粒3% 黄色粘1% 標石を支えている?
2. 褐色(10YR4/4)砂質土 しまりややあり炭化物1%未満だが、この層のみ検出されるφ3cm粘土が混在(1%)し、焼土粘もごくごく微量に含まれるφ10~15cmの礫が出土 根固め石か

第200図 標石3平・断面図(S=1/40)



①遺構状況 その1



②遺構状況 その2



③半截状況 その1



④半截状況 その2



⑤石皿

図版143 標石3遺構状況(①~⑤)

⑥TAK201302①標石4 (第201図 図版144)

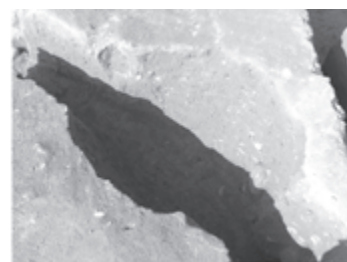
標石4は①区8460グリッドで標石3から3mほど南東側に位置する。長軸0.9m、深さ0.45mを測る土坑の上に長軸1.3m、高さ0.15m程のマウンドを構築しその中に長さ0.33m、幅0.3m、厚み4cmの楕円形の自然礫を使用している。土坑は箱式石棺墓等を構築した層からの掘削で墓域を構築した時期差は小さいと考える。遺物は出土しなかった。



①遺構状況 その1

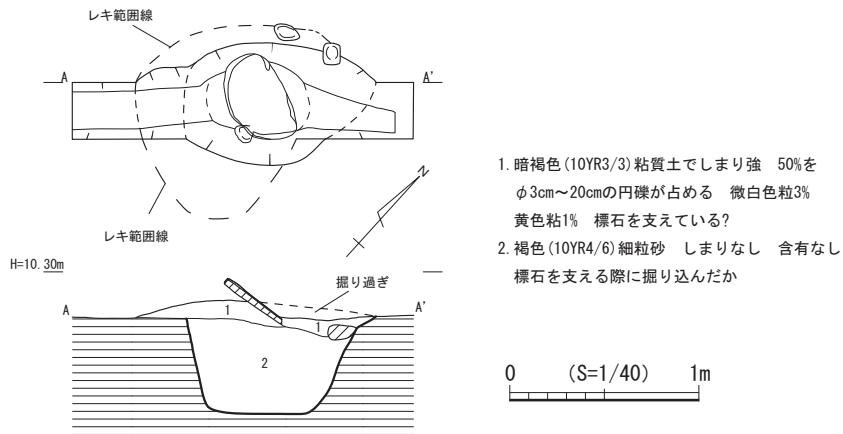


②遺構状況 その2



③半截状況

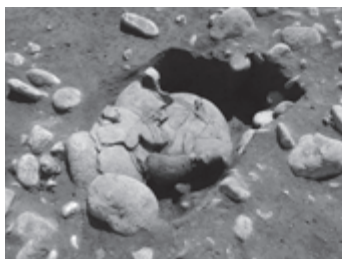
図版144 標石4遺構状況(①~③)



第201図 標石4平・断面図(S=1/40)

⑥3TAK201303B1区ST1(甕棺) (第202・203図 図版145・146 表74・75)

ST1はB1区の9076グリッドに位置する甕棺墓(壺棺)で、集団墓域から外れている。墓壙は長軸0.8m、短軸0.6m、深さ0.55mを測る不正楕円形を呈する。墓壙中央に棺を設置している。甕棺は口縁部を丁寧に取り外した完形である。甕棺の開口部は西側に32°傾斜させ設置していた。開口部に壺口縁部~胴部を割った破片を蓋にして閉塞していた。閉塞する際に粘土による目張りを行っている。遺物は甕棺と蓋にした甕がある。845は口縁部を取り除いた壺である。器高54.8cm、胴部最大径46cmを測る。胴部に最大の位置に二重の刻目三角凸帯を有す。内外面にハケメ調整を施す。底部は平底である。846は蓋に使われていた破片を復元、接合した壺である。復元器高66cm、胴部最大径53.6cmを測る。口縁部は大きく外反し端部は方形を呈する。胴部最大位置のやや下位に二重の刻目三角凸帯を有する。内外面はやや粗めのハケメ調整を施す。底部は僅かに膨らみをもつ平底である。時期は弥生時代後期後半頃であろう。



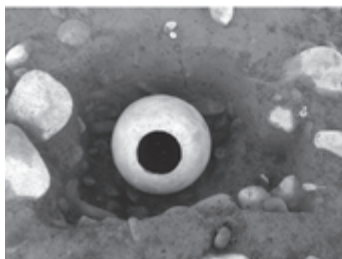
①検出状況 その1



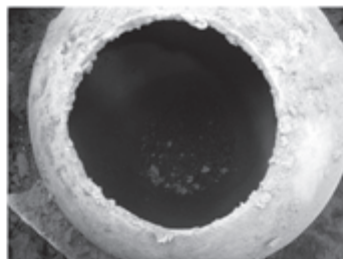
②検出状況 その2



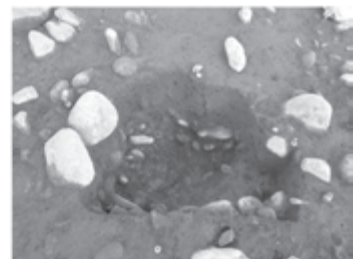
③上甕検出状況



④下甕検出状況

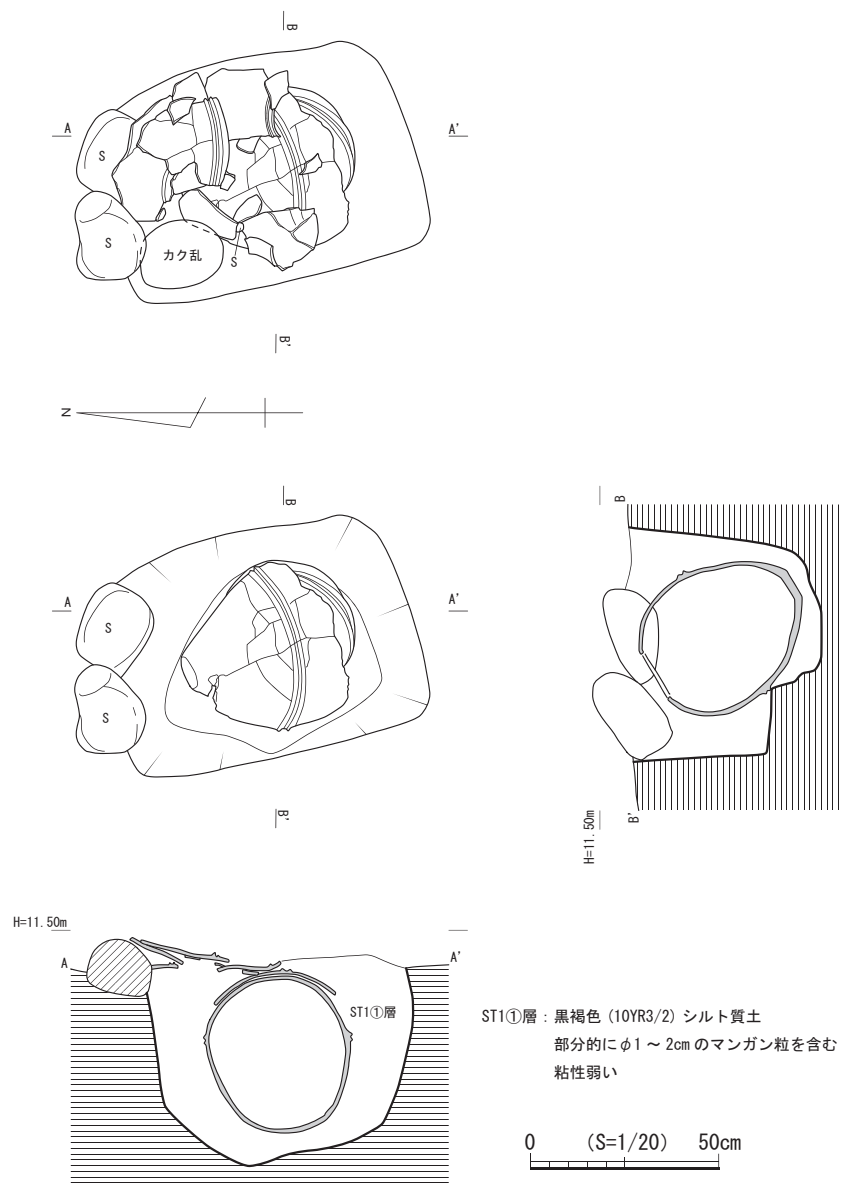


⑤甕内状況

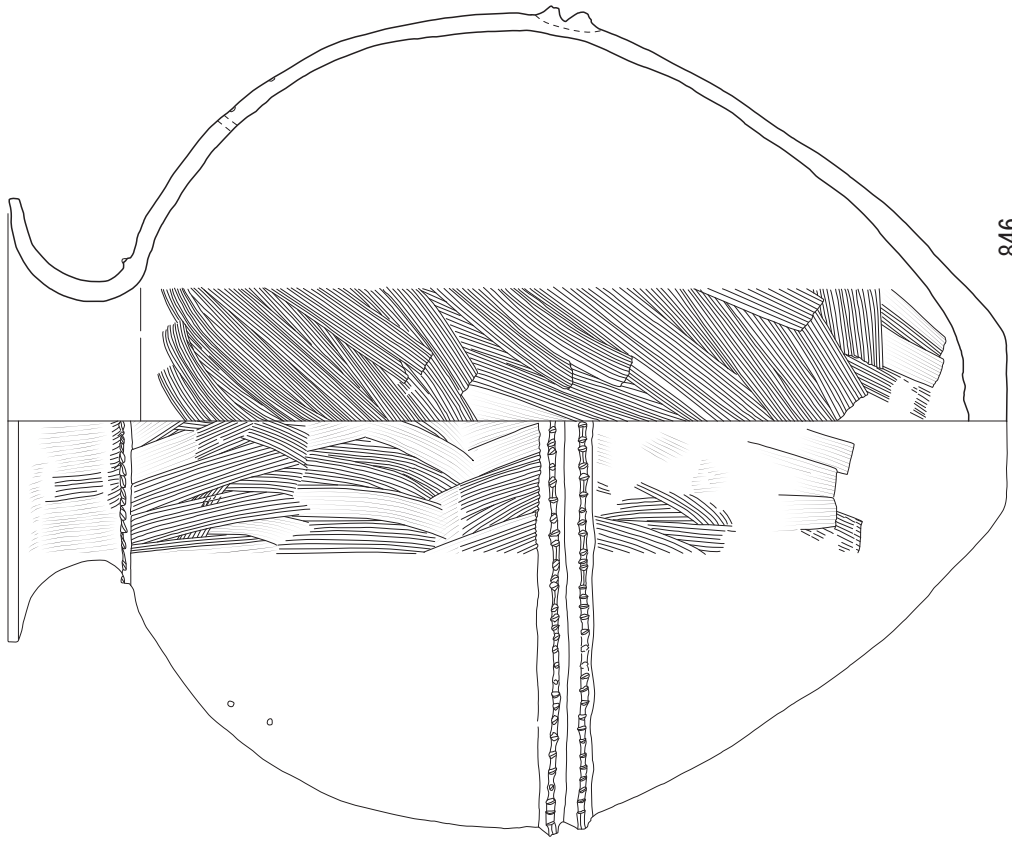


⑥完掘状況

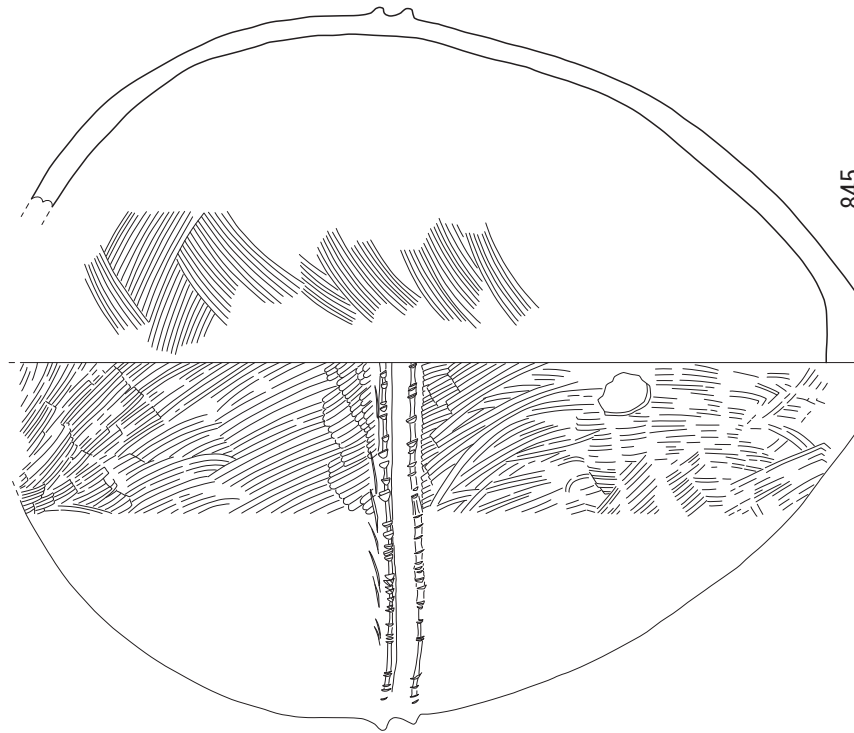
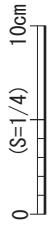
図版145 ST1(1303B1区)遺構状況(①~⑥)



第202図 ST1 (1303B1区) 平・断面図 (S=1/20)



846



845

第203図 ST1 (1303B1区) 出土遺物実測図 (S=1/4)





図版146 ST1(1303B1区)出土遺物

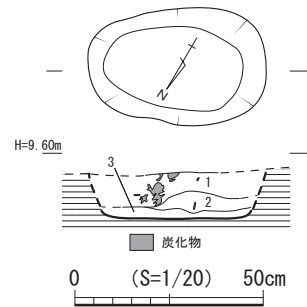
第74表 ST1(1303B1区)出土土器観察表

遺物番号	器種	部位	法量(cm)			調整		色調		焼成	胎土	備考
			口径	器高	底径	外面	内面	外面	内面			
845	壺	胴部～底部	—	54.8	—	ハケメ	ハケメ	7.5YR7/6 橙	7.5YR7/4 にぶい橙	良好	長石、雲母、角閃石、赤色粒子	胴部最大径46cm、二重の刻目三角凸帯を有す
846	壺	口縁部～底部	(23.8)	66.0	—	粗いハケメ	粗いハケメ	10YR7/3 にぶい黄橙	10YR6/3 にぶい黄橙	良好	雲母	胴部最大径53.6cm、二重の刻目三角凸帯を有す



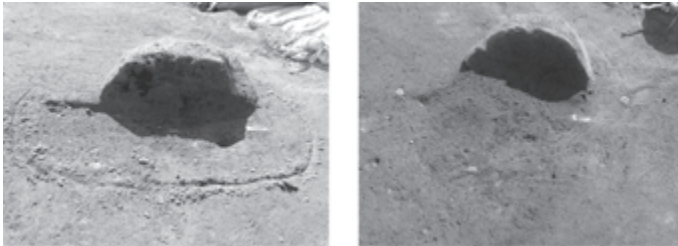
⑥4TAK201302①SK2(土坑) (第204図 図版147)

SK2は①区8656グリッドに位置する。主軸方位をN-59°-Eにとり北東から南西方向に構築された土坑である。規模は長軸0.46m、短軸0.3m。深さ3cm+を測り、平面形は楕円形を呈する。覆土は3層に分層できた。全体に掘りすぎであり様相は判然としない。遺物は出土しなかった。



1. 暗褐色 (10YR3/3) 砂質土 φ2mmの砂粒でしまりなく被熱している 拳大の炭化物検出
2. 1. と同色 しまり弱 砂粒細かくφ0.5mmとなる φ10mm炭化物混在 被熱している
3. 2. とほぼ同じだがしまりあり 被熱し焼土粒1%混じる

第204図 SK2平・断面図(S=1/20)

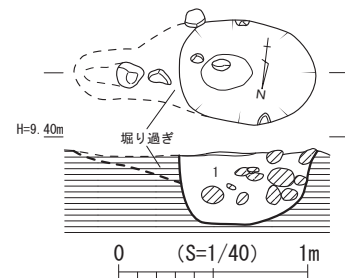


①半截状況 ②完掘状況

図版147 SK2遺構状況(①・②)

⑥5TAK201302①SK3(土坑) (第205図 図版148)

SK3は①区8658グリッドに位置する。主軸方位をN-84°-Eにとり東西方向に構築された土坑である。規模は長軸1.44m、短軸1.08m、深さ0.75mを測る。平面形は楕円形である。遺物は出土しなかった。



1. 褐色 (7.5YR4/4) 拳~人頭大の円礫50%以上しまりなし 投げ込み

第205図 SK3平・断面図(S=1/40)

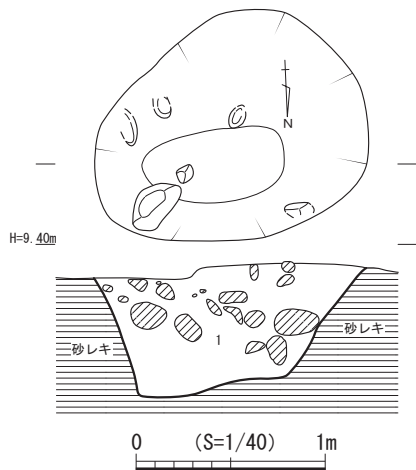


①検出状況 ②半截状況 ③完掘状況

図版148 SK3遺構状況(①~③)

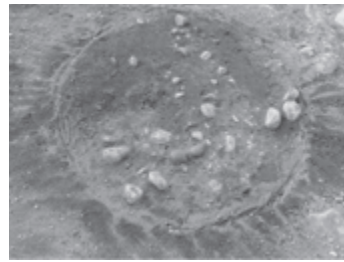
⑥6TAK201302①SK4(土坑) (第206図 図版149)

SK4は①区8458グリッドに位置する。主軸方位をE-3°-Sにとり東西方向に構築された土坑である。規模は長軸1.48m、短軸1.1m、深さ0.63mを測る。平面形は楕円形を呈する。遺物は出土しなかった。

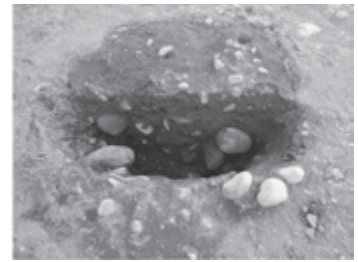


1. 褐色 (7.5YR4/4) 粘性を帯びる土と砂質を帯びる土が入り混じる 投げ込みにより全体に40%程φ15~40cmの円礫が混在 炭化物、焼土粒、遺物はなし

第206図 SK4平・断面図(S=1/40)



①検出状況

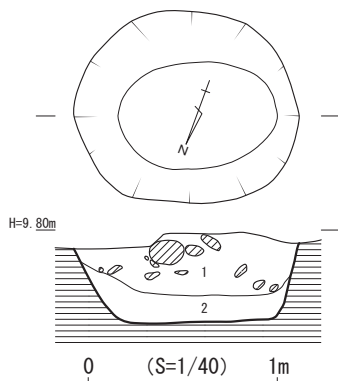


②半截状況

図版149 SK4遺構状況(①・②)

⑥7TAK201302①SK5(土坑) (第207図 図版150)

SK5は①区8460グリッドに位置する。主軸方位をN-61°-Eにとりやや東西方向に構築された土坑である。規模は長軸1.18m、短軸1.02m、深さ0.46mを測る。平面形は楕円形を呈する。遺物は出土しなかった。



1. 褐色 (7.5YR4/3) 砂質土 投げ込みによるφ30cm円礫が混じる  
2. 1. と同色同質 礫を含まず しまりなし

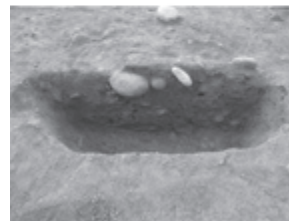
第207図 SK5 平・断面図(S=1/40)



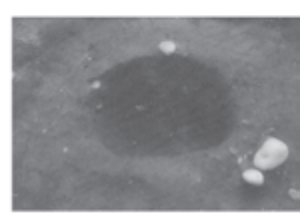
①検出状況 その1



②平面形確認



③半截状況

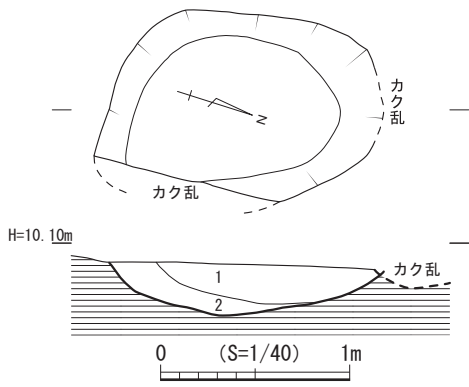


④完掘状況

図版150 SK5遺構状況(①~④)

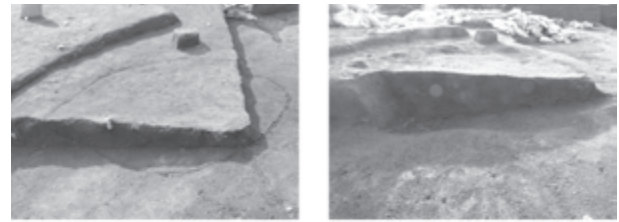
⑥8TAK201302①SK7(土坑) (第208図 図版151)

SK7は①区8460グリッドに位置する。主軸方位はN-17.5°-Wにとり概ね南北方向に構築された土坑である。東から南側にかけて一部攪乱がある。規模は長軸1.44m、短軸0.98m、深さ0.28mを測る。平面形は楕円形である。遺物は出土しなかった。



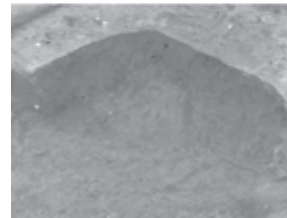
1. 褐色 (10YR4/4) 砂層 φ1mm 大の砂粒でややしまる
2. 1 と同色砂層 砂粒がφ1.5mm と1より大きくなりしまりなし

第208図 SK7平・断面図(S=1/40)



①検出状況

②半截状況

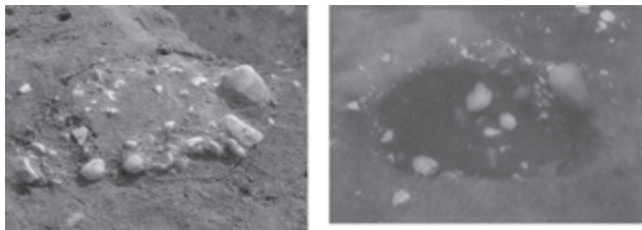


③完掘状況

図版151 SK7遺構状況  
(①~③)

⑥9TAK201302①SK8(土坑) (第209図 図版152)

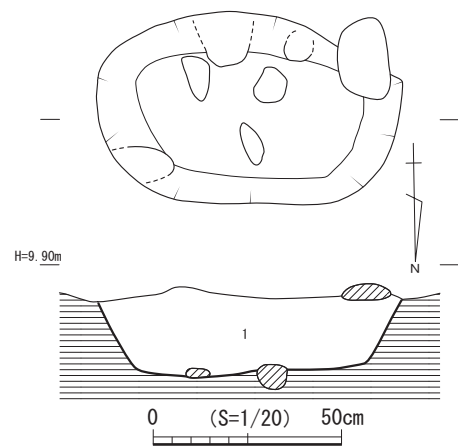
SK8は①区8460グリッドに位置する。主軸方位をN-90°-Eにとり東西方向に構築された土坑である。規模は長軸0.78m、短軸0.5m、深さ0.19mを測る。平面形は横楕円形である。遺物は出土しなかった。



①検出状況

②完掘状況

図版152 SK8(1302①)遺構状況(①・②)

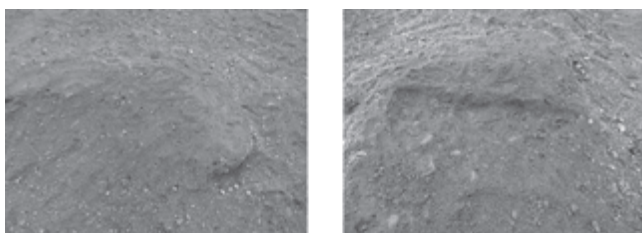


1. 暗褐色 (7.5YR3/3) 砂礫土 投げ込みにより50%以上をφ100mm~30mmの円礫で混ぜられる

第209図 SK8(1302①)平・断面図(S=1/20)

⑦0TAK201302①SK10(土坑) (第210図 図版153)

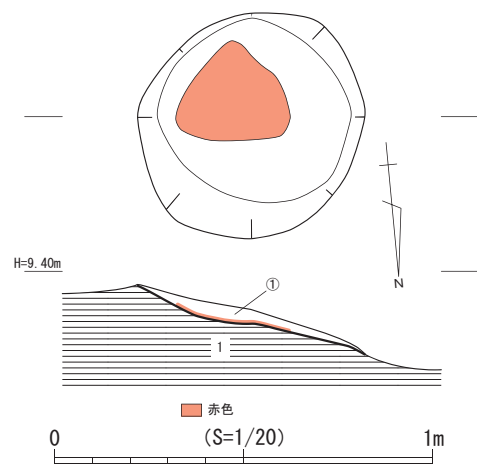
SK10は①区8460グリッドに位置する。主軸方位をE-5°-Sにとり東西方向に構築された土坑である。規模は長軸0.6m、短軸0.6m、深さ5cmで円形の平面形を呈する。中央上面で赤色顔料と思われるものが付着している。遺構上面がかなり削られており全体像が判然としない状況である。遺物は出土しなかった。



①検出状況

②半截状況

図版153 SK10遺構状況(①・②)



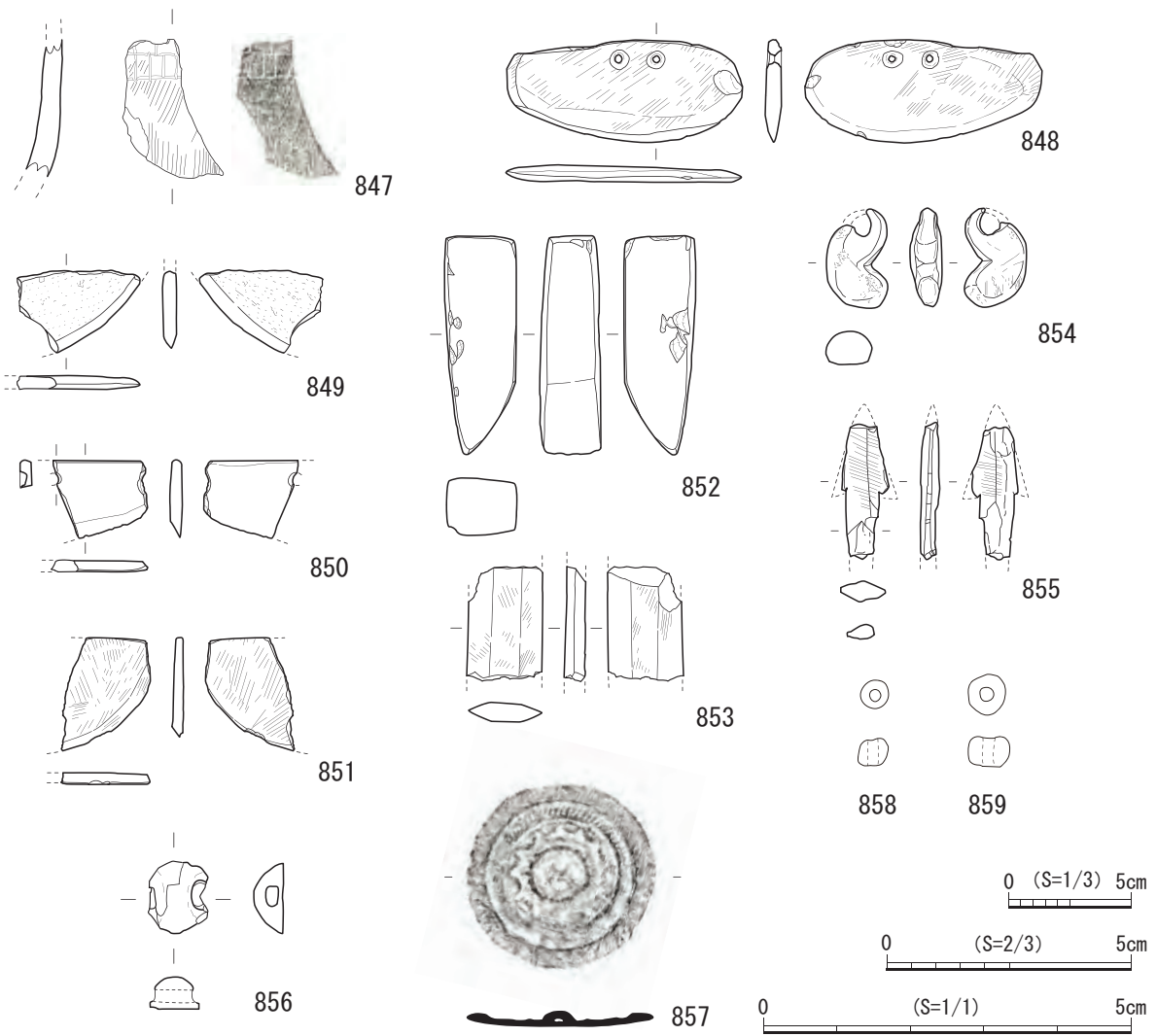
- ① 黒褐色 (10YR3/2) 砂質土、しまり弱、粘性なし、中砂がメイン  
白色粒を1%、粗砂を5%、0.1~1cm大の礫を3%  
赤色顔料と思われるものが付着している(特に中央上面)

1. 土坑確認面は、1cm~3cm大の小礫を20%含む極粗粒砂、  
灰黄褐色 (10YR4/2)

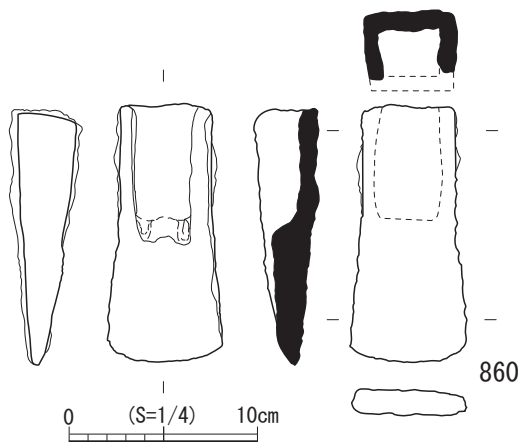
第210図 SK10平・断面図(S=1/20)

⑦弥生時代包含層遺物(第211～218図 図版154・155 表76～80)

弥生時代の包含層遺物は3層を中心に出土した。以下出土遺物について記す。**847**は器種は不明であるが胴部の破片である。外面にハケメ調整を施した上から縦、横に直線的な線刻が施されている。**848～851**は石包丁である。**848**は完形品で、穿孔は2孔で両面穿孔を施し、刃部は片刃状に研磨されている。長さ9.6cm、幅4.2cm、厚さ7mmを測る。石材は安山岩である。**849～851**は破片である。**849**は刃部が残存する。刃部は両刃に加工されている。厚さは5.5mmを測る。**850**は2穿孔の一部を残し両辺が欠損する。刃部は片刃である。厚さ5mmを測る。石材は安山岩である。**851**は刃部が一部欠損するが片刃であることが判断できる。**852**は大陸系柱状片刃石斧である。ほぼ完形品であるが全体的に風化している。全長8.9cm、幅2.9cm、厚さ2.5cmを測る。石材は泥岩である。**853**は石剣片で剣先、柄部が欠損する。身部は表裏に平坦面を作り両辺は両刃で丁寧な作りである。**854**は半球状勾玉で穿孔が一部欠損する。長さ2.0cm、幅1.2cm、厚さ0.7cmを測る。**855**は銅鏃で残存長は2.25cm、重さ1.26gを測る有茎鏃である。銅鏃は先端及び抉り部が一部欠損する。また茎部に僅かな凹みを有す。茎端部断面は切断した痕跡を示すことから連鑄式で作製されたことを窺わせる。**856**は舶載鏡の鈕片である。鈕長軸1.5cm、幅1.25cm、厚さ0.65cm、重さ2.30gを測る。鈕孔形態は長方形である。**857**は小形仿製鏡で弥生の集団墓域の北端、旧河川から出土した。法量は直径7.4cm、厚さ0.2～0.3cm、重さ59.67gを測る完形品である。しかし鏡面、鏡背の外縁端、内、外区が一部摩滅しているが全体としての形状は維持している。外区は平縁、粗目の斜行櫛歯文帯、内区の文様帯は摩滅等により明瞭ではない。鈕孔形態は左右で違う。円形と横楕円形である。左右で違う鈕孔形態はありえないため詳細に観察すると円形になっている鈕の端に僅かに溝状の痕跡が窺える。紐を通し使用している間に摩滅し横楕円形が円形に変化した可能性がある。**858**、**859**はガラス小玉である。**858**は紺色、**859**は淡青色を呈する。いずれもカリガラスである。**860**は⑨区0272グリッドから出土した鍛造の袋状鉄斧(無肩無段袋式)で袋部の折り返しが欠損する。長さ13.6cm、基部幅5.0cm、刃部幅で6.0cm、袋部幅4.9cmで刃部に向かってやや広がり先端は尖る。袋部の折り返しが欠損しているがコの字状に残る横断面形は長方形を呈する。また折り返しが欠損しているため両端が突合わせになって密着するかどうかは判断できない。川越哲志氏(1993)によると「舶載品、国産品の区別は袋部(柄袋)の横断面形が方形または長方形で、折り返しの両端が突合せになって密着するのが舶載品で、袋部の横断面形が円形または楕円形で折り返しの両端が接せず開いているのが国産品である。全体にていねいではない」。このことから**860**は舶載品である。類例の舶載品(朝鮮製)として対馬市佐保浦赤崎遺跡出土の大形袋状鉄斧(長さ15.3cm、刃部幅8cm)を一回り小さくした形状である。赤崎遺跡の時期が後期初頭頃であることからその時期に近い可能性がある。



第211図 弥生時代包含層出土遺物実測図 (No. 854~856はS=2/3, No858・859はS=1/1, 他はS=1/3)



第212図 弥生時代包含層出土鉄斧実測図 (S=1/4)



図版154 弥生時代包含層出土鉄斧



図版155 弥生時代包含層出土遺物

第76表 弥生時代包含層出土土器観察表

遺物番号	器種	部位	出土区グリッド	層位	法量(cm)				調整		色調		焼成	胎土	備考
					口径	器高	底径	外面	内面	外面	内面				
847	不明	胴部	B2-9274-7	3層②	-	-	-	ハケメ	ナデ	10YR7/4 にぶい黄橙	10YR7/4 にぶい黄橙	良	長石、赤色粒子	外面縦横に直線的な線刻を有す	

第77表 弥生時代包含層出土石器観察表

遺物番号	器種	材質	出土区グリッド	層位	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	備考
848	石包丁	安山岩	B1-9074	3層	9.6	4.2	0.7	38.87	完形品、2孔の両面穿孔
849	石包丁	泥岩	A4-8672・8674	4層	3.3	5.0	0.55	11.69	刃部が残存
850	石包丁	安山岩	B1-9074-10	3-②層	3.15	3.85	0.5	9.56	片刃
851	石包丁	安山岩	B1-9074	3層	(4.6)	(3.6)	4.5	9.94	片刃
852	片刃柱上石斧	頁岩	⑤No.60		8.9	2.9	2.5	-	ほぼ完形、全体的に風化
853	石剣片	泥岩	A5-8674	3層	4.65	3.05	0.85	18.22	剣先、柄部が欠損
854	半球状勾玉	メノウ	A5-8874-9	3④S1	2.0	1.2	0.7	-	色調 5Y3/5 灰オリーブ

第78表 弥生時代包含層出土青銅器観察表

遺物番号	器種	材質	出土区グリッド	層位	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	備考
855	銅鏃	青銅	①-弥生 河川		2.25	1.00	0.35	1.26	色調 7.5GY6/1 緑灰
856	船載鏡鈕片	青銅	①-9266 旧表土		1.50	1.25	0.65	2.30	破鏡、色調 5YG3/1 暗オリーブ灰
857	小形仿製鏡	青銅	①-旧河川		(面径)7.4	-	0.2~0.3	59.67	完形品

第79表 弥生時代包含層出土ガラス小玉観察表

遺物番号	材質	色調	出土区グリッド	層位	最大長(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	重量(g)	備考
858	カリガラス	紺色	⑤-9262	2層	3.80	4.00		0.06	
859	カリガラス	淡青色	⑤-9260	No.1	3.90	5.60		0.15	

第80表 弥生時代包含層出土鉄器(鉄斧)観察表

遺物番号	器種	最大長(cm)	出土区グリッド	層位	基部幅(cm)	刃部幅(cm)	袋部幅(cm)	重量(g)	備考
860	袋状鉄斧	13.6	⑨-0272	3.4層上	5.0	6.0	4.9	565.0	袋部横断面形が長方形、船載品(朝鮮製)

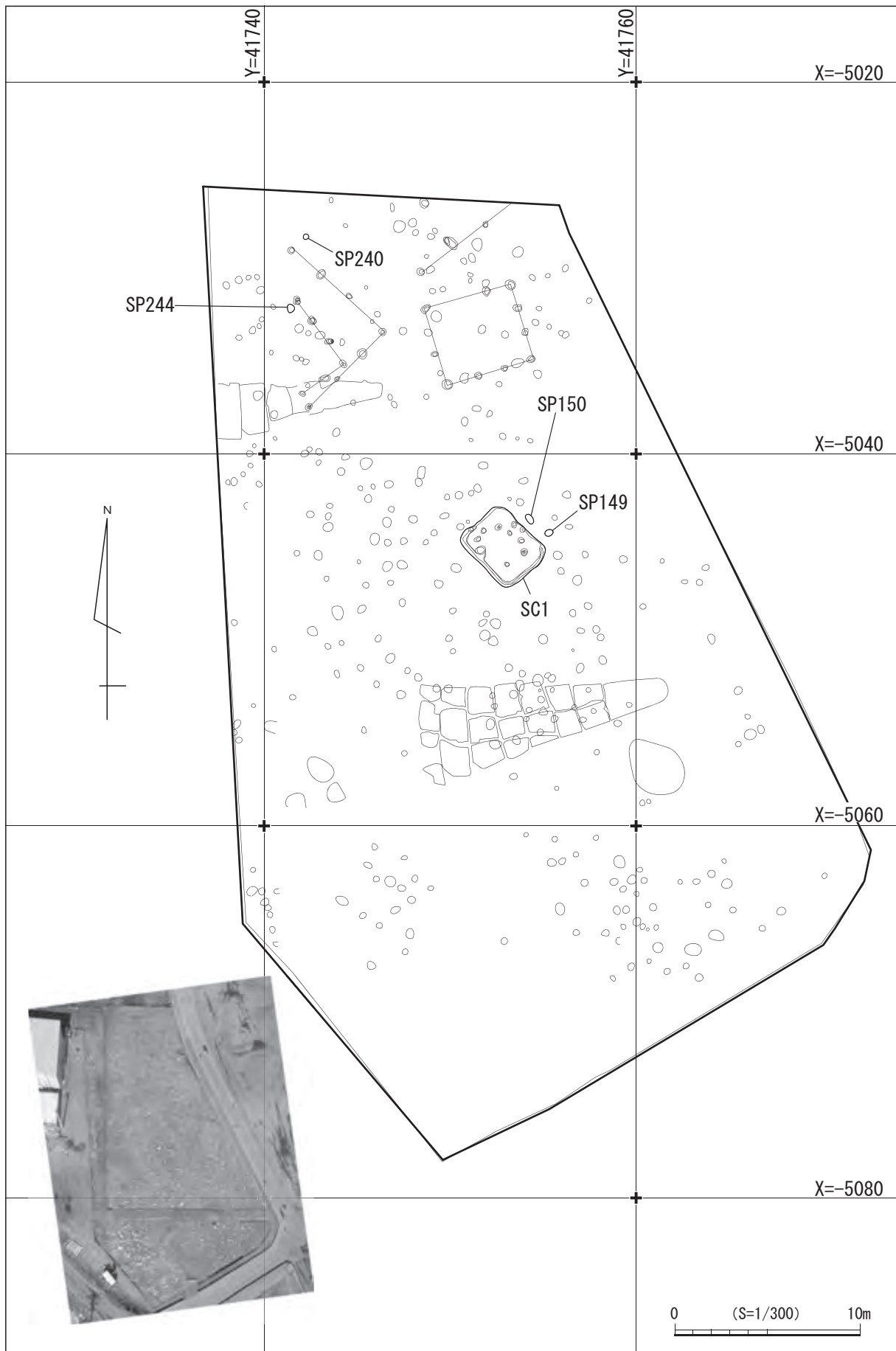




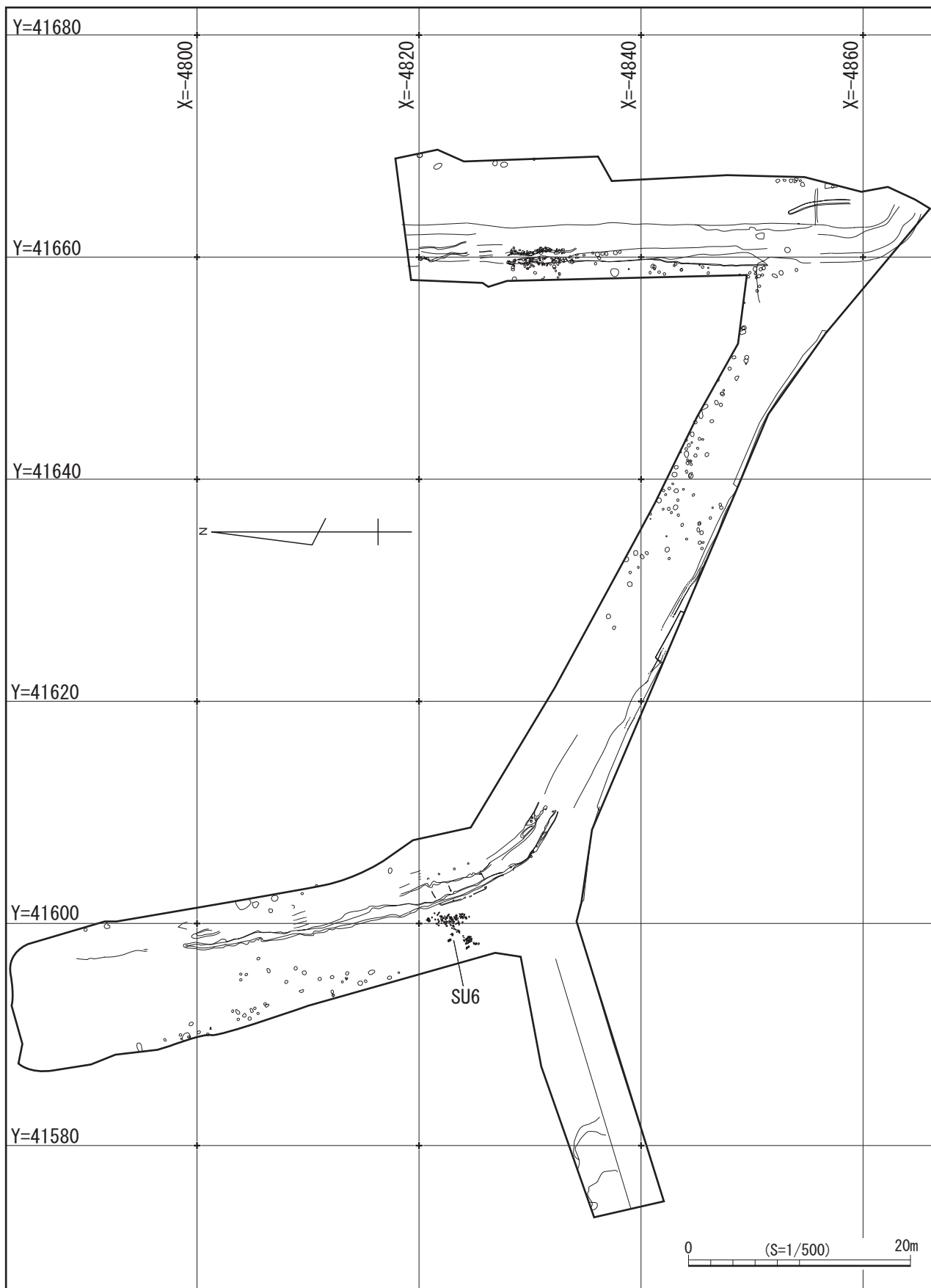
第213図 TAK201202調査区⑥区遺構配置図(S=1/300)  
平成24年度調査『竹松遺跡Ⅱ』未報告分



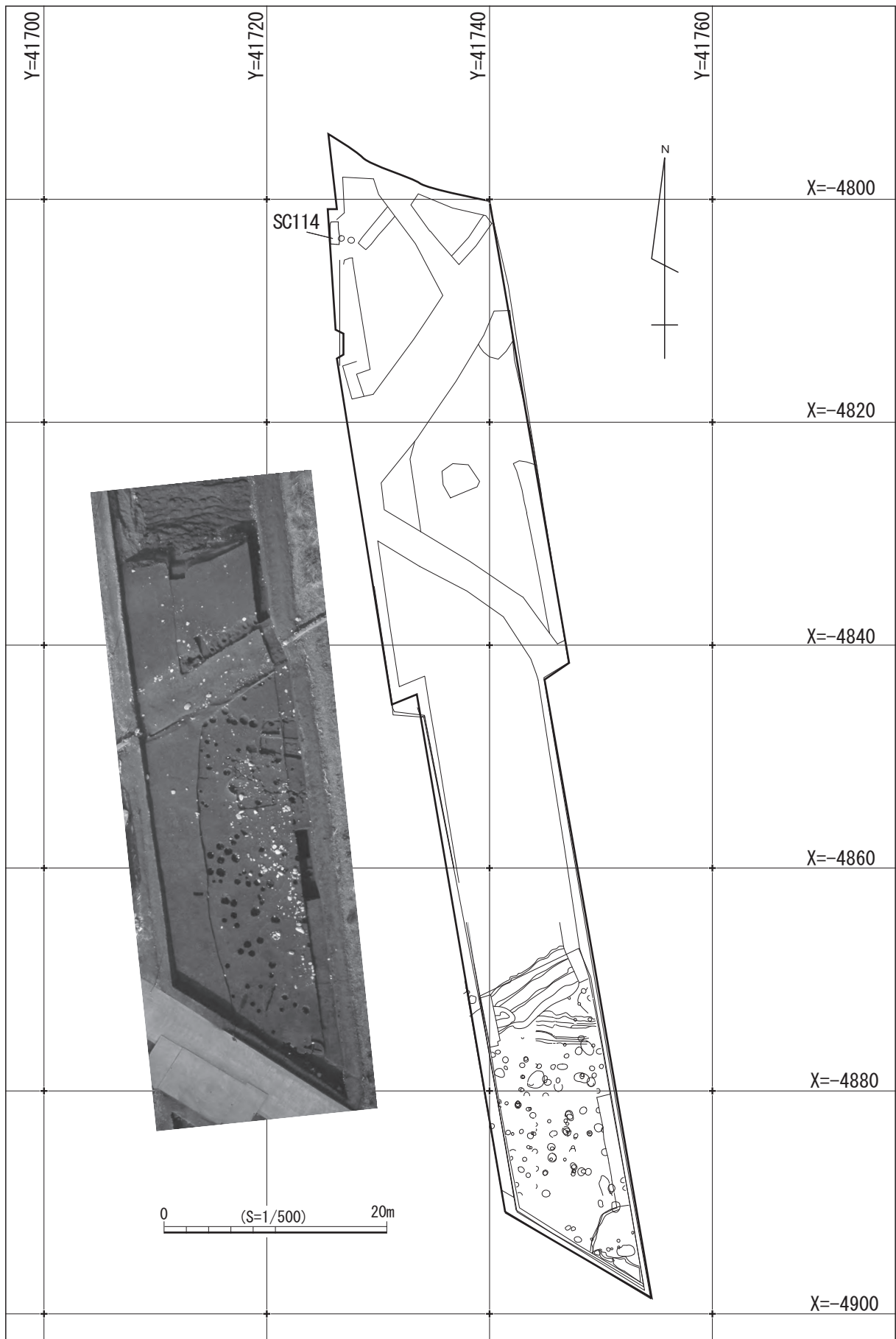
第214図 TAK201302調査区④区古墳時代遺構配置図 (S=1/300)



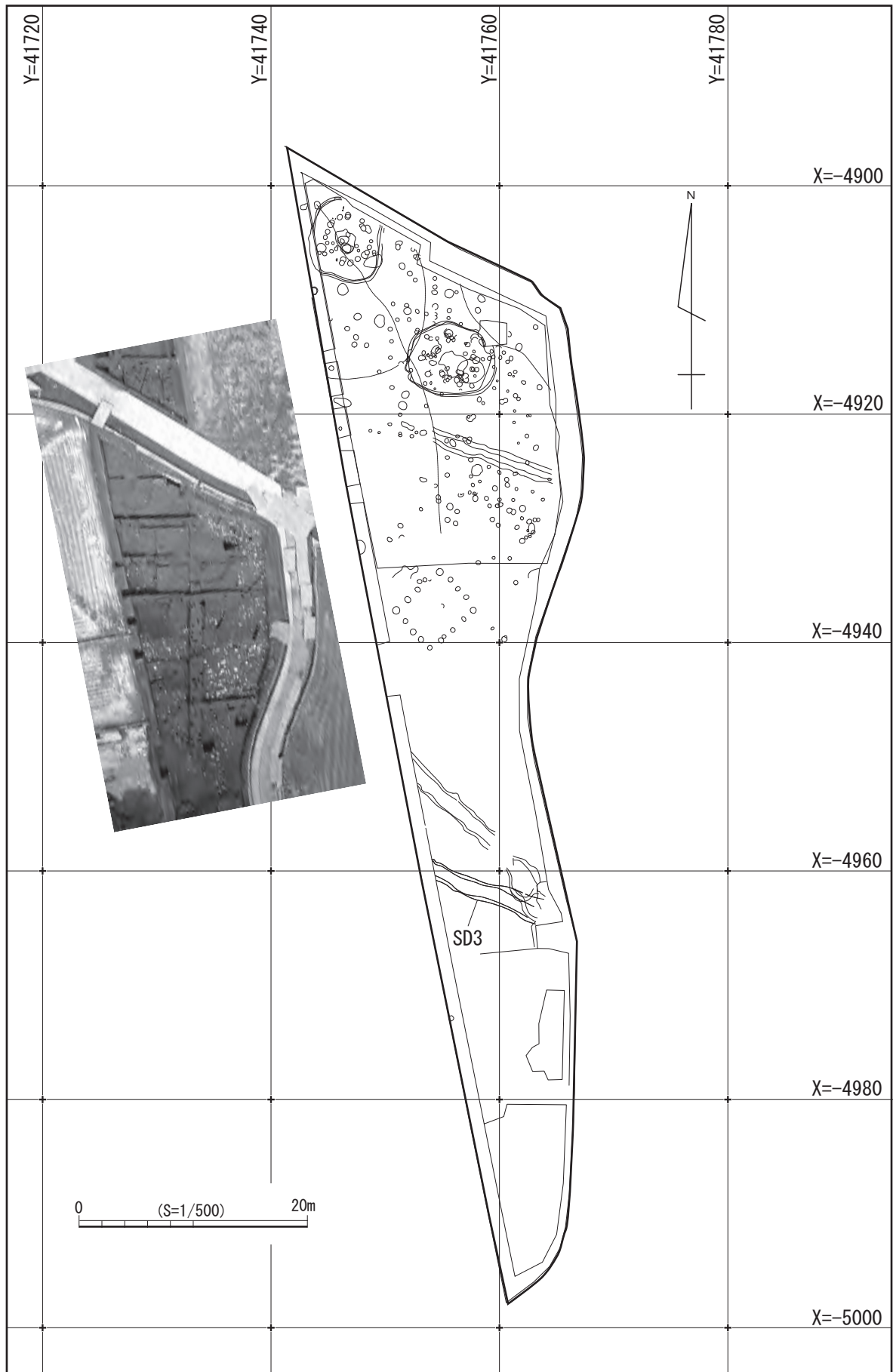
第215図 TAK201302調査区⑩区古墳時代遺構配置図 (S=1/300)



第216図 TAK201302調査区⑫区古墳時代遺構配置図 (S=1/500)



第217図 TAK201303調査区A区古墳時代遺構配置図(S=1/500)  
現場では北から1~5の小区に分けたが、省略



第218図 TAK201303調査区B区古墳時代遺構配置図(S=1/500)  
現場では北から1~5の小区に分けたが、省略

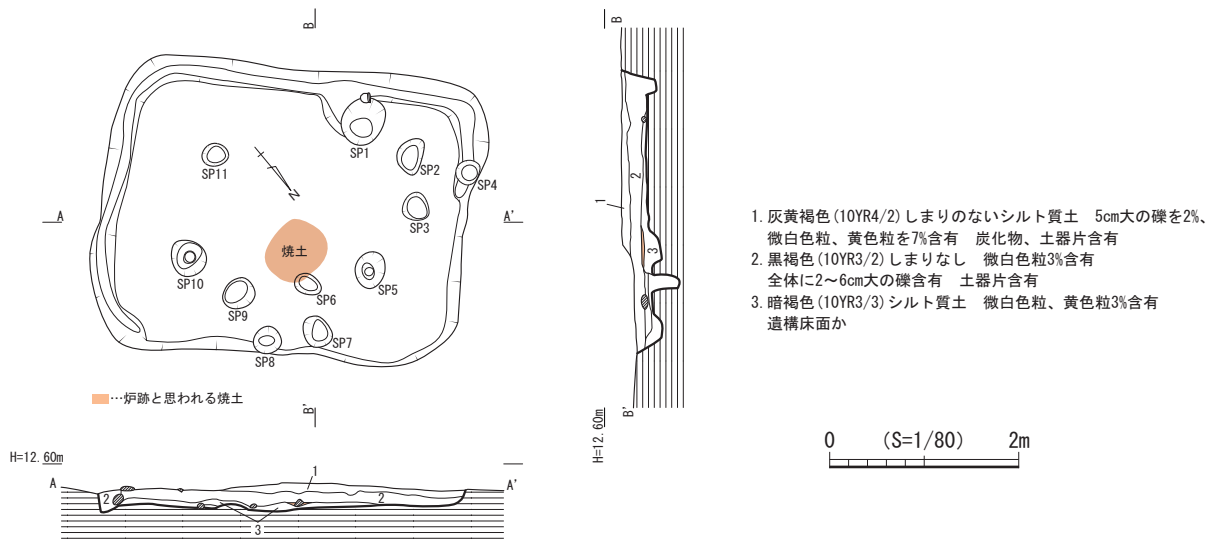
## (2) 古墳時代の遺構、遺物

TAK201301～04調査区で古墳時代の遺構が検出された調査区は TAK201302調査区および201303調査区である。遺構は竪穴建物(SC)、柱穴(SP)、遺物集積(SU)、不明遺構(SX)を検出した。以下個別遺構、遺物の説明を記す。

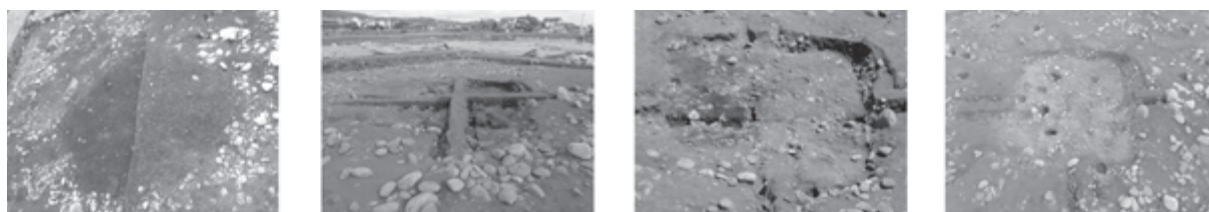
### ①TAK201302⑩ SC1(竪穴建物) (第219・220図 図版156・157 表81)

SC1は⑩区0474グリッドに位置する。主軸方位はN-50°-Wで北西から南西方向に構築された竪穴建物である。規模は長軸上端3.9m、短軸上端3.0m、深さ0.13mを測り、平面プランは隅丸方形を呈する。屋内施設は東から西側にかけて排水溝が構築される。柱跡は11穴を確認した。直径24～42cmを測り平面プランは円形及び楕円形を呈する。基本柱はSP2、5、10、11が考えられ、残りは桁、梁方向からややずれていることから補助材であろうか。中央北側から僅かながら焼土痕が検出された。全体的に後世の洪水で小礫等が散乱し、建物上面が削平されていることから全体の様相が不明瞭である。遺物は覆土及び床面から小形壺、高杯、甕口縁部片等が出土した。以下出土遺物について記す。

**861**は甕の口縁部である。くの字口縁で端部は方形を呈する。口縁部の器壁はやや厚い。**862**は高杯脚部片で、穿孔が1ヶ所確認できる。外面は細かな削り痕が残る。**863**は高杯脚部片で脚端部は短く跳ね上がり丸い。**864**は小形の壺である。ほぼ完形で胴部の一部が剥離している。口縁部は短く外反し、端部は丸い。底部は丸底である。**865**は高杯杯部である。口縁部は緩やかに外反し端部は丸い。器壁は薄く外面のミガキは一定の間隔を持った縦位で暗文である。全体的にミガキが施され丁寧な作りである。遺物の時期は4世紀中～後半頃と考えられる。

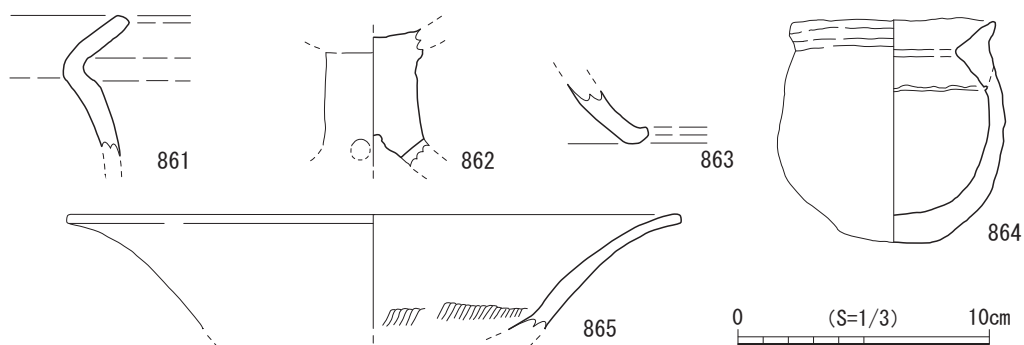


第219図 SC1(1302⑩)平・断面図(S=1/80)



①検出状況 ②土層ベルト ③床面柱穴検出・遺物出土状況 ④完掘状況

図版156 SC1 (1302⑩) 遺構状況(①～④)



第220図 SC1 (1302⑩) 出土遺物実測図(S=1/3)



図版157 SC1 (1302⑩) 出土遺物

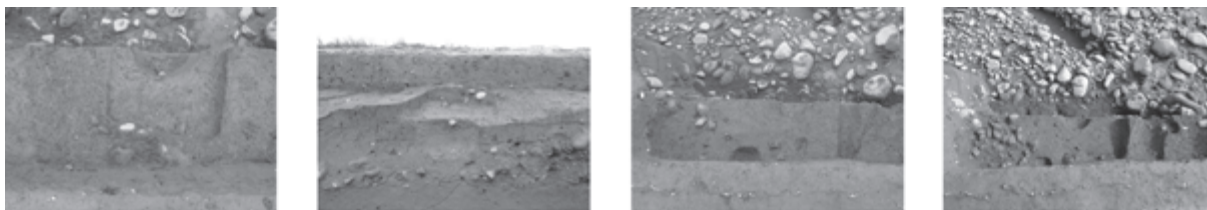
第81表 SC1出土土器観察表

遺物番号	器種	部位	法量(cm)			調整		色調		焼成	胎土	備考
			口径	器高	底径	外面	内面	外面	内面			
861	甕	口縁部	—	—	—	ハケメ	ハケメ	10YR5/1 褐灰	7.5YR8/4 浅黄橙	良	石英、角閃石	くの字口縁
862	高杯	脚部	—	—	—	(細かな)削り痕	ナデ	5YR6/4 にぶい橙	5YR6/4 にぶい橙	良	長石、石英、雲母 角閃石	穿孔1ヶ所あり
863	高杯	脚部	—	—	—	ナデ	ナデ	7.5YR6/6 橙	7.5YR6/6 橙	良	長石、石英	
864	小形壺	ほぼ完形	8.2	8.9	—	ヘラ削り	ナデ	7.5YR6/6 橙	7.5YR6/4 にぶい橙	良	雲母	丸底
865	高杯	杯部	(24.4)	—	—	ナデミガキ	ハケメナデ	2.5YR6/6 橙	2.5YR6/6 橙	良	長石、雲母 細かい砂粒	

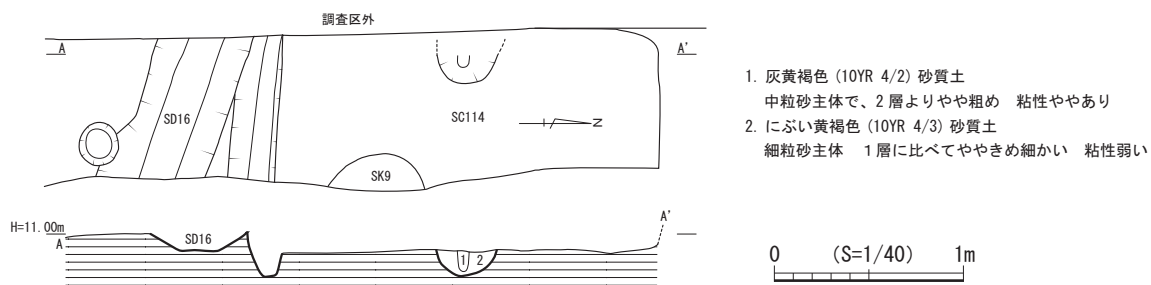
②TAK201303A1区SC114(竪穴建物) (第221・222図 図版158・159 表82)

SC114はA1区8072グリッドに位置する。調査区が細長いため遺構全体が検出できない状況である。SC114の規模は南北軸4.5m+、東西軸1.6m+を測る。南側は周壁溝が幅0.5m、深さ6cm程で構築された竪穴建物である。屋内施設は柱穴が1ヶ所検出した。直径0.6m、深さ7～8cmを測る。直径12cmの柱痕が残る。遺物は鉢、甕片等が出土した。**866**は鉢の口縁部片である。器壁は薄い。外面は薄いハケメ調整を施す。**867**は甕の口縁部片である。くの字口縁で端部は丸い。器壁は薄く細かな砂粒を含む。全体的に磨耗する。時期は4世紀代の所産か。

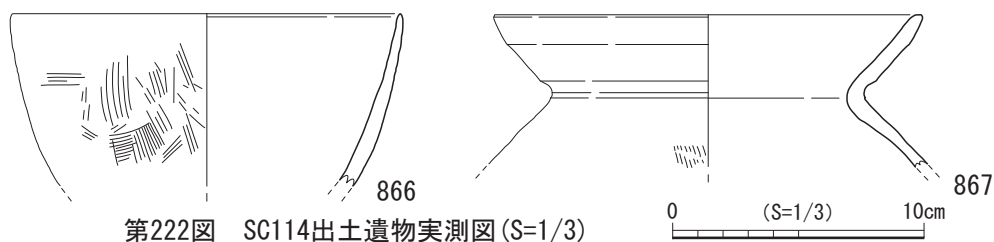




①床面検出状況 その3    ②床面検出状況 その2    ③完掘状況 その1    ④完掘状況 その2  
 図版158 SC114遺構状況(①~④)



第221図 SC114平・断面図(S=1/40)



第222図 SC114出土遺物実測図(S=1/3)



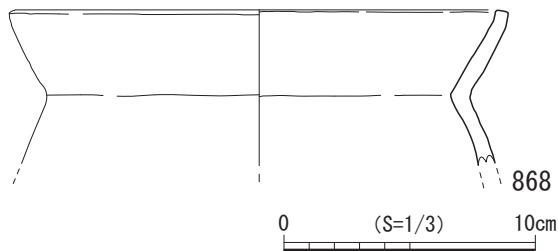
図版159 SC114出土遺物

第82表 SC114出土土器観察表

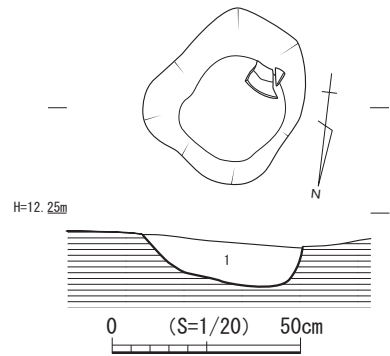
遺物番号	器種	部位	法量(cm)			調整		色調		焼成	胎土	備考
			口径	器高	底径	外面	内面	外面	内面			
866	鉢	口縁部	(15.6)	—	—	薄いハケメ	ナデ	7.5YR8/8 黄橙	7.5YR7/4 にぶい橙	良	長石、赤色粒子	
867	甕	口縁部	(16.9)	—	—	ハケメ	ヘラケズリ	7.5YR6/3 にぶい褐	7.5YR6/3 にぶい褐	良	薄く細かな砂粒 石英、長石、金雲母	くの字口縁

③ TAK201302⑩SP149(柱穴) (第223・224図 図版160 表83)

SP149は⑩区0474グリッドに位置する。規模は長軸0.44m、短軸0.36m、深さ0.12mを測る。平面形は楕円形を呈する。覆土から土師器甕口縁部片が出土した。868はくの字口縁で端部は方形を呈する。外面はハケメ調整を施す。器壁は薄い。4世紀代の甕か。



第224図 SP149出土遺物実測図 (S=1/3)



1. 黒色 (7.5YR 2/1) しまり無し 粘性あり

第223図 SP149平・断面図 (S=1/20)



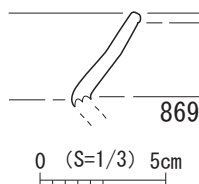
図版160 SP149出土遺物

第83表 SP149出土土器観察表

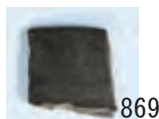
遺物番号	器種	部位	法量 (cm)			調整		色調		焼成	胎土	備考
			口径	器高	底径	外面	内面	外面	内面			
868	土師器甕	口縁部	(20.0)	—	—	ハケメ	ナデ	7.5YR8/4 浅黄橙	7.5YR8/6 浅黄橙	良	褐色粒子	くの字口縁

④ TAK201302⑩SP150(柱穴) (第225図 図版161 表84)

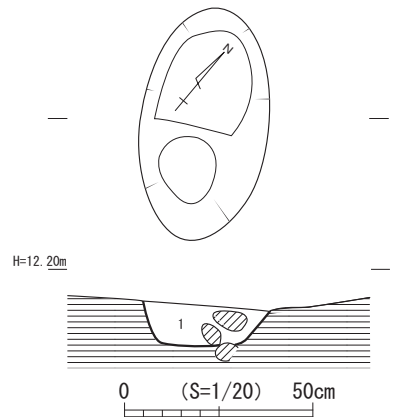
SP150は⑩区0474グリッドに位置する。規模は長軸0.60m、短軸0.32m、深さ0.10mを測る。平面形は長楕円形を呈する。覆土から土師器甕口縁部片が出土した。869は甕口縁部片である。くの字口縁を呈し、端部は丸い。器壁は薄い。



第226図 SP150出土遺物実測図 (S=1/3)



図版161 SP150出土遺物



1. 黒褐色 (7.5YR 3/1) しまり無し 粘性シルト質土  
 橙色粒 1%、微白色粒 20%、こぶし大の礫 30%  
 φ1cm 大の礫 5% 含有

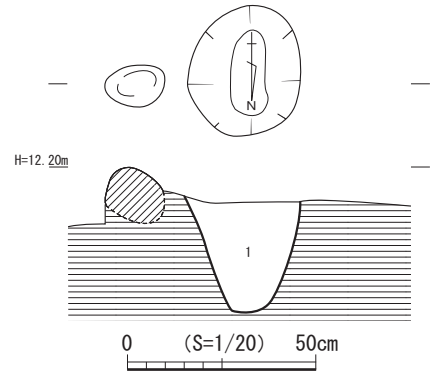
第225図 SP150平・断面図 (S=1/20)

第84表 SP150出土土器観察表

遺物番号	器種	部位	法量 (cm)			調整		色調		焼成	胎土	備考
			口径	器高	底径	外面	内面	外面	内面			
869	甕	口縁部	(14.4)	—	—	ナデ	ナデ	5YR3/2 暗赤褐	5YR5/3 にぶい赤褐	良	長石、褐色粒子	くの字口縁

⑤TAK201302⑩SP240(柱穴) (第227図)

SP240は⑩区0274グリッドに位置する。規模は長軸0.34m、短軸0.30m、深さ0.28mを測る。平面形は楕円形を呈する。覆土から甕?口縁部小細片が出土したが、細片のため図化できない。

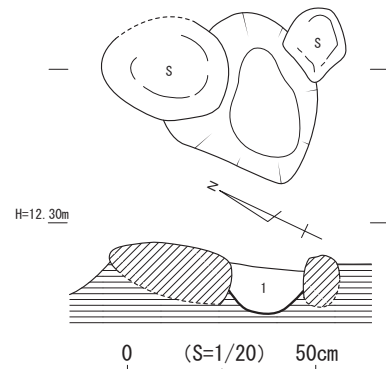


1. 黒褐色 (10YR 3/1) しまり無し 粘性大  
 下方にオレンジ色粒 3% 上方に黄色ブロック  
 全体に 1cm 大の礫 10% 含有

第227図 SP240平・断面図 (S=1/20)

⑥TAK201302⑩SP244(柱穴) (第228図)

SP244は⑩区0274グリッドに位置する。規模は長軸0.46m、短軸0.40m、深さ0.12mを測る。平面形は不正楕円形である。覆土から短頸壺?口縁部小細片(丹塗り)が出土したが、細片のため図化できない。

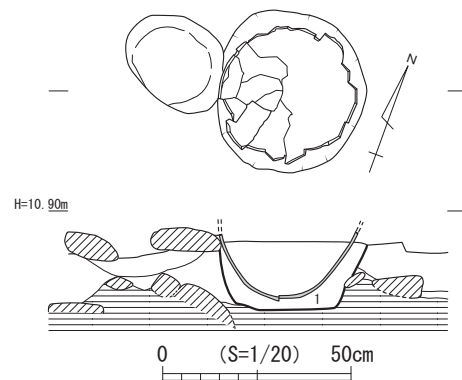


1. 黒褐色 (10YR 3/2) しまり無し 微白色粒 10% 含有

第228図 SP244平・断面図 (S=1/20)

⑦TAK201302④SU2(遺物集積) (第229・230図 図版162・163 表85)

SU2は④区の9264グリッドに位置する。規模は長軸0.42m、短軸0.40m、深さ0.20m+を測る。平面形はほぼ円形である。この中に須恵器甕胴部~底部片が収められている。須恵器は底部に1cm程の孔が施されている。870は須恵器甕の胴部~底部片である。底部中央に1cm程の孔を空けている。外面は格子タタキ、内面は同心円及び縦方向にタタキを施す。復元胴部径37.0cmを測る。

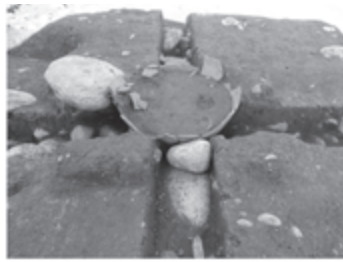


1. 黒褐色 (10YR3/2) 粘質土、しまり強、粘性大 白色粒を 10%

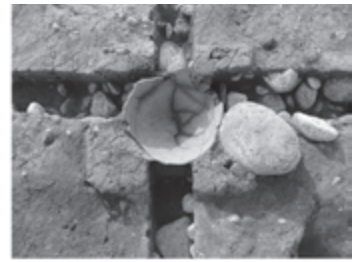
第229図 SU2平・断面図 (S=1/20)



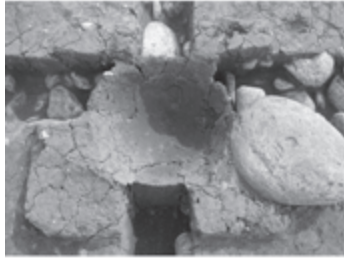
①検出状況



②半截状況



③遺物出土状況 その1

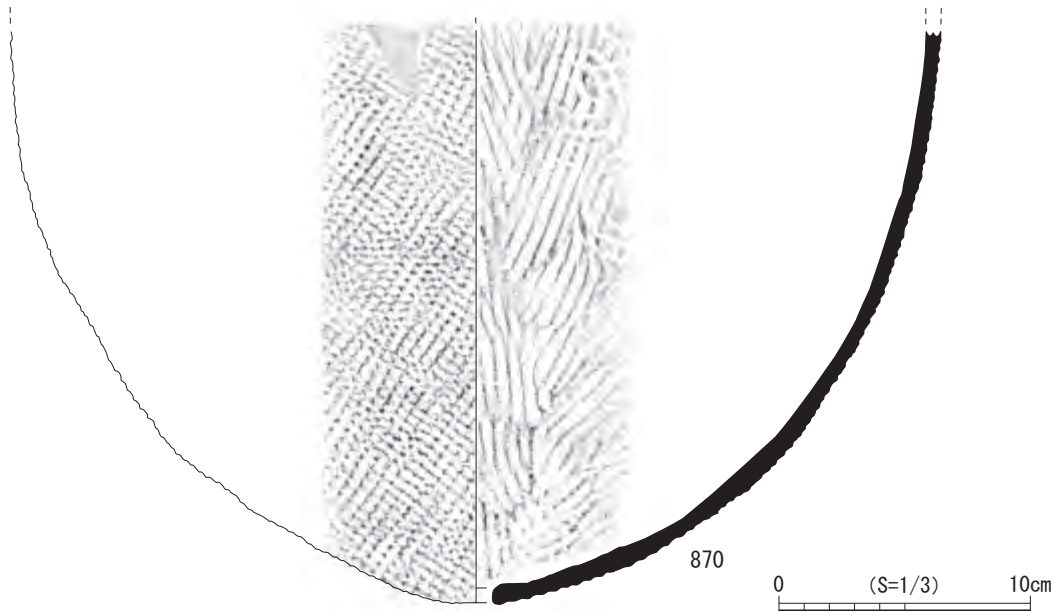


④遺物出土状況 その2

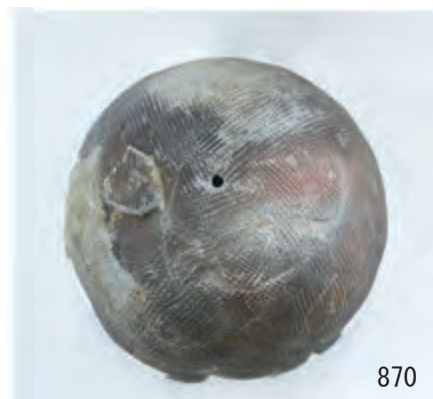


⑤完掘状況

図版162 SU2遺構状況(①~⑤)



第230図 SU2出土遺物実測図(S=1/3)



図版163 SU2出土遺物

第85表 SU2出土土器観察表

遺物番号	器種	部位	法量(cm)			調整		色調		焼成	胎土	備考
			口径	器高	底径	外面	内面	外面	内面			
870	須恵器	胴部	-	-	-	格子目のタタキ痕	ハケメタタキ痕	7.5YR4/1 褐灰	7.5YR4/1 褐灰	良好	長石、雲母 黒色粒子	底部に1cm程の孔を有す

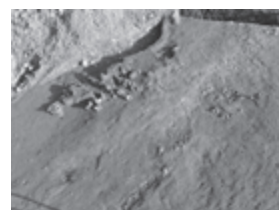
⑧TAK201302⑫SU6(遺物集積) (第231～235図 図版164～167 表86・87)

SU6は⑫区の8258、8260グリッドに位置する。平面的な遺構の掘り方は確認できず古墳時代の須恵器、土師器を中心に一部弥生後期土器の遺物集中をみた。遺物集中は南北4.6m、東西3.4mの範囲で、標高10m程である。遺物は須恵器杯身、土師器壺、甕、椀などが出土した。以下出土遺物について記す。

871～894、919、920までは甕で口縁部～胴部の破片である。いずれも口径が20cm未満の小形から中形の甕である。口縁部はくの字口縁で端部は丸い。876、886はやや尖り気味で、884は方形気味である。器面の外面はハケメ、内面は指圧痕及びハケメ調整を施している。895～899は壺で口縁部～胴部片である。896、899の口縁部は垂直に立ち上がり、端部はやや尖る。外面は縦、斜め方向にハケメ調整を行い、内面は削り痕が残る。900～915は椀で口縁部～底部にかけての破片である。復元口径12～15cmを測る。口縁部は内湾するもの905、914。直線的に延びるもの902、908、911、912。体部から緩やかに内湾するもの907、910。短く外反するもの913。外反するもの915がある。ほとんどの口縁端部は丸く仕上げられているが、910、911、912はやや尖る。外面調整は縦及び斜め方向にハケメ調整を施すもの905、907、908。横方向に削りを施した909がある。916は須恵器杯身で完形品である。底部外側には×のヘラ記号を有す。口径11.3cm、器高1.7cmを測る。時期は5世紀後半頃であろう。917、918は高杯の脚部片である。917は孔が1ヶ所確認できる。



第231図 SU6平・断面図 (S=1/40)



①検出状況



②遺物検出状況

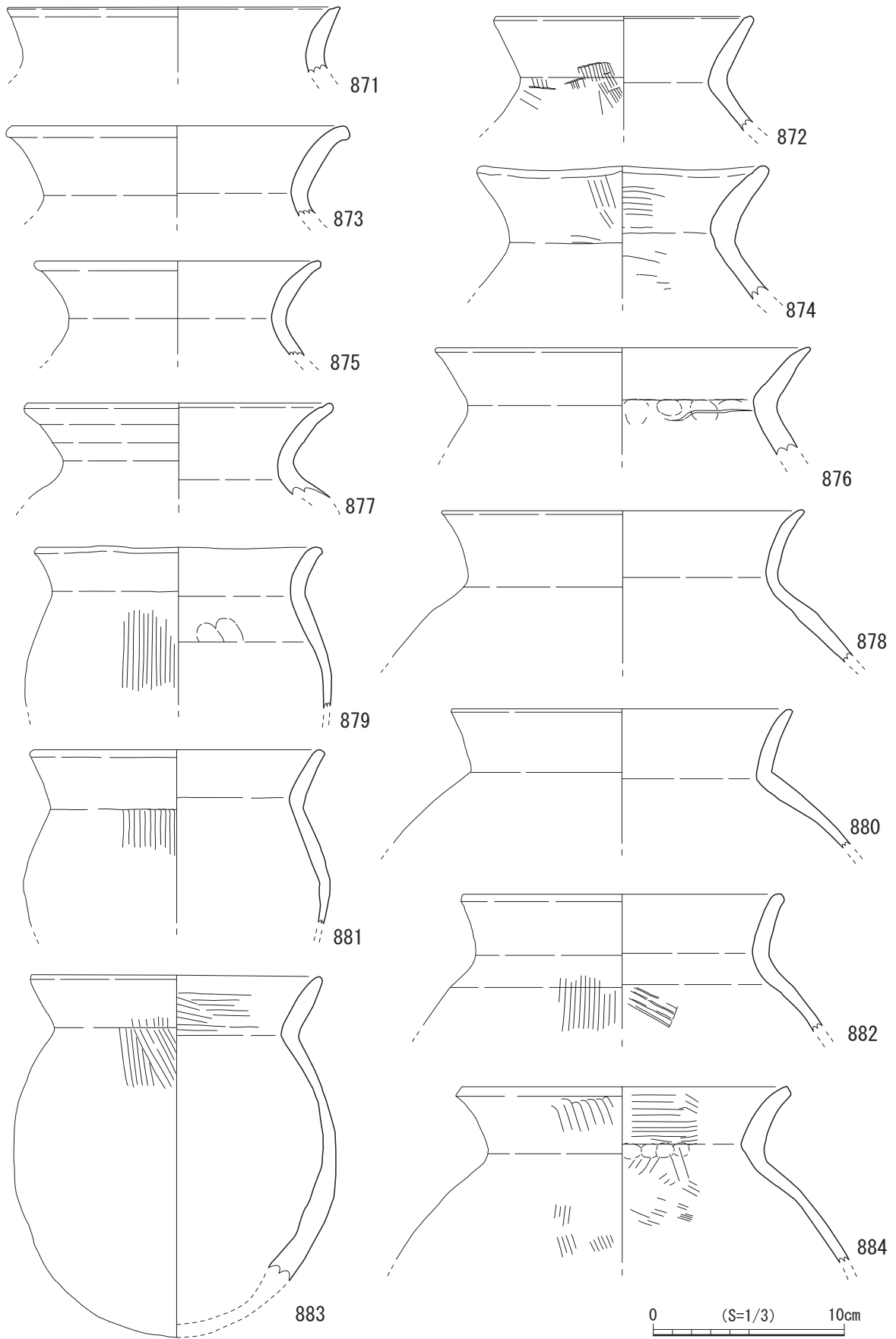


③断面状況

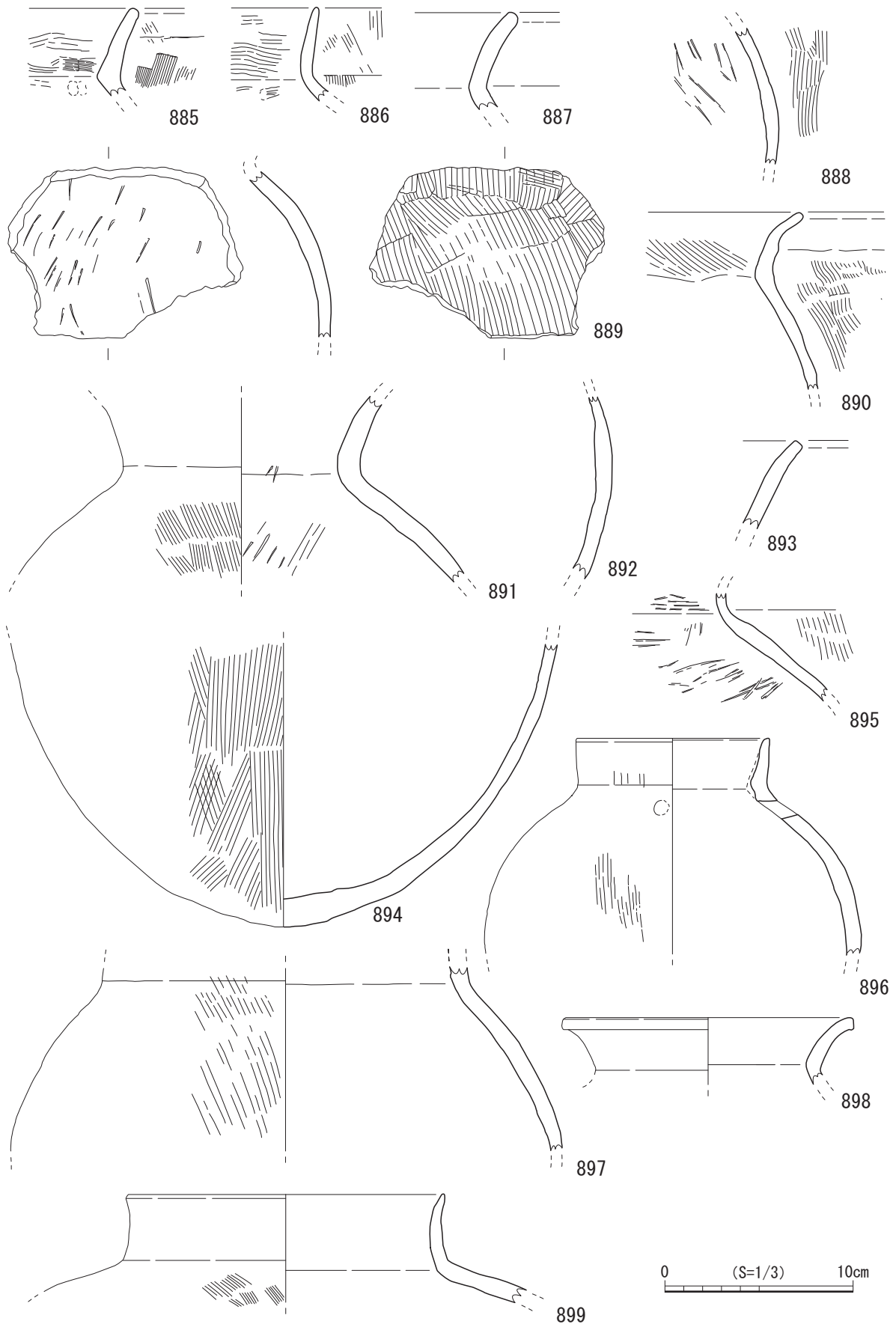


④掘方完掘状況

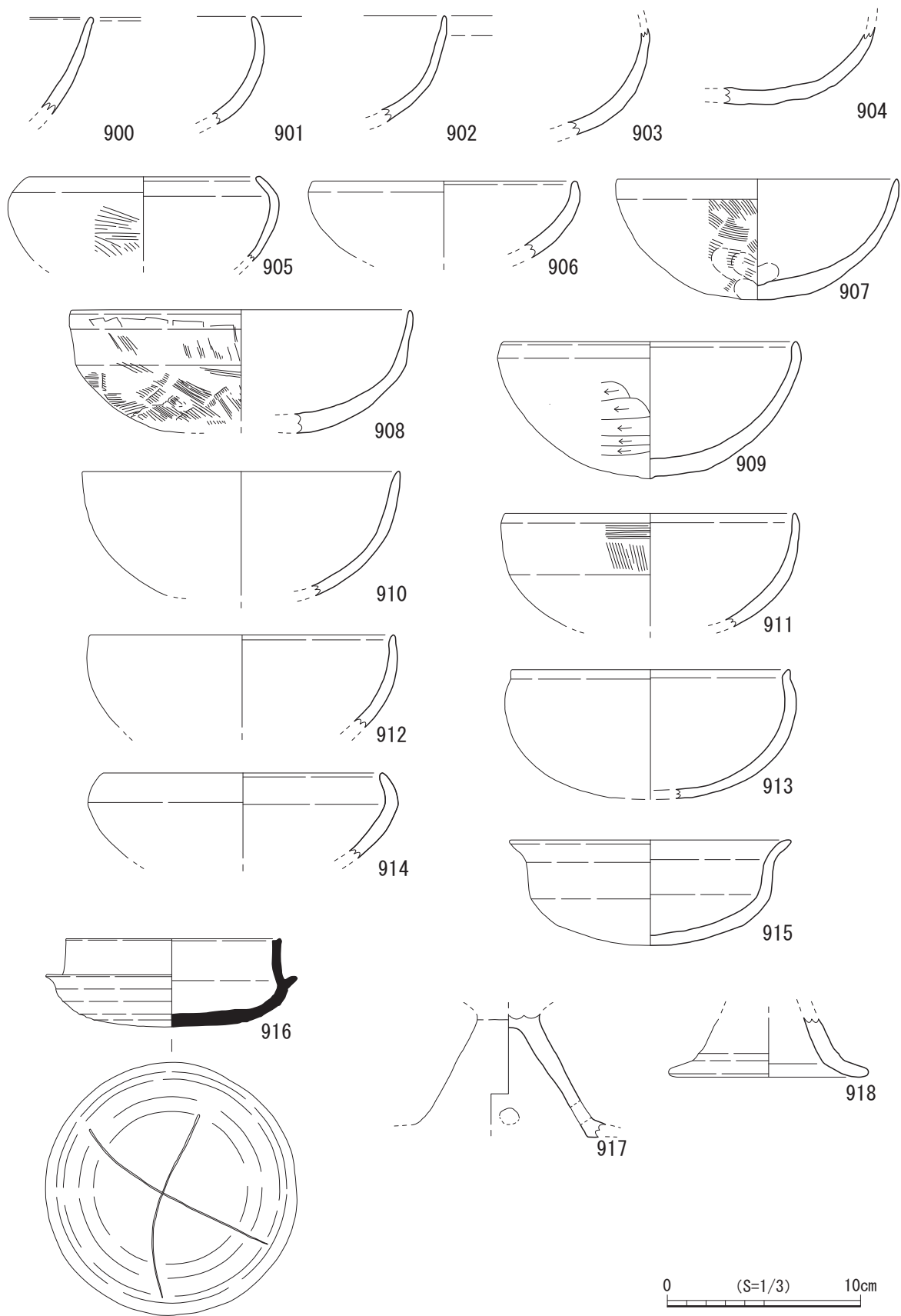
図版164 SU6遺構状況(①～④)



第232図 SU6出土遺物実測図 その1(S=1/3)

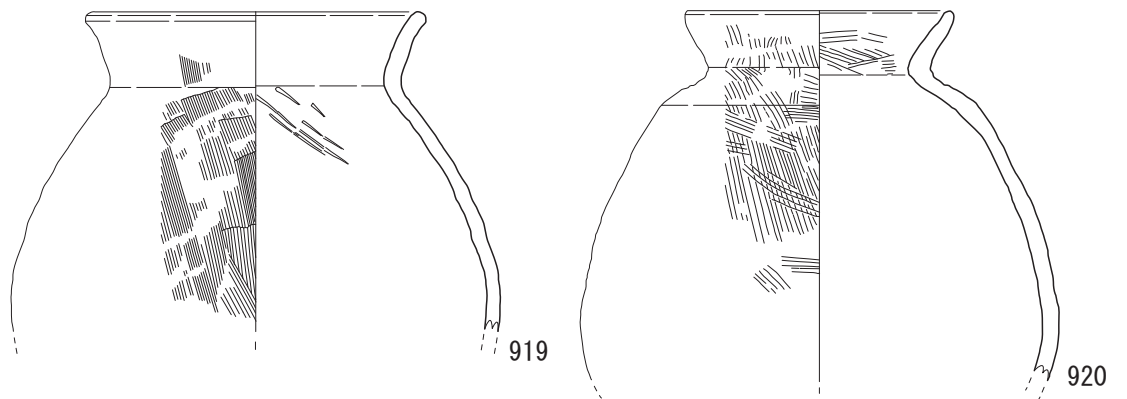


第233図 SU6出土遺物実測図 その2(S=1/3)



第234図 SU6出土遺物実測図 その3(S=1/3)





第235図 SU6出土遺物実測図 その4 (S=1/4)



図版165 SU6出土遺物 その1



884



885



886



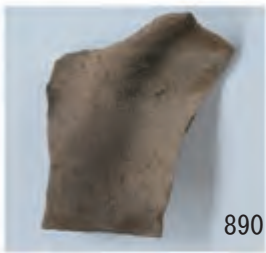
887



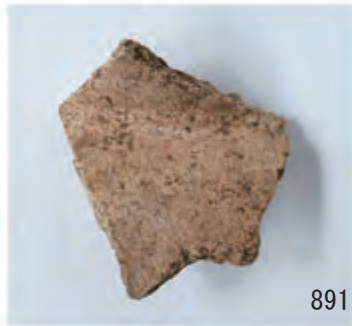
888



889



890



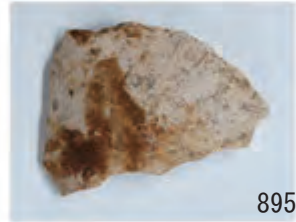
891



892



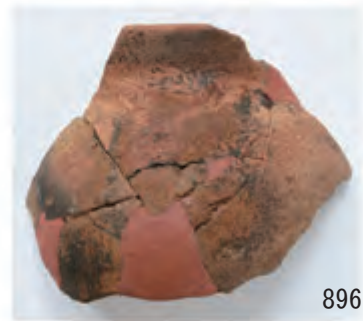
893



895



894



896



897



898



899



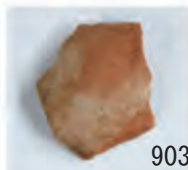
900



901



902



903

図版166 SU6出土遺物 その2



図版167 SU6出土遺物 その3

第86表 SU6出土土器観察表その1

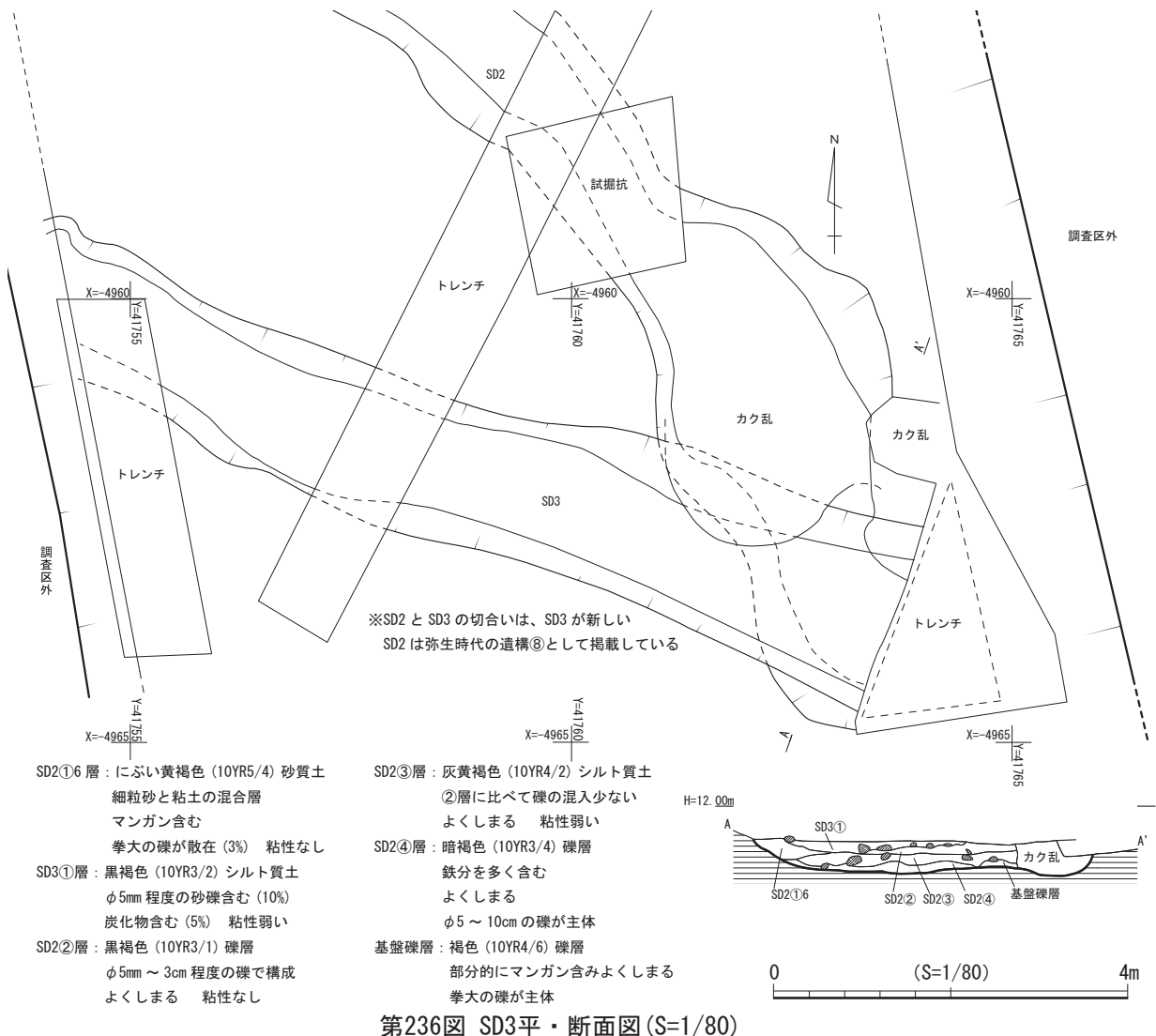
遺物番号	器種	部位	法量(cm)			調整		色調		焼成	胎土	備考
			口径	器高	底径	外面	内面	外面	内面			
871	甕	口縁部	(17.4)	—	—	ハケメ	ナデ	5YR6/6 橙	7.5YR6/4 にぶい橙	良	長石、石英 雲母、角閃石	くの字口縁
872	甕	口縁部	(13.4)	—	—	ハケメ	ナデ	5YR6/8 橙	7.5YR7/6 橙	良	長石、角閃石	くの字口縁
873	甕	口縁部	(17.8)	—	—	ハケメ	ハケメ	7.5YR7/4 にぶい橙	7.5YR7/4 にぶい橙	良	石英、雲母 角閃石、赤色粒子	くの字口縁
874	甕	口縁部	(15.2)	—	—	ハケメ	ハケメ ユビオサエ	7.5YR7/3 にぶい橙	7.5YR7/6 橙	良	長石、角閃石	くの字口縁
875	甕	口縁部	(15.0)	—	—	ナデ	ナデ ヘラ削り痕	5YR7/4 にぶい橙	5YR7/4 にぶい橙	良	長石、雲母、 角閃石、赤色粒子 結晶片岩	くの字口縁
876	甕	口縁部	(19.6)	—	—	ナデ	ナデ	7.5YR8/6 浅黄橙	10YR7/4 にぶい黄橙	良	石英、角閃石	くの字口縁
877	甕	口縁部	(16.1)	—	—	ナデ	ナデ	7.5YR7/2 明褐灰	7.5YR7/6 橙	良	雲母、結晶片岩	くの字口縁
878	甕	口縁部	(19.0)	—	—	ナデ	ナデ ユビオサエあり	10YR8/3 浅黄橙	10YR8/3 浅黄橙	良	長石、石英 角閃石	くの字口縁
879	甕	口縁部	(15.0)	—	—	ハケメ	ナデ 指圧痕	7.5YR6/6 橙	7.5YR6/4 にぶい橙	良	長石、石英 雲母	くの字口縁
880	甕	口縁部	(17.8)	—	—	ハケメ	ナデ	5YR5/6 明赤褐	5YR6/6 橙	良	長石、石英 雲母、角閃石 結晶片岩	くの字口縁
881	甕	口縁部	(15.4)	—	—	ハケメ	ナデ	2.5YR6/3 にぶい橙	2.5YR5/6 明赤褐	良	石英、雲母 結晶片岩	くの字口縁
882	甕	口縁部	(16.9)	—	—	ハケメ	ハケメ	5YR5/4 にぶい赤褐	7.5YR7/3 にぶい橙	良	雲母、角閃石 結晶片岩	くの字口縁
883	甕	ほぼ完形	14.9	(18.8)	—	ハケメ	ナデ ユビオサエ	7.5YR6/3 にぶい褐	7.5YR6/3 にぶい褐	良	石英、雲母 結晶片岩	くの字口縁
884	甕	口縁部	17.5	—	—	ハケメ	ナデ	7.5YR6/4 にぶい橙	7.5YR7/3 にぶい褐	良	長石、石英 雲母	くの字口縁
885	甕	口縁部	—	—	—	ハケメ	ハケメ	7.5YR6/4 にぶい橙	7.5YR7/6 橙	良	長石、石英 雲母、角閃石	くの字口縁
886	甕	口縁部	—	—	—	ハケメ	ハケメ	7.5YR6/4 にぶい橙	7.5YR6/4 にぶい橙	良	長石	くの字口縁
887	甕	口縁部	—	—	—	ナデ	ナデ	5YR7/4 にぶい橙	5YR5/4 にぶい赤褐	良	長石、雲母 赤色粒子	くの字口縁
888	甕	胴部	—	—	—	ハケメ	ハケメ	7.5YR4/3 褐	7.5YR7/6 橙	良	長石、雲母 角閃石、結晶片岩	
889	甕	胴部	—	—	—	ハケメ	ハケメ	2.5YR6/8 橙	10Y8/2 灰白	良	雲母、角閃石	
890	甕	頸部	—	—	—	ハケメ	ハケメ	10YR7/2 にぶい黄橙	10YR6/3 にぶい黄橙	良	長石、角閃石	くの字口縁
891	甕	頸部	—	—	—	ハケメ	ナデ ユビオサエ	7.5YR8/4 浅黄橙	7.5YR8/4 浅黄橙	良	雲母、角閃石 褐色粒子	くの字口縁
892	甕	胴部	—	—	—	ハケメ	ナデ	7.5YR6/3 にぶい褐	7.5YR7/6 橙	良	長石、雲母 角閃石、赤色粒子 結晶片岩	
893	甕	口縁部	—	—	—	ナデ	ナデ	5YR7/8 橙	5YR7/8 橙	良	長石	
894	甕	胴部	—	—	—	ハケメ	ユビオサエ	7.5YR6/4 にぶい橙	7.5YR6/2 灰褐	良	石英、雲母 角閃石、赤色粒子 結晶片岩	
895	壺	胴部	—	—	—	ハケメ	ハケメ	10YR8/3 浅黄橙	10YR8/3 浅黄橙	良	長石、角閃石	
896	壺	口縁部～ 胴部	(10.2)	—	—	ハケメ	ハケメ	5YR4/4 にぶい赤褐	5YR6/6 橙	良	長石、石英	
897	壺	胴部	—	—	—	ハケメ	ヘラ削り	2.5YR6/8 橙	2.5YR7/6 橙	良	長石、石英 雲母、結晶片岩	
898	壺	口縁部	(15.4)	—	—	ナデ	ナデ	5YR7/6 橙	7.5YR8/4 浅黄橙	良	石英、角閃石	
899	壺	口縁部	(16.7)	—	—	ハケメ	ハケメ	7.5YR8/4 浅黄橙	7.5YR8/3 浅黄橙	良	石英、雲母 角閃石、赤色粒子	
900	椀	口縁部	—	—	—	ナデ	ナデ	5YR6/8 橙	5YR6/8 橙	良	長石	
901	椀	口縁部	—	—	—	ハケメ	ナデ	5YR6/8 橙	5YR6/6 橙	良	石英、雲母 赤色粒子	
902	椀	口縁部	—	—	—	ナデ	ナデ	7.5YR7/6 橙	7.5YR7/6 橙	良	長石	
903	椀	口縁部	—	—	—	ナデ	ナデ	5YR7/6 橙	5YR6/6 橙	良	長石、雲母 赤色粒子	
904	椀	口縁部～ 胴部	—	—	—	ナデ	ナデ	7.5YR5/3 にぶい褐	7.5YR6/4 にぶい橙	良	石英、雲母 角閃石	
905	椀	口縁部	(12.0)	—	—	ハケメ	ナデ	7.5YR7/6 橙	7.5YR5/3 にぶい褐	良	長石、雲母 赤色粒子	
906	椀	口縁部	(13.6)	—	—	ナデ	ナデ	2.5YR6/8 橙	5YR5/4 にぶい褐	良	長石、雲母	
907	椀	口縁部～ 胴部	(14.4)	—	—	ハケメ	ナデ	5YR6/4 にぶい橙	5YR6/6 橙	良	長石、石英	
908	椀	口縁部～ 底部	(17.4)	—	—	ハケメ	ナデ	5YR7/6 橙	5YR7/6 橙	良	雲母、角閃石	
909	椀	ほぼ完形	15.4	7.05	6.0	ヘラ削り	ナデ	10YR7/4 にぶい黄橙	10YR7/4 にぶい黄橙	良好	長石、雲母	
910	椀	口縁部	(16.4)	—	—	ナデ	ナデ	2.5YR5/8 明赤褐	2.5YR5/8 明赤褐	良好	長石、石英 角閃石	

第87表 SU6出土土器観察表その2

遺物番号	器種	部位	法量 (cm)			調整		色調		焼成	胎土	備考
			口径	器高	底径	外面	内面	外面	内面			
911	椀	口縁部	(14.8)	—	—	ハケメ	ハケメ	5YR7/6 橙	5YR7/6 橙	良	雲母、赤色粒子	
912	椀	口縁部	(16.0)	—	—	ナデ	ナデ	5YR6/6 橙	5YR7/6 橙	良	石英、赤色粒子	
913	椀	口縁部	(14.4)	—	—	ナデ	ナデ	5YR6/6 橙	5YR6/6 橙	良	長石、石英	
914	椀	口縁部	(14.4)	—	—	ナデ	ナデ	5YR6/6 橙	5YR6/6 橙	良	長石、雲母 赤色粒子	
915	椀	口縁部～ 底部	(14.6)	5.4	—	ナデ	ナデ	2.5YR7/4 淡赤橙	2.5YR6/6 橙	良	石英、角閃石 赤色粒子	
916	須恵器 杯身	完形	11.1	4.6	—	ヘラケズリ		5Y6/1 灰	5Y6/1 灰	良好	雲母、赤色粒子	底部外側に×の ヘラ記号を有す
917	高杯	脚部	—	—	—	ナデ	ナデ	7.5YR8/4 浅黄橙	7.5YR8/4 浅黄橙	良好	長石、雲母 赤色粒子	穿孔1ヶ所を有す
918	高杯	脚部	—	—	(10.4)	ナデ	ナデ	5YR7/6 橙	5YR7/4 にぶい橙	良	長石、石英 赤色粒子	
919	甕	口縁部～ 胴部	18.0	—	—	ハケメ	ケズリ	7.5YR7/6 橙	7.5YR7/6 橙	良	雲母、角閃石	くの字口縁
920	甕	口縁部～ 胴部	(14.0)	—	—	ハケメ	ケズリ	7.5YR6/3 にぶい褐	10YR8/2 灰白	良	石英、角閃石	くの字口縁

⑨TAK201303B3区SD3(溝) (第236・237図 図版168・169 表88)

SD3はB3区9474、9674、9676グリッドに位置する。構築方向は南東から北西方向で規模は長さ9.60m+、幅1.34～2.24m、深さ0.14mを測る。1303B3区SD2との切り合い関係がありSD3が切っている。遺物は覆土から土師器甕口縁部片、胴部片、高杯片が出土した。921は甕口縁部片で端部は方形である。922は甕胴部片で外面ハケメ調整、内面は指圧痕が残る。923は高杯杯部片である。





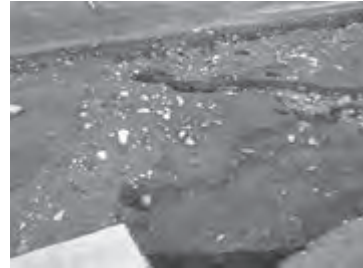
①検出状況 その1



②検出状況 その2

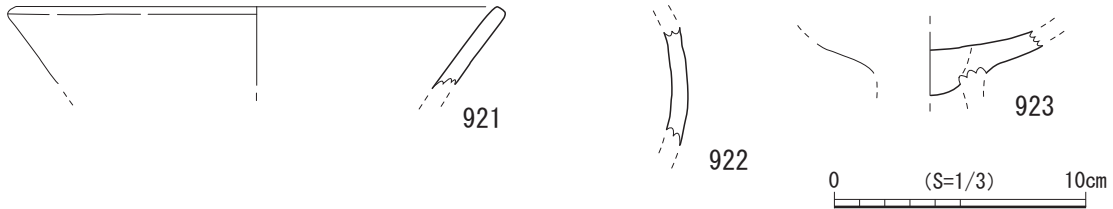


③断面状況



④完掘状況

図版168 SD3遺構状況(①~④)



第237図 SD3出土遺物実測図(S=1/3)



921



922



923

図版169 SD3出土遺物

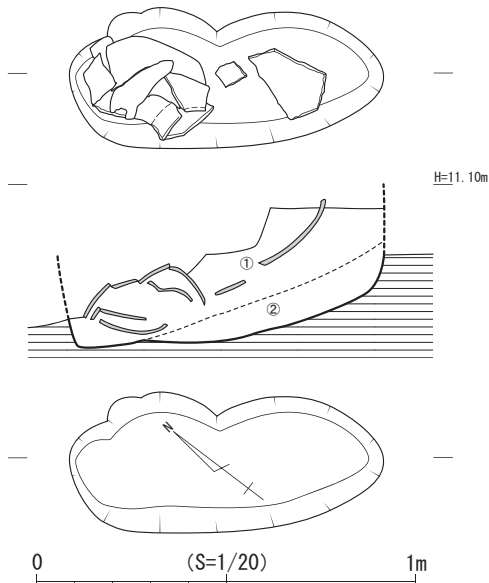
第88表 SD3出土土器観察表

遺物番号	器種	部位	法量(cm)			調整		色調		焼成	胎土	備考
			口径	器高	底径	外面	内面	外面	内面			
921	甕	口縁部	(19.0)	—	—	ナデ	ナデ	7.5YR8/4 浅黄橙	7.5YR8/6 浅黄橙	良 やや軟質	雲母	端部は方形
922	甕	胴部	—	—	—	ハケメ	指圧痕	7.5YR6/3 にぶい褐	7.5YR6/3 にぶい褐	良 やや硬質	石英、雲母 角閃石、赤色粒子	
923	高杯	杯部	—	—	—	ナデ	ナデ	7.5YR7/6 橙	7.5YR7/6 橙	良 やや軟質	長石、赤色粒子	

⑩TAK201202⑥SK111(土坑) (第238・239図 図版170・171 表89)

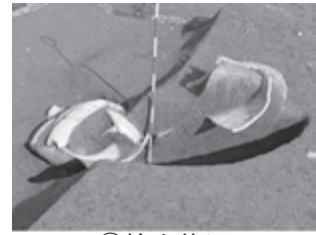
平成24年度調査分で、『竹松遺跡Ⅱ』(長崎県教委編 2017)未報告の遺構である。

SK111は⑥区8466グリッドに位置する。土坑は長軸0.84m、短軸0.31m、深さ12~18cmを測る不整形の土坑である。この覆土から須恵器(焼成は軟質)壺が出土した。924は須恵器(軟質)の壺である。接合からほぼ完形に復元できた。復元口径19.2cm、復元器高は34.7cmを測る。口縁部は短く、緩やかに外反し、端部は丸い。口唇部に緩やかな凸線を有す。内外面はタタキ痕が残る。内面は円弧状、外面は斜め方向の並行タタキである。口縁部の開きから古代の所産か。

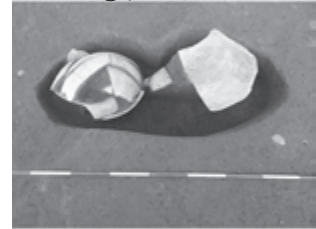


- ①. にぶい黄褐色 (10YR5/4) 砂質しまりあり 白色粒φ1mm2% マンガン粒φ5～8mm7% 含む  
 ②. にぶい黄褐色 (10YR5/3) 砂質しまりあり マンガン粒φ5mm1% 含む  
 ※②部分は掘り過ぎ

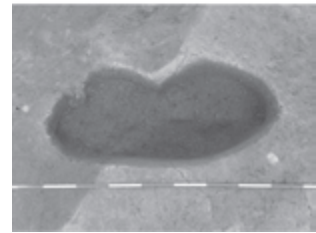
第238図 SK111平・断面図(S=1/20)



①検出状況

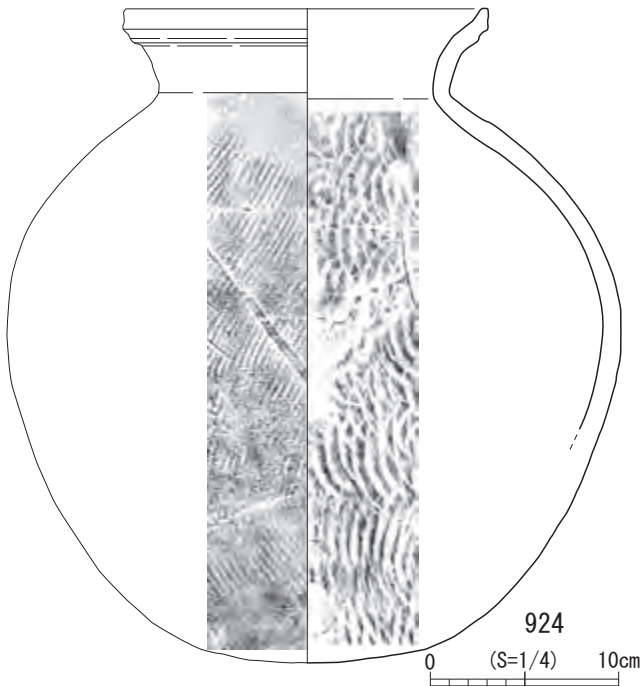


②遺物出土状況



③完掘状況

図版170 SK111遺構状況(①～③)



第239図 SK111出土遺物実測図(S=1/4)



図版171 SK111出土遺物

第89表 SK111出土土器観察表

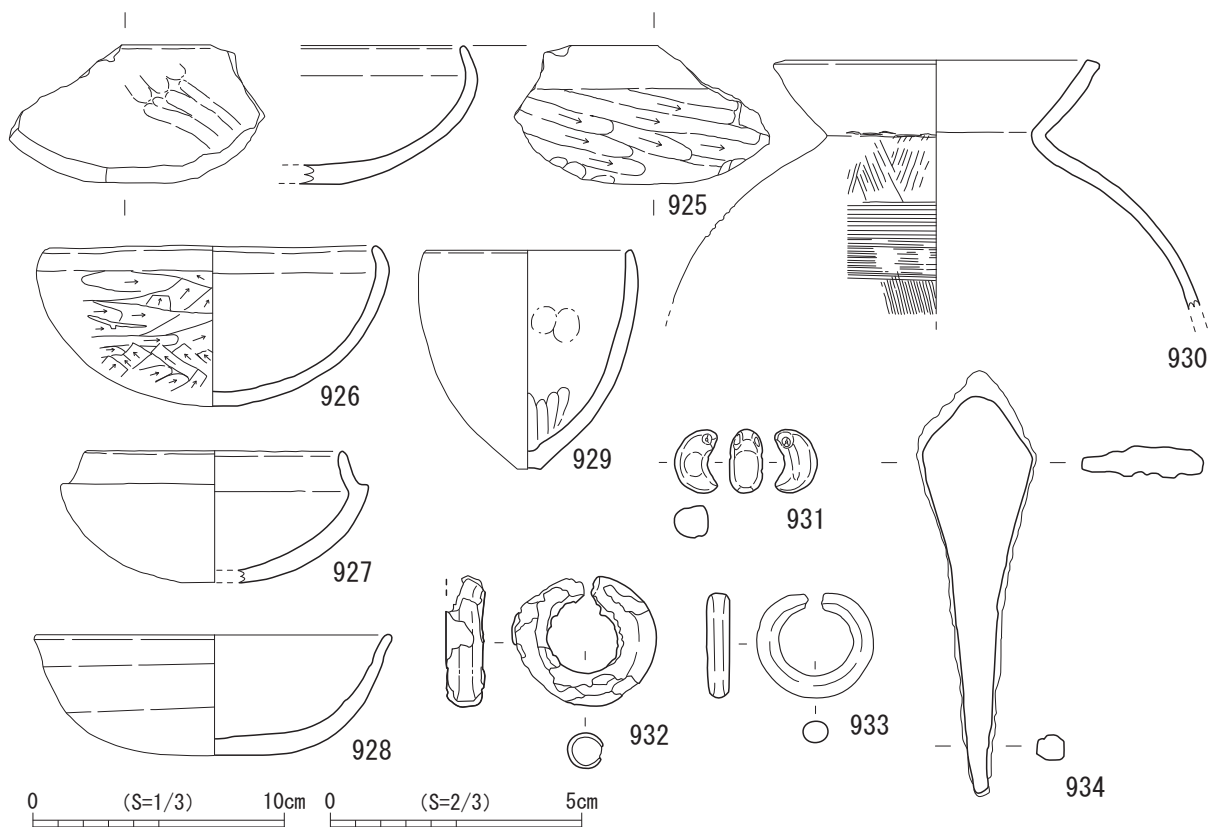
遺物番号	器種	部位	法量(cm)			調整		色調		焼成	胎土	備考
			口径	器高	底径	外面	内面	外面	内面			
924	須恵器壺	ほぼ完形	19.2	(34.7)		叩き痕	叩き痕	10YR7/3 にぶい黄橙	10YR7/3 にぶい黄橙	良好軟質	長石、赤色粒子	口唇部に緩やかな凸線を有す

⑪古墳時代包含層遺物(第240図 図版172 表90~92)

古墳時代の包含層遺物は2層、3層、4層を中心に出土した。以下出土遺物について記す。

925、926は椀である。いずれも口縁部が内湾し端部は丸い。内外面は斜め方向に削りを施す。925は口縁部~底部の破片である。外面は粗い削り痕が残る。赤色顔料を内外面に塗布する。926は底部が丸底で、口縁部は内湾し端部は丸い。内面は横、斜め方向に削り痕が残る。927は杯身で赤褐色を呈する土師質の模倣杯である。外面はナデ調整が施されるが凹凸が残る。内面はミガキにより極めて平滑である。口縁部の立ち上がりから見て6世紀後半頃であろう。

928は杯で器形の2/3が残存する。口径14.0cm、器高4.8cmを測る。口縁部はやや外反し端部は丸い。全体に赤色顔料を施しミガキをかけている。全体的に丁寧な作りである。929は尖底土器で口縁部から胴部の一部が欠損する。全体的に削り後にナデ調整を行い丁寧な仕上げを行っている。口径8.3cm、器高8.7cm、底径0.9cmを測る。930は壺の口縁部~胴部の破片である。口縁部はくの字で口縁端部は方形である。胴部上位外面は4~5条の浅い沈線を施しその下から横方向にハケメ調整を行う。内面は削りを行い器壁は薄い。布留式の様相を呈する。931は半球状勾玉である。穿孔は貫通していない。長さ2.5cm、幅1.7cm、厚さ1.3cmを測る。932、933は耳環である。932は銀耳環で地金は銅である。剥離、錆等が著しい。長径2.9cm、短径2.6cm、厚み0.75cmを測る。933は地金の銅だけが残る。長径2.3cm、短径2.05cm、厚み0.45cmを測る。934は鉄鏃である。形式は無頸有茎の圭頭形鏃でほぼ完形である。長さ8.4cm、最大幅2.4cm、厚さ0.6cmを測る。松木武彦氏の編年から時代を考えると10期の6世紀前葉~中葉頃と考えられる。



第240図 古墳時代包含層出土遺物実測図 (No. 932~934はS=2/3, 他はS=1/3)





図版172 古墳時代包含層出土遺物

第90表 古墳時代包含層出土土器観察表

遺物番号	器種	部位	出土区 グリッド	層位	法量 (cm)			調整		色調		焼成	胎土	備考
					口径	器高	底径	外面	内面	外面	内面			
925	土師器 椀	口縁部～ 底部	⑫-8050	3層	(9.8)	(6.2)	(3.6)	横方向にミガキ	ナデ	5YR5/6 明赤褐	2.5YR6/8 橙	良	長石	
926	土師器 椀	口縁部～ 底部	②-8458	3a層	12.6	6	—	横方向にミガキ	ナデ	2.5YR6/8 にぶい橙	2.5YR6/4 にぶい橙	良	長石 褐色粒子	丸底
927	土師器 杯身	口縁部～ 体部下位	⑫-8262		10.2	5.2	—	ナデ	ミガキ	5YR5/4 にぶい赤褐	2.5YR5/6 明赤褐	良	長石、金雲母 角閃石	模倣杯
928	土師器 杯	ほぼ完形	A1-8072	3層	14	4.8	—	ナデ	ナデ	5YR6/8 橙	5YR6/8 橙	良	長石、雲母 黒色粒子	全体的に赤色 顔料を施しミガキ
929	尖底土器 椀	ほぼ完形	⑩-0474	3層	8.3	8.7	0.9	ケズリ後ナデ	ケズリ後ナデ	10YR5/4 にぶい黄褐	7.5YR6/4 にぶい橙	良	長石	
930	土師器 壺	口縁部～ 胴部	⑫-8262		12	—	—	横方向にハケメ	ケズリ	10YR6/3 にぶい黄橙	10YR6/3 にぶい黄橙	良	長石、石英、雲母 角閃石、赤色粒子	胴部上位外面に4～5 条の浅い沈線を施す

第91表 古墳時代包含層出土石器観察表

遺物番号	器種	材質	出土区グリッド	層位	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	備考
931	半球状勾玉	軽石	①8460	2層	2.5	1.7	1.30	

第92表 古墳時代包含層出土鉄製品観察表

遺物番号	器種	材質	出土区グリッド	層位	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	備考
932	銀耳環	銀・銅	③8866	2層	2.90	2.60	0.75	9.78	地金は銅
933	耳環	銅	⑤No.94		2.30	2.05	0.45	4.51	地金の銅だけが残る
934	鉄鏃	鉄	②8456 No.106		8.40	2.40	0.60	14.52	ほぼ完形の無頸有茎の圭頭形鏃

### (3) 小結—弥生時代の集団墓について—

TAK201301～04調査区では縄文時代から中、近世までの遺構、遺物が多く確認された。その中で TAK201302①調査区から弥生時代の集団墓30基が、標高9.00m～9.25mの間に構築されている。地形は河川に挟まれた中州状の微高地である。墓の種類も箱式石棺墓、甕棺墓、木棺墓、石蓋木棺墓、土坑墓と多岐にわたる。また標石、特定個人墓に設置された標石、火葬骨を伴う祭祀遺構など極めて重要な遺構が検出された。そこで弥生時代の集団墓域について考えまとめとしたい。

#### ①弥生時代の集団墓の配置について(第241図)

弥生時代の集団墓の配置について検討してみる(第241図)。8458、8658グリッドの中で箱式石棺墓、土坑墓等が構築されていない地域が存在する。特に8458グリッドの南北方向に24m、東西方向に幅7～16mに渡って遺構の空白地域があり東西の墓域に分かれる。東側墓域は6グループ18基で単独の標石4基が位置する。西側墓域は5グループ12基、祭祀遺構2基が位置する。この東西の墓域配置から考えて集落内の単位(家族)を意味するものであろう。

#### ②出土遺物からの構築時期について(第242・243図)

弥生時代の墓域は TAK201302①調査区に集中する。東西54m、南北25mの範囲に箱式石棺墓20基、木棺墓4基(石蓋木棺墓2基、木棺墓2基)、土坑墓2基、甕棺墓4基から成る合計30基の集団墓である。墓は8458グリッド東側から8460、8462グリッドでやや密集する。30基の墓から遺物が出土した墓は箱式石棺墓8基(ST1、3、6、8、12、13、16、17)、木棺墓1基(ST28)、甕棺墓1基(ST35)の合計10基である。これらの墓から出土した土器及び甕棺4基(ST35、36、37、38)の形式から構築時期を考えてみたい。

ST1から二重の刻目三角凸帯を有する壺胴部片1点が石棺の蓋石に張り付いた状況で出土した。この土器はST3から出土した壺片と接合し更に祭祀遺構2出土土器と接合した。土器片は二重の刻目三角凸帯を有することから弥生後期後半頃と考えられる。よってST1の構築時期は土器片と同時期かやや遡る時期であろう。

ST3からは壺胴部片3点、器台の裾端部片1点が出土した。壺胴部片3点の内2点は祭祀遺構2から出土した二重凸帯を有す壺と接合し、残り1点はST1から出土した刻目三角凸帯を有する壺胴部片と接合した。さらにこの破片は祭祀遺構2から出土した壺胴部片と接合した。器台の裾端部片は復元底径18cmを測る。内外面はナデ調整を施し、胎土は多くの砂粒を含む。焼成はやや軟質である。こうした出土遺物からST1と同じ時期であろう。

ST6から甕の胴部片1点が出土した。内外面は粗いハケメ調整を行い外面は一部ナデ調整である。器壁は厚い。底部に近い部分から復元すると平底と考えられる。土器の時期は後期前半頃であろうか。

ST8からガラス小玉5個が出土した。5個全てがカリガラスで淡青色を呈する。カリガラス製小玉の流通が激増する時期は後期前半頃からであるためこの時期以降であろう。

ST12からは10点の土器小片が出土した。この内2点を実測した。1点はやや穏やかな台形凸帯付き壺胴部片、器厚はやや薄く細かな砂粒を多く含む。焼成は良好で硬い。2点目は短頸壺の口縁部片である。口縁端部に丹塗り痕が残る。焼成は良好で硬い。内外面はハケメ調整を施す。こうした状況から後期前半頃の所産と思われる。

ST13からは器台片、壺底部片、壺口頸部～胴部片、高杯杯部～脚部片が出土した。器台くびれ部～裾部片で1/2が残存する。この土器は蓋石直上で出土した。裾端部は方形を呈し、内外面は縦及び横方向のハケメ調整を施し器壁は厚い。くびれ部に透かしは見当たらない。裾部で丹塗りが一部認められた。壺は底部片で、底径は5.0cmで緩やかな凸レンズ状を呈する。外面は僅かにハケメ調整が残る。内面はナデ調整と指圧痕が残る。焼成はやや軟質である。壺の口頸部～胴部片である。口頸部に三角凸帯を有し、内外面とも縦、斜め方向にハケメ調整が残る。焼成はやや軟質である。高杯杯部、脚部片である。脚部に一部朱が塗布されている。外面は縦、斜め方向にハケメ調整、内面はハケメ後ナデ調整を施す。焼成はやや軟質である。これらの土器から後期前半頃の所産であろう。

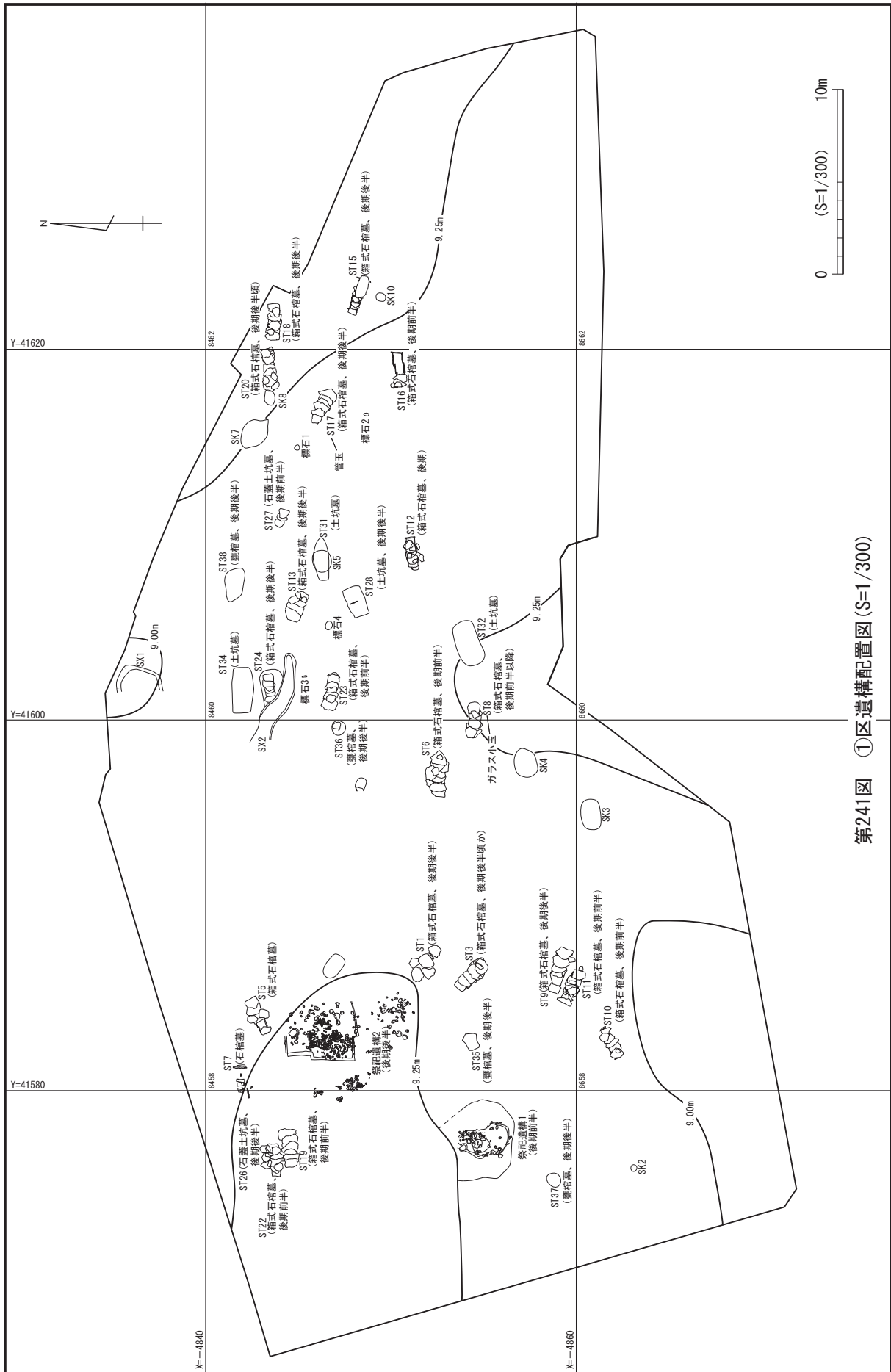
ST16は覆土からの出土で甕胴部小片、口頸部三角凸帯を貼り付けた小片が出土した。口頸部に三角凸帯が貼り付けられている。時期は後期前半頃であろう。

ST17の覆土②から管玉1個が出土した。長さ1.39cm、幅0.42cm、重さ0.35gである。穿孔は両面穿孔で径は1.34mm、1.49mmを測る。孔内は平滑で凹凸がないことから鉄錐を使用したものと考えられる。このことから時期は後期後半頃以降の所産であろう。石材の色調は淡灰緑色を呈する。このことから北陸産の可能性はある。

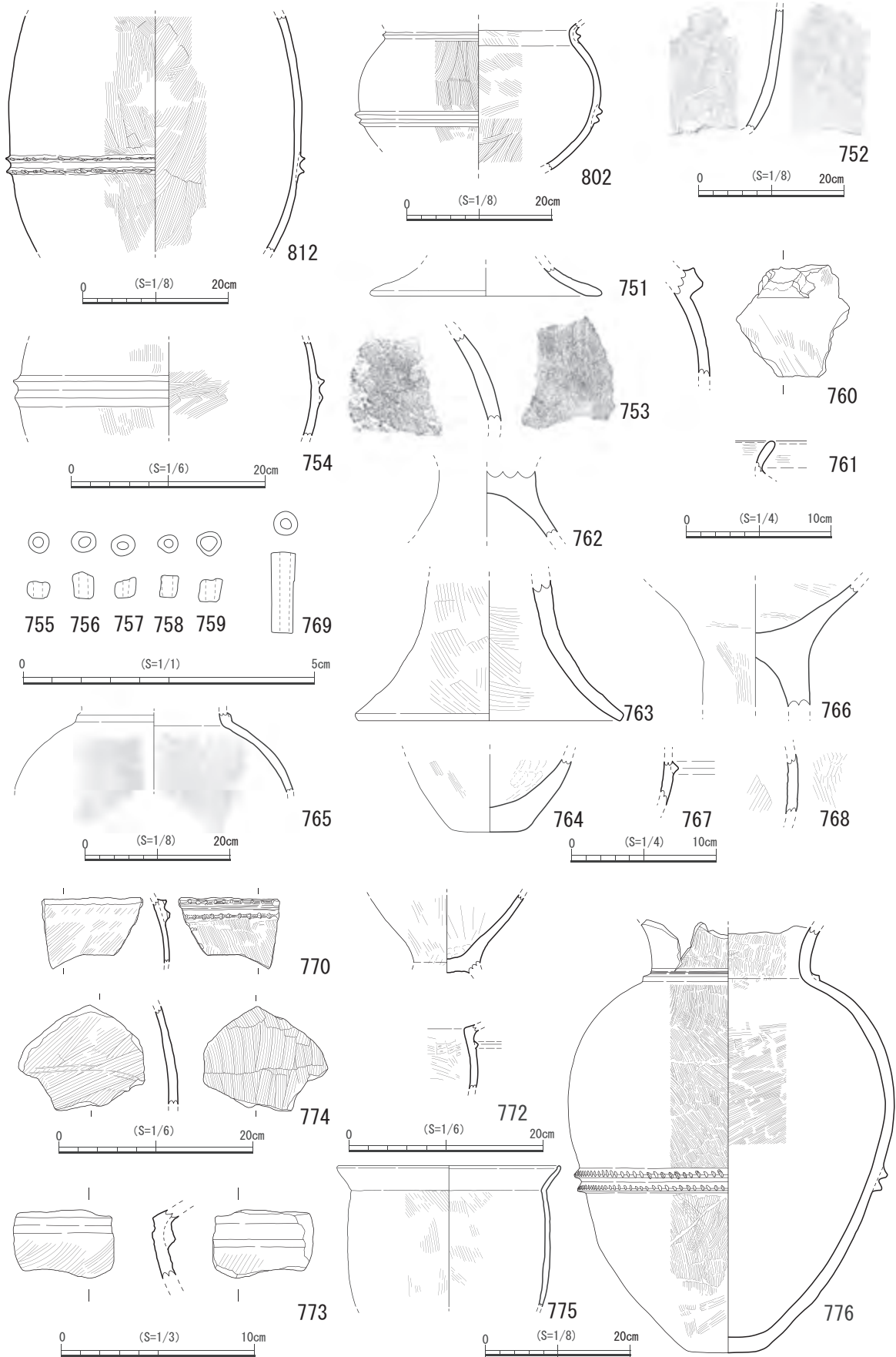
ST28からは5点の土器片が出土した。高杯杯部片、壺胴部刻目凸帯片、壺口頸部三角凸帯片、壺胴部丹塗り片、壺口頸部三角凸帯片である。この中で胴部凸帯に刻目が出現するのは後期後半頃からと考えられるためこの時期に対応するものと思われる。

次に甕棺墓4基(ST35、36、37、38)である。ST35は口縁部の一部を欠損する甕棺である。復元残存器高57.4cm、復元最大胴部幅44.7cmを測る。口頸部に三角凸帯を有し、胴部最大部下位に二重の刻目三角凸帯を有する。底部形状は僅かに凸レンズ状を呈する。ST36は甕で復元残存高65cm、復元胴部最大径50.7cmを測る。口縁部は「く」の字を呈する。口頸部に台形状凸帯を有する。ST37は復元残存器高37.7cm、復元胴部最大径47.6cmを測る。胴部中位に刻目三角凸帯を有する。ST38は胴部～底部の破片で復元残存器高60.7cm、復元胴部最大幅51.7cmを測る。胴部下位に二重の刻目三角凸帯を有する。底部形状は僅かに凸レンズ状を呈する。全ての甕棺の内外面調整はハケメ調整を施す。口縁部、凸帯、底部形状及び内外面の調整から ST35～38は後期後半頃の時期が考えられる。この時期甕棺は終焉する時期ではあるが、糸島地域、筑後南部、島原、大村地域に部分的に分布する。しかしながら大形棺はなく、小形棺が多く5基前後で群集する状況である。

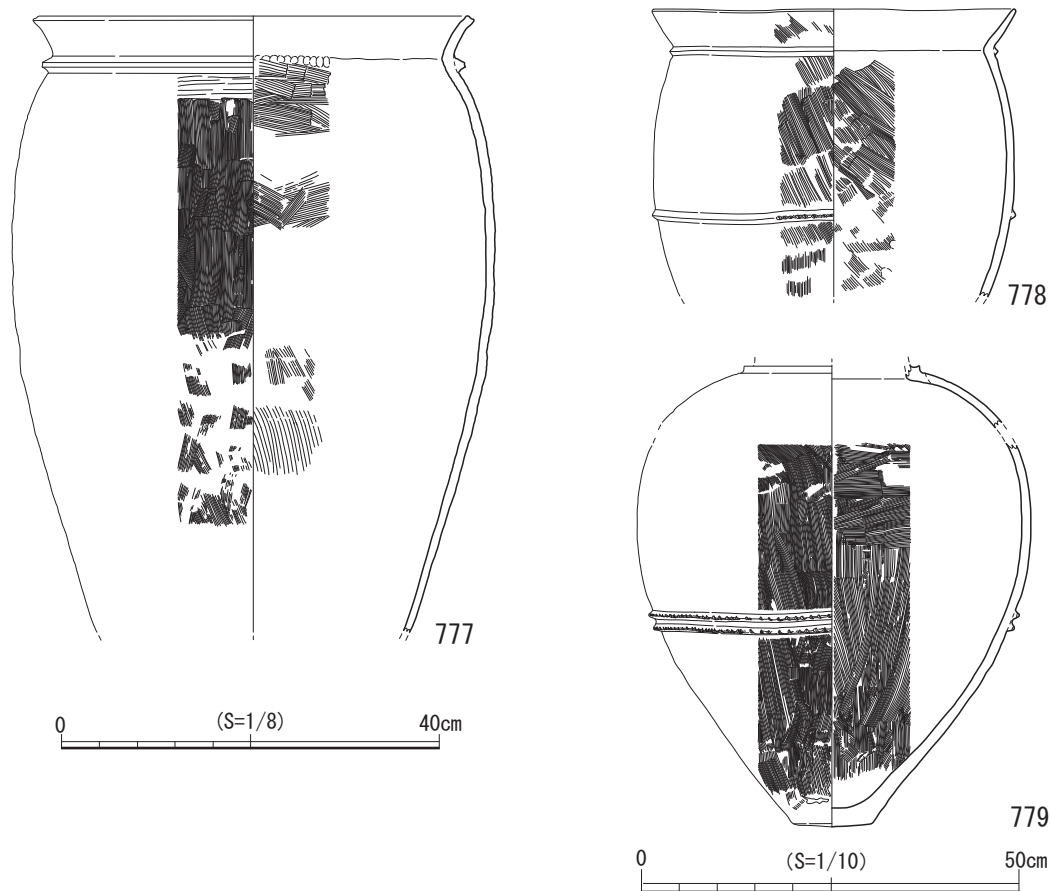
弥生集団墓30基内の14基から出土した遺物から構築時期を考えると後期前半頃と後期後半頃の二時期が考えられる。



第241図 ①区遺構配置図 (S=1/300)



第242図 墓域出土遺物実測図 その1



第243図 墓域出土遺物実測図 その2

### ③グルーピングについて(第244図)

30基の墳墓は東西54m、南北25mの範囲に分布する。30基の墳墓の構築方向、墳墓の隣接状況、切り合い関係、遺物の出土状況、石組み等からグルーピングを考えると11G(グループ)に分けることができる。北西からグルーピングする。

**1G**は3基でST19(箱式石棺墓)、ST22(箱式石棺墓)、ST26(石蓋木棺墓)である。3基全てが構築方向は同一で、構築位置が隣接する。ただしST26は土層堆積から箱式石棺墓より上層の構築で、ST19、22より新しい。ST19とST22は墓壙の切り合い関係からST22の方が新しい。よって構築は古い順にST19→ST22→ST26である。ST22とST19は時期差が小さく、ST26との時期差はやや大きいと考えられる。

**2G**は2基でST5(箱式石棺墓)、ST7(箱式石棺墓)である。ST5、7は構築方向がやや異なるものの構築位置は隣接する。この2基はやや時期差が大きい可能性がある。

**3G**は3基でST1(箱式石棺墓、標石あり)、ST3(箱式石棺墓、標石あり)、ST35(甕棺墓)である。ST1、3は構築方向が同一で構築位置も隣接することから構築時期差は小さいものと考えられる。いずれの箱式石棺墓も標石を有す。ST35(甕棺墓)はST1、3とも隣接することから時期差は小さいものと考えられる。またST1、3は礫を含むマウンドを構築しており厚葬墓の様相を呈する。出土遺物から構築時期は後期後半頃と考えられる。

**4G** は3基でST9(箱式石棺墓)、ST10(箱式石棺墓)、ST11(箱式石棺墓)である。ST9、11は隣接して構築され、構築方向は同一である。またST11とST9とは切り合い関係を示しておりST11がST9を切っている。こうした状況から構築時期差は小さいと考えられる。しかしST10は構築方向が古い様相を示すことからST9とST11との時期差は大きい可能性がある。構築は古い順にST10→ST9→ST11である。

**5G** は3基でST6(箱式石棺墓)、ST8(箱式石棺墓)、ST32(土坑墓)である。ST6、8の構築方向は同一で隣接することから構築時期差は小さいと考えられる。ST32はST6、ST8と構築方向を異にすることから時間差は大きい可能性がある。ST6、8は出土遺物から後期前半頃と考えられる。

**6G** は3基でST24(箱式石棺墓)、ST34(木棺墓)、ST38(甕棺墓)である。ST24、34は構築方向が同一で、構築位置も隣接することからST38だけがやや離れる。こうしたことからST24、34の構築時間差は小さく、ST38との構築時期差は大きい可能性がある。ST38は甕棺から後期後半頃と考えられる。

**7G** は4基でST13(箱式石棺墓)ST23(箱式石棺墓)、ST27(石蓋木棺墓)ST36(甕棺墓)である。ST13、23、27の構築方向が同一で、構築間隔も一定であることから構築時期差は小さいと考えられる。ST36も隣接する。また標石1、3、4が位置する。ST13、23、27の構築時期差は小さく、ST36は時間差が大きいと考えられる。ST36は後期後半頃と考えられる。

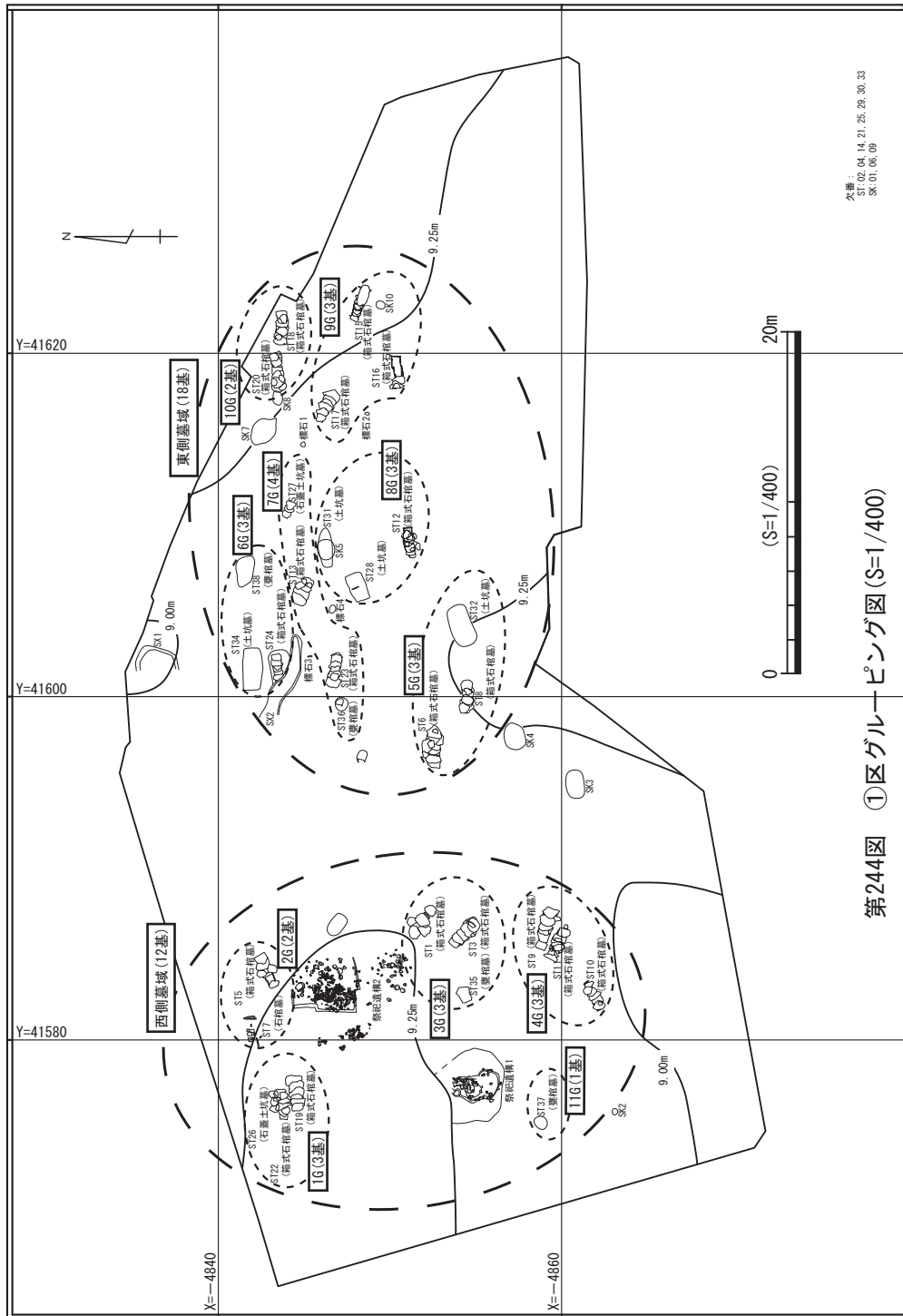
**8G** は3基でST12(箱式石棺墓)、ST28(木棺墓、標石あり)、ST31(土坑墓)である。ST12、31の構築方向が同一でST28の木棺墓がやや構築方向が違う。このことからST12、31の構築時期差は小さく、ST28はやや時期差が大きいと考えられる。ST12は出土遺物から後期前半頃、ST28後期後半頃と考えられる。

**9G** は3基でST15(箱式石棺墓)、ST16(箱式石棺墓)、ST17(箱式石棺墓)である。ST15、17は構築方向が同一で構築間隔が隣接する。このことから構築時期差は小さいものと考えられる。ST16は構築方向が東西方向となりST15、17とは構築方向が違うことから構築時期差は大きいと考えられる。また標石2がST16と17の間に位置する。ST17から出土した管玉から後期後半頃が考えられることからST15もこの時期に近い頃の可能性がある。ST16は出土遺物から後期前半頃と考えられる。

**10G** は2基でST18(箱式石棺墓)、ST20(箱式石棺墓)である。ST18、20の構築方向が同一で、構築間隔が隣接する。このことから構築時期差は小さいと考えられる。

**11G** は1基でST37(甕棺墓)単独である。この甕棺は後期後半頃と考えられる。

以上11グループに分けることができる。各グループは2基～4基程で構成され、墓の組み合わせは1. 箱式石棺墓だけで構成。2. 箱式石棺墓と甕棺墓で構成。3. 箱式石棺墓と石蓋木棺墓で構成。4. 箱式石棺墓と木棺墓と甕棺墓で構成。5. 箱式石棺墓と木棺墓と土坑墓で構成。6. 甕棺墓だけで構成と6種類の構成に分けることができる。各グループは集落内の家族単位と考えられるが、墓の形態は家族内の序列を思わせる。



大塚  
ST1, ST3, ST6, ST8, ST12, ST13, ST16, ST17, ST19, ST20, ST24, ST26, ST27, ST28, ST29, ST30, ST31, ST32, ST33, ST34, ST35, ST36, ST37, ST38, ST39, ST40, ST41, ST42, ST43, ST44, ST45, ST46, ST47, ST48, ST49, ST50, ST51, ST52, ST53, ST54, ST55, ST56, ST57, ST58, ST59, ST60, ST61, ST62, ST63, ST64, ST65, ST66, ST67, ST68, ST69, ST70, ST71, ST72, ST73, ST74, ST75, ST76, ST77, ST78, ST79, ST80, ST81, ST82, ST83, ST84, ST85, ST86, ST87, ST88, ST89, ST90, ST91, ST92, ST93, ST94, ST95, ST96, ST97, ST98, ST99, ST100

第244図 ①区グループピンング図 (S=1/400)

④箱式石棺墓の石組み構造について(第245・246図)

20基の箱式石棺墓のうち、遺物が出土した箱式石棺墓は8基(ST1、3、6、8、12、13、16、17)である。この8基については構築時期が概ね判断できており、後期前半と後期後半が主体である。残りの12基について主体部の側石(側壁石)の組み方構造を分類し、構築年代を考えてみたい。特に箱式石棺墓の主軸方位、法量、内部構造、頭位等を検討し時期的な構造変化を見ていくことにする。第245図は箱式石棺墓の側石の組み方及び方位を示したものである。この中で構築構造が同じ又は類似する箱式



石棺墓を抽出するとST6、ST13、ST16、ST19、ST23の5基、ST15とST18の2基、ST17とST24とST5の3基は足位の側石が内側と外側だけでその他の石組みは類似である。特にST17とST5は側石3枚で頭位から2番目の側石は内側、3番目の側石は内側で構築され同一である。

ST6、ST13、ST16、ST19、ST23の5基は頭位側から足位側に向かって左右非対称の側石の構築を行っている。頭位側から足位側に向かって右側石は内側に持ち送りし鎧重ねし、左側石は外側に持ち送りし鎧重ねしている。この中でST6、ST13、ST16は出土遺物から後期前半が考えられることからST19、ST23もこの時期に近い可能性が考えられる。

ST15、ST18は頭位側から足位側に向かって左右対称ではなく、右側石は外側に持ち送りして鎧重ねし、左側石は外、内、外側に重ねて構築している。

ST17とST24は頭位側から足位側に向かって石材の組み方が左右対称であるが足位の石組みが内側に組むST17と外側に組むST24がある。足位の石組みだけが違う。ST17から後期後半の遺物が出土していることからST24もこの時期の可能性が考えられる。

残りのST5、7、9、10、11、15、18、20、22の9基は、側石の構築が全て左右非対称で、両小口は1枚の板石である。両側石は3枚を一組、4枚一組を基本とする。しかし左右が4枚、3枚と変則的な石組みもある。ST10以外の箱式石棺墓は全て側石を鎧重ねで構築している。ST10のみが足位の側石が欠損しているが、側石の端と端を合わせる組み方を行っている。

長崎県内の石棺墓の型式変遷(第246図 寺田 2005)を行った寺田氏の分類に、ST10を当てはめるとⅡcに分類され弥生時代後期(前半頃?)に比定される。Ⅲaは両小口石を側石で挟み鎧重ねを行う形態で後期(中頃~後半?)Ⅲbは両小口が側石の外に置き、鎧重ねを行う形態で後期(終末?)~古墳時代初頭と型式分類されている。また対馬市『ハロウ遺跡』では弥生時代後期初頭~前半代には4枚以上を数えることが多く、後期後半~終末頃になると次第に棺材が減少する傾向にある。また敷石については時期が降るにしたがって設けなくなる傾向がある(高倉 1980)。小口の特徴として後期頃になると次第に石棺が長くなりはじめ、小口と長側壁端とが揃うか、やや外側へ出す傾向がある(町田 1992)。

ST10が後期前半頃と考えられる事から、同一グループ内のST9、11の時期を考えてみる。ST9、11は切り合い関係にありST11がST9を切っている。この2基は構築方位を同一である事から構築時期は小さいと考える。よって後期前半より新しいと思われる。次にST15、18、20、22の4基について考える。ST15は9G(ST15、16、17)の中に位置している。ST17から後期後半の遺物が出土していること。またST15とST17の構築方向がほぼ同じ事からST15は後期後半頃であろう。

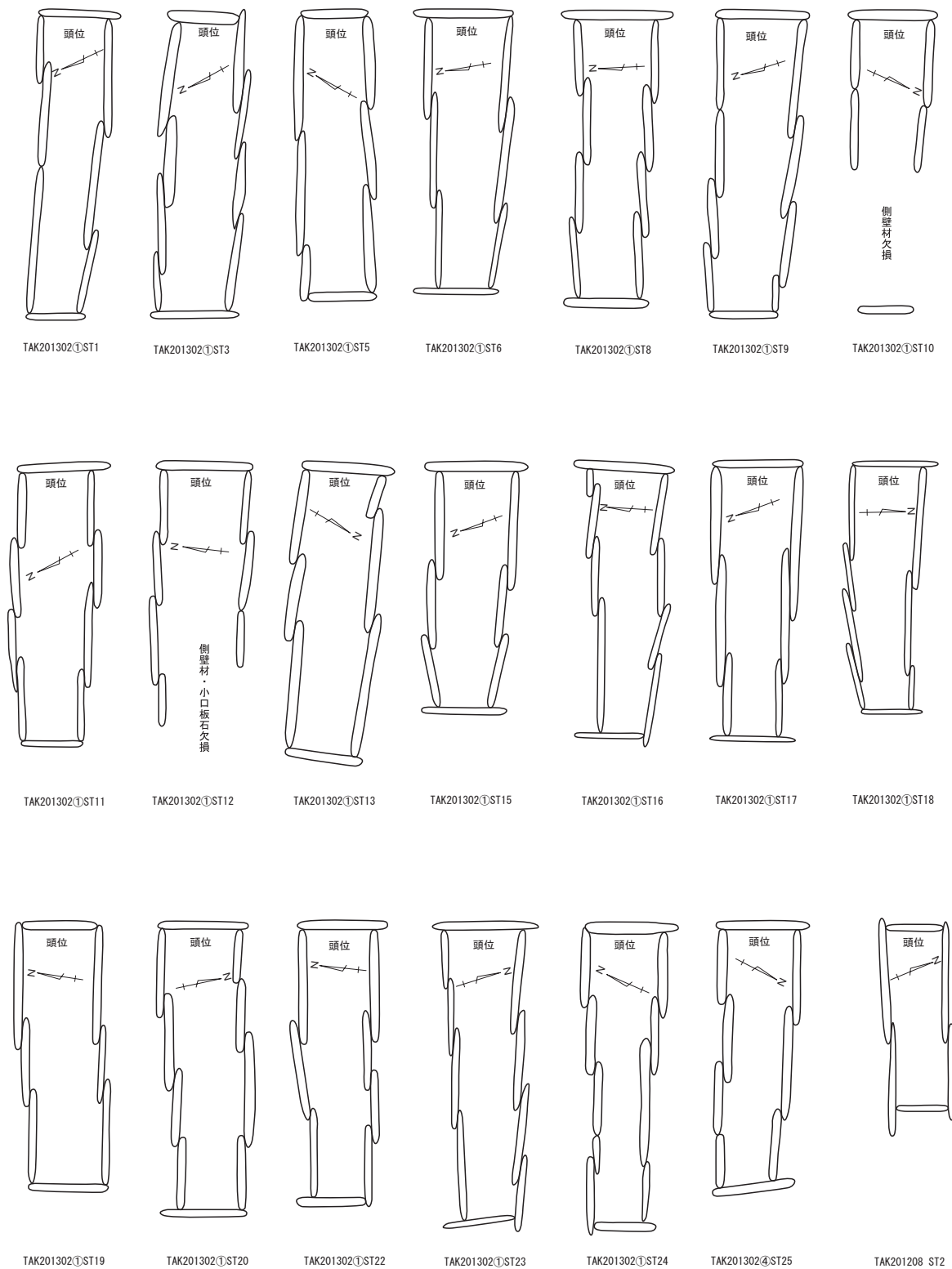
ST15とST18は石棺構造が類似していることからST18も後期後半頃の可能性が高い。

ST18はST20と10Gに位置する。ST18、20ともに構築方向が同一で、しかも構築位置が隣接することからST20は後期後半頃の構築が考えられる。

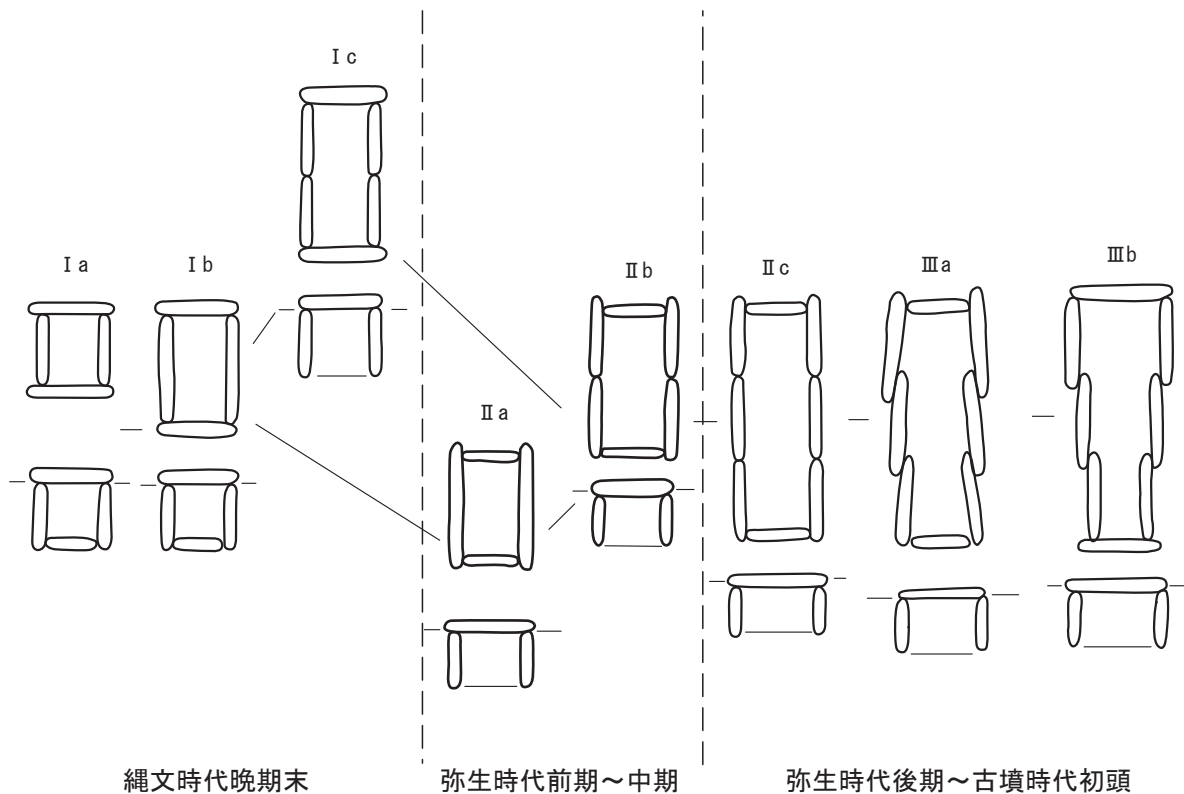
ST22は1G(ST19、22、26)に位置する。ST19が後期前半頃の構築であることが考えられることからST22も構築方向、構築位置、切り合い関係からST19の時期に近いことが考えられる。ST26はこの時期よりやや新しくなりそうである。

残る2GのST5、7についてはST5がST17と類似する構築であること、ST17から後期後半の遺物が出土していることからST5は同時期の可能性がある。ST7は側石、蓋石等が激しく損壊しているため判

断は難しい。以上のことから考えて箱式石棺墓20基の構築時期は弥生時代後期前半頃と後期後半頃の二時期が考えられる。



第245図 箱式石棺墓 型式模式図

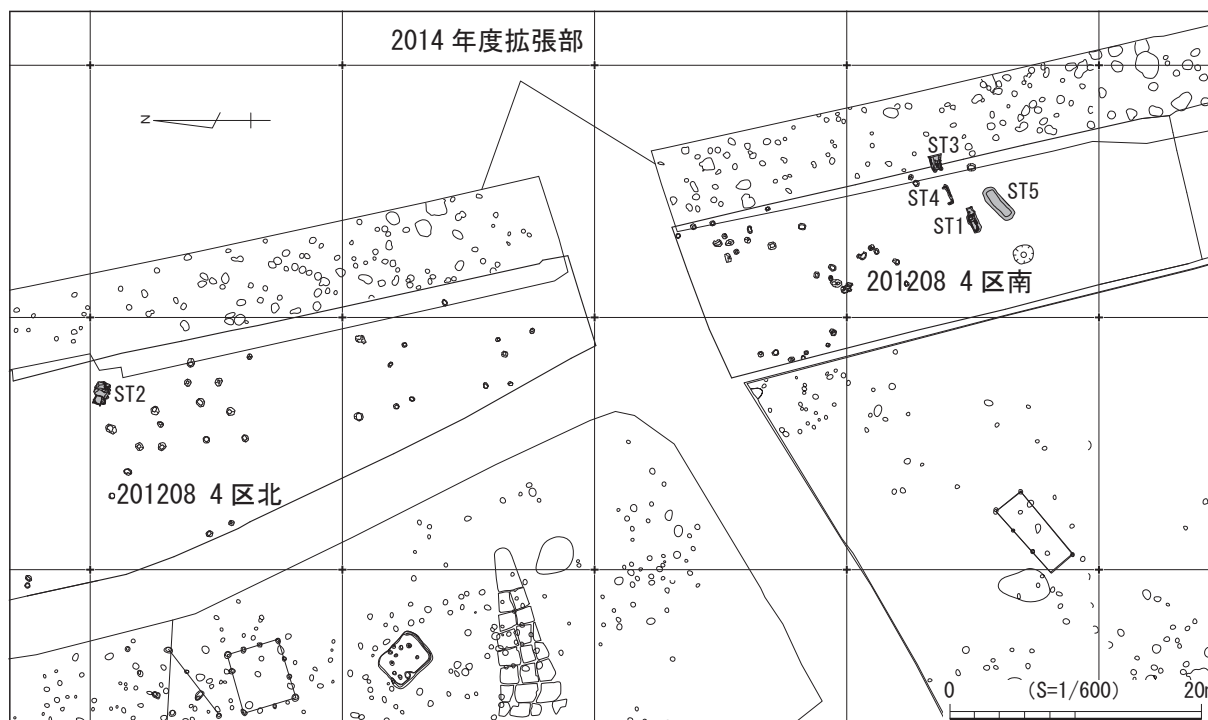


第246図 石棺墓の型式変遷概念図(寺田2005)

⑤TAK201208調査区の墓域について(第247図)(『竹松遺跡Ⅲ』長崎県教委編2017で報告済み)

TAK201208調査区から5基(ST1、2、3、4、5)の墳墓を確認した。しかしながら3基(ST1、3、4)は半壊又は調査区範囲の関係で1/2程の調査しかできなかった。側石、小口板石等が流されている状態で全体が把握できない状況である。5基の墳墓は構築場所、構築方向から2G(グループ)に分かれる。1Gは1基(ST2、箱式石棺墓)と2Gは4基(ST1箱式石棺墓、ST3箱式石棺墓、ST4箱式石棺墓、ST5土坑墓)で構成されていることが分かる。この2Gの構築距離は70m離れている。1GのST2は箱式石棺墓で蓋石は一部欠損していたものの内部主体は現状の様相を保っていた。規模は中心軸で長軸1.45m、短軸0.5m、深さ0.6mを測る。主軸をN-66°-Wにとり西北西～東南東に構築された墓である。墓の構造は、蓋石は3枚、両小口石は1枚、両側石は2枚で構築され鎧重ねである。床面は敷石がなく水平である。

ST1、3、4、5の主軸方位はST1がN-69°-E、ST3がN-77°-E、ST4がN-66°-E、ST5がN-50°-Eであった。このことから概ね北東～南西方向に構築されていることが分かる。こうしたことから同一グループと考えられる。またそれぞれの構築時期差は小さいと考えられる。1GのST2と2GのST1、ST4とは構築方向はほぼ同一方向である。よってST2とST1、4との構築時期差は小さいものとする。出土遺物についてはST3(箱式石棺墓)から1点、ST5(土坑墓)から3点の管玉が出土した。管玉の穿孔状況から見て後期後半以降と考えられている。副葬品については極めて貧弱で、TAK201302調査区の20基の箱式石棺墓のST8からガラス小玉5個、ST17から管玉1個と同様に貧弱な内容である。



第247図 TAK1208調査区の墓域 (S=1/600) (長崎県教委編2017より)

#### ⑥標石について(第198～201・241図 図版141～144)

標石は4基(標石1、2、3、4)が8460グリッドに所在する。また板石状の標石を伴う箱式石棺墓が2基(ST1、3)、木棺墓が1基(ST28)に構築されている。こうした標石を持つ弥生時代の墳墓は長崎県内では、壱岐市の『原の辻遺跡、大川605—1区1号石棺墓』で蓋石に伴って立石をもつ例や、対馬市の経隈墳墓3号石棺から東1.5m離れたの立石がある。同市上ガヤノキ遺跡3号土坑墓には板状石がある。平戸市の里田原萩の下1号甕棺墓は集石をもつ。南島原市の北岡金比羅祀遺跡甕棺墓は上石(標石)をもつ。以上5遺跡から標石墓を検出している。この5遺跡の中で竹松遺跡と類似する標石は原の辻遺跡、大川605—1区1号石棺墓と経隈墳墓3号石棺東側立石である。

経隈墳墓、3号石棺東側立石は、竹松遺跡の標石1、2、3、4と類似し、原の辻遺跡、大川605—1区1号石棺墓は竹松遺跡のST1、3、28に類似する。

竹松遺跡の標石1、2、3、4はいずれも特定の墓に設置されている訳ではなく、独立した標石として位置しておりランダムな配置である。構築された土層は箱式石棺墓を構築した同じ層位であることから石棺が構築されてからの時期差は小さいものと考えられる。

標石が位置する東側では6グループ(5G～10G)が墓域を形成する。この6グループは2基～4基でグループを構成していることから家族単位と想定される。その家族単位の墓に標石1、2、3、4を構築し配置したものと思われる。標石1は10G(グループ)、標石2は9G、標石3は6G又は7G、標石4は7G又は8Gのためのランドマーク的位置付けと思われる。また特定個人墓に標石を構築している3基(ST1、3、28)については盛り土を築造しその中に板状の自然石(標石)を設置している。この3基は厚葬墓的な様相で他の墓とは区別される。グループ内の階層差がうかがえる。

### ⑦祭祀遺構について(第187～197図 図版132～140 表70～73)

祭祀遺構は二遺構を検出した。祭祀遺構1、祭祀遺構2である。祭祀遺構1は8456グリッド、祭祀遺構2は8458グリッドに位置し、西側の墓域の中に位置する。西側墓域は5グループ(1G～4G、11G)が存在する。1Gと2Gの南側に祭祀遺構2が位置し、3Gと4Gの東側に祭祀遺構1が位置する。祭祀遺構1、2の配置から考えて祭祀遺構1は3G、4G、11Gとの関係が考えられ、祭祀遺構2は1G、2Gとの関係が考えられる。

祭祀遺構1は土坑(SK1)を伴う。土坑を中心に東西3.4m、南北2.8mの広がり火葬骨の分布を確認した。また土坑内から供献用と考えられる小形甕、高杯、鉢等の完形品が出土した。小形の甕は床面直上に置かれ原位置を保っていた。この土器から弥生時代後期前半頃が考えられる。

骨の集中部分は土坑の北側に集中した。骨片は1層下面から2層上面の20cm程に堆積していた。骨は3体分が確認されている(成人性別不明2、幼児1(4～5歳)松下 2014)。土坑内には被熱した痕跡は見られず、焼土ブロックなども混入していないことから、別の場所で焼かれたものが持ち込まれたものと考えられる。火葬した場所については墓域の周辺と想定されるが、周辺域では焼土痕等は確認されていない。墓域西側の調査区外の可能性もある。

火葬骨(焼人骨)の意味については『死者の他界での再生を意図するもの』(設楽 1993a、春成 1993、馬場 1994)。『火による浄化に求めるもの』(大場ほか 1963)。被葬者については『副葬品からムラの中で特別な役割を担った人物』(渡部俊 1998)。『被葬者のもつ生前の特別な役割や能力がもとめられた時』(花輪 2003)がある。いずれにしても分析した松下氏に詳細は委ねる。

祭祀遺構2は1Gと2Gの南側に位置する。南北2.7m、東西2.2mの範囲に土器集中を確認した。土器は拳大から人頭大の円礫を配置して並べた中に置いた様子である。また焼石を2個確認したことから火を伴う祭祀行為が行われた可能性がある。しかしながら焼土等の痕跡はこの範囲からは確認できなかったことから長期に渡る祭祀行為は行われていない様である。土器の器種は高杯、複合口縁壺、コップ形土器、器台、短頸壺、甕等が出土した。これらの土器から弥生時代後期後半頃が考えられる。

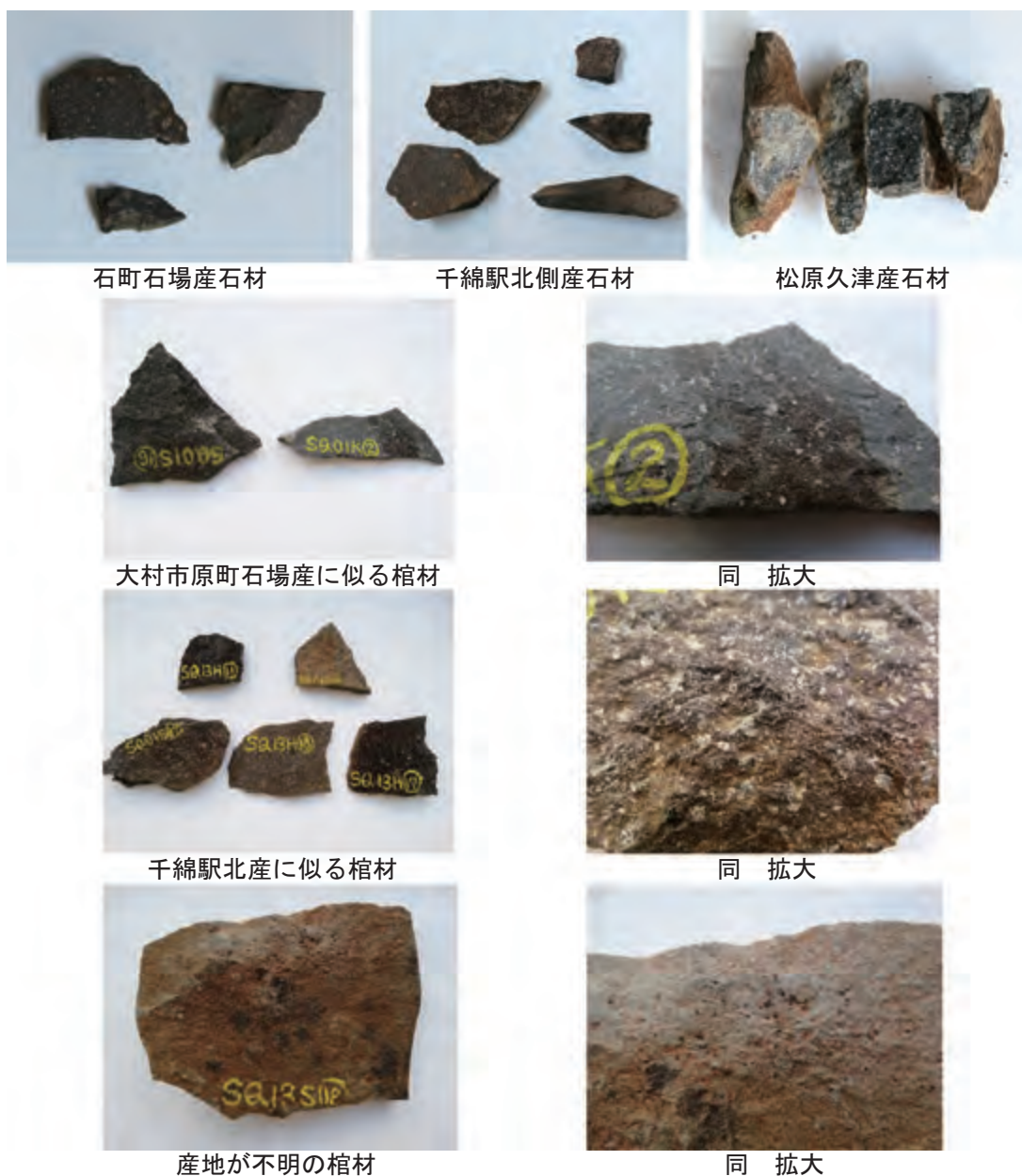
### ⑧箱式石棺墓の石材について(第248図 図版173)

TAK201302①調査区から検出した20基の箱式石棺墓の内2基の箱式石棺墓の石材8点(ST1から4点、ST13から4点)と供給先と考えられる石材12点(大村市原町石場3点、東彼杵町千綿駅北側5点、大村市久津4点)を肉眼鑑定した(隅田 2017)。その結果は安山岩であることが判明した。安山岩は同一のタイプではなく3種類に分かれる。1つ目は基質と同じ程度の斑晶を含むタイプ。このタイプは大村市原町石場で産出される。現在「大和産業」が採掘している所。2つ目は緻密な基質よりも斑晶が多く含まれるタイプ。このタイプはJR大村線千綿駅北側50mの旧長崎街道沿い。3つ目は緻密で基質が同じ程度に斑晶が含まれるタイプである。このタイプは今の所、産出地は不明である。20基の箱式石棺墓の石材を鑑定した訳ではないが、2基の鑑定結果から見えてくる石材の供給地及び消費地について若干考えてみることにする。「竹松遺跡」から石材の供給候補地までの直線距離は大村市原町石場まで3.0km、JR大村線千綿駅北側50mの旧長崎街道沿いまでは6.6kmである。大村市原町石場の供給地北側20mに郡川が流れ、JR大村線千綿駅北側50mの旧長崎街道沿いは大村湾まで10mの位置にある。運搬方法は海路か陸路か定かではないが海路が合理的なのかも知れない。また大村市内においてもう一つの供

給先が考えられる。大村市松原久津周辺域である。1974年に東彼杵郡川棚町五反田郷徳島『五反田遺跡』を調査した正林護氏は「大村湾沿岸の石棺について」（結語にかえて）の中で「大村湾沿岸地方において（中略）石棺材は殆どが安山岩板状石であり知り得る範囲では、大村市久津、諫早市湯ノ尾川東岸、森山町山中が挙げられる」。と指摘している。「竹松遺跡」にもっとも近い大村市松原久津周辺域に赴くと安山岩の露頭があり石材供給地としての候補になり得る。大村湾までは20m程で竹松遺跡までの距離は3.0kmである。

今の所3ヶ所の石材供給地が考えられ、分析した安山岩も3タイプが存在したことから、石棺の構築材は一ヶ所からの供給ではなく2ヶ所、3ヶ所から供給した可能性は十分に考えられる。

※石材の鑑定は長崎大学教育学部隅田祥光准教授から指導、助言を頂いた。



石町石場産石材

千綿駅北側産石材

松原久津産石材

大村市原町石場産に似る棺材

同 拡大

千綿駅北産に似る棺材

同 拡大

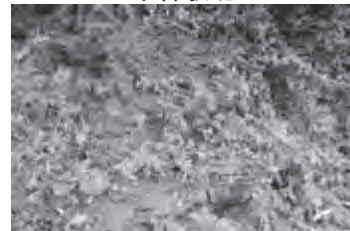
産地が不明の棺材

同 拡大

図版173 ST1・ST13の分析石材



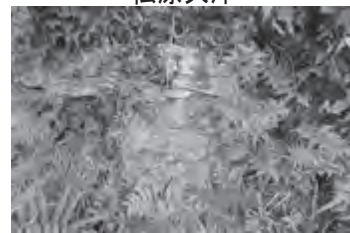
千綿駅北



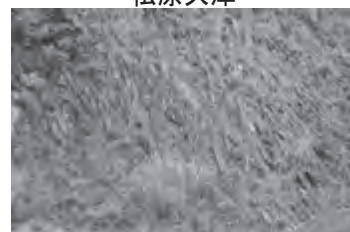
千綿駅北



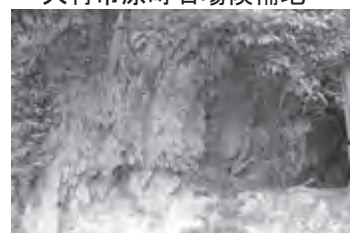
松原久津



松原久津



大村市原町石場候補地



大村市原町石場候補地



大村市原町石場候補地遠景

第248図 箱式石棺の石材供給候補地図(S=1/50,000) 「彼杵、武留路山(縮尺1:25,000)」(国土地理院)をもとに作成

### ⑨破鏡及びその他の青銅器について(第249・250図 図版174 表93)

TAK201302、03調査区から1. 破鏡(細線式獣帯鏡、後漢鏡)、2. 小形仿製鏡、3. 銅鏃、4. 鈕片が、またTSJ201603調査区から5. 破鏡が出土した。こうしたことから若干の考察を行いまとめとしたい。なお破鏡、青銅器については、九州大学田尻義了准教授、辻田淳一郎准教授、埼玉県立さきたま史跡の博物館中井歩学芸員から御教示頂いた。

1. **破鏡(細線式獣帯鏡、後漢鏡)**はTAK201303B1区SC123(竪穴建物)の床面から20cm上の覆土から出土した。鏡は鏡面、鏡背とも極めて残存状況が良好で破断面も錆一つない状態である。鏡の大きさは長さ7.4cm、幅(中央)2.0cm、厚さ0.21cm、重さ10.66gを測る。破鏡は内区の一部で乳が2個残存し輻射文座である。乳座間3.2cmでその間に朱雀が配されている。この距離から復元をしてみると7個の乳座を配置していたと考えられる。界圈から復元して内区径は8.5cmを測る。外区が欠損していることから鏡の面径は不明であるが他の同型鏡の外区幅は3.5~4.0cm程であるため復元面径は15.5~16.5cm程であろうか。細線式獣帯鏡の年代は岡村秀典氏の漢鏡編年から5期、1世紀中頃~末頃の範疇に入るものと思われる。SC123の廃絶時期と破鏡の時期はほぼ一致する。当初この鏡は鏡片と見ていたが、九州大学辻田准教授の破断面細部観察から一部に磨れた痕でやや光沢がある所、僅かな削り痕が観察できたことから鏡片ではなく破鏡との見解を得た。

2. **弥生小形仿製鏡**は完形品でTAK201302①区北側の包含層(旧河川)から出土した。出土地点は弥生の集団墓域の北端にあたる。北部九州系の内行花文仿製鏡で、面径7.4cm、厚さ0.2~0.3cm、重さ59.67gを測る完形品である。しかし鏡面、鏡背の外縁端、内、外区が一部摩滅しているが全体の形状は維持している。外区は平縁、粗目の斜行櫛歯文帯、浅いU字状の一圈で内区と画する。内区は摩滅等により一部明瞭ではないが連弧文が13個配置されその内側の一圈が鈕座を構成する。鈕形は円形で鈕孔は楕円である。仿製鏡をI類~III類に分類した高倉編年によると、連弧文が二重または一重、面径が7.4cmとやや大きくなることからII a~II b類の中間に相当することから弥生時代後期中頃?と考えられる。

小形仿製鏡は近年島原半島から出土している。雲仙市国見町『佃遺跡』87区SB1床面から小形内行花文仿製鏡が出土している。また南島原市『高原遺跡』2号溝(断面V字形~逆台形~U字形、最大幅3.2m、深度1.5m)から出土した鏡は0.3cmの二つの穿孔があり、縁から鈕にかけて幅0.7~1.5cmほど欠損した面径6cmの小形仿製鏡である。

3. **銅鏃**はTAK201302①調査区の包含層(旧河川)から出土した。残存長は2.25cm、重さ1.26gを測る有茎鏃である。銅鏃は先端及び抉り部が一部欠損する。また茎部に僅かな凹みを有す。茎端部断面は切断した痕跡を示すことから銅鏃は連鑄式で製作されている。長崎本土部から連鑄式の銅鏃は出土していないことから福岡地域で出土した鑄型等から時期を考えて見たい。鑄型が出土した遺跡は、福岡市井尻B遺跡(弥生時代後期中頃~後半)春日市御陵遺跡(古墳時代初頭)須玖坂本遺跡(弥生時代後期)筑紫野市ヒルハタ遺跡(弥生時代後期)である。こうしたことから考えて今回出土した銅鏃の時期は弥生時代後期中頃~古墳時代初頭頃であろう。

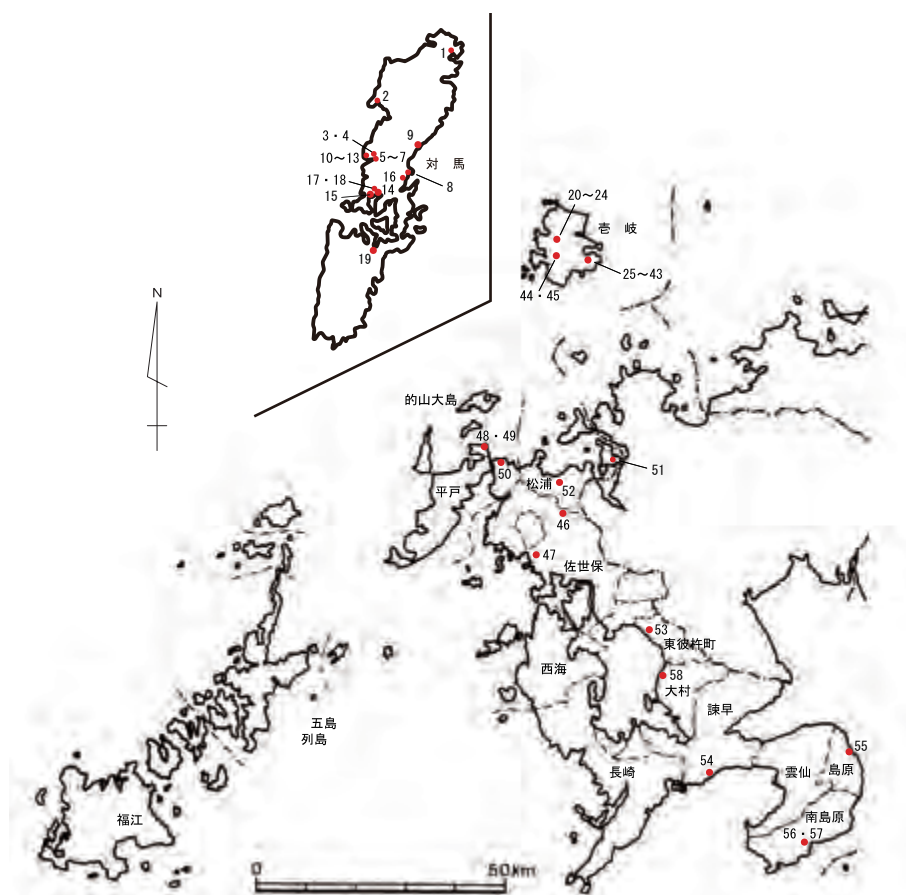
4. **鈕片**はTAK201302⑦調査区の旧表土から出土した鈕片である。鈕長軸1.5cm、幅1.25cm、厚さ0.65cm、重さ2.30gを測る。鈕孔形態は長方形で、底辺が鈕座面に接することから考えて古墳時代初頭~前半頃の小形倭製鏡の鈕区の破鏡である可能性が高い(辻田淳一郎氏、中井歩氏より御教示)。



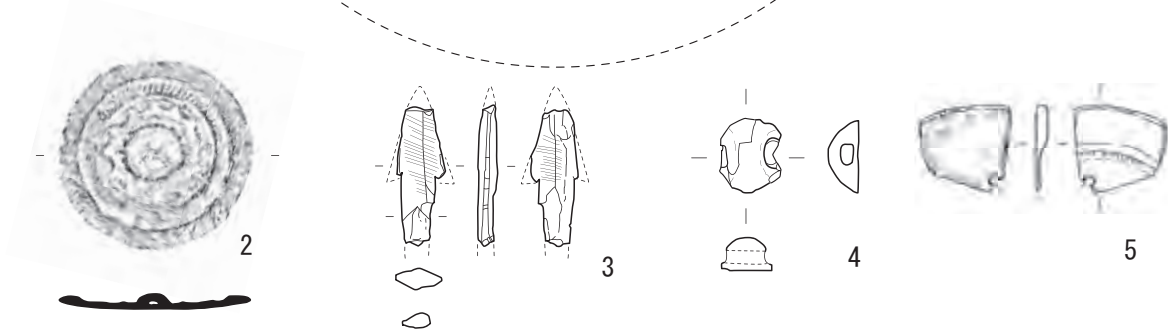
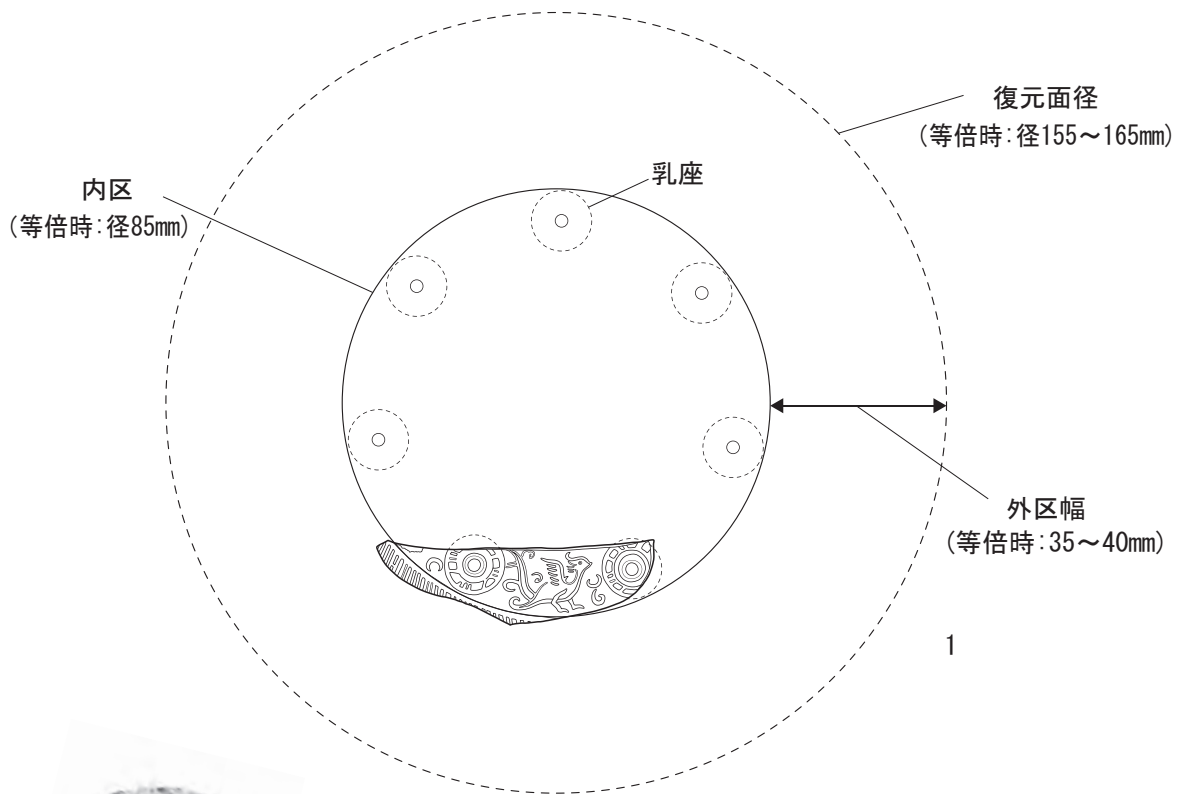
5. 破鏡が竹松遺跡から南に1km程の立小路遺跡4区3層包含層から1点出土している(長崎県教委編2018)。破鏡は中国鏡で前漢末頃の異体字銘帯鏡か方格規矩鏡であろう。外区から内区の一部の破片で重さは25.49gを測る。全体に丁寧に研磨し、穿孔が1ヶ所確認できるが半分が破損した状態である。縁は平縁で斜行櫛歯文帯が僅かに残る。内区はすべて磨かれ文様は不明である。破鏡の状態からかなりの時間所有していたものと思われる。

以上5点の青銅器は破鏡3点、仿製鏡1点、銅鏃1点である。破鏡3点は穿孔痕、磨れた痕等から垂れ下げの装飾品と考えられる。竹松遺跡では竪穴建物が27軒検出されているが同時期に存在した竪穴建物は12軒程である。こうした状況から考えて小規模な集落構成である。この小規模な集落が舶載破鏡、仿製鏡、ガラス小玉、銅鏃、舶載の鉄斧を入手できるだけの生産力があつたのであろう。こうした小規模集落の首長層(有力家父長層)が所有していたであろう青銅器、ガラス小玉はこの時期の威信財として位置付けされていたものである。小規模集落の首長層単独ではこうした威信財を入手するルートを確保することは困難であろうことは予測できる。その中継になったのが拠点集落の首長層であろう。しかしながら竹松遺跡周辺では後期前半～後半にかけての拠点集落は今の所発見されていない。

以下長崎県内で出土した弥生時代から古墳時代前期までの舶載鏡、仿製鏡、破鏡、鏡片について一覧を示す(第93表)。



第249図 長崎県内における青銅鏡出土遺跡位置図  
(弥生時代～古墳時代前半)



第250図 破鏡及びその他の青銅器実測図  
(2・5はS=1/3、その他はS=2/3)

0 (S=1/3) 5cm

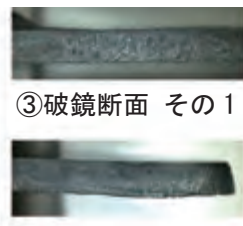
0 (S=2/3) 5cm



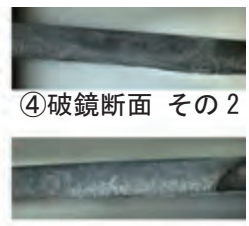
①破鏡



②破鏡拡大



③破鏡断面 その1



④破鏡断面 その2



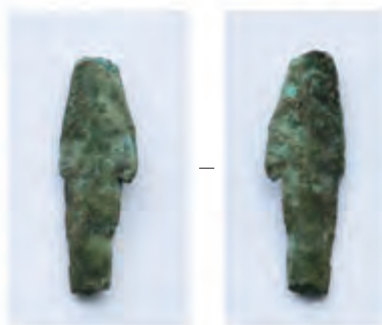
⑤破鏡断面 その3



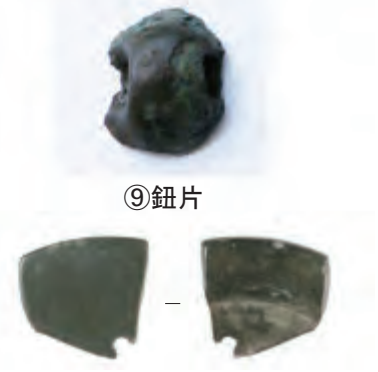
⑥破鏡断面 その4



⑦小形仿製鏡



⑧銅鏃



⑨鈕片

⑩立小路遺跡 破鏡

図版174 破鏡及びその他の青銅器

第93表 長崎県内出土弥生時代関係鏡、鏡片、破鏡一覧表

番号	鏡式名	遺跡名	所在地	遺構内部主体		遺構の時期	直径	出土年	所蔵、所有者	備考	文献		
1	方格規矩渦文鏡	塔ノ首遺跡4号石棺	対馬市上対馬町古里	不明	箱式石棺	弥生後期	10.2cm	1971年	対馬市教育委員会		1		
2	夔鳳鏡	大將軍山古墳	対馬市上県町志多留	古墳	箱式石棺	古墳前期	11.4cm	1950年	東京国立博物館		2		
3	連弧文銘帯鏡	下ガヤノキ遺跡F地点	対馬市峰町三根字ガヤノ木	墳墓	箱式石棺	弥生中期	17.7cm	1970年	九州大学文学部		1		
4	不明				箱式石棺	弥生中期	9.2cm	1970年		1			
5	弥生仿製鏡 (内行花文鏡)	タカマツノダン遺跡	対馬市峰町三根字エイシ	墳墓	箱式石棺	弥生時代	4.6cm	1954年	筑波大学		1		
6	弥生仿製鏡 (綾杉文鏡)				箱式石棺	弥生時代	5.5cm	1954年		1			
7	弥生仿製鏡 (内行花文鏡)				箱式石棺	弥生中期	7.0cm	1953年		1			
8	連弧文明光鏡	伝 エーガ崎遺跡	対馬市峰町佐賀字内田ノ浦(伝)	墳墓	箱式石棺	弥生時代	12.5cm	不明	対馬市教育委員会		3		
9	弥生仿製鏡 (十一弧内行花文鏡)	椎ノ浦遺跡4号石棺墓	対馬市峰町志多賀字内椎ノ浦	墳墓	箱式石棺	古墳前期	7.7cm	不明	海神社宝物館		1		
10	弥生仿製鏡 (六弧内行花文鏡)	木坂遺跡5号石棺	対馬市峰町木坂字ヨケジ	墳墓	箱式石棺	弥生後期	7.9cm	1975年	海神社宝物館		4		
11	弥生仿製鏡 (七弧内行花文鏡)				箱式石棺	弥生後期	8.2cm	1975年		4			
12	弥生仿製鏡 (七弧内行花文鏡)				箱式石棺	弥生後期	7.5cm	1975年		4			
13	弥生仿製鏡				箱式石棺	弥生後期	9.7cm	1975年		4			
14	弥生仿製鏡(素文鏡)	東の浜遺跡	対馬市豊玉町仁位字和宮	墳墓	箱式石棺	弥生時代	不明	1959年	所在不明		5		
15	弥生仿製鏡 (九弧内行花文鏡)	佐保浦赤崎遺跡 第2号石棺墓	対馬市豊玉町卯麦字アカサキ	墳墓	箱式石棺	弥生中期	5.9cm	1966年	対馬市教育委員会		1		
16	弥生仿製鏡 (七弧内行花文鏡)	観音鼻遺跡 第2号箱式石棺墓	下県郡豊玉町千尋藻字船カクシ	墳墓	箱式石棺	弥生後期	7.7cm	1958年頃	長崎県立対馬歴史民俗資料館		1		
17	弥生仿製鏡 (七弧内行花文鏡)	ハロウ遺跡A地点 第5号石棺	対馬市豊玉町仁位	墳墓	箱式石棺	弥生後～ 末期	7.8cm	1979年	対馬市教育委員会		6		
18	弥生仿製鏡 (六弧内行花文鏡)	ハロウ遺跡B地点 第2号石棺			箱式石棺	弥生末期	8.2cm	1979年		6			
19	弥生仿製鏡 (内行花文鏡)	中道壇遺跡 1号石棺墓	対馬市美津島町州藻字中道壇	墳墓	箱式石棺	弥生末期	7.8cm	1952年	対馬市教育委員会		4		
20	方格規矩鏡 or 獸帯鏡	カラカミ遺跡土屋敷貝塚	吉岐市勝本町立石東触 字カラカミ	集落	不明	弥生後期	破片	1952年	京都大学総合博物館		4		
21	弥生仿製鏡 (内行花文鏡)	カラカミ遺跡小川貝塚			遺物包含層	弥生時代	9.0cm	1926年		吉岐市立一支国博物館	4		
22	弥生仿製鏡 (内行花文鏡)	カラカミ遺跡			墳墓	甕棺?	弥生中～ 後期	7.6cm		1971年		7	
23	弥生仿製鏡	カラカミ遺跡1次Ⅱ区大溝内			集落	環壕	弥生時代	4.5cm		2011年	吉岐市教育委員会		8
24	弥生仿製鏡	カラカミ遺跡2次Ⅲ区 北側調査区1号大溝上層				溝	弥生後期	7.5cm		2013年		9	
25	素文鏡	原の辻遺跡	吉岐市芦辺町深江鶴亀触字	集落	不明	弥生中～ 後期	7.1cm	1939年		4			
26	複波紋線方規矩鏡	原の辻遺跡大川地区	吉岐市石田町大字西触	墳墓	箱式石棺 甕棺	弥生後期	10.4cm	1976年	長崎県埋蔵文化財センター		10		
27	不明	原の辻遺跡			箱式石棺 甕棺	弥生中期	破片	1976年		4			
28	不明				箱式石棺 甕棺	弥生中期	破片	1976年		4			
29	不明				箱式石棺 甕棺	弥生中期	破片	1976年		4			
30	不明	原の辻遺跡			箱式石棺 甕棺	弥生中期	破片	1976年		4			
31	不明	原の辻遺跡第14試掘工			箱式石棺 甕棺	弥生中期	破片	1976年		4			
32	不明	原の辻遺跡			箱式石棺 甕棺	弥生中期	破片	1976年		4			
33	上方作系浮彫式 獸帯鏡?	原の辻遺跡(表面採取)			集落	表面採取	弥生時代	11.2cm		1977年	10		
34	弥生仿製鏡 (七弧内行花文鏡)	原の辻遺跡原ノ久保 A地区8号箱式石棺墓			墳墓	無墳丘 箱式石棺	弥生後期	7.6cm		1966年	11		
35	長宜子孫八弧 内行花文鏡	原の辻遺跡原ノ久保 A地区9号箱式石棺墓				無墳丘	弥生後期	20cm		1966年	11		
36	多鈕細文鏡	原の辻遺跡石田大原地区			吉岐市芦辺町深江鶴亀触 吉岐市石田町石田西触	集落	不明	弥生時代		破片	不明		12
37	連弧文銘帯鏡	原の辻遺跡石田大原 344-A・B地区					不明	弥生時代		8.8cm	2008年	13	
38	虬龍鏡	原の辻遺跡 石田大原地区					不明	弥生時代		破片	不明	14	
39	上方作系浮彫式 獸帯鏡?	原の辻遺跡	不明	弥生時代			破片	不明	14				
40	弥生仿製鏡 (内行花文鏡)		不明	弥生時代			完形	不明	14				
41	不明		不明	弥生時代			破片	不明	14				
42	内行花文鏡		原の辻遺跡大川地区	不明			弥生時代	破片	不明	—			
43	連弧文銘帯鏡	原の辻遺跡高元地区 ⅡC区3b層	集落	遺物包含層			弥生中期	破片	2003年	—			

番号	鏡式名	遺跡名	所在地	遺構内部主体		遺構の時期	面径	出土年	所蔵、所有者	備考	文献
44	方格規矩鏡 or 獸帯鏡	車出遺跡土器溜り	沓崎市郷ノ浦町田中触	集落	溝	弥生後期	10.7cm	1998年	長崎県教育委員会		15
45	弥生仿製鏡 (内行花文鏡)						7.0cm				15
46	六弧内行花文鏡	岩谷口遺跡1区第3層	佐世保市世知原町筋瀬字源太岩	岩陰	不明	不明	9.8cm	1966年	財団法人古代学協会		16
47	内行花文鏡	門前遺跡ⅡB-10-19区	佐世保市愛宕町、中里町	集落	遺物包含層	弥生時代	破片	2002~3年	長崎県教育委員会		17
48	上方作系浮彫式獸帯鏡	田助遺跡	平戸市大久保町蜂の久保	墳墓?	箱式石棺	古墳前期	17.0cm	1928年	所在不明 (個人旧蔵)		18
49	内行花文鏡						破片				18
50	多鈕細文鏡	里田原遺跡萩の下地区44C地点3号甕棺墓	平戸市田平町里免	墳墓	甕棺	弥生中期	9.0cm	2000年	平戸市教育委員会		12
51	不明	白土遺跡(伝)	松浦市福島町端免字セキウト・白土(伝)	集落	箱式石棺	弥生時代	不明	不明	所在不明		19
52	内行花文鏡	柗ノ木遺跡2号石棺	松浦市志佐町柗ノ木免字小久保	墳墓	箱式石棺	弥生中期	10.4cm	1971年	長崎県教育委員会		16
53	方格規矩鏡 or 獸帯鏡	白井川遺跡F-3区第3層	東彼杵郡東彼杵町蔵本郷字白井川	集落	遺物包含層	弥生中~後期	1.05cm	1987年	長崎県教育委員会		16
54	不明	下釜墳墓群	諫早市飯盛町下釜	墳墓	不明	弥生時代	不明	不明	所在不明		19
55	不明	景華園遺跡甕棺(伝)	島原市中野町高城元(伝)	墳墓	支石墓甕棺	弥生時代	不明	江戸時代以前	所在不明		20
56	小形仿製鏡 (内行花文鏡)	今福遺跡B-3・4区1号溝	南島原市北有馬町丁今福名字今福	集落	溝	弥生時代中期中葉~古墳前期	7.5cm	1979年	長崎県教育委員会		21
57	弥生仿製鏡 (内行花文鏡)						7.8cm				1979年
58	舶載鏡片、破鏡	冷泉遺跡3号石棺墓付近より出土	大村市今富町	墳墓	箱式石棺	弥生後期	8.2cm	2000年代?	大村市教育委員会	穿孔1ヶ所あり	22

## 参考文献

文献1	小田富士雄他 1974『対馬 浅茅湾とその周辺の考古学的調査』長崎県文化財調査報告書第17集、長崎県教育委員会
文献2	佐賀県立博物館編 1979『鏡・玉・剣—古代九州の遺宝—』佐賀県立博物館
文献3	後藤守一 1926『漢式鏡』日本考古学大系、雄山閣
文献4	小田富士雄他 1991『弥生古鏡を掘る—北九州の国々と文化—』北九州市立考古博物館
文献5	永留久恵 1964『対馬の弥生式文化』新対馬島誌編集委員会編『新対馬島誌』厳原町
文献6	長崎県教育庁文化課編 1996『原始・古代の長崎県』資料編Ⅰ 長崎県教育委員会
文献7	高倉洋彰 1972『弥生時代小形仿製鏡について』『考古学雑誌』第58巻第3号、日本考古学会
文献8	ジャパン通信社編 2011『月間文化財発掘出土情報』2011年12月号、ジャパン通信社
文献9	田中聡一他 2014『天手長男神社遺跡 市史跡カラカミ遺跡2次 [カラカミⅢ区 カラカミⅣ区]』沓崎市文化財調査報告書第23集、長崎県沓崎市教育委員会
文献10	安楽勉他 1978『原の辻遺跡』長崎県文化財調査報告書 第37集、長崎県教育委員会
文献11	宮崎貴夫編 1999『原の辻遺跡』原の辻遺跡調査事務所調査報告書第11集、長崎県教育庁原の辻遺跡調査事務所
文献12	車崎正彦 2002『考古資料大観』第5巻 弥生・古墳時代 鏡、小学館
文献13	田中聡一他 2009『特別史跡 原の辻遺跡』沓崎市文化財調査報告書第14集、長崎県沓崎市教育委員会
文献14	宮崎貴夫 2008『原の辻遺跡』日本の遺跡 32、同成社
文献15	安楽勉 1998『車出遺跡』原の辻遺跡調査事務所調査報告書第8集、長崎県教育委員会
文献16	長崎県教育庁文化課埋蔵文化財班編 1997『原始・古代の長崎県』資料編Ⅱ 長崎県教育委員会
文献17	副島和明 2006『門前遺跡Ⅱ』長崎県文化財調査報告書 第190集、長崎県教育委員会
文献18	小葉田淳 1951『平戸学術調査』京都大学文学部内京都大学平戸学術調査団
文献19	宮崎貴夫 2014『長崎県本土地区の古墳・墳墓一覧及び基本資料の集成』長崎県考古学会編『長崎県本土地区における古墳の様相—日本列島西端の古墳の様相—』平成26年度長崎県考古学会大会発表要旨・資料集、長崎県考古学会
文献20	岡崎敬 1979『日本における古鏡 発見地名表 九州地方Ⅰ』東アジアより見た日本古代墓制研究(増補改訂版)
文献21	宮崎貴夫 1958『今福遺跡Ⅱ』長崎県文化財調査報告書第77集
文献22	大野安生他 2003 大村市文化財調査報告書 第25集『黒丸遺跡ほか発掘調査概要』Vol.3 1998~2002 長崎県大村市教育委員会

## ⑩全体的なまとめ(表94)

弥生時代墳墓の構築状況、構築時期、出土遺物の状況、墳墓の単位構成、祭祀遺構、標石遺構等を検討してきた。この30基の集団墓が構築を開始したのは弥生時代後期前半頃である。後期後半頃には終焉を迎える。出土遺物から集団の様相を見ていくと遺物が出土した墓は箱式石棺墓8基(ST1、3、6、8、12、13、16、17)、木棺墓1基(ST28)、甕棺墓1基(ST35)の合計10基である。出土遺物はST8からガラス小玉5個、ST17から管玉1個で、その他は器台、壺、甕、高杯等の土器片で極めて貧弱な内容である。また各グループの墓の配置からみて共同墓地的な様相を呈している。しかしながらマウンド状を呈する造り(ST1、ST3)や標石の設置(ST1、ST3、ST28)、など特定個人墓が台頭してくる前段階の様相を示す状況が窺える。

墓のグルーピングから集落構造を想定すると、後期前半頃から墓が構築されることから考えて、集落の居住開始はそれ以前の後期初頭頃であろうか。後期前半頃に墓が構築され始め、東側は3グループ(5G、7G、9G)7基。西側は2グループ(1G、4G)3基程が築造される。それが後期後半には東側は6グループ(6G、7G、8G、9G、10G、11G)8基。西側は4グループ(2G、3G、4G、11G)6基である。後期後半で僅かながら墓が増加している。したがって集落の状況は後期後半まで小集落が続く様相である。

石棺墓の石材取得候補地は郡川中流域の大村市原町石場、大村市松原海岸、東彼杵町千綿海岸に所在する安山岩を利用した可能性が高いことが分かった。こうしたことから竹松遺跡の弥生墳墓を構築した集団の生産活動のテリトリーは郡川中、下流域を中心とした地域が想定できる。また2点ではあるが結晶片岩を石棺墓(ST3)の側石、標石(標石3、石皿転用)に用いていることから産出供給地(大村湾対岸の長崎市琴海町村松戸根付近)との交流関係の可能性も考えられる。こうした状況から考えてこの集団の生産活動は大村湾対岸の西彼杵まで広がる可能性もある。弥生後期後半頃に墓の構築もピークを迎える。後期前半に比べて後期後半は生産活動が僅かながら活発になったことは墳墓の増加から理解できる。しかしながら副葬品の貧弱さから考えて集団の生産力の位置付けは垂流的様相を呈するものである。こうしたことから考えて「竹松遺跡」は拠点集落の縁辺部に所在する衛星的な小集落としての位置付けができそうである。竹松遺跡の周辺域には後期前半から後半頃にかけての拠点集落は今のところ発見されていない。

※堅穴建物と弥生墳墓との関係は「竹松遺跡IV2018」で考察する。

※「竹松遺跡」長崎県文化財調査報告書第214集、第V章 まとめ第1節(1)において「西側に展開する墓域は箱式石棺21基、甕棺3基、土坑墓4基、石蓋土坑墓4基、土坑9基の総数39基の集団墓である」としていたが、正しくは「西側に展開する墓域は箱式石棺20基、甕棺4基、土坑墓2基、木棺墓4基(石蓋木棺墓2基、木棺墓2基)の総数30基の集団墓である」に訂正する。

※九州考古学会(2014)、長崎考古学会(2014)等で竹松遺跡から出土した箱式石棺墓の石材を全て玄武岩と報告した。しかし後日、2基(ST1、ST13)の箱式石棺墓の石材鑑定をした結果安山岩であることが判明した。修正し訂正する。残り18基は記録保存の後、現場に埋め戻したため石材鑑定はできていないが安山岩の可能性は高い。石材鑑定した2基の箱式石棺墓は大村市教育委員会で保管している。

第94表 旧彼杵郡内の石棺墓集成一覧表(一部高来郡を含む)

番号	遺跡名	所在地	遺構名	法量(棺内法(cm))		法量(掘方(cm))		底面玉石	特記事項	出土遺物	時代	文献
				長さ	幅	長さ	深さ					
1	篤木遺跡	大村市富の原2丁目							遺跡台帳に石棺墓ありとの記述 雷の原・黒丸と同時期か		弥生時代	1
2	雷の原(常盤)遺跡	大村市富の原	A地点1号石棺墓	65	40						弥生時代	2
3	雷の原(常盤)遺跡	大村市富の原	A地点2号石棺墓	90	43	48				管玉3	弥生時代	2
4	雷の原(常盤)遺跡	大村市富の原	A地点3号石棺墓								弥生時代	2
5	雷の原(常盤)遺跡	大村市富の原	A地点4号石棺墓								弥生時代	2
6	雷の原(常盤)遺跡	大村市富の原	A地点5号石棺墓								弥生時代	2
7	雷の原(常盤)遺跡	大村市富の原	A地点6号石棺墓								弥生時代	2
8	雷の原(常盤)遺跡	大村市富の原	A地点7号石棺墓	38	22						弥生時代	2
9	雷の原(常盤)遺跡	大村市富の原	A地点8号石棺墓								弥生時代	2
10	雷の原(常盤)遺跡	大村市富の原	A地点9号石棺墓								弥生時代	2
11	雷の原(常盤)遺跡	大村市富の原	A地点10号石棺墓								弥生時代	2
12	雷の原(常盤)遺跡	大村市富の原	A地点11号石棺墓	89	43	42				丹塗土器	弥生時代	2
13	雷の原(常盤)遺跡	大村市富の原	A地点12号石棺墓	41	24	28					弥生時代	2
14	雷の原(常盤)遺跡	大村市富の原	A地点13号石棺墓	50	31	27					弥生時代	2
15	雷の原(常盤)遺跡	大村市富の原	A地点14号石棺墓								弥生時代	2
16	雷の原(常盤)遺跡	大村市富の原	A地点15号石棺墓								弥生時代	2
17	雷の原(常盤)遺跡	大村市富の原	A地点16号石棺墓								弥生時代	2
18	雷の原(常盤)遺跡	大村市富の原	A地点17号石棺墓	101	39	38				なし	弥生時代	2
19	雷の原(常盤)遺跡	大村市富の原	A地点18号石棺墓	41	30						弥生時代	2
20	雷の原(常盤)遺跡	大村市富の原	A地点19号石棺墓								弥生時代	2
21	雷の原(常盤)遺跡	大村市富の原	A地点20号石棺墓								弥生時代	2
22	雷の原(常盤)遺跡	大村市富の原	A地点21号石棺墓								弥生時代	2
23	雷の原(常盤)遺跡	大村市富の原	A地点22号石棺墓								弥生時代	2
24	雷の原(常盤)遺跡	大村市富の原	B地点1号石棺墓	86	42	17					二段埴り	2
25	雷の原(常盤)遺跡	大村市富の原	B地点2号石棺墓	46	26						弥生時代	2
26	雷の原(常盤)遺跡	大村市富の原	B地点3号石棺墓	122	52	35				二段埴り 頭蓋骨	弥生時代	2
27	雷の原(常盤)遺跡	大村市富の原	B地点4号石棺墓								弥生時代	2
28	雷の原(常盤)遺跡	大村市富の原	B地点5号石棺墓								弥生時代	2
29	雷の原(常盤)遺跡	大村市富の原	B地点6号石棺墓	25							弥生時代	2
30	雷の原(常盤)遺跡	大村市富の原	B地点7号石棺墓	58	34						弥生時代	2
31	雷の原(常盤)遺跡	大村市富の原	B地点8号石棺墓	28							弥生時代	2
32	雷の原(常盤)遺跡	大村市富の原	B地点9号石棺墓	50	30						弥生時代	2
33	雷の原(常盤)遺跡	大村市富の原	B地点10号石棺墓	72	34						弥生時代	2
34	雷の原(常盤)遺跡	大村市富の原	B地点11号石棺墓	44							弥生時代	2
35	雷の原(常盤)遺跡	大村市富の原	B地点12号石棺墓	91	43						弥生時代	2
36	雷の原(常盤)遺跡	大村市富の原	B地点13号石棺墓								弥生時代	2
37	雷の原(常盤)遺跡	大村市富の原	B地点14号石棺墓	94	46						弥生時代	2
38	雷の原(常盤)遺跡	大村市富の原	B地点15号石棺墓	43							弥生時代	2
39	雷の原(常盤)遺跡	大村市富の原	B地点16号石棺墓	42	28					管玉1	弥生時代	2
40	雷の原(常盤)遺跡	大村市富の原	B地点17号石棺墓								弥生時代	2
41	雷の原(常盤)遺跡	大村市富の原	B地点18号石棺墓								弥生時代	2
42	雷の原(常盤)遺跡	大村市富の原	B地点19号石棺墓	90	36	44					弥生時代	2
43	雷の原(常盤)遺跡	大村市富の原	B地点20号石棺墓	44	33					大腿骨 結晶片岩板石を用いる	弥生時代	2
44	雷の原(常盤)遺跡	大村市富の原	B地点21号石棺墓								弥生時代	2
45	雷の原(常盤)遺跡	大村市富の原	B地点22号石棺墓								弥生時代	2
46	雷の原(常盤)遺跡	大村市富の原	B地点23号石棺墓								弥生時代	2
47	雷の原(常盤)遺跡	大村市富の原	B地点24号石棺墓								弥生時代	2
48	雷の原(常盤)遺跡	大村市富の原	B地点25号石棺墓								弥生時代	2
49	雷の原(常盤)遺跡	大村市富の原	B地点26号石棺墓	91	43						弥生時代	2
50	雷の原(常盤)遺跡	大村市富の原	B地点27号石棺墓		52						弥生時代	2

大村市検出石棺墓集成

番号	遺跡名	所在地	遺構名	法量(棺内法(cm)) 長さ 幅 高さ 深さ	法量(掘方(cm)) 長さ 幅 高さ 深さ	底面玉石	特記事項	出土遺物	時代	文献
51	富の原(常盤)遺跡	大村市富の原	B地点28号石棺墓	32 16 19					弥生時代	2
52	富の原(常盤)遺跡	大村市富の原	B地点29号石棺墓	67 34					弥生時代	2
53	富の原(常盤)遺跡	大村市富の原	B地点30号石棺墓	107 38 40					弥生時代	2
54	富の原(常盤)遺跡	大村市富の原	B地点31号石棺墓	43					弥生時代	2
55	富の原(常盤)遺跡	大村市富の原	B地点32号石棺墓	58 27 25					弥生時代	2
56	富の原(常盤)遺跡	大村市富の原	B地点33号石棺墓						弥生時代	2
57	富の原(常盤)遺跡	大村市富の原	B地点34号石棺墓						弥生時代	2
58	富の原(常盤)遺跡	大村市富の原	B地点35号石棺墓	60 28 26					弥生時代	2
59	富の原(常盤)遺跡	大村市富の原	B地点36号石棺墓	59 32 25					弥生時代	2
60	富の原(常盤)遺跡	大村市富の原	石棺墓1	80 40			床石なし		弥生時代	3
61	富の原(常盤)遺跡	大村市富の原	石棺墓2	85 50			床石なし	人骨数体分が集積	弥生時代	3
62	富の原(常盤)遺跡	大村市富の原	石棺墓3	85 45				丹塗高坏脚部1	弥生時代	3
63	富の原(常盤)遺跡	大村市富の原	1号石棺墓	111 60	181 120			なし	弥生時代	4
64	富の原(常盤)遺跡	大村市富の原	2号石棺墓		140 80			なし	弥生時代	4
65	富の原(常盤)遺跡	大村市富の原	3号石棺墓					なし	弥生時代	4
66	富の原(常盤)遺跡	大村市富の原	4号石棺墓	124 80				なし	弥生時代	4
67	富の原(常盤)遺跡	大村市富の原	5号石棺墓	147 70				なし	弥生時代	4
68	富の原(常盤)遺跡	大村市富の原	6号石棺墓	131 90			一部二段掘り	なし	弥生時代	4
69	富の原(常盤)遺跡	大村市富の原670-1 673番地	4号石棺墓	45 28 25				小型甕	弥生中期中葉	5
70	富の原(常盤)遺跡	大村市富の原670-1 673番地	6号石棺墓					なし	弥生時代	5
71	富の原(常盤)遺跡	大村市富の原670-1 673番地	8号石棺墓	51 22 22				なし	弥生時代	5
72	富の原(常盤)遺跡	大村市富の原670-1 673番地	9号石棺墓	50 30 38				勾玉1 小型甕	弥生中期中葉	5
73	富の原(常盤)遺跡	大村市富の原670-1 673番地	10号石棺墓	72 34 25				なし	弥生時代	5
74	富の原(常盤)遺跡	大村市富の原670-1 673番地	11号石棺墓	72 40 23				なし	弥生時代	5
75	富の原(常盤)遺跡	大村市富の原670-1 673番地	12号石棺墓	91 38 43				人骨片	弥生時代	5
76	富の原(常盤)遺跡	大村市富の原670-1 673番地	13号石棺墓	50 24 30				なし	弥生時代	5
77	富の原(常盤)遺跡	大村市富の原670-1 673番地	14号石棺墓	90 40 38			側壁外に円礫の裏込め 板石で棺内を2分割	小型甕	弥生中期中葉	5
78	富の原(常盤)遺跡	大村市富の原670-1 673番地	15号石棺墓	110 38 48				粉状に風化した骨片	弥生時代	5
79	富の原(常盤)遺跡	大村市富の原670-1 673番地	16号石棺墓	45 28 28				なし	弥生時代	5
80	富の原(常盤)遺跡	大村市富の原670-1 673番地	17号石棺墓	53 33				なし	弥生時代	5
81	富の原(常盤)遺跡	大村市富の原670-1 673番地	37号石棺墓	57 32 37				小型甕	弥生中期中葉	5
82	富の原(常盤)遺跡	大村市富の原670-1 673番地	38号石棺墓	62 32 29				なし	弥生時代	5
83	富の原(常盤)遺跡	大村市富の原670-1 673番地	39号石棺墓	85 34				なし	弥生時代	5
84	富の原(常盤)遺跡	大村市富の原670-1 673番地	40号石棺墓					なし	弥生時代	5
85	富の原(常盤)遺跡	大村市富の原670-1 673番地	41号石棺墓	92 69				人骨片	弥生時代	5
86	富の原(常盤)遺跡	大村市富の原670-1 673番地	42号石棺墓	38				なし	弥生時代	5
87	富の原(常盤)遺跡	大村市富の原670-1 673番地	43号石棺墓	72 40				なし	弥生時代	5
88	富の原(常盤)遺跡	大村市富の原670-1 673番地	44号石棺墓	89 47				人骨片 歯	弥生時代	5
89	富の原(常盤)遺跡	大村市富の原670-1 673番地	45号石棺墓	93 43				なし	弥生時代	5
90	富の原(常盤)遺跡	大村市富の原670-1 673番地	46号石棺墓	53 52				なし	弥生時代	5
91	富の原(常盤)遺跡	大村市富の原670-1 673番地	47号石棺墓	88 52				土器多数	弥生中期後半	5
92	富の原(常盤)遺跡	大村市富の原670-1 673番地	48号石棺墓	95 48 95				なし	弥生時代	5
93	富の原(常盤)遺跡	大村市富の原670-1 673番地	49号石棺墓	107 48				人骨片	弥生時代	5
94	富の原(常盤)遺跡	大村市富の原670-1 673番地	50号石棺墓	38				なし	弥生時代	5
95	富の原(常盤)遺跡	大村市富の原670-1 673番地	51号石棺墓	42			中央にピット状の掘り込み	なし	弥生時代	5
96	富の原(常盤)遺跡	大村市富の原670-1 673番地	52号石棺墓	104 50				なし	弥生時代	5
97	富の原(常盤)遺跡	大村市富の原670-1 673番地	53号石棺墓	45 28				なし	弥生時代	5
98	富の原(常盤)遺跡	大村市富の原670-1 673番地	54号石棺墓	95				頭蓋骨 大腿骨 脛骨 歯	弥生時代	5
99	竹松遺跡Ⅲ(本編)	大村市竹松町1042番地1他	ST1石棺墓	184 42 24	224 86 42	頭部のみ	二段掘り。標石(立石 I、平置5)円礫を投入し盛土を構築。赤色顔料は床面に厚く堆積、掘方周辺にまで撒かれている。	壺胴部片1(祭祀遺構2から出土した土器と接合)	弥生後期後半	6
100	竹松遺跡Ⅲ(本編)	大村市竹松町1042番地1他	ST3石棺墓	164 34 32		あり	標石あり。側壁材の1枚は結晶片岩を使用。		弥生時代	6
101	竹松遺跡Ⅲ(本編)	大村市竹松町1042番地1他	ST5石棺墓	138 38 42		あり	床面は玉砂利敷。花粉を採取。		弥生時代	6

大村市検出石棺墓集成

番号	遺跡名	所在地	遺構名	法量(棺内法(cm)) 長さ 幅 高さ 深さ	法量(掘方(cm)) 長さ 幅 高さ 深さ	底面玉石	特記事項	出土遺物	時代	文献
102	竹松遺跡Ⅲ(本編)	大村市竹松町1042番地1他	ST6石棺墓	188 44 34		あり	側壁材を何重にも重ねている	骨片出土	弥生時代	6
103	竹松遺跡Ⅲ(本編)	大村市竹松町1042番地1他	ST7石棺墓	148 50		あり	糟乱により大半が欠損		弥生時代	6
104	竹松遺跡Ⅲ(本編)	大村市竹松町1042番地1他	ST8石棺墓	156 36 26	46 32	あり	側壁材の継ぎ目に赤色顔料を撒く		弥生後期前半	6
105	竹松遺跡Ⅲ(本編)	大村市竹松町1042番地1他	ST9石棺墓	198 48 21			11号と並列		弥生時代	6
106	竹松遺跡Ⅲ(本編)	大村市竹松町1042番地1他	ST10石棺墓				側壁材が一部存在せず。木材を使用か		弥生時代	6
107	竹松遺跡Ⅲ(本編)	大村市竹松町1042番地1他	ST11石棺墓	164 56 24		あり	ST09を切る。蓋石が棺内に落ち込み、構築時の状況留めず		弥生時代	6
108	竹松遺跡Ⅲ(本編)	大村市竹松町1042番地1他	ST12石棺墓	184 42 30			河川の氾濫により破損		弥生後期中頃	6
109	竹松遺跡Ⅲ(本編)	大村市竹松町1042番地1他	ST13石棺墓	120 30 23	150 63 25	あり	全体を赤彩、小児石棺か		弥生時代	6
110	竹松遺跡Ⅲ(本編)	大村市竹松町1042番地1他	ST15石棺墓	176 48 21	206 80 24	あり	床板に織維片が付着		弥生時代	6
111	竹松遺跡Ⅲ(本編)	大村市竹松町1042番地1他	ST16石棺墓	179 50 20		2,3		骨片出土	弥生後期後半	6
112	竹松遺跡Ⅲ(本編)	大村市竹松町1042番地1他	ST17石棺墓	162 50 20		あり			弥生後期後半	6
113	竹松遺跡Ⅲ(本編)	大村市竹松町1042番地1他	ST18石棺墓	172 47 22		あり			弥生時代	6
114	竹松遺跡Ⅲ(本編)	大村市竹松町1042番地1他	ST19石棺墓	172 40 31			円礫を周囲に配石か。覆土粘性強		弥生時代	6
115	竹松遺跡Ⅲ(本編)	大村市竹松町1042番地1他	ST20石棺墓	192 35 26		あり	棺内を粘土で目張り。	骨片出土	弥生時代	6
116	竹松遺跡Ⅲ(本編)	大村市竹松町1042番地1他	ST22石棺墓	180 38 37			19号に近接、覆土粘性強		弥生時代	6
117	竹松遺跡Ⅲ(本編)	大村市竹松町1042番地1他	ST23石棺墓	180 38 25		あり			弥生時代	6
118	竹松遺跡Ⅲ(本編)	大村市竹松町1042番地1他	ST24石棺墓	170 28	177 53		三段掘り。残存状況悪い		弥生時代	6
119	竹松遺跡Ⅲ(本編)	大村市竹松町1042番地1他	ST25石棺墓	112 30 22		あり			弥生時代	6
120	竹松遺跡Ⅲ(本編)	大村市竹松町1042番地1他	ST26石蓋土坑墓 (木棺墓)	139 42 20			蓋石は3枚平置き		弥生時代	6
121	竹松遺跡Ⅲ(本編)	大村市竹松町1042番地1他	ST27石蓋土坑墓 (木棺墓)	125 50 20	158 75 28		蓋石は3枚重ね		弥生時代	6
122	竹松遺跡Ⅲ(本編)	大村市竹松町1042番地1他	ST28木棺墓		127 68 30		赤色顔料残存良好		弥生後期後半	6
123	竹松遺跡Ⅲ(本編)	大村市竹松町1042番地1他	ST31土坑墓					骨片出土	弥生時代	6
124	竹松遺跡Ⅲ(本編)	大村市竹松町1042番地1他	ST32土坑墓						弥生時代	6
125	竹松遺跡Ⅲ(本編)	大村市竹松町1042番地1他	ST34土坑墓		208 50 24				弥生時代	6
126	竹松遺跡Ⅲ(本編)	大村市竹松町1042番地1他	ST35雙棺墓				弥生時代後期 祭祀遺構1の隣接し掘り方がなく蓋が濡れている状態で検出したことから祭祀遺構に伴う可能性がある		弥生後期後半	6
127	竹松遺跡Ⅲ(本編)	大村市竹松町1042番地1他	ST36雙棺墓				突帯を持たず薄手		弥生後期後半	6
128	竹松遺跡Ⅲ(本編)	大村市竹松町1042番地1他	ST37雙棺墓				大半が破損		弥生後期後半	6
129	竹松遺跡Ⅲ(本編)	大村市竹松町1042番地1他	ST38雙棺墓				大半が破損		弥生後期後半	6
130	竹松遺跡201208・4区北	大村市竹松町1042番地1他	ST1	180 40					弥生時代	7
131	竹松遺跡201208・4区北	大村市竹松町1042番地1他	ST2	145 50 60					弥生時代	7
132	竹松遺跡201208・4区北	大村市竹松町1042番地1他	ST3				半壊	管玉1(弥生後期以降)	弥生後期後半	7
133	竹松遺跡201208・4区北	大村市竹松町1042番地1他	ST4	130(推定)	不明	不明	半壊		弥生後期後半	7
134	竹松遺跡201208・4区北	大村市竹松町1042番地1他	ST5	250	64 40			管玉3	弥生時代	7



諫早市検出石棺墓集成

番号	遺跡名	所在地	遺構名	法量(棺内法(cm))			法量(掘方(cm))			底面玉石	特記事項	出土遺物	時代	文献
				長さ	幅	高さ	長さ	幅	高さ					
1	化屋大島遺跡	諫早市多良見町化屋名中大島119	1号石棺	105	46	43	なし	なし	なし	石材の継ぎ目は粘土で目張り	鉢形土器	弥生時代	8	
2	化屋大島遺跡	諫早市多良見町化屋名中大島119	2号石棺	117	47	38	なし	なし	なし	周辺に密封用とみられる小石あり	壺形土器	弥生時代	8	
3	化屋大島遺跡	諫早市多良見町化屋名中大島119	3号石棺	120	46	25	なし	なし	なし	裏込め用とみられる小石あり	壺形土器	弥生時代	8	
4	化屋大島遺跡	諫早市多良見町化屋名中大島119	4号石棺	107	36	23	なし	なし	なし	東北方に墓壇と思われる掘込を確認	壺形土器	弥生時代	8	
5	化屋大島遺跡	諫早市多良見町化屋名中大島119	5号石棺	95	40	40	なし	なし	なし		壺形土器	弥生時代	8	
6	化屋大島遺跡	諫早市多良見町化屋名中大島119	6号石棺	105	35		なし	なし	なし		壺形土器	弥生時代	8	
7	滑川遺跡	諫早市貝津町782	1号箱式石棺墓	100	40	43					壺形土器	弥生時代中期初	9	
8	滑川遺跡	諫早市貝津町782	2号箱式石棺墓	70	30	25					なし	弥生時代中期初	9	
9	滑川遺跡	諫早市貝津町782	3号箱式石棺墓	130	40						なし	弥生時代中期初	9	
10	滑川遺跡	諫早市貝津町782	4号箱式石棺墓	110	30	50					壺形土器	弥生時代中期初	9	
11	溝口遺跡	諫早市高来町字馬渡114	3号箱式石棺墓	90	37	25					隣接して石蓋土壇墓がある	弥生時代後葉~終末	9	
12	溝口遺跡	諫早市高来町字馬渡114	石蓋土坑墓	85	30	25					墓壇は2段掘り	弥生時代後葉~終末	9	
13	溝口遺跡	諫早市破籠井町・中里町	B地点1号支石墓									縄文晩期~弥生初頭	10	
14	風観岳支石墓群	諫早市破籠井町・中里町	B地点2号支石墓									縄文晩期~弥生初頭	10	
15	風観岳支石墓群	諫早市破籠井町・中里町	B地点3号支石墓									縄文晩期~弥生初頭	10	
16	風観岳支石墓群	諫早市破籠井町・中里町	B地点4号支石墓									縄文晩期~弥生初頭	10	
17	風観岳支石墓群	諫早市破籠井町・中里町	C地点5号支石墓									縄文晩期~弥生初頭	10	
18	風観岳支石墓群	諫早市破籠井町・中里町	C地点6号支石墓									縄文晩期~弥生初頭	10	
19	風観岳支石墓群	諫早市破籠井町・中里町	C地点7号支石墓									縄文晩期~弥生初頭	10	
20	風観岳支石墓群	諫早市破籠井町・中里町	C地点8号支石墓									縄文晩期~弥生初頭	10	
21	風観岳支石墓群	諫早市破籠井町・中里町	C地点9号支石墓									縄文晩期~弥生初頭	10	
22	風観岳支石墓群	諫早市破籠井町・中里町	C地点10号支石墓									縄文晩期~弥生初頭	10	
23	風観岳支石墓群	諫早市破籠井町・中里町	E地点11号支石墓									縄文晩期~弥生初頭	10	
24	風観岳支石墓群	諫早市破籠井町・中里町	E地点12号支石墓									縄文晩期~弥生初頭	10	
25	風観岳支石墓群	諫早市破籠井町・中里町	E地点13号支石墓									縄文晩期~弥生初頭	10	
26	風観岳支石墓群	諫早市破籠井町・中里町	E地点14号支石墓									縄文晩期~弥生初頭	10	
27	風観岳支石墓群	諫早市破籠井町・中里町	E地点15号支石墓									縄文晩期~弥生初頭	10	
28	風観岳支石墓群	諫早市破籠井町・中里町	E地点16号支石墓									縄文晩期~弥生初頭	10	
29	風観岳支石墓群	諫早市破籠井町・中里町	C地点17号支石墓									縄文晩期~弥生初頭	10	
30	風観岳支石墓群	諫早市破籠井町・中里町	C地点18号支石墓									縄文晩期~弥生初頭	10	
31	風観岳支石墓群	諫早市破籠井町・中里町	C地点19号支石墓									縄文晩期~弥生初頭	10	
32	風観岳支石墓群	諫早市破籠井町・中里町	C地点20号支石墓									縄文晩期~弥生初頭	10	
33	風観岳支石墓群	諫早市破籠井町・中里町	A地点21号支石墓	62	60	40						縄文晩期~弥生初頭	10	
34	風観岳支石墓群	諫早市破籠井町・中里町	A地点22号支石墓	88	55	30						縄文晩期~弥生初頭	10	
35	風観岳支石墓群	諫早市破籠井町・中里町	A地点23号支石墓	60	50	10						縄文晩期~弥生初頭	10	
36	風観岳支石墓群	諫早市破籠井町・中里町	A地点24号支石墓									縄文晩期~弥生初頭	10	
37	風観岳支石墓群	諫早市破籠井町・中里町	A地点25号支石墓	86	40	40						縄文晩期~弥生初頭	10	
38	風観岳支石墓群	諫早市破籠井町・中里町	C地点26号支石墓	95	70							縄文晩期~弥生初頭	10	
39	風観岳支石墓群	諫早市破籠井町・中里町	C地点27号支石墓	82	53	30						縄文晩期~弥生初頭	10	
40	風観岳支石墓群	諫早市破籠井町・中里町	C地点28号支石墓	63	37	45						縄文晩期~弥生初頭	10	
41	風観岳支石墓群	諫早市破籠井町・中里町	C地点29号支石墓	70	50							縄文晩期~弥生初頭	10	
42	風観岳支石墓群	諫早市破籠井町・中里町	D地点30号支石墓	58	27	40						縄文晩期~弥生初頭	10	
43	風観岳支石墓群	諫早市破籠井町・中里町	D地点31号支石墓	68	36	32						縄文晩期~弥生初頭	10	
44	風観岳支石墓群	諫早市破籠井町・中里町	D地点32号支石墓	53	30	35						縄文晩期~弥生初頭	10	
45	風観岳支石墓群	諫早市破籠井町・中里町	D地点33号支石墓	100	30	60						縄文晩期~弥生初頭	10	
46	風観岳支石墓群	諫早市破籠井町・中里町	D地点34号支石墓	83	33	45						縄文晩期~弥生初頭	10	
47	風観岳支石墓群	諫早市破籠井町・中里町	D地点35号支石墓									縄文晩期~弥生初頭	10	
48	風観岳支石墓群	諫早市破籠井町・中里町	D地点36号支石墓									縄文晩期~弥生初頭	10	
49	風観岳支石墓群	諫早市破籠井町・中里町	D地点37号支石墓									縄文晩期~弥生初頭	10	
50	風観岳支石墓群	諫早市破籠井町・中里町	D地点38号支石墓	60	50	15						縄文晩期~弥生初頭	10	
51	風観岳支石墓群	諫早市破籠井町・中里町	D地点39号支石墓	78	20	10						縄文晩期~弥生初頭	10	
52	風観岳支石墓群	諫早市破籠井町・中里町	D地点39号支石墓									縄文晩期~弥生初頭	10	

諫早市検出石棺墓集成

番号	遺跡名	所在地	遺構名	法量(棺内法(cm))	法量(掘方(cm))	底面玉石	特記事項	出土遺物	時代	文献
				長さ 幅 高さ	長さ 幅 高さ					
53	風観岳支石墓群	諫早市破籠井町・中里町	D地点40号支石墓	60 60 20				黒曜石剥片と削片	縄文晩期～弥生初頭	10
54	風観岳支石墓群	諫早市破籠井町・中里町	D地点41号支石墓	45 55 30					縄文晩期～弥生初頭	10
55	風観岳支石墓群	諫早市破籠井町・中里町	D地点42号支石墓	57 59 20				黒曜石削片2	縄文晩期～弥生初頭	10
56	風観岳支石墓群	諫早市破籠井町・中里町	D地点43号支石墓	91 26 27				黒曜石製石器17	縄文晩期～弥生初頭	10
57	風観岳支石墓群	諫早市破籠井町・中里町	D地点44号支石墓					石斧2	縄文晩期～弥生初頭	10
58	風観岳支石墓群	諫早市破籠井町・中里町	D地点45号支石墓						縄文晩期～弥生初頭	10
59	風観岳支石墓群	諫早市破籠井町・中里町	D地点46号支石墓						縄文晩期～弥生初頭	10
60	風観岳支石墓群	諫早市破籠井町・中里町	D地点47号支石墓						縄文晩期～弥生初頭	10
61	風観岳支石墓群	諫早市破籠井町・中里町	D地点48号支石墓						縄文晩期～弥生初頭	10
62	風観岳支石墓群	諫早市破籠井町・中里町	D地点49号支石墓	70 43 14				石器32 石器10 炭化物26	縄文晩期～弥生初頭	10
63	風観岳支石墓群	諫早市破籠井町・中里町	D地点50号支石墓					黒曜石削片10	縄文晩期～弥生初頭	10
64	風観岳支石墓群	諫早市破籠井町・中里町	D地点51号支石墓	35 30 20				薔形石器 石器3	縄文晩期～弥生初頭	10
65	風観岳支石墓群	諫早市破籠井町・中里町	E地点52号支石墓					石器4 石器3	縄文晩期～弥生初頭	10
66	風観岳支石墓群	諫早市破籠井町・中里町	F地点53号支石墓	112 45 22					縄文晩期～弥生初頭	10
67	風観岳支石墓群	諫早市破籠井町・中里町	B地点103号支石墓						縄文晩期～弥生初頭	10
68	風観岳支石墓群	諫早市破籠井町・中里町	D地点106号支石墓						縄文晩期～弥生初頭	10
69	風観岳支石墓群	諫早市破籠井町・中里町	C地点108号支石墓						縄文晩期～弥生初頭	10
70	風観岳支石墓群	諫早市破籠井町・中里町	E地点110号支石墓						縄文晩期～弥生初頭	10
71	中江遺跡	諫早市高来町小江下与名	1号石棺	87 87 25			石室朱塗	人骨	弥生時代	11
72	中江遺跡	諫早市高来町小江下与名	2号石棺	166 32 27				鉄製刀子 石枕	弥生時代	11
73	中江遺跡	諫早市高来町小江下与名	3号石棺	180 38 20				なし	弥生時代	11
74	中江遺跡	諫早市高来町小江下与名	4号石棺	161 36 30				石枕 人骨	弥生時代	11
75	中江遺跡	諫早市高来町小江下与名	5号石棺	172 38 38				土器細片	弥生時代	11
76	中江遺跡	諫早市高来町小江下与名	6号石棺	166 31 26		床面敷石		石器細片 石枕	弥生時代	11
77	中江遺跡	諫早市高来町小江下与名	7号石棺	168 47 37		床面砂利		なし	弥生時代	11
78	中江遺跡	諫早市高来町小江下与名	8号石棺	155 36 29				石枕	弥生時代	11
79	中江遺跡	諫早市高来町小江下与名	9号石棺	184 32 30				石枕	弥生時代	11
80	中江遺跡	諫早市高来町小江下与名	10号石棺	159 41 25		床面敷石		石枕	弥生時代	11
81	中江遺跡	諫早市高来町小江下与名	11号石棺	198 35 36		床面敷石		石枕	弥生時代	11
82	中江遺跡	諫早市高来町小江下与名	12号石棺	160 32 26				石枕	弥生時代	11
83	中江遺跡	諫早市高来町小江下与名	13号石棺	177 48 30				鉄器? 石枕	弥生時代	11
84	中江遺跡	諫早市高来町小江下与名	14号石棺	191 58 30				鉄鉋 石枕	弥生時代	11
85	中江遺跡	諫早市高来町小江下与名	15号石棺	186 40 30				石枕	弥生時代	11
86	中江遺跡	諫早市高来町小江下与名	16号石棺	168 50 38		敷石		石枕 人骨 朱	弥生時代	11
87	中江遺跡	諫早市高来町小江下与名	17号石棺	181 32 35		敷石		石枕 人骨 朱	弥生時代	11
88	中江遺跡	諫早市高来町小江下与名	18号石棺	192 90 80			石棺系石室	刀子	弥生時代	11
89	本明石棺群	諫早市本明町(上諫早小学校)	1号石棺				諫早市指定史跡		弥生時代	8
90	本明石棺群	諫早市本明町(上諫早小学校)	2号石棺				諫早市指定史跡		弥生時代	8
91	本明石棺群	諫早市本明町(上諫早小学校)	3号石棺				諫早市指定史跡		弥生時代	8
92	本明石棺群	諫早市本明町(上諫早小学校)	4号石棺				諫早市指定史跡		弥生時代	8
93	本明石棺群	諫早市本明町(上諫早小学校)	5号石棺				諫早市指定史跡		弥生時代	8
94	本明石棺群	諫早市本明町(上諫早小学校)	6号石棺				諫早市指定史跡		弥生時代	8
95	井崎支石墓群	諫早市小長井町井崎名					JR長崎本線工事(昭9)の際、消滅	石枕	弥生時代	9
96	井崎支石墓群	諫早市小長井町井崎名					JR長崎本線工事(昭9)の際、消滅		弥生時代	9
97	井崎支石墓群	諫早市小長井町井崎名					JR長崎本線工事(昭9)の際、消滅		弥生時代	9
98	井崎支石墓群	諫早市小長井町井崎名					JR長崎本線工事(昭9)の際、消滅		弥生時代	9
99	井崎支石墓群	諫早市小長井町井崎名					JR長崎本線工事(昭9)の際、消滅		弥生時代	9
100	井崎支石墓群	諫早市小長井町井崎名					JR長崎本線工事(昭9)の際、消滅		弥生時代	9
101	井崎支石墓群	諫早市小長井町井崎名					JR長崎本線工事(昭9)の際、消滅		弥生時代	9
102	井崎支石墓群	諫早市小長井町井崎名					JR長崎本線工事(昭9)の際、消滅		弥生時代	9
103	井崎支石墓群	諫早市小長井町井崎名					JR長崎本線工事(昭9)の際、消滅		弥生時代	9
104	井崎支石墓群	諫早市小長井町井崎名					JR長崎本線工事(昭9)の際、消滅		弥生時代	9
105	貝津横島A遺跡	諫早市					詳細不明		弥生 古墳	14

諫早市検出石棺墓集成												
番号	遺跡名	所在地	遺構名	法量(棺内法(cm)) 長さ 幅	法量(掘方(cm)) 長さ 幅 高さ	底面玉石	特記事項	出土遺物	時代	文献		
106	上阿蘇遺跡	諫早市					詳細不明		弥生	14		
107	藤平石棺	諫早市					詳細不明		弥生 古墳	14		
108	藤山遺跡	諫早市					詳細不明		弥生 古墳	14		
109	西の前遺跡	諫早市					詳細不明		弥生 古墳	14		
110	高野遺跡	諫早市					詳細不明		弥生	14		
111	下藤平B遺跡	諫早市					詳細不明		弥生	14		
112	下藤平A遺跡	諫早市					詳細不明		弥生	14		
113	田代石棺	諫早市					詳細不明		弥生	14		

東彼杵検出石棺墓集成

番号	遺跡名	所在地	遺構名	法量(棺内法)(cm)	法量(掘方)(cm)	底面玉石	特記事項	出土遺物	時代	文献
				長さ 幅 高さ 深さ	長さ 幅 高さ 深さ					
1	白井川遺跡	東彼杵郡東彼杵町蔵本郷白井川	第1号石棺墓	135 60 18				ガラス小玉1	弥生時代	12
2	白井川遺跡	東彼杵郡東彼杵町蔵本郷白井川	第2号石棺墓	117 60 13		なし			弥生時代	12
3	白井川遺跡	東彼杵郡東彼杵町蔵本郷白井川	第3号石棺墓	82 43 12				なし	弥生時代	12
4	白井川遺跡	東彼杵郡東彼杵町蔵本郷白井川	第4号石棺墓	77 45 19				碧玉製管玉2	弥生時代	12
5	白井川遺跡	東彼杵郡東彼杵町蔵本郷白井川	第5号石棺墓	103 47 15					弥生時代	12
6	白井川遺跡	東彼杵郡東彼杵町蔵本郷白井川	第6号石棺墓	67 44 12					弥生時代	12
7	白井川遺跡	東彼杵郡東彼杵町蔵本郷白井川	第7号石棺墓	?					弥生時代	12
8	白井川遺跡	東彼杵郡東彼杵町蔵本郷白井川	第8号石蓋土坑墓	76 59 25					弥生時代	12
9	白井川遺跡	東彼杵郡東彼杵町蔵本郷白井川	第9号石棺墓	?	5				弥生時代	12
10	白井川遺跡	東彼杵郡東彼杵町蔵本郷白井川	第10号石棺墓	62 35 5					弥生時代	12
11	白井川遺跡	東彼杵郡東彼杵町蔵本郷白井川	第11号石棺墓	96 49 5					弥生時代	12
12	白井川遺跡	東彼杵郡東彼杵町蔵本郷白井川	第12号石棺墓	84 48 17				ガラス玉40	弥生時代	12
13	白井川遺跡	東彼杵郡東彼杵町蔵本郷白井川	第13号石蓋土坑墓	67 38 11					弥生時代	12
14	白井川遺跡	東彼杵郡東彼杵町蔵本郷白井川	第14号石棺墓	132 57 15				管玉1	弥生時代	12
15	白井川遺跡	東彼杵郡東彼杵町蔵本郷白井川	第15号石蓋土坑墓	68 44 15					弥生時代	12
16	白井川遺跡	東彼杵郡東彼杵町蔵本郷白井川	第16号石棺墓	57 34 20					弥生時代	12
17	白井川遺跡	東彼杵郡東彼杵町蔵本郷白井川	第17号石蓋土坑墓	28 25 14					弥生時代	12
18	白井川遺跡	東彼杵郡東彼杵町蔵本郷白井川	第18号石蓋土坑墓	76 44 19					弥生時代	12
19	白井川遺跡	東彼杵郡東彼杵町蔵本郷白井川	第19号石棺墓	84 33 13				管玉1	弥生時代	12
20	白井川遺跡	東彼杵郡東彼杵町蔵本郷白井川	第20号石棺墓	62 55 17					弥生時代	12
21	白井川遺跡	東彼杵郡東彼杵町蔵本郷白井川	第21号石棺墓	58 35 10					弥生時代	12
22	白井川遺跡	東彼杵郡東彼杵町蔵本郷白井川	第22号甕棺墓				詳細不明		弥生時代	12
23	五釜谷道上遺跡	東彼杵郡東彼杵町							弥生 古墳	14
24	五反田遺跡	東彼杵郡川棚町上組郷徳島	第1号石棺	150					弥生	20
25	五反田遺跡	東彼杵郡川棚町上組郷徳島	第2号石棺						弥生	20
26	五反田遺跡	東彼杵郡川棚町上組郷徳島	第3号石棺	180					弥生	20
27	五反田遺跡	東彼杵郡川棚町上組郷徳島	第4号石棺						弥生	20
28	五反田遺跡	東彼杵郡川棚町上組郷徳島	第5号石棺						弥生	20
29	五反田遺跡	東彼杵郡川棚町上組郷徳島	第6号石棺						弥生	20
30	麻生瀬遺跡	東彼杵郡川棚町五反田郷	第1号石棺	120 40 40				壺1(須玖I式)	弥生時代中期前半	13
31	麻生瀬遺跡	東彼杵郡川棚町五反田郷	第2号石棺						弥生時代中期前半	13
32	麻生瀬遺跡	東彼杵郡川棚町五反田郷	第3号石棺				原状埋め戻し		弥生時代中期前半	13
33	麻生瀬遺跡	東彼杵郡川棚町五反田郷	第4号石棺	115 40 35			原状埋め戻し		弥生時代中期前半	13
34	麻生瀬遺跡	東彼杵郡川棚町五反田郷	第5号石棺	85 30 20					弥生時代中期前半	13
35	麻生瀬遺跡	東彼杵郡川棚町五反田郷	第6号石棺	105 40 40					弥生時代中期前半	13
36	麻生瀬遺跡	東彼杵郡川棚町五反田郷	第7号石棺				原状埋め戻し		弥生時代中期前半	13
37	麻生瀬遺跡	東彼杵郡川棚町五反田郷	第8号石棺				原状埋め戻し		弥生時代中期前半	13
38	麻生瀬遺跡	東彼杵郡川棚町五反田郷	第9号石棺				原状埋め戻し		弥生時代中期前半	13
39	麻生瀬遺跡	東彼杵郡川棚町五反田郷	第10号石棺				原状埋め戻し		弥生時代中期前半	13
40	麻生瀬遺跡	東彼杵郡川棚町五反田郷	第12号石棺				原状埋め戻し		弥生時代中期前半	13
41	麻生瀬遺跡	東彼杵郡川棚町五反田郷	第13号石棺				原状埋め戻し		弥生時代中期前半	13
42	麻生瀬遺跡	東彼杵郡川棚町五反田郷	第14号石棺				原状埋め戻し		弥生時代中期前半	13
43	麻生瀬遺跡	東彼杵郡川棚町五反田郷	第15号石棺	不明	40 35			棺外に須玖I式の鉢1	弥生時代中期前半	13
44	麻生瀬遺跡	東彼杵郡川棚町五反田郷	第16号石棺				原状埋め戻し		弥生時代中期前半	13
45	麻生瀬遺跡	東彼杵郡川棚町五反田郷	第17号石棺	100 35 30					弥生時代中期前半	13
46	麻生瀬遺跡	東彼杵郡川棚町五反田郷	第18号石棺	120 35 30					弥生時代中期前半	13
47	麻生瀬遺跡	東彼杵郡川棚町五反田郷	第19号石棺				原状埋め戻し		弥生時代中期前半	13
48	麻生瀬遺跡	東彼杵郡川棚町五反田郷	第20号石棺				原状埋め戻し		弥生時代中期前半	13
49	麻生瀬遺跡	東彼杵郡川棚町五反田郷	第21号石棺				原状埋め戻し		弥生時代中期前半	13
50	麻生瀬遺跡	東彼杵郡川棚町五反田郷	第22号石棺				原状埋め戻し		弥生時代中期前半	13
51	麻生瀬遺跡	東彼杵郡川棚町五反田郷	第23号石棺	不明	40 40				弥生時代中期前半	13
52	麻生瀬遺跡	東彼杵郡川棚町五反田郷	第24号石棺				原状埋め戻し		弥生時代中期前半	13
53	麻生瀬遺跡	東彼杵郡川棚町五反田郷	第25号石棺	不明	35 35				弥生時代中期前半	13

佐世保市検出石棺墓集成

番号	遺跡名	所在地	遺構名	法量(棺内法(cm))			法量(掘方(cm))			底面玉石	特記事項	出土遺物	時代	文献
				長さ	幅	高さ	長さ	幅	高さ					
1	門前遺跡	佐世保市愛宕町・中里町	箱式石棺墓	100	40	70					土器片のみ	弥生後期~終末頃	15	
2	門前遺跡	佐世保市愛宕町・中里町	1号石棺墓	167	31	35					鉄剣	弥生後期~終末頃	15	
3	門前遺跡	佐世保市愛宕町・中里町	2号石棺墓	180	37	34					赤色顔料	弥生後期~終末頃	15	
4	門前遺跡	佐世保市愛宕町・中里町	3号石棺墓	179	43	28					赤色顔料	弥生後期~終末頃	15	
5	門前遺跡	佐世保市愛宕町・中里町	4号石棺墓	179	43	28					赤色顔料	弥生後期~終末頃	15	
6	門前遺跡	佐世保市愛宕町・中里町	5号箱式石棺墓	113	38	30						弥生後期~終末頃	15	
7	門前遺跡	佐世保市愛宕町・中里町	6号箱式石棺墓	161	46	39					勾玉	弥生後期~終末頃	15	
8	門前遺跡	佐世保市愛宕町・中里町	7号箱式石棺墓	169	33	13					ガラス玉	弥生後期~終末頃	15	
9	中村遺跡	佐世保市萩坂町									詳細不明	弥生	14	

西彼西海検出石棺墓集成

番号	遺跡名	所在地	遺構名	法量(棺内法(cm))			法量(掘方(cm))			底面玉石	特記事項	出土遺物	時代	文献
				長さ	幅	高さ	長さ	幅	高さ					
1	天久保遺跡	西海市西海町天久保郷塔尾	1号支石墓								支石墓	弥生中期	19	
2	天久保遺跡	西海市西海町天久保郷塔尾	2号支石墓								支石墓	弥生	19	
3	天久保遺跡	西海市西海町天久保郷塔尾	3号支石墓								支石墓	弥生	19	
4	天久保遺跡	西海市西海町天久保郷塔尾	1号石棺								石棺墓	弥生	19	
5	天久保遺跡	西海市西海町天久保郷塔尾	2号石棺								石棺墓	弥生	19	
6	天久保遺跡	西海市西海町天久保郷塔尾	3号石棺	100	40	30					石棺墓	弥生	19	
7	天久保遺跡	西海市西海町天久保郷塔尾	4号石棺	90	40	35					石棺墓	弥生	19	
8	天久保遺跡	西海市西海町天久保郷塔尾	5号石棺								石棺墓	弥生	19	
9	天久保遺跡	西海市西海町天久保郷塔尾	6号石棺	60	30						土器1 土器小破片1	弥生中期	19	
10	白浜石棺群	西海市									詳細不明	弥生	14	
11	上丘鯉沼石棺	西海市									詳細不明	弥生	14	
12	樽瀬中屋敷遺跡	西海市									詳細不明	弥生	14	
13	前島古墳群第7号墳	西彼杵郡時津町子々川郷	第7号墳	160	90						詳細不明	弥生	18	
14	前島古墳群	西彼杵郡時津町子々川郷	第1号箱式石棺	40	20	20						弥生	18	

長崎市検出石棺墓集成

番号	遺跡名	所在地	遺構名	法量(棺内法(cm))			法量(掘方(cm))			底面玉石	特記事項	出土遺物	時代	文献
				長さ	幅	高さ	長さ	幅	高さ					
1	宮田遺跡A地点	長崎市黒崎町上黒崎	A地点											
2	宮田遺跡A地点	長崎市黒崎町上黒崎	A地点											
3	宮田遺跡A地点	長崎市黒崎町上黒崎	A地点											
4	宮田遺跡B地点	長崎市黒崎町上黒崎	B地点											
5	宮田遺跡B地点	長崎市黒崎町上黒崎	B地点											
6	宮田遺跡B地点	長崎市黒崎町上黒崎	B地点											
7	宮田遺跡B地点	長崎市黒崎町上黒崎	B地点											
8	宮田遺跡B地点	長崎市黒崎町上黒崎	B地点											
9	宮田遺跡B地点	長崎市黒崎町上黒崎	B地点											
10	宮田遺跡C地点	長崎市黒崎町上黒崎	C地点											
11	宮田遺跡C地点	長崎市黒崎町上黒崎	C地点											
12	宮田遺跡C地点	長崎市黒崎町上黒崎	C地点											
13	宮田遺跡C地点	長崎市黒崎町上黒崎	C地点											
14	宮田遺跡C地点	長崎市黒崎町上黒崎	C地点											
15	宮田遺跡C地点	長崎市黒崎町上黒崎	C地点											
16	出津遺跡	長崎市黒崎町西出津郷	1号石棺	90	60	60					人骨		16	
17	出津遺跡	長崎市黒崎町西出津郷	石蓋土壇	130	30	10					蓋石は台形に近く、やや東側に傾斜を持つ	弥生時代中期の土器、黒曜石の破片など	弥生中期	
18	深堀遺跡	長崎市深堀5丁目		108	56	56							弥生中期	
19	東上遺跡	長崎市東上町									詳細不明	弥生	14	
20	崎山遺跡	長崎市									詳細不明	弥生	14	
21	千々遺跡	長崎市千々町									詳細不明	弥生	14	
22	高浜遺跡	長崎市									詳細不明	弥生	14	

## 旧彼杵郡内の石棺墓集成一覧表 参考文献

文献1	大村市文化財調査報告第24集『黒丸遺跡ほか発掘調査概報 Vol2 1997～1999』大村市教育委員会 2000年3月31日
文献2	大村市文化財調査報告第12集『富の原 大村市富の原1・2丁目に所在する遺跡群の範囲確認調査』大村市教育委員会 1987年3月31日
文献3	大村市文化財調査報告第25集『富の原遺跡 ～市道富の原3号線道路改良工事に伴う発掘調査報告書』大村市教育委員会 2008年2月1日
文献4	大村市文化財調査報告第28集『黒丸遺跡ほか発掘調査概報 Vol5』大村市教育委員会 2005年3月31日
文献5	大村市文化財調査報告第19集『富の原遺跡・小佐古石棺墓群B地点Ⅱ発掘調査報告書』大村市教育委員会 1995
文献6	新幹線文化財調査事務所調査報告書第6集『竹松遺跡Ⅲ』長崎県教育委員会 2018
文献7	新幹線文化財調査事務所調査報告書第5集『竹松遺跡Ⅱ』長崎県教育委員会 2017
文献8	多良見町文化財調査報告書第2集『化屋大島遺跡－西彼杵群多良見町所在弥生時代石棺群の発掘調査記録－』多良見町教育委員会 1974
文献9	『諫早市文化財調査年報Ⅰ(H9～H17)』諫早市教育委員会
文献10	諫早市文化財調査報告書第19集『風観岳支石墓群発掘調査報告書』諫早市教育委員会 2006・3
文献11	高来町文化財調査報告書第1集『中江遺跡・上田井原遺跡』高来町教育委員会 1993
文献12	東彼杵町文化財調査報告書第4集『白井川遺跡(Ⅱ)』東彼杵町教育委員会 1990
文献13	川棚町文化財調査報告書第1集『麻生瀬遺跡』川棚町教育委員会 2006
文献14	長崎県遺跡情報システム
文献15	長崎県文化財調査報告書第190集『門前遺跡』長崎県教育委員会 2006
文献16	外海町文化財調査報告書第1集『出津遺跡』外海町教育委員会 1982
文献17	『深堀遺跡』人類学考古学研究報告第1号 長崎大学医学部解剖学第二教室 1967
文献18	時津町埋蔵文化財調査報告書第1集『前島古墳群』時津町教育委員会 1991
文献19	長崎県文化財調査報告書第114集『県内重要遺跡範囲確認調査報告書Ⅱ』長崎県教育委員会 1994
文献20	長崎県文化財調査報告書第55集『長崎県埋蔵文化財調査集報Ⅳ』長崎県教育委員会 1981

### 参考文献

- 松井和典、水野篤行『5萬分の1地質図幅説明書 大村(鹿児島－第17号)』工業技術院地質研究所 昭和41年
- 多良見町教育委員会1974『化屋大島遺跡－西彼杵群多良見町所在弥生時代石棺群の発掘調査記録－』多良見町文化財調査報告書第2集
- 高橋徹1979「破棄された鏡片－豊後における弥生時代の終焉－」『古文化談叢』第6集 九州古文化研究会
- 長崎県教育委員会1981「長崎県埋蔵文化財調査報告書」『Ⅱ五反田遺跡』長崎県文化財調査報告書第55集
- 高倉洋彰1981『弥生時代社会の研究』寧楽社
- 大村市教育委員会1987『富の原 大村市富の原1・2丁目に所在する遺跡群の範囲確認調査』大村市文化財調査報告第12集
- 藤尾慎一郎1988『九州の甕棺－弥生時代甕棺墓の分布とその変遷－ 国立歴史民俗博物館
- 東彼杵町教育委員会1990『白井川遺跡(Ⅱ)』東彼杵町文化財調査報告書第4集
- 高来町教育委員会1993『中江遺跡・上田井原遺跡』高来町文化財調査報告書第1集
- 岡村秀典1993「後漢鏡の編年」国立歴史民俗博物館研究報告第55集
- 藤丸詔八郎1993「破鏡の出現に関する一考察－北部九州を中心として－」『古文化談叢』第30集 九州古文研究会 P87～116
- 川越哲志1993『弥生時代の鉄器文化』雄山閣出版株式会社
- 国立民俗博物館1994『日本出土鏡データ集成』2 国立民俗博物館研究報告第56集
- 大村市教育委員会1995『富の原遺跡・小佐古石棺墓群B地点Ⅱ発掘調査報告書』大村市文化財調査報告第19集
- 高田健一1997『古墳時代銅鏃の生産と流通』待兼山論叢 史学篇
- 橋口達也1999『弥生文化論－稲作の開始と首長権の展開－』雄山閣出版株式会社
- 大村市教育委員会2000『黒丸遺跡ほか発掘調査概報 Vol2 1997～1999』大村市文化財調査報告第24集
- 車崎正彦編2002「漢鏡」『考古資料大観』5 弥生・古墳時代 鏡 小学館
- 柳田康雄2002『九州弥生時代の研究』学生社
- 辻田淳一郎2005「破鏡の伝世と副葬－穿孔事例の観察から－」『史淵』第142輯九州大学大学院人文科学研究院 P1～39
- 大村市教育委員会2005『黒丸遺跡ほか発掘調査概報 Vol5』大村市文化財調査報告第28集
- 寺田正剛2005「長崎県地域における箱式石棺墓の様相について」『西海考古』第6号正林護先生喜寿記念号
- 諫早市教育委員会2006『風観岳支石墓群発掘調査報告書』諫早市文化財調査報告書第19集
- 大賀克彦2006「碧玉製玉類の生産と流通」『季刊考古学』第94号特集弥生・古墳時代の玉文化

川棚町教育委員会2006『麻生瀬遺跡』川棚町文化財調査報告書第1集  
松木武彦2007『日本列島の戦争と初期国家形成』東京大学出版会  
大村市教育委員会2008『富の原遺跡 ～市道富の原3号線道路改良工事に伴う発掘調査報告書』大村市文化財調査報告第25集  
田崎博之2008『弥生集落の集団関係と階層性』考古学研究第五卷第三号(通卷二一九号)  
長崎県教育委員会2010『門前遺跡Ⅲ 武辺城跡Ⅱ』長崎県佐世保文化財調査事務所調査報告書第5集  
荒木伸也2012「島原半島南部の集落—高原遺跡—」『有明海をめぐる弥生時代集落と交流』長崎県考古学会・肥後考古学会合同大会資料  
雲仙市教育委員会2013『佃遺跡Ⅱ』雲仙市文化財調査報告書第12集  
下垣仁志2016『日本列島出土鏡集成』株式会社同成社  
長崎県教育委員会2017『竹松遺跡』長崎県文化財調査報告書第214集都市計画道路池田沖田線街路改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ  
長崎県教育委員会2017『竹松遺跡Ⅱ』新幹線文化財調査事務所調査報告書第5集  
阿部友寿2017「獣骨と人骨の焼骨共伴例」『考古学研究』第64巻第1号(通巻253号)  
設楽博巳1993a「縄文時代の再葬」『国立歴史民俗博物館研究報告』第49集、7-46頁  
春成秀爾1993「弥生時代の再葬制」『国立歴史民俗博物館研究報告』第49集、47-91頁  
馬場保之1994「縄文時代晩期墓制に関する一考察—長野県南部を中心として—」『中部高地の考古学』Ⅳ、131-163頁  
大場磐雄ほか1963「長野県東筑摩郡四賀村井刈遺跡調査概報」『信濃』第15巻第12号、1-20頁  
渡辺俊一1998「縄文時代の焼人骨・火葬墓について—北海道・東北地方を例に—」『北方の考古学野村崇先生還暦記念論集』103-114頁  
花輪宏2003「縄文時代の「火葬」について」『考古学雑誌』第87巻第4号、1-31頁  
石材の鑑定は長崎大学教育学部墨田祥光准教授から指導  
長崎県教育委員会2018『竹松遺跡Ⅲ』新幹線文化財調査事務所調査報告書第6集  
長崎県教育委員会2018『立小路遺跡』長崎県文化財調査報告書第216集都市計画道路池田沖田線街路改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ

## ⑪長崎県本土部における弥生後期土器研究の現状と課題

はじめに

竹松遺跡の TAK2013の各調査区の弥生時代の遺構、遺物の報告にあたり、長崎県本土部の弥生後期土器研究の現状を概観し、現状認識を踏まえたうえで、報告したい。

### 1 現状

#### (1)平成17年(2005年)以降の状況

本県における弥生後期の土器については、平成17年(2005年)の段階で、筆者が概観している(古門2005)。

当時、住居跡などからの一括出土遺物に恵まれない本県の状況のなか、大村市冷泉(れいせん)遺跡の住居跡から良好な一括資料が発見されたことを契機に、長崎県本土部の弥生後期土器編年案を試行したものであった。

先行する研究としては、松藤和人・宮崎貴夫の仕事があった(松藤1975、宮崎1985a1985b)。しかし、松藤は様式の設定まで至らず、宮崎の仕事は南島原市今福遺跡や、諫早市西ノ角遺跡の調査報告書の中での分析・報告であったため、取り扱う土器形式が多岐にわたり、筆者個人としては、他の遺跡や現場では使いにくいと感じていた。

そのため、比較的資料数がある脚台付甕形土器(以降、台付甕と呼ぶ)と高杯形土器の型式組列を示し、遺構一括遺物を使って、現場で使えるような編年案を作ろうと思い立ったのが先の筆者の論攷であった。

その後、雲仙市や南島原市などで、弥生後期の遺跡が調査され、資料は増加したものの、本県独自の弥生後期土器の編年の確立には至らず、宮崎以外の多くの県内担当者は、他県の編年を援用しつつ、遺構や遺物の時期を認定しているのが現状である。

一方で、近年、長崎県考古学会が、肥後考古学会や九州考古学会との合同学会を開催し、本県の弥生後期文化の研究を盛んに行っている。同学会は「交流」というテーマのもと、本県本土部の弥生後期土器に特徴的な「台付甕」や「肥前型器台」に着目し、北部九州とは異なる土器文化圏の存在と広がり进行を明らかにし、その社会的背景や文化的動向を探求している(長崎県考古学会2012、肥後考古学会2014、長崎県考古学会2015など)。

精力的な近年の長崎県考古学会の活動による研究成果は、関係の資料集に集約され、蓄積されており、今後も新たな研究の展開と進展が期待される。

#### (2)近年の本県本土部の弥生後期土器研究

このような長崎県考古学会の研究活動を牽引している一人が長崎県考古学会副会長の宮崎貴夫氏であるが、最近の宮崎は、本県の弥生時代において、独自の土器様式が成立するのは後期後半ではないかと推測している<sup>(註1)</sup>。

また、全ての土器を地元で作ったわけではなく、地域によって土器製作の有り様が異なっていたと考えている<sup>(註2)</sup>。

宮崎の推測が正しいとすれば、本県では小林行雄の様式論に基づいた弥生土器の編年の構築は不可能ということになる。

この点については、今は問題提起の段階であり、今後の検討課題である。



## 2 本県本土部の弥生後期土器について—台付甕を中心に—

### (1) 近年の台付甕の研究

本県本土部の弥生時代の甕形土器が、弥生中期後半に、それまでの北部九州の様相から変化し、平底の甕と台付甕が分布地域を異にして展開することを最初に指摘したのは宮崎であった(宮崎1995)。

さらに宮崎は、本県本土部の台付甕は、弥生中期後葉に肥後地域の黒髪式土器の影響を受けて、まず島原半島、諫早、大村地域で成立するとした(宮崎2015)。

一方、松浦・平戸・佐世保などの県北地域は、後期前半から佐世保市の門前遺跡で台付甕が出土し始め、後期後半には、同遺跡が在地系台付甕の分布地域に含まれたことを指摘し、同遺跡を在地系台付甕の分布の北限と評価した(宮崎2015)。

また宮崎は、本県本土部の弥生後期後半の台付甕に「島原半島型」<sup>(註3)</sup>と命名した石橋新次氏の見解を追認している(宮崎2015)。

宮崎は、本県本土部の台付甕の終焉についても言及しており、それによると弥生終末(庄内式併行)では依然として在地の台付甕が主体であるが、古墳時代前期初頭(布留0式併行期)には、台付甕も伴うものの、布留式系甕が主体となるとした。しかしながら、門前遺跡においては、この段階で既に台付甕が消滅していると指摘する。

また次の古墳時代前期初頭から前葉(布留I式併行期)の時期には、台付甕が痕跡的に残るものの、前期中頃(布留II式併行)には完全に消滅するとした(宮崎2015)。

### (2) 台付甕の型式分類

かつて筆者は台付甕を胴部に膨らみを持つAタイプと膨らみを持たないBタイプに分け、それぞれの口縁部の傾きの変化を中心に4期に分類した(古門2005)。

近年、宮崎も台付甕の型式組列を発表している。分類の根拠は記されていないものの、筆者同様、4期に分類している。(宮崎2015)

今回の竹松遺跡の弥生後期土器の報告にあたり、筆者の2005年段階の論攷の再検討を行い、台付甕の型式組列を再度、提示したい。前回は台付甕の口縁部の傾きを中心に分類したが、今回は脚部の型式変化も加味しながら分類する。

分類の方法は、図上復元も含めて完形の台付甕を対象とし、実測図上で検討を行った。図上復元も含めた完形の台付甕の点数は21点で、資料数としては極めて少ない点が今後の課題である。

### (3) 台付甕の口縁部の変化

2005年の論攷では、口縁部は傾きが強いものが古く、弱いものが新しいとして分類した。この型式変化の特徴は衆目の一致するところであろう。前回4分類であったが、今回は5分類とした。

口縁部の傾きは、実測図に示された口縁部内面の屈曲部から実測基準線を結ぶ稜線と、口縁部の傾斜が成す角度(内角)を採用した。傾斜を示す線は、口縁部断面の真ん中を通した(第1図)。

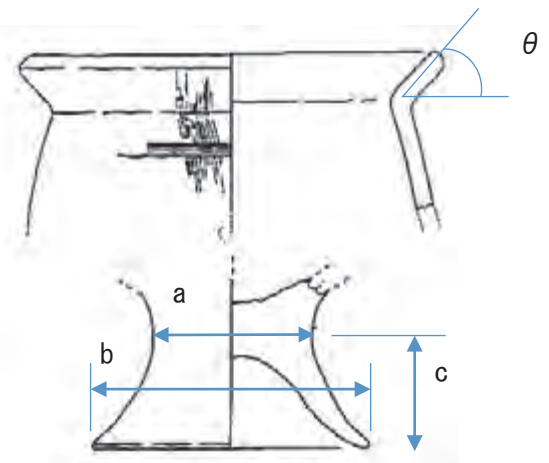
口縁部の傾斜角度の区分を具体的に記すと

第1類：口縁部の傾きが強いもの

(傾きは、およそ30度以下)

第2類：口縁部の傾きがやや強いもの

- (傾きは、およそ31度～44度)
- 第3類：口縁部の傾きがやや弱いもの  
(傾きはおよそ45度～52度)
- 第4類：口縁部の傾きが弱いもの  
(傾きは、およそ53度～59度)
- 第5類：口縁部の傾きが極めて弱いもの  
(傾きは、およそ60度以上)
- である。

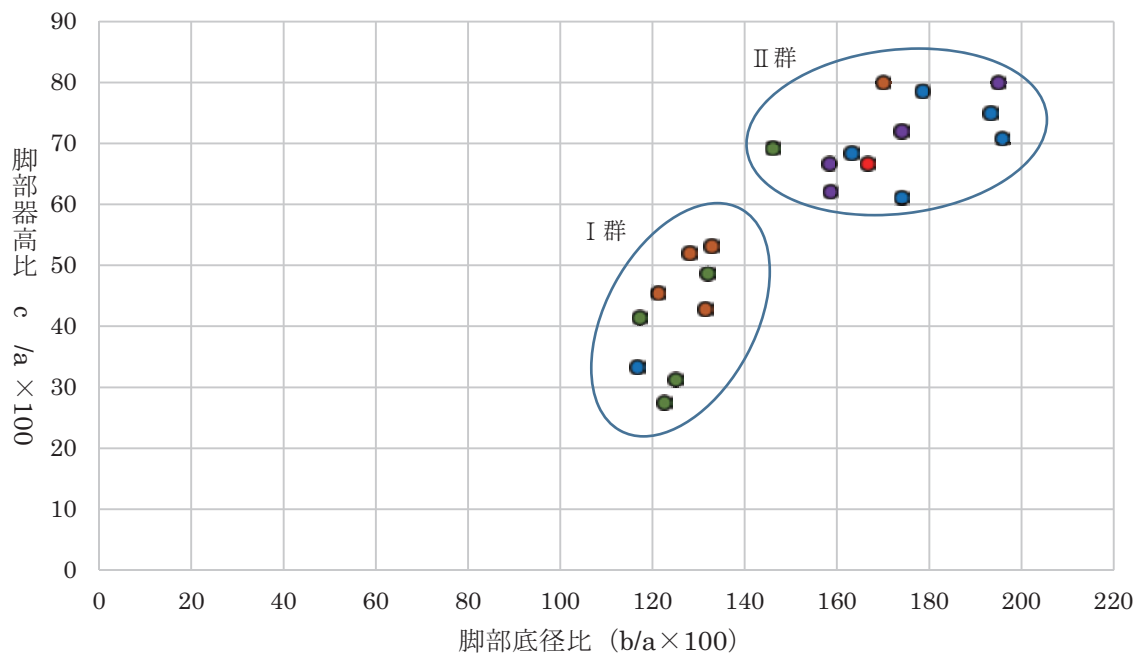


第1図 口縁部の傾きと脚部の計測

型式変化は1類→2類→3類→4類→5類と変化すると想定される。これらの口縁部の分類に、前述した台付甕の形状から分類したA類(胴部に膨らみがあるもの)、B類(胴部に膨らみがないもの)を冠し、A1類、B1類、A2類、B2類などと呼称する。

なお、前稿では「胴部の膨らみ」の定義が恣意的で曖昧であったことを認め、本稿ではA類は「胴部最大径が口縁部径と同じか、大きいもの」とし、B類は「胴部最大径が口縁部径より小さいもの」と定義する。

#### (4) 台付甕の脚部の変化



- 1類 ● 2類 ● 3類 ● 4類 ● 5類 ●


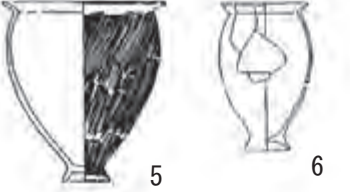
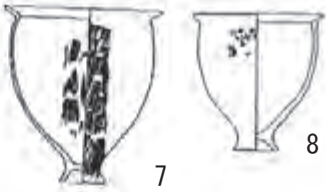


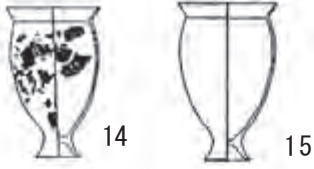

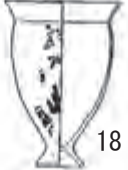
第2図 台付甕脚部の器高比と底径比

前回の論攷では、台付甕の脚部の型式変化を「脚部の高さが低いものが古く、高いものが新しい。さらに脚部の底径が狭いものが古く、広いものが新しい」としたが、具体的な根拠を示していなかった。今回は、図上復元を含めた完形の21点の台付甕の底径と脚高の比率および底径と脚底径の比率の相関図を作成し、検討した<sup>(註4)</sup>(第1図、第2図)。

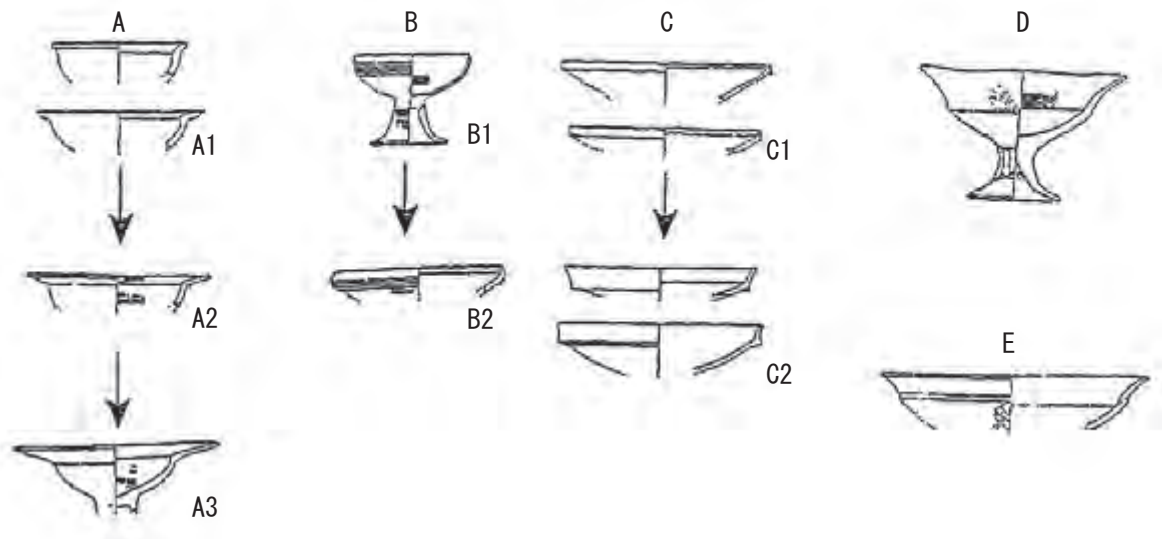
それをみると、明らかに脚底径比・脚高比のいずれも小さいもの(第Ⅰ群)と、脚底径比・脚高比のいずれも大きいもの(第Ⅱ群)の、2つのグループに分かれることがわかる。

さらに、この相関図に個々の土器の口縁部の傾きを反映させてみると、若干の例外はあるものの、口縁部分類で示したように型的に古い第1、2類は底部分類の第Ⅰ群に属し、新しい口縁部分類の第3、4、5類は底部分類の第Ⅱ群に属することがわかる。このことは、台付甕の脚部が第Ⅰ群から第Ⅱ群へ型式変化することを意味すると言えよう<sup>(註5)</sup>。

すなわち台付甕の脚部の第Ⅰ群から第Ⅱ群の変化は、「脚部の高さが低いものが古く、高いものが新しい。さらに脚部の底径が狭いものが古く、広いものが新しい」の根拠となるのである。

	A類	B類
1		
2		
3		
4		
5		 <ul style="list-style-type: none"> <li>1 富の原 A</li> <li>2 伊古 F 区 K 2</li> <li>3 深堀 1 号甕棺</li> <li>4 西ノ角土坑</li> <li>5 伊古 F 区 K 1</li> <li>6 一野住居跡</li> <li>7 深堀 1 号甕棺</li> <li>8 西ノ角土坑</li> <li>9 十園 26 区 SD02</li> <li>10 十園 26 区 SD01</li> <li>11 今福 C 区 3 号溝</li> <li>12 十園 26 区 SD02</li> <li>13 十園 26 区 SD02</li> <li>14 龍王 14 区 SB4</li> <li>15 今福 C 区 3 号溝</li> <li>16 今福 C 区住居跡</li> <li>17 十園 26 区 SD02</li> <li>18 冷泉 6 号住居跡</li> </ul>

第3図 台付甕の型式組列(S=1/16)



第4図 高杯形土器の分類と型式組列(古門2005)(縮尺不同)

### (5) 台付甕の型式組列

本県本土部の台付甕のうち、図上復元も含めて完形資料を集め、それらの形状および口縁部の傾斜角と脚部の器高比、底径比の比較検討から、台付甕の型式組列を示したものが第3図である。

### (6) 長崎県本土部の弥生後期土器の様相

次に、長崎県本土部の住居跡から、前述の台付甕の各型式のうち、どの型式が出土したのかを検討し、台付甕の型式組列に準じて住居跡の時期を古い順に並べてみた。対象とする住居跡を検出した遺跡は9遺跡であり、資料数は極めて少ないと言える。

さらに、台付甕に、他の形式の土器が共伴し、どのような組み合わせを見せるか、また、どのような様相を示すかを検討した。

その際に、時期を画す土器となるのが、高杯A類・同D類・同E類・肥前型器台・模倣甕<sup>(註6)</sup>である(第4図)。これらの土器が、どの型式の台付甕と共伴して出土しているか整理したのが第1表である<sup>(註7)</sup>。

第1表

○内の数字は出土点数である

長崎県南部 弥生後期土器編年表																										
様相	遺跡・遺構名	脚台付甕形土器 A類					脚台付甕形土器 B類					台付甕脚部		高杯形土器 A類			高杯形土器 B類		高杯形土器 C類		高杯形土器 D類	高杯形土器 E類	肥前型器台	模倣甕	時期	
		A1	A2	A3	A4	A5	B1	B2	B3	B4	B5	I群	II群	A1	A2	A3	B1	B2	C1	C2						
II	今福遺跡 B6区住居跡							②					②		①	①										前半
	一野遺跡第2号住居跡		②					②					②													
III	佃遺跡87区 SB-1							①	②				①		①											中頃
	西ノ角遺跡住居跡			②								①	①											※		
IV	今福遺跡 C9、10区住居跡											①	①						②					①	後半	
	龍王遺跡14区1号住居跡								③	③		③			①						③	②	①			
V	白井川遺跡第3号住居跡					②		②				②											②		終末	
	龍王遺跡13・14区6号住居跡					③		①	①		①	○									①	①	②	①	古墳初頭	
	冷泉遺跡第6号住居跡							①		④		①									③		①	②		

第1表を見ると、本県本土部の弥生後期の土器の様相は4つに分かれそうである。それぞれの土器様相を整理する<sup>(註8)</sup>。

第II相：台付甕A2類、B2類、脚I群が主体。高杯はA類。

第Ⅲ相：台付甕A3類、B3類、脚Ⅱ群が出現。高杯はA類。

第Ⅳ相：台付甕A4類、B4類が出現。高杯D類、同E類、肥前型器台が加わり、供献土器の様相に変化が生じる。脚Ⅱ群主体。

第Ⅴ相：台付甕A5類、B5類が出現。

古墳初頭：「模倣甕」が出現。

### 3 まとめ

長崎県本土部とくに大村市・諫早市・島原半島を中心に、住居跡から出土した弥生後期の台付甕の型式変化を軸に、他の形式の土器がどのように組み合わせるかという観点から土器の様相をみた。

その結果、4つの土器の様相が見て取れた。この4つの土器様相に時代区分をあてはめ、第Ⅱ相は後期前半、第Ⅲ相は後期中頃、第Ⅳ相を後期後半とし、第Ⅴ相を後期終末としておく。さらに「模倣甕」の出現をもって古墳時代とする。

#### 【註】

註1 このような最近の宮崎の考えは、石橋新次氏からの問題提起を受けてのもの聞き及んでいる。

註2 本稿を宮崎が査読した際の所見では「長崎県本土部地域では弥生時代中期後半に肥後系の黒髪式土器の影響を受け台付甕が作られ始めるが、この段階には台付甕と鉢が中心で、他の器種については他地域からの土器を補完して使用しているように思える。しかし、五島列島などの島嶼部や五島灘沿岸部の遺跡では、弥生時代を通して弥生土器は製作せず、交易によって入手して使用していると想定している。」と述べている。

註3 台付甕の「く」字状の口縁部が内湾し、器壁が薄く、やや華奢な作りの型式である。当該地域の弥生後期後半の土器の様相の変化を最初に指摘したのは石橋新次氏であり、その後、宮崎が追認した(宮崎2015)。

註4 宮崎は昭和59(1984)年の今福遺跡の報告書において台付甕の脚高と底径および脚底径の相関を検討している。その際、脚高は読値を使い、底径と脚底径では比例値を用いている(宮崎編1984)。

註5 第2図における「若干の例外」とは、型式として古い台付甕B1類に新しい型式の脚Ⅱ群をもつ土器(門前遺跡弥生後期河川、今福遺跡B地区3号溝、)があること、逆に型式的に新しい台付甕B3類に古い型式である脚Ⅰ群を有する土器(西ノ角A15ピット4)があることである。



門前弥生後期河川      今福B区3号溝      西ノ角A15ピット4(いずれも縮尺不同)

後者は第1表の編年表でもわかるとおり、脚Ⅰ群は弥生後期を通じて見られる型式であり、3類以降の新しい型式の台付甕にあっても矛盾はない。

問題は前者の例からして、脚Ⅱ群が弥生後期の早い時期から出現していたのではないかと考えられることである。脚Ⅰ群から脚Ⅱ群への型式変化は動かないと思われるが、脚Ⅱ群の出現時期がどこまで遡れるかは、今後の検討課題としたい。

註6 古墳時代に入ると先に弥生後期第Ⅴ相とした土器群に布留式の甕を模倣したものが加わる。宮崎はこの甕を「模倣甕」

と呼んでおり、内面調整がヘラ削りではなく、従来のハケ調整であることを特徴とする。

註7 第1表には以下のような課題がある。

まず、第Ⅲ相とした西ノ角遺跡住居跡から出土した高杯は報告書を見る限り、E類とみられる。この高杯が確実に住居跡に伴うものであれば、西ノ角遺跡の住居跡出土土器は第Ⅳ相に降る可能性がある。ここでは、台付甕の型式を優先し、第Ⅲ相とした。

また、第Ⅳ相とした今福遺跡C9・10区住居跡および龍王遺跡14区1号住居跡からは台付甕A4類は出土していない。あくまで台付甕の型式変化からみた仮説として台付甕A4類を伴う第Ⅳ相に位置づけた。同様に第Ⅴ相の白井川遺跡住居跡からは台付甕A5類は出土しているものの、台付甕B5類は出土していない。

註8 弥生後期第Ⅰ相は台付甕A1類とB1類、脚Ⅰ群、高杯A類を主体とする土器群で、中期末から後期初頭の時期を想定している。この時期の住居跡から出土した資料には諫早市飯盛町の開(ひらき)遺跡がある(長崎県教委編2007)。

#### 【引用・参考文献】

安楽 努編1989『白井川遺跡Ⅱ』東彼杵町文化財調査報告書第3集 東彼杵町教育委員会

浦田和彦編1992『一野遺跡』有明町文化財調査報告書第3集 有明町教育委員会

辻田直人編2008『佃遺跡』雲仙市文化財調査報告書第4集 雲仙市教育委員会

長崎県教育委員会編1984『今福遺跡Ⅰ』長崎県文化財調査報告書第68集 長崎県教育委員会

長崎県教育委員会編2007『開遺跡Ⅱ』主要地方道諫早飯盛線道路改良工事に係る埋蔵文化財発掘調査報告書 長崎県文化財調査報告書第193集

長崎県考古学会編2012『有明海をめぐる弥生時代集落と交流』長崎県考古学会・肥後考古学会合同大会資料集

長崎県考古学会編2015『有明海とその周辺をめぐる弥生時代の交流』長崎県考古学会・九州考古学会合同研究大会資料集

肥後考古学会編2014『肥前型器台について』肥後考古学会・長崎県考古学会合同大会資料集

古門雅高2005「有明海西岸地域における弥生時代後期の土器」『西海考古』第6号 正林護先生喜寿記念号 西海考古同人会

松藤和人編1975『口之津烽火遺跡調査報告』百人委員会埋蔵文化財報告第5集 百人委員会

宮崎貴夫編1984『今福遺跡Ⅰ』長崎県文化財調査報告書第68集 長崎県教育委員会

宮崎貴夫編1985a『西ノ角遺跡』長崎県文化財調査報告書第73集 長崎県教育委員会

宮崎貴夫編1985b『今福遺跡Ⅱ』長崎県文化財調査報告書第77集 長崎県教育委員会

宮崎貴夫1995「弥生式土器と弥生時代」『長崎県の考古学』ろうきんブックレット2 長崎県労働金庫

宮崎貴夫2014「肥前型器台および長崎県の状況について」『肥前型器台について』肥後考古学会

宮崎貴夫2015「長崎県本土地域の状況について」『有明海とその周辺をめぐる弥生時代の交流』長崎県考古学会・九州考古学会合同研究大会資料集 長崎県考古学会・長崎県考古学会合同大会資料集 肥後考古学会

#### 【挿図出典】

挿図は古門2005、宮崎2014から転載した。

第1図 竹松遺跡：長崎県教育委員会編2017『竹松遺跡Ⅱ』新幹線文化財調査事務所調査報告書第5集 長崎県教育委員会

第3図 富の原遺跡：大村市教育委員会編1987『富の原』

伊古遺跡：雲仙市教育委員会編2010『伊古遺跡Ⅲ』雲仙市文化財調査報告書第8集 雲仙市教育委員会

西ノ角遺跡：長崎県教育委員会編1985『西ノ角遺跡』長崎県文化財調査報告書第73集 長崎県教育委員会 27, 28pp

深堀遺跡：長崎市教育委員会編2005『深堀遺跡』

一野遺跡：有明町教育委員会編1992『一野遺跡』

十園遺跡：国見町教育委員会編2005『十園遺跡Ⅱ』国見町文化財調査報告書第5集 国見町教育委員会 39pp

今福遺跡：長崎県教育委員会編1985『今福遺跡Ⅱ』長崎県文化財調査報告書第77集 60pp

冷泉遺跡：大村市教育委員会編2003『黒丸遺跡ほか発掘調査概報3』大村市文化財調査報告書第25集 大村市教育委員会 16～19pp

第5図 一野遺跡：有明町教育委員会編1992『一野遺跡』

今福遺跡：第3図に同じ。36pp

西ノ角遺跡：第3図に同じ

佃遺跡：雲仙市教育委員会編『佃遺跡Ⅱ』雲仙市文化財調査報告書第12集 雲仙市教育委員会

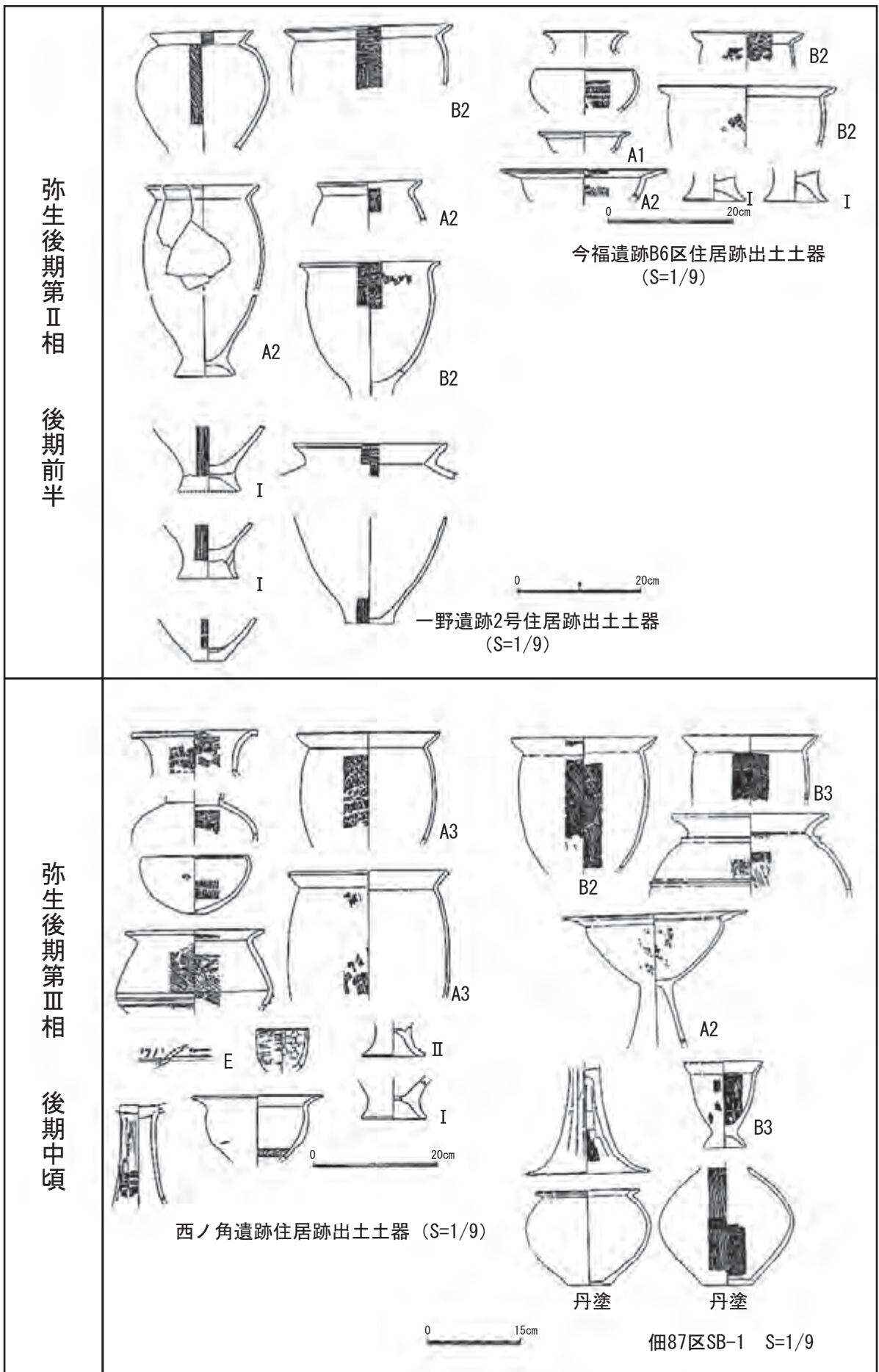
第6図 今福遺跡：長崎県教育委員会編1986『今福遺跡Ⅲ』長崎県文化財調査報告書第84集 94pp

龍王遺跡：雲仙市教育委員会編2008『龍王遺跡Ⅲ』雲仙市文化財調査報告書第3集 雲仙市教育委員会 50～52pp

白井川遺跡：長崎県教育委員会編

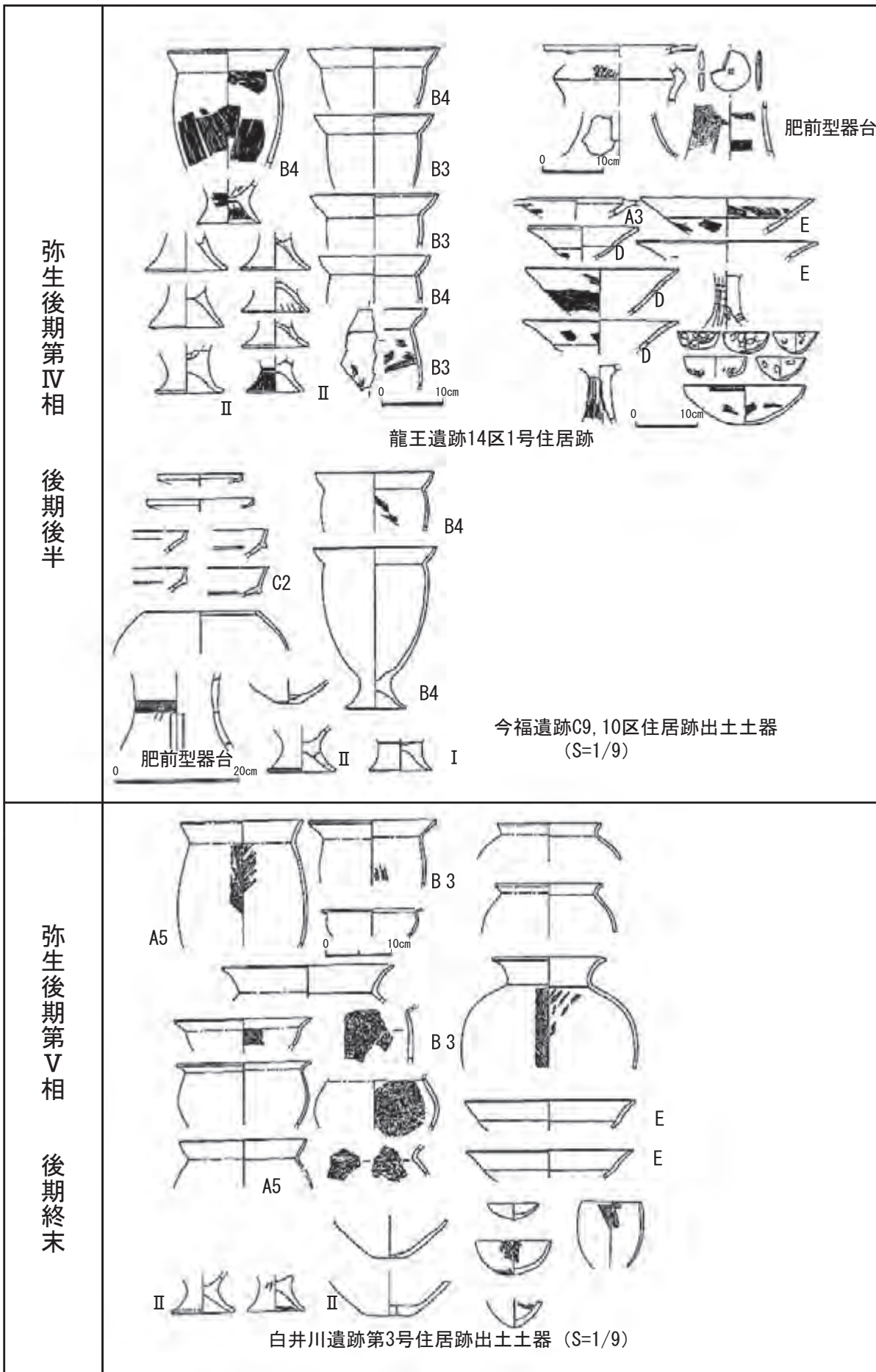
第7図 冷泉遺跡：第3図に同じ

龍王遺跡：第6図に同じ

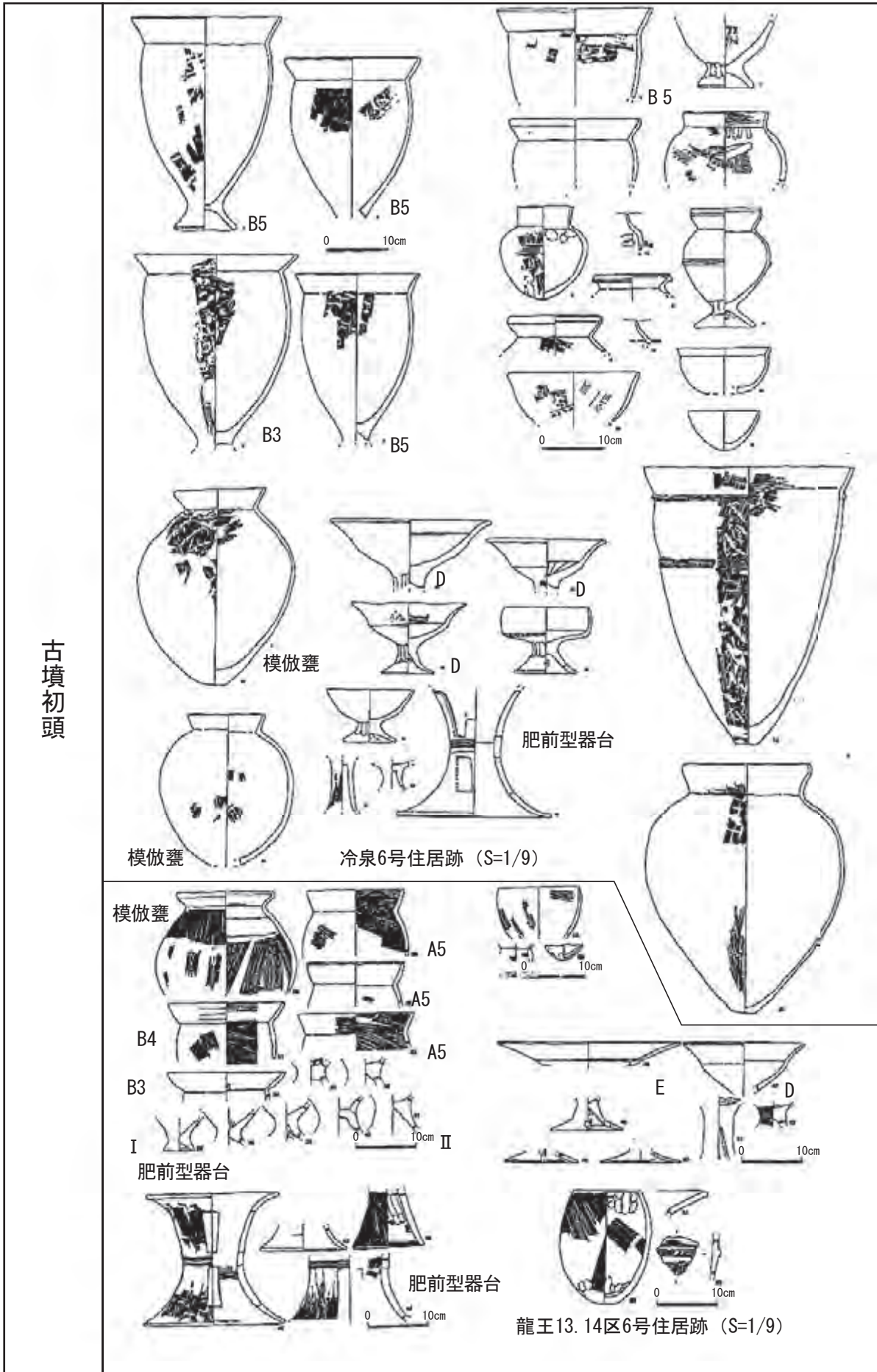


第5図 長崎県本土部の弥生後期土器の様相①





第6図 長崎県本土部の弥生後期土器の様相②

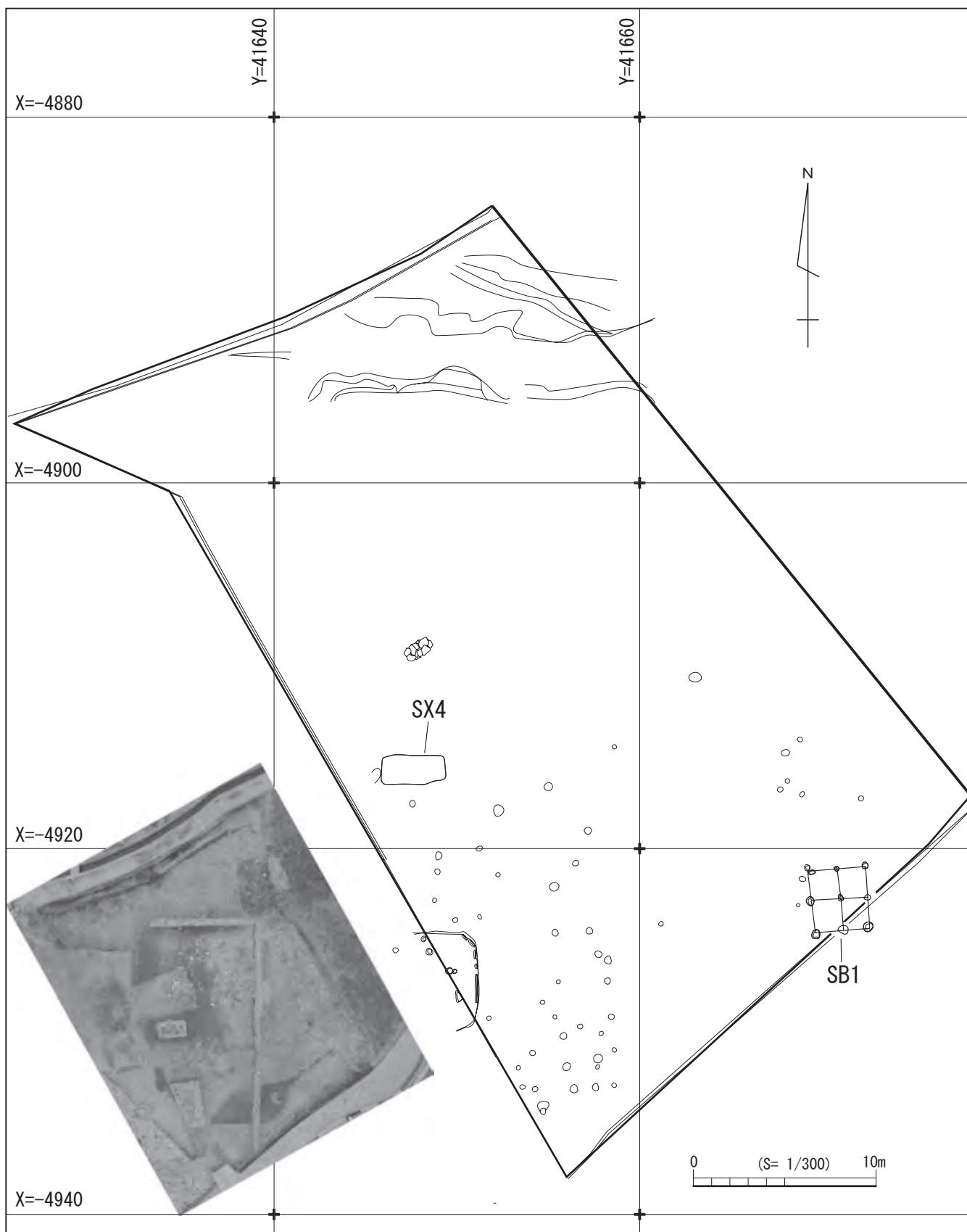


古墳初頭

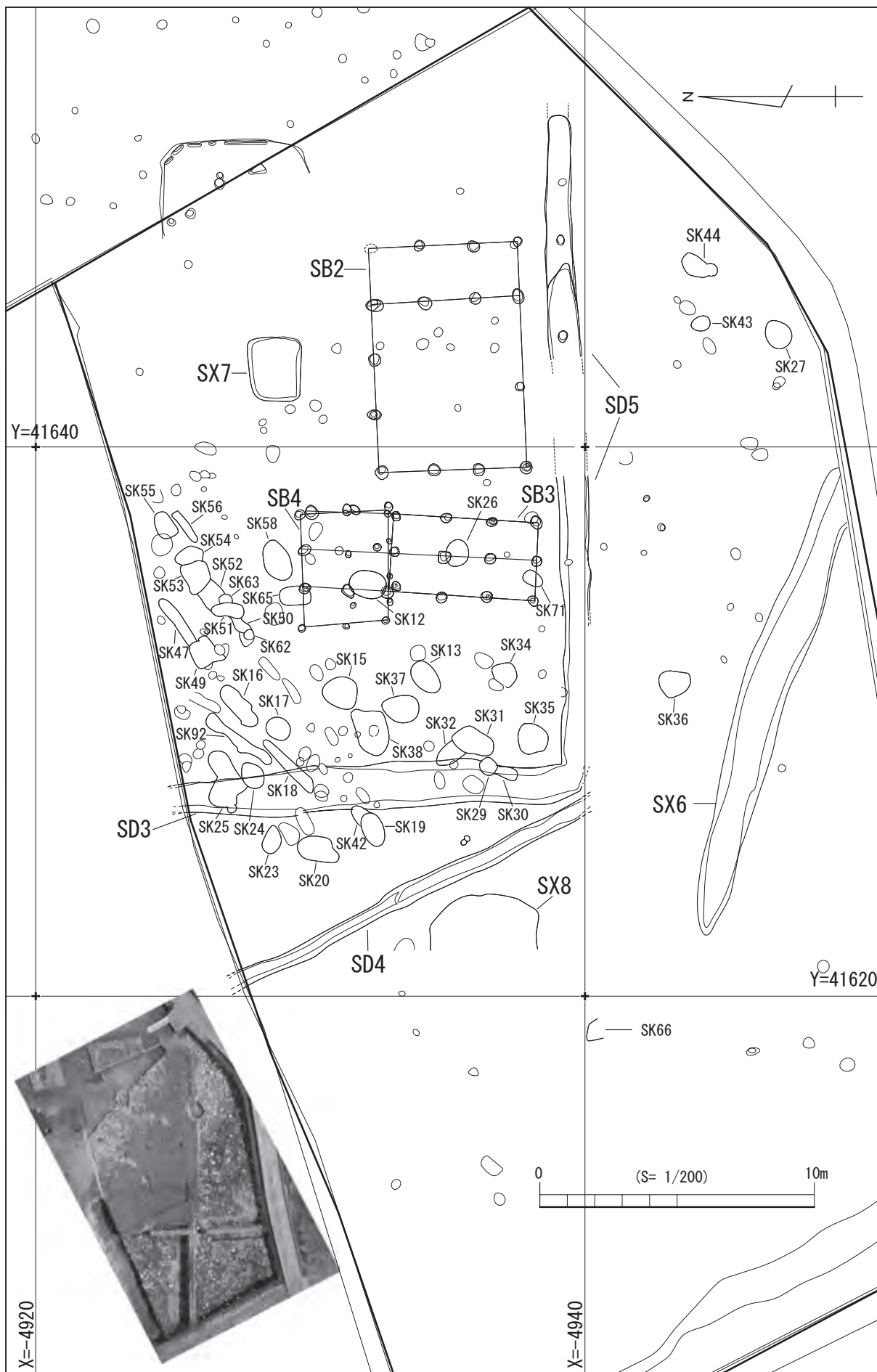
第7図 長崎県本土部の弥生後期土器の様相③



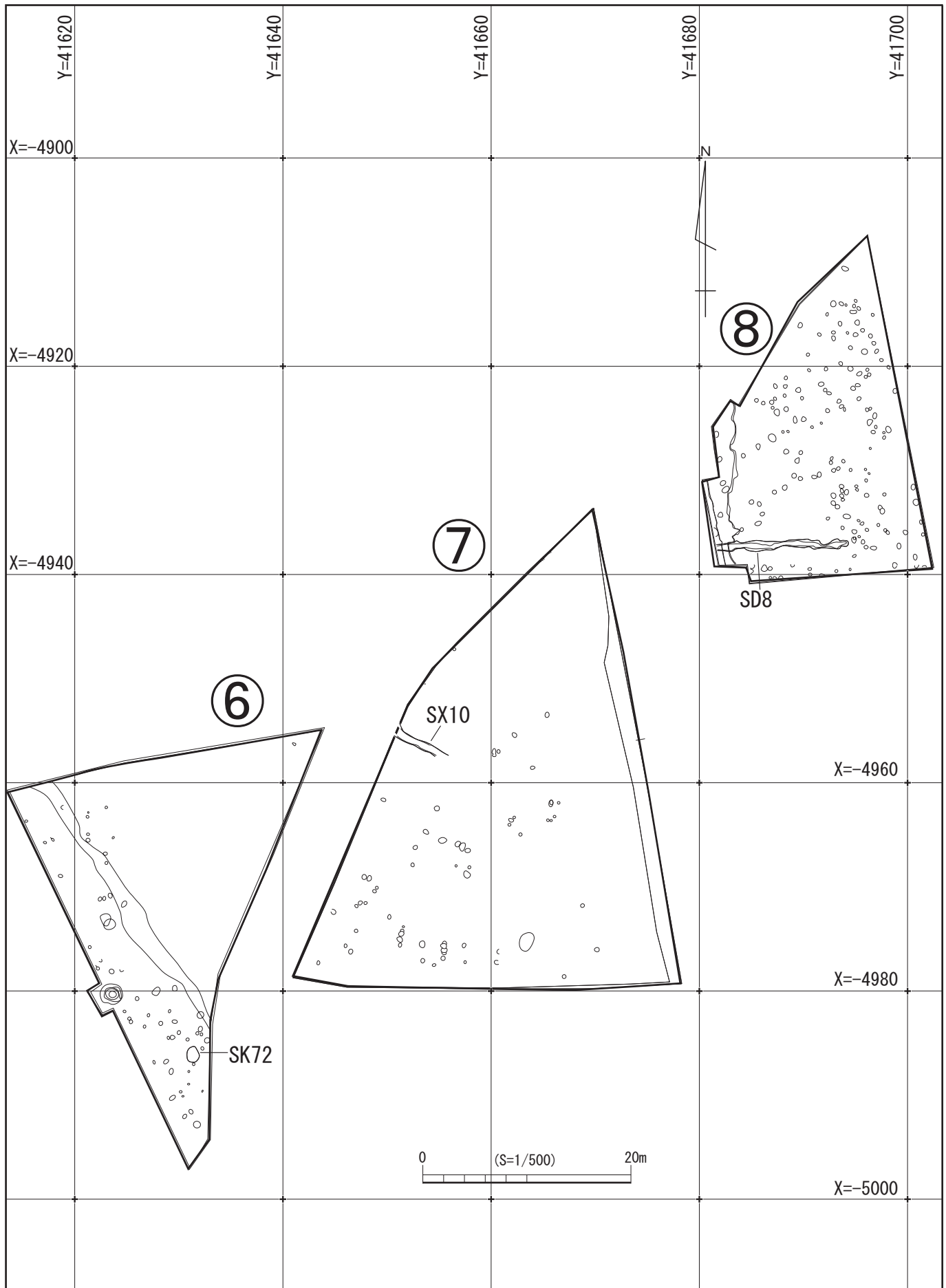
図版174-2 TAK201302①調査区弥生時代後期の集団墓空撮(右が北)



第251図 TAK201302調査区④区古代遺構配置図(S=1/300)



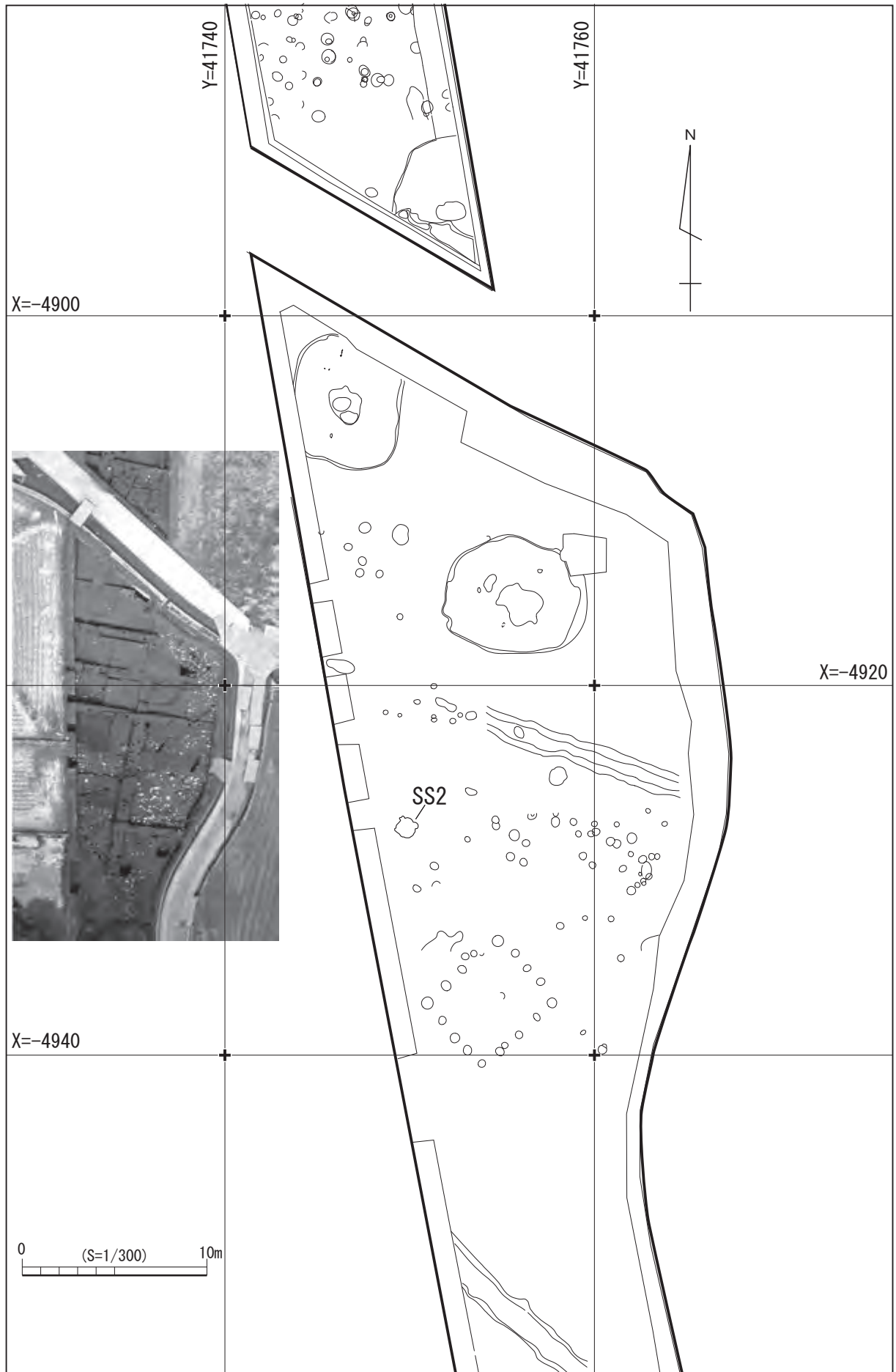
第252図 TAK201302調査区⑤区古代遺構配置図(S=1/200)



第253図 TAK201302調査区⑥区⑦区⑧区古代遺構配置図(S=1/500)



第254図 TAK201302調査区⑨区⑩区古代遺構配置図(S=1/500)



第255図 TAK201303調査区B区古代遺構配置図 (S=1/300)



### 3. 古代

古代の遺構遺物は、TAK201302調査区から集中して出土した。

なお、本報告では、古墳時代・古代の時期区分については、須恵器の編年を基準とした。杯の身・蓋が反転し、蓋に宝珠状のつまみが付く段階から古代とした。実年代観は6世紀末に相当する。古代・中世の時期区分に関しては、大宰府陶磁器編年のB期(山本信夫2000)、土師器の山本編年(山本信夫1990)のX・XI期までを古代とした。実年代では11世紀第3四半期までとなる。以上の基準に基づき、遺構並びに遺構出土遺物、包含層出土遺物を抽出した。古墳時代以来の器種である丸底の土師器杯A(平城分類)については、7世紀のものが包含層出土遺物に混じっているものと思われるが、須恵器編年との対応関係に不明の点が残るため、古代の遺物としては報告しない。

なお土師器の器種名に関しては、高台付の杯(平城分類の杯B)・椀の系譜の認識、器種の区別を巡って研究史上混用が見られる<sup>(註2)</sup>が、以下の基準で器種を呼称する。8世紀第4四半期を過渡期(山本編年IV・V期)と看做した上で、それ以前を須恵器杯蓋の系譜に属する(蓋付の)杯とし、9世紀前半以降は越州窯青磁や緑釉陶器の影響が色濃いものとして椀と呼称する<sup>(註3)</sup>。

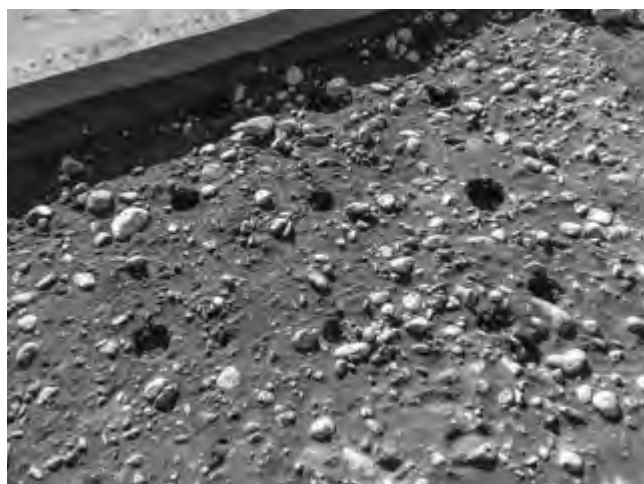
(註1)田辺編年ではTK43からTK209、中村編年のⅢ期に該当する。

(註2)都城の土器研究会は、奈良文化財研究所の平城分類を重んじて9世紀前半まで南都(平城京)の高台付土師器を杯Bと呼び、平安京については高台の有無をもって椀・杯と区分する。北部九州では佐藤浩司・山本信夫は8世紀段階から高台付の土師器を椀と呼び、九州歴史資料館は不丁地区編年のⅢ期から椀の呼称を始める(小田・杉原ほか2014)。

(註3)土器に関する文献は小結にまとめて掲げた。

#### (1) 掘立柱建物(SB)

TAK201302調査区において、古代の遺構として報告する掘立柱建物は7棟ある。いずれも柱穴から、建築・廃絶時期を示す遺物の取り上げを見なかったが、検出層位や主軸方位、周囲の包含層の遺物出土状況などから総合的に判断して、建物の年代を認定した。他の大調査区の調査(TAK201301・TAK201303・TAK201304)では、古代にかかる掘立柱建物は検出されなかった。なお、建物の規格は(桁行)間×(梁行)間で表記している。



図版175 SB01完掘状況(北から)

① SB01(第256・257図、第95・97表、

図版175・176)

小調査区④区9266グリッドの4層で検出した。南東側に既存の農耕用コンクリ道路があり、作業の



第256図 SB01出土遺物(1/3)

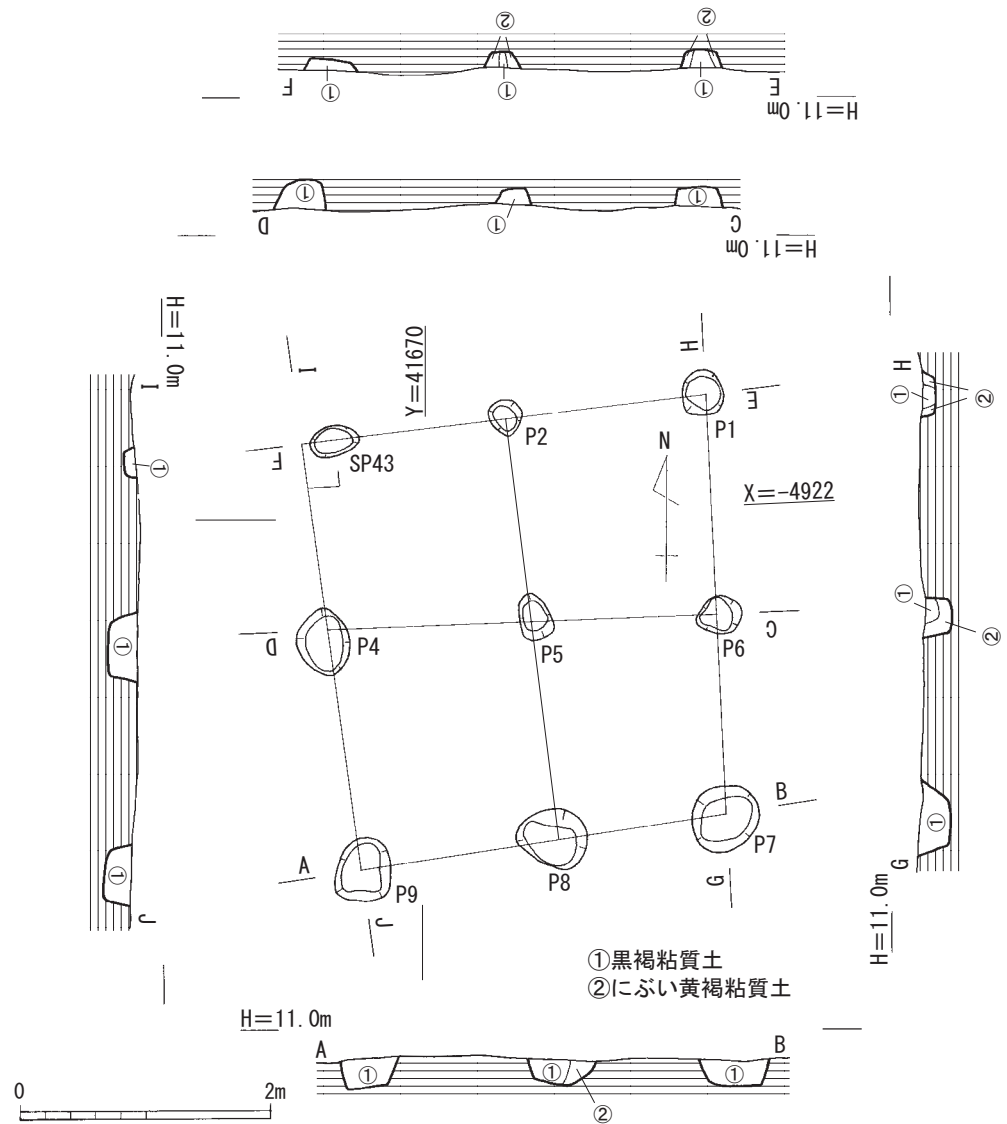


図版176 SB01出土遺物

第95表 SB01出土遺物観察表

遺物番号	器種	部位	法量 (cm)			調整		色調		焼成	胎土	備考
			口径	器高	底径	内面	外面	内面	外面			
935	須恵器甕	口縁部	28.0	—	—	回転ヘラケズリ	—	橙色	良好	精良		

安全上の観点から可能な範囲で調査区を拡張して検出作業を行ったが、道路部分下は未調査である。検出できた範囲で2×2間の総柱建物であり、柱間で3×3.2mを測る。未調査部分の南側へ建物が延びる可能性を残す。主軸方位は真北から西へ5度傾いている。柱穴の最大径は50cmであるのに対して残存深度は20cm程度であり、大きく削平を受けていると考えられる。混入品だが、935はSB01-7から出土した古墳後期の甕の口縁部片である。シャープに回転ヘラケズリ調整され、玉縁状を成す。口径は28cm程度に復元される。他の混入品として縄文土器・弥生土器の小片が柱穴から出土しているが、小片のため図化しえない。



第257図 SB01平・断面図(1/60)



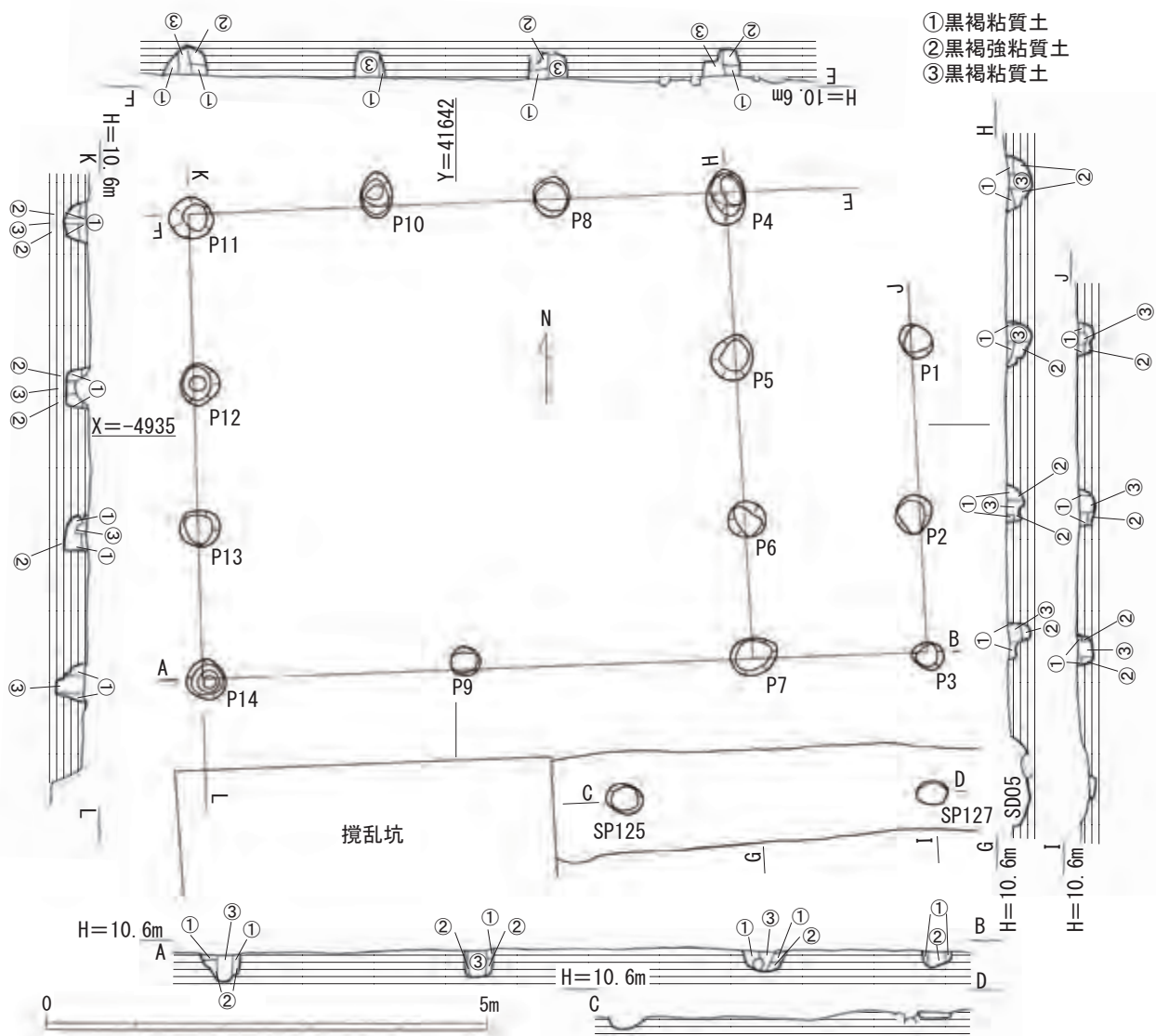
図版177 SB02検出状況(南から)

② SB02(第258図、第97表、図版177・178)

小調査区⑤区9264・9262グリッドで検出した。3×3間の側柱建物で、少なくとも東側には廂を持つ。SB03およびSB04と主軸と検出レベル、柱穴深度を同じくし、これらの建物の南側にSD 03、西側にSD04またはSD05をめぐらせ、周囲では多くの土坑SKや作業場と思われる竪穴状不明遺構を検出した。東側(④区に該当)に関しては削平が激しく、調査段階が異なることもあって、溝などの遮蔽施設の検出は叶わなかった。建物規模から考えて、これらの遺構群の中で中核的な役割を果たす建物であると考えられる。建物の長軸とSD05が平行であるため、関



図版178 SB02完掘状況(東から)



第258図 SB02平・断面図(1/80)

連があると想定し、遺構年代はSD03、05と同じく8世紀後半から9世紀前半と位置づけられる。

柱穴からの出土遺物は小片のため図化しえなかった。

### ③ SB03(第259図、第97表、図版179)

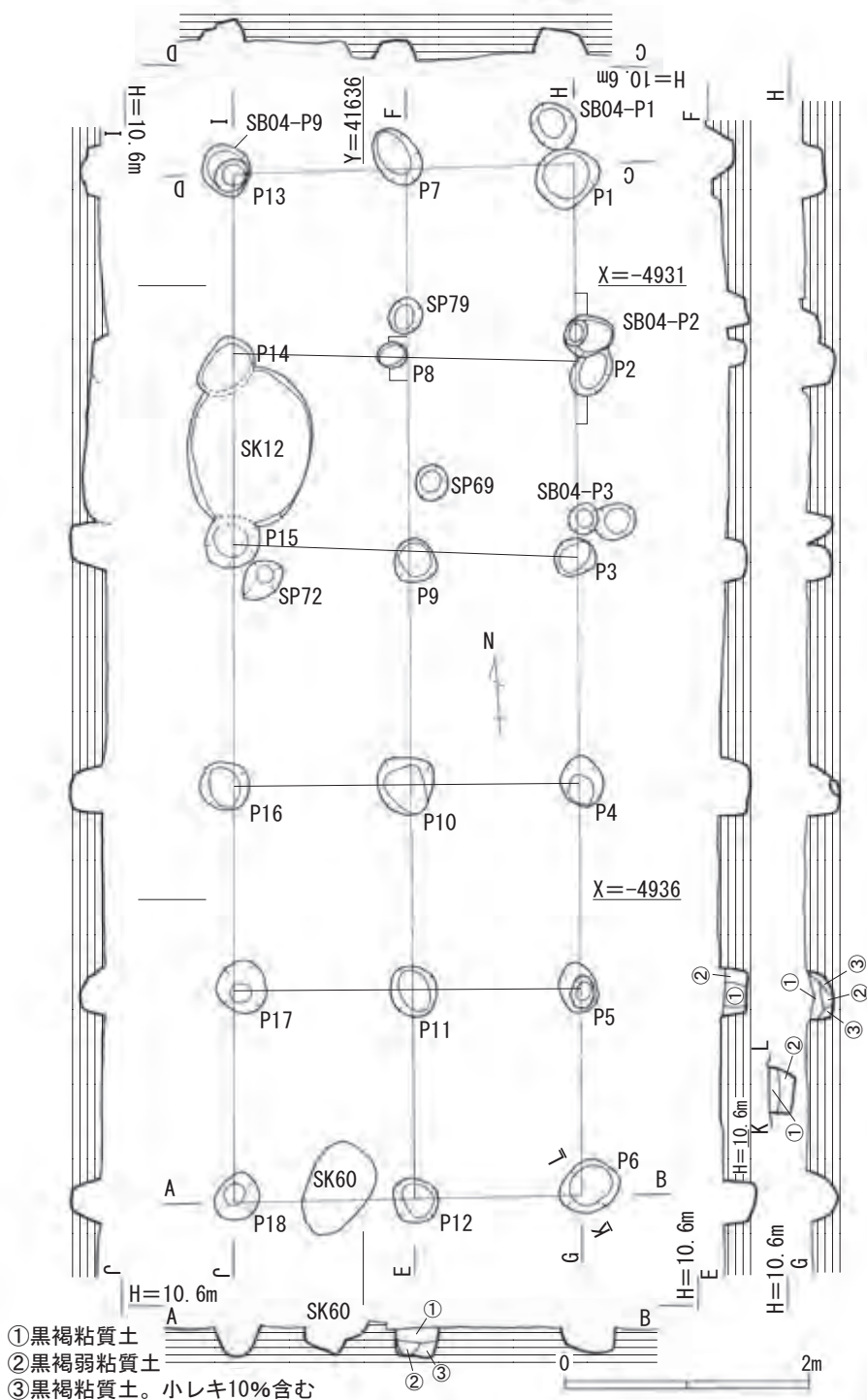
小調査区⑤区9262グリッドに位置する。4層面で検出した。5×2間の南北棟の側柱建物である。SB02の西側に位置し、SB04と北側で重複する。建物間の距離から考えても、SB02とSB03は同時期に並存しない。SB02・SB04やSD03・SD05とは主軸方位が4度ずれており、時期差があると考えられる。柱穴の切り合いから、SB03が後出すると判断した。P12とP18の間にSK71があるが、切り合い関係はない。

まとめ(2)で述べるように、⑤区の円形土坑はSB02～04に先行する段階の条里方向に主軸を持つ掘立柱建物である可能性があるが、SK12(や後述のSK65)には礫が詰め込まれており、それらの土坑とは異質であると考えられる。

現場調査および県教委の内部資料の結果報告の作成段階では、SB03についてはSB04との平面的重なりを想定せず、3×2間として認識し、遺構台帳の作成や結果報告、遺構集成などを行っていた。しかし、本報告書の執筆に当たって平面配置を周辺の検出ピットを含めて再検討した結果、5×2間の南北棟の掘立柱建物として認識するに至った。

建物範囲の南および西に主軸を同じくする区画溝SD03・05を近接し、斜行溝SD04がSD05の西側に検出された。

柱穴からの出土遺物は見られなかった。



第259図 SB03平・断面図(1/60)

④ SB04(第260図、第97表、  
図版179)

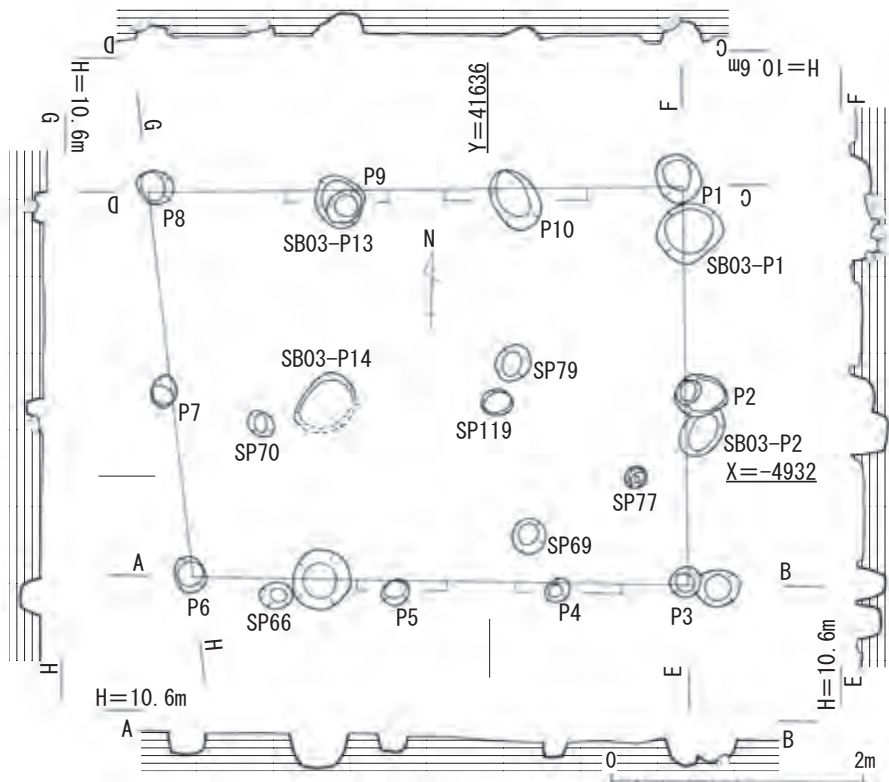
小調査区⑤区9262に位置する。3×2間の東西方向の側柱建物である。SB02の北東に位置し、主軸方位を同じくする。そのためSB02と同じ時期を想定している。5×2間のより大きな平面規模を有する南北棟のSB03の北側部分と重複するが、先述のようにSB03が後出すると考えられる。SK12と直接の切り合い関係がなく、SB04とSK12の新旧関係は



図版179 SB03・SB04完掘状況(東から)

不明である。小結で述べるように条里方位の掘立柱建物を構成する可能性を残す(残存深度の)浅い円形大型土坑はSB02~04より更に年代的に先行するものと思われる。

柱穴からの出土遺物は見られなかった。



第260図 SB04平・断面図(1/60)

⑤ SB05(第261・262図、第96・97表、  
図版180～183)

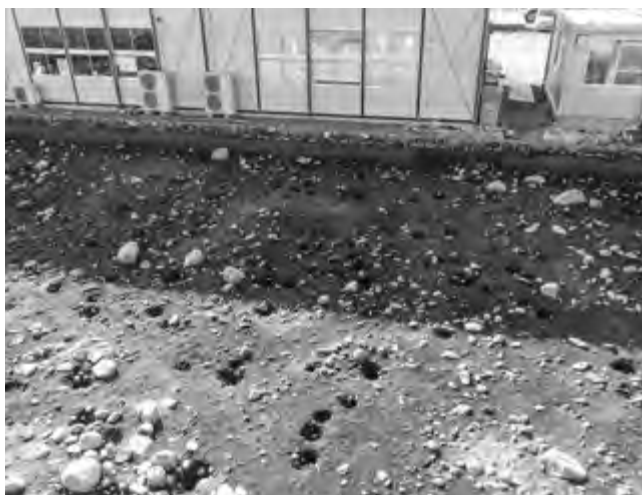
小調査区⑨区の0072・0272グリッドに位置する。礫直上の4層で検出した。3×2間に四面廂がつく総柱建物である。梁行は東西方向である。母屋の柱穴の径は60cmを測るが、廂の柱穴は径が小さく、最小で30cm程度となる。礫層に掘り込む残存深度は30cmほどで、後世に削平されたものと考えられる。⑨区・⑩区付近は地山としての大村扇状地の基盤礫層が台地状を成す部分であり、礫交じりの埋土を有する遺構の検出・掘削には困難があった。

SB06の西側に隣接するが、同時期の並存を想定するには、後述のように両建物間の距離が近すぎる。長崎県内で初めての四面廂建物の出土例<sup>(註4)</sup>となった。古代のものとしては未だ唯一である。

郡家の政庁などの官衙施設と見るには柱穴の規模が小さい。村落首長層の居宅と見ることも出来ようが、周囲から輪花緑釉陶器皿や錫杖状金属製品が出土しており、東日本で言われる村落寺院(草堂)の可能性もある(堀内2017)。

寺院または居宅の附属施設の建物などが周囲に分布した可能性が高いが、南側は発掘調査対象外の地区であり、調査時点で竹松遺跡の遺物・調査記録の保管・整理作業用の竹松現場事務所のプレハブ建物が建てられていた。基盤の礫層が高く盛り上がる部分である上に削平が激しく、SB05の南側に関しては平成23年度に長崎県埋蔵文化財センターが実施した試掘・範囲確認調査(TAK201105・註5)で調査対象外と判断した為である。従って南側に附属施設の有無は確認できなかった。また、削平が激しいため、わずかに掘立柱建物の柱穴の下部を検出できたのみであり、土坑などの付属的な遺構は検出できなかった。

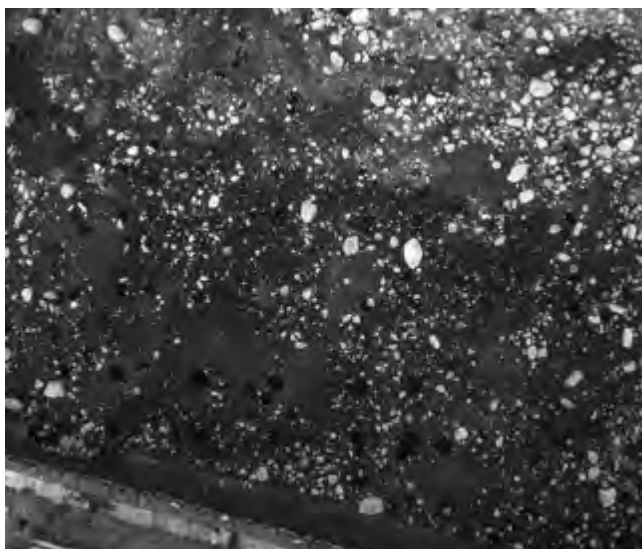
P22から土師器杯**936**が出土した。掘り方か柱



図版180 SB05検出状況(北から)

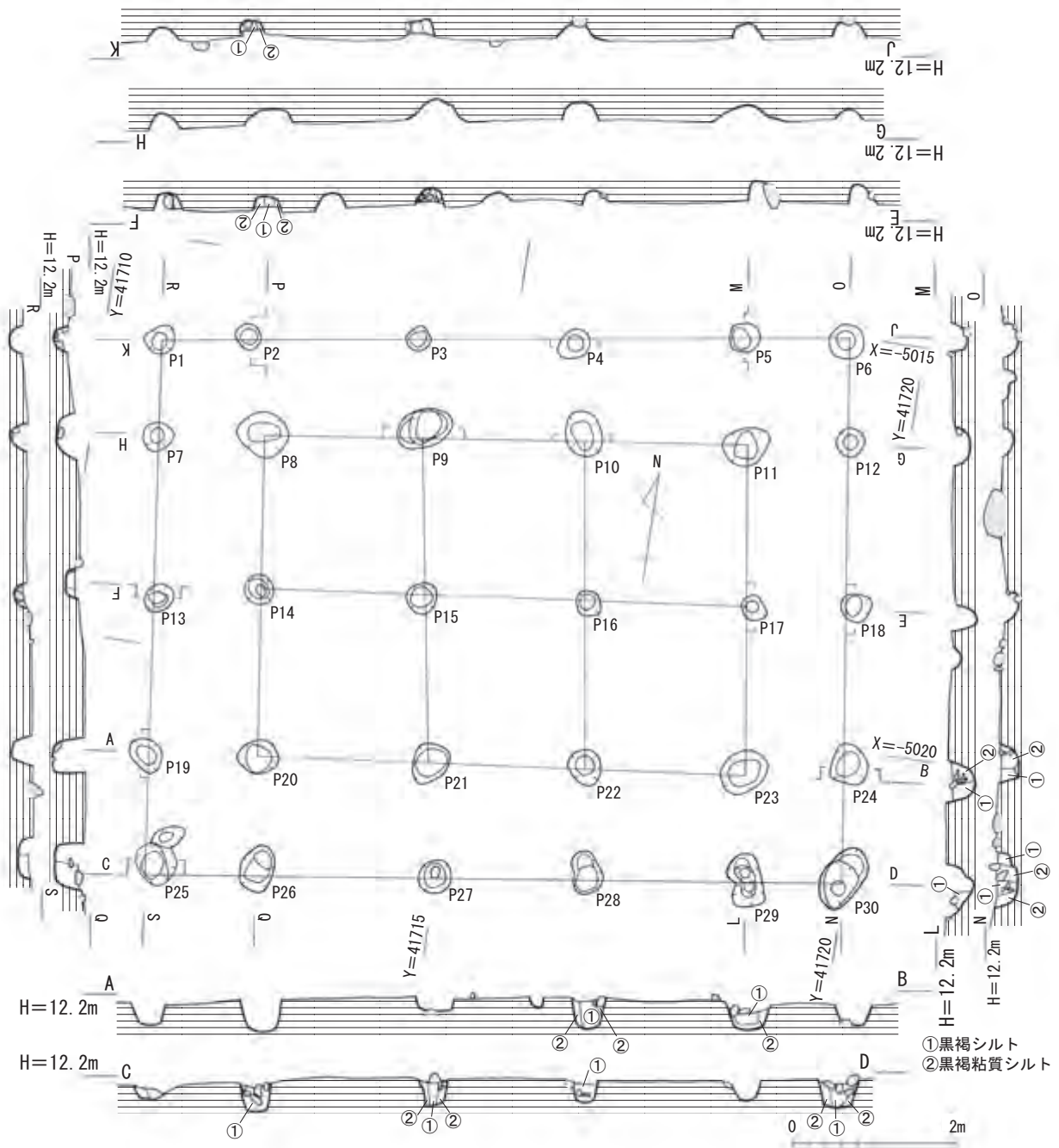


図版181 SB05完掘状況(北から)



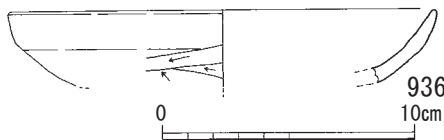
図版182 SB05・06完掘状況(空撮)

跡かいずれからの出土か明らかでない。復元口径は17cm程度で、丸底の器形であり、器高は3.5cm程度と想定される。体部下半に手持ちヘラケズリ調整を行う。土師器杯に手持ちヘラケズリが残る最終段階であり遺物の年代は8世紀後半と考えられ、遺構の時期も8世紀後半に想定している。



第261図 SB05平・断面図(1/80)

(註4)翌年度実施した TAK201405調査区  
で、12~14世紀の1町(108m)区画溝  
で囲まれた中世前期の居館の中核  
施設と思われる四面廂建物が2棟出  
土した。詳細は『竹松遺跡Ⅳ』で  
報告予定である。



第262図 SB05出土遺物(1/3)



図版183 SB05出土遺物

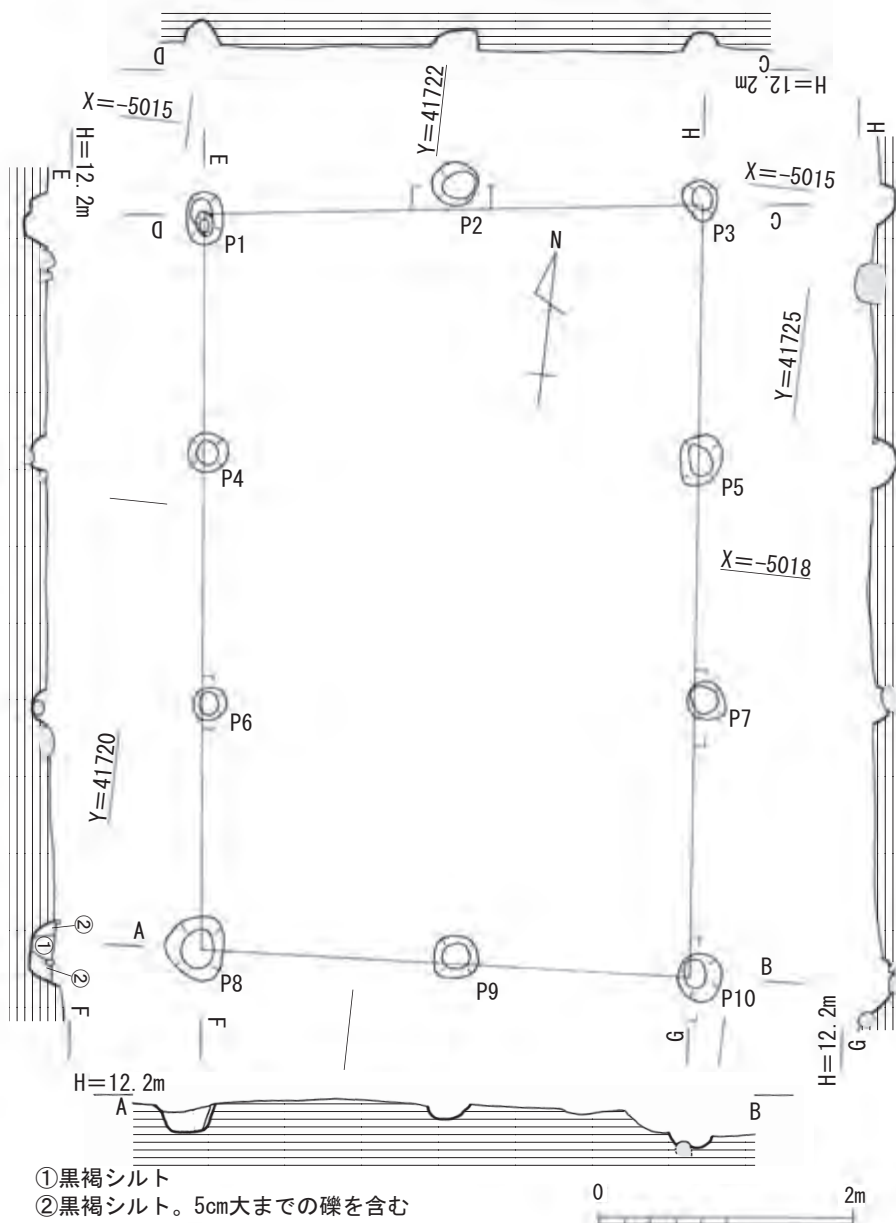
(註5)『竹松遺跡Ⅰ』新幹線文化財調査事務所調査報告書第4集、2017・『竹松遺跡Ⅱ』同5集、2017で報告済みである。

第96表 SB05出土土器観察表

遺物番号	器種	部位	法量 (cm)			調整		色調		焼成	胎土	備考
			口径	器高	底径	外面	内面	外面	内面			
936	土師器杯	口縁	(17.0)	(2.9)	不明	手持ちヘラケズリ	—	橙色	橙色	良好	金雲母、長石、石英	

⑥ SB06(第263図、第97表、図版182・184)

小調査区⑨区の0070・  
0072グリッドに位置する。  
礫層直上の4層で検出し、  
礫層に掘り込んでいる。  
3×2間の南北方向の側柱  
建物であり、柱穴の最大  
径は50cmに上る。残存深  
度は10~20cm程度に過ぎ  
ず、後世の削平が著しい。  
西側に四面廂建物 SB05  
が位置するが、わずかに  
主軸が異なる。先述のよ  
うに両者の距離が短すぎ  
ることも考慮すれば、双  
方の建物が同時期に並存  
していた状況は想定でき  
ない<sup>(註6)</sup>。従って村落寺  
院または居宅の中心施設  
の四面廂建物に附属した  
建物とは考えられない。  
双方の建物とも遺物の出  
土がない上に、柱穴の切  
り合いがなく、新旧関係  
は判断できない。



第263図 SB06平・断面図(1/60)





図版184 SB06検出状況(南から)

柱穴からの出土遺物は見られなかった。

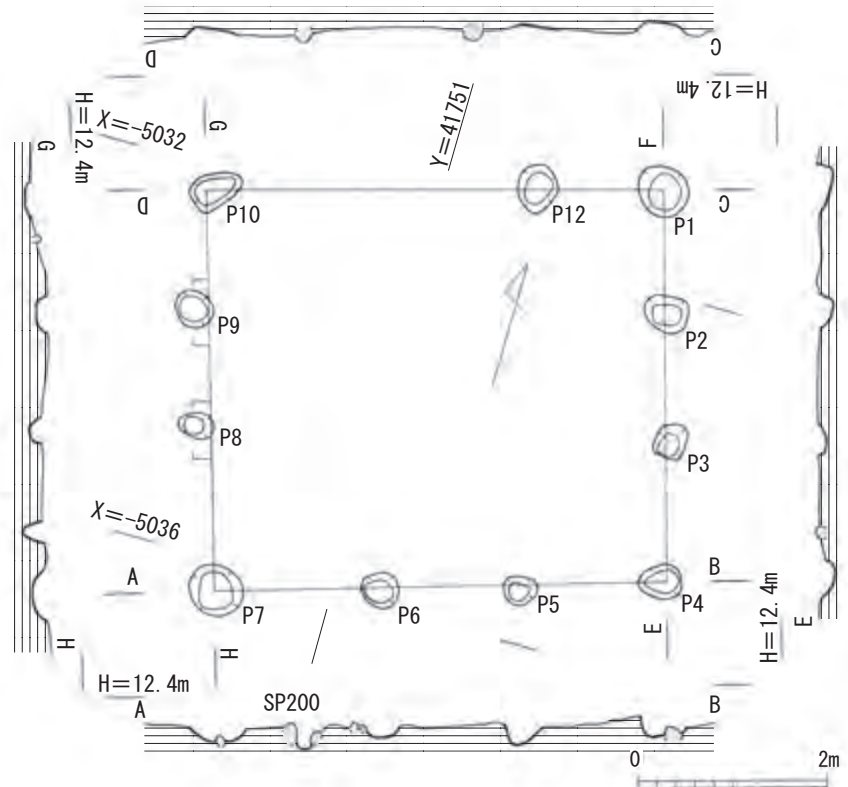
(註6)竹松遺跡の調査指導時の森公章氏(東洋大学文学部教授)のご教示などによる。

⑦ SB07(第264図、第97表、図版185)

小調査区⑩区の0274グリッド4層で検出した側柱建物である。北側の柱列の内のSB07-11が検出できなかった。柱穴掘り方の元来の掘り深度が相対的に浅かったためであろう。

遺構検出が可能だった範囲で柱穴配置を検討した結果は、3×3間となるが、想定される上部構造は不自然なものとなる。削平が激しく、残存深度は10～20cm程度である。主軸方位は真北から17度、西へ傾く。主軸を同じくする建物、遺構はない。遺物の出土はない。建物の時期を想定する材料に乏しいが、古代の範囲に収まるものと想定する。柱穴の形状や法量、また礫直上の検出面が隣接する⑨区のSB05・06と酷似するためである。続けて報告する柵列SAの年代も同様のものと想定している。

柱穴からの遺物出土は見られなかった。



第264図 SB07平・断面図(1/80)

第97表 SB(掘立柱建物跡)計測表

遺構番号	挿図番号	図版番号	主軸方向	柱間間数 (桁×梁)	規模 (m, m <sup>2</sup> )					備考
					桁間	梁間	桁行	梁行	身舎面積	
01	257	177	N5° W	2×2	1.5~1.9	1.6~1.8	3.2	3.0	9.6	総柱
02	258	178	N3° W	3×3	2.0	1.6~2.0	6.1	5.3	32.3	側柱 東に廂
03	259	179	N85° W	5×2	1.5~2.0	1.4~1.5	8.5	3.0	25.5	側柱
04	260	179	N1° W	3×2	1.1~1.6	1.4~1.5	4.2~4.0	1.5~1.7	12.5	側柱
05	261	180~182	N82° E	3×2	2.0	2.0	6.0	4.0	24.0	総柱
06	263	182	N7° W	3×2	1.9~2.1	1.9~2.0	5.9~6.1	4.0	24.0	側柱
07	264	185	N74° E	3×3	1.3~1.7	1.2~1.7	4.8	4.2	20.2	側柱

## (2) 柵列(SA)

いずれも TAK201302の小調査区⑨・⑩区の境界付近、調査当時の竹松現場事務所(整理棟)東側から検出した。SA02を除いた3つの柵列はL字状をなし、掘立柱建物跡を形作る柱穴列であった可能性があるが、対面に対応する柱穴はいずれも遺憾ながら検出されなかった。郡川の洪水流が形作った基盤礫層が高くせりあがる地区であり、わずかな包含層、遺構面の直上が近現代の生活面となる状況のため、礫層に食い込む遺構の検出は極めて困難であったことを付言しておく。



図版185 SB07・SA01・SA02検出状況

### ① SA01(第265図、第98表、図版185・186)

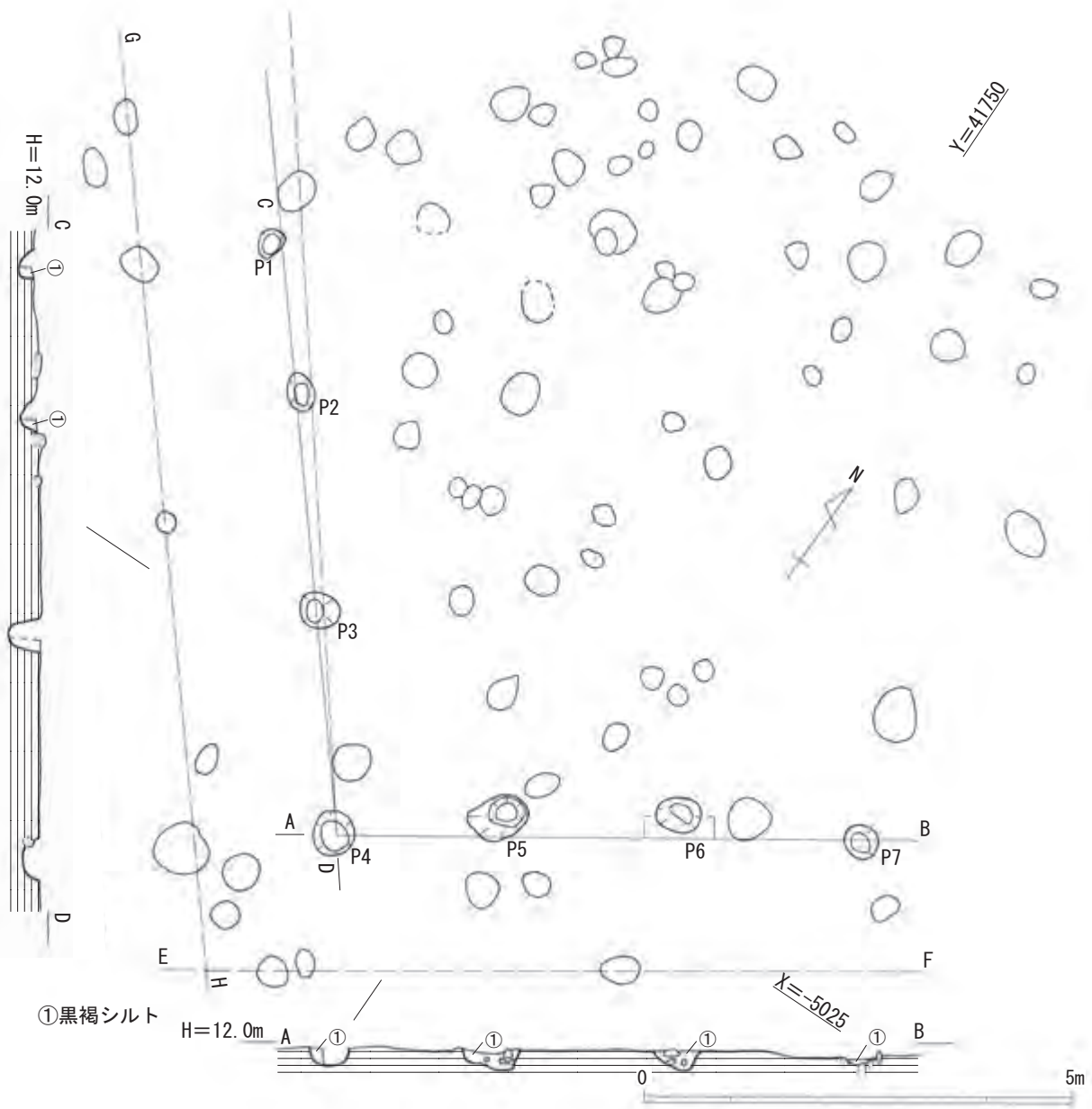
小調査区⑨・⑩区で検出したL字状の柵列である。先に述べたように、掘立柱建物を復元するための参考記録として、周囲の個別実測した柱穴の位置を上端のみ平面図に図示した。主軸は真北から東へ40度程度傾く。各々の柱穴の径は40~60cm程度であり、L字の交点のSA01-P4から北東へ3間(SA01-P5~P7)、北西へ3間(SA01-P1~P3)続く。残存深度は概ね25cm程度、最大でSA01-P3の40cm程度と、後世の農耕に伴う削平を受けている。柱穴の間隔は北東方向へ2m程度、北西は2.5m程度である。近接した位置に酷似した柱穴があり、切り合いを有する柱穴(SA01-P5)を含めて、主軸をわずかに変えて建て替えが行われた可能性を残す。出土遺物はないが、SB07の項で述べた事情で、古代の遺構と判断した。図示するように、L字状に並ぶ双方の柱穴列の外側に1.5mほどの間隔を持って、やはりL字状にやや小さめの直径30cmほどのピットを含めて柱穴列が並ぶ。破線で表現した通りである。SA01



図版186 SA01完掘状況(北西から)



図版187 SA02完掘状況(北から)



第265図 SA01平・断面図(1/80)

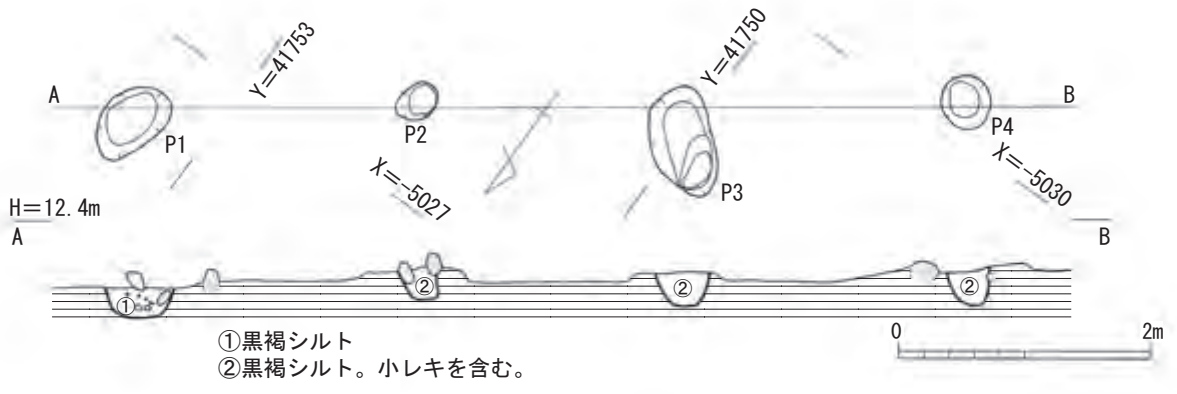
が掘立柱建物の残存部分であるとすれば、破線部で結ばれる柱穴は山中敏史が指摘した外周柱穴列(山中敏史2003, P118~)の一種と想定される。

柱穴からの出土遺物は見られなかった。

② SA02(第266図、第98表、図版185・187)

小調査区⑩区0274グリッド4層で検出された柵列である。4基の柱穴が並び、主軸は真北から東へ55度傾く。柱穴の径は30~60cmを測る。中心間の間隔は2~2.2m程度である。残存深度は20~30cm程度である。SA02-P3のみ楕円状で、残存深度40cm強の柱穴の最深部が北西側にずれる。別段階の柱穴が切りあっているものと考えられる。

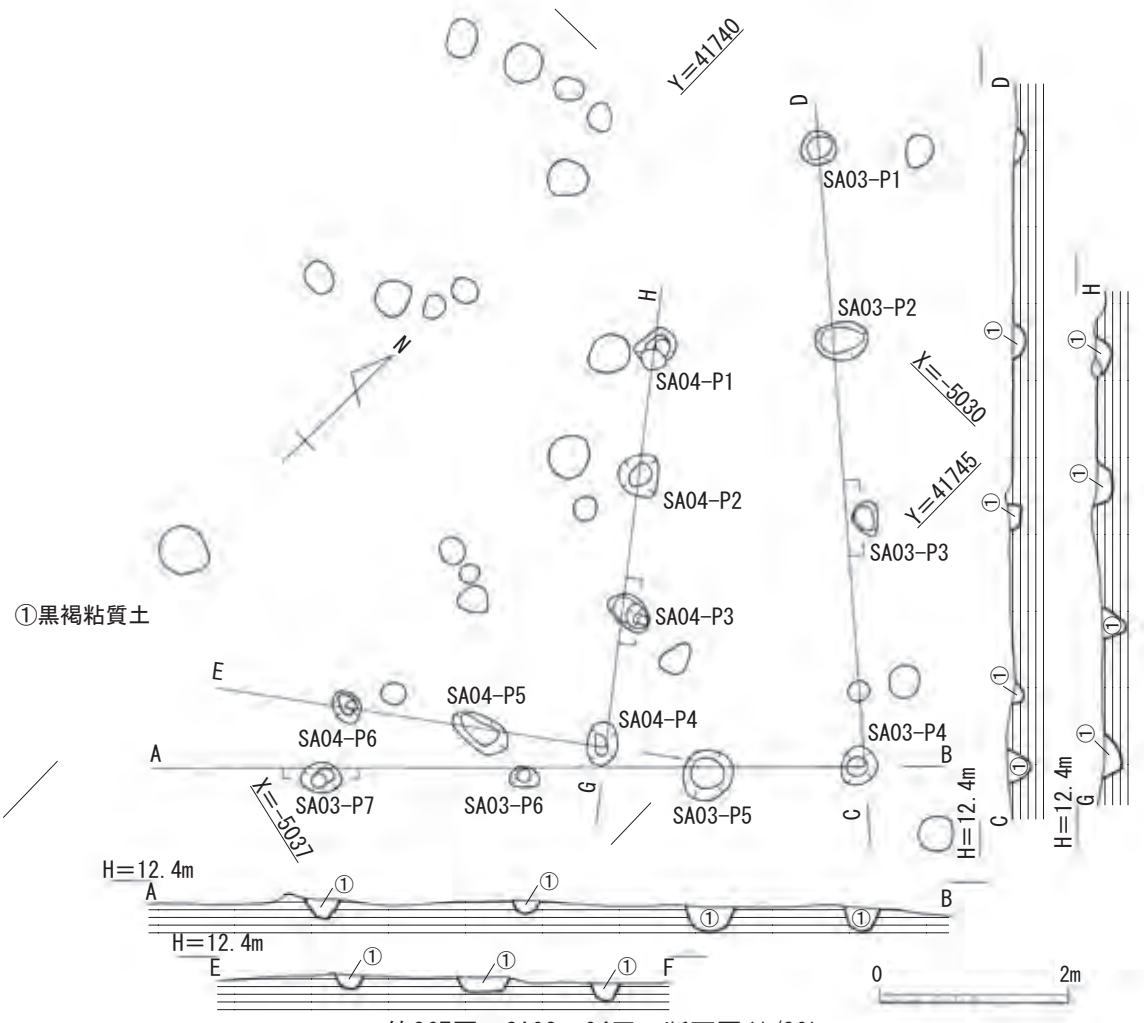
柱穴からの出土遺物は見られなかった。



第266図 SA02平・断面図(1/60)

③ SA03・SA04(第267図、第98表、図版188)

いずれも小調査区⑩区で検出されたL字状の柵列である。調査区の西側に接し、L字の交点の対角線に当たる部分は、2011年度に長崎県埋蔵文化財センターが行った試掘範囲確認調査(TAK201105)の結果、調査対象外の地区として整理棟(竹松現場事務所)・ヤードスペースとした部分であり、可能な限り調査区を拡張して遺構検出を行ったが、遺憾ながら遺構の全面的な調査は叶わなかった。主軸方位はL字の交点から北西方向の柱穴列を基準とすると、SA03が真北から45度、SA04が35度ずれる。SA



第267図 SA03・04平・断面図(1/80)



図版188 SA03・04完掘状況(北から)

03は交点から南西へ3基、北西は3基の柱穴を並べる。その柱間隔は1.6~2mで、柱の径は概ね40~55cm程度である。SA04は交点から南西へ2基、北西へ3基の柱穴を並べる。規模はやや小ぶりで、柱間隔は1.3~1.5m、径は30~40cm程度である。いずれも残存深度は20cm未満である。柱穴からの遺物の出土は見られなかった。

第98表 SA(柵列)計測表

遺構番号	挿図番号	写真番号	主軸方向	柱間数	全長(m)	備考
01	265	185・186	N40° W	北西-南東3、北東-南西3	13.1	L字に曲がる
02	266	185・187	N55° E	3	6.6	SA01の北東-南西部分と軸が同じ
03	267	188	N45° W	北西-南東3、北東-南西3	12.3	L字に曲がる
04	267	188	N35° W	北西-南東3、北東-南西2	7.0	L字に曲がる

### (3) 溝(SD)

古代の節で取り上げる溝は大調査区 TAK 201302の⑤区・⑧区に分布する。他に一連のものである可能性を有する溝状遺構のSX06(⑤区)、SX10(⑦区)、SX12(⑨区)が存する。他の調査区の溝状遺構からも古代以前の遺物は出土しているものの、多くは中世の流路跡への混入ないし流れ込みと考えられるため、時代や性格が不明のことが多い。これらについては遺構配置図での掲載に留めて、詳しい報告は行わない。土師質の大型の土馬がSD03上層から長崎県内で初めて出土したことが、最も注目される。



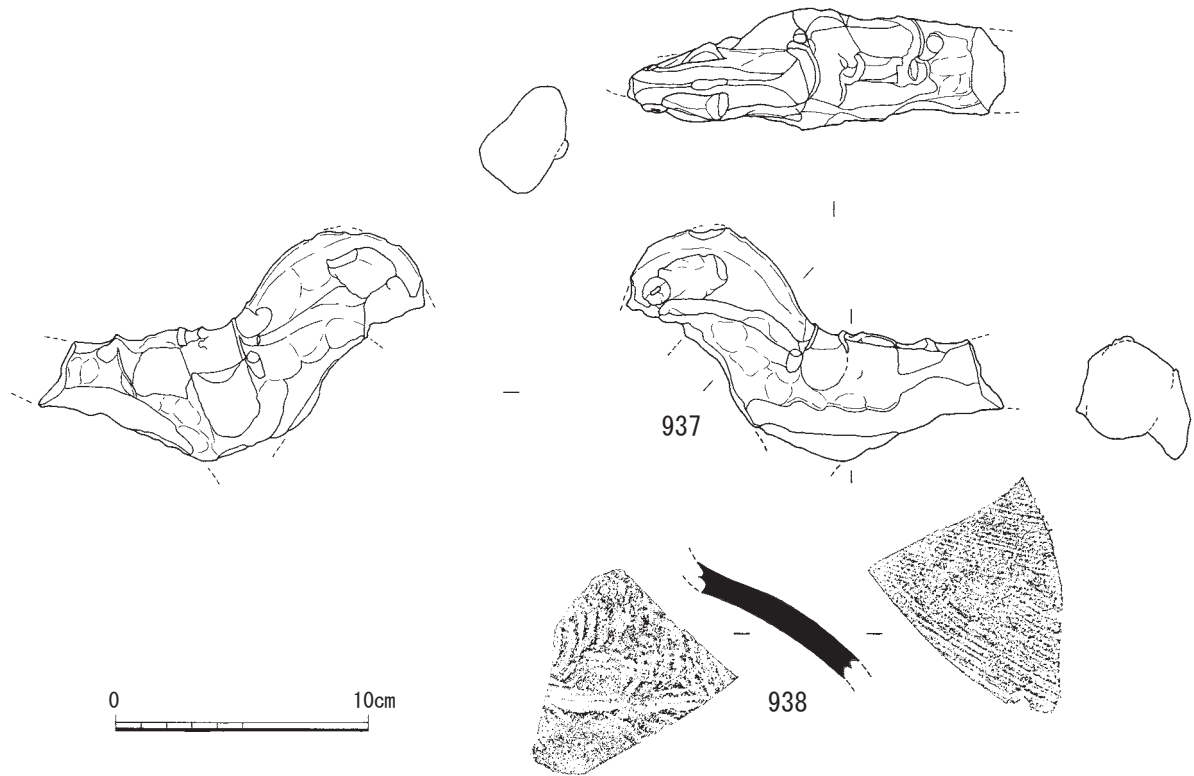
図版189 SD03・SD05検出状況(南西から)

#### ① SD03・05(第268・269図、第99・100表、図版189~192)

小調査区⑤区のSB02~04を南・西方向で取り巻く区画溝である。南側をSD05・西側をSD03と付番した。SD05は9262・9264グリッドの南側ベルト上、SD03は9262グリッドの3層で検出した。⑧区のSD08に東側で接続する可能性がある。SD05が東西上層観察ベルトと重なったこともあり、検出は遅れた。



図版190 SD03・SD05完掘状況(南西から)



第268図 SD03出土遺物(1/3)

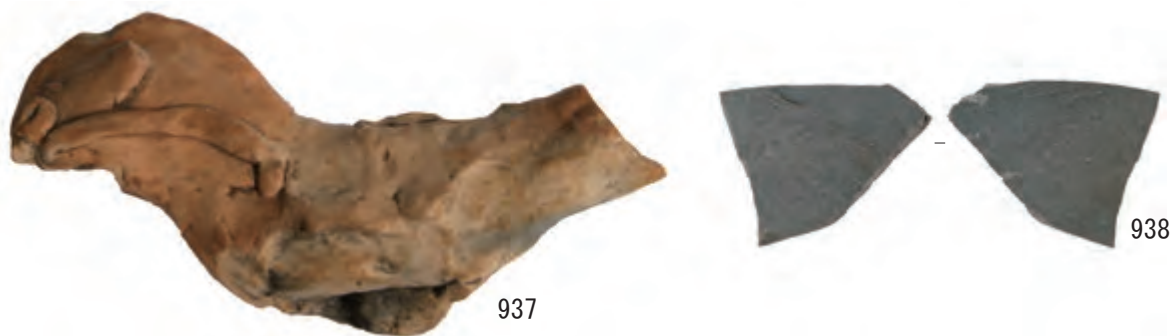
残存深度は10~20cm程度である。

近接して、南西コーナー付近から北西方向に伸びる斜行溝 SD04(後述)を検出し、切り合い関係を知るべく調査で努力したが、削平が激しく、残存部分のみでは新旧関係は分からなかった。SD03、05は残存深度が浅い上に、黒褐色粘質土どうしの遺構検出の困難な土層であるため、これらの溝の検出は土坑群、掘立柱建物群の調査の後となった。10~20cm程度を包含層として掘削してしまったため、溝上層出土の遺物を包含層出土として取り上げたものが含まれると考えられる。

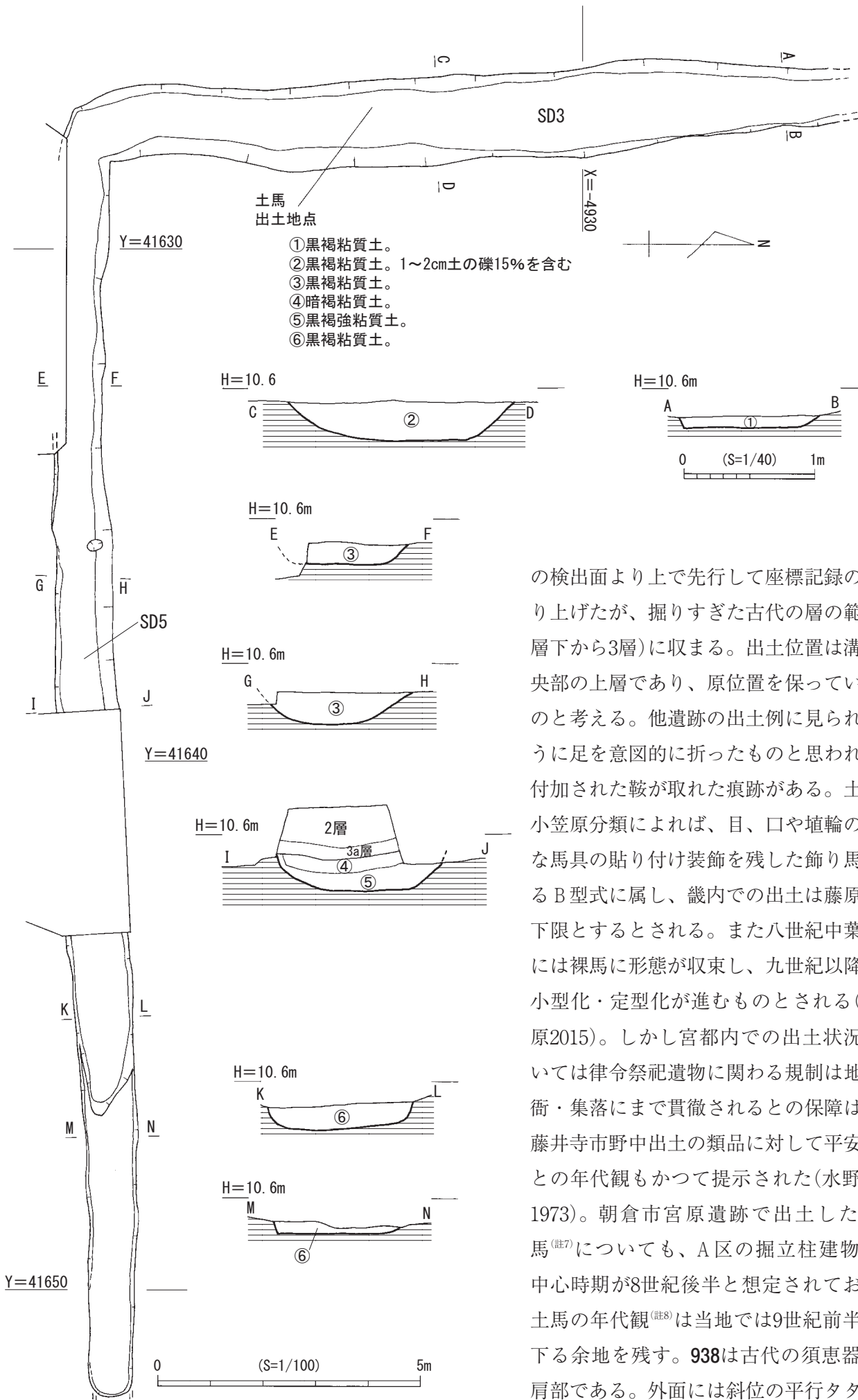


図版191 土馬出土状況(西から)

遺物は2点認識した。937は土師質の土馬である。その位置は第269図に示したとおりである。SD03



図版192 SD03出土遺物



の検出面より上で先行して座標記録の上取り上げたが、掘りすぎた古代の層の範囲(2層下から3層)に収まる。出土位置は溝の中央部の上層であり、原位置を保っているものと考えられる。他遺跡の出土例に見られるように足を意図的に折ったものと思われる。付加された鞍が取れた痕跡がある。土馬の小笠原分類によれば、目、口や埴輪のような馬具の貼り付け装飾を残した飾り馬であるB型式に属し、畿内での出土は藤原京を下限とするとされる。また八世紀中葉までには裸馬に形態が収束し、九世紀以降には小型化・定型化が進むものとされる(小笠原2015)。しかし宮都内での出土状況、ひいては律令祭祀遺物に関わる規制は地方官衙・集落にまで貫徹されるとの保障はなく、藤井寺市野中出土の類品に対して平安前期との年代観もかつて提示された(水野正好1973)。朝倉市宮原遺跡で出土した飾り馬<sup>(註7)</sup>についても、A区の掘立柱建物群の中心時期が8世紀後半と想定されており、土馬の年代観<sup>(註8)</sup>は当地では9世紀前半まで下る余地を残す。938は古代の須恵器甕の肩部である。外面には斜位の平行タタキと

第269図 SD03・SD05平・断面図(平面図1/100, 断面図1/40)

上位にカキメが見られ、内面は当て具痕をナデ消している。

第99表 SD03出土土製品観察表

遺物番号	器種	部位	法量 (cm)			成形 円筒形の芯で頸部~胴部の型を作った後、 脚や馬具を貼付け	色調	焼成	胎土	備考
			長さ	高さ	厚さ					
937	土馬	体部~頸部	(14.8)	(9.3)	(4.4)		橙色	良好	精良 金雲母 長石	脚、尻尾、鞍、口が欠損

第100表 SD03出土土器観察表

遺物番号	器種	部位	法量 (cm)			調整		色調		焼成	胎土	備考
			口径	器高	底径	外面	内面	外面	内面			
938	須恵器 甕	肩部	—	(4.5)	—	平行タタキ、上位にカキメ	当て具痕ナデ消し	灰色	灰色	良好	長石、石英	

(註6)律令祭祀の観点からの評価は、筑後平野の朝倉市宮原遺跡や吉備の類似事例との比較を含め、竹松遺跡から出土した村落寺院関係の遺構・遺物について論じた別の機会に触れた。先述の四面廂建物 SB05を村落寺院の中核施設として考えている(堀内2017)。

(註7)宮原遺跡の総括報告書(武田ほか1998)で、遺跡の年代の見当を行った児玉真一は、遺構精査中に地山直上から出土した須恵質の完形土馬については年代観を保留しつつ、他の円面硯や端整な字形の墨書土器、土製権、香炉蓋を正方位の掘立柱建物群 A 群に付随するものとし、年代については奈良時代を中心に、一部は9世紀前半に入ると結論付けた。これら特殊遺物のセット関係は竹松遺跡に酷似する。

(註8)北部九州全体の状況から見た竹松遺跡出土土器の様相との関連で、小結で述べる。

【参考文献】

小笠原好彦2015「土馬考」『日本古代の宮都と文物』吉川弘文館(初出1975)

武田光正・児玉真一・伊崎俊秋1998『甘木市所在宮原遺跡Ⅴ』九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告52、福岡県教育委員会  
堀内和宏2017「竹松遺跡と西日本の村落寺院」『民衆史研究』第93号、民衆史研究会

水野正好1973「藤井寺市野中発見の土馬」『節・光・仙』〔大阪府文化財調査速報〕第21号・大阪府教育委員会文化財保護課

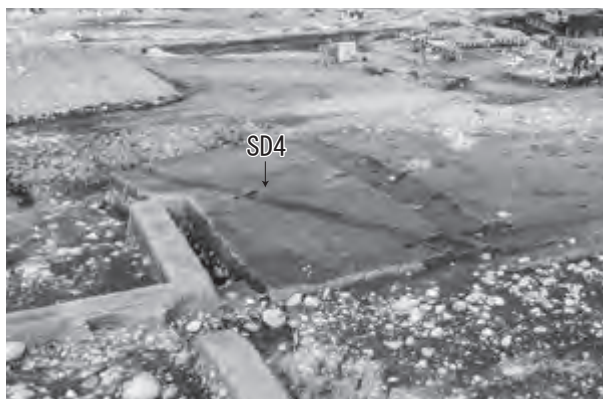
水野正好1983「馬・馬・馬—その語りの考古学」『文化財学報』第2号、奈良大学文学部文化財学科

山中敏史2003『古代の官衙遺跡Ⅱ 遺物・遺構編』独立行政法人文化財研究所奈良文化財研究所

② SD04(第270図、図版193~195)

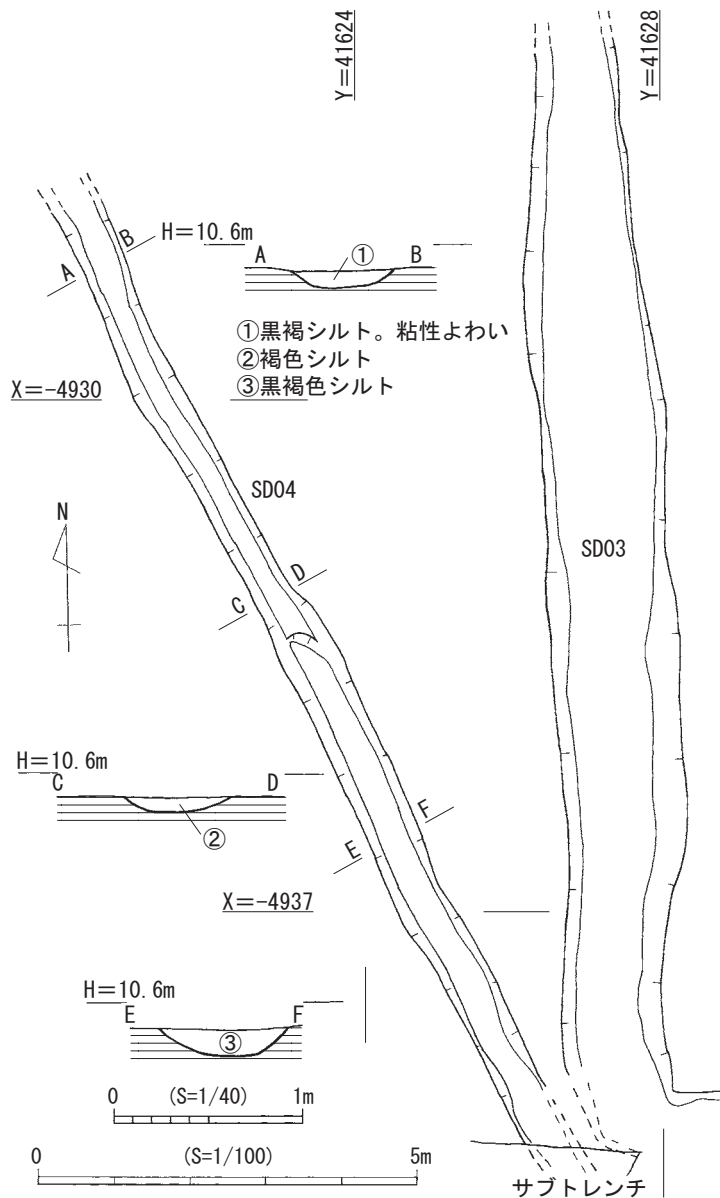


図版193 SD04検出状況(南西から)



図版194 SD04完掘状況(南西から)





第270図 SD04平・断面図(平面1/100, 断面1/40)

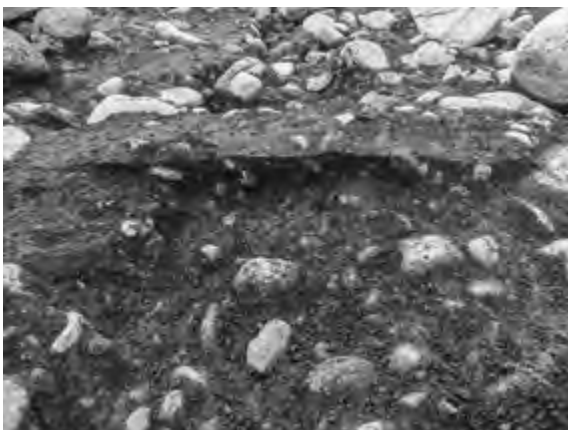


図版195 SD04断面状況(北から)

小調査区⑤区の9262グリッドの3層から検出した斜行溝である。正方位を取るSD03・05と異なり、真北から27度西に傾く。断面形状はレンズ状である。残存深度は20cm未満であり、西端で深度を下げ減らし消失する。後世の削平が激しいためと考えられる。⑤区の掘立柱建物群に伴う区画溝に含まれるものと解される。SD03・05の項で先述のように南北溝SD05との切り合いは調査では不明である。新旧関係は⑤区の遺構配置全体を検討して断すべきであろう。

検出が遅れたこともあり、本遺構からの遺物の取り上げはなかった。

③ SD08(図版196)



図版196 SD08完掘状況(東から)

小調査区⑧区の9268グリッドの南端近くで検出した溝である。先述した⑤区のSD05の東側の延長線上に位置する。⑤区と⑧区の間には未調査の既存農道部及び調査済みのTAK201108調査区(『竹松遺跡I』で報告済み)が位置する。⑧区の調査では、礫層に掘り込むわずかな遺構の残存面を検出する困難があった。平面形状は第253図に示した通りである。礫層に掘り込んだ黒褐色の埋土を有するが、残存深度は10cm程度である。出土遺物はなかった。

#### (4) 土坑(SK)

2013年度調査区の中に分布する多くの土坑の中で、TAK201302調査区の⑤区の掘立柱建物群(SB02~04)の北東側には、取り分け多くの廃棄土坑が存する。全て暗褐色粘質土の3層から検出した。建物群の北東側にも関連遺構が分布していた可能性があるが、④区との境界部分に広範に先行トレンチを入れたために、平面的な遺構検出を十分に行えなかったことを遺憾とする。トレンチの西側については作業用通路として調査前半で使用したために、遺構検出及び掘削作業は本ページ下の図版199・200に見るように残りの調査区に比べて遅れて行うこととなった。

不明遺構として報告したSX04(同④区)・SX07・SX08を含め、これら掘立柱建物と関連する遺構であると認識する。過年度調査のTAK201202④区(『竹松遺跡Ⅱ』で報告済)の、遺物が出土しなかったため未報告の土坑群も関連すると考えられ、その概要のみを第5表で補足する。概ね先述の区画溝SD03・05及び斜行溝SD04で区画される範囲に集中するが、一部はこれらの溝の西及び南側に展開する。これらの遺構群の南西側で斜行する溝状遺構SX06・10(後述)で区切られる範囲に土坑群の分布は収束する。

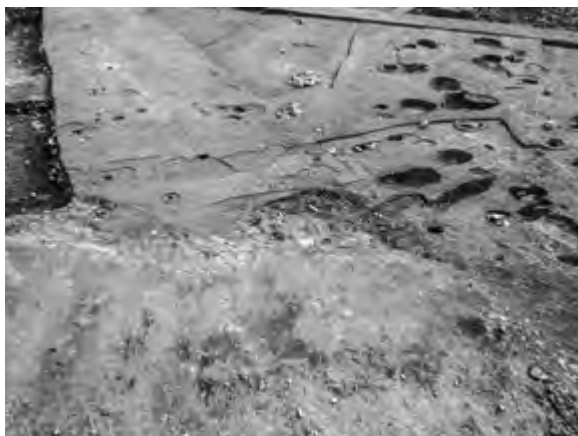
本節では、土器などの遺物が出土した土坑を中心に報告し、⑤区に限っては連続して蟻の巣状や溝状を呈する特異な形状のもの(SK18, 25, 29~34, 38, 44, 47, 49~54, 56, 62, 92)や、掘立柱建物の柱穴や溝などとの平面重複関係を有するもの(SK12, 18, 24, 25, 26, 29, 30, 32, 42, 65)、及び概ね1m以上の法量を持つ円形または楕円形の大型土坑(SK17, 26, 35, 36, 37, 43, 44, 55, 58)をも本文で報告した。その他の



図版197 TAK201302⑤区土坑群(SK12~25・92) 検出状況(北東から)



図版198 TAK201302⑤区土坑群(SK12~25・92) 完掘状況(北東から)



図版199 TAK201302⑤区土坑群(SK)北東側検出状況(北から)



図版200 TAK201302⑤区土坑群検出・完掘状況(北から)

区の土坑についてはピット状の特徴のないものが多く、遺物が出土せず時期も不明のものが多い。従って遺物の出土を見ない土坑については、各小調査区別の遺構配置図のみの情報提示に留めることとした。

①SK12(第271図、図版197・198・201~203)

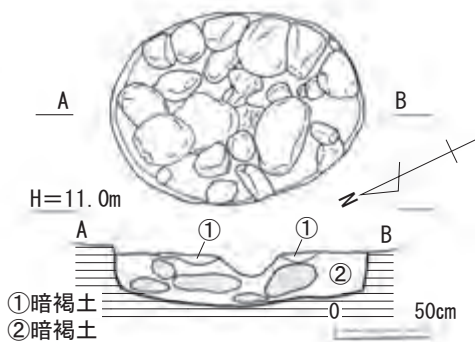
小調査区⑤区9262グリッドの3層で検出した楕円形の土坑である。最大長は1.32m、残存深度約30cm以上を測る。礫までを完掘した状況の断面図がないことを遺憾とする。掘立柱建物SB03の調査段階の断面図を見るに、SB03-P14を切るように現場段階では認識している。検出状況を示す右の図版201から、SK12北側部分がSB3-P14に切られている状況が見て取れる。



図版201 SK12検出状況(北から)

最上部の中央に礫を置き、下層に人頭大の礫が詰められていた。検出段階で上部の礫は抜き取られていた。中央の礫の周囲の上層には黄褐色粒と焼土を含む部分が疎らに分布していた。遺物の出土はなかった。先にSK12を検出したが、先述のように、SB03の二つの柱穴に切られる。SK12とSB04との新旧・重複関係は不明である。

出土遺物には鎬蓮弁文を有する龍泉窯青磁碗の破片を含むが、細片のため図示しえない。



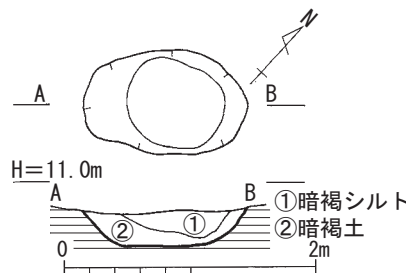
第271図 SK12平・断面図(1/40)



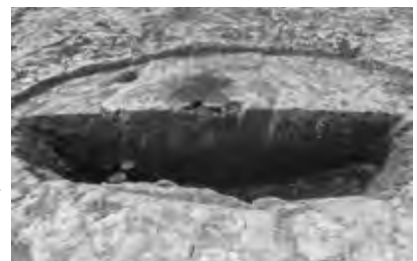
図版202 SK12断面状況(西から) 図版203 SK12掘削状況(西から)

②SK13(第272図、図版197・198・204)

小調査区⑤区の9262グリッド3層で検出した楕円形の土坑である。長軸1.3m、短軸0.85m、残存深度30cmを測る。底部近くから、図化しえない土器片が出土した。



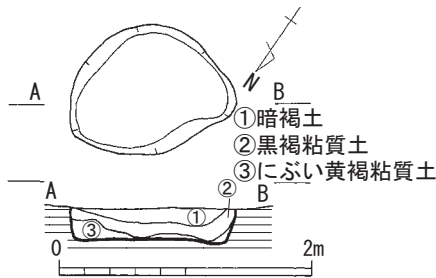
第272図 SK13平・断面図(1/60)



図版204 SK13断面状況(南東から)

③SK15(第273図、図版197・198・205)

小調査区⑤区9262グリッドの3層で検出したやや瓢箪に似た楕円形の平面形状を呈する土坑である。長軸1.3m、短軸1.05m、残存深度25cmを測る。出土遺物は細片で図化しえない。



第273図 SK15平・断面図(1/60)

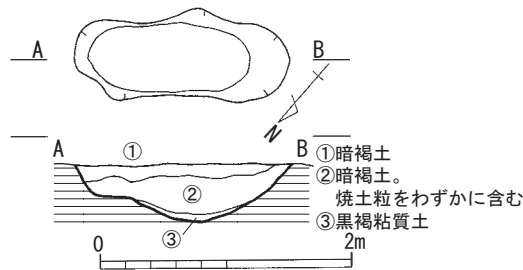


図版205 SK15断面状況(南東から)

④SK16(第274・275図、第101表、図版197・198・206・207)

小調査区⑤区9262グリ

ッドの3層で検出した楕円形の土坑である。SK17・92に近接する。長軸1.3m、短軸1.05m、残存深度45cmを測る。連続的に掘削された廃棄土坑であり、暗褐色土が水平に堆積し、一気に埋められたものと考えられる。ほぼ完形の黑色土器碗が出土した。939は両黒の黑色土器B類である。土師器の大宰府編年を参照すれば(山本 1990)、高台が細く屈曲し、口縁端部がやや外反する形態は十世紀のものである(山本編年Ⅷ・Ⅸ期)。



第274図 SK16平・断面図(1/60)



図版206 SK16断面状況(北から)

第101表 SK16出土土器観察表

遺物番号	器種	部位	法量(cm)			調整		色調		焼成	胎土	備考
			口径	器高	底径	内面	外面	内面	外面			
939	黑色土器碗	ほぼ完形	15.2	6.25	8.4	回転ナデ	回転ナデ	暗灰色		良好	精良	



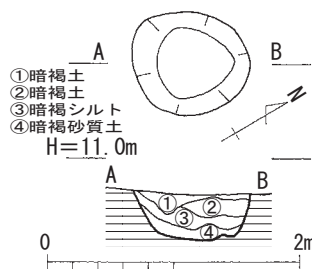
図版207 SK16出土遺物



第275図 SK16出土遺物(1/3)

⑤SK17(第276図、図版197・198・208)

小調査区⑤区9262グリッドの3層で検出した円形の土坑である。長軸90cm、短軸80cm、残存深度35cmを測る。水平堆積の最上層に円錐状の土層が切り込む。出土遺物は細片で図化しえない。



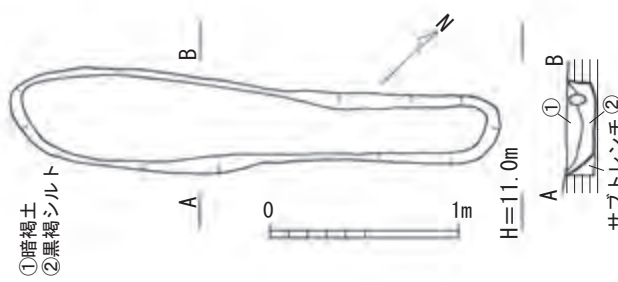
第276図 SK17平・断面図(1/60)



図版208 SK17断面状況(北から)

⑥SK18(第277図、図版197・198・209)

小調査区⑤区9262グリッドの3層で検出した細長い土坑である。長軸2.6m、短軸50cm、残存深度20cmを測る。溝SD03と平面配置で重なるが、



第277図 SK18平・断面図(1/40)

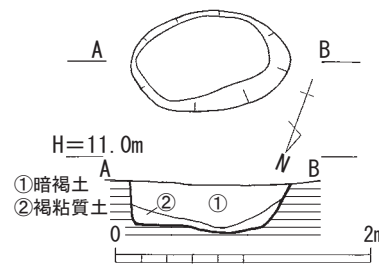


図版209 SK18断面状況(北東から)

検出レベルが異なるため、切り合い関係は不明である。南西側の断面線付近に平面と立ち上がりの形状が不自然な部分があるが、本遺構の調査段階で検出していなかったSD03の上層部分と切り合っていた可能性がある。SD03~05は暗褐色の3層に切り込む暗褐色の埋土を有するため、検出が困難であり、SD03の遺構調査が⑤区の調査の最終段階となったためである。遺物としては古代の須恵器杯身片、白磁Ⅳ類及び龍泉窯青磁椀Ⅱ類が出土したが、細片のため図化しえない。

⑦SK19(第278図、図版197・198・210)

小調査区⑤区9262グリッドの3層で検出した楕円形の土坑である。SK42と切り合う。長軸1.25m、短軸0.8m、残存深度40cmを測る。出土遺物は細片で図化しえない。



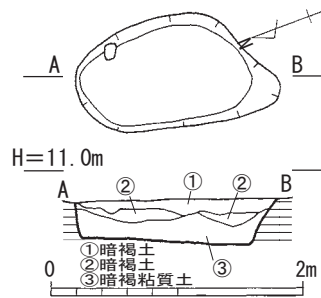
第278図 SK19平・断面図(1/60)



図版210 SK19断面状況(西から)

⑧SK20(第279・280図、第102表、図版197・198・211・212)

小調査区⑤区9262グリッドの3層で検出した楕円形の土坑である。長軸1.6m、短軸0.9m、残存深度35cmを測る。中層に小土坑の痕跡が残存しており、図版211には掘削の中間段階を示す。出土遺物は8世紀末の須恵器杯身の底部片940である。



第279図 SK20平・断面図(1/60)



図版211 SK20断面状況(西から)



第280図 SK20出土遺物(1/3)



図版212 SK20出土遺物

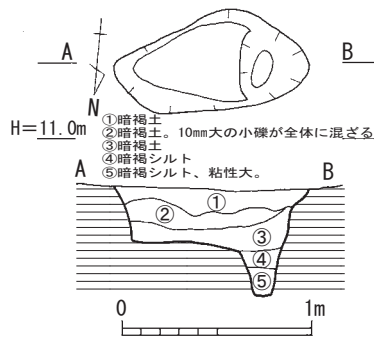
第102表 SK20出土土器観察表

遺物番号	器種	部位	法量(cm)			調整		色調		焼成	胎土	備考
			口径	器高	底径	外面	内面	外面	内面			
940	須恵器 杯	底部	—	(2.0)	(10.0)	—	—	灰色	灰白色	良好	長石	貼り付け高台

⑨SK23(第281・282図、第103表、図版197・198・213・214)

小調査区⑤区9262グリッド3層で検出した楕円形の土坑である。長軸1m、短軸50cm、残存深度30cmを測り、部分的に樹痕状の深まりを持つ。

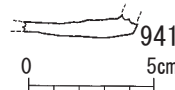
遺物として貿易陶器片941が出土した。壺の底部片と考えられる。内外面に褐釉がかかり、内面にナデ痕がある。胎土はやや粗であり、胎土に含まれる気泡により表面に凹凸が出来ている。



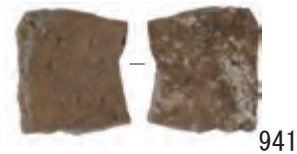
第281図 SK23平・断面図(1/40)



図版213 SK23断面状況(北から)



第282図 SK23出土遺物(1/3)



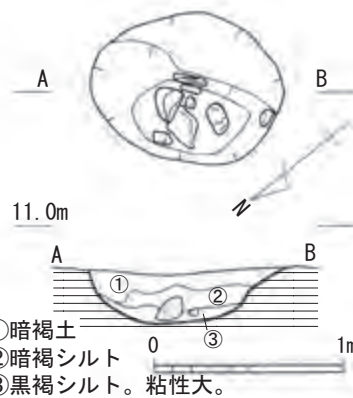
図版214 SK23出土遺物

第103表 SK23出土土器観察表

遺物番号	器種	部位	法量(cm)			調整		色調		焼成	胎土	備考
			口径	器高	底径	外面	内面	外面	内面			
941	貿易陶器 壺	底部	—	(0.9)	—	—	ナデ	褐色	にぶい褐色	良好	—	内外面に褐釉

⑩SK24(第283図、図版197・198・215)

小調査区⑤区9262グリッドの3層で検出した楕円形の土坑である。長軸1m、短軸75cm、残存深度25cmを測る。出土遺物は細片のため図化できない。



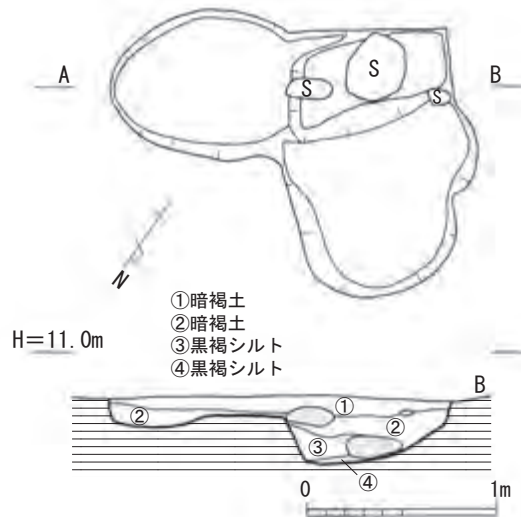
第283図 SK24平・断面図(1/40)



図版215 SK24断面状況(北から)

⑪SK25 (第284図、図版197・198・216)

小調査区⑤区9262グリッドの3層で検出したL字状の連続土坑である。SK24の北側に位置する。



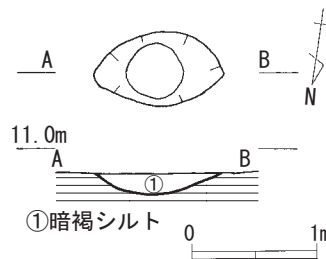
第284図 SK25平・断面図(1/40)



図版216 SK25断面状況(北西から)

⑫SK26 (第285・286図、第104表、図版217・218)

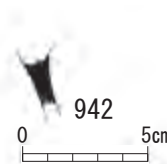
小調査区⑤区9262グリッドの3層で検出した楕円形の土坑である。SB03-P11, P10の柱間に位置する。長軸1m、短軸60cm、残存深度35cmを測る。須恵器高杯の脚部片942が出土した。全体の器形は復元できない。



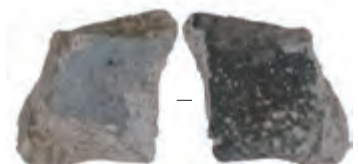
第285図 SK26平・断面図(1/60)



図版217 SK26完掘状況(北から)



第286図 SK26出土遺物(1/3)



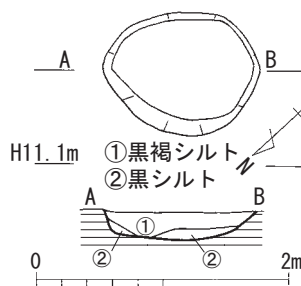
図版218 SK26出土遺物

第104表 SK26出土土器観察表

遺物番号	器種	部位	法量(cm)			調整		色調		焼成	胎土	備考
			口径	器高	底径	外面	内面	外面	内面			
942	須恵器 高杯	脚部	—	(2.2)	—	—	—	褐灰色	褐灰色	良好	—	上端部

⑬SK27 (第287図、図版219)

小調査区⑤区9464グリッドの3層で検出した円形の土坑である。建物群の南側の調査区南端際に位置する。長軸1.2m、短軸90cm、残存深度20cmを測る。出土遺物は細片のため図化できない。



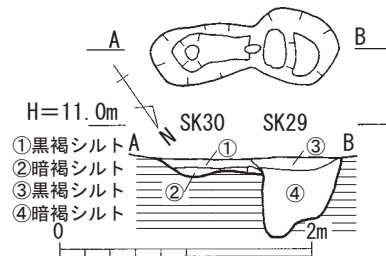
第287図 SK27平・断面図(1/60)



図版219 SK27断面状況(北から)

⑭SK29・30(第288図、図版220・221)

小調査区⑤区9262グリッドの3層で検出した連続土坑である。SK29がSK30を切る。SD03の南半と平面配置が重なる。SK18の場合と同様にSD03と検出レベルが異なり、切り合い(新旧)関係は確認できない。SK29はやや楕円形の柱穴状で、長軸70cm、短軸60cm、残存深度65cmを測る。SK30は浅い楕円状で、長軸はSK29に切られるため不明で、短軸45cm、残存深度15cmを測る。出土遺物は貿易陶器の破片があるが、細片で図化できない。



第288図 SK29・30平・断面図 (1/60)



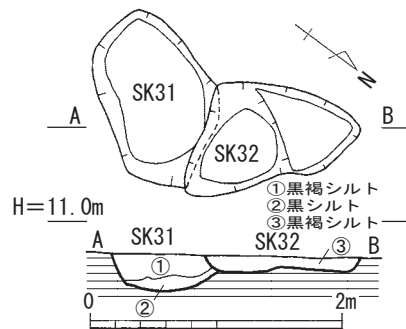
図版220 SK29断面状況 (東から)



図版221 SK30断面状況 (東から)

⑮SK31・32(第289図、図版222)

小調査区⑤区9262グリッドの3層で検出したL字状の連続土坑である。SK32がSK31を切る。SK31は楕円状で、長軸1.2m、短軸90cm、残存深度30cmを測る。SK32は帆立貝状の平面形を呈し、ほとんど時期を隔てず二段階の掘削が行われた痕跡が断面形から読み取れる。長軸1.5m、短軸80cm、残存深度15cmを測る。出土遺物は細片のため図化できない。



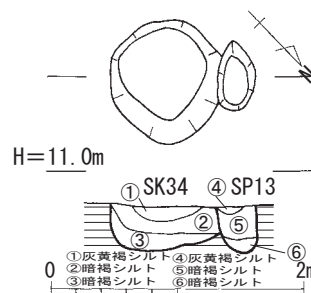
第289図 SK31・32平・断面図 (1/60)



図版222 SK31・32断面状況 (北東から)

⑯SK34(第290図、図版223)

小調査区⑤区9262グリッドの3層で検出した円形の土坑である。北西側を⑤区SP13が切る。一段下げ検出の段階で南東側にピットを検出したが、掘削の結果、明確な形状を示さなかった。長軸90cm、短軸80cm、残存深度30cmを測る。出土遺物は細片のため図化できない。



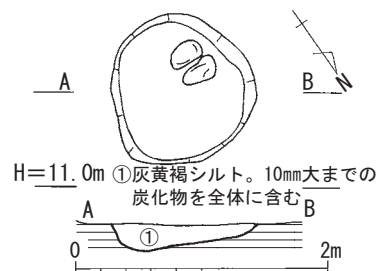
第290図 SK34平・断面図 (1/60)



図版223 SK34断面状況 (東から)

⑰SK35(第291図、図版224)

小調査区⑤区9262グリッドの3層で検出した浅い円形の土坑である。底面はやや傾き、南東側がやや深い。



第291図 SK35平・断面図 (1/60)



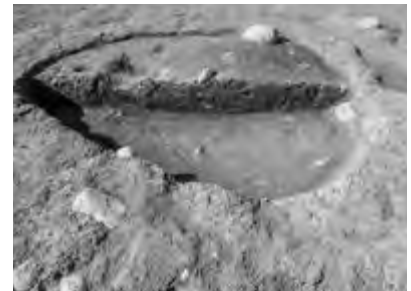
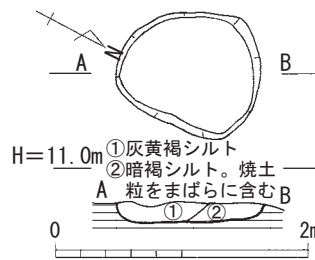
図版224 SK35断面状況 (東から)



底部の深度は下のSK36に近い。形状はレンズ状でやや異なるが、SK37、SK43・44とも深度は似る。これらの遺構の掘削時の生活面は他の土坑よりやや高く、他の土坑と時期差があるものと想定される。直径115cm、残存深度20cmを測る。

⑱SK36(第292図、図版225)

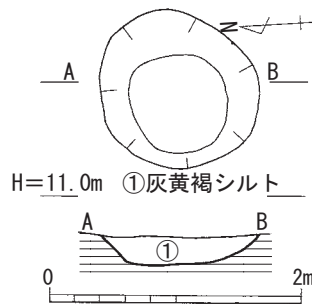
小調査区⑤区9462グリッドの3層で検出した浅い円形の土坑である。長軸1.1m、短軸90cm、残存深度15cmを測る。形状及び底部の深度が先述のようにSK35などと似ており、共通した性格を読み取れる。出土遺物は細片で、図化できない。



第292図 SK36平・断面図 (1/60) 図版225 SK36断面状況(東から)

⑲SK37(第293図、図版226)

小調査区⑤区9262グリッドの3層で検出した円形の土坑である。レンズ状で残存深度は浅い。SK13の北西にあり、さらに北西に位置するSK38と接する。直径1.3m、残存深度25cmを測る。遺物の取り上げは見られなかった。

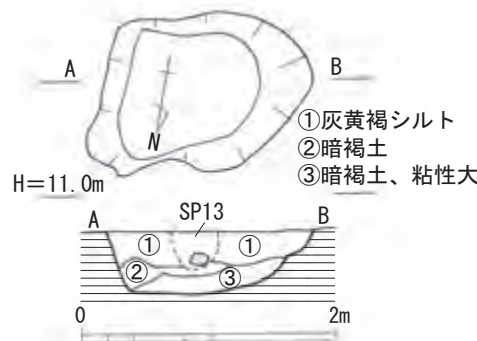


第293図 SK37平・断面図 (1/60) 図版226 SK37断面状況(北から)

⑳SK38(第294図、図版227)

小調査区⑤区9262グリッドの3層で検出した不定形の土坑である。

上層中央に⑤区SP13が切り込む。区画溝SD03・05の範囲内にある。長軸1.7m、短軸1.25m、残存深度50cmを測る。断面は平面堆積を示し、短期間に埋められたことが想定される。SP13の地固めと見るには土坑が大きく、不整形である。



第294図 SK38平・断面図(1/60) 図版227 SK38断面状況(北から)

形成時期を異にする遺構と考えられる。出土遺物は細片で図化できなかった。

㉑SK42(第295図、図版228)

小調査区⑤区9262グリッドの3層で検出した楕円形の土坑である。長軸70cm、短軸60cm、残存深度40cmを測る。柱穴の

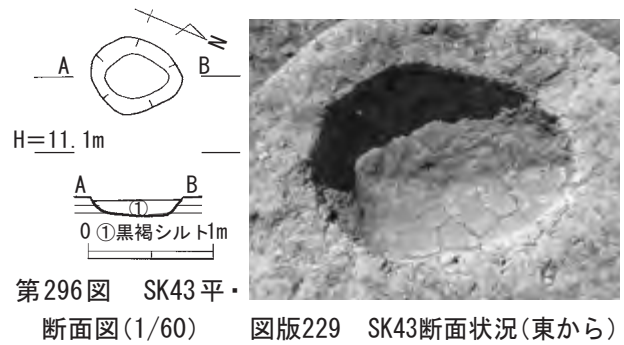


第295図 SK42平・断面図 (1/60) 図版228 SK42断面状況(北西から)

可能性を残す。SK19の北東に位置して切り合うが、新旧関係などは判断できなかった。出土遺物は細片のため図化できない。

②SK43(第296図、図版229)

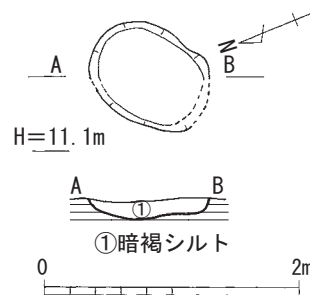
小調査区⑤区9464グリッドの3層で検出した円形土坑である。残存深度は浅く、レンズ状を呈する。SD05の南側の区画溝外に位置する。直径0.7m、残存深度15cmを測る。出土遺物は細片のため図化できない。



第296図 SK43平・断面図(1/60) 図版229 SK43断面状況(東から)

③SK44(第297図、図版230・231)

小調査区⑤区9464グリッドの3層で検出した楕円形の平面形状を呈する土坑である。一段下げ検出から半截段階に至る



第297図 SK44平・断面図(1/60)



図版230 SK44検出状況(北西から)



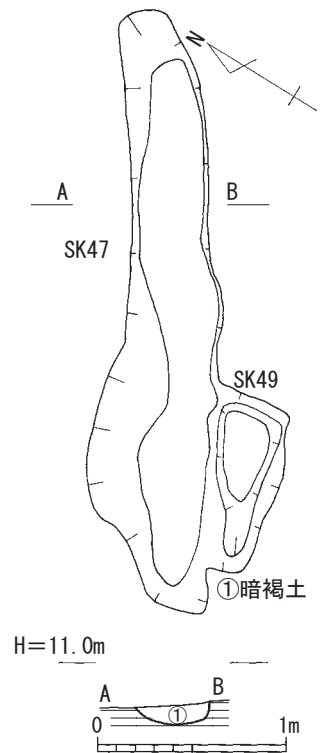
図版231 SK44半截状況(北西から)

まで平面形状の認識が不明確であったことから、長軸方向にサブトレンチを開けて、断面形状から遺構範囲を確定した。半截段階で掘り過ぎの部分を含む。長軸約1m、短軸75cm、残存深度15cmを測る。出土遺物は細片のため図化できない。

④SK47・49(第298図)

小調査区⑤区9262グリッドの3層で検出した不整形の連続土坑である。SK47が溝状で長軸4.7m、短軸で最大1.0m、最大深度15cmを測る。真北から西へ54度傾く。SK49はその南東側に位置する長軸1.3m程度の鋭角な三角形の不整形土坑である。調査記録からは新旧関係は明らかではない。いずれも大幅な削平を受けているものと思われる。

出土遺物は細片のため図化できない。



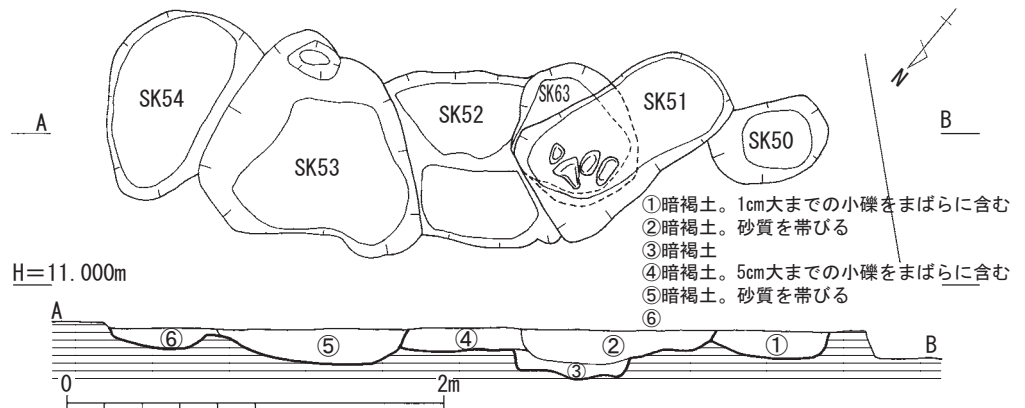
第298図 SK47・49平・断面図(1/40)

②SK50～54・63(第299図、図版232～234)

小調査区⑤区9262  
グリッドの3層で検  
出した不整形の連続  
土坑である。SK50の  
南西側にはSK61が  
位置するが、調査工  
程の事情により別段  
階での調査となった。  
真北から東へ52度傾  
いた方位を長軸とす

る。長軸の総延長は3.8mを測る。SK50  
は楕円形で長軸70cm、短軸40cm、深さ15  
cm、SK51はやや細長い将棋の駒状で、長  
軸1.2m、短軸60cm、深さ18cm、SK63は直  
径70cm強、深さ25cmのほぼ円形、SK53は  
1辺約1.1m、深さ20cmの正三角形状、SK54  
は長軸1m、短軸80cmの楕円形状を示す。  
SK52は二つの底部を持つ不整形の土坑で  
あり、さらに複数の土坑が切りあっていた  
可能性がある。南西からSK50・51・  
63・52・53・54の順に並ぶ。SK50はその  
南西のSK61を切る。切り合い関係につ  
いては、SK51がSK50とSK63を  
切り、SK63がSK52を切る。また  
SK53がSK52とSK54を切る。SK51  
とSK53の新旧関係は分からな  
い。

出土遺物はいずれも細片で図  
化できない。



第299図 SK50～54・63平・断面図(1/40)



図版232 SK50～54・63断面状況(北から)



図版233 SK52完掘状況(北から)



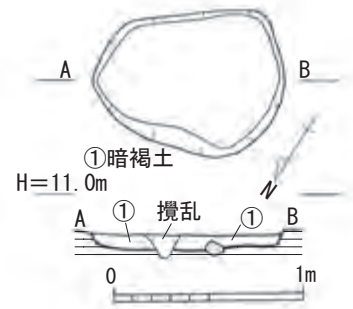
図版234 SK53断面状況(北から)

②⑥SK55(第300図、図版235)

小調査区⑤区9262グリッドの3層で検出した不整形の土坑である。長軸1m、短軸75cm、残存深度15cmを測る。断面形でクサビ状の攪乱が入る。出土遺物は細片のため図化できない。



図版235 SK55断面状況  
(北から)



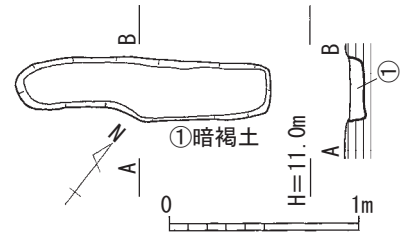
第300図 SK55平・断面図  
(1/40)

②⑦SK56(第301図、図版236)

小調査区⑤区9262グリッドの3層で検出した溝状の連続土坑である。SK55の南側に接する。長軸135cm、短軸30cm、残存深度20cmを測る。出土遺物は細片のため図化できない。



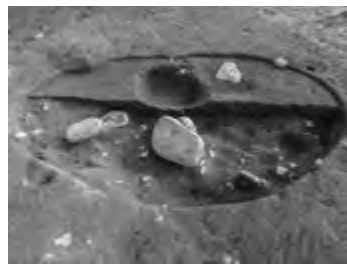
図版236 SK56断面状況  
(東から)



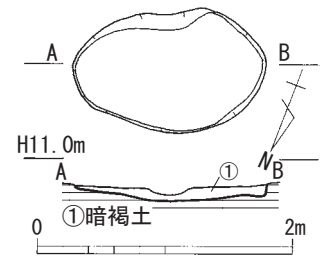
第301図 SK56平・断面図(1/40)

②⑧SK58(第302・303図、第105表、図版237・238)

小調査区⑤区9262グリッドの3層で検出したレンズ豆状の浅い土坑である。SB03・04の北辺に接する。長軸1.5m、短軸1m弱、残存深度10cmを測る。西隣に30cmほどの距離を置いて、礫が詰められた円形土坑のSK65が位置する。須恵器甕の頸部片943が出土した。外面と断面に成形時の粘土紐接合痕が残る。



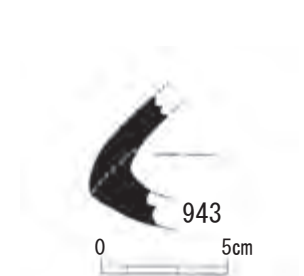
図版237 SK58断面状況  
(北から)



第302図 SK58平・断面図  
(1/60)



図版238 SK58出土遺物



第303図 SK58出土遺物  
(1/3)

第105表 SK58出土土器観察表

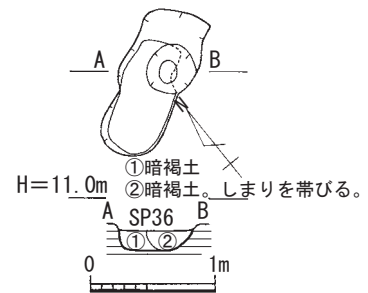
遺物番号	器種	部位	法量(cm)			調整		色調		焼成	胎土	備考
			口径	器高	底径	外面	内面	外面	内面			
943	須恵器 甕	頸部	—	(5.1)	—	タタキ痕ナデ消し	当て具痕ナデ消し	灰色	灰色	良好	—	粘土紐接合痕が残る

②9SK62(第304図、図版239・240)

小調査区⑤区9262グリッドの3層で検出した楕円状の不整形な土坑である。長軸1.2m、短軸50cm程度、残存深度5～25cm程度を測る。SK50以下の先述の連続土坑が北東側に続く。これらの連続土坑とは調査段階がずれたため、両者の切り合いの詳細は確認しておらず、平面形状には不確実な要素を残す。SK50が新しい。出土遺物は細片のため図化できない。



図版239 SK62断面状況  
(西から)



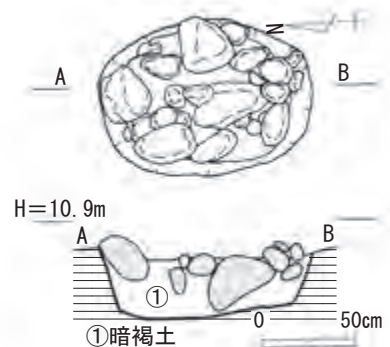
第304図 SK62平・断面図(1/60)

③0SK65(第305図、図版241・242)

小調査区⑤区9262グリッドの3層で検出したバケツ状の円形土坑である。最大40cm大の礫が詰められている。また、下端から鋭角に立ち上がる断面形状を示し、他の(多くは浅い)円形土坑とは異質の要素を含む。長軸115cm、短軸85cm、残存深度40cmを測る。SB03-P13とSB04-P9の南西にほぼ接するが、これらの柱穴と切り合い関係がなく、新旧は不明である。遺物は出土しなかった。



図版240 SK62完掘状況  
(北西から)



第305図 SK65平・断面図(1/40)



図版241 SK65断面状況  
(西から)



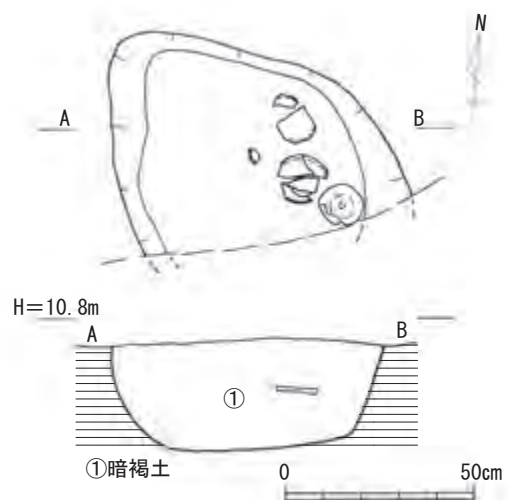
図版242 SK65完掘状況  
(西から)

③1SK66(第306・307図、第106表、図版243～245)

小調査区⑤区9460グリッドの3層で検出した楕円形の土坑である。遺構認定の段階で南側が既に掘削済みであったため、平面形状には不明な状況を残す。長軸は70cm程度と推定され、短軸60cm、深さ30cmを測る。土師器杯944と黒色土器椀、須恵器甕の図化しえない胴部片が出土した。黒色土器椀が共伴したが、現在所在を探索中である。土師器杯は高台がなく、上端が傾き、外面の回転ナデの方向も上端の傾きに近づいた歪



図版243 SK66断面状況(南から)

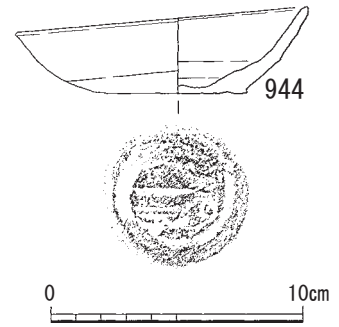


第306図 SK66平・断面図(1/20)

んだ形状である。底部には板状圧痕を有し、外面にロクロ目を残す。底部と体部の稜線が明瞭な部分と丸みを帯びた部分が混じり、大宰府の山本編年のⅦ期とⅧ期(山本1990)、不丁地区のⅢc期とⅣ期の間の中間的な様相を呈する。9世紀の半ばの幅を持った年代が想定される。



図版244 SK66遺物出土状況



第307図 SK66出土遺物 (1/3)



図版245 SK66出土遺物

第106表 SK66出土土器観察表

遺物番号	器種	部位	法量(cm)			調整		色調		焼成	胎土	備考
			口径	器高	底径	内面	外面	内面	外面			
944	土師器杯	完形	11.6	3.4	5.6	回転ナデ	回転ナデ	橙色	良好	やや良	歪み大きい	

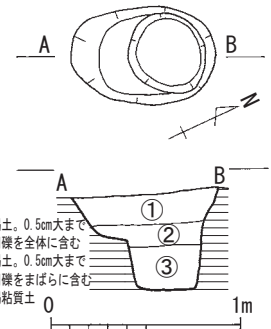
③SK71(第308・309図、第107表、図版246・247)

小調査区⑤区の9262グリッド3層から検出した楕円形の土坑である。長軸75cm、短軸50cm、残存深度55cmを測り、北側が部分的に深まっている。

須恵器の長頸壺945が出土した。高台付きの底部から体部の下半が残存する。体部下半に右方向の回転ヘラケズリを行ったのち高台を貼り付けている。8世紀後半のものと思われる。



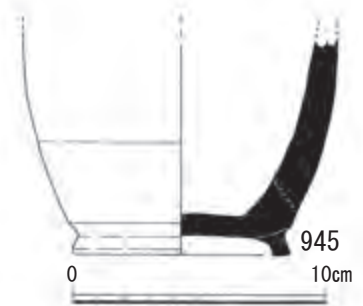
図版246 SK71断面状況(東から)



第308図 SK71平・断面図 (1/40)



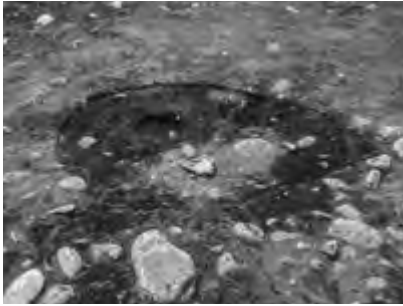
図版247 SK71出土遺物



第309図 SK71出土遺物(1/3)

第107表 SK71出土土器観察表

遺物番号	器種	部位	法量(cm)			調整		色調		焼成	胎土	備考
			口径	器高	底径	外面	内面	外面	内面			
945	須恵器 長頸壺	底部	—	(8.5)	(8.6)	体部下半右回転ヘラケズリ	—	褐灰色	明褐色	良好	石英・長石・黒色粒子	貼り付け高台



図版248 SK72検出状況(東から)



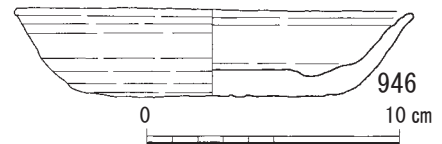
図版249 SK72断面状況(東から)



図版250 SK72完掘状況(東から)



第310図 SK72平・断面図(1/20)



第311図 SK72出土遺物(1/3)



図版251 SK72出土遺物

③SK72(第310・311図、第108表、図版248～251)

小調査区⑥区9862グリッドの4層で検出した楕円形の土坑である。長軸1.6m、短軸120cm、残存深度15cmを測る。完形の土師器杯946が出土した。杯aであり、平底をなすが、体部との境はシャープではない。ロクロ成形の後の調整については、比較的丁寧なナデのみでヘラミガキを行っていない。ヘラ切り後に簡単なナデ調整を行った底部外面には一部に板状圧痕を残す。底部見込みには簡単な指ナデを施す。わずかに口縁端部が外反する。口径15.4cmとやや大ぶりではあるが、8世紀中頃の所産で、大宰府編年Ⅲ期に並行すると考えられる。北側の⑤区の掘立柱建物・土坑群と年代が一致するものと見る。

第108表 SK72出土土器観察表

遺物番号	器種	部位	法量(cm)			調整		色調		焼成	胎土	備考
			口径	器高	底径	内面	外面	内面	外面			
946	土師器椀	ほぼ完形	15.4	3.5	8.5	回転ナデ	回転ナデ	にぶい黄橙色	良好	精良		

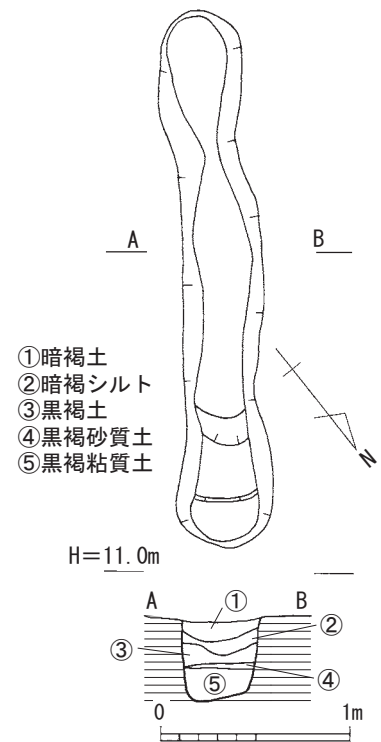
③SK92(第312図、図版197・198・252)

小調査区⑤区9262グリッドの3層で検出した溝状の土坑である。現場調査の段階では溝SDとして遺構認定し、調査を進めたが、連続的に掘削された廃棄土坑と見られるため、TAK201302の小調査区



図版252 SK92断面状況(北東から)

①～②区まで通しの遺構略号の土坑SKの末尾に再付番した。長軸2.8m、短軸40cm程度、最大深度45cmを測る。断面形状が水平堆積をなしていることから、人為的に短期間に埋められたものと考えられる。遺物は古代の須恵器杯身や龍泉窯青磁片などが出土しているが、細片のため図示できない。



第312図 SK92平・断面図(1/40)

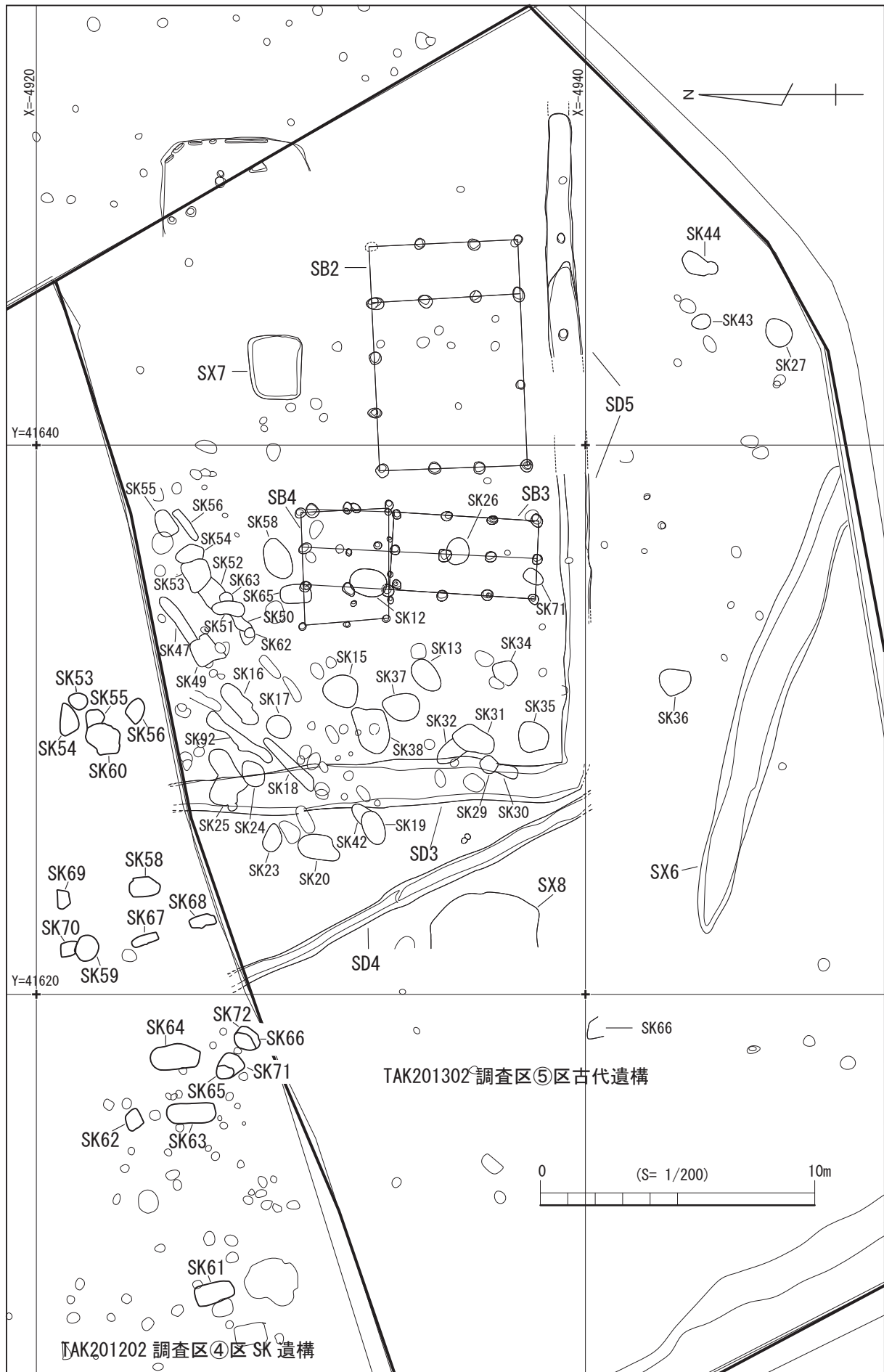
③TAK201202④区の未報告土坑について(第313図、第109表)

TAK201302⑤区の北側に隣接する TAK201202調査区④区(『竹松遺跡Ⅱ』新幹線文化財調査事務所調査報告書第5集で報告済み)でも10基以上の土坑がこれらの居館に伴う土坑群の一環として検出されているが、遺物の出土を見ず、形状も概ねピット状を呈したため、『竹松遺跡Ⅱ』では本文に記述していない。本報告では、⑤区の遺構群との関係に鑑み、遺構配置図と土坑一覧表を提示する。

第109表 TAK201202④区関連土坑一覧表

遺構番号	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)	備考
SK53	64.0	48.5	15.0	
SK54	114.0	66.0	10.0	
SK55	70.0	68.0	6.0	SK60と切合
SK56	91.5	66.0	22.5	
SK58	110.0	68.0	20.0	
SK59	95.0	80.0	12.0	SK70と切合
SK60	138.0	100.0	30.0	SK55と切合
SK61	94.0	66.0	20.0	
SK62	82.0	64.0	14.0	
SK63	174.0	72.0	22.0	
SK64	178.0	85.0	22.0	
SK65	45.0	43.0	66.0	SK72と切合
SK66	82.0	78.0	10.0	SK71と切合
SK67	100.0	32.0	22.0	
SK68	94.0	45.0	14.0	
SK69	85.0	66.0	15.5	
SK70	122.0	52.0	22.0	SK59と切合
SK71	70.0	54.0	60.0	SK66と切合
SK72	84.0	58.0	44.0	SK65と切合





第 313 図 TAK201202④区土坑及び周辺調査区遺構配置図 (S=1/200)

(5) 集石(SS)・不明遺構(SX)

本節では、集石(SS)・不明遺構(SX)として現場段階で付番した遺構および遺構出土遺物の中で、古代に位置づけられるものを取り上げた。大調査区は TAK201302・TAK201303調査区双方に分布する。

①TAK201303B区 SS02(第314・315図、第110表、図版253～256)

小調査区B区の9274グリッドの3層から検出した遺構である。平面形状は不整円形を呈する。長軸で1.3m、短軸で1.1m、深さ0.3mを測る。集石遺構として遺構番号を付番して調査を進めたが、拳大または人頭大の礫や焼土を投げ込んだ土坑と認識するに至った。焼土は遺構内での火の使用を示すものではなく、二次的な堆積と考えられる。実測図に示したように、遺構内の二ヶ所に先行する小規模な土坑があり、下層に痕跡を残す。

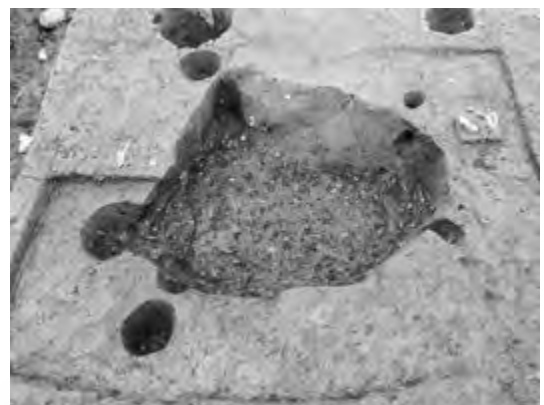
遺物は古代の須恵器および土師器片18点を出土したが、ほとんど小片であり、図化に堪えたものは4点到留まる。947～949は須恵器杯である。947は杯蓋である。948・949は杯身である。いずれも、8世紀後半～9世紀前半のものである。950は8世紀後半の土師器甕である。従って、遺構の年代は8世紀後半～9世紀前半と考えられる。



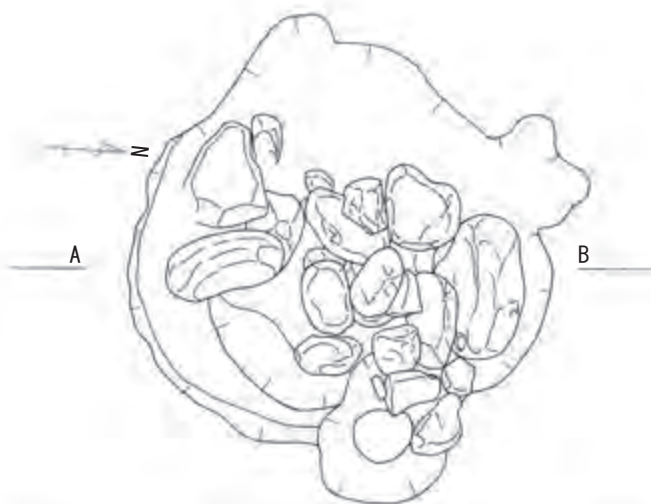
図版253 SS02検出状況(東から)



図版254 SS02焼土堆積状況



図版255 SS02完掘状況(西から)



H=11.6m



- ①暗褐粘質土、焼土粒含む
- ②黒褐粘質土、焼土粒含む
- ③黒褐粘質土、焼土粒、炭化物を含む
- ④黒褐粘質土、焼土粒、炭化物を含む
- ⑤暗褐粘質土。

第314図 SS02平・断面図(1/20)



第315図 SS02出土遺物(1/3)

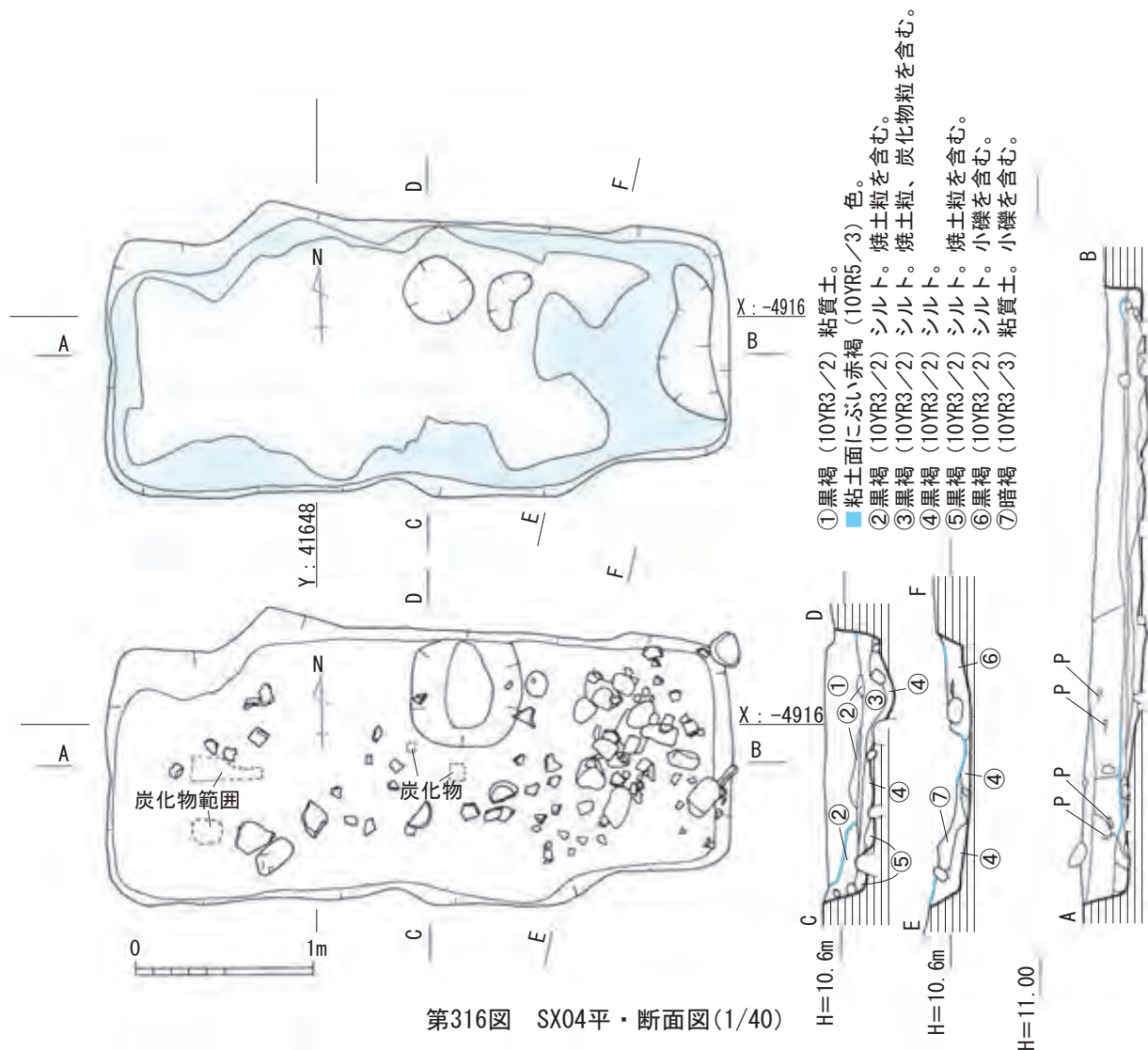


図版256 SS02出土遺物

第110表 TAK201303B区 SS02出土土器観察表

遺物番号	器種	部位	法量 (cm)			調整		色調		焼成	胎土	備考
			口径	器高	器径	内面	外面	内面	外面			
947	須恵器杯蓋	口縁部	—	—	—	回転ナデ	回転ナデ	黄灰色		良好	長石	
948	須恵器杯身	口縁部	14.0?	—	—	回転ナデ	回転ナデ	オリーブ黒色		良好	緻密・長石	
949	須恵器杯身	口縁部	—	—	—	回転ナデ	回転ナデ	灰白色	灰色	良好	長石・黒色粒子	
950	土師器甕	口縁部	—	—	—	ヘラケズリ・ナデ	横方向ナデ・ハケメ	浅黄橙色		良好	長石・黒色粒子	

②TAK201302④区 SX04(第316・317図、第111・112表、図版257~264)



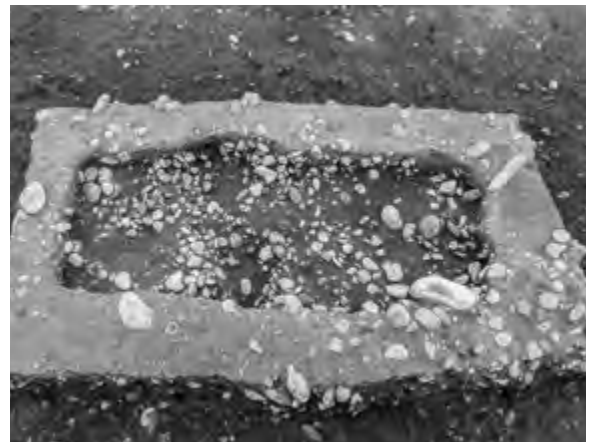


図版257 SX04検出状況(北から)



図版258 SX04遺物出土状況(北から)

④区の9064グリッドの3層面で検出した不明遺構である。平面形は長辺3.5m、短辺1.5mの長方形であり、掘り方の深さは15cm程度である。地山の礫層に掘り込んでおり、図版256に見るように、平面検出は容易であったが、粘土面の検出及び礫が混じる下層の掘削には慎重な作業を要した。中層に薄い粘土面を有し、その上下から遺物が多く出土した。遺物の出土位置は原位置を保っているものと思われる。遺構実測図には粘土面直下の生活面と掘り方の二面を記し、短辺に対しては2面の断面土層を記録した。遺物の出土位置も座標及び図面上に記録し、実測図に記載した。一部の遺物については下層の出土状況を別に記録している。掲載遺物については観察表に取り上げ番号を記載した。遺構の性格を検討すると、平面形は短辺があまりに短く、炉ないしカマド跡を持たないため、住居址とはみなしがたい。廃棄土坑とは考えがたく、土坑墓としては掘り方が過大である。作業場としての利用などが想定される。明確な



図版259 SX04床面検出状況(北から)



図版260 SX04掘り方完掘状況(北から)



図版261 SX04断面土層(東から)



図版262 SX04断面土層(北から)



図版263 SX04断面土層(東から)

第111表 TAK201302④区 SX04出土土器観察表

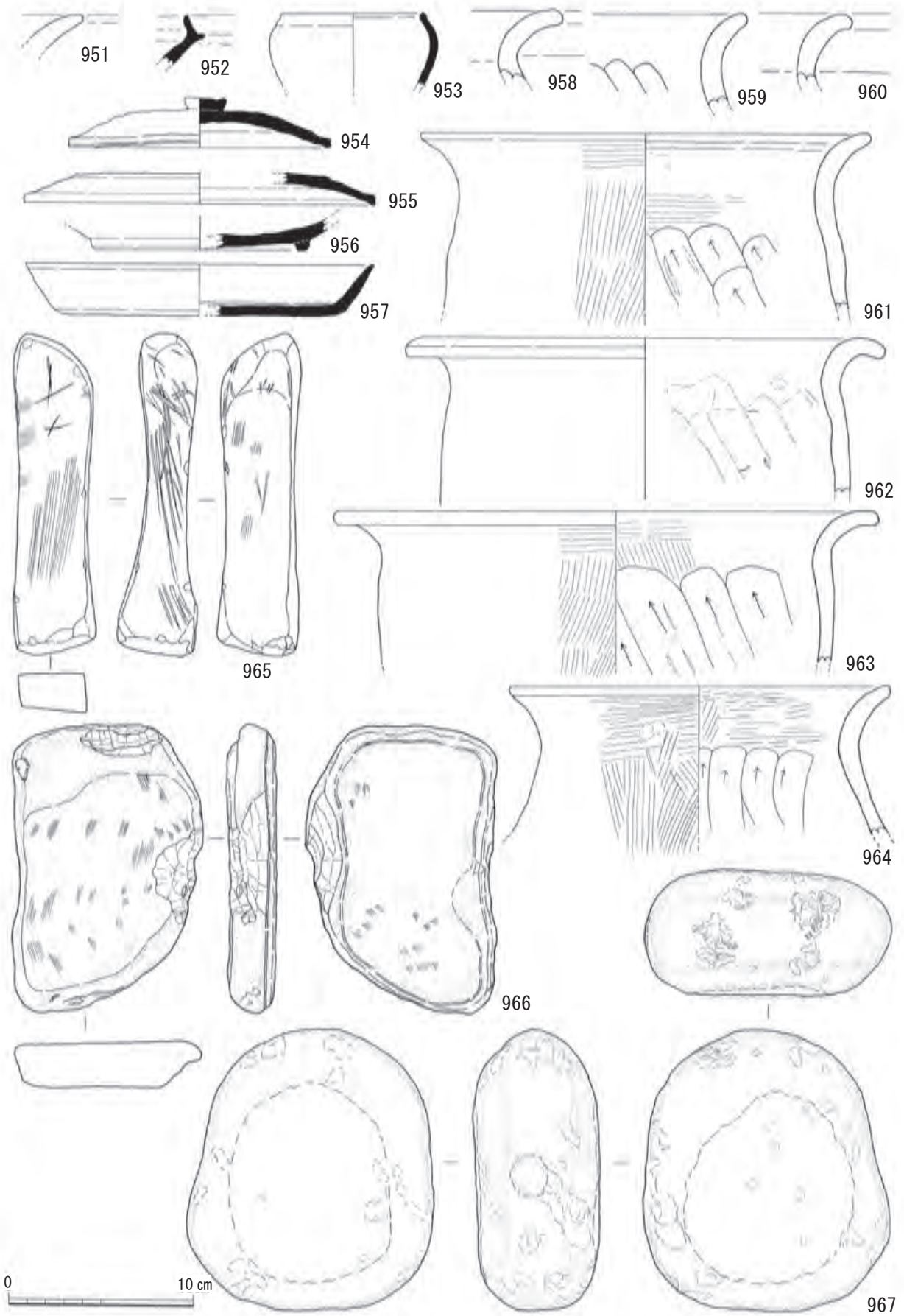
遺物番号	器種	出土位置	部位	法量(cm)			調整		色調		焼成	胎土	備考
				口径	器高	口径	内面	外面	内面	外面			
951	弥生土器壺	No. 42	口縁部	—	—	—	ナデ	ナデ	にぶい橙色		良好	角閃石・長石・石英	
952	須恵器杯身	—	頸部	—	—	—	回転ナデ	回転ナデ	オリーブ黒色		良好	精良・灰白色	
953	須恵器短頸壺	—	口縁部 ~胴部	7.7	—	—	回転ナデ	回転ナデ	灰色	灰色	良好	精良・長石	
954	須恵器杯蓋	No. 110	—	14.0	2.7	14.0	回転ナデ	回転ナデ	灰色	灰色	良好	精良・灰白色	つまみ为中心からずれる。 60%残存
955	須恵器杯蓋	No. 22	体部	19.0	1.6	19.0	回転ナデ	回転ナデ	灰白色	灰白色	良好	やや良・長石・細砂粒	
956	須恵器杯身	No. 3	底部	—	—	—	回転ナデ	回転ナデ	灰白色	灰白色	良好	やや良・長石	底径11.8
957	須恵器皿	No. 19	—	18.8	2.8	底径 15.0	回転ナデ	回転ナデ	灰白色	灰白色	良好	やや良・雲母・長石・石英	1/2残存
958	土師器甕	No. 52	口縁部	—	—	—	ナデ	ナデ	にぶい橙色	橙色	良好	雲母・石英・赤色粒子	
959	土師器甕	No. 82	口縁部	24程度	—	—	ヘラケズリ・ナデ	ナデ	にぶい橙色	にぶい橙色	良好	雲母・角閃石・長石・石英・赤色粒子	
960	土師器甕	No. 49	口縁部	26.8?	—	—	ナデ	ナデ	灰黄褐色	にぶい橙色	良好	雲母・角閃石・長石・石英・赤色粒子	
961	土師器甕	No. 30	頸部	20.4	—	—	ヘラケズリ・ナデ	ナデ・ハケメ	橙色	橙色	やや良	雲母・角閃石・長石・石英・赤色粒子	ほぼ縦方向のヘラケズリ
962	土師器甕	No. 82	頸部	24.0	—	—	ヘラケズリ・ナデ	ナデ・ハケメ	橙色	橙色	やや良	やや粗・雲母・角閃石・結晶片岩・長石・赤色粒子	砂礫が3%混じる。内面ヘラケズリが左上がり
963	土師器甕	No. 26	口縁部 ~胴部	25.7	—	—	ヘラケズリ・ナデ	ナデ・ハケメ	灰白色	浅黄褐色	良好	雲母・角閃石・長石・石英	
964	土師器甕	—	口縁部 ~胴部	29.2	—	—	ヘラケズリ・ナデ	ナデ・ハケメ	灰黄褐色	灰黄褐色	良好	金雲母・雲母・角閃石・石英・長石	

第112表 TAK201302④区 SX04出土石器観察表

図版番号	器種	石種	最大長(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	重量(g)	備考
965	砥石	頁岩	172	44	42.5	365	表面に鉄分が付着 青灰色
966	砥石	砂岩	154	100	27	660	オリーブ灰色(風化?)
967	台石	安山岩	251	132	68	2105	



図版264 SX04出土遺物



第317図 SX04出土遺物(1/3)

柱穴を持たない竪穴建物跡であった可能性がある。

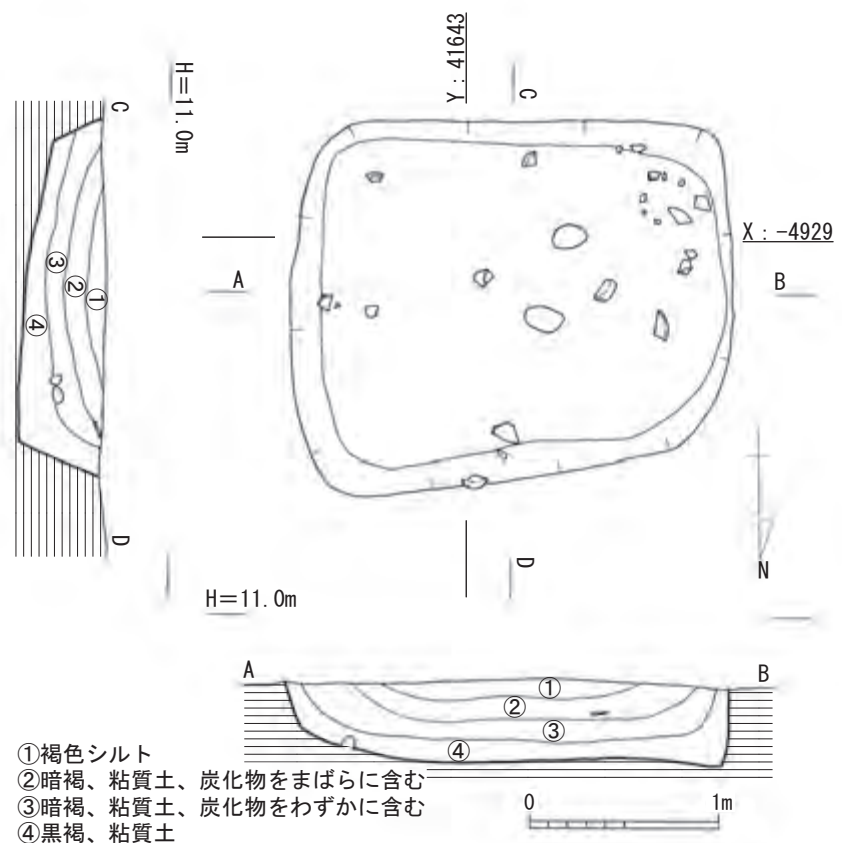
出土遺物について述べる。951は弥生土器の広口壺の口縁部である。混入と思われる。952～957は須恵器である。952は6世紀後半の杯身である。底部まで残存しておらず、体部中位で肥厚する。底部から直線状に立ち上がる牛頸編年ⅣA期に位置づけられ、混入と思われる。953は小型の短頸壺である。954はボタン状のつまみ付の杯蓋であるが、つまみ部を中心からずれて付加している。ⅦB期のものと思われる。955も杯蓋だが、つまみの形態を確認できない。956は逆台形の高台が底部隅により、滑らかに立ち上がる形態を取る杯身である。957は口径18.8cmを測る皿である。958～964は古代の土師器甕である。958～960は口径を復元できなかった口縁部である。961～964は器形を図上復元したもので、8世紀後半から8世紀末に位置づけられる。口縁部の傾きの度合いには個体差がある。965・966は砥石である。967は台石である。以上のように、弥生後期の広口壺の口縁部片、6世紀後半の須恵器片が混入しているが、出土遺物は8世紀後半から8世紀末の範囲に収まる。

③TAK201302⑤区 SX07(第318・319図、第113表、図版265～267)

⑤区の9264・9262グリッドの3層から検出した隅丸方形の不明遺構である。主軸方位はSB02～04とほぼ一致する。柱穴やカマド、硬化面など竪穴住居址としての要素は見出せなかった。床面から浮いた状態で須恵器12点を取り上げた。

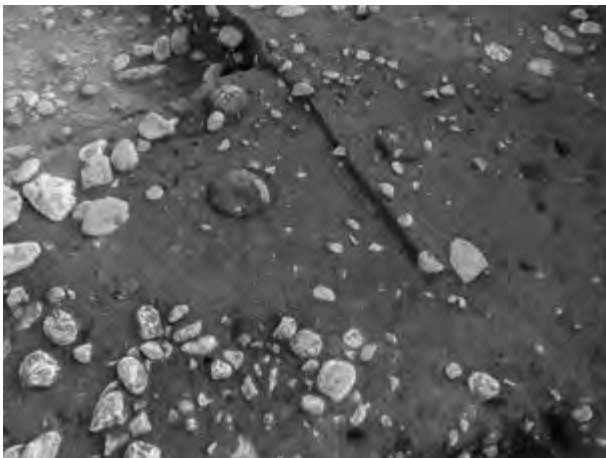
968は須恵器の高盤(高杯)の杯部片である。脚部や接合部は欠損している。皿や壺蓋に似た形態を呈するが、口縁部の立ち上がりが浅い。内外面の調整(ヘラミガキ)は極めてていねいで、屈曲部の稜線も皿以上に鋭利に整形される。脚部近くは13mm程度の厚さを持ち、中心近くの脚部との接合部付近では口縁端部に近い高さまで持ち上がり、皿のような実用性は乏しい。宮都や国府郡家の政庁周辺域から出土するような、脚部から滑らかに受け部から口縁部まで立ち上がる薄手の精製品の高盤とは異質の性格を持つ。8世紀後半の時期のものである。この高杯の出土が持つ意味については小結で述べる。

969～979はいずれも須恵器杯である。969～971は杯蓋である。969はつまみ部を欠き、口縁部が屈曲する。年代は8世紀前半と思われる。970は



第318図 SX07平・断面図(1/40)

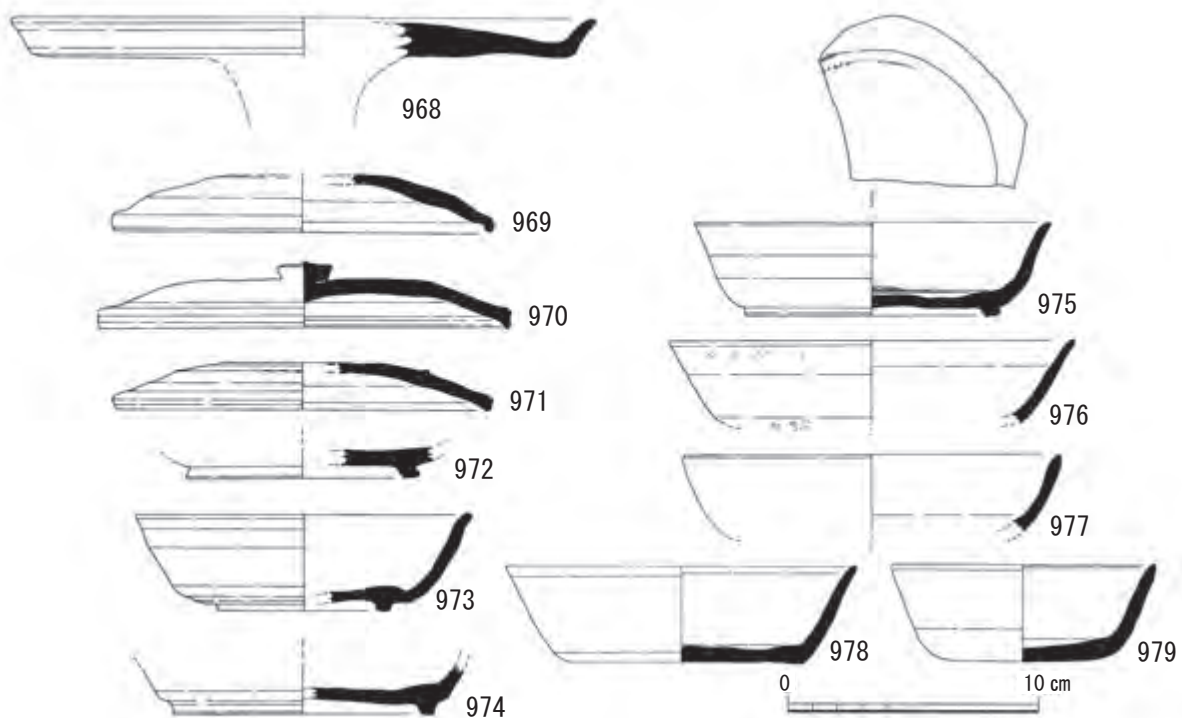
折り返しにより成形された断面三角形の口縁端部を持ち、ボタン状の摘みを貼り付けている。8世紀後半のものと思われる。**971**は口縁端部がわずかに肥厚し、折り返しの表現を残している。回転ヘラ切りにより作出された天井部は平坦で、ヘラケズリなどの調整は行われず、切り離しの際に出る余分な粘土はナデつけている。摘みを欠く。8世紀後半のものと思われる。**972~975**は高台付の杯である。**972**は外反する平行四辺形の高台を持つ。8世紀前半のものであろう。古相である。**973**は高台が内側に寄る。8世紀中頃のものである。**975**は底部からふくらみを持って立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。見込みに重ね焼き跡が残る。**976・977**は底部を欠く。**976**は8世紀後半のもので、**977**は7世紀後半と思われる。**978・979**は高台なしの杯である。8世紀中頃から8世紀後半のものと思われる。**979**はやや小ぶりである。出土した遺物は8世紀中頃~8世紀後半のものが中心である。



図版265 SX07検出状況(北から)



図版266 SX07完掘状況(北から)



第319図 SX07出土遺物(1/3)





図版267 SX07出土遺物

第113表 TAK201302⑤区 SX07出土土器観察表

図版番号	器種	部位	法量(cm)			調整		色調		焼成	胎土	備考
			口径	器高	底径	内面	外面	内面	外面			
968	高盤(高杯)	杯部	21.4	—	—	回転 ヘラケズリ	回転ナデ・ ヘラケズリ	灰色～ 灰白色	暗灰色～ 灰色	良好	石英・角閃石 ・赤色粒子	杯部見込みに自然釉か かる
969	杯蓋	体部	15.0	2.3	—	回転ナデ	回転ナデ	オリーブ灰色		良好	長石	
970	杯蓋	つまみ～口縁部	16.2	2.6	—	回転ナデ	回転ヘラケズリ ・ナデ	明青灰色	明青灰色	良好	長石	右回転
971	杯蓋	体部～口縁部	15.0	残存1.9	—	回転ナデ・ 指押え	回転ヘラ切り →ナデ	灰色	灰色	良好	緻密・長石	口縁近くに灰被り
972	杯身	底部	—	—	8.8	回転ナデ	回転ナデ・ナデ	灰色～暗灰色		良好	長石	
973	杯身	底部～口縁部	13.2	3.8	6.8	回転ナデ・ ヘラケズリ	回転ナデ・ 底部ヘラケズリ	灰白色	灰白色	良好	長石・細砂粒	
974	杯身	底部	—	—	10.2	回転ナデ	回転ナデ	灰色	暗灰色	やや良	長石	
975	杯身	底部～口縁部	14.0	3.7	10.0	回転ナデ	回転ナデ	灰色	灰色	良好	粗粒砂・長石	
976	杯身	体部～口縁部	16.0	—	—	回転ナデ	回転ナデ	灰白色	灰白色	良好	長石	高台有無は不明
977	杯身	体部～口縁部	15.0	—	—	回転ナデ	回転ナデ	灰色	灰色	良好		内面がやや濃い
978	杯身	底部～口縁部	13.8	3.8	9.2	回転ナデ・ ナデ	回転ナデ	灰色	灰色	良好	長石・石英・ 細砂粒	4/5残存・高台なし
979	杯身	底部～口縁部	10.4	3.8	6.0	回転ナデ	回転ヘラケズリ	灰白色	灰白色	良好	長石	高台なし

④TAK201302⑤区 SX06・⑦区 SX10(第320図、図版268～273)

TAK201302の小調査区⑤区9462グリッドの3層及び⑦区9464グリッドの3層で検出した不明遺構である。⑤区部分をSX06、⑦区部分をSX10と呼称する。主軸方位は東西方向から15度程度傾く。

SX06は西北西に向け平面形は姿を消すが、西端付近で表土直下の遺構面が10.62mから10.60mほどへわずかながら下がっている。図版268で示した検出状況で、SX06の西端付近に南北方向の土の変化を見て取ることが出来るように、既存の農地境界に相当する。耕作状況の違いがわずかに残る遺構面の削平の有無に影響したものと考えられる。東側では、調査前の農耕用の既存コンクリ道路・小水路から成る未調査部分をはさみ⑦区のSX10と連続した一体の遺構と考えられる。SKの節冒頭で論じたように、本遺構で区画される範囲で、⑤区の掘立柱建物群に附随した土坑群の分布は収束する。従って遺物の出土は見られなかった。本遺構の性格については、掘立柱建物群や土坑群との関係で8・9世紀前後の時期と捉えることが妥当と考えられる。



図版268 SX06検出状況(東から)



図版269 SX06断面状況AA'間(東から)

残存深度は最も深い場所でも10cm未満であり、後世の削平を受けたものと思われる。SX10は3層に掘り込む溝状をなすが、⑤区部分のSX06は遺構検出段階で既に土塁状に整形しており、明確な溝状を呈さない。SX10として完掘した溝状部分の北側には、図版268及び図版272に見るように帯状の礫が集中する部分があるが、遺構と認識して調査はしていない。SX10と一体の遺構であった可能性を残す。

現場調査と記録整理の担当者は平面配置から判断して、SX06とSX10の両者を一体の溝状の不明遺構と解した。SX06については、礫の分布状況と砂礫交じりの埋土範囲を平面実測し、部分的なサブトレンチ掘削により断面状況を把握したのみで、掘り方は掘削しなかった。

また担当者は、これら2つの小調査区にまたがる溝状不明遺構がさらに⑪区のSX12と連続する可能性を指摘する。SX12も酷似した方位を示すが、後述のように遺構検出後の状況に限っては溝状でなく砂礫が帯状に集積した状況を示す。残存深度が浅かったこともあり、出土遺物は多くなく、細片ばかりである。年代の分かるものとしては、8世紀終わりの須恵器杯身の底部片が出土しているが、摩滅が激しい。



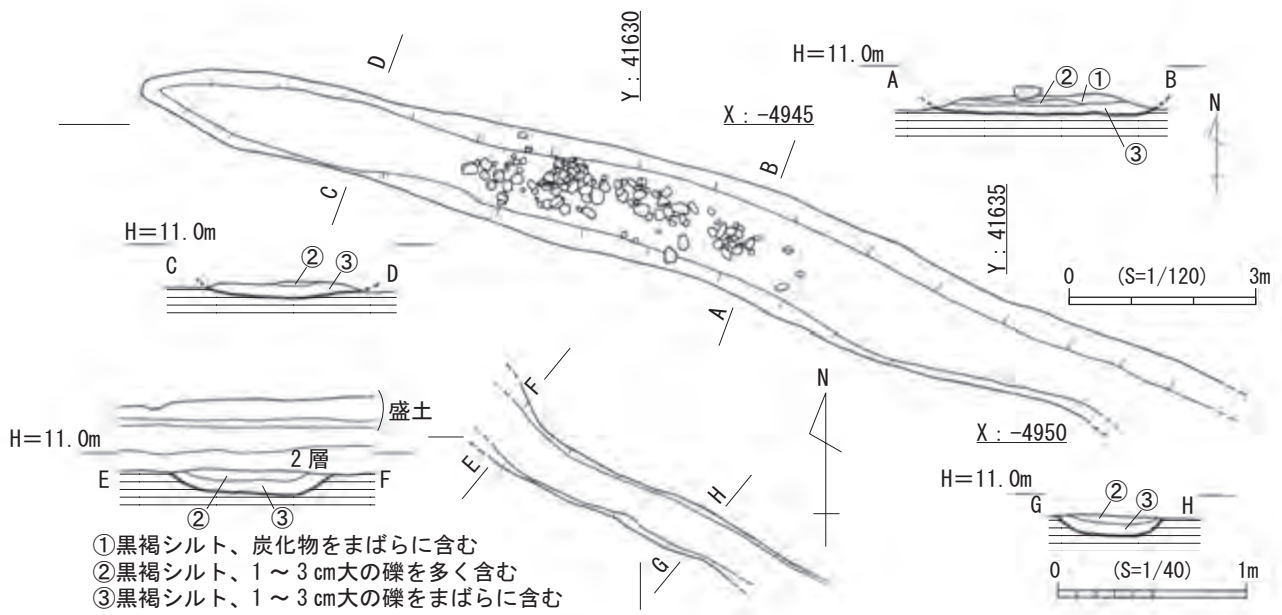
図版271 SX10検出状況(西から)



図版272 SX10完掘状況(西から)



図版273 SX10調査区壁土層状況(西から)

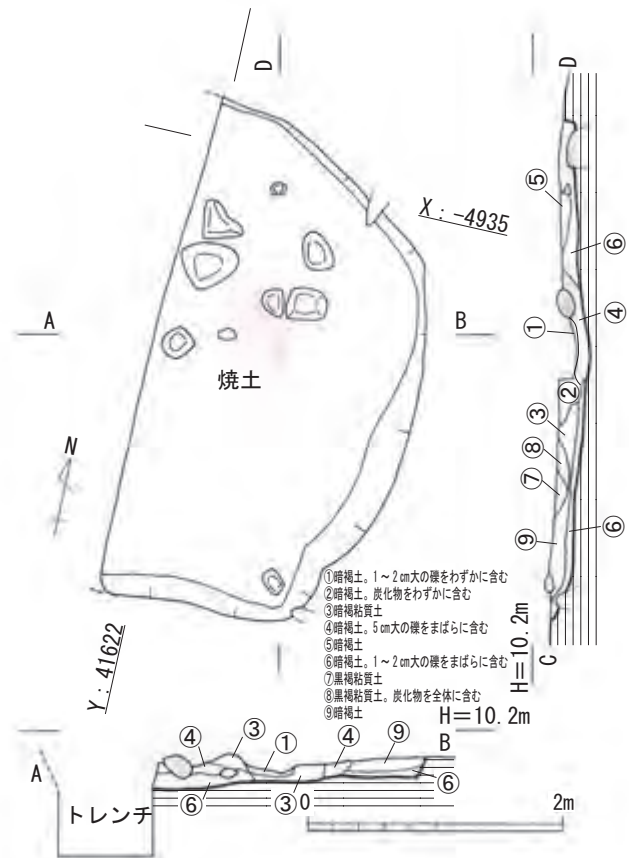


第320図 SX06・SX10平・断面図(平面1/120・断面1/40)

⑤TAK201302⑤区 SX08(第321図、図版274～278)

TAK201302の小調査区⑤区の9262グリッド3層で検出した焼土を伴う不明遺構である。出土遺物は細片のため図示できなかった。楕円形に近いやや不整形な平面形を呈し、南側は東西方向の正方位に直線状に切られている。柱穴は遺構内に確認されなかった。検出レベルは海拔9.8～10.05m程度で、掘り方の残存深度は30cm程度である。長軸の南北方向に4mを測り、短軸の東西方向については検出できた範囲で2m程度である。3層の地山より細かい小礫を多く含む。検出範囲のほぼ中央に焼土が分布する。15～45cm大の礫が埋土にまばらに混じっており、遺構の利用形態と関係するものと考え、図化した。

9262グリッド西際で先行トレンチ掘削や南北方向の土層確認ベルトの存置を行っていたことにより、遺憾ながら西側の形状を現場で十分に確認できなかった。遺構として検出・認定した時期が調査終了の近い2月下旬であり、調査期間に限度があったが故である。本来の平面形状は検出範囲を西側に折り返し、短軸で3.5m程度を測るものと想定している。検出面近くに焼土が分布しており、生活面はその上と判断されるが、そのレベルは第320図に示した断面形状からは明らかではない。炉床部分のみを検出したものと認識する。焼土は遺構全体の東よりに1m近く中心からずれて分布していることとなる。生活面は遺構調査段階で削平されていたものと考えられる。



第321図 SX08平・断面図(1/60)



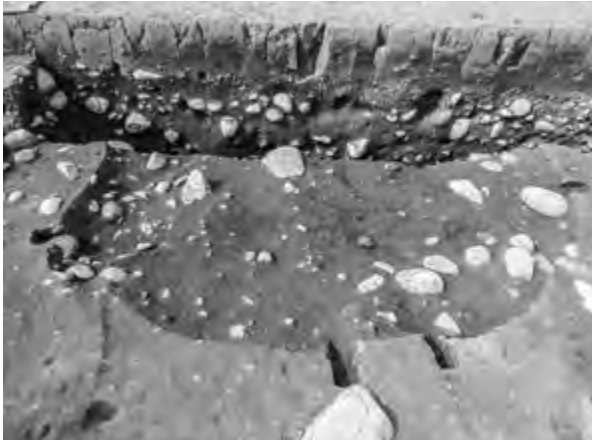
図版274 SX08検出状況(北から)



図版275 SX08断面状況(北から)



図版276 SX08焼土範囲(東から)



図版277 SX08完掘状況(東から)

なお図版278にも示すように調査時の記録では、10.2m付近から下のレベルにSX10に対応する層が北側の流路に続けて西側の断面土層に存在するが、調査工程の都合により十分に平面範囲を掘むことは出来なかった。



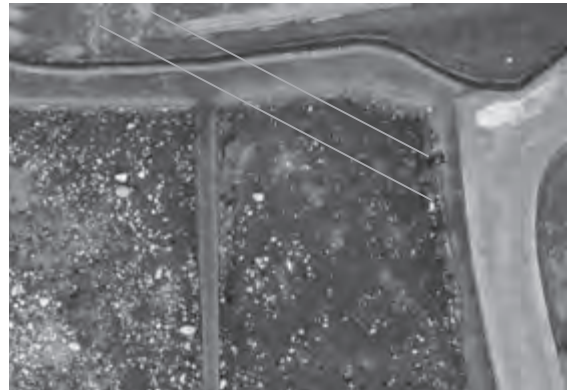
図版278 9262G西壁土層状況(東から)

⑥TAK201302⑨区 SX12(第322図、図版279・280)

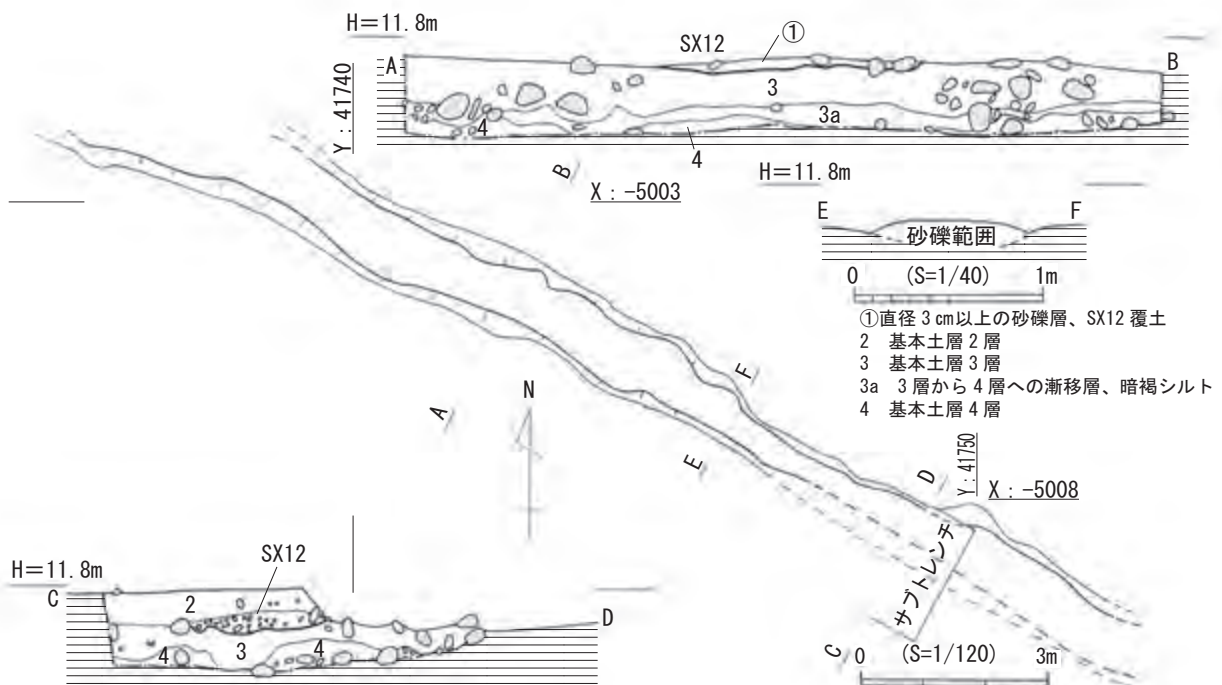
TAK201302の小調査区⑨区の北東隅0472・0474グリッドの4層(礫層直上)で検出した不明遺構である。砂礫が詰まった溝状遺構の可能性はあるが、削平が激しく、掘り込み部分はほとんど残存していない。5ヶ所にトレンチを入れて断面観察を行ったが、断面形状は薄い凸面レンズ状を呈するのみである。調査段階では砂利の上に礫を置いた堤状の遺構として認識したため、埋土部分は未掘削のままである。平面図には礫の分布範囲のみ示す。最終的な範囲の検出が遅れたため、東半部は左下の図版279のように既に包含層掘削を進めており、平面形状には不確定な部分を残す結果となった。



図版279 SX12トレンチ②  
東壁土層状況(北西から)



図版280 SX12検出状況(空撮)



第322図 SX12平・断面図(断面1/40・平面1/120)

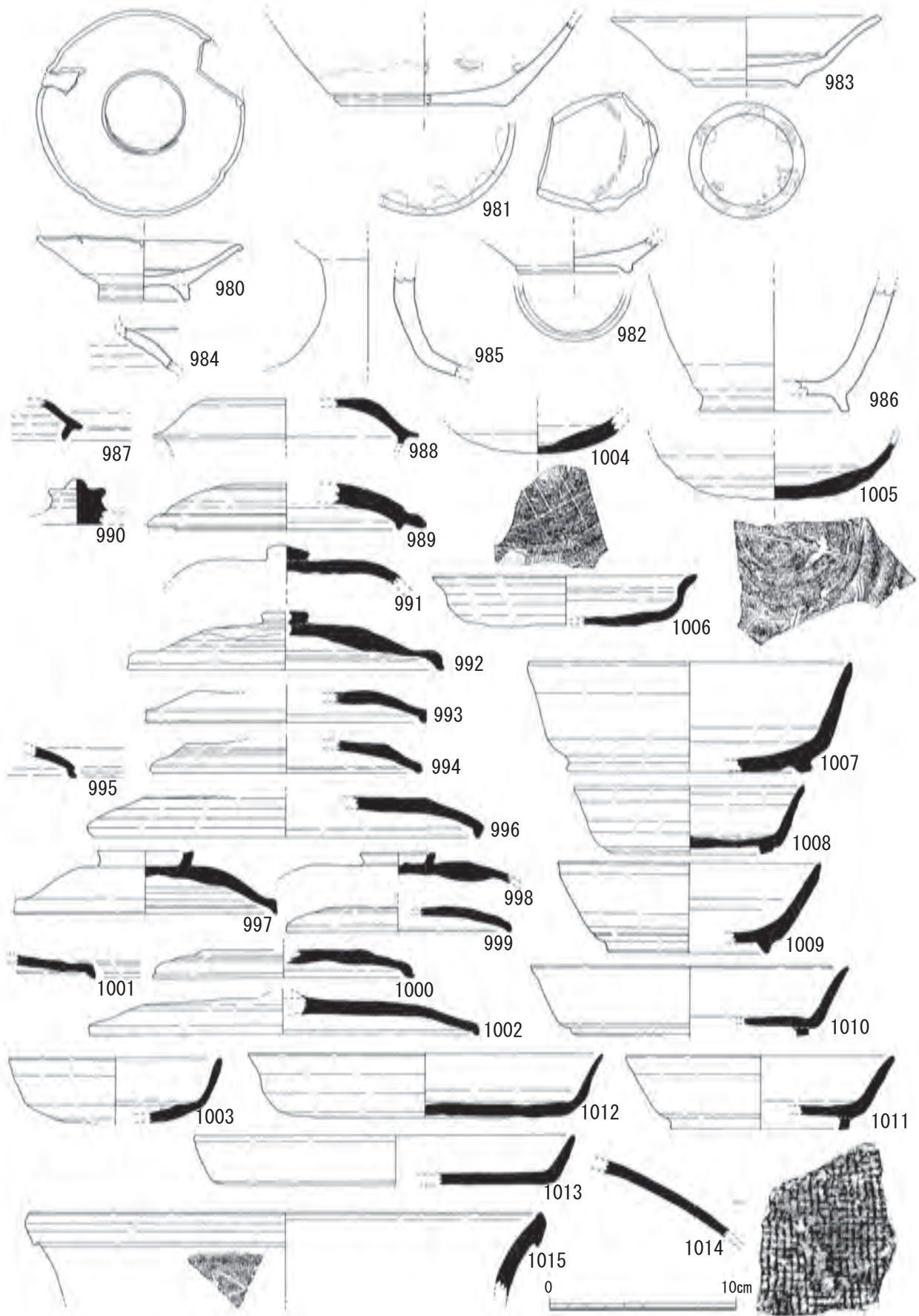
## (6) 包含層出土遺物

平成25年度(2013)調査で出土した遺物の総量は、全時代を通じ約30万点に上る。古代の包含層出土遺物に関しては、緑釉陶器、双輪状の香炉蓋、刻書・墨書土器などの特殊遺物のほか、移動式竈など肥前西部地域の出土品の中で希少性が高いもの、完形に近いもの、土師器・須恵器杯や越州窯青磁など年代基準となるものを中心に掲載する。TAK201301調査区及びTAK201304調査区については古代の遺構がなく、郡川支流の上流からの流れ込みの可能性を排除できない二次堆積の小片が多く、ほとんどは図化に堪えない。中世の貿易陶磁などの出土はTAK201301調査区の条里方向溝SD11などを中心に見られ、2調査区の上層には多くの小柱穴があるが中世以降のものと思われる。これらの調査区では、古代には活動の中心はなかったと考えられる。従って古代に関するTAK201301出土遺物の掲載は行っていない。他の調査区の包含層から出土した同形式ないし同様式の土器を以って竹松遺跡の古代の様相を示すに十分なものと考えられるためである。TAK201304調査区からも土錘を含め土器4点を掲載するに留まるのも同様の理由に基づく。

### ①TAK201302調査区包含層出土遺物(第323～326図、第114表、図版281～284)

980は国産の緑釉陶器皿である。釉が相当に銀化しており、緑釉はほとんど残っていない。瓦質の胎土などの要素から東濃系と考えられる。見込みには一条の沈線が巡り、口縁には外からの押圧による輪花が5ヶ所に配置される。貼り付け製法により細く高い高台を作り出している。981～985は越州窯青磁である。981・982は椀である。981は大宰府分類の椀Ⅰ-5類で、わずかに上げ底に近い形態の平底の底部を持つ。体部と底部の境に沈線が巡り、斜めに削り出している。体部下半から底部は露胎で、ガラス質にならなかった緑褐色の釉がかかる。見込みと底部外面には重ね焼きの目跡が残る。982も椀Ⅰ類で、輪状高台を持つ底部片である。灰褐色の精良な胎土であり、全面施釉後に畳付の釉を剥ぎ取っている。見込み及び畳付に目跡が残る。983は青磁皿Ⅱ類である。椀Ⅱ-2類に対応する。口径14.4cmを測り、上げ底風の高台を有し、口縁部はやや外反する。胎土目を残す。984は残存部分からは器種を判断しがたいが、瓶または水注の肩部片である。砂粒を含まない緻密な緑灰色の胎土にオリブ色の釉薬がかかる。内面には水引痕が強く残る。985は青磁瓶である。Ⅱ類に属する。986は同時期と考えられる陶器瓶である。985・986共に⑤区の掘立柱建物近くから出土した。

987～1016は古代の須恵器である。1014を除いて全て、⑤区の掘立柱建物群を中心とする遺構群の付近から出土している。出土層位はほとんど、遺構検出面の3層となる。987～1002は杯蓋である。987は上下反転後のかえりを有する。7世紀前半の杯蓋の口縁部である。988・989は、7世紀終わりと考えられる。989は器厚が10mm程度と厚手である。990は中央部が突出し、付け根の径が締まる宝珠型の摘み部である。突出具合から見て7世紀後半のものと思われる。991は摘み部から体部の上半が残存する。摘みの偏平化が進んでおり、傾けたまま貼り付け、周囲を簡単にナデ付ける。内面は回転ヘラケズリを残しているが、同心円状の凹凸が残る。992は外面の調整は成形時に削り取った胎土をナデ付けている。8世紀中頃のものであろう。993・1001はSX07出土品のような高杯の可能性を残す。996・1002は口径20cmを越える大型品である。996は偏平化が進んでいるが、口縁端部付近の括れ部内面に沈線が見られることから8世紀後半のものと思われる。997・998は熊本県荒尾産の輪状の摘み部を有する杯蓋である。東北～北関東地方では「リング状つまみ」と呼称して報告され、美濃や上野地域との、



第323図 TAK201302包含層出土遺物その1(1/3)



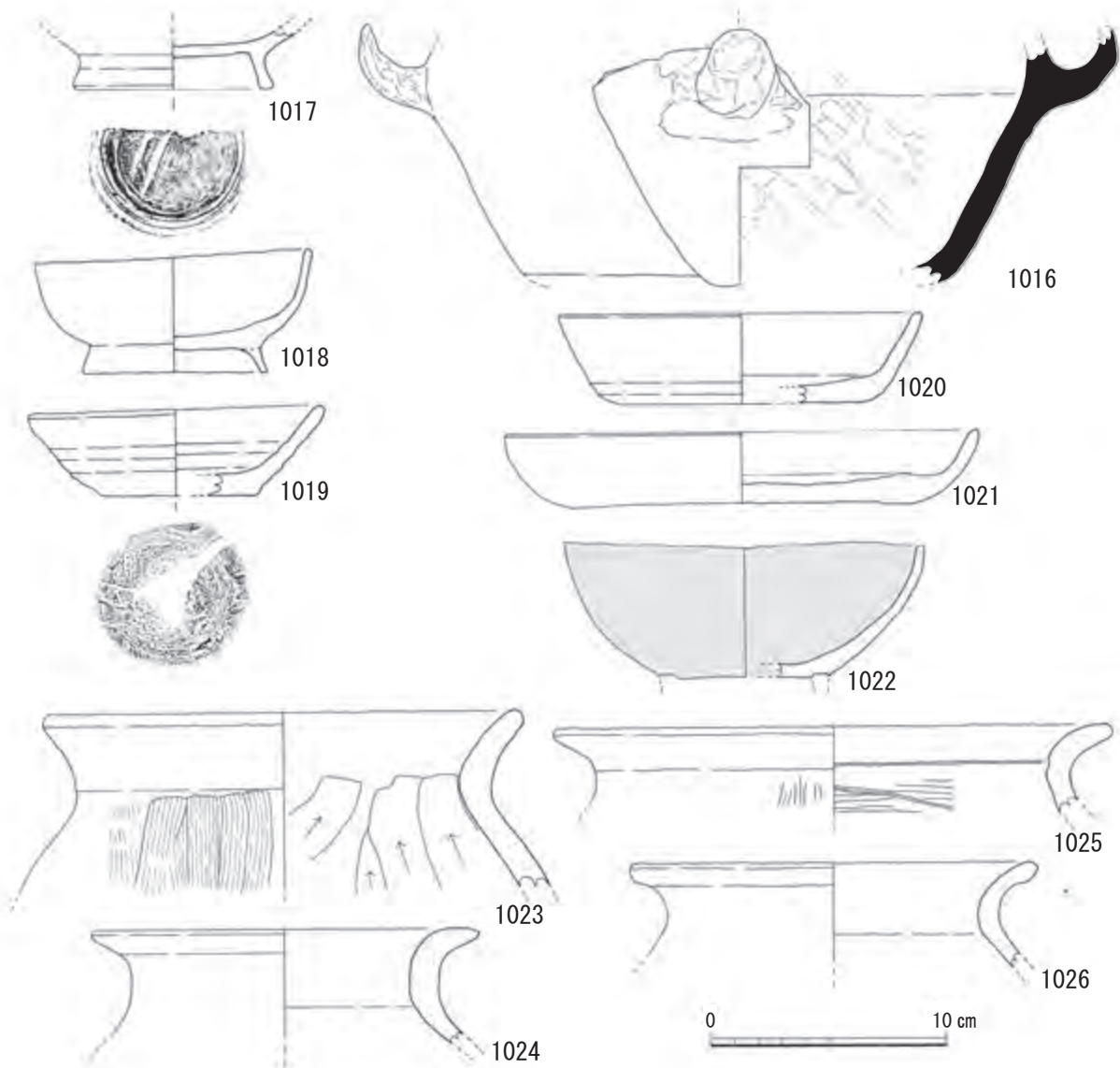


図版281 TAK201302包含層出土遺物その1

東山道ルートを通じた遠隔地交流の証左とされる(管野2018)。金属器模倣の可能性が指摘され、祖形としては正倉院所蔵の佐波理加盤第7号(南倉47)などが想定される。近隣では西海市松島の串島遺跡(宮崎1980)や島原市稗田原遺跡(竹中・福田2001)から出土例がある。なお、中国地方で見られるような7世紀後半のかえり付きの段階(亀田2013)のものは、今のところ肥前西部では出土が見られない。中国地方出土の個体は輪状つまみの内部が上げ底状高台に似た形態を示すものが一般的で、これら北部九州で出土するものと同一系譜に属するかどうかについては従来検討が行われていないように思われる。「木都」刻書紡錘車に見られるように、防人派遣に伴う東国からの文化流入の可能性を含め、検討を要する。

**1003**～**1011**は杯身である。**1003**は還元不足の赤焼けの底部片で、7世紀初頭～中頃のものである。**1004**は7世紀半ばのものであろう。**1005**は底部に直線状に長く一直線に切り欠いたヘラ記号を有する。**1006**は口縁部を外反させる器形で、類例は少ない。大宰府不丁地区の官衙創建期(I期)の溝SX2380や牛頸の後田60-1窯跡などから同様の器形のもので出土している。7世紀終わりのものと考えられる。**1007**～**1011**は高台付の杯である。**1007**は口径全体に平底に近い形状を呈する。8世紀後半のものと思われる。**1010**は器高が低く、盤に近い形態を示す。

**1012**・**1013**は皿である。**1014**・**1015**は甕である。**1014**は内外面の調整から見て肥後の樺万丈窯産と考えられる。製作・使用年代は12世紀以降に下る可能性があるが、便宜上、本章で報告する。同様の胴部片は南島原市(旧南高来郡北有馬町)今福遺跡(宮崎1986, p124)や島原市畑中遺跡(安楽1993)などからの出土が知られている。**1015**は頸部の外面にヘラ記号を持つ。**1016**は把手付短頸壺である。把手が付いた須恵器の煮沸具では、口縁部が内湾しない鉢の出土例はままた見られる。同形態の短頸壺は大



第324図 TAK201302包含層出土遺物その2(1/3)

宰府条坊跡160次でも出土例があり、牛頸窯跡(井手44号窯跡)が窯跡出土品である。肥前では、佐賀県鳥栖市東十郎古墳7区7号墳(木下1966、小田・下原2003、下原・西岡2004)からも出土例がある。8世紀前半から半ばにかけての時期が想定される。

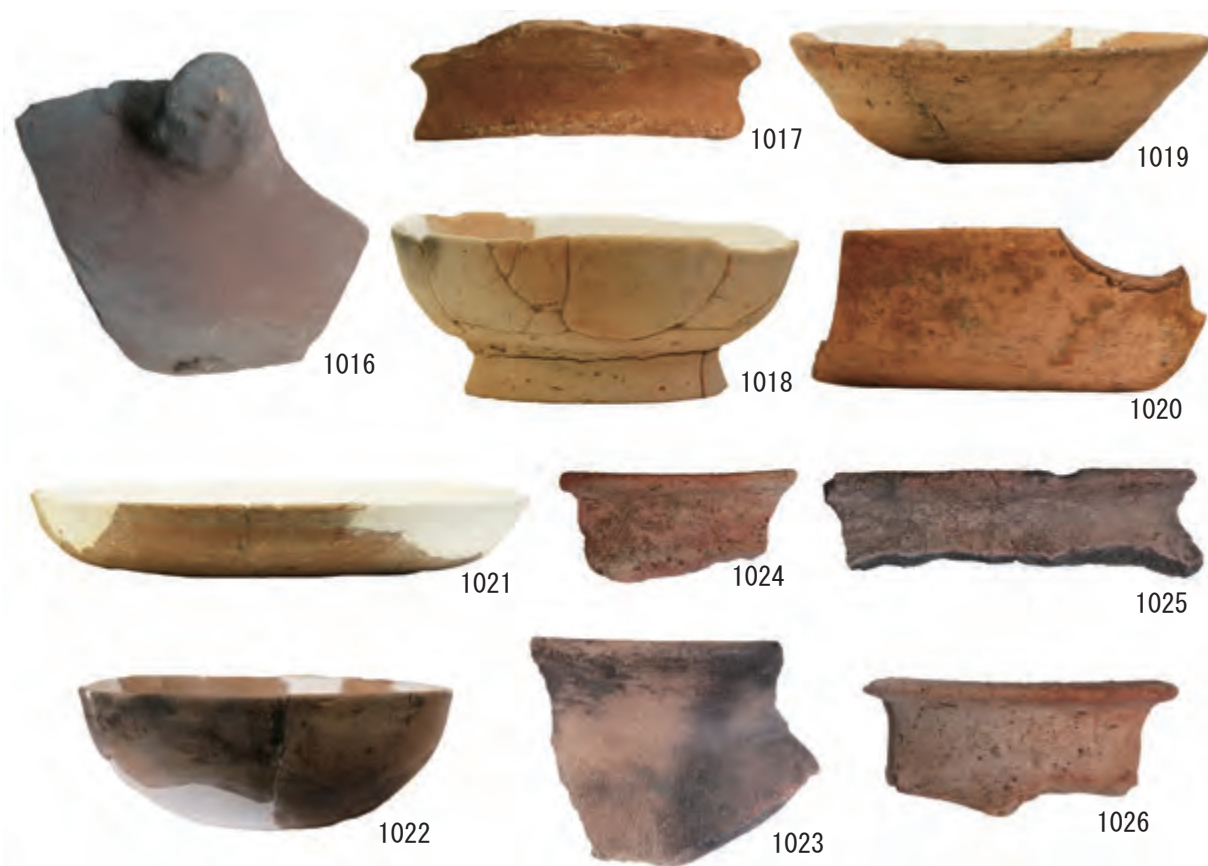
1017～1037は土師器である。1017・1018は高台付の土師器碗である。1017は高台内側に板状圧痕を残す。1018は口縁が傾いたいびつな成型で、見込みには手持ちナデ調整が残るが、外面は高台内の底部までロクロで成型する。いずれもやや細身の高台を貼り付けて、体部が丸みを帯びており、10世紀初頭に位置付けられる。1019・1020は土師器杯である。1020はロクロ目を残し、やや口縁部が傾くいびつさを有している。1021は口径20cmの皿で、底部外面に×のヘラ記号がある。

1022は黒色土器の杯である。口径15.2cmを測る。内外面にミガキを施す。高台部分については、焼成後に丁寧に全体を剥ぎ取り、全体の器形を鉄鉢に似せようとしたかのような痕がある。剥ぎ取った後に高台痕を含めて燻して黒色処理を施したようである。剥落しているのか、内面には黒色部分が見られない。このような加工が黒色処理前に為された事例について、類例の提示を待つ次第である。年

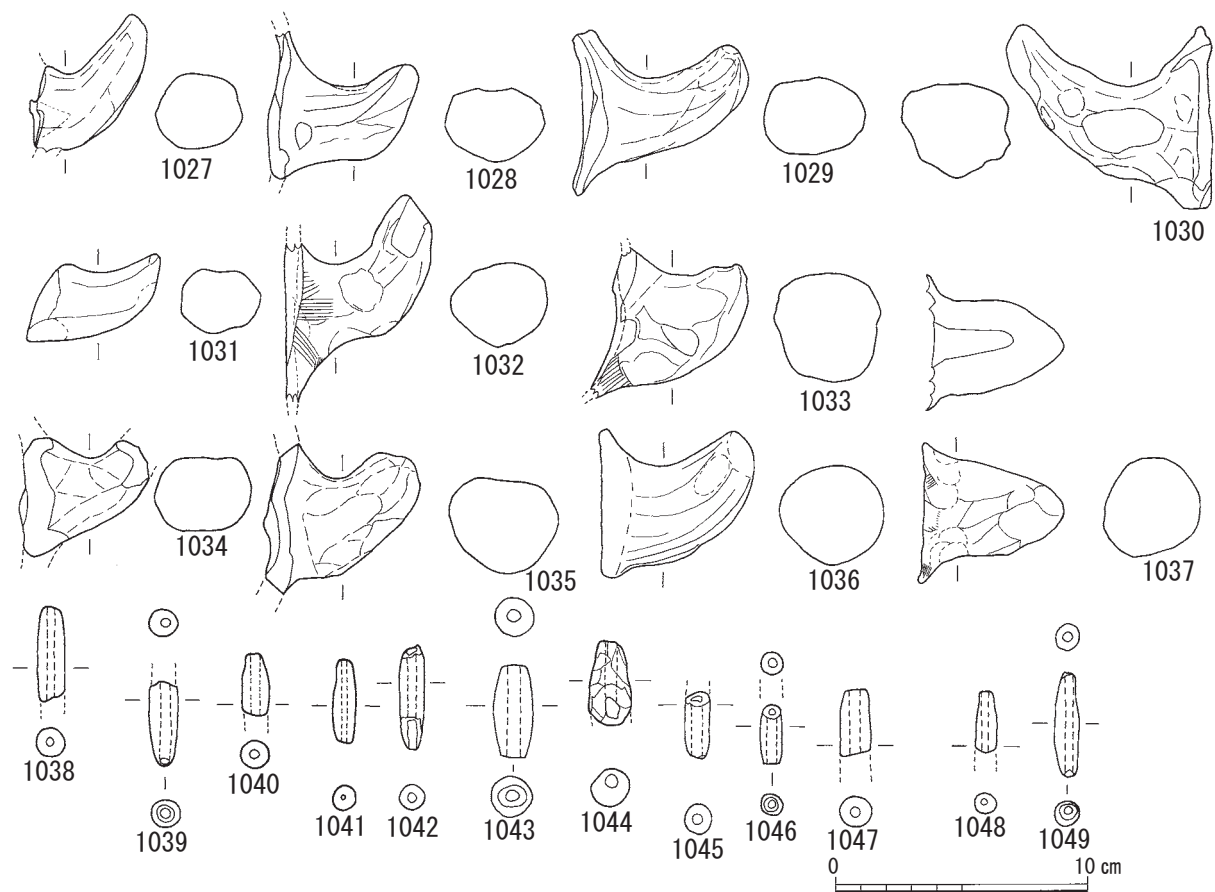
代については、黒色土器B類(内外面黒色)としての器形に着目すれば、10世紀半ばまで下る可能性を有する。1023～1026は胴部内面に粗いヘラケズリを施す古代の土師器甕である。

1027～1037は土師器の甑の把手部である。被熱により下面が灰色化したものもある。ほとんどは⑤区の居宅付近で取り上げている。甕や移動式竈の把手部が混じっている可能性があるが、残存部分のみからは確認できないため、甑として報告する。1032のみ明確に上向きであるが、小結⑤でも述べるように、北部九州では把手の形状は古墳後期から古代の煮沸具の編年の基準とはならないと考えられている。

1038～1049は土錘である。②区・⑫区の溝状遺構の付近と⑤区の居宅と考えられる遺構群の付近から出土している。年代は明らかではないが、層位的な状況により便宜的に古代で報告する。1050～1052は移動式竈の基部である。全体の形状は明らかではないが、三面展開により図示した。1052については同一個体の2片と認識して実測したが、胎土中の金雲母の混じり具合に差異があり、別個体の可能性を含む。1053は滑石製の紡錘車である。



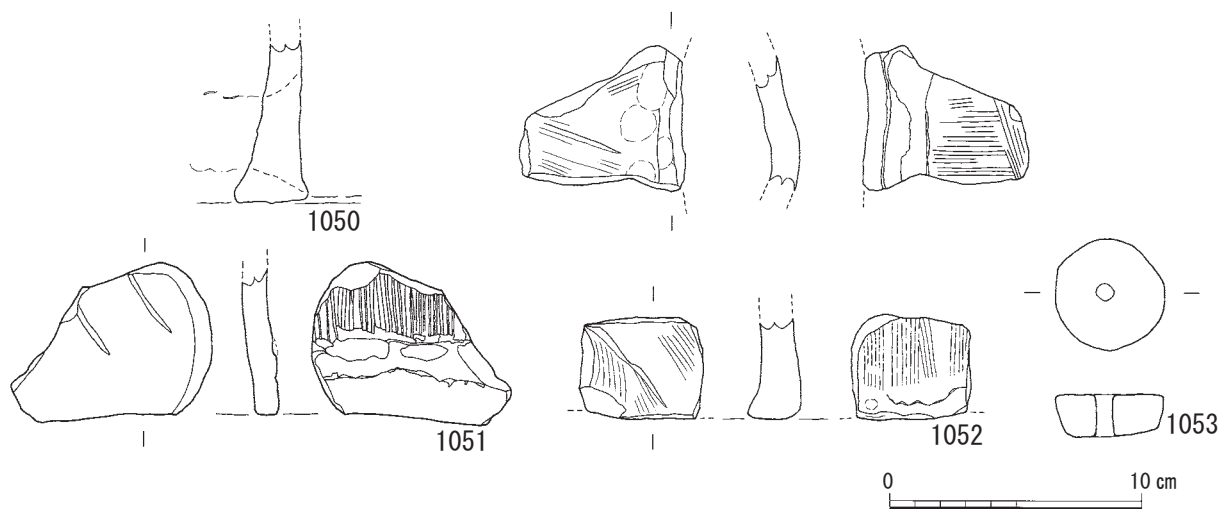
図版282 TAK201302包含層出土遺物その2



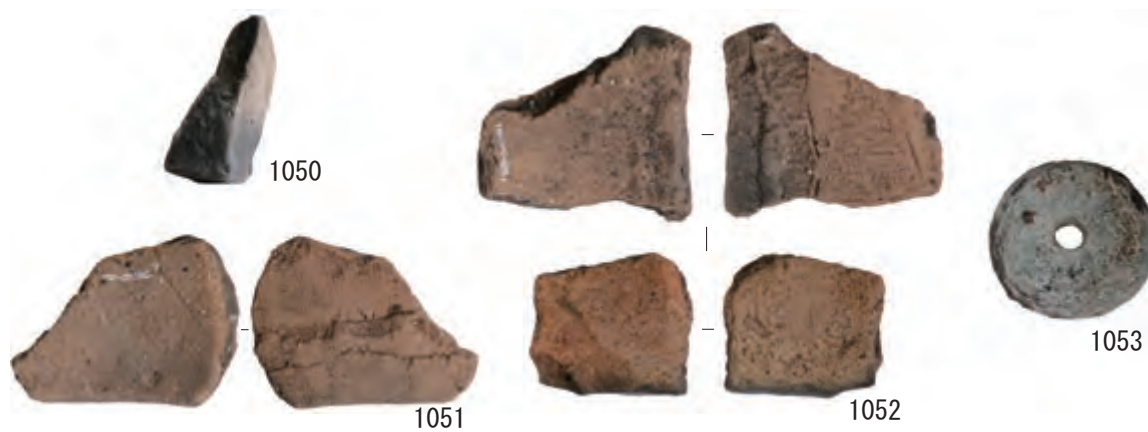
第325図 TAK201302包含層出土遺物その3(1/3)



図版283 TAK201302包含層出土遺物その3



第326図 TAK201302包含層出土遺物その4(1/3)



図版284 TAK201302包含層出土遺物その4

第114表 TAK201302包含層出土土器観察表

遺物番号	器種	出土区・グリッド	層位ほか	部位	法量 (cm)			調整		色調		焼成	胎土	備考
					口径	器高	底径	内面	外面	内面	外面			
980	緑釉陶器皿	⑨区0072	3層	ほぼ完形	11.0	3.4	4.9	施釉	施釉	灰オリーブ～灰色	灰色	良好	精良	
981	青磁椀	⑫区8464	SD19	底部	—	—	9.0	施釉	施釉・露胎	淡黄色	淡黄色	良好	精良	
982	青磁椀	⑫区	SS08	底部	—	—	6.2	施釉	施釉・露胎	灰オリーブ色	灰オリーブ色	良好	精良	見込みに砂目積痕あり
983	青磁皿	⑫区	SD19	1/2超	14.4	3.7	5.4	施釉	施釉・露胎	にぶい黄色	にぶい黄色	良好	精良	胎土目あり
984	青磁	⑫区	SS08	胴部	—	—	—	施釉	施釉	灰オリーブ色	灰オリーブ色	良好	緻密	水注または瓶
985	青磁瓶	⑤区	3層	頸部	—	—	—	施釉	施釉	明褐色	明褐色	良好	白色粒子・黒色斑点	
986	陶器瓶	⑤区9262	3層	底部	—	—	8.1	回転ナデ	回転ナデ	灰白色	灰白色	良好	長石	貿易陶器
987	須恵器杯蓋	⑤区9460	3層	口縁部	—	—	—	回転ナデ	回転ナデ	灰色	灰色	良好	白色粒子	
988	須恵器杯蓋	⑦区9464	3層	体部	14.2	—	—	回転ナデ	回転ナデ	青灰色	青灰色	良好	長石	
989	須恵器杯蓋	⑤区	3層	下半	14.8	—	—	回転ナデ	回転ナデ	灰色	灰色	良好	白色粒子・長石・褐色粒子	
990	須恵器杯蓋	③区8668	2層	摘み部	—	—	—	不明	回転ナデ	浅黄褐色	浅黄褐色	良好		摩滅激しい
991	須恵器杯蓋	⑤区9262	3層	天井部	—	—	—	回転ナデ	回転ナデ	灰色	灰色	良好	白色粒子・長石	
992	須恵器杯蓋	⑤区9262	3層	1/3	16.8	3.1	—	回転ナデ	回転ナデ	灰白色～暗灰色	灰白色	良好	長石	整形時に削り取った土を外面にナデつける
993	須恵器杯蓋	⑤区9262	試掘坑 清掃	口縁部	14.8	—	—	回転ナデ	回転ナデ	灰白色～暗灰色	灰白色	良好	長石・角閃石	皿状高杯の可能性あり
994	須恵器杯蓋	⑤区9262	3層	口縁部	14.2	—	—	回転ナデ	回転ナデ	灰白色	灰白色	良好	白色粒子	
995	須恵器杯蓋	⑤区9460	3層	口縁部	—	—	—	回転ナデ	回転ナデ	灰色	灰色	良好	石英	
996	須恵器杯蓋	⑤区9262	3層	口縁部	20.4	—	—	回転ナデ	回転ナデ	灰白色	灰白色	良好	長石・石英	端部内面に沈線
997	須恵器杯蓋	⑤区9262	3層	口縁部	14.0	3.3	—	回転ナデ	回転ナデ	褐色	灰白色	良好	長石	輪状摘み・天井部を指押さえ後ヘラケズリ
998	須恵器杯蓋	⑤区9262?	3層	天井部	—	—	—	回転ナデ・指押さえ	回転ナデ	灰色	灰～暗灰色	良好		輪状摘み 摘み部付近をヘラケズリ 9464グリッド出土か
999	須恵器杯蓋	⑤区9264	3層	主要部	12.0	—	—	回転ナデ・指押さえ	回転ナデ	黄白色	灰白色	良好	長石・石英・白色粒子	
1000	須恵器杯蓋	⑦区9466	3層	主要部	14.0	—	—	回転ナデ・指押さえ	回転ナデ	にぶい赤褐色	褐色	良好	長石・石英	赤焼け
1001	須恵器杯蓋	⑤区9264	3層	口縁部	—	—	—	回転ナデ	回転ナデ	灰色	灰色	良好	白色粒子・雲母	
1002	須恵器杯蓋	⑤区9264	3層	主要部	20.8	—	—	回転ナデ	回転ナデ	灰白色	灰白色	良好	長石・褐色粒子	
1003	須恵器杯身	⑤区9460	3層	底部	—	—	—	回転ナデ	回転ナデ	にぶい赤褐色	にぶい赤褐色	良好	精良・角閃石	赤焼け
1004	須恵器杯身	⑤区	3層	体部	11.4	3.5	—	回転ナデ	回転ナデ	灰色	灰色	良好	石英・白色粒子・細砂粒	
1005	須恵器杯身	⑦区9466	4層?	主要部	—	—	—	回転ナデ	回転ナデ	灰色	灰色	良好	長石・石英・小礫	
1006	須恵器杯身	⑦区9466	3層	主要部	14.0	2.7	—	回転ナデ	回転ナデ	灰色	灰色	良好	石英	口縁部が外反
1007	須恵器杯身	④区9264	2層	主要部	17.3	5.8	13.0	回転ナデ	回転ナデ	灰色	灰色	軟質	白色粒子・雲母	摩滅あり
1008	須恵器杯身	③区8868	—	主要部	12.4	3.6	9.0	回転ナデ	回転ナデ	灰色	灰色	軟質	白色粒子・石英	やや摩滅あり
1009	須恵器杯身	④区9064	南ヘルト2層	口縁～底部	14.0	4.8	8.6	回転ナデ	回転ナデ	にぶい褐色	褐色	良好	長石・褐色粒子	内面のみやや赤焼け
1010	須恵器杯身	⑤区	3層	口縁～高台部	16.8	3.7	11.6	回転ナデ	回転ナデ	灰色	灰色	良好	精良	
1011	須恵器杯身	⑤区9262	3層	口縁～底部	14.2	3.9	9.4	回転ナデ	回転ナデ	灰色	灰色	良好	雲母・白色粒子・褐色粒子	
1012	須恵器皿	⑤区9262	3層	口縁～底部	18.7	3.4	14.0	回転ナデ	回転ナデ	灰白色	にぶい黄褐色	良好	雲母・石英・褐色粒子・砂粒	
1013	須恵器皿	⑤区9264	3層	口縁～底部	20.1	2.6	18.2	回転ナデ	回転ナデ	灰白色	明青灰色	良好	長石・雲母・角閃石	
1014	須恵器甕	③区	表探	胴部	—	—	—	ナデ・当て具痕	タタキ	灰黄色	灰黄色	良好	長石・角閃石・褐色粒子	樺万丈産か
1015	須恵器甕	⑤区9462	表土	口縁部	27.2	—	—	回転ナデ	回転ナデ	灰白色	黒色	良好	長石・石英	ヘラ記号
1016	須恵器双耳壺	⑤区	3層	把手～胴部下半	把手先端の最大径32cm	—	17.5	ナデ・ヘラケズリ	ナデ・指押さえ	灰色	灰赤色	良好	長石・石英・雲母・細砂粒	
1017	土師器椀	②区8664	3層	底部	—	—	8.4	回転ナデ	回転ナデ	褐色	明黄褐色	良好	長石・雲母	底部の高台内側に板状圧痕あり
1018	土師器椀	⑤区9062?	3層	完形	11.6	5.2	7.8	ナデ・回転ナデ	回転ナデ	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	良好	褐色粒子	内面の一部に煤付着。
1019	土師器杯	⑧区9270	2層	ほぼ完形	12.2	3.8	6.6	回転ナデ	回転ナデ	褐色	褐色	良好	やや精良	
1020	土師器杯	③区8868	—	主要部	15.0	3.8	10.0	回転ナデ	回転ナデ	明褐色	にぶい褐色	良好	雲母・石英・赤色粒子	
1021	土師器皿	⑪区1276	3層	1/2	20.0	3.1	14.4	回転ナデ	回転ナデ	褐色	にぶい褐色	良好	長石・雲母・赤色粒子	
1022	黒色土器	③区8666	西壁トレンチ	口縁～体部	15.2	5.9	7.2	回転ナデ	回転ナデ	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	良好	長石・雲母	3/4残存
1023	土師器甕	⑦区9466	3層	頸部	20.0	—	—	ナデ・ヘラケズリ	ナデ・ハケメ	浅黄褐色	にぶい黄褐色	良好	長石・雲母・角閃石	
1024	土師器甕	⑦区9466	3層	頸部	14.4	—	—	ナデ・ヘラケズリ	ナデ	褐色	にぶい褐色	良好	長石・雲母・褐色粒子	
1025	土師器甕	⑧区9268	3層?	頸部	23.6	—	—	ナデ	ナデ	にぶい褐色	明褐色	良好	長石・角閃石	存置していた土層ベルトから出土
1026	土師器甕	⑦区9466	3層	頸部	16.8	—	—	ナデ・ヘラケズリ	ナデ	褐色	褐色	良好	長石・雲母・褐色粒子	摩滅あり
1027	土師器瓶	⑤区9460	3層	把手部	—	—	—	ナデ	ナデ	褐色～褐色	褐色	良好	長石・石英・雲母	
1028	土師器瓶	⑤区9462	3層	把手部	—	—	—	ナデ	ナデ	浅黄褐色	浅黄褐色	良好	雲母	
1029	土師器瓶	⑤区9462?	3層	把手部	—	—	—	ナデ	ナデ	赤褐色	淡褐色	良好	長石・石英	
1030	土師器瓶	⑤区9462?	3層	把手部	—	—	—	ナデ	ナデ	灰白色	灰白色	良好	長石・雲母・角閃石	
1031	土師器瓶	⑤区9462?	3層	把手部	—	—	—	ナデ	ナデ	暗黄褐色	暗黄褐色	良好	長石・雲母・石英・角閃石	
1032	土師器瓶	⑤区9462?	3層	把手部	—	—	—	ナデ	ナデ	浅黄褐色～灰白色	浅黄褐色	良好	長石・雲母・角閃石	
1033	土師器瓶	⑤区9262?	3層	把手部	—	—	—	ナデ	ナデ	灰白色	灰白色	良好	長石・雲母・角閃石	
1034	土師器瓶	⑤区9262?	3層	把手部	—	—	—	ナデ	ナデ	にぶい褐色	明赤褐色	良好	長石・雲母・石英・角閃石	
1035	土師器瓶	⑤区9262?	3層	把手部	—	—	—	ナデ	ナデ	にぶい褐色	にぶい褐色	良好	長石・雲母・石英・角閃石	
1036	土師器瓶	⑦区9466	3層	把手部	—	—	—	ナデ	ナデ	黄褐色	黄褐色	良好	長石・雲母・赤色粒子	

1037	土師器甕	⑦区9466	3層	把手部	—	—	—	ナデ	ナデ	にぶい橙色～褐灰色	良好	長石・雲母	
1038	土鉢	②区8664	2層	—	3.7	直径1.1	—	—	—	にぶい橙色	良好	角閃石	
1039	土鉢	②区8664	2層	—	(3.3)	直径1.1	—	—	—	にぶい赤褐色	良好	長石・石英・褐色粒子	
1040	土鉢	②区8664	2層	—	(2.4)	直径1.1	—	—	—	にぶい橙色	良好		
1041	土鉢	②区8664	2層	—	3.3	直径0.9	—	—	—	にぶい赤褐色	良好	雲母	
1042	土鉢	②区8664	2層	—	4.1	直径1.07	—	—	—	黄褐色	良好		
1043	土鉢	②区	表土	—	3.7	直径1.52	—	—	—	橙色	良好	長石・石英	
1044	土鉢	③区8664	表土	—	4.3	直径1.7	—	—	—	黒褐色	良好		
1045	土鉢	⑤区9260・9460	表土	—	(2.6)	直径1.07	—	—	—	にぶい橙色	良好	長石・角閃石・赤色粒子	
1046	土鉢	⑤区9260	清掃中	—	—	直径0.9	—	—	—	明赤褐色	良好	褐色粒子	
1047	土鉢	⑤区9264	3層	—	(2.6)	直径1.2	—	—	—	にぶい黄褐色	良好		
1048	土鉢	⑦区9464	3層	—	—	直径0.85	—	—	—	明褐灰色	良好		
1049	土鉢	⑦区9466	3層	—	4.1	直径0.96	—	—	—	明赤褐色	良好	長石・雲母・褐色粒子	
1050	移動式甕	⑤区9262	3層	基部	—	—	—	ナデ	ナデ	浅黄褐色   浅黄褐色	良好	長石・雲母・褐色粒子	
1051	移動式甕	⑦区9466	3層	基部	—	—	—	ナデ	ハケメ・ナデ	にぶい橙色	良好	長石・雲母・角閃石・赤色粒子	
1052	移動式甕	⑦区9464	3層	基部・体部	—	—	—	ナデ	ハケメ・ナデ	にぶい橙色	良好	長石・角閃石・結晶片岩・赤色粒子・金雲母	図化した2片は別個体の可能性あり

〔参考文献〕

安楽勉1993「畑中遺跡」『長崎県埋蔵文化財集報XVI』長崎県文化財調査報告書第108集

石木秀啓2004「九州の須恵器生産一特に8世紀以降を中心として」『第7回西海道古代官衙研究会資料集』於熊本市

今岡一三・松尾充晶・平石充2006『青木遺跡Ⅱ(弥生～平安時代編)』〔3分冊〕島根県教育委員会

小田富士雄・下原幸裕2003「佐賀県・東十郎古墳群の研究」(『福岡大学考古学研究室研究調査報告』第2冊、福岡大学人文学部考古学研究室)

亀田修一2013「かえりを有する輪状つまり杯蓋小考：岡山県備前市佐山新池1号窯跡出土例を中心に」『半田山歴史地理研究』1、岡山理科大学生物地球学部生物地球学科地理考古学研究室

管野和博2018「石背国の成立と石背郡衙関連遺跡」『第44回古代城柵官衙遺跡検討会資料集』福島県須賀川市、2018年2月18日  
木下之治1966『東十郎古墳群』佐賀県教育委員会

下原幸裕・西岡千絵2004「佐賀県・東十郎古墳群の研究—補遺編—」(『福岡大学考古学研究室研究調査報告』第3冊、福岡大学人文学部考古学研究室)

竹中(野澤)哲朗・福田一志2001『稗田原遺跡V』長崎県文化財調査報告書第161集

宮崎貴夫1980「出土土器について」『申島遺跡』長崎県文化財調査報告書第51集

宮崎貴夫1986「歴史時代土器・陶磁器・滑石製容器」(宮崎貴夫・町田利幸編『今福遺跡Ⅲ』長崎県文化財調査報告書第84集)

山崎純男・山口譲二・松村道博・原俊一1980『下和白塚原古墳群』福岡市埋蔵文化財調査報告書第55集

②TAK201303調査区包含層出土遺物(第327・328図、第115表から117表、図版285・286)

TAK201303調査区の古代の報告遺物は全てA区から出土する。B区や竹松遺跡南部のC区からも若干の土器が出土するが、ほとんど小片であり、凶化に堪える遺物は少ない。特異な土器は出土していない。基本土層1～3層の出土遺物が混じる。旧流路からの流れ込みを含む。9世紀の遺物が目立つが、A区の周囲からは同時期に該当する遺構は見つかっていない。このような遺物の出土状況が持つ意味については小結で触れる。溝SD出土として取り上げた遺物もあるが、その下限時期は中世に下るもので、遺構としては中世の章で報告している。取り上げ状況を観察表に明記の上で包含層出土遺物として報告する。

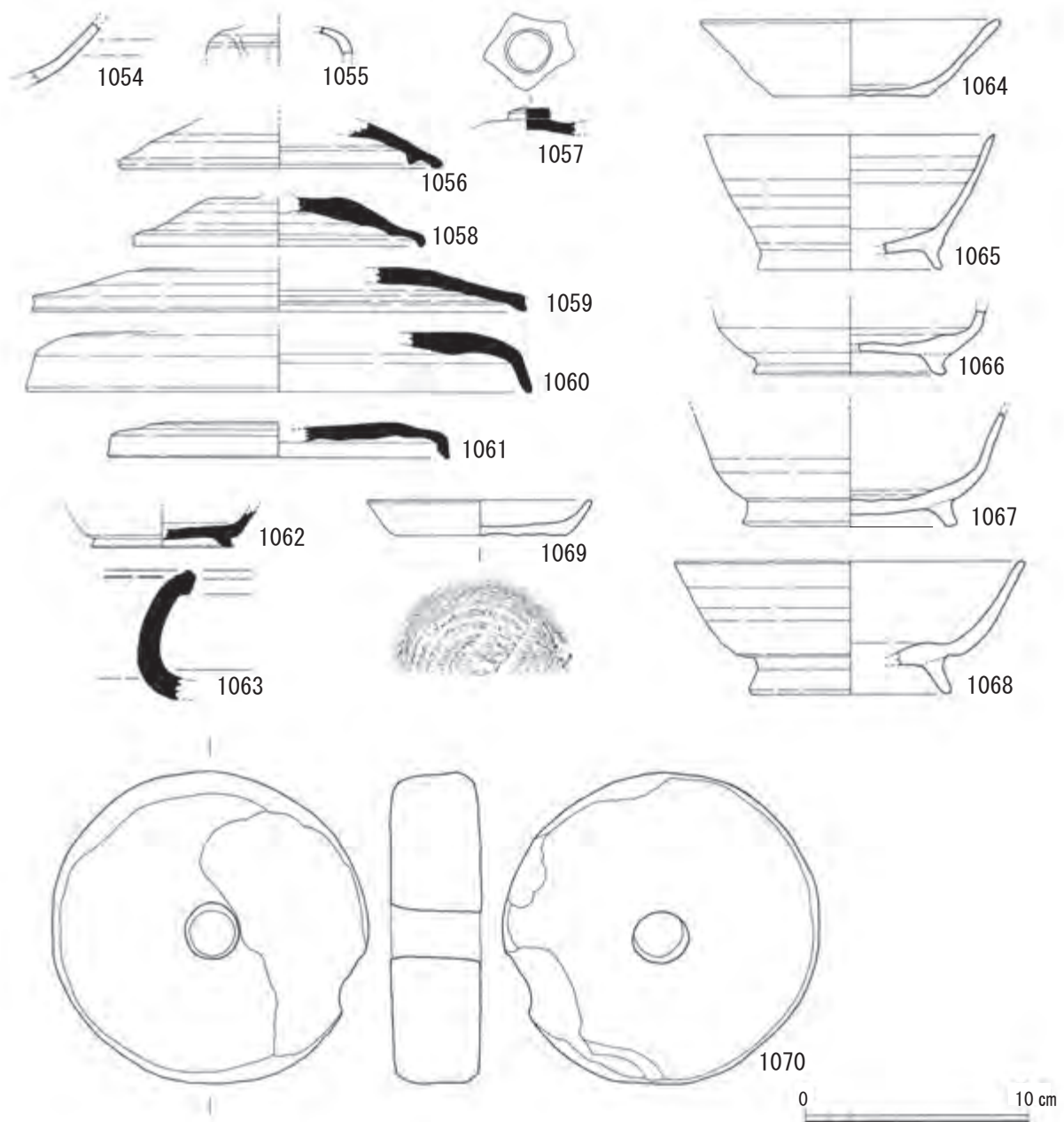
1054は越州窯青磁碗Ⅰ類の体部片である。残存範囲において内外面ともに全面的に黄褐色の施釉が為されている。口縁および高台部を欠くため、太宰府編年における細分類は不明である。1055は奈良



図版285 TAK201303包含層出土遺物



時代の国産の二彩の小壺である。緑釉地に褐釉を施す。発色は全体に淡いが、焼成は良好である。1056～1063は須恵器である。1056～1059は杯蓋で、1056は7世紀後半のかえりを持つもので、1057は端部に丸みを帯びた整形を施す。1058は摘み部で、1059は口径21.8cmを測る大型品である。1060はA1区SD11から出土した壺蓋である。SD11については中世の遺構として報告している。口径22cm程度に図上復元した。口縁部近くで肥厚した付近までは内外面とも回転ナデで調整しているが、失われた中心部に向かって薄く複数方向の直線状にナデ調整を行っている。古代の須恵器壺蓋の報告例は当該時代の遺跡の調査例の中でも一般に少ない。1060は竹松遺跡の中で初例である。1061は蓋として作図したが、(1)⑤のSX07で取り上げたものと同様の皿状の高杯の杯部である可能性を残す。1062は杯身で、高台が外反して平行四辺形状をなし、8世紀半ばに位置づけられるが、やや小ぶりである。1063は壺の口



第327図 TAK201303包含層出土遺物(1/3)

縁部で7世紀後半と思われる。

1064～1069は土師器である。1064は、9世紀初頭に位置づけられる。1065～1068は9世紀代の椀である。1069は小皿で、法量から10世紀前半と思われる。1点のみ年代が下るが、1063と同様に中世溝 SD 11に関連して出土しており、流路の上流からの流れ込みによるものと考えられる。

1070は有孔円盤状石製品と称すべきものである。直径14cm、穿孔の径は2cm強を測る。端部は丸く削り、平衡に研磨されて、全般に規格性の高い整形が為されている。古代・中世に大村湾地域で利用が活発化する滑石製品であり、紡錘車を大型化した古代の祭祀遺物である可能性があるため、古代の章で報告する。竹松遺跡からは『竹松遺跡Ⅱ』で取り上げた「木都」紡錘車が出土している。

第115表 TAK201303包含層出土土器観察表

遺物番号	器種	出土区・グリッド	層位ほか	部位	法量 (cm)			調整		色調		焼成	胎土	備考
					口径	器高	底径	内面	外面	内面	外面			
1054	青磁椀	A3区8272	—	体部	—	—	—	施釉	施釉	暗オリーブ色	良好	精良	越州窯椀Ⅰ類 外面にロクロ目	
1055	二彩小壺	A4区8674	SD11②層	胴部上位	—	—	—	回転ナデ・露胎	施釉	灰白色	淡黄色	良好	精良	緑釉地に褐釉を施す
1056	須恵器杯蓋	A4区8472・8474	SD11②層	口縁部	14.0	—	—	回転ヘラケズリ・ナデ		浅黄色	オリーブ灰色	良好	緻密、長石・角閃石	かえりあり
1057	須恵器杯蓋	A4区8272・8274・8474	1層	摘み部	—	—	—	ナデ	ナデ	灰褐色	灰褐色	良好	長石・角閃石・白色粒子	
1058	須恵器杯蓋	A5区8674	SD09	体部	13.0	—	—	回転ナデ・ナデ	回転ヘラケズリ	青灰色	紫灰色	良好	長石・白色粒子	摘みの痕跡あり
1059	須恵器杯蓋	A4区8472・8474	1層	口縁～天井部	21.8	—	—	回転ナデ	回転ヘラケズリ・回転ナデ	にぶい黄橙色	浅黄橙色	良好	長石・石英・雲母	
1060	須恵器壺蓋	A1区8074	SD11③層	口縁～天井部	22.2	—	—	回転ナデ・ナデ	回転ナデ	青灰色	暗紫灰色	良好	長石・角閃石・褐色粒子	
1061	須恵器杯蓋	A1区8072	1層	口縁～天井部	15.1	—	—	回転ナデ	回転ナデ	灰色	灰色	良好	長石	皿状高杯か
1062	須恵器杯身	A3区8272・8274	3層	底部	—	—	6.4	回転ナデ	回転ナデ	灰白色	灰白色	良好	白色粒子	
1063	須恵器壺	A4区8672	SD09③層	頸部	—	—	—	回転ナデ	回転ナデ	灰色	黒色	良好	緻密、長石・石英・黒色粒子	
1064	土師器椀	A5区8674	3層	半分超	13.1	3.4	7.0	回転ナデ	回転ナデ	橙色	橙色	良好	石英・雲母	
1065	土師器椀	A4区8472・8474	SD11②層	高台～口縁部	11.8	6.0	7.4	回転ナデ	回転ナデ・ナデ(高台切り離し)	橙色	浅黄橙色	良好	長石・雲母	
1066	土師器椀	A1区8072	3層	底部～体部下半	—	—	8.6	回転ナデ	回転ナデ	灰白色	灰色	良好	石英・長石・白色粒子	
1067	土師器椀	SD12	—	底部～体部	—	—	8.6	回転ナデ・指押え	回転ナデ	橙色	橙色	良好	石英・雲母・結晶片岩	3層相当
1068	土師器椀	A1区 SP130	—	体部	15.6	5.9	8.8	回転ナデ・ナデ	回転ナデ・回転ヘラケズリ	にぶい黄橙色		良好	石英・長石・細砂粒	西壁トレンチ2層で検出
1069	土師器小皿	A1区8074	3層	半分残存	10.0	1.6	7.3	回転ナデ	回転ナデ	灰白色	灰白色	良好	赤色粒子・白色粒子	底部ヘラ切り

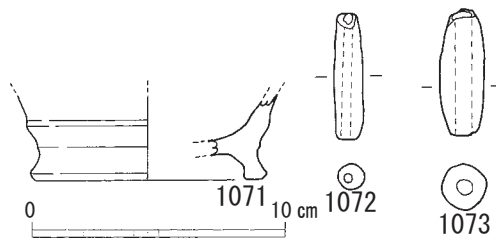
第116表 TAK201302・TAK201303包含層出土土器観察表

図版番号	器種	部位	石材	最大長cm	最大幅cm	最大厚cm	重量g	その他
1053	紡錘車	ほぼ完形	滑石	4.3	4.3	1.7	50	
1070	円形石製品	ほぼ完形	滑石	14.0	14.0	4.0	1375.0	短冊形

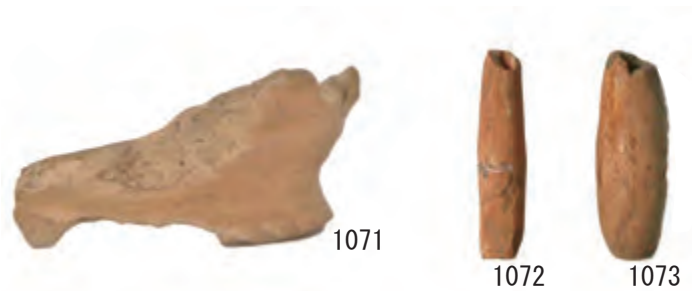
③TAK201304調査区包含層出土遺物(第328図、第117表、図版286)

基本土層(竹松遺跡南部)の1層から3層の出土遺物が混じっているが、3層からも近世陶磁器が出土しており、いずれも二次堆積の要素を含む。

1071は土師質の高台付椀である。残存状況により切り離しは不明である。1072は土師質の管状の土錘である。重量は10g未満の5.5gと小型のものである。1071、1072ともに摩滅のため器面全体がととも滑らかである。1073は土師質の紡錘形状の土錘である。重量は10gを超え12.5gと1072より大型である。(東郷一子)



第328図 TAK201304包含層出土遺物(1/3)



図版286 TAK201304包含層出土遺物

第117表 TAK201304包含層出土土器観察表

遺物番号	器種	部位	出土グリッド・層位	法量(cm)			調整		色調		焼成	胎土	備考
				口径	器高	底径	内面	外面	内面	外面			
1071	土師器椀	底部	4086 3層	—	3.4	(9.0)	回転ナデ	回転ナデ	灰白色	灰白色	良好	精良、長石	高台付

第118表 TAK201304包含層出土土製品観察表

遺物番号	器種	最大長(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	重量(g)	色調	焼成	胎土	出土区グリッド	備考
1072	土錘	5.0	1.2	1.1	5.5	橙色	良好	雲母、石英	4084	筒型
1073	土錘	4.6	1.8	1.8	13.2	にぶい橙色	良好	雲母、石英	4686	紡錘型

#### ④特殊遺物(第329図、第119～121表、図版287)

出土文字資料を除き、古代に属する特殊遺物として8点を取り上げる。

**1074**は宋銭で景德元宝である。景德年間は1004～1007年である。TAK201302②区8660グリッド2層礫上から見つかった。5mm大の四角穴を持つ。流れ込みによる二次堆積の可能性を残す。丸みを帯びた楷書体の文字が記される。破損が激しいため写真のみの掲載に留める。

**1075**は錫杖状の青銅製品である。青銅製で、部分的に金メッキが残る。ほぼ完形の遊鑲部と羊角状の大鑲の先端部が出土した。錫杖型鉄製品における井上雅孝分類の断面形タイプに近い形態である。TAK201302の⑨区0068グリッドの礫直上の第4図に示す地点から取り上げた。錫杖は『四分律』『十誦律』などの經典の記載では山林修行の際に野生動物から身を守るための仏具であり、密教の山林信仰とつながる村落寺院の宗教活動の様子を物語る遺物と考えられる。⑨区西側付近から近世陶磁などの遺物は見られず、字図などの資料から近世以後の住居域であった証左はない。近世などの新しい遺物である可能性は低い<sup>(註1)</sup>。

**1076**は土師質の香炉蓋の双輪部である<sup>(註2)</sup>。九州では鹿児島県始良市小倉畑遺跡の類似例(寺原徹2002)がある。小倉畑遺跡は主要遺構のある主体部が未確認であるが、旧流路や包含層から多くの古代の遺物が出土している点、鉄鉢型土器が出土している点など竹松遺跡と類似性が大きい。仏塔状のつまみがついた香炉蓋は久留米市へボノ木遺跡の出土例があるが、本資料に比べて塔部の軒が浅く細身であり、型式が異なる。**1077・1078**は榿状滑石製の石製品である。いずれもTAK201303調査区から出土した。**1077**は縦横4.0cm、器高4.0cmを測り、鈕を除いた高さ2.7cmの本体部は四方を丸く収束させる均衡ある器形で、3片から成る蓮華を象った鈕に直径0.4cmの穿孔を施す。完形品であり、**1078**については、弥生後期前半の竪穴建物跡SC01を切る中世溝SD01から出土した<sup>(註3)</sup>。縦長な形状で、断面を八角形に面取りし、上方がわずかに窄まる。上面に鈕と思われる摘み状の突起痕と孔痕が見られる。上位に孔があるが貫通はしておらず、再加工時のものと思われる。製作年代が10世紀以前に属するも、溝への二次堆積による出土か、**1078**の製作年代が11世紀末以降に下るか否かについては、類例の編年研究が十分でない現状では留保しておきたい。なお、同様の滑石製の榿状石製品はTAK201202⑤区からも出土しており(『竹松遺跡Ⅱ』で報告済)、TAK201506調査区では金属製榿も出土を見ている。

**1079**は8世紀代の須恵器杯蓋の摘み部分で、転用硯である<sup>(註4)</sup>。天井部内面が平滑で、朱墨と思われる赤色顔料が残る。朱墨を入れて使用されたものと想定される。**1080**は線刻を施した須恵器瓶の胴部片である。外面にはカキメが施された後、水鳥と思われる線刻画が描かれる。水鳥は嘴が広く頸の羽毛を表現するなど写実的である。内面には指オサエ痕が残る。(堀内・川畑)

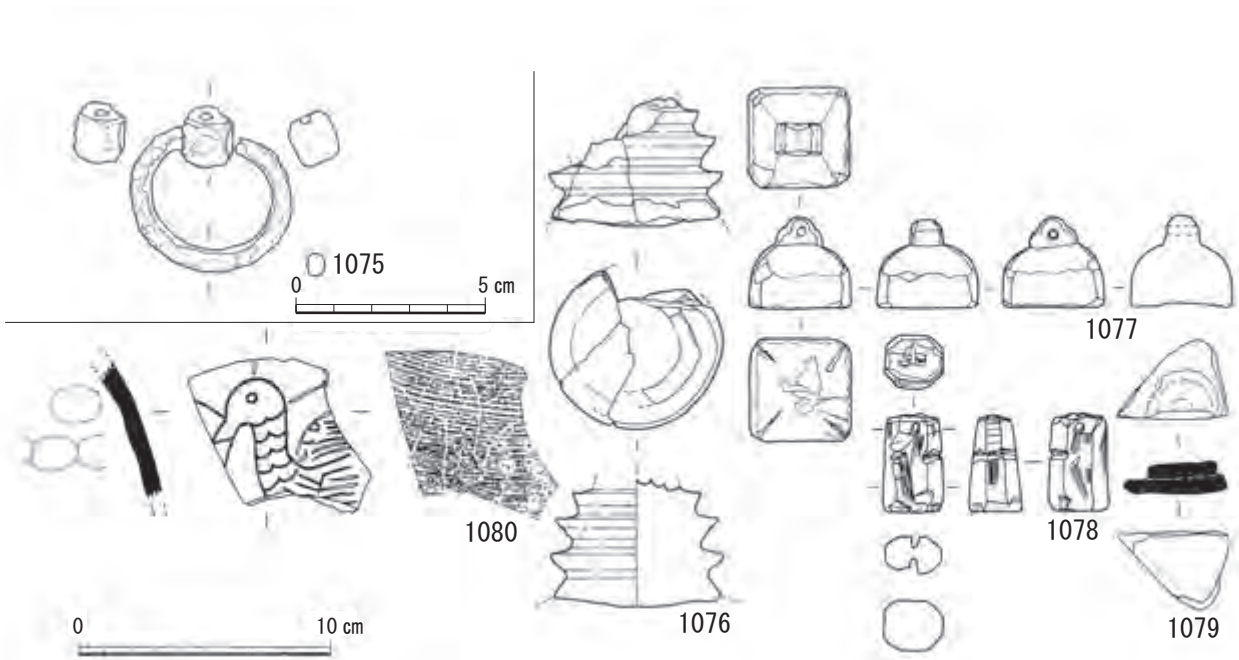
(註1)四面廂建物SB05との関係については別項で論じた(堀内・濱村2017)。

(註2)柴田博子・石黒ひさ子・笹生衛各氏の調査指導による。当初は瓦塔の相輪部分の可能性も想定していたが、土製百万塔としての記者発表を経て、香炉蓋であるとの結論に至った。なお九州における瓦塔の出土例(1点の伝世品を含む)は、小田富士雄による集成では17例が知られる(小田・下原2007)が、肥前国内での出土例は1例に留まる。佐賀平野の中心地の肥前国府付近の上和泉遺跡からは基壇部と初重軸部(第1層部分)が出土している(木島慎治1999)が、離島部を含めて長崎県内からは未だ出土が見られない。百万塔は称徳天皇の発願により神護景雲年間に作られて十官寺に置かれた木製百万塔を模して諸国で作られたと考えられているものである。正倉院の二点の金属製塔椀型合子に酷似する土製品であり、

塔部は三重・五重・七重の形態が見られ、軒の深さにはいくつかの種類がある。

(註3)それぞれ弥生時代、中世の遺構として別項で報告。

(註4)本品など平成24・25年度調査出土の古代の特殊遺物の数点については、平成26年3月に川畑・中尾・松崎が九州歴史資料館に遺物を持参して鑑定を受け、関連して大宰府史跡など出土の転用硯を多量に閲覧した。小田和利氏(学芸調査室長)の好意に謝意を表する次第である。



第329図 古代特殊遺物(1/2、1/3)



図版287 古代特殊遺物

第119表 古代特殊遺物(金属器)観察表

遺物番号	器種	調査区・グリッド	層位	部位	材質	最大長 cm	最大幅 cm	最大厚 cm	重量 g	備考
1074	景德元宝	TAK1302 ⑫区8660	2層礫上	3/4	銅	2.4	2.4	—	—	四角穴0.5cm
1075	錫杖状 青銅製品	TAK1302 ⑨区0068	礫直上	遊鑲部・ 大鑲先端部	青銅	4.2	4.5	0.5	18.4	

第120表 古代特殊遺物(石器)観察表

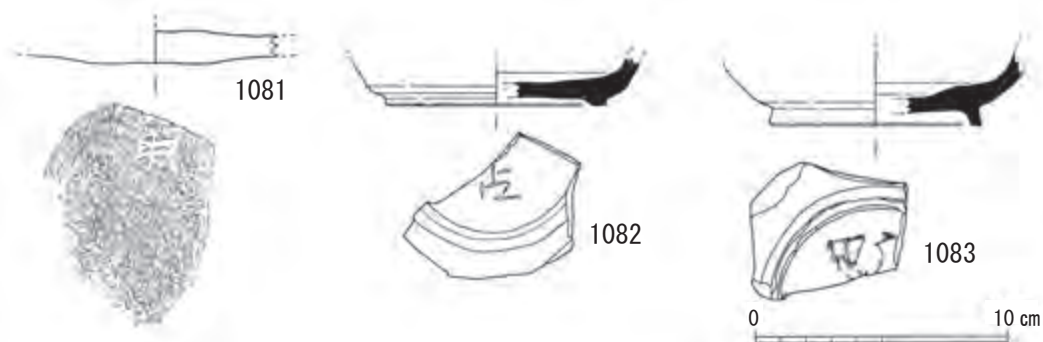
遺物番号	器種	調査区・グリッド	層位	部位	材質	最大長 cm	最大幅 cm	最大厚 cm	重量 g	備考
1077	権状石製品	TAK1303A 区8474	②層トレンチ (灰褐色砂質土)	完形	滑石	4.0	4.0	3.6	46.1	—
1078	権状石製品	TAK1303A 5区8874	SD01②層(砂礫層)	ほぼ完形	滑石	3.9	2.4	2.1	33.2	—

第121表 古代特殊遺物(土器)観察表

遺物番号	器種	出土区・グリッド	層位 ほか	部位	法量(cm)			調整		色調		焼成	胎土	備考
					口径	器高	底径	内面	外面	内面	外面			
1076	土師器香炉蓋	TAK1302⑬区 8868	2層 下 流路内	塔部	—	—	—	ナデ	ナデ	—	浅黄橙	良好	長石	
1079	転用硯	TAK1303B1区 9074	第一遺 構面	摘み部	—	—	—	使用痕	ナデ	灰黄色	灰色	良好	長石	須恵器杯蓋。赤色顔料付着
1080	線刻土器 (須恵器瓶)	TAK1303A4区 8672・8674	2層	胴部	—	—	—	ナデのち 指押さえ	カキ目に ヘラ描き	灰黄色	灰色	良好	精良	水鳥と思われる線刻。 8674G1層出土品と接合
1081	刻書土器 (土師器杯)	TAK1302⑫区 7858	3層	底部	—	—	—	ナデ・ 指押さえ	ヘラ切り・ 刻書	にぶい 橙色	橙色	良好	長石・雲母・ 多量の赤色粒子	
1082	刻書土器 (須恵器杯身)	TAK1302⑦区 9466	3層	底部	—	—	8.7	回転ナデ	回転ナデ	灰色	灰色	良好	精良	
1083	墨書土器 (須恵器杯身)	TAK1302⑦区 9466	2層	底部	—	—	8.4	回転ナデ・ ナデ	回転ナデ	灰白色	灰白色	良好	長石・角閃石・ 褐色粒	

⑤文字資料(第330図、第120表、図版288) (註5)

TAK201302調査区では3点の文字資料が出土した。1081は「中」と記した刻書土器である。⑫区の7858グリッド3層から出土した土師器杯の底部外面に刻まれている。流路付近からの出土のため摩滅が激しく、ミガキaの有無などの表面調整などはいかがいたいが、10cm以上にわたる底径から山本編年Ⅳ期に相当する8世紀後半の年代が想定される。1082は底径8.7cmの須恵器杯身の高台内の底部外面に「占」刻書を施している。⑦区の9466グリッド3層から出土した。残存部の上方に他の文字が存在したか否かは明らかではない。「占」の文字を記す意味には所属集団の明示などが想定できるが、定かではない。須恵器の器形から土器の年代は8世紀後半に相当する。この時期の地方社会への占い、すなわち術数文化の普及としては全国的に早い状況である。このような術数文化の普及状況は壱岐・対馬と中央及び伊豆に分布する卜部氏の活動と関連するものと考えられる。1083は底部高台内に墨書のある土師器杯である。残存部から判断すれば「町」と釈読され、下にわずかに残角が残る文字が続



第330図 古代出土文字資料(1/3)

くものと想定される。下の残角と一体で読み、「野」などと釈読する途も考えられるが、「田」に続く下の字画との間に懸隔があること、「丁」が完結した字形を見せることから、その可能性は低い。土器の年代については、8世紀前半と思われる。



図版288 古代出土文字資料

(註5)出土文字資料の釈読については、永山修一(ラ・サール学園教諭)・細井浩志(活水女子大教授)・木本雅康(長崎外国語大学教授)・森公章(東洋大学教授)・服部一隆(明治大学兼任講師)・高島英之(群馬県教委)・柴田博子(宮崎産業経営大学教授)・石黒ひさ子(明治大学兼任講師)・堀江潔(佐世保高专准教授)・鈴木景二(富山大学教授)[順不同]の各氏から実見の上、ご意見を頂いた。『竹松遺跡Ⅱ』に引き続き謝意を表する次第である。

〔参考文献〕

- 井上雅孝2007「古代蝦夷社会における古密教の受容と展開」(楢山林継・山岸良二編『原始・古代の祭祀』同成社)
- 小田富士雄・下原幸裕2007『豊前トギバ窯跡の調査 ―古代須恵器・瓦塔に関する研究―』福岡大学考古学研究室研究調査報告第5冊
- 木島慎治1999『上和泉遺跡群Ⅰ 上和泉遺跡6区』佐賀市文化財調査報告書第107集寺原徹2002『小倉畑遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター調査報告書第34集
- 中野充・楠本正士2002『上和泉遺跡群Ⅱ 上和泉遺跡9』佐賀市文化財調査報告書第135集
- 奈良文化財研究所編2006『在地社会と仏教』(第10回古代官衙・集落研究集会報告書)
- 堀内和宏・濱村一成2017「竹松遺跡と西日本の村落寺院」『民衆史研究』93号、民衆史研究会
- 堀内和宏2016「肥前平氏と薩摩・南島との交流について」(『9～11世紀における大村湾海域の展開 ―東アジア世界の中の竹松遺跡―』平成28年度長崎県考古学会大会発表要旨集・基本資料集)
- 立正大学考古学会編1999『【特集】出土仏具の世界』(『考古学論究』第5号)

## (7) 小結

### ① 古代の竹松遺跡の遺構と遺物に関する若干の考察

小結の冒頭で出土遺構、遺物について羅列的ながら、性格付けと予見を示すこととする。

TAK201302調査区⑤区周辺の掘立柱建物群(SB02～04)と主軸を同じくする溝 SD03・05、周囲の土坑群 SK・不明遺構 SX04・07を、まとまりある遺構群として想定する。SX06・10や SD04も別段階の区画施設の一つと想定する。文字資料の出土もなく、出土遺物の点からも建物の規模から言っても官衙的な性格については希薄で、遺構としての性格は居宅の可能性が高いものと考えている。が、他遺跡の類例の集成分析を待つ必要がある(以下「居宅」と称す)。「居宅」の年代観については柱穴や溝からの最大の建物 SB02と方位を同じくする SX04・07出土土器を一括性の高さにより基準とすれば、8世紀後半から9世紀前半の時期のものとなる<sup>(註1)</sup>。SX04の出土遺物は煮沸具の土師器甕片が主体を占めるほか、やや大型の須恵器皿が2点出土している。一般農民の生活の範囲に収まるものでなく、集落で支配的な立場にある人物と関係して埋設されたものと想定している。

また土坑や区画施設については、より年代幅を持つものと考えられる。8世紀初頭(牛頸VI期)に属する包含層出土の須恵器も見られる。SK16出土の黒色土器碗984は口縁端部の形態に注目すると、他の北部九州の出土例から10世紀のものである。⑤区周辺の土坑などの遺構は長い時間存続したと考えられる。土坑については先述のように(1)連続して蟻の巣状や溝状を呈する特異な形状のもの(SK18, 25, 29～34, 38, 44, 47, 49～54, 56, 62, 92)や、(2)掘立柱建物の柱穴や溝などとの平面重複関係を有するもの(SK12, 18, 24, 25, 26, 29, 30, 32, 42, 65)、(3)概ね1m以上の法量を持つ円形または楕円形的大型土坑(SK17, 26, 35, 36, 37, 43, 44, 55, 58)の3類型があり、性格や年代差を示すとも考えられるが後考を俟つ。(1)については必要に応じて断続的にほとんど時間差を置かず掘削された土取穴や廃棄土坑と考えられる<sup>(註2)</sup>。(3)については後述するように、掘立柱建物を中心とする「居宅」よりわずかに先行する可能性を残す。

包含層出土遺物に関しても、中世に続く⑫区の溝の埋土を除けば、⑤区周囲(④区・⑦区・⑧区)から集中して出土している。当該項で述べたように、TAK201302調査区⑥区のSK72と北側の「居宅」は年代が合うものと考えられるが、距離がある。⑥区は後世の攪乱が遺構配置図に見るように大きく、これらの間に古代の遺構が所在した可能性があるが、確認できない。大調査区 TAK201301・03・04調査区<sup>(註3)</sup>では、古代の明確な遺構はほとんどなく、層位的な出土状況から見て、南東側の郡川扇状地の上流部からの流れ込みと看做される。⑨区・⑩区からは「草堂」と解した四面廂建物や緑釉陶器皿、錫杖状鉄製品の出土は見られたが、古代の土器の取り上げはわずかである。大村扇状地の基盤礫層の高まりが大きく、柱穴は直接礫層に掘り込んだもので、後世の耕作により相当の深度で削平された結果と考えられる。

竹松遺跡出土の煮沸具について触れる。古墳中期から8世紀の土師器の編年に関し、甑や甕などの煮沸具の変化は北部九州では畿内に比較して緩慢であったことが指摘される(山本信夫1996a・1996b)。具体的には甑の把手の形態は畿内(河内平野)では、TK23型式以後(6世紀初頭)以降は幅を狭くして上方へ湾曲し、飛鳥I式段階以降は湾曲を強めて先端を尖らせる(京嶋・高井編1992)が、北部九州では古墳中期と同様の形態の把手が8・9世紀の遺跡でも出土する。竹松遺跡の包含層出土土器の様相も同様である。地方官衙遺跡には厨における官人への給食活動が必ず付属し、器種構成の比率を高めた供



膳具は飛鳥Ⅲ式以降に台付・平底食器の成立に端的に示されるように、律令制土器様式として規格化される。

また移動式竈が出土したことも注目される。移動式竈については8世紀初頭の大宰府の西海道への施行を画期とする時期(牛頸編年Ⅶ期、山本Ⅱ・Ⅲ期)から北部九州で出土量が増加することが、「戌」木簡を出土したことで知られる佐賀県中原遺跡の調査成果の分析により指摘されている(美浦2007)。国造軍の段階を脱した組織編制と運営原理を取る軍団兵士制の確立との関係が想定される。移動式竈の出土は、肥前国府から離れた彼杵郡域にも軍事面を伴う律令国家の活動が盛んであったことを示す。このような律令制支配の浸透は大村扇状地を経て島原半島の先端に至り、海上駅路で肥後につながる円環ルートを有する古代官道の西海道肥前路の存在にも示されるもので、『竹松遺跡Ⅱ』(新幹線文化財調査事務所調査報告書第5集)で報告した「木都」刻書紡錘車の出土、7世紀第4四半期に相当する上限年代の想定とも関連するものと考えられる。

(註1)土器編年の論拠となる周辺地域の文献については以下に記す。宮都や全国的な編年文献は略す。北部九州に絞れば、1970年代からの前川威洋・森田勉らの先駆的な土師器及び貿易陶磁の編年、分類の成果を受け、山本信夫はいわゆる大宰府編年を確立し、近年は九州歴史資料館も過去の大宰府遺跡調査の正報告書作成を機に、不丁地区の遺構のみに資料を得た編年を提示した(小田・杉原ほか2014)。並行して豊前では佐藤浩司による編年、肥後では網田龍生による編年が提示されているが、肥前西部では資料の不足から未提示であった。出土土器の全体的な編年の問題については、全調査区の報告が揃った機会を俟つこととしたい。

(註2)九州歴史資料館の小田和利氏のご教示による。SK34については樹痕の切り合いの可能性を残す。

(註3)細片が多く、ほとんどは図化に堪えないか、必ず同一形式の土器がTAK201302⑤区周辺から出土しているため、報告の対象としない。

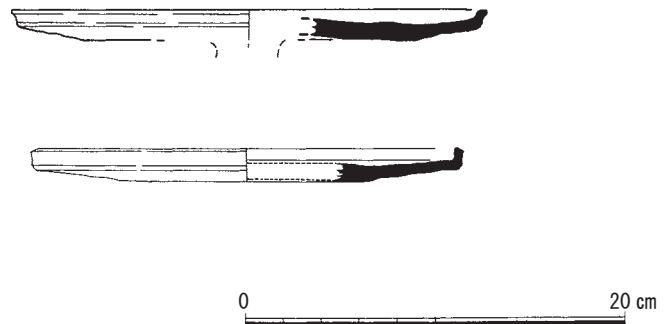
[参考文献]

- 網田龍生1994「奈良時代 肥後の土器」『先史学・考古学論究』龍田考古会
- 岩橋孝典2003「山陰地方の古墳時代後期～奈良時代の炊飯具について」『古代文化研究』第11号・島根県古代文化センター
- 小田和利・杉原敏之・下原幸裕・小嶋篤2013『大宰府政庁周辺官衙跡Ⅳ—不丁地区 遺物編1—』九州歴史資料館
- 小田和利・杉原敏之ほか2014『大宰府政庁周辺官衙跡Ⅴ—不丁地区 遺物編2—』九州歴史資料館
- 小田裕樹2013「食器構成からみた「律令的土器様式」の成立」『文化財学の新地平』奈良文化財研究所
- 京嶋覚・高井健士編1992「第2節古墳時代後半期における土師器の器種組成」『長原・瓜破遺跡発掘調査報告Ⅲ』大阪市文化財協会
- 杉井健1998「古代における竈の変質」(大阪大学文学部日本史研究室編1998『古代中世の社会と国家』清文堂出版)
- 中島恒次郎2005「聖武朝の土器—九州(大宰府と周辺)—」『古代の土器研究 聖武朝の土器様式』古代の土器研究会
- 西弘海 1986『土器様式の成立とその背景』真陽社
- 堀内和宏2018「鞠智城と古代西海道の官衙・交通路」(『鞠智城と古代社会』第5号〔平成28年度鞠智城跡「特別研究」論文集〕熊本県教育委員会)
- 美浦雄二2007「3 移動式竈について」(小松讓編『中原遺跡Ⅰ』佐賀県文化財調査報告書第168集)
- 山本信夫1990「統計上の土器—歴史時代土師器の編年研究に寄せて—」『九州上代文化論集』〔乙益重隆先生古稀記念論文集〕
- 山本信夫1996a「古代前期の煮沸具—筑前・筑後・豊前・豊後・肥前—」『古代の土器研究—律令的土器様式の西・東4 煮沸具—』古代の土器研究会〔第4回シンポジウム資料〕
- 山本信夫1996b「北部九州の土器」(大川清・鈴木公雄・工楽善通編1996『日本土器事典』雄山閣出版)

②TAK 201302⑤区の居宅関連の出土遺物と類似遺跡(第331図)(参考文献は439頁、440頁参照)

各項目の記述の中で既に記したが、TAK201302④区の不明遺構 SX04と⑤区の掘立柱建物 SB02～04の3棟、不明遺構 SX07の関係性については、有力農民の居宅と関連施設として捉えられる。その性格を象徴するものとして、まず注目すべき遺物は SX07出土の皿状の須恵器高杯968である。古代の高杯は須恵器・土師器の区別を問わず、一般集落から出土する器種ではないが、畿内の宮都、大宰府周辺官衙や国府など官衙出土のものとも型式が異なっている。これらの中核的官衙出土品は器厚が薄く整形された上に、杯部の器形がわずかに端部に向かって立ち上がる古墳時代以来の供献土器たる高杯の形態を取る。それらとは異なり、杯部が皿状の形態を取る。968は皿状の高杯の中でも、後述する宮原遺跡出土品などに見られる牛頸窯跡産品とも様相を異にしている。内外面を丹念に回転ヘラケズリしている。器厚は脚部との接合部に向けて厚くなり、最大13mmほどに及ぶ。

④区・⑤区のこれらの遺構の年代は8世紀中頃から9世紀前半である。SX04からは土師器甕を中心とした土器等を出土した。SX04について、周辺地域で同時期の類似した遺構を探すと、福岡県朝倉市(旧甘木市)下浦の宮原遺跡<sup>(註1)</sup>D地区の50番土坑が先ずは挙げられる。南北長8m、東西長2m、深さ0.7mの、南北に迫り出しを持つ長方形を呈する。SX04と同様の土師器甕や須恵器杯の他、多数の須恵器・土師器・製塩土器・転用硯を出土し、北側に5m離れて位置する掘立柱建物109・110号との関係が指摘される。



第331図 宮原遺跡出土(上)・惣座遺跡出土須恵器(下)高杯(1/4)  
(惣座遺跡出土遺物は報告書では蓋として掲載されている)

宮原遺跡は大分自動車道の建設に伴って

大規模に発掘調査された遺跡である。下高橋官衙遺跡や小郡官衙遺跡との関連が指摘される8世紀から9世紀にかけての古代集落遺跡である。SX07出土の須恵器高杯の類似品が、宮原遺跡の50番土坑及び49番土坑から出土していることも注目すべきであろう。片や大宰府周辺官衙や九州内の国府跡の遺跡では出土例がない。一般庶民が使用する日常品ではないが、官衙での公的儀式・饗宴や、長屋王邸跡に代表される上級貴族の邸宅などで使用される高級品でもない、中間的な性格を有するものと考えられる。

佐賀市大和町惣座遺跡(田平徳栄他1990)の土坑 SK232からも、須恵器高杯の類似品<sup>(註2)</sup>が出土している。口径は23.0cmと、951とほぼ一致し、皿状に平たく広がり、中央にかけて肥厚する器形も酷似している。惣座遺跡は嘉瀬川の左岸の微高地上にあって、肥前国庁の政庁の北北西200mに位置し、長崎自動車道の建設に伴って1982・83年度に発掘調査された。古代のコの字配置の総柱の倉庫群が、弥生中後期の環濠集落の上層に展開する。SK232は大型掘立柱建物 SB260の東側に位置する廃棄土坑であり、建物の使用時期と同時期の廃棄年代が想定される。

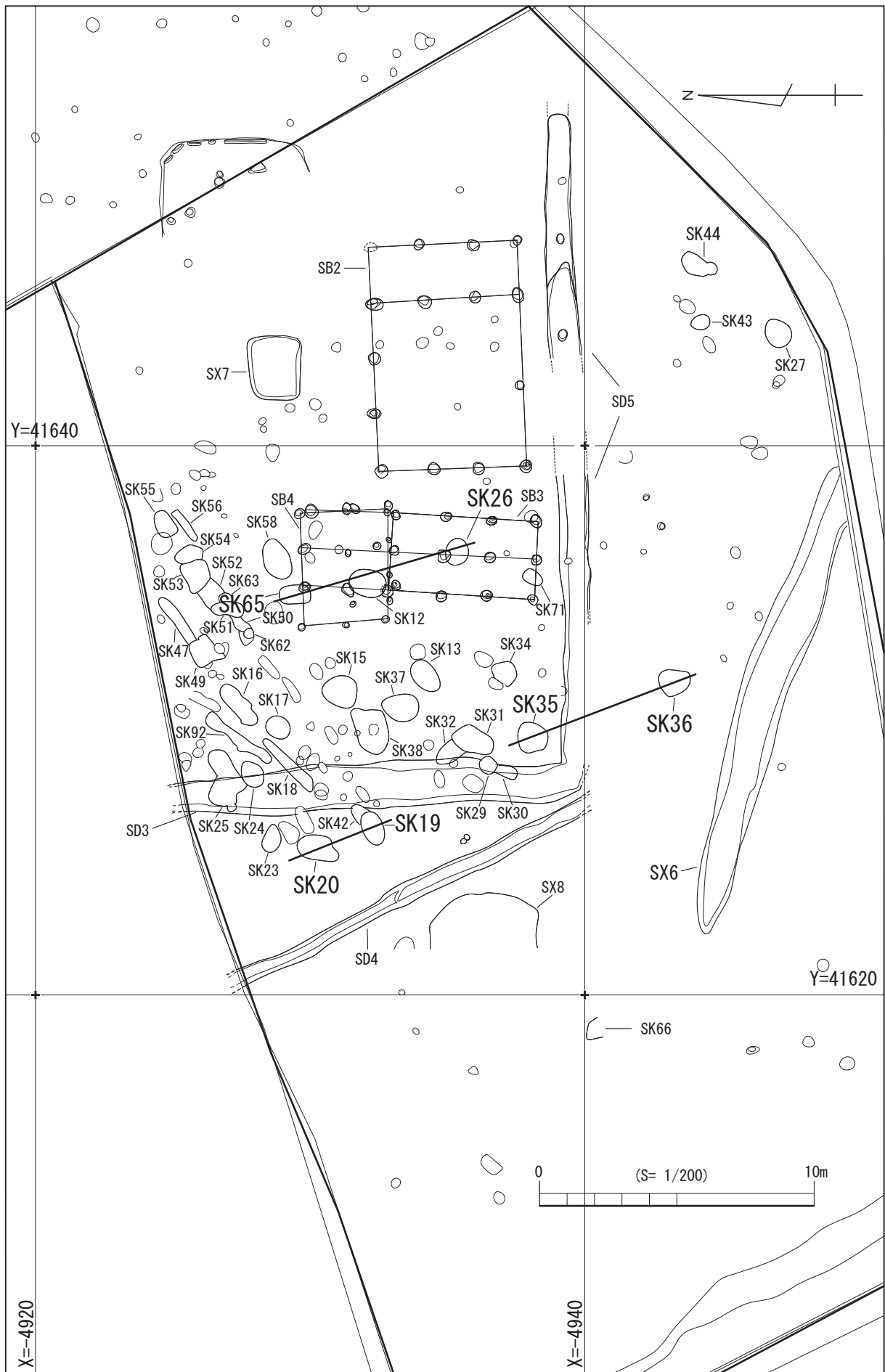
SB260は近隣では肥前国庁正殿に次ぐ規模の2×6間の大型建築であり、報告書では8世紀後半から9世紀初めに存続時期が推定されている。南に向けたコの字配置の中庭の管理棟的な施設の所在が推定されている。国庁に倉庫群が附属する肥前国府の状況は、租の収納施設として倉庫令などで規格や管

理規定が制度的に整備された郡家の正倉に比べて、その性格を明らかにしづらい。地理的に見れば、嘉瀬川の東岸にあって、川の防衛ラインの手前に食料を貯蔵しておく戦略的な意義があったものと考えられる。8世紀前半の段階では「兵家稲」を収める特殊な軍事的な目的<sup>(註3)</sup>も想定され、730年代の官稲混合を経て8世紀後半以降には民政色が強くなったものと考えられる。同様の施設が他の国府に見られないことは、肥前国府では8世紀後半以降もそれ以前からの惣座遺跡の軍事目的の倉庫群施設を活用した柔軟な行政執行が行われたことを窺わせる。このような惣座遺跡の遺物様相は、全国で斉一な地方行政制度に必ずしも属さず、地域の固有の事情に応じて地方財政と官司の運営が行われていた実態を示す遺跡として捉えられる。

(註1)竹松遺跡と宮原遺跡の古代の遺構遺物の類似性については、小田和利氏(九州歴史資料館学芸調査室長)のご教示を受けた。

(註2)報告書(田平徳栄ほか1990)では須恵器蓋として図化し、報告されている。器種、製作窯跡の確定には更なる調査を要する状況である。高杯と見て、杯部が厚手の鈍重な成型であることはSX07出土品と同じであるが、口縁端部以外のほとんど部分のナデ整形にロクロを使用しておらず、屈曲部のケズリも甘い。壺蓋としては口縁部の立ち上がりが小さく、杯蓋としては成立しない器形である。遺物の実見に関しては小松讓(佐賀県教育委員会文化財課主幹)、松本幸子(同主事)両氏から格別の配慮を得た。惣座遺跡の調査については、当時調査を担当した本田秀樹氏(長崎明誠高校教諭・前新幹線文化財調査事務所文化財保護主事)から教示を得た。

(註3)惣座遺跡の倉庫群はSB260・249の前段階の8世紀前半のSB235ら7棟の鍵の字配置の建物群に、その当初の段階に最も際立った遺構配置を見せつつその機能が始まり、その規模を縮小させながら9世紀に続く。国府に付属した倉庫群は全国的にあまり類例がなく、成立時期から言って730年代の官稲混合後に、正倉を管理する財政権限が郡司から国司に移ったが故に、国庁のそばに作られたものとは考えがたい。これらの遺構の性格については、別稿で論じた(堀内2018b)。なお、佐賀市西部の地名には兵庫町が存在するが、近世の領主の官途名に由来するもので、古代の地域の様相とは関係ない。また、倉庫令の体系で倉と庫、蔵は概念上、区別されている。ひっきょう兵庫は武具を収納する場所であって、「兵家稲」を保管する食糧倉庫ではない。



第332図TAK201302調査区⑤区SKの並び (S=1/200)

### ③居宅に先行する条里方向の掘立柱建物の可能性、社会背景について(第332図)

既に述べたように④区 SX04や⑤区 SX07や周辺土坑の出土遺物によって、⑤区で出土した掘立柱建物群から成る居宅遺構は8世紀中頃から9世紀前半に位置づけられる。しかしながら7世紀終末の須恵器杯類が⑤区の包含層を中心に出土する。摩滅状況や、分布状況から見て、⑤区周辺に7世紀末から多くの須恵器杯などの供膳具を使用する活動の中心があったものと考えざるをえない。そこで注目されるのが第332図に見えるレンズ状の残存深度の浅い円形ないし楕円形の土坑の並び方である。SK19と20、SK35と36、SK26と65などを結ぶと、真北から西に15～20度ほど傾く主軸方位の柱列が引ける。この方位は沖田黒丸条里の主軸方位、W16度(堀内2018a)に似る。これらの土坑が断片的な材料ながら条里方向の掘立柱建物の痕跡を示すとすると、⑤区に居宅に先行する段階の建物群となる。むしろ、これら先行する段階の建物跡の存在を示唆する遺構は、これらレンズ状の残存深度の浅い土坑しかない点は注意を要する。遺構の残存状況から想定される可能性としては、居宅を造営する段階で既存の遺構面を大きく削平し、それ以前の段階の建物群の痕跡を意図して消したとも考えられる。

竹松遺跡のこの地区における8世紀後半から9世紀にかけての遺構配置の変遷のあり方については二つの具体的な類例が存する。地方官衙遺跡の官衙建物を示す柱穴形状は1m程度かそれ以上の隅丸方形のものが最も一般的であるが、1m程度の大型ながら、やや不整形な柱穴や大型の円形・楕円形柱穴も地方官衙を構成する掘立柱建物の柱穴となりうることは、既に山中敏史の指摘がある。類例とは、鳥取県鳥取市(旧気高郡気高町)の上原遺跡と福岡県久留米市の筑後国府跡井葉地区3期の様相である。いずれも山中敏史が大形円形柱穴から成る官衙的な大形掘立柱建物の好例として提示した事例(山中2003)である。

#### ④伊場遺跡と竹松遺跡

竹松遺跡の性格を考える上で類例として交通拠点の全国の官衙遺跡を検討する必要がある。大島畠田遺跡(宮崎県都城市)の9・10世紀の居館跡や古志田東遺跡(山形県米沢市)など国府・郡家などの類型に入らないタイプの類似遺跡は多い。しかし前代からの歴史的展開も含め、最も参考となるのは、静岡県浜松市の伊場遺跡(竹内理三1977・甘粕健1977・鈴木敏則2017など参照)である。

伊場遺跡は戦後の早い時期から弥生時代の集落遺跡として県指定史跡に指定されていたが、1970年代の東海道新幹線の車両基地建設に伴い、学術目的の発掘調査が行われた。最終的に工事に伴い遺憾ながら古代の遺構の主要部分について、遺跡の現地保存を図ることは出来なかった。掘立柱建物群に沿う大溝から須恵器、木製品と共に木簡や墨書土器など多くの古代の地方官衙の活動を示す文字資料が出土し、その保存が社会問題となった遺跡である。大型の隅丸方形柱穴が規格的に配置された郡家の中心施設の正庁や正倉が調査区内から出土せず、一般集落から弁別されるべき地方官衙としての遺跡の性格が明確でなかった。そのため遺跡の保存を訴える立場からも、周辺部での郡衙の存在と国津としての性格を伊場遺跡に認めつつも大神宮と浜名神戸との私的関係が伊勢湾の水上交通との関係で強調される(竹内1977)面もあり、伊場遺跡は「(保存するほど)大して意味のある遺跡ではない」(坂本太郎)とも解される点がネックとなった<sup>(註1)</sup>。今日では伊場遺跡の基本的な性格については遠江国敷智郡家と理解し、周辺に駅家や軍団施設が立地した可能性が最終報告書で指摘され(浜松市教育委員会編2008)、古代史学界で広く支持されている。

竹松遺跡の調査では官衙としての活動を物語る木簡の出土は見なかったが、古代の伊場遺跡に対する以下の甘粕健の概括的な評価は、弥生時代以来の歴史的展開や律令国家の当該地域の支配のあり方を含め、竹松遺跡の評価にもちょうど当てはまる。

(前略)大溝は古墳時代中期の五世紀末ころから加工がおこなわれ、その岸に集落が営まれているという事実が明らかにされている。そして伊場の集落の歴史は弥生時代の拠点集落にさかのぼることができる。律令政府は交通の要衝にあって古くから地方のセンターとして栄えた場所を押さえ、地方支配の拠点としたのである。／律令政府はこの場所を地方支配のセンターとして押さえただけでなく、中央と地方を結ぶ全国的な幹線ルート〔注：官道駅路〕の中に位置づけた。(中略 栗原駅に関わる出土文字資料)また「浜津」と記した木簡も発見されており、この大溝に官衙に付属する津(港)の施設があったことも考えられる。(甘粕1977、P113～)

伊場遺跡の場合と同様に、竹松遺跡内には古代から中世の多くの郡川の分流が流れ、大村湾の水上交通と西海道肥前路の駅路を結び付けていた。弥生時代後期の拠点集落としての性格については、墓域の性格を考察する中で、弥生・古墳時代のまとめで述べた通りである。「木津」刻書紡錘車(『竹松遺跡Ⅱ』で報告済み)に見えるように、周辺地域で類例がほとんどない出土文字資料から、東国からの防人派遣の様相と共に、竹松遺跡が彼杵郡の郡津としての性格を有するが明らかとなった。周辺地域で最古の5世紀後半の須恵器も遺跡内から出土し、古墳時代中期の段階でのヤマト王権の政治連関についても共通性がある。

肥前と遠江など東海道諸国に対する古代国家の地域支配のあり方に共通性が見えることは、水上交通と地域支配の関係性に関わる以下の根拠から示される。まず、瀬戸内海から北九州方面と伊勢湾から太平洋岸の水上交通に対しては遅くとも6世紀半ばの時点において、ヤマト王権が同一の論理、氏

族編成<sup>(註2)</sup>の下で交通支配を展開していた証左が文献史料に存する。第一に、大阪湾岸の住吉大社は律令制下には水上交通や遣外使節の守護神であったことが知られるが、その社家の津守氏の由来を記す『住吉大社神代記』『船木等本記』には古代国家の水上交通支配のあり方を示す記載がある。そこには、津守宿禰<sup>つものすくね</sup>氏の遠祖の意富弥多足尼が垂仁天皇と景行天皇の二代に仕奉し、後者から「船司・津司」に任命され、五カ国(但波・粟・伊勢・針間・周芳国)の船木連<sup>ふなきのむらじ</sup>を統括したとの伝承が記されている。これは畿内の伴造氏族が地方の豪族や部民を統率する7世紀以前の政治体制の一環である。第二に『国造本紀』に記される東海道諸国の三河・遠江・駿河・伊豆地域の国造氏族は概ね物部系である(篠川・大川原・鈴木2012)が、白村江の戦いに国造軍の万余の兵力を率いて参戦した廬原臣足を出した廬原国造<sup>いおはら</sup>は吉備系である(荒木1998)。ヤマト王権の日本海への窓口である敦賀津を支配した角賀(つぬが)国造が吉備氏と同祖系譜を形成していることと同様である。が、廬(いお)原(はら)国造は水上交通を通じて広範な地域に対して影響力を有していた、または複数氏族の地域支配を横断した「タテの支配」(仁藤2011)が行われていた<sup>(註3)</sup>。後者の面については、6・7世紀の国造支配の本質は領域支配でなく、人間集団を対象とした支配であった(仁藤2005)がゆえである。

これに対し、彼杵郡の郡領氏族は史料的に不明であるが、肥前南西部(藤津・彼杵・高来)に支配領域を比定される葛津立国造<sup>ふじつだち</sup>は紀氏系であり、紀伊から瀬戸内海にかけて広範な政治的配置を見せる紀氏の氏族結合の最西端に位置する(堀内2016)。瀬戸内海の水上交通を通じたヤマト王権の支配はその先兵となる氏族連合を替えることなく、律令制成立以前に肥前西部に達していたこととなる。また、奈良時代半ばの藤原仲麻呂政権下で推進された新羅征討計画の中で膨大な船舶の建造と運航が全国に分担して命じられる中で、東海道諸国の兵士と軍船を運ぶために肥前国<sup>(註4)</sup>から2400人の水手が選ばれている事実(堀内2016)も、肥前地域と東海道諸国を意図して結び付けて古代国家が掌握していたことを示している。

第四に、江戸時代の東海道と同様に、律令制下の東海道諸国を結ぶ駅路は木曾三川や天竜・大井・富士川などの大河川に阻まれて架橋ができず、浮き橋もしくは舟運による渡しを経る必要があった。伊勢国からの東行は舟運を経る必要があり、伊勢湾の水上交通の媒介なしに三河以遠<sup>(註5)</sup>の東海道諸国は都との交通が不可能であった。浜名橋は辛うじて古代を通じて維持され、東海道駅路のランドマークとして歌枕となった。遠江国府は天竜川の東岸の台地上に造営される一方、天竜川の西岸には伊勢湾交通と天竜川以東、浜名湖周辺地域を結びつける交通拠点が必要であり、それが伊場遺跡であった。肥前国は肥後国との間を西海道肥前路の海上駅路で結ぶ特異な位置にあり(堀内2016)、竹松遺跡は駅路と大村湾、有明海の水上交通を結ぶ結節点に位置した。

以上から、伊場遺跡と竹松遺跡は畿内から見て別方向にあっても、律令制下で共通の国郡里からなる地方行政システムを越えた共通性を有していたものと考えられる。そして弥生時代から8世紀に至るまで同様の歴史的展開を辿ってきたことは前言の通りである。

(註1) 遺跡の現地保存を図れなかった点については、「〈早すぎた〉発見」(鐘江宏之2017)であった。当時の日本古代史研究が地方行政のシステムの解明にまで十分に及んでおらず、駅家でも「郡衙」(=郡家)でもない複合的な交通拠点の官衙が地域と古代の日本列島全体の歴史に果たした役割について学界から社会に満足に説明できなかった点が指摘されている(荒木敏夫2017)。

(註2) 術語について一言すれば、ここで述べる同一氏族や〇〇氏系とは、事実として同一の血縁を有することを示すのではな

く、地域間で豪族が政治的結合を深めるために他地域の地方豪族や畿内の有力氏族と間で、ある時期に祖先を同じくする系譜を架上したり、関係ある畿内の有力氏族と似たウジナ(名代・子代を含む)を姓(宿禰・君など)と繋げて名乗ったりすることを含む。

(註3)東海道沿岸地域では、古代国家にとっての地域編成のあり方が、評制下(7世紀後半)にはそれ以降と違っていた可能性がある。近年の山田道の調査(奈文研藤原第193・194次調査)で出土した荷札木簡(木簡2号)の表面に「〔珠カ〕<sup>す</sup>流河<sup>る</sup>評<sup>がのこおり</sup>〔作<sup>き</sup>度<sup>わたり</sup>里<sup>カ</sup>〕」(山本崇2017)とあり、『倭名類聚抄』に記載のない里名であった。静岡市内の安部川西岸の丸子宿近くの「佐<sup>わたり</sup>渡<sup>り</sup>」地名が比定候補となったが、静岡市西部に比定される有度郡の流域に属し、富士山南東麓の駿河郡の領域と全く一致しなかった。国名郡としての特殊性もあり、伊場遺跡の「駅評」と同じく、大宝令制以降に引き継がれない飛び地の行政区分のあり方が浄御原令制下で存在していた(原秀三郎ほか1994・仁藤敦史2005など)。また裏面に「玉<sup>たま</sup>作<sup>つくり</sup>マ」と書かれ、荷札木簡で既知の「×河評柏原里玉作マ」(『藤原京木簡』一、311号木簡)で記される富士川河口域の氏族名との関連性も問題となる。

(註4)五島列島を含めた松浦郡地域を中心とする範囲で活動する海民を動員する計画であったと考えられる。農業生産基盤の乏しさとは裏腹に、小値賀島を中心とする五島列島は9世紀には「人口殷豊」(『日本三代実録』)として国家に認識されており、漁業や交易活動によって多くの住民の生活が支えられていた状況が読み取れる。

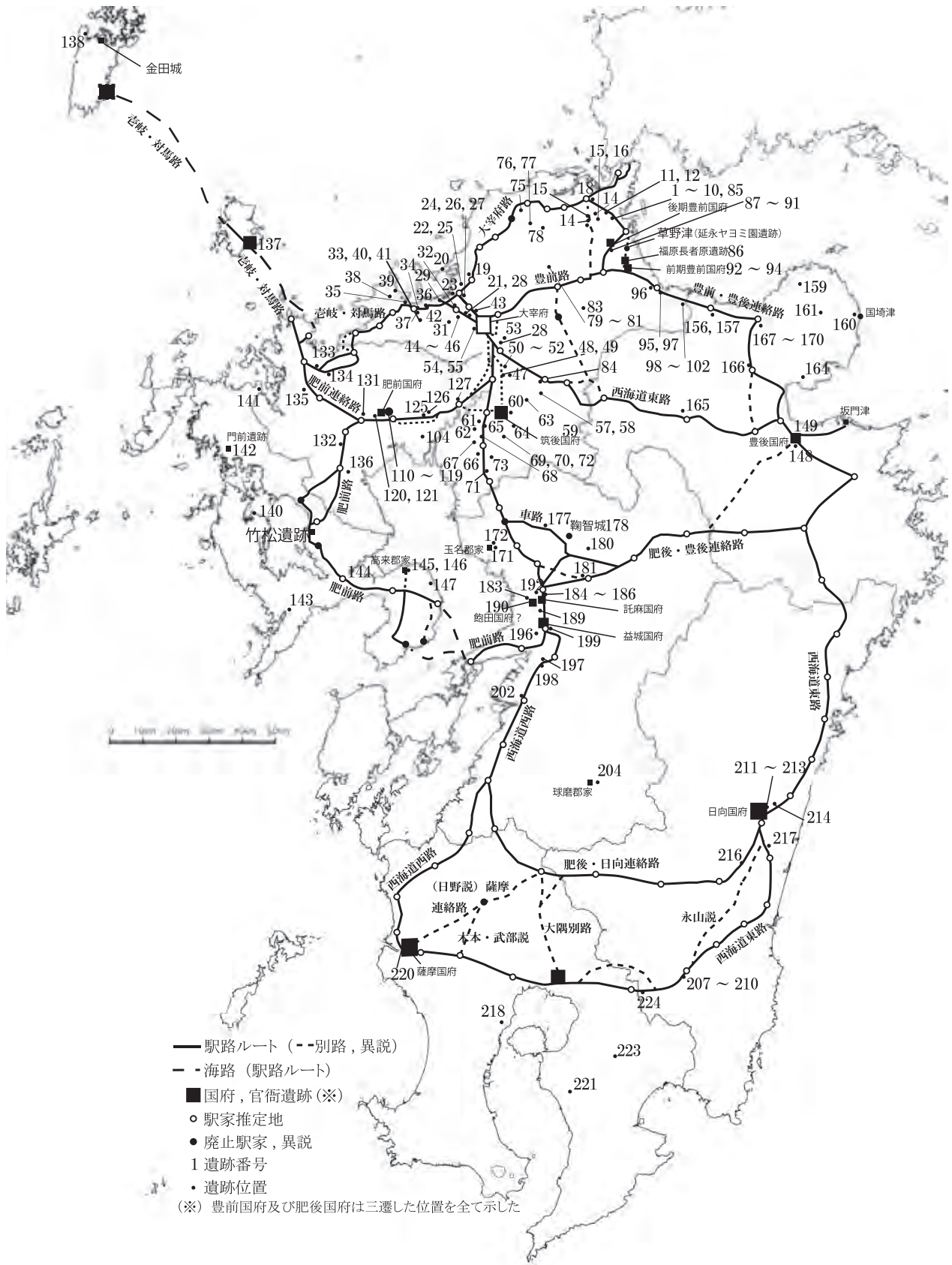
(註5)尾張国が行政区画として律令制の当初は東山道に含まれていた(田中卓1980)上に、8世紀初頭から上野国司の赴任が東海道経由で行われ(「東日本の幹線路」)、美濃国が陸路で東海道、東山道を結節するハブとなっていた点(川尻2002)には留意が必要である。後者については国司赴任に陸路を義務付ける律令国家の特別の交通政策がからんでいると考えられ、古代東海道における伊勢湾交通の重要性を減じて理解する必要はない。

## ⑤官衙遺跡の諸類型について(第333図)

官衙か集落か、日本列島における古代の遺跡の性格を明らかにするために有用な手段は、石帯、円面硯に代表される陶硯、緑釉陶器など官衙的な性格の強い特殊遺物の出土状況を九州内の周辺遺跡との比較の中で分析することである(佐藤浩司1993・堀内2018)。これら3種全てが竹松遺跡の調査により出土している。これまでに刊行した竹松遺跡に関する発掘調査報告書の中で、『竹松遺跡Ⅰ』では緑釉陶器に関し北部九州の範囲で集成を行い、『竹松遺跡Ⅱ』では九州内の石帯の出土事例集成を行っている。一般民衆の生活には不必要でありながら、位階表示や文書行政の実施などのために地方官人が使用した特殊遺物の出土状況は、遺構配置以外の面から遺跡の官衙性を示すものとなる。管見の通り北部九州における出土状況をまとめると、(ア)国府・郡家など地方官衙(イ)その関連遺跡、交通関係官衙、地方寺院(ウ)官道駅路沿い集落(エ)港湾(オ)須恵器窯跡〔硯のみ〕に類型化が可能である。

石帯や緑釉陶器の出土は(ウ)の集落からも多く見られる状況であり、出土遺跡を官衙として見る確率を高めても、集落でなく官衙である決定的な材料とはならない。しかし、この三種の遺物の中で陶硯のみが特有の性格を持っている。地方官衙においても曹司における下級官人による文書作成は圧倒的な物量を出土する転用硯を用いて行う。壮麗な円面硯、とりわけ蹄脚硯や獣脚硯は国府や大宰府、中央官司のみで出土するものであり、文書発給を伴う政務儀礼でのみ用いられ、国郡による地方行政を通じた古代国家の支配秩序を体現するものであった(堀内2018)。





第333図 九州内官衙遺跡・駅路配置図

	遺跡名	類型	陶硯	石帯	緑釉陶器
1	御租神社窯跡	オ	圀石硯	なし	
	朽網原遺跡	ウ	圀石硯	なし	○
2	愛宕遺跡	イ		鈍尾	
3	朽網南塚遺跡	ウ	風字硯	なし	○
4	加治屋敷遺跡	ウ			○
5	潤崎遺跡	イ?	圀石硯2	丸靱1・巡方1	○
6	高野遺跡	ウ	圀石硯	巡方	
7	貫川遺跡	ウ	—	巡方	
8	下貫遺跡	ウ			○
8	山田遺跡2・3区	ウ			○
9	御座遺跡	ウ			○
10	長野A遺跡	イ	風字硯	○	○
11	長野・早田遺跡	ウ			○
12	石田・岡屋敷遺跡	ウ			○
13	祇園町遺跡	ウ			○
14	蒲生寺中遺跡	ウ			○
15	金山遺跡	ウ			○
16	長ムタ遺跡	ウ			○
17	高津尾遺跡	ウ			○
18	牛丸遺跡	ウ			○
19	多々良込田遺跡	エ	—	丸靱2	○
		エ	圀足硯2・風字二面硯	丸靱4・巡方2	○
20	海の中道遺跡	エ	—	丸靱	
21	南八幡遺跡群第8次	ウ	圀足硯	なし	
22	箱崎遺跡第26次	イ	—	巡方	
	箱崎遺跡第64次	イ	—	巡方	
23	博多遺跡群 築港線2次	エ	—	山形1・巡方2	
	博多遺跡群 築港線4次	エ	—	巡方	
	博多遺跡群22次	エ	—	丸靱1・同未製品1	
	博多31次	エ	—	丸靱	
	博多第77次	エ	圀足硯		○
	博多遺跡群80次	エ		丸靱1・巡方1	○
	博多遺跡群85次	エ	風字二面硯1・円面硯1	丸靱未製品2・巡方2	
24	博多遺跡群第102次	エ	脚付円形硯1・猿面硯2	なし	○
	博多遺跡群第115次	エ		丸靱2	
	那珂遺跡第14次	イ	圀足硯1・風字硯1	なし	
	那珂遺跡第21次	イ	獸足硯1・圀足硯1	なし	
	那珂遺跡群86次	イ	獸足硯	なし	
	那珂遺跡群114次	イ	円面硯	なし	
25	吉塚祝町遺跡	ウ			○
26	山王遺跡	ウ			○
27	比恵遺跡群	ウ			○
28	麦野A遺跡群	ウ			○
29	鴻臚館第17次	ア	猿面硯	丸靱	○
30	三宅廃寺	ア		巡方	○
31	柏原遺跡M地点	イ	圀足硯3・風字硯1	丸靱3	○
32	井尻B遺跡 第17次	ウ	圀足硯	なし	
33	飯盛吉武遺跡	イ	圀足硯	巡方	○
34	湯納遺跡	ウ	圀足硯	巡方	○
35	今宿五郎江遺跡	ウ			○
36	有田遺跡第3次	ア		巡方	○
	有田遺跡 第77次	ア	獸足硯	なし	○
37	野方久保遺跡	ウ?		鈍尾?	
38	元岡・桑原遺跡群第7次	イ?	提瓶型硯・圀足硯	なし	○
39	大原E遺跡	イ?			○
40	東入部遺跡群第3次	イ		鈍尾	
	同第10次	イ	圀足硯	なし	○
41	清末遺跡群 第2次	イ		丸靱	
42	野芥遺跡群	ウ?			○
43	御笠の森遺跡	ウ?		丸靱	
44	九州大学筑紫地区遺跡群	ウ?		丸靱	
45	御供田遺跡	ウ	圀足硯		
46	浦ノ原窯跡	オ	亀形硯(蓋?)		
47	井上廃寺跡第2次	イ		巡方	

48	小郡正尻遺跡	ウ			丸靱	
49	上岩田遺跡	ア			丸靱2	○
50	三沢京江ヶ浦5号横穴墓	オ	○			
51	小郡遺跡	ウ	○			
52	小坂井京塚遺跡					○
53	松原遺跡	ウ			丸靱	
54	剣塚遺跡	ウ			巡方	
55	杉塚廃寺跡	ウ			丸靱	
56	岡田地区遺跡群	ウ			丸靱	○
57	堂畑遺跡	ウ	圀足硯			
58	仁右衛門畑遺跡	ウ	圀足硯			
59	筑後国府跡 第4次(東遺跡:調査時名称)	ア	圀足硯		丸靱2・巡方1	○
	筑後国府跡第85次				丸靱	
60	下見遺跡	イ	圀足硯		?	
	へボノ木遺跡	イ			巡方	○
61	神道遺跡 第22次	イ	圀足硯			
62	念仏塚遺跡	ウ				○
63	道蔵遺跡第14次	ア				○
64	柴刈小学校遺跡	ウ			丸靱	
	高良神社付近	イ	猿面権		なし	
65	杉の城跡	イ	風字権1・二面風字権1		なし	
		イ	獸足硯		なし	
66	西ノ原遺跡	イ			なし	
67	志西田遺跡	ウ			丸靱	
68	若菜森坊遺跡	ウ			巡方	
69	羽大塚中道遺跡	ウ				○
70	塚ノ谷窯跡群	オ	○			
71	新代・高長遺跡	ウ	円面硯			
72	大道端遺跡	ウ	円面硯		鈍尾	
73	御二田遺跡	ウ	圀足硯			
74	山の上遺跡	ウ	二面風字硯			○
75	山下遺跡	ウ	○			
76	竜徳遺跡?	?			丸靱	
77	西屋敷遺跡・古墳群					○
78	中間中学校横穴墓群	ウ	三脚円形硯		なし	
79	鳥尾遺跡	ウ				○
80	井尻遺跡	ウ				○
81	土取遺跡	ウ				○
82	観音寺	ウ			丸靱	
83	才田遺跡	イ			巡方	
84	雨窪遺跡群	イ				○
85	福原長者原遺跡	ア	圀足硯			
86	高来井正丸遺跡	イ			丸靱	
87	崎野遺跡	ウ				○
88	徳永法師ヶ坪遺跡	ウ				○
89	福富小畑遺跡 B地	ウ				○
90	辻垣下出口遺跡	ウ				○
91	豊前国府跡	ア	風字硯			○
92	幸木遺跡	ア	圀足硯			
93	木山廃寺	イ	圀足硯			
94	越路貴船遺跡	イ			丸靱	○
95	赤幡森ヶ坪遺跡	イ			丸靱	
96	ウツケ畑遺跡	ウ				○
97	道ノ本遺跡	ウ?				○
	大ノ瀬下大坪遺跡	ア	圀足硯			
	八ツ並下ノ原遺跡	イ	圀足硯		○	
	堂ノ前遺跡	イ	?			
98	永久遺跡	ウ	○			○
99	久路土鐘鐘田遺跡	イ	○			
100	四郎丸窯跡	オ	○			
101	荒堀大保II遺跡	ウ?				○
102	薬師寺塚原遺跡	ウ				
103	塚田南遺跡	イ	円面硯			
104	蓮池上天神遺跡	ウ			巡方	
105	藤木三本杉遺跡	イ			丸靱	
106	ウー屋敷遺跡	ウ				○
107	藤附B遺跡	ウ	圀足硯			
108	牛島遺跡	ア				○
109	西千布遺跡	ウ				○
110	本村籠遺跡	イ			丸靱	
111	肥前国府跡	ア	圀足硯2		巡方	○
112	肥前国分寺跡	イ	長方硯			
113	久池井B遺跡	ア			丸靱	
114	惣座遺跡	イ				○
115	東古賀遺跡	イ				○
116	小川遺跡	イ			巡方	
117	鍵尼遺跡	イ			丸靱	○

118	一本木遺跡	イ			○
119	下村遺跡	イ			○
120	久留間カミ塚遺跡	ウ		丸靱	
121	西山田三本松B遺跡	ア	圏足硯2 (東山田一本 杉遺跡)	丸靱1・ 鈍尾1	
122	畑田遺跡	エ	円面硯 (未詳)		
123	友貞遺跡	ウ			○
124	徳永遺跡	ウ			○
125	吉野ヶ里遺跡	ア	圏足硯2	巡方	
126	熊谷遺跡	ウ?		巡方	
126	野田五本松遺跡	ウ	○		
127	中津隈干飯遺跡	ウ		巡方	
128	下中杖遺跡	ウ			○
129	惣楽遺跡	ウ			○
130	社遺跡	エ?			○
131	千葉城遺跡	イ?		巡方	
132	みやこ遺跡	ウ		巡方	
133	中原遺跡	イ	提瓶型硯		○
134	鶏ノ尾遺跡	ウ			○
135	座主遺跡	ア		巡方	
136	大黒町遺跡	ア	圏足硯		
137	原の辻遺跡	ア	圏足硯	○(椿遺跡)	○
137	大宝遺跡	イ			○
138	水崎・仮宿遺跡	?		楕円状	
139	大浜遺跡	イ?	圏足硯	なし	○
140	膝行神貝塚	エ		丸靱状	
141	今福遺跡	イ			○
142	門前遺跡	イ		なし	○
142	竹松遺跡		圏足硯	巡方・丸靱	○
143	桜町遺跡	?		丸靱	
144	小野堀口遺跡	ウ	圏足硯	なし	○
145	十園遺跡	ア		巡方	
146	専正寺遺跡	イ?	圏足硯	なし	
147	大野原七反畑遺跡	イ	圏足硯	なし	
147	下郡遺跡群	ア		巡方	
147	下郡遺跡群 第34次		円面硯		
148	下郡遺跡群 第90次		円面硯		
148	下郡遺跡群 第94次		円面硯		
148	下郡遺跡群 第115次		円面硯		
149	中世大友府内町跡		円面硯	○	
150	地藏原遺跡		圏足硯		
151	中安遺跡 第2次	ア	円面硯		
152	丹生川坂ノ市条里跡 ／里・川田遺跡		円面硯		
153	二目川遺跡		円面硯		○
153	井ノ久保遺跡		円面硯		○
154	城原・里遺跡 第9次		陶硯		
155	松岡古窯跡群		円面硯		
156	横尾遺跡 第96-2		円面硯		○
156	横尾遺跡群 第87次		風字硯		
157	穂屋2号窯跡		円面硯		
158	長者屋敷遺跡		円面硯		
159	信重遺跡	?		巡方	
160	飯塚遺跡			巡方	
161	陽弓遺跡			巡方	
162	三和教田遺跡 B地		円面硯		
163	上ノ馬場遺跡		円面硯		
164	会下遺跡	ウ		巡方	
165	原田遺跡	ウ		巡方	
166	三口田遺跡	?			
167	瓦塚遺跡	イ	円面硯	金属製か帯	
168	虚空蔵寺跡	イ	円面硯・風字 硯		
169	凶首塚周辺遺跡	ウ?	圏足硯		
170	御幡遺跡	ウ	圏足硯		
171	柳町遺跡	ア	圏足硯	山形	
172	小園遺跡	イ		巡方	
173	立願寺大塚遺跡	イ	二面風字硯	なし	
174	稲佐津留遺跡	ウ?	低圏足硯		
175	梅迫遺跡	ウ	圏足硯		
176	駄の原遺跡	ウ	圏足硯		
177	御宇田妙見遺跡	ア	○(未報告)	巡方	
178	鞠智城跡	ア	圏足硯(下端)		
179	住吉日吉神社遺跡	ア	圏足硯		

180	湯舟原(亀ヶ城近接)	ウ			丸靱
181	楠木遺跡	ア			巡方
182	国分寺跡 第5次	イ			○
183	上高橋高田遺跡	エ			丸靱1・ 巡方
184	大江遺跡群	ア	圏足硯2		巡方4・ 丸靱
184	陣山廃寺跡	イ	○(別報告)		鈍尾
185	陣山遺跡	イ	圏足硯1・ 風字硯1		○
186	神水遺跡	ア			巡方
187	本庄遺跡	イ?	圏足硯2		○
188	新屋敷遺跡	ア?	獣脚硯1		○
189	御幸木部古屋敷遺跡	エ?			丸靱
189	二本木遺跡群第8次				鈍尾
189	二本木遺跡群第13次		獣脚硯1・ 圏足硯9		丸靱2
189	同第39次		圏足硯1		
189	同第41次		圏足硯1		
189	同第50次		圏足硯1		
190	二本木遺跡群 春日 地区	ア	低圏足硯1・ 圏足硯4		
190	二本木遺跡 春日 地区 県8次		二面風字硯・ 圏足硯・獣脚 硯・風字硯		
191	田崎本町遺跡	ウ			○
192	熊本城三の丸跡	?			巡方
193	沼山津遺跡	ウ			
194	益城国府推定地	ア	圏足硯		
194	舞ノ原台地南縁	ア	圏足硯		
195	西倉遺跡	イ	圏足硯		
196	境目西原遺跡	ウ			丸靱
197	田中遺跡	ウ			丸靱
198	小野立田遺跡	ウ?			丸靱
199	中山錦川遺跡	ア			丸靱
200	土穴瀬貝塚	?	円面硯		
201	興善寺志水遺跡	イ	圏足硯1・低 圏足硯1		
202	福正寺遺跡	ウ			
202	宮地池尻遺跡	イ	○		
202	宮地小畑遺跡	イ		巡方?	○
202	宮地観行寺遺跡	イ	提瓶型硯		
203	西片町遺跡周辺	?	圏足硯		
204	西小原遺跡	イ?			○
205	下り山窯跡	エ	圏足硯		
206	堂園遺跡	ア			○
207	並木添遺跡	ウ			丸靱
208	二タ元遺跡	イ			丸靱
209	馬渡遺跡	イ			丸靱
210	加治屋B遺跡	ア?			巡方
211	上妻B地区遺跡	ア			巡方
212	諏訪遺跡	イ			巡方
213	穂北遺跡	?			鈍尾
214	宮の東遺跡	イ?	円面硯・風字 硯		丸靱
215	下耳切第3遺跡	ウ	○		
216	西下本庄遺跡	ウ?			巡方?
217	平田迫遺跡	ウ			巡方
218	豎野窯跡	エ	長方硯		
219	大坪遺跡	ウ	○		
220	薩摩国府	ア	風字硯2点		
220	京田遺跡	ウ	猿面硯16点		○
220	大島遺跡	イ	獣脚硯・風字 硯		丸靱 丸靱
221	宮の脇遺跡	?			○
222	波見遺跡	?	風字硯		
223	広津田城跡遺跡	?			○
224	高篠遺跡	イ			巡方

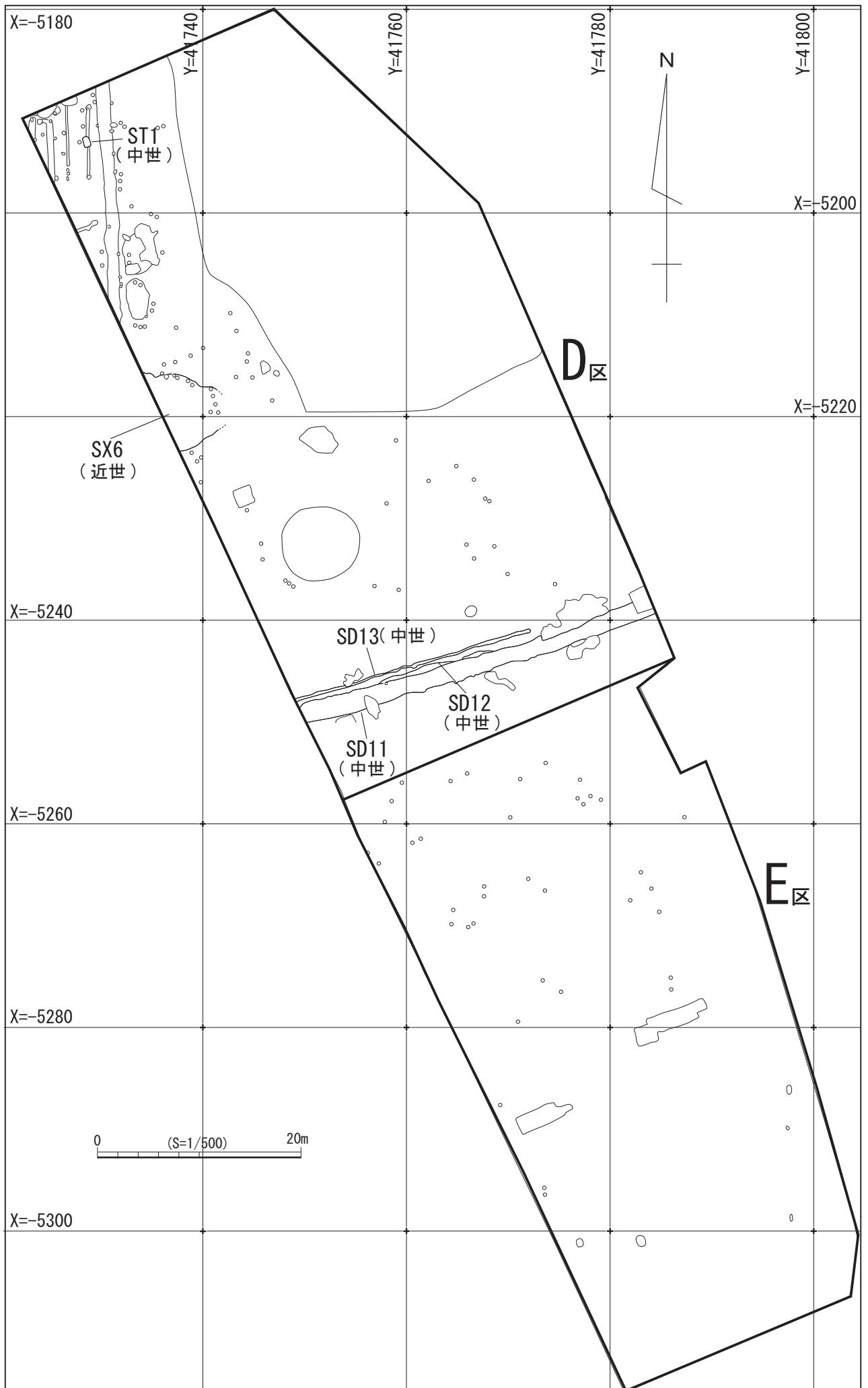
竹松遺跡の古代の性格は遺構の面から未だ不明であるが、伊場遺跡の調査にかかる以下の言葉は示唆的であり、今後も竹松遺跡に関する調査研究を続ける必要性を提示している。

(遺跡の調査で)すぐにすっきりした解釈のつかない新事実があらわれ、研究者のあいだの論争をまき起こす(中略)すぐには解釈のつかない問題も、類似の遺跡の調査資料が増大するなかで自ずと解決する場合も少なくない。多くの困難な問題を提起し、紛糾をまき起こすような遺跡こそ、学問の進歩に貢献する大きな可能性をふくんでいるし、地域史に豊かな個性を与えるものといえる。伊場遺跡はそういう意味できわめて「問題の多い」遺跡なのである。(甘粕健1977)

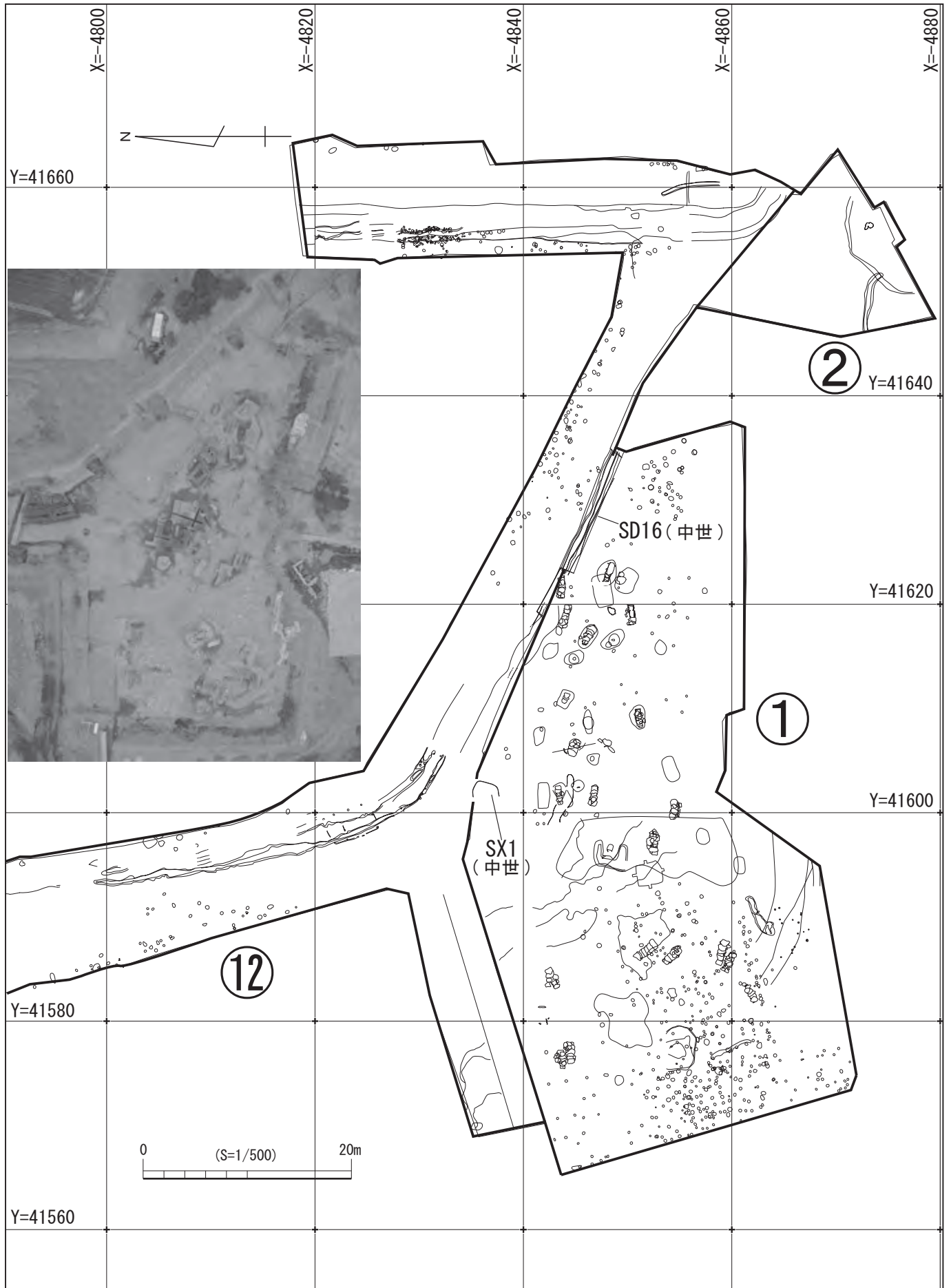
#### 【参考・引用文献】

- 甘粕 健1977「V民衆と古代国家の接点—浜松市伊場の地方官衙遺跡の発見」『埋蔵文化財のはなし』(初出1975)
- 荒木敏夫1998「1章 静岡の夜明けと律令体制の成立」『静岡県の歴史』〔県史22〕山川出版社
- 荒木敏夫2017「伊場遺跡保存運動のころ」(鈴木靖民・荒木敏夫・川尻秋生編2017『日本古代の道路と景観 —駅家・官衙・寺—』八木書店所収)
- 今泉隆雄1972「八世紀郡領の任用と出自」(『史学雑誌』81-12、史学会)
- 鐘江宏之1997「律令制形成期の往来と道制」(古代交通研究会編『古代交通研究』第7号・八木書店)
- 鐘江宏之2017「地方官衙研究の歩みと課題」(鈴木靖民他編前掲2017所収)
- 河根裕二・松下俊秀・鈴木孝則1986『逢坂地域遺跡群発掘調査報告書』気高町文化財報告書IX
- 川尻秋生2002「古代東国における交通の特質—東海道・東山道利用の実態—」(『古代交通研究』第11号)
- 川尻秋生2003『古代東国史の基礎的研究』塙書房
- 川畑敏則・中尾篤志・中川潤次ほか2017『竹松遺跡II』新幹線文化財調査事務所調査報告書第5集
- 児玉真一・武田光正・伊崎俊秋1998『甘木市所在宮原遺跡の調査(D地区)IV』(九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告51)福岡県教育委員会
- 小松譲1997「佐賀平野の古代道路」『佐賀県内における古代官衙遺跡の調査』〔佐賀考古談話会1997年大会資料集〕
- 佐賀県教育庁文化課2018『平成29年度吉野ヶ里遺跡古代調査指導委員会』〔配布資料〕2018年2月23日
- 佐藤全敏2008「日本古代の四等官制」『平安時代の天皇と官僚制』東京大学出版会(初出2007)
- 篠川賢・大川原竜一・鈴木正信編2012『国造制の研究』八木書店
- 神保・小澤・水原2002『筑後国府跡—平成12・13年度発掘調査概要報告—』久留米市文化財調査報告書第182集
- 鈴木敏則・渡辺晃宏・山本崇2008『伊場遺跡発掘調査報告書(総括編)』浜松市教育委員会
- 鈴木敏則2017「静岡県伊場遺跡群と遠江の古代交通」(鈴木他編前掲2017所収)
- 鈴木靖民・川尻秋生・鐘江宏之編2015『日本古代の運河と水上交通』八木書店
- 竹内理三1977「難波朝前後の伊場遺跡 —大溝の形成—」(難波宮址を守る会編『難波宮と日本古代国家』塙書房)
- 田中 卓1986「尾張国はもと東山道か」『田中卓著作集6 律令制の諸問題』国書刊行会(初出1980)
- 田平徳栄他1990『惣座遺跡』(九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書11)佐賀県文化財調査報告書第96集、佐賀県教育委員会
- 仁藤敦史2005「第2編 原始古代の焼津 第3章 ヤマトタケル東征伝承と宮号氏族」『焼津市史』通史編上
- 仁藤敦史2011『古代王権と支配構造』吉川弘文館
- 原秀三郎1994「第2編 古代の静岡 第1章 大和王権と遠江・駿河・伊豆の古代氏族」(『静岡県史 通史編1 原始・古代』静岡県)
- 平川 南2014『律令国郡里制の研究』上下巻・吉川弘文館
- 堀内和宏2014「津司について」史学会大会日本古代史部会口頭発表、東京大学本郷キャンパス、2014年11月9日

- 堀内和宏2016「肥前国彼杵郡・高来郡の歴史地理的特質と古代地方社会の労働力動員について～大村市竹松遺跡の調査を踏まえて～」『長崎県埋蔵文化財センター研究紀要』第6号
- 堀内和宏2018a「竹松遺跡の調査と周辺条里」『条里制・古代都市研究』第33号、条里制・古代都市研究会
- 堀内和宏2018b「鞠智城と古代西海道の官衙、交通路」『鞠智城と古代社会』第6号、平成29年度鞠智城跡「特別研究」論文集
- 松村一良2008『筑後国府跡(1)』久留米市文化財調査報告書第271集
- 松村一良2009『筑後国府跡(2)』久留米市文化財調査報告書第284集
- 水原道範2000「第165次調査」『筑後国府跡—平成11年度発掘調査概要—』久留米市文化財調査報告書第162集
- 森 公章2000『古代郡司制度の研究』吉川弘文館
- 山口英男1993「郡領の詮擬とその変遷」(笹山晴生先生還暦記念会編『日本律令制論集』下巻、吉川弘文館)
- 山中敏史2003「Ⅲ-2 柱掘り方の形状」『古代の官衙遺跡 I 遺構編』奈良文化財研究所
- 山中敏史・河根裕二・中林保・石毛彩子・志賀崇2003「上原遺跡群発掘調査報告書—古代因幡国気多郡衙推定地—」気高町文化財調査報告書第30集
- 山中敏史編2006『郡衙周辺寺院の研究 —因幡国気多郡衙と周辺寺院の分析を中心として—』奈良文化財研究所
- 山本 崇2017「山田道の発掘調査と出土木簡」第三九回木簡学会研究集会報告、奈良文化財研究所、2017年12月2日
- 吉川真司1998「律令官僚制の基本構造」『律令官僚制の研究』塙書房(初出1989)
- 米田雄介1976『郡司の研究』法政大学出版会



第 334 図 TAK201301 調査区 D・E 区中世・近世遺構配置図 (S=1/500)

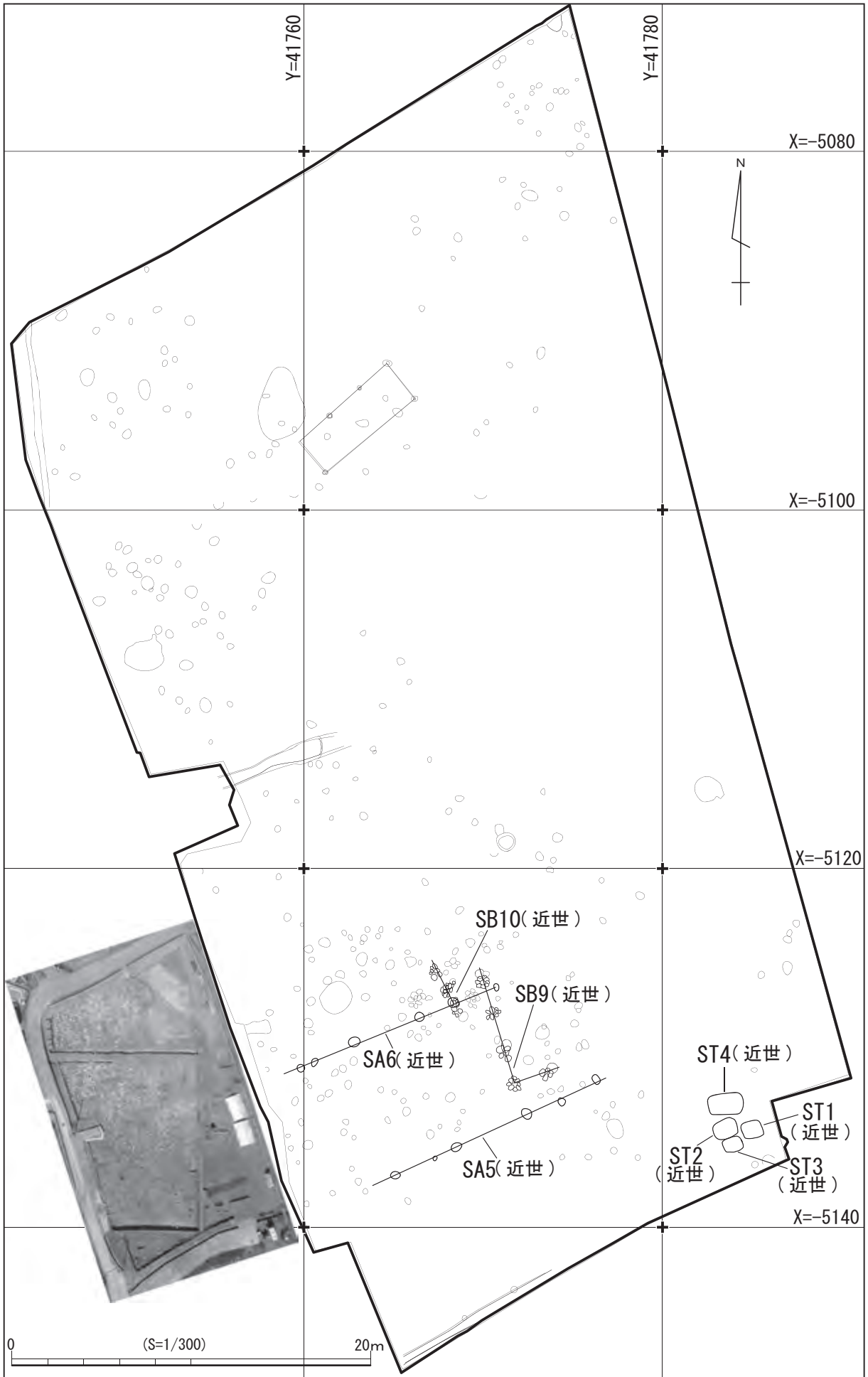


第 335 図 TAK201302 調査区①・②・⑫区中世・近世遺構配置図 (S=1/500)

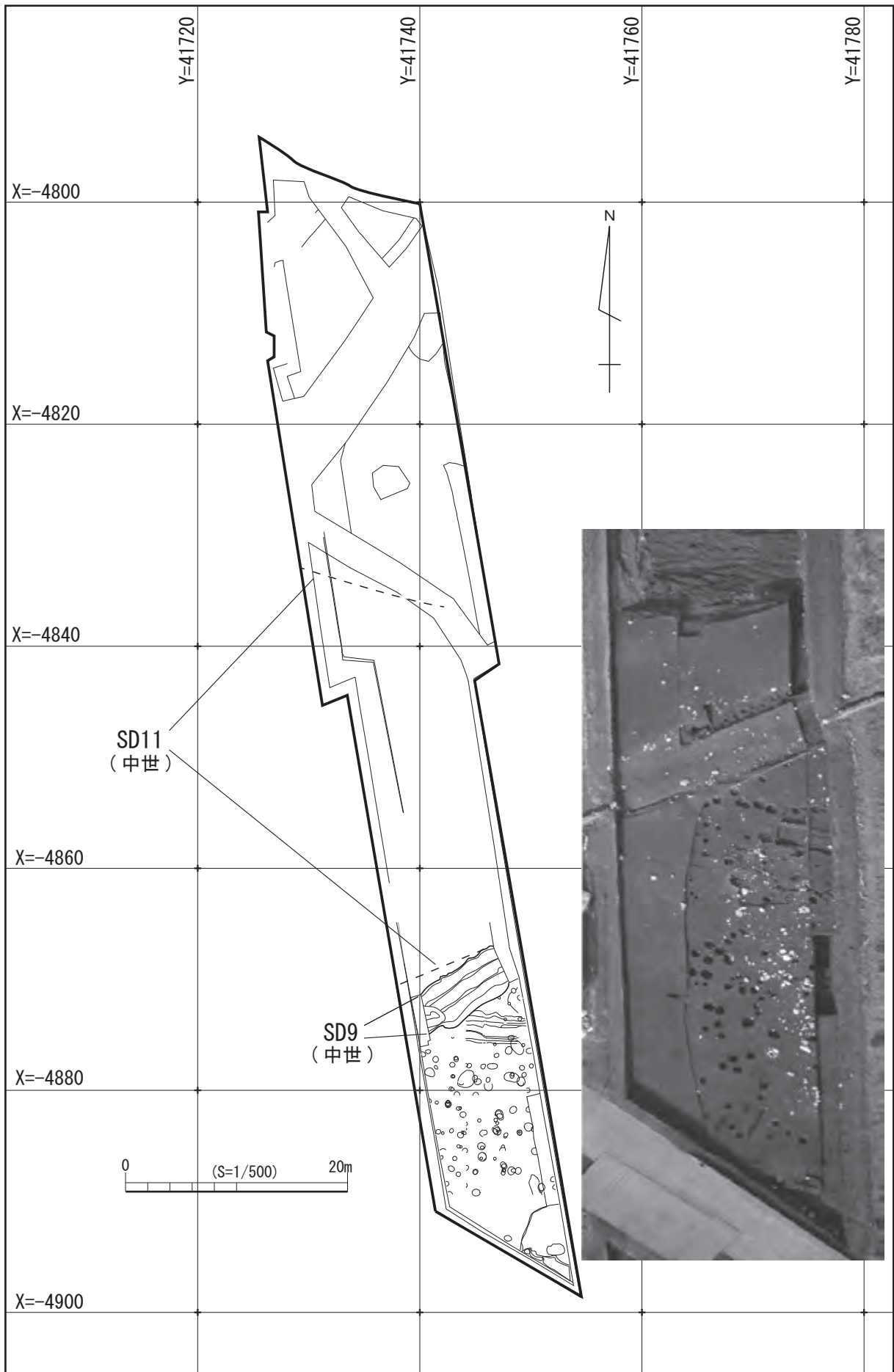


第 336 図 TAK201302 調査区⑨・⑩区中世・近世遺構配置図 (S=1/500)

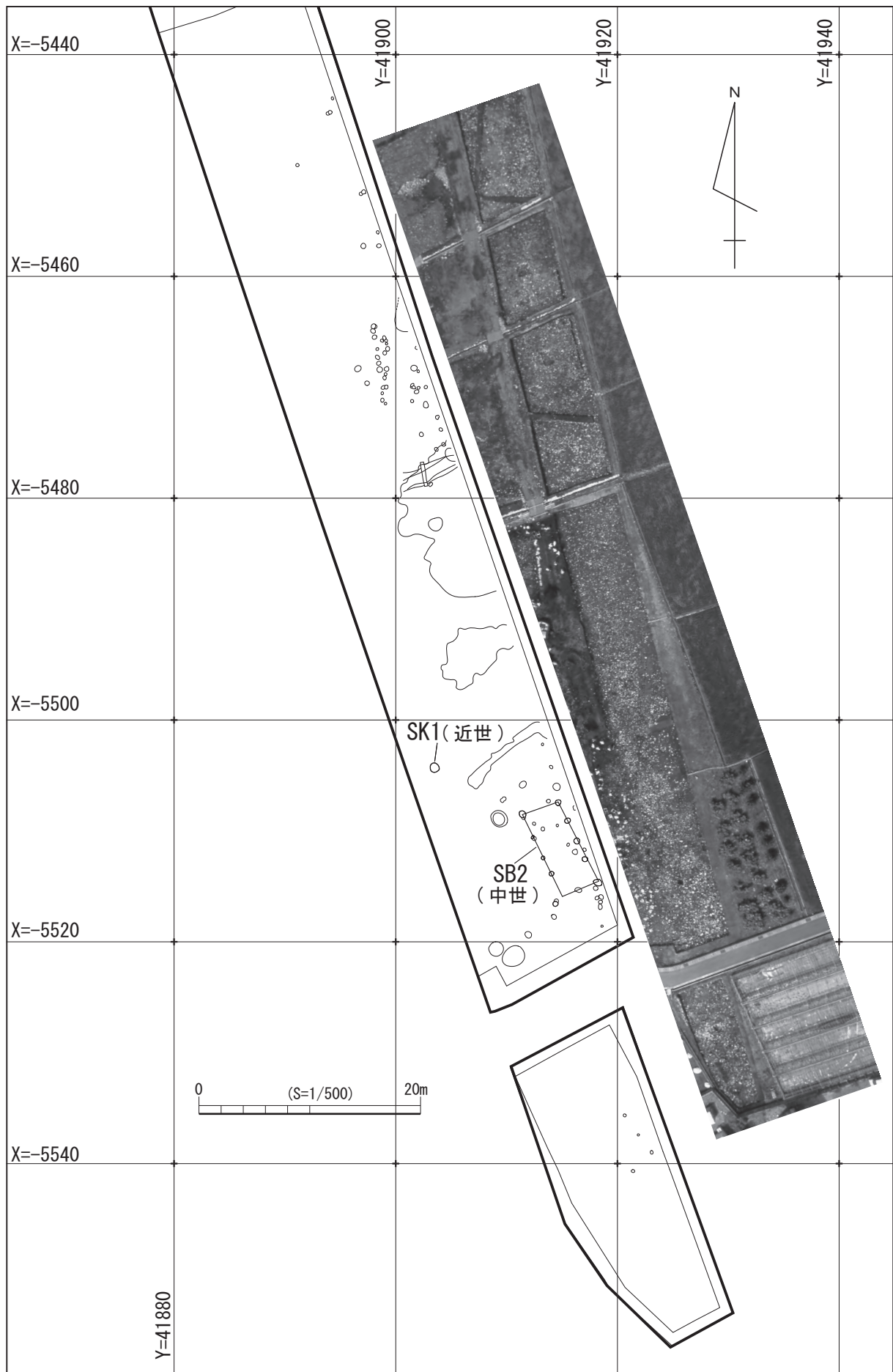




第 337 図 TAK201302 調査区①区中世・近世遺構配置図 (S=1/300)



第 338 图 TAK201303 調査区 A 区中世・近世遺構配置図 (S=1/500)



第 339 図 TAK201303 調査区 C 区中世・近世遺構配置図 (S=1/500)

## 4 中 世

今回報告する中世の遺構は柵列、掘立柱建物跡、溝、土坑、土坑墓などである(第334～336・338・339図)。遺構は北側に位置する大調査区 TAK201302(以下 TAK を省略)、大調査区 TAK201303(以下 TAK を省略)の小調査区A区で多く検出した。以下順に説明をしたい。なお、今回の調査では大調査区201302の小調査区⑫区で、前年度確認をした大規模な区画溝の南西コーナーを確認したが、区画溝や区画内の調査は次年度も引き続き行ったために、この地区の最終調査年度報告(201405調査区報告『竹松遺跡Ⅳ』)でまとめて行う予定である。

### (1) 掘立柱建物(SB)

今回報告する掘立柱建物は1棟である。

#### ① TAK201303 C区 SB2(第340図、第122表)

大調査区201303の小調査区C区5090グリッド2層からプランを検出した。調査終了後の整理中に柱筋や柱穴の深さから掘立柱建物跡とした。そのために写真撮影は行っていない。梁行1間、桁行4間の側柱建物で主軸はN28°Wである。柱穴径は0.8～0.3mのほぼ円形で覆土は単層である。出土遺物は無く確認面が2層であることから近世以降の建物の可能性もある。

第122表 SB(掘立柱建物跡)計測表

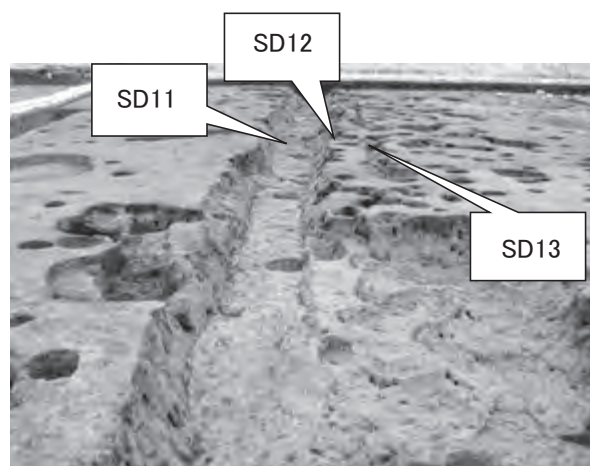
遺構番号	挿図番号	写真番号	主軸方向	柱間間数	規模(m, m <sup>2</sup> )				備考	
					梁間	桁間	梁行	桁行		身舎面積
2	340	—	N28°W	1×4	3.5	2.5～1.2	3.5	8.1～8.6	30.5	側柱

### (2) 溝・河川(SD)

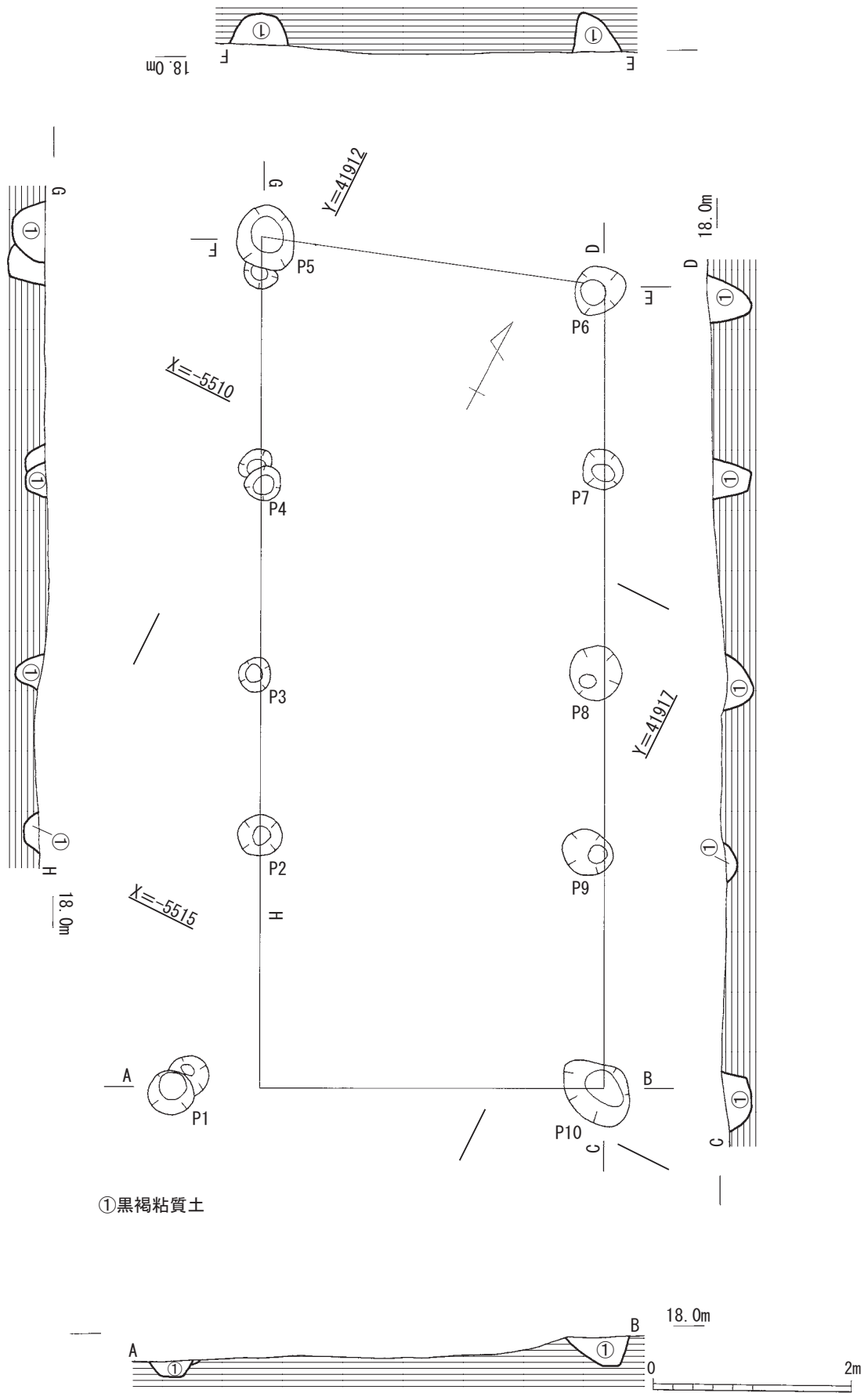
大調査区201301から3条、201302から1条、201303から2条を検出した。そのうち、201301から検出した溝は大調査区201208で検出したSD35(長崎県教委編2017『竹松遺跡Ⅱ』新幹線文化財調査事務所調査報告書 第5集 第164図参照)と繋がる。

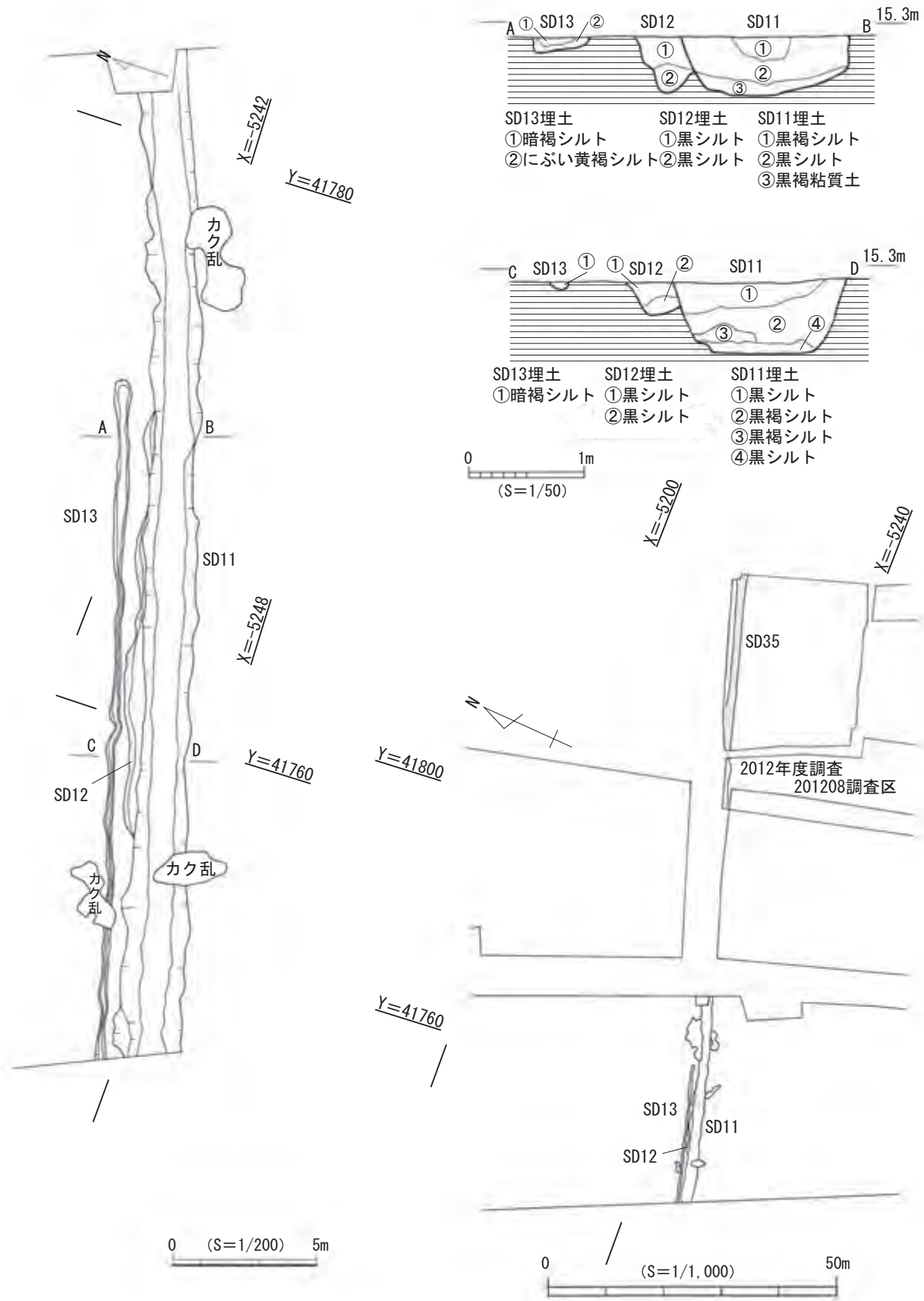
#### ① TAK201301 D区 SD11(第341図、図版289)

大調査区201301の小調査区D区2474、2476、2276、2278、2478グリッド3層から検出した。確認長(北東-南西)35.0m、最大幅2.3m、深さ0.3mを測る。埋土は黒色～黒褐色のシルトから成る。北東方向の延長上には未調査区の道路を挟み201208調査区のSD35があることから、本遺構もしくは本遺構が切っている長軸線を同じくするSD12と繋がると思われる。本遺構と繋がった場合の確認長は110mとなる。



図版289 SD11・SD12・SD13 完掘状況(東から)





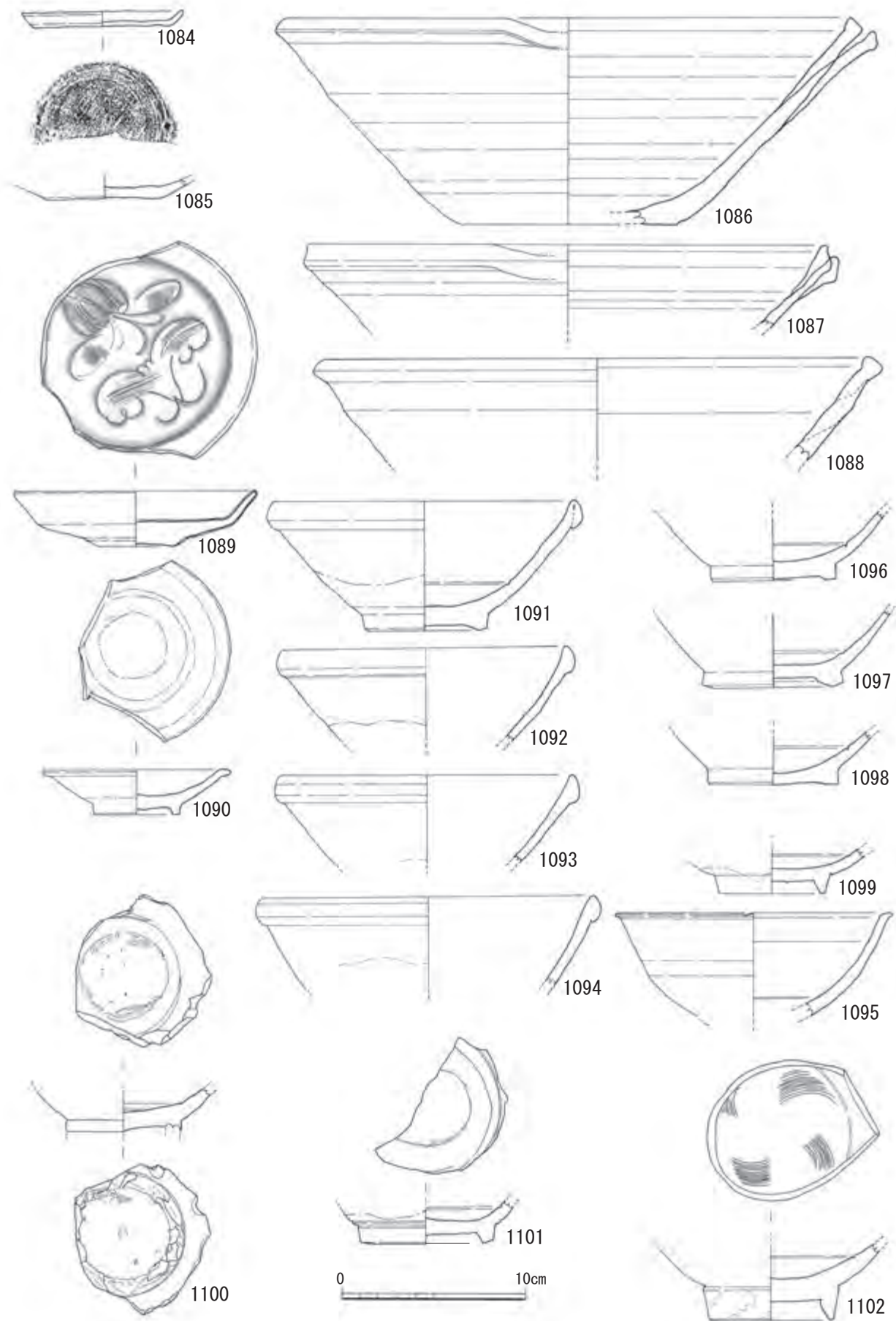
第341図 SD11. 12. 13平・断面図(S=1/1,000、1/200、1/50)

SD11出土遺物(第342・343図、第123～124表、図版290・291)

1084は土師器小皿である。薄く広い底部に低い体部が付く。切り離しは回転糸切りで板状圧痕が付く。12世紀後半～13世紀の所産である。1085は土師器杯底部である。摩滅が激しいが底部外面に右回転の糸切り痕が僅かに残る。13世紀前半のものであろうか。1086～1088は東播系の捏鉢である。1086は片口である。底部～口縁部までが残存する。体部は粘土紐で成形後ロクロ回転による引き上げを行っているが、成形時の凹凸が外面に残る。口縁部は僅かに摘み上げられた後端部を水平に面取りする。また、重ね焼きのために口縁部のみ自然釉が掛かるが体部以下は焼成が甘い。底部は切り離し後ナデを行っているが、糸切り痕が僅かに残る。静止糸切りか。1087は片口で、体部は薄く引き上げられ、肥厚した口縁は立ち上がり気味の端部を持つ。焼成は甘く、口縁部より下は重ね焼きのために吸炭していない。13世紀前半のものと思われる。1088の体部は薄く引き上げられ、口縁部は摘み上げられた後、端部を水平に面取りする。重ね焼きのために口縁部のみ焼成が良好である。断面に成形時の粘土紐接合痕が残る。1089は龍泉窯系青磁皿Ⅰ類である。見込みには櫛と篋による草花文が描かれ、灰オリーブ色の釉薬が掻き取られた外底部を除き厚く掛かる。1090～1102は白磁である。1090は皿Ⅲ類で、見込みの釉が輪状に掻き取られた部分には融着を防ぐための白色土が僅かに残る。外面体部下半は露胎である。1091は椀Ⅳ類である。底部～口縁部まで残存する。玉縁部分の断面には折り返した接合痕が残る。1092は椀Ⅳ類体部～口縁部である。玉縁の口縁部が付く。1093は椀Ⅳ類体部～口縁部である。玉縁の口縁部が付く。1094は椀Ⅳ類の口縁部である。1095は椀Ⅴ-4類口縁部である。嘴状の口縁端部に輪花が施される。1096～1099は椀Ⅳ類底部である。1098は低い削り出し高台が付く。1099は高台の削りが深いのでⅣ-2類に含まれる。1100は椀Ⅷ類底部である。見込みの釉が輪状に掻き取られた部分には融着を防ぐための白色土が掻き取り痕に沿って残る。メンコとして再利用されており、高台および周囲に細かい打ち欠き痕が見られる。1101は椀Ⅷ類底部である。見込みの釉が輪状に掻き取られた部分には融着を防ぐための白色土が掻き取り痕に沿って残る。高台畳付にも釉薬が融着した白色土が見られる。1102は高台が高い椀Ⅴ類の底部である。見込みには櫛目による花文が描かれる。1103・1104は滑石製石鍋である。1103は内傾する口縁部片である。端部は水平に面取りが行われている。縦

第123表 SD11出土土器・陶磁器観察表

遺物番号	器種	部位	法量(cm)			調整		色調		焼成	胎土	備考
			口径	器高	底径	外面	内面	外面	内面			
1084	土師器 皿	底部～口縁部	(8.6)	0.8	(7.4)	—	ナデ	にぶい黄橙色	浅黄橙色	良好	雲母	回転糸切り 板状圧痕
1085	土師器 杯	底部	—	(1.1)	6.4	—	—	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	良好	石英	回転糸切り
1086	東播系 片口捏鉢	底部～口縁部	30.6	11.15	11.8	—	—	褐灰色	褐灰色	やや不良	長石 石英	底部は糸切り後ナデ、静止糸切りか?
1087	東播系 片口捏鉢	体部～口縁部	(27.8)	(4.5)	—	—	—	灰黄色	灰黄色	やや良好	長石 雲母	重ね焼きの跡が残る
1088	東播系 片口捏鉢	体部～口縁部	(29.8)	(5.5)	—	—	—	灰色	灰色	口縁部のみ良好	長石 石英	断面に成形時の粘土紐接合痕
1089	龍泉窯系青磁皿Ⅰ類	底部～口縁部	13.2	3	4.2	—	—	灰オリーブ色	灰オリーブ色	良好	黒色粒子	
1090	白磁 皿	底部～口縁部	(10.1)	2.4	4.6	回転ヘラズリ	—	灰白色	灰白色	良好	—	見込み釉剥ぎ 体部下半露胎
1091	白磁 椀Ⅳ類	底部～口縁部	(16.4)	7.0	(6.8)	回転ヘラズリ	—	灰白色	灰白色	良好	黒色粒子	断面に玉縁口縁の折り返し痕有
1092	白磁 椀Ⅳ類	口縁部～体部	(15.4)	(5.0)	—	回転ヘラズリ	—	灰白色	灰白色	良好	黒色粒子	
1093	白磁 椀Ⅳ類	口縁部～体部	(16.4)	(4.8)	—	回転ヘラズリ	—	灰白色	灰白色	良好	黒色粒子	
1094	白磁 椀Ⅳ類	口縁部～体部	(18.0)	(4.9)	—	回転ヘラズリ	—	灰白色	灰白色	良好	黒色粒子	
1095	白磁 椀Ⅴ-4類	口縁部～体部	(15.0)	(5.5)	—	回転ヘラズリ	—	灰白色	灰白色	良好	—	口縁に輪花
1096	白磁 椀Ⅳ類	底部	—	(3.7)	6.7	回転ヘラズリ	—	灰白色	灰白色	良好	—	
1097	白磁 椀Ⅳ類	底部	—	(4.1)	(7.6)	回転ヘラズリ	—	灰白色	灰白色	良好	—	
1098	白磁 椀Ⅵ類	底部	—	(2.9)	7	—	—	灰白色	灰白色	良好	—	
1099	白磁 椀Ⅳ類	底部	—	(2.5)	5.8	回転ヘラズリ	—	灰白色	灰白色	良好	—	
1100	白磁 椀Ⅷ類	底部	—	(2.4)	—	—	—	灰白色	灰白色	良好	—	メンコとして再利用
1101	白磁 椀Ⅷ類	底部	—	(2.3)	7.2	—	—	灰オリーブ色	灰オリーブ色	良好	—	融着を防ぐための白色土が残る
1102	白磁 椀Ⅴ類	底部	—	(4.1)	6.6	—	—	灰白色	灰白色	良好	—	見込みに櫛目による花文

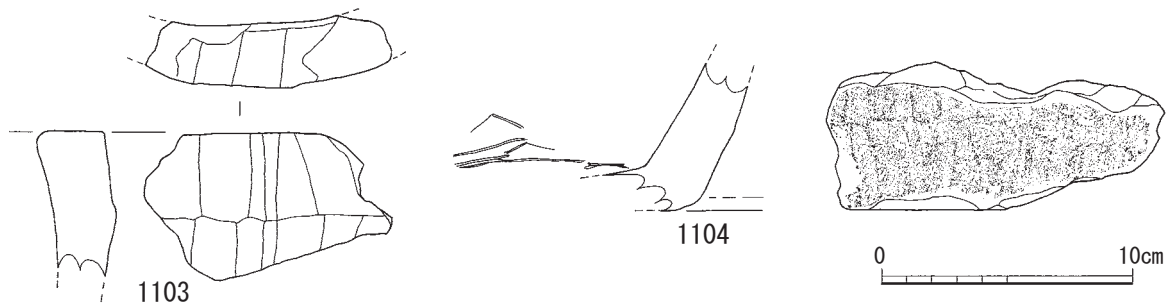


第342図 SD11出土遺物-1 (S=1/3)





图版290 SD11出土遺物-1



第343図 SD11出土遺物-2(S=1/3)



図版291 SD11出土遺物-2

耳が付くタイプと思われる。1104は底部片である。内面の底部と体部の境には成形時のものと思われる工具による削り痕が残る。これらの遺物からSD11の埋没は13世紀前半と思われる。

第124表 SD11出土 滑石製石鍋観察表

遺物番号	器種	部位	法量(cm)			調整		色調		備考
			口径	器高	底径	外面	内面	外面	内面	
1103	縦耳付石鍋	口縁部	—	(5.8)	—	横位のケズリ	—	灰黄褐色	褐灰色	
1104	石鍋	底部	—	(5.7)	—	—	—	灰色	灰色	体部下端に粗い工具痕

② TAK201301 D区 SD12(第341図、図版289)

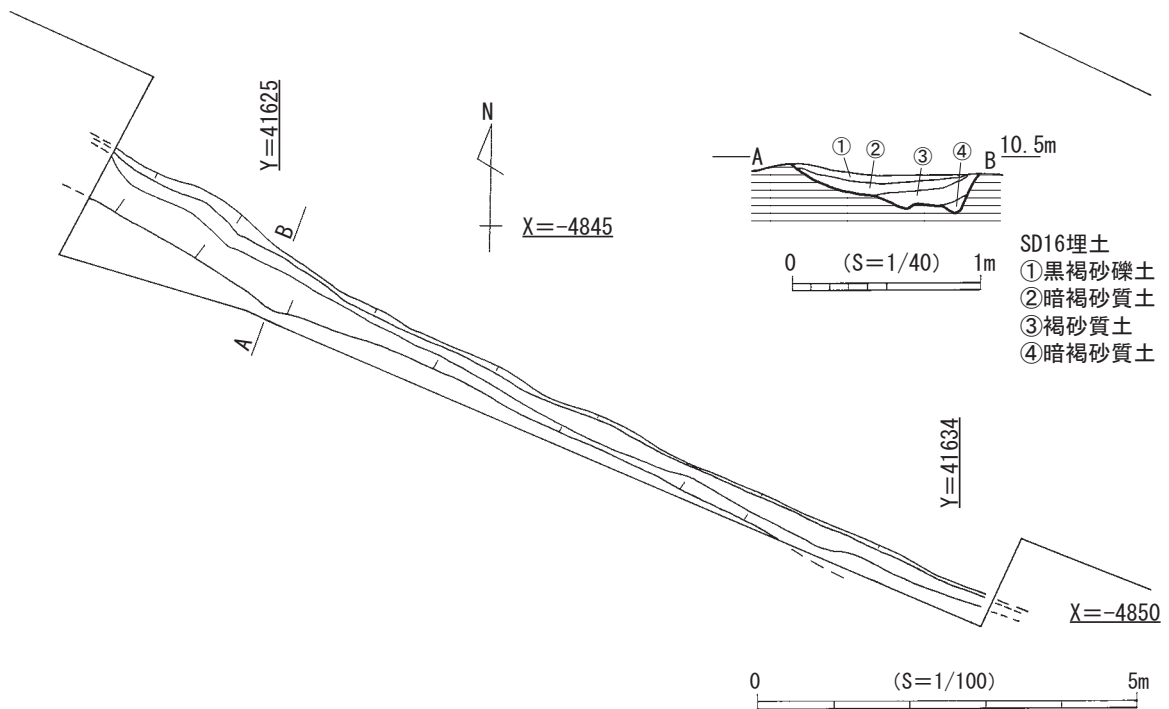
大調査区201301の小調査区D区2474、2476グリッド第2層から検出した。確認長(北東-南西)7.5m、幅0.3m、深さ0.5mを測る。SD11と長軸方向を同じにするがSD11に切られているために詳細については不明である。埋土は黒色のシルトから成る。北東方向の延長上には未調査区の道路を挟み201208調査区のSD35があることから、本遺構がSD35に繋がる可能性もある(第341図参照)。本遺構と繋がった場合の確認長は100mとなる。遺物の出土は無かった。

③ TAK201301 D区 SD13(第341図、図版289)

大調査区201301の小調査区D区2474、2476グリッド第3層から検出した。確認長(北東-南西)12m、幅0.1m、深さ0.1mを測る。SD11、SD12と長軸方向を同じにする。埋土は暗褐色のシルトから成る。遺物の出土は無かった。

④ TAK201302⑫ SD16(第344図、図版292)

大調査区201302の小調査区⑫区8462グリッド第3層から検出した。確認長(南東-北西)13m、幅0.9m、深さ0.2mを図る。埋土は褐色の砂質土から成る。



第344図 SD16平・断面図(S=1/100、1/40)

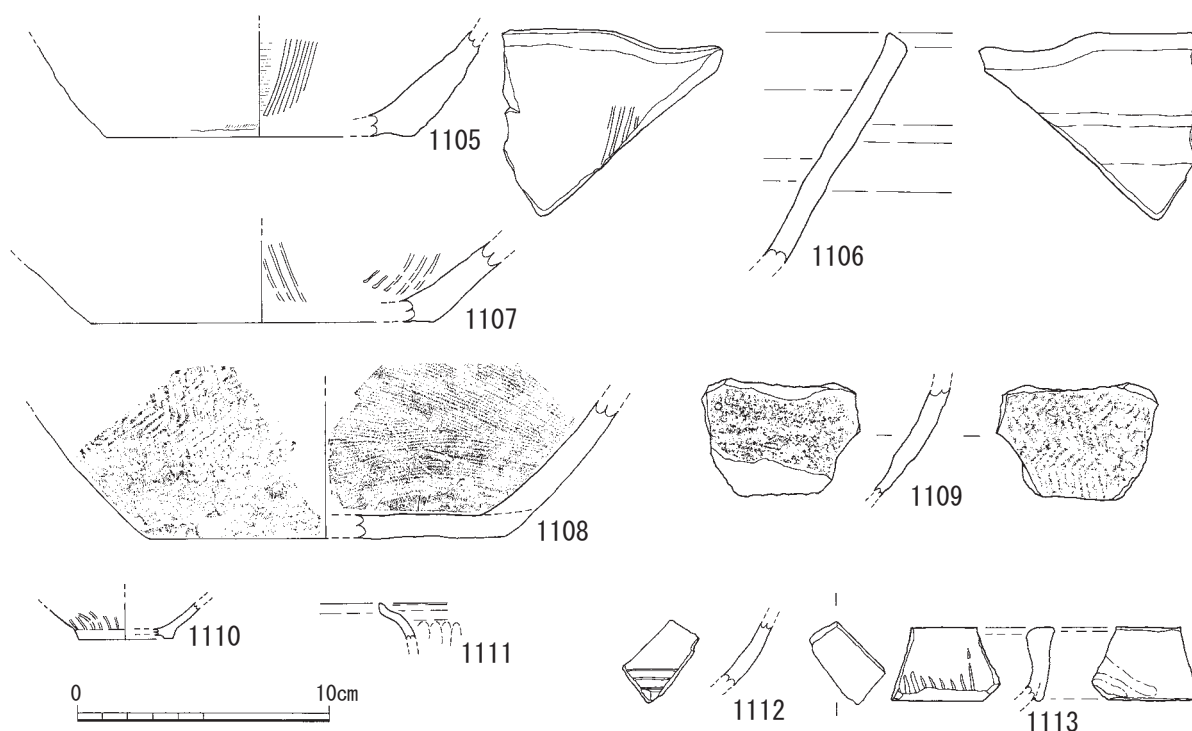
SD16出土遺物(第345・346図、第125・126表、図版293・294)

1105～1107は瓦質の摺鉢である。1105は底部片で、砂粒をわずかに含む精良な胎土である。内面には横位のハケメと縦位の4条の摺り目が見られる。焼成は甘く外面には焼成時の破裂痕があばた状に全体に残る。内面の摩滅が少ないことから使用回数は少なかったと思われる。1106は口縁部の片口部分である。軟質で還元も進んでおらず灰褐色を呈する。内面には3条の摺り目が残る。内面の摩滅が少ないことから使用回数は少なかったと思われる。1107は底部片で砂粒をわずかに含む精良な胎土である。焼成は甘く、外面には焼成時の破裂痕があばた状に残る。摺り目が消えている部分があることから、使用回数は多かったと思われる。1108は砂粒をほとんど含まない精良な胎土の瓦質摺鉢である。内面には横位、斜位のハケメが残り、外面には綾杉状のタタキ痕が見られる。内外面ともに燻されている。1109は内外面ともに焼成時の燻しによる黒変がわずかに残る。樺万丈産か。1110は白磁の小椀である。白色で軟質の胎土に光沢のある透明釉が掛かる。外面の高台際から高台内は露胎である。外面には縦篋花卉文が施されている。1111は外面に蓮弁が施された型押しによる青白磁合子身である。灰白色の胎土に淡い黄味がかかった水色の釉が掛かる。1112は内面に3条の白土象嵌が施された高麗青磁椀片である。灰白の粗い胎土に灰青色の釉が薄く掛かる。1113は貿易陶器小鉢の口縁部である。赤

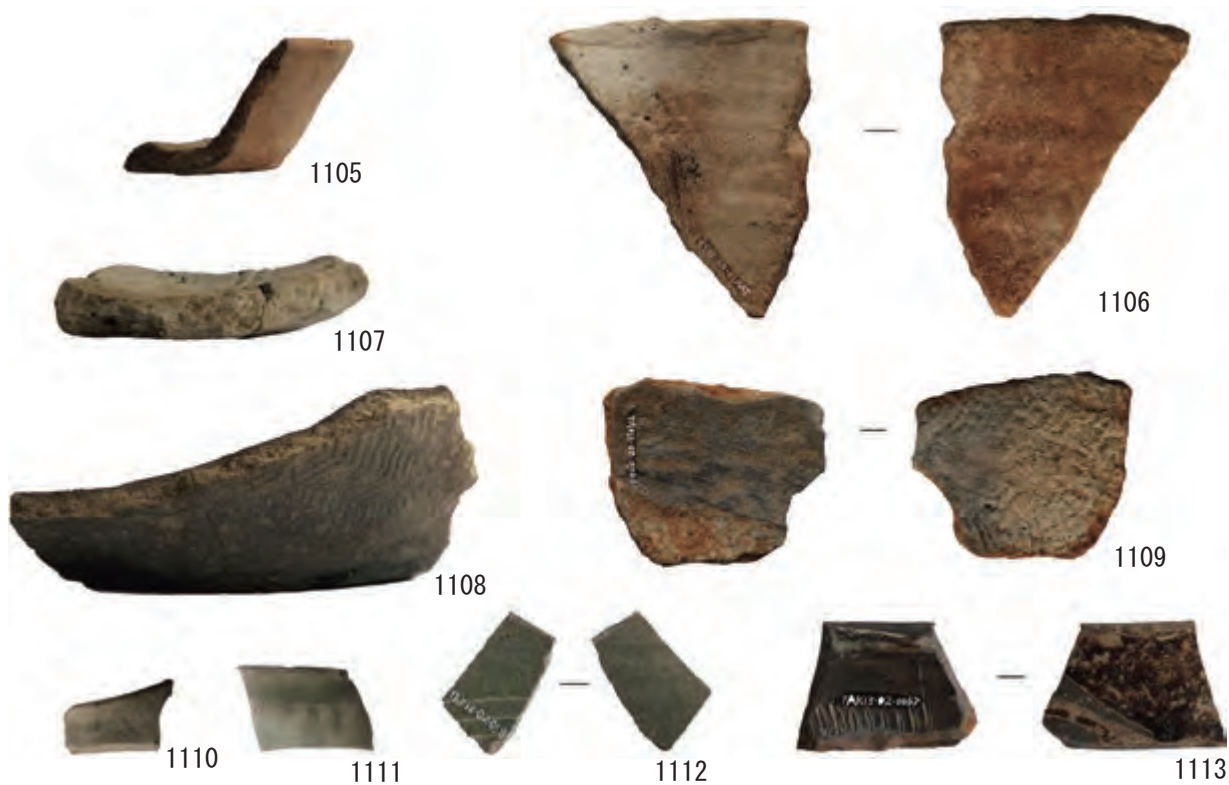


図版292 SD16 完掘状況(東から)

褐色の胎土に褐色の釉が、外面は厚く内面は薄く掛かる。口縁部は折り返しにより厚く作り出す。内面には9条以上の摺り目が施され、口縁端部には白色の目跡が残る。1114~1117は鍔が付く石鍋である。1114は体部から口縁部にかけて緩やかに内湾し、径が最大になる位置に鍔が付く。鍔は断面が台

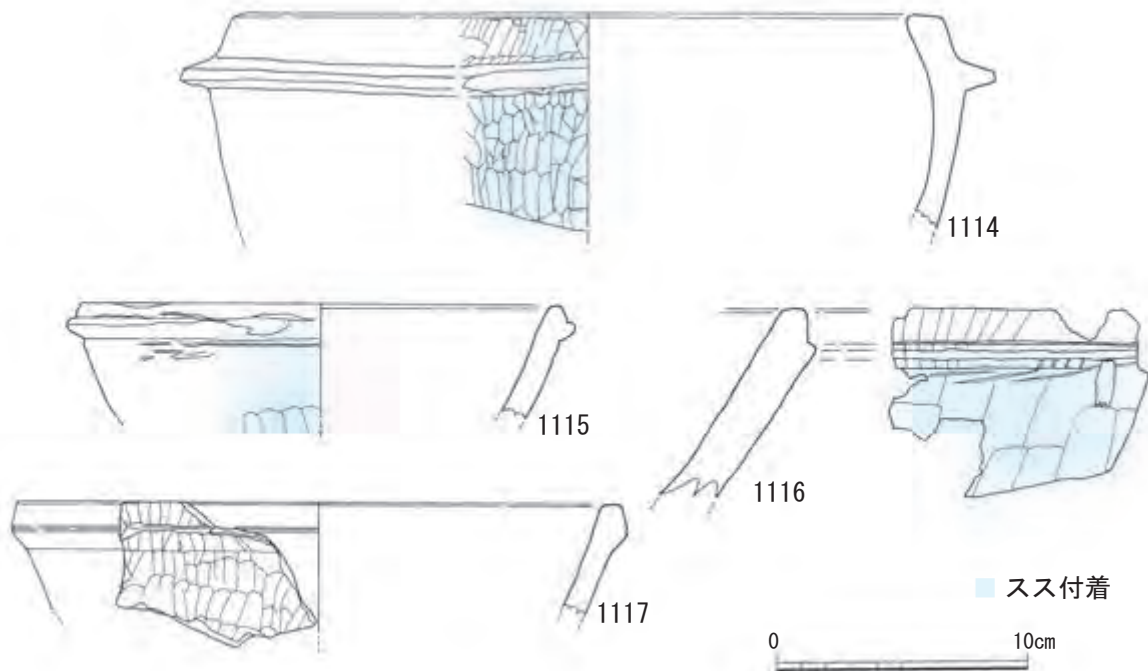


第345図 SD16出土遺物-1(S=1/3)

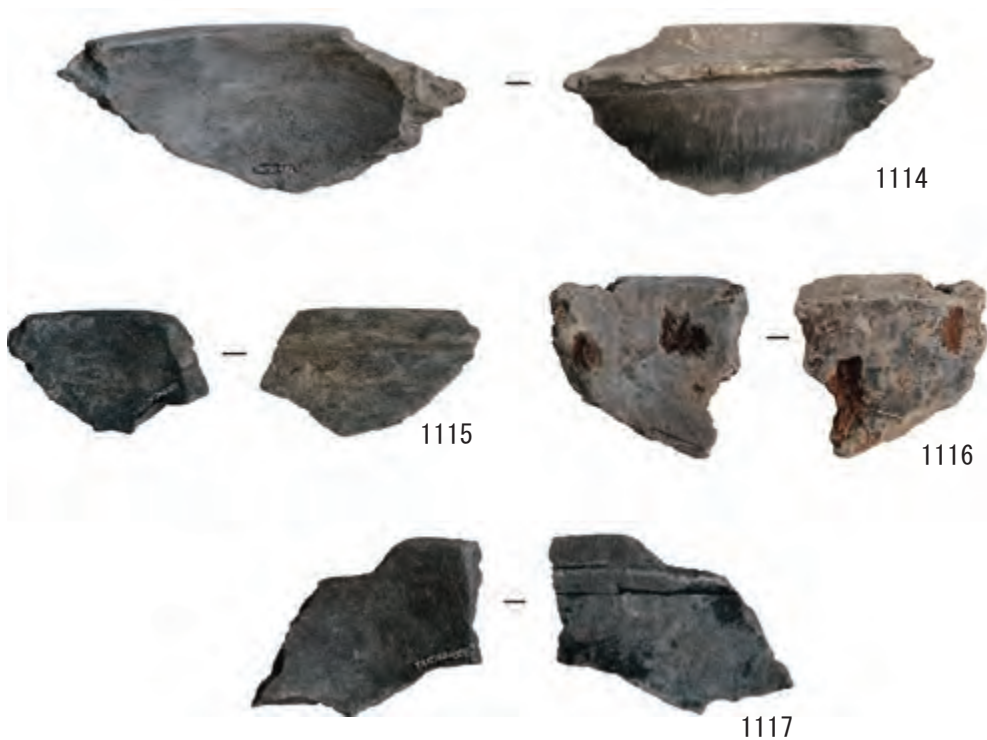


図版293 SD16出土遺物-1

形でしっかりと作り出されているが、張り出しが小さく厚さも均一でない。外面には幅が狭い縦位のケズリが見られ、煤痕も残る。1115は体部が外方へ開き口縁部は直立する。鏝部の上下には溝が切られ鏝部を意識した作りになっているが、鏝は稜がつぶれ断面には角がなくなる。1116も体部が外方へ開き口縁部は直立する。鏝部の上端に溝が切られ鏝部は意識されて作り出されているが、張り出しはわずかである。1117は体部が外方に伸びそのまま口縁部に至る。断面台形状に肥厚させた口縁部から、削り出しと溝によって鏝部を作り出している。



第346図 SD16出土遺物-2(S=1/3)



図版294 SD16出土遺物-2

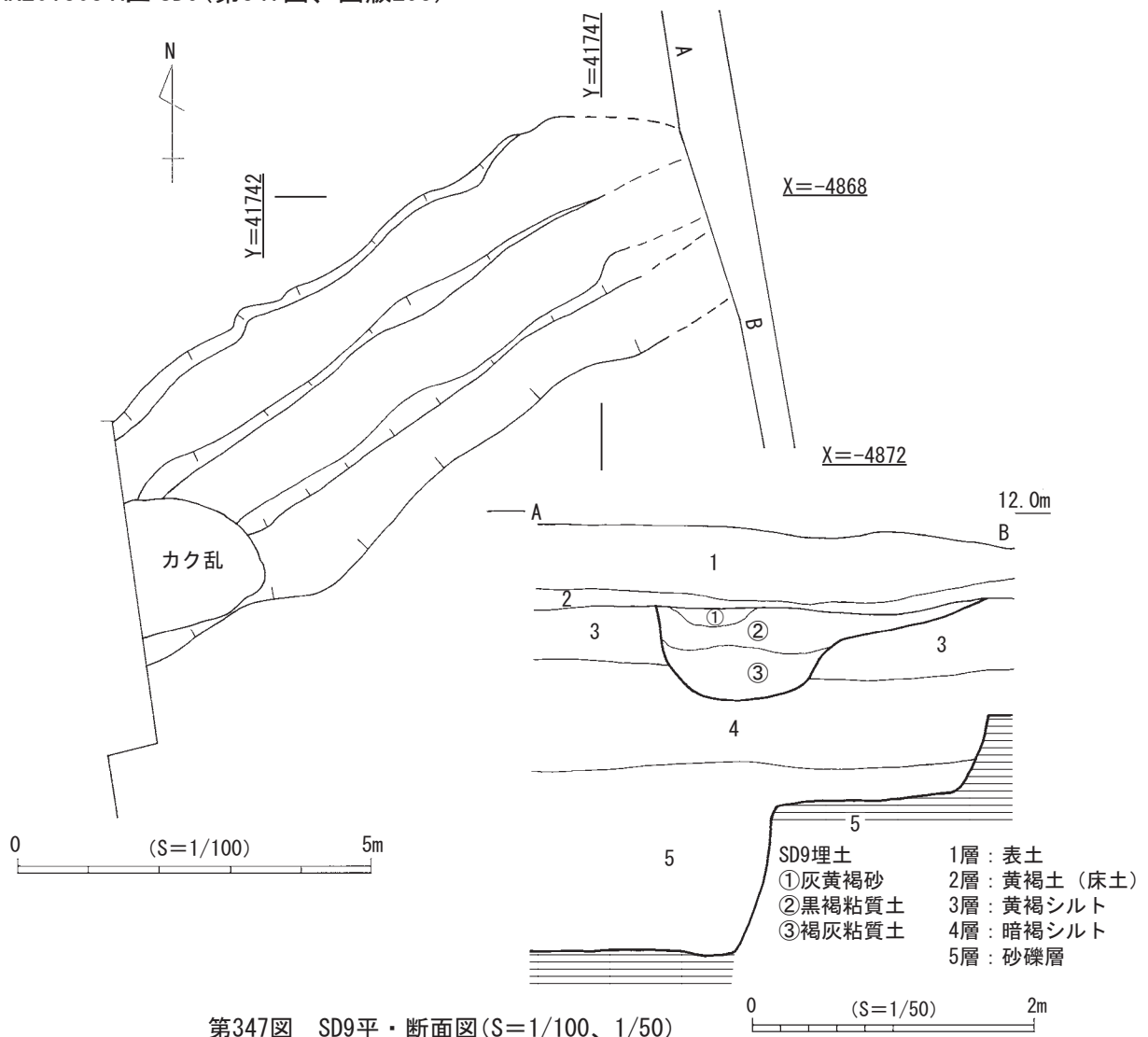
第125表 SD16出土 土器・陶磁器観察表

遺物番号	器種	部位	法量 (cm)			調整		色調		焼成	胎土	備考
			口径	器高	底径	外面	内面	外面	内面			
1105	瓦質 摺鉢	底部	—	(4.2)	(12.2)	—	ハケメ	灰白色	灰白色	やや不良	長石 石英	
1106	瓦質 摺鉢	(片口)	—	(9.6)	—	—	—	明褐色	浅黄褐色	やや不良	角閃石 長石	
1107	瓦質 摺鉢	体部中位～底部	—	(3.2)	(13.4)	—	—	灰白色	灰白色	やや不良	長石	
1108	瓦質 控鉢	底部～体部	—	(5.4)	(13.8)	—	タタキ	灰色	黒褐色	良好	長石 雲母 角閃石 赤色粒子	
1109	軟質 須部蓋 裏カ蓋	胴部	—	(4.3)	—	—	綾杉状のタタキ痕	—	黄灰色	やや不良	雲母 角閃石 石英	
1110	白磁 小椀	底部	—	(1.4)	(3.8)	—	—	明オリブ灰色	明緑灰色	良好	—	
1111	青白磁 合子身	口縁部～体部	—	(1.5)	—	—	—	明オリブ灰色	灰白色	良好	—	
1112	高麗青磁椀	胴部	—	(2.6)	—	—	—	灰オリブ色	灰オリブ色	良好	長石	
1113	陶器 小鉢	口縁部	—	(2.9)	—	—	摺目	褐灰色	暗赤褐色	良好	雲母	内・外面鉄袖

第126表 SD16出土 滑石製石鍋観察表

遺物番号	器種	部位	法量 (cm)			調整		色調		備考
			口径	器高	底径	外面	内面	外面	内面	
1114	鈔付石鍋	口縁～体部	(25.4)	(8.5)	—	—	—	灰白色	灰白色	外面に幅が狭い縦のケズリ痕
1115	鈔付石鍋	口縁部	(18.0)	(4.4)	—	—	—	黒褐色	黒褐色	鈔部の上下に溝を切り鈔部を意識したつくり
1116	鈔付石鍋	口縁部	(30.0)	(7.4)	—	—	—	褐灰色	にぶい黄褐色	鈔部の上端に溝を切る
1117	鈔付石鍋	口縁部	(23.0)	(4.4)	—	—	—	褐灰色	黄灰色	削り出しと溝によって鈔部を作り出している

⑤ TAK201303 A区 SD9(第347図、図版295)



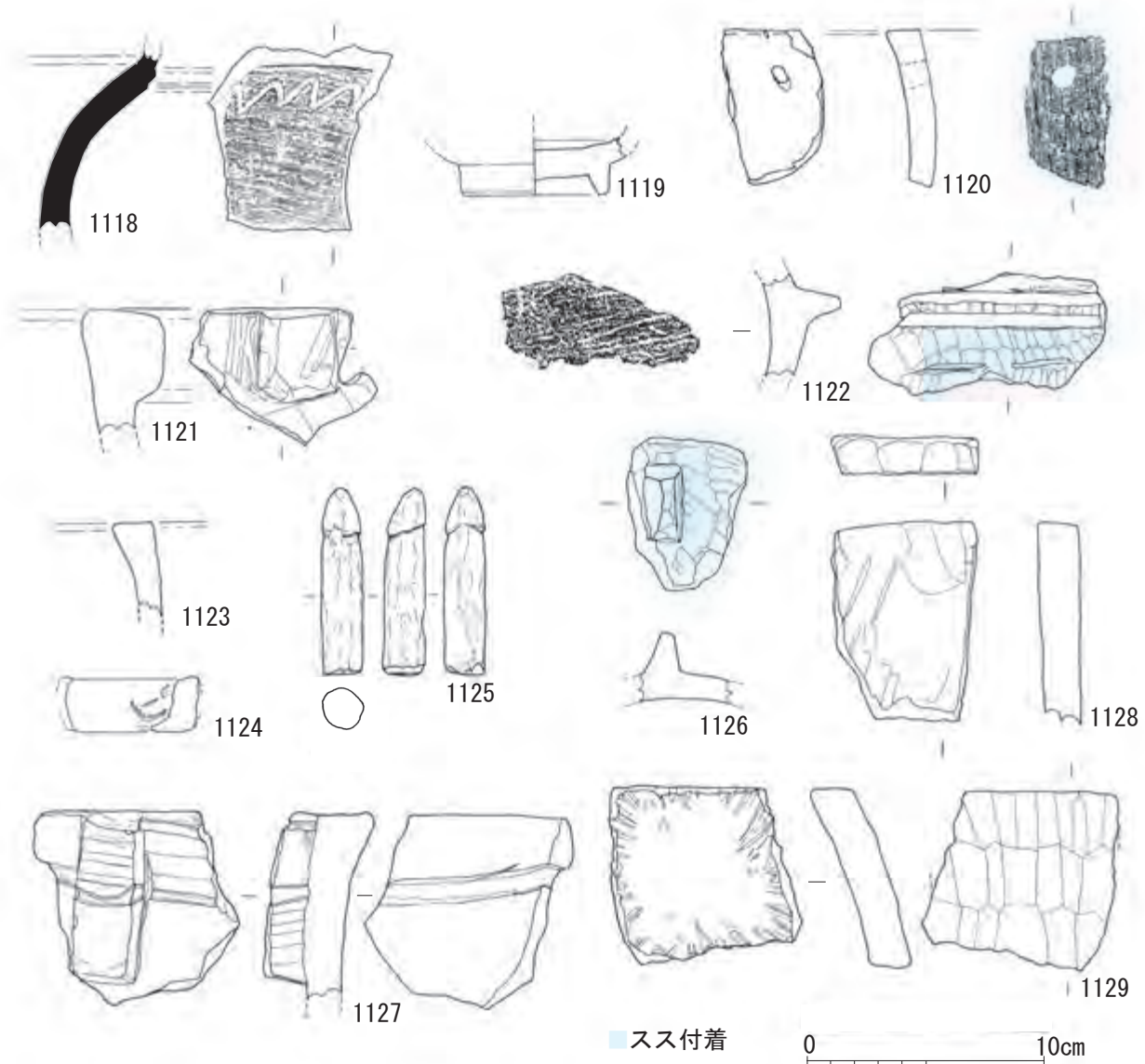
大調査区201303の小調査区A区8674グリッドから検出した。確認長(北東-南西)9.5m、幅3.3m、深さ1.9mを測る。断面が短軸方向の両側に段を持つ形状である。埋土は砂層と粘質土から成る。SD11を切る。SD11の埋没が12世紀後半と思われるのでSD9の埋没はそれ以降である。しかし、出土している遺物の年代がほぼ同じであることからSD11の埋没後間をおかずにSD9も埋没したと思われる。

SD9出土遺物(第348図、第127～131表、図版296)

1118は須恵器複合口縁大甕の頸部～口縁部である。頸部は緩やかに外反しながら屈曲部を経て口縁部に至る。屈曲部を挟み上下に浅い沈線が巡る。外面は格子タタキ痕をナデ消した後に1条の浅い波状沈線が巡る。胎土は精製されており焼成は良好で硬く焼きしまっているが、還元が十分ではなく赤みがかっている。荒尾産の製品と思われる。1119は白磁椀V類の底部片である。微細な黑色粒子を含む灰白色の胎土である。1120～1123は滑石製石鍋片である。1120は縦耳が付くタイプの口縁部である。外面は全面に煤が付着しているが、口縁端部には煤の付着が見られないことから蓋の使用が考えられる。補修孔と思われる穿孔がある。1121も縦耳付きの石鍋口縁部である。耳の作り出しの際に付いた削り痕が多く残る。補修痕と思われる穿孔が見られる。1122は鐙付きの口縁部片である。摩滅が激しいが鐙から下に煤痕が残る。1123も口縁部であるが、どちらのタイプになるかは不明である。1124は滑石製の小型の容器状製品である。内面に荒い削り痕が残る。被熱のために赤変をしているこ



図版295 SD9(部分)東から



第348図 SD9出土遺物-1(S=1/3)

とから、石鍋の加工品と思われる。1125は硬質の滑石を使った陽物である。通常の滑石の加工は削って行うが、この製品は硬質のために敲打により成形を行っている。1126は鏝付き石鍋の鏝部を利用した製作途中の石鍋補修具である。鏝の切断痕が外面に残る。挿入部の穿孔をする前に破棄している。1127は縦耳付石鍋の加工素材である。中央に刻まれた浅い溝が全周する。破断面には切断痕は見られず、石鍋の欠けた部分を利用していると思われる。1128は方形をした滑石製品である。上縁部に横位の削り痕が残ることから、石鍋口縁部の加工素材であろう。表面には粗い削り痕が残る。形状から温石の可能性もある。1129は縦耳付石鍋の口縁部の加工素材である。両側縁に切断痕が僅かに残る。内面には放射状の削り痕が全周する。



図版296 SD9出土遺物

第127表 SD9出土 土器・陶磁器観察表

遺物番号	器種	部位	法量 (cm)			調整		色調		焼成	胎土	備考
			口径	器高	底径	外面	内面	外面	内面			
1118	須恵器 甕	口縁部	—	(7.7)	—	ナデ消し	—	褐灰色	褐灰色	良好	精良	1条の波状沈線 酸化が強い焼成
1119	白磁 椀 V類	底部	—	(2.3)	6	—	—	灰白色	灰白色	良好	—	

第128表 SD9出土 滑石製石鍋観察表

遺物番号	器種	部位	法量 (cm)			調整		色調		備考
			口径	器高	底径	外面	内面	外面	内面	
1120	縦耳付石鍋	口縁部	—	(6.6)	—	横位のケズリ	—	灰色	灰色	補修孔有
1121	縦耳付石鍋	口縁部	—	(5.8)	—	—	—	黄灰色	黄灰色	補修孔有
1122	鏝付石鍋	鏝部	—	(4.4)	—	横位のケズリ	横位のケズリ	灰白色	灰黄褐色	
1123	石鍋	口縁部	—	(3.0)	—	—	—	灰白色	灰白色	

第129表 SD9出土 滑石製品観察表

遺物番号	器種	最大長 (mm)	最大幅 (mm)	最大厚 (mm)	重量 (g)	備考
1124	小型の容器状製品	口径 (5.4)	器高2.25	底径 (5.0)	25	石鍋加工製品
1125	陽物	79	18	22.5	40	硬質滑石



第130表 SD9出土 滑石製石鍋加工製品観察表

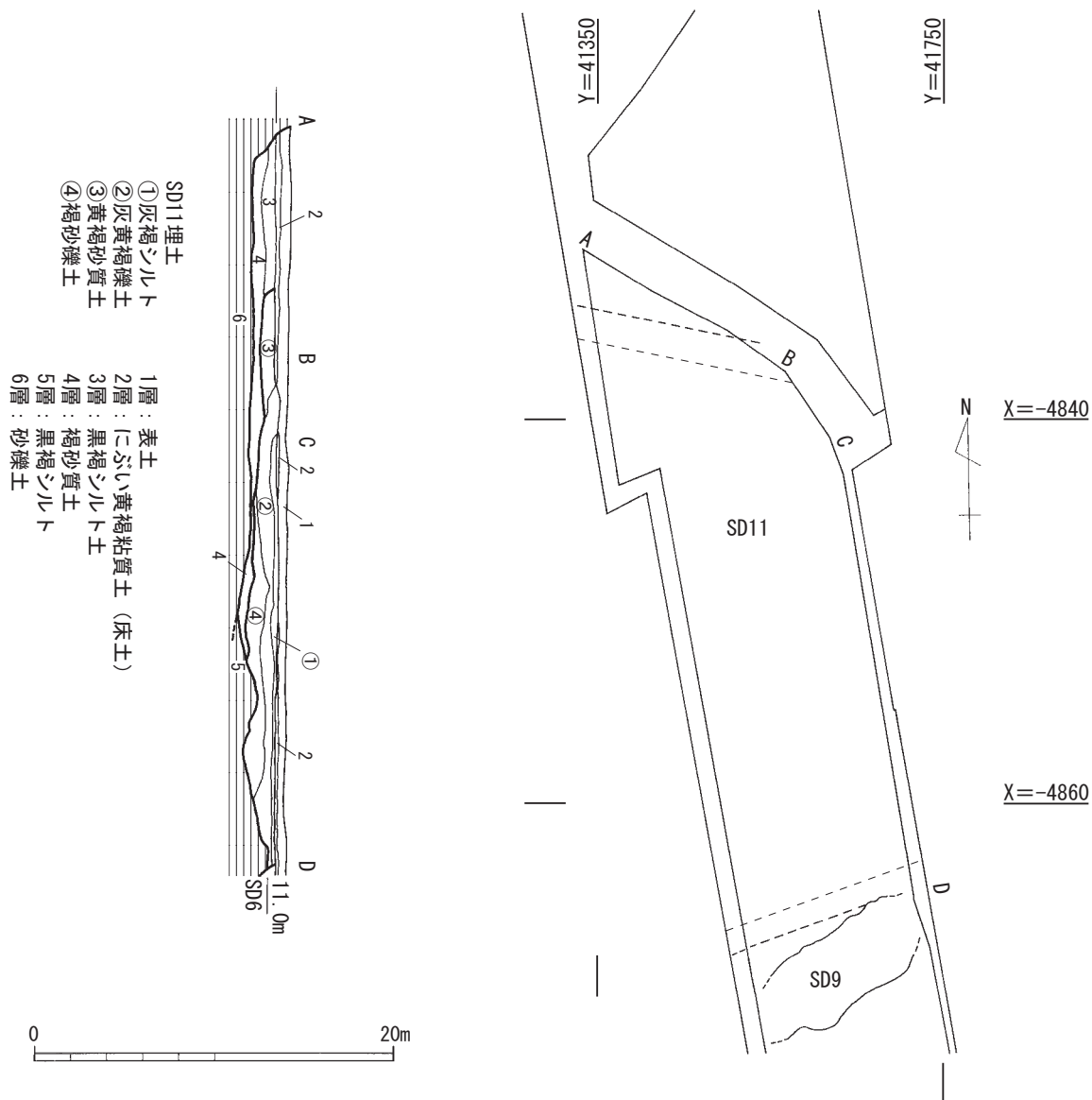
遺物 番号	器壁部 (mm)			挿入部 (mm)			重量 (g)	備考
	最大長	最大幅	最大厚	最大長	最大幅	最大厚(高)		
1126	63	51	11	32	16	15	75	鏝を断ち切って耳状にする。石鍋補修具

第131表 SD9出土 滑石製石鍋加工素材観察表

遺物 番号	最大長 (mm)	最大幅 (mm)	最大厚 (mm)	重量 (g)	備考
1127	82	76	35	305	溝あり
1128	84	59	15	175	板状製品 粗い削り痕あり
1129	75	81	18	245	切断痕、削り痕あり

⑥ TAK201303 A区 SD11(第349図)

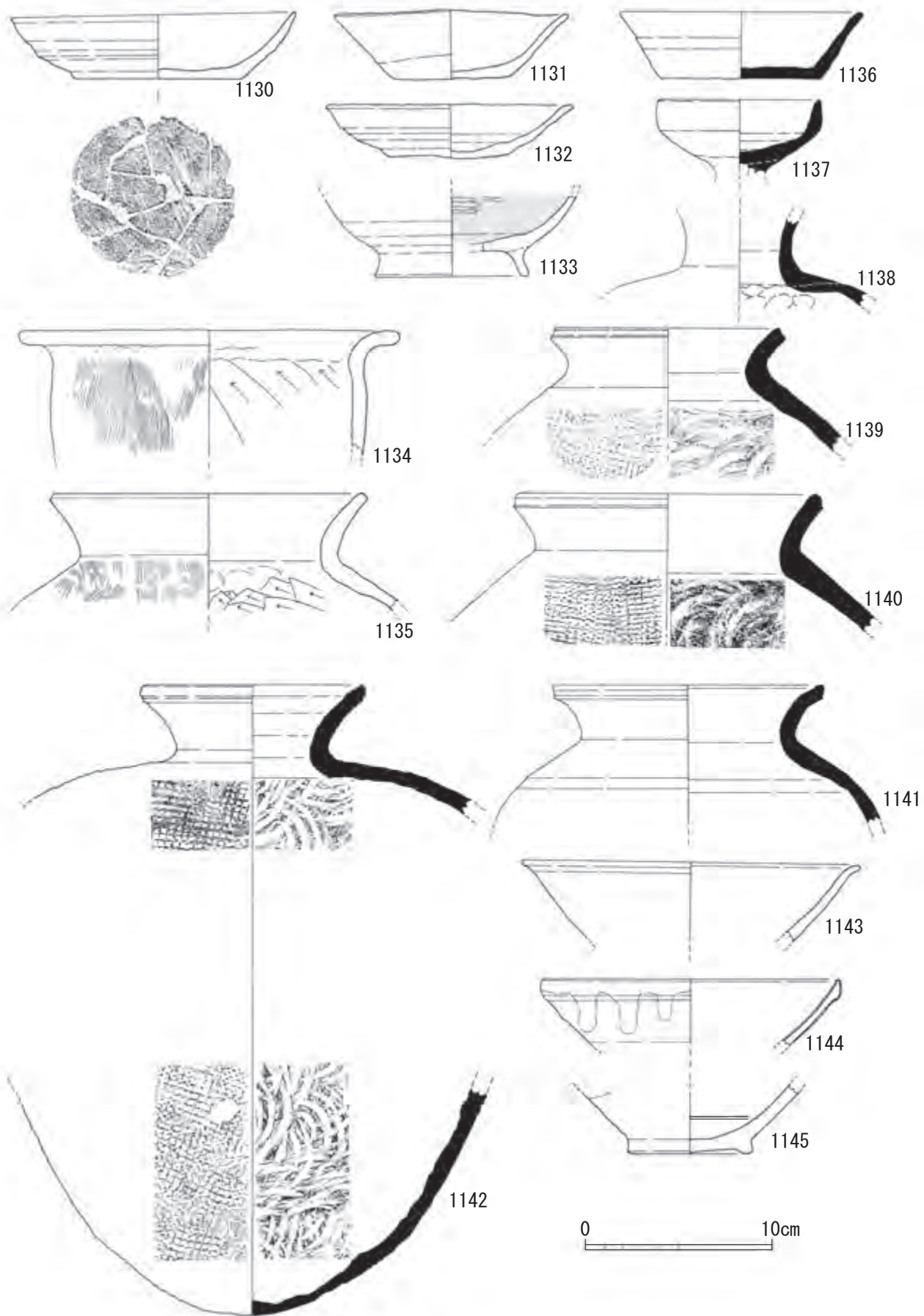
大調査区201303の小調査区A区8272、8274、8472、8474、8672、8674グリッドから検出した。確認長(北東-南西)13m、幅35m、深さ2.5mを測る。埋土は砂や砂礫から成る。遺物が多数出土した。調査時の連絡の不備で平面図の作成を失念しており、土層断面図から復元した溝両端の範囲を点線で記している。



第349図 SD11平・断面図(S=1/400)

SD11出土遺物(第350~352図、第132~135表、図版297~299)

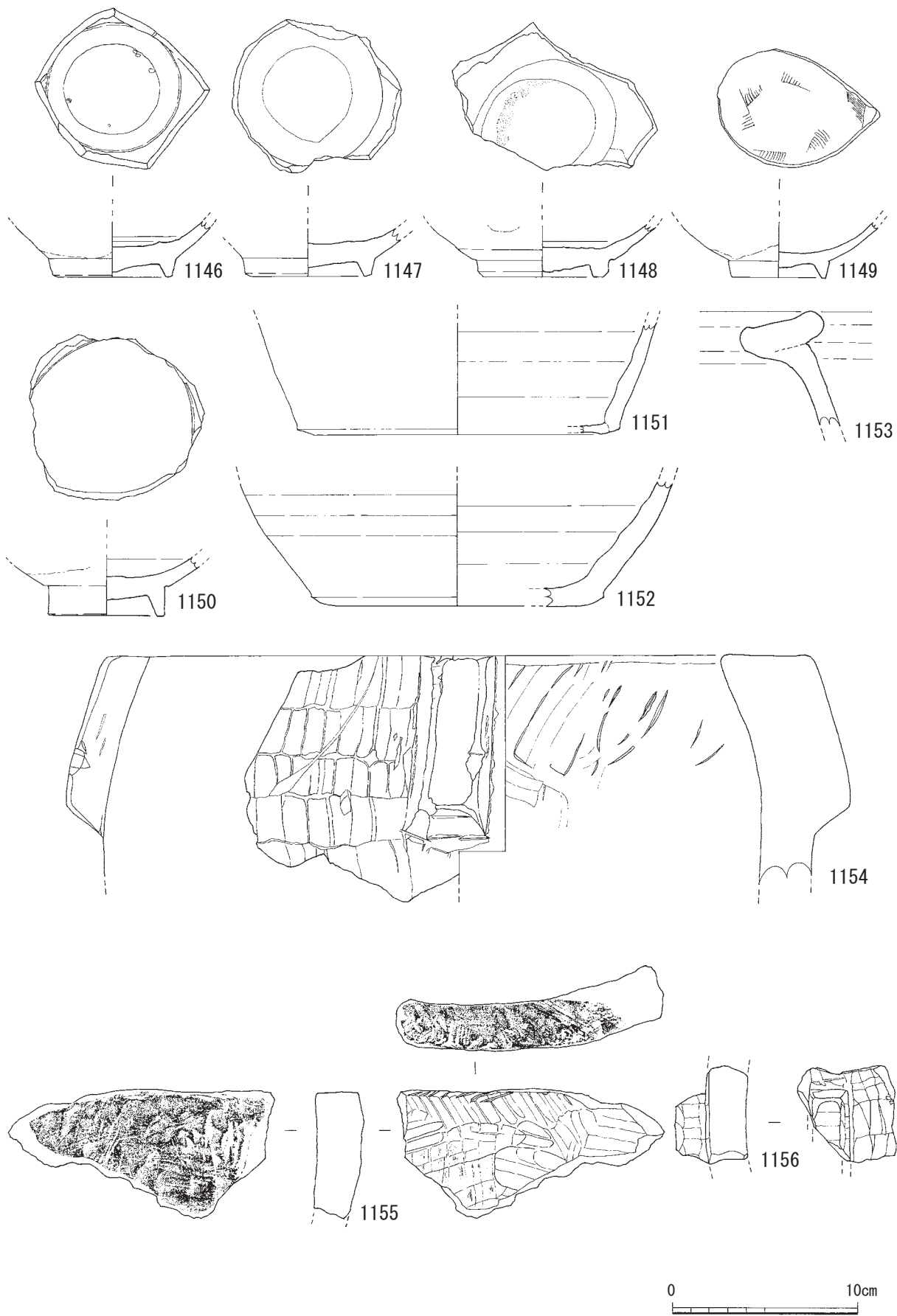
1130~1132は土師器杯である。1130は精選された胎土で砂粒は含まない。広めの体部から内湾しながら立ち上がり口縁部で僅かに外反する。外面には引き上げの際の凹凸が残る。切り離しは右回転の糸切りによる。胎土、形態から豊前系の土師器杯と思われる。1131は底部から直線的に体部が伸び口縁部に至る。底部の切り離しは右回転のヘラ切りで、切り離し後体部際の底部をナデで平滑に仕上げる。1132は薄作りで器高が低い杯である。胎土は精良である。切り離しは回転ヘラ切りと思われる。切り離し後は底部外面をナデで仕上げる。1133は細く高い高台を持つ黒色土器A類碗の底部~体部片である。体部は丸みを持って立ち上がる。高台はていねいに作られ、暈付の線もシャープである。内面は摩滅をしているが横方向のミガキがわずかに残る。1134は最大径が口縁部にある土師器甕口縁部である。胴部内面は下から斜め上方に向かって強いヘラケズリが行われ、外面には縦方向のハケメが施される。口縁部の厚さは胴部と変わらず内面に粘土紐の接合痕が残る。1135は最大径が胴部中位にあると思われる甕の口縁部~胴部片である。口縁部は強くくびれ壺型を呈する。胴部内面には下から斜め上方へ向かって強いヘラケズリが行われ、外面には縦方向のハケメが施される。1136~1142は須恵器である。1136は生焼けの杯である。体部はほぼ直線で立ち上がった後口縁部で外反する。右回転のヘラ切り後、切り離し痕をナデで底部外面を平滑に仕上げる。1137は口径が小さな高杯の杯部である。脚部との接合部分から破損している。体部は斜めに直線的に伸びた後、直立して口縁部に至る。用途および時期については不明である。1138は長頸壺の肩部片である。内面には胴部と頸部の接合痕と接合のための指オサエ痕が残る。1139は甕の口縁部~肩部片である。短い口縁が外反し、口縁端部に緩い段を作る。外面には格子タタキ痕が残り、内面は青海波文と思われる当て具痕をナデ消している。焼成は甘く軟質である。1140は甕の口縁部~肩部片である。形態は1139と良く似ているが口縁部にある段が鋭く稜となっている。外面の格子タタキや内面の青海波文と思われる当て具痕のナデ消しも良く似ている。焼成は良好で硬く焼きしまっている。1141は甕の口縁部~肩部片である。口縁端部に2条の沈線が巡る。焼成が甘く生焼けである。タタキ痕や当て具痕は見られず回転ナデで平滑に仕上げる。1142は甕口縁部と底部である。丸底の底部で最大径は胴部上位にあると思われる。外面には格子タタキが、内面には青海波の当て具痕が残る。1143は口縁端部が外反する越州窯系青磁碗Ⅰ類である。精良な胎土にオリーブ色の釉薬が薄く掛かる。1144~1150は白磁碗である。1144はⅣ類口縁部、1145はⅣ類底部である。1146・1147・1148はⅧ類底部である。見込みの釉薬を輪状に搔き取っている。1149・1150はⅤ類底部片である。1149は見込みに櫛描文が施される。1151・1152は陶器壺底部片である。1151は底部器厚が非常に薄い。外面には赤褐色の釉薬が薄く掛かり内面は露胎である。1152は器厚が厚い外面には灰褐色の釉薬が薄く掛かり内面は露胎である。1153は甕口縁部である。胎土には白色砂粒を多く含む。口縁部は折り返されており断面はT字形である。1154~1158は縦耳が付く石鍋片である。1154は復元口径が37.4cmを測る。体部から内傾しながら口縁部に至る。1155は僅かに内傾しながら口縁部に至る。口縁端部や内面に不定方向の削り痕が見られることから、石鍋の2次加工品の可能性もある。1156は口縁部より一段下がって耳が付くタイプである。断面に結晶が見える荒い滑石を使用している。1157は耳の上端を欠損している。内面に斜位の工具痕が傷状に残る。1158は摩滅が激しい。1159は耳が付く石鍋の口縁部片であるが、耳は横長で口縁端部に付く。内面は使用により平滑になっている。1160~1162は鏝付き石鍋の口縁部である。1160は鏝付き石鍋の口縁部である。稜が



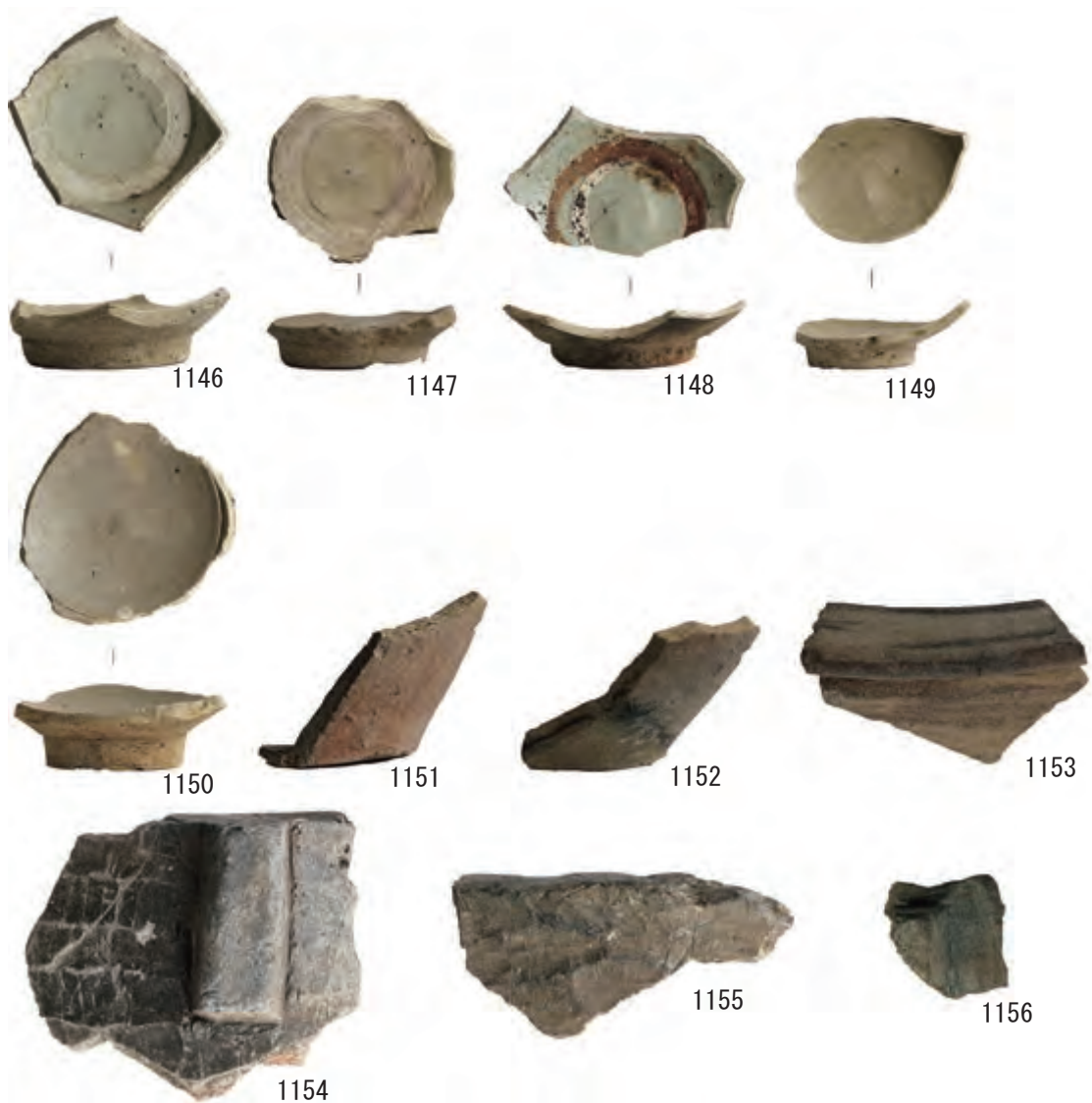
第350図 SD11出土遺物-1(S=1/3)



图版297 SD11出土遗物-1

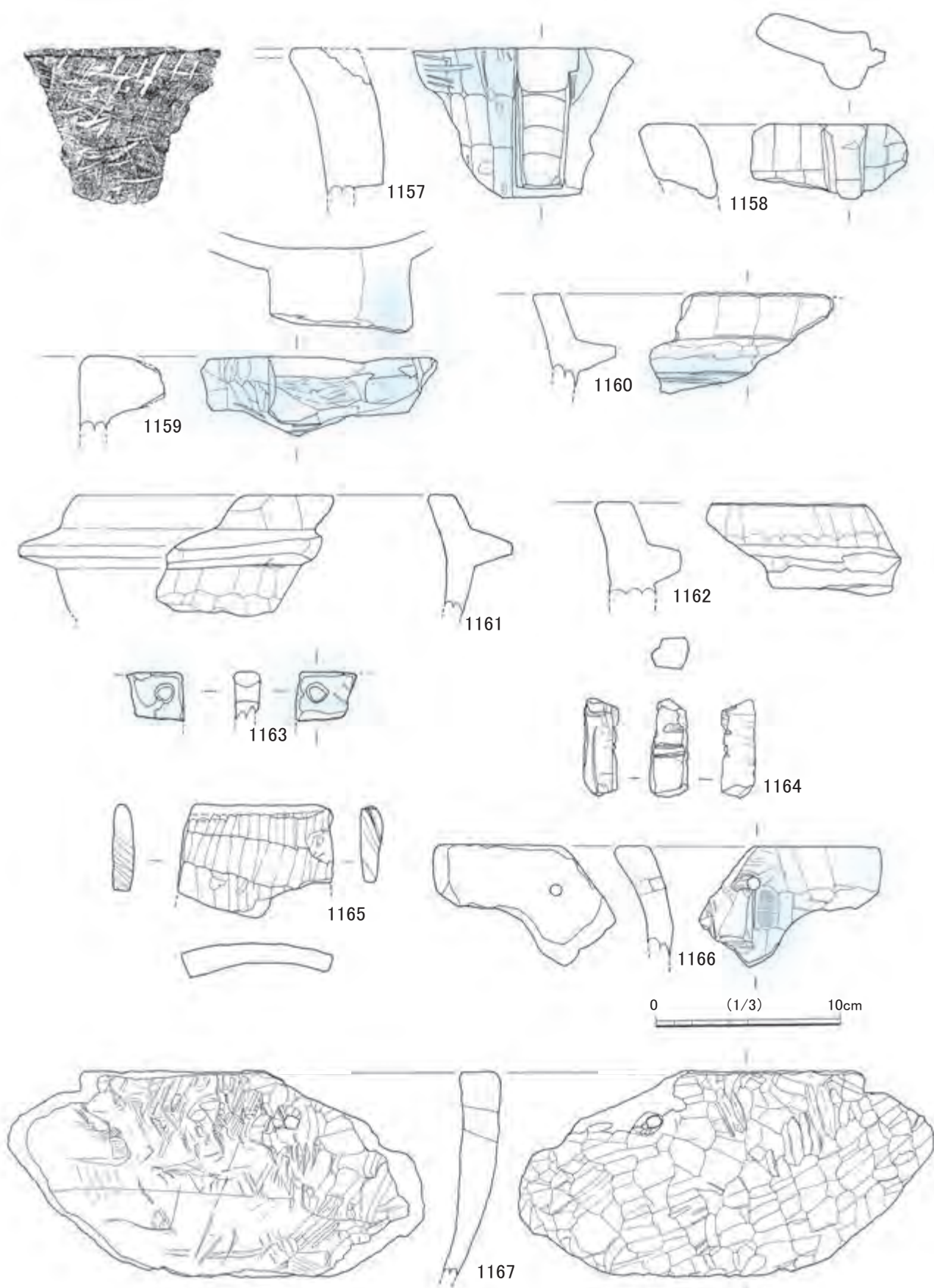


第351図 SD11出土遺物-2(S=1/3)



図版298 SD11出土遺物-2

明確な鏝が伸び、鏝部下面より下に煤が付着する。**1161**は強く内湾する口縁部にしっかりとした鏝が付く。**1162**は鏝の張りがやや弱い。**1163**は、石鍋を加工した石鍋補修具の挿入部もしくは温石の小片である。径1cmの穿孔がある。穿孔部分も含め全面に煤が付着している。**1164**は石鍋の加工素材で棒状を呈する。長辺が緩やかに弧を描くことから石鍋体部の加工品と判断した。**1165**は縦耳の石鍋の加工素材である。口縁部を縦に切断しており、両側縁に切断時の工具痕が残る。下半分は欠損している。**1166**は縦耳の石鍋の加工素材である。口縁部を斜めに切断している。石鍋時に穿たれた補修孔には鉄



■ スス附着  
■ 鉄

第352図 SD11出土遺物-3(S=1/3)(1167のみS=1/4)



图版299 SD11出土遺物-3



線が残る。1167は復元口径42cmを測る大型の縦耳付石鍋口縁部である。外面の削りが縦位に行われているのが特徴的である。穿孔が見られるが径が大きく補修孔以外の可能性もある。白磁碗Ⅷ類や鍔付きの石鍋の出土からSD11は12世紀後半に埋没したと思われる。

第132表 SD11出土 土器・陶磁器観察表

遺物番号	器種	部位	法量 (cm)			調整		色調		焼成	胎土	備考
			口径	器高	底径	外面	内面	外面	内面			
1130	土師器 杯	ほぼ完形	15.1	3.6	9	ナデ	ナデ	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	良好	砂粒を含まず精良	右回転系切りによる切り離し
1131	土師器 杯	ほぼ完形	12.3	3.7	6.5	ナデ	ナデ	橙色	橙色	良好	砂粒を含まず精良	右回転のヘラ切り 底部と体部境をナデ
1132	土師器 杯	底部～口縁部	(13.2)	2.9	6.2	ナデ	ナデ	にぶい橙色	橙色	良好	石英 雲母	回転ヘラ切り後ナデで仕上げる
1133	黒色土器A類 椀	底部～体部	—	(4.3)	8	ナデ	ミガキ	橙色	黒	良好	長石 石英 金雲母	細く高い高台を貼り付け
1134	土師器 甕	口縁部～体部	19.9	(6.7)	—	ハケメ	ヘラケズリ	暗褐色	褐色	良好	石英 角閃石 雲母 長石	口縁内面に粘土紐接合痕
1135	土師器 甕	口縁部～胴部	(16.4)	(6.4)	—	ハケメ	ケズリ	褐色	にぶい褐色	良好	長石 石英	最大径が胴部
1136	須恵器 杯	底部～口縁部	(12.8)	3.6	8.4	ナデ	ナデ	灰白色	淡黄色	良好	長石 石英	右回転ヘラ切り後平滑なナデ
1137	須恵器 高杯	杯部	9.4	(4)	—	—	—	灰色	灰色	良好	石英 長石 黒色粒子	口径が小さい
1138	須恵器 長頸壺	肩部	—	(3.9)	—	—	指オサエ痕	灰色	灰色	良好	石英 長石 黒色粒子	胴部と頸部の接合痕と指オサエ痕
1139	須恵器 甕	口縁部～肩部	(12)	(6.5)	—	格子タタキ	ナデ消し	灰色	灰色	やや軟質	長石 灰色粒子	
1140	須恵器 甕	口縁部～肩部	(15.6)	(7.5)	—	格子タタキ	ナデ消し	灰色	灰色	良好	石英 長石 白色粒子	口縁端部に段状の稜を作る
1141	須恵器 甕	口縁部	(14.6)	(7.5)	—	沈線	ナデ	淡黄色	淡黄色	不良	精良	口縁端部に2条の沈線
1142	須恵器 甕 壺	口縁部 胴部～底部	(11.8)	(7)(12.3)	—	格子タタキ	当て具痕	にぶい褐色	にぶい褐色	良好	黒色粒子	
1143	越州窯系青磁 椀 I類	口縁部	(18.2)	(4.2)	—	—	—	オリーブ黄色	オリーブ黄色	良好	精良	
1144	貿易白磁 椀	口縁部	(15.8)	(3.7)	—	—	—	灰色	灰色	良好	精良	
1145	貿易白磁 椀 IV-I類	底部	—	(3.7)	6	—	—	灰白色	灰白色	良好	精良	
1146	白磁 碗 V類	底部	—	(3.0)	6	—	—	灰白色	灰白色	良好	黒色粒子	見込みの釉を掻き取る
1147	白磁 碗 V類	底部	—	(2.6)	6	—	—	灰黄色	灰白色	良好	黒色粒子	見込みの釉を掻き取る
1148	白磁 碗 V類	底部	—	(2.8)	(6.4)	—	—	にぶい黄褐色	灰白色	良好	黒色粒子	見込みの釉を掻き取る
1149	白磁 碗 V類	底部	—	(3.0)	5	—	—	浅黄色	淡黄色	良好	—	見込みに樹描文
1150	白磁 碗 V類	底部	—	(3.1)	6.1	—	—	淡黄色	灰白色	良好	黒色粒子	
1151	陶器 壺	底部	—	(6.0)	(15.2)	—	—	橙色	明褐色	良好	石英 黒色粒子	薄い底部 内面は露胎
1152	陶器 壺	底部	—	(6.7)	(15.0)	—	—	灰褐色	灰白色	良好	長石 黒色粒子	内面露胎 外面には灰褐の釉
1153	陶器 甕	口縁部	(63)	(6.0)	—	—	—	暗赤灰色	赤灰色	良好	白色砂粒	口縁部断面はT字型

第133表 SD11出土 滑石製石鍋観察表

遺物番号	器種	部位	法量 (cm)			調整		色調		備考
			口径	器高	底径	外面	内面	外面	内面	
1154	縦耳付石鍋	口縁部	(37.4)	(11.8)	—	—	—	灰色	灰色	
1155	縦耳付石鍋	口縁部	(36)	(6.6)	—	—	—	灰白色	灰白色	不定方向のケズリ痕有
1156	縦耳付石鍋	体部上位	—	(5.2)	—	—	—	オリーブ灰色	オリーブ灰色	口縁より1段下がり耳が付く
1157	縦耳付石鍋	口縁部	(26.4)	(7.7)	—	—	—	褐灰色	褐灰色	内面に斜位の工具痕有
1158	縦耳付石鍋	口縁部	—	(4.0)	—	—	—	灰白色	にぶい黄褐色	
1159	耳付石鍋	口縁部	(26)	(4.3)	—	—	—	褐灰色	褐灰色	内面は使用により平滑 横長の耳が口縁端部に付く
1160	鍔付石鍋	口縁部	(40)	(5.5)	—	—	—	灰白色	灰白色	鍔下面より下にスス付着
1161	鍔付石鍋	口縁部	(20.0)	(6.3)	—	—	—	褐灰色	褐灰色	
1162	鍔付石鍋	口縁部	(38)	(5.0)	—	—	—	灰色	灰色	
1167	縦耳付石鍋	口縁部	(42)	(14.7)	—	縦位のケズリ	—	明黄褐色	灰色	穿孔

第134表 SD11出土 滑石製石鍋加工製品観察表

遺物番号	器種	最大長 (mm)	最大幅 (mm)	最大厚 (mm)	重量 (g)	備考
1163	補修具か温石	26	33	13	20	

第135表 SD11出土 滑石製石鍋加工素材観察表

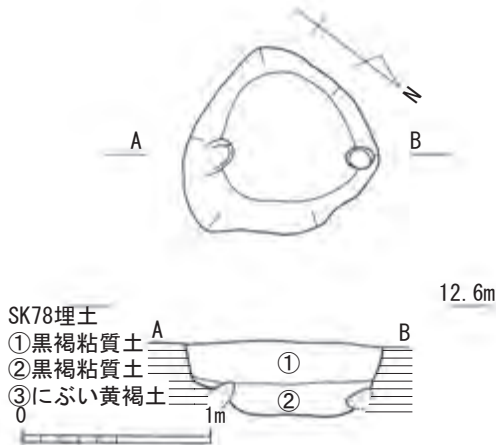
遺物番号	最大長 (mm)	最大幅 (mm)	最大厚 (mm)	重量 (g)	備考
1164	52	20	18	30.4	断面短形の棒状 用途不明
1165	61	83	15	245	切断痕有
1166	63	85	23	160	切断痕有 石鍋時の補修孔に鉄線有

### (3) 土坑 (SK)

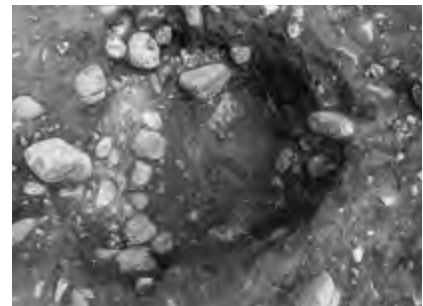
今回報告する土坑は3基である。大調査区201302の小調査区⑩区0474グリッド第3層から検出した。SK77・79からは遺物の出土が無かったが、SK78に隣接し同程度の規模であることから、同時期の遺構と考えた。

#### ① TAK201302⑩ SK78 (第353図、図版300)

長軸1.0m、短軸0.9mのいびつな楕円形で深さは0.4mを測る。覆土は黒褐色のシルトから成る。



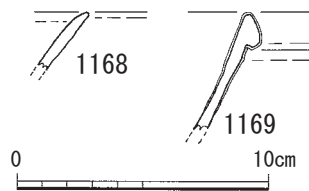
第353図 SK78平・断面図(S=1/40)



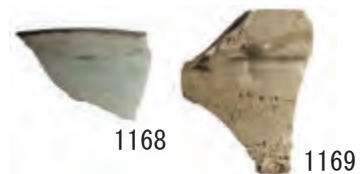
図版300 SK78完掘状況(北西から)

#### SK78出土遺物(第354図、第136表、図版301)

1168は白磁皿Ⅸ類の口縁部である。口禿げである。1169は白磁碗Ⅳ類口縁部である。1168の年代からSK78は13世紀後半から14世紀前半の遺構と思われる。



第354図 SK78出土遺物(S=1/3)



図版301 SK78出土遺物

#### 第136表 SK78出土 磁器観察表

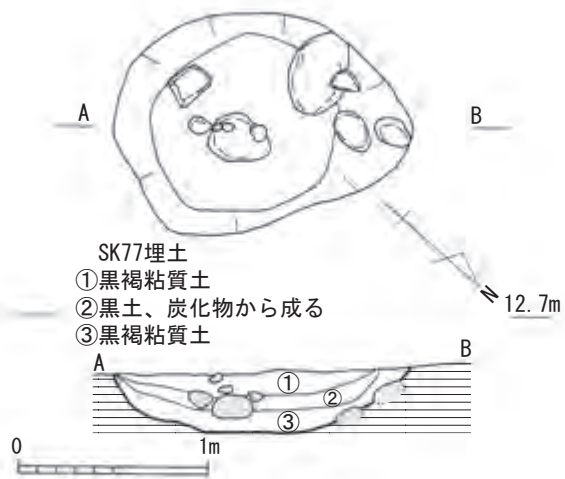
遺物番号	器種	部位	法量(cm)			調整		色調		焼成	胎土	備考
			口径	器高	底径	外面	内面	外面	内面			
1168	貿易白磁 皿Ⅸ類	口縁部	(14.8)	(2.3)	—	—	—	灰白色	灰白色	良好	黒色粒子	口禿の口縁
1169	貿易白磁 碗Ⅳ類	口縁部	—	(4.6)	—	—	—	灰白色	灰白色	良好	黒色粒子	

#### ② TAK201302⑩ SK77 (第355図、図版302)

SK78の北西0.2mに位置する。長軸1.6m、短軸1.1mの楕円形で、深さは0.3mである。埋土は黒褐色のシルトで炭化物を多く含む。

#### ③ TAK201302⑩ SK79 (第356図、図版303)

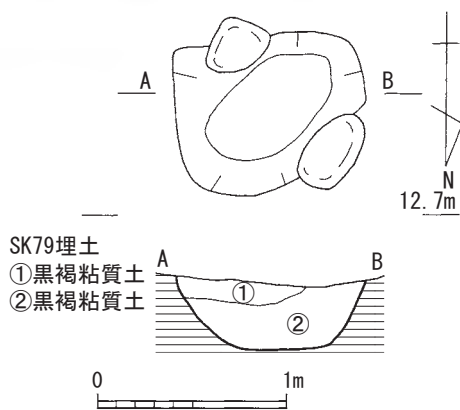
SK78の西1mに位置する。長軸1.1m、短軸0.7mの楕円形で、深さは0.35mである。埋土は黒褐色の粘質土である。



第355図 SK77平・断面図(S=1/40)



図版302 SK77完掘状況(北から)



第356図 SK79平・断面図(S=1/40)



図版303 SK79完掘状況(北から)

#### (4) 集石(SS)

今回報告する集石は1基である。

##### ① TAK201302⑨ SS5(第357図、図版304)

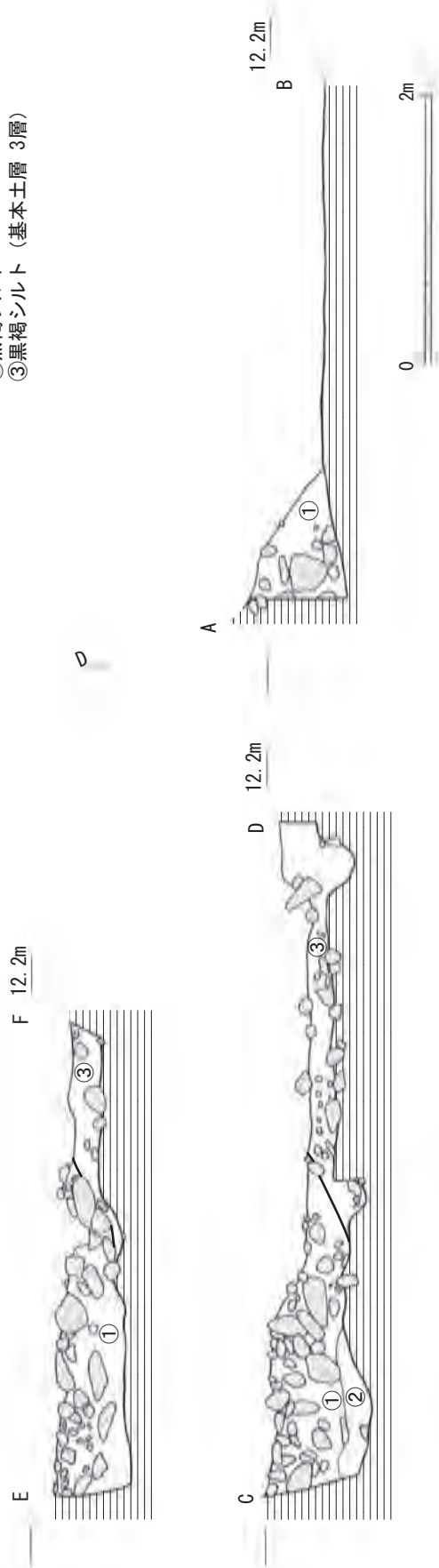
大調査区201302の小調査区⑨区9870グリッド第3層から検出した。長軸(北西-南東)10.5m、短軸2.5m、高さ0.8mを測る。拳から人頭大までの円礫が集積されている。北側から南側へ緩やかに高さを減じていることから、北側に集積された石が南へ崩れたものと思われる。礫の間を、しまりのない黒褐色シルトが埋めている。



図版304 SS5検出状況(西から)



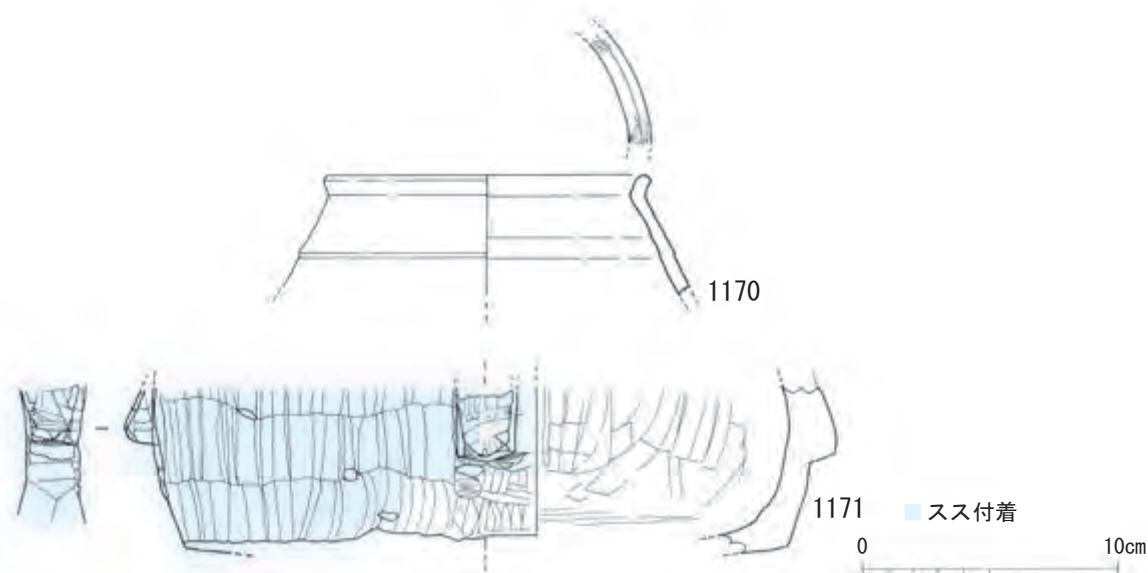
- SS5埋土
- ①黒褐シルト。礫を多く含む
  - ②黒褐シルト
  - ③黒褐シルト (基本土層 3層)



第357図 SS5平・断面図(S=1/50)

SS5出土遺物(第358図、第137・138表、図版305)

1170は陶器壺口縁部である。明瞭な頸部を持たず、胴部から外反する口縁部へ続く。胴部上位には1条の沈線が巡る。口縁部には白色の砂目が見られる。1171は縦耳が付く石鍋である。体部は緩やかに内湾しながら口縁部に至る。4ヶ所に付けられた耳は小さく、上部が薄く削られており断面は三角形を呈する。耳の位置から浅い鍋であったと思われる。外面は煤の付着が著しい。



第358図 SS5出土遺物(S=1/3)



図版305 SS5出土遺物

第137表 SS5出土 陶器観察表

遺物番号	器種	部位	法量 (cm)			調整		色調		焼成	胎土	備考
			口径	器高	底径	外面	内面	外面	内面			
1170	陶器 壺	口縁部	(12.2)	(4.8)	—	—	—	灰黄色	灰白色	良好	精良	胴部上位に横沈線 口縁部に白色砂目跡

第138表 SS5出土 滑石製石鍋観察表

遺物番号	器種	部位	法量 (cm)			調整		色調		備考
			口径	器高	底径	外面	内面	外面	内面	
1171	縦耳付石鍋	底部~体部	—	(6.7)	(23.5)	—	—	褐灰色	灰色	耳が4ヶ所付く 外面スス付着

(5) 墓(ST)

今回報告する墓は1基である。

① TAK201301 D 区 ST1(第359図、図版306・307)

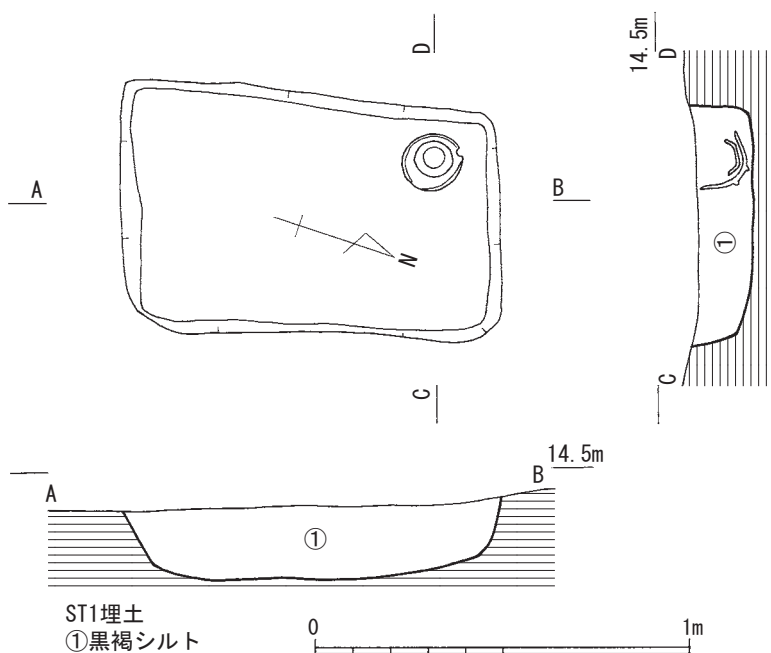
大調査区201301の小調査区D区1872グリッド第3層から検出した。長軸1.0m、短軸0.6mの長方形のプランで深さ0.2mを測る。北西隅の床直上から青磁碗の中に白磁皿が正位の入れ子状で出土した。埋土はしまりのない黒褐色シルトの単層である。



図版306 ST1遺物出土状況(北から)



図版307 ST1 遺物出土状況



第359図 ST1平・断面図(S=1/20)

ST1出土遺物(第360図、第139表、図版308)

1172は完形の白磁皿Ⅸ-1類である。底部は平底で口縁部を除き全面施釉される。口縁部の釉剥ぎの部分には漆と



第360図 ST1出土遺物(S=1/3)

思われる黒色の顔料が付着している。部分的に見られるが口禿げ部分全面に塗布されていたものと思われる。1173は口縁をわずかに欠く龍泉窯系青磁碗Ⅱ類である。外面には鎬蓮弁が施される。



図版308 ST1出土遺物

第139表 ST1出土 磁器観察表

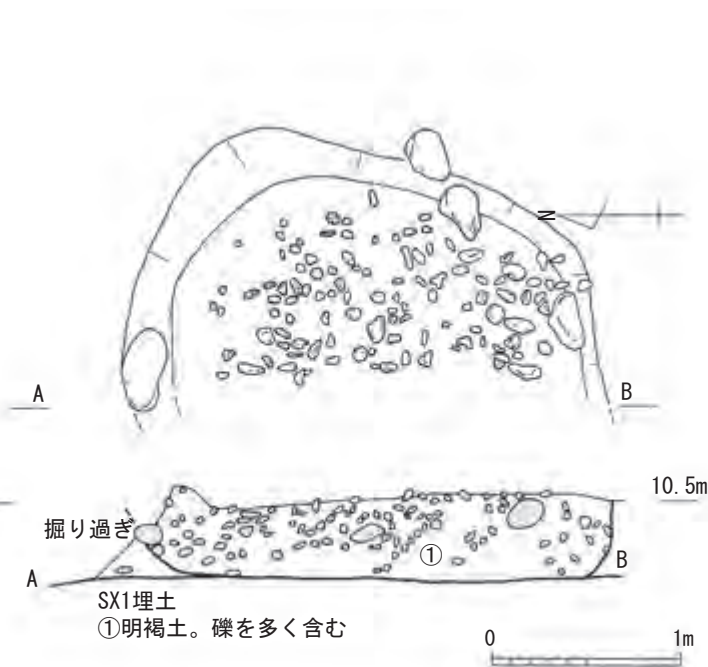
遺物番号	器種	部位	法量 (cm)			調整		色調		焼成	胎土	備考
			口径	器高	底径	外面	内面	外面	内面			
1172	白磁 皿 Ⅱ類	完形	10	1.9	6	—	—	明オリーブ灰色	明オリーブ灰色	良好	—	口禿部分に漆と思われる顔料
1173	龍泉窯系青磁碗 Ⅱ類	完形	16.8	6.7	5.6	—	—	灰オリーブ色	灰オリーブ色	良好	—	口縁部に小さな欠け

### (6) 不明遺構 (SX)

今回報告する不明遺構は1基である。

#### ① TAK201302① SX1 (第361図、図版309・310)

大調査区201302の小調査区①区8260グリッド第3層から検出した。前年度の調査で西側を確認できないまま掘り下げており、全形については不明である。残存規模は長軸3.0m、短軸1.2m、深さ0.4mを測る。埋土は礫が混ざる明褐土層で、扇状地礫層の上に形成された遺構としては珍しく木製品の出土を見た。



第361図 SX1平・断面図(S=1/40)



図版309 SX1検出状況(北から)



図版310 SX1完掘状況(北から)

SX1出土遺物(第362図、第140表、図版311)

1174は桶の側板と思われる板材である。長さ20.7cm、幅4.3cm、厚さ0.8cmを測る。上端内面は蓋受けと思われる斜めの面取りが見られる。上端と下端に木製釘が打たれているが、下端の穴は貫通をしていない。内外面には横位や斜位の切り傷が見られることから、2次的な利用も考えられる。詳細な時期については不明である。



図版311 SX1出土遺物

第362図 SX1出土遺物(S=1/3)

第140表 SX1出土 木製品観察表

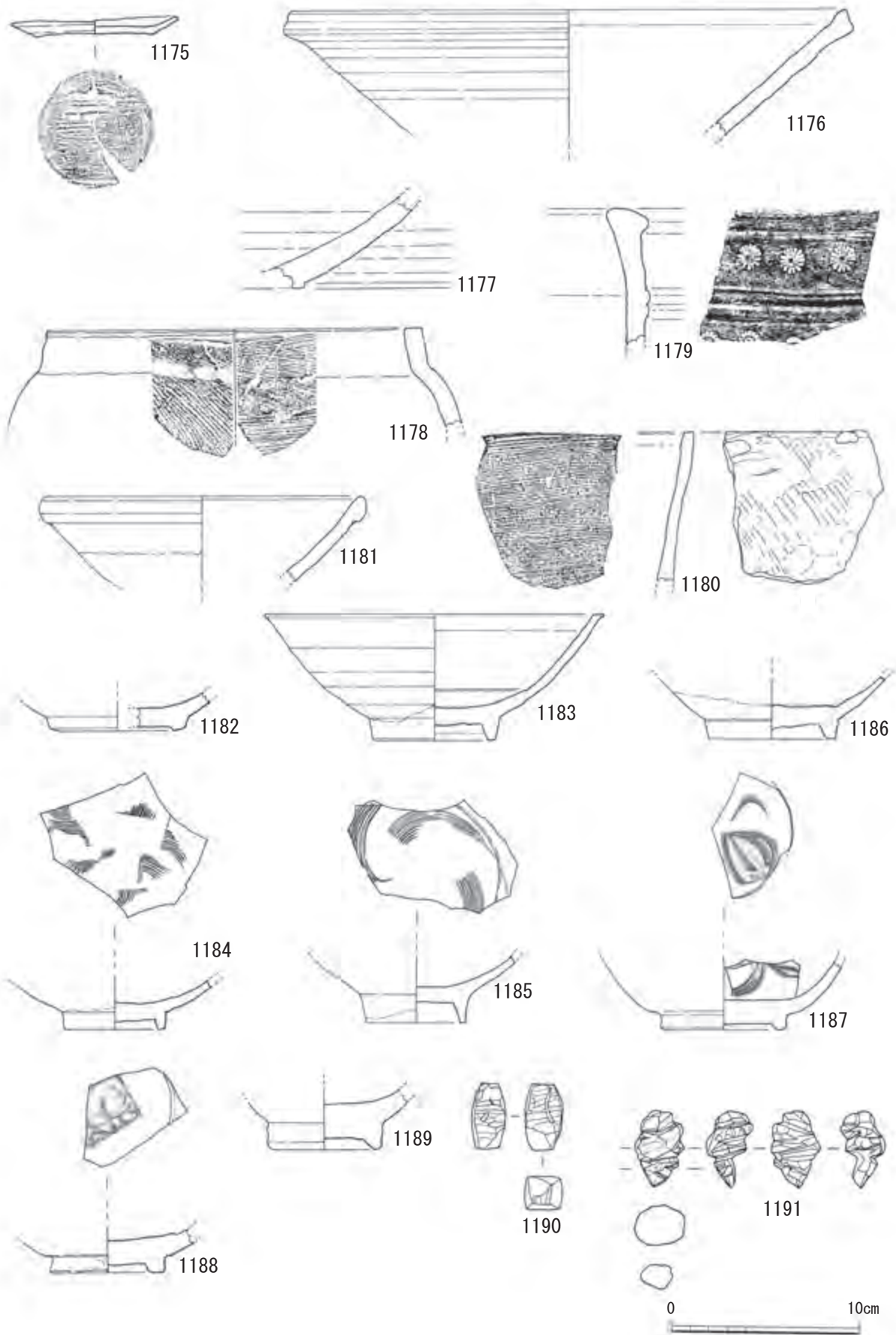
遺物番号	器種	材質	最大長(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	備考
1174	桶の側板か?	杉?	20.7	4.3	0.8	

(7) 包含層出土の遺物

①TAK201301調査区2層 出土遺物(第363図、第141・142表、図版312)

1175は土師器小皿である。底部から外反しながら立ち上がる。口縁部が歪んでおり波を打っている。底部には回転糸切り痕と板状圧痕が残る。13世紀代のものと思われる。1176・1177は東播系捏鉢である。1176は体部からほぼ同じ厚さで斜め方向に伸び口縁部に至る。口縁端部はわずかに肥厚し、内面は上方に引き上げられる。1177は底部片である。内面は使用により平滑になっている。1178は瓦質の風炉口縁部片である。肩部に最大系を持ち口縁部はほぼ直立する。胎土は精良で内外面ともに十分に燻されて濃く変色している。ていねいな作りである。1179は瓦質の火鉢である。胴部から凸帯状の口縁部に至る。口縁下には断面半円形の2条の凸帯が巡り、凸帯の上下にはスタンプによる菊花文が巡る。1180は瓦質の片口である。ロクロによる引き上げは行わずに体部～口縁部まで薄く仕上げている。成形後内外面にハケメを施すが、外面には成形時の指オサエ痕が凹凸となり残る。1181～1186は白磁である。1181は椀Ⅳ類口縁部、1182は椀Ⅳ類底部である。





第363図 TAK 201301調査区 2層出土遺物(S=1/3)



図版312 TAK201301調査区 2層出土遺物

1183は高い高台に嘴状の口縁を持つ椀Ⅴ類である。1184・1185は椀Ⅴ類底部である。見込みに櫛目文が施される。1186は見込みの釉を環状に掻き取る白磁椀Ⅷ類底部である。1187～1189は龍泉窯系青磁である。1187は椀Ⅰ類で内面に片彫りの蓮華文が施される。1188は椀Ⅱ類で見込みに文字と思われるスタンプが見られる。1189は分厚い底部片である。体部に細蓮弁が描かれる椀と思われる。1190は平面形が樽型で断面は方形の滑石製品である。最大厚は中央にあり両端は面取りを行っている。形状から錘の未製品の可能性もある。1191も滑石製品である。親指大の滑石ブロックを刻むことで3～4段の層を作っているが用途については不明である。

第141表 TAK201301調査区2層出土 土器・陶磁器観察表

遺物番号	器種	部位	法量 (cm)			調整		色調		焼成	胎土	出土区 グリッド	備考
			口径	器高	底径	外面	内面	外面	内面				
1175	土師器 皿	底部～口縁部	(8.6)	0.9	6	—	ナデ	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	良好	雲母 褐色粒子 細砂	D区 2278	回転糸切り痕 板状圧痕
1176	東播系 捏鉢	口縁部	(28.8)	(6.7)	—	—	—	灰色	灰色	良好	長石 石英	B区 2480	
1177	東播系 捏鉢	底部	—	(5.0)	—	—	—	灰色	灰色	良好	長石 石英	D区 2076	内面平滑
1178	瓦質 風炉	口縁部	(19.5)	(5.4)	—	ハケメ	ハケメ	灰色	灰色	良好	精良 雲母 長石 石英	D区 2072	
1179	瓦質 火鉢	口縁部	(30)	(7.3)	—	ミガキ	—	黒褐色	にぶい黄褐色	良好	石英 赤色粒子 細砂 長石	D区 2072	
1180	瓦質 片口	口縁部	(23)	(8.0)	—	ハケメ	ハケメ	灰黄褐色	にぶい黄褐色	良好	精良 雲母 角閃石 石英 金雲母	D区 2072	
1181	白磁 椀Ⅳ類	口縁部	(16.6)	(4.5)	—	—	—	浅黄色	浅黄色	良好	微細な黒色粒子	D区 2476	
1182	白磁 椀Ⅳ類	底部	—	(2.0)	(5.8)	—	—	明緑灰色	灰白色	良好	黒色粒子	D区 1874	
1183	白磁 椀Ⅴ類	底部～口縁部	(16.6)	6.5	6.4	—	—	灰白色	灰白色	良好	微細な黒色粒子	D区 2274	
1184	白磁 椀Ⅴ類	底部	—	(2.6)	(5.2)	—	—	灰白色	灰白色	良好	黒色粒子	D区 2474	見込みに櫛目文
1185	白磁 椀Ⅴ類	底部	—	(3.5)	(5.2)	—	—	灰オリーブ色	灰オリーブ色	良好	黒色粒子	D区 1874	見込みに櫛目文
1186	白磁 椀Ⅵ類	底部	—	(3.2)	(6.6)	—	—	灰白色	灰白色	良好	黒色粒子	D区 2476	
1187	龍泉窯系青磁 椀Ⅰ類	底部	—	(3.6)	(6.0)	—	—	褐灰色	褐灰色	良好	—	C区	内面に蓮華文
1188	龍泉窯系青磁 椀Ⅱ類	底部	—	(2.3)	5.8	—	—	灰白色	灰オリーブ色	良好	黒色粒子	D区 1874	見込みに文字スタンプ
1189	龍泉窯系青磁 椀	底部	—	(3.2)	(5.4)	—	—	灰オリーブ色	オリーブ色	良好	—	D区 2274	高台内露胎

第142表 TAK201301調査区2層出土 滑石製品観察表

遺物番号	器種	最大長 (mm)	最大幅 (mm)	最大厚 (mm)	重量 (g)	出土区グリッド	備考
1190	不明製品	35	19.5	17.5	23.3	B区 2680	錘の未製品か
1191	不明製品	41	26	24	25.1	D区 2072	滑石を刻む

② TAK201302調査区2層 出土遺物(第364・365図、第143～148表、図版313・314)

1192は瓦質の片口摺鉢である。内面には横位のハケメが施され摺目は4条確認できる。磨り減りが少ないことから使用された回数は少なかったと思われる。1193は常滑焼大甕の口縁部である。ほぼ垂直に立つ口縁部は端部で折り返された後、凸帯が貼り付けられる。頸部内面には横方向の強いナデが施される。14世紀末～15世紀中頃の所産である(赤羽1977)。1194は白磁皿Ⅵ類である。底部から緩やかに内湾しながら口縁部に至る。1195は白磁小壺の蓋である。壺に挿入する下部は露胎である。1196は白磁水滴である。注口部分が残っている。内面は露胎である。1197は高麗象嵌青磁の瓶底部片である。外面には白土による縦線と2条の圏線が描かれる。内面は露胎で底部から体部下端にかけて強いナデが施される。暈付と高台内面は露胎であるが、粗い砂粒が全面に付着する。1198は土鍋の脚部と思われる棒状の土製品である。胎土は精良であるが微細な砂粒を多く含む。1199・1200はメンコである。1199は白磁皿の底部を利用し高台の輪郭に沿っていねいな打ち欠きを行っている。1200は龍泉窯系青磁椀Ⅱ類口縁部を利用している。口縁端部が打ち欠かれずに残っている。1201は縦耳付き滑石製石鍋の口縁部片である。胴部から緩やかに内湾し口縁部に至る。耳周囲には耳を作り出す際の粗い工具痕が残る。1202は鏝が退化して口縁部が三角形の断面になる滑石製石鍋と思われる。口縁部下に

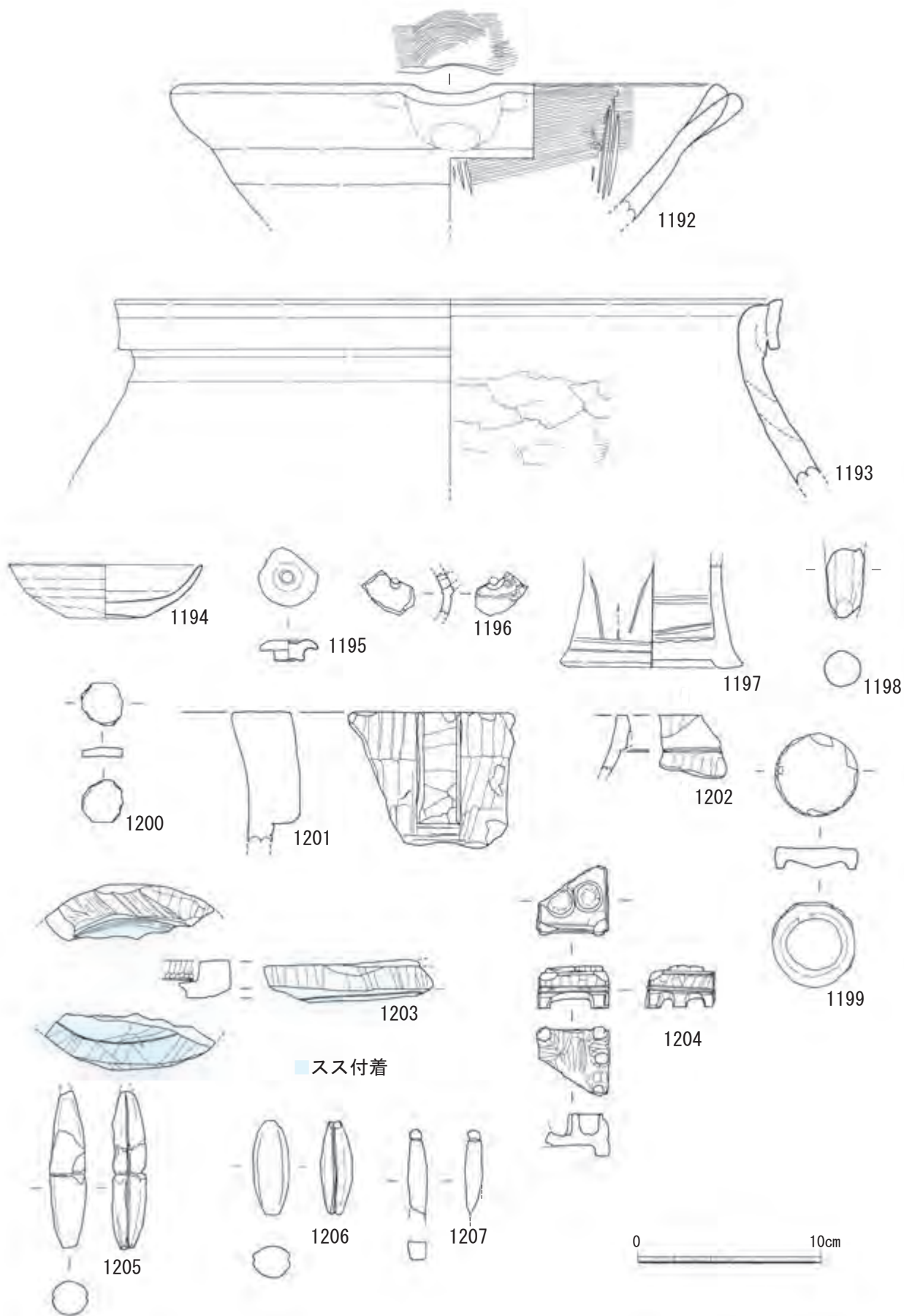
は段を作り鑿を意識した作りをしている。内面が平滑に摩滅していることから石鍋と考えた。1203は深さ1cm程の滑石製浅鍋状製品である。全面に煤が付着していたと思われるが、口縁端部と体部外面は2次加工により表面が削り取られ煤は見られない。1204～1211は滑石製品である。1204は方形の台の上面に円形の凹を作り出し、下面の正面には隅に1本ずつ、側面にはさらに間に1本加え足を作り出す。各面や角を区画する均一な幅と深さの直線も刻まれている。非常にていねいな作りである。写実的な造形で連結したカマドにも見えるが、モデル及び用途は不明である。1205は緑がかった硬質の滑石を素材とする石錘である。紡錘形で最大径を持つ中央に横位の、側面には縦位の刻みが巡る。1206は紡錘形の石錘で側面に縦位の刻みが巡る。1207は中央が僅かに膨らむ方柱形の石錘である。上端部分に横位に刻みを全周させている。下半は欠損している。1208は石鍋の補修具である。推定直径が7cmほどの円盤状を呈する。ほぼ1/4を欠損しているが、中央部分に当たる箇所に突起の存在が見られることから石鍋の補修具と考えた。器壁部端部には直径5mmほどの小孔がある。1209は面取りが見られる石鍋の加工素材である。上端を面取りしている。上端の曲線から石鍋底部の加工品と思われる。1210は縦耳付き石鍋口縁部の加工素材である。上面と左側面に切断痕がある。上部にある小孔は表面と変色が同じであることから石鍋時にすでにあったものと思われる。1211は鑿付き石鍋口縁部の加工素材である。鑿の先端を削り取っているが外縁の割れ面には切断痕や面取り痕は見られない。

第143表 TAK201302調査区2層出土 土器・陶磁器観察表

遺物番号	器種	部位	法量(cm)			調整		色調		焼成	胎土	出土区 グリッド	備考
			口径	器高	底径	外面	内面	外面	内面				
1192	瓦質 摺鉢	口縁部	(58.8)	(7.3)	—	—	ハケメ	灰黄褐色	灰黄褐色	良好	長石 石英	⑩区 0674	4条の摺目 片口
1193	常滑 甕	口縁部～頸部	(36)	(9.0)	—	—	ナデ	褐灰色	褐灰色	良好	長石 石英 雲母	⑫区 8462	
1194	白磁 皿 VI類	底部～口縁部	(10.4)	2.9	(4.0)	—	—	灰白色	灰白色	良好	黒色粒子	⑦区 9664	
1195	白磁 小壺	蓋	幅3.2	厚1.1	長3.2	—	—	灰白色	灰白色	良好	—	③区 8668	下部は露胎
1196	白磁 水滴	注口	—	(2.5)	—	—	—	灰白色	灰白色	良好	黒色粒子	⑧区 9268	内面は露胎
1197	高麗青磁 瓶	底部	—	(5.6)	(9.8)	ナデ	—	明緑灰色	灰白色	良好	精良	⑩区 0474	外面に白土象嵌

第144表 TAK201302調査区2層出土 土製品観察表

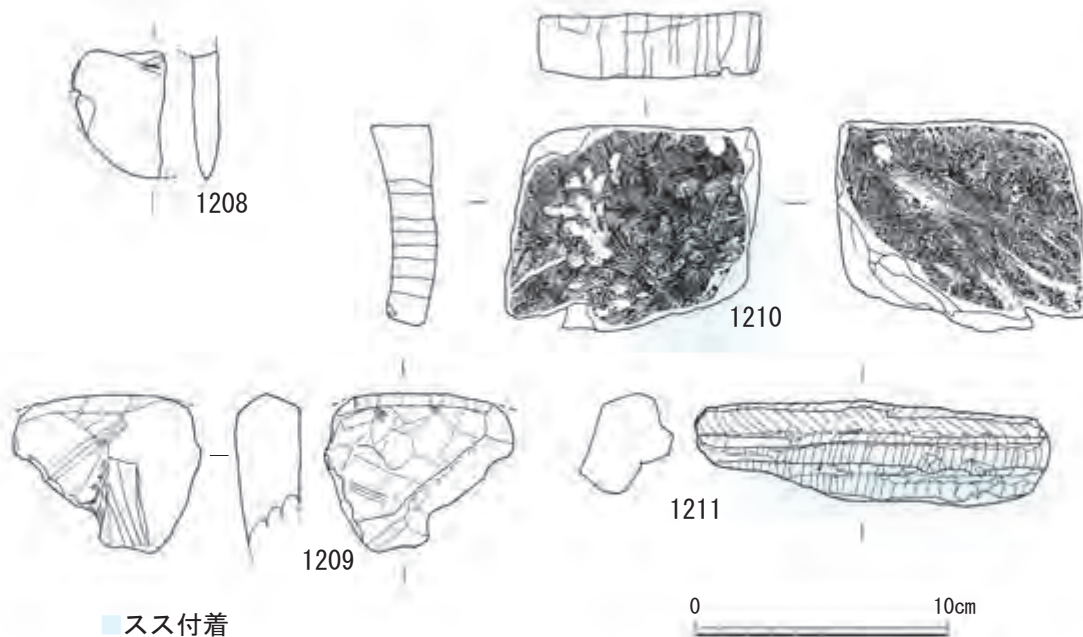
遺物番号	最大長(mm)	種類	最大幅(mm)	最大厚(mm)	重量(g)	色調	焼成	胎土	出土区 グリッド	備考
1198	(3.7)	土鍋の脚?	(2.0)	(1.9)	13.23	灰白色	良好	精良	②区 8664	
1199	45	メンコ	45	12	28.8	灰白色	良好	雲母 褐色粒子	②区 8664	
1200	23	メンコ	22	5	3.6	明緑灰色	良好	—	⑪区 1476	



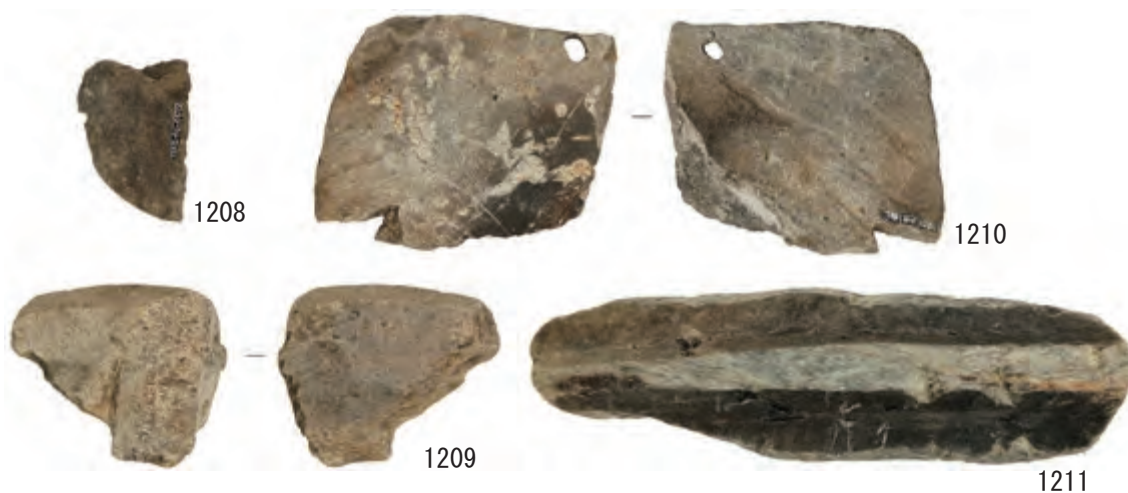
第364図 TAK201302調査区 2層出土遺物-1(S=1/3)



図版313 TAK201302調査区 2層出土遺物-1



第365図 TAK201302調査区 2層出土遺物-2(S=1/3)



図版314 TAK201302調査区 2層出土遺物-2

第145表 TAK201302調査区2層出土 滑石製石鍋観察表

遺物番号	器種	部位	法量(cm)			調整		色調		出土区グリッド	備考
			口径	器高	底径	外面	内面	外面	内面		
1201	縦耳付石鍋	口縁部	(30)	(7.0)	—	—	—	灰白色	灰白色	②区 8664	粗い工具痕が耳周囲に残る
1202	鐔付石鍋	口縁部	(16)	(3)	—	—	—	灰色	灰色	⑫区 8058	鐔の陵が欠損
1203	浅鍋状製品	底部~口縁部	(17)	2	(17)	—	—	青灰色	青灰色	⑨区 0074	深さ1cm程の浅い器

第146表 TAK201302調査区2層出土 滑石製品観察表

遺物番号	器種	最大長(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	重量(g)	出土区グリッド	備考
1204	用途不明品	37.5	39	23	35.2	⑧区 9068	
1205	石錘	85	19	19	40	⑩区 4074・0476	
1206	石錘	51	20	17	25	⑨区 0070	紡錘形で側面に縦位の刻みが巡る
1207	石錘	47	9	10	5	②区 8664	

第147表 TAK201302調査区2層出土 滑石製石鍋補修具観察表

遺物番号	器壁部(mm)			挿入部(mm)			重量(g)	出土区グリッド	備考
	最大長	最大幅	最大厚	最大長	最大幅	最大厚(高)			
1208	52	38	11	—	—	—	30	⑫区 8262	直径5mmほどの小孔がある

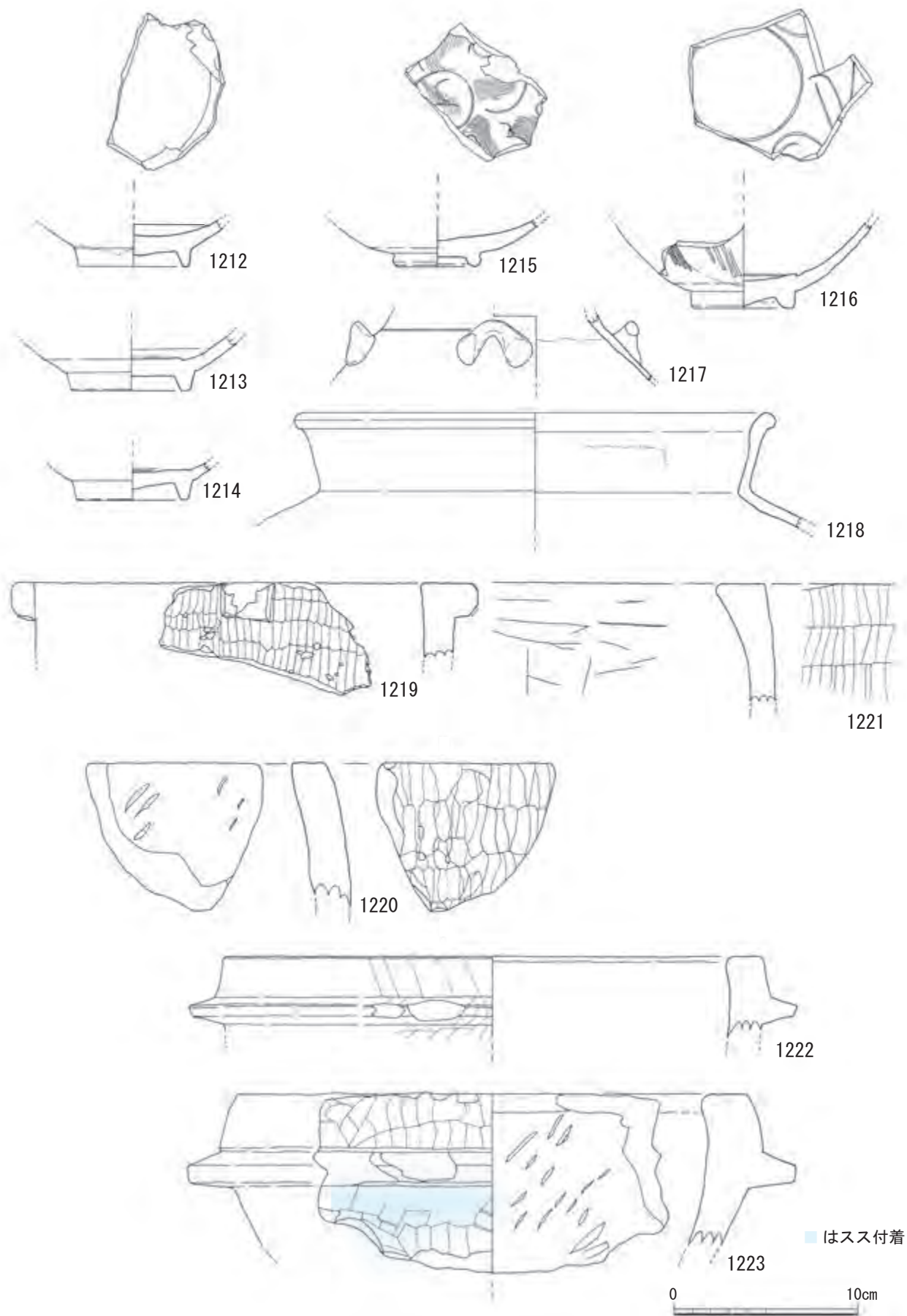
第148表 TAK201302調査区2層出土 滑石製石鍋加工素材観察表

遺物番号	最大長(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	重量(g)	出土区グリッド	備考
1209	63	74	26	130	⑤区 9264	灰白色の良質な石材 面取り
1210	118	82	21	375	③区 8666	切断痕あり
1211	139	40	32	259	⑫区 8464・8462	削り痕あり

③ TAK201303調査区2層 出土遺物(第366・367図、第149～152表、図版315・316)

1212は白磁碗Ⅴ類底部である。1213・1214は白磁碗Ⅶ類底部である。1213は内面の釉薬の掻き取りにロクロの回転を使っている。1214の掻き取りは回転を使わずに行っている。1215は龍泉窯系青磁碗Ⅰ類である。内面には片彫文と櫛目文が施される。1216は同安窯系青磁碗Ⅰ類である。外面に幅広の櫛目文、内面には篋による花文が施される。高台内面は兜巾状を呈する。1217は褐釉が掛かる耳壺Ⅴ類の肩部である。内面の釉は頸より上位に掛かる。1218は耳壺Ⅲ類の口縁部である。砂粒を多く含む胎土に緑褐色の釉薬が掛かるが、内面の頸部中位から下は露胎である。1219～1223は滑石製石鍋片である。1219は灰白色で軟質の滑石を使った耳が付くタイプの口縁部である。胴部からほぼ直立し口縁部に至る。口縁端部に付く耳は小さく横に長い。1220は胴部から僅かに内湾する口縁部である。硬質の緑灰色の滑石を素材にしているが不純物が多い。1221は灰白色で軟質の滑石を使った耳が付くタイプの口縁部である。胴部から僅かに内湾し口縁部に至る。内面に横位の工具痕が残る。1222は鐔が付くタイプの口縁部である。胴部から内湾しながら口縁部に至る。1223も鐔が付くタイプで口縁部は内湾し肥厚している。内面には斜位の工具痕が多く残る。「す」が全面にはいる石材から作られている。1224は内湾しながら立ち上がる底部片である。内面には横位の工具痕が残り、外面には煤が全面に付着する。1225は底部片である。内面には斜位の工具痕が残り、外面には煤が全面に付着する。1226・1227は滑石製品である。1226は厚みのあるブロック状の石塊を素材とし、1.2～1.3cmに割り付けて円錐状に凹を形成する。完形の凹は1ヶ所のみ確認できるが、左右にも同様の面取りが見られることから、連続した抉りがあったと思われる。用途は不明である。1227は棒状の滑石製品である。1228～1232は加工痕が残る石鍋片である。1228は鐔付きの口縁部である。鐔は張り出し端部の作り出しはシャープである。口縁端部に複数の刻みが見られることから再利用目的の加工痕と判断した。1229は鐔付きの口縁部である。全体に削り面取りを行う。刻み痕が複数見られる。1230は体部片である。切断痕は見られず破片の利用である。鍋内面にあたる面に3ヶ所の穿孔が残る。上方にある1ヶ所は欠損してい



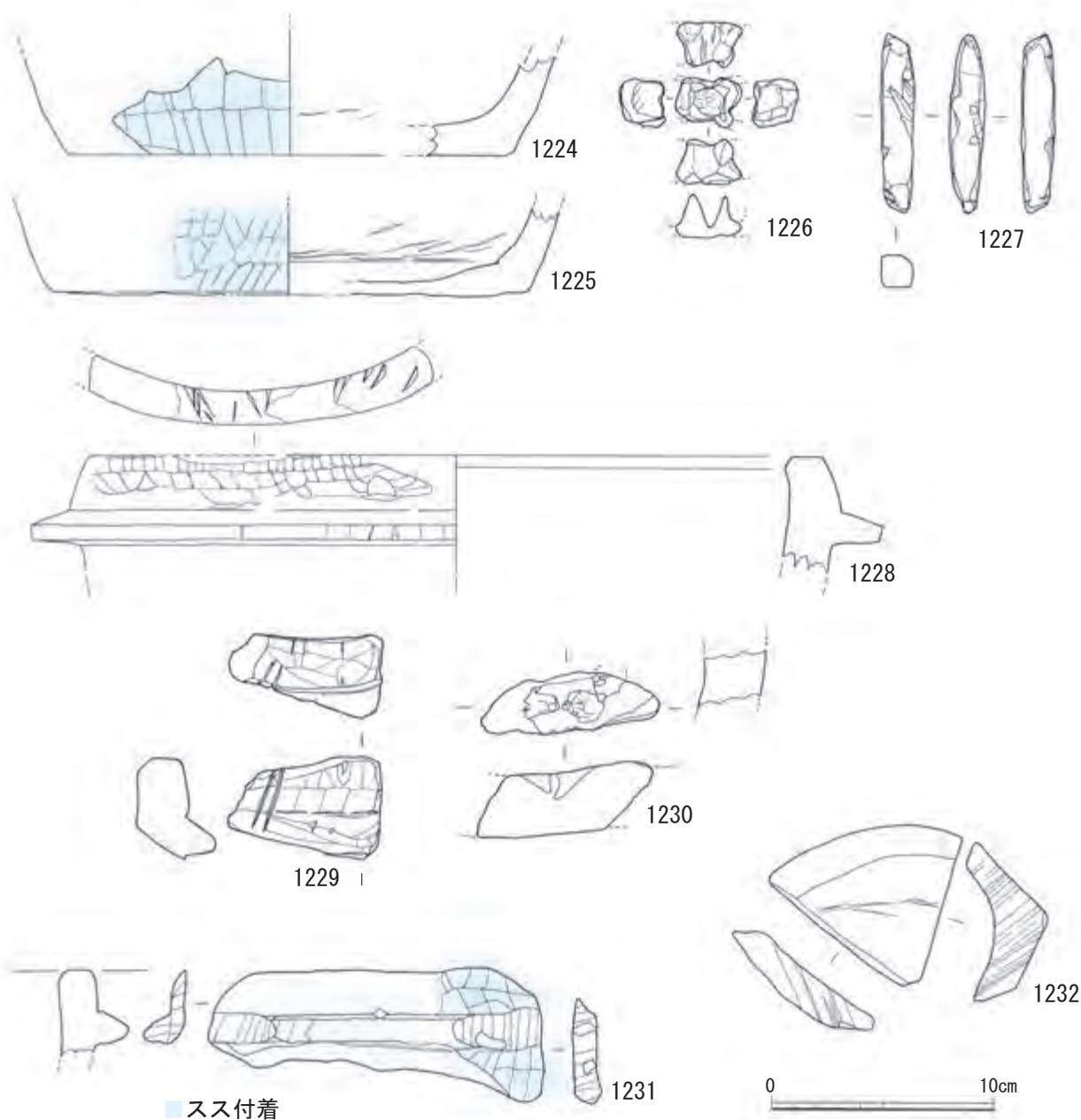


第366図 TAK201303調査区 2層出土遺物-1(S=1/3)

る。残りの2ヶ所は近い位置にあるが貫通はしていない。1231は鑿付きの口縁部である。両端および鑿部に切断痕が残る。口縁部外面には浅く削った箇所がありその部分は石鍋使用時の煤が消えている。1232は底部を利用している。両端に切断痕が残る。



図版315 TAK201303調査区 2層 出土遺物-1



第367図 TAK201303調査区 2層出土遺物-2(S=1/3)

第149表 TAK201303調査区2層出土 陶磁器観察表

遺物番号	器種	部位	法量(cm)			調整		色調		焼成	胎土	出土区グリッド	備考
			口径	器高	底径	外面	内面	外面	内面				
1212	白磁 椀 V類	底部	-	(2.5)	(6.0)	-	-	灰白色	灰白色	良好	黒色粒子	A区 3272・3274	
1213	貿易白磁 椀 VII類	底部	-	(3)	7.4	-	-	灰白色	灰白色	良好	黒色粒子	A区 8272	
1214	白磁 椀 VII類	底部	-	(2.0)	5.8	-	-	灰白色	灰白色	良好	黒色粒子	A区 8272・8274	
1215	龍泉窯系 青磁 椀 I類	底部	-	(2.7)	(4.3)	-	-	オリーブ灰色	オリーブ灰色	良好	黒色粒子	A区 8072	
1216	同安窯系青磁 椀 I類	底部	-	(4.5)	5.4	-	-	灰白色	灰白色	良好	黒色粒子	A区 8272・8472	
1217	耳壺 V類	肩部	-	(3.4)	-	-	-	灰黄色	灰黄色	良好	白色粒子 長石	A区 8474	褐釉がかかる
1218	耳壺 III類	口縁部	(24.7)	(6.3)	-	-	-	灰オリーブ色	灰オリーブ色	良好	長石 黒色粒子	A区 8272	内面の釉は口縁下まで



図版316 TAK201303調査区 2層出土遺物-2

第150表 TAK201303調査区2層出土 滑石製石鍋観察表

遺物番号	器種	部位	法量(cm)			調整		色調		出土区グリッド	備考
			口径	器高	底径	外面	内面	外面	内面		
1219	縦耳付石鍋	口縁部	(22.6)	(4.0)	—	—	—	灰白色	灰白色	A区 8274	耳は小さく横に長い
1220	縦耳付石鍋	口縁部	(40)	(7.7)	—	—	斜位の工具痕	オリーブ灰色	オリーブ灰色	A区 8472・8474	不純物が多い
1221	縦耳付石鍋	口縁部	(46)	(6.5)	—	—	横位のケズリ	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	A区 8274	
1222	鐙付石鍋	口縁部	(29)	(4.0)	—	—	—	褐灰色	赤灰色	C区 4980	
1223	鐙付石鍋	口縁部	(27)	(9.7)	—	—	—	灰色	灰色	A区 8474	内面に斜位の工具痕「す」が多く入る
1224	石鍋	底部	—	(4.3)	(19)	—	—	灰色	灰色	A区 8472・8474	
1225	石鍋	底部	—	(3.8)	(21)	—	—	灰白色	灰白色	A区 8272・8274	

第151表 TAK201303調査区2層出土 滑石製品観察表

遺物番号	器種	最大長(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	重量(g)	出土区グリッド	備考
1226	不明製品	22	29	20	14.56	A区 8274	左右に連結した挟りがあったと思われる
1227	棒状製品	80	14	15	30	A区 8472	両端に浅い挟り

第152表 TAK201303調査区2層出土 滑石製石鍋加工素材観察表

遺物番号	最大長(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	重量(g)	出土区グリッド	備考
1228	口径(330)	高さ(50)	—	395	D区 2474	刻み痕あり
1229	43	70	23	125	A区 8272	面取り、刻み痕あり
1230	65	23	28	85	A区 8492	3ヶ所の穿孔
1231	59	148	30	285	A区 8472	切断痕、削り痕あり
1232	78	86	20	195	A区 8472	切断痕あり

④TAK201304調査区2層 出土遺物(第368図、第153～155表、図版317)

1233は土師器小皿である。底部から僅かに内湾しながら立ち上がる。内底部には体部との境に段ができる。切り離しは回転糸切りである。13世紀前半の所産か。1234は青磁椀底部である。灰褐色の粗い胎土にオリーブ灰の釉が掛かる。見込みには卍とそれから四方に伸びる草花文のスタンプが押される。高台内は露胎である。15世紀代の龍泉窯系青磁である。1235は朝鮮産と思われる陶器椀底部である。低い高台で全面施釉後畳付の釉を掻き取る。見込みに5ヶ所と畳付に砂目が見られる。釉薬は白濁し厚く掛かる。1236は明の染付椀である。低く広い高台から膨らみを持ち立ち上がり端反りの口縁部に至る。体部外面には牡丹唐草文が、内面口縁部には四方襷文が、見込みには風景が、高台内には福字が描かれる。器肉は薄く呉須の発色も良い。畳付を除き全面に釉が掛かる。14世紀末～15世紀中頃の所産である。1237は石鍋口縁部である。鏝は退化し断面三角形の肥厚した口縁となるが断面三角形の稜はしっかりとしている。1238は石鍋の底部片である。外面には煤が付着する。1239は鏝付き石鍋口縁部の加工素材である。鏝部の突起の先端が削り取られ、口縁端部には削り痕が見られる。

第153表 TAK201304調査区2層出土 土器・陶磁器観察表

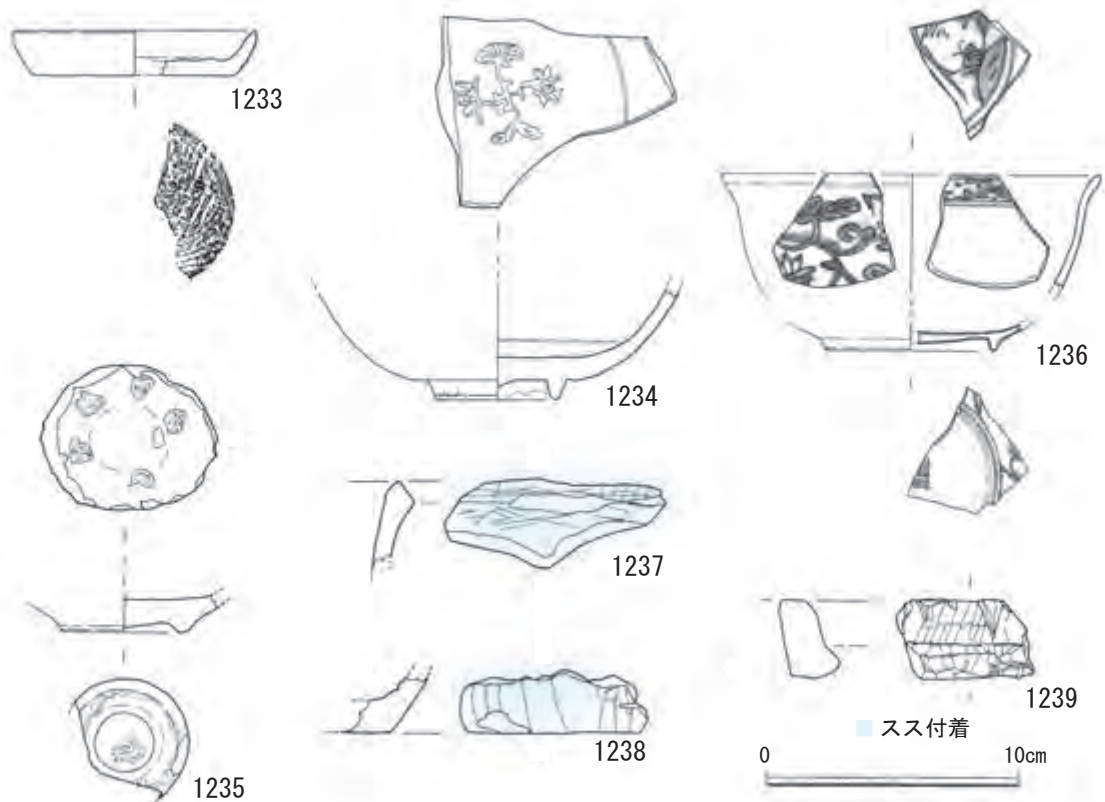
遺物番号	器種	部位	法量(cm)			調整		色調		焼成	胎土	出土区グリッド	備考
			口径	器高	底径	外面	内面	外面	内面				
1233	土師器 皿	底部～口縁部	(9.6)	1.8	(8.0)	—	ナデ	にぶい赤褐色	にぶい赤褐色	良好	精良 長石 石英	3482	回転糸切り
1234	龍泉窯系青磁 椀	底部	—	(3.4)	5	—	—	明オリーブ灰色	明オリーブ灰色	良好	—	4486	
1235	陶器 椀	底部	—	(1.5)	(5.2)	—	—	灰白色	灰白色	良好	長石を含む	4888	
1236	染付椀 B2群	口縁部・底部	(14.8)	(7.0)	(6.6)	—	—	灰白色	灰白色	良好	—	4888	

第154表 TAK201304調査区2層出土 滑石製石鍋観察表

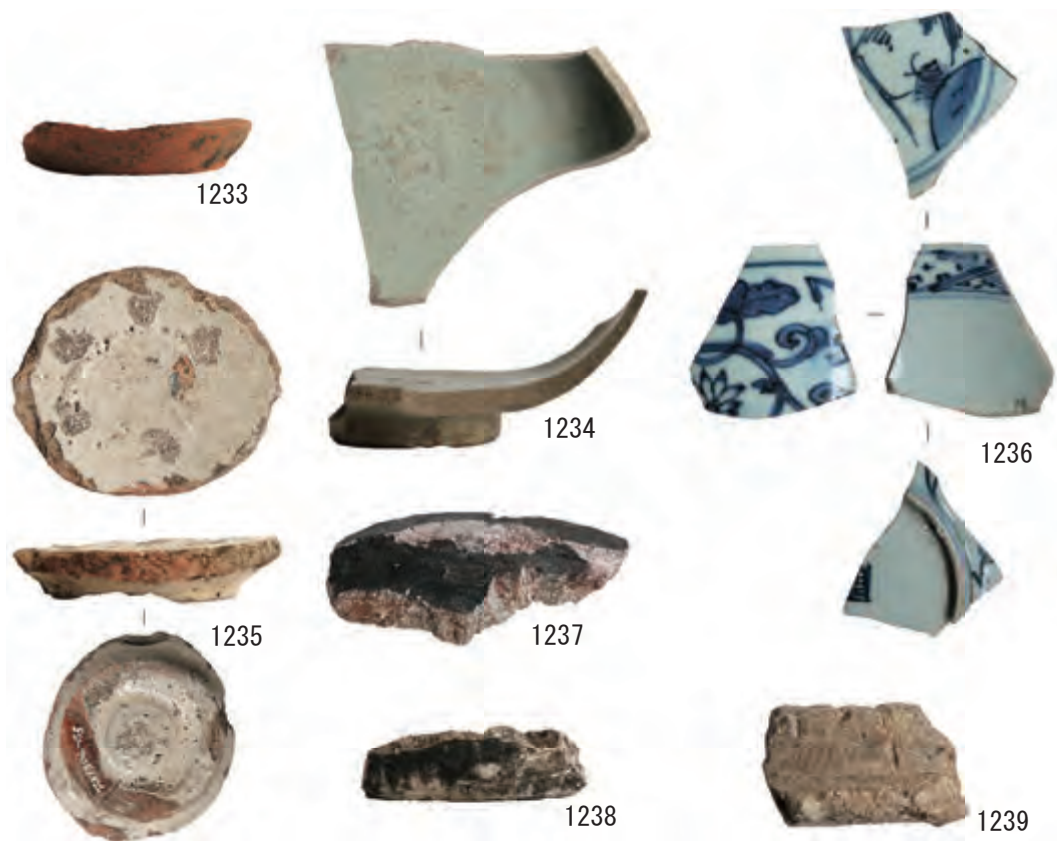
遺物番号	器種	部位	法量(cm)			調整		色調		出土区グリッド	備考
			口径	器高	底径	外面	内面	外面	内面		
1237	石鍋	口縁部	—	(3.5)	—	—	—	黒褐色	褐灰色	4668	
1238	石鍋	底部	—	(2.2)	(20)	—	—	灰色	灰色	4888	

第155表 TAK201303調査区2層出土 滑石製石鍋加工素材観察表

遺物番号	最大長(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	重量(g)	出土区グリッド	備考
1239	31	54	20	52.8	4888	削り痕あり



第368図 TAK201304調査区 2層出土遺物(S=1/3)



図版317 TAK201304調査区 2層出土遺物

⑤TAK201301調査区3層 出土遺物(第369図、第156～158表、図版318)

1240は土師器小皿である。底部から斜め方向に立ち上がり口縁部に至る。切り離しは右回転糸切りである。1241は東播系捏鉢口縁部である。体部は薄く引き上げられた後、口縁部は緩やかに肥厚し端部を斜めに面取りをすることで断面が三角形を呈する。13世紀前半の所産と思われる。1242は龍泉窯系青磁椀Ⅰ類で無文の椀である。1243は白磁椀底部片である。厚くがっしりとした高台から僅かに膨らみ斜め方向へ伸びる体部である。外面には縦方向の櫛目文が描かれる。畳付と高台内は露胎である。1244は高麗の象嵌青磁である。内面には3条の白土による圏線が、外面には1条の白土による圏線の下に白土による花文が描かれる。1245は陶器壺の底部片である。平底の高台から僅かに内湾しながら体部は立ち上がる。胎土に砂粒を多く含み、外面は自然釉が厚く掛かり内面は露胎である。ロクロ回転方向は右である。1246は鍔付き石鍋のミニチュアである。鍔径は7.4cmを測る。鍔の稜は丸みを持ち鋭さがない。1247は滑石製の錘である。平面形は楕円形で断面は方形を呈する。短軸方向の中心に1条、側面の長軸方向に1条浅い刻みが全周する。

第156表 TAK201301調査区3層出土 土器・陶磁器観察表

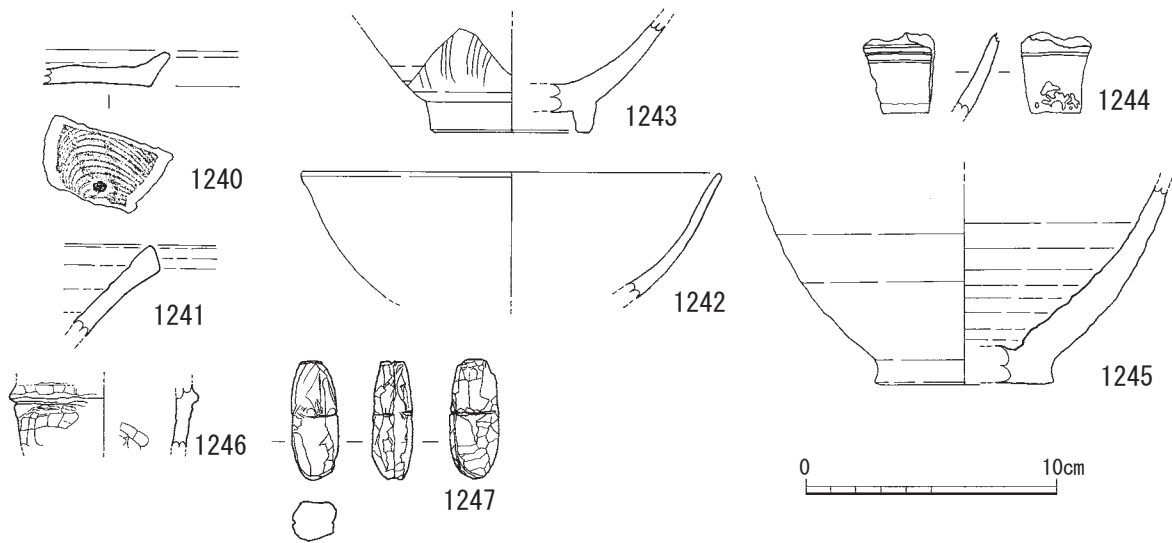
遺物番号	器種	部位	法量(cm)			調整		色調		焼成	胎土	出土区グリッド	備考
			口径	器高	底径	外面	内面	外面	内面				
1240	土師器 小皿	底部～口縁部	(8.4)	(1.3)	(7.4)	—	—	明褐色	明褐色	良好	—	B区 2280	右回転糸切り
1241	東播系 捏鉢	口縁部	(2.4)	(3.6)	—	—	—	黄灰色	黄灰色	良好	長石	C区 3282	
1242	龍泉窯系青磁 椀	口縁部	(16.3)	(5.0)	—	—	—	にぶい黄色	にぶい黄色	良好	—	A区 1478	無文
1243	白磁 椀	底部	—	(4.4)	(6.2)	—	—	灰白色	灰白色	良好	微細な黒色粒子	B区 2280	
1244	高麗青磁 椀	口縁部	(12.8)	(3.1)	—	—	—	褐灰色	褐灰色	良好	微細な気泡	C区 3082	
1245	陶器 壺	底部	—	(7.8)	(6.4)	—	—	灰白色	灰白色	良好	長石 石英 赤色粒子 角閃石	A区 1676	

第157表 TAK201301調査区3層出土 滑石製ミニチュア石鍋観察表

遺物番号	器種	部位	法量(cm)			重量(g)	調整		色調		出土区グリッド	備考
			鍔径	器高	底径		外面	内面	外面	内面		
1246	鍔付石鍋	体部	(7.4)	(2.5)	—	9.1	—	—	灰白色	灰白色	C区 3284	

第158表 TAK201301調査区3層出土 滑石製品観察表

遺物番号	器種	最大長(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	重量(g)	出土区グリッド	備考
1247	石錘	47	15	17	20	A区 1478	



第369図 TAK201301調査区 3層出土遺物(S=1/3)

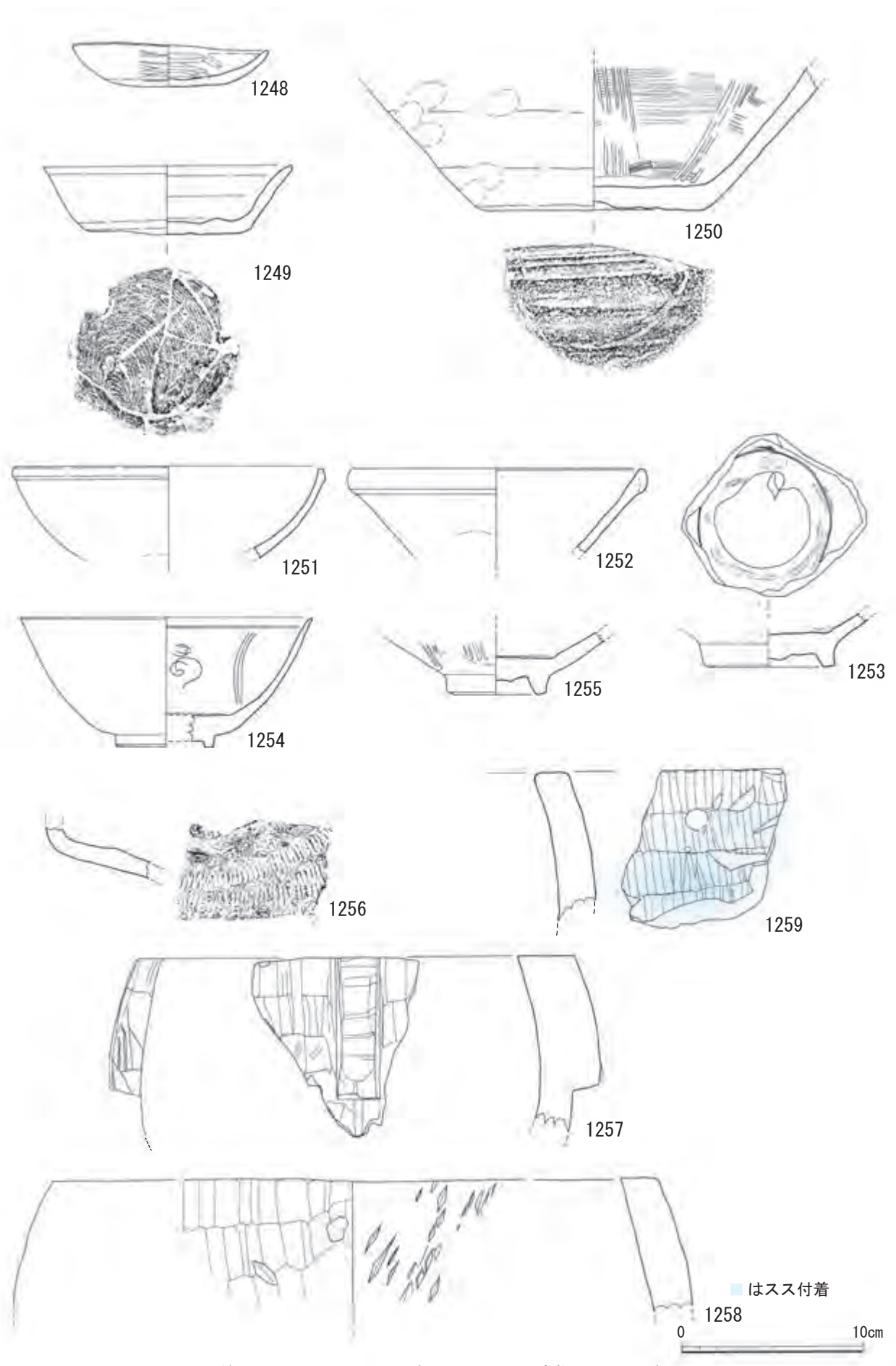


図版318 TAK201301調査区 3層出土遺物



⑥TAK201302調査区3層 出土遺物(第370・371図、第159～163表、図版319・320)

1248は瓦器皿である。立ち上がりから緩やかに内湾しながら口縁部に至る。ヘラ切り離した後、底部外周をヘラケズリで調整する。内外面ともに横位のミガキが見られる。砂粒を含むが精良な胎土で焼成も良好である。11世紀後半の所産と思われる。1249は土師器杯である。見込みにはナデによる凹凸が見られる。体部はほぼ直線で立ち上がり、口縁部で僅かに外反する。切り離しは右回転の糸切りで切り離し後の調整は行われていない。13世紀前半のものと思われる。1250は土師質の摺鉢である。体部外面には成形時の指オサエ痕が残るが、内面は横位のハケメが施される。摺目は5条の単位で、復元すると10単位程度になる。内面には煤の付着が見られることから、摺鉢以外の用途にも用いられたと思われる。1251は白磁椀Ⅱ類の口縁部～体部片である。器厚が薄く緩やかに内湾する体部に小さな玉縁の口縁部が付く。外面の体部下半は露胎である。1252は白磁椀Ⅳ類の口縁部～体部片である。玉縁の口縁部は断面に折り返し痕が残る。1253は白磁椀Ⅷ類の底部片である。見込みの釉を掻き取った輪状の露胎部分には融着を防ぐための白土が付着する。外面の体部下半は露胎である。1254は龍泉窯系青磁椀Ⅰ類の口縁部～底部片である。外面は無文である。内面は口縁部に1条の沈線が巡り、体部は3条の片刃で分割され花文か飛雲文と思われる文様が描かれる。見込みと体部境には段を持ち見込みは無文である。1255は同安窯系青磁椀底部である。外面は体部下半が露胎で幅広の縦の櫛目文が施される。内面見込みと体部の境に段を持つ。1256は貿易陶器甕の肩部片である。水平に近い傾きである。内面は当て具痕をナデ消し外面には平行タタキ痕が見られる。1257～1260は縦耳が付く石鍋である。1257は体部から口縁部へ向けて緩やかに内湾する。外面下半には煤の付着が見られる。縦長の耳が作り出されている。1258は体部から口縁部にかけて緩やかに内湾する。内面には斜位の粗い工具痕が残る。1259・1260は煤痕も残る。1261～1263は縦耳が付くタイプで、穿孔がある口縁部片である。いずれも穿孔は器表の変色と同じ色であることから使用時のものと思われる。1261は体部から口縁部にかけて緩やかに内湾する。外面には幅の狭い縦位のケズリが見られる。穿孔は径0.5cmである。1262の穿孔は径0.8cmである。外面に煤の付着が見られる。1263は2ヶ所の穿孔があり、径0.4cmの小さいほうは貫通しておらず径0.7cmの大きいほうには浅い溝が切られている。この溝は、破損した石鍋を紐状の物で接合するための溝と考えたが、2次加工での作業痕の可能性もある。1264・1265はミニチュアの石鍋である。1264は底部～口縁部までが残存しており全形を復元することができた。底部から緩やかに内湾しながら立ち上がり口縁部に至る。最大径は胴部中位にある。口縁部の残存が1/4未満のために縦耳の有無については不明である。工具による調整痕の方向は不規則である。1265は鐔付きで、体部から緩やかに湾曲し口縁部に至る。径が最大になる位置に鐔部が作り出される。鐔は断面が台形で大きく張り出し、稜はしっかりと作られている。1266～1271は滑石製品である。1266はスタンプの未製品と思われる。小さなケズリで成形を行っている。煤が付着した面が残ることから、石鍋の加工品と思われる。1267は硯である。硯面は陸部と海部を意識して作り出しているが、粗いケズリ痕が残る。長軸方向に湾曲していることから、石鍋の加工品と思われる。1268～1270は石錘である。いずれも紡錘型で、長軸方向に溝が1条巡る。1268は灰白色の軟質の滑石を使用している。1269は断面が方形に近く、全面に「す」が入る。両端が欠損している。1270は灰緑色で硬質の滑石を素材にしている。1271は先端が欠けており全形は不明であるが、柄に皿状の凹が付く杓子のような形状であった可能性がある。1272～1274は石鍋の加工未製品である。1272の素材は、体部から口縁部にかけて直線的に開



第370図 TAK201302調査区 3層出土遺物-1(S=1/3)



図版319 TAK201302調査区 3層出土遺物-1



第371図 TAK201302調査区 3層出土遺物-2(S=1/3)



図版320 TAK201302調査区 3層出土遺物-2

き口縁部近くに断面台形の短い鏝を作り出す石鍋である。表面のほぼ全面に煤が付着する。加工は左側縁に見られる。内側から直線的に深い切れ込みを入れた後折り取りを行っている。**1273**は両面に溝が確認できる体部片である。外面には横位に2条(内1条は断面中に)、裏面は断面にかかり1条が切られる。断面と重なる溝が複数あることから、これらの溝は折り取りを行うための溝と思われる。**1274**は鏝付き石鍋の鏝部分を利用し全面にケズリが行われている。

第159表 TAK201302調査区3層出土 土器・陶磁器観察表

遺物番号	器種	部位	法量 (cm)			調整		色調		焼成	胎土	出土区グリッド	備考
			口径	器高	底径	外面	内面	外面	内面				
1248	瓦器 皿	底部～口縁部	10.55	2.4	7.1	ミガキ	ミガキ	灰白色	灰白色	良好	精良 黒色粒子	⑥区 9862	ヘラ切りヘラケズリ
1249	土師器 杯	底部～口縁部	13.6	3.8	8.6	—	ナデ	橙色	橙褐色	良好	長石 雲母 赤色粒子	⑫区	右回転系切り
1250	土師質 摺鉢	底部～体部	—	(7.8)	(12)	—	ハケメ	灰白色	灰白色	良好	精良 赤色粒子	⑩区 0674	板状圧痕 内面にスス
1251	白磁 碗 II類	口縁部	(16.6)	(5)	—	—	—	灰白色	灰白色	良好	黒色粒子	⑦区 9466	体部下半露胎
1252	白磁 碗 IV類	口縁部～体部	(16.0)	(4.7)	—	—	—	灰白色	灰白色	良好	黒色粒子	⑨区 0076	口縁断面に折り返し痕
1253	白磁 碗 VII類	底部	—	(3.0)	6.2	—	—	灰白色	灰白色	良好	黒色粒子	⑨区 0072	
1254	龍泉窯系 青磁碗 I類	口縁部～底部	(16.0)	7	5.2	—	—	灰オリブ色	灰オリブ色	良好	黒色粒子	⑨区 0072・0070	
1255	同安窯系青磁 碗 III類	底部	—	(3.4)	5.4	—	—	灰白色	灰オリブ色	良好	長石	⑫区 8264	
1256	貿易陶磁 甕	肩部	—	(2.8)	—	平行タタキ	ナデ消し	灰褐色	灰褐色	良好	精良	⑫区 8462	IV類?

第160表 TAK201302調査区3層出土 滑石製石鍋観察表

遺物番号	器種	部位	法量 (cm)			調整		色調		出土区グリッド	備考
			口径	器高	底径	外面	内面	外面	内面		
1257	縦耳付石鍋	口縁部	(21.0)	(9.7)	—	—	—	明褐色	褐色	⑨区 0074	外面にスス
1258	縦耳付石鍋	口縁部	(33.2)	(7.3)	—	—	—	灰白色	灰白色	③区 8868	
1259	縦耳付石鍋	口縁部	(38)	(8.1)	—	幅の狭い縦位のケズリ	—	灰白色	灰白色	⑨区 0074	外面にスス
1260	縦耳付石鍋	口縁部	(40)	(5.4)	—	幅の狭い縦位のケズリ	—	灰白色	灰色	⑨区 0074	外面にスス
1261	縦耳付石鍋	口縁部	(40)	(5.5)	—	幅の狭い縦位のケズリ	斜位の工具痕	灰色	灰色	⑨区 0070	使用時のものと思われる口縁下に穿孔有
1262	縦耳付石鍋	口縁部	(26)	(4.0)	—	—	—	灰色	灰色	⑨区 0068	穿孔
1263	縦耳付石鍋	口縁部	(40)	(4.5)	—	—	—	灰白色	灰白色	③区 8866	

第161表 TAK201302調査区3層出土 滑石製ミニチュア石鍋観察表

遺物番号	器種	部位	法量 (cm)			重量 (g)	調整		色調		出土区グリッド	備考
			口径	器高	底径		外面	内面	外面	内面		
1264	石鍋	口縁部～底部	(6.1)	3.3	(4.5)	25	—	—	黒褐色	褐色	⑨区 0072	
1265	鏝付き石鍋	口縁部～体部	(9.2)	(2.8)	—	28.7	—	—	灰色	灰色	⑫区 8264	ていねいな作り

第162表 TAK201302調査区3層出土 滑石製品観察表

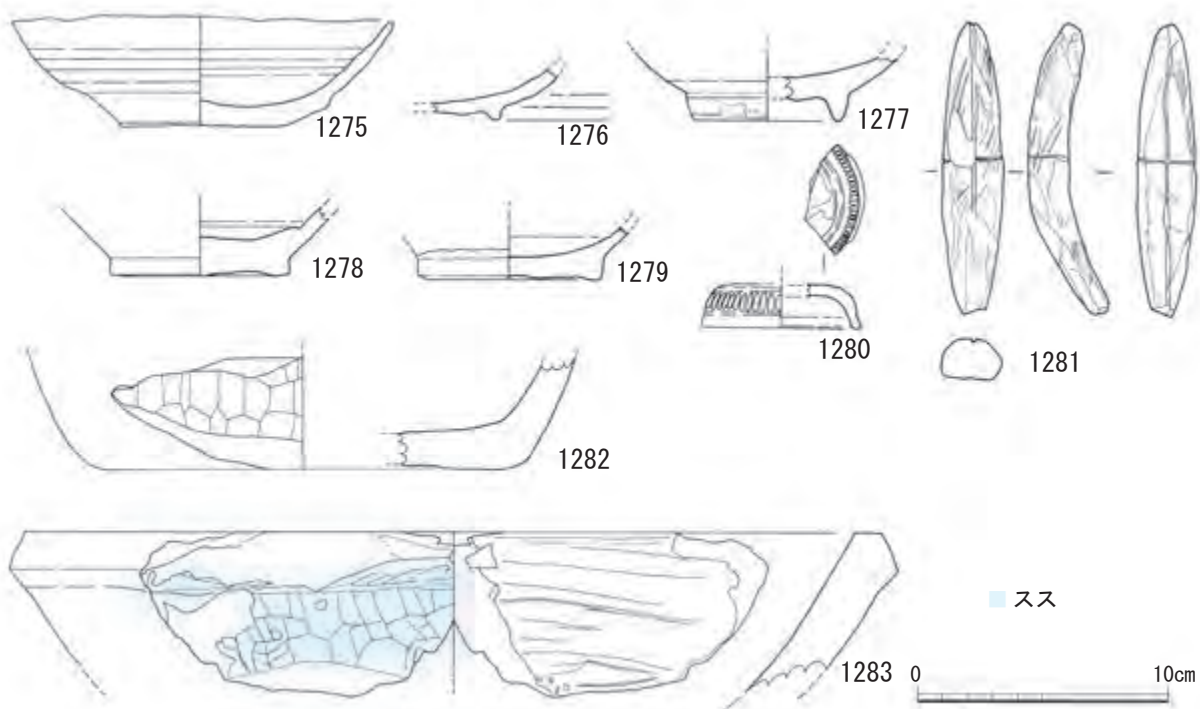
遺物番号	器種	最大長 (mm)	最大幅 (mm)	最大厚 (mm)	重量 (g)	出土区グリッド	備考
1266	スタンプ型 未成品	36	28	29	25	①区 8056	石鍋加工製品
1267	硯型	(50)	(47)	(16)	65	⑫区 8264	硯面は粗い削りによる 石鍋加工製品
1268	石錘	63	21	17	35	②区 8664	灰白色の軟質の滑石
1269	石錘	78	22	16	30	⑨区 0072	全面に「す」が入る
1270	石錘	50	19	16	25	⑨区 0070	硬質の滑石
1271	不明	(150)	(61)	(23)	110	⑨区 0072	

第163表 TAK201302調査区3層出土 滑石製石鍋加工素材観察表

遺物番号	最大長 (mm)	最大幅 (mm)	最大厚 (mm)	重量 (g)	出土区グリッド	備考
1272	116	76	17	270	⑩区 0674・0474	鏝の小さな石鍋を利用 左側縁に折り痕有
1273	60	67	17	115	③区 8666	溝有
1274	63	27	23	60	⑫区 8260	鏝部分を利用 削り痕有

⑦TAK201303調査区3層 出土遺物(第372図、第164～166表、図版321)

1275は土師器杯である。浅黄橙の精良な胎土でわずかに内湾しながら口縁部に至る。外面には回転による引き伸ばしの際の凹凸が見られ、口縁端部は波打ちいびつである。切り離しは右回転の糸切りによるが摩滅のために明瞭でない。豊前型の土師器杯と思われる。1276は瓦器碗底部片である。精良な胎土で低い高台が付く。摩滅が激しい。1277～1279は白磁碗IV類底部である。1277は高台内面の削りが深く外面の施釉は高台畳付際まで行われる。1278は胎土に小孔が多く見られ1279は胎土に微細な黒色粒子を含む。1280は白磁合子蓋である。型押しによる花卉が巡り天井部には花文と思われる文様



第372図 TAK201303調査区 3層出土遺物(S=1/3)



図版321 TAK201303調査区 3層出土遺物

が見られる。内面は露胎である。**1281**は石鍋を加工した石錘である。石鍋の円周に沿って細長く切り取り、両端を先細りに成形している。正面の長軸と短軸方向に浅い溝が巡る。**1282**は石鍋底部片である。煤の付着は見られない。**1283**は鏝が無い石鍋口縁部である。直線的に伸びる体部から口縁部に至る。口縁部には鏝が退化した断面三角形の突起が残る。内面には使用による横位の擦痕が複数見られる。外面は三角突起下面まで全面に煤が付着する。

第164表 TAK201303調査区3層出土 土器・陶磁器観察表

遺物番号	器種	部位	法量(cm)			調整		色調		焼成	胎土	出土区グリッド	備考
			口径	器高	底径	外面	内面	外面	内面				
1275	土師器 杯	ほぼ完形	15.2	4.2	6.4	-	-	浅黄橙色	浅黄橙色	良好	精良	A区 8072	豊前型
1276	瓦器 椀	底部	-	(2.0)	(5.8)	-	-	淡黄色	灰白色	良好	長石 精良	A区 0272・8274	摩滅が激しい
1277	白磁 椀 IV類	底部	-	(2.5)	(5.8)	-	-	灰オリーブ色	灰オリーブ色	良好	小孔が多い	A区 8274	
1278	白磁 椀 IV類	底部	-	(2.7)	(7.0)	-	-	灰白色	暗オリーブ灰色	良好	小孔が多い	A区 8274	
1279	白磁 椀 IV類	底部	-	(2.2)	6.6	-	-	灰黄色	灰白色	良好	黒色粒子含む	A区 8272・8274	
1280	白磁 合子蓋	端部~天井部	(6.3)	1.7	-	-	-	灰白色	灰白色	良好	黒色粒子を含む	A区 8072	

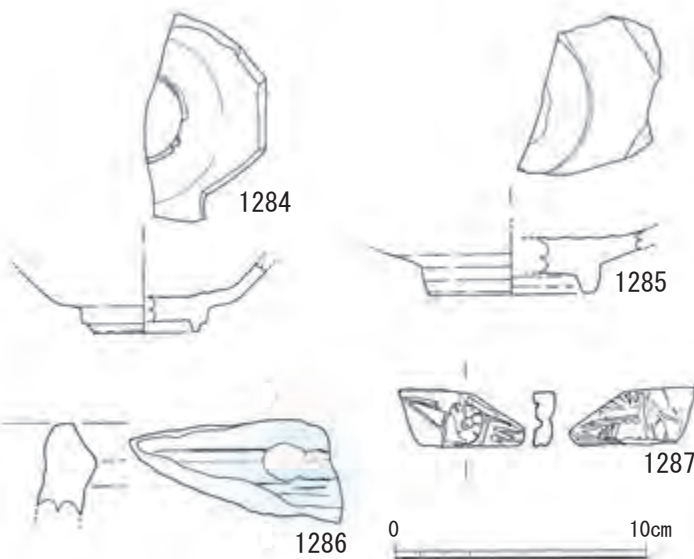
第165表 TAK201303調査区3層出土 滑石製品観察表

遺物番号	器種	最大長(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	重量(g)	出土区グリッド	備考
1281	石錘	115	24	32	62.93	A区 8072	石鍋加工製品 背面に石鍋時の面が残る

第166表 TAK201303調査区3層出土 滑石製石鍋観察表

遺物番号	器種	部位	法量(cm)			調整		色調		出土区グリッド	備考
			口径	器高	底径	外面	内面	外面	内面		
1282	石鍋	底部	-	(4.4)	(16)	-	-	灰白色	灰白色	A区 8274	
1283	鏝なし石鍋	口縁部	(34)	(6.3)	-	-	-	にぶい黄橙色	黄灰色	C区 5090	

⑧TAK201304調査区3層 出土遺物(第373図、第167~169表、図版322)



第373図 TAK201304調査区 3層出土遺物(S=1/3)

**1284**は青磁椀底部片である。高台は外面を深く削りだし高く仕上げている。見込みの釉を輪状に掻き取り高台内は露胎である。14世紀末~15世紀前半にかけての龍泉窯系青磁と思われる。**1285**は青磁椀底部片である。外面に段を持つ高台で高台内は露胎である。見込みの釉を円形に剥ぐ。14世紀末~15世紀前半にかけての龍泉窯系青磁と思われる。**1286**は滑石製石鍋の口縁部である。鏝は退化し断面三角形の肥厚した口縁となるが断面三角形の稜は角がとれ丸みを持つ。**1287**は滑石製品である。厚さ1cmほどの板状で、表面には幾何





学的な文様を、裏面には葉状の文様を浮き彫りにし、周囲は面取りがなされている。文様のモデル及び用途は不明である。

図版322 TAK201304調査区 3層 出土遺物

第167表 TAK201304調査区3層出土 磁器観察表

遺物番号	器種	部位	法量 (cm)			調整		色調		焼成	胎土	出土区グリッド	備考
			口径	器高	底径	外面	内面	外面	内面				
1284	龍泉窯系青磁 椀	底部	—	(2.5)	(6.6)	—	—	灰オリーブ色	灰オリーブ色	良好	石英	4888	
1285	龍泉窯系青磁 椀	底部	—	(2.7)	(4.4)	—	—	灰オリーブ色	灰オリーブ色	良好	微細な黒色粒子	5090	

第168表 TAK201304調査区3層出土 滑石製石鍋観察表

遺物番号	器種	部位	法量 (cm)			調整		色調		出土区グリッド	備考
			口径	器高	底径	外面	内面	外面	内面		
1286	石鍋	口縁部	—	(4.2)	—	—	—	黒褐色	明褐色	3280	

第169表 TAK201304調査区3層出土 滑石製品観察表

遺物番号	器種	最大長 (mm)	最大幅 (mm)	最大厚 (mm)	重量 (g)	出土区グリッド	備考
1287	不明製品	23	49	9	14.2	4886	周囲は面取りが行われている 文様のモデルは不明

参考文献

赤羽一郎 1977「日本中世」『世界陶磁全集3』小学館

## (8) 小結

前回の報告(竹松遺跡Ⅱ)は遺跡の中心よりやや北側であったが、今回報告する竹松遺跡の2013年度調査分は、遺跡の南部分にあたる南北850mの範囲となった(第388図)。今回の調査は、竹松遺跡に南北方向のトレンチを入れたようなもので、南部分だけではあるが中世の竹松遺跡の概要について情報をもたらしてくれた。

### ① 遺構数について

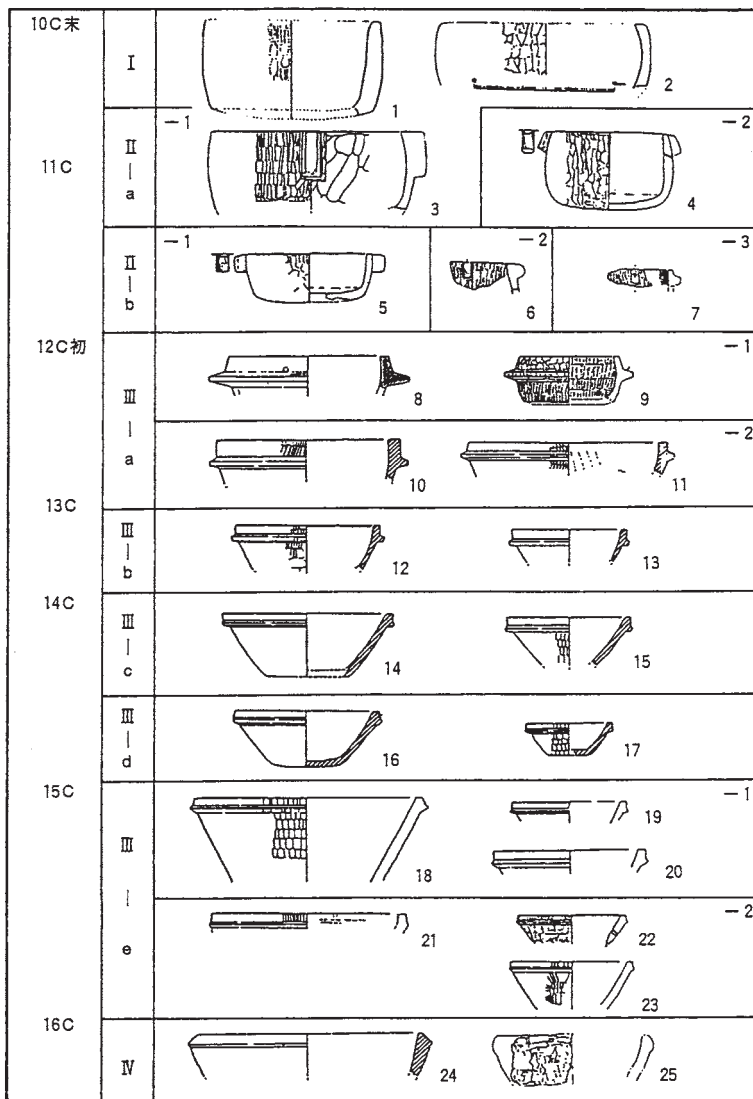
第170表は今回報告した地区ごとの遺構数である。

第170表 調査区ごとの遺構数

調査区	201302	201303(A区・B区)	201301	201304	201303(C区・D区)	竹松Ⅱ(参考)
遺構数	6	3	4	3	0	55

調査面積が異なるので一概には言えないが、南へ行くにつれて遺構数が減っている。このことは出土する遺物の数にも比例し、南へ行くほど中世の遺物は減っている。中世において竹松遺跡の中心は竹松遺跡Ⅱで報告をした周辺であったと言えよう。

### ② 滑石製石鍋について



第374図 石鍋編年図(木戸1995)

前述したように、竹松遺跡Ⅱ報告分と比べると中世の遺構は少ないために滑石製石鍋の出土点数も少なくなっているが、大村湾沿岸の中世遺跡と同じように石鍋の出土する比率は大きいように感じられる。滑石製石鍋の編年については木戸雅寿氏による編年試案(木戸1995)が多く用いられている。氏の編年の中でⅡ類・Ⅲ-A類は今回も一定量出土しているがⅢ類・Ⅳ類と呼ばれるものも数は多くはないが出土している(1237・1273・1286)。また、石鍋の加工品も多く出土している。その中には、バレン状石製品と呼ばれている石鍋の補修具(1208)や硯(1267)、小型容器状製品(1124)など別の製品へと姿を変えたものもあるが、加工の手を加えてはいるが製品になっていないものも多くある。それらは、石鍋時の部位を残したもので、工具による切断の痕跡があるもの、刻みを有するもの、削りを行ったもの、

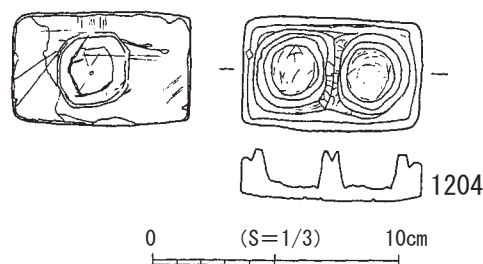
穿孔があるものなどである<sup>(註1)</sup>。11世紀に琉球列島では石鍋が大流行をし、滑石を入れ石鍋を模した土器も出現する。このことから、池田榮史氏は土器への混和材としての石鍋の破損品の搬入を想定している(池田2003)。これらのことも念頭に、製品になっていない石鍋の加工品について今後検討を進める予定である。

### ③滑石製品について

滑石は硬度1と軟らかいため加工を行いやすく様々なものが作られてきた。今回の報告でも石錘、権状製品などがある。これら滑石製品は、誰でも作ることができるためか出来上がりが稚拙なものが多い上に用途が不明なものが多々ある。それに対して、今回不明製品として報告した1204は報告でも述べたように、直線の刻みや脚の作り方など非常に精緻な作りである。この製品の特徴は、脚を持つことと二つの円形の穴が上面にあることである。円形の穴を二つ並べたものはこれまでも各地で出土しており(星野2005、九州歴史資料館1990・1991、東彼杵町教育委員会1988)、これらの祖形とも考えたが関連は不明である。また、脚を3本×2本持つ点については、カマドや机など中国、朝鮮半島に類例を探している。いずれにしても、これまで見てきた滑石製品とは作りが違うというのが印象である。



図版323 不明滑石製品(遺物番号1204)



第375図 岡遺跡出土不明滑石製品(S=1/3)<sup>(註2)</sup>

註1 今回の報告では、これらの製品にはなっていないが加工痕があるものを「石鍋加工素材」とし、製品になっているものを「石鍋加工製品」とした。

註2 再トレースを行った。

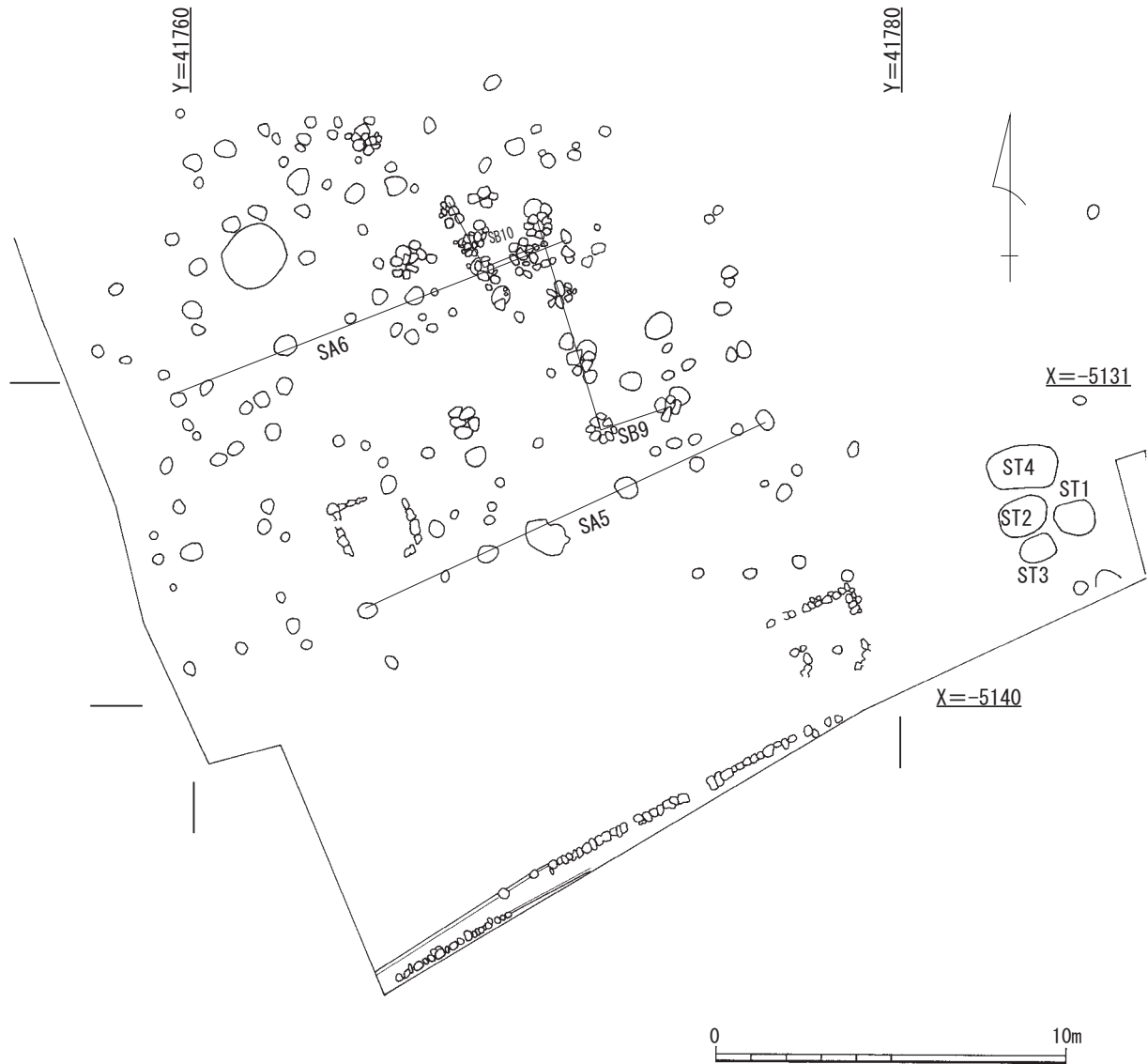
### 引用・参考文献

- 木戸雅寿 1995「石鍋」『概説 中世の土器・陶磁器』中世土器研究会編 真陽社
- 池田榮史 2003「穿孔を有する滑石製石鍋片について」『小湊フワガネタ 遺跡群遺跡範囲確認発掘調査報告書』名瀬市教育委員会
- 星野恵美 2005『博多104 博多遺跡第144次調査報告』福岡市埋蔵文化財調査報告書850 福岡市教育委員会
- 九州歴史資料館 1990『大宰府史跡』平成元年度発掘調査概報
- 九州歴史資料館 1991『大宰府史跡』平成2年度発掘調査概報
- 東彼杵町教育委員会 1988『岡遺跡』東彼杵町文化財調査報告書第2集

## 5 近 世

今回報告する近世の遺構は建物跡、土坑、土坑墓などである(第334・337・339・376図)。遺構は大調査区 TAK201301、大調査区 TAK201302、大調査区 TAK201303で検出した。調査期間の関係で、近世遺構については詳細な記録は取らずに報告も行わないようにしていたが、ST1～ST4を検出したことから、近世墓及び近世墓に関連すると思われる遺構と特徴的な遺構について報告をしたい。

### (1) 墓(ST)



第376図 近世遺構配置図(S=1/200)

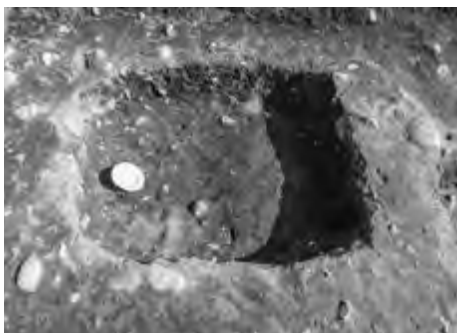
今回報告する墓は4基である。大調査区201302小調査区⑪区1278グリッド第4層から4基を並んで検出した。確認面は第4層であるが、遺構の掘り込みはその上からと思われる。



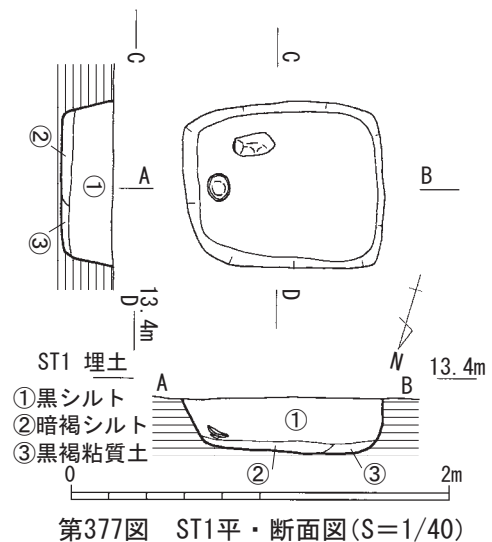
図版324 ST1～ST4配置状況(東から)

①TAK201302① ST1(第376・377図、図版324・325)

4基の中で南東隅に位置する。隅丸長方形のプランで、内法は長さ95cm、幅76cm、深さ30cmを測る。埋土は黒褐土で3層に分層できる。東壁寄りに唐津溝縁皿が1点出土した。



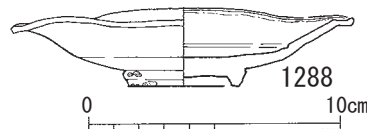
図版325 ST1完掘状況(北から)



第377図 ST1平・断面図(S=1/40)

ST1出土遺物(第378図、第171表、図版326)

1288は薄手の作りで口縁部が波打ち、見込みに段を持つ唐津の溝縁皿である。高台の作出と体部下半の調整は反時計回りのロクロによる回転ヘラケズリである。砂がほとんど入らない胎土に薄緑色の灰釉が高台畳付を除きかかる。また、高台畳付には砂目が3ヶ所残るが見込みには目跡は無い。この遺物からST1の時期は17世紀前半と思われる。



第378図 ST1出土遺物(S=1/3)



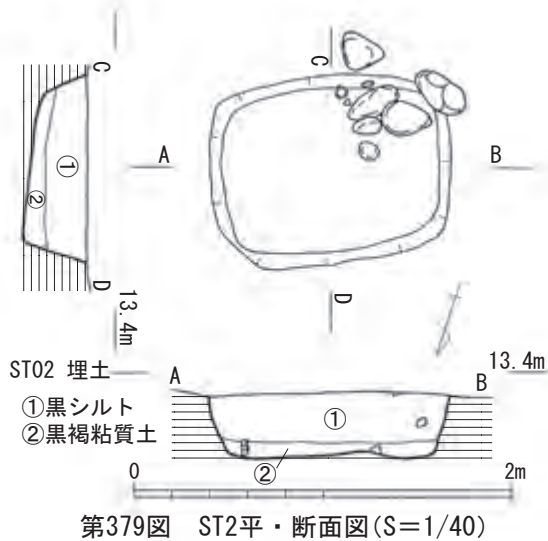
図版326 ST1出土遺物

第171表 ST1出土 土器観察表

遺物番号	器種	部位	法量 (cm)			調整		色調		焼成	胎土	備考
			口径	器高	底径	外面	内面	外面	内面			
1288	陶器 皿	完形	13.5	3.5	4.4	—	—	オリーブ黄色	オリーブ黄色	良好	精良	溝縁皿

②TAK201302⑪ ST2(第376・379図、図版324・327)

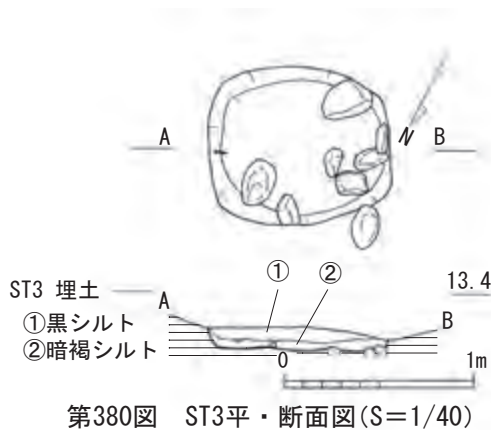
ST1の西に接し北にはST4南にはST3が接する。隅丸長方形のプランで、内法は長さ114cm、幅86cm、深さ35cmを測る。埋土は黒褐土で3層に分層できる。出土遺物は無かったが、周りのSTとほぼ同じ時期と思われることから、17世紀前半～中頃の時期を当てたい。



図版327 ST2完掘状況(北から)

③TAK201302⑪ ST3(第376・380図、図版324・328)

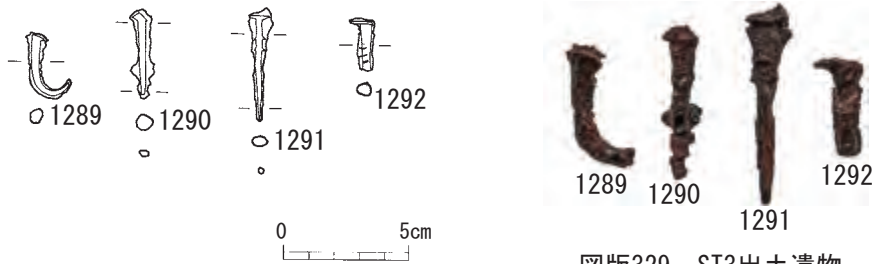
ST2の南に接し隅丸方形のプランを呈する。内法は長さ85cm、幅70cm、深さ10cmを測る。埋土は黒褐土で3層に分かれる。鉄片2点が出土。掘り込みが浅かったために削平の影響を大きく受ける。鉄片のみの出土で時期を確定できる遺物は出土しなかったが、ST2と同じ理由で17世紀前半～中頃と思われる。



図版328 ST3完掘状況(北から)

ST3出土遺物(第381図、第172表、図版328)

1289～1292は鉄釘である。棺の止め具であろうか。1289は先端が曲がり U 字状を呈する。



第381図 ST3出土遺物(S=1/3)

図版329 ST3出土遺物

第172表 ST3出土 金属製品観察表

遺物番号	器種	材質	最大長(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	重量(g)	備考
1289	釘	鉄	26.5	8.5	6	1.6	先端曲がる
1290	釘	鉄	35.5	9.5	6.5	1.9	
1291	釘	鉄	45	10	4	1.7	
1292	釘	鉄	21	10	5.5	1.1	先端欠

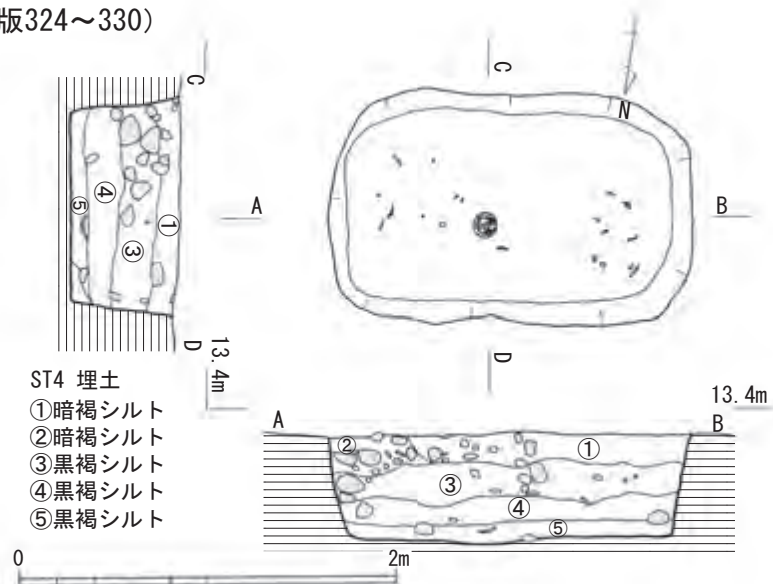
④TAK201302⑪ ST4(第376・382図、図版324～330)

4基の近世墓の中では最も北に位置する。内法は長さ114cm、幅86cm、深さ35cmを測る。埋土は黒褐土で5層に分かれる。

ほぼ中央から染付け皿が1点、その傍から寛永通宝が3枚重なった状態で出土した。周囲からは鉄片が複数出土した。

ST4出土遺物(第383図、第173・174表、図版331)

1293は初期伊万里の小皿である。径がやや広い底部から内湾しながら立ち上がり口縁端部は外反する。見込みには二重圏線が巡りその内側三方に半菊文を配置し、中央に草文と思われる文様をあしらう。外面口縁端部直下にも1条の圏線が巡る。釉調は灰褐色を呈し呉須は緑がかった発色である。高台部畳付内側には焼成時に敷かれた砂が付着する。この遺物より ST4の年代は17世紀中頃と思われる。1294～1304は鉄片である。

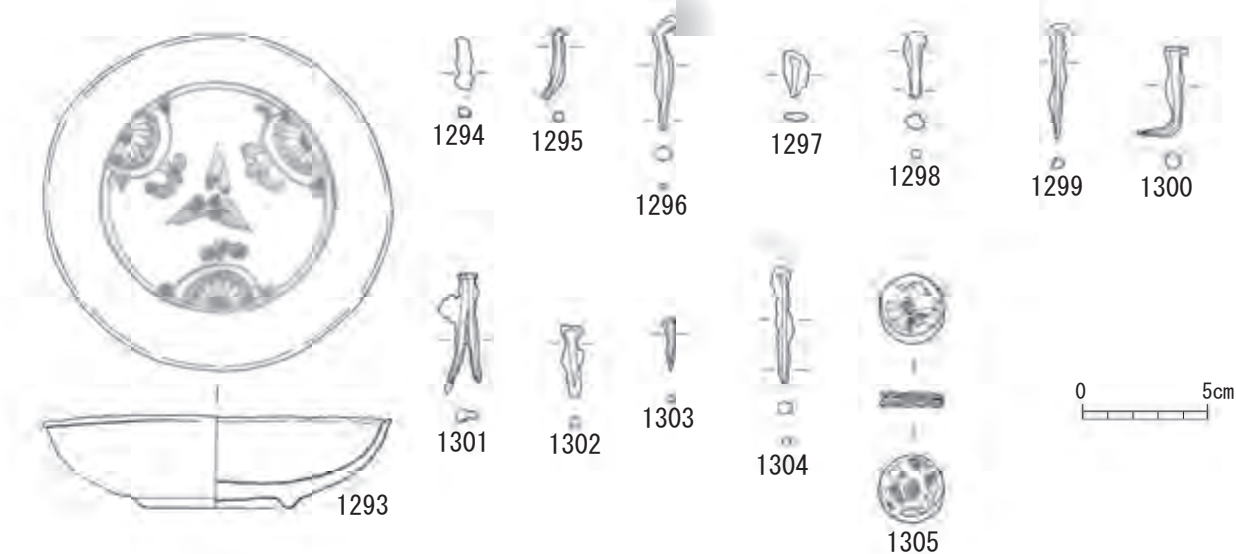


第382図 ST4平・断面図(S=1/40)



図版330 ST4遺物出土状況(北から)

形状から棺材に打たれた釘と思われる。遺存状態の良いものを図示した。1305は寛永通宝である。3枚が重なった状態で出土し、銭の金属成分により布片が腐食せずに付着していた。



第383図 ST4出土遺物(S=1/3)



図版331 ST4出土遺物

第173表 ST4出土 金属製品観察表

遺物番号	器種	材質	最大長(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	重量(g)	備考
1294	釘	鉄	20.5	7.5	3.5	1.1	
1295	釘	鉄	29	5.5	4	1	
1296	釘	鉄	46.5	7	5.5	1.5	
1297	釘	鉄	19	10	3.5	0.8	先端欠
1298	釘	鉄	26.5	8	6	1.4	先端欠
1299	釘	鉄	46	65	4	1.6	
1300	釘	鉄	35.5	6.5	7	2.1	先端曲がる
1301	釘	鉄	47.5	14	5	3.1	錆により2本が固着している
1302	釘	鉄	27.5	8	4	1.7	
1303	釘	鉄	23	3	3	0.3	
1304	釘	鉄	46.5	6	5	1.9	
1305	貨幣	銅	27.5	26.5	6	6.2	寛永通宝 3枚が固着 布片付着



第174表 ST4出土 土器観察表

遺物番号	器種	部位	法量 (cm)			調整		色調		焼成	胎土	備考
			口径	器高	底径	外面	内面	外面	内面			
1293	染付小皿	完形	13.7	3.55	5.9	—	—	灰黄色	灰黄色	良好	—	初期伊万里

(2) 柵列 (SA)

今回報告する柵列は2基である。いずれも、大調査区201302小調査区⑪区1276グリッドより近世も含む土層である第2層から検出した。主軸方向がほぼ同じであることから同時期の遺構と思われる。また、敷地の南東辺の軸とも並行することから、敷地の地割ができた後に作られたと思われる。周辺から出土する遺物が近世のものであったことから、これら柵列の時期を近世と判断した。

①TAK201302⑪ SA5(第376図、第175表)

主軸は N65° E で、3間分の柱穴が12.8mの長さで列をなす。柱間は4.0~4.2mで、柱穴は径0.6~0.63mの楕円形である。SA6と軸をほぼ同じとする。遺物の出土は無かった。

②TAK201302⑪ SA6(第376図、第175表)

主軸は N68° E で3間分の柱穴が11.8mの長さで列をなす。柱間は3.4~4.6mで、柱穴は径0.4~0.6mの楕円形である。SA5と軸をほぼ同じとする。遺物の出土は無かった。

第175表 SA(柵列)計測表

遺構番号	挿図番号	写真番号	主軸方向	柱間数	全長 (m)	備考
5	376	—	N65° E	3	12.8	SA6と軸がほぼ同じ
6	376	—	N68° E	3	11.8	SA5と軸がほぼ同じ

(3) 礎石建物 (SB)

今回報告する礎石建物は2棟である。いずれも、大調査区201302小調査区⑪区1276グリッド第2層から検出したが礎石が抜かれているために全形は不明である。また、遺物の出土が無かったために時期の確定ができなかったことから、近現代の建物跡の可能性もある。

①TAK201302⑪ SB9(第376図、第176表)

3間×1間を確認した。3間の長さは6.0mで柱間は2.0mである。東 - 西に桁行があると仮定した場合にはこの3間は梁行となる。出土遺物はなし。

②TAK201302⑪ SB10(第376図、第176表)

SB9の東に位置する。2間×1間を確認した。2間の長さは2.0mで柱間は1.0mである。SB1と同じように東 - 西に桁行があると仮定した場合にはこの3間は梁行となる。SA6と軸を同じにする。出土遺物はなし。

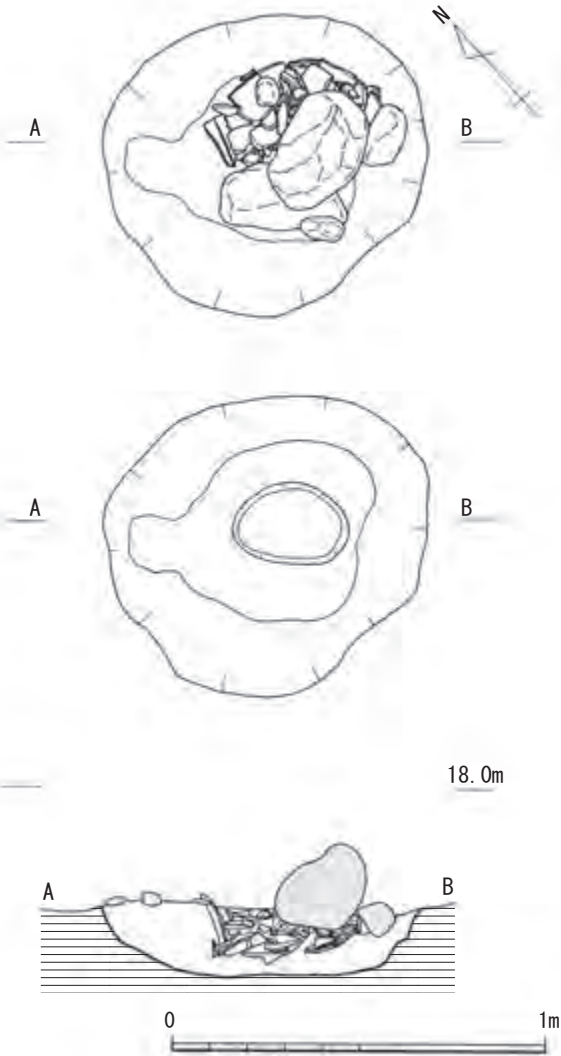
第176表 SB(礎石建物)計測表

遺構番号	挿図番号	写真番号	主軸方向	柱間間数	規模 (m、m)					備考
					梁間	桁間	梁行	桁行	身舎面積	
9	376	—	N70° E	(3×1)	2.0	2.0	(6.0)	(2.0)	(12.0)	全形は不明
10	376	—	N67° E	(2×1)	1.0	1.2	(2.0)	(12)	(2.4)	全形は不明

#### (4) 土坑(SK)

今回報告する土坑は1基である。大調査区201303小調査区C区5090グリッド第2層から検出した。

##### ①TAK201303 C区 SK1(第384図、図版332・333)



第384図 SK1平・断面図(S=1/20)



図版332 SK1検出状況(北から)

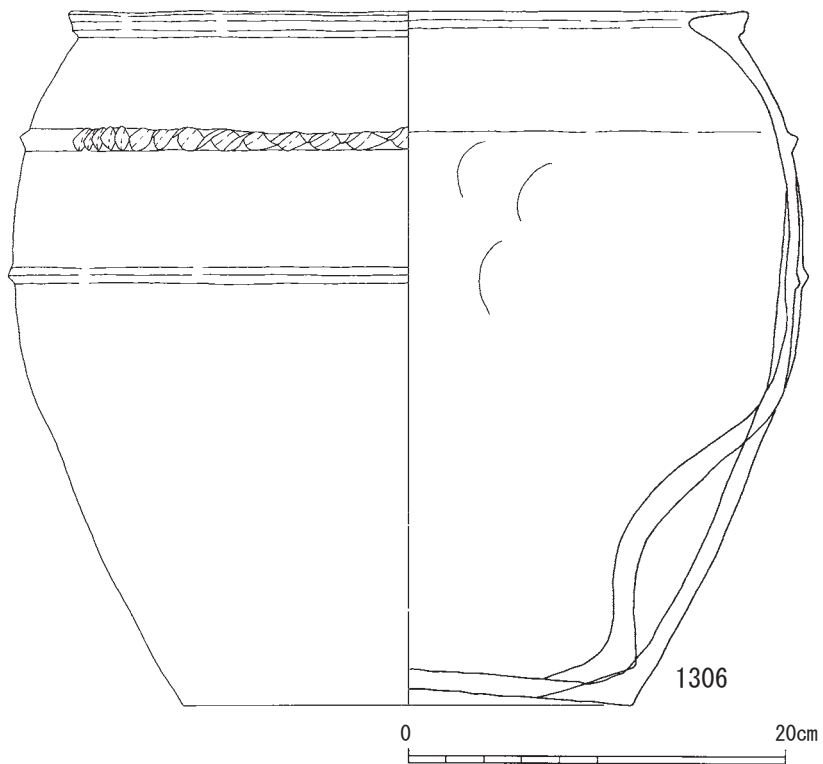


図版333 SK1遺物出土状況(西から)

長さ0.85m、幅0.75mの楕円形で深さ0.2mを測る。人頭大の円礫2個の下から唐津の甕がつぶれた状態で出土した。

##### SK1出土遺物(第385図、第177表、図版334)

1306は唐津焼の甕である。最大径は胴部の凸帯部分にあり緩やかに内湾しながら頸部を持たずに口縁部に至る。肩部には縄状凸帯が巡り、口縁部は折り返し後上端部分を水平に仕上げている。この口縁部上端部分には釉剥ぎが行われ貝目が残る。体部内面は円形の当て具痕をナデ消しており焼成の際の胴部の変形が著しい。類例が武雄市所在の甕屋窯跡4号窯物原出土遺物(東中川1996)に見られることから、この遺物の年代は1610~1630年代に求められる。



第385図 SK1出土遺物(S=1/4)



図版334 SK1出土遺物

第177表 SK1出土 土器観察表

遺物番号	器種	部位	法量 (cm)			調整		色調		焼成	胎土	備考
			口径	器高	底径	外面	内面	外面	内面			
1306	陶器 甕	底部～口縁部	35.8	36.6	23.8	—	当て具痕をナデ消し	暗赤褐色	暗赤褐色	良好	白色粒子	

(5) 不明遺構(SX)

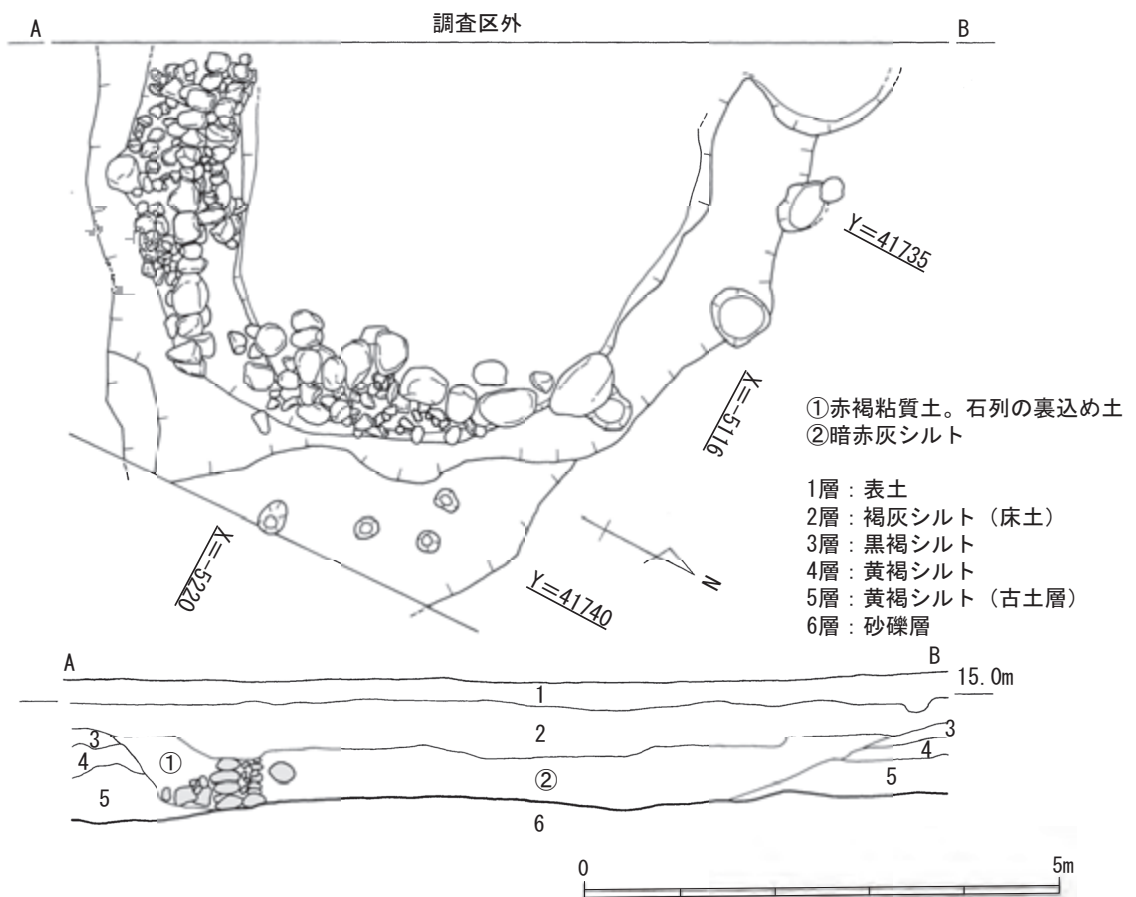
今回報告する不明遺構は1基である。大調査区201301小調査区D区2072・2074・2272・2274グリッド第3層から検出した。

①TAK201301 D区 SX6(第386図、図版335)

(北・南)7.3m、(東・西)5.5mを測る。西側部分は調査区外へ延びており全形については不明である。深さは0.7mである。大きな落ち込みで南と東壁に石積みが見られることから、池状の施設の可能性もあるが湧水はなかった。



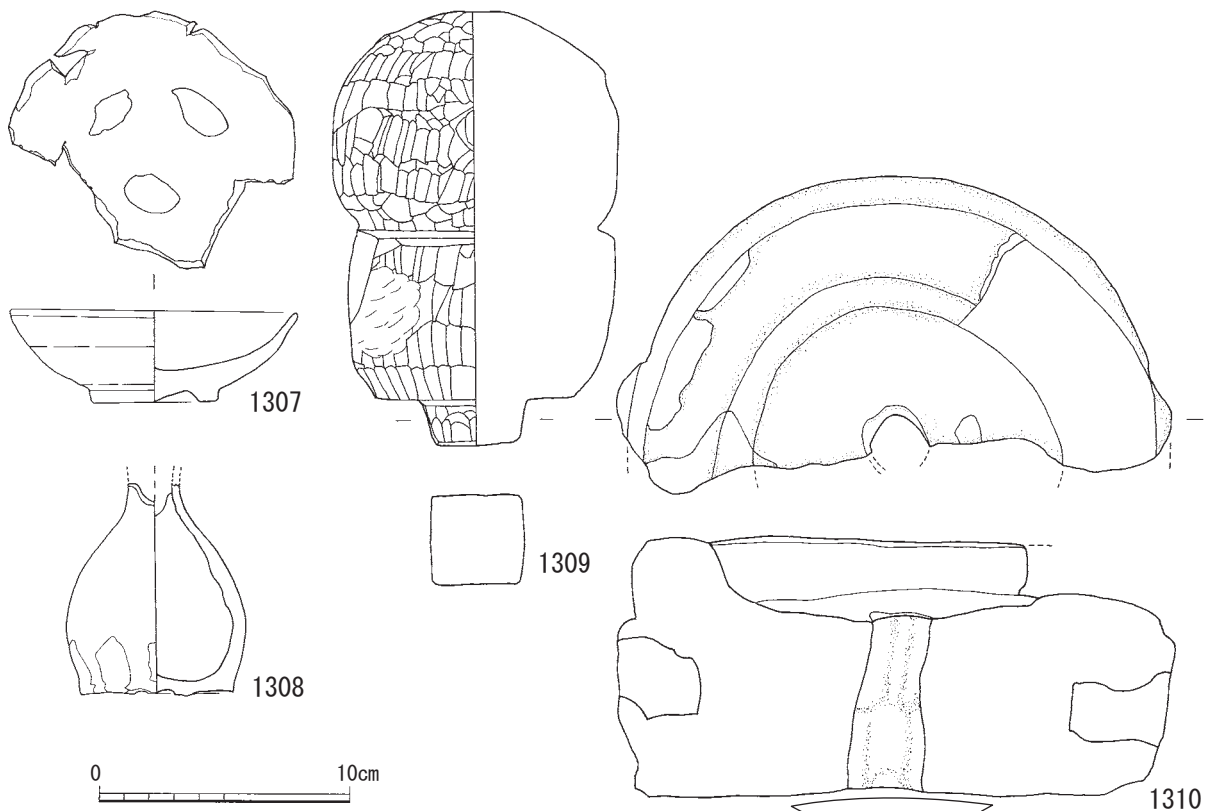
図版335 SX6検出状況(北から)



第386図 SX6平・断面図(S=1/80)

SX6出土遺物(第387図、第178・179表、図版336)

1307は唐津焼の皿である。高台内は兜巾が見られ体部は内湾しながら口縁部に至る。やや厚めの釉薬は体部下半～高台部を除き掛かる。見込みには3ヶ所の砂目が残る。1308は褐釉小壺である。頸部より上位を欠いている。外底には全面に粗い砂が付着する。釉薬が垂れて窯道具と融着をしており剥ぎ取った傷が底部の釉垂れ部分に残る。1309は緑泥片岩製の五輪塔風空輪である。全面に工具による加工痕が残る。空輪は丸みを残し、風空輪の境のくびれ部分の加工もくびれを意識していることが窺える。これらの特徴から大野・安部編年(大野・安部 1998)に従うと第3段階(室町中期)に相当すると思われる。およそ1/3が欠損しているが、空輪の頂点部に力が加わったものと思われる。1310は茶臼の上臼である。中心には芯木をはめ込む穴が開けられている。側面には2ヶ所に挽き手をはめ込む穴が開けられており、穴の周囲は浮き彫りによる四角形の縁取りが施される。摺り面には摺り目は見られず、中央部分がわずかに凹みその周囲が使用により平滑になっている(矢印範囲)。側面には被熱のためと思われる赤変が見られる。



第387図 SX6出土遺物(S=1/3)

第178表 SX6出土 土器観察表

遺物番号	器種	部位	法量(cm)			調整		色調		焼成	胎土		備考
			口径	器高	底径	外面	内面	外面	内面				
1307	陶器 皿	底部～口縁部	11.3	3.8	5	—	—	明褐色	褐灰色	良好	長石 黑色粒子	右回転ロクロによる高台の削り出し	
1308	陶器 小壺	底部～頸部	—	(8.2)	6	—	—	オリーブ黒色	—	良好	長石 黑色粒子	底部全面に粗い砂が付着	



図版336 SX6出土遺物

第179表 SX6出土 石製品観察表

遺物番号	器種	石材	最大長(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	重量(g)	備考
1309	五輪塔 風空輪	緑泥片岩	181	112	111	2805	空輪の頂点部から三分の一欠損
1310	茶臼 上臼	安山岩	径(205)	—	高101	2835	表面が赤変被熱か

参考文献

東中川 忠美 他 1996「甕屋窯跡」『内野山北窯跡』佐賀県文化財調査報告書129集 佐賀県教育委員会  
 大野安生・安部憲毅 1998「第4章大村館墓地」『富の原遺跡 大村館墓地 下荒瀬山 下墓地』大村市文化財調査報告 第21集 大村市教育委員会

## (6) 小結

### ① 近世墓について

近世墓は4基まとまって検出した。長軸はすべて北東 - 南西で切り合いもないことから、墓域として認知されていたと思われる。これらの墓坑から出土した遺物について溝縁皿は17世紀前葉で、染付皿は17世紀中葉のものであるという教示を得た(註1)。これら近世墓が血縁の者のものと仮定した場合、2点の遺物の時期差からST1とST4の被葬者は親子もしくは祖父母と孫との関係にあたることも考えられる。また、調査前の宅地境である調査区の南西際から検出した石列を伴う溝が、当時の屋敷地の境を示す石列とも考えられ、その傍に立地することから、これらの墓は柵列(SA5、SA6)や礎石建物(SB9、SB10)に伴う屋敷墓の可能性もある。

今回報告をした調査区よりも北側にある調査区では、14世紀になり生活の痕跡が消えていったことを述べた(註2)、今回の調査でも14世紀から16世紀の遺構は検出できず、遺物の点数もわずかであった。南側でも北側と同じ状況であったといえよう。そして、17世紀になり今回報告をした調査区内で再び人々の生活が始まったと想定される。

註1 両遺物は、波佐見町教育委員会中野雄二氏と長崎大学多文化社会学部野上健紀氏に実見をしていただき、製品の特徴や制作年代等について教示をいただいた。

溝縁皿は、砂目と薄作りという点から17世紀前葉の製作であり、染付け皿は広めの高台と三方に半菊を配置する構図から17世紀中葉の製作で、有田や波佐見では見られない文様であるとのことであった。また、被葬者の階層についてもお尋ねしたところ、生産地が近くにあるので手に入りやすい環境にはあったであろうが、中流の中でも上のほうではなかろうかという答えであった。

註2 竹松遺跡の消長について検出遺構数や遺物の数が14世紀になると激減し、15世紀の遺構や遺物が見られなくなることから、15世紀には生活の場ではなくなったと想定した。詳しくは「4 古代中世(4)まとめ」『竹松遺跡Ⅱ』長崎県教委編2017に記載。

## IV 附 編(自然科学分析結果)



大調査区201302小調査区①区8456グリッド内で検出した祭祀遺構1より採取した。遺構の詳細は本文中「(1)弥生時代の遺構、遺物 57 TAK201302①祭祀遺構1」256頁に記載した。

## 長崎県大村市竹松遺跡出土の弥生人骨

松下 孝幸\*・松下 真実\*\*

【キーワード】：長崎県、弥生人骨、火葬骨、非火葬骨、散布

### はじめに

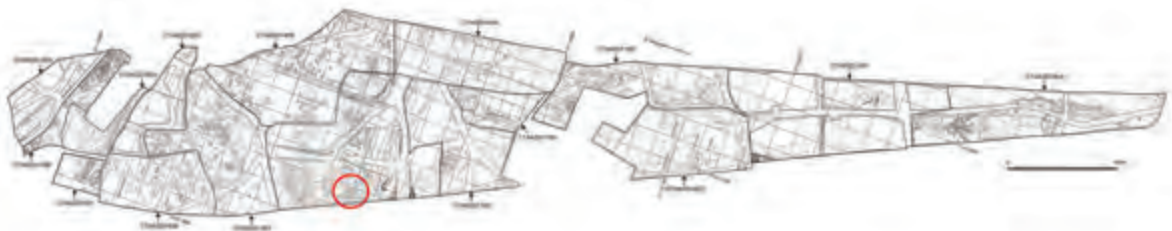
九州新幹線西九州ルート(長崎ルート)の建設工事に伴い、長崎県大村市竹松町に所在する竹松遺跡の発掘調査が2011(平成23)年からおこなわれていたが、2013(平成25)年度のTAK201302①区の調査で大規模な弥生時代の墳墓がみつかり、その一角から火葬骨が検出された。筆者らは現地を2度にわたって訪れ、火葬骨の出土状況を観察することができた。この発掘調査で、弥生時代の箱式石棺墓21基、甕棺墓4基、石蓋土壙墓2基、土壙墓5基の総数32基の墳墓と標石4個が検出されているが、標石は下部構造を伴っていない。火葬骨は、墓域の西端に位置し、祭祀遺構(SK01)と推測されている供献土器を伴う土坑上部やその周辺一帯から検出されている。



調査区全景

東日本では弥生時代の火葬骨や再葬墓が見つまっているが(設楽博己、2008)、九州では福岡県志免町の松ヶ上遺跡の合口成人用甕棺(前期後半)から少量の火葬骨片(頭蓋片と四肢骨片)と歯根2本が出土している例しかない(金・他、1996)。また、沖縄県うるま市の具志川グスク崖下地区から弥生後期の火葬骨片が多数出土しているが、骨になって焼いたもの(焼骨)と遺体を火葬したもの(火葬骨)とが存在し(土肥・他、2008)、遺構や火葬骨片の出土状況が本例とはかなり異なっている。本例は人骨の検出状況(明確な土抗を確認できない)から再葬跡とは考え難い。人骨はSK01から検出されたが、火葬骨ばかりではなく火葬されていない人骨も存在する。

長崎県では、長崎市深堀遺跡、大村市富の原遺跡(松下・他、1986)、平戸市根獅子遺跡(金関・他、1954、松下、1996、2017)、佐世保市の宇久松原遺跡(松下・他、1983)と宮の本遺跡(松下・他、1981)、



遺構位置図



壱岐市の原の辻遺跡(1995、2001)と大久保遺跡(松下、1988)、対馬市住吉平貝塚(内藤・他、1975)、五島市浜郷遺跡、小値賀町神ノ崎遺跡(松下、1984)から弥生人骨が出土しているが、いずれも火葬骨ではない。

今回、検出された火葬骨は広い範囲から、いずれも小片、細片状態で検出されているが、一部では火葬骨片を包含する層から火葬されていない骨が見つかっている。保存状態はいずれも悪いが、人類学的観察をおこない、興味ある所見を得たので、その結果を報告しておきたい。

### 資料および所見

人骨は1区のSK01(祭祀遺構)周辺一帯から検出されており、火葬骨片と非火葬骨とが確認された。なお、この火葬骨は、いずれも軟部組織が残っている状態で火葬に付されたもので、骨を焼いたものではない。また、火葬骨はほとんどが小片、細片状態であることから、骨は破碎されたものと思われる。火葬骨片の検出状況から筆者らは、火葬骨は砕かれて細片状態にされて、この祭祀遺構上面に散布されたと推測している。火葬骨の点数はかなり多い。



人骨出土状況

火葬骨は、考古学的所見から弥生時代(後期)に属する火葬骨と推測されている。非火葬骨は火葬骨片を含む層から出土していることから、火葬骨片が撒かれた後に、埋納されているが、検出状況から推測して、古墳時代以降の人骨とは考えがたい。また、埋葬状態を保っていたのか、それも集骨状態であったのかは、人骨の保存状態が著しく悪かったため、明らかにできなかった。

火葬骨片は原則として、番号をつけて取り上げてある。ブロック1から検出された非火葬骨は点ではなくブロックで取り上げられており、個別番号が付されていなかったため、新たに「Y-01」という番号をつけた。

SK01周辺一帯から検出された人骨片の大部分は小片、細片状なので、骨種を同定することがほとんどできなかったが、なかには同定できたものも存在する。火葬骨は検出された骨片と歯冠から、未成人1体と成人2体の遺骨の一部と推測され、非火葬骨は成人男性骨と思われる。従って、火葬骨は少なくとも3体分の骨の一部と推測される。成人骨2体のうち1体は矢状縫合が内外両板とも開離していることから年齢は壮年と思われる。年齢区分を表2に示した。火葬骨片の点数は多いが、それでも3人分の総骨量には達していない。

表1 資料数(最少個体数)(Table 1. Number of materials)

	成人			幼小児 (未成人)	合計
	男性	女性	不明		
火葬骨	0	0	2	1	3
非火葬骨	1	0	0	0	1
合計	1	0	2	1	4

表2 年齢区分 (Table 2. Division of age)

	年齢区分	年齢
未成人	乳児	1歳未満
	幼児	1歳～5歳 (第一大臼歯萌出直前まで)
	小児	6歳～15歳 (第一大臼歯萌出から第二大臼歯歯根完成まで)
	成年	16歳～20歳 (蝶後頭軟骨結合癒合まで)
成人	壮年	21歳～39歳 (40歳未満)
	熟年	40歳～59歳 (60歳未満)
	老年	60歳以上

注) 成年という用語については土井ヶ浜遺跡第14次発掘調査報告書(1996)を参照されたい。

### 1. 火葬骨

取り上げられた火葬骨片は細片が多く、同定できたものは少ない。同定できたのは、頭蓋、下顎骨、上腕骨、大腿骨、脛骨、椎骨などの骨片と歯で、とくに骨種や部位に偏った傾向は認められない。頭蓋は脳頭蓋の破片が多いが、上顎骨や下顎骨の一部も存在する。上腕骨は右側骨体の遠位部が残存していた。大腿骨は骨体の破片を、脛骨は前縁部分を認めた。歯は歯根だけではなく、歯冠も確認できた。骨には火葬骨特有の捻れがみられ、亀裂も入っている。右側の上顎骨前頭突起が2点 (No. 1060、No. 1197) 認められた。その他に未成人 (幼児) の上顎右側の第一小白歯冠 (No. 1205) を1点確認することができたので、本火葬骨 (SK01) は少なくとも3体分の火葬骨である。上顎骨前頭突起は成人のものであるが、性別は推測できない。第一小白歯冠は未萌出で、歯冠の形成程度から4～5歳程度の幼児の小白歯と推測される。



人骨出土状況



人骨出土状況

### 2. 非火葬骨 (Y-01、男性・年齢不明、成人骨)

ブロック1から検出された。火葬骨片を含む層に包含されていたが、遺存状態は著しく悪い。左右の脛骨と下顎の歯列を確認することができた。脛骨は骨体が残存していた。重複する骨が認められないので、1体分 (Y-01) と推測した。計測はできないが、脛骨体の径は大きい。下顎の歯列を検出したが、歯冠は薄く著しく脆い。

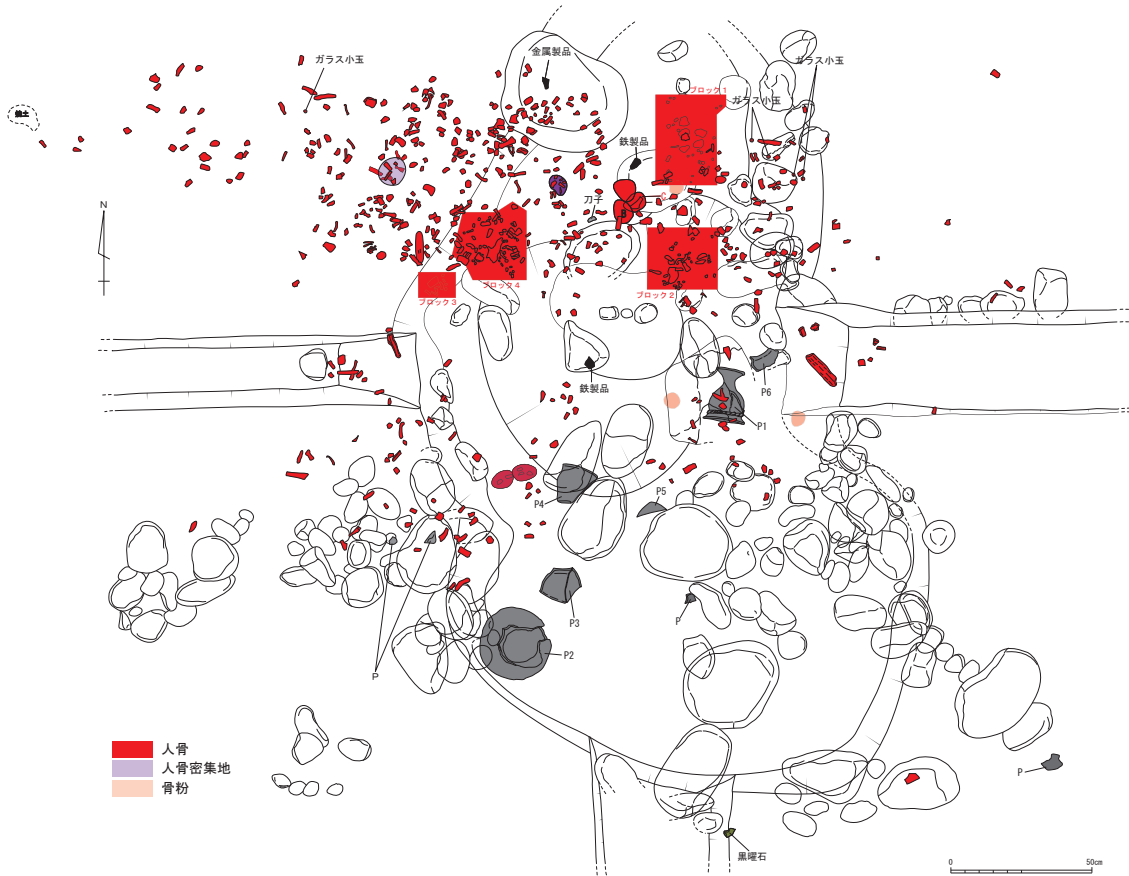
下顎の歯冠が残存していた。残存歯と歯槽の状態を歯式で示すと、次のとおりである。

／ 7 6 5 4 3 ／／ | ／／ 3 4 5 6 7 8      [／：不明(破損)、番号は歯種]

[1：中切歯、2：側切歯、3：犬歯、4：第一小臼歯、5：第二小臼歯、6：第一大臼歯、7：第二大臼歯、8：第三大臼歯]

咬耗度は Broca の1度(咬耗がエナメル質のみ)～2度(咬耗が部分的に象牙質まで及ぶ)である。

性別は、脛骨体の径が大きいことから男性と推定したが、年齢は不明である。



人骨出土位置図

## 要約

長崎県大村市竹松町にある竹松遺跡 TAK201302①区の発掘調査で、祭祀遺構(SK01)周辺一帯から火葬骨と非火葬骨が出土した。人骨の保存状態は著しく悪かったが、人類学的観察をおこない、以下の所見を得た。

1. 竹松遺跡 TAK201302①区からは、弥生時代の箱式石棺墓21基、甕棺墓4基、石蓋土壙墓2基、土壙墓5基の総数32基の墳墓と2基の祭祀遺構が検出された。人骨は1基の祭祀遺構(SK01)の上層やその周辺一帯から検出された。火葬骨片は広範囲に広がっており、点数はかなりの多いが、大部分は小片、細片で、大きな破片は少ない。おそらく、火葬骨は砕かれて、祭祀遺構の上面に散布されたのであろう。散布にあたって、特定の骨種や部位にこだわった傾向は認められない。
2. 本人骨は、考古学的所見から、弥生時代(後期)に属する人骨である。
3. 火葬骨のうち、同定できたのは、頭蓋、下顎骨、上腕骨、大腿骨、脛骨のそれぞれ一部と歯(歯根、歯冠)などである。右側上顎骨前頭突起を2体分確認することができた。その他に未成人(幼児)

の臼歯冠が1点存在するので、最少個体数は3体で、本火葬骨は少なくとも3体分の火葬骨の一部である。

4. 火葬骨片を包含する層から非火葬骨が検出された。遺存状態は著しく悪かったので、一次葬なのか二次葬なのか判別できなかった。同定ができたのは左右の脛骨体と歯列のみである。重複骨を確認できなかったので、1体分と推断した。脛骨体の径が大きいので、男性骨と推定した。
5. 従って、本祭祀遺構からは3体分の火葬骨片と1体分の非火葬骨の合計4体の人骨が検出されたことになる。
6. 本遺跡の祭祀遺構上層とその周辺一帯から弥生時代の火葬骨が検出されたが、火葬骨は細かく碎かれ、祭祀遺構上部に散布されたと思われる状況を呈しており、東日本でみられる再葬墓とは性格が異なるようであり、また松ヶ上遺跡の甕棺や具志川グスク崖下の様相とも違う。火葬骨は少なくとも未成人を含む3体の骨の一部である。火葬骨が複数体の骨であることから、複数体の同時死亡の可能性もある。遺体を火葬し、骨を碎き散布したことは、そのような異常事態と墓地空間を浄化するための祭祀行為なのかもしれない。

## 謝辞

《擧筆するにあたり、本研究と発表の機会を与えていただいた長崎県教育庁新幹線文化財調査事務所の皆様に感謝致します。》

## 《参考文献》

1. 土肥直美・他、2008：沖縄県具志川市具志川グスク崖下地区の発掘調査。平成17年度～平成19年度科学研究費補助金研究成果報告書
2. 石川日出志、1988：縄文・弥生の焼人骨。『駿台史學』第74号：84-110.
3. 金関丈夫・他、1954：長崎県平戸島獅子村根獅子免出土の人骨に就いて。人類学研究、第1巻第3～4号：178-226.
4. 金宰賢・他、1996：福岡県志免町・松ヶ上遺跡出土人骨(弥生・平安)。松ヶ上遺跡(志免町文化財調査報告第6集)：150-154.
5. 松下真実・他、2017：長崎県平戸市根獅子遺跡出土の弥生人骨。平戸紀要、第5号：1-46.
6. 松下孝幸、1976：対馬の先史生物(人類)。長崎生物学会編、対馬の生物：31-32.
7. 松下孝幸、1981：宮の本遺跡出土の人骨。宮の本遺跡(佐世保市埋蔵文化財調査報告書)：93-109, 114-118, 145-146.
8. 松下孝幸、1995：長崎県壱岐原の辻遺跡出土の弥生時代人骨。原の辻遺跡(長崎県文化財調査報告書第124集)：209-220.
9. 松下孝幸、2001：長崎県壱岐原の辻遺跡出土の弥生人骨。
10. 松下孝幸・他、1983：長崎県宇久松原遺跡出土の弥生時代人骨。長崎県埋蔵文化財調査集報VI(長崎県文化財調査報告66)：97-134.
11. 松下孝幸・他、1984：長崎県小値賀町神ノ崎遺跡出土の弥生・古墳時代人骨。小値賀町文化財調査報告、第4集：95-100, 178.
12. 松下孝幸、1984：諫早市有喜貝塚出土の人骨。有喜貝塚(諫早市文化財調査報告書第5集)：62-68.
13. 松下孝幸・他、1986：大村市富の原遺跡出土の弥生時代人骨。富の原遺跡群確認調査概報V(大村市文化財調査報告第11集)：30-45.
14. 松下孝幸・他、1988：長崎県壱岐・石田町大久保遺跡出土の弥生時代人骨。長崎県埋蔵文化財調査集報XI(長崎県文化財調査報告書第91集)：77-99.
15. 松下孝幸、1996：根獅子遺跡出土の弥生時代人骨。平戸市史自然・考古編：405-441.

16. 内藤芳篤・他、1975：対馬・住吉平貝塚出土の弥生時代人骨例。対馬の遺跡(長崎県文化財調査報告書20)：139-147.
17. 設楽博己、2008：弥生再生墓と社会、塙書房
18. 内山大介、2005、先史時代の葬送と供犠-焼骨出土例の検討から。『信濃』第57巻第9号

---

\* Takayuki MATSUSHITA、\*\* Masami MATSUSHITA

The Organization of Anthropological Research [NPO 法人・人類学研究機構]



頭蓋 (The skull)  
竹松遺跡 SK01 (No, 1332) (性別・年齢不明)  
(The cremated skeleton from SK01 (No, 1332) at the Takematsu site, sex and age are unknown)



下顎・錐体 (The mandible、The Pyramis)  
竹松遺跡 SK01 (No, 1205) (性別・年齢不明)  
(The cremated skeleton from SK01 (No, 1205) at the Takematsu site, sex and age are unknown)





頭蓋・下顎 (The skull, the mandible)  
竹松遺跡 SK01 (No, 1205) (性別不明・壯年)  
(The cremated skeleton from SK01 (No, 1205) at the Takematsu site, young adult unknown sex)



右前頭突起 (The right frontal process)  
竹松遺跡 SK01 (No, 1160・1097) (性別・年齢不明)  
(The cremated skeleton from SK01 (No, 1160・1097) at the Takematsu site, sex and age are unknown)



上・下顎骨 (The maxilla, the mandible)  
 竹松遺跡 SK01 (No, 1160・1097) (性別・年齢不明)  
 (The cremated skeleton from SK01 (No, 1160・1097) at the Takematsu site, sex and age are unknown)



下顎第一小臼歯 (The mandibular first premolar)  
 竹松遺跡 SK01 (No, 1205) (性別不明・幼児)  
 (The cremated skeleton from SK01 (No, 1290・1288) at the Takematsu site, infant unknown sex)



歯 (The teeth)  
 竹松遺跡 SK01 (No, 1290・1288) (性別・年齢不明)  
 (The cremated skeleton from SK01 (No, 1290・1288) at the Takematsu site, sex and age are unknown)



右上腕骨 (The right Humerus)

竹松遺跡 SK01 (No. 1303) (性別・年齢不明)

(The cremated skeleton from SK01 (No. 1303) at the Takematsu site,  
sex and age are unknown)



大腿骨 (The femur)

竹松遺跡 SK01 (No. 669) (性別・年齢不明)

(The cremated skeleton from SK01 (No. 669) at the Takematsu site,  
sex and age are unknown)



右脛骨(The right tibia)

竹松遺跡 Y-01 (男性・年齢不明)

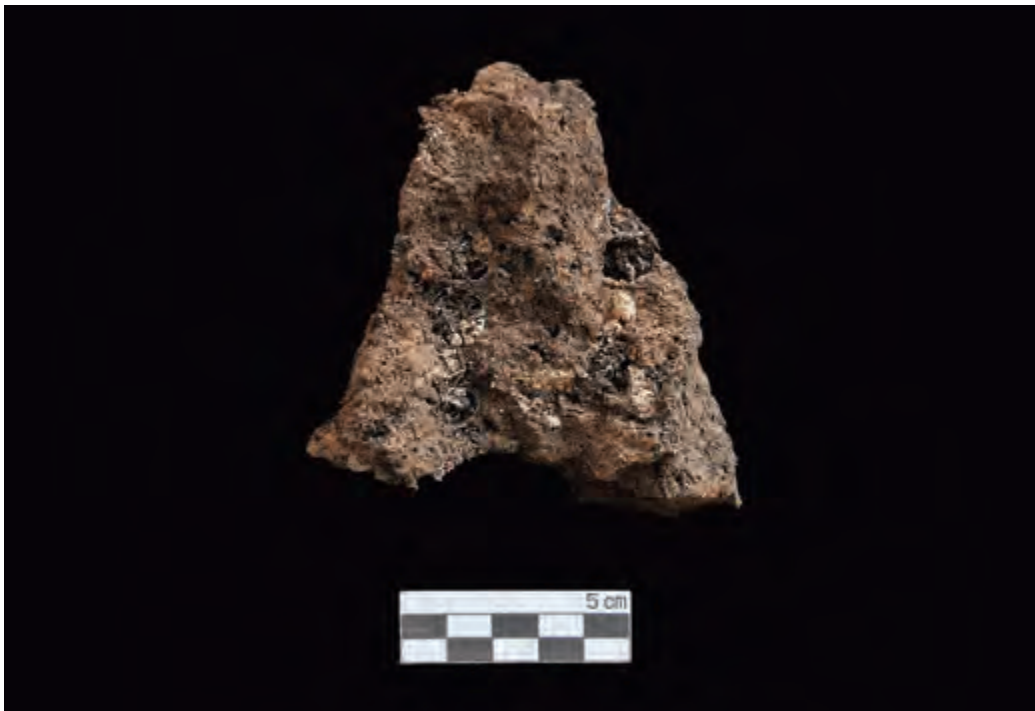
(The skeleton Y-01 from the Takematsu site, male unknown age)



左脛骨(The left tibia)



大腿骨 (The femur)



歯 (The teeth)

竹松遺跡 Y-01 (男性・年齢不明)  
(The skeleton Y-01 from the Takematsu site, male unknown age)

大調査区201302小調査区①区の弥生時代の集団墓より採取した。

## 竹松遺跡から出土した赤色顔料について

九州国立博物館 志賀 智史

### 1. はじめに

長崎県大村市竹松町にある竹松遺跡から出土した赤色顔料について分析調査を行なった。本遺跡では弥生時代の墳墓群が検出されており、赤色顔料は弥生時代後期後半の箱式石棺墓および土壙墓から出土した。筆者は発掘現場を一度訪問し、一部の石棺墓について赤色顔料の出土状態の調査を行った。資料の採取は、協議の上、発掘担当者に依頼した。採取資料は20基から75点となった。これら資料の中には、墳墓内での赤色顔料の分布を明確化するため、目視で赤くない部分からも採取を依頼したものが含まれている。

弥生時代～古墳時代の墳墓出土赤色顔料は、現在までの調査によって水銀を主成分とする朱(化学組成は  $\text{HgS}$ 、鉱物名称は辰砂(Cinnabar))と、赤色の酸化鉄を主成分とするベンガラ(化学組成は  $\text{Fe}_2\text{O}_3$ 、鉱物名は赤鉄鉱(Hematite)等)の二種類が知られている。

### 2. 調査方法

以下の方法で調査を行い、その結果を総合的に判断した。

#### (1) 顕微鏡観察

顕微鏡観察は赤色物の有無、付着状況、二種類の赤色顔料の混在状況、粒子形態等を知るために行なった。資料を十分自然乾燥させた後に調査を行なった。

実体顕微鏡(7–100倍)では、白色光に近い光で資料を直接観察した。朱はショッキングピンク色～オレンジ色に見え、ベンガラであれば暗赤色他に見える。この観察では、赤色顔料の有無だけでなく、包含土壌とのあり方や有機質遺物の有無など、赤色顔料の使われ方や用途などを考えるための基礎的な観察も同時に行っている。

生物顕微鏡(50–1000倍)では、実体顕微鏡による観察結果をふまえて合成樹脂オイキットを用いてプレパラートに封入した資料を、側射光および透過光にて観察した。側射光では朱はルビー色の樹脂状光沢を持つ透き通った粒子に、ベンガラは暗赤色他の微粒子が見える。

#### (2) 蛍光X線分析

主成分元素を知るために行なった。朱は水銀(Hg)が、ベンガラは鉄(Fe)が検出される。ただし鉄は土壌にも含まれている。測定にはポータブル型の Innov-X 社  $\alpha$ -4000(Ta, 40kv, 30秒, SDD, 測定径直径約7mm, 手持ち測定)を用い、サンプル袋に入った資料全体にX線が照射できるよう装置を動かしながら測定した。一部の資料については、据置型の堀場製作所 XGT-5200(Rh, 30kv, 180s, SDD, 測定径直径100 $\mu\text{m}$ )を用い、赤い部分を直接測定した。

#### (3) X線回折・顕微ラマン分光分析

結晶構造、分子構造を知るために行なった。X線回折は、リガク社 RINT Ultima III (Cu, 40kV, 40mA, 平行法)、顕微ラマン分光分析は、Bruker Optics 社 SENTERRA (785nm, 1mW, 10s)を用いた。朱は辰砂

が、ベンガラは赤鉄鉱他が同定される。一部の資料を対象とし、X線回折は土砂除去後に粉末にしたものを、顕微ラマン分光分析は生物顕微鏡観察用プレパラート中の資料を測定した。

### 3. 調査結果のまとめと考察

調査結果を表1に示す。特徴的な写真および図等を図1～3に示す。以下では、調査所見にこれまでの知見を交えて若干の考察を行う。

#### (1) 検出された赤色顔料

分析調査を行った墳墓20基のうち16基から赤色顔料が検出された。その種類は朱とベンガラであった。遺構別に見ると、朱だけが検出されたものが11基(ST6・ST11・ST12・ST15～17・ST19・ST23・ST31・ST32・SR8)、ベンガラだけが検出されたものが2基(ST8・ST13)、朱とベンガラの両方が検出されたものが3基(ST1・ST18・ST20)あり、圧倒的に朱だけが検出されたものが多い。ST5・ST9・ST10・ST25の4基では赤色顔料が検出されなかった。

朱とベンガラの両者が検出された墳墓については、全ての資料でベンガラが主体であった。朱とベンガラは完全には混在しておらず、ある程度分離できる状況であったため、混ぜて使用されたとは考えられない。

朱については、朱粒子だけが凝集している部分は大変少なく、多くは実体顕微鏡の低中倍率で朱が混じった直径1mm程度の土壌塊が数粒～10数粒確認できたに過ぎない(図1-8, 9, 13, 15)。

朱だけが検出された11基のうちST11・ST12・ST19およびST32では、足部の資料について実体顕微鏡観察で朱が認められず、蛍光X線分析でも水銀が検出されなかったが、生物顕微鏡観察では数粒の朱粒子が確認された(図1-3, 12)。蛍光X線分析では検出できないほど微量の朱が存在していたと考えられる。これらの墳墓では頭部でしっかり朱が確認されていることから、頭部からの連続で足部に微量の朱が使用されたか、もしくは埋蔵環境や発掘時に頭部の朱が足部に移動してきたかのどちらかと考えられる。

ベンガラについては、通常みる暗赤色のもの以外に赤土素材のものが認められた。

なお、今回調査を行った全ての資料において、遺跡土壌の砂に直径1-3mm程の赤色酸化鉄小塊が含まれていた(図1-16)。この小塊は、硬質で表面に光沢があるもの、円礫状で通常のベンガラよりも赤みが弱く斑点状に白色鉱物や空隙がある等の特徴を持つ。前者は明らかに赤色顔料ではないと判断できたが、後者については後述する赤土素材のベンガラとの区分が一部不明瞭であった。

#### (2) ベンガラについて

遺跡出土ベンガラは、粒子形態から直径約1 $\mu$ mのパイプ状の粒子を含むもの(ベンガラ(P))と不定形な粒子だけで構成されたもの(ベンガラ(非P))等、最低二種類以上に細分できる。

ベンガラに含まれるパイプ状の粒子については、鉄細菌の一種である *Leptothrix* の鞘と考えられている(岡田1997)。川の澱みや湖沼からこの鉄細菌を含む黄褐色の沈殿物を採取し、焼成して赤く発色させたものがベンガラ(P)として使用されたようである。ベンガラ(非P)については、鉱山から得られた鉄鉱石(褐鉄鉱、赤鉄鉱、磁赤鉄鉱、磁鉄鉱)が使用されたと推定されることが多い。

巨視的にみれば日本列島内ではベンガラ(P)が採用される傾向が強い。ベンガラ(非P)の採用が顕著な地域や時期も認められ、弥生時代後期から古墳時代の九州北半の一部地域はその典型例である(志

賀2008, 2010)。

本遺跡の墳墓5基から検出されたベンガラは、パイプ状の粒子を含んでおらずベンガラ(非P)に分類できた。このベンガラ(非P)は、実体顕微鏡観察の結果、さらに2つに分類できた。一方は、ST18・ST20の2基で採用されたもので、九州北半で通常みられるベンガラ(非P)に類似した色調を持ち、暗赤色を呈するものである(図1-10, 13)。使用量が少ないためか通常みられる1mm以上のベンガラ小塊は確認し辛い。微量であったため埋蔵環境による汚染を考慮し、十分な科学調査を行っていない。

もう一方は、ST1・ST8・ST13の3基で採用されていたもので、赤土様を呈するものである(図1-1, 4, 6)。通常のベンガラよりも赤みが弱い。赤褐色の粘土状のものや、淡い赤色の小塊中に白色鉱物や空隙が斑点状に認められるものがある。参考までに粉末状態での色調を標準土色帖で示せば、ST1が5YR5/8(明赤褐色)、ST8が2.5YR5/4(にぶい赤褐色)、ST13が2.5YR6/8(橙色)となる。この赤土は、墳墓で通常出土するベンガラと同様の部位から出土しており、弥生時代人がベンガラとして使用していたことが明らかであるため、今回はベンガラと考えた。しかし包含層からの出土であれば、ベンガラとは呼べない色調である。

これら赤土素材のベンガラは、鉄、珪素、アルミニウムを主成分としていた(図2)。通常のベンガラに比べ、珪素とアルミニウムを多く含んでいるようである。X線回折では共通して赤鉄鉱とイライトを検出した(図3)。赤鉄鉱のピークは鋭いものや鈍いものがある。その他、石英、クリストラバイト、ハロイサイトを検出した資料も認められた。通常のベンガラであれば、多くの場合は赤鉄鉱のみが検出され、磁赤鉄鉱、針鉄鉱、磁鉄鉱も検出されることがある。赤土素材のベンガラについては遺跡土壌の混入の可能性を考えると、どの元素や鉱物までがベンガラに伴うものか判断が付かない。さらに、ベンガラ製造時に焼成していた可能性も考えると、データの検討には慎重にならざるを得ない。ここでは、通常のベンガラとは異なり赤土を素材とするベンガラが使用されていたことを指摘するに留めておきたい。

これまで墳墓出土赤色顔料の調査を継続して行っているが、本例のように赤土素材のベンガラが纏まって検出された事例は皆無である。近隣の同時期の墳墓では、多良岳東側にある佐賀県太良町の伊福箱崎遺跡出土 SP02石蓋土墳墓および島原半島西側にある長崎県雲仙市の門山遺跡出土箱式石棺墓の調査を行っている。いずれもベンガラ(P)が採用されており(志賀・本田2006, 志賀・大坪2009)、竹松遺跡の事例とは大きく異なっている。竹松遺跡は通常のベンガラ(非P)の流通圏外縁部にあり、遠隔地から搬入される通常のベンガラ(非P)や地元で調達される赤土素材のベンガラ(非P)を採用していた可能性が考えられる。今後、周辺地域でのベンガラの時空間上の広がりを把握すると共に、原料の産地、生産、流通等の問題も含め調査を継続したいと考えている。

### (3) 赤色顔料の遺構内分布

弥生時代～古墳時代の墳墓主体部での赤色顔料の使用については、本田光子による北部九州の箱式石棺等墳墓を中心とした研究から、以下の3つに分類されている(本田1988, 1995)。

- a類：床面から朱だけが出土するもので、埋葬施設の床面あるいは遺骸から朱だけが検出され、朱は遺骸自身に施されていたものと推定される。
- b類：朱とベンガラが出土するもので、埋葬施設の内面にベンガラを塗布し、床面にもベンガラを散布あるいは塗布した状態にa類の遺骸を納めたものと推定される。



c類：ベンガラだけが出土するもので、埋葬施設内面にベンガラだけを塗布したものと推定される。

a類は弥生時代の初頭から認められる。b類の朱とベンガラの使い分けは、北部九州の弥生時代中期後半もしくは後期中頃に始まり、古墳時代の開始とともに西日本各地に広まったと考えられている典型的な使い方である。近年では、弥生時代終末期の北九州市の城野遺跡1号方形周溝墓のように埋葬施設と頭部で朱を使い分ける事例(志賀2011)も知られるようになってきている。

竹松遺跡では、朱は頭部を中心に、ベンガラは埋葬施設全体に広がる傾向があった。本田の言うように朱は遺骸に、ベンガラは埋葬施設に使用されていたものと考えられる。ST18では頭部のみの資料から朱とベンガラが検出されたが、これまで両者が明瞭に混ぜて使用された事例が知られていないことから、ベンガラは埋葬施設全面に使用されていたものと推定した。

本遺跡での調査結果を本田の分類に当てはめると、a類は11基、b類は3基、c類は2基のうちSR8の1基のみが該当する。SR8と共にベンガラだけが検出されたST13については、床面の資料が無く、b類とc類のどちらに該当するか明らかではないため除外した。

弥生時代後期の九州北半では、b類が典型的な使用方法と考えられているが、本遺跡ではa類が最も多い。この違いは、本田が分析対象とした遺跡は福岡県内が中心であり、長崎県内での分析事例が少なかったことによるものであろう。今後は、九州北半の中でも赤色顔料の使用 방법에地域性がある可能性を考え、分析調査を進める必要がある。

本遺跡で特徴的な赤色顔料の分布状況に、ST1で認められた石棺頭部側小口面への朱の塗布があった。薄い広範囲にしっかり付着しており、塗布されたように見受けられた。

他に特徴的な分布状況として、ST8とST13で検出された石棺壁面石材の上面継目付近に認められたベンガラがある。同じ部分に赤色顔料が認められたST1でも、分析は行っていないが床面と同様にベンガラであったと考えられる。これら継目に施されたように見えるベンガラについては、検討の結果、蓋石の下面(石棺内面)に塗布されたもののうち石棺外に位置する部分についてのみ、地山にパックされる形で遺存したものと考えた。特に今回は赤土素材のベンガラが使用されており、通常のベンガラに比べ石棺表面へ固着し辛く、パックされていない蓋石内面や壁面については容易に剥落する状況であったと思われる。

#### 〈謝辞〉

本研究を実施するにあたり、長崎県教育委員会ならびに同 川畑敏則氏には大変お世話になりました。また、本研究には、日本学術振興会 科研費・基盤研究(B)26284122(分担者：志賀)を使用しました。記して感謝申し上げます。

#### 〈引用・参考文献〉

- 岡田文男1997「パイプ状ベンガラ粒子の復元」『日本文化財科学会第14回大会研究発表要旨集』日本文化財科学会, 38-39頁
- 志賀智史2008「前期前方後円(方)墳から出土するベンガラの地域性に関する研究」『日本文化財科学会第25回大会研究発表要旨集』日本文化財科学会, 196-197頁
- 志賀智史2010「高江辻遺跡出土の赤色顔料について」『高江辻遺跡』筑後市教育委員会, 40-52頁
- 志賀智史2011「城野遺跡出土の赤色顔料について」『城野遺跡1』北九州市芸術文化振興財団埋蔵文化財調査室, 100-109頁
- 志賀智史・本田光子2006「門山遺跡および遠見塚遺跡出土の石棺に付着する赤色顔料」『みなみくしやま 続南串山町郷土誌』

志賀智史・大坪芳典2009「伊福箱崎遺跡出土の石蓋土壙墓に関する赤色顔料について」『伊福箱崎遺跡』佐賀県太良町教育委員会, 13-17頁

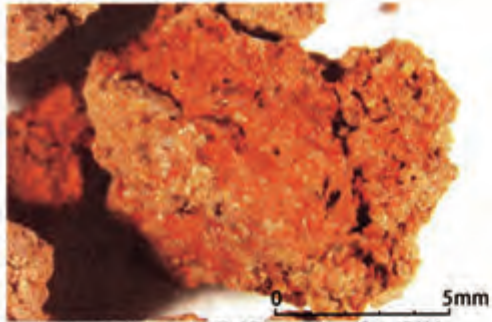
本田光子1988「弥生時代の墳墓出土赤色顔料-北九州地方にみられる使用と変遷-」『九州考古学』第62号, 九州考古学会, 39-49頁

本田光子1995「古墳時代の赤色顔料」『考古学と自然科学』第31・32号(合併号), 日本文化財科学会, 63-79頁

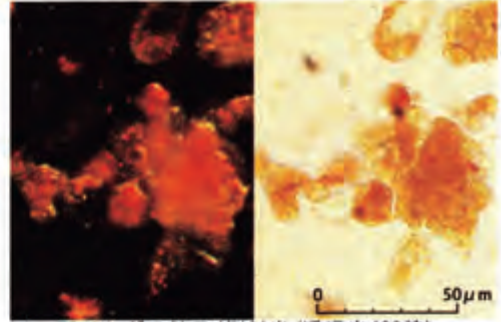
表1 竹松遺跡から出土した赤色顔料の分析結果一覧

新遺構名	旧遺構名	位置	調査方法				各分析結果			赤色顔料の種類	その他の所見
			顕微鏡		XRF	回折・ラマン	生物顕微鏡	XRF	X線回折ラマン(*)		
			実体	生物							
ST1	第1号箱式石棺墓	頭	○	○	○	○	朱, ベンガラ(非P)	Fe, Hg	赤鉄鉱	朱, ベンガラ(非P)	頭の朱は凝集していない。ベンガラ(非P)は赤土素材。
		胸	○	○	○	○	ベンガラ(非P)	Fe	—	ベンガラ(非P)	
		足	○	○	○	○	ベンガラ(非P)	Fe	—	ベンガラ(非P)	
ST5	第5号箱式石棺墓	埋土①下層	○	○	○	○	なし	Fe	—	なし	
		埋土③下層	○	○	○	○	なし	Fe	—	なし	
		頭	○	○	○	○	朱	Fe, Hg	—	朱	
ST6	第6号箱式石棺墓	頭	○	○	○	○	朱	Fe, Hg	—	朱	朱の量は、頭>胸。
		胸	○	○	○	○	朱	Fe, Hg	—	朱	
		足	○	○	○	○	なし	Fe	—	なし	
ST8	第8号箱式石棺墓	頭	○	○	○	○	ベンガラ(非P)	Fe	—	ベンガラ(非P)	ベンガラ(非P)は赤土素材。
		胸	○	○	○	○	ベンガラ(非P)	Fe	—	ベンガラ(非P)	
		足	○	○	○	○	ベンガラ(非P)	Fe	—	ベンガラ(非P)	
		棺外A	○	○	○	○	ベンガラ(非P)	Fe	赤鉄鉱	ベンガラ(非P)	
		棺外B	○	○	○	○	ベンガラ(非P)	Fe	—	ベンガラ(非P)	
		棺外C	○	○	○	○	ベンガラ(非P)	Fe	—	ベンガラ(非P)	
		棺外D	○	○	○	○	ベンガラ(非P)	Fe	—	ベンガラ(非P)	
		棺外E	○	○	○	○	ベンガラ(非P)	Fe	—	ベンガラ(非P)	
		棺外F	○	○	○	○	ベンガラ(非P)	Fe	—	ベンガラ(非P)	
		棺外G	○	○	○	○	ベンガラ(非P)	Fe	—	ベンガラ(非P)	
		棺外H	○	○	○	○	ベンガラ(非P)	Fe	—	ベンガラ(非P)	
ST9	第9号箱式石棺墓	頭	○	○	○	○	なし	Fe	—	なし	
		胸	○	○	○	○	なし	Fe	—	なし	
		足	○	○	○	○	なし	Fe	—	なし	
ST10	第10号箱式石棺墓	頭	○	○	○	○	なし	Fe	—	なし	
		胸	○	○	○	○	なし	Fe	—	なし	
		足	○	○	○	○	なし	Fe	—	なし	
ST11	第11号箱式石棺墓	頭	○	○	○	○	朱	Fe, Hg	—	朱	朱の量は、頭>胸>足。足の朱は、極微量(コンタミレベル)。
		胸	○	○	○	○	朱	Fe, Hg	—	朱	
		足	○	○	○	○	朱	Fe	—	朱	
ST12	第12号箱式石棺墓	頭	○	○	○	○	朱	Fe, Hg	—	朱	朱の量は、頭>胸>足。足の朱は、極微量(コンタミレベル)。
		胸	○	○	○	○	朱	Fe, Hg	—	朱	
		足	○	○	○	○	朱	Fe	—	朱	
ST13	第13号箱式石棺墓	棺外A	○	○	○	○	ベンガラ(非P)	Fe	赤鉄鉱	ベンガラ(非P)	ベンガラ(非P)は赤土素材。
		棺外B	○	○	○	○	ベンガラ(非P)	Fe	—	ベンガラ(非P)	
		棺外C	○	○	○	○	ベンガラ(非P)	Fe	—	ベンガラ(非P)	
		棺外D	○	○	○	○	ベンガラ(非P)	Fe	—	ベンガラ(非P)	
		棺外E	○	○	○	○	ベンガラ(非P)	Fe	—	ベンガラ(非P)	
		棺外F	○	○	○	○	ベンガラ(非P)	Fe	—	ベンガラ(非P)	
		棺外G	○	○	○	○	ベンガラ(非P)	Fe	—	ベンガラ(非P)	
		棺外H	○	○	○	○	ベンガラ(非P)	Fe	—	ベンガラ(非P)	
		棺外I	○	○	○	○	ベンガラ(非P)	Fe	—	ベンガラ(非P)	
		棺外J	○	○	○	○	ベンガラ(非P)	Fe	—	ベンガラ(非P)	
		棺外K	○	○	○	○	ベンガラ(非P)	Fe	—	ベンガラ(非P)	
ST15	第15号箱式石棺墓	頭側小口石	○	○	○	○	朱	Fe, Hg	—	朱	
		頭	○	○	○	○	朱	Fe, Hg	—	朱	
		胸	○	○	○	○	朱	Fe, Hg	—	朱	
		足	○	○	○	○	なし	Fe	—	なし	

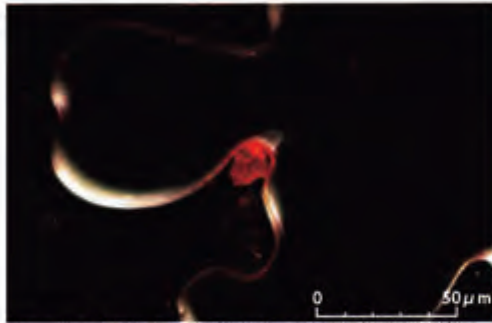
新遺構名	旧遺構名	位置	調査方法				各分析結果			赤色顔料の種類	その他の所見
			顕微鏡		XRF	回折・ラマン	生物顕微鏡	XRF	X線回折ラマン(*)		
			実体	生物							
ST16	第16号箱式石棺墓	頭	○	○	○	—	朱	Fe,Hg	—	朱	腕が最も赤く見える。これは遺存状況の違いか。
		胸	○	○	○	—	朱	Fe,Hg	—	朱	
		腕	○	○	○	—	朱	Fe,Hg	—	朱	
		足	○	○	○	—	なし	Fe	—	なし	
		茶色の粒	○	○	○	—	なし	Fe	—	なし	
ST17	第17号箱式石棺墓	頭	○	○	○	—	朱	Fe,Hg	—	朱	朱の量は、頭>胸>足。足の朱は、極微量(コンタミレベル)。
		胸	○	○	○	—	朱	Fe,Hg	—	朱	
		足	○	○	○	—	朱	Fe,Hg	—	朱	
ST18	第18号箱式石棺墓	頭	○	○	○	○	朱,ベンガラ(非P)	Fe,Hg	辰砂*,赤鉄鉱*	朱,ベンガラ(非P)	ベンガラ(非P)は通常のもの。
ST19	第19号箱式石棺墓	頭	○	○	○	—	朱	Fe,Hg	—	朱	朱の量は、頭>胸>足。足の朱は、極微量(コンタミレベル)。
		胸	○	○	○	—	朱	Fe,Hg	—	朱	
		足	○	○	○	—	朱	Fe	—	朱	
ST20	第20号箱式石棺墓	頭	○	○	○	—	朱,ベンガラ(非P)	Fe,Hg	—	朱,ベンガラ(非P)	ベンガラ(非P)は通常のもの。
		足	○	○	○	—	朱,ベンガラ(非P)	Fe,Hg	—	朱,ベンガラ(非P)	
ST23	第23号箱式石棺墓	頭	○	○	○	—	朱	Fe,Hg	—	朱	
		胸	○	○	○	—	朱	Fe,Hg	—	朱	
		足	○	○	○	—	なし	Fe	—	なし	
ST25	第25号箱式石棺墓		○	○	○	—	なし	Fe	—	なし	
ST31	第4号土墳墓	頭	○	○	○	—	朱	Fe,Hg	—	朱	
		胸	○	○	○	—	朱	Fe,Hg	—	朱	
		足	○	○	○	—	なし	Fe	—	なし	
ST32	第5号土墳墓	頭	○	○	○	—	朱	Fe,Hg	—	朱	朱の量は、頭>胸>足。足の朱は、極微量(コンタミレベル)。
		胸	○	○	○	—	朱	Fe,Hg	—	朱	
		足	○	○	○	—	朱	Fe	—	朱	
SR8	第8号土墳墓		○	○	○	—	朱	Fe,Hg	—	朱	遺構全体が不明瞭なため、報告書本文では欠番とした。



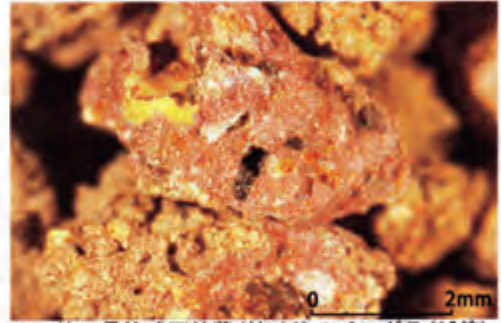
1. 第1号箱式石棺墓(足)のベンガラ(5倍)  
赤土素材。通常のベンガラよりも赤みが弱く、  
粘土状に見える。



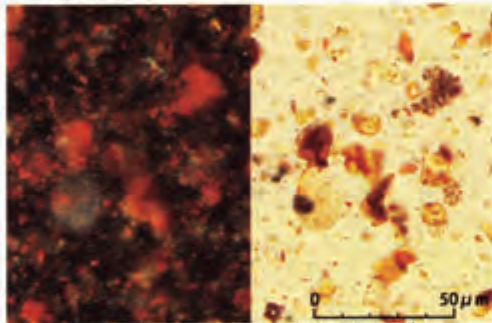
2. 同ベンガラ粒子(側射光/透過光400倍)  
赤色ではあるが、通常のベンガラに認められる  
赤鉄鉱の粒子は少ない。ベンガラ(非P)であっ  
た。



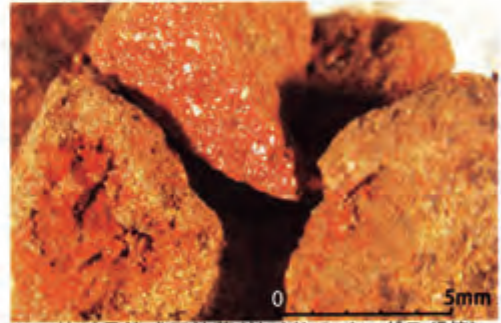
3. 第1号箱式石棺墓(頭)の朱(側射光400倍)  
実体顕微鏡観察では認められなかったが、生物  
顕微鏡観察では認められた。使用量が少なかっ  
たのであろう。



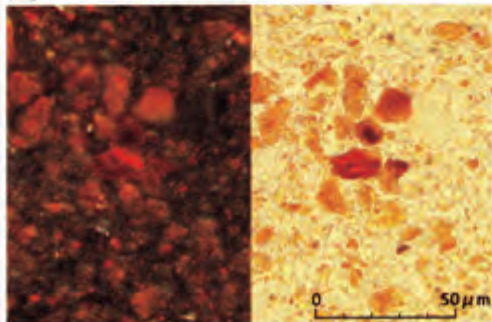
4. 第8号箱式石棺墓(棺外A)のベンガラ(10倍)  
赤土素材。淡い赤色の小塊で白色鉱物や空隙が  
斑点状に入る。



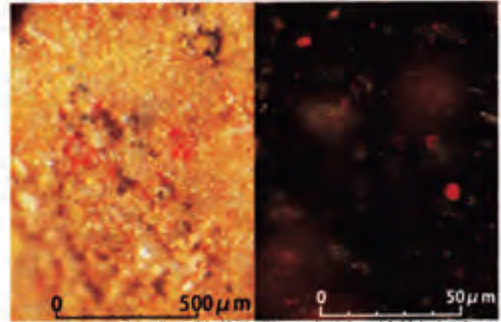
5. 同ベンガラ粒子(側射光/透過光400倍)  
赤色ではあるが、通常のベンガラに認められる  
赤鉄鉱の粒子は少ない。ベンガラ(非P)であっ  
た。



6. 第13号箱式石棺墓(棺外A)のベンガラ(5倍)  
赤土素材。粘土状(左)、それに共存するクサリ  
礫(右)、淡い赤色の角礫状で白色鉱物が斑点  
状に入るもの(上)等が認められる。

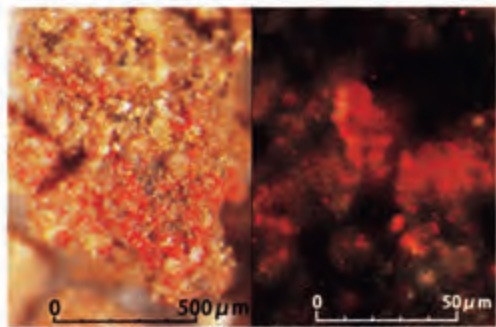


7. 同ベンガラ粒子(側射光/透過光400倍)  
赤色ではあるが、通常のベンガラに認められる  
赤鉄鉱の粒子は少ない。ベンガラ(非P)であっ  
た。

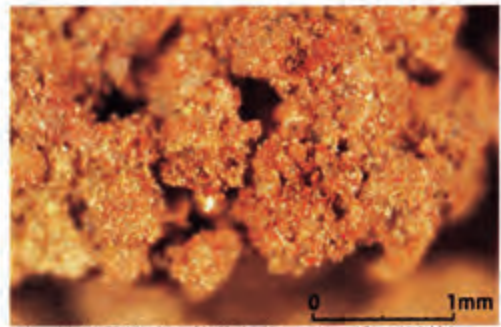


8. 第15号箱式石棺墓(頭)の朱(左:40倍)とその  
粒子(右:側射光400倍)  
実体顕微鏡観察で認められたが、非常に少な  
い。

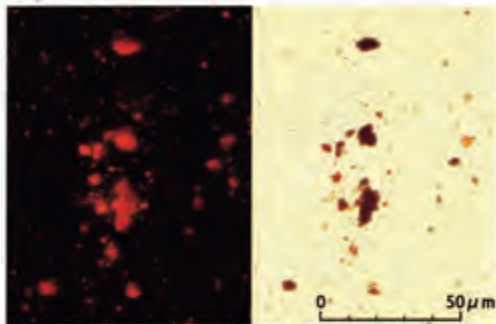
図1-1 赤色顔料の顕微鏡写真



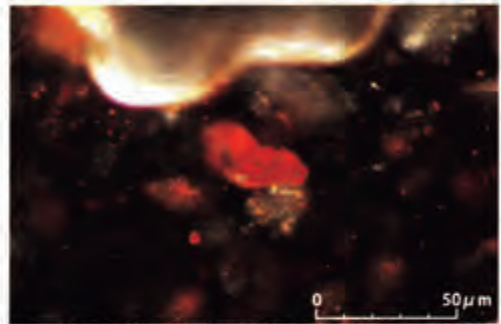
9. 第17号箱式石棺墓(頭)の朱(左:40倍)とその粒子(右:側射光400倍)  
実体顕微鏡観察で認められたが、非常に少ない。



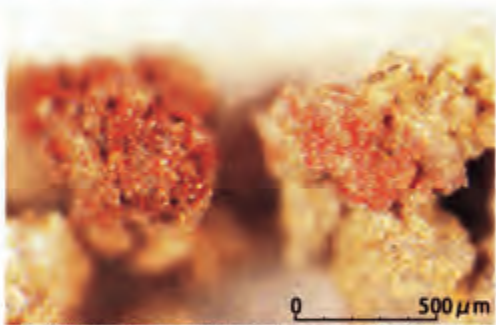
10. 第18号箱式石棺墓(頭)のベンガラ(20倍)  
通常のベンガラに近い色調。使用量が少ないため、ベンガラ小塊は認められない。



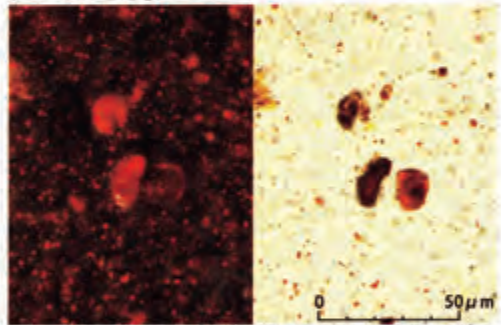
11. 同ベンガラ粒子(側射光/透過光400倍)  
通常のベンガラに認められる赤鉄鉱の粒子と同様。ベンガラ(非P)であった。



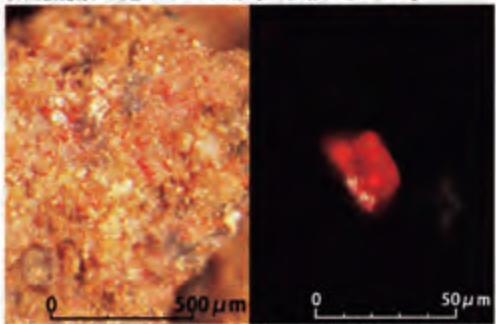
12. 第18号箱式石棺墓(頭)朱粒子(側射光400倍)  
実体顕微鏡観察では認められなかったが、生物顕微鏡観察では認められた。使用量が少なかったのであろう。



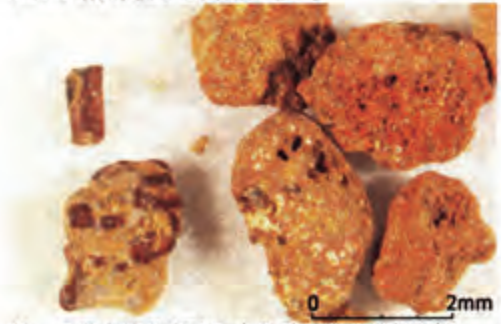
13. 第20号箱式石棺墓(頭)のベンガラ(左)と朱(右)(40倍)  
ベンガラは通常のものに近い色調。朱は実体顕微鏡観察で見つかったが、非常に少ない。



14. 第20号箱式石棺墓(頭)の朱粒子とベンガラ粒子(側射光/透過光400倍)  
中央のルビー色のものが朱粒子。他は通常のベンガラ(非P)粒子と同様のもの。



15. 第5号土坑墓(頭)の朱(左:40倍)とその粒子(右:側射光400倍)  
実体顕微鏡観察で認められたが、非常に少ない。



16. 5号土坑墓(足)の赤色酸化鉄小塊(10倍)  
左は硬質で光沢があり、ベンガラではない。右は円礫状であることから遺跡土壌の含有物と考えた。他の墳墓でも同等なものが確認された。

図1-2 赤色顔料の顕微鏡写真

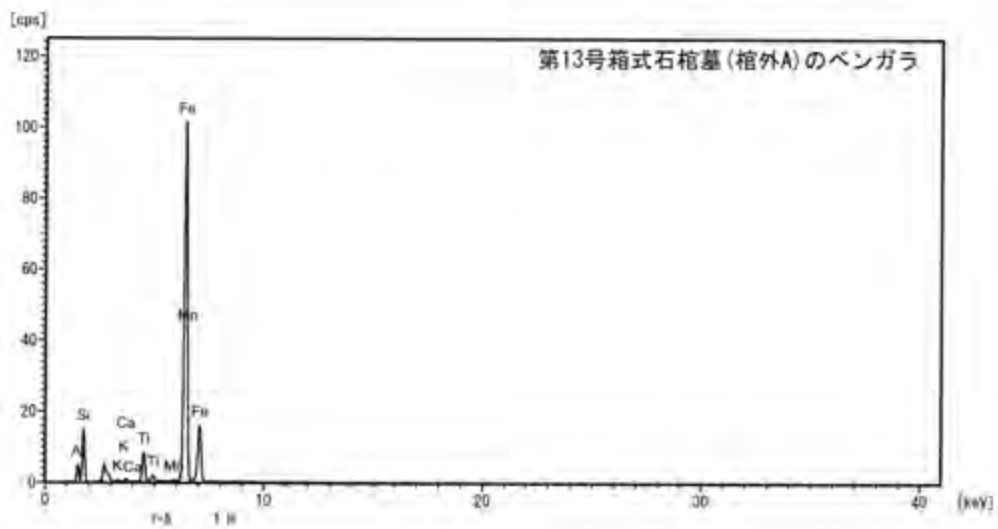
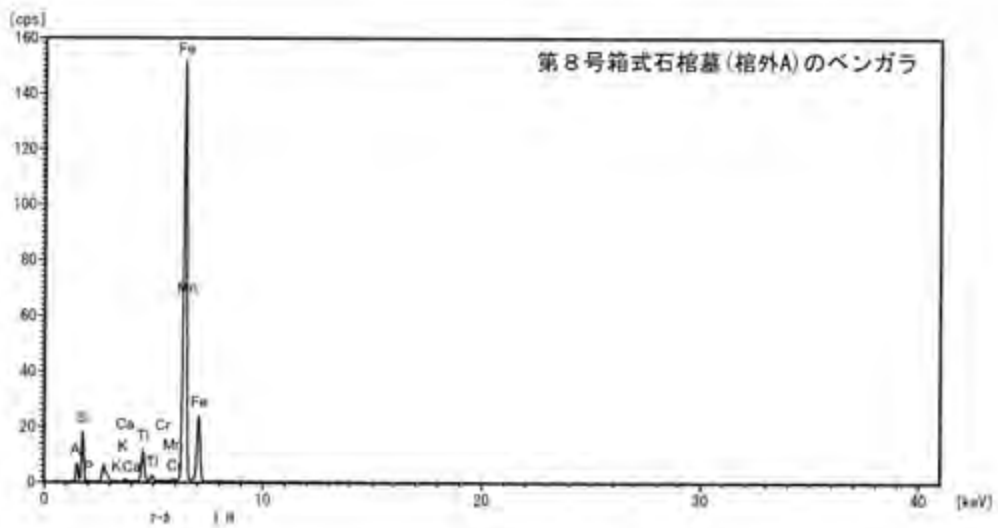
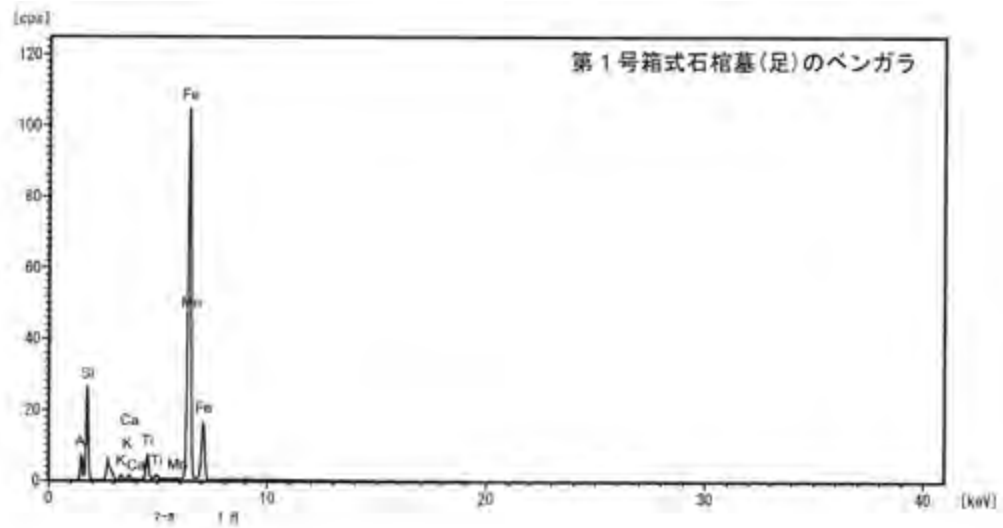


図2 蛍光X線スペクトル図

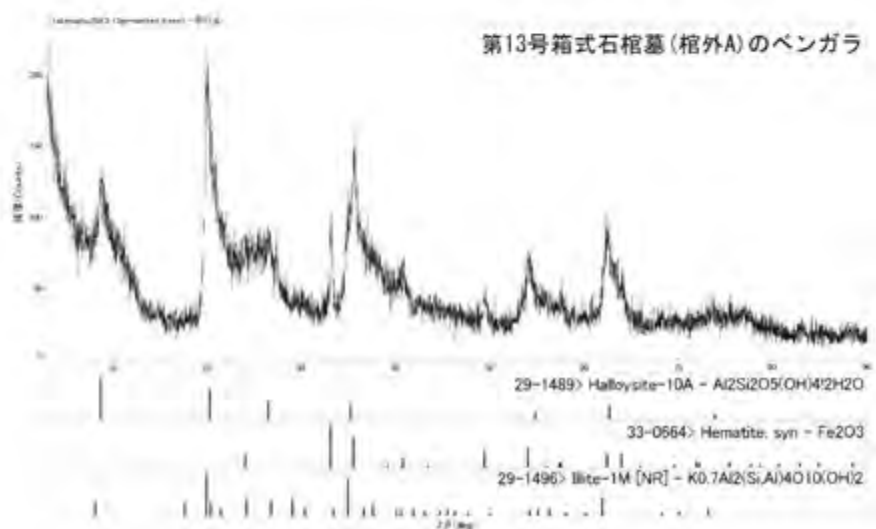
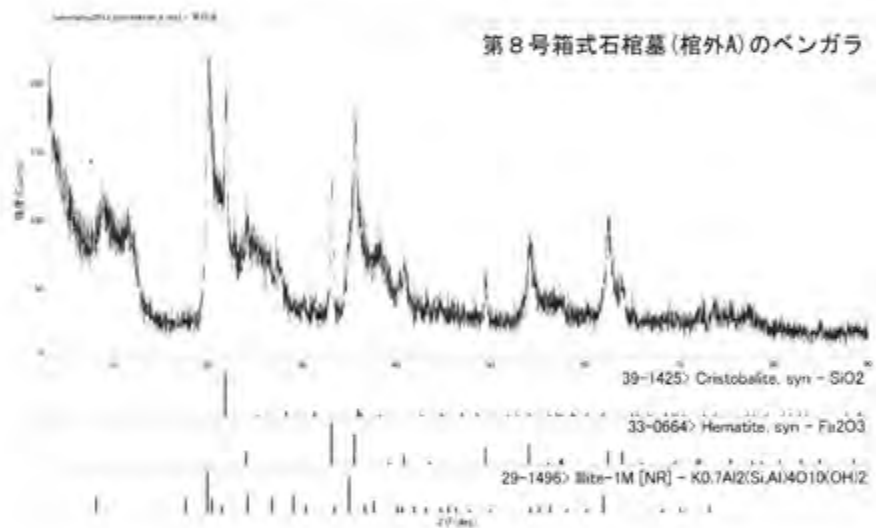
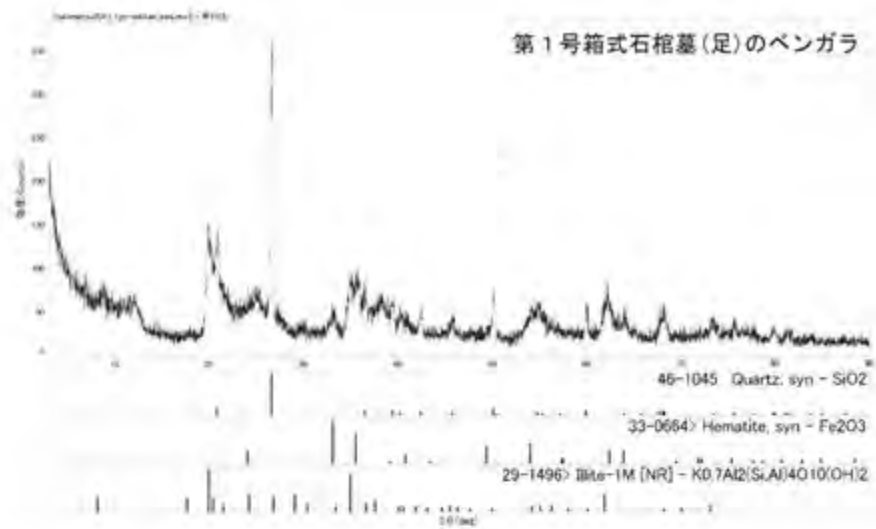


図3 X線回折図

## 竹松遺跡における科学分析

今回報告をした TAK201301～TAK201304調査区で行った自然科学分析と前年度刊行の報告書(長崎県教委編2017『竹松遺跡Ⅱ』)で未報告であった TAK201202調査区の自然科学分析について、採取地点等について説明をしたい。

### 1. 放射性炭素年代測定①(TAK201302調査区) レポートは545頁掲載

試料は破損した甕棺の近くから採取した。採取地点は本報告書 ST36位置図(本文第181図)に記載した(250頁)。

### 2. 放射性炭素年代測定②(TAK201302調査区) レポートは548頁掲載

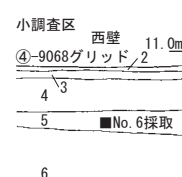
試料採取地点は SK04と SK05である。調査時は別の土坑と認識しており、それぞれに遺構番号を付与したが、2013年度の調査で両遺構は祭祀遺構1であることが分かった。採取地点は本文中「(1)弥生時代の遺構、遺物 57 TAK201302①祭祀遺構1」256頁に記載した。放射性炭素年代測定③で測定した試料(測定番号 PLD-25972)より上層からの採取である。

### 3. 放射性炭素年代測定③(TAK201302調査区) レポートは550頁掲載

試料は3点ある。資料No.14(測定番号 PLD-25972)は、大調査区201302小調査区①祭祀遺構1から出土した。放射性炭素年代測定②の SK04採取試料、SK05採取試料より下層からの採取である。採取地点は本文中「(1)弥生時代の遺構、遺物 57 TAK201302①祭祀遺構1」256頁に記載した。

試料No.15(測定番号 PLD-25973)は、大調査区201303小調査区 A 区で検出した弥生時代の焼土面から採取した。採取時点等詳細については来年度刊行予定の『竹松遺跡Ⅳ』で行う。科学分析の結果については『竹松遺跡Ⅳ』で再掲載する。

試料No.16(測定番号 PLD-25974)は、大調査区201303小調査区 A 区で検出した竪穴建物跡(SC1)から採取した。採取地点は本文中「(1)弥生時代の遺構、遺物 2 TAK201303A5区 SC1(竪穴建物)」147頁に記載した。



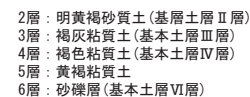
### 4. 花粉分析および寄生虫卵分析 レポートは554頁掲載

6点の試料の科学分析を行ったが、いずれも2012年度(平成24年度)の調査分である(長崎県教委編2017『竹松遺跡Ⅱ』)。採集地点は第6図に示した。

#### ①No.6 : TAK201202④-9058グリッド 西壁5層(第1・6図)

砂礫層の上にある黄褐色粘質土である。他調査区では部分的に見られるが、④区では堆積も厚く面的な広がりが見られたために試料とした。縄文時代晩期の遺物で占められており、当時代の包含層と考えられる。

第1図 No.6採取土層



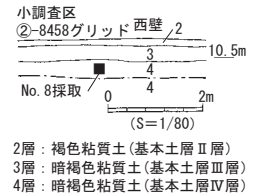


②No.7 : TAK201202①-8056グリッド SK20覆土(第6図)

採取時は土坑と認識をしていたが、その後3層の浅い窪みに中世の包含層である2層がたまつたものと分かった。遺構番号は欠番となるが分析報告文ではそのまま記載している。

③No.8 : TAK201202②-8458 西壁4層(第2・6図)

弥生時代の遺構を確認した層である。今回本文で報告した弥生時代の祭祀遺構2 261頁はこの層から検出した。



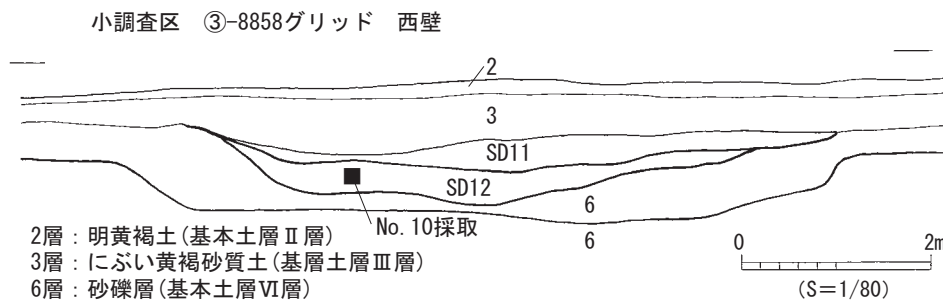
第2図 No.8採取土層

④No.9 : TAK201202⑦-8464 SD 2覆土(第6図)

中世の大規模な区画溝を切っている溝である。この遺構についての報告は来年度刊行予定の『竹松遺跡Ⅳ』で行う。科学分析の結果については『竹松遺跡Ⅳ』で再掲載したい。

⑤No.10 : TAK201202③-8858 西壁 SD 7覆土(第3・6図)

科学分析の依頼後、遺構番号を振り替えたために『竹松遺跡Ⅱ』(長崎県教委編2017)での報告番号はSD12となっている。東から南へ流れる自然流路で、古代の遺物が多く出土した。遺物の年代から10世紀代に埋没したと考えられる。



第3図 No.10採取土層

⑥No.11 : TAK201202⑦-8464 SD 3覆土(第6図)

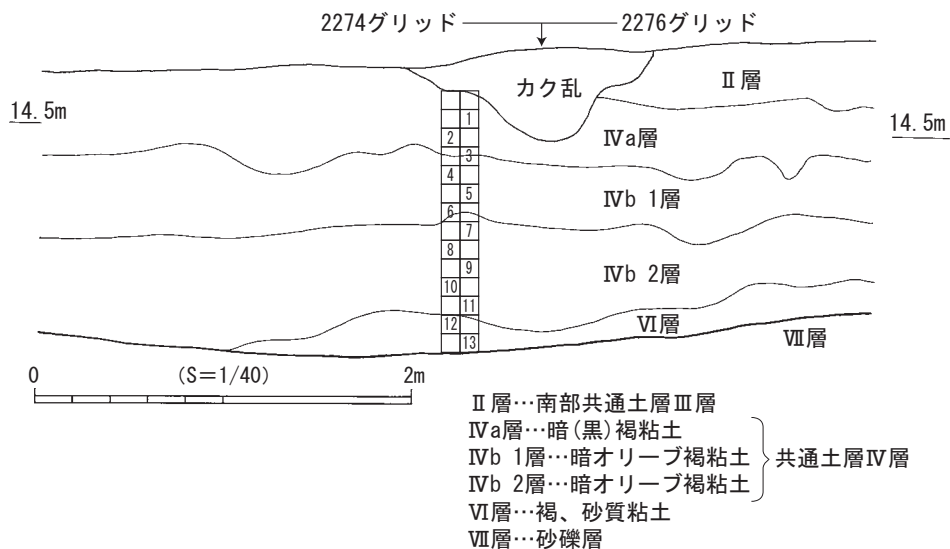
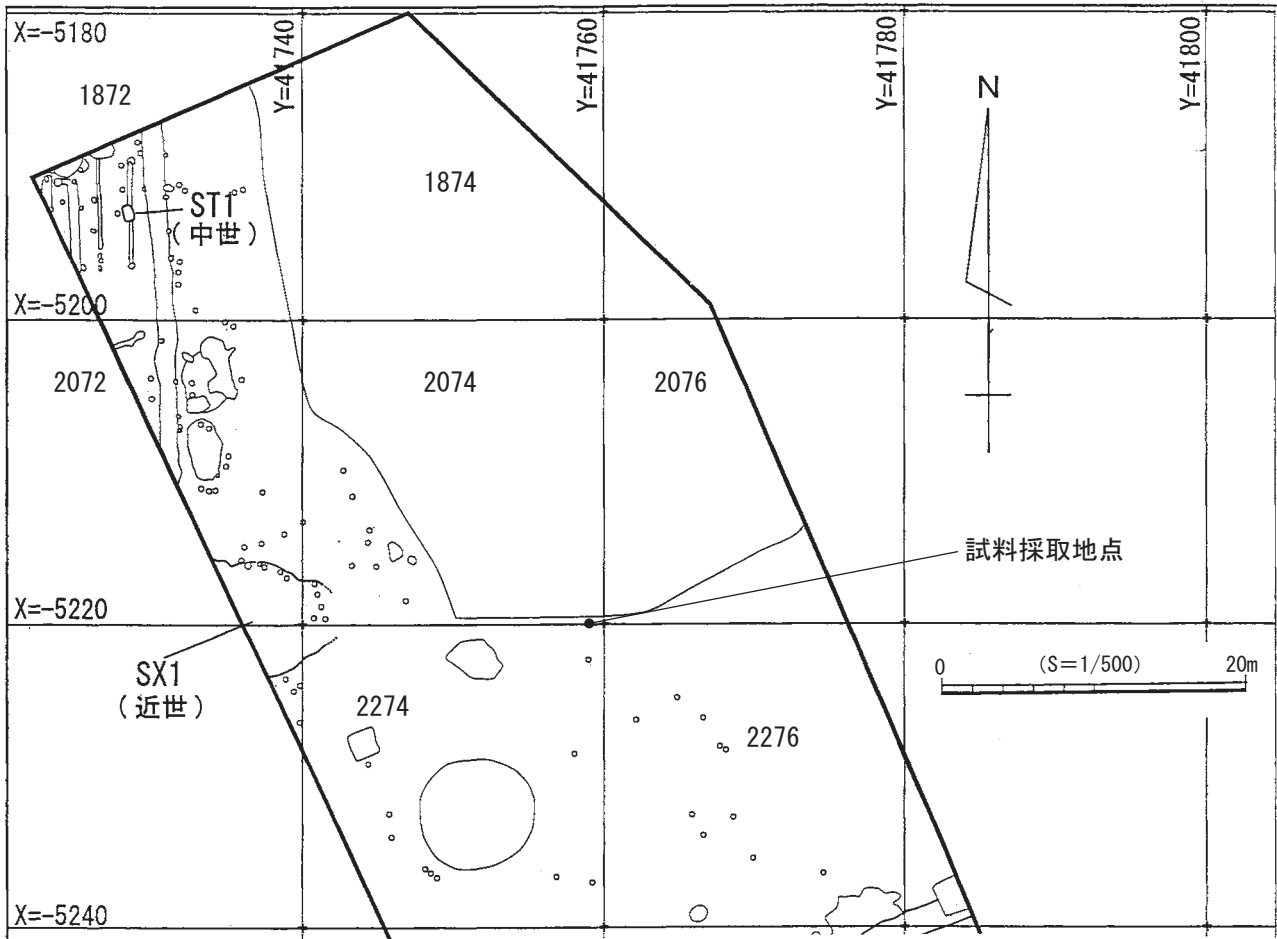
中世の大規模な区画溝である。この遺構についての報告は来年度刊行予定の『竹松遺跡Ⅳ』で行う。科学分析の結果については『竹松遺跡Ⅳ』で再掲載したい。

5. 炭化在材の樹種同定 レポートは557頁掲載

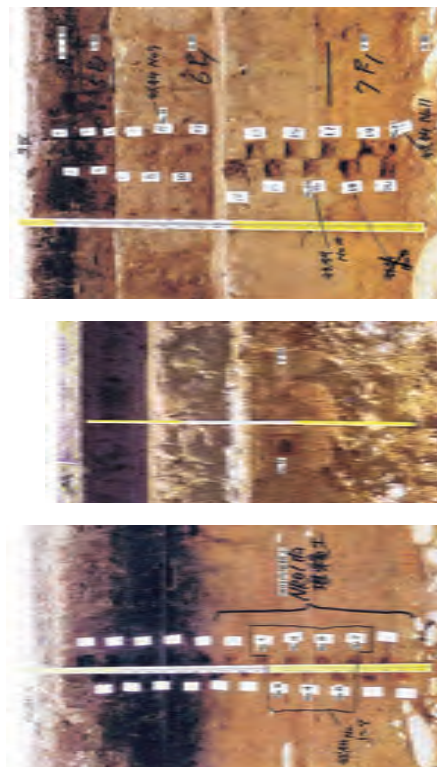
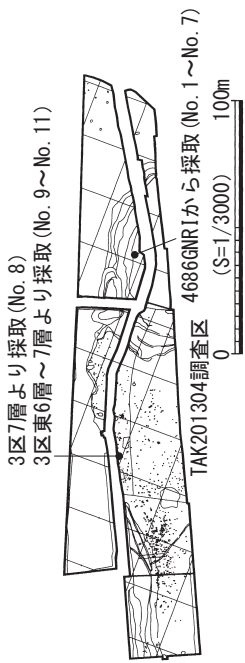
大調査区201303小調査区 A 区8874グリッド内で検出した竪穴建物跡(SC1)内より採取した。本稿「3. 放射性炭素③」の項で説明をした試料No.16と同一材である。遺構の詳細は本文中「(1)弥生時代の遺構、遺物 2 TAK201303A5区 SC1(竪穴建物)」147頁に記載した。

6. テフラ分析(第4・5図)レポートは201301調査区は559頁。201304調査区は566頁に掲載。

本報告書の201301調査区D区2274グリッド北壁で試料を採取した(第4図)。IV層はIVa、IVb-1、IVb-2と細分しているが、基本土層のIV層で黄ボクに当たる。VI層は当地区で部分的に見られる層である。VII層は基本土層VI層の地山である砂礫層である。試料はIV層・VI層を10cm方眼で区切り、上から順に採取を行った。201304調査区の採集資料で、3区東6層は共通土層V層に相当し、3区東7層と3区7層は3区を中心部分的に見られる層である(第5図)。



第4図 TAK201301調査区 調査区D区2274グリッド北壁 テフラ分析試料採取地点



4686G NRI 3区7層  
3区東6層~7層  
第5図 TAK201304調査区テフラ分析試料採取地点



第6図 自然科学分析 (2012年度調査 TAK201202調査区分) 試料採取地点 (花粉分析および寄生虫卵分析)

# 1. 放射性炭素年代測定①

株式会社古環境研究所

## (1) はじめに

放射性炭素年代測定は、光合成や食物摂取などにより生物体内に取り込まれた放射性炭素( $^{14}\text{C}$ )の濃度が、放射性崩壊により時間とともに減少することを利用した年代測定法である。樹木や種実などの植物遺体、骨、貝殻、土壌、土器付着炭化物などが測定対象となり、約5万年前までの年代測定が可能である。

## (2) 試料と方法

次表に、試料の採取箇所、種類、前処理・調整法および測定法を示す。

試料名	採取箇所	種類	前処理・調整	測定法
No.1	②-8458 (No.303), 洪水砂層中	土壌(黒色腐植土)	酸洗浄	AMS

AMS: 加速器質量分析法 (Accelerator Mass Spectrometry)

## (3) 測定結果

加速器質量分析法(AMS)によって得られた $^{14}\text{C}$ 濃度について同位体分別効果の補正を行い、放射性炭素( $^{14}\text{C}$ )年代および暦年代(較正年代)を算出した。次表にこれらの結果を示す。

試料名	測定No. (Beta-)	未補正 $^{14}\text{C}$ 年代 (年 BP)	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	$^{14}\text{C}$ 年代 (年 BP)	暦年代(2 $\sigma$ : 95%確率)
No.1	339041	2020 $\pm$ 30	-25.2	2020 $\pm$ 30	Cal BC90~70, BC60~AD30, AD40~50

BP: Before Physics (Present), Cal: Calibrated, BC: 紀元前, AD: 西暦紀元

### ① 未補正 $^{14}\text{C}$ 年代

試料の $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ 比から、単純に現在(AD1950年)から何年前かを計算した値。 $^{14}\text{C}$ の半減期は5,730年であるが、国際的慣例により Libby の5568年を用いている。

### ② $\delta^{13}\text{C}$ 測定値

試料の測定 $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ 比を補正するための炭素安定同位体比( $^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$ )。この値は標準物質(PDB)の同位体比からの千分偏差(‰)で表す。試料の $\delta^{13}\text{C}$ 値を-25(‰)に標準化することで同位体分別効果を補正している。

### ③ $^{14}\text{C}$ 年代

$\delta^{13}\text{C}$ 測定値により同位体分別効果を補正して算出した年代。暦年代較正にはこの年代値を使用する。

### ④ 暦年代(Calendar Years)

過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中 $^{14}\text{C}$ 濃度の変動および $^{14}\text{C}$ の半減期の違いを較正することで、より実際の年代値に近づけることができる。暦年代較正には、年代既知の樹木年輪の詳細な $^{14}\text{C}$ 測定値およびサンゴのU/Th(ウラン/トリウム)年代と $^{14}\text{C}$ 年代の比較により作成された較正曲線(IntCal09)を使用した。暦年代は、 $^{14}\text{C}$ 年代値の偏差の幅を較正曲線に投影した年代の幅を表し、ここ

では信頼限界 $2\sigma$ (95%確率)で示した。較正曲線が不安定な年代では、複数の値が表記される場合もある。

#### (4) 所見

加速器質量分析法(AMS)による放射性炭素年代測定の結果、No.1では $2020 \pm 30$ 年 BP( $2\sigma$ の暦年代で BC90~70, BC60~AD30, AD40~50年)の年代値が得られた。なお、No.1には炭化材などの炭化物が含まれておらず、年代測定の対象になるのは有機質を含む土壌(黒色腐植土)のみであった(予備試料4点も同様)。土壌試料による年代測定結果は、その土壌が生成された当時の年代を示しており、文化層としての年代観とは必ずしも一致しない場合がある。

#### 文献

Paula J Reimer et al.,(2009)IntCal 09 and Marine 09 Radiocarbon Age Calibration Curves,0-50,000 Years cal BP. Radiocarbon,51,p.1111-1150.

中村俊夫(2003)放射性炭素年代測定法と暦年代較正. 環境考古学マニュアル. 同成社, p. 301-322.



TAK 201202  
②-8458  
年瀬1サンワル 1. (No.303)  
2012.12.04



# CALIBRATION OF RADIOCARBON AGE TO CALENDAR YEARS

(Variables: C13/C12=-25.2;lab. mult=1)

Laboratory number: Beta-339041

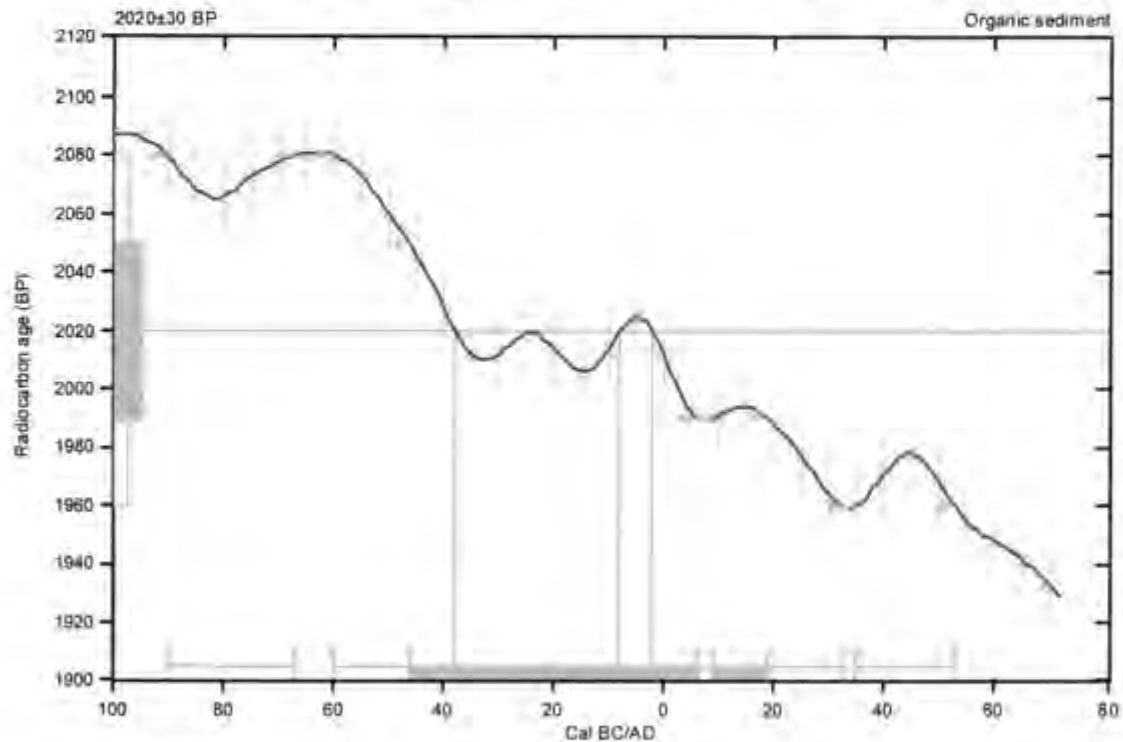
Conventional radiocarbon age: 2020±30 BP

2 Sigma calibrated results: Cal BC 90 to 70 (Cal BP 2040 to 2020) and  
(95% probability) Cal BC 60 Cal AD 30 (Cal BP 2010 to 1920) and  
Cal AD 40 to 50 (Cal BP 1920 to 1900)

Intercept data

Intercepts of radiocarbon age  
with calibration curve: Cal BC 40 (Cal BP 1990) and  
Cal BC 10 (Cal BP 1960) and  
Cal BC 0 (Cal BP 1950)

1 Sigma calibrated results: Cal BC 50 Cal AD 10 (Cal BP 2000 to 1940) and  
(68% probability) Cal AD 10 to 20 (Cal BP 1940 to 1930)



## References:

### Database used

INTCAL09

### References to INTCAL09 database

Heaton, et al., 2009, *Radiocarbon* 51(4):1151-1164, Reimer, et al., 2009, *Radiocarbon* 51(4):1111-1150,

Suiver, et al., 1993, *Radiocarbon* 35(1):1-244, Oeschger, et al., 1975, *Tellus* 27:168-192

### Mathematics used for calibration scenario

A Simplified Approach to Calibrating C14 Dates

Talma, A. S., Vogel, J. C., 1993, *Radiocarbon* 35(2):317-322

## Beta Analytic Radiocarbon Dating Laboratory

4985 S.W. 74th Court, Miami, Florida 33155 • Tel: (305)667-5167 • Fax: (305)663-0964 • E-Mail: beta@radiocarbon.com

## 2. 放射性炭素年代測定②

パリノ・サーヴェイ株式会社

### (1) はじめに

今回の分析調査では、竹松遺跡の発掘調査で検出された遺構の形成埋没にかかわる年代情報を得ることを目的として、出土炭質物の放射性炭素年代測定を実施する。

### (2) 試料

測定試料は、SK04(Na428)とSK05(Na425)から出土した炭質物2点である。試料は、いずれも微細な炭質物破片、焼骨微細片が混じる堆積物からなり、その中から炭質物のみを抽出し、測定試料とした。

### (3) 分析方法

試料に付着している土壌や根などの目的物と異なる物質をピンセット、超音波洗浄などにより物理的に除去する。その後HClによる炭酸塩等酸可溶成分の除去、NaOHによる腐植酸等アルカリ可溶成分の除去、HClによりアルカリ処理時に生成した炭酸塩等酸可溶成分を除去する(酸・アルカリ・酸処理)。

試料をバイコール管に入れ、1gの酸化銅(II)と銀箔(硫化物を除去するため)を加えて、管内を真空にして封じきり、500℃(30分)850℃(2時間)で加熱する。液体窒素と液体窒素+エタノールの温度差を利用し、真空ラインにてCO<sub>2</sub>を精製する。真空ラインにてバイコール管に精製したCO<sub>2</sub>と鉄・水素を投入し封じ切る。鉄のあるバイコール管底部のみを650℃で10時間以上加熱し、グラファイトを生成する。化学処理後のグラファイト・鉄粉混合試料を内径1mmの孔にプレスして、タンデム加速器のイオン源に装着し、測定する。

測定機器は、3MV小型タンデム加速器をベースとした14C-AMS専用装置(NEC Pelletron9SDH-2)を使用する。AMS測定時に、標準試料である米国国立標準局(NIST)から提供されるシュウ酸(HOX-II)とバックグラウンド試料の測定も行う。また、測定中同時に13C/12Cの測定も行うため、この値を用いて $\delta^{13}C$ を算出する。

放射性炭素の半減期はLIBBYの半減期5568年を使用する。また、測定年代は1950年を基点とした年代(BP)であり、誤差は標準偏差(One Sigma; 68%)に相当する年代である。なお、暦年較正は、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV6.0.0(Copyright1986-2010M Stuiver and PJ Reimer)を用い、誤差として標準偏差(One Sigma)を用いる。

暦年較正とは、大気中の14C濃度が一定で半減期が5568年として算出された年代値に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の14C濃度の変動、及び半減期の違い(14Cの半減期5730±40年)を較正することである。暦年較正に関しては、本来10年単位で表すのが通例であるが、将来的に暦年較正プログラムや暦年較正曲線の改正があった場合の再計算、再検討に対応するため、1年単位で表している。暦年較正は、測定誤差 $\sigma$ 、 $2\sigma$ ( $\sigma$ は統計的に真の値が68%、 $2\sigma$ は真の値が95%の確率で存在する範囲)双方の値を示す。また、表中の相対比とは、 $\sigma$ 、 $2\sigma$ の範囲をそれぞれ1とした場合、その範囲内で真の値が存在する確率を相対的に示したものである。

表1. 放射性炭素年代測定結果および暦年較正結果

試料名	処理方法	測定年代 BP	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	補正年代 (暦年較正用) BP	暦年較正結果				Code No.
					誤差	cal BC		cal BP	
SK05 (No.425) 炭質物	AAA	1,770 ± 30	-25.90 ± 0.33	1,790 ± 30 (1,790 ± 25)	$\sigma$	cal AD 144 - cal AD 147	cal BP 1,806 - 1,803	0.019	IAAA-130207
						cal AD 171 - cal AD 193	cal BP 1,779 - 1,757	0.161	
					$2\sigma$	cal AD 211 - cal AD 257	cal BP 1,739 - 1,693	0.640	
						cal AD 299 - cal AD 319	cal BP 1,651 - 1,631	0.181	
SK04 (No.428) 炭質物	AaA	1,750 ± 30	-18.59 ± 0.35	1,860 ± 30 (1,859 ± 25)	$\sigma$	cal AD 91 - cal AD 99	cal BP 1,859 - 1,851	0.070	IAAA-130208
						cal AD 124 - cal AD 179	cal BP 1,826 - 1,771	0.638	
					$2\sigma$	cal AD 187 - cal AD 213	cal BP 1,763 - 1,737	0.292	
						cal AD 83 - cal AD 226	cal BP 1,867 - 1,724	1.000	

1) 処理方法のAAAは、酸処理—アルカリ処理—酸処理を示す。アルカリ濃度が1Mに達した場合はAAA, 1M未満の場合はAaAと記載する。

2) BP年代値の算出には、Libbyの半減期5568年を使用した。BP年代値は、1950年を基点として何年前であるかを示す。付記した誤差は、測定誤差 $\sigma$ (測定値の68%が入る範囲)を年代値に換算した値。

3) 暦年の計算には、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV6.0(Copyright 1986-2010 M Stuiver and PJ Reimer)を使用した。(暦年の計算には、補正年代に( )で暦年較正用年代として示した、一桁目を丸める前の値を使用している)年代値は、1桁目を丸めるのが慣例だが、暦年較正曲線や暦年較正プログラムが改正された場合の再計算や比較が行いやすいように、暦年較正年代値は1桁目を丸めていない、相対比は、 $\sigma$ 、 $2\sigma$ のそれぞれを1とした場合、確率的に真の値が存在する比率を相対的に示したものである。統計的に真の値が入る確率は $\sigma$ は68.3%、 $2\sigma$ は95.4%である。

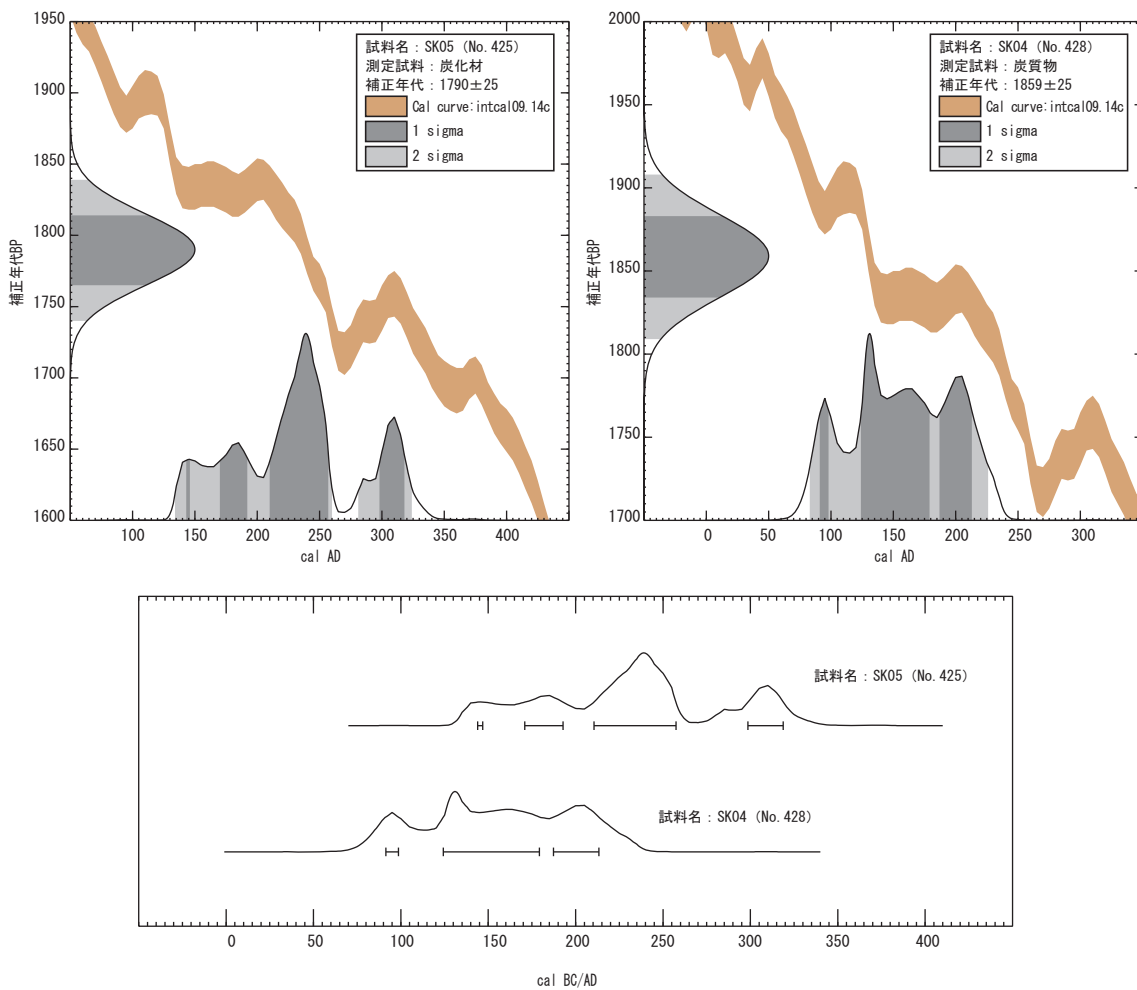


図1 暦年較正結果



#### (4) 結果

放射性炭素年代測定結果および暦年較正結果を表1、各試料の較正暦年代の確率分布を図1に示す。各遺構の炭質物の同位体効果の補正を行った年代測定結果(補正年代)は、SK05の炭質物(No.425)が $1,790 \pm 30BP$ 、SK04の炭質物(No.428)が $1,860 \pm 30BP$ を示した。また、暦年較正年代(測定誤差 $2\sigma$ : 確率1位)は、SK05の炭質物(No.425)が cal AD134 – 260、SK04の炭質物(No.428)が cal AD 83 – 226を示した。このように今回調査を実施したSK05およびSK04の充填堆積物中の出土炭質物の年代値は、ほぼ近似する値を示した。これらの年代値は、西本編(2006)による北部九州の土器付着物の年代値を参考にすると、いずれも弥生時代後期の年代を示していることになる。今回測定対象とした炭質物は、発掘調査所見として遺構機能期に堆積したものと推定されていることから、土坑SK04・SK05は弥生時代後期に構築されたことが推定される。

#### 引用文献

西本豊弘編, 2007, 新弥生時代のはじまり 第2巻縄文時代から弥生時代へ, 雄山閣, 185p.

### 3. 放射性炭素年代測定③

パレオ・ラボ AMS年代測定グループ

伊藤 茂・安昭炫・佐藤正教・廣田正史・山形秀樹・小林紘一

Zaur Lomtadidze・Ineza Jorjoliani・小林克也・中村賢太郎

#### (1) はじめに

長崎県大村市に位置する竹松遺跡で出土した試料について、加速器質量分析法(AMS法)による放射性炭素年代測定を行った。なお、一部の測定試料について樹種同定が行われている(樹種同定の項参照)。

#### (2) 試料と方法

試料は、弥生時代の遺構3基から1点ずつ採取された炭化材計3点である。測定試料の情報、調製データは表1のとおりである。SK01は、供献土器の上に位置する浅い土坑で、土坑内から焼けた人骨と炭化物が出土している。SK01から試料として炭化材(最終形成年輪無し)が採取された(PLD-25972)。住居跡外に位置し、焼土面を有するSL05からは、試料として炭化材(最終形成年輪無し)が採取された

表1 測定試料および処理

測定番号	遺跡データ	試料データ	前処理
PLD-25972	遺構: ①-SK01 遺物No.炭化物No.2 試料No.14	種類: 炭化材 試料の性状: 最終形成年輪以外部位不明 状態: dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸: 1.2N, 水酸化ナトリウム: 1.0N, 塩酸: 1.2N)
PLD-25973	調査区: A5区 遺構: SL-05 位置: 焚口 試料No.15	種類: 炭化材 試料の性状: 最終形成年輪以外部位不明 状態: dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸: 1.2N, 水酸化ナトリウム: 1.0N, 塩酸: 1.2N)
PLD-25974	調査区: A区 遺構: SC1 試料No.16	種類: 炭化材(サカキ) 試料の性状: 最終形成年輪 状態: dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸: 1.2N, 水酸化ナトリウム: 1.0N, 塩酸: 1.2N)

(PLD-25973)。竪穴住居跡 SC1からは、試料として最終形成年輪を有する炭化材(サカキ)が採取された(PLD-25974)。試料は調製後、加速器質量分析計(パレオ・ラボ、コンパクト AMS: NEC製1.5SDH)を用いて測定した。得られた<sup>14</sup>C濃度について同位体分別効果の補正を行った後、<sup>14</sup>C年代、暦年代を算出した。

表2 放射性炭素年代測定および暦年較正の結果

測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	暦年較正用年代 (yrBP $\pm 1\sigma$ )	<sup>14</sup> C年代 (yrBP $\pm 1\sigma$ )	<sup>14</sup> C年代の暦年代に較正した年代範囲	
				1 $\sigma$ 暦年代範囲	2 $\sigma$ 暦年代範囲
PLD-25972	-27.86 $\pm$ 0.19	1866 $\pm$ 20	1865 $\pm$ 20	86AD (17.8%) 109AD 118AD (39.4%) 170AD 194AD (11.0%) 210AD	81AD (95.4%) 220AD
PLD-25973	-26.70 $\pm$ 0.21	2041 $\pm$ 20	2040 $\pm$ 20	88BC (10.4%) 76BC 56BC (57.8%) 1AD	151BC (0.7%) 146BC 111BC (94.7%) 21AD
PLD-25974	-29.86 $\pm$ 0.20	2018 $\pm$ 20	2020 $\pm$ 20	45BC (68.2%) 5AD	86BC (1.2%) 79BC 55BC (90.8%) 30AD 37AD (3.3%) 51AD

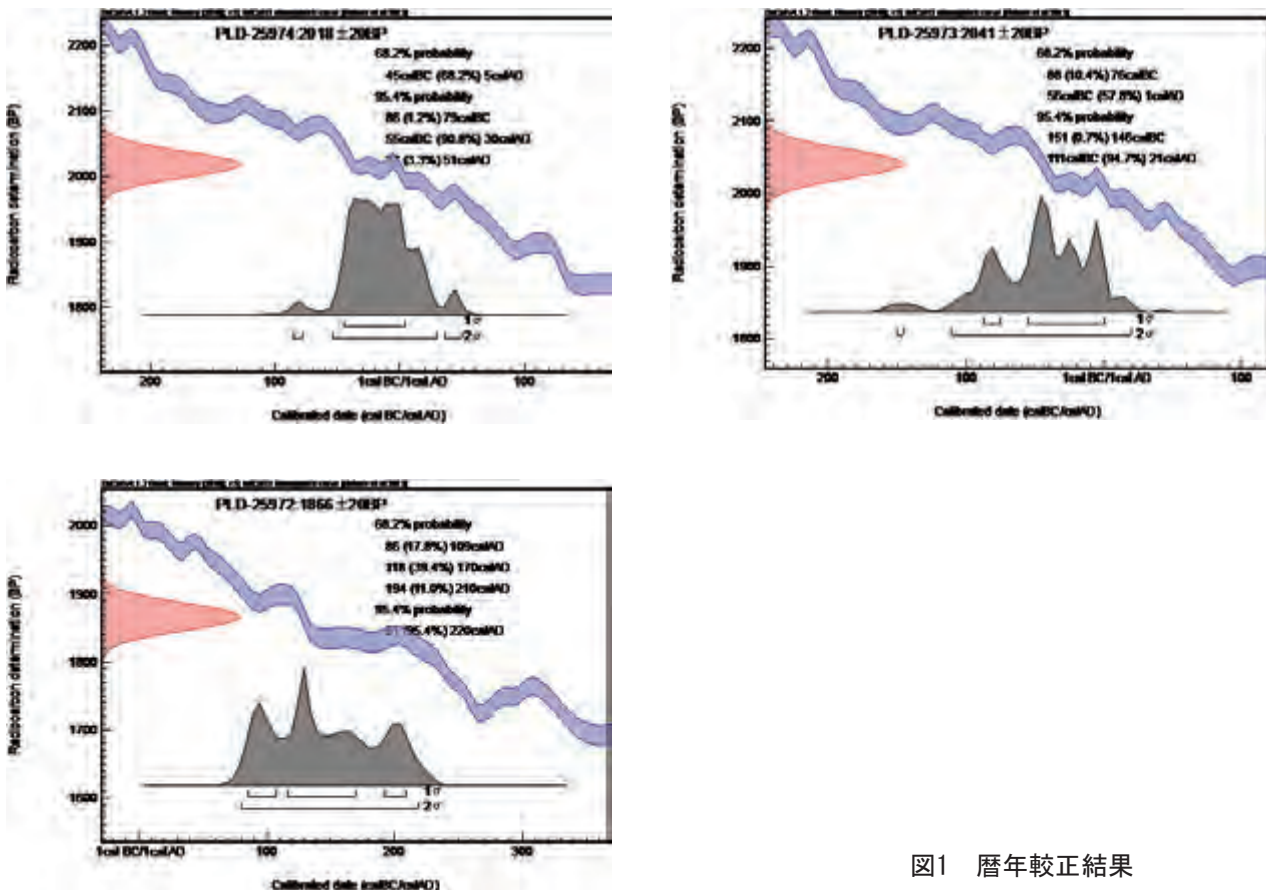


図1 暦年較正結果

### (3) 結果

表2に、同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比( $\delta^{13}\text{C}$ )、同位体分別効果の補正を行って暦年較正に用いた年代値と較正によって得られた年代範囲、慣用に従って年代値と誤差を丸めて表示した $^{14}\text{C}$ 年代を、図1に暦年較正結果をそれぞれ示す。暦年較正に用いた年代値は下1桁を丸めていない値であり、今後暦年較正曲線が更新された際にこの年代値を用いて暦年較正を行うために記載した。

$^{14}\text{C}$ 年代はAD1950年を基点にして何年前かを示した年代である。 $^{14}\text{C}$ 年代(yrBP)の算出には、 $^{14}\text{C}$ の半減期としてLibbyの半減期5568年を使用した。また、付記した $^{14}\text{C}$ 年代誤差( $\pm 1\sigma$ )は、測定の統計誤差、標準偏差等に基づいて算出され、試料の $^{14}\text{C}$ 年代がその $^{14}\text{C}$ 年代誤差内に入る確率が68.2%であることを示す。

なお、暦年較正の詳細は以下のとおりである。

暦年較正とは、大気中の $^{14}\text{C}$ 濃度が一定で半減期が5568年として算出された $^{14}\text{C}$ 年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の $^{14}\text{C}$ 濃度の変動、および半減期の違い( $^{14}\text{C}$ の半減期 $5730 \pm 40$ 年)を較正して、より実際の年代値に近いものを算出することである。 $^{14}\text{C}$ 年代の暦年較正にはOxCal4.1(較正曲線データ: IntCal13)を使用した。なお、 $1\sigma$ 暦年代範囲は、OxCalの確率法を使用して算出された $^{14}\text{C}$ 年代誤差に相当する68.2%信頼限界の暦年代範囲であり、同様に $2\sigma$ 暦年代範囲は95.4%信頼限界の暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値は、その範囲内に暦年代が入る確率を意味する。グラフ中の縦軸上の曲線は $^{14}\text{C}$ 年代の確率分布を示し、二重曲線は暦年較正曲線を示す。

### (4) 考察

以下、 $2\sigma$ 暦年代範囲(確率95.4%)に着目して結果を整理する。なお、弥生土器編年と暦年代との対応関係について、藤尾(2009)を参照した。

SK01の炭化材(PLD-25972)は、 $^{14}\text{C}$ 年代が $1865 \pm 20$ yr BP、 $2\sigma$ 暦年代範囲が81-220cal AD(95.4%)、すなわち1世紀後半~3世紀前半であった。この年代は弥生時代後期に相当する。ただし、SK01の炭化材は最終形成年輪ではないため、古木効果の影響を考慮する必要がある。つまり、木材は内側の年輪と外側の年輪では、形成時期が異なるため、 $^{14}\text{C}$ 年代も異なる。樹皮直下の最終形成年輪を測定すれば木材の枯死あるいは伐採された年代が得られるが、内側の年輪を測定すればどの程度内側かに応じて得られる $^{14}\text{C}$ 年代は古くなる。さらに、1世紀から3世紀は日本産樹木が数十~ $100^{14}\text{C}$  yr、系統的に古い炭素年代を示すことが知られている(Sakamoto, 2003; 尾寄, 2009)。今回、IntCal13(欧米産樹木で作成)で較正した暦年代範囲は、見かけ上実際の年代より数十から100年程度古い可能性が考えられる。したがって、将来日本産樹木から作成されたデータセットで較正し直した場合、今回の測定試料の暦年代範囲は、より新しい方に動く可能性がある。古木効果とIntCalと日本産樹木の差を考慮すると、得られた暦年代は材の枯死・伐採年よりいくぶん古く出ている可能性が残る。SK01の年代をより確かにするためには、焼けた人骨自体の放射性炭素年代測定(Lanting, 2001)が有効であろう。

竪穴住居跡外に位置し焼土面を有するSL05の炭化材(PLD-25973)は、 $^{14}\text{C}$ 年代が $2040 \pm 20$ yr BP、 $2\sigma$ 暦年代範囲が151-146cal BC(0.7%)および111cal BC-21cal AD(94.7%)、すなわち紀元前2世紀後半~後1世紀前半であった。この年代は弥生時代中期後半~後期に相当する。ただし、SL05の炭化材は最終形成年輪ではないため、古木効果の影響により、得られた暦年代は材の枯死・伐採年よりいくぶん

古く出ている可能性がある。SL05の炭化材の2暦年代範囲は、SC1の炭化材の2 $\sigma$  暦年代範囲と重複しており、古木効果の影響を考慮したとしても、両遺構の同時性を支持する結果である。

竪穴住居跡 SC1の炭化材(PLD-25974)は、 $^{14}\text{C}$ 年代が $2020 \pm 20\text{yr BP}$ 、2 $\sigma$  暦年代範囲が86-79cal BC (1.2%)、55cal BC-30cal AD(90.8%)、37-51cal AD(3.3%)、すなわち紀元前1世紀前半~後1世紀中頃であった。この年代は弥生時代中期後半~後期に相当する。SC1の炭化材は、部位が最終形成年輪であるので、古木効果を考慮する必要は無い。先に述べたとおり、SC1の炭化材の2 $\sigma$  暦年代範囲はSL05の炭化材と重複する。

#### 参考文献

- Bronk Ramsey, C. (2009) Bayesian Analysis of Radiocarbon dates. *Radiocarbon*, 51(1), 337-360.
- 藤尾慎一郎(2009) 弥生時代の実年代. 西本豊弘編「新弥生時代のはじまり第4巻弥生農耕のはじまりとその年代」: 9-54, 雄山閣.
- Lanting, J.N., Aerts-Bijima, A.T., and van der Plicht, J. (2001) Dating of Cremated Bones. *Radiocarbon*, 43(2A), 249-254.
- 中村俊夫(2000) 放射性炭素年代測定法の基礎. 日本先史時代の $^{14}\text{C}$ 年代編集委員会編「日本先史時代の $^{14}\text{C}$ 年代」: 3-20, 日本第四紀学会.
- 尾壽大真(2009) 日本版校正曲線の作成と新たな課題. 西本豊弘編「新弥生時代のはじまり第4巻弥生農耕のはじまりとその年代」: 4-8, 雄山閣.
- Reimer, P.J., Bard, E., Bayliss, A., Beck, J.W., Blackwell, P.G., Bronk Ramsey, C., Buck, C.E., Cheng, H., Edwards, R.L., Friedrich, M., Grootes, P.M., Guilderson, T.P., Hafliðason, H., Hajdas, I., Hatte, C., Heaton, T.J., Hoffmann, D.L., Hogg, A.G., Hughen, K.A., Kaiser, K.F., Kromer, B., Manning, S.W., Niu, M., Reimer, R.W., Richards, D.A., Scott, E.M., Southon, J.R., Staff, R.A., Turney, C.S.M., and van der Plicht, J. (2013) IntCal13 and Marine13 Radiocarbon Age Calibration Curves 0-50,000 Years cal BP. *Radiocarbon*, 55(4), 1869-1887.
- Sakamoto, M., Imamura, M., van der Plicht, J., Mitsutani, T., and Sahara, M. (2003) Radiocarbon Calibration for Japanese Wood Samples. *Radiocarbon*, 45(1), 81-89.

## 4. 花粉分析および寄生虫卵分析

株式会社古環境研究所

### (1) はじめに

花粉分析は、一般に低湿地の堆積物を対象とした比較的広域な植生・環境の復原に応用されており、遺跡調査においては遺構内の堆積物などを対象とした局地的な植生の推定も試みられている。また、同一試料で寄生虫卵分析を行うことで、生活域の確認や人糞施肥の有無、あるいは便所遺構を確認することも可能である。花粉や寄生虫卵などの有機質遺体は、水成堆積物では保存状況が良好であるが、乾燥的な環境下の堆積物では分解されて残存していない場合もある。

### (2) 試料

分析試料は、以下に示すNo6～No11の6点である。

No6：④-9058 西壁5層(縄文時代晩期の包含層と思われる)

No7：①-8056 SK20覆土

No8：②-8458 西壁4層(弥生時代後期の遺構が掘り込まれた土層)

No9：⑦-8464 SD2覆土(中世の溝)

No10：③-8858 西壁 SD7覆土(自然流路の中にある溜まり部分。10～11世紀の遺物)

No11：⑦-8464 SD3覆土(中世初めと思われる溝)

### (3) 方法

花粉および寄生虫卵の分離抽出は、中村(1967)の方法をもとに、以下の手順で行った。

1) 試料から1cm<sup>3</sup>を採量(No11については、堆積物の粒度が粗いため2cm採量)

2) 0.5%リン酸三ナトリウム(12水)溶液を加え15分間湯煎

3) 篩別および沈澱法により大きな砂粒や木片等を除去

4) 25%フッ化水素酸を加え30分静置(2～3度混和)

5) 遠心分離(1500rpm、2分間)による水洗の後にサンプルを2分割

6) 片方にアセトリシス処理を施す

7) 両方のサンプルを染色後、グリセリンゼリーで封入してプレパラート作成

8) 検鏡・計数

基本的にアセトリシス処理を施したプレパラートで花粉分析、施していないもので寄生虫卵分析を行った。検鏡は、生物顕微鏡によって300～1000倍で行った。花粉の同定は、鳥倉(1973)および中村(1980)をアトラスとして、所有の現生標本との対比で行った。結果は同定レベルによって、科、亜科、属、亜属、節および種の階級で分類し、複数の分類群にまたがるものはハイフン(-)で結んで示した。

### (4) 結果

#### ①花粉分析

##### 1) 分類群

出現した分類群は、樹木花粉と草本花粉を含むもの1、草本花粉1、シダ植物孢子1形態の計3分類群である。分析結果を表1に示し、主要な分類群について顕微鏡写真を示す。以下に出現した分類群を記載する。

〔樹木花粉と草本花粉を含むもの〕

クワ科－イラクサ科

〔草本花粉〕

ヨモギ属

〔シダ植物孢子〕

三条溝孢子

## 2) 花粉群集の特徴

No.6～No.11の6試料について分析を行った。その結果、No.9(⑦－8464SD2覆土)ではクワ科－イラクサ科、シダ植物三条溝孢子、No.10(③－8858西壁 SD7覆土)とNo.11(⑦－8464SD3覆土)ではヨモギ属が検出されたが、いずれもわずかである。No.6(④－9058西壁5層)、No.7(①－8056SK20覆土)、No.8(②－8458西壁4層)の3試料では、花粉やシダ植物孢子は検出されなかった。

## ② 寄生虫卵分析

No.6～No.11の6試料について分析を行った。その結果、寄生虫卵および明らかな消化残渣は、いずれの試料からも検出されなかった。

## (5) 考察

No.6～No.11の6試料について花粉分析および寄生虫卵分析を行った。その結果、No.6～No.8では花粉が検出されず、No.9～No.11でもほとんど検出されなかった。花粉が検出されない原因としては、1)乾燥もしくは乾湿を繰り返す堆積環境下で花粉などの有機質遺体が分解されたこと、2)上層の堆積速度が速かったこと、3)水流や粒径による淘汰・選別を受けたことなどが考えられる。部分的にわずかに検出されたヨモギ属やクワ科－イラクサ科は、乾燥した荒地などに生育する草本であることから、ここでは1)の要因が大きいと考えられる。

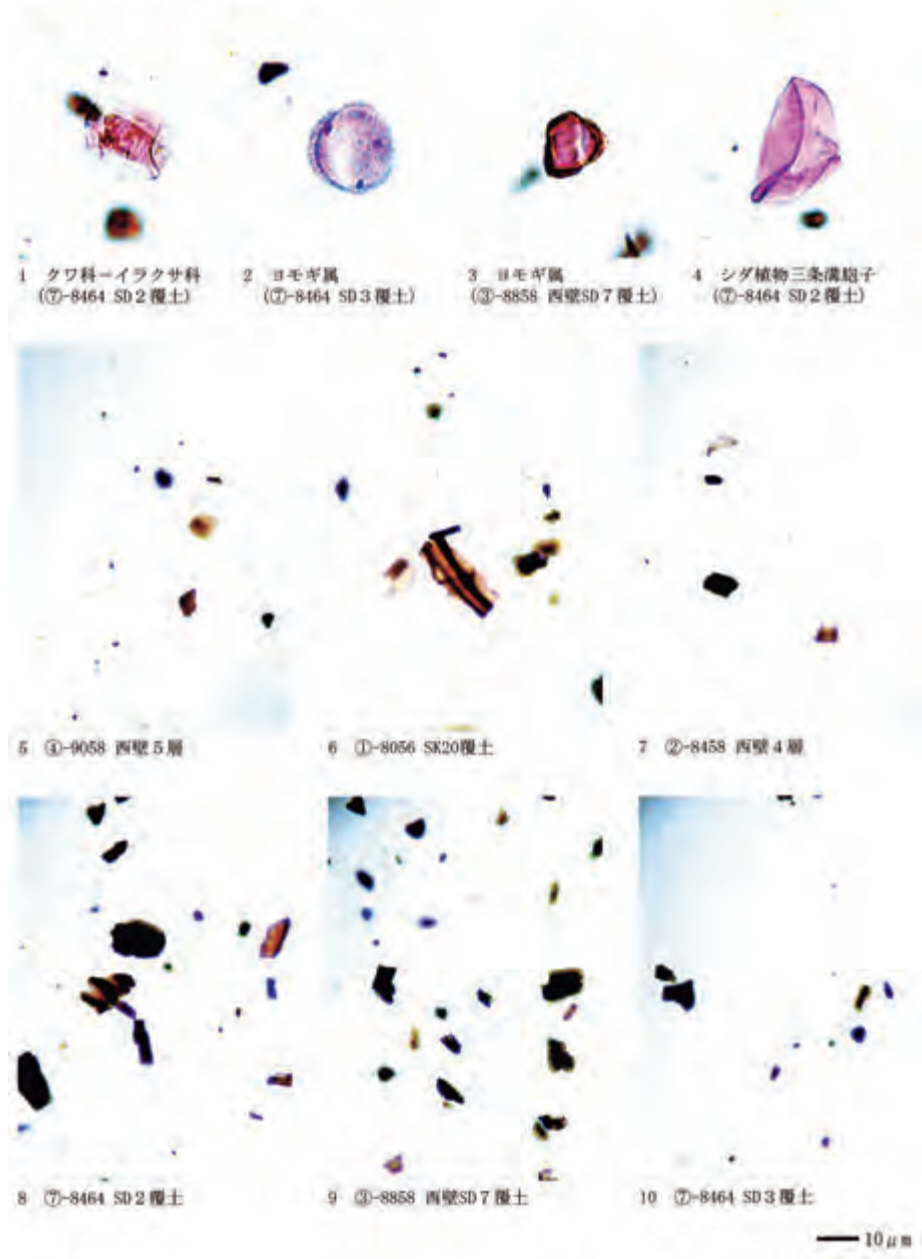
寄生虫卵は、いずれの試料からも検出されなかった。寄生虫卵については、花粉と同様の残存状況を示すことから、乾燥もしくは乾湿を繰り返す堆積環境下で分解消失した可能性が考えられるが、当初から含まれていなかった可能性も想定される。

## 文献

- 金子清俊・谷口博一(1987)線形動物・扁形動物. 医動物学. 新版臨床検査講座, 8, 医歯薬出版, p. 9-55.
- 金原正明(1993)花粉分析法による古環境復原. 新版古代の日本第10巻古代資料研究の方法, 角川書店, p. 248-262.
- 金原正明(1999)寄生虫. 考古学と動物学. 考古学と自然科学, 2, 同成社, p. 151-158.
- 金原正明(2004)寄生虫卵分析. 環境考古学ハンドブック, 朝倉書店, p. 419-429.
- 島倉巳三郎(1973)日本植物の花粉形態. 大阪市立自然科学博物館収蔵目録第5集, 60p.
- 中村純(1967)花粉分析. 古今書院, p. 82-110.
- 中村純(1980)日本産花粉の標徴. 大阪自然史博物館収蔵目録第13集, 91p.
- Peter J. Warnock and Karl J. Reinhard (1992) Methods for Extraxting Pollen and Parasite Eggs from Latrine Soils. Journal of Archaeological Science, 19, p. 231-245.

分類群		6	7	8	9	10	11
学名	和名	④-9058	①-8056	②-8458	⑦-8464	③-8858	⑦-8464
Arboreal・Nonarboreal pollen	樹木・草本花粉	西壁5層	SK20覆土	西壁4層	SD2覆土	西壁 SD7覆土	SD3覆土
Moraceae-Urticaceae	クワ科-イラクサ科				1		
Nonarboreal pollen	草本花粉						
Artemisia	ヨモギ属					1	1
Fern spore	シダ植物胞子						
Trilate type spore	三条溝胞子				1		
Arboreal pollen	樹木花粉	0	0	0	0	0	0
Arborea・Nonarboreal pollen	樹木・草本花粉	0	0	0	1	0	0
Nonarboreal pollen	草本花粉	0	0	0	0	1	1
Total pollen	花粉総数	0	0	0	1	1	1
Pollen frequencies of 1cm <sup>3</sup>	試料1cm <sup>3</sup> 中の花粉密度	0.00	0.00	0.00	8.00	7.00	4.00
Unknown pollen : Fern spore	未同定花粉 シダ植物胞子	0 0	0 0	0 0	0 1	0 0	0 0
Helminth eggs	寄生虫卵	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)
Stone cell	石細胞	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)
Digestion rimeins	明らかな消化残渣	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)
Charcoal fragments	微細炭化物	<(+) )	(+)	(+)	(+)	(+)	(+)

竹松遺跡の花粉・胞子・羽拉大写真



## 5. 炭化材の樹種同定

小林 克也(パレオ・ラボ)

### (1) はじめに

郡川左岸に位置する竹松遺跡では、竪穴住居跡から出土した炭化材の樹種同定を行なった。なお、同一試料を用いて放射性炭素年代測定も行われている(放射性炭素年代測定の項参照)。

### (2) 試料と方法

試料は、竪穴住居跡 SC1から出土した炭化材1点である。時期については発掘調査所見では弥生時代後期と考えられ、放射性炭素年代測定の結果では弥生時代中期～後期であった。

試料について、形状観察と、残存半径および残存年輪数の計測を行なった。残存半径は、試料に残存する半径を直接計測し、残存年輪数は残存半径内の年輪数を計測した。

炭化材の樹種同定では、まず試料を乾燥させ、材の横断面(木口)、接線断面(板目)、放射断面(柾目)について、カミソリと手で割断面を作製し、整形して試料台にカーボンテープで固定した。その後イオンスパッタにて金蒸着を施し、走査型電子顕微鏡(日本電子(株)製 JSM-5900LV)にて検鏡および写真撮影を行なった。

### (3) 結果

同定の結果、竪穴住居跡である SC1で出土した炭化材はサカキであった。同定結果を表1に示す。

表1 竹松遺跡出土炭化材の樹種同定結果

試料 No.	地区	グリッド	遺構名	樹種	形状	残存半径 (cm)	残存年輪数	年代測定番号
17	A区	8874	SC1	サカキ	破片	1.7	30	PLD-25974

次に、同定された材の特徴を記載し、図版に走査型電子顕微鏡写真を示す。

#### (1) サカキ *Cleyera japonica* Thunb. ツバキ科 図版1 1a-1c(No.17)

小型の道管が単独で密に散在する散孔材である。道管は20～40段程度の階段穿孔を有し、内壁にはらせん肥厚がみられる。放射組織は単列で、上下端1～4列が直立する異性である。

サカキは日本海側で新潟県、太平洋側で関東以西の本州、四国、九州などの温帯から亜熱帯に分布する常緑高木である。材は強靱、堅硬で、切削加工は困難である。

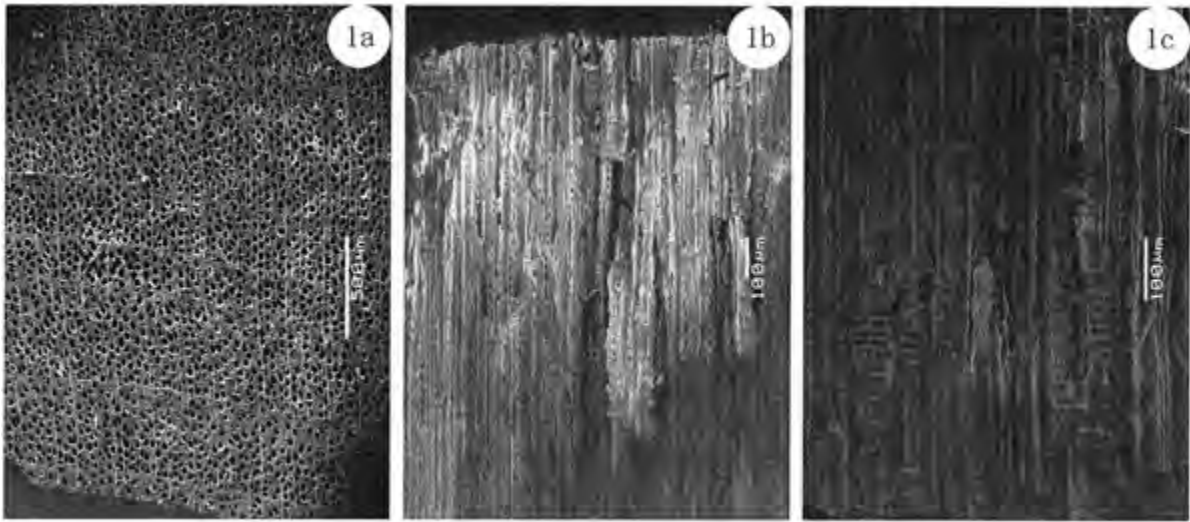
### (4) 考察

竪穴住居跡である SC1から出土した炭化材は、サカキであった。炭化材の用途は不明であるが、焼けた建築材の可能性などが考えられる。サカキは堅硬で強靱であるという材質を持つことから(伊東ほか, 2011)、竪穴住居跡の建築材には堅硬で強靱なサカキを利用していた可能性があるが、試料数が少なく、住居跡の建築材の用材傾向は確認できなかった。またサカキは九州地方に普通にみられる樹種であり(伊東ほか, 2011)、弥生時代後期頃の竹松遺跡周辺にはサカキが生育し、それを伐採利用していたと考えられる。



引用文献

伊東隆夫・佐野雄三・安部 久・内海泰弘・山口和穂(2011)日本有用樹木誌. 238p, 青海社.



図版1 竹松遺跡出土炭化材の走査型電子顕微鏡写真

1a-1c. サカキ(No.17)

a: 横断面、b: 接線断面、c: 放射断面

## 6. テフラ分析

藤根 久・鈴木 正章(パレオ・ラボ)

### (1) はじめに

竹松遺跡の調査により得られた試料について、テフラ分析を行い、堆積物の特性およびテフラ層序について検討した(TAK201301調査区)。

### (2) 試料と方法

分析試料は、竹松遺跡車両①D区(TAK201301)において連続的に採取された堆積物13点である。堆積物は、IV a層が黒褐色～暗褐色粘土、IV b1層～IV b2層上部が暗オリーブ褐色の粘土、IV b2層下部が暗オリーブ褐色のやや軟質の砂質粘土、VI層が褐色のやや軟質の砂質粘土である(表1、図1)。各試料は、以下の方法で処理した。

表1 分析試料とその特徴

分析No.	採取地点	層位	色調
1	竹松遺跡車両①D区 (遺跡調査番号 TAK201301)	IV a層	黒褐色(10YR3/2)粘土
2			暗褐色(10YR3/3)粘土
3		IV a層-IV b1層	暗オリーブ褐色(2.5Y3/3)粘土
4		IV b1層	暗オリーブ褐色(2.5Y3/3)粘土
5			暗オリーブ褐色(2.5Y4/3)粘土
6		IV b1層-IV b2層	暗オリーブ褐色(2.5Y4/3)粘土
7		IV b2層	暗オリーブ褐色(2.5Y4/4)粘土
8			暗オリーブ褐色(2.5Y4/4)粘土
9			暗オリーブ褐色(2.5Y4/4)やや軟質の砂質粘土
10		IV b2層-VI層	暗オリーブ褐色(2.5Y4/4)やや軟質の砂質粘土
11			暗オリーブ褐色(2.5Y4/4)やや軟質の砂質粘土
12		VI層	褐色(10YR4/4)やや軟質の砂質粘土
13			褐色(10YR4/4)やや軟質の砂質粘土

(1) 湿重で39g～47g程度を秤量した後、3φ(0.125mm)、4φ(0.063mm)の2枚の篩を重ね、湿式篩分けをした。なお、含水率を求めるために、湿潤試料約10gを恒温乾燥機により105℃、24時間で乾燥させた。(2) 4φ篩残渣について、重液(テトラブプロモエタン、比重2.96)を用いて重鉱物と軽鉱物に分離した。(3) 軽鉱物は、水浸の簡易プレパラートを作製し、軽鉱物組成と火山ガラスの形態分類を行った。火山ガラスの形態は、町田・新井(2003)の分類基準に従って、バブル型平板状(b1)、バブル型Y字状(b2)、軽石型繊維状(p1)、軽石型スポンジ状(p2)、急冷破碎型フレーク状(c0)に分類した。(4) 重鉱物は、封入剤カナダバルサムを用いてプレパラートを作製し、単斜輝石(Cpx)、斜方輝石(Opx)、角閃石(Ho)、磁鉄鉱(Mag)、不明(Opq)を同定・計数した。(5) 分析No.1、No.5、No.11の4φ篩残渣中の火山ガラスは、横山ほか(1986)に従って、温度変化型屈折率測定装置を用いて屈折率(n)を測定した。また、分析No.11の斜方輝石(Opx)は、横山・山下(1986)に従って、温度変化型屈折率測定装置を用いて屈折率(γ)を測定した。

### (3) 結果

以下に、各地点の試料について、含水率や粒度組成、軽鉱物および重鉱物組成の特徴、火山ガラスおよび斜方輝石の屈折率測定結果について述べる。

試料の含水率は、30.82%~40.58%の範囲を示し、下位から上位に向かって微増する(表2)。

湿式篩分けを行った4φ以上の含砂率は、分析No.9およびNo.10において最も高く、分析No.6やNo.7およびNo.11においてもやや高い。4φ未満のシルトおよび粘土分は、58.93%~98.87%と全体的に高い(表2)。

4φ篩残渣中の重・軽鉱物は、軽鉱物が61.28%~83.30%と多い(表2)。4φ篩残渣中の重鉱物は、分析No.1~No.11において斜方輝石(Opx)が多く、分析No.12やNo.13では、磁鉄鉱が多い。その他では単斜輝石(Cpx)や角閃石(Ho)が含まれていた。軽鉱物では、分析No.1~No.5において火山ガラスが16.67%~33.79%と比較的多く検出された。全体としては、不明(Opq)が多い(表3、図1)。

火山ガラスを比較的多く含む分析No.1およびNo.5の火山ガラスの屈折率測定では、分析No.1において1.4983-1.5005(平均値1.4993)であり、No.5において1.4981-1.5001(平均値1.4989)であり、いずれも1.5000付近に集中して分布する(図1、図2)。なお、分析No.11の軽石型火山ガラスの屈折率は、1.4992-1.5042(平均値1.5018)であり、分析No.1やNo.5の屈折率よりやや高い値を示し、やや分散する(図1、図2)。分析No.11の斜方輝石の屈折率( $\gamma$ )が1.6952-1.6983(平均値1.6968)であった(図2)。

### (4) 考察

竹松遺跡車両①D区(TAK201301)において連続的に採取された堆積物13点についてテフラ分析を行った。堆積物は、粘土および砂質粘土である。

テフラ分析では、IV a層~IV b1層においてバブル型の火山ガラスがやや多く検出され(16.67%~33.79%)、分析No.1およびNo.5の火山ガラスの屈折率測定では、いずれも1.5000付近に集中して分布する値が得られた。こうしたバブル型火山ガラスの形態および屈折率の特徴から、始良 Tn テフラ(AT)と推定された、IV b1層の分析No.5以降に降灰したことが推定される。なお、同様のバブル型火山ガラスは、下位の分析No.6~No.8においても僅かに検出されている。

表2 テフラ試料の湿式篩分け・重液分離の結果

試料No.	含水率計測試料			分析試料(g)							4φ篩残渣(g)	
	湿潤(g)	乾燥(g)	含水率(%)	湿潤(g)	乾燥(g)	3φ	4φ	<4φ	含砂率(%)	軽鉱物	重鉱物	
1	10.99	6.53	40.58	40.76	24.22	0.0281	0.2466	23.9439	1.13	0.1016	0.0498	
2	10.45	6.33	39.43	39.92	24.18	0.6852	0.6517	22.8443	5.53	0.1017	0.0611	
3	10.21	6.14	39.86	40.29	24.23	0.1354	0.738	23.3558	3.6	0.0982	0.0503	
4	9.76	5.86	39.96	38.66	23.21	0.4506	1.2838	21.4774	7.47	0.1062	0.0562	
5	9.93	5.98	39.78	41.64	25.08	0.0465	0.7987	24.2311	3.37	0.1141	0.0478	
6	9.88	6.16	37.65	39.22	24.45	1.5386	3.0055	19.9089	18.58	0.0929	0.0399	
7	12.50	7.92	36.64	41.35	26.2	1.7002	4.1493	20.3499	22.33	0.1159	0.053	
8	10.84	7.16	33.95	40.03	26.44	0.0094	0.4646	25.9665	1.79	0.0831	0.0491	
9	9.51	6.44	32.28	39.45	26.71	6.7775	4.1809	15.7564	41.02	0.0831	0.0491	
10	10.81	7.40	31.54	39.36	26.94	6.6067	4.4589	15.8783	41.07	0.1038	0.0656	
11	9.96	6.89	30.82	40.49	28.01	1.4593	5.9127	20.6376	26.32	0.1283	0.0638	
12	9.80	6.63	32.35	46.8	31.66	0.2654	2.0599	29.3363	7.34	0.1257	0.0252	
13	9.95	6.71	32.56	47.14	31.79	0.984	1.8041	29.0018	8.77	0.1155	0.0471	

表3 4φ篩残渣中の鉱物組成(個数)

分類群 分析No.	石英 (Qu)	長石 (Pl)	不明 (Opa)	バブル(泡)型		軽石型		急冷破砕型 フレーク状 (c0)	ガラス 合計	軽鉱物 の合計	重鉱物の合計					重鉱物 の合計
				平板状 (b1)	Y字状 (b2)	繊維状 (p1)	スポンジ状 (p2)				斜方輝石 (Opx)	単斜輝石 (Cpx)	角閃石 (Ho)	磁鉄鉱 (Mg)	不明 (Opa)	
1	7	72	52	30	39		1	1	71	202	114	31	39	13	8	205
2	7	70	93	14	18	1		1	34	204	84	34	32	39	17	206
3	19	79	61	15	29	1		3	49	208	118	23	33	17	9	200
4	12	54	106	12	25		2	2	41	213	96	23	30	32	20	201
5	10	55	80	32	38			4	74	219	120	27	50	11	3	211
6	3	49	136	8	13			1	22	210	123	29	24	17	12	205
7	15	41	153	7	14	1	3		25	234	118	33	26	19	13	209
8	11	38	135	10	8			4	22	206	133	33	22	13	4	205
9	11	51	145	1	1			3	5	212	121	30	19	25	6	201
10	10	42	151				2	3	5	208	116	36	20	28	6	206
11	6	29	164		1		6	3	10	209	116	32	13	25	16	202
12	11	27	174	1			1		2	214	59	6	43	92	13	213
13	5	24	175					1	1	205	39	8	26	137	11	221

なお、分析No.11の軽石型ガラスおよび斜方輝石(Opx)の屈折率( $\gamma$ )では、該当するテフラは不明である。

以下に、始良 Tn テフラ(AT)の概要について述べる。

始良 Tn テフラ(AT)は、南九州始良カルデラを噴出源とし、約2.6~2.9万年前に噴出した降下軽石、巨大火砕流堆積物とその降下火山灰をさす。一連の噴火は、まず大規模なプリニアン噴火にはじまり、多量の大量降下軽石をもたらした。つづいて水蒸気マグマ噴火による火砕流、妻屋火砕流堆積物が噴出し、わずかな時間間隙をおいて破局的噴火により入戸火砕流堆積物と呼ばれる膨大なテフラが噴出した。始良 Tn 火山灰は、主にこの火砕流の上部を占めていた多量の火山灰が風に送られて広大な範囲に降下堆積したものである。

このテフラは、日本列島をすっぽり覆い、日本海全域、朝鮮半島、東シナ海、太平洋四国海盆を広く覆っている。分布面積は $4 \times 10^6 \text{km}^2$ 以上で、1,400kmの遠方でも認められる。

また、このテフラは輝石流紋岩質の火山ガラスに富むテフラで、部層にかかわりなくきわめて均質である。火山ガラスは A-0s(大量降下軽石)の場合、ほとんど軽石型であるが、他の部層はいずれも透明なバブル型が主体をなす。火山ガラスの屈折率( $n$ )は、1.498-1.501(最頻値1.499-1.500)であり、きわめて狭い範囲を占め、均質な巨大マグマが一気に噴出したことを暗示する。なお、斜方輝石の屈折率( $\gamma$ )は、1.728-1.734である。

このテフラの噴出年代については、多くの $^{14}\text{C}$ 年代測定がおこなわれているが、その中でも AMS $^{14}\text{C}$ 法で求め、同位体補正を行った年代数値として24-25kaBP が多く報告されている。これに対して、海底コアの研究では AT テフラの層準は酸素同位体ステージ2と3との境界付近、またその直前にあるとみなされている。このステージ境界の年代については、海底コアでは25-26ka 内外、より分解能の高いグリーンランド氷床コア GIPS2の酸素同位体曲線では27.5-29ka または31.5-32ka とみなされ、26-29 ka に入ると考えるのが妥当とされていた。

なお、これまで AT テフラに関連して測定されたうち、 $^{14}\text{C}$ 年代が最も集中する24,000-25,000yr BP (町田・新井, 2003)について、IntCal 13(Reimer et al., 2013)を用いて較正すると28,000-29,000cal BP 頃である。

## (5) おわりに

竹松遺跡車両①D区(TAK201301)において連続的に採取された堆積物13点についてテフラ分析を行った。その結果、IV a層～IV b1層においてバブル型の火山ガラスがやや多く検出され、始良 Tn テフラ(AT)と考えられ、IV b1層の分析No.5以降に降灰したことが推定された。なお、分析No.11において僅かに検出された軽石型ガラスのテフラ起源は不明であった。

## 参考・引用文献

- 地盤工学会「土質試験の方法と解説」改訂編集委員会(2000)土質試験の方法と解説(第1回改訂版)。社団法人地盤工学会, 902 p.
- 町田 洋・新井房夫(2003)新編火山灰アトラス。336p, 東京大学出版会。
- Reimer, P.J., Bard, E., Bayliss, A., Beck, J.W., Blackwell, P.G., Bronk Ramsey, C., Buck, C.E., Cheng, H., Edwards, R.L., Friedrich, M., Grootes, P.M., Guilderson, T.P., Hafliðason, H., Hajdas, I., Hatte, C., Heaton, T.J., Hoffmann, D.L., Hogg, A.G., Hughen, K.A., Kaiser, K.F., Kromer, B., Manning, S.W., Niu, M., Reimer, R.W., Richards, D.A., Scott, E.M., Southon, J.R., Staff, R.A., Turney, C. S.M., and van der Plicht, J. (2013) IntCal 13 and Marine 13 Radiocarbon Age Calibration Curves 0- 50,000 Years cal BP. *Radiocarbon*, 55(4), 1869-1887.
- 横山卓雄・檀原 徹・山下 透(1986)温度変化型屈折率測定装置による火山ガラスの屈折率測定。第四紀研究, 25, 21-30.
- 横山卓雄・山下 透(1986)温度変化型屈折率測定装置(RIMS-86)による斜方輝石・角閃石の屈折率測定の試み。京都大学教養部報告(九十九地学), 21, 30-36.

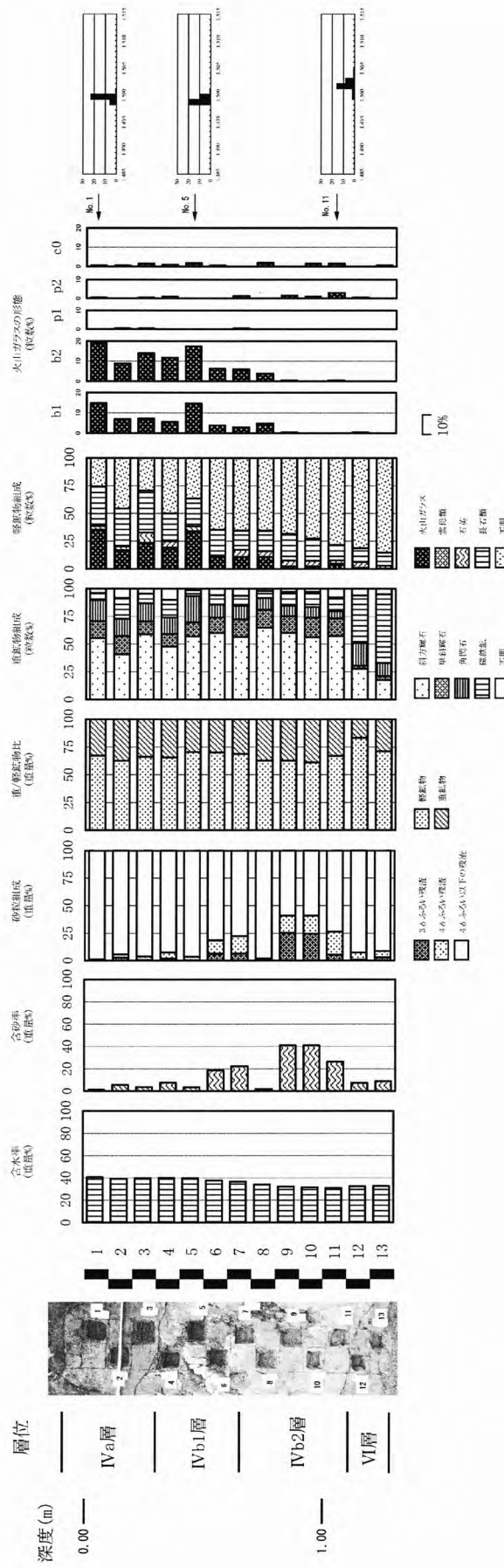
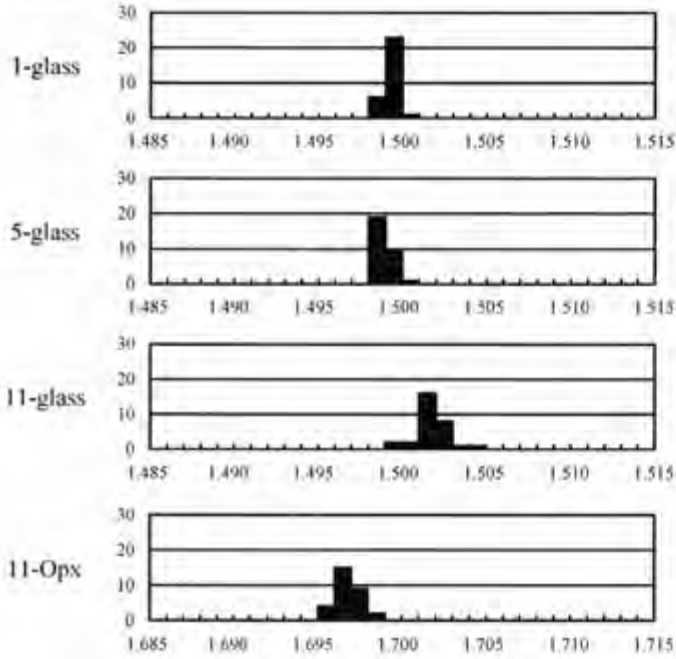


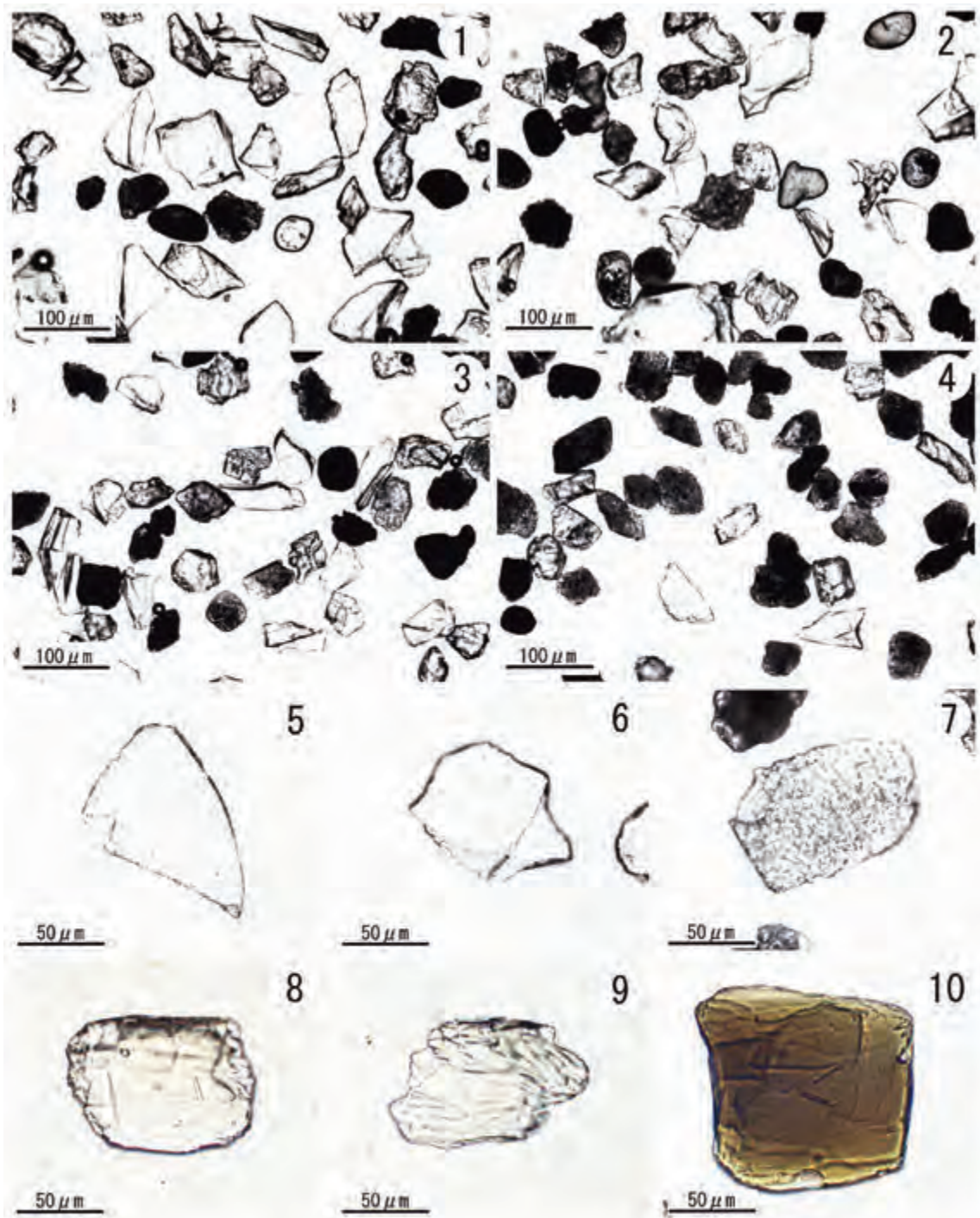
図1 堆積物の含水率・含砂率・粒度組成・鉱物組成および屈折率

分析No.



範囲(range)	平均(mean)	個数
1.4983 - 1.5005	1.4993	30
1.4981 - 1.5001	1.4989	30
1.4992 - 1.5042	1.5018	30
1.6952 - 1.6983	1.6968	30

図2 火山ガラスおよび斜方輝石の屈折率測定結果



図版1 堆積物中の鉱物の実態顕微鏡写真

1. No.1の軽鉱物(4φ篩残渣) 2. No.3の軽鉱物(4φ篩残渣)
3. No.5の軽鉱物(4φ篩残渣) 4. No.11の軽鉱物(4φ篩残渣)
5. バブル型平板状ガラス(No.5) 6. バブル型Y字状ガラス(No.5)
7. 急冷破碎型ガラス(No.11) 8. 斜方輝石(No.5)
9. 単斜輝石(No.5) 10. 角閃石(No.5)



## I. 竹松遺跡における火山灰(テフラ)分析

### 1. はじめに

火山灰(テフラ)層の岩石学的諸特性(重軽鉱物組成、火山ガラスの形態分類、火山ガラスの屈折率)を明らかにすることにより、指標テフラとの対比を試みた。なお、火山灰の岩石学的諸特性や年代については新編火山灰アトラス(町田・新井, 2003)を参照した。

### 2. 試料

分析試料は、4686GのNR01内堆積土から採取されたNo1~No7、3区の7層から採取されたNo8、3区東の6層~7層から採取されたNo9~11の計11点である。試料採取箇所を図1および写真図版に示す。

### 3. 方法

試料に水を加えて超音波洗浄装置により分散した後、250メッシュ分析篩を用いて水洗し、粒径1/16mm以下の粒子を除去した。乾燥の後、篩別して得られた粒径1/4mm~1/8mmの砂分を重液分離し、重鉱物250粒について偏光顕微鏡下でカウントした。また、軽鉱物250粒について、火山ガラス(バブル型・中間型・軽石型に形態分類)、石英、長石、その他の量比を求めた。火山ガラスの屈折率は、温度変化型屈折率測定装置(古澤地質社製、MAIOT2000)を用いて測定した。

### 4. 結果

#### (1) 重軽鉱物組成(表1、図1)

##### 1) 4686G

NR01内堆積土(No1~7)は、重鉱物組成では斜方輝石が51.6~55.6%と最も多く、不透明鉱物が少量~中量、単斜輝石、角閃石、酸化角閃石が微量~少量、カンラン石が微量含まれている。また、No2は緑レン石が微量含まれている。軽鉱物組成では、No1は長石が68.4%と最も多く、石英、火山ガラス、その他の変質粒が少量含まれている。No2~7は、その他の変質粒が45.2~77%と最も多く、長石が少量~中量、石英が微量、火山ガラスが微量~少量含まれている。火山ガラスは、バブル型火山ガラスが微量~少量含まれ、No1では7.2%と比較的多い。No1~No2は中間型火山ガラスが微量含まれている。

##### 2) 3区

7層(No8)は、重鉱物組成では斜方輝石が45.6%と最も多く、不透明鉱物が少量~中量、単斜輝石、角閃石、酸化角閃石が微量~少量、カンラン石が微量含まれている。軽鉱物組成では、その他の変質粒が54.0%、長石が42.8%、石英、火山ガラスが微量含まれている。火山ガラスは、バブル型火山ガラスが1.2%、軽石型火山ガラスが0.4%と微量含まれている。

### 3)3区東

6層上部(No.9)、6層最下部(No.10)、7層最下部(No.11)は、重鉱物組成では斜方輝石が59.6~62.4%と最も多く、不透明鉱物が8.8~16.4%、単斜輝石、角閃石、酸化角閃石が微量~少量、カンラン石が微量含まれている。軽鉱物組成では、その他の変質粒が58.4~76.8%と最も多く、長石が22.8~44.0%、石英が微量、火山ガラスが微量~少量含まれている。火山ガラスは、バブル型火山ガラスが微量~少量含まれ、No.9では12%と比較的多い。No.9とNo.10は、軽石型火山ガラスが微量含まれている。

## (2) 火山ガラスの屈折率測定 (図2)

### 1)4686G

No.1とNo.2は、n1.508~n1.515の高屈折率のレンジを示し、モードはn1.509~n1.510である。また、わずかにn1.497~n1.498の低屈折率の火山ガラスも認められた。No.3とNo.4は、n1.496~n1.498の低屈折率のレンジと、n1.509~n1.514の高屈折率のレンジに分かれた。No.5~No.7は、n1.496~n1.500前後の低屈折率のレンジを示し、モードはn1.497~n1.498である。また、わずかにn1.508~n1.513前後の高屈折率の火山ガラスも認められた。

### 2)3区

No.8は、n1.496~n1.500の低屈折率のレンジを示し、モードはn1.497~n1.498である。

### 3)3区東

No.9~No.11は、n1.497~n1.500の低屈折率のレンジを示し、モードはn1.498~n1.499である。

## 5. 考察

火山灰(テフラ)の岩石学的諸特性(鉱物組成、火山ガラスの形態、火山ガラスの屈折率)、顕微鏡観察の所見、および土層の堆積状況などから、指標テフラとの対比を行った。その結果、4686GのNR01内堆積土の上部(No.1、No.2)は、おもに鬼界アカホヤ火山灰(K-Ah:約7,300年前, 町田・新井, 1978, 町田・新井, 2003)に由来するテフラ粒子、下部(No.6、No.7)はおもに始良Tn火山灰(AT:約2.9万年前, 町田・新井, 1976, 町田・新井, 2003)に由来するテフラ粒子が含まれており、中部(No.3、No.4)には両者が混在していると考えられる。また、3区のNo.8および3区東のNo.9~No.11は、ATに由来するテフラ粒子が含まれていると考えられる。なお、いずれも火山ガラスの含有割合が低く、テフラ降灰後の攪乱や再堆積の影響を受けていると考えられることから、今回の分析では降灰層準の特定は困難である。

## 文献

- 町田洋・新井房夫(1976)広域に分布する火山灰—始良Tn火山灰の発見とその意義. 科学, 46, p. 339-347.  
町田洋・新井房夫(1978)南九州鬼界カルデラから噴出した広域テフラ—アカホヤ火山灰. 第四紀研究, 17, p. 143-163.  
町田洋・新井房夫(2003)新編火山灰アトラス—日本列島とその周辺—. 東京大学出版会, p. 58-63.

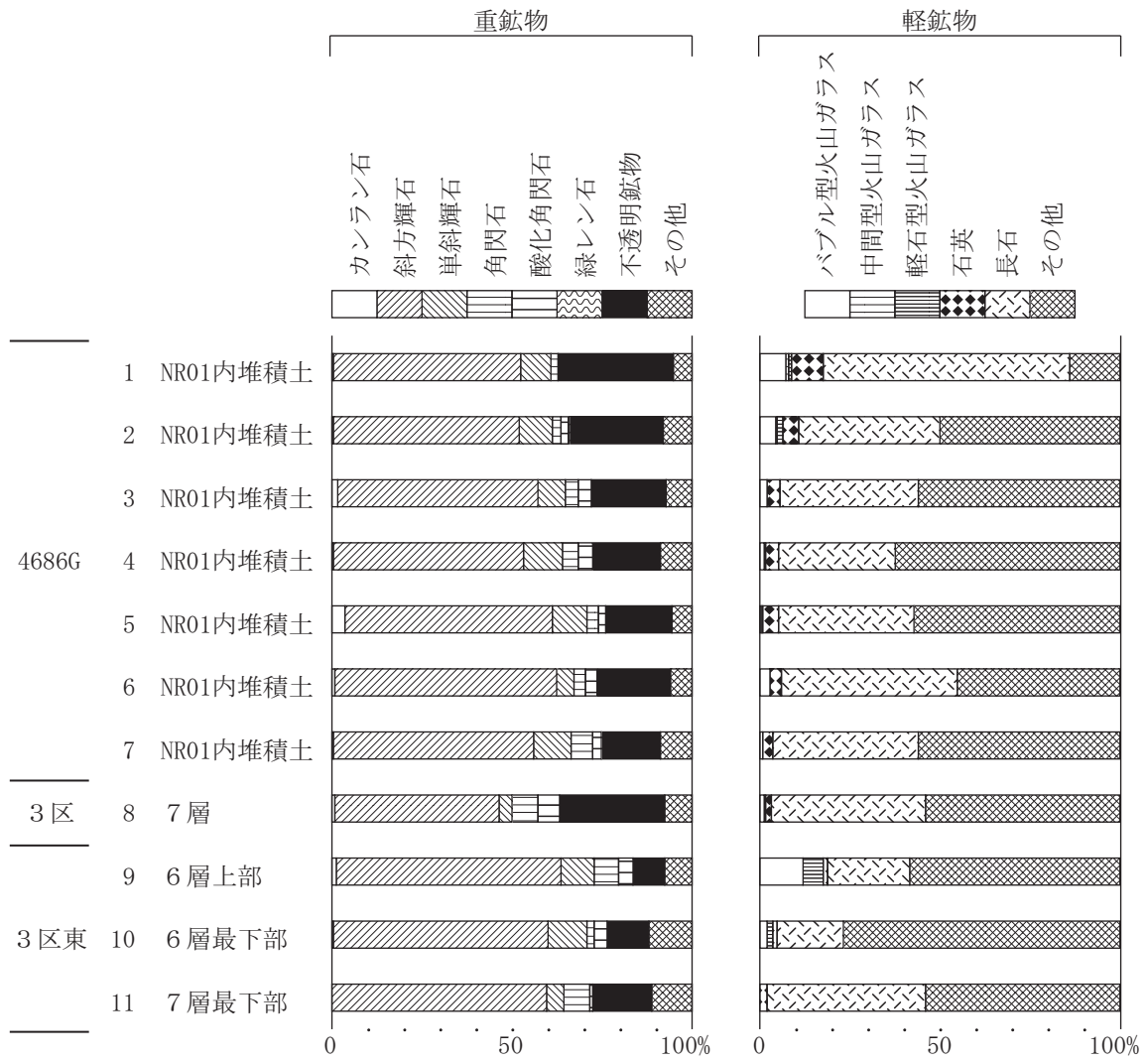


図1 重軽鉍物組成

表1 竹松遺跡におけるテフラ分析結果

地点 No. 層位	4686G																					
	3区							3区東														
	1	2	3	4	5	6	7	7層	8	9	10	11										
	NR01内堆積土																					
重鉱物	1	1	4	1	9	2	1	2	3	1	0	130	129	139	132	144	154	139	114	156	149	149
カンラン石	21	23	19	27	24	12	26	9	23	27	12	5	6	9	11	8	8	15	18	17	5	18
斜方輝石	0	5	9	10	5	8	6	15	10	9	2	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0
単斜輝石	80	65	52	47	46	51	41	73	22	29	41	13	20	18	22	14	15	22	19	19	30	28
角閃石																						
酸化角閃石																						
緑閃石																						
不透明鉱物																						
その他																						
合計	250	250	250	250	250	250	250	250	250	250	250	250	250	250	250	250	250	250	250	250	250	250
軽鉱物	18	11	5	3	1	7	2	3	30	5	1	2	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0
バブル型火山ガラス	2	4	0	1	1	0	0	1	14	4	0	2	4	0	1	1	0	0	1	14	4	0
中間型火山ガラス	22	11	9	9	11	8	7	4	3	3	5	22	11	9	9	11	8	7	4	3	3	5
軽石型火山ガラス	171	98	96	81	94	122	101	107	57	46	110	35	125	140	156	143	113	140	135	146	192	134
石英																						
長石																						
その他																						
合計	250	250	250	250	250	250	250	250	250	250	250	250	250	250	250	250	250	250	250	250	250	250

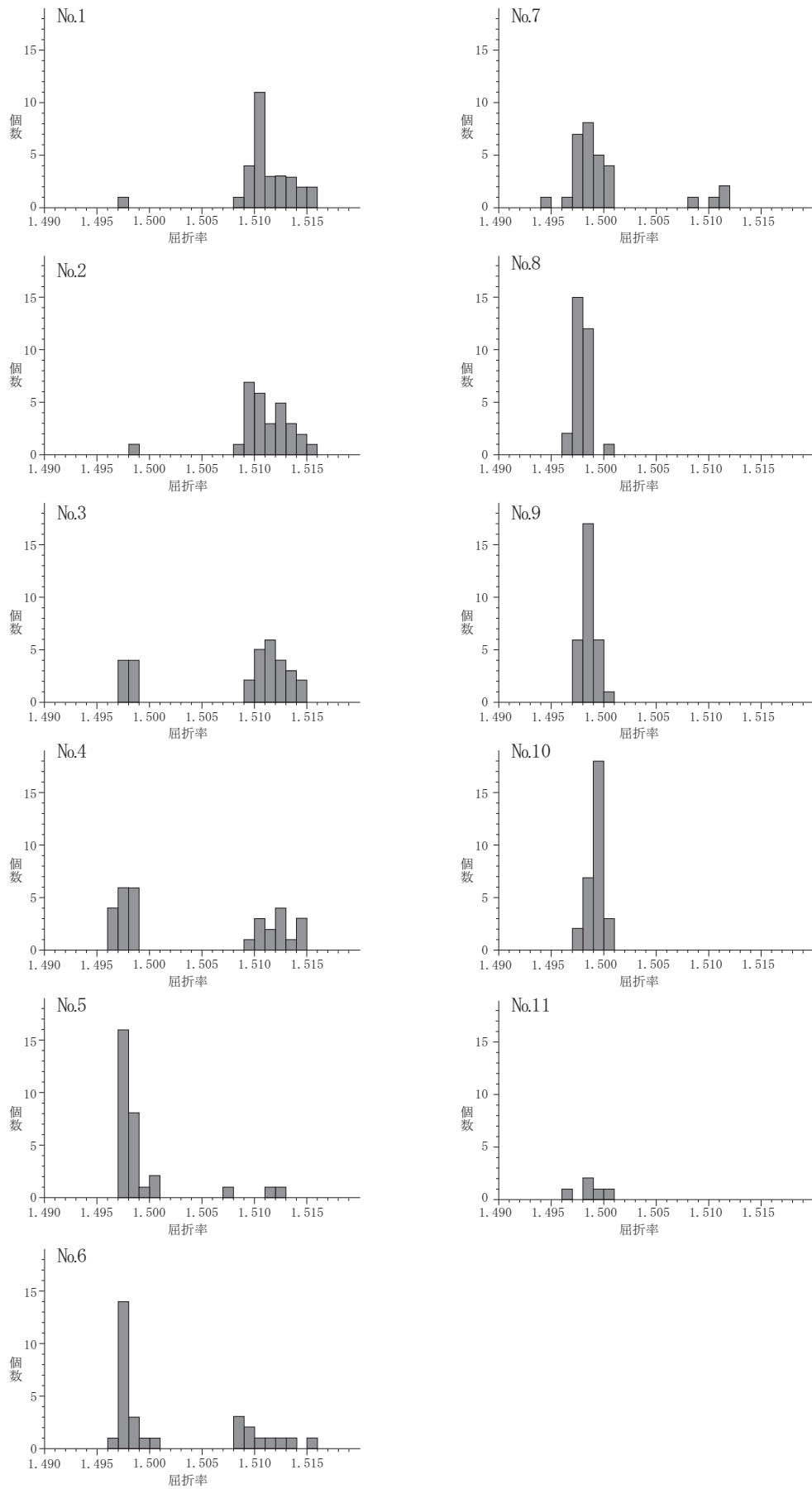
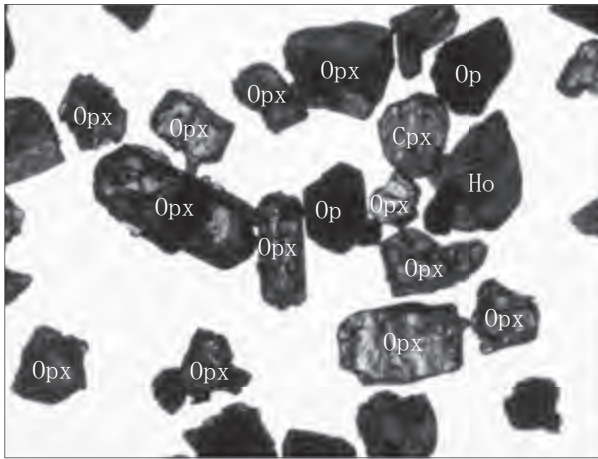
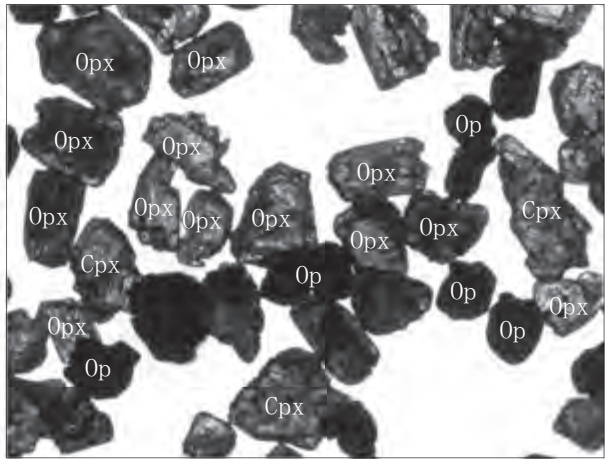


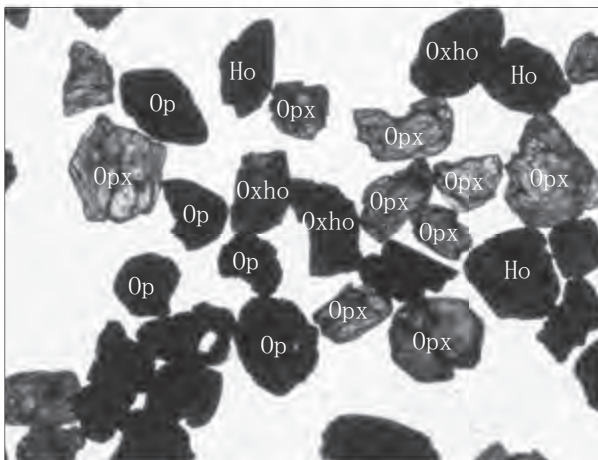
図2 火山ガラスの屈折率



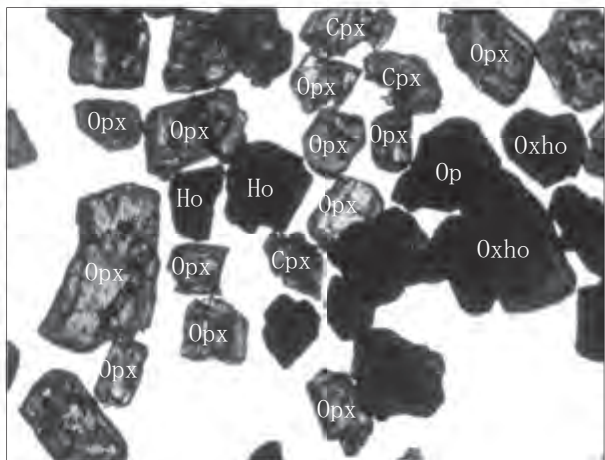
重鉍物 No.1



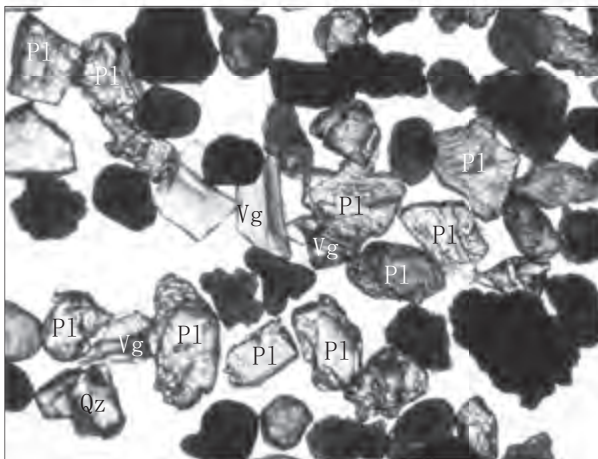
重鉍物 No.5



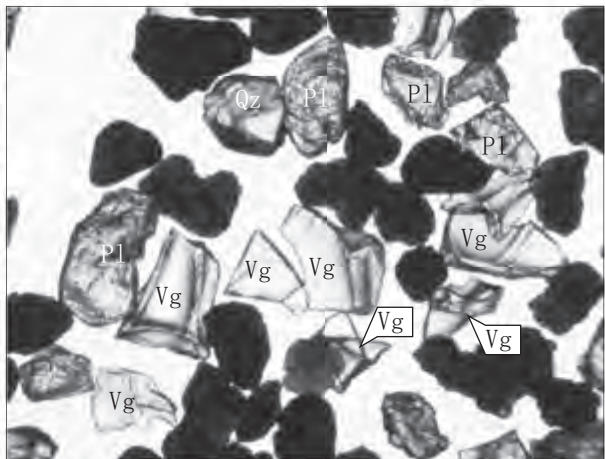
重鉍物 No.8



重鉍物 No.9



K-Ahの火山ガラス No.1



ATの火山ガラス No.9

0.5mm

Opx: 斜方輝石. Cpx: 単斜輝石. Ho: 角閃石. Oxho: 酸化角閃石.

Op: 不透明鉍物.

Vg: 火山ガラス. Qz: 石英. Pl: 斜長石.

竹松遺跡のテフラ写真

## V. まとめ

竹松遺跡の TAK2013の各調査区の遺構、遺物の報告を簡潔にまとめる。

【旧石器時代】 TAK201304調査区の下層（共通土層第V層）下の赤褐色粘砂質土層から黒曜石が出土したが、旧石器と認定するに至らなかった。しかし、TAK201303調査区の下層（古土層）から剥片尖頭器が出土した。

【縄文時代】 落とし穴、集石遺構を検出したので、県内の類似遺構を集成した。出土した遺物では、ハチノコ形を呈した石製品は稀少である。

【弥生時代・古墳時代】 弥生時代後期の集団墓は「小結」に詳述している。集団墓に伴う1号祭祀遺構より、焼人骨が出土している。管見では弥生時代の九州・沖縄で、これまでに焼人骨が出土した例はわずか2遺跡のみである。形質人類学の所見は松下孝幸、松下真実両先生の報文に詳しい。ここでは、考古学的所見として、ご本人の了解のもと、大阪大学の福永伸哉先生の所見を註1に紹介し、まとめとする。

掘立柱建物跡が1棟出土している。竹松遺跡に近い富の原遺跡でも多くの掘立柱建物跡が検出されており（大村市教委編2016）、今後、比較検討していく。

【古代・中世】 古代の掘立柱建物跡7棟を報告した。報告者は四面廂建物跡を除く、これらの建物跡を「有力農民の居宅」と理解した。連結した土坑群や、高杯など特徴的な遺構や遺物は「小結」に詳述した。平成29年11月の九州考古学会において、土馬や金属の権衡、石帯などの特殊遺物は、郡衙が存在したことの証明にはならないとのご意見をいただいた。発掘調査において官衙にまつわる政庁や正倉などの遺構が発見されなかった現状では、竹松遺跡の性格を「官衙」とすることはできない。

【自然科学分析】 赤色顔料の分析では、弥生後期の集団墓を構成する石棺に、通常のベンガラとは異なり、赤土を素材とするベンガラが使用されていたことが指摘され、ベンガラ流通圏外縁部のありかたの一端が垣間見えた。

放射性炭素年代測定では、祭祀土坑1と2を分析したが、弥生時代後期には該当したものの、さらに詳しい時期を特定することはできなかった。

中世の区画溝の花粉分析および寄生虫分析報告も行っているが、中世区画溝の考古学的報告は『竹松遺跡Ⅳ』で行うため、あらためて再掲する。（古門）

【註】1「弥生時代の焼人骨は、おもに再葬墓の一次葬として遺体を骨化させる過程と関連しており、分布は東北南部から中部高地に限られている。しかし、竹松遺跡の事例は、付近で「再葬墓」も見つかっていないうえ、東日本からの距離的な隔たりも大きく、直接の影響関係があるか否かは即断できない。このほか、再葬墓との関係は明確ではないが、縄文時代の西日本に点在する焼人骨例、古墳時代の広田遺跡（鹿児島県）に認められる九州でも稀な焼人骨例、古墳時代の太平洋岸の洞窟遺跡に散見される焼人骨例などとの関係も検討する必要がある。さらに、人骨は出土していないが、原山支石墓群（南島原市）など県内の縄文晩期末に認められる支石墓下部の埋葬施設が小規模なことから、これらを再葬墓とみるなら、その際の骨化過程において火を用いる習俗が西北九州に脈々と存在していた可能性なども検討の余地がある。」

（福永伸哉先生には、平成25年に集団墓の調査現場に招聘し、ご指導いただいた。その際に所見もいただいた。）

【文献】大村市教育委員会編2016『富の原遺跡』大村市文化財調査報告書第40集



A区調査風景



A区ベルト掘削作業



A区遺構検出作業



B区掘削作業



B区掘削作業



C区遺構検出作業



C区遺構検出作業



C区掘削作業



E区調査風景



遺構実測状況



E区遺構検出作業



E区掘削作業

TAK201301調査区 作業風景





調査風景



表土はぎ



墓域調査風景



墓域調査風景



石棺掘削作業



石棺実測作業



土層確認風景



小学生の体験発掘



小学生の体験発掘



小学生の体験発掘



遺構検出作業



掘削作業

TAK201302調査区 作業風景



調査風景



調査風景



遺構検出作業



遺構検出作業



重機による掘削作業



掘削作業



ベルト掘削作業



遺構検出作業



遺構調査作業



遺構掘削作業



遺構検出作業



遺構掘削作業

TAK201303調査区 作業風景



水まき作業



掘削作業



遺構検出作業



遺構検出作業



遺構検出作業



遺構検出作業



遺構検出作業



遺構検出作業



遺構検出作業



遺構検出作業

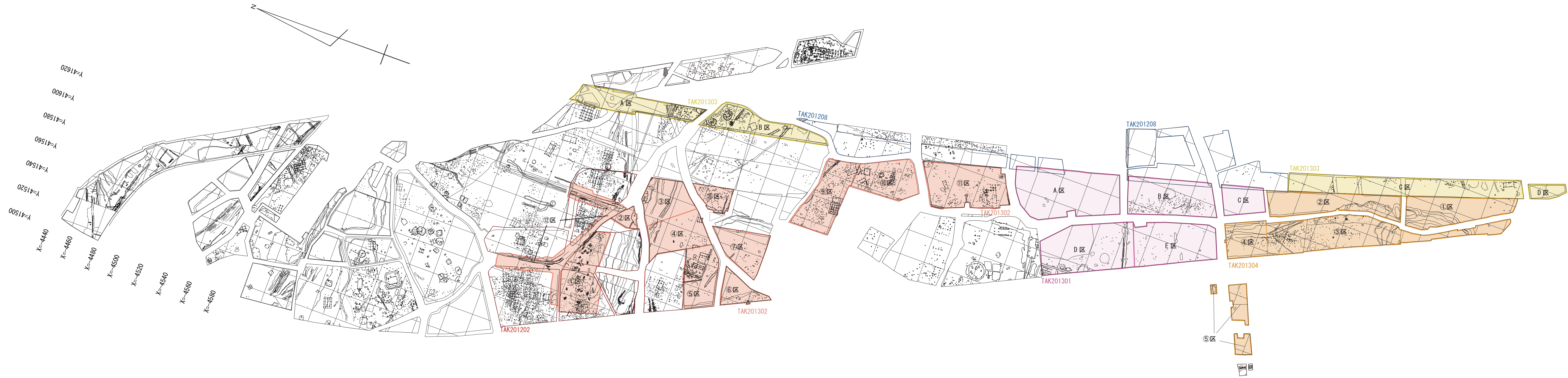


重機による掘削作業



掘削作業

TAK201304調査区 作業風景



第388図 竹松遺跡全体遺構配置図 (S=1 / 1,500)

0 (S=1/1,500) 100m

# 報告書抄録

ふりがな	たけまついせき さん
書名	竹松遺跡Ⅲ
副書名	九州新幹線西九州ルート(長崎ルート)建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	Ⅵ
シリーズ名	新幹線文化財調査事務所調査報告書
シリーズ番号	第6集
編著者名	川畑敏則・中川潤次・中尾篤志・堀内和宏・古門雅高・杉原敦史・浦田和彦
編集機関	長崎県教育委員会
所在地	〒850-8570 長崎県長崎市尾上町3番1号 TEL095-824-1111
発行年月	西暦2018年8月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 〇'〃	東経 〇'〃	調査期間	調査面積 m <sup>2</sup>	調査原因
		市町村	遺跡番号					
たけまついせき 竹松遺跡	ながさきけん 長崎県 おおむらし 大村市 たけまつまち 竹松町 1021番地他	42205	086	32° 57' 15"	129° 56' 45"	20130527～ 20140318	39,677 m <sup>2</sup>	九州新幹 線西九州 ルート (長崎 ルート) に係る車 両基地、 路線建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
竹松遺跡	包含地	縄文早期 弥生後期  古墳  古代  中世	落とし穴、集石 掘立柱建物跡、 竪穴建物跡、石 棺墓、土坑墓、 木棺墓、土器棺、 祭祀土坑 竪穴建物跡、土 坑 四面廂建物跡、 掘立柱建物跡、 柵列、溝、集石 遺構 掘立柱建物跡、 土坑墓	墓標、焼人骨、 銅鏃、舶載鏡、 仿製鏡、石剣、 ガラス玉、勾玉、 袋状鉄斧 耳環、鉄鏃  特殊遺物(錫杖、 権、線刻土器)、 刻書土器  石鍋、貿易陶磁	

新幹線文化財調査事務所調査報告書 第6集  
九州新幹線西九州ルート(長崎ルート)建設に伴う  
埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅵ

## 竹松遺跡Ⅲ

平成30(2018)年8月発行

発行者 長崎県教育委員会  
〒850-8570 長崎市尾上町3番1号  
TEL095-824-1111

印刷所 株式会社 昭和堂  
長崎県諫早市長野町1007-2  
TEL0957-22-6000